市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集

上総国分寺台遺跡調査報告XXIX

市原市天神台遺跡Ⅲ

（本文編１）

２０２３

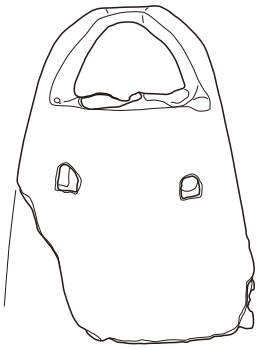
市 原 市 教 育 委 員 会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集

上総国分寺台遺跡調査報告XXIX

市原市天神台（てんじんだい）遺跡Ⅲ

（本文編１）



２０２３

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市国分寺台地区は、奈良時代に上総国分僧寺・国分尼寺が建てられるなど、上総国の政治、文化の中心地でした。また、本地区の土地区画整理事業に伴って発掘調査された諸遺跡では、旧石器時代にまでさかのぼる先人たちの足跡が辿られており、この台地が居住好適地として往古より連綿と利用されてきた歴史が明らかにされています。

今回報告する天神台遺跡も、その土地区画整理事業に伴い調査された遺跡の一つです。昭和49（1974）年度に始まった発掘調査は、最終年度の昭和63（1988）年度に調査総面積が14ヘクタールを超え、諏訪神社周辺は、事業地内において最も広範囲に調査された区域となっています。

発掘調査では、縄文時代の集落と貝塚、弥生時代以降の集落と墳墓、古墳時代以降の墳墓群が多数検出されました。縄文時代の遺構と遺物、弥生時代・古墳時代以降の墳墓群については、それぞれ発掘調査報告書が刊行されており、本書は残る弥生時代以降の集落に関する遺構と遺物について報告するものです。500棟近い竪穴建物跡からは、土器に描かれた船の原始絵画や、小銅鐸など、たいへん興味深い資料が発見されています。また、近畿地方や東海地方など遠く離れた地域からもたらされた土器も出土しており、房総における古墳時代の幕開けを考えるうえで、重要な資料となることでしょう。

今後、これらの情報が学術的な分野で比較・検討を重ねられることを期待します。そしてまた、はからずも今日の利便と引き換えになった遺跡とその発掘調査の意義を、永く広く伝えることは我々の責務であるとつねづね感じております。調査成果が研究者のみならず、市原歴史博物館などの社会教育の場において、また学校教育を通して、市民の方々によって多方面に活用されることを願ってやみません。

発掘調査から本書の刊行に至るまでには、文化庁、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団及び財団法人市原市文化財センター、並びに地元関係者の方々に多大な御尽力をいただきました。各位に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月28日

市原市教育委員会

教育長　林　　充

例 言

1　本書は、千葉県市原市村上字諏訪台1664 番地、同字東山、惣社字天神台、西広字松ケ谷ほか（現惣社５丁目・南国分寺台２丁目・諏訪１丁目・諏訪２丁目・西広１丁目・西広２丁目）に所在した天神台遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、天神台遺跡における弥生時代以降の集落跡を報告対象とする。縄文時代については、『市原市天神台遺跡Ⅰ』（第25集）（以下、報告書Ⅰ）、弥生時代以降の墳墓については『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ』（第31集）（以下、報告書Ⅱ）として報告している。

3　天神台遺跡・諏訪台古墳群は、昭和49（1974）年から、昭和63（1988）年までの間、大別13 地区を調査している。各地区の地番、遺跡名、面積、調査主体、調査期間等は、発掘調査に係る文書の記載事項に基づく報告書Ⅱ例言のとおりである。ただし、同（8）③については、帰属をSW83地区からセ28地区に改める。第1表に調査区一覧を示すが、報告書Ⅰ・Ⅱとの相違は本書記載を優先する。

4　調査対象面積について、報告書Ⅰ・Ⅱでは総面積を146,890㎡としたが、各地区面積の集計に齟齬があったため、以下のとおり改める。1980（昭和55）年度に行われた、諏訪神社周辺保存区域内における地形・墳丘測量及び9・10・11号墳確認調査の範囲は19,700㎡であり、これまでは、これを調査面積とし、そこにSW80・81地区ａ～ｄ区の面積6,500㎡を含めている。しかし、SW80・81地区の面積は、099地区等と重複するわけではなく独立して存在するため、146,890㎡から19,700㎡を除き、6,500㎡を加えた面積が発掘調査範囲に相当する。また、報告書Ⅰ・Ⅱでは、セ72地区第２地点の調査区域41㎡が脱落しているため、これを加えた133,731㎡が本調査実施範囲となる。保存区域の測量及びトレンチ調査の対象面積19,700㎡を加えると、対象範囲の総計は153,431㎡となる。

5　整理・報告事業は、平成16年度から平成17年度までを財団法人市原市文化財センターが市原市より受託して行い、財団解散後の平成18年度以降は、市原市教育委員会埋蔵文化財調査センターが引き継いで実施した。整理作業期間と主担当者は以下のとおりである。

平成16年度～平成19年度　担当：浅利幸一
平成20年度～平成24年度　担当：田中清美
平成25年度～令和 4 年度　担当：小橋健司

6　記録及び出土遺物を確認できない地区については、概報等を基に関連資料を補い記載している。

7　本書の執筆と編集は小橋が担当した。第３章第４節については忍澤成視（市原市教育委員会文化財課）・鶴岡英一（市原歴史博物館）、中近世土器の分類については櫻井敦史の協力を得た。畿内系土器については市村慎太郎氏（大阪府立近つ飛鳥博物館）、出土ウマについては金子浩昌氏に御教示いただいた。第271図・図版186・187掲載の小銅鐸実測図と三次元モデル画像及び、DVD収録の三次元モデルデータについては、株式会社ラング（千葉　史氏）作成の三次元モデル及びPEAKIT画像、上野祥史氏（国立歴史民俗博物館）作成の三次元モデル及び画像・動画データを提供いただき、それぞれを作成した。各位の御教示と御協力に感謝申し上げる。石材鑑定（肉眼）について、パリノ・サーヴェイ株式会社（赤堀岳人氏・坂元秀平氏・石岡智武氏）に依頼し、鑑定結果を本文・遺物観察表中に記載した。また、土器付着炭化物等の放射性炭素年代測定について、株式会社加速器分

析研究所（山田しょう氏（当時）・早瀬亮介氏）に依頼し、分析結果を第３章第１節として掲載した。赤色顔料及び青銅製品の蛍光Ｘ線分析をパリノ・サーヴェイ株式会社（高野和弘氏・齋藤紀行氏）に依頼し、分析結果を第3章第2節として掲載した。土器表面圧痕の分析について、株式会社パレオ・ラボ（米田恭子氏・菊地有希子氏）に依頼し、分析結果を第３章第３節として掲載した。

8　出土遺物と記録類は、市原市埋蔵文化財調査センター（〒290−0011千葉県市原市能満1489）に保管されている。

整理作業に際しては、多くの方々から御助言、御助力を賜った。御芳名を記して感謝申し上げる。（敬称略・五十音順）

赤塚次郎・市村慎太郎・上野祥史・江原　順・大村　直・賀来孝代・千葉　史・寺沢　薫
中居和志・早野浩二・原田昌浩

凡 例

1　遺物実測図の縮尺は、土器1/4、拓影掲載土器・土製品・石製品1/3を基本とする。例外は図中に注記している。

2　遺物写真の縮尺は実測図に準じ、平面写真は実測図掲載土器1/4、拓影掲載土器・土製品・石器1/3を基本とするが厳密ではない。立面撮影遺物は任意縮尺である。また、技法・調整等の拡大写真については写し込んだ定規（最小1mm目盛）の通りである。例外は図版中に注記している。

3　遺物実測図における赤彩部・炭化物付着範囲はスクリーントーンで表現している（下記参照）。拓影掲載土器の赤彩部については断面図脇のドットで示した。

4　石製品・金属製品等の横断面図は、図中上方向が遺物正面（正置した場合の天側）である。

5　遺物観察表等の数値については、推定復元の場合「？」を付け、欠損のある現存部位を表す場合「（○○）」のように括弧でくくって示した。属性「部位」の「半完形」は実測図上で口縁から底部まで遺存する場合を指す。「遺存」は実測図では表現されない円周方向の遺存程度を大まかに表現したものである。上半部だけでも一周していれば100 とした。

6　遺物観察表における色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』に基づき記載した。また、同じく胎土は、肉眼で確認できる混入粒子の種別と相対的な量で表現した。胎土の「在地」・「非在地」は通常の在来系土器との比較に基づく、主観的な分類である。

7　「○○形土器」は基本的に「○○」と略記している。

8　遺物実測図の表現のうち、透孔配置図は横断面を上（天側）から見た状態を示し、放射方向の短線は器壁の厚さ、短線間の幅が透孔直径（または幅）を示す。

9　遺物実測図のうち、欠落を補っている場合は、外形・断面とも描線を切って間隔を空け、示している。また、反転復元を行った場合は、口縁あるいは底面の線と稜線を切断している。この時、小片の場合は、口縁遺存幅（正射投影）を示し、1/4以上遺存する場合は、中心軸近くを切って示している。

10　遺構平面図は真北（座標北）を基準に方位を示している。TJ地区については全体が磁北軸で図化記録されているため、099地区で重複して調査されたSI0021の位置等を基準に座標軸との対応を想定した。報告書IIにおけるTJ地区の傾きについては本書掲載図に改める。

11　グリッドシステムについては、本書を基準とする。報告書I・IIと異なる場合、本書を優先する。

12　遺構番号は報告にあたって変更している（第2～6表参照）。種別を示すアルファベット記号と4桁数字を組み合わせて表示している。SI：竪穴建物跡、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝状遺構、SE：井戸状遺構、SX：土器集積等性格不明遺構、SL：炉穴、SM：古墳、SS：方形周溝墓等の墳墓、SY：炭窯・製炭遺構、である。数字の4桁目は地区ごとに異なり、TJ地区：0、099地区1、064地区：2、SW79地区：3、セ28地区：4、セ54地区：5、セ72地区：6、セ73地区：7、SW74地区：8、SW83地区：9、である。

13　遺構図における番号のない遺物ドットは、遺物注記と対照不能、もしくは実測資料と対応しないドットである。また、土層断面図に土層番号および注記のない箇所は、調査記録が欠落する部分である。

14　遺構実測図中の「K」は近現代撹乱坑を表す。

15　竪穴建物跡の面積は、1/40図をスキャン、デジタルトレースしたベクターデータを座標付けし、推定復元した上端ラインをGIS上で計測している。「主軸方位」は、主柱穴・竪穴形状・炉の位置を勘案し、座標北を0°として時計回りに角度を表現したもので、「竪穴深度」は付近地山から、「主柱穴深度」は床面からの高低差を示す。主柱穴の記号a・b・c・dは、主軸方位を図面上方とした場合の左上柱穴から時計回りで付しており、4 箇所に満たない場合は間欠をおいて、順序を守り与えている。床面ピットe・fも同様で、推定される「ハシゴ穴」（出入口施設関連ピット）・「貯蔵穴」（木蓋等を受ける周堤帯の伴う場合もある竪穴壁際の穴）に対してこの順で付しているが、ハシゴ穴がない場合は、貯蔵穴をe としている。主柱穴位置を踏襲したと見られる穴は「a'」「a''」のように表記している。

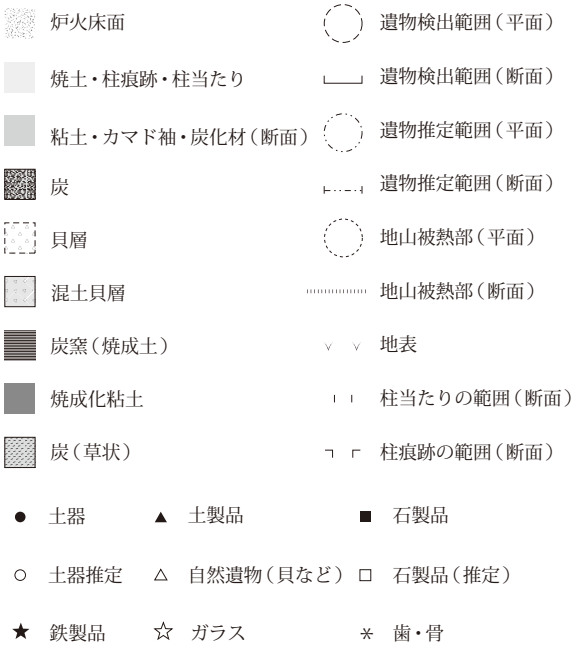
16　遺構実測図中のエレベーション図は、すべて平面図の標高記録から作成したものである。

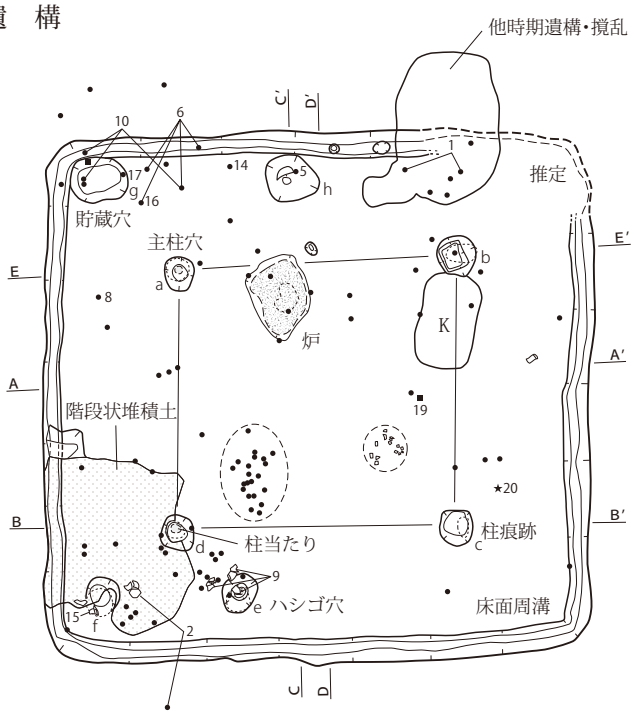
17　現場図面中に器械高の記載が無い場合や明らかに誤っている場合は、等高線図や隣接地の記録等から推定している。不確定な推定値は括弧を付して表示している。

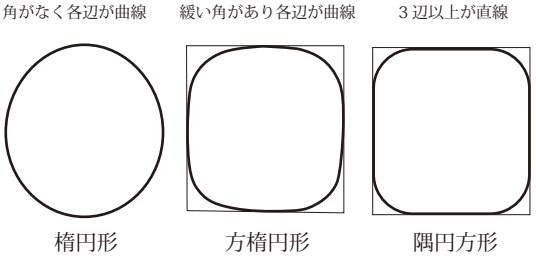
18　第1 図は国土地理院発行数値地図200000（地図画像）・数値地図50m メッシュ（標高）、第2図は同院発行の数値地図25000（地図画像）、第3図には迅速測図原図、第4 図には1/500 国分寺台土地区画整理事業現況図を用いた。また、図版1には国土地理院による昭和36 年撮影の航空写真を用いた。

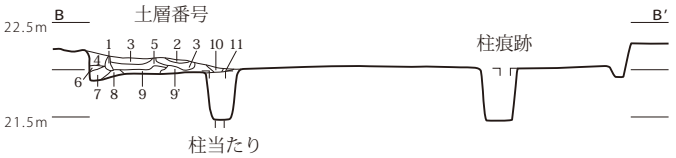
19　遺物実測図及び遺構図中の網掛け表現・各種ドット等の意味は次頁の通りである。

遺　構



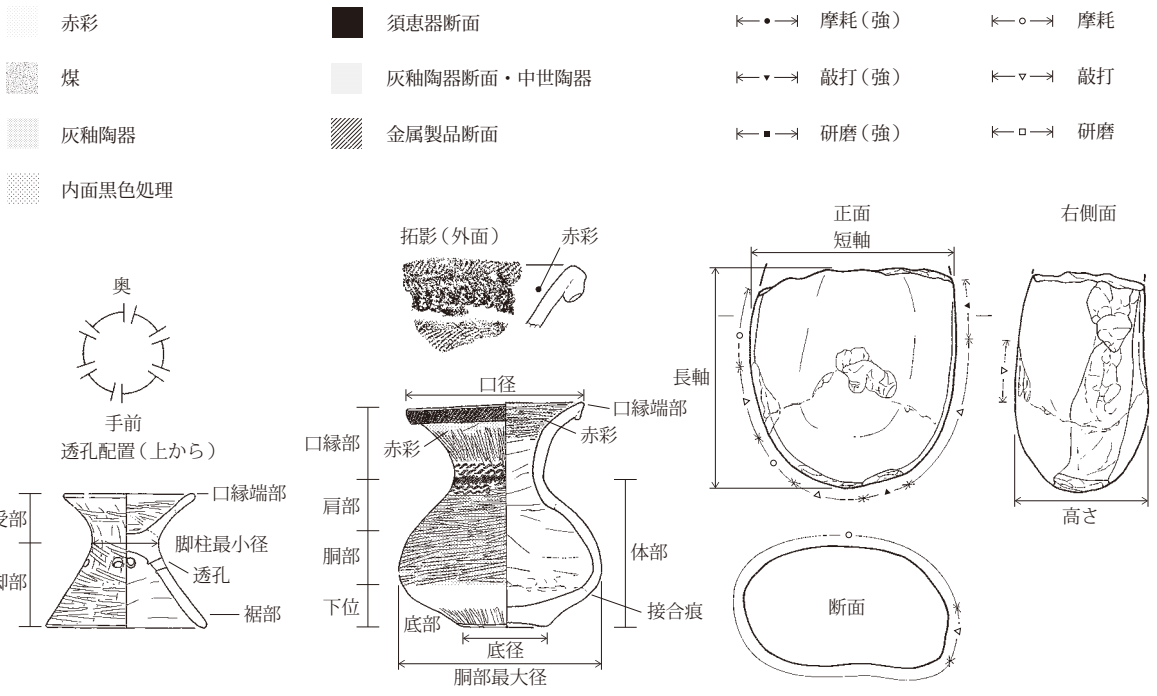






幅長比 1:1.2 以上を長楕円形、長方楕円形、隅円長方形とした。

遺　物



本 文 目 次

序文

例言・凡例

第1章　調査の経緯と概要

第 1 節　調査に至る経緯 …… 1

第 2 節　調査の方法 …… 1

第 3 節　立地と環境 …… 3

第2章　遺構と遺物

第 1 節　TJ地区 …… 51

第 2 節　099地区 …… 269

挿 図 目 次

第 1 図　市原市周辺の地形 …… 2
第 2 図　国分寺台地区・天神台遺跡位置図 …… 4
第 3 図　国分寺台地区の旧地形 …… 6
第 4 図　国分寺台地区と周辺の遺跡群 …… 7・8
第 5 図　天神台遺跡と周辺遺跡 …… 10
第 6 図　天神台遺跡調査区と周辺地形図 …… 11
第 7 図　諏訪台古墳群・天神台遺跡測量図 …… 12
第 8 図　天神台遺跡全体図 …… 13
第 9 図　天神台遺跡全体図（報告対象遺構） …… 14
第 10 図　調査区配置図 …… 15
第 11 図　遺構分布図（1） …… 35
第 12 図　遺構分布図（2） …… 36
第 13 図　遺構分布図（3） …… 37
第 14 図　遺構分布図（4） …… 38
第 15 図　遺構分布図（5） …… 39
第 16 図　遺構分布図（6） …… 40
第 17 図　遺構分布図（7） …… 41
第 18 図　遺構分布図（8） …… 42
第 19 図　遺構分布図（9） …… 43
第 20 図　遺構分布図（10） …… 44
第 21 図　遺構分布図（11） …… 45
第 22 図　遺構分布図（12） …… 46
第 23 図　遺構分布図（13） …… 47
第 24 図　遺構分布図（14） …… 48
第 25 図　遺構分布図（15） …… 49
第 26 図　遺構分布図（16） …… 50
第 27 図　TJ地区、SW74南・北地区全体図 …… 52
第 28 図　SI0001遺構 …… 53
第 29 図　SI0002遺構・遺物 …… 53
第 30 図　SI0003遺構・遺物 …… 54
第 31 図　SI0004遺構 …… 55
第 32 図　SI0004遺物 …… 56
第 33 図　SI0005・SI0006遺構、SI0006遺物（1） … 57
第 34 図　SI0005遺物、SI0006遺物（2） …… 58
第 35 図　SI0007・SI0008・SI0009遺構 …… 59
第 36 図　SI0007・SI0009遺物 …… 60
第 37 図　SI0010遺構・遺物 …… 61
第 38 図　SI0011遺構・遺物 …… 62
第 39 図　SI0012遺構・遺物 …… 63
第 40 図　SI0013遺構・遺物 …… 65
第 41 図　SI0014遺構（1） …… 66
第 42 図　SI0014遺構（2）、SI0014遺物 …… 67
第 43 図　SI0015遺構、SI0015遺物（1） …… 68
第 44 図　SI0015遺物（2） …… 69
第 45 図　SI0016遺構・遺物 …… 70
第 46 図　SI0017遺構 …… 71
第 47 図　SI0018遺構・遺物 …… 72
第 48 図　SI0019遺構・遺物 …… 74
第 49 図　SI0020遺構・遺物 …… 75
第 50 図　SI0021遺構・遺物 …… 76
第 51 図　SI0022・SI0023遺構（1） …… 77
第 52 図　SI0022・SI0023遺構（2）、
SI0022・SI0023遺物 …… 78
第 53 図　SI0024・SI0162遺構、SI0024遺物 …… 79
第 54 図　SI0025遺構・遺物 …… 80
第 55 図　SI0026遺構 …… 81
第 56 図　SI0027遺構・遺物 …… 82
第 57 図　SI0028遺構・遺物 …… 83
第 58 図　SI0029遺構・遺物 …… 84
第 59 図　SI0030遺構・遺物 …… 85
第 60 図　SI0031遺構、SI0031遺物（1） …… 87
第 61 図　SI0031遺物（2） …… 88
第 62 図　SI0032遺構・遺物 …… 89
第 63 図　SI0033遺構・遺物 …… 91
第 64 図　SI0034遺構・遺物 …… 92
第 65 図　SI0035遺構・遺物 …… 93
第 66 図　SI0036遺構・遺物 …… 94
第 67 図　SI0037遺構、SI0037遺物（1） …… 95
第 68 図　SI0037遺物（2） …… 96
第 69 図　SI0038遺構・遺物 …… 97
第 70 図　SI0039・SI0062遺構、SI0039遺物 …… 98
第 71 図　SI0062遺物 …… 99

第 72 図　SI0040遺構、SI0040遺物（1）…… 100
第 73 図　SI0040遺物（2）…… 101
第 74 図　SI0041遺構・遺物 …… 102
第 75 図　SI0042遺構（1）、SI0042遺物（1）…… 103
第 76 図　SI0042遺構（2）…… 104
第 77 図　SI0042遺物（2）…… 105
第 78 図　SI0042遺物（3）…… 106
第 79 図　SI0042遺物（4）…… 107
第 80 図　SI0042遺物（5）…… 108
第 81 図　SI0043遺構・遺物 …… 109
第 82 図　SI0044遺構・遺物 …… 111
第 83 図　SI0045遺構…… 112
第 84 図　SI0046A・B遺構・遺物…… 113
第 85 図　SI0047遺構・遺物 …… 114
第 86 図　SI0048遺構・遺物 …… 116
第 87 図　SI0049遺構・遺物 …… 117
第 88 図　SI0050遺構（1）、SI0050遺物（1）…… 118
第 89 図　SI0050遺構（2）、SI0050遺物（2）…… 119
第 90 図　SI0051遺構（1）、SI0052遺構、
SI0051遺物（1）、SI0052遺物…… 120
第 91 図　SI0051遺構（2）、SI0051遺物（2）…… 122
第 92 図　SI0053・SI0054・SI0163遺構、
SI0054遺物…… 123
第 93 図　SI0055遺構・遺物 …… 124
第 94 図　SI0056・SI0057遺構（1）…… 126
第 95 図　SI0056・SI0057遺構（2）、
SI0056遺物（1）…… 127
第 96 図　SI0056遺物（2）…… 128
第 97 図　SI0056遺物（3）…… 129
第 98 図　SI0056遺物（4）…… 130
第 99 図　SI0056遺物（5）、SI0057遺物…… 131
第100図　SI0058遺構…… 132
第101図　SI0059・SI0060遺構（1）、
SI0059遺物（1）…… 133
第102図　SI0059・SI0060遺構（2）、
SI0059遺物（2）、SI0060遺物…… 134
第103図　SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・
SI0066遺構（1）…… 136
第104図　SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・
SI0066遺構（2）…… 137
第105図　SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・
SI0066遺構（3）、SI0061遺物、
SI0063遺物（1）…… 138
第106図　SI0063遺物（2）、SI0064遺物（1）…… 139
第107図　SI0064遺物（2）、SI0065・SI0066遺物
…… 140
第108図　SI0067遺構・遺物 …… 142
第109図　SI0068遺構・遺物 …… 143
第110図　SI0069遺構・遺物 …… 144
第111図　SI0070・SI0071・SI0083遺構（1）…… 146
第112図　SI0070・SI0071・SI0083遺構（2）、
SI0070・SI0071遺物 …… 147
第113図　SI0083遺物（1）…… 148
第114図　SI0083遺物（2）…… 149
第115図　SI0073・SI0160遺構、SI0073遺物 …… 150
第116図　SI0074・SI0075・SI0076・SI0077遺構‥ 152
第117図　SI0074遺物、SI0075遺物（1）…… 153
第118図　SI0075遺物（2）、SI0076遺物、
SI0077遺物…… 154
第119図　SI0078遺構（1）、SI0079遺構…… 156
第120図　SI0078遺構（2）、SI0078遺物（1）…… 157
第121図　SI0078遺物（2）…… 158
第122図　SI0078遺物（3）、SI0079遺物…… 159
第123図　SI0080遺構（1）、SI0080遺物（1）…… 160
第124図　SI0080遺構（2）、SI0080遺物（2）…… 161
第125図　SI0080遺物（3）…… 162
第126図　SI0080遺物（4）…… 163
第127図　SI0081遺構・遺物 …… 164
第128図　SI0082遺構・遺物 …… 165
第129図　SI0084・SI0088遺構、SI0084遺物 …… 167
第130図　SI0085遺構・遺物 …… 168
第131図　SI0086遺構・遺物 …… 169
第132図　SI0087遺構・遺物 …… 170
第133図　SI0089遺構…… 171
第134図　SI0089遺物…… 172
第135図　SI0090遺構・遺物 …… 173
第136図　SI0091・SI0130遺構 …… 174
第137図　SI0091・SI0130遺物 …… 175
第138図　SI0092・SI0107遺構、SI0092遺物 …… 177
第139図　SI0093遺構、SI0093遺物（1）…… 178
第140図　SI0093遺物（2）…… 179
第141図　SI0094・SI0164遺構 …… 180
第142図　SI0095遺構・遺物 …… 181
第143図　SI0096・SI0127遺構、SI0096遺物（1）‥ 182
第144図　SI0096遺物（2）、SI0127遺物…… 183
第145図　SI0097遺構・遺物 …… 185
第146図　SI0098遺構・遺物 …… 186
第147図　SI0099遺構・遺物 …… 187
第148図　SI0100遺構…… 188
第149図　SI0101・SI0102・SI0106遺構（1）…… 189
第150図　SI0101・SI0102・SI0106遺構（2）…… 190
第151図　SI0106遺物（1）…… 191
第152図　SI0101・SI0102遺物、SI0106遺物（2）‥ 192
第153図　SI0103・SI0113・SI0123遺構（1）、
SI0123遺物（1）…… 194
第154図　SI0103・SI0113・SI0123遺構（2）、
SI0103遺物（1）、SI0123遺物（2）…… 195
第155図　SI0103遺物（2）、SI0113遺物（1）…… 196
第156図　SI0113遺構（3）、SI0113遺物（2）…… 197
第157図　SI0104遺構・遺物 …… 198
第158図　SI0105・SI0112遺構 …… 200
第159図　SI0105・SI0112遺物 …… 201
第160図　SI0108・SI0110・SI0115遺構（1）…… 202
第161図　SI0108・SI0110・SI0115遺構（2）…… 203
第162図　SI0108・SI0110・SI0115遺物 …… 205
第163図　SI0111遺構・遺物 …… 206
第164図　SI0114遺構・遺物 …… 207
第165図　SI0116遺構・遺物 …… 208
第166図　SI0117・SI0119遺構、SI0117遺物 …… 209
第167図　SI0118遺構・遺物 …… 210
第168図　SI0120遺構・遺物 …… 211
第169図　SI0121遺構・遺物 …… 212

第170図　SI0122遺構、SI0122遺物（1）……213
第171図　SI0122遺物（2）……214
第172図　SI0124遺構……215
第173図　SI0125・SI0135遺構（1）……216
第174図　SI0125・SI0135遺構（2）、
SI0125遺物（1）、SI0135遺物……217
第175図　SI0125遺物（2）……218
第176図　SI0126遺構……220
第177図　SI0126遺物……221
第178図　SI0128遺構……222
第179図　SI0129遺構・遺物……223
第180図　SI0131遺構・遺物……224
第181図　SI0132遺構・遺物……225
第182図　SI0133遺構・遺物……227
第183図　SI0134遺構……228
第184図　SI0134遺物……229
第185図　SI0136遺構・遺物……230
第186図　SI0137遺構・遺物……231
第187図　SI0138遺構・遺物……233
第188図　SI0139遺構、SI0139遺物（1）……234
第189図　SI0139遺物（2）……235
第190図　SI0140遺構……236
第191図　SI0140遺物……237
第192図　SI0141・SI0146・SI0147・SI0148遺構（1）
……238
第193図　SI0141・SI0146・SI0147・
SI0148遺構（2）、SI0146・SI0147遺物…239
第194図　SI0141・SI0148遺物……240
第195図　SI0142遺構、SI0142遺物（1）……243
第196図　SI0142遺物（2）……244
第197図　SI0143・SI0165遺構、SI0143・SI0165遺物
……245
第198図　SI0144・SI0166遺構……247
第199図　SI0144・SI0166遺物……248
第200図　SI0145遺構……249
第201図　SI0145遺物……250
第202図　SI0149遺構・遺物……251
第203図　SI0150・SI0152遺構……253
第204図　SI0150・SI0152遺物……254
第205図　SI0151遺構・遺物……255
第206図　SI0153・SI0154遺構、SI0153遺物……256
第207図　SI0154遺物……257
第208図　SI0155遺構……257
第209図　SI0156遺構・遺物……258
第210図　SI0157遺構・遺物……259
第211図　SI0158遺構・遺物……261
第212図　SI0159遺構、SI0159遺物（1）……262
第213図　SI0159遺物（2）……263
第214図　SI0161遺構・遺物……264
第215図　SI0167遺構……264
第216図　SI0168遺構・遺物……265
第217図　SI0201・SI0202遺構……266
第218図　SI0203・SI0204遺構……267
第219図　SD0001遺構……268
第220図　099地区全体図……270
第221図　SI1002遺構・遺物……271
第222図　SI1003遺構……272
第223図　SI1004遺構・遺物……273
第224図　SI1005遺構（1）……274
第225図　SI1005遺構（2）、SI1005遺物（1）……275
第226図　SI1005遺物（2）……276
第227図　SI1006遺構・遺物……277
第228図　SI1007遺構、SI1007遺物（1）……278
第229図　SI1007遺物（2）……279
第230図　SI1008遺構・遺物……280
第231図　SI1009遺構……282
第232図　SI1009遺物（1）……283
第233図　SI1009遺物（2）……284
第234図　SI1010遺構・遺物……285
第235図　SI1011遺構・遺物……286
第236図　SI1012A・B遺構……287
第237図　SI1012A・B遺物……288
第238図　SI1013遺構・遺物……289
第239図　SI1014遺構・遺物……290
第240図　SI1015遺構・遺物……291
第241図　SI1016遺構・遺物……292
第242図　SI1017遺構・遺物……293
第243図　SI1018遺構・遺物……294
第244図　SI1019遺構・遺物……296
第245図　SI1020遺構・遺物……297
第246図　SI1021遺構・遺物……298
第247図　SI1022遺構……299
第248図　SI1022遺物（1）……300
第249図　SI1022遺物（2）……301
第250図　SI1023・SI1204遺構（1）……303
第251図　SI1023・SI1204遺構（2）、SI1023遺物…304
第252図　SI1204遺物（1）……305
第253図　SI1204遺物（2）……306
第254図　SI1024遺構・遺物……307
第255図　SI1025遺構……308
第256図　SI1026遺構……309
第257図　SI1027遺構……309
第258図　SI1028遺構（1）、SI1028遺物（1）……311
第259図　SI1028遺構（2）、SI1028遺物（2）……312
第260図　SI1029遺構・遺物……313
第261図　SI1030遺構……314
第262図　SI1030遺物……315
第263図　SI1031遺構・遺物……316
第264図　SI1032遺構……317
第265図　SI1032遺物……318
第266図　SI1033遺構・遺物……319
第267図　SI1034遺構（1）……320
第268図　SI1034遺構（2）、SI1034遺物（1）……321
第269図　SI1034遺物（2）……322
第270図　SI1035・SI1036遺構（1）……323
第271図　SI1035・SI1036遺構（2）、
SI1035・SI1036遺物……324
第272図　SI1037遺構（1）……326
第273図　SI1037遺構（2）、SI1037遺物（1）……327
第274図　SI1037遺物（2）……328
第275図　SI1038遺構（1）……330
第276図　SI1038遺構（2）、SI1038遺物……331

第277図　SI1039遺構……332
第278図　SI1039遺物（1）……333
第279図　SI1039遺物（2）……334
第280図　SI1040・SI1041遺構、
　　SI1040・SI1041遺物……336
第281図　SI1042遺構・遺物……338
第282図　SI1043遺構・遺物……339
第283図　SI1044遺構・遺物……340
第284図　SI1045遺構・遺物……341
第285図　SI1046遺構（1）……342
第286図　SI1046遺構（2）……343
第287図　SI1046遺物（1）……345
第288図　SI1046遺物（2）……346
第289図　SI1046遺物（3）……347
第290図　SI1046遺物（4）……348
第291図　SI1046遺物（5）……349
第292図　SI1047遺構……350
第293図　SI1047遺物……351
第294図　SI1048・SI1049遺構（1）……353
第295図　SI1048・SI1049遺構（2）、
　　SI1049遺物……354
第296図　SI1048遺物（1）……355
第297図　SI1048遺物（2）……356
第298図　SI1050遺構……357
第299図　SI1050遺物……358
第300図　SI1051遺構、SI1051遺物（1）……359
第301図　SI1051遺物（2）……360
第302図　SI1052遺構……361
第303図　SI1052遺物（1）……362
第304図　SI1052遺物（2）……363
第305図　SI1053遺構、SI1053遺物（1）……364
第306図　SI1053遺物（2）……365
第307図　SI1054遺構・遺物……366
第308図　SI1055遺構、SI1055遺物（1）……367
第309図　SI1055遺物（2）……368
第310図　SI1056遺構・遺物……369
第311図　SI1057遺構・遺物……370
第312図　SI1058遺構、SI1058遺物（1）……372
第313図　SI1058遺物（2）……373
第314図　SI1059遺構・遺物……374
第315図　SI1060遺構・遺物……376
第316図　SI1061・SI1062遺構、
　　SI1061・SI1062遺物……377
第317図　SI1063遺構・遺物……378
第318図　SI1064遺構・遺物……380
第319図　SI1065遺構、SI1065遺物（1）……381
第320図　SI1065遺物（2）……382
第321図　SI1066・SI1067遺構（1）……383
第322図　SI1066・SI1067遺構（2）、
　　SI1066遺物（1）……384
第323図　SI1066遺物（2）、SI1067遺物……385
第324図　SI1068・SI1069・SI1070遺構……387
第325図　SI1068・SI1069・SI1070遺物……388
第326図　SI1071遺構（1）……390
第327図　SI1071遺構（2）……391
第328図　SI1071遺物……392
第329図　SI1072・SI1073遺構、SI1073遺物（1）・393
第330図　SI1072遺物、SI1073遺物（2）……394
第331図　SI1074遺構、SI1074遺物（1）……396
第332図　SI1074遺物（2）……397
第333図　SI1075遺構……398
第334図　SI1075遺物……399
第335図　SI1076遺構、SI1076遺物（1）……401
第336図　SI1076遺物（2）……402
第337図　SI1077遺構・遺物……403
第338図　SI1078遺構・遺物……404
第339図　SI1079遺構……406
第340図　SI1079遺物……407
第341図　SI1080遺構……408
第342図　SI1080遺物……409
第343図　SI1081遺構、SI1081遺物（1）……410
第344図　SI1081遺物（2）……411
第345図　SI1082・SI1083遺構（1）……413
第346図　SI1082・SI1083遺構（2）、
　　SI1082・SI1083遺物……414
第347図　SI1084遺構・遺物……415
第348図　SI1085遺構・遺物……416
第349図　SI1086遺構・遺物……417
第350図　SI1087遺構、SI1087遺物（1）……418
第351図　SI1087遺物（2）……419
第352図　SI1087遺物（3）……420
第353図　SI1088遺構……421
第354図　SI1088遺物……422
第355図　SI1089遺構（1）……424
第356図　SI1089遺構（2）、SI1089遺物……425
第357図　SI1090遺構、SI1090遺物（1）……426
第358図　SI1090遺物（2）……427
第359図　SI1091・SI1205遺構、
　　SI1091・SI1205遺物……429
第360図　SI1092遺構……430
第361図　SI1092遺物……431
第362図　SI1093・SI1206遺構……432
第363図　SI1093・SI1206遺物……433
第364図　SI1094遺構（1）……435
第365図　SI1094遺構（2）……436
第366図　SI1094遺物（1）……437
第367図　SI1094遺物（2）……438
第368図　SI1094遺物（3）……439
第369図　SI1095遺構・遺物……440
第370図　SI1096・SI1097遺構、SI1097遺物……441
第371図　SI1098・SI1099遺構（1）、SI1098遺物・443
第372図　SI1098・SI1099遺構（2）、
　　SI1099遺物（1）……444
第373図　SI1099遺物（2）……445
第374図　SI1100遺構・遺物……446
第375図　SI1101遺構（1）……447
第376図　SI1101遺構（2）、SI1101遺物（1）……448
第377図　SI1101遺物（2）……449
第378図　SI1102・SI1207遺構……450
第379図　SI1102・SI1207遺物……451
第380図　SI1103遺構・遺物……453
第381図　SI1104遺構、SI1104遺物（1）……455

第382図　SI1104遺物（2）……456
第383図　SI1104遺物（3）……457
第384図　SI1105遺構……458
第385図　SI1105遺物……459
第386図　SI1106遺構・遺物 ……460
第387図　SI1107遺構（1）……461
第388図　SI1107遺構（2）……462
第389図　SI1107遺構（3）、SI1107遺物（1）……463
第390図　SI1107遺物（2）……464
第391図　SI1107遺物（3）……465
第392図　SI1108遺構、SI1108遺物（1）……467
第393図　SI1108遺物（2）……468
第394図　SI1109遺構・遺物 ……469
第395図　SI1110遺構……470
第396図　SI1110遺物（1）……471
第397図　SI1110遺物（2）……472
第398図　SI1111遺構・遺物、SI1112遺構・遺物 ‥474
第399図　SI1113遺構・遺物 ……476
第400図　SI1114遺構・遺物 ……477
第401図　SI1115遺構・遺物 ……478
第402図　SI1116・SI1117遺構、
　　SI1116・SI1117遺物 ……479
第403図　SI1119遺構（1）……481
第404図　SI1119遺構（2）、SI1119遺物（1）……482
第405図　SI1119遺物（2）……483
第406図　SI1120遺構（1）、SI1120遺物（1）……484
第407図　SI1120遺構（2）……485
第408図　SI1120遺物（2）……486
第409図　SI1120遺物（3）……487
第410図　SI1121遺構（1）……488
第411図　SI1121遺構（2）、SI1121遺物（1）……489
第412図　SI1121遺物（2）……490
第413図　SI1122遺構・遺物 ……491
第414図　SI1123遺構……492
第415図　SI1124遺構・遺物 ……494
第416図　SI1125遺構・遺物 ……495
第417図　SI1126遺構・遺物 ……496
第418図　SI1127遺構・遺物 ……497
第419図　SI1128遺構……498
第420図　SI1129遺構・遺物 ……499
第421図　SI1130遺構・遺物 ……500
第422図　SI1131遺構・遺物 ……501
第423図　SI1132遺構・遺物 ……502
第424図　SI1133遺構・遺物 ……503
第425図　SI1134遺構・遺物 ……504
第426図　SI1135遺構、SI1135遺物（1）……505
第427図　SI1135遺物（2）……506
第428図　SI1136遺構・遺物 ……507
第429図　SI1137遺構、SI1137遺物（1）……508
第430図　SI1137遺物（2）……509
第431図　SI1138遺構・遺物 ……510
第432図　SI1139遺構……510
第433図　SI1140遺構・遺物 ……511
第434図　SI1201遺構……512
第435図　SI1202遺構・遺物 ……513
第436図　SK1001遺構・遺物……514
第437図　SE1001遺構 ……515
第438図　SY1001・SY1002遺構……516
第439図　SY1003遺構 ……517
第440図　SD1001遺構・遺物……518
第441図　SD1002遺構……519
第442図　SK130遺構・遺物 ……520
第443図　SD1003遺構 ……521
第444図　SD1004遺構（1）……522
第445図　SD1004遺構（2）……524
第792図　天神台遺跡全体図（詳細）‥DVD-ROM収録

表目次

第 1 表　諏訪台古墳群・天神台遺跡調査一覧……xii
第 2 表　竪穴建物跡一覧……16
第 3 表　掘立柱建物跡一覧……32
第 4 表　井戸状遺構一覧……32
第 5 表　溝状遺構一覧……33
第 6 表　土坑・その他遺構一覧 ……33
第 7 表　土器観察表 ……DVD-ROM収録
第 8 表　土製品観察表……DVD-ROM収録
第 9 表　石製品・ガラス製品観察表 ‥DVD-ROM収録
第10表　金属製品観察表……DVD-ROM収録
第11表　炭化材観察表……DVD-ROM収録

第１表　諏訪台古墳群・天神台遺跡調査一覧

年度	地区	調査面積 ㎡	概報段階遺構数			概報・年報	調査主体	担当者
			縄文時代（報告Ⅰ対象）	墳墓群（報告Ⅱ対象）	弥生時代以降集落（報告Ⅲ対象）			
1974（昭和 49）	SW74	1,900	早期：炉穴 9	方墳 1・円墳 1・前方後円墳 1・造出し付円墳 1	弥生～古墳：竪穴建物 11 中世：台地整形区画	概要 1975	上総国分寺台遺跡調査団	須田　勉 田中新史
1974（昭和 49）	TJ	18,700	早期：炉穴 13	弥生：方形周溝墓 3 方墳 10	弥生～古墳：竪穴建物 161	概報 1975	上総国分寺台遺跡調査団	平野元三郎 谷島一馬 對島郁夫
1979（昭和 54）	SW79	890	早期：炉穴 15・陥穴 2	前方後方墳 1	弥生～古墳：竪穴建物 32	概報 1980	上総国分寺台遺跡調査団	田中新史
1980（昭和 55）	SW80	6,500	早期：炉穴 13 前期：竪穴建物 4	方墳 10・円墳 1 中近世：塚 1 地形測量（19,700 ㎡）・確認調査（9・10・11 号墳）	弥生：竪穴建物 1	概報 1981	上総国分寺台遺跡調査団 早稲田大学考古学研究室	深沢克友 白井久美子
1981（昭和 56）	SW81	2,200		方墳 6		概報 1982	上総国分寺台遺跡調査団 早稲田大学考古学研究室	白井久美子 永沼律朗
1982（昭和 57）	064	6,000	早期：炉穴 竪穴建物 3	方墳 3・円墳 3 木棺墓 中世：土坑・地下式坑	弥生～古墳：竪穴建物 110 中世：台地整形区画		上総国分寺台遺跡調査団	永沼律朗 石坂俊郎 半田堅三
1982（昭和 57）	099	13,800	早期：陥穴 5・炉穴 40 ＋ 前期：竪穴建物 17	弥生中期：方形周溝墓 20 弥生後期：方形周溝墓 12	弥生中期：竪穴建物 1		上総国分寺台遺跡調査団	浅利幸一 鈴木英啓
1983（昭和 58）	099	30,200		古墳前期：方墳 5 古墳後期～終末：方墳 14・円墳 10・前方後円墳 3・前方後方墳 2 奈良・平安：方形周溝状遺構 35 木棺墓・土壙墓・地下式改葬墓・地下式坑	弥生～古墳：竪穴建物 140	年報 57・58 年度	財団法人市原市文化財センター	浅利幸一 鈴木英啓 高橋康男
1983（昭和 58）	SW83	4,100	早期：炉穴 4	古墳終末期：方墳 6・前方後方墳 1		概要 1984	上総国分寺台遺跡調査団	米田耕之助 半田堅三
1984（昭和 59）	SW83	12,000		古墳終末期：方墳 14・前方後方墳 1 土坑墓・溝	古墳：竪穴建物 4		上総国分寺台遺跡調査団	須田　勉
1985（昭和 60） 1986（昭和 61）	セ 28	20,000	早期：竪穴建物 11・炉穴 362・陥穴 2・地点貝塚 23・人骨 1 前期：竪穴建物 6	弥生中期：方形周溝墓 23 弥生後期：方形周溝墓 2 古墳前期：方形周溝墓 18・前方後方墳 1 古墳後期～終末期：方墳 7・円墳 14・前方後円墳 5 奈良・平安：方形周溝状遺構 14 木棺墓・土坑墓・地下式改葬墓・地下式土壙	奈良・平安：竪穴建物 13・掘立柱建物 14・井戸 3	年報 60・61 年度	財団法人市原市文化財センター	浅利幸一 田所　真 米田耕之助 高橋康男
1987（昭和 62）	セ 54	12,300	早期～前期：炉穴 9・竪穴建物 13・陥穴 11・土壙 36	弥生中期：方形周溝墓 7 古墳終末期：方墳 21・前方後方墳 1 奈良・平安：方形周溝状遺構 8 地下式改葬墓 1・土坑墓・地下式土壙		年報 62 年度	財団法人市原市文化財センター	清藤一順 宮本敬一 加藤正信 高橋康男 木對和紀 浅利幸一
1988（昭和 63）	セ 72	2,000	早期：竪穴建物 3・炉穴 43・土坑 5・地点貝塚 10	弥生後期：方形周溝墓 3 弥生～古墳：墳墓 6 古墳前期：方墳 1・前方後方墳 1・土坑墓 5 奈良・平安：地下式土坑墓 2 中・近世：土坑 16・井戸 1・土壙 14	弥生後期：竪穴建物 1	年報 63 年度	財団法人市原市文化財センター	加藤正信
1988（昭和 63）	セ 72 第 2 地点	41						
1988（昭和 63）	セ 73	3,100	早期：竪穴建物 2・炉穴 14・土坑 5	古墳前期：前方後方墳 1 古墳後期：方墳 4・前方後方墳 1・木棺墓・土坑墓 14 中・近世：溝 4・土坑墓 1	弥生後期：竪穴建物 2 奈良・平安：竪穴建物 1	年報 63 年度	財団法人市原市文化財センター	宮本敬一
	計	133,731 ㎡						

第 1 章　調査の経緯と概要

第 1 節　調査に至る経緯

天神台遺跡・諏訪台古墳群の発掘調査は、国分寺台地区の宅地造成事業に伴って実施された。

市原市内では昭和30年代に始まる海浜部の工業地化をきっかけに、臨海部台地上の宅地造成が活発化し、国分寺台地区の事業も同様の背景の下に計画されている。1971（昭和46）年に市原市国分寺台土地区画整理組合が設立されたが、事業予定地は当時から、上総国分僧寺に代表される史跡・古墳群があり、埋蔵文化財の存在が想定される地区であった。このため、発掘調査に対応するべく、上総国分寺台遺跡調査会を結成し、内部に上総国分寺台遺跡調査団を組織した。事業地内の調査対象面積は、発掘調査の進捗によって、遺跡の質量・分布範囲の把握が進み、当初の見込みから大幅に拡大することとなり、最終的には57ヘクタールを超え、調査期間は1972（昭和47）年度から1988（昭和63）年度に及んでいる。拡大する発掘調査事業への対応が要求される中、1982（昭和57）年度に設立された財団法人市原市文化財センターが、発掘調査組織に加わっている。その後、当初から発掘調査を行っていた調査団は1985（昭和60）年に解散している。

整理作業は、発掘調査と並行して一部行われ、東間部多古墳群（須田・宮本1974）（上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ）・南向原古墳群（田中他1976）（Ⅱ）・西広貝塚（米田他1977）（Ⅲ）・蛇谷遺跡（須田他1977（1989））（Ⅳ）について、報告書が刊行された。

その後、整理・報告作業は、費用負担の問題から停滞を余儀なくされたが、文化庁文化財部記念物課（当時）・千葉県教育庁教育振興部文化財課の配慮を得て、補助事業として発掘調査を実施した遺跡を対象に、1994（平成6）年度より国庫補助事業として整理報告作業が行われることとなった。また、1995（平成7）年には市原市と土地区画整理組合との協議により費用負担の問題等が解決され、1997（平成9）年度から本格的に全体の整理作業が開始された。以後、祇園原貝塚報告書（忍澤他1999）（Ⅴ）から順次、刊行が進められ、2005（平成17）年度に財団法人市原市文化財センターが解散した後は、公立の市原市埋蔵文化財調査センターが業務を引き継いでいる。

第 2 節　調査の方法

各地区の調査方法については報告書Ⅰ・Ⅱに詳しいため、本項では概要のみ述べる。なお、天神台遺跡は諏訪台古墳群と範囲が重なる遺跡であり、複数主体による長期事業の結果、「諏訪台遺跡」等の一貫性を欠く表記も見られたが、上層の諏訪台古墳群、下層の天神台遺跡と区分される。

天神台遺跡の調査では、多数の区域が複数の調査主体によって調査されており、グリッドシステム、遺構名、遺物取り上げ方法、記録類の粗密等に異同が生じている。

TJ地区は、グリッドシステムが採られておらず、表土掘削にブルドーザーが用いられたこともあり、表採遺物はほとんど認められない。遺構内の遺物は、集中出土した複数の破片を同一番号でまとめて取り上げられ、出土レベルは遺物の表面で計測されている。遺物注記は接合後に行われており、一部の遺物は図面記録との対応が不明となっている。図面・写真との照合で明らかに異なる場合は修正している。遺物注記の遺跡略号は「TJ」である。竪穴建物は「H1」、ドット取り上げ遺物は「Po.1」のように表記されている。



第1図　市原市周辺の地形

SW74地区は、TJ地区に隣接し、同時並行的に古墳の調査が行われている。記録類を確認できないため、詳細は不明である。便宜的に北・中・南地区に分けて記載するが、北地区はTJ地区、中地区は064地区に隣接する。遺物注記の遺跡略号は、国分寺台地区古墳番号の「147」等である。

SW79地区は、諏訪台2号墳下層に竪穴建物跡群が検出されており、遺跡略号は古墳番号の「148」が付されている。遺構番号は「001」等である。一括取り上げ遺物は6000番台、ドット取り上げ遺物は1000番台等の注記が行われ、国分寺台地区における発掘調査と共通する（米田1978）。

SW80・81地区は古墳主体の調査で、遺物注記の遺跡略号は、古墳番号「154」等である。

064地区は、50m四方の大グリッドを基準とするグリッドシステムを採用している。遺跡略号は「064」、遺構番号は「SB001」のように表記される。遺物については、SW79地区同様の方法で注記されている。一部にグリッド取り上げ遺物が認められる。竪穴建物跡の炉の個別図面が多く作成されており、主柱穴柱痕跡の検出状況や遺物出土状況など詳細な記録が残る。

099地区は、40m四方の大グリッドを基準とするグリッドシステムを採用している。遺跡略号は「099」、遺構番号は「1001」のように表記される。竪穴建物跡が1000番台、溝状遺構が2000番台、土坑が3000番台、墳墓が4000番台である。位置記録取り上げ遺物については「1」のように注記されている。若干のグリッド取り上げ遺物が認められる。

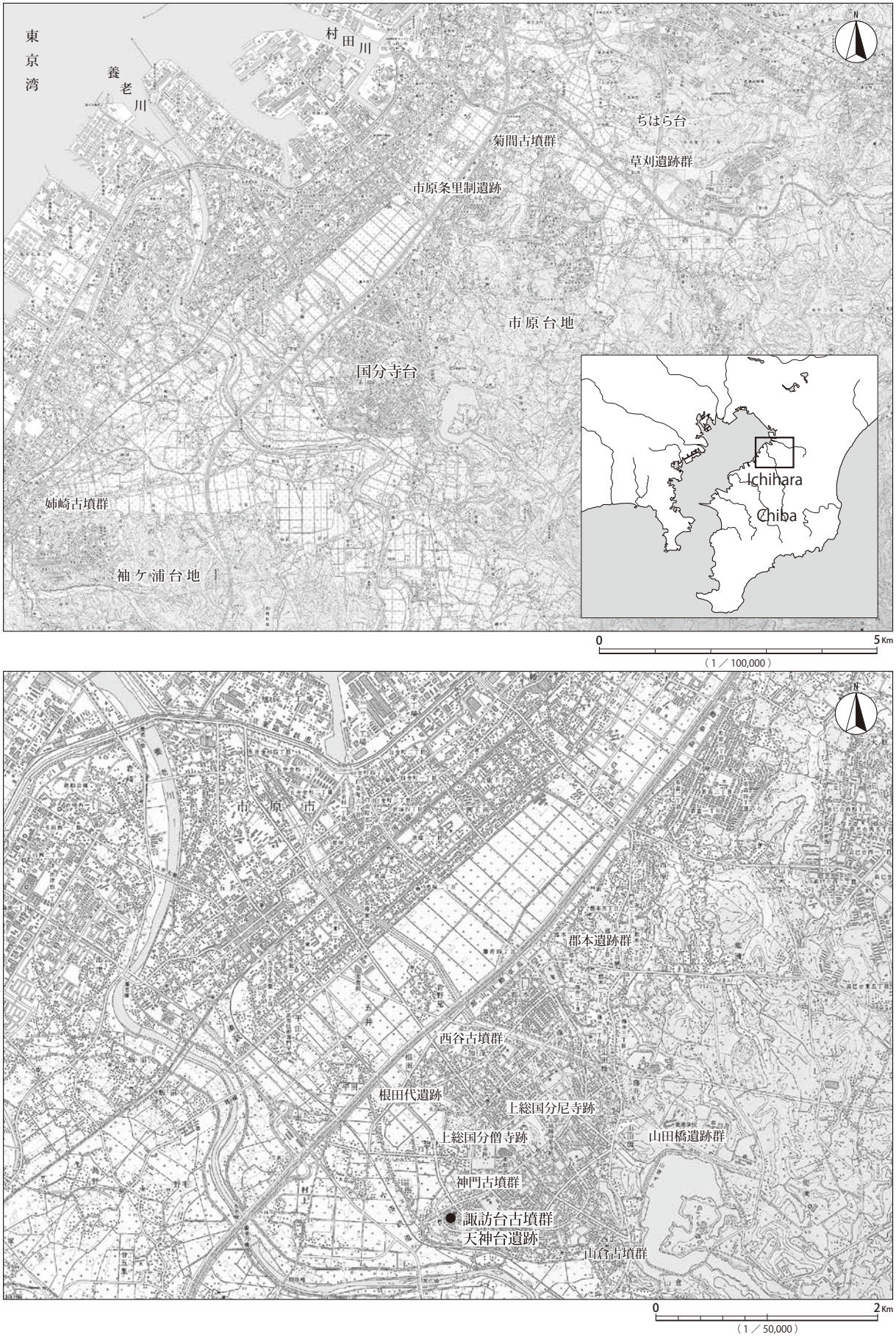
SW83地区は、40m四方の大グリッドを基準とするグリッドシステムを採用している。遺跡略号は099地区と同じく「099」、遺構番号は竪穴建物跡が1000番台等と表記される。遺物は、共通する方法で注記されている。

セ28地区は、20m四方の大グリッドを基準とするグリッドシステムを採用している。遺跡略号は「セ28」、遺構番号は「001」のように3桁表記され、遺構種別を分けずに通し番号になっている。遺物は「001」等と注記されている。掘立柱建物跡柱穴の柱痕跡検出状況・土層断面の記録が残されているが、完掘状況の図面の欠落が目立つ。

セ54・セ72・セ73地区は、20m四方の大グリッドを基準とするグリッドシステムを採用している。遺跡略号は「セ54」・「セ72」・「セ73」、遺構番号は「001」のように3桁表記され、遺構種別を分けずに通し番号になっている。遺物は一桁もしくは「001」等と注記されている。

第3節　立地と環境

周辺地形と遺跡の立地　市原市は東京湾東岸、房総半島の中央部に位置する（第1・2図）。外房沖の太平洋にはプレートの三重会合点があることから、大陸側へのプレート沈み込みに伴う関東造盆地運動が生じており、房総半島の北西側が沈降、南東側が隆起し続けている。東京湾東岸南部の河川は、付加体の隆起で生じた急峻な山地より平野部へ下り、北西から西に向かって流れている。市内を貫流する養老川はその一つで、清澄山系に発する30km以上の流れを持ち、上流は夷隅川上流域、中流は一宮川水系と繋がり太平洋岸へと結びついている。市域北部で東京湾へ流入する村田川は、房総半島が最も狭まる位置を東西に流れ、一宮川水系を介して、東京湾と太平洋を結ぶ最短経路となっている。東京湾東岸南部の各河川下流域は、海沿いの台地によって比較的明確に区切られており、水系に基づく独立性の高い地域単位を形成している。流域単位の相対的な独立性と、景観・経路の異なる村田川流域と養老川流域の結節部を擁する地域性が、市域の地形的特徴と言える。



第2図　国分寺台地区・天神台遺跡位置図

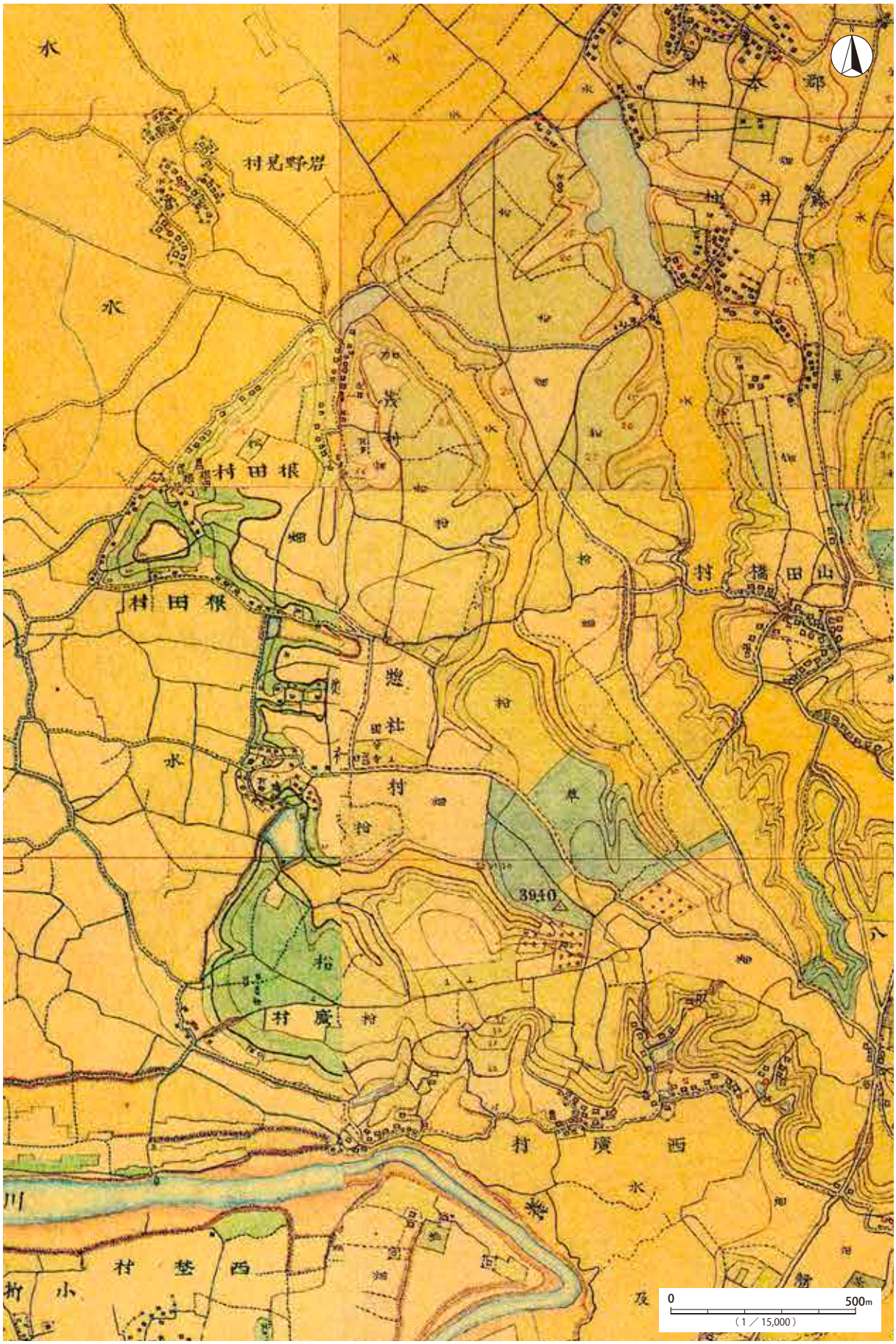
天神台遺跡の所在する国分寺台地区は、村田川左岸、養老川右岸に当たる市原台地の西側に位置し、樹枝状に開析された谷に区切られた地形を呈している（第２～４図）。後期旧石器時代の最寒冷期に深く下刻された谷は、縄文海進期以降に埋積され、幅の広い谷底平野となり、台地の海岸側斜面は北東−南西方向の直線的な海食崖となっている。主要な谷は、南からＡ谷・Ｂ谷・Ｃ谷と区分しており、Ｃ谷の奥部は現在、山倉ダムとして利用されている。谷内には湧水があり、それぞれの谷口には溜池が設けられている。天神台遺跡の位置する台地は標高 25m 前後で、北にＡ谷、南に養老川、西に沖積地を望む。台地縁辺部との比高差は約 15m である。

周辺の遺跡と歴史的環境　国分寺台地区では多数の遺跡が調査されており、各時代の遺構と遺物が検出されている（第４・５図）。後期旧石器時代の遺物は、根田代遺跡（大村他2005）・長平台遺跡（小橋他2006）等の立川ローム層中から剥片石器が出土している。市内では縄文時代草創期の遺跡として、隆起線文土器・有舌尖頭器等の出土した中高根南原遺跡（大塚他1979・1980）が著名だが、国分寺台地区においては加茂遺跡Ｄ地点（小橋他2002）等に有舌尖頭器が検出されている程度で、遺構・土器の存在は不明瞭である。縄文時代早期には、各遺跡から炉穴が多く検出されるようになり、分布が明確化する。海進がピークを迎える縄文時代前期までに明確な居住痕跡が確認され、天神台遺跡では、早期後葉から前期前葉の竪穴建物跡・炉穴・貝層が多数検出されている。早期後葉の集落跡には大型竪穴建物跡が複数伴い、貝層からは獣骨等の動物遺存体の他、1400点を超えるツノガイ類による貝玉等の人工遺物が検出されている（忍澤他2014）。地区内の縄文時代中期は希薄化し、菊間手永貝塚（近藤1987）・門前貝塚・山倉貝塚（金子他1969）・小谷吹上遺跡等、周辺に分布が認められる。縄文時代後期・晩期の遺跡としては、祇園原貝塚（忍澤1999）・西広貝塚（金子他1977、安井他2005、鶴岡・忍澤他2007）が著名である。祇園原貝塚は上総国分尼寺の造営に伴って削平を受けているが、貝層と多数の遺構・遺物が検出されている。国分寺台地区南東端に位置する西広貝塚は、貝層全量の分析の結果、多数の人工遺物と動物遺存体が得られている。

弥生時代前期から中期中葉にかけての遺構は確認されていないが、縄文時代晩期後葉の浮線文・沈線文の施される土器が、西広貝塚・台遺跡Ｂ地点（半田 2003）等で散発的に出土している。弥生中期中葉には、同じ養老川右岸に位置する武士遺跡（加納他 1996）において壺棺再葬墓群が検出されているものの、国分寺台地区内に遺構は認められず、少量の土器片が見られる程度である。

弥生時代中期後葉には、複数の環濠集落が営まれ、竪穴建物跡と方形周溝墓群が多く検出されるようになる。竪穴建物跡は、根田代遺跡・台遺跡Ｂ地点・台遺跡Ｃ地点（木對 2010）、御林跡遺跡（Ⅱ）（木對 2008）、祇園原貝塚上層（忍澤 1999）、上総国分尼寺跡下層、向原台遺跡（高橋 2002）、天神台遺跡で検出されている。環濠は、根田代遺跡・台遺跡・祇園原貝塚上層で確認され、向原台遺跡にも存在した可能性がある。いずれの環濠も弥生時代後期前半までに埋没している。弥生時代後期は、古墳群として調査された遺跡を除き、ほぼすべての遺跡で竪穴建物跡が検出されており、総数は約1000 棟に達する。御林跡遺跡（木對他 2004）・長平台遺跡等では、帯状円環型銅釧とガラス玉を副葬品に持つ方形周溝墓が伴っている。

弥生時代終末期に至ると、北陸南西部系・東海西部系・近畿系等の外来系土器が多く見られるようになり、竪穴建物跡群の分布が継続する。北陸南西部系は、上総国分僧寺下層の中台遺跡（鶴岡・櫻井 2013）と南中台遺跡（大村・鶴岡 2009）、東海西部系は長平台遺跡に目立ち、近畿周辺由来のタ



第3図　国分寺台地区の旧地形



第４図　国分寺台地区と周辺の遺跡群

タキ甕も各遺跡から多数出土している。中台遺跡の集落跡は弥生時代終末期後半に最盛期を迎えるが、それと対応するように墳丘長 40m を超える神門墳丘墓群が築造されている。当時の周辺地域において最大規模の墳墓群であり、定型化前方後円墳出現以前の広域首長墓と見られる。

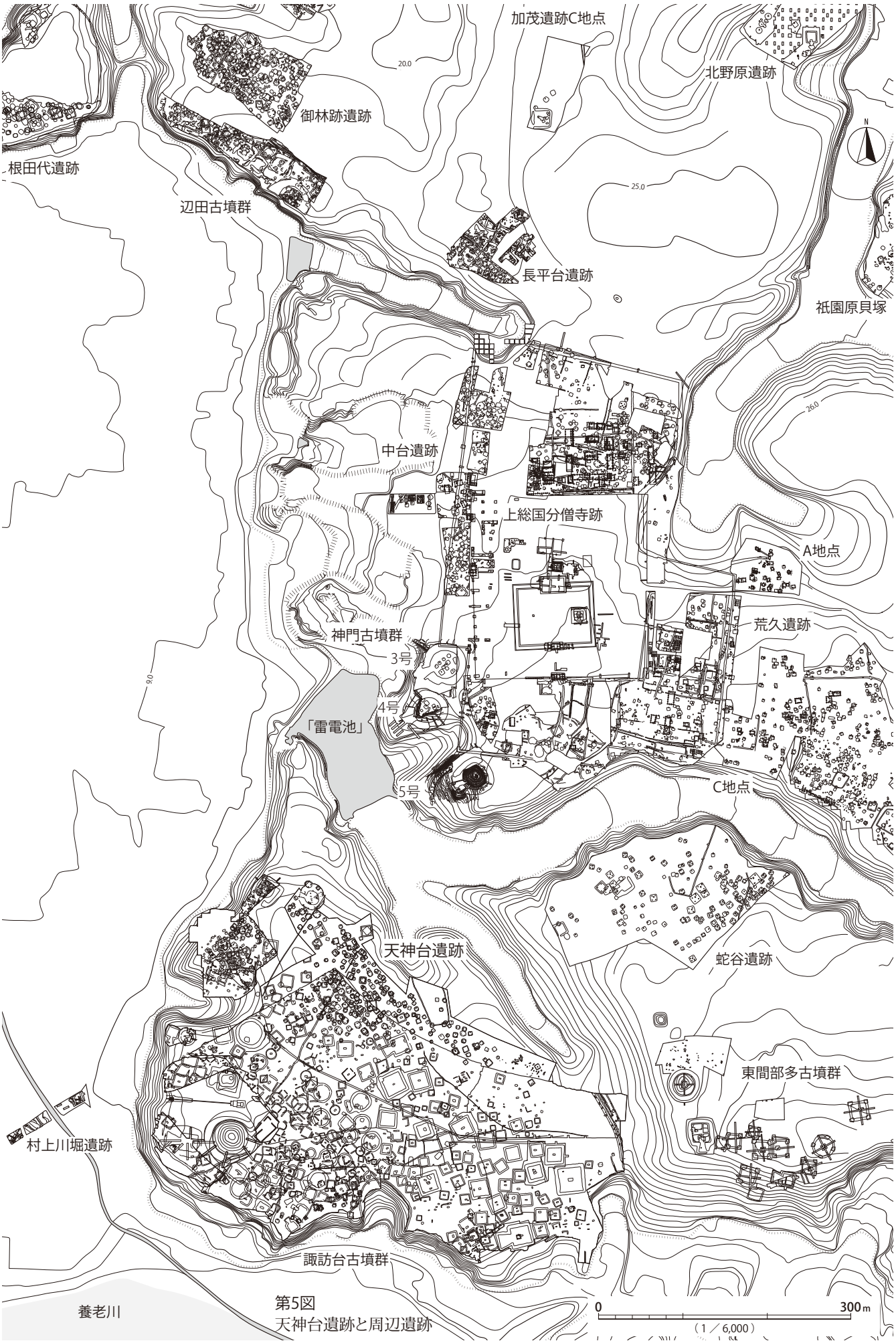
古墳時代前期以降、市内では 1500 基以上の古墳が築造されることになるが、養老川流域内で最大規模の前方後円墳は姉崎古墳群に移動し、国分寺台地区内の古墳築造は、規模面においては相対的に低調となる。神門 3 号墓に連なる円丘系と見られる直径 32m の円墳、辺田 1 号墳（木對他 2004）が前期中葉に存在するが、同時期に姉崎古墳群では 93m の前方後円墳、釈迦山古墳（小久貫 1996）が築造されている。諏訪神社境内に残る大型円墳、諏訪台 10 号墳は、村田川下流左岸の大厩浅間様古墳（直径 50m）（浅利・田所 1999）、養老川下流左岸の海保大塚古墳（直径 60m）（小橋・近藤 2018）と同様に、古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる可能性があるものの、直径 42m と規模は及ばない。中期中葉以降には、王賜銘鉄剣の出土した稲荷台 1 号墳、短甲出土の東間部多 1 号墳（市毛他 1974）等が築造され、持塚 3 号墳（田中 2000）・南向原 4 号墳（田中他 1976）には埴輪が伴う。後期後半には根田 1 号墳で下総型埴輪（田中 1981）、山倉 1 号墳（小橋・櫻井他 2004）に生出塚窯から供給された埴輪が出土している。諏訪台古墳群は、中期から後期前半に空白期を持つが、西谷古墳群と同様に後期後半以降、円墳群の築造が再開し活発化する。古墳時代終末期には、諏訪台古墳群内に複数の前方後方墳が築造され、古代まで続く方形墳墓群が周囲に展開する。古墳時代終末期の前方後方墳は、姉崎古墳群の六孫王原古墳（中村他 1975）、海保西竹谷 SM003（大山他 2014）等、養老川下流域に集中し、規模の大きさから国造・評督等の首長墓形態として採用されたと見られる。

古代には、東海道の駅路が東京湾を超えて接続し、市原郡に上総国府が置かれている。初期の国府所在地については、国分寺台地区西側台地下の村上地区を想定する説（須田 1998 等）もあるが、大字市原所在の光善寺廃寺周辺を想定する意見もあり、確定を見ていない。台地下の村上川堀遺跡（蜂屋・小川 2000）では、奈良時代の掘立柱建物跡が検出されているものの小規模である。養老川旧河道に隣接する村上遺跡では、8 世紀前半に遡る掘立柱建物跡群が検出されており、水運に関係する可能性が指摘される（小久貫・渡邊 1997）。稲荷台遺跡では、両側溝の古代道路跡沿いに平安期の建物群多数が広範囲に検出され、国司館等の公的施設と推定されている（浅利他 2003）。

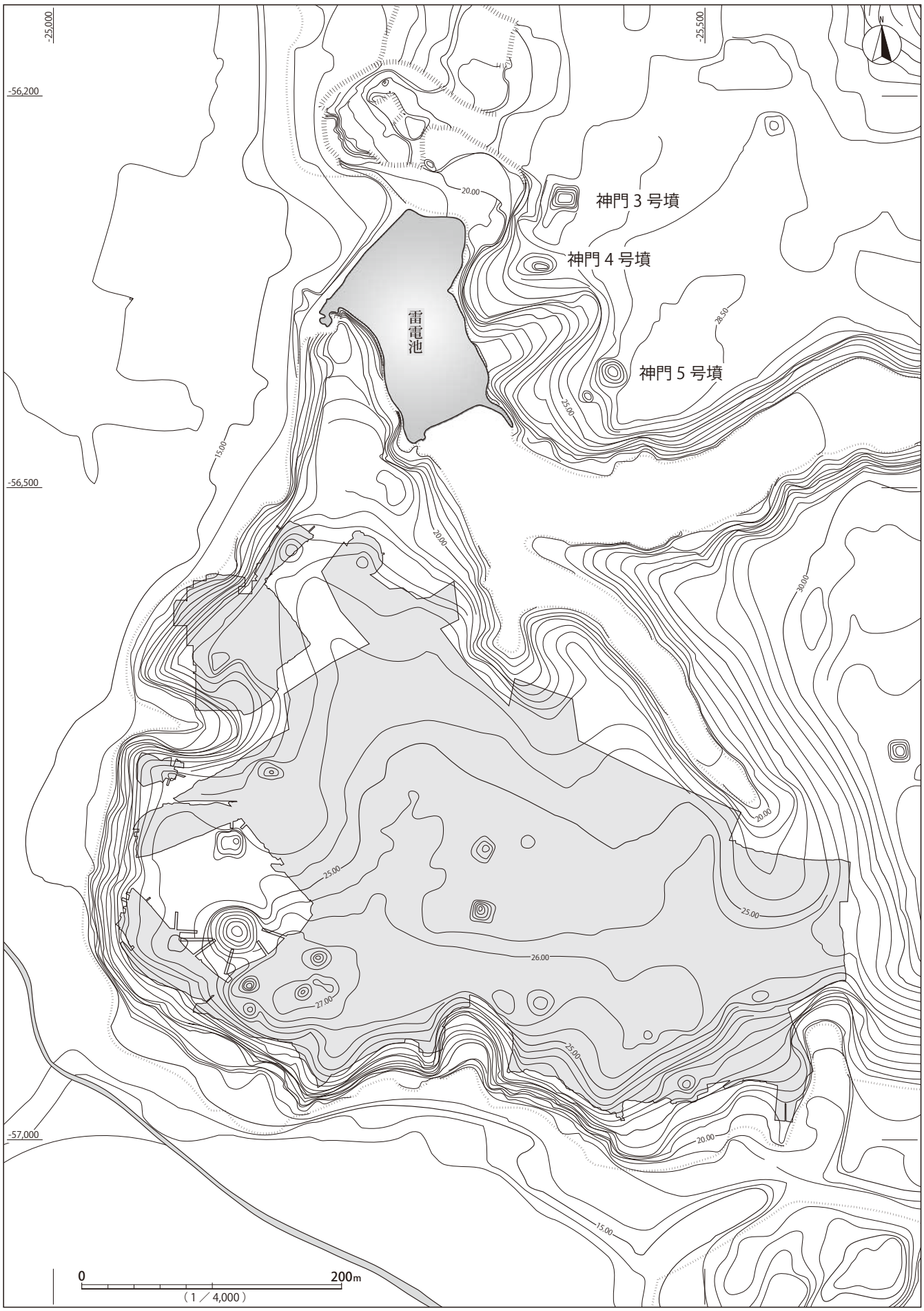
古代の国分寺台地区に大きく影響を及ぼしたのは、上総国分寺の建立であり、僧寺（櫻井他 2009、鶴岡他 2016）・尼寺（宮本 1998）の造営と維持管理は、古代の遺跡・遺構分布を規定したと考えられる。僧寺・尼寺から距離を取るように、加茂遺跡 D 地点・北野原遺跡・御林跡遺跡・台遺跡等において、奈良・平安時代の方形墳墓群が築造されており、諏訪台古墳群における墳墓群も、A 谷を挟む立地に意味があったと思われる。

中世前期には、上総国分僧寺外郭において復興に関連すると見られる区画が成立する。また、荒久遺跡 B 地点（北見・櫻井他 2011）では、菊花双雀文鏡と水晶製数珠玉の副葬される、平安時代末の土坑墓が検出されている。台遺跡 A 地点（木對他 2014）・山倉 1 号墳墳丘上等では、鎌倉時代に遡る常滑大甕が蔵骨器として利用されている。中世後期には台遺跡において、台地整形区画が造成され、地下式坑と中世土器・陶磁器が多数検出され、活発な土地利用状況が認められる。

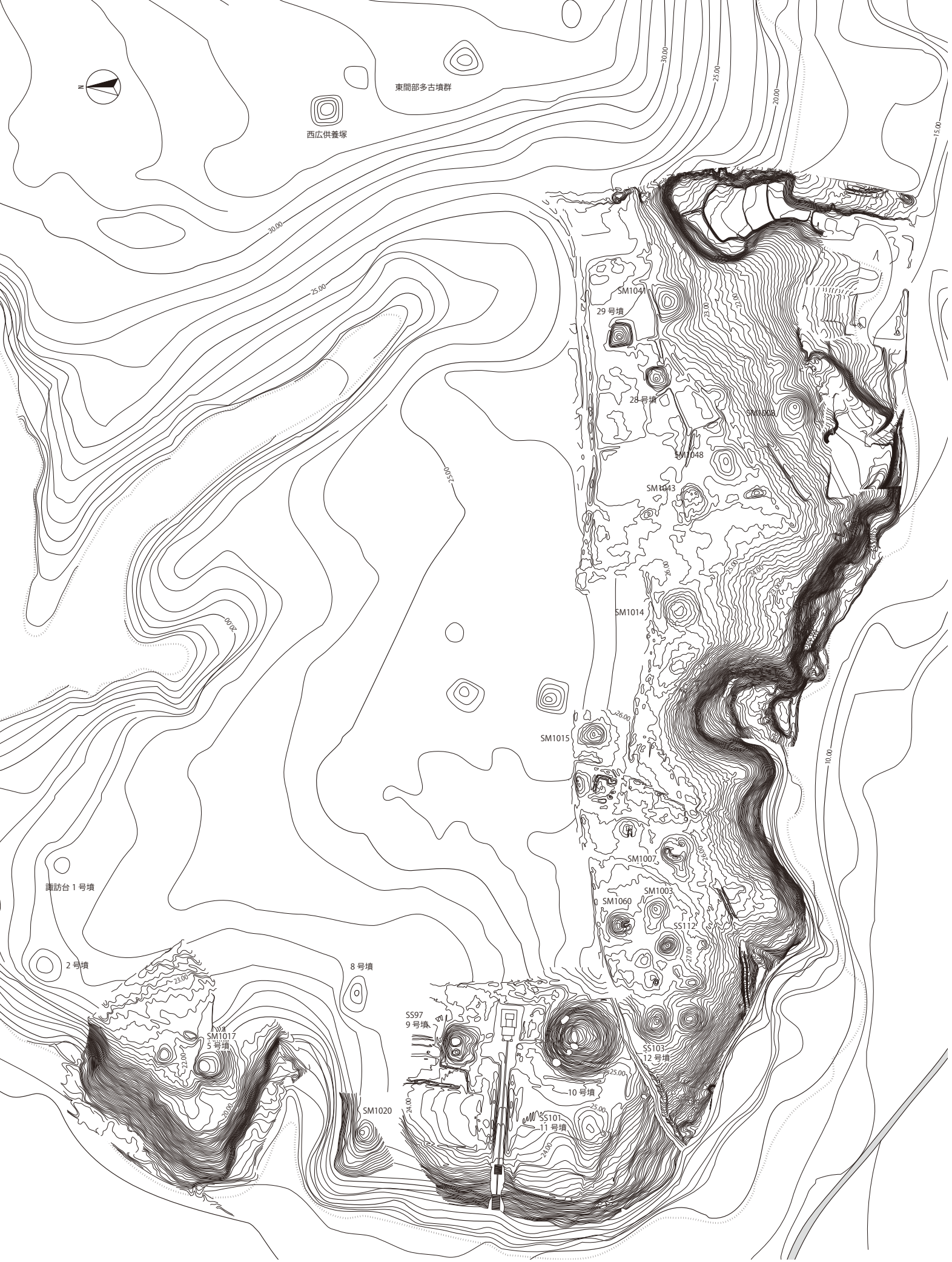
近世には、18 世紀の国分寺復興に関わると見られる梵鐘鋳造遺構が、僧寺から検出されている。



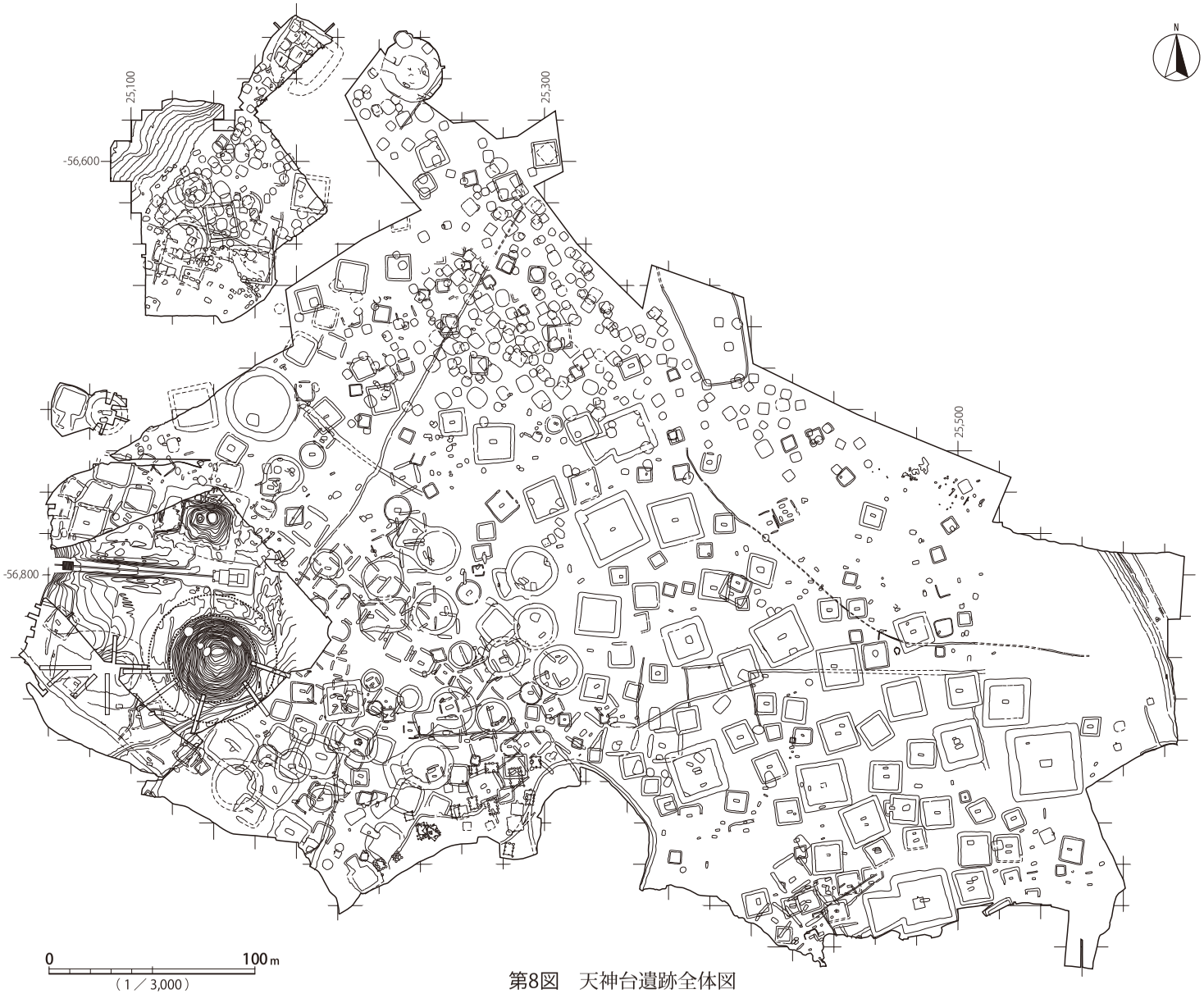
第5図
天神台遺跡と周辺遺跡



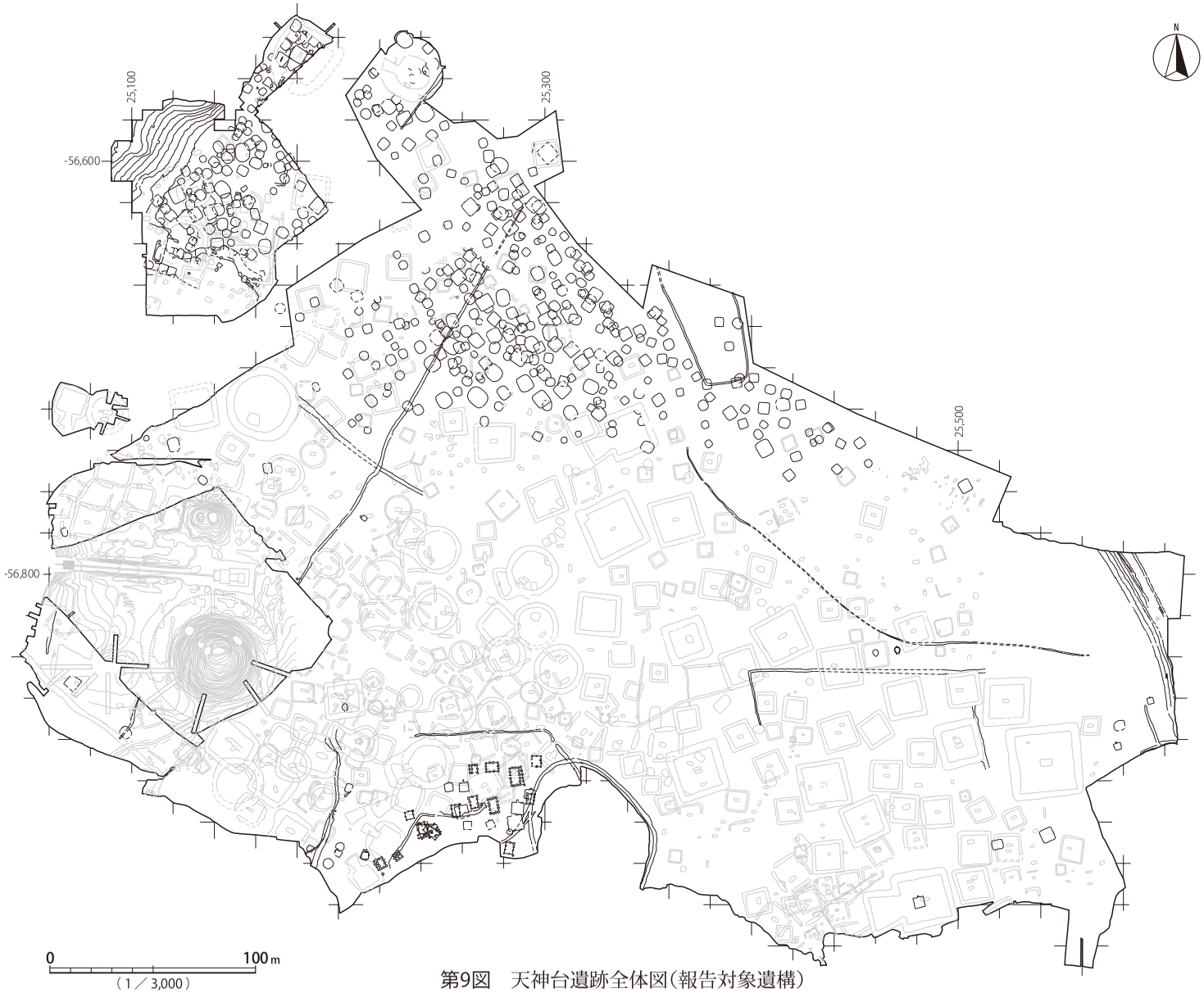
第6図　天神台遺跡調査区と周辺地形図



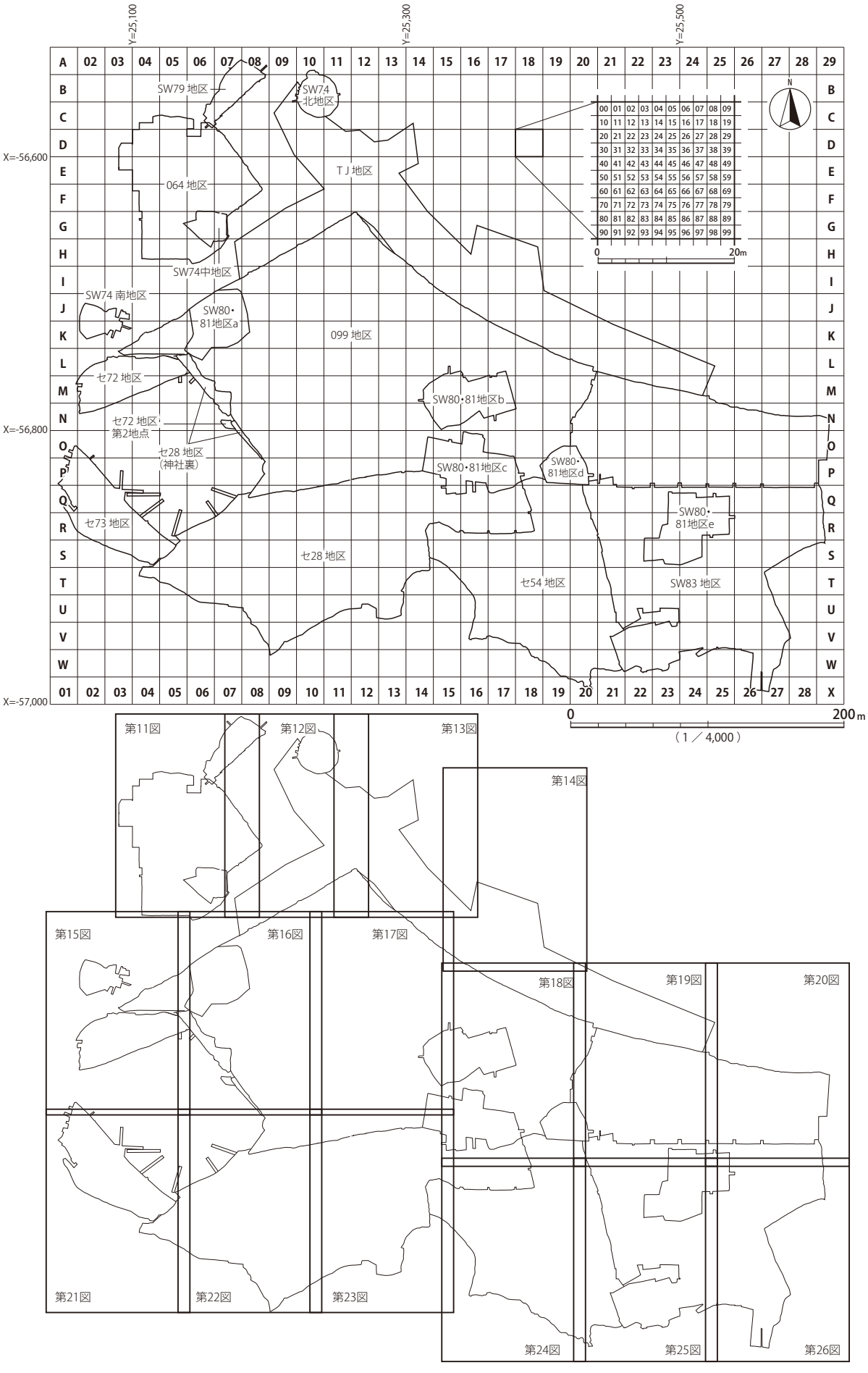
第7図　諏訪台古墳群・天神台遺跡測量図



第8図　天神台遺跡全体図



第9図　天神台遺跡全体図（報告対象遺構）


Y=25,100
Y=25,300
Y=25,500
X=-56,600
X=-56,800
X=-57,000
SW79 地区
SW74
北地区
TJ 地区
064 地区
SW74中地区
SW74 南地区
SW80・
81地区a
099 地区
セ72 地区
セ72 地区
第2地点
セ28 地区
（神社裏）
SW80・81地区b
SW80・81地区c
SW80・
81地区d
SW80・
81地区e
セ73 地区
セ28 地区
セ54 地区
SW83 地区
N
0
20m
0
200m
（1／4,000）

第11図
第12図
第13図
第14図
第15図
第16図
第17図
第18図
第19図
第20図
第21図
第22図
第23図
第24図
第25図
第26図

第10図　調査区配置図

第２表　竪穴建物跡一覧

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
TJ	H1	SI0001	L21	38	28	17	弥生後期	－	－	円形	340	50	3.7	3.6	1.03	10.972	13.320	82.4	－	－	－	－	8	6	12	－	－	－						
TJ	H2	SI0002	K21	86	29	17	古墳前期	前半	草刈１～２	方形	324	20	4.6	4.6	1.00	20.430	21.160	96.6	－	－	－	－	21	30	23	－	－	－						
TJ	H3	SI0003	K21	81	30	17	古墳前期	前半	草刈２	方形	27	25	4.3	4.0	1.08	16.178	17.200	94.1	－	－	－	－	17	22	17	－	－	－						
TJ	H4	SI0004	L21	40	31	17・18	弥生終末期	中葉	中台１-２～２-１	隅円方形	317	30	4.3	4.0	1.08	16.411	17.200	95.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－			多			
TJ	H5	SI0005	K20	48	33	18	弥生終末期	－	－	方形	326	20	4.5	4.5	1.00	18.686	20.250	92.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－				SI0006		
TJ	H6	SI0006	K20	48	33	18	弥生終末期	－	－	隅円方形	318	50	4.3	3.8	1.13	14.457	16.340	88.5	－	－	－	－	21	－	－	－	－	－					SI0005	
TJ	H7	SI0007	K20	85	35	18	弥生終末期	－	－	隅円方形	337	20	3.4	2.9	1.17	8.665	9.860	87.9	－	－	－	－	48	－	－	－	－	－				SI0009		
TJ	H8	SI0008	K20	53	35	18	弥生終末期	－	－	隅円方形	336	15	3.5	3.4	1.03	10.627	11.900	89.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
TJ	H9	SI0009	K20	76	35	18・19	弥生後期後半～弥生終末期	－	山田橋～中台１	円形～隅円方形	308	50	3.9	3.8	1.03	12.555	14.820	84.7	－	－	－	－	－	－	23	13	－	－			有		SI0007	
TJ	H10	SI0010	L20	10	37	19	弥生終末期	－	－	隅円方形	70	15	5.2	4.4	1.18	21.080	22.880	92.1	－	－	－	－	13	20	10	39	36	33						
TJ	H11	SI0011	J20	81	38	19	古墳前期	前半	草刈２	方形	353	25	4.6	4.6	1.00	20.615	21.160	97.4	－	－	－	－	19	13	11	14	27	－						
TJ	H12	SI0012	K19	37	39	20	弥生終末期	－	－	方楕円形	286	40	5.4	5.0	1.08	22.759	27.000	84.3	2.96	2.52	2.88	2.30	59	68	72	66	26	16	g24		炭化物			
TJ	H13	SI0013	K19	32	40	20	弥生後期後半～弥生終末期	－	－	隅円方形	305	30	3.7	3.2	1.16	11.027	11.840	93.1	－	－	－	－	16	16	－	－	－	－						
TJ	H14	SI0014	K19	82	41・42	20・21	弥生終末期	－	－	隅円方形	330	50	7.9	7.0	1.13	52.483	55.300	94.9	3.84	4.48	3.84	4.48	68	77	68	64	34	47	g44 h23 i40 j26 k16 l18 m28 n36 o18 p23		少			ガラス小玉	ベッド状遺構あり。
TJ	H15	SI0015	K19	61	43	21・22	弥生後期	後半	－	方楕円形	322	60	4.7	4.0	1.18	16.173	18.800	86.0	2.12	2.70	2.10	2.40	61	58	65	57	13	－			有				窪地利用による硬化面。
TJ	H16	SI0016	J19	92	45	22	古墳前期	前半	－	方形	4	30	5.5	5.3	1.04	28.261	29.150	97.0	2.56	3.26	2.68	2.96	81	80	78	84	46	25			有				貯蔵穴内に粘土ブロック。
TJ	H17	SI0017	J19	87	46	22	弥生後期～弥生終末期	－	－	方楕円形	359	5	6.8?	6.0?	1.13	34.818	40.800	85.3	－	－	－	－	14	66	35	38	－	－			少				
TJ	H18	SI0018	J19	68	47	22	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	284	40	5.0	4.6	1.09	20.934	23.000	91.0	2.46	2.30	2.82	2.48	67	64	82	58	25	22	g24						
TJ	H19	SI0019	J19	54	48	23	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	279	60	5.2	4.4	1.18	19.642	22.880	85.8	2.34	2.80	2.38	2.80	61	67	54	50	17	16			少				
TJ	H20	SI0020	K18	37	49	23	弥生終末期後半～古墳前期前半	－	－	方形	341	50	4.5	4.4	1.02	19.035	19.800	96.1	2.04	2.24	2.04	2.32	46	26	58	48	32	－							ベッド状遺構あり。
TJ	H21	SI0021	L19	69	50	23	古墳前期	－	－	方形	321	10	4.9	4.7	1.04	21.861	23.030	94.9	－	－	－	－	29	19	22	－	－	－						
TJ	H22	SI0022	J18	49	51・52	23	弥生終末期～古墳前期前半	－	－	方形	326	25	3.8	4.0	0.95	13.953	15.200	91.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	g16		有	SI0023			
TJ	H23	SI0023	J19	20	51・52	23・24	弥生終末期	－	－	方形	357	40	4.3	4.6	0.93	19.119	19.780	96.7	2.80	2.68?	2.50?	3.00?	6	40	42?	－	10	－			多		SI0022		ベッド状遺構あり。
TJ	H24	SI0024	J18	36	53	24・55	古墳前期	前半	－	方形	348	20	4.8	4.8	1.00	22.351	23.040	97.0	3.52?	3.06?	3.36	2.80	29	38	51	21	47	－				SI0162			
TJ	H25	SI0025	K18	04	54	24	弥生終末期	－	－	隅円方形	324	10	6.0	5.4	1.11	31.479	32.400	97.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
TJ	H26	SI0026	J17	79	55	24	弥生終末期	－	－	隅円方形	325	10	4.0	4.0	1.00	15.323	16.000	95.8	－	－	－	－	17	26	26	13	－	－						
TJ	H27	SI0027	K17	38	56	24	弥生後期	後半	－	方楕円形	343	40	3.7	3.4	1.09	10.883	12.580	86.5	－	－	－	－	3	3	2	16	14	28	g29						
TJ	H28	SI0028	J17	98	57	24・25	弥生後期	後半	－	方楕円形	330	70	5.0	4.6	1.09	19.370	23.000	84.2	1.98	2.56	2.16	2.52	42	50	45	42	7	5	g8		少				
TJ	H29	SI0029	J17	26	58	25	弥生終末期	前半	中台１	隅円方形	333	40	3.8	4.0	0.95	14.310	15.200	94.1	－	－	－	－	24	13	－	－	－	－			多・炭化材			鉄滓？	鍛冶遺構の可能性。
TJ	H30	SI0030	J17	62	59	25	弥生終末期	前半	中台１	隅円方形	350	60	3.6	3.4	1.06	11.717	12.240	95.7	－	－	－	－	23	34	－	－	－	－			全体・炭化物				
TJ	H31	SI0031	J16	77	60	25・26	弥生終末期	－	－	隅円方形	325	40	5.4	5.4	1.00	26.721	29.160	91.6	3.00	2.70	3.12	2.52	64	59	75	61	25	48			少				
TJ	H32	SI0032	I17	94	62	26	弥生終末期	－	－	隅円方形	326	45	4.3	4.1	1.05	16.162	17.630	91.7	－	－	－	－	22	硬化面から13	33	20	－	－			多・炭化物				
TJ	H33	SI0033	I16	78	63	26	弥生終末期	前半	中台１	隅円方形	86	5	4.7	4.6	1.02	20.277	21.620	93.8	－	－	－	－	23	43	32	35	5	－							ベッド状遺構か。
TJ	H34	SI0034	I16	49	64	26・27	弥生終末期	前半	中台１	方楕円形	334	35	5.1	4.9	1.04	22.147	24.990	88.6	2.50	2.36	2.48	2.44	50	45	48	65	－	8	g10						
TJ	H35	SI0035	I17	80	65	27	弥生終末期	－	－	隅円方形	277	15	4.5	4.3	1.05	18.065	19.350	93.4	－	－	－	－	26	31	－	－	－	－							
TJ	H36	SI0036	I16	35	66	27	弥生終末期	－	－	隅円方形	289	20	4.1	4.0	1.03	15.794	16.400	96.3	－	－	－	－	15	－	－	－	－	－			多・炭化物				

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
TJ	H37	SI0037	I16	84	67	27	弥生終末期	後半	中台2	隅円方形	324	30	5.0	4.6	1.09	22.121	23.000	96.2	2.58	2.68	2.50	2.68	70	62	72	67	37	-	a-b'2.80m b'-c'2.68m c'-d2.72m b'75cm c'80cm	有					
TJ	H38	SI0038	J16	34	69	27	弥生終末期	-	-	方楕円形	312	20	3.0	3.2	0.94	8.608	9.600	89.7	-	-	-	-	34	20	41	28	-	-							
TJ	H39	SI0039	I16	18	70	27	弥生終末期	-	-	隅円方形	310	10	4.1	4.1	1.00	16.460	16.810	97.9	-	-	-	-	20?	7?	-	-	-	-			少		SI0062		
TJ	H40	SI0040	I16	13	72	28	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	333	30	5.4	5.1	1.06	26.092	27.540	94.7	2.40	3.20	2.40	3.20	55	76	72	61	24	-			有	SI0041			
TJ	H41	SI0041	I16	23	74	28	弥生後期	前半	-	方楕円形	334	30	3.8	3.7	1.03	11.868	14.060	84.4	-	-	-	-	18	14	-	-	-	-					SI0040		
TJ	H42	SI0042	I15	59	75・76	28・29	弥生終末期	-	-	隅円方形	308	30	4.0	3.8	1.05	14.005	15.200	92.1	-	-	-	-	-	22	-	-	-	-			多・炭化物				
TJ	H43	SI0043	I15	76	81	29	弥生終末期	-	-	隅円方形	320	10	5.9	5.6	1.05	32.532	33.040	98.5	4.16	-	-	-	16	19	17	-	-	-			有	SI0044			
TJ	H44	SI0044	I15	87	82	29	弥生後期	後半	-	方楕円形	329	60	4.7	4.0	1.18	16.007	18.800	85.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0043・SM1103		
TJ	H45	SI0045	I15	63	83	2	弥生後期？	-	-	不明	312	-	5.9?	5.0?	1.18	25.228	29.500	85.5	2.82	3.12	2.72	3.44	27	21	19	22	-	-							覆土遺存せず。
TJ	H46	SI0046A	I15	60	84	29	弥生終末期後半～古墳前期前半	-	-	隅円方形	335	30	4.4	4.3	1.02	17.461	18.920	92.3	-	-	-	-	15	26	42	-	-	-	c'36		有	SI0046B			SI0046B → A。
TJ	H46	SI0046B	I15	60	84	29	弥生終末期	-	-	隅円方形	335	45	4.0	4.1	0.98	15.256	16.400	93.0	d-e 2.56	e-f 2.66	f-g 2.04	g-d 2.20	-	-	-	16	12	33	g10　h22	有			SI0046A		SI0043と遺構間接合か。
TJ	H47	SI0047	J17	39	85	30	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	354	40	5.0	4.4	1.14	20.104	22.000	91.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			多・炭化物		SD0001		
TJ	H48	SI0048	I18	44	86	30	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	355	50	4.2	4.4	0.95	16.533	18.480	89.5	2.20	2.43	2.19	2.46	61	62	67	63	-	-			少				
TJ	H49	SI0049	H18	82	87	2	弥生終末期	-	-	隅円方形	0	5	4.4	4.3	1.02	18.117	18.920	95.8	2.16	1.98	2.08	2.00	39	38	38	31	-	-			少				覆土遺存不良。
TJ	H50	SI0050	H18	96	88・89	30	弥生終末期	-	-	方楕円形	315	60	5.2	4.6	1.13	20.378	23.920	85.2	2.56	2.44	2.36	2.48	71	66	74	57	24	18					SD0001		
TJ	H51	SI0051	I15	19	90・91	30・31	弥生終末期	-	-	隅円方形	331	25	5.5	5.8	0.95	30.392	31.900	95.3	-	-	-	-	36	26	11	12	-	-			多	SI0052			
TJ	H52	SI0052	I15	17	90	31	弥生終末期	-	-	隅円方形	317	20	4.0?	3.6	1.11	13.305	14.400	92.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0051		
TJ	H53A	SI0053	H15	97	92	31	弥生後期後半～弥生終末期前半	-	-	方楕円形	332	30	3.0	2.7?	1.11	6.637	8.100	81.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0054・SI0163		
TJ	H54	SI0054	H15	95	92	31	弥生終末期	-	-	隅円方形	40	50	4.5	4.5	1.00	19.872	20.250	98.1	2.36	1.98	1.94	1.90	57	54	46	56	11	24	g54		少	SI0053・SI0163			
TJ	H55	SI0055	I15	03	93	31	弥生終末期	-	-	方楕円形	296	10	3.9	3.8?	1.03	13.103	14.820	88.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							覆土遺存不良。
TJ	H56	SI0056	H16	66	94・95	32	弥生終末期	-	-	隅円方形	311	60	5.2	4.8	1.08	23.711	24.960	95.0	2.24	2.60	2.44	2.80	54	50	73	61	35	-			有	SI0057		タタキ褒	出土土器多量。
TJ	H57	SI0057	H16	75	94・95	32	弥生終末期	-	-	方楕円形	57	40	3.8	3.6	1.06	11.630	13.680	85.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0056		
TJ	H58	SI0058	H15	65	100	32	弥生後期～弥生終末期	-	-	方楕円形	39	30	4.3?	4.0?	1.08	14.730	17.200	85.6	2.38	2.02	-	-	35	42	42	-	-	-					SI0054・SI0059・SK2		
TJ	H59	SI0059	H15	55	101・102	33	弥生終末期後半～古墳前期前半	-	-	隅円方形	306	40	4.9	5.0	0.98	23.446	24.500	95.7	-	-	-	-	23	37	-	-	-	-			多	SI0060			
TJ	H60	SI0060	H15	54	101・102	33	弥生終末期	-	-	隅円方形	346	30	5.0	5.0	1.00	24.604	25.000	98.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			有		SI0059		
TJ	H61	SI0061	H15	30	103・104・105	33	弥生終末期	-	-	長楕円形？	306	30	5.1?	4.2?	1.21	18.394	21.420	85.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0064・SI0063		
TJ	H62	SI0062	H16	88	70	2	古墳前期	前半	草刈1	隅円方形	312	5	4.0	3.5	1.14	13.555	14.000	96.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SI0039			
TJ	H63	SI0063	H15	21	103・104・105	33	弥生終末期	-	-	隅円方形	304	40	6.2	6.0	1.03	35.701	37.200	96.0	e-f 3.16	f-g 3.12	g-h 3.14	h-e 3.20	-	-	-	-	37	29	g58　h74　i35　j24		有	SI0066・SI0061			
TJ	H64	SI0064	H15	40	103・104・105	33	弥生終末期	-	-	隅円方形	304	20	5.8	5.2	1.12	29.442	30.160	97.6	2.32	2.84	2.30	2.86	88	86	77	67・77	-	-		可能性	有	SI0061		タタキ褒	
TJ	H65	SI0065	H14	18	103・104・105	33	弥生終末期	-	-	方楕円形	288	30	3.6?	3.4	1.06	10.681	12.240	87.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			有	SI0066			
TJ	H66	SI0066	H14	29	103・104・105	34	弥生後期	前半	-	隅円方形	334	30	4.3	3.9	1.10	15.088	16.770	90.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0065・SI0063		
TJ	H67	SI0067	H14	87	108	34	弥生後期	前半	-	長方楕円形	292	45	6.2	4.9	1.27	25.537	30.380	84.1	2.38	2.68	2.52	2.86	57	38	67	47	36	-					SI0068		
TJ	H68	SI0068	H14	65	109	34	古墳前期	前半	-	方形	329	15	7.2	6.7	1.07	47.613	48.240	98.7	3.86	4.06	3.78	4.26	60	45	51	55	80	43				SI0067・SI0069			

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間 (m)				ピット深度 (cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位 (度)	竪穴深度 (cm)	主軸長 (m)	直交軸 (m)	長短比	面積 (㎡)	方面積 (㎡)	方円度 (%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
TJ	H69	SI0069	H14	45	110	34	弥生終末期	前半	中台 1	方楕円形	332	30	4.2	3.8	1.11	13.821	15.960	86.6	-	-	-	-	19	15	-	-	-	-				SI0068		
TJ	H70	SI0070	H14	52	111・112	34	弥生後期	後半	-	方楕円形	320	30	5.3	4.5	1.18	21.061	23.850	88.3	2.22	2.62	2.22	2.66	43	42	74	61	-	-			有	SI0071		
TJ	H71	SI0071	H14	71	111・112	34	弥生後期	-	-	楕円形	318	30	4.5?	4.0	1.13	14.503	18.000	80.6	2.26	1.88	2.14	1.78	-	-	-	-	58	45	g50 h34		有		SI0070・SI0083	
TJ	H73	SI0073	H14	14	115	35	弥生後期	-	-	楕円形	336	5	5.4?	5.0	1.08	21.167	27.000	78.4	-	-	-	-	31	-	-	-	-	-			少		SI0160	
TJ	H74	SI0074	G15	70	116	35	弥生後期	後半	-	方楕円形	307	50	4.2	4.1	1.02	15.535	17.220	90.2	-	-	-	-	-	-	-	29	-	-					SI0075・SI0076	
TJ	H75	SI0075	G15	50	116	35	弥生終末期後半～古墳前期前半	-	-	隅円方形	325	30	4.6	4.4	1.05	19.561	20.240	96.6	-	-	-	-	-	-	29	-	-	-				SI0074・SI0077		
TJ	H76	SI0076	G14	69	116	35	弥生終末期	-	-	方楕円形	325	25	3.6 以上	5.3?	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SI0074	SI0075	
TJ	H77	SI0077	G14	58	116	35	弥生終末期	-	-	方楕円形	308	30	4.8	5.0	0.96	21.620	24.000	90.1	-	-	-	-	55	40	-	-	-	-					SI0075	
TJ	H78	SI0078	G14	32	119・120	35	弥生後期	前半	久ヶ原 2	長方楕円形	331	40	7.0	5.6	1.25	35.037	39.200	89.4	3.00	3.02	3.12?	3.04?	75?	67	75	72?	-	-					SI0079	
TJ	H79	SI0079	G14	11	119	35	弥生終末期後半～古墳前期前半	-	-	方形	330	5	3.7	4.0	0.93	13.514	14.800	91.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SI0078		
TJ	H80	SI0080	G13	78	123・124	35・36	弥生後期	前半	久ヶ原 2	方楕円形	336	25	6.6	5.7	1.16	32.585	37.620	86.6	3.08	3.40	3.08	3.28	74	79	88	77	72	63	g37 h-					
TJ	H81	SI0081	G14	98	127	36	弥生後期	前半	-	不整長方楕円形	309	30	4.8	3.8	1.26	15.484	18.240	84.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
TJ	H82	SI0082	G14	86	128	36	弥生後期	後半	山田橋 1～2 古	方楕円形	316	50	4.4	4.3	1.02	16.329	18.920	86.3	2.00	2.28	2.00	2.24	62	59	59	56	27	-			有・炭化物			
TJ	H83	SI0083	H14	82	111・112	34・36・37	弥生終末期	-	-	隅円方形	328	35	3.8	3.7	1.03	12.857	14.060	91.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	i16			SI0071	SM1083	
TJ	H84	SI0084	G14	26	129	37	弥生後期	-	-	楕円形	228	15	4.9	4.7	1.04	19.113	23.030	83.0	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-					SI0088	
TJ	H85	SI0085	H13	28	130	37	弥生後期	前半	-	方楕円形	326	50	5.5	4.8	1.15	22.653	26.400	85.8	2.84	2.56	2.82	2.56	39	52	68	49	13	-					SI0086	
TJ	H86	SI0086	H13	17	131	37	弥生後期	前半	-	楕円形	334	35	4.4?	3.9	1.13	13.660	17.160	79.6	-	-	-	-	48	62	-	-	-	-				SI0085		
TJ	H87	SI0087	G14	71	132	37	弥生終末期	-	-	隅円方形	41	40	3.3	2.9	1.14	8.368	9.570	87.4	-	-	-	-	17	27	-	-	-	-						
TJ	H88	SI0088	G14	27	129	38	弥生終末期～古墳前期前半	-	-	方形	228	10	4.2	3.9	1.08	15.633	16.380	95.4	-	-	-	-	-	6?	-	-	-	-				SI0084		
TJ	H89	SI0089	H13	59	133	38	古墳前期	前半	-	方形	330	15	5.2	4.9	1.06	24.744	25.480	97.1	2.52	2.54	2.37	2.56	62・54	46	55	51	52	42			多・炭化材			鳥帽子形支脚が原位置出土。
TJ	H90	SI0090	G13	25	135	38	弥生後期	後半	-	隅円方形	314	15	3.7	3.7	1.00	12.037	13.690	87.9	-	-	-	-	6	21	8	-	-	-						
TJ	H91	SI0091	G13	51	136	38・39	弥生終末期～古墳前期前半	-	-	隅円方形	305	25	5.0	5.2	0.96	24.457	26.000	94.1	3.00	2.96	2.98	2.80	64	60	70	83	28	-			有	SI0130	SM1124		ベッド状遺構あり。
TJ	H92	SI0092	F13	84	138	39	弥生後期	後半	-	方楕円形	307	25	3.0	2.9	1.03	7.350	8.700	84.5	-	-	-	-	40	-	-	-	-	-				SI0107			
TJ	H93	SI0093	F14	84	139	39	弥生後期後半～弥生終末期前半	-	-	隅円方形	318	70	4.1	3.6	1.14	13.175	14.760	89.3	-	-	-	-	41	18	-	-	-	-			多・炭化材			
TJ	H94B	SI0094	F13	98	141	39	弥生後期	-	-	楕円形	329	10	3.0	3.3?	0.91	7.943	9.900	80.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI0164	
TJ	H95	SI0095	F13	51	142	2	古墳前期	前半	-	方形	48	15	6.5	6.2	1.05	36.652	40.300	90.9	-	-	-	-	14	25	-	-	-	-			有			
TJ	H96	SI0096	G13	22	143	40	弥生後期	前半	-	方楕円形	334	40	4.6	4.3	1.07	16.452	19.780	83.2	2.34	1.90	2.32	2.12	55	61	49	74	18	31			少・炭化物		SI0127・SM1124	
TJ	H97	SI0097	F12	96	145	40	弥生終末期	-	-	隅円方形	339	20	4.2	4.2	1.00	16.197	17.640	91.8	2.08	2.08	2.10	2.26	29	35	31	29	19	20			少			
TJ	H98	SI0098	F12	66	146	40	弥生終末期～古墳前期前半	-	-	方形	35	10	4.8	4.9	0.98	22.941	23.520	97.5	-	-	-	-	-	33?	-	-	-	-			多			
TJ	H99	SI0099	F13	33	147	40	古墳前期	前半	草刈 1	方形	315	25	4.8	4.9	0.98	22.078	23.520	93.9	2.52	2.32	2.44	2.44	64	53	62	74	-	-					SD0003	
TJ	H100	SI0100	F14	71	148	41	弥生後期～弥生終末期	-	-	不整方形	302	25	3.4	3.6?	0.94	9.906	12.240	80.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
TJ	H101	SI0101	F13	39	149・150	41	古墳前期	-	-	隅円方形	231	15	3.9	3.6	1.08	13.444	14.040	95.8	-	-	-	-	-	-	-	-	32	28				SI0102		
TJ	H102	SI0102	F13	47	149・150	41	古墳前期	前半	-	隅円方形	45	30	4.0	3.6	1.11	13.901	14.400	96.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	g26 h24		有	SI0106	SI0101	
TJ	H103	SI0103	F12	29	153・154	41	弥生終末期	前半	中台 1	方楕円形	301	50	6.6	5.8	1.14	33.039	38.280	86.3	3.16	3.46	3.15	3.60	63	67	77	46	30	31			多・炭化材	SI0123	SI0113	口縁多孔壺	
TJ	H104	SI0104	E13	70	157	41	弥生後期	後半	-	不整隅円方形	3	10	5.6	4.8	1.17	23.315	26.880	86.7	2.68	2.64	2.68	2.60	81	49	65	84	58	-	a'33	可能性			SM1078	
TJ	H105	SI0105	F12	01	158	41・42	弥生終末期後半～古墳前期前半	-	中台 2～草刈 1	隅円方形	318	40	7.2	6.5	1.11	44.077	46.800	94.2	3.30	4.12	3.36	4.00	62	80	76	81	50	101	g13 h75 i65		有・炭化材	SI0112		
TJ	H106	SI0106	F13	58	149・150	42	弥生後期後半～弥生終末期前半	-	-	方楕円形	309	40	5.2	4.5	1.16	20.275	23.400	86.6	2.14?	2.88?	2.10	2.88	57	56?	43	67	-	-			多・炭化物		SI0102		

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
TJ	H107	SI0107	F13	83	138	42	弥生後期	−	−	長方楕円形	263	10	5.0?	3.9?	1.28	16.702	19.500	85.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0092		
TJ	H108	SI0108	E13	43	160・161	42	弥生終末期	−	−	隅円方形	328	5	5.4	4.7	1.15	24.818	25.380	97.8	−	−	−	−	−	−	−	−	46	−			少				床面に被熱赤変部。
TJ	H110	SI0110	E13	83	160・161	42・43	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	山田橋２～中台１	方楕円形	325	50	4.6	4.4	1.05	18.058	20.240	89.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0111・SI0115・SM1078		
TJ	H111	SI0111	E13	03	163	42	弥生終末期後半～古墳前期前半	−	中台２～草刈１	隅円方形	319	15	4.1	4.1	1.00	15.781	16.810	93.9	2.34	2.06?	2.22?	2.08	18	17	17?	16	−	−			多	SI0110			
TJ	H112	SI0112	F12	13	158	42・43	弥生後期	後半	−	不整隅円長方形	288	20	3.9?	3.2	1.22	10.801	12.480	86.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			有		SI0105		
TJ	H113	SI0113	F12	28	153・154・156	43	弥生終末期後半～古墳前期前半	−	中台２～草刈１	方形	321	15	4.1	4.0?	1.03	15.698	16.400	95.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			多・炭化物	SI0103			
TJ	H114	SI0114	F12	07	164	43	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	351	20	4.6	4.4	1.05	17.331	20.240	85.6	−	−	−	−	26	45	−	−	−	−			少				
TJ	H115	SI0115	E13	64	160・161	43	弥生終末期	後半	中台２	隅円方形	326	15	5.6	5.0	1.12	26.316	28.000	94.0	2.46	2.90	2.76	2.62	55	62	35	72	−	−			有	SI0110			
TJ	H116	SI0116	E12	75	165	44	弥生終末期	前半	中台１	方楕円形	345	30	3.8	3.7	1.03	12.266	14.060	87.2	−	−	−	−	20	24	−	−	−	−			少				
TJ	H117	SI0117	E12	83	166	44	弥生終末期後半～古墳前期前半	−	中台２～草刈１	方形	317	5	3.2	2.9	1.10	8.665	9.280	93.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0119			
TJ	H118	SI0118	F12	51	167	44	弥生終末期	−	−	隅円方形	38	5	3.6	3.2	1.13	10.374	11.520	90.1	−	−	−	−	62	−	−	−	−	−							
TJ	H119	SI0119	E12	63	166	44	弥生後期	−	−	円形	−	5	4.1	3.8	1.08	12.199	15.580	78.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			有・炭化材		SI0117		
TJ	H120	SI0120	E12	40	168	44	弥生後期	−	−	方楕円形	271	30	3.6	3.2	1.13	9.682	11.520	84.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1140		
TJ	H121	SI0121	E12	67	169	44	弥生終末期～古墳前期前半	−	−	方形	325	10	4.4	4.1	1.07	17.193	18.040	95.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1078		
TJ	H122	SI0122	E13	27	170	44・45	弥生終末期	−	−	隅円方形	344	20	4.2	4.0	1.05	14.632	16.800	87.1	−	−	−	−	28	24	−	−	−	−			有		SM1080		
TJ	H123	SI0123	F13	21	153・154	45	弥生後期	後半	山田橋２	方楕円形	355	30	3.3	3.1?	1.06	9.181	10.230	89.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g34		有		SI0103		
TJ	H124	SI0124	E11	27	172	45	弥生終末期～古墳前期前半	−	−	隅円方形	284	10	4.2	3.6	1.17	14.352	15.120	94.9	−	−	−	−	30	46	−	−	−	−							
TJ	H125	SI0125	F13	07	173・174	45	弥生終末期	−	−	隅円方形	313	60	6.3	6.4	0.98	38.887	40.320	96.4	3.14	3.44	3.14	3.42	125	94	100	97	32	50	g44 h32 i50 j45		有		SI0135		ヤリガンナ・石杵（水銀朱）	
TJ	H126	SI0126	E12	17	176	45・46	弥生終末期	−	−	隅円方形	330	40	5.7	5.9	0.97	30.179	33.630	89.7	2.92	2.72	3.02	2.88	74	83	79	48	36	−	c−d'2.76m d'45cm	可能性			SI0134			
TJ	H127	SI0127	G13	12	143	46	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	隅円方形	296	25	3.8	3.6?	1.06	12.186	13.680	89.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g33 h23 i21 j27 k18				SI0096			
TJ	H128	SI0128	D12	55	178	46	弥生後期	−	−	方楕円形	345	40	4.7	4.2	1.12	16.745	19.740	84.8	2.40	2.12?	2.40?	2.20	34	28	−	38	13	24							
TJ	H129	SI0129	D11	15	179	46	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	345	40	4.3	4.4	0.98	16.437	18.920	86.9	−	−	−	−	26	−	−	−	−	−			有				
TJ	H130	SI0130	G13	62	136	46	弥生終末期	−	−	方楕円形	351	15	3.8	3.4	1.12	10.418	12.920	80.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	29					SI0091・SM1124		
TJ	H131	SI0131	D11	93	180	46・47	弥生後期	−	−	不整隅円長方形	344	25	4.9?	4.0	1.23	18.015	19.600	91.9	−	−	−	−	35	−	−	−	−	−					SS2		
TJ	H132	SI0132	E11	71	181	47	弥生終末期	前半	中台１	隅円方形	351	15	5.5	5.3	1.04	26.012	29.150	89.2	2.40	3.12	2.40	3.08	68	69	81	56	−	−					SS1	受口状口縁甕	
TJ	H133	SI0133	D10	56	182	47	弥生終末期	−	−	隅円方形	308	25	5.4	5.0	1.08	25.653	27.000	95.0	2.28	2.88	2.28	2.72	59	59	47	55	19	14	g23		少				SS2に接する位置。
TJ	H134	SI0134	E12	08	183	47	弥生後期	前半	−	楕円形	302	40	8.4	7.4?	1.14	51.104	62.160	82.2	3.44?	3.72?	3.44?	3.72?	56?	80?	64?	62?	−	−			少		SI0126		
TJ	H135	SI0135	F13	18	173・174	48	弥生後期	後半	−	方楕円形	325	40	6.6?	5.8?	1.14	33.228	38.280	86.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	k50				SI0125		
TJ	H136	SI0136	D10	83	185	48	弥生終末期	前半	−	隅円方形	259	25	3.3	3.2	1.03	9.564	10.560	90.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							床面周溝小穴壁面抉り込み。
TJ	H137	SI0137	D12	86	186	48	弥生終末期	前半	−	隅円長方形	358	45	6.0	5.0	1.20	28.019	30.000	93.4	3.12?	2.94?	3.16?	2.92?	46?	48?	56?	55?	32?	−	g−		少	SI0134			
TJ	H138	SI0138	D10	51	187	48	弥生終末期	−	−	隅円方形	225	10	5.3	5.0	1.06	23.701	26.500	89.4	2.24	3.46	2.80	3.32	60	53	48	55	16	−							
TJ	H139	SI0139	D10	12	188	49	弥生後期	前半	久ヶ原２	隅円方形	315	55	4.4	3.8	1.16	15.064	16.720	90.1	−	−	−	−	24	17	34	−	−	−			有・炭化物				床面周溝小穴壁面抉り込み。
TJ	H140	SI0140	C11	70	190	49	弥生後期	後半	−	方楕円形	324	50	9.0?	8.2	1.10	61.408	73.800	83.2	4.24?	b−d 4.40?	d−e 4.64?	e−a 4.72?	44?	−	58?	58?	56?	−	g28? h−		有			円形石製品【所在不明】	
TJ	H141	SI0141	C09	27	192・193	49	弥生終末期	−	−	隅円方形	42	10	3.7	3.5	1.06	11.517	12.950	88.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			有・炭化材	SI0146			
TJ	H142	SI0142	C09	86	195	49・50	弥生後期	前半	久ヶ原２	楕円形	302	30	5.3	4.8	1.10	20.230	25.440	79.5	2.36	2.46	2.36	2.46	71	63	73	63	35	32			有・炭化材				

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間(m)				ピット深度(cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位(度)	竪穴深度(cm)	主軸長(m)	直交軸(m)	長短比	面積(㎡)	方面積(㎡)	方円度(%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
TJ	H143B	SI0143	C09	79	197	50	弥生終末期	−	−	隅円長方形	344	25	3.8?	3.1?	1.23	10.446	11.780	88.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0165			
TJ	H144A	SI0144	C10	95	198	50	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	335	30	6.2	7.1	0.87	41.075	44.020	93.3	3.88?	4.06?	3.84?	4.04?	40?	36?	36?	42?	28?	−				SI0166			
TJ	H145	SI0145	F11	80	200	50・51	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	332	30	5.1	4.9	1.04	22.287	24.990	89.2	2.56	2.76	2.34	2.80	39	51	70	68	33	30	g33 h29 i30 j15 k40 l40		炭化材			手びねり土製品	
TJ	H146	SI0146	C09	47	192・193	51	弥生後期	前半	−	方楕円形	312	20	3.8	3.4	1.12	11.431	12.920	88.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g20		有・炭化材		SI0148→SI0141		
TJ	H147	SI0147	C09	54	192・193	51	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	方楕円形	331	25	3.8	3.4	1.12	11.342	12.920	87.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	19			有	SI0148?			
TJ	H148	SI0148	C09	35	192・193	51	弥生後期	後半	−	方楕円形	344	30	4.8	4.4	1.09	17.936	21.120	84.9	2.32	2.02	2.36	2.12	54	52	70	44	32	−				SI0146	SI0147?		
TJ	H149	SI0149	H08	44	202	52	弥生後期	前半	−	隅円方形	343	35	4.5	4.0	1.13	16.451	18.000	91.4	−	−	−	−	31	−	−	−	−	−							
TJ	H150	SI0150	C10	74	203	52	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	不整楕円形	327	15	3.8	3.3	1.15	9.608	12.540	76.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0152	SI0166?	蓋形土器	
TJ	H151	SI0151	F11	56	205	52	弥生終末期	−	−	隅円方形	349	15	3.8	3.8	1.00	12.809	14.440	88.7	−	−	−	−	23	25	16	−	−	−					SK1		
TJ	H152	SI0152	C10	62	203	53	弥生後期	前半	久ヶ原2	方楕円形	318	30	7.1?	6.2	1.15	38.325	44.020	87.1	3.44	3.08	3.56	3.08	74	67	73	69	23	−			少		SI0150・SI0155?		
TJ	H153	SI0153	B09	98	206	53	弥生終末期	−	−	隅円方形	327	15	4.4	4.0?	1.10	15.498	17.600	88.1	−	−	−	−	−	15?	−	−	−	−					SI0154		
TJ	H154	SI0154	B09	88	206	53	弥生終末期後半～古墳前期前半	−	−	隅円方形	310	25	4.2	3.8?	1.11	15.640	15.960	98.0	−	−	−	−	−	−	14?	−	−	−				SI0153			
TJ	H155	SI0155	C10	53	208	53	弥生後期～弥生終末期	−	−	方楕円形	325	5	4.4	4.0?	1.10	14.710	17.600	83.6	−	1.86?	c−a 1.96?	−	37?	−	35?	29?	−	−				SI0152?			
TJ	H156	SI0156	G10	24	209	53・54	弥生後期	−	−	不整方楕円形	325	25	3.6	3.4	1.06	10.029	12.240	81.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1079		
TJ	H157	SI0157	G10	55	210	54	弥生後期	中葉	−	不整方楕円形	329	25	4.2	4.2	1.00	14.282	17.640	81.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			有・炭化材				
TJ	H158	SI0158	E11	40	211	54	弥生後期	前半	−	楕円形	325	45	4.7	4.2	1.12	16.773	19.740	85.0	−	−	−	−	19	27	−	−	−	−			全面・炭化材		SS1		焼土は全面との記述あり。
TJ	H159	SI0159	D11	32	212	54	弥生後期	前半	久ヶ原2	不整方楕円形	315	40	4.9	4.6	1.07	20.210	22.540	89.7	2.74	2.52	2.76?	2.52?	50	71	50	−	−	−			少				炉体転用土器片あり。
TJ	H160	SI0160	G14	93	115	55	古墳前期?	−	−	方形	335	5	4.1	3.5	1.17	13.814	14.350	96.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0073			
TJ	H161	SI0161	H08	70	214	55	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	方楕円形	271	40	4.2	3.9	1.08	14.259	16.380	87.1	−	−	−	−	16	−	−	−	−	−					SM1086		
TJ	H24B	SI0162	J18	27	53	55	弥生後期以前	−	−	円形	358	−	4.6	4.4	1.05	16.647	20.240	82.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI0024		
TJ	H53B	SI0163	I15	06	92	55	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	隅円方形?	318	30	3.4?	3.5?	0.97	11.707	11.900	98.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0053	SI0054		
TJ	H94A	SI0164	F13	89	141	39	弥生後期	−	−	円形	329	20	3.6	3.8	0.95	10.968	13.680	80.2	−	−	−	−	19	42	19	−	−	−				SI0094			
TJ	H143A	SI0165	C09	79	197	50	弥生終末期	−	−	隅円方形	333	25	5.0?	4.4?	1.14	20.840	22.000	94.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			少		SI0143		
TJ	H144B	SI0166	C10	85	198	55	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	隅円方形	22	20	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI0150?	SI0144		
TJ	H200	SI0167	K18	08	215	56	弥生終末期	−	−	不整方楕円形	312	10	3.7	4.0	0.93	13.141	14.800	88.8	b−a 1.60	−	−	−	28	33	29	25	32	−							
TJ	H300	SI0168	L24	81	216	56	弥生終末期	−	−	隅円方形	329	45	6.0	5.7	1.05	31.674	34.200	92.6	−	−	−	−	16	15	26	9	26	−			少				
TJ	−	SI0201	H08	09	217	2	弥生後期～弥生終末期	−	−	隅円方形	316	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1061		調査記録なし。
TJ	−	SI0202	H09	24	217	2	弥生後期～弥生終末期	−	−	隅円方形	246	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1061		調査記録なし。
TJ	−	SI0203	D14	70	218	2	古墳前期?	−	−	方形	318	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1080		調査記録なし。
TJ	−	SI0204	D13	65	218	2	不明	−	−	不明	17	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1080		調査記録なし。
099	1000	SI1000	−	−	687	3・4	不明	−	−	不明	−	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							調査記録なし。
099	1001	SI1001	−	−	687	3・4	不明	−	−	不明	−	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							調査記録なし。遺物のみ。
099	1002	SI1002	I09	07	221	58	弥生後期	後半	−	隅円方形	342	30	4.6	4.4	1.05	18.186	20.240	89.9	−	−	−	−	17	29	−	−	−	−							
099	1003	SI1003	H10	08	222	58	弥生後期	−	−	方楕円形	335	10	4.6	4.1	1.12	15.673	18.860	83.1	−	−	−	−	9	10	−	−	−	−							
099	1004	SI1004	H11	20	223	58	弥生終末期	前半	中台1−2	隅円方形	304	30	4.8	4.2	1.14	17.951	20.160	89.0	1.84	2.08	2.34	1.92	41	46	30	10	43	−	c−f1.74m f−a2.00m				SM1170		
099	1005	SI1005	G11	92	224・225	59	弥生終末期	前半	中台1−1	隅円方形	310	50	5.2	4.8	1.08	22.261	24.960	89.2	2.34	3.00	2.32	3.06	70	64	56	68	−	−							土器多数出土。
099	1006	SI1006	G11	64	227	59	弥生後期	後半	−	方楕円形	318	10	3.5	3.4?	1.03	10.005	11.900	84.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI1007		

位置					図	図版	時期			形態		規模								主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
099	1007	SI1007	G11	66	228	59	弥生終末期	前半	中台1-1	隅円方形	318	40	4.7	4.2	1.12	18.903	19.740	95.8	2.22	2.44	1.88	2.48	67	68	51（柱筋）・53・49	73	32	47				SI1006			
099	1008	SI1008	G11	61	230	59	弥生後期後半～弥生終末期前半	-	-	方楕円形	331	25	4.3?	3.9	1.10	15.159	16.770	90.4	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-							
099	1009	SI1009	G11	49	231	59	弥生終末期	前半	-	方楕円形	323	40	4.9	4.3	1.14	18.059	21.070	85.7	-	-	-	-	-	-	45	-	-	9			有		SM1181		
099	1010	SI1010	H11	41	234	59	弥生終末期	前半	中台1-1	方楕円形	326	30	4.7	4.4	1.07	18.100	20.680	87.5	-	-	-	-	25	28	13	30	-	-							SI1004に接する（SI1010が先行か）。
099	1011	SI1011	H11	62	235	60	弥生後期	前半	-	円形	130	5	3.3	3.4	0.97	8.876	11.220	79.1	-	-	-	-	14	31	25	13	-	-							
099	1012A	SI1012A	H10	94	236	60	弥生終末期	-	-	隅円方形	344	40	4.9	5.0	0.98	21.619	24.500	88.2	2.36	2.52	2.34?	2.50?	54	53	57	-	-	15	g15 h6 i18 j15		有	SI1012B・SI1013?	SS9?		炉体転用土器片あり。
099	1012B	SI1012B	I10	03	236	60	弥生後期	後半	-	不明	-	15	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI1012A		
099	1013	SI1013	H10	96	238	60	弥生後期	後半	-	隅円方形	340	10	3.5	3.0	1.17	9.545	10.500	90.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI1012A?・SS9?		
099	1014	SI1014	H10	88	239	60	弥生後期	後半	-	方楕円形	329	30	3.5	3.4	1.03	10.068	11.900	84.6	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-							
099	1015	SI1015	H09	39	240	60	弥生後期	後半	山田橋1	円形	325	20	3.6?	3.2	1.13	9.341	11.520	81.1	-	-	-	-	13	-	-	-	-	-							
099	1016	SI1016	I09	76	241	60	弥生後期	前半	久ヶ原2新	円形	352	30	4.3	4.4	0.98	15.134	18.920	80.0	-	-	-	-	25	11	-	-	-	-					SS8		炉体転用土器片あり。
099	1017	SI1017	I09	99	242	61	弥生後期	前半	久ヶ原2	方楕円形	351	30	4.0	3.8?	1.05	12.530	15.200	82.4	-	-	-	-	15	13	10	-	-	-					SS8		
099	1018	SI1018	I10	22	243	61	弥生後期後半～弥生終末期	-	-	隅円方形	328	30	4.7	4.1	1.15	16.989	19.270	88.2	2.36	2.48	2.36	2.44	73?	104	94	84	13	24					SK73・SK58		
099	1019	SI1019	I10	43	244	61	弥生後期～弥生終末期	-	-	隅円方形	333	5	3.4	3.2	1.06	10.087	10.880	92.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
099	1020	SI1020	I10	65	245	61	弥生後期	前半	-	方楕円形	336	35	4.6	4.2	1.10	16.268	19.320	84.2	-	-	-	-	9	10	-	-	-	-			有				
099	1021	SI1021	J13	17	246	61	弥生終末期	前半	-	方楕円形	329	30	3.8	3.5	1.09	11.711	13.300	88.1	-	-	-	-	22	-	-	-	-	-			多・炭化材	SI1102		屈折口縁半球形鉢	
099	1022	SI1022	J13	35	247	62	弥生終末期	前半	中台1	方楕円形	333	65	7.8	7.0	1.11	48.792	54.600	89.4	3.80	3.66	4.06	3.88	84	97	75	113	31	26	g14 h23						
099	1023B	SI1023	J14	90	250・251	62	弥生後期	後半	-	方楕円形	2	30	5.2?	4.4?	1.18	19.092	22.880	83.4	h-i 2.26	i-j 1.90	-	-	-	-	-	-	-	-	h96 i76 j-k34			SI1204		
099	1024	SI1024	J09	12	254	62	弥生後期	後半	山田橋1	方楕円形	321	40	4.6	4.0	1.15	16.267	18.400	88.4	2.28	2.28	1.98	2.20	83	83	55	39	8	31	g24 h18 i24 j37						
099	1025	SI1025	J08	44	255	3・4	弥生後期？	-	-	長楕円形	333	10	4.5	3.2?	1.41	12.105	14.400	84.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SS10		
099	1026	SI1026	K09	33	256	62	弥生後期～弥生終末期	-	-	方楕円形	316	10	3.6	3.3	1.09	10.155	11.880	85.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
099	1027	SI1027	K09	57	257	62	弥生後期～弥生終末期	-	-	隅円方形	4	15	3.1?	3.4	0.91	9.351	10.540	88.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SM1150		
099	1028	SI1028	J11	75	258・259	62	弥生後期	後半	山田橋1	方楕円形	327	55	7.8	6.8	1.15	45.855	53.040	86.5	3.64	3.48	3.64	3.52	73	56	56	65（柱筋）・70・41	19	-					滑石製勾玉	
099	1029	SI1029	J10	14	260	62	弥生後期	後半	-	不整円形	316	45	4.4	4.4	1.00	15.553	19.360	80.3	2.38	1.94	2.08	1.76	35	34	52	52	24	12	g23				SS6・SS7	擬縄文壺（東海東部系？）	
099	1030	SI1030	I10	49	261	63	弥生終末期	前半	-	方楕円形	330	60	5.9	5.1	1.16	25.267	30.090	84.0	2.84	2.76	2.88	2.58	52	48	71	58	25	16						炉体転用土器片あり。
099	1031	SI1031	H11	82	263	60・63	弥生終末期	-	-	隅円方形	318	10	2.7	2.6	1.04	6.214	7.020	88.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SK77		
099	1032	SI1032	I10	72	264	63	弥生後期	後半	-	方楕円形	332	30	5.3	4.7	1.13	20.996	24.910	84.3	2.26	2.20	2.40	2.20	82?	80?	80	81	14	-							
099	1033	SI1033	I11	23	266	63	弥生終末期	-	-	長方楕円形	313	20	7.3	6.1	1.20	40.430	44.530	90.8	3.12	3.80	3.28	3.84	44	39	42	35	32	27	g30				SI1206・SM1115		
099	1034	SI1034	I11	82	267・268	63	弥生終末期	-	-	方楕円形	319	25	7.8	7.2	1.08	47.746	56.160	85.0	3.46	3.74	3.12	3.74	85	87	57	78	31	-	g48 h38? i48				SD1001		
099	1035	SI1035	G12	21	270・271	63・64	弥生終末期	後半	中台2-1	隅円方形	308	40	5.0	5.0	1.00	23.600	25.000	94.4	-	-	-	-	25	-	-	-	-	-			有	SI1108・SI1036	SM1053・SM1181	小銅鐸	
099	1036	SI1036	G12	23	270・271	63・64	弥生終末期	前半	中台1-2	隅円方形？	314	25	5.4	5.1?	1.06	26.158	27.540	95.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI1035	受口状口縁甕	
099	1037	SI1037	G11	78	272・273	64	弥生終末期	後半	中台2-1	隅円方形	319	60	6.2	6.4	0.97	37.466	39.680	94.4	3.12	2.66	2.96	2.64	80	59	54?	50	16	10	g19 h20 i34 j40 k18 l10 m10 n- o20		有	SI1038		受口状口縁甕	床面周溝が二重で、貯蔵穴も2箇所以上あり。
099	1038	SI1038	G12	71	275・276	64	弥生終末期	前半	-	隅円方形	300	55	5.0	5.6	0.89	26.728	28.000	95.5	2.54	2.26	2.54	2.22	30	39	59	35	-	19	g7 h10 i8 j9		少	SI1044	SI1037・SM1181	受口状口縁甕	間仕切り溝あり。

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間(m)				ピット深度(cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位(度)	竪穴深度(cm)	主軸長(m)	直交軸(m)	長短比	面積(㎡)	方面積(㎡)	方円度(%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
099	1039	SI1039	H12	00	277	65	弥生終末期	前半	中台1-1	方楕円形	331	35	4.1	3.7	1.11	12.611	15.170	83.1	-	-	-	-	13	-	-	-	-	-			多・炭化材			土器多数・タタキ甕	床面から完形土器多量(中台1-1式)。
099	1040	SI1040	G12	44	280	65	弥生終末期	-	-	隅円方形	307	25	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				SI1041			
099	1041	SI1041	G12	55	280	65	弥生後期	後半	-	方楕円形	306	30	5.1	4.5?	1.13	20.615	22.950	89.8	2.64	-	-	-	54	54	-	-	-	-					SI1040・SI1042		
099	1042	SI1042	G12	64	281	3・4・66	弥生終末期～古墳前期前半	-	-	隅円方形?	299	10	4.5?	4.3?	1.05	17.734	19.350	91.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			少				
099	1043	SI1043	G11	96	282	66	弥生後期	後半	山田橋2	不整円形	200	15	3.5	3.7	0.95	10.444	12.950	80.6	-	-	-	-	46	44	-	-	-	-					SM1162	貝層	
099	1044	SI1044	G12	83	283	66	弥生終末期	前半	-	隅円方形	337	10	6.0?	5.7?	1.05	32.145	34.200	94.0	-	-	-	-	73	29?	22	40	-	-					SI1038・SM1169・SD1001		
099	1045	SI1045	H12	23	284	66	弥生後期	前半	-	不整円形	326	15	3.8	3.7	1.03	11.491	14.060	81.7	-	-	-	-	27	-	-	-	-	-					SI1048		
099	1046	SI1046	H12	29	285・286	66	弥生後期	前半	久ヶ原2新	長方楕円形	347	45	8.2	6.5	1.26	44.917	53.300	84.3	3.56	4.00	3.56	4.00	68	62	63・75	74	30	74	g14		有			土器多数・貝層	土器多数出土。埋没時は山田橋1式期か。炉体転用土器片あり。
099	1047	SI1047	H12	87	292	66	弥生終末期	前半	中台1	隅円方形	311	35	5.4	5.5	0.98	28.503	29.700	96.0	2.94	2.80	2.94	3.06	62	63	67	66	10	30			有				ベッド状遺構あり。
099	1048	SI1048	H12	35	294・295	66・67	弥生終末期	中葉	中台1-2～2-1	隅円方形	329	40	6.6	7.5	0.88	47.680	49.500	96.3	4.30	3.48	4.32	3.34	69	71	59	73	35	-			有	SI1049・SI1045		水銀朱付着高杯・臼井南式・垂飾状土製品	ベッド状遺構あり。
099	1049	SI1049	H12	66	294・295	66	弥生後期	-	-	方楕円形	326	40	4.7?	4.6	1.02	20.277	21.620	93.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	63	g74 h25		有		SI1048		
099	1050	SI1050	H13	61	298	67	弥生後期	後半	山田橋2	方楕円形	336	35	5.2	5.1	1.02	24.341	26.520	91.8	2.86	2.42	3.14	2.42	90	72	77?	76	25	86					SK80	タタキ甕	墳状出入口施設?あり。
099	1051	SI1051	H12	31	300	67	弥生後期	後半	山田橋1	方楕円形	328	65	5.5	4.7	1.17	21.017	25.850	81.3	2.64	2.56	2.42	2.56	36	48	58	29	28	11					SD1001		
099	1052	SI1052	H12	72	302	67	弥生後期	前半	久ヶ原2	方楕円形	340	50	5.0	4.5	1.11	18.609	22.500	82.7	2.69	2.40	2.46	2.34	62	42	61	38	13	22	g14 h23 i9						炉体転用土器片あり。
099	1053	SI1053	I09	12	305	67	弥生後期	後半	山田橋1	長方楕円形	344	45	4.2	3.5	1.20	13.104	14.700	89.1	-	-	-	-	32	14	-	-	-	-							炉体転用土器片あり。
099	1054	SI1054	H09	64	307	3・4	弥生後期後半～弥生終末期	-	-	方楕円形	314	15	3.4	3.7	0.92	11.189	12.580	88.9	-	-	-	-	11	-	-	-	-	-					SS3		
099	1055	SI1055	I12	10	308	67	弥生後期	後半	山田橋2古	方楕円形	322	40	5.7	5.2	1.10	24.593	29.640	83.0	2.80	2.60	2.76	2.40	64	61	76	50	23	-						小銅環	
099	1056A	SI1056	H12	84	310	68	弥生後期～弥生終末期	-	-	不整円形	311	15	3.1	3.0?	1.03	7.725	9.300	83.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			少				
099	1057	SI1057	H12	99	311	68	弥生後期	前半	-	方楕円形	358	30	3.9	3.4	1.15	11.621	13.260	87.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SI1058		炉体転用土器片あり。
099	1058	SI1058	I13	01	312	68	弥生終末期	中葉	中台1-2～2-1	隅円方形	296	40	5.1	4.8?	1.06	23.300	24.480	95.2	2.84	2.80	2.84	2.82	68	45	58	39?	28	-				SI1057・SI1059		船の線刻画土器・ミニチュア装飾壺・胴部穿孔小型土器	
099	1059	SI1059	I13	11	314	68	弥生後期	後半	-	隅円方形	328	40	5.8	5.3	1.09	28.077	30.740	91.3	2.76	2.66	2.76	2.66	62	55	65	63	24	20	g20				SI1058		
099	1060	SI1060	H13	84	315	68・69	弥生終末期	後半	-	方形	330	5	5.0?	5.2	0.96	25.013	26.000	96.2	-	-	-	-	11	17	36	-	-	-				SI1061・SI1062・SI1063	SM1182		
099	1061	SI1061	I13	04	316	69	弥生終末期	前半	中台1	不整楕円形	329	15	4.2?	4.3	0.98	14.943	18.060	82.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			有	SI1062・SI1063	SI1060		
099	1062	SI1062	I13	04	316	69	弥生終末期	前半	中台1-1	方楕円形	327	20	4.1	4.0	1.03	14.928	16.400	91.0	-	-	-	-	33	24	-	-	-	-					SI1063・SI1061・SI1060		
099	1063	SI1063	H13	96	317	69	弥生終末期	前半	中台1	方楕円形	344	30	4.2	3.8	1.11	13.244	15.960	83.0	-	-	-	-	15	15	-	-	-	-				SI1062	SI1060		
099	1064	SI1064	H13	89	318	69	弥生終末期	前半	中台1	不整方楕円形	338	15	4.8?	4.4?	1.09	18.121	21.120	85.8	-	-	-	-	26	46	-	-	-	-						受口状口縁甕	
099	1065	SI1065	I13	34	319	69	弥生終末期	中葉	中台1-2～2-1	方楕円形	273	20	4.8	4.4	1.09	18.558	21.120	87.9	2.08	2.92	1.98	2.60	79	68	57	69	22	13				SI1066			火床面連結型炉。

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
099	1066	SI1066	I13	36	321・322	69	弥生後期	後半	山田橋１	長方楕円形	330	30	8.0	6.6	1.21	43.933	52.800	83.2	2.78	3.72	2.78	3.70	50	31	58	61	7	－	a'－b'3.48m b'－c'3.84m c'－d'3.32m d'－a'4.00m a'81cm　b'81cm c'95cm　d'88cm	有			SI1065・SI1067・SI1072		炉体転用土器片あり。
099	1067	SI1067	I13	58	321・322	69	古墳前期	前半	草刈１	方形	331	30	4.8	5.0	0.96	22.554	24.000	94.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	69	g45　h25　i60						
099	1068	SI1068	I13	70	324	70	弥生後期	前半	－	楕円形	312	15	4.2	3.8?	1.11	12.821	15.960	80.3	2.04	1.58	2.04	1.54	51	59	26	24	17	74	g59				SI1069・SI1071		
099	1069	SI1069	I13	51	324	70	弥生終末期	－	－	方楕円形	317	20	3.2?	3.8	0.84	11.229	12.160	92.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	h16　i52			SI1068・SI1070		貝層	
099	1070	SI1070	I13	53	324	70	弥生後期後半～弥生終末期	－	－	方楕円形	320	25	3.3?	3.1	1.06	8.873	10.230	86.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SI1069・SI1071		
099	1071	SI1071	I13	73	326・327	70	弥生終末期	後半	中台２－２	方形	305	50	7.7	6.8	1.13	49.370	52.360	94.3	3.56	3.48	3.44	3.50	45	46	44	45	30	36	g43　h5　i75? j73?　k28　l26		有	SI1068・SI1070	SK81	赤色顔料容器？	
099	1072	SI1072	I13	75	329	72	弥生終末期	－	－	隅円長方形	1	15	5.8	5.4?	1.07	28.348	31.320	90.5	2.68	3.36	2.66	3.40	71?	34	43	59?	－	－	g53?			SI1066・SI1073	SI1071		
099	1073	SI1073	I13	87	329	72	弥生後期～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	358	35	5.0	4.4	1.14	18.335	22.000	83.3	－	－	－	－	－	－	－	－	8	30			少		SI1072		
099	1074	SI1074	I12	33	331	70	弥生後期	前半	久ヶ原２古	不整長方楕円形	322	35	7.3	5.9	1.24	38.177	43.070	88.6	－	－	－	－	14	9	－	－	－	－						焼成前補修痕土器	
099	1075	SI1075	I12	27	333	70	弥生終末期	前半	中台１	隅円方形	331	30	6.9	6.6	1.05	41.324	45.540	90.7	3.88	3.96	3.32	4.04	77	68?	66	49	38	29	g10		少	SI1076			火床面連結型炉。
099	1076	SI1076	I12	57	335	70	弥生後期	前半	久ヶ原２新	方楕円形	13	60	5.7	5.0	1.14	23.357	28.500	82.0	2.64	2.66	2.68	2.68	57	77	58	66	－	32	b－c'2.34m d'－a2.32m c'20cm　d'23cm g33cm　h13cm i18cm　j8cm k23cm				SI1075	炉器台？	SI1089と遺構間接合の土器あり。
099	1077	SI1077	H09	59	337	3・4	弥生後期	前半	久ヶ原２	不整方楕円形	318	30	3.5	3.2	1.09	9.521	11.200	85.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SM1123		
099	1078	SI1078	I11	64	338	71	弥生終末期	－	－	隅円方形	327	25	5.6	5.0	1.12	25.350	28.000	90.5	2.68	2.96	2.12	2.96	75	86	77	94	36	21					SD1001	タタキ台付甕・焼成粘土塊	火床面連結型炉か。
099	1079	SI1079	I11	46	339	71	弥生後期	後半	山田橋１	方楕円形	303	25	8.8?	7.4	1.19	55.971	65.120	86.0	3.60	4.20	3.60	4.20	75	80	80?	79	18	－			少		SI1080・SI1033・SI1206・SI1078		
099	1080	SI1080	I11	49	341	71・72	弥生終末期	前半	中台１－１	方楕円形	338	30	5.6	5.3	1.06	25.504	29.680	85.9	2.56	2.68	2.40	3.00	67	73	73?	60	23	－				SI1079・SI1081		ハケ台付甕（折衷型）	火床面連結型炉。
099	1081	SI1081	I12	40	343	71・72	弥生後期	後半	山田橋１	方楕円形	342	40	4.1	3.8	1.08	13.475	15.580	86.5	－	－	－	－	25	18?	37	－	－	－			炭化材		SI1080		
099	1082	SI1082	I11	87	345・346	72	弥生後期	後半	山田橋２	方楕円形	353	35	5.0	4.2	1.19	18.140	21.000	86.4	2.32	2.24	2.32	2.02	71	70	76	70	31	8	g25　h89　i28		少		SI1083・SI1084		
099	1083	SI1083	I11	89	345・346	72	弥生後期	後半	－	不整円形	297	30	3.5	3.5	1.00	10.207	12.250	83.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	j17　k5		有・炭化材	SI1082		炉器台	
099	1084	SI1084	J11	08	347	72	弥生終末期	－	－	不整方楕円形	315	5	4.2	4.6	0.91	17.044	19.320	88.2	－	－	－	－	27	－	－	－	－	－				SI1085・SI1082			
099	1085	SI1085	J12	00	348	72	弥生後期	前半	久ヶ原２	楕円形	320	35	3.8	3.4	1.12	10.923	12.920	84.5	－	－	－	－	14	15	－	－	－	－					SI1084・SI1098?		
099	1086	SI1086	I14	70	349	72	弥生後期	前半	－	方楕円形	10	35	4.8	4.4	1.09	18.574	21.120	87.9	2.98	2.12	2.98	2.00	64?	78	76	67	37	26							
099	1087	SI1087	I14	56	350	73	弥生終末期	後半	中台２	方形	319	30	5.9	6.1?	0.97	35.125	35.990	97.6	3.16?	3.64?	3.14	3.40	65	56?	56	44	46	16			少		SM1083		eの浅い部分9cm。間仕切り溝あり。
099	1088	SI1088	I14	42	353	73	弥生終末期	－	－	隅円方形	314	40	6.2	5.9	1.05	34.258	36.580	93.7	3.58	3.70?	3.58?	3.72	90	70	78?	81	－	－			有	SI1089	SM1083	土製紡錘車	火床面連結型炉か。
099	1089	SI1089	I14	11	355・356	73	弥生後期	前半	久ヶ原２新	方楕円形	346	55	7.9	6.8	1.16	46.694	53.720	86.9	3.86	3.46	3.84	3.46	71	66	72	68	－	－			有		SI1088・SM1083		
099	1090	SI1090	I14	88	357	73	古墳前期	前半	草刈１	方形	324	15	6.3	5.9	1.07	36.088	37.170	97.1	3.80	3.40	4.04	3.08	18	15	12	10	35	31	g12				SM1161		ベッド状遺構あり。間仕切り溝あり。
099	1091A	SI1091	H11	94	359	73	弥生後期	前半	－	方楕円形	332	20	4.0?	3.8?	1.05	13.413	15.200	88.2	2.14	1.88	1.66	2.18	72	75	64?	59?	－	－					SI1205・SM1115		

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間(m)				ピット深度(cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位(度)	竪穴深度(cm)	主軸長(m)	直交軸(m)	長短比	面積(㎡)	方面積(㎡)	方円度(%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
099	1092	SI1092	H11	87	360	73	弥生後期	後半	−	長方楕円形	344	45	7.1	5.8?	1.22	35.524	41.180	86.3	3.26	3.22	3.44	3.28	83	91?	92	104	26	24	g51				SM1115		
099	1093B	SI1093	I11	28	362	73	弥生後期	後半	−	不整円形	343	5	3.3?	3.2	1.03	8.674	10.560	82.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1115		
099	1094	SI1094	J12	17	364・365	74	弥生後期	前半	久ヶ原２古	方楕円形	315	30	8.4?	7.3	1.15	52.626	61.320	85.8	3.32	4.44	3.66	4.00	71	48	77	72	45	54	g53		有・炭化材		SI1095・SM1117	土器多数・ミニチュア土器	炉体転用土器片あり。
099	1095	SI1095	I12	85	369	74	弥生終末期	−	−	隅円方形	319	15	5.4?	5.0	1.08	25.886	27.000	95.9	2.32	2.66	2.44	2.72	55	63	71	43	42	−			多	SI1094	SM1117	庄内式甕（大和型）	火床面連結型炉。
099	1096	SI1096	J12	34	370	74	弥生後期	−	−	方楕円形	303	10	3.4?	3.0	1.13	9.831	10.200	96.4	−	−	−	−	8	−	−	−	−	−					SI1097		
099	1097	SI1097	J12	24	370	74	弥生後期	−	−	方楕円形	341	15	3.4?	3.3	1.03	9.720	11.220	86.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI1096	SM1117		
099	1098	SI1098	J12	11	371・372	74	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	314	10	3.8?	3.5?	1.09	11.513	13.300	86.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g10			SI1085?	SI1099・SM1117		
099	1099	SI1099	J12	31	371・372	74・75	弥生後期	後半	山田橋１	楕円形	314	30	5.0	4.6	1.09	17.895	23.000	77.8	2.32	2.16	2.40	2.18	53	53	57	59	12	12?			有	SI1098			完形土器多数出土。
099	1100	SI1100	I12	62	374	75	弥生後期	前半	−	不整長方楕円形	315	20	3.5	2.9	1.21	8.340	10.150	82.2	−	−	−	−	23	29	−	−	−	−					SM1117		bはGLからの深さ。
099	1101	SI1101	J12	59	375・376	75	弥生後期	前半	久ヶ原１～久ヶ原２古	長方楕円形	325	45	6.6	5.3	1.25	30.375	34.980	86.8	2.74	3.24	2.96	3.06	64	71	77	68	19	15			有・炭化材		SK85		炉体転用土器片あり。
099	1102A	SI1102	J13	19	378	75・76	弥生後期	前半	久ヶ原２	不整方楕円形	316	25	6.3	5.3	1.19	28.735	33.390	86.1	2.88	2.38	2.86	2.42	52	35	51	46	42	−			有・炭化材		SI1207・SI1021・SI1103		炉体転用土器片（3段階か）あり。
099	1103	SI1103	J14	31	380	76	弥生終末期	前半	中台１	方楕円形	273	55	4.6	4.2	1.10	16.444	19.320	85.1	2.50	2.16	2.50	2.14	70	71	61	69	23	18				SI1102			火床面連結型炉。有堤貯蔵穴。
099	1104	SI1104	J14	34	381	76	古墳前期	前半	草刈２古	方形	286	30	4.6	5.0?	0.92	21.809	23.000	94.8	−	−	−	−	67	−	−	−	−	−			有・炭化材（放射状）	SI1106・SI1105		布留式甕片	有堤貯蔵穴。完形土器多数出土。
099	1105	SI1105	J14	54	384	76	弥生終末期	後半	中台２	隅円方形	315	35	6.9	7.0	0.99	46.165	48.300	95.6	3.62	3.78	3.92	3.76	76	92	82	91	51	14	g14　h32		有		SI1104		ベッド状遺構あり。
099	1106	SI1106	J14	26	386	76	弥生後期	中葉	−	方楕円形	320	25	3.6	3.6	1.00	11.295	12.960	87.2	−	−	−	−	−	29	−	−	−	−					SI1104・SM1161		
099	1107	SI1107	J12	63	387・388・389	76・77	弥生後期	前半	久ヶ原２古	方楕円形	313	45	10.0	8.4	1.19	71.034	84.000	84.6	4.52	5.04	4.52	5.04	86	80	70	70	42	27	g14	可能性	多・炭化材（放射状）			砥石	炉体転用土器片あり。有堤貯蔵穴。完形土器多数出土。
099	1108	SI1108	G12	11	392	77	弥生終末期	前半	中台１−１	方楕円形	320	20	4.8?	4.5?	1.07	19.121	21.600	88.5	−	−	−	−	46	31	−	−	−	−					SI1035・SM1053	中台１−１式土器	山田橋式と中台式の過渡的様相の土器群。
099	1109	SI1109	J11	58	394	77	弥生後期	後半	−	不整方楕円形	339	20	4.4	4.2	1.05	15.221	18.480	82.4	−	−	−	−	18	24	−	−	−	−							
099	1110	SI1110	J15	40	395	77	弥生後期	後半	−	方楕円形	294	50	7.6	6.5	1.17	41.932	49.400	84.9	3.78	3.56	3.78	3.60	87	88	102	93	17	−			少			東京湾西岸系ハケ甕	
099	1111	SI1111	J15	03	398	77	弥生終末期	−	−	隅円方形	270	25	3.7	4.1?	0.90	13.971	15.170	92.1	−	−	−	−	13	23	−	−	−	−							ベッド状遺構あり。
099	1112	SI1112	J15	25	398	78	弥生終末期	−	−	方楕円形	309	15	3.8	4.0	0.95	13.356	15.200	87.9	−	−	−	−	36	−	−	−	−	−							SI1111と形態酷似。
099	1113	SI1113	J15	79	399	78	弥生終末期	−	−	隅円方形	320	30	3.6	3.6	1.00	11.795	12.960	91.0	−	−	−	−	17	5	−	−	−	−							ベッド状遺構か。
099	1114	SI1114	J15	46	400	78	弥生後期	後半	山田橋１	方楕円形	303	35	3.9	3.5	1.11	11.353	13.650	83.2	−	−	−	−	25	24	10	−	−	−			少				
099	1115	SI1115	J15	54	401	78	弥生終末期～古墳前期前半	−	−	不整長方形	32	15	3.4	2.8	1.21	8.427	9.520	88.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							
099	1116	SI1116	J15	82	402	78	弥生終末期	−	−	隅円方形	259	20	3.5	3.4	1.03	10.600	11.900	89.1	−	−	−	−	69	18	15	−	−	−					SI1117		
099	1117	SI1117	J15	83	402	78	弥生終末期	後半	−	隅円方形	261	15	4.3	4.0	1.08	16.652	17.200	96.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI1116・SI1119			
099	1119	SI1119	K15	13	403・404	78	弥生終末期	前半	中台１−１	方楕円形	319	45	6.4	6.0	1.07	34.008	38.400	88.6	3.96	2.86	3.48	3.10	48	62	58	57	28	23					SI1117・SI1120・SM1009		
099	1120	SI1120	J15	91	406・407	78・79	弥生終末期	後半	中台２	隅円方形	303	25	3.5	3.2	1.09	10.419	11.200	93.0	1.90	1.96	1.94	1.92	19	26	17	18	−	−				SI1119			
099	1121	SI1121	K14	06	410・411	79	弥生後期	前半	久ヶ原２古	楕円形	325	50	7.1?	6.2	1.15	36.608	44.020	83.2	3.18	3.22	3.09	3.38	77	71	75	71	37	−			炭化材		SS12	銅鏃	炉体転用土器片（2段階か）あり。

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a－b	b－c	c－d	d－a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
099	1122	SI1122	K05	80	413	79	弥生中期	後半	宮ノ台	不整隅円長方形	347	10	6.8?	5.5	1.24	33.771	37.400	90.3	2.22	2.84	1.94	2.78	45	76	93	96	28	12	g19 h16 i26 j45 k36 l28				SK126	宮ノ台式	炉床拡張か。調査範囲最古の竪穴建物跡。
099	1123	SI1123	J10	96	414	79	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	323	55	4.7	4.6	1.02	18.474	21.620	85.4	－	－	－	－	15	11	－	－	－	－					SD1001		
099	1124	SI1124	K10	09	415	79	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	325	30	5.0	4.8	1.04	20.372	24.000	84.9	2.46	2.26	2.52	2.26	58	60	49	52?	21	33							
099	1125	SI1125	J16	62	416	80	弥生後期	前半	－	円形	355	25	5.3?	5.3?	1.00	21.184	28.090	75.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－							
099	1126	SI1126	K16	18	417	3・4	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	不整円形	321	35	3.5	3.7	0.95	10.539	12.950	81.4	－	－	－	－	26	12	－	－	－	－			有				
099	1127	SI1127	J12	98	418	3・4	弥生後期	前半	久ヶ原２	不整円形	319	20	4.4	4.1	1.07	14.477	18.040	80.2	1.86	1.90	1.94	1.64	18	56	53?	54	－	13							
099	1128	SI1128	J10	42	419	3・4	弥生終末期	－	－	不整方楕円形	5	40	3.4?	3.0	1.13	8.937	10.200	87.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SM1072		
099	1129	SI1129	K13	68	420	80	弥生終末期	－	－	不整隅円方形	295	15	4.4	4.0	1.10	16.061	17.600	91.3	－	－	－	－	63	－	－	－	－	－					SK94	有段口縁甕	
099	1130	SI1130	K14	74	421	80	弥生終末期	前半	中台１－１	方楕円形	337	40	2.9	3.0	0.97	7.249	8.700	83.3	－	－	－	－	11	30	－	－	－	－			少			東海系高杯	
099	1131	SI1131	K16	02	422	80	弥生後期～弥生終末期	－	－	方楕円形？	323	20	4.6?	4.2?	1.10	17.533	19.320	90.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－			炭化材		SM1009		
099	1132	SI1132	K16	33	423	80	弥生終末期	前半	中台１－１	楕円形	125	25	4.3?	5.3?	0.81	16.625	22.790	72.9	－	－	－	－	19	－	－	－	－	－					SM1009		横楕円形の平面形。
099	1133	SI1133	K16	94	424	80	弥生後期	後半	－	方楕円形	297	60	6.2	5.4	1.15	28.027	33.480	83.7	2.98	2.70	3.10	2.66	72?	75	78	79	22	26	g14				SM1009		有堤貯蔵穴あり。
099	1134	SI1134	K15	36	425	80	弥生後期～弥生終末期前半	－	－	円形	317	40	3.5	3.4	1.03	9.662	11.900	81.2	－	－	－	－	14	GLから35	－	－	－	－					SI1135・SM1009		
099	1135	SI1135	K15	56	426	81	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	333	30	5.0	4.8	1.04	19.731	24.000	82.2	2.46	2.54	2.44	2.40	55	66	65	53	8	－				SI1134	SM1009		
099	1136	SI1136	K14	68	428	81	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	343	40	2.9	2.7	1.07	6.630	7.830	84.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SS12		
099	1137	SI1137	K12	25	429	81	弥生後期	後半	山田橋１	長方楕円形	357	40	4.8	4.0	1.20	16.162	19.200	84.2	2.28	1.56	2.18	1.68	80	47	71	66	36	22?			有・炭化物		SM1047		
099	1138	SI1138	K17	89	431	81	弥生後期～弥生終末期	－	－	隅円方形	52	40	3.4	3.4	1.00	10.055	11.560	87.0	－	－	－	－	15	－	－	－	－	－			有				
099	1139	SI1139	K09	24	432	3・4	弥生終末期～古墳前期前半	－	－	方形	322	10	2.8	2.9	0.97	7.638	8.120	94.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SM1150		
099	1140	SI1140	J09	77	433	81	弥生後期	前半	久ヶ原２	長方楕円形	321	50	6.1	5.0	1.22	26.238	30.500	86.0	－	－	－	－	27	89?	12	22	－	－					SM1072		
099	1201	SI1201	J10	61	434	3・4	弥生後期	－	－	不整方楕円形	35	30	3.8?	3.2?	1.19	10.185	12.160	83.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SI1128?・SM1072		詳細不明。縄文時代前期（関山式期）遺構か。
099	1202	SI1202	L07	42	435	3・4	弥生中期	後半	宮ノ台	不整隅円長方形	351	5	5.1	4.2	1.21	19.566	21.420	91.3	1.78?	2.36?	1.80	2.34	84	－	73	79?	37	31					SM1002		
099	1203	SI1203	N19	13	699	3・4	縄文	前期	関山	不整長楕円形	0	10	3.6	3.0	1.20	8.932	10.800	82.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SD1003		
099	1023A	SI1204	J13	78	250・251	3・4	弥生終末期	－	－	隅円方形	323	50	7.4	7.0	1.06	48.807	51.800	94.2	3.58	4.04	3.56	4.04	57	62	64	84	－	27	g25			SI1023			ベッド状遺構あり。
099	1091A	SI1205	H11	95	359	73	弥生後期	後半	－	隅円方形	318	30	3.4?	3.3	1.03	10.138	11.220	90.4	－	－	－	－	－	－	－	－	25	－				SI1091	SM1115		
099	1093B	SI1206	I11	16	362	73	弥生終末期	－	－	方形	44	10	5.0	4.7?	1.06	22.612	23.500	96.2	2.20	2.62	2.12?	2.40?	54	49	49	－	10	－			有		SM1115	タタキ甕	
099	1102B	SI1207	J13	08	378	75	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	－	方楕円形	322	30	3.4	3.7	0.92	10.803	12.580	85.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	32	g20			SI1102			
064	SB001	SI2001	G04	69	447・448	84	弥生終末期	中葉	中台１－２～２－１	方形	288	45	4.1	4.3	0.95	17.383	17.630	98.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－			有・炭化材		SI2002		火床面連結型炉。
064	SB002	SI2002	G04	57	447・448・449	84	弥生終末期	中葉	中台１－２～２－１	方形	289	30	4.6	4.7	0.98	21.210	21.620	98.1	－	－	－	－	21?	－	－	－	－	－				SI2001			
064	SB003	SI2003	G04	44	451	84	弥生後期	－	－	方楕円形	280	－	4.5?	3.9	1.15	15.005	17.550	85.5	2.46	2.28	－	－	－	－	－	－	－	－							
064	SB004	SI2004	G06	28	452・453・454	85	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	320	25	5.3?	4.6	1.15	22.003	24.380	90.3	2.62	2.38	2.54	2.40	53?	64?	54	62	9	24					SI2005・SM1046	ガラス玉６・管玉１	
064	SB005	SI2005	G06	27	452・453・454	85	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	292	60	3.3	2.9?	1.14	8.593	9.570	89.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－				SI2004			
064	SB006	SI2006	G05	16	456	86	弥生終末期	－	－	隅円方形	351	70	5.7?	5.3	1.08	28.429	30.210	94.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SM1017・SX2005		

位置					図	図版	時期			形態		規模								主柱穴間 (m)				ピット深度 (cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位 (度)	竪穴深度 (cm)	主軸長 (m)	直交軸 (m)	長短比	面積 (㎡)	方面積 (㎡)	方円度 (%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
064	SB007	SI2007	G07	02	457	86	弥生後期	前半	−	方楕円形	1	35	7.1	6.0	1.18	36.100	42.600	84.7	3.00	−	−	−	−	−	23	33	10	4	g7 h4 i19 j10		有・炭化物		SM1046・SD4		
064	SB008	SI2008	F08	60	458・459・460	86	弥生後期後半〜弥生終末期前半	−	−	方楕円形	322	55	5.3?	4.6	1.15	21.711	24.380	89.1	−	2.62	−	−	−	54	52	25	−	−				SI2009			炉体転用土器片あり。
064	SB009	SI2009	F07	59	458・459・460	86・87	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形	30	45	4.4	4.4	1.00	16.300	19.360	84.2	−	−	−	−	44	−	−	−	−	−					SI2008	土器多数・貝層	窪地利用。
064	SB010	SI2010	F07	51	466	87	古墳前期	後半	草刈３	方形	292	20	5.7	5.8	0.98	31.820	33.060	96.2	2.94	2.86	2.93	2.74	48	55	55	53	46	42	g20 h52				SK17・SK18	鉄鏃１	階段状堆積土。
064	SB011	SI2011	F07	76	468	87	弥生終末期	−	−	方楕円形	308	20	5.8	5.1	1.14	24.753	29.580	83.7	2.52	2.88	2.66	2.90	35?	41	28	66	22	−				SK14	SD5		
064	SB012	SI2012	F08	43	469	88	弥生後期	−	−	方楕円形	324	15	4.1?	3.9	1.05	14.733	15.990	92.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							
064	SB013	SI2013	F08	35	470	88	弥生終末期〜古墳前期	−	−	隅円方形？	320	40	−	1.9以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−						ほぼ全体が削平される。
064	SB014	SI2014	F08	04	470・471	88	古墳前期	後半	草刈３−２	方形	309	20	6.2	6.8	0.91	40.419	42.160	95.9	3.52	3.12	3.50	3.12	91	87	87-97	87	42	47	g15		炭化材		SM1055		
064	SB015	SI2015	F08	21	473・474	88	弥生後期	前半	久ヶ原２新	方楕円形	341	50	5.4?	4.8	1.13	22.046	25.920	85.1	2.66	2.36	2.36	2.36	57	70?	61	62	18	16					SM1055		
064	SB016	SI2016	E08	50	476	89	古墳前期	後半	草刈３−２	方形	27	10	4.5	4.4?	1.02	18.936	19.800	95.6	−	−	−	−	11	24	−	−	−	−					SM1055		SI2056と類似。
064	SB017	SI2017	E07	74	477	89	弥生後期	前半	久ヶ原２新	楕円形	350	15	3.4	3.1	1.10	8.640	10.540	82.0	−	−	−	−	42	24	61	28	−	−						土器多数	高杯が直立状態で検出。
064	SB018	SI2018	E07	19	479	89	弥生後期	前半	久ヶ原２古	方楕円形	324	40	5.6?	4.8?	1.17	25.363	26.880	94.4	−	−	−	−	34	18	−	−	−	−			少		SI2019		
064	SB019	SI2019	D07	98	479	89・90	弥生終末期〜古墳前期	−	−	隅円方形	324	20	3.7	3.4	1.09	11.845	12.580	94.2	−	−	−	−	−	−	21	14	2?	−			少				
064	SB020	SI2020	E07	47	480	90	弥生後期	前半	久ヶ原２古	楕円形	341	30	4.9	4.4	1.11	17.268	21.560	80.1	−	−	−	−	33	18	18	26	36	24	g30 h20		少		SX2001		炉体転用土器片あり。ハシゴ痕跡。
064	SB021	SI2021	E07	15	482・483	90・91	弥生後期	中葉	久ヶ原２新〜山田橋１	方楕円形	337	70	5.6	5.4	1.04	26.125	30.240	86.4	3.12	2.64	3.18	2.68	54	43	51	56	28	26	g13			SI2022		貝層	炉体転用土器片あり。
064	SB022	SI2022	E07	17	482・483	91	縄文早期？	−	−	不整方楕円形	328	15	3.4	3.0?	1.13	8.581	10.200	84.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	h45 i18 j24 k7 l10		少		SI2021		炉が壁際に寄る。縄文時代遺構か。
064	SB023	SI2023	D07	86	485	91	弥生後期	前半	久ヶ原２新	方楕円形	338	60	4.1	3.8	1.08	12.573	15.580	80.7	−	−	−	−	19	41	6	3	27	45	g24 h26 i35 j35		少			貝層	中層に遺物集中あり。
064	SB024	SI2024	D07	55	488	91・92	弥生後期	前半	−	方楕円形	331	15	3.9	3.9	1.00	12.782	15.210	84.0	−	−	−	−	27	11	10	27	−	−			多・炭化材				
064	SB025	SI2025	D07	34	488	92	弥生後期〜弥生終末期	−	−	方楕円形	313	10	2.9	2.9?	1.00	7.687	8.410	91.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							
064	SB026	SI2026	D07	12	489	92	弥生後期	前半	久ヶ原２	長方楕円形	354	30	6.4?	5.1	1.25	28.877	32.640	88.5	−	2.96	c−a 2.96	−	69	78?	102	28	36	91			有・炭化材				
064	SB027	SI2027	E07	12	491	93	弥生後期	−	−	不整円形	3	20	2.2	2.2	1.00	3.912	4.840	80.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							
064	SB028	SI2028	E07	00	491	93	弥生後期	後半	山田橋１	長方楕円形	295	40	6.0	4.9	1.22	25.753	29.400	87.6	2.60	2.61	2.74	2.68	66	73	51	75	17	28							
064	SB029	SI2029	D07	81	493	93・94	弥生後期	中葉	久ヶ原２新〜山田橋１	方楕円形	306	55	4.2	4.0	1.05	14.438	16.800	85.9	−	−	−	−	66	15	13	−	−	−				SI2030		土器多数	炉体転用土器片あり。
064	SB030	SI2030	D07	61	496・497	94	弥生中期	後半	宮ノ台	方楕円形	345	25	5.6	5.0	1.12	23.379	28.000	83.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	g20 h14 i− j11				SI2029・SI2031・SI2032		炉体転用土器片あり。
064	SB031	SI2031	D07	40	496・497	94・95	弥生後期	前半	−	不整長方楕円形	322	25	4.8?	4.0?	1.20	16.747	19.200	87.2	2.03	2.28	1.96	2.54	16	48	35	22	25	−				SI2030			炉体転用土器片あり。
064	SB032	SI2032	D06	58	499	95	弥生後期	前半	久ヶ原２新	隅円方形	325	40	5.0	4.8?	1.04	22.172	24.000	92.4	2.92	2.32	2.80	2.30	68	67	39	49	24	22	g10 h28 i7 j28 k15 l12				SI2030・SI2031・SI2033		
064	SB033	SI2033	D06	66	501・502	95・96	弥生後期	前半	久ヶ原２古	長楕円形	355	70	9.0	7.0	1.29	52.369	63.000	83.1	3.76	3.74	3.72	3.94	92	96	95	93	9	21	g6 h7 i8 j19 k76	可能性	有・炭化材		SI2032・SK10	勾玉１【所在不明】	床面下に炉・貯蔵穴か。炉体転用土器片あり。
064	SB034	SI2034	D06	28	504	96	弥生後期	後半	山田橋１	方楕円形	323	40	4.0?	3.6	1.11	12.201	14.400	84.7	2.52	2.20	2.32	1.90	30-38	19	24	31	23	14			少		SI2035		
064	SB035	SI2035	D06	18	504	5	弥生終末期	−	−	不整方楕円形	352	5	3.2?	3.2?	1.00	9.256	10.240	90.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g21		有	SI2034			
064	SB036	SI2036	D06	06	506・507	96・97	弥生後期	後半	山田橋１	不整楕円形	314	15	4.0	3.7	1.08	11.263	14.800	76.1	2.54	2.16	2.16	1.70	26	53	54	56?	13	34			少・炭化材		SI2037	貝層	炉体転用土器片あり。

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a－b	b－c	c－d	d－a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
064	SB037	SI2037	D06	16	506・507	97	弥生終末期	前半	中台１－１	方楕円形	330	55	4.6	4.0	1.15	16.060	18.400	87.3	g－h 1.74	h－i 2.44	i－j 1.44	j－g 2.52	g53	h55	i61	j52	k11	l8	g－h'1.80m h'－i'2.12m i'－j1.56m h'44cm　i'61cm	可能性	少	SI2036			
064	SB038	SI2038	D06	35	509・510	97・98	弥生終末期	前半	中台１－２	隅円方形	33	40	3.6	3.7	0.97	11.606	13.320	87.1	－	－	－	－	34	－	－	－	－	－			多・炭化材（カヤ含）	SI2039・SI2037			焼土・炭化材が広く検出。
064	SB039	SI2039	D06	45	509	5・6	弥生後期	中葉	－	楕円形	329	10	3.4	2.9	1.17	7.508	9.860	76.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	20?					SI2038		
064	SB040	SI2040	D06	24	509	5・6	弥生後期	後半	－	方楕円形？	32	5	3.1?	3.4?	0.91	9.160	10.540	86.9	－	－	－	－	－	－	48	26	17	－					SI2038		
064	SB041	SI2041	E06	26	512・513	98	弥生後期	後半	山田橋１	不整隅円方形	300	30	5.3	4.5	1.18	21.865	23.850	91.7	2.48	2.30	2.80	2.32	58	64	58	61	9	8	g4					炉器台	
064	SB042	SI2042	D05	97	515	99	弥生後期	後半	－	方楕円形	333	20	3.4	3.1	1.10	8.609	10.540	81.7	2.06	2.12	2.00	1.84	47	21	16	19?	－	－							炉内奥壁側に土器出土。
064	SB043	SI2043	E06	23	516	99	弥生終末期	－	－	方楕円形	321	30	5.2	4.5	1.16	19.011	23.400	81.2	2.52	2.28	2.50	2.12	60	57	39	81	17	22				SI2044			
064	SB044	SI2044	E06	10	517・518・519	99	弥生後期	前半	久ヶ原２	楕円形	322	15	5.4?	4.8	1.13	21.381	25.920	82.5	g－h 2.68	h－i 2.16	i－j 2.38	j－g 2.20	g52	h50?	i58	j73	k41	l24	m24				SI2045・SI2043		
064	SB045	SI2045	E06	00	517・518・519	100	弥生後期	後半	山田橋２古	隅円方形	313	40	5.0	4.4	1.14	19.568	22.000	88.9	2.28	2.28	2.32	2.26	51	40	44	56	19	27				SI2044			
064	SB046	SI2046	D06	93	521・522	100	弥生後期	前半	－	方楕円形	322	10	5.8?	4.9	1.18	23.449	28.420	82.5	2.82	－	－	－	58	83	36	11	64	92	g11　h20				SI2047	貝層・楕円形土器（船底状底部）	
064	SB047	SI2047	D06	83	521・522	100	古墳中期	前半	南岩崎 5a	方形	359	15	5.4	6.3	0.86	33.238	34.020	97.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	i11		少・炭化材	SI2046・SI2048		鳥帽子形支脚３	
064	SB048	SI2048	D06	63	525	100	弥生後期	後半	－	方楕円形	344	30	4.3	3.8	1.13	13.813	16.340	84.5	2.16	2.00	2.24	2.12	55	49	49	63	22	31	g17			SI2046	SI2047・SM1174		
064	SB049	SI2049	D06	60	526	101	弥生後期	前半	－	長方楕円形	335	35	5.8	4.8	1.21	23.214	27.840	83.4	2.76	2.48	2.52	2.48	83	69	85	51	19	36	g22　h27　i51				SI2047・SM1174		炉体転用土器片あり。
064	SB050	SI2050	D06	81	526	101	弥生後期？	－	－	不明	－	15	2.4以上	2.4以上	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SI2047・SK9		
064	SB051	SI2051	E05	70	528・529	101	弥生終末期	後半	中台２	隅円方形	333	40	7.6	6.8	1.12	49.980	51.680	96.7	2.86	3.78	2.98	3.86	101	81	85?	91	37	－	b－c'4.34m c'－d2.82m c'63?cm				SM1024	鉄鏃１（所在不明）・ヤリガンナ１（所在不明）	
064	SB052	SI2052	E05	41	530	102	弥生後期	後半	－	隅円方形	324	25	2.9	3.4	0.85	8.715	9.860	88.4	1.78	－	－	－	－	－	29	－	－	－					SM1024		
064	SB053	SI2053	E05	23	531	102	弥生後期	後半	山田橋２新	方楕円形	153	15	5.0?	4.2	1.19	17.802	21.000	84.8	1.82	－	－	－	24	16	－	－	－	－				SL2001	SM1024		
064	SB054	SI2054	E05	26	532	102	弥生後期	後半	山田橋２	方楕円形	344	45	3.4	3.2	1.06	9.255	10.880	85.1	－	－	－	－	15	19	21	－	－	－			少		SM1024		中層に中台１式の土器群。
064	SB055	SI2055	E05	38	534	103	弥生後期	前半	久ヶ原２	楕円形	315	25	5.0	4.7	1.06	19.492	23.500	82.9	2.34	2.36	2.36	2.36	57	68	79	70	33	16					SM1024		
064	SB056	SI2056	E05	68	535	103	古墳前期	後半	草刈３－２	方形	342	25	4.5	4.3	1.05	18.337	19.350	94.8	－	－	－	－	39	－	－	－	－	－				SI2057	SM1024		SI2016と類似。
064	SB057	SI2057	E05	67	535	103	弥生後期	後半	－	方楕円形？	304	30	2.8?	2.8	1.00	6.795	7.840	86.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－					SI2056・SM1024		
064	SB058	SI2058	E05	86	536	103	弥生後期	後半	山田橋１	方楕円形	317	45	5.3	4.7	1.13	21.121	24.910	84.8	2.72	2.52	2.34	2.68	81	81	65	74	50	20				SI2071			
064	SB059	SI2059	E06	93	538	103・104	古墳前期	後半	草刈３	方形	345	5	5.2?	5.2	1.00	25.412	27.040	94.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－				SI2060	SM1057	線刻のある甕	
064	SB060	SI2060	E06	61	539	104	弥生後期	前半	久ヶ原２	長方楕円形	317	30	8.2	6.7	1.22	46.913	54.940	85.4	3.82	3.52	3.82	3.48	75	73	84	81	25	－		可能性			SI2059		
064	SB061	SI2061	E06	75	541	104	弥生後期	前半	久ヶ原２古	不整方楕円形？	63	15	3.2?	3.0?	1.07	7.339	9.600	76.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－				SI2115・SI2062			
064	SB062	SI2062	E06	85	541	104	弥生後期	前半	－	楕円形	1	40	2.7?	3.3	0.82	7.376	8.910	82.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－				SI2115	SI2066		
064	SB063	SI2063	F06	44	544・545	105	弥生後期	中葉	久ヶ原２新～山田橋１	方楕円形	296	40	4.4	4.2	1.05	16.121	18.480	87.2	－	－	－	－	33	24	－	－	－	－			有・炭化材	SI2111	SM1057		炉体転用土器片あり。
064	SB064	SI2064	F06	11	546	105	弥生後期後半～弥生終末期前半	－	山田橋２～中台１	方楕円形	323	45	6.0?	5.1?	1.18	26.180	30.600	85.6	2.56	2.80	2.60	2.80	56	48?	57	64	22	23			少		SI2065・SM1057		
064	SB065	SI2065	F05	29	547・548・549・550	105・106	弥生終末期	後半	中台２	隅円方形	330	40	6.5	5.5	1.18	33.822	35.750	94.6	3.08?	3.76	3.28	3.72?	70?	69	76	29	53	－	a'－b2.56m a'64?cm	可能性		SI2105・SI2064	SM1057	貝層	

位置					図	図版	時期			形態		規模								主柱穴間 (m)				ピット深度 (cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位 (度)	竪穴深度 (cm)	主軸長 (m)	直交軸 (m)	長短比	面積 (㎡)	方面積 (㎡)	方円度 (%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
064	SB066	SI2066	F06	05	541	104	弥生後期	前半	−	方楕円形	353	25	3.8	3.6?	1.06	12.275	13.680	89.7	−	−	−	−	18	−	−	−	−	−				SI2062・SI2108	SM1057		
064	SB067	SI2067	F06	73	552	106	弥生後期	前半	久ヶ原２古	不整方楕円形	276	25	4.2	4.0	1.05	13.041	16.800	77.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2069・SM1057・SD4		
064	SB068	SI2068	E05	99	553	107	弥生後期〜弥生終末期	−	−	隅円方形？	315	5	6.3?	6.6	0.95	38.219	41.580	91.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			有		SM1024・SM1057		
064	SB069	SI2069	F06	51	554・555	107	弥生後期	前半	久ヶ原２古	方楕円形	0	50	6.0	5.4	1.11	26.634	32.400	82.2	2.70	2.46	2.72	2.42	67	62	64	68	36	床面から３	g 床面から５ h66 i13	可能性	少	SI2067		貝層・石製垂飾１・勾玉１(所在不明)	
064	SB070	SI2070	E05	74	559	107・108	弥生後期	前半	久ヶ原２	不整円形	329	25	2.8	2.6	1.08	5.692	7.280	78.2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			少	SI2081	SM1024		
064	SB071	SI2071	E05	95	559	108	弥生後期	前半	久ヶ原２新	円形	330	35	3.6	3.6?	1.00	10.307	12.960	79.5	−	−	−	−	11	9	−	−	−	−				SI2081	SI2058	炉器台	
064	SB072	SI2072	F05	04	562	108	弥生後期〜弥生終末期	−	−	方楕円形	353	25	5.0	4.3	1.16	17.872	21.500	83.1	−	−	−	−	79	68	−	−	−	−			少	SI2071	SI2073・SM1024	塊状土製支脚１	
064	SB073	SI2073	F05	25	563	108	弥生終末期	−	−	隅円方形	328	20	6.1	5.4?	1.13	32.588	32.940	98.9	2.50	3.62	2.50	3.82	73	84	54	73?	44?	28?	g22			SI2072・SI2074	SM1017・SM1024		
064	SB074	SI2074	F05	33	565	109	弥生終末期	前半	中台１	方形	313	35	7.3	7.8	0.94	52.930	56.940	93.0	3.92	−	−	−	96?	94	88?	−	−	−				SI2075	SM1017		
064	SB075	SI2075	F05	12	565	109	弥生後期〜弥生終末期前半	−	−	不明	−	20	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2074		竪穴建物ではない可能性あり。
064	SB077	SI2077	F04	39	566・567	109	弥生終末期	−	−	方形	312	40	4.9	5.2	0.94	23.085	25.480	90.6	2.84	−	−	c-a 2.34	54	26	17	30	14	23							
064	SB078	SI2078	F04	18	566・567	109・110	弥生後期	後半	−	方楕円形	322	50	4.8	4.4	1.09	18.052	21.120	85.5	g-h 2.34	h-i 2.34	i-j 2.32	j-g 2.38	g40	h52	i48	j39	k9	−				SI2079			
064	SB079	SI2079	E04	97	569・570	110	弥生後期	前半	−	楕円形	36	35	4.9	4.3	1.14	16.867	21.070	80.1	−	−	−	−	28	46?	24	−	−	−					SI2078・SI2080		
064	SB080	SI2080	E04	96	569・570	110	弥生終末期	−	−	隅円方形	318	40	4.6	4.9	0.94	21.965	22.540	97.4	−	−	−	d-e 1.76	−	−	−	57	68	14	g22			SI2079			
064	SB081	SI2081	E05	84	559	108	弥生後期	前半	−	不整長楕円形	296	10	2.8?	1.8?	1.56	3.635	5.040	72.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2070・SI2071		
064	SB082	SI2082	F04	36	571	5・6	弥生後期	前半	久ヶ原２	不明	−	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	26	−	−	−	−							床面まで露出して検出。
064	SB083	SI2083	F04	47	571	110	弥生後期	−	−	方楕円形？	30	15	3.5?	3.2?	1.09	9.536	11.200	85.1	−	−	−	−	59?	−	−	−	−	−							
064	SB084	SI2084	G05	10	572	110	弥生後期	前半	−	方楕円形？	282	20	1.8以上	3.3以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							
064	SB085	SI2085	F05	83	574・575	111	弥生終末期〜古墳前期前半	−	−	方楕円形？	254	15	2.8以上	3.2以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	17	−	−				SI2088?			断片的に遺存。
064	SB086	SI2086	F05	64	577	112	弥生後期	前半	久ヶ原２新	不整方楕円形	359	15	3.4	3.5	0.97	9.057	11.900	76.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1017		
064	SB087	SI2087	F05	86	577	112	弥生後期？	−	−	方楕円形？	31	10	2.0以上	2.0以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				縄文65号	SM1017		
064	SB088	SI2088	F05	94	574・575	111	弥生後期	中葉	久ヶ原２新〜山田橋１	方楕円形	311	70	3.8	3.6	1.06	11.834	13.680	86.5	−	−	−	−	15	−	−	−	−	−			少・炭化材		SI2092・SI2085?・SI2089		
064	SB089	SI2089	G05	14	574・575	111	弥生終末期後半〜古墳前期前半	−	中台２〜草刈１	隅円方形？	69	5	3.9?	3.7?	1.05	12.767	14.430	88.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI2088・SI2092			
064	SB090	SI2090	G05	22	572	5・6	弥生終末期	−	−	隅円方形	307	20	3.8?	3.8?	1.00	14.278	14.440	98.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2094	ガラス玉１(所在不明)	
064	SB091	SI2091	G05	00	572	5・6	弥生後期	前半	−	不明	−	−	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−							焼土集中部のみ検出。
064	SB092	SI2092	G05	03	574・575	111・112	弥生終末期後半〜古墳前期前半	−	中台２〜草刈１	隅円長方形？	25	15	3.4?	2.8?	1.21	8.796	9.520	92.4	−	−	−	−	−	17	−	−	−	−				SI2088	SI2089		
064	SB093	SI2093	F06	77	578	112	弥生後期	後半	山田橋１	不整方楕円形	292	25	4.1	4.0	1.03	13.309	16.400	81.2	−	−	−	−	20	28	15	−	−	−			少			ヤリガンナ１(所在不明)	
064	SB094	SI2094	G05	33	580	113	古墳前期	後半	草刈３	方形	16	30	4.2?	4.1	1.02	16.690	17.220	96.9	−	−	−	−	12	−	−	−	−	−				SI2090	SM1017		
064	SB095	SI2095	F07	30	581	113	弥生後期？	−	−	不整長方形	348	15	5.6	4.1	1.37	20.517	22.960	89.4	−	−	−	−	26	14	27	13	−	−					SM1039		
064	SB098	SI2098	F06	94	581	113	弥生終末期	前半	中台１	方楕円形	304	30	3.5	3.1	1.13	9.046	10.850	83.4	−	−	−	−	37?	−	−	−	−	−							炉体転用土器片あり。

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																															
064	SB100	SI2100	G06	27	452・453・454	85	弥生後期	−	−	不明	315	10	−	−	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g14? h16						
064	SB101	SI2101	E06	98	582	113	弥生後期？	−	−	方楕円形？	69	20	4.5?	4.2?	1.07	16.906	18.900	89.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI2102			
064	SB102	SI2102	F06	08	582	113	弥生後期？	−	−	長方楕円形？	34	25	6.2	5.0?	1.24	26.271	31.000	84.7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2101		
064	SB104	SI2104	F06	34	583	113	弥生終末期	−	−	隅円長方形？	350	25	2.9?	2.2	1.32	5.793	6.380	90.8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI2116?			
064	SB105	SI2105	F05	49	547・548・549	106	弥生後期	前半	久ヶ原２	方楕円形？	343	20	5.2?	4.8?	1.08	24.454	24.960	98.0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	27	g21 h33 i36 j24 k27				SI2065・SI2107・SM1057		
064	SB106	SI2106	F06	60	584	114	弥生後期	後半	−	方楕円形？	318	15	3.4	3.3?	1.03	9.357	11.220	83.4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI2069?	SI2107		
064	SB107	SI2107	F05	69	584	114	弥生終末期	前半	−	方楕円形	318	30	4.8?	4.5?	1.07	19.571	21.600	90.6	2.46	2.64	2.46	2.64	64?	78	66	64?	19	−				SI2105・SI2106	SM1057・SD4		
064	SB108	SI2108	F06	04	541	5・6	弥生後期	前半	−	方楕円形？	358	20	3.7	2.9以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2066・SM1057		
064	SB109	SI2109	E05	45	585	114	弥生後期後半～弥生終末期前半	−	−	方楕円形？	315	35	4.4?	4.1?	1.07	15.515	18.040	86.0	−	−	−	−	15	−	−	−	−	−			多	SI2054・SI2110	SM1024		
064	SB110	SI2110	E05	54	585	114	弥生後期	−	−	方楕円形？	322	10	−	3.6以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2109・SM1024		
064	SB111	SI2111	F06	64	544	105	縄文？	−	−	不明	253	15	3.8?	2.7?	1.41	8.449	10.260	82.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2063?・SM1057		
064	SB112	SI2112	E06	67	586	114	弥生後期～弥生終末期	−	−	不整長方形	56	10	3.1	2.1	1.48	5.834	6.510	89.6	−	−	−	−	23	−	−	−	−	−							
064	SB113	SI2113	G06	00	587	114	弥生終末期	−	−	方形？	90	15	6.2	5.7?	1.09	33.559	35.340	95.0	2.42	3.80	−	−	72	68	53	16	70?	37?	b'−c'3.16m b'51cm c'72cm g38cm h25cm i21cm	可能性		SI2114?			
064	SB114	SI2114	G06	12	587	114	弥生終末期？	−	−	不整方楕円形？	103	30	4.0	3.6?	1.11	11.357	14.400	78.9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	j86 k36				SI2113?・SK20		中世台地整形区画に関係か。
064	SB115	SI2115	E06	75	541	104	弥生後期	前半	−	不整隅円長方形？	10	15	4.0?	2.9?	1.38	10.266	11.600	88.5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2061		
064	SB116	SI2116	F06	24	583	113	弥生終末期	−	−	長方楕円形？	286	30	3.5	2.9?	1.21	8.857	10.150	87.3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−				SI2117	SM1057		
064	SB117	SI2117	F06	13	583	113	弥生後期～弥生終末期	−	−	長方楕円形？	298	30	3.8?	2.9?	1.31	9.051	11.020	82.1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2116・SM1057		
064	SB118	SI2118	G04	19	572	110	弥生後期	前半	−	不明	283	15	1.6以上	2.8以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−			少				
064	SB119	SI2119	E05	57	535	103	縄文？	−	−	方楕円形？	296	40	3.5?	3.3?	1.06	9.886	11.550	85.6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SI2056・SM1024		
064		SI2201	G07	61	588	5・6	弥生終末期～古墳前期？	−	−	方形？	349	10	2.4以上	2.0以上	−	計測不能	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−					SM1046		SM1046 墳丘内。
セ28	183	SI4001	T13	63	597・598	117	奈良	前半	先国分寺期	方形	3	50	5.9	6.0	0.98	32.973	35.400	93.1	3.00	2.78	3.12	2.90	19	48	57	78	12	98	g11				SI4002	有孔板状青銅製品1・斜格子状暗文杯・湖西産須恵器	カマド改修あり。
セ28	184	SI4002	U13	02	599・600	117	奈良	前半	先国分寺期	方形	350	40	7.4	7.6	0.97	52.868	56.240	94.0	3.68	3.56	3.80	3.72	91	56	56	102	18	21	g16			SI4001	SD4001・SX4001	畿内産暗文土師器	カマド改修あり。
セ28	178	SI4003	T13	36	602	117	奈良	中葉	先国分寺期～坊作Ⅰ-a	方形	6	50	4.4	4.6?	0.96	19.805	20.240	97.9	−	−	−	−	22	17	24	−	−	−		カマド有		SB4004	SD4001	摘鎌状鉄製品1・須恵器杯（新治窯・木葉下窯）	
セ28	129	SI4004	U09	76	604・605	117・118	奈良	前半	先国分寺期	方形	A:3／B:27	65	3.7	3.4	1.09	10.531	12.580	83.7	2.30	2.16	2.64	1.96	10	13	19	13	17	−		有		SS119			B面積12.114。カマド付替あり。
セ28	133	SI4005	U12	06	606	118	奈良	前半	先国分寺期	方形	334	40	3.8?	3.9	0.97	14.480	14.820	97.7	2.48	2.52	3.02	2.60	17	9	31	59?	15?	7	g35? h17 i7 j21						
セ28	136	SI4006	U09	70	607	118	奈良	前半	先国分寺期～坊作Ⅰ-a	方形	301	20	3.4	3.2	1.06	10.247	10.880	94.2	1.54	1.74	1.64	1.64	57	55	58	44	36	−			炭化材		SE4001		
セ28	440	SI4007	U11	10	608	118	奈良？	−	−	不整方形	359	50	4.7	4.6	1.02	19.544	21.620	90.4	−	−	−	−	20	31	18	−	−	−					SI4014?		
セ28	126	SI4008	T11	16	609	118・119	奈良～平安前期	−	−	方形	350	30	4.1	4.1	1.00	15.586	16.810	92.7	2.46	1.86	2.22	1.72	17	16	27	28	7	14			少	SS115			

位置					図	図版	時期			形態		規模							主柱穴間(m)				ピット深度(cm)							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位(度)	竪穴深度(cm)	主軸長(m)	直交軸(m)	長短比	面積(㎡)	方面積(㎡)	方円度(%)	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
セ28	127	SI4009	T12	10	611	119	奈良～平安前期	-	-	方形	351	15	4.5	4.6	0.98	19.095	20.700	92.2	3.20	b'-c 2.74	2.72	2.80	28	21	51	22	14	26	a-b'2.84m b'55cm g11cm h16cm i33cm j16cm k19cm			SS56・SS115			
セ28	206	SI4010	T11	79	612	119	奈良	前半	-	方形	346	60	6.1?	6.3	0.97	37.212	38.430	96.8	2.70	2.44	2.84	2.68	30	39	40	54	5	-					SB4007・SD4003		
セ28	132	SI4011	U12	01	613	119・120	奈良～平安前期	-	-	方形	359	40	4.0?	4.0	1.00	15.274	16.000	95.5	1.82	2.16	1.96	2.04	61	51	41?	45?	-	-							
セ28	138	SI4012	U08	63	614	120	平安前期	-	坊作Ⅴ	方形	295	45	3.0	2.8?	1.07	7.829	8.400	93.2	1.54	-	-	-	17	8	16	-	-	-					SD4004B	鉄製穂摘具1	
セ28	228	SI4013	T09	12	616	120	奈良？	-	-	長方形	24	20	4.2	3.3?	1.27	12.694	13.860	91.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					SD4005		縄文時代集石遺構と重複か。
セ28	441	SI4014	U11	23	617	120	奈良～平安前期？	-	-	方形	340	40	5.3?	5.4	0.98	27.331	28.620	95.5	2.60	2.72	2.58	2.68	61	68	70	59	-	-			SI4007?				
SW83	1203	SI9001	U26	21	653・654	124・125	弥生終末期	中葉	中台1-2～2-1	隅円方形	335	50	6.4	6.3	1.02	39.017	40.320	96.8	3.28	3.66	3.26	3.76	9	26	50	44	51	29	a'39 b'33		多・炭化材		SK202		ベッド状遺構。
SW83	1202	SI9002	U24	59	655	125	弥生終末期～古墳時代	-	-	方形	347	40	4.6	5.4	0.85	23.066	24.840	92.9	-	-	-	-	13	-	-	-	-	-					SM1076・SM1058		
SW83	1205	SI9003	R27	69	656	125	弥生後期～弥生終末期	-	-	不整方楕円形	347	20	4.8?	5.2	0.92	22.240	24.960	89.1	-	-	-	-	8	9	43	-	-	-							
SW83	1204	SI9004	S27	18	657	125	平安前期	-	-	方形	342	30	3.4	3.6	0.94	10.667	12.240	87.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							カマド付き。
SW83	1206	SI9005	R28	06	658	125	古墳終末期～古代	-	-	方形	344	5	3.1	3.0	1.03	8.735	9.300	93.9	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-							カマド付き。
SW83	1207	SI1001(Ⅱ)	V22	89	730・731・732	-	古墳終末期	中葉	茶ノ木10期	方形	347	40	5.3	5.2	1.02	25.265	27.560	91.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			有		SM1008	竪穴外に須恵器甕(湖西産)	カマド付き。報告Ⅱ。SM1008における葬送儀礼の一環で廃絶か。
セ72	011	SI6001	L05	77	662	126	弥生中期	後半	宮ノ台	方楕円形	314	10	4.4	3.8	1.16	14.361	16.720	85.9	-	-	-	-	19	29	11	-	-	-					SS97		
セ73	005	SI7001	R03	88	664	126	弥生後期	前半	-	方楕円形	321	50	5.7	5.1	1.12	25.003	29.070	86.0	-	-	-	-	33	-	-	-	-	-			少・炭化材		SD7001		
セ73	011	SI7002	Q02	65	665	126	奈良～平安前期	-	-	不整方形	131	30	6.2	6.6	0.94	37.131	40.920	90.7	-	-	-	-	24	43	10	12	8	11	g46		少	SS101・SK339			カマド付き。
SW74北	H1	SI8001	B11	21	666	127	弥生終末期	-	-	方形	316	-	4.4	4.4	1.00	17.466	19.360	90.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳周溝内。
SW74北	H2	SI8002	B10	05	666	-	弥生後期	後半	-	長方楕円形	316	-	8.2	6.7	1.22	46.327	54.940	84.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳周溝内。
SW74北	H3	SI8003	B11	62	666	127	弥生後期	後半	-	方楕円形	312		6.1?	6.2	0.98	31.224	37.820	82.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳周溝内。
SW74北	H4	SI8004	B10	67	666	-	弥生後期	前半	-	方楕円形？	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW74北	H5	SI8005	B11	81	666	127	弥生後期後半～弥生終末期	-	-	方楕円形	-	-	5.6?	5.6?	1.00	25.863	31.360	82.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW74北	H6	SI8006	B10	89	666	-	弥生後期後半？	-	-	方楕円形？	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW74北	H7	SI8007	C10	07	666	-	弥生後期後半～弥生終末期	-	-	方楕円形	-	-	4.0?	3.8?	1.05	14.179	15.200	93.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW74北	H8	SI8008	C11	04	666	-	弥生後期後半？	-	-	方楕円形？	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳周溝内。
SW74北	H9	SI8009	B10	70	666	-	弥生終末期	-	-	不明	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳周溝内。
SW74北	H10	SI8010	B10	84	666	-	不明	-	-	方楕円形？	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW74北	H11	SI8011	B10	74	666	-	弥生後期後半？	-	-	不明	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台1号墳墳丘内。
SW79	001	SI3001	B07	43	671	-	弥生後期～弥生終末期	-	-	方楕円形	307	-	3.1?	3.4	0.91	10.058	10.540	95.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台2号墳周溝部。
SW79	002	SI3002	B08	51	671	-	弥生後期？	-	-	楕円形？	-	-	-	-	-	計測不能	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台2号墳墳丘内。
SW79	003	SI3003	B08	52	671	-	弥生終末期？	-	-	隅円方形？	-	-	5.4?	4.6	1.17	20.859	24.840	84.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							諏訪台2号墳墳丘内。

位置					図	図版	時期			形態		規模						主柱穴間（m）				ピット深度（cm）							建替	焼土	切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	主軸方位（度）	竪穴深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	長短比	面積（㎡）	方面積（㎡）	方円度（%）	a-b	b-c	c-d	d-a	a	b	c	d	e	f	その他			を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小																														
SW79	004	SI3004	B08	23	671	－	弥生終末期	－	－	隅円方形	311	－	5.2	5.0	1.04	24.856	26.000	95.6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	005	SI3005	B08	14	671	－	弥生終末期	－	－	隅円方形	309	－	5.1?	5.4?	0.94	26.297	27.540	95.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	006	SI3006	B08	25	671	－	弥生後期～弥生終末期	－	－	楕円形～方楕円形	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	007	SI3007	B08	22	671	－	弥生後期前半？	－	－	楕円形？	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	008	SI3008	A08	92	671	－	弥生終末期？	－	－	隅円長方形	－	－	5.0	6.2?	0.81	27.949	31.000	90.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	009	SI3009	B08	00	671	－	弥生終末期？	－	－	長方形	303	－	5.6?	4.3?	1.30	22.950	24.080	95.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	010	SI3010	A08	91	671	－	弥生終末期	－	－	方形	308	－	4.7	4.5	1.04	20.264	21.150	95.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	011	SI3011	A07	79	671	－	弥生後期	前半	－	方楕円形	313	－	5.4	5.5	0.98	26.530	29.700	89.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	012	SI3012	A07	99	671	－	弥生終末期	－	－	隅円方形	313	－	6.0?	6.0	1.00	34.310	36.000	95.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	013	SI3013	B07	17	671	－	弥生終末期	－	－	方楕円形	316	－	5.6	5.4	1.04	27.318	30.240	90.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		有				諏訪台２号墳墳丘内。3013B：5.6×4.8m、面積23.772㎡。
SW79	014	SI3014	B08	40	671	－	弥生終末期	－	－	隅円方形	301	－	7.3	7.0	1.04	47.953	51.100	93.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。埋葬施設直下に位置する。
SW79	015	SI3015	B07	38	671	－	弥生後期～弥生終末期	－	－	楕円形	323	－	4.4?	4.1?	1.07	14.950	18.040	82.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	016	SI3016	B07	28	671	－	弥生終末期？	－	－	隅円方形？	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	017【022?】	SI3017	B08	70	671	－	弥生後期？	－	－	楕円形	340	－	5.3?	5.0?	1.06	21.716	26.500	81.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	018	SI3018	B07	69	671	－	弥生終末期	－	－	方形	327	－	5.7?	6.0	0.95	33.174	34.200	97.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。ベッド状遺構あり。
SW79	019	SI3019	B07	78	671	－	弥生終末期	－	－	－	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						SI3018のベッド状遺構部分。
SW79	020	SI3020	B07	56	671	－	弥生終末期	－	－	隅円方形	308	－	6.6?	6.4	1.03	37.749	42.240	89.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		有				諏訪台２号墳墳丘内。3回程度建て替えの可能性。
SW79	021	SI3021	B07	67	671	－	弥生終末期？	－	－	隅円方形？	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳墳丘内。
SW79	023	SI3023	C07	16	671	－	弥生後期～弥生終末期	－	－	長方楕円形？	－	－	3.9?	3.2?	1.22	11.071	12.480	88.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						諏訪台２号墳周溝付近。
SW79	024	SI3024	C07	24	671	－	弥生終末期	－	－	方楕円形	320	－	3.8?	3.4	1.12	10.863	12.920	84.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	025	SI3025	C07	02	671	－	弥生終末期	－	－	不整方楕円形	314	－	3.3?	4.2	0.79	12.071	13.860	87.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	026	SI3026	C07	31	671	－	弥生後期？	－	－	方楕円形	28	－	4.0?	3.5	1.14	11.582	14.000	82.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	027	SI3027	B07	72	671	－	弥生終末期	－	－	方楕円形	322	－	2.5?	2.8	0.89	6.169	7.000	88.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	028	SI3028	C07	50	671	－	弥生後期	－	－	不整方楕円形	347	－	3.4?	3.3?	1.03	9.456	11.220	84.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	029	SI3029	C07	51	671	－	弥生後期？	－	－	不整方楕円形	－	－	－	－	－	計測不能	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						方形周溝墓主体部か。
SW79	041	SI3041	B07	80	671	－	弥生終末期	－	－	不整方楕円形	－	223	4.6?	4.5?	1.02	17.115	20.700	82.7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	042	SI3042	C06	79	671	－	弥生後期？	－	－	方楕円形	313	－	3.6	3.3	1.09	10.226	11.880	86.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	043	SI3043	C07	00	671	－	弥生終末期	－	－	不整方楕円形	336	－	3.2	3.7	0.86	9.062	11.840	76.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						
SW79	044	SI3044	C06	28	671	127	弥生終末期	－	－	隅円方形	301	－	3.9	4.2	0.93	14.755	16.380	90.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－						

第３表　掘立柱建物跡一覧

| 位置 | | | | | 図 | 図版 | 時期 | | 形態 | | 建物推定規模 | | | | | | | 建替 | ピット深度（cm） | | | | | | |

第５表　溝状遺構一覧

位置					図	図版	時代・時期	形態		規模			備考
地区	遺構名		グリッド					平面形他	断面形	検出長（m）	最大幅（m）	深度（cm）	
	旧遺構	新遺構	大	小									
TJ	溝状遺構	SD0001	I18	00	219	56	古代以降	コ字形	U字形～逆台形	111	0.7	50	谷地形に向きを合わせる。
TJ	溝状遺構	SD0002	D10	00	27	127	近世以降	直線的	不明	30以上	0.8	30	SW74北地区に連続。
TJ	古道	SD0003	F13	00	27	2	近世以降	直線的	不明	20以上	0.5	30	SD1001と合流する。
099	2010溝	SD1001	K10	00	440	66・79	近世以前～	直線的	緩いU字	179	1.4	40	SD0003と合流する。
099	2013溝	SD1002	N13	00	441	81	近世～現代	直線的	一部轍状	75以上	2.4	20	SK130鍋被り葬土坑墓。
099	2014溝	SD1003	O21	00	443	81	近世以降	直線的	皿状	230	1.0	15	
099	－	SD1004A	O28	00	444・445	81・82	近世以降	直線的	皿状	62	2.8	60	SD9003が南側で並行する。
099	－	SD1004B	O28	00	444・445	81・82	近世以降	直線的	皿状	56	1.8	25	
099	－	SD1004C	O28	00	444・445	81・82	近世以降	直線的	逆台形～皿状	30	1.2	40	２条が重複する。
099	－	SD1004D	O28	00	444・445	81・82	近世以降	直線的	皿状	33	1.4	15	
064	溝状遺構	SX2003	G04	45	590・593	5・6・83・115	中世	L字形	逆台形	4.8以上	1.0	60	台地整形区画SX2005区画a東辺に続く。
064	溝状遺構	SX2004	G04	25	590・593	5・6・83・115	中世	L字形	逆台形	13	1.2	15	SX2003と並行する。
セ28・セ54	051	SD4001	S14	00	642・649	123・124	近世以降	C字形	逆台形	138	2.0	80	道路か。分岐部北22m、分岐部南22.4m。
セ28	052	SD4002	R12	00	643	124	古代以降	へ字形	逆台形	93	0.6～2.0	30～60	古代建物群の区画溝か。
セ28	131	SD4003	T11	00	644	121	近世以降	へ字形	皿状	61	0.5～1.6	30	道路か。
セ28	135	SD4004	T08	00	645	124	近世以降	直線的	緩いU字	70	1.2～3.0	50～120	SM1003前方部墳丘に規制される。
セ28	230	SD4005	T09	32	616	120	近世以降	直線的	逆台形	4	0.8	20	SD4004Bに連続か。
セ54・SW83	－	SD5001	Q18	29	648	124	近世以降	L字形	皿状	56	0.5～1.6	20	区画溝か。
SW83	－	SD9001	R24	00	652	10	近世以降	直線的	－	30	2.0	－	区画溝か。
SW83	2021	SD9002	R28	00	659	126	近世以降	曲線的	皿状	18	1.0～2.0	10～20	
SW83	2022	SD9003	S28	00	659	126	近世以降	直線的	緩いU字	24	0.8～1.5	20～50	道路。底面に楕円形掘り込みが連続する。
SW83	2023	SD1004A	Q29	00	659	126	近世以降	直線的	逆台形	38	2.0	40	道路。099地区から連続。
SW83	2024	SD1004B	Q29	00	659	126	近世以降	直線的	緩いU字	23	1.2	20	道路。099地区から連続。
セ73	－	SD7001	R04	00	664	12・126	近世以降	直線的	緩いU字	20	0.8	20	道路か。SS101と10号墳の間を通る。
セ73	－	SD7002	P02	50	21	12	近世以降	直線的	緩いU字	22	1.8	10	道路か。SS101前方部前面と並行する。
SW74北	溝状遺構	SD0002	C11	00	666	127	近世以降	直線的	逆台形	18	1.0	20	道路。底面に円形掘り込みが連続する。

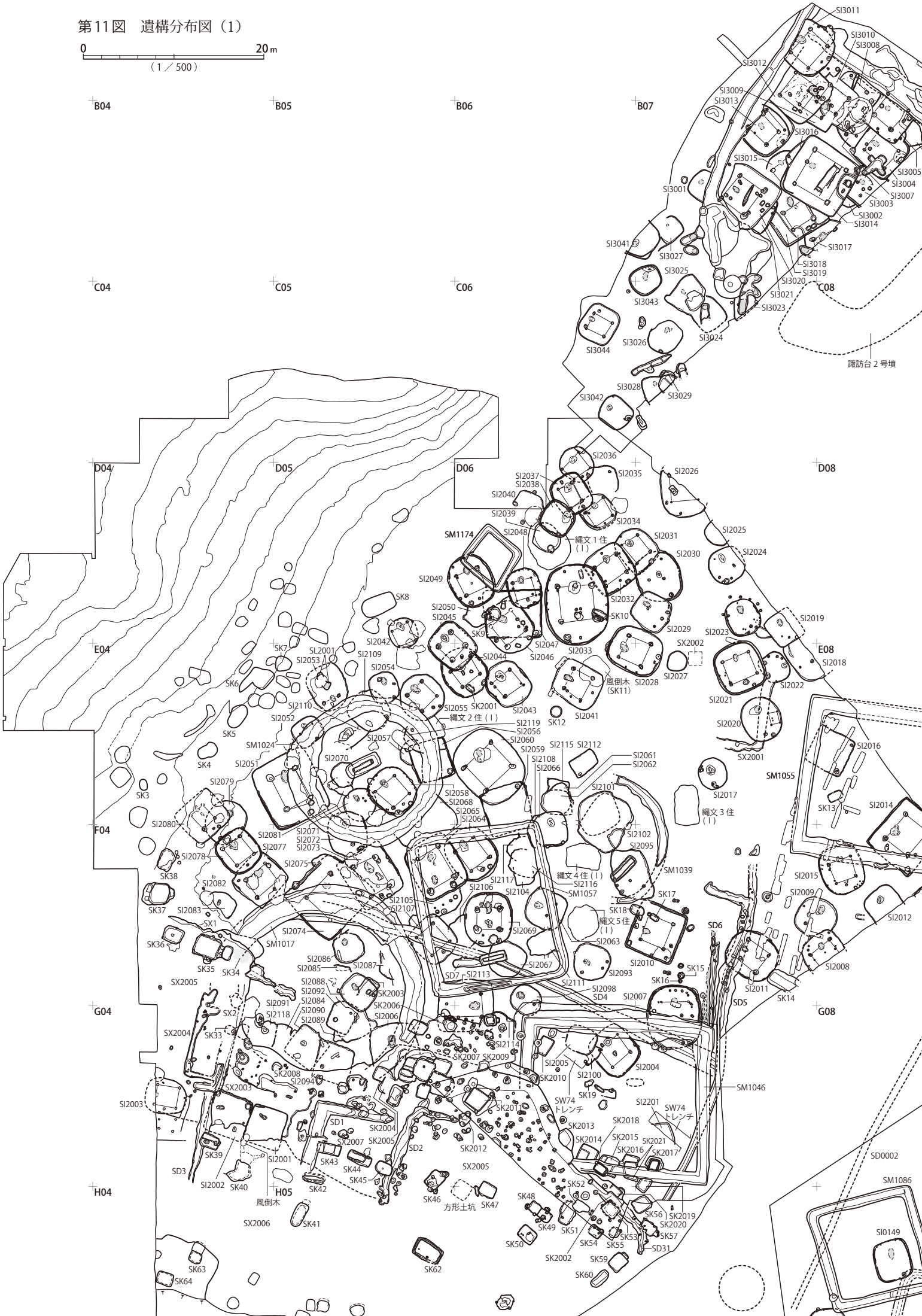
第６表　土坑・その他遺構一覧

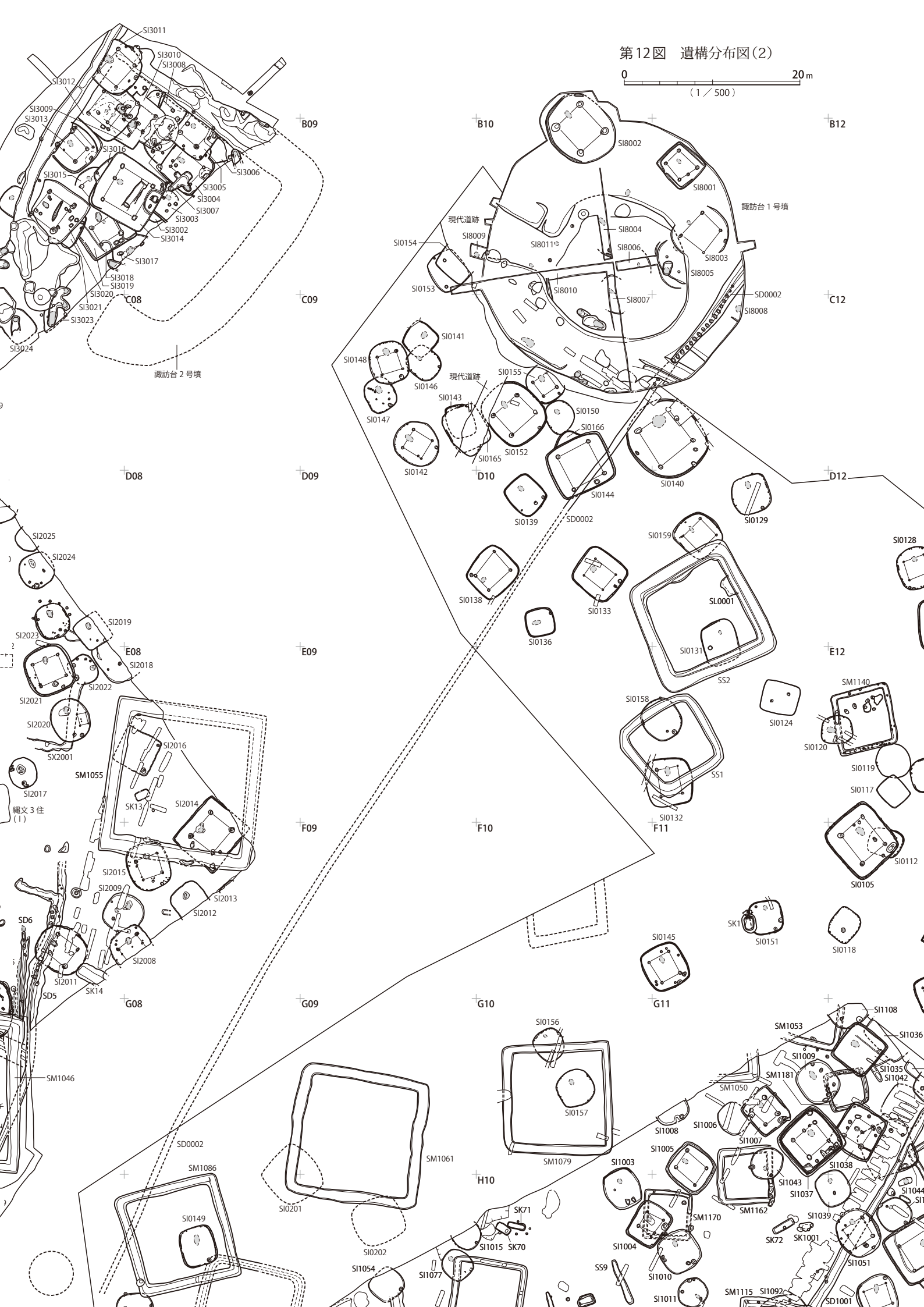
位置					図	図版	時期			形態			規模			切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	種別	主軸方位（度）	深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小															
TJ	40号	SK0001	L22	97	697	2	縄文	－	－	不整円形	土坑	－	15	1.7	1.5				100号土坑（報告書Ⅰ）。
TJ	41号	SK0002	L22	57	697	2	縄文	－	－	不整長楕円形	土坑	－	20	2.8	1.8				
TJ	100号	SK0003	M22	12	697	2	縄文	－	－	方楕円形	土坑	－	－	1.9	1.8				
TJ	8号	SL0001	D11	64	698	2	縄文	－	－	不整方楕円形	炉穴？	331	15	2.3	1.3				
099	ロ-10	SK130	K08	57	442	3・4	近世	－	－	長方楕円形	土坑	322	30	0.96	0.68	SS11	SD1002	内耳鉄鍋	報告書Ⅱ。歯・骨片。
099	3025	SK1001	H11	28	436	82	古墳前期	前半	草刈1	隅丸方形	土坑	75	20	1.9	1.0				竪穴建物残欠か。
099	3404	SK1002	L15	85	716	3・4	古墳	－	－	長方楕円形	有天井土坑	66	65	1.9	1.0				
099	3405	SK1003	不明	不明	716	3・4	古代？	－	－	長方楕円形	土坑墓？	78?	90	2.7	1.3				底面にピットと畝状隆帯あり。
099	3355A	SK1004	O22	74	716	3・4	不明	－	－	不整楕円形	土坑	－	50	2.0	1.8				
099	3355B	SK1005	O22	85	716	3・4	不明	－	－	不整楕円形	土坑	－	20	2.5	1.4				
099	3061	SL1001	L03	19	700	3・4	縄文	－	－	不整方楕円形	炉穴	－	25	3.0	2.6				
099	3064	SL1002	L04	02	700	3・4	縄文	早期	－	楕円形	炉穴	－	40	2.9	2.5				
099	3057	SL1003	J08	82	700	3・4	縄文	－	－	不整楕円形	炉穴？	36	40	2.3	1.3				
099	3403	SL1004	J08	91	700	3・4	縄文	－	－	不整楕円形	炉穴？	81	65	3.8	2.0				
099	3135	SL1005	M07	43	701	3・4	縄文	－	－	不整楕円形	炉穴？	284	10	2.7	1.4				
099	3401	SL1006	L07	95	701	3・4	縄文	－	－	不整方楕円形	炉穴？	46	不明	2.0	1.8				
099	3402	SL1007	L07	75	701	3・4	縄文	－	－	不整円形	炉穴？	－	不明	1.3	1.3				
099	3139	SL1008	L07	45	702	3・4	縄文	早期	－	方楕円形	炉穴	357	65	3.5	3.4				土坑状部分：長軸2.8、短軸1.1m。
099	3140	SL1009	L07	47	702	3・4	縄文	早期	－	不整楕円形	炉穴	115	30	2.2	1.5				
099	3143	SL1010	L07	58	702	3・4	縄文	－	－	長楕円形	炉穴	312	65	2.2	1.3				

位置					図	図版	時期			形態			規模			切り合い関係		特徴的な遺物	備考
地区	遺構名		グリッド				時代	詳細	細分	平面形	種別	主軸方位（度）	深度（cm）	主軸長（m）	直交軸（m）	を切る	に切られる		
	旧遺構	新遺構	大	小															
099	3144?	SL1011	L07	48	702	3・4	縄文	−	−	不整楕円形	炉穴？	314	不明	2.5	1.9				
099	3141	SL1012	L07	25	702	3・4	縄文	−	−	長楕円形	炉穴	272	70	2.6	1.5				SK129（報告書 II）。
099	3134	SY1001	M09	66	438	82	近世〜	−	−	方形	製炭土坑	128	65	2.6	2.2				SD1001 東側。
099	3353	SY1002	P22	90	438	3・4	近現代	−	−	イチジク形	製炭土坑	352	40	3.2	2.7				SD1002 北側。
099	3354	SY1003	P22	85	439	3・4	近現代	−	−	イチジク形	炭窯	348	5	3.6	2.7			軟質岩（大谷石？）	SD1002 北側。
064		SK64	H04	53	590	5・6・83・115	近世〜	−	−	方形	製炭土坑	109	70 以上	1.9	1.5				深度は断面図から推定。報告書 II。
064	−	SK2001	E06	20	517	5・6・83・115	古墳	−	−	方形	側壁抉り込み土坑？	313	39	1.1	0.6	SI2044			
064	−	SK2002	H06	08	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	131	86	2.1	(0.8)				
064	−	SK2003	F05	85	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	42	87	(2.4)	(1.8)				
064	−	SK2004	G05	35	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	117	37	(2.0)	1.7				
064	−	SK2005	G05	46	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	25	33	(2.1)	(1.5)				
064	−	SK2006	G05	19	590	5・6・83・115	中世	−	−	不整楕円形	土坑	127	29	1.7	1.3				
064	−	SK2007	G06	20	590	5・6・83・115	中世	−	−	不定形	土坑	90	35	2.2	2.1				
064	−	SK2008	G05	30	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	25	28	(1.1)	1.1				
064	−	SK2009	G06	31	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	90	37	1.4	1.3				
064	−	SK2010	G06	25	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	32	15	2.1	1.5				
064	−	SK2011	G06	51	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	127	95	2.3	2.1				粘土ブロック。 外縁部長軸 3.55m、直交軸 3.3m。
064	−	SK2012	G06	60	590	5・6・83・115	中世	−	−	不整方形	土坑	34	27	1.8	1.4				
064	−	SK2013	G06	76	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	137	63	(2.6)	(1.6)				
064	−	SK2014	G06	87	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	116	77	2.1	(2.0)				
064	−	SK2015	G06	88	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	124	53	2.5	(2.1)				
064	−	SK2016	G06	89	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	108	56	1.8	(1.1)				
064	−	SK2017	G07	81	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	108	97	2.1	(1.7)				
064	−	SK2018	G06	98	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	128	49	1.8	1.1				
064	−	SK2019	G07	90	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	35	37	(1.7)	1.3				
064	−	SK2020	H06	08	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	133	40	1.4	(0.7)				
064	−	SK2021	G06	99	590	5・6・83・115	中世	−	−	方形	土坑	4	46	2.2	1.7				
064	−	SL2001	E05	22	720	5・6・83	縄文	−	−	不整楕円形	炉穴	10	−	2.1	1.0		SI2053		
064	−	SX2001	E07	56	589	90	弥生中期？	−	−	L 字形	方形周溝墓？	8	15	幅 1.2	−		SI2020		
064	−	SX2002	E07	03	492	5・6・83	弥生後期	−	−	−	土器集積？	−	−	−	−			輪積痕褒	SI2027 東側。掘方不明。SX2001 に伴う土器棺墓か。
064	−	SX2005	G05	00	590・593	115・127	中世	−	−	−	台地整形区画	−	−	−	−				区画 a 〜 h あり。
064	−	SX2006	H04	00	590	115・116	中世	−	−	−	台地整形区画	−	−	−	−				上部斜面含む。
064	−	SX2007	G05	74	590	5・6・83・115	中世	−	−	−	掘立柱建物跡	86	25	1.16	0.98				柱痕跡あり。掘立柱建物跡の可能性あり。
セ 28	−	SK213	S05	43	740	6・7・8	古墳前期	前半	−	長方形	埋葬施設（木棺？）	320	75	2.88	1.62				SS102 主体部。報告書 II 訂正。
セ 28	−	SK4001	S05	60	740	6・7・8	古墳？	−	−	長方形	土坑墓？	313	50	3.36	2.22		SD27・SD29		推定木棺痕跡：2.40 × 0.90m。報告書 II 訂正。
セ 28	−	SX4001	U13	21	599	6・7・8・116	近世〜	−	−	円形	製炭土坑？	315	55	2.96	2.80	SI4002			SD4001 北西側。
セ 28	246	SX4002	V10	20	641	122・123	奈良後半〜平安初	−	−	不整方楕円形	土坑（遺物集中）	66	20 以上	1.22	1.08	SS119		「寺」銘墨書土器	掘方不明瞭。
セ 28	−	SY4001	R09	10	644	6・7・8	近現代	−	−	楕円形	炭窯	343	60 以上	3.5	2.6	SM1060			SM1060 墳丘を掘り込む。山砂混じりの粘土で構築。
セ 28 神社裏	−	SK4101	M07	93	734	6・7・8	古墳	−	−	不整方楕円形	土坑	312	50	2.01	1.62	SS21			
セ 28 神社裏	−	SK4102	N07	15	734	6・7・8	縄文	−	−	方楕円形	土坑	280	30	1.62	1.29		SK274		
セ 28 神社裏	−	SK4103	N07	13	734	6・7・8	弥生？	−	−	長楕円形	周溝内土坑？	48	65	1.26	0.55		SS21?		SS21 北西周溝内墓壙か。
SW83	−	SX9001	V22	55	730・731・732・733	125・298	古墳終末期	中葉	−	不定形帯状	焼土混じり遺物集中部	−	厚さ 5 〜 15	12.4	6.5			SI1001（II）由来の土器・土製支脚等	SI1001（II）。北東部に広がる。
セ 72	−	SK6001	N07	86	746	−	縄文	−	−	方楕円形？	竪穴	−	10	2.64	1.14		SS21		

第11図　遺構分布図（1）

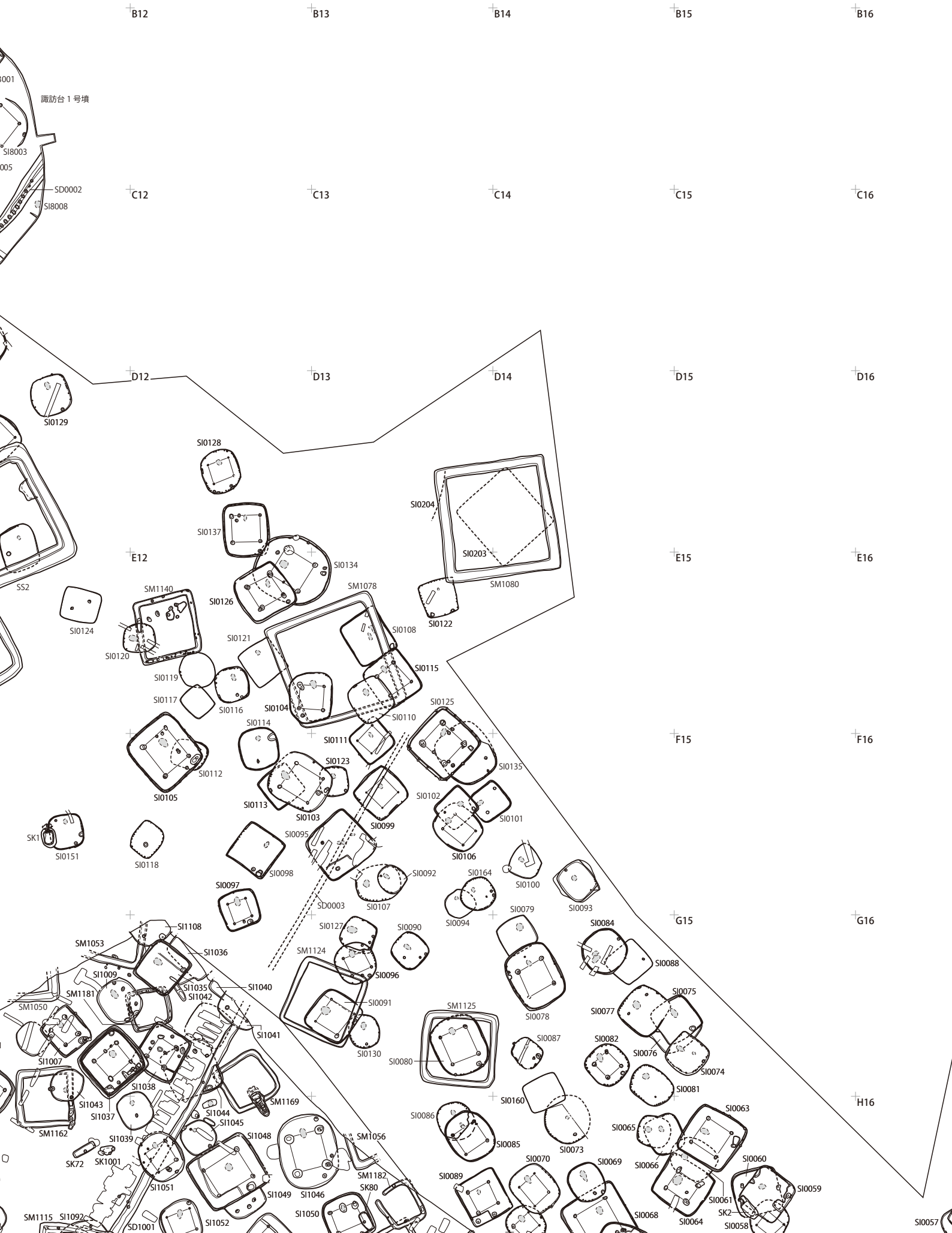
0　20m
（1／500）




第12図　遺構分布図(2)
0
20m
(1／500)
B09
B10
B12
C08
C09
C12
D08
D09
D10
D12
E08
E09
E12
F09
F10
F11
G08
G09
G10
G11
H10
SI3011
SI3010
SI3008
SI3012
SI3009
SI3013
SI3016
SI3015
SI3006
SI3005
SI3004
SI3007
SI3003
SI3002
SI3014
SI3017
SI3018
SI3019
SI3020
SI3021
SI3023
SI3024
諏訪台2号墳
SI8002
SI8001
諏訪台1号墳
現代道跡
SI8004
SI8009
SI8011
SI8006
SI8003
SI0154
SI8005
SI0153
SI8010
SI8007
SD0002
SI8008
SI0141
SI0148
SI0146
現代道跡
SI0155
SI0143
SI0147
SI0150
SI0166
SI0165
SI0152
SI0142
SI0140
SI0144
SI0139
SD0002
SI0129
SI0128
SI0159
SI0138
SI0133
SL0001
SI0136
SI0131
SS2
SI0124
SM1140
SI0158
SI0120
SS1
SI0119
SI0117
SI0132
SI0112
SI0105
SK1
SI0151
SI0118
SI0145
SI2025
SI2024
SI2019
SI2023
SI2018
SI2022
SI2021
SI2020
SX2001
SI2016
SM1055
SI2017
縄文3住
(I)
SK13
SI2014
SI2015
SI2009
SI2013
SI2012
SD6
SI2008
SI2011
SK14
SD5
SM1046
SI0156
SI0157
SM1079
SM1053
SI1108
SI1036
SI1009
SI1035
SI1042
SM1181
SM1050
SI1008
SI1006
SI1007
SI1005
SI1038
SI1003
SI1043
SI1037
SI1044
SM1170
SM1162
SI1039
SK72
SK1001
SI1004
SI1051
SI1010
SS9
SI1011
SM1115
SI1092
SD1001
SD0002
SM1086
SM1061
SI0201
SI0149
SI0202
SK71
SI1015
SK70
SI1054
SI1077

第13図　遺構分布図（3）

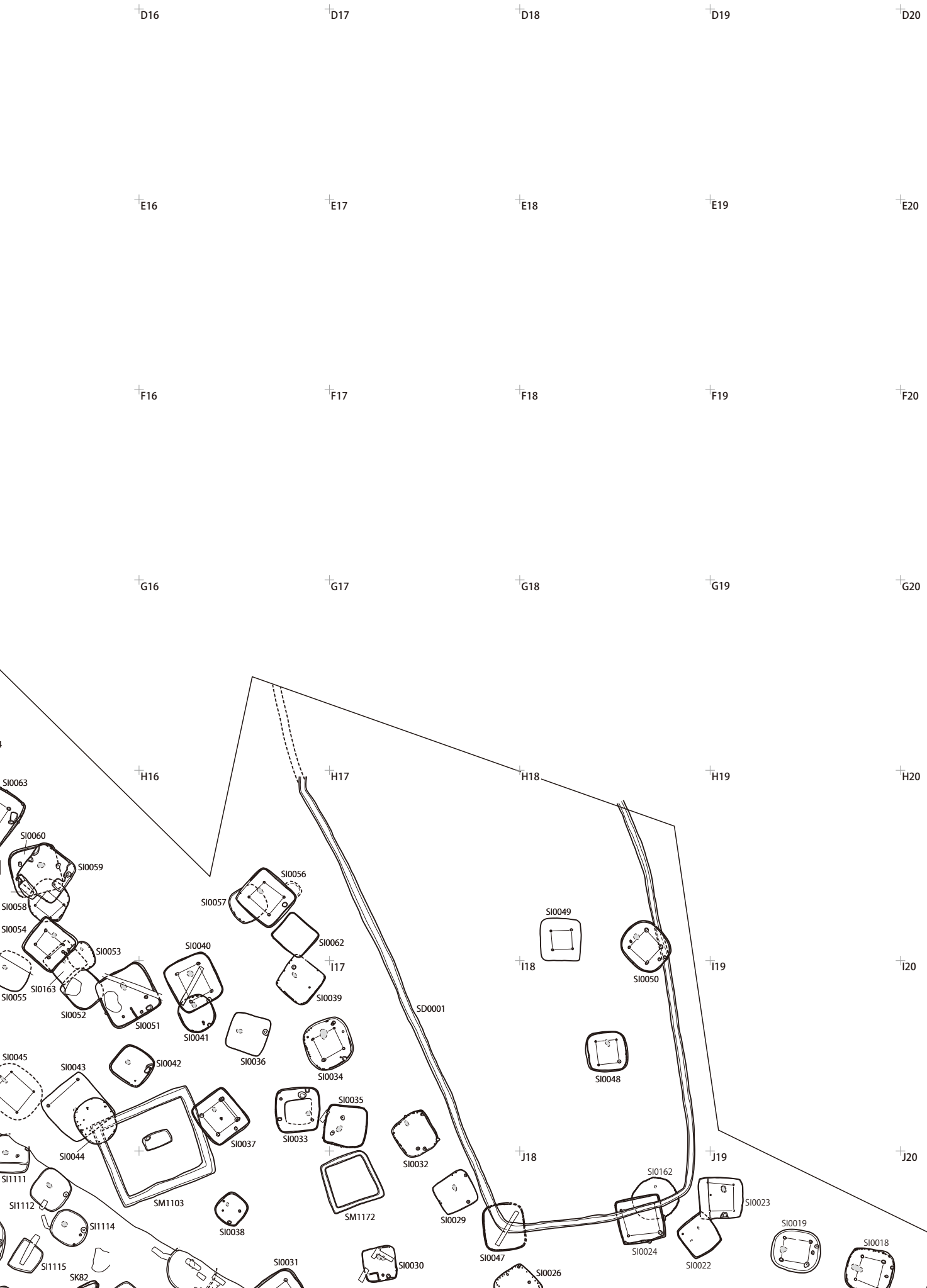
0　20m
（1／500）



第14図　遺構分布図（4）

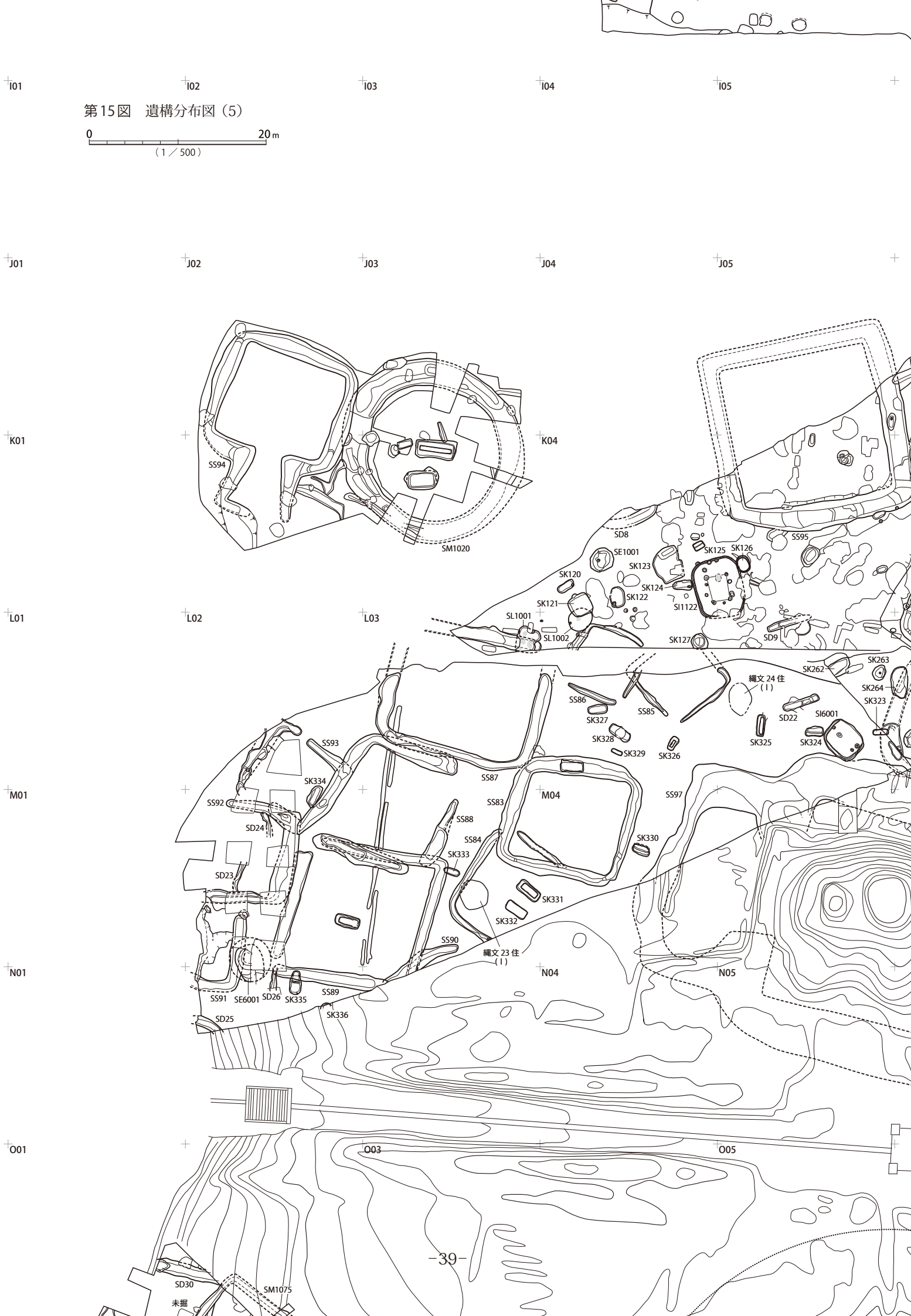
0　20m

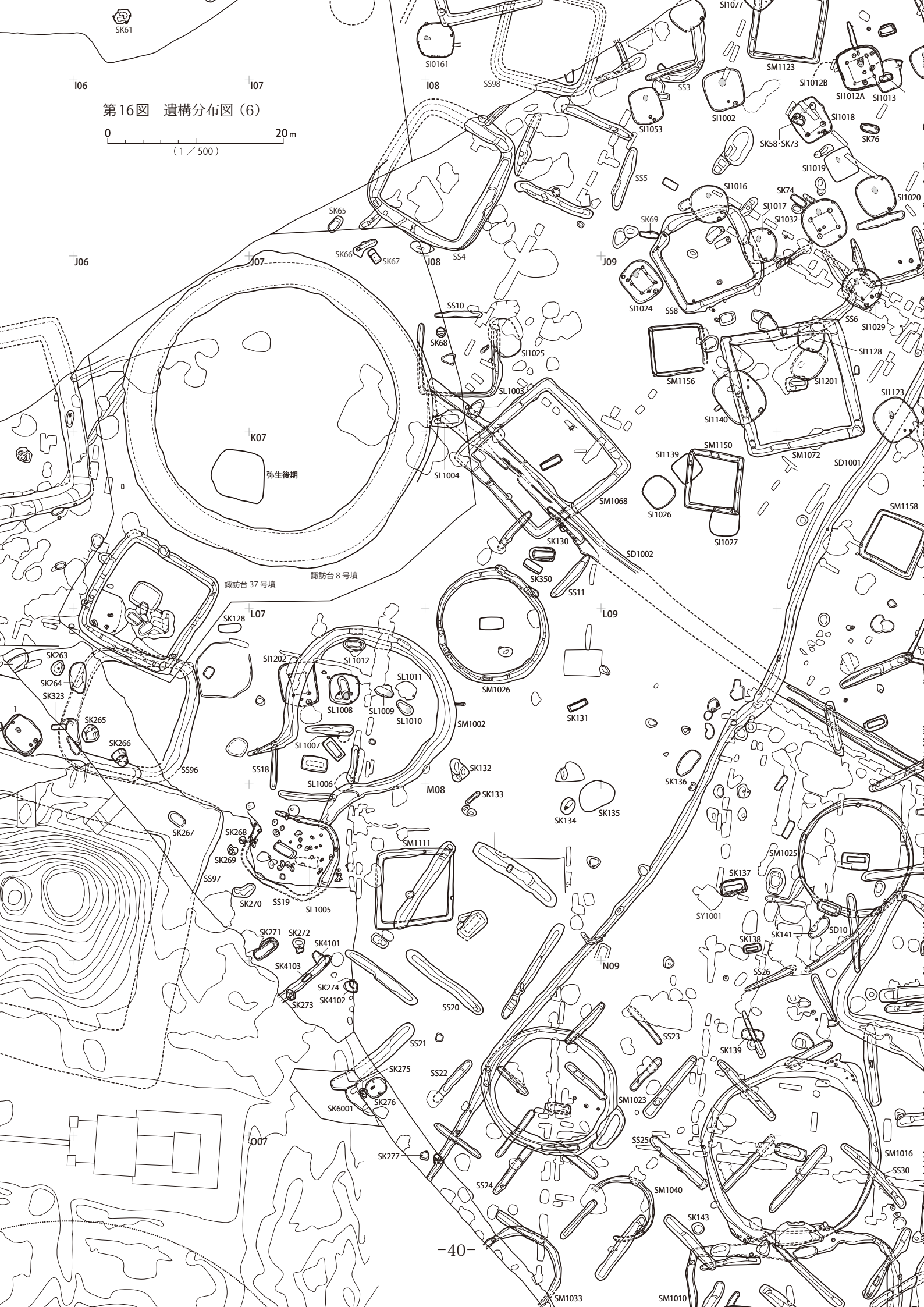
（1／500）

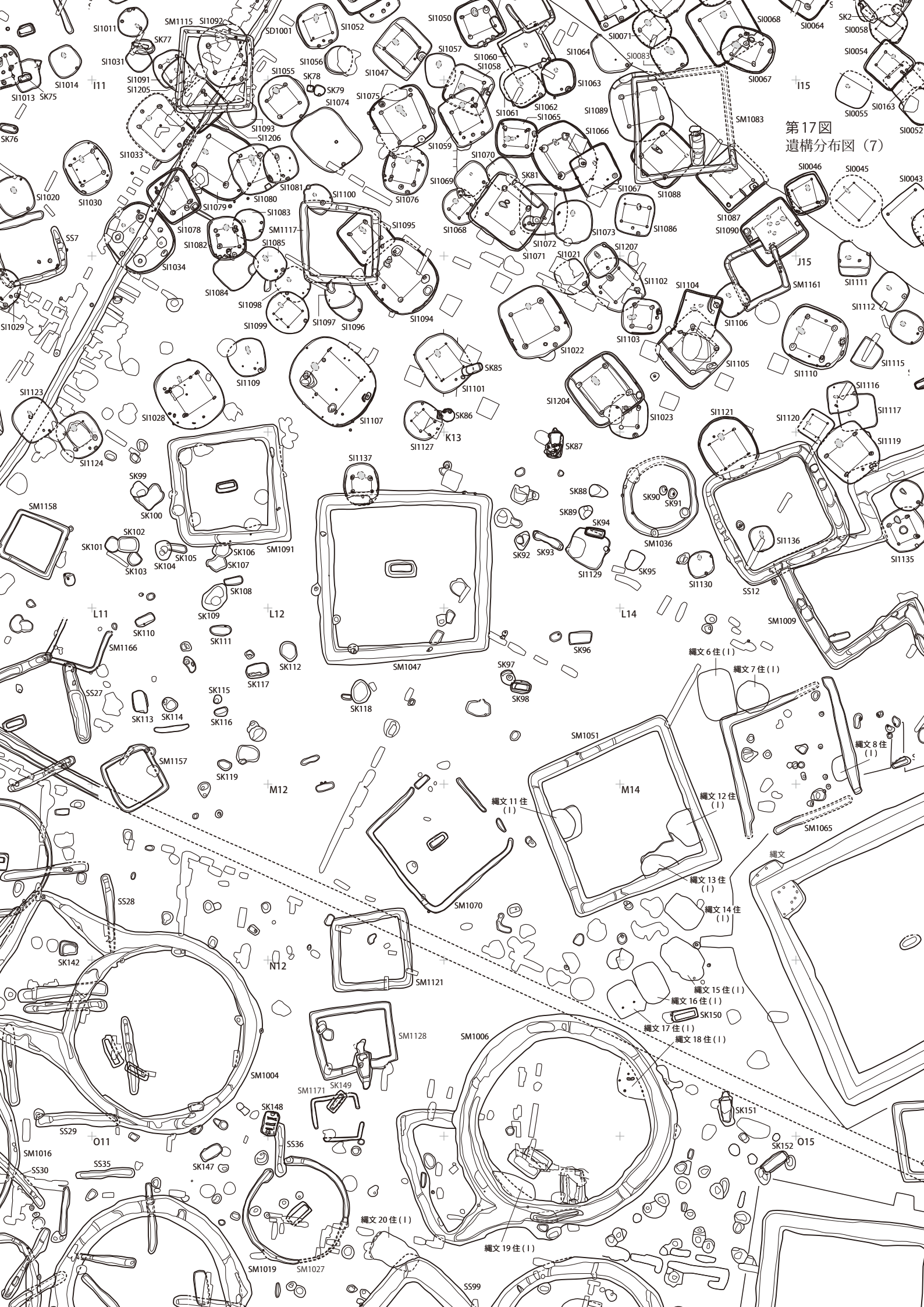


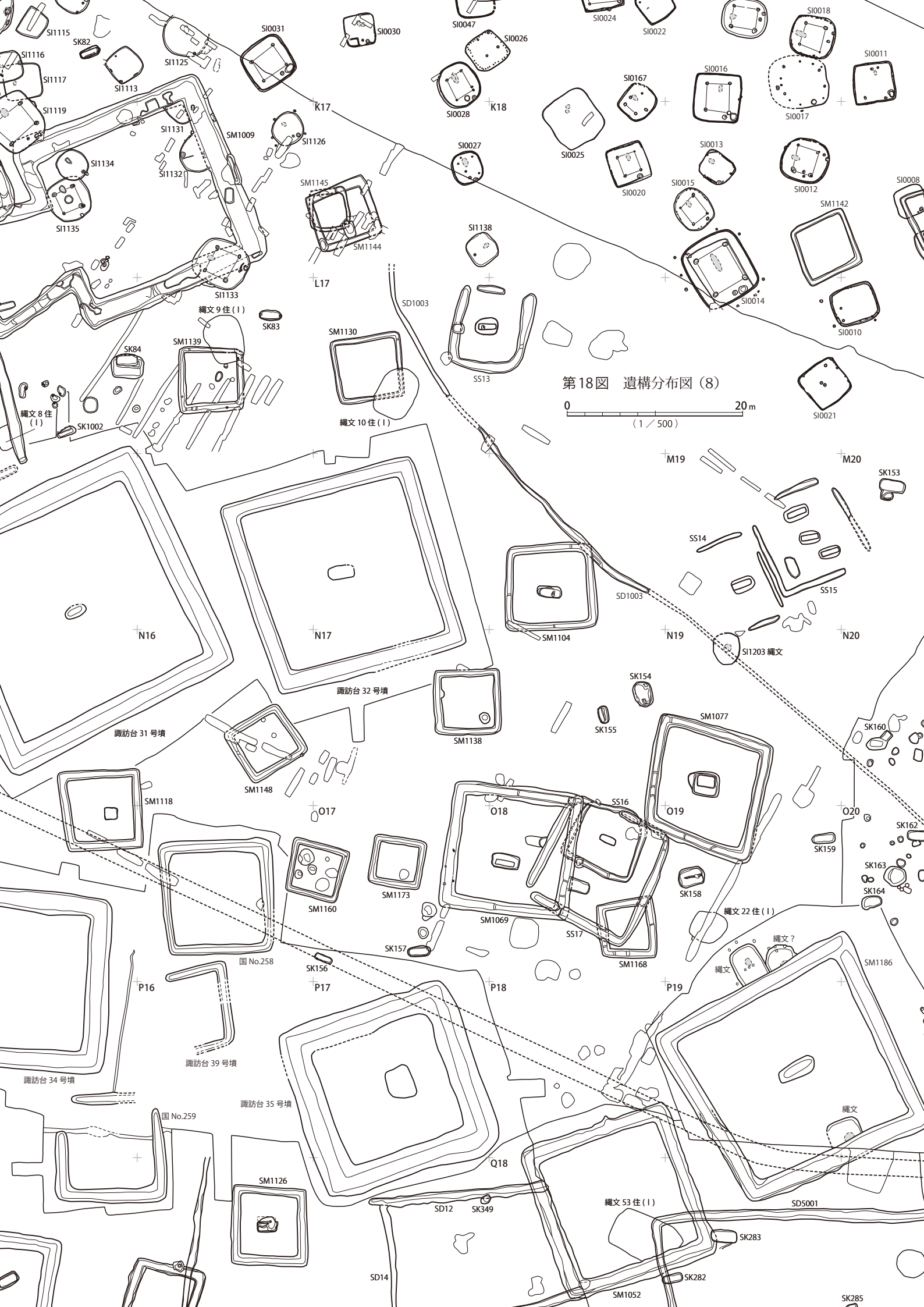
第15図　遺構分布図（5）

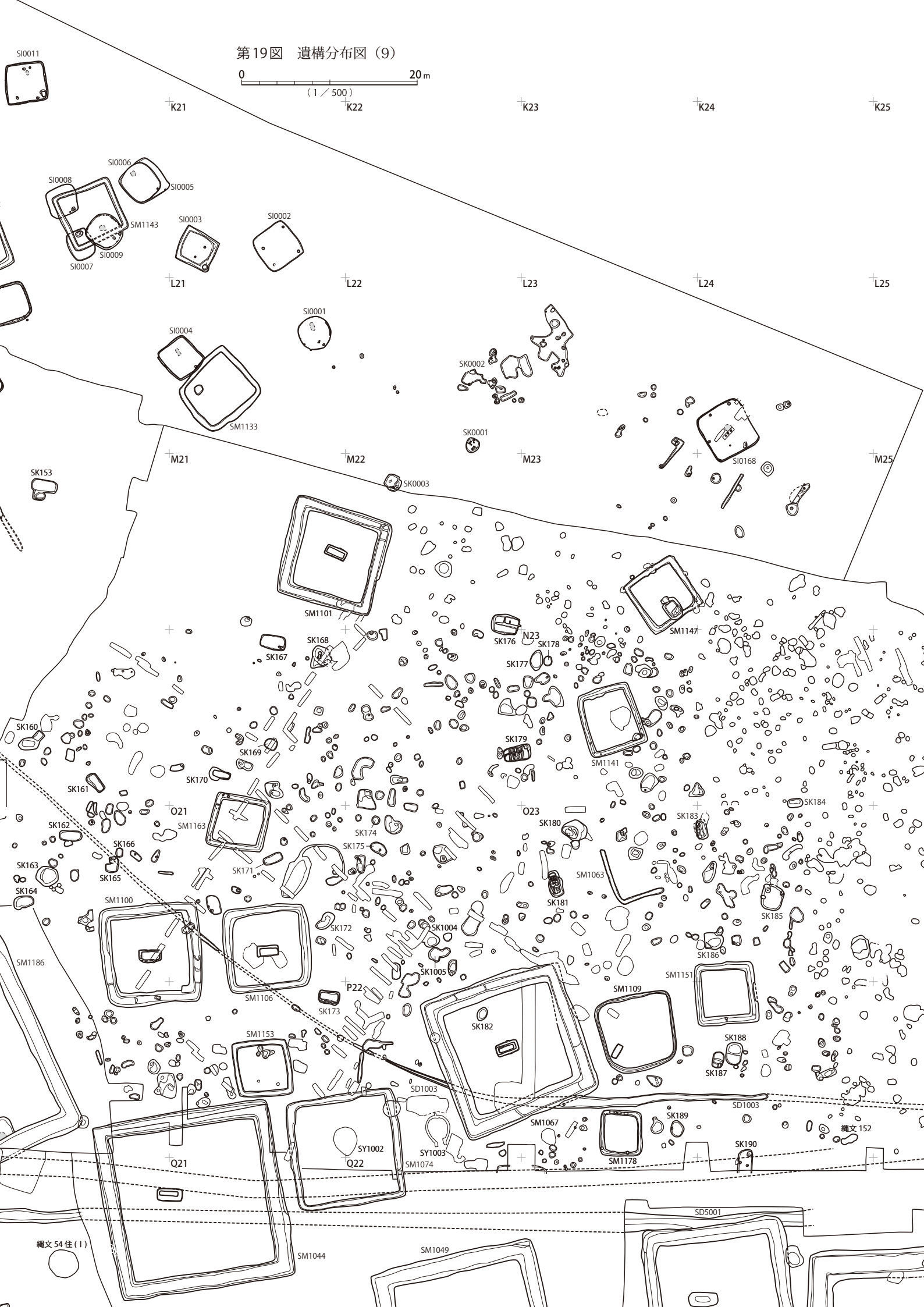
0　20m
（1／500）




第16図　遺構分布図（6）
0
20m
（1／500）
I06
I07
I08
J06
J07
J08
J09
K07
L07
L09
M08
N09
O07
SK61
SI0161
SS98
SS3
SI1053
SI1077
SM1123
SI1012B
SI1012A
SI1013
SI1002
SI1018
SK58・SK73
SK76
SS5
SI1019
SI1016
SK74
SI1020
SI1017
SI1032
SK69
SK65
SK66
SK67
SS4
SI1024
SS8
SS6
SI1029
SS10
SK68
SI1025
SI1128
SM1156
SI1201
SL1003
SI1140
SI1123
SM1150
SI1139
SM1072
SD1001
SL1004
弥生後期
SM1068
SI1026
SI1027
SM1158
SK130
SD1002
SK350
SS11
諏訪台 37 号墳
諏訪台 8 号墳
SK128
SI1202
SL1012
SL1011
SK263
SK264
SK323
SL1008
SL1009
SL1010
SM1002
SM1026
SK131
SK265
SK266
SL1007
SS96
SS18
SK132
SK136
SL1006
SK133
SK134
SK135
SK267
SK268
SK269
SM1111
SM1025
SS97
SK137
SK270
SS19
SL1005
SY1001
SD10
SK141
SK271
SK272
SK4101
SK138
SK4103
SS26
SK274
SK273
SK4102
SS20
SS23
SS21
SK139
SK275
SS22
SK276
SK6001
SM1023
SS25
SM1016
SK277
SS30
SS24
SM1040
SK143
SM1033
SM1010


第17図
遺構分布図（7）
I11
I15
J15
K13
L11
L12
L14
M12
M14
N12
O11
O15
縄文
縄文 6 住（I）
縄文 7 住（I）
縄文 8 住（I）
縄文 11 住（I）
縄文 12 住（I）
縄文 13 住（I）
縄文 14 住（I）
縄文 15 住（I）
縄文 16 住（I）
縄文 17 住（I）
縄文 18 住（I）
縄文 19 住（I）
縄文 20 住（I）


SI1115
SK82
SI1116
SI1117
SI1119
SI1113
SI1125
SI0031
SI0030
SI0047
SI0026
SI0028
SI0024
SI0022
SI0018
SI0011
SI0016
SI0167
SI0017
SI0025
SI0020
SI0013
SI0012
SI0015
SI0008
SM1142
SI0014
SI0010
SI0021
K17
K18
SM1009
SI1126
SI1131
SI1132
SI1134
SI1135
SI1133
SM1145
SM1144
SI1138
L17
SD1003
SS13
縄文 9 住 (I)
SK83
SM1130
SM1139
SK84
縄文 8 住 (I)
SK1002
縄文 10 住 (I)
第18図　遺構分布図（8）
0
20 m
(1 ／ 500)
M19
M20
SK153
SS14
SS15
SD1003
SM1104
N16
N17
N19
N20
SI1203 縄文
SK154
SK155
SM1077
諏訪台 32 号墳
諏訪台 31 号墳
SM1138
SM1148
SK160
SM1118
O17
O18
SS16
O19
O20
SK162
SK159
SK163
SM1160
SM1173
SK158
SK164
縄文 22 住 (I)
SM1069
SS17
縄文？
縄文
SM1186
SK157
SM1168
国 No.258
SK156
P16
P17
P18
P19
諏訪台 39 号墳
諏訪台 34 号墳
諏訪台 35 号墳
国 No.259
Q18
縄文
SM1126
SD12
SK349
縄文 53 住 (I)
SD5001
SK283
SD14
SK282
SM1052
SK285


第19図　遺構分布図（9）
0
20m
（1／500）
K21
K22
K23
K24
K25
L21
L22
L23
L24
L25
M21
M22
M23
M25
N23
O21
O23
P22
Q21
Q22
SI0011
SI0006
SI0005
SI0008
SI0003
SI0002
SM1143
SI0009
SI0007
SI0001
SI0004
SM1133
SK0002
SK0001
SI0168
SK0003
SK153
SM1101
SM1147
SK176
SK178
SK168
SK167
SK177
SK160
SK179
SK169
SM1141
SK170
SK161
SK184
SK183
SK162
SM1163
SK180
SK174
SK166
SK175
SK163
SK171
SM1063
SK165
SK164
SK181
SM1100
SK185
SK172
SK1004
SK186
SM1186
SK1005
SM1151
SM1109
SM1106
SK173
SK182
SK188
SM1153
SK187
SD1003
SD1003
SK189
SM1067
縄文 152
SY1002
SY1003
SM1178
SK190
SM1074
SD5001
縄文 54 住（1）
SM1044
SM1049

第20図　遺構分布図（10）

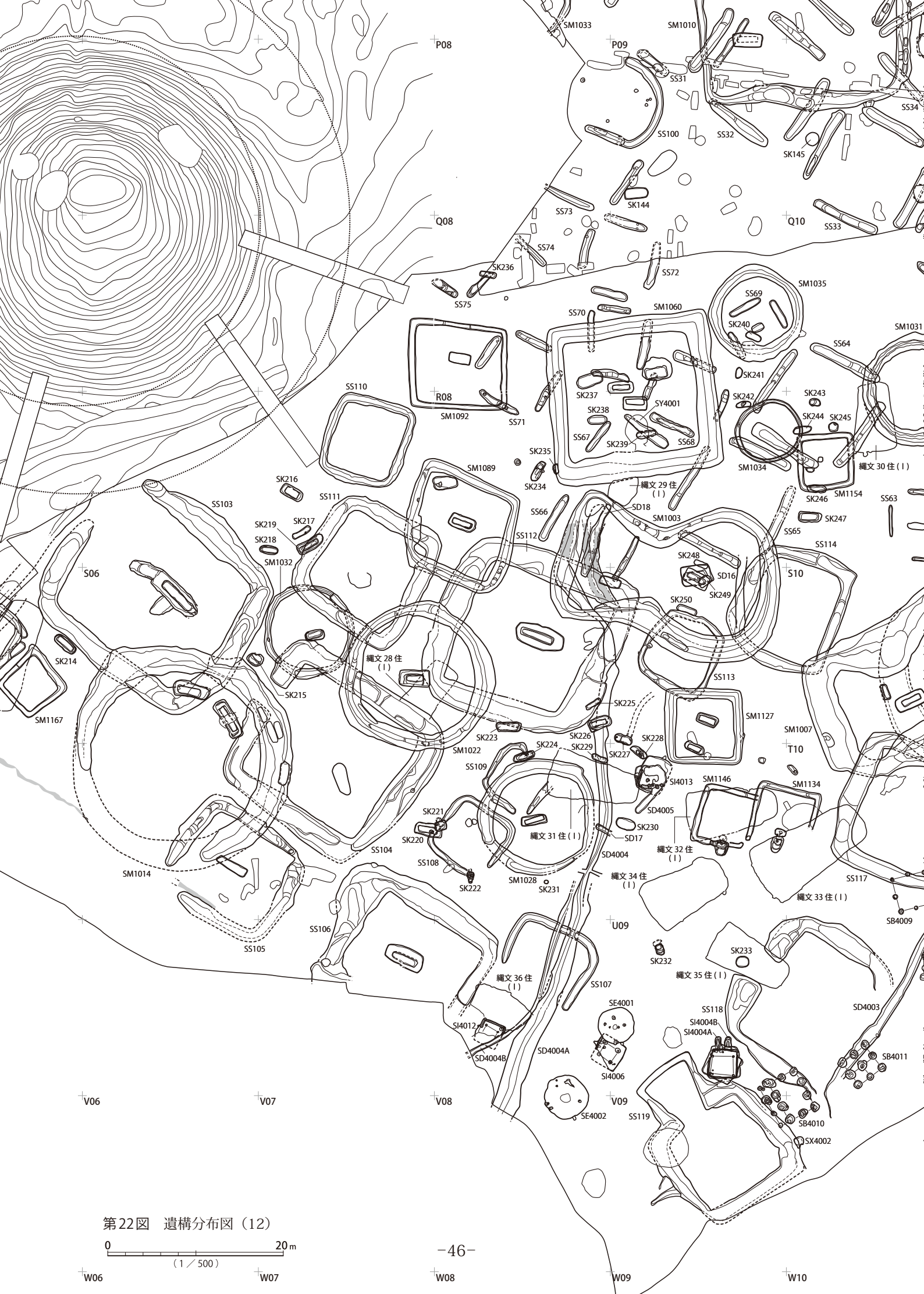
0　20m
（1／500）





第21図　遺構分布図（11）

0　20 m
（1／500）



第22図　遺構分布図（12）

0　20m
（1／500）



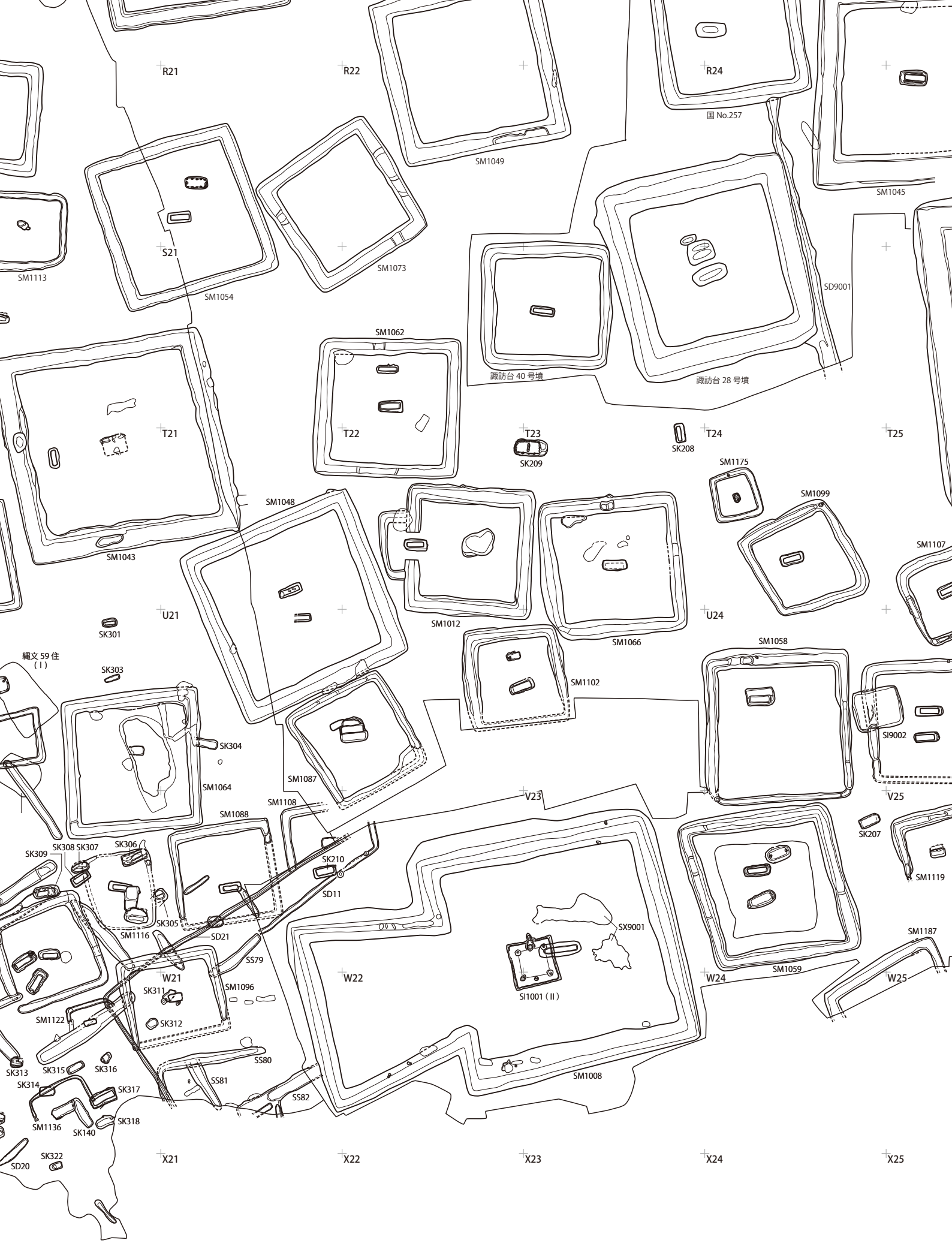
第23図　遺構分布図（13）

0　20m
（1／500）



第24図　遺構分布図（14）

0　20m
（1／500）



第25図　遺構分布図（15）

0　20 m
（1／500）



第26図　遺構分布図（16）

0　20m
（1／500）

第２章　遺構と遺物

検出遺構の概要　今回報告対象とする集落遺跡の遺構は、弥生時代から古代にかけての竪穴建物跡が主体である。弥生時代以降の竪穴建物跡は496棟あり、弥生時代中期後葉４棟、弥生時代後期223棟（うち不確定28棟）、弥生時代終末期209棟（同40棟）、古墳時代前期37棟（同13棟）、古墳時代中期１棟、古墳時代終末期１棟、奈良・平安時代17棟（同１棟）、時期不明４棟が検出されている。掘立柱建物跡は奈良・平安時代の14棟、井戸状遺構は奈良・平安時代の４基が検出されている。その他、溝状遺構26条と土坑多数が認められる。中世台地整形区画とそれに伴う遺構・遺物については、064地区の項で触れる。全体的な遺構群の変遷については第４章第１節で述べる。

調査主体と時期の違いにより地区ごとに調査方法が相違し、図・本文で提示する属性にも粗密が生じている。また、遺構の切り合い関係についても現場段階の評価が欠落、不確定、もしくは竪穴床面深度を優先して判断したと見られるケースが存在する。特にTJ地区においては、遺構覆土の土層断面図がほとんど作成されていないため、切り合い関係を検証するのが難しくなっている。以下では、他地区も含め、竪穴建物跡の切り合い関係に関しては、記録類と遺物相に齟齬がある場合、出土遺物の帰属型式を優先し、推定している。また、出土遺物の帰属についても、遺物注記のみではなく、切り合い関係の推定や写真等から総合的に判断している。

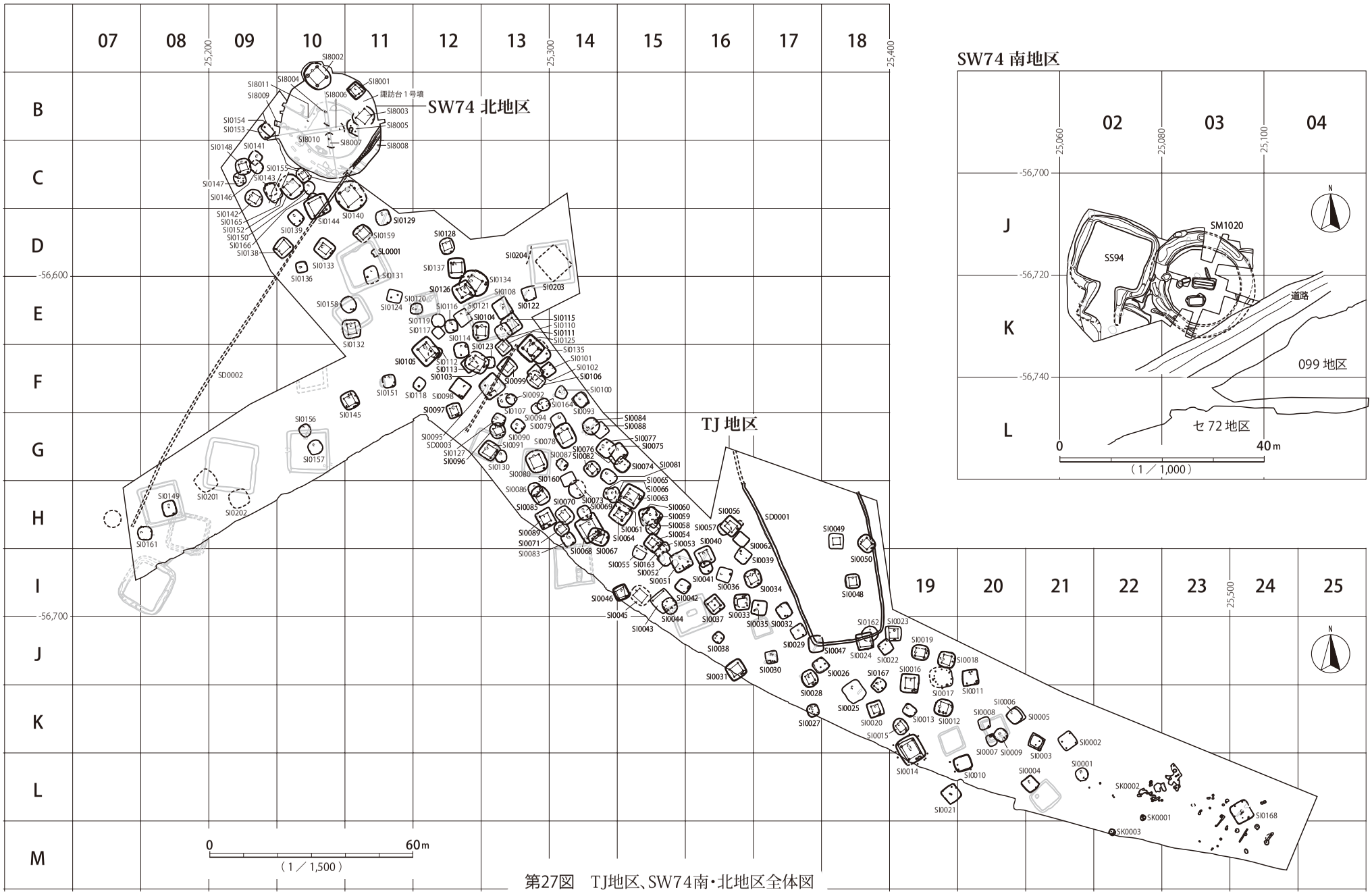
遺構の帰属時期については、国分寺台地区周辺を中心とした土器型式編年に準拠し、弥生時代中期後葉：宮ノ台式期（根田代１期）、同後期前半：久ヶ原式期、同後期後半：山田橋式期、同終末期前半：中台１式期、同終末期後半：中台２式期、古墳時代前期前半：草刈１～２式期、同前期後半：草刈３式期、同中期前半：南岩崎5a期（和泉式期）とする（大村2004・2005・2006・2009）。

遺構規模については、平板測量による誤差や計測位置の不安定性を踏まえ、平面はｍ単位で小数点第１位までとした。深度は、覆土の遺存良好な箇所と周辺地山の高低差を5cm単位で表現した。

第１節　TJ地区

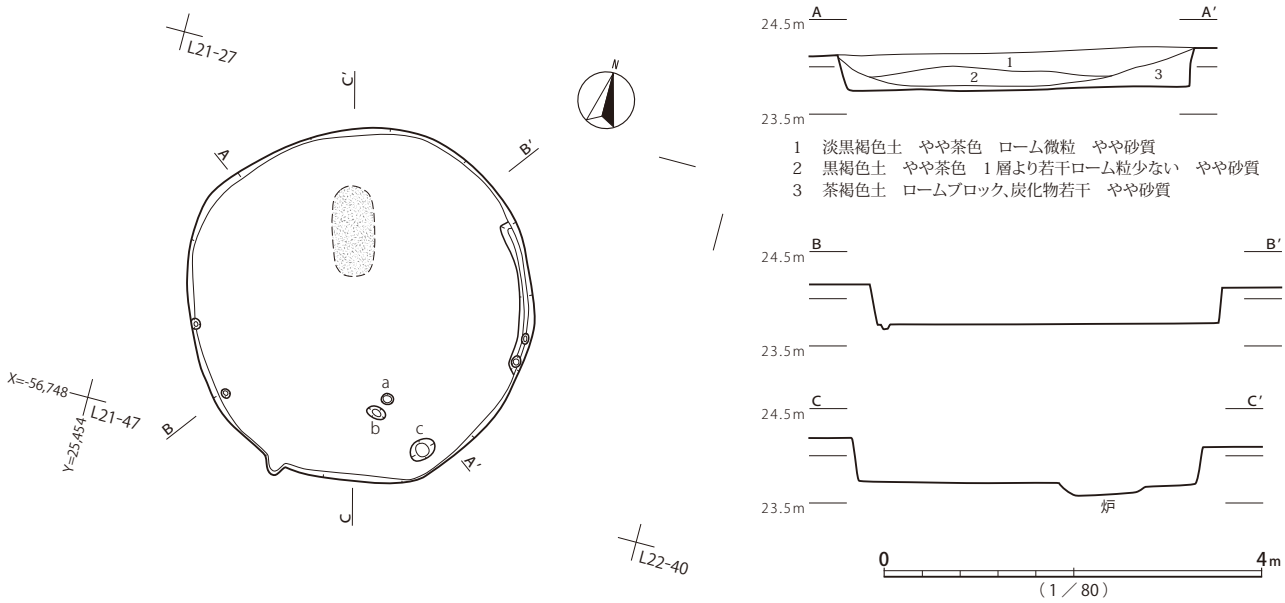
TJ地区概要（第27図、図版２）

事業の早い段階で広範囲を対象とした調査区である。主な遺構として、竪穴建物跡171棟、弥生時代終末期方形墓２基、古墳時代土坑墓２基、古墳時代終末期から古代の方形墳墓13基、古代以降の溝跡２条・道路跡１条が検出されている。竪穴建物跡のうち３棟については、各種記録が乏しいものの、ある時点で未調査遺構と認識されており、航空写真からも存在が推定できるものである。このうち２棟をSI0201・SI0202とする。調査区外南西部の竪穴建物跡推定部１単位については、全体図中に推定範囲を示すのみで遺構番号は付与していない。方形周溝状遺構については、SM1079北方に３辺の捉えられている１基が調査記録を確認できないもので、遺構番号は付与していない。他に、南に隣接する099地区において検出された墳墓、SS4・SS98・SM1050の延長部が本地区で確認されている。このうちSM1050の北西部については記録が認められず、TJ地区調査時には表土掘削深度などの影響で確認できなかったと推定される。SS4・SS98については、諏訪台古墳群報告書で推定形を示しているが、今回報告における両地区の位置関係の修正に伴い、本報告の形状に改める。概報（平野他1975）には、確認された２基の周溝を、次期調査で対象とする予定とされているが、記録



第27図　TJ地区、SW74南・北地区全体図

SI0001



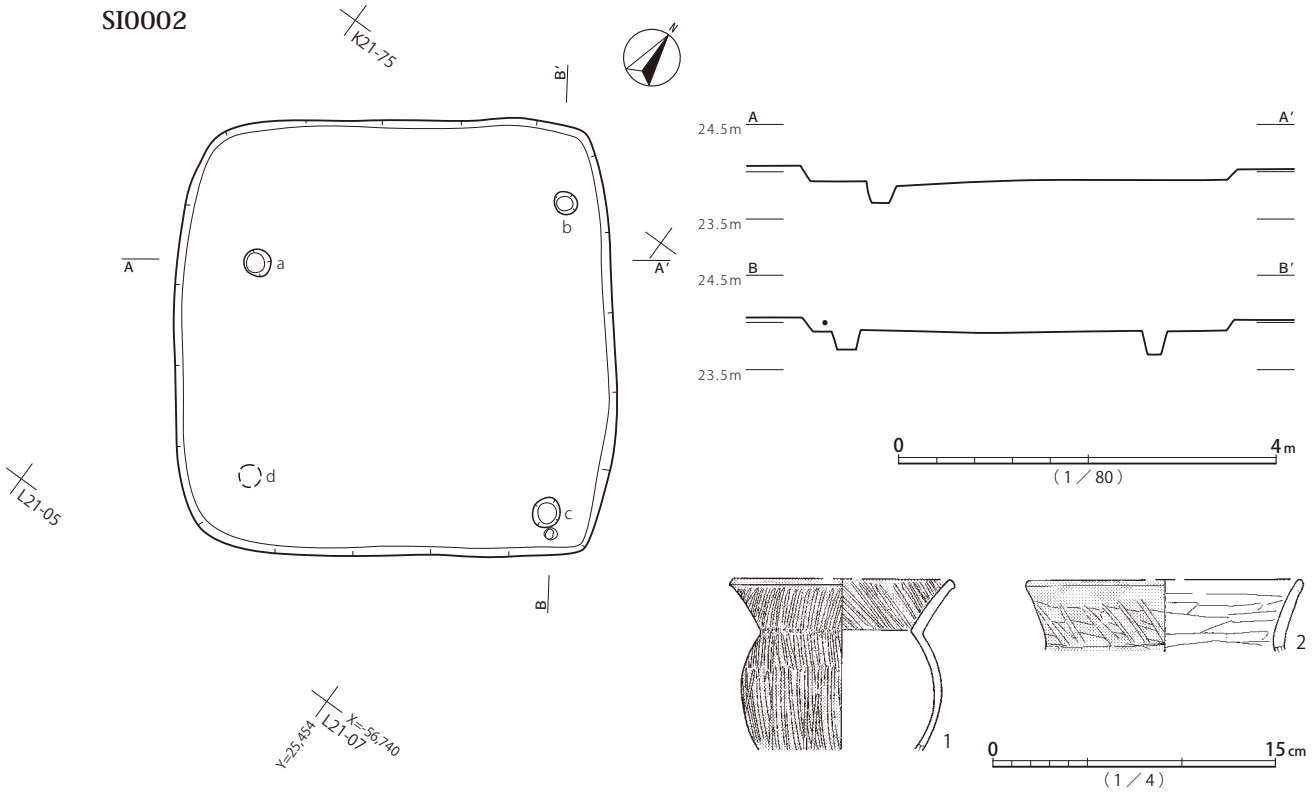
第28図　SI0001遺構

は確認できない。

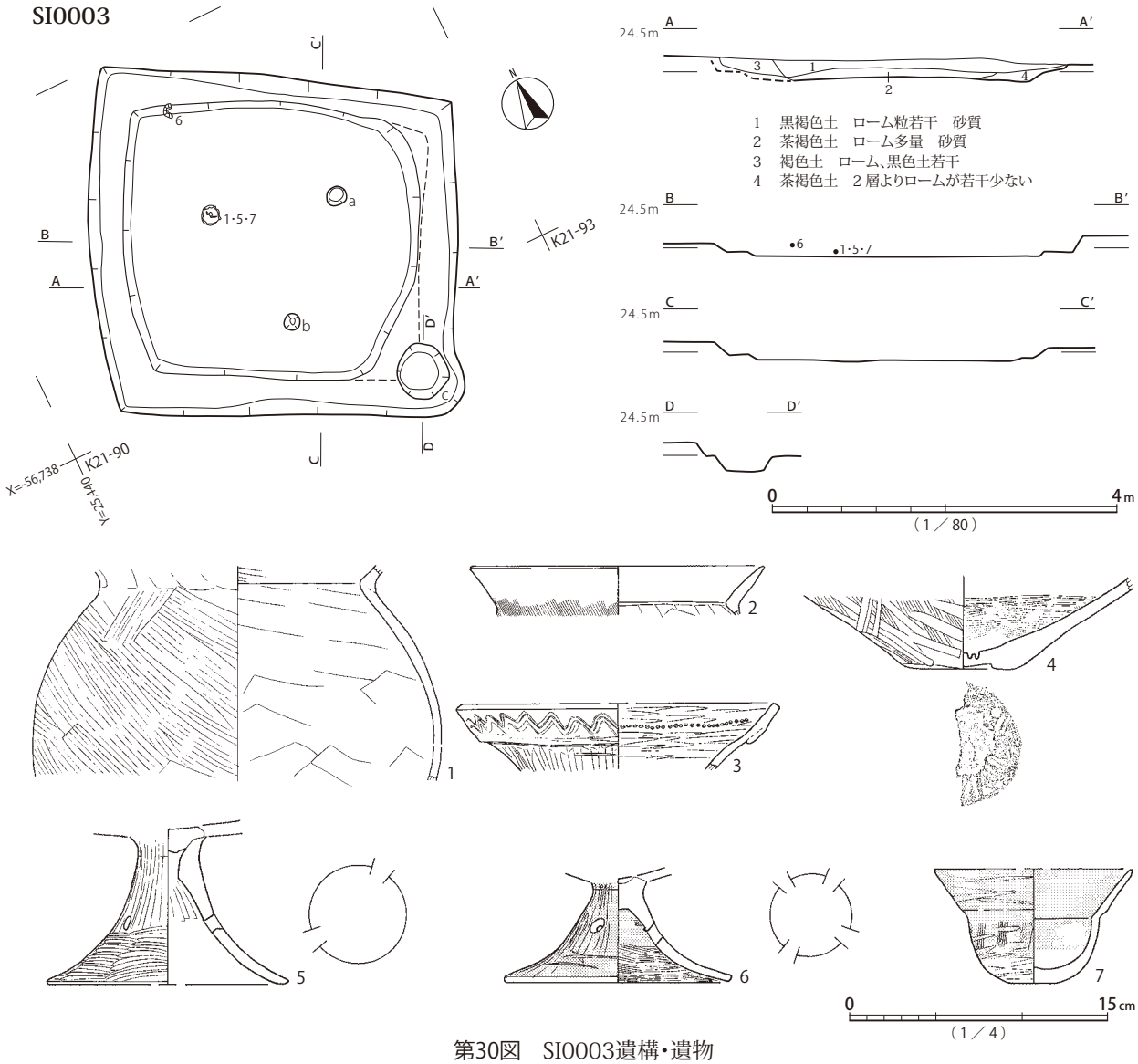
SI0001（第 28 図、図版 17）

3.7 × 3.6m、深さ 50cm程度の円形竪穴建物跡で、長軸一端寄りに小判形の炉が設けられる。主柱穴は確認されず、ハシゴ穴と見られるa･b、貯蔵穴と見られるcが検出されている。床面周溝は東側で部分的に認められる。

SI0002



第29図　SI0002遺構･遺物



第30図　SI0003遺構・遺物

覆土は、ロームブロックを含む竪穴外周の初期堆積の後に、漸移的な自然堆積が進んだと見られる。目立った出土遺物はないが、竪穴平面形と炉の位置から弥生時代後期の所産と考えられる。

SI0002（第 29 図、図版 17・188）

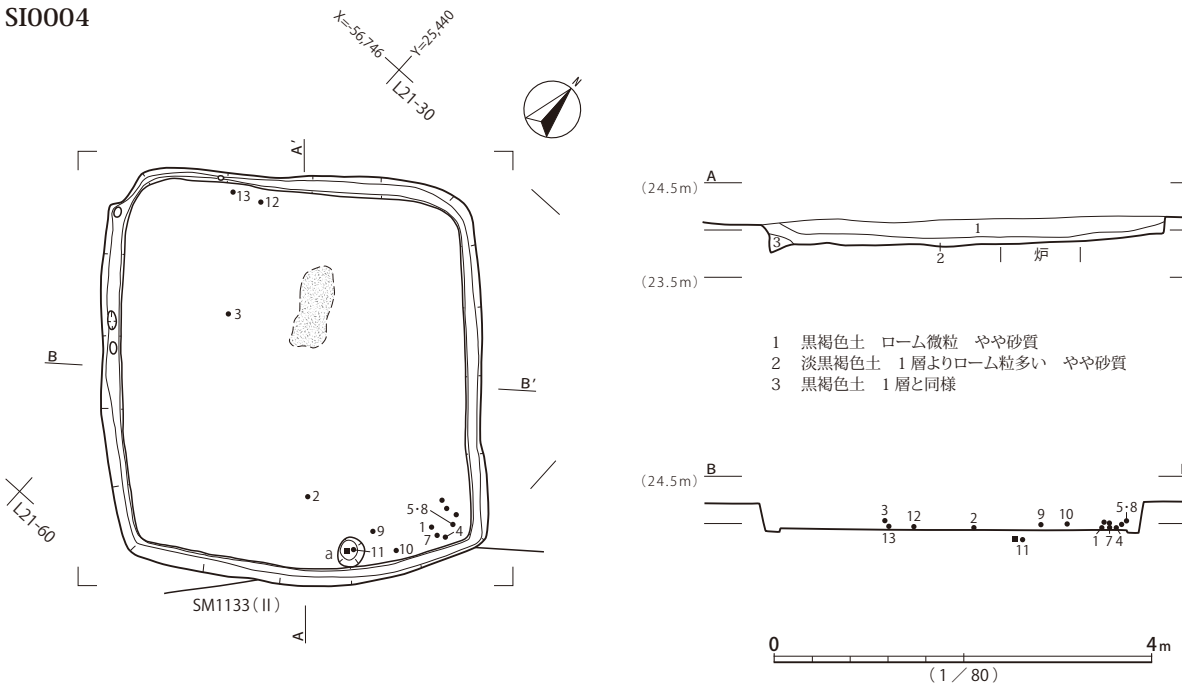
4.6 × 4.6m、深さ 20cm以下の方形竪穴建物跡である。柱穴と見られる３箇所の円形の穴が検出されているものの、規則的な柱穴配置状況は認められない。cは貯蔵穴の可能性も考えられる。

出土土器と竪穴平面形から、古墳時代前期、草刈１～２式期の所産と考えられる。

SI0003（第 30 図、図版 17・132・188・328）

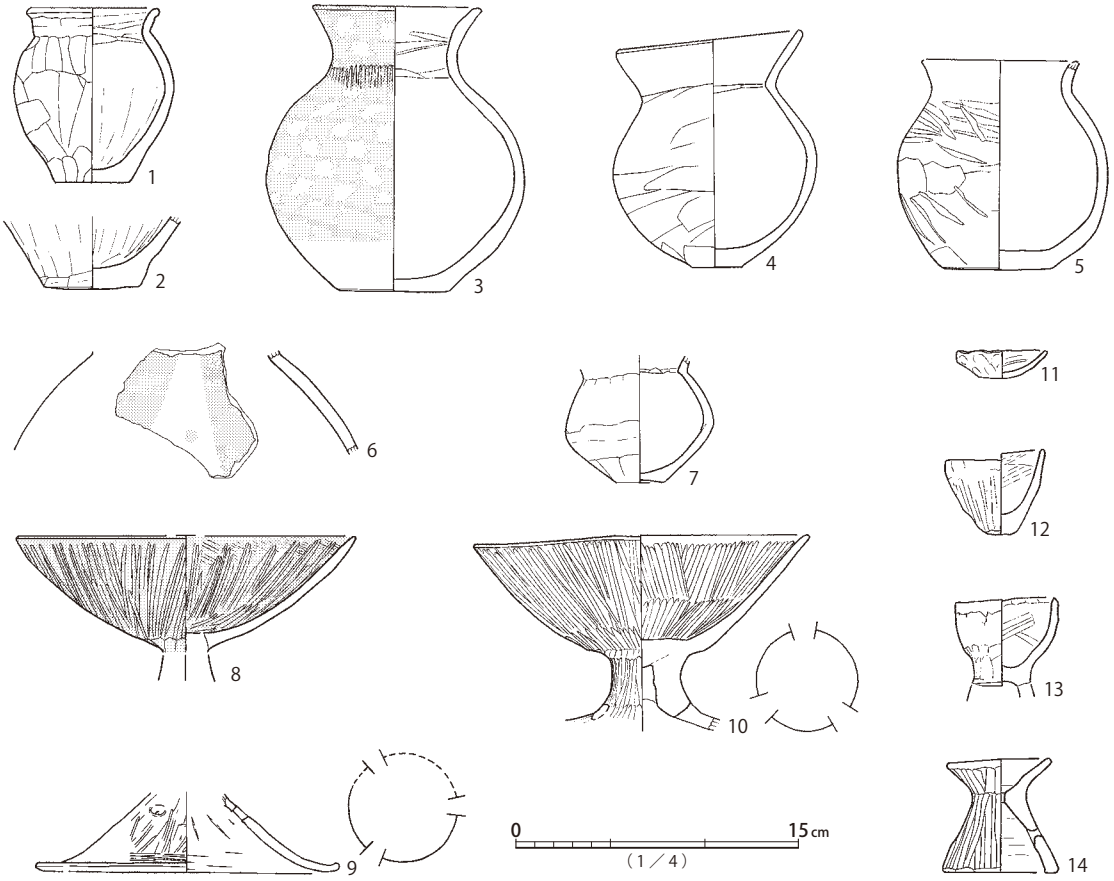
4.3 × 4.0m、深さ 25cm程度の方形竪穴建物跡である。竪穴南隅に貯蔵穴cが設けられるが、a・b以外の明確な主柱穴は認められない。床面外周には幅50cm以下のテラス状の高まりが伴うように記録されているが、中央の貼床土層を掘り下げた状態を示す可能性もあり、機能時の構造とは断定しがたい。

SI0004



第31図 SI0004遺構

SI0004



第32図　SI0004遺物

遺物は、床面付近から古式土師器が出土している。それらの特徴から、本遺構は古墳時代前期前半、草刈2式の所産と考えられる。

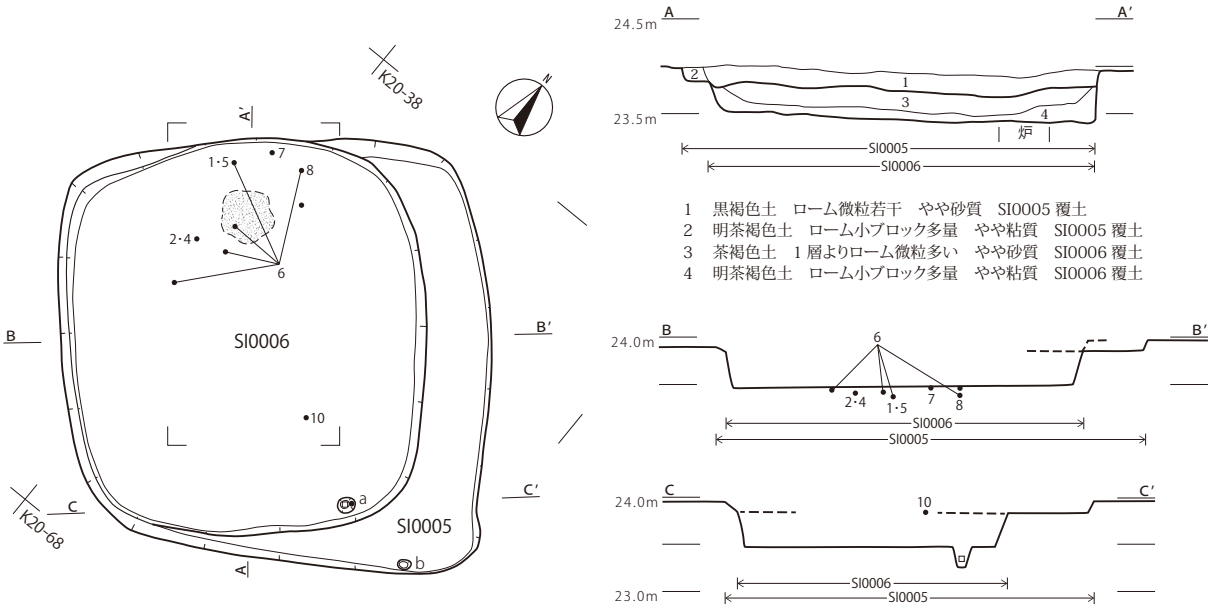
SI0004（第 31・32 図、図版 17・18・132・188）

4.3 × 4.0m、深さ 30cm 程度の隅円方形竪穴建物跡で、南東辺がやや膨らむ。床面周溝が全周し、中央やや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。南東辺壁際やや東寄りに貯蔵穴 a がある他は、主柱穴は認められない。

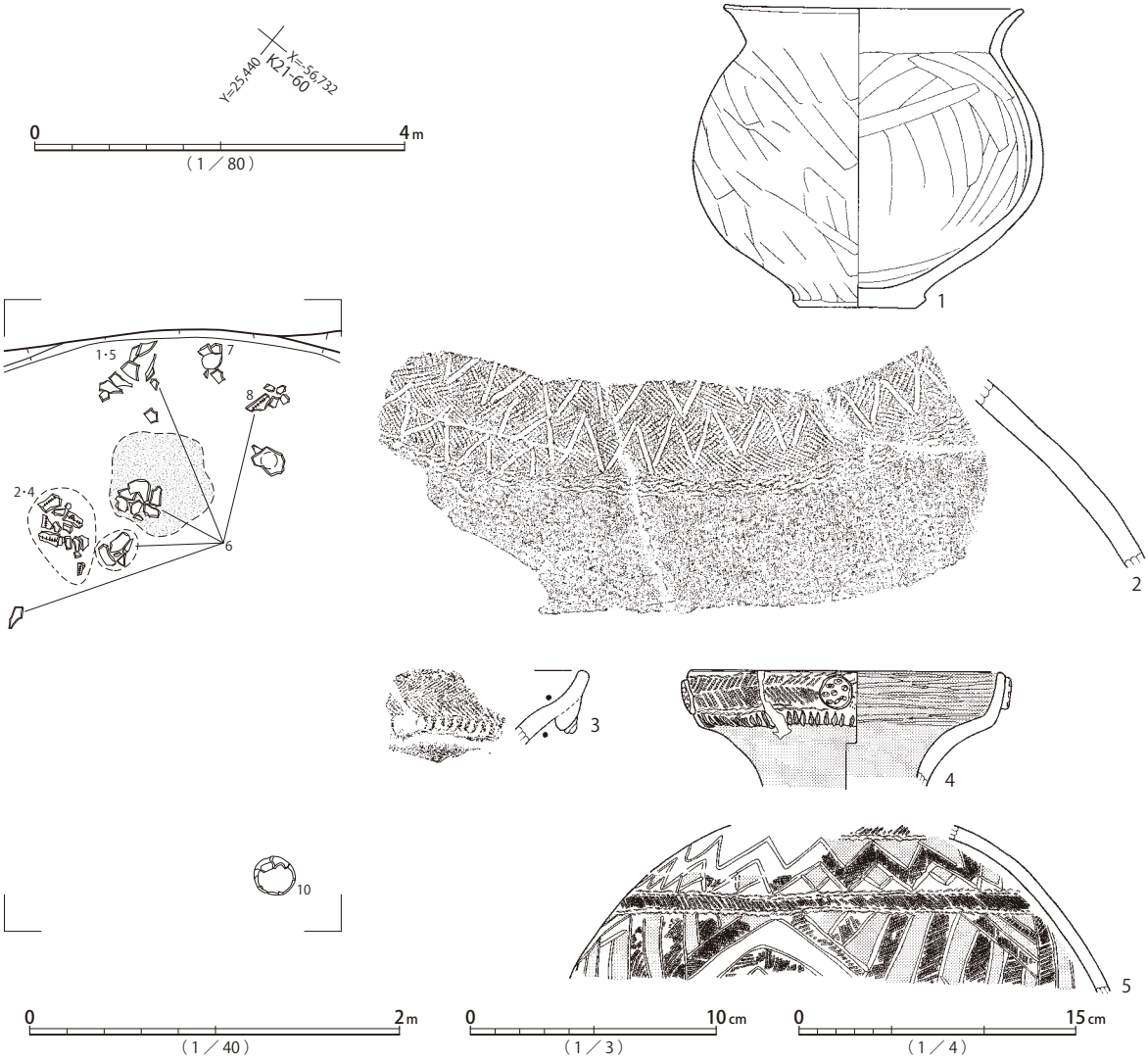
北西側を中心として床面直上に焼土が広がり、西隅と北隅で 10cm 程度、堆積する。焼土層からは古式土師器壺 3 が検出され、南東部の貯蔵穴と東隅間の床面レベル近くにおいても、集中的に土器が出土している。焼土層と小型土器 11 ～ 14 の存在からすると、建物・建材の焼却処分に伴う儀礼行為が行われた可能性がある。なお、ミニチュア器台 14 については、遺物が所在不明である。

遺物は古式土師器で、頸部屈曲のなだらかな壺 3、杯部底面が丸底を呈する在地系由来の高杯 8 の形状から、中台 1－2 式から 2－1 式と捉えられる。遺構の帰属時期は弥生時代終末期と考えられる。

SI0005・0006

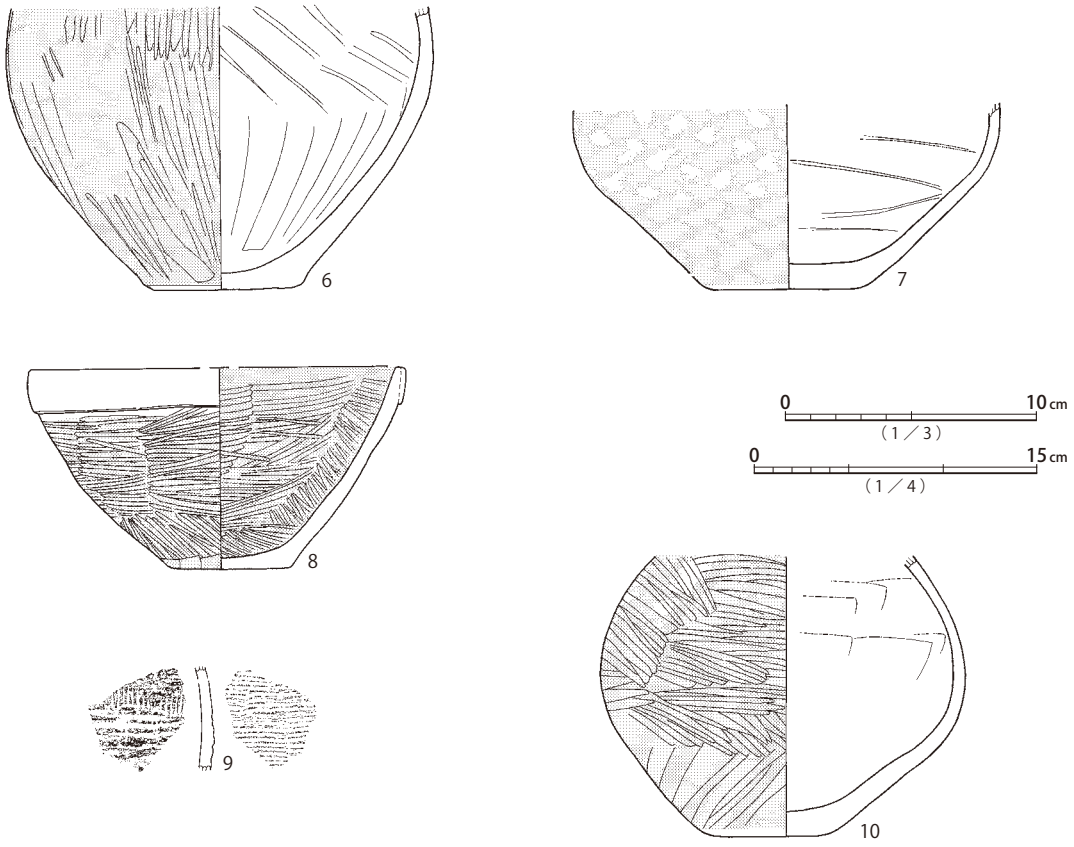


SI0006



第33図　SI0005・SI0006遺構、SI0006遺物（1）

SI0006



第34図　SI0005遺物、SI0006遺物（2）

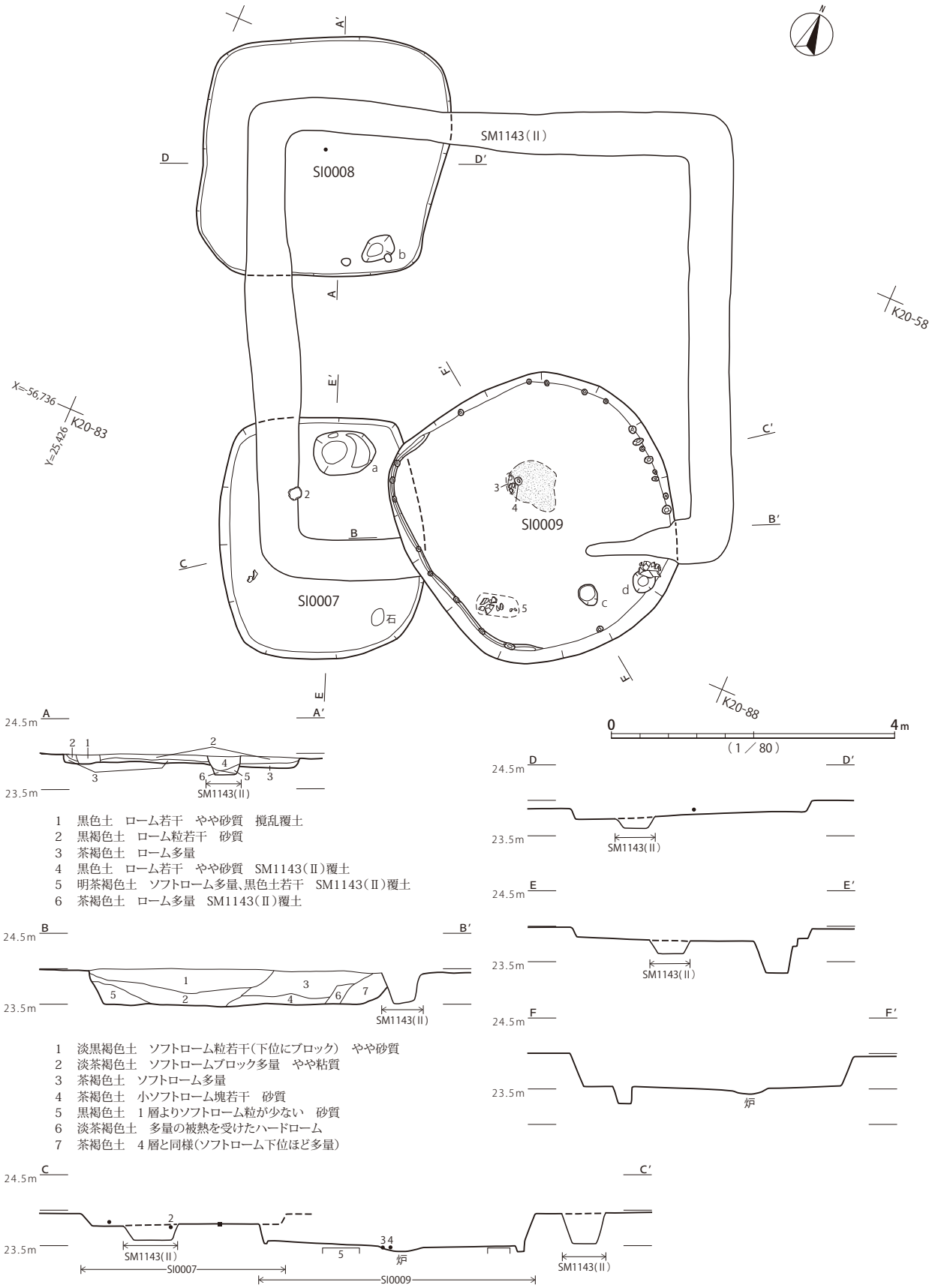
SI0005・SI0006（第 33・34 図、図版 18・132・133・188）

4.3 × 3.8mの隅円方形竪穴建物跡SI0006と、そのプランを共有し上位に床面を形成する一辺4.5mの方形竪穴建物跡SI0005である。SI0006の深さが50cm程度で、上部20cm程度がSI0005覆土に当たる。下層のSI0006は北西辺に寄った位置に炉が設けられ、反対辺東寄りに貯蔵穴の可能性のあるaのみが検出されている。SI0005も同じく東隅近くにbが検出されているが、主柱穴その他の施設は記録がないため不明である。

SI0006の炉周辺床面レベル近くからは、在地的様相を示す土師器的な土器群が出土している。一見、草刈式以降にも見える、くの字状口縁甕1は、頸部屈曲の緩い過渡的な形状と評価でき、装飾壺5と無文化した折り返し状口縁を持つ鉢8との共伴関係に齟齬はなく、中台式期と位置付けられる。SI0005は壺10が床面レベルで出土している。形態的特徴は乏しいが、ヘラミガキの施し方や器体のつくりから弥生時代終末期の所産と見られる。SI0006・SI0005ともに中台式期に属すると考えられる。

SI0007・SI0008・SI0009（第 35・36 図、図版 18・19・133・188・299）

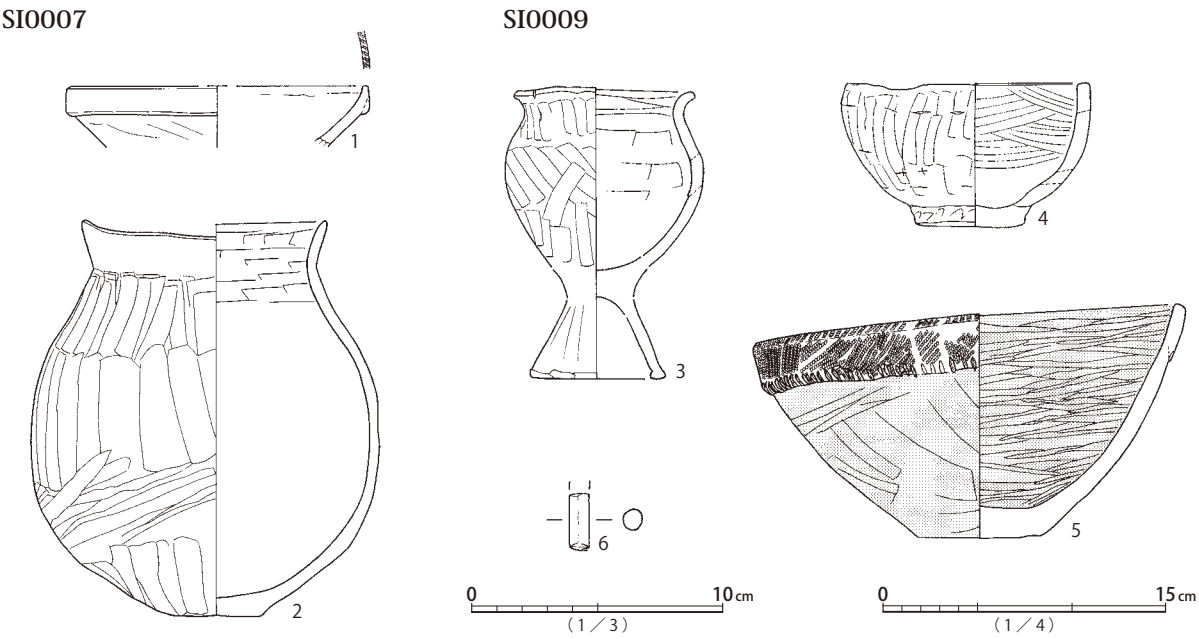
3.9 × 3.8mの隅円方形気味の円形竪穴建物跡SI0009と、その西側で切り合う3.4 × 2.9mの隅円方形竪穴建物跡SI0007、北に近接する3.5 × 3.4mの隅円方形竪穴建物跡SI0008である。古墳時代終



1　黒色土　ローム若干　やや砂質　撹乱覆土
2　黒褐色土　ローム粒若干　砂質
3　茶褐色土　ローム多量
4　黒色土　ローム若干　やや砂質　SM1143(Ⅱ)覆土
5　明茶褐色土　ソフトローム多量、黒色土若干　SM1143(Ⅱ)覆土
6　茶褐色土　ローム多量　SM1143(Ⅱ)覆土

1　淡黒褐色土　ソフトローム粒若干(下位にブロック)　やや砂質
2　淡茶褐色土　ソフトロームブロック多量　やや粘質
3　茶褐色土　ソフトローム多量
4　茶褐色土　小ソフトローム塊若干　砂質
5　黒褐色土　1層よりソフトローム粒が少ない　砂質
6　淡茶褐色土　多量の被熱を受けたハードローム
7　茶褐色土　4層と同様(ソフトローム下位ほど多量)

第35図　SI0007・SI0008・SI0009遺構



第36図　SI0007・SI0009遺物

末期～古代の方形墳墓SM1143周溝が３棟を切る。

SI0009は長軸やや北西寄りに炉を設け、反対側壁面寄りにハシゴ穴c、その東側壁面直下に貯蔵穴dが伴う。床面周溝は西側にのみ検出され、東側外周には小ピット列が見られる。竪穴は深さ50cm程度遺存し、覆土下位には被熱したロームブロックが認められ、建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。炉内と南側床面から完形に近い土器群（３～５）が出土しており、処分に伴う儀礼が行われたと見られる。

SI0007は竪穴が深さ20cm程度遺存する。床面にはa以外の主柱穴等の施設は検出されていない。SM1143南西部に大きく削られた影響も否定できないが、もともと備わっていなかったと見られる。SM1143との切り合い部、竪穴床面レベルから半完形の甕２が出土している。

SI0008も貯蔵穴と見られるbのみが検出されている。竪穴は15cm程度の深さが遺存する。時期的特徴を示す出土遺物は得られていない。

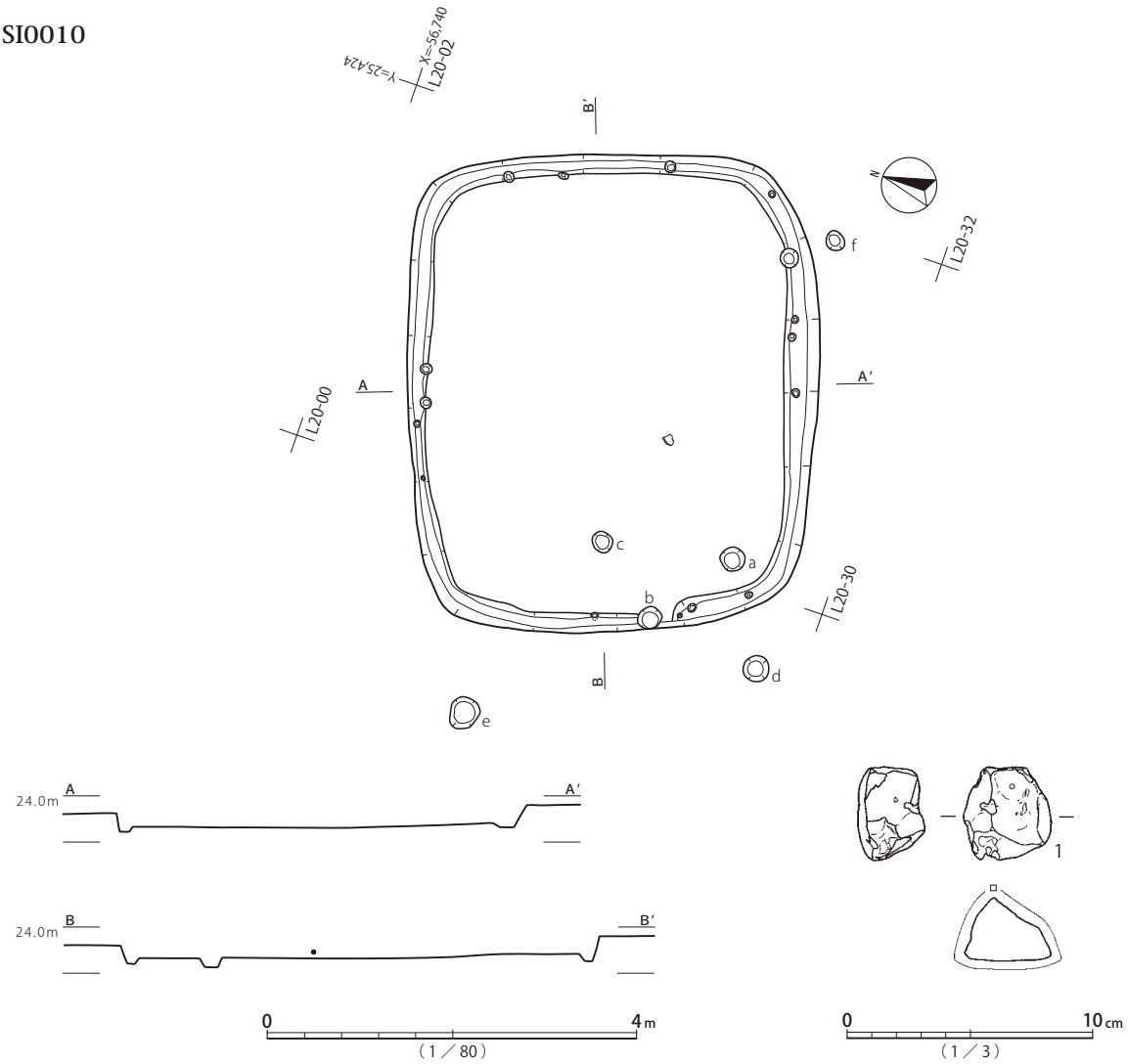
SI0009→SI0007の変遷は、切り合い関係から確定的であり、前者が弥生時代後期後半、山田橋式期から中台１式期、後者が中台式期に属すると考えられる。SI0008については、平面形から中台式期の所産と思われる。

SI0010（第37図、図版19・302）

5.2×4.4m、深さ15cmの隅円方形竪穴建物跡である。床面周溝はほぼ全周し、小ピットが部分的に伴う。aが貯蔵穴、b・cがハシゴ穴の可能性がある。

出土遺物は軽石製砥石１のみである。積極的根拠は乏しいが、竪穴平面形と軽石の存在から弥生時代終末期の所産と推定する。

SI0010



第37図　SI0010遺構・遺物

SI0011（第 38 図、図版 19・133・188）

一辺4.6m、深さ25cm程度の方形竪穴建物跡である。北・東辺が約4m、南・西辺が約4.5mと不均等なためやや歪な形状を呈する。床面中央やや北寄りに楕円形の炉が設けられ、南東隅に方形貯蔵穴eが検出されている。明確な主柱穴は見られず、規模的にはa・c・dが目立つ程度である。床面周溝は全周し、底面には小穴がやや疎らに伴い、一部は壁面にオーバーハング気味に掘り込まれる。

覆土は床面近く、北寄りに焼土が目立つ。北東隅と貯蔵穴e寄りの東辺近くからは、床面直上から覆土下層にかけて土器片が集中して出土している。

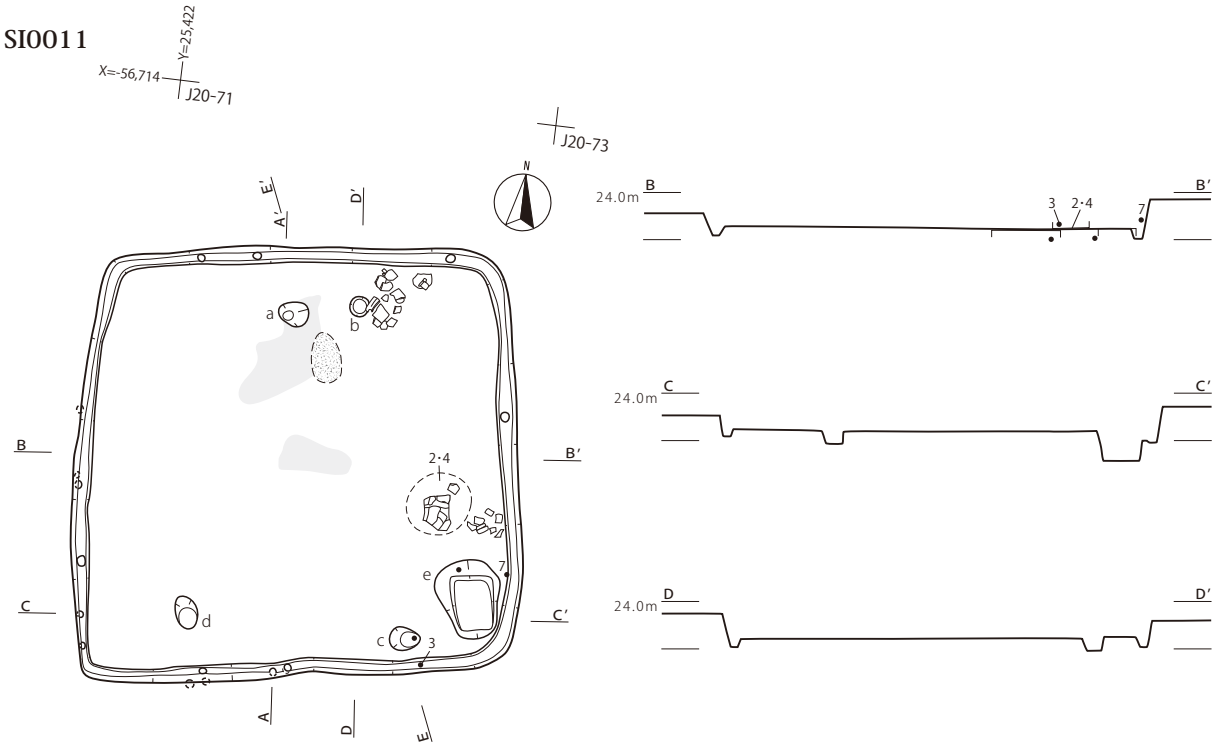
ハケメ整形のくの字状口縁甕1・2、直口壺4 ～ 6は草刈2式の特徴を示す。椀7については、一見、古墳時代後期、鬼高式の杯に類似するが、同時期の遺物と見られる。

本遺構は、出土土器の示す古墳時代前期前半の所産と考えられる。

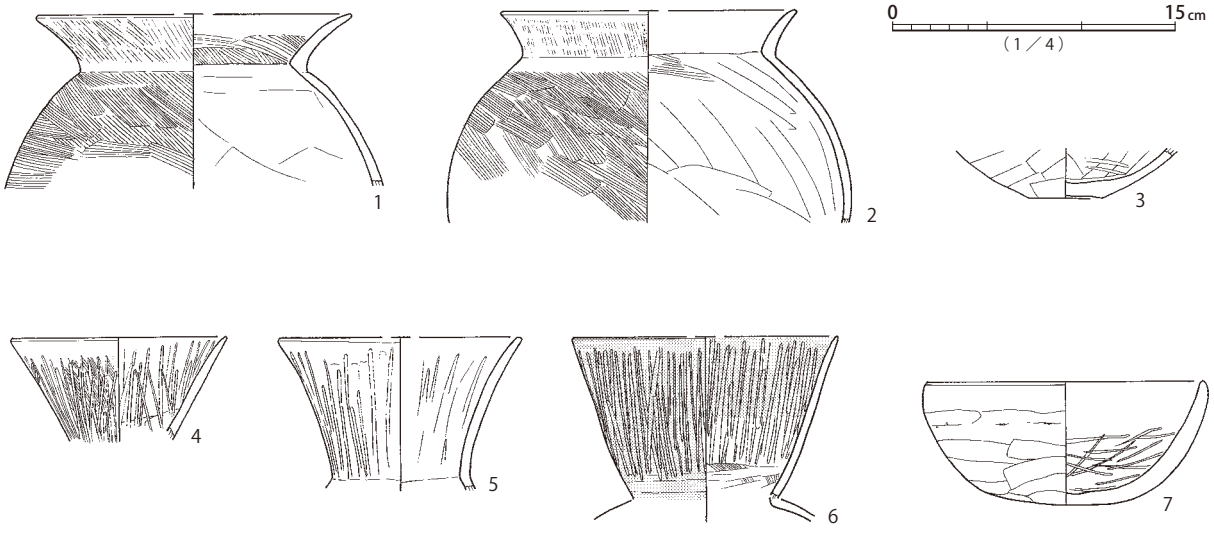
SI0012（第 39 図、図版 20・133・188）

5.4 × 5.0m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。床面には、長軸に対して直交する長方形配置の主柱穴a ～ dと、貯蔵穴と見られるeが検出されている。長軸中心線上、主柱穴間に楕円

SI0011

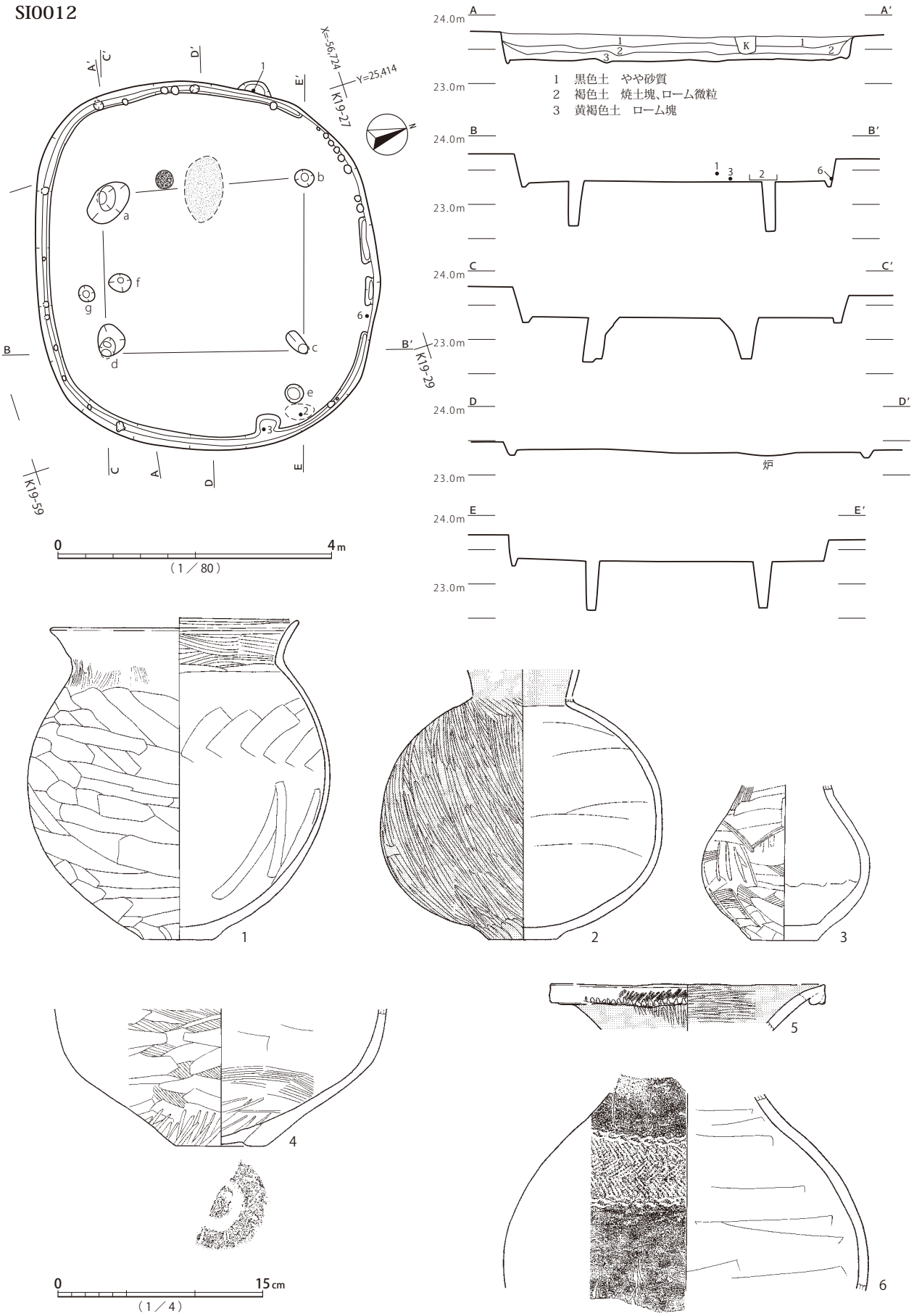


1　茶褐色土　ソフトローム　やや砂質
2　黒褐色土　ソフトローム粒若干　やや砂質
3　赤褐色焼土　黒色土、小ブロック
4　淡茶褐色土　ソフトローム若干、焼土
5　焼土



第38図　SI0011遺構・遺物

SI0012



第39図 SI0012遺構・遺物

形の炉が設けられている。床面周溝は北西側で途切れるがほぼ全周し、底面に小穴が部分的に伴う。南側柱列延長線上の東壁面際に部分的な床面の高まりが認められる。

覆土は、下層にロームブロックの多い黄褐色土が堆積しており、埋め戻しの行われた可能性がある。炉の西側には炭化物の集中部が見られる。

遺物は、古式土師器が床面レベル近くほかで出土している。くの字状口縁甕1は、西壁から外へ張り出す黒色土中から検出されたもので、草刈式以降の型式に類似し、本遺構覆土埋積後の遺物が混入した可能性がある。結節文区画壺6は床面出土との注記を持ち、また、北壁際から縄文施文壺が出土したとの記載が残る。底部輪台技法の底部片4を含め、概ね中台式に位置づけられる。

本遺構は、竪穴平面形と出土遺物から、弥生時代終末期に属すると考えられる。

SI0013（第 40 図、図版 20・133・188・302）

3.7×3.2m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。長軸中央付近、北西壁面寄りに卵形の炉が設けられる。床面周溝は断続的に認められ、部分的に小穴が伴う。aはハシゴ穴の可能性がある。床面は外周部を除き、堅く踏み固められている。

覆土は、壁面付近にローム主体の初期堆積が見られるが、以上は漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、炉の脇から鉢4、高杯5、1.5mほど離れて甕1、広口壺2が、それぞれ床面レベルで出土している。その他、覆土一括取り上げ資料の軽石製砥石6が出土している。

本遺構は、弥生時代後期後半から終末期の所産と思われる。

SI0014（第 41・42 図、図版 20・21・133・134・187・189）

7.9×7.0m、深さ50cm程度の隅円方形竪穴建物である。南側を除く床面外周に60cmから1mの幅、10cm程度の高さで、いわゆるベッド状遺構が設けられる。中央部には、主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。gは貼床下から検出された穴である。炉は長楕円形で柱穴a・b間内側から竪穴中心にかけて設けられている。床面周溝は全周し、北側の一部に小穴が認められる。竪穴外に、囲むようにh～pの小穴が検出されており、建物に関係する可能性も考えられる。

覆土は、部分的に焼土が検出され、床面レベルで遺物の出土が見られることから、焼却処分が行われた可能性が考えられる。

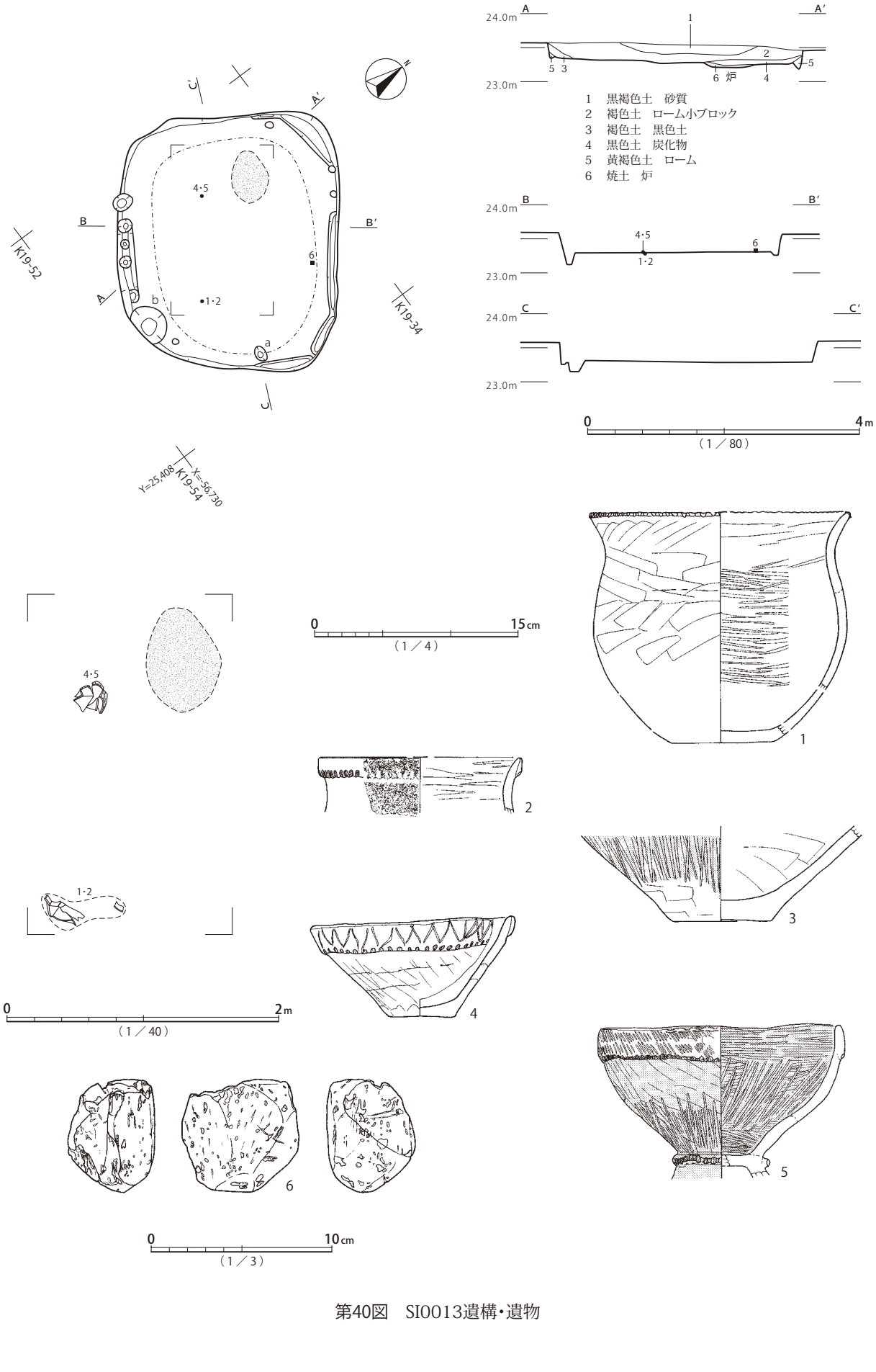
遺物は、貯蔵穴内出土の甕1、ほぼ床面レベルで出土したハケメ整形の台付甕2、転用甑5など、弥生時代終末期、中台式期に属する土器が主体である。他に、ガラス玉7が床面レベルで出土している（位置は推定範囲）。

本遺構は、平面形と出土土器の様相から、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物の中では大型の部類に属し、また、ベッド状遺構を備えることから、集落成員の一般的住居とは異なる性格を持っていた可能性がある。

SI0015（第 43・44 図、図版 21・22・134・189）

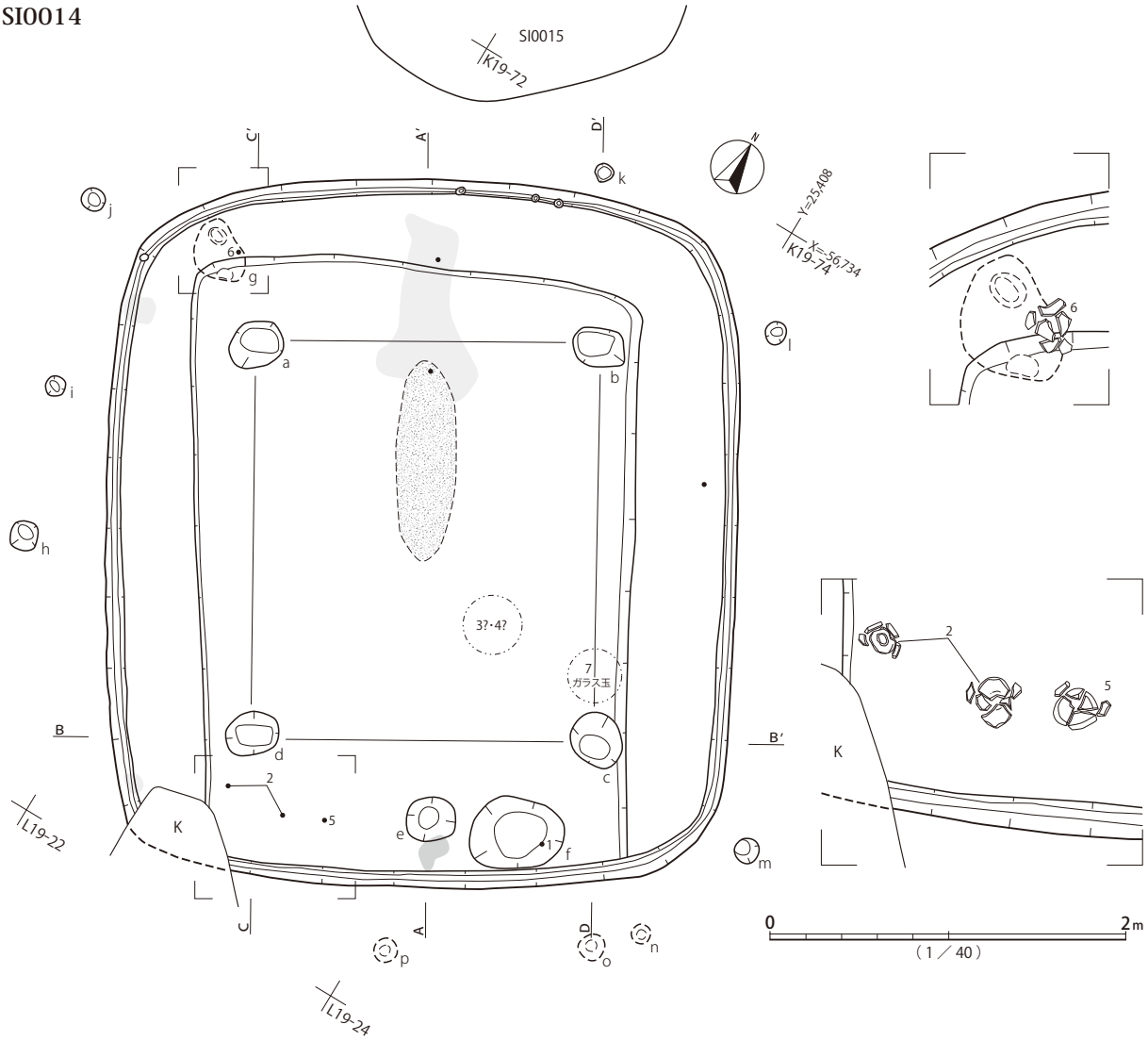
4.7×4.0m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～dと貯蔵穴eが検出されている。柱穴c・dは内向きに傾斜する掘り方が確認されている。a・b間のやや竪穴中心寄りに楕円形の炉が

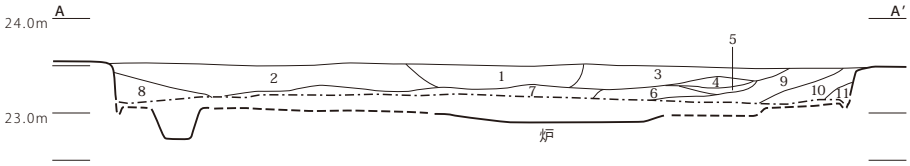
SI0013



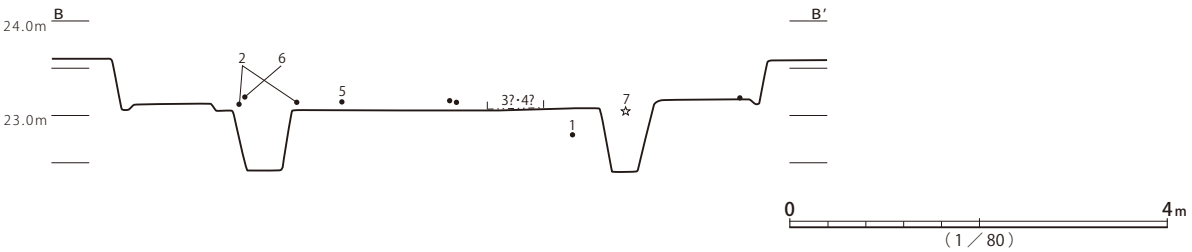
第40図　SI0013遺構・遺物

SI0014



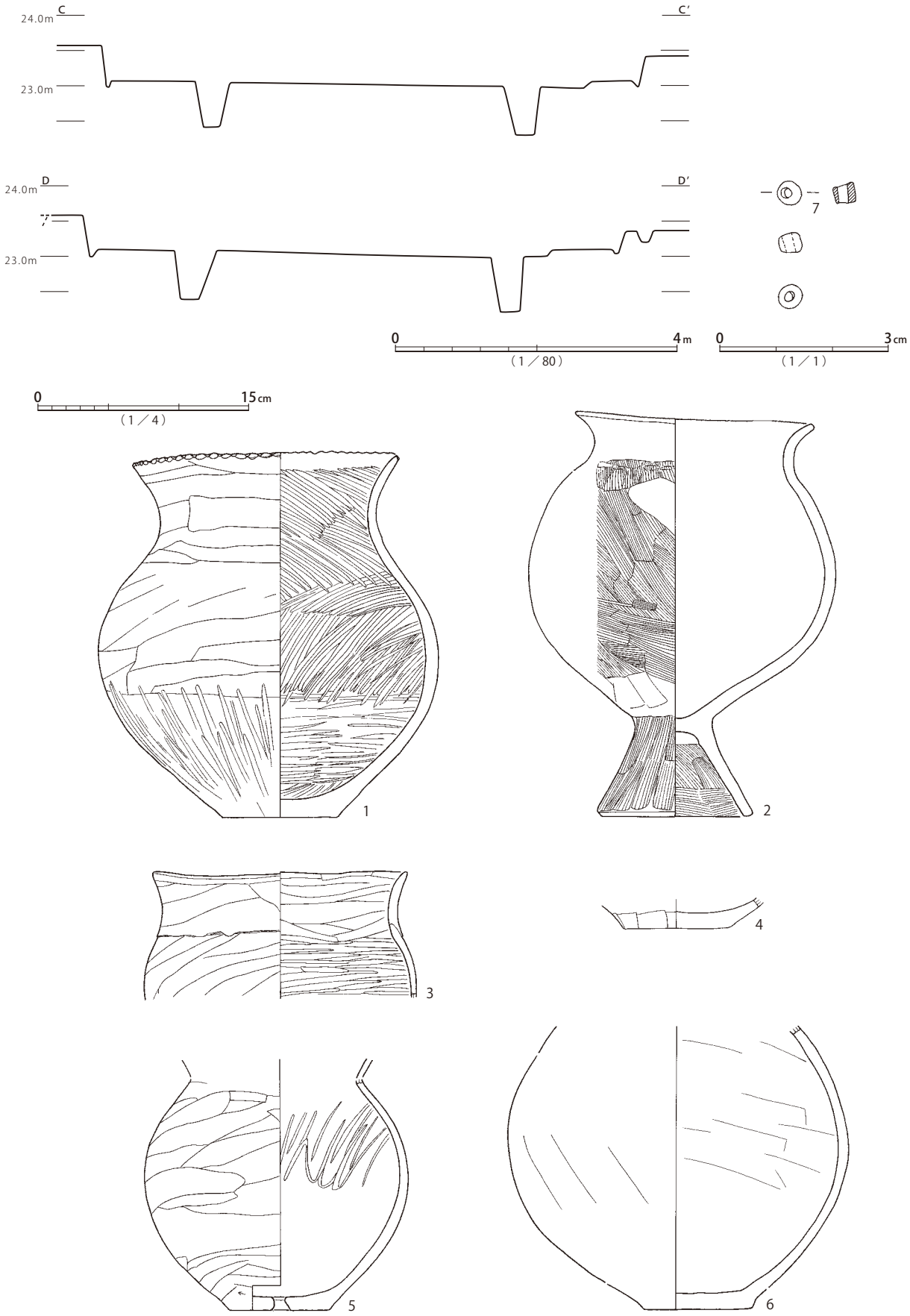


1　茶褐色土　ソフトローム粒若干　やや砂質
2　明茶褐色土　ロームブロック（上位ソフトローム多量・下位ハードローム）　やや砂質
3　黒褐色土　ソフトローム粒若干　やや砂質
4　明茶褐色土　ロームブロック多量　2層と同一　やや砂質
5　黒褐色土　やや砂質
6　明茶褐色土　ハードローム小ブロック
7　明茶褐色土　ロームブロック少量　やや砂質
8　黒色土　部分的に炭化物　やや砂質
9　茶褐色土　ソフトローム粒若干　1層と同一　やや砂質
10　黒色土　部分的に炭化物　8層と同一　やや砂質
11　黒褐色土　ソフトローム多量　やや砂質



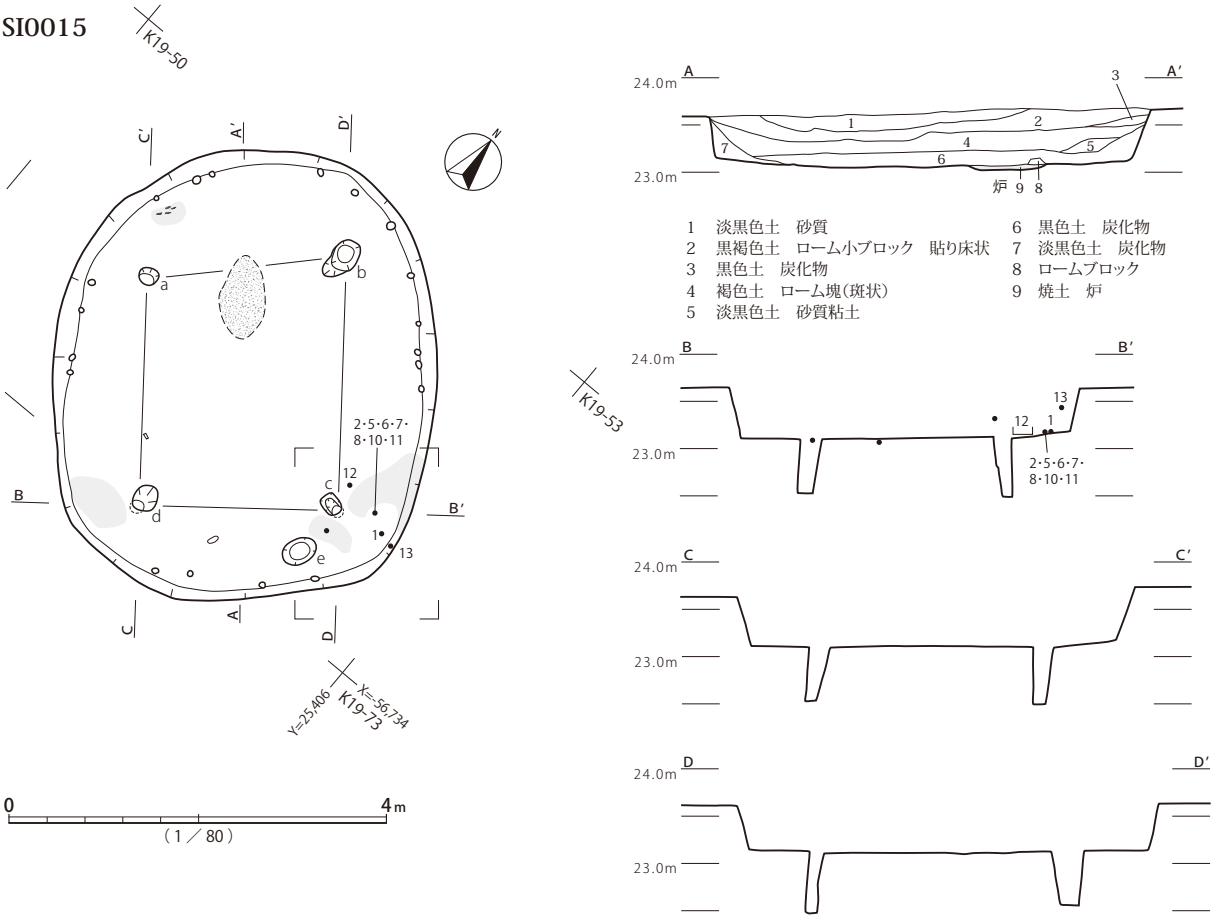
第41図　SI0014遺構（1）

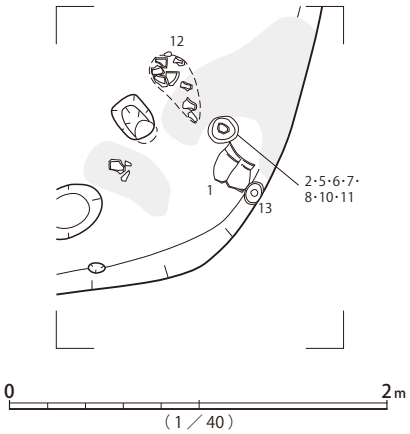
SI0014

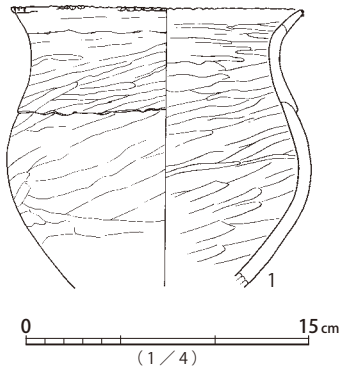


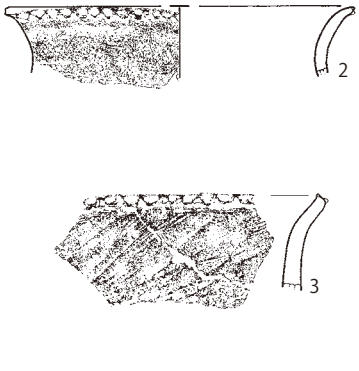
第42図　SI0014遺構(2)、SI0014遺物

SI0015



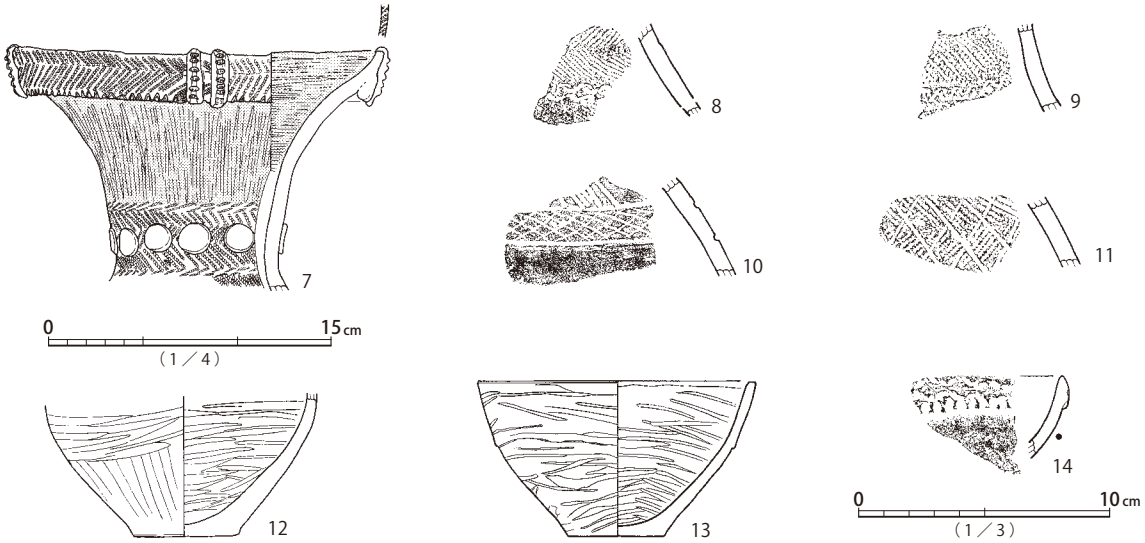






第43図　SI0015遺構、SI0015遺物(1)

SI0015



第44図　SI0015遺物(2)

設けられる。床面周溝は認められないが、壁面直下に小穴が並んで検出されている。

覆土は、外周部の床面近くを中心に焼土の堆積が見られる。また、埋め戻しとの関連は不明だが、上位に位置する２層について貼床状に硬化した様相が記録されており、埋没過程における凹地利用が推定できる。

遺物は鉢13を除き、床面レベル近くで一部が焼土に埋没して出土している。弥生時代後期後半を中心とするが、タタキ甕片６は弥生時代終末期に位置づけられる。遺物注記を参照すると土器２・５・６・７・８・10・11は同一箇所から出土したことになるが、本来、その主体は平面図で表現された壺口縁部７と思われる。覆土上位の凹地利用に由来する一括取り上げ遺物の一部が、取り扱いの混乱により同一注記されるに至った可能性がある。壺10は、弥生時代終末期前半のSI0042から出土した網目状撚糸文装飾壺57の一部と見られる。

本遺構の帰属時期は、甕１と壺７の特徴から弥生時代後期後半と考えられる。

SI0016（第 45 図、図版 22・134・189）

5.5×5.3m、深さ30cm程度の方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴もしくは貯蔵穴と見られるe、貯蔵穴fが検出されている。床面周溝は全周し、底に小穴が伴う。a・b間ライン内側、中心軸やや東寄りに楕円形の炉が設けられている。

覆土は、東側床面に焼土が見られ、貯蔵穴内に粘土ブロックが検出されている。建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

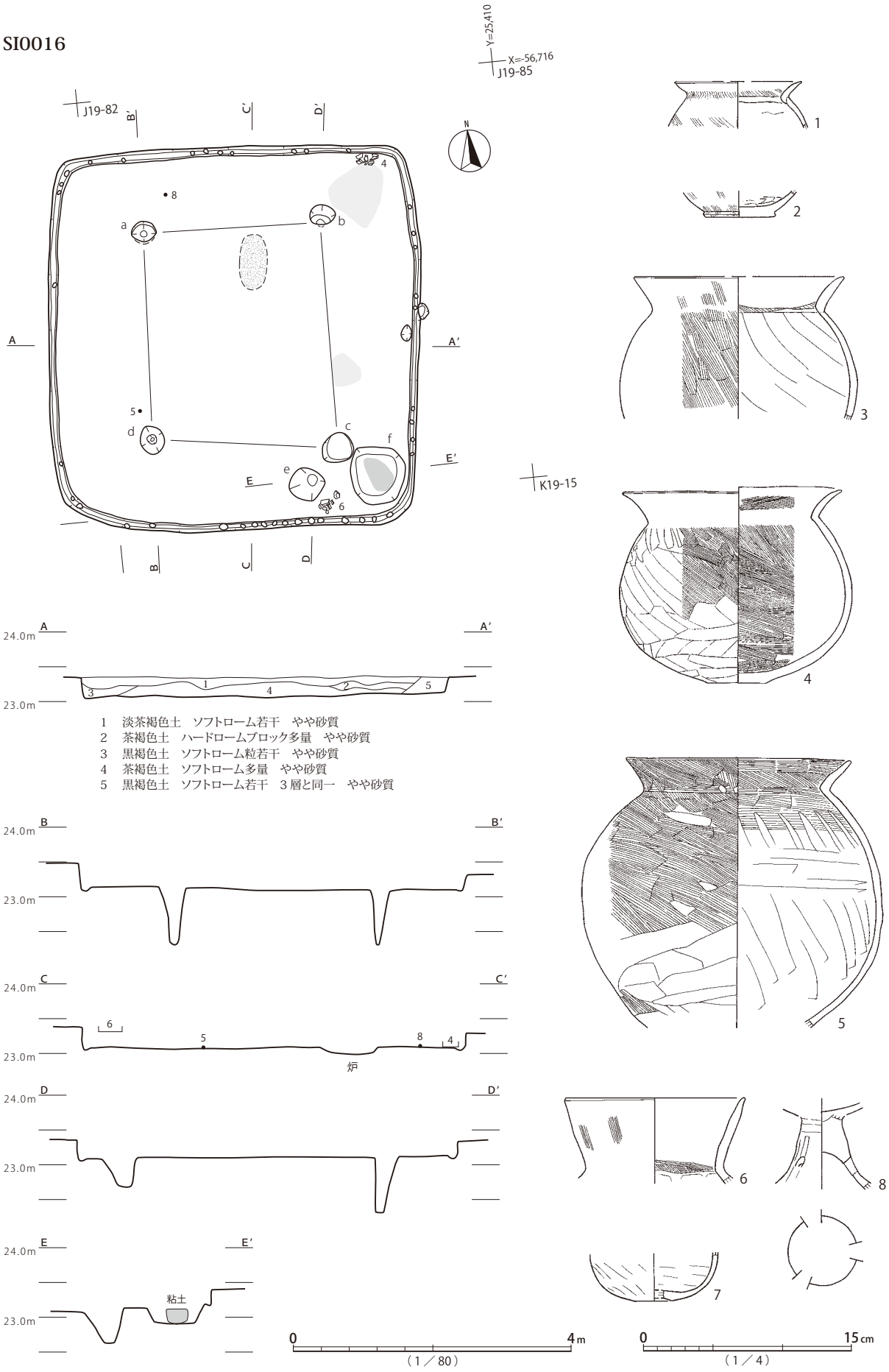
遺物は、床面レベルで甕４・５、高杯８が出土し、いずれも草刈１～２式に位置づけられる。

本遺構は、古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI0017（第 46 図、図版 22）

6.8？×6.0？m、深さ5cm程度が遺存する方楕円形と見られる竪穴建物跡である。ほぼ削平され、

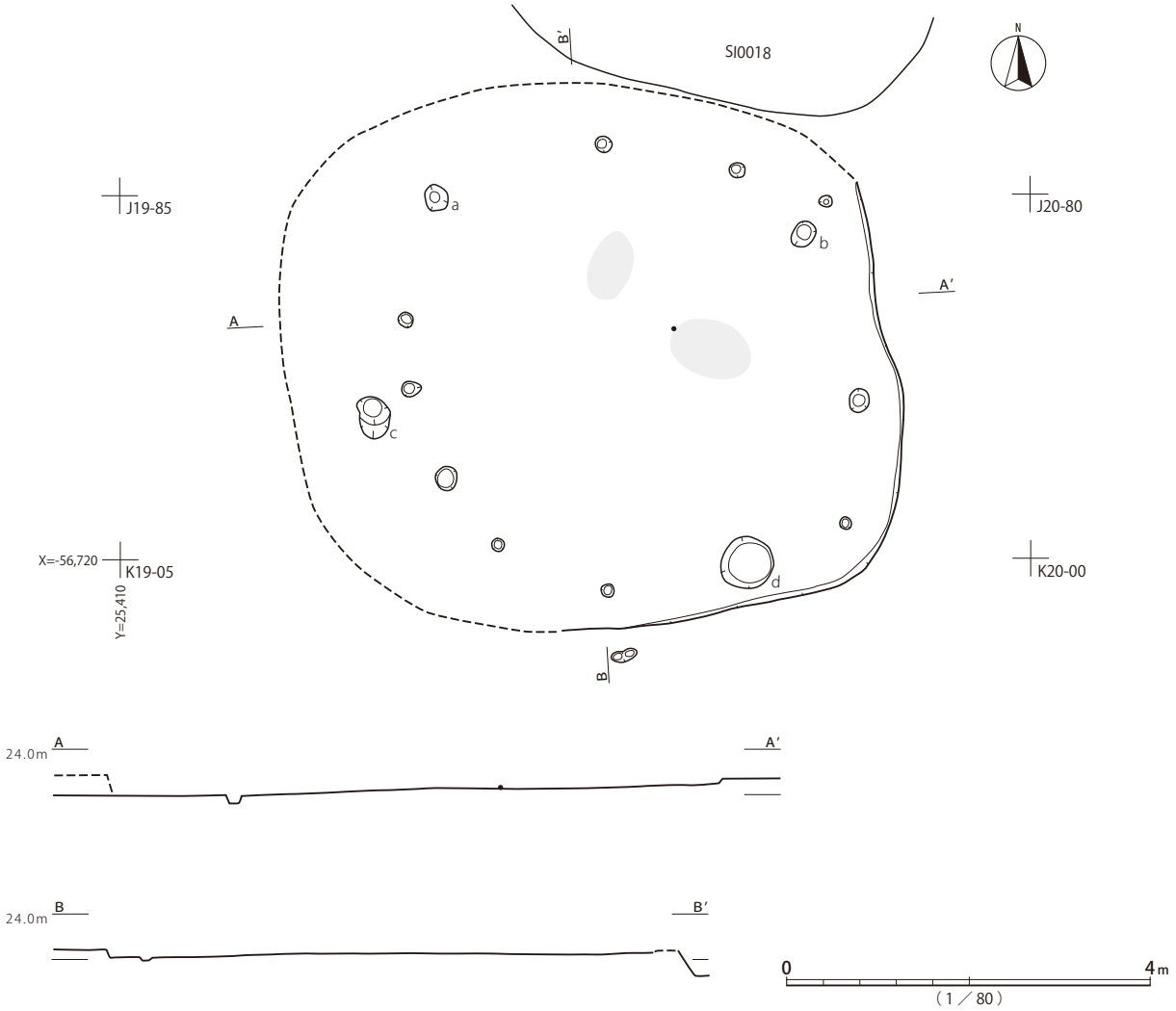
SI0016



1　淡茶褐色土　ソフトローム若干　やや砂質
2　茶褐色土　ハードロームブロック多量　やや砂質
3　黒褐色土　ソフトローム粒若干　やや砂質
4　茶褐色土　ソフトローム多量　やや砂質
5　黒褐色土　ソフトローム若干　3層と同一　やや砂質

第45図　SI0016遺構・遺物

SI0017



第46図　SI0017遺構

平面形も南東検出部からの推定である。aが14cm、bが66cm、cが35cm、dが38cmと比較的明確な掘り込みを持つが、主柱穴配置などは不明である。明瞭な床面硬化部は認められない。

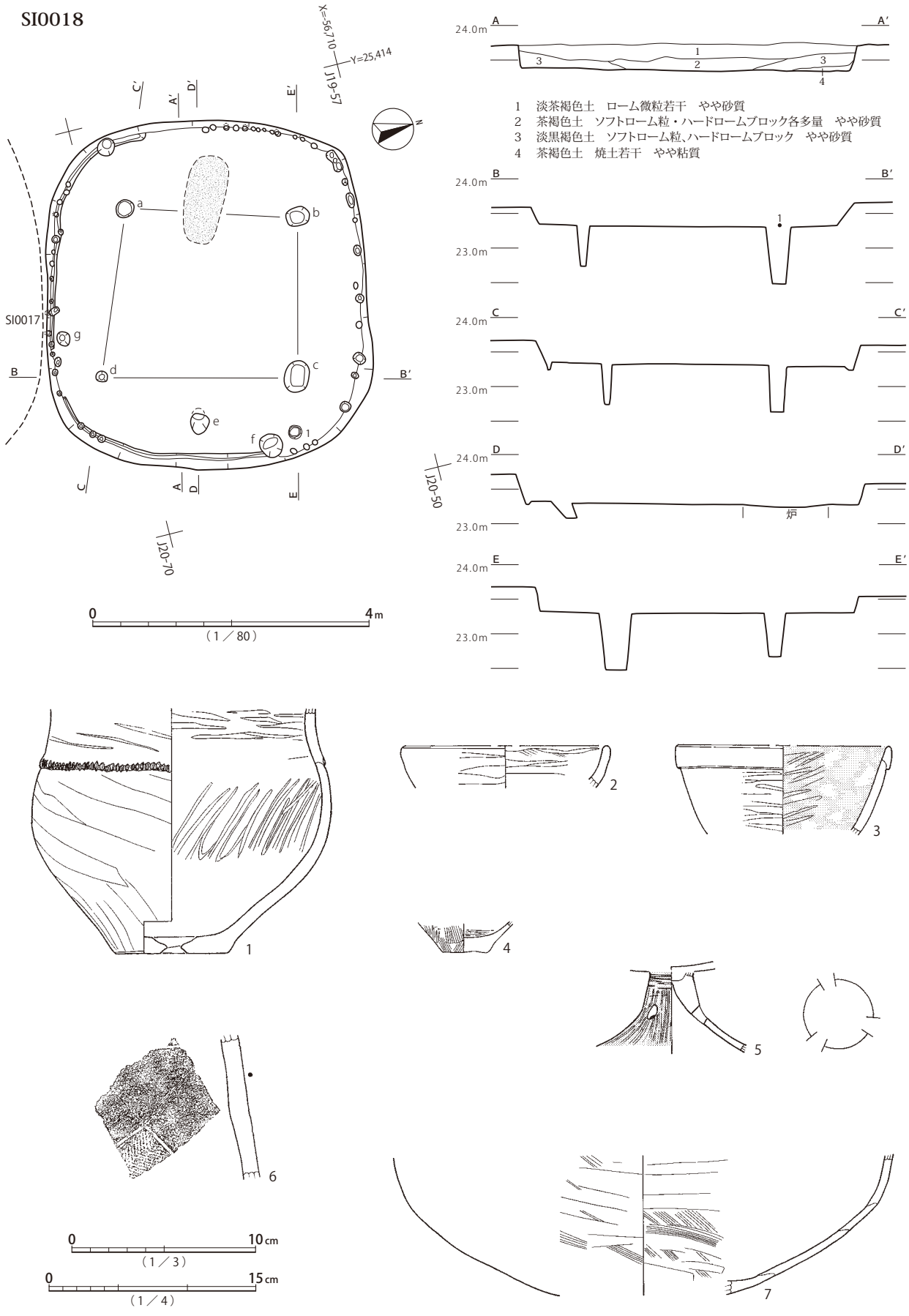
遺存深度はわずかだが、焼土が床面から検出されている。焼土範囲は炉の可能性もあるが、被熱赤化面と凹部が明確には確認されていない。

時期を示唆する出土遺物は得られていないが、方楕円形に近い推定平面形から、本遺構は弥生時代後期から終末期に帰属する可能性がある。

SI0018（第47図、図版22・134・189・328）

5.0×4.6m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南側ではほぼ連続するが、北側は小穴のみが認められる。

南側でSI0017と接するが、切り合い関係は不明である。覆土は、炉の近くに焼土粒を含む初期堆積が見られるが、基本的に漸移的に埋没した様相を示す。



第47図　SI0018遺構・遺物

遺物は、甕転用甑1が北東隅、貯蔵穴脇の床面から出土している。古式土師器高杯5なども含まれるが、覆土一括取り上げ遺物であり、遺構の帰属時期よりやや後出すると見られる。

本遺構は、弥生時代後期後半から終末期前半に帰属すると考えられる。

SI0019（第48図、図版23・134・189・302）

5.2×4.4m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に不整円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。主柱穴の配置は竪穴長軸に沿った長方形を呈する。主軸方位は西に位置するSI0018に近似する。

覆土は、最上面近くのソフトローム主体土上に遺物集中が認められ、竪穴埋没後に凹地が利用された可能性がある。遺物集中面以下は、黒色土が堆積していたとされるが、図面記録はない。貯蔵穴近くに焼土集中部が認められる。

遺物は、竪穴床面から甕転用甑1、壺3、鉢12が出土し、遺構の帰属時期を示す。覆土上層には古墳時代前期の小型丸底系鉢8を伴うが、廃絶・埋没後の堆積物であり、下限を示すに過ぎない。その他、覆土一括取り上げ資料として砂岩製礫石器15が出土している。

本遺構は弥生時代後期後半から終末期前半の所産と考えられる。

SI0020（第49図、図版23・135・189・328）

4.5×4.4m、深さ50cm程度の方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。主軸のやや東寄り、a・b間ラインに接する位置に楕円形の炉が設けられる。東壁前床面には高さ10cm程度の硬化土によるベッド状の高まりが認められる。床面周溝は硬化面を除き、断続しながら3辺に見られ、小穴が伴う。

覆土は、埋め戻しの痕跡が見られず、漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面レベルから鉢8、高杯12、20cm程度高い位置でミニチュア土器11、高杯13が出土している。いずれも中台式から草刈式にかけての特徴が認められる。なお、平面図には小型鉢8の北側に完形に近い甕と見られる土器が記録されているが、該当する注記の遺物は確認できず詳細は不明である。

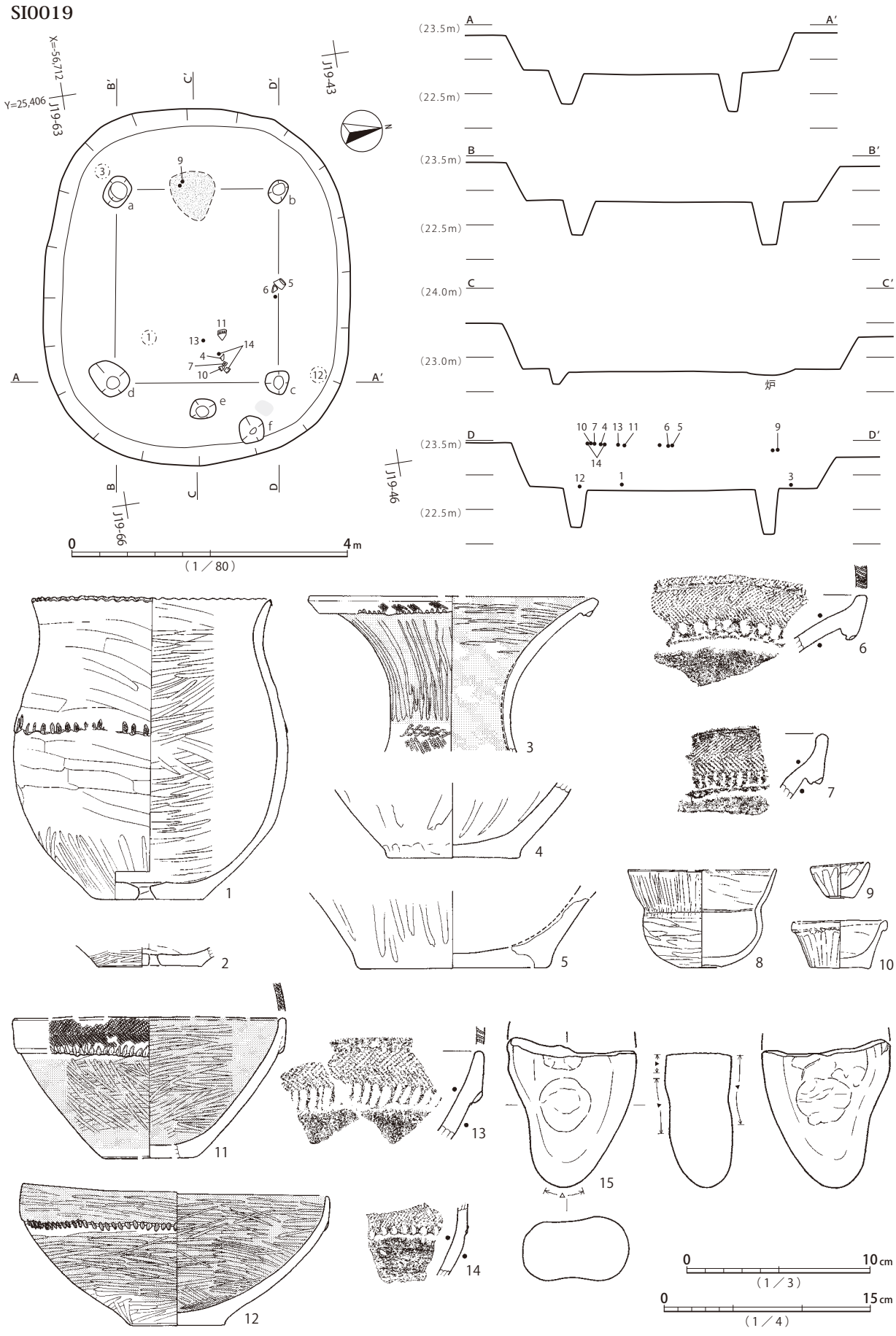
本遺構は、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI0021（第50図、図版23・135・296）

4.9×4.7m、深さ10cm程度の方形竪穴建物跡である。明確な主柱穴は見られず、深さ29cmのa、19cmのb、22cmのcが目立つ程度である。床面周溝は北東と南西で途切れる以外は連続し、部分的に小穴が伴う。床面はあまり硬化していない。

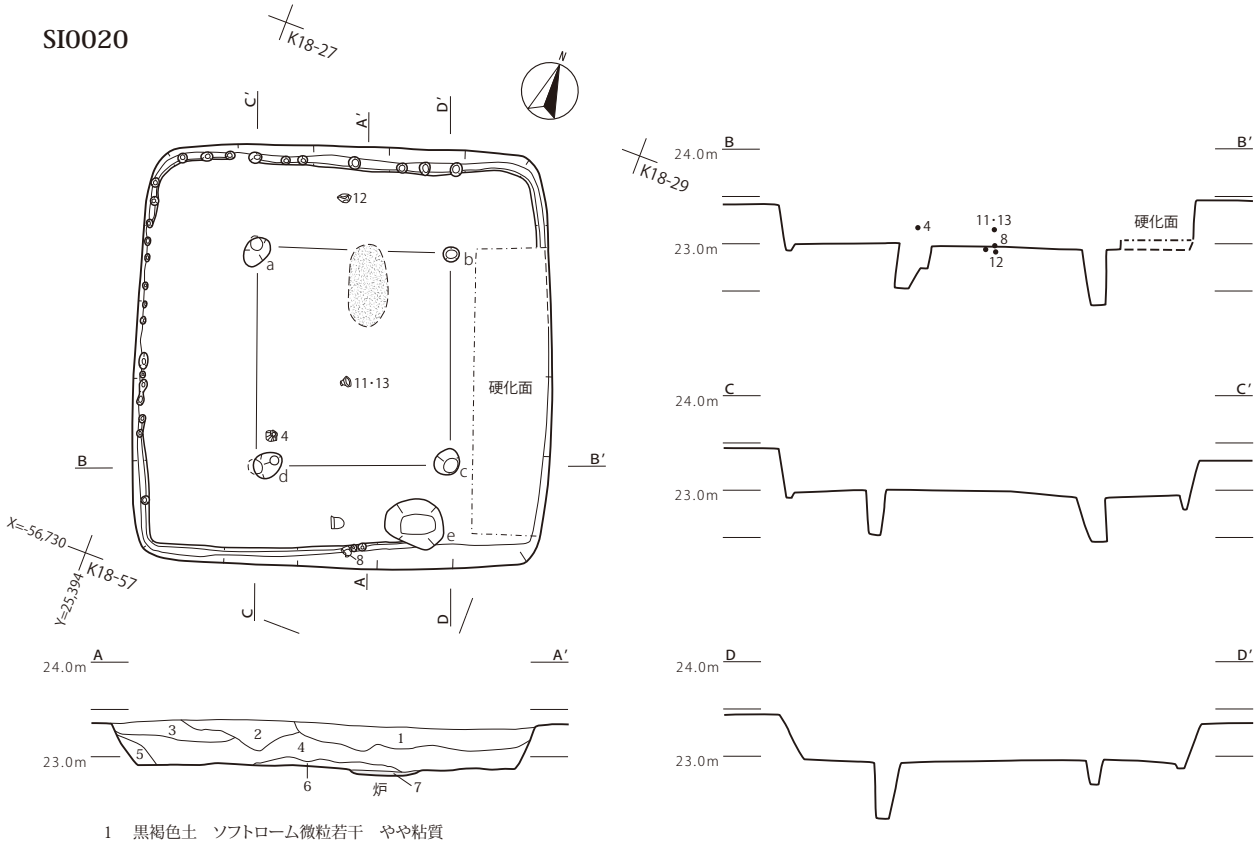
遺物は、北隅床面レベルでカワラケ小皿1が出土しているが、混入品である。

本遺構の帰属時期は、根拠は乏しいものの、竪穴平面形と周辺の遺構分布傾向から古墳時代前期と推定される。



第48図　SI0019遺構・遺物

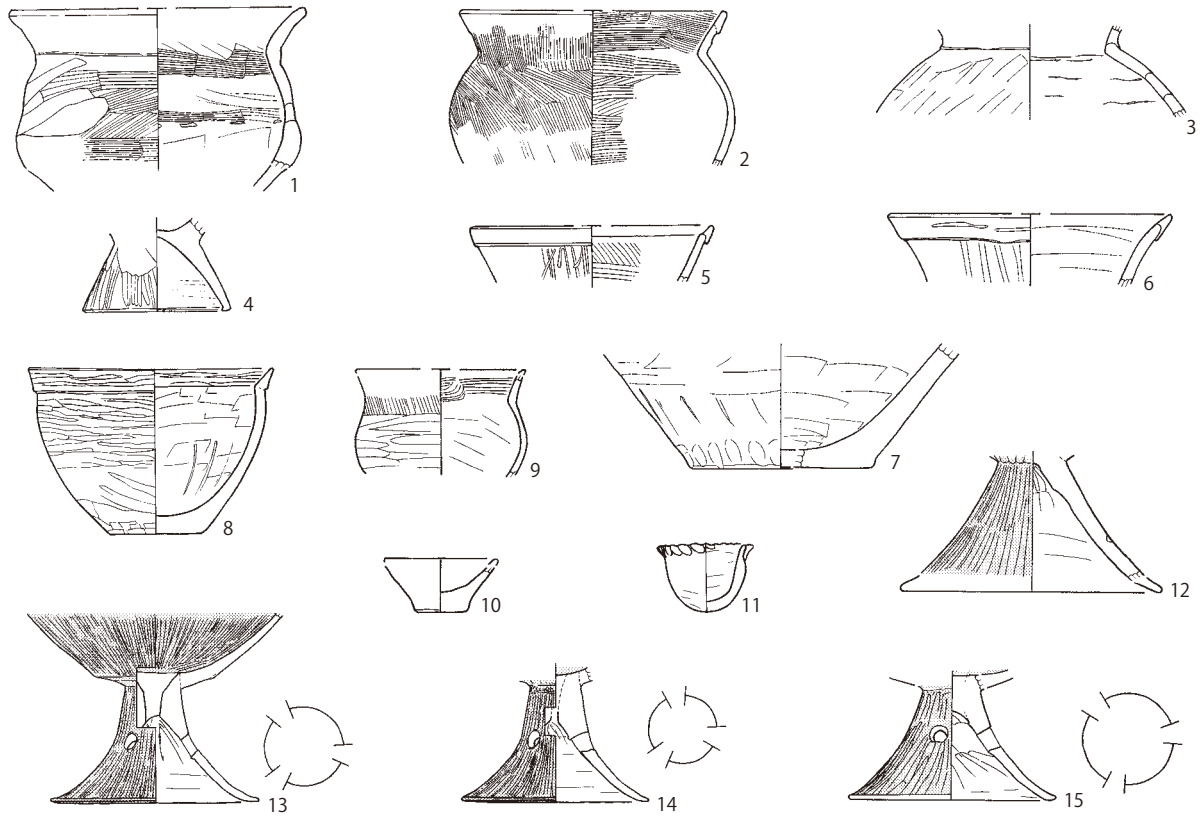
SI0020



1　黒褐色土　ソフトローム微粒若干　やや粘質
2　明茶褐色土　ソフトローム多量　やや砂質
3　茶褐色土　ソフトロームは２層より少なく４層より多い　やや砂質
4　淡黒褐色土　ソフトローム若干　やや砂質
5　黒褐色土　ソフトローム粒多量
6　茶褐色土　黒色土若干　やや粘質
7　焼土　炉

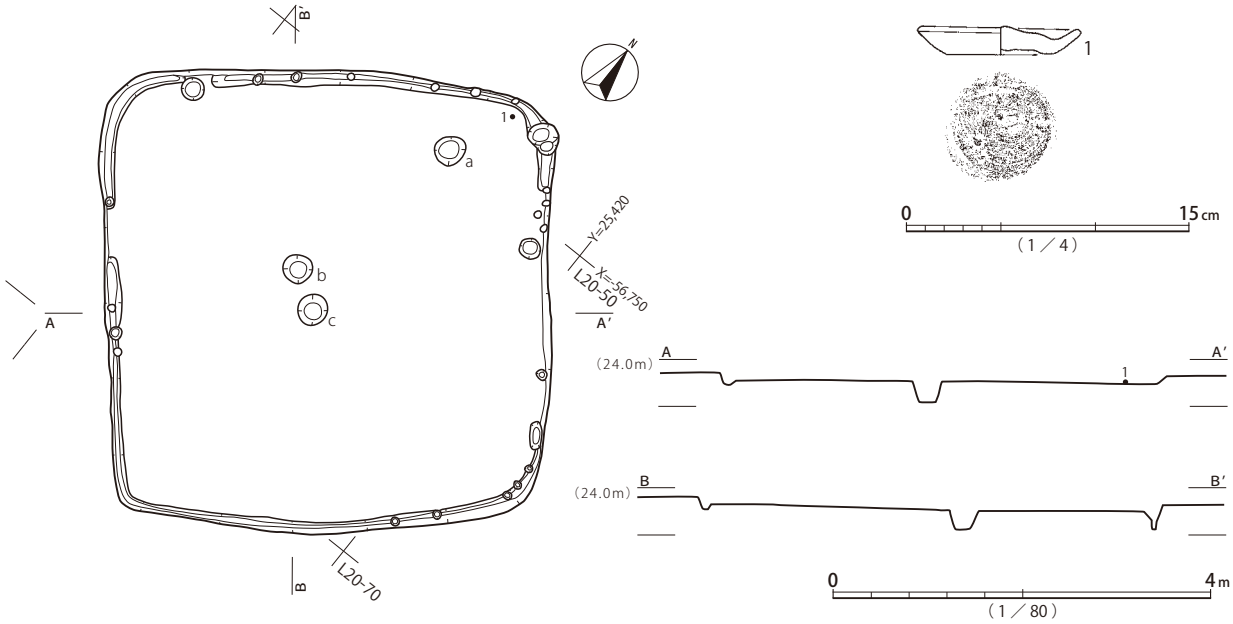
0　4m　（1／80）

0　15cm　（1／4）



第49図　SI0020遺構・遺物

SI0021



第50図　SI0021遺構・遺物

SI0022・SI0023（第 51・52 図、図版 23・24・135・190・299）

4.3 × 4.6m、深さ 40cm 程度の方形竪穴建物跡 SI0023 と、3.8 × 4.0m、深さ 25cm 程度の方形竪穴建物跡 SI0022 である。SI0023 の南西隅が SI0022 の北隅に切られている。

SI0023 は東側に幅 1m 前後のベッド状遺構が設けられ、15cm 程度の段差を持つ。下位床面からは主柱穴 a ～ d、貯蔵穴の可能性のある e が検出され、a・d については、ベッド状遺構と床面の境に位置する。c・d の図・記録はなく、位置・形状は推定である。竪穴中心軸やや東寄り、a・b 間ライン内側に炉が設けられる。調査日誌には、炉の南縁にいわゆる枕石と見られる「砂岩質の石」の検出された記述が残されているものの、遺物・記録とも確認できない。床面はあまり硬化していない。

ベッド状遺構を含む床面レベルで焼土・炭化材が広く検出され、建物・建材の焼却処分の行われた可能性が高い。SI0022 と切り合う南西隅については、焼土が連続することから SI0022 覆土が切り込んでいると見られる。

遺物は、焼土層に混在して床面レベルから、甕 6、高杯 9・12、鉢 10、小型器台 14 が出土している。いずれも中台式の特徴を示し、弥生時代終末期に位置づけられる。

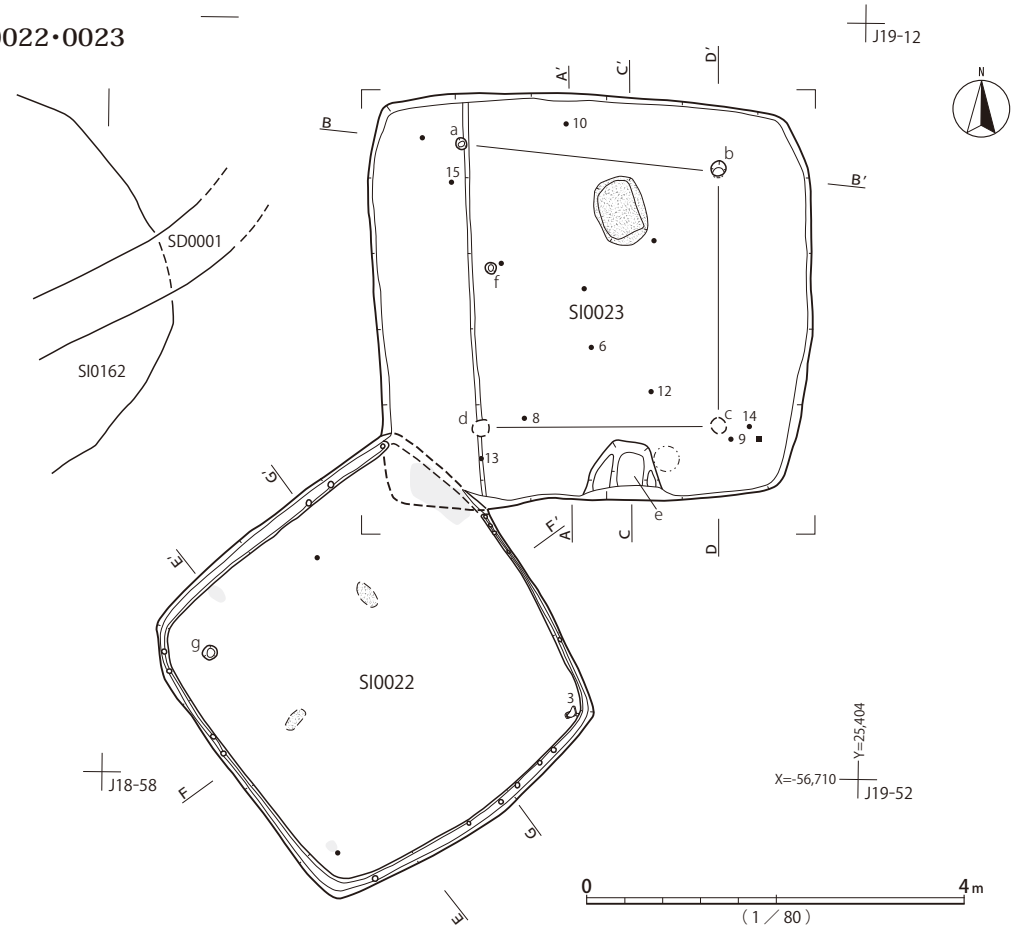
SI0022 は明確な主柱穴は認められず、深さ 16cm の g が目立つ程度である。炉と見られる焼土の伴う被熱部が 2 箇所、北西辺寄りと南西辺寄りに検出されている。床面周溝は全周し、小穴が部分的に伴う。床面はあまり硬化していない。

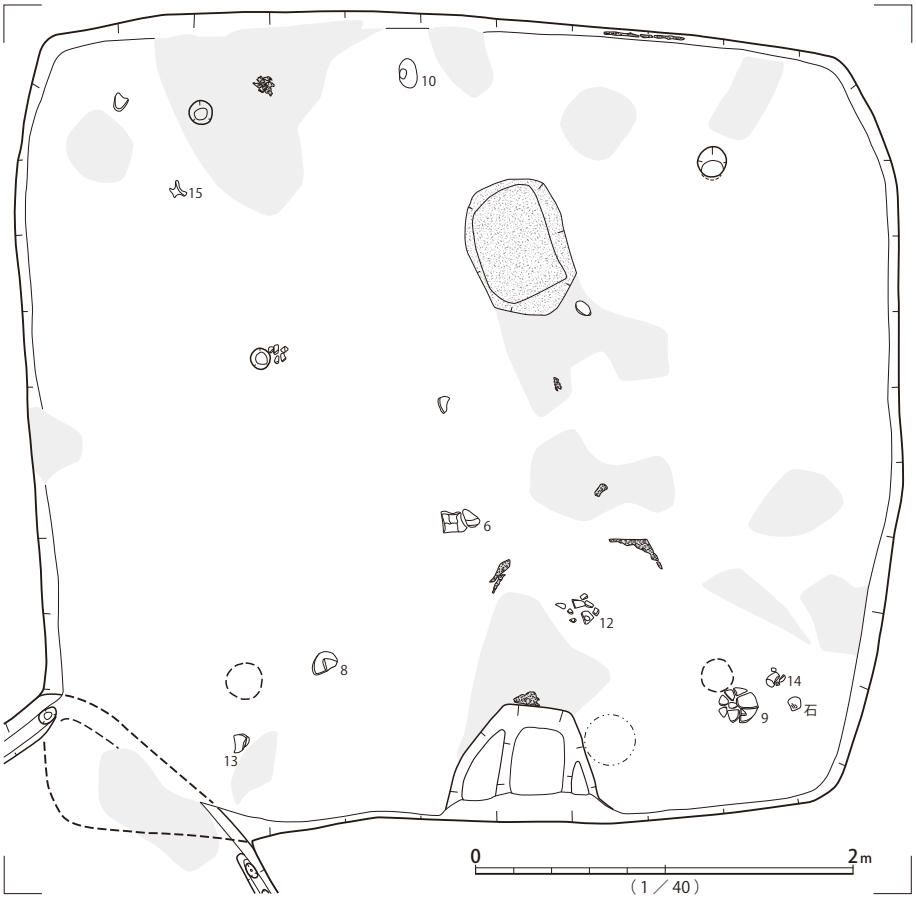
覆土は、床面近くに 10cm 程度の厚さの焼土堆積が北隅で検出されている。

遺物は、覆土中から高杯 3 等、草刈式に位置づけられる土器が出土している。その他、覆土一括取り上げ資料の環状土製品 5 がある。

切り合い関係と出土遺物の様相から、SI0023 が弥生時代終末期、SI0022 が弥生時代終末期から古墳時代前期前半に帰属すると考えられる。

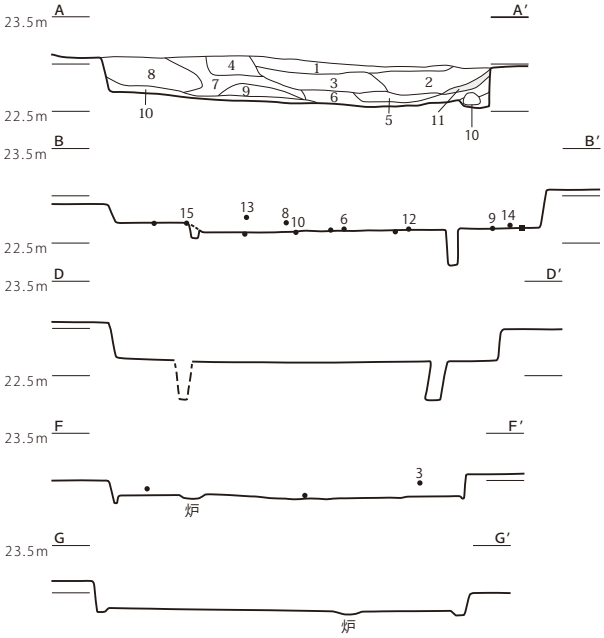
SI0022・0023



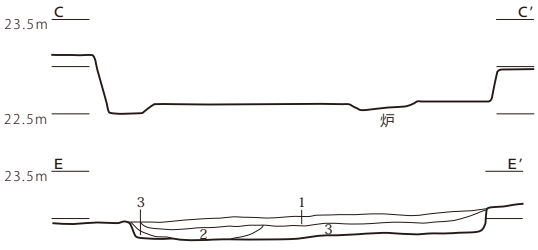


第51図　SI0022・SI0023遺構（1）

SI0022・0023



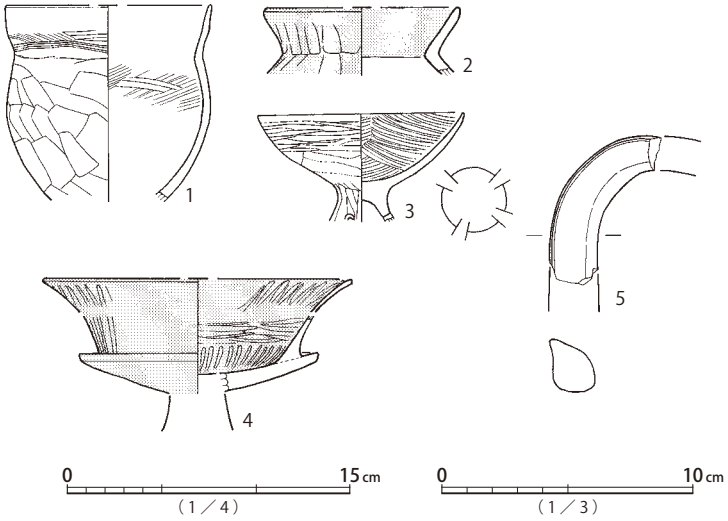
1　茶褐色土　やや砂質
2　淡明茶褐色土　ローム塊(1cm 大)少量　やや粘質
3　黒褐色土　やや砂質土とやや粘質土の混合土
4　茶褐色土　1 層よりやや黒い　やや砂質
5　明茶褐色土　ロームブロック
6　明茶褐色土　ロームブロック　5 層とほぼ同じ　5 層よりやや粘質
7　黄褐色土　多量の黄褐色ローム大ブロックと明茶褐色粘質土の混合土
8　黒褐色土　やや砂質土とやや粘質土の混合土
9　明茶褐色土　ロームブロック　5 層とほぼ同じ　5 層よりやや粘質
10　淡茶褐色土　やや黄色　粘質
11　焼土



1　茶褐色土　明るい　やや砂質
2　茶褐色土　1 層よりやや黒い　やや砂質
3　黒褐色土　ロームブロック若干　やや砂質

0　4m
(1／80)

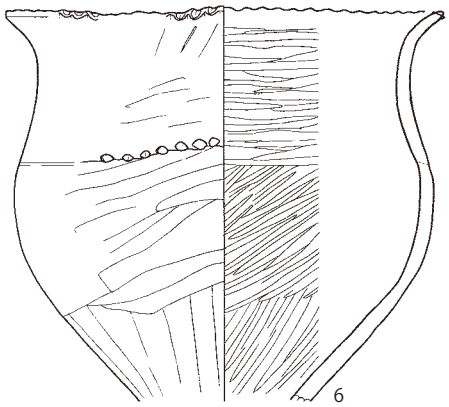
SI0022

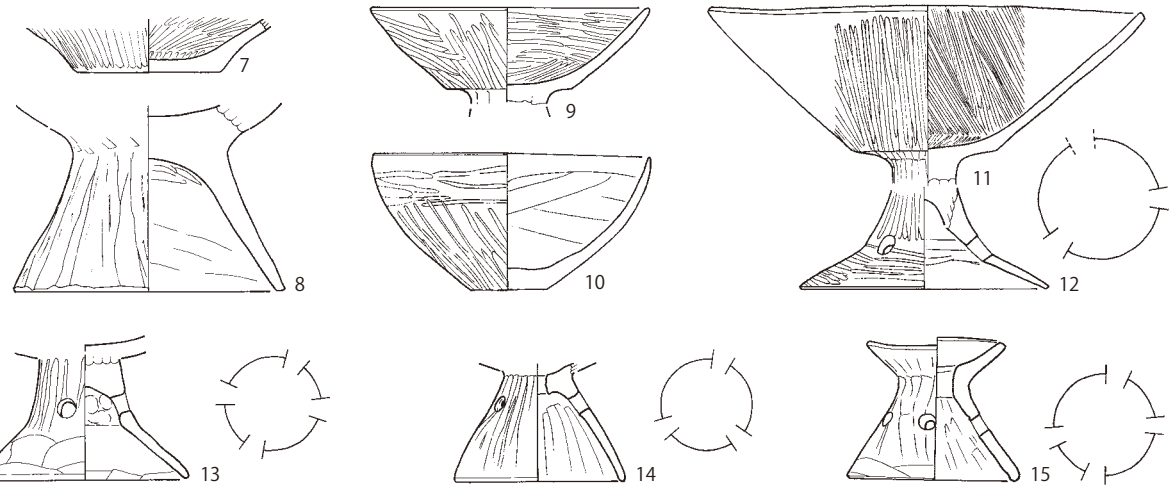


0　15cm
(1／4)

0　10cm
(1／3)

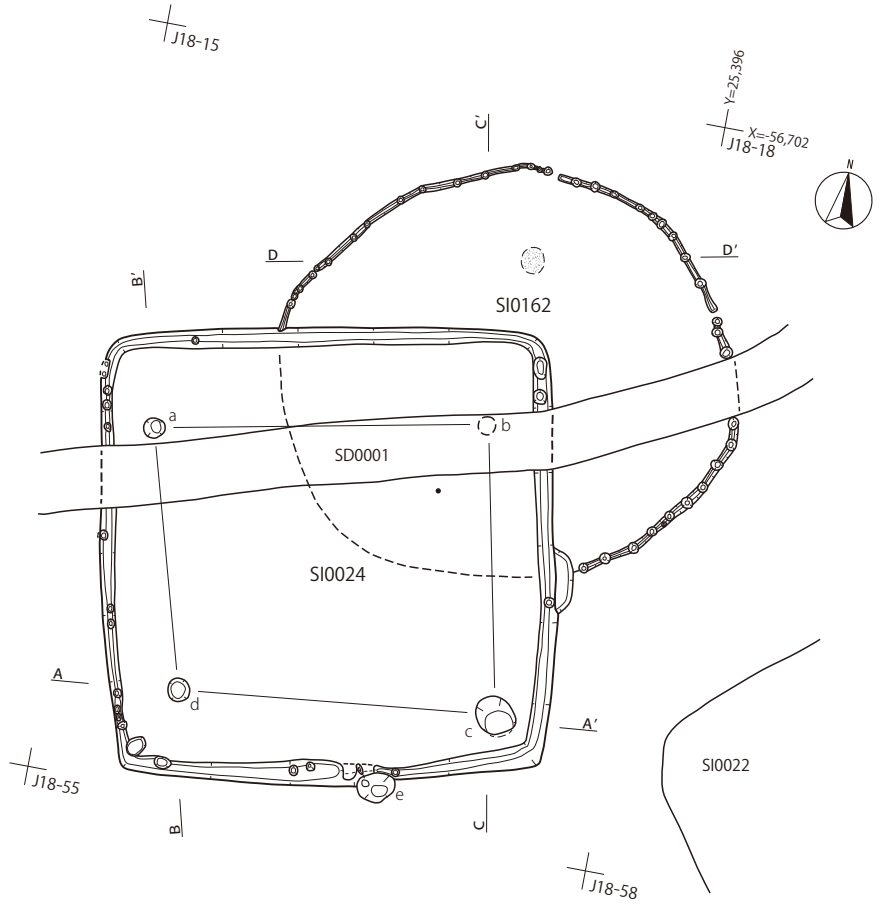
SI0023

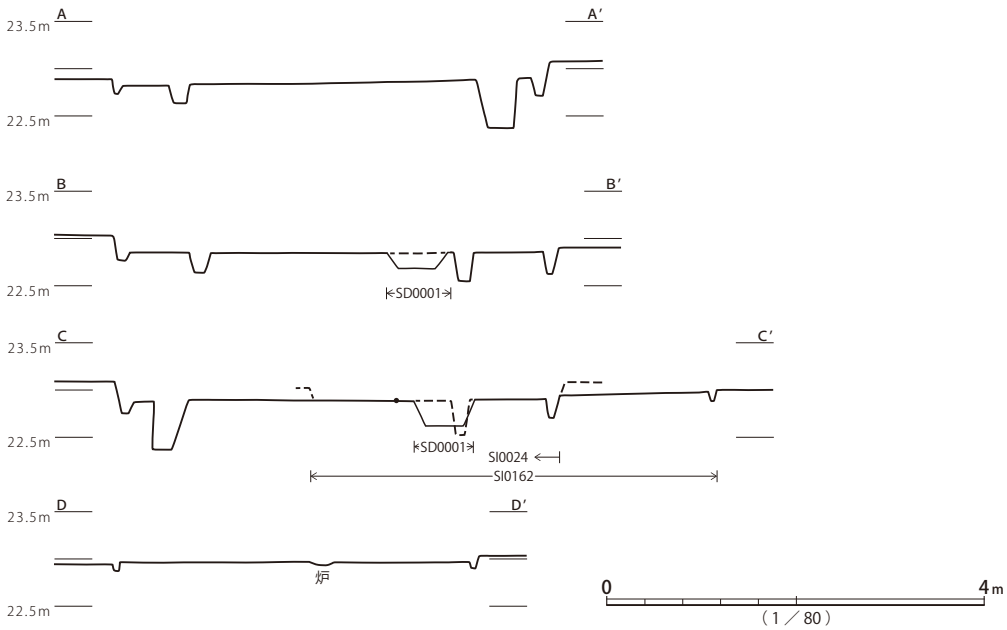




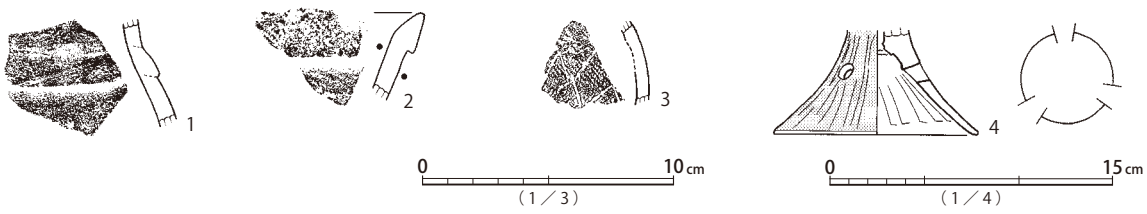
第52図　SI0022・SI0023遺構(2)、SI0022・SI0023遺物

SI0024・0162

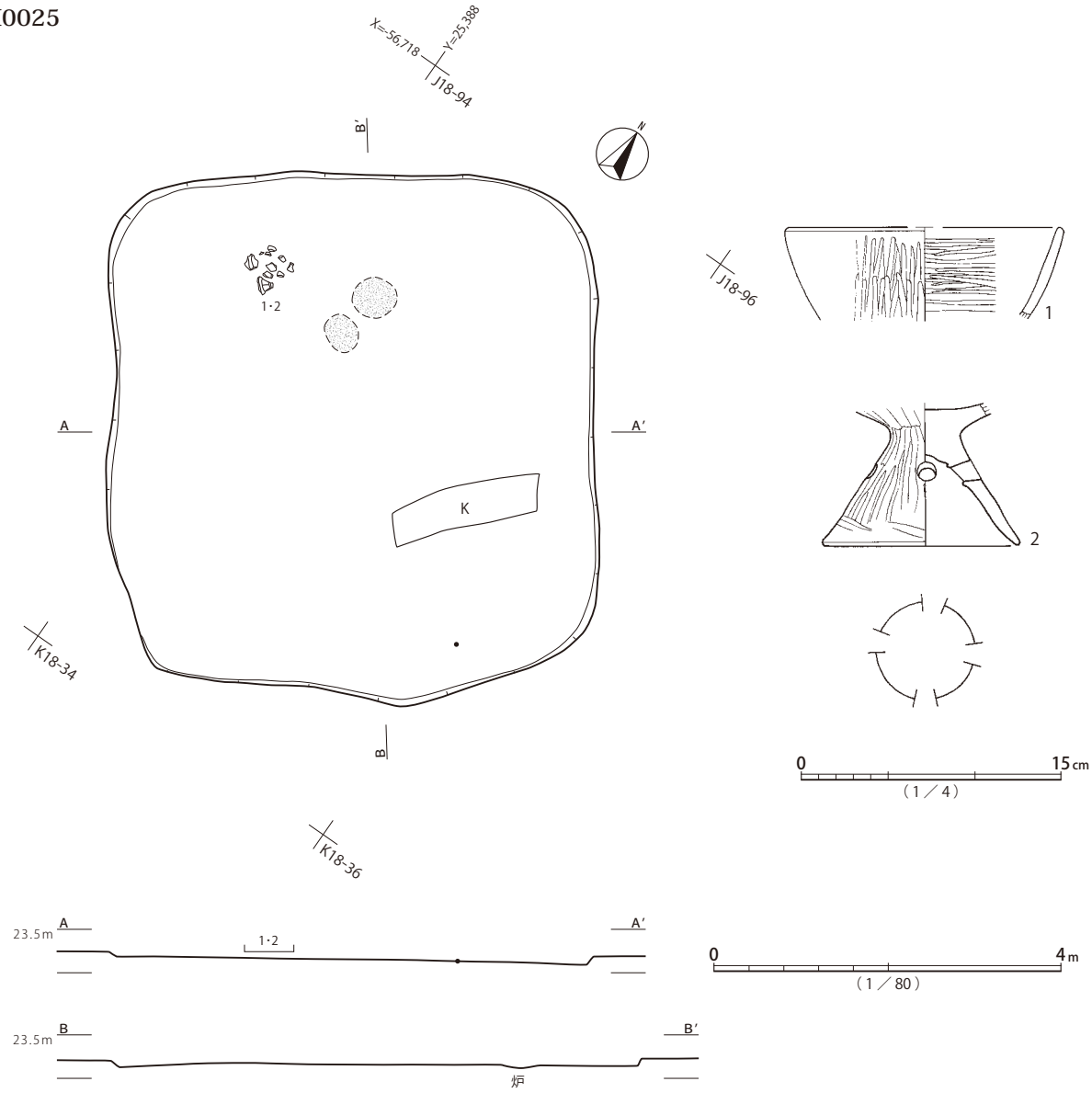




SI0024



第53図　SI0024・SI0162遺構、SI0024遺物



第54図　SI0025遺構・遺物

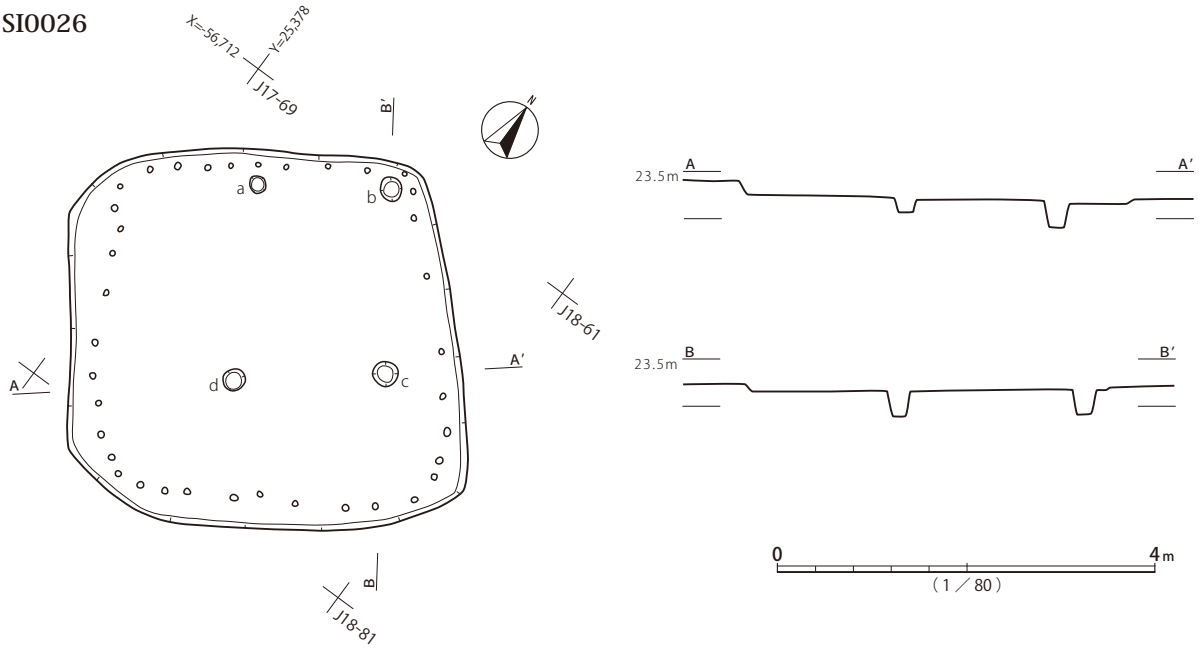
SI0024・SI0162（第 53 図、図版 24・55・135・190）

4.6 × 4.4mの円形竪穴建物跡と見られる遺構SI0162と、4.8m四方、深さ20cm程度の方形竪穴建物跡SI0024である。SI0162の南西部、四分の一以上をSI0024が破壊している。SI0162は遺存状態が悪く、床面が検出面に露出している。

SI0162は、北寄りに炉が検出された以外は、主柱穴等は認められない。遺存部は床面周溝が幅10cm弱、深さ5cm程度で全周し、25 ～ 30cm間隔で小穴が並ぶ。本来の覆土の内容や堆積状況は不明である。遺物は出土していない。

SI0024は、主柱穴a ～ dが検出・推定されている。柱配置は竪穴壁面に寄ったプランが想定できる。検出範囲内では床面周溝が全周し、部分的に小穴が伴う。床面は中央部が硬化している。

SI0024はSI0162を切って構築され、東西方向に横切る古代以降と見られる溝SD0001により部分的に破壊されている。



第55図　SI0026遺構

遺物は、混入と見られる弥生土器1 ～ 3の他に高杯4が出土しているが、位置記録は確認できない。

SI0162は平面形から縄文時代を含む弥生時代後期以前、それを破壊して構築されるSI0024は古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI0025（第 54 図、図版 24・136・190）

6.0 × 5.4m、深さ 10cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴等は検出されていない。中心軸上のやや北西寄りに炉が設けられる。

炉の西側の床面レベルから、中台式の高杯1・2が出土している。

本遺構は平面形と出土遺物から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0026（第 55 図、図版 24）

4.0m四方、深さ 10cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。検出時に輪郭が不明瞭だったため、本来の平面形より広めに掘り下げられたとの記述がある。小穴列の範囲を当初プランと想定すると3.6m四方程度となる。主柱穴と見られる穴は通例の配置上には無く、a ～ dが検出されている程度である。床面はソフトローム層に形成され、軟質で硬化部は認められない。

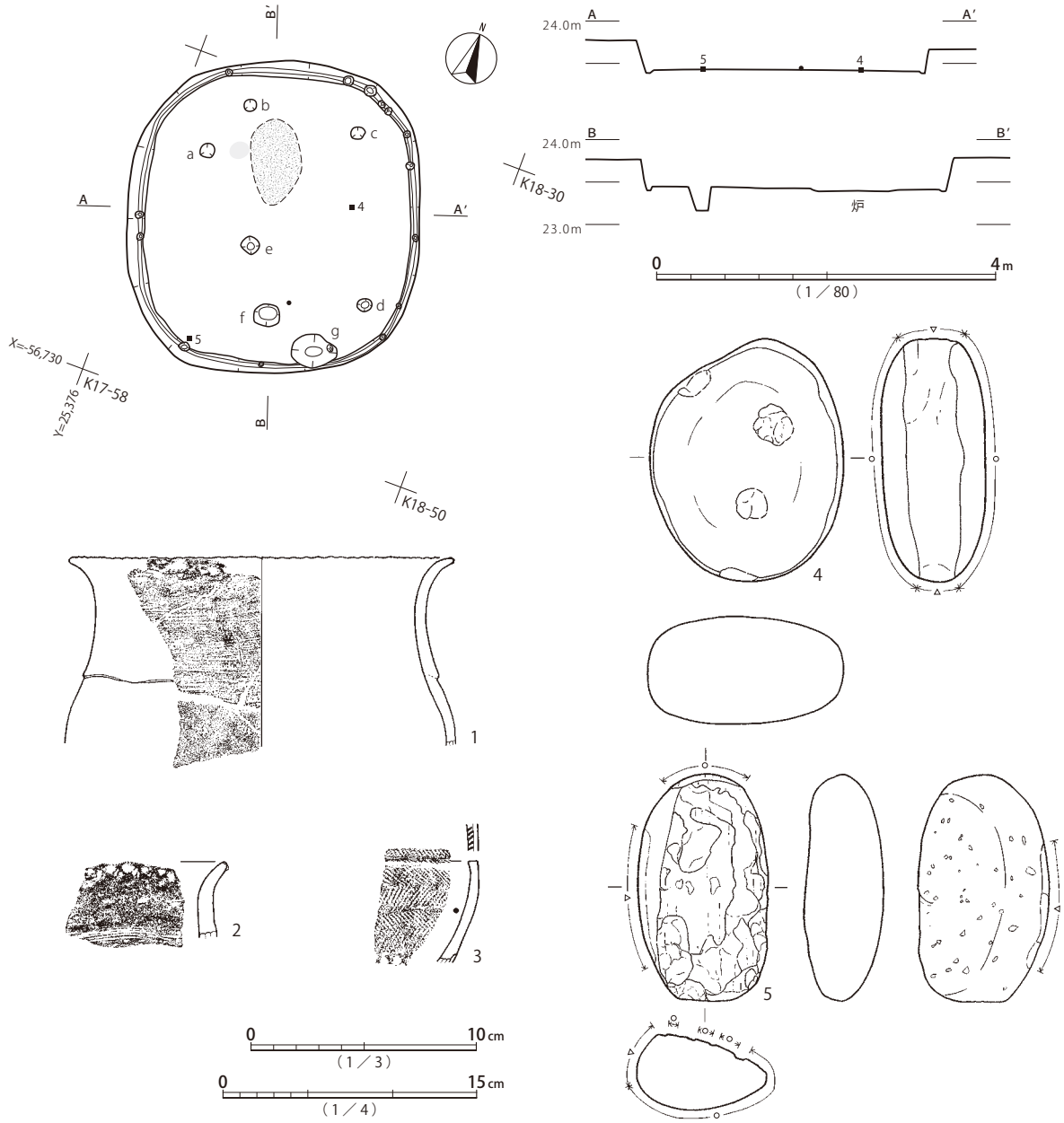
出土遺物はなく、明確な帰属時期は不明だが、平面形から弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0027（第 56 図、図版 24・190・302）

3.7 × 3.4m、深さ 40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。明確な主柱穴は認められないが、a ～ eの小穴の他に、ハシゴ穴f、貯蔵穴gが検出されている。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。中心軸上の北寄りに炉が設けられる。床面周溝は全周し、部分的に小穴が伴う。

遺物は、弥生土器の甕1・2、鉢3が出土しているが、いずれも覆土一括取り上げ資料である。輝

SI0027



第56図　SI0027遺構・遺物

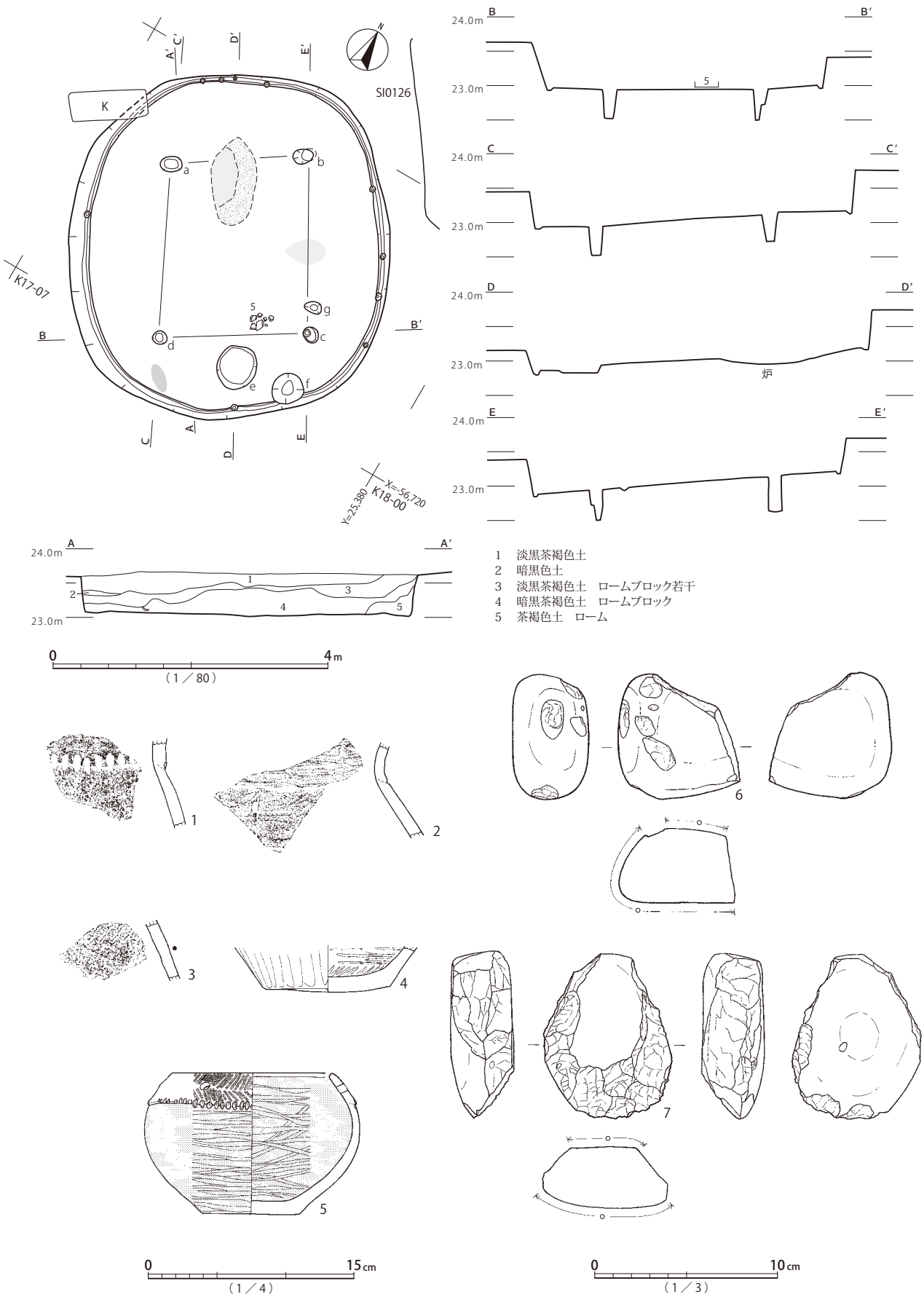
石安山岩製礫石器4、石英斑岩製礫石器5が床面で検出されている。縄文時代の遺物を再利用した可能性がある。

平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

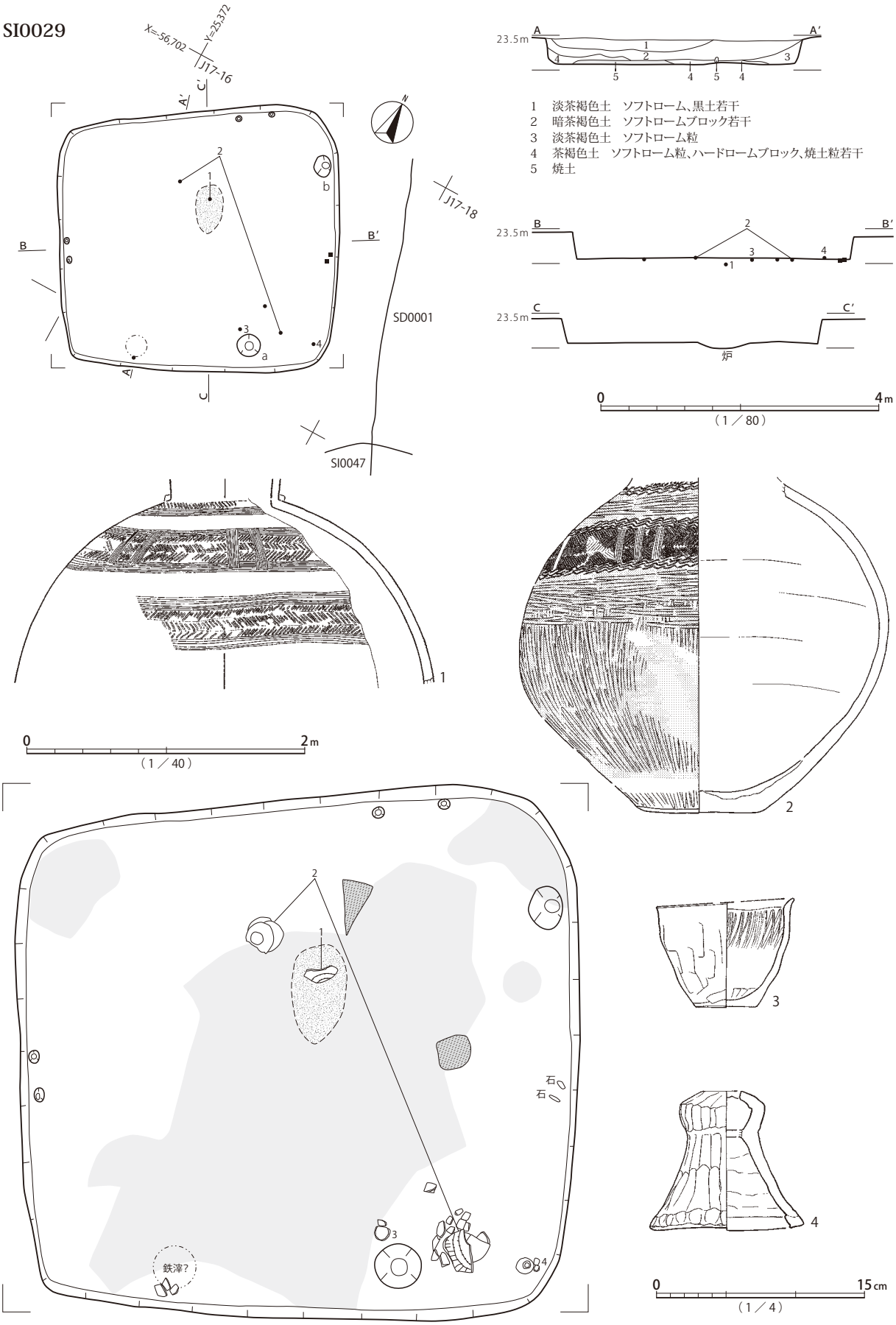
SI0028（第57図、図版24・25・136・190・302）

5.0×4.6m、深さ70cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴の可能性があるe、貯蔵穴fが検出されている。地形の傾斜に従い、南側が深く遺存している。中心軸とa・b間ラインが交差する位置から中心側の位置に炉が設けられる。床面周溝は全周し、疎らに小穴が伴う。床面はハードローム層に形成され、凹凸は目立つものの堅緻である。

SI0028

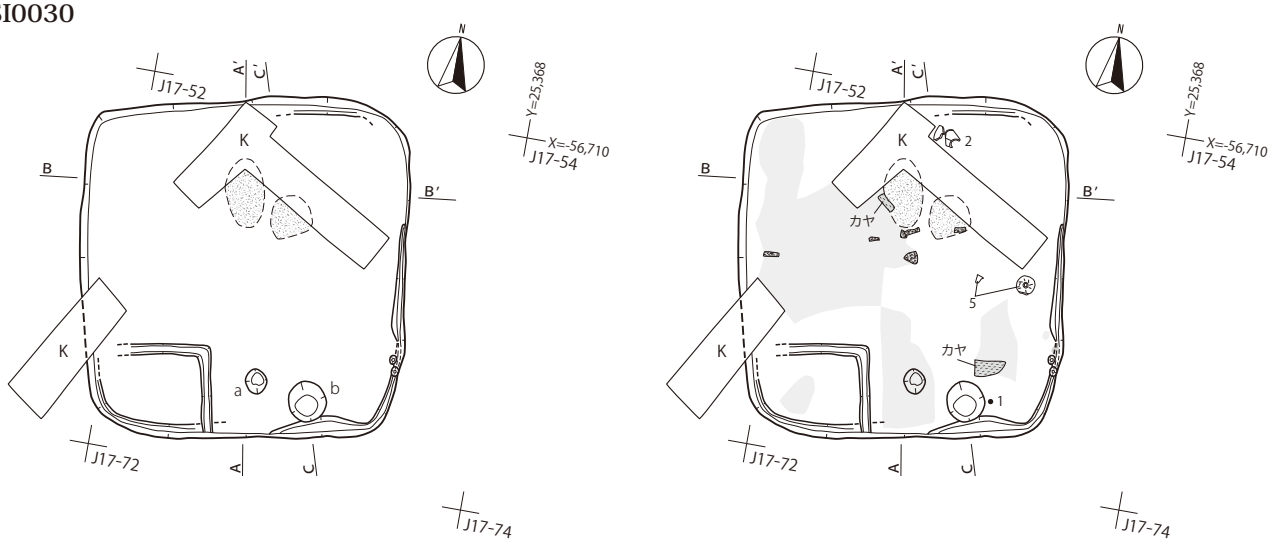


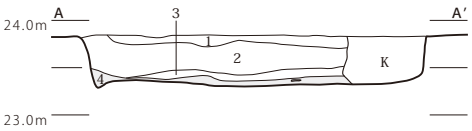
第57図 SI0028遺構・遺物



第58図　SI0029遺構・遺物

SI0030

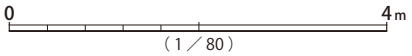


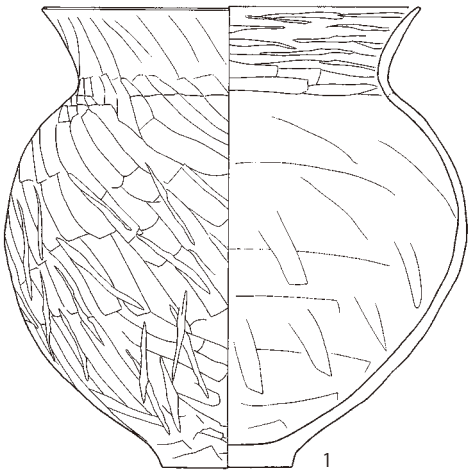


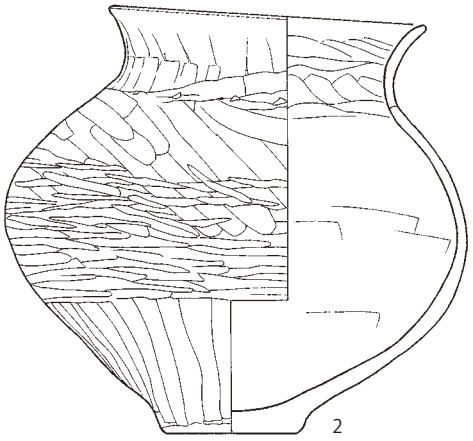


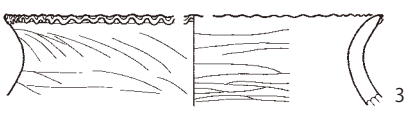


1　黒色土　ロームの混入が殆どない　やや砂質
2　黒褐色土　同層下位にソフトローム若干、焼土粒　やや砂質
3　淡黒褐色土　ハードローム小ブロック、焼土粒　２層よりソフトローム多い　やや砂質
4　淡黄褐色土　焼土多量、ハードローム小ブロック、炭化材片

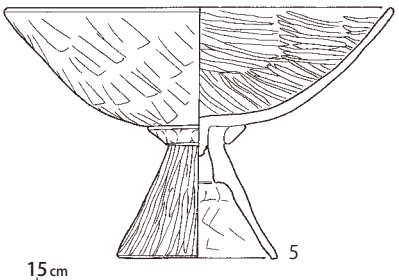


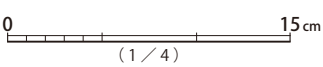












第59図　SI0030遺構・遺物

覆土は、東側床面近くに焼土、南壁近くに粘土ブロックが検出されている。初期堆積と見られるローム主体の５層と焼土・粘土の堆積は、建物が解体され焼却を伴う処分が行われた可能性を示唆する。

遺物は、床面レベルで山田橋式に位置づけられる椀５が出土している。輝石安山岩製礫石器6、砂岩製礫石器７については、縄文時代の遺物を転用した可能性がある。

平面形と出土土器の様相から、本遺構は弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI0029（第 58 図、図版 25・136・190・328）

3.8 × 4.0m、深さ 40cmの隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は見られず、24cmのａ、深さ 13cmのｂが検出されるのみで、ｂは貯蔵穴の可能性がある。中心軸上、やや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は伴わず、小穴が疎ら見られる。

床面には、炭化材・ロームブロック混じりの焼土が広く検出され、焼土層は５～ 10cmの厚さで確認されている。炭化材は、束になった葦・カヤ・竹に類する形状で、屋根等の建材に由来する可能性がある。調査記録には、焼土中に「鉄滓」が含まれるとの記述があり注目されるが、出土遺物中に鉄滓・鍛造剥片は確認できていない。平面図中の範囲は鉄滓の推定出土範囲である。

遺物は床面レベルで土器が出土している。安房形装飾壺由来の櫛描文区画壺１が炉内、壺２が炉周辺と南東隅近くに分かれて、小型鉢３が貯蔵穴ａ脇、炉器台４が南東隅から検出されている。いずれも中台式に属する。土器の他に礫２点が出土したとの記録があるものの所在不明である。

平面形と出土土器の様相から、本遺構は、弥生時代終末期前半に位置づけられる。調査時に認識された物質が鉄滓だとすれば、初期の鍛冶遺構である可能性も否定できないが、現時点において確定的な評価を行うのは困難と言える。

SI0030（第 59 図、図版 25・136・190・328）

3.6 × 3.4m、深さ 60cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴ａ、貯蔵穴ｂが検出されている。中心軸上、北寄りに楕円形の炉が設けられ、南東脇に同様の炉が伴う。床面周溝は北西部を除いて概ね連続し、南西隅には 1.2 × 0.8m程度、深さ 3cm前後のＬ字形小区画溝が竪穴主軸に合わせて掘られている。

床面のほぼ全体に焼土が堆積し、建材由来と見られる炭化物が伴う。部分的に屋根材と思われるカヤのような形状を保つブロックが見られる。建材の焼却処分が行われた可能性がある。

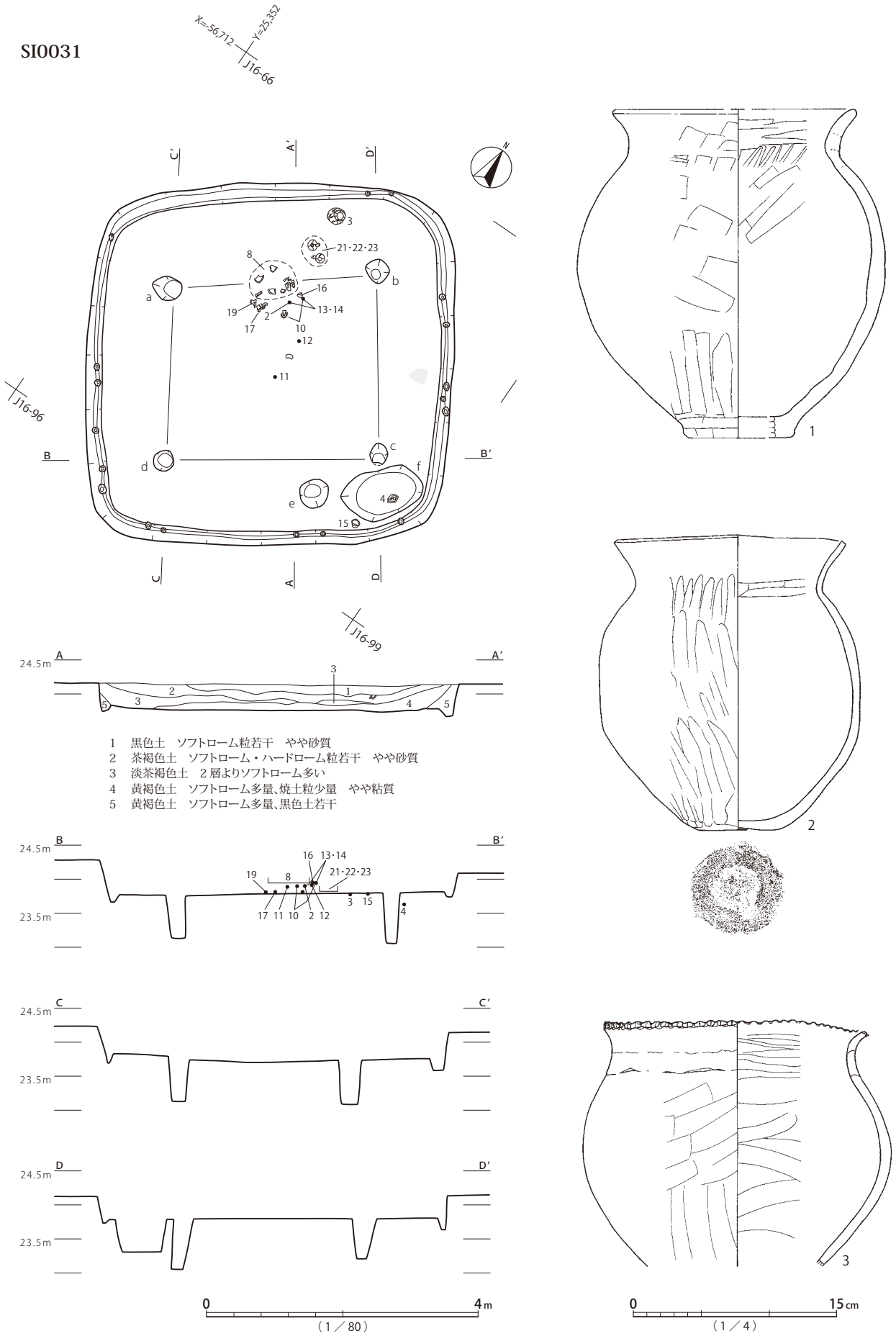
遺物は、床面レベルで土器が出土しており、竪穴廃絶に伴う儀礼の過程で残された器物の可能性が考えられる。貯蔵穴に落ち込んでいた可能性のある甕１、北辺中央寄りの甕２、杯部と脚部が分離していた高杯５があり、いずれも中台式の特徴を示す。

本遺構は出土土器から弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI0031（第 60・61 図、図版 25・26・136・137・190）

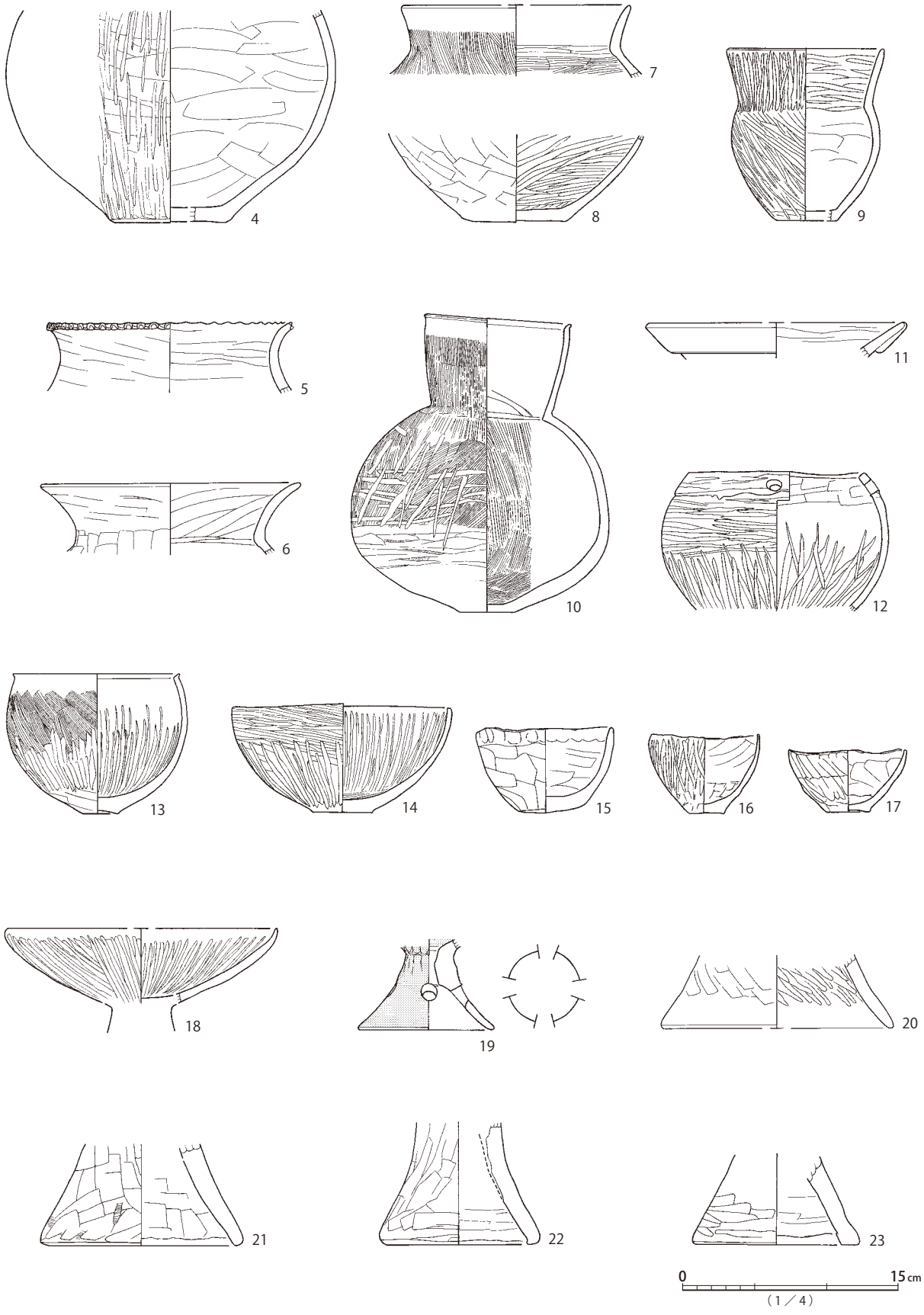
5.4m四方、深さ 40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴ａ～ｄ、ハシゴ穴ｅ、貯蔵穴ｆが認められる。調査記録上、炉は検出されていない。何らかの理由で使用期間が短く、被熱等の痕跡

SI0031

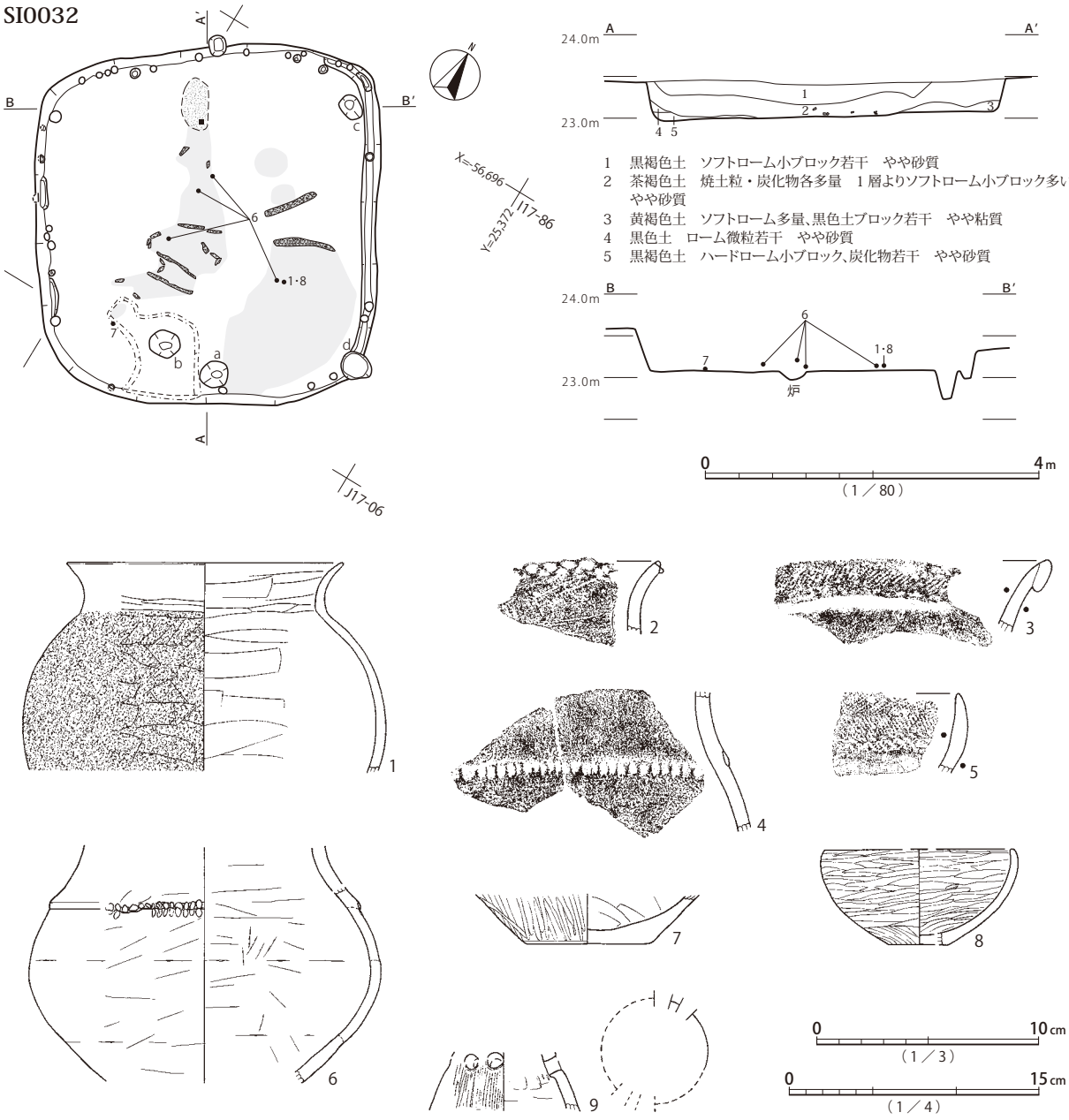


第60図 SI0031遺構、SI0031遺物(1)

SI0031



第61図　SI0031遺物（２）



第62図　SI0032遺構・遺物

がほぼ残らなかったためであろうか。床面周溝は全周し、小穴がやや疎らに伴う。

覆土は、下位の4・5層にソフトロームが大量に混じり、人為的な埋積が示唆される。床面レベルにおいて焼土が一部に認められる。

遺物は大まかに、出土レベルが床面近くと10cm程度高い位置に分かれる。床面からは、甕3、小型土器15・17、小型器台19、炉器台21・22・23、覆土下位からは、甕2・8、内弯傾向の直口壺10、壺11、椀12、鉢13・14、小型土器16、貯蔵穴覆土からは甕4が出土している。いずれも中台式の範疇で理解できる。完形に近い土器があり、小型土器が共通して含まれる様相と、一般的な炉の配置位置周辺に集中し、炉器台21 ～ 23が脇に伴う検出状況からすると、共伴する土器群と捉えることも可能である。竪穴廃絶の過程に伴う一連の遺物と見られる。

本遺構は、出土遺物の位置づけから、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。

SI0032（第 62 図、図版 26・137・190）

4.3 × 4.1m、深さ 45cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は不明確で、ハシゴ穴 a の他は b・c・d が比較的目立つ規模である。b については、周辺は床面から 20cm ほど高い位置で検出された硬化面であり、その上面から掘られているため、建物主柱穴である可能性は低い。床面はハードローム層に形成され、堅緻に締まる。中心軸上、北辺にかなり寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は東辺のみ連続し、他の壁際は小穴が断続的に認められる。

覆土は、床面上に炭化物混じりの焼土層が広く認められる。棒状の炭化物は建物部材に由来するものと見られ、建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

遺物は床面レベルから焼土中にかけて、甕 1・6・7、小型鉢 8 が出土している。くの字状口縁を持つ甕 1 は一見、草刈式のハケメ調整甕に似るが、工具ナデ仕上げで頸部屈曲も緩やかなため、中台式期と考えられる。無文の小型鉢 8 なども同時期として理解できる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0033（第 63 図、図版 26・137・191）

4.7 × 4.6m、深さ 5cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。床面に a ～ e が検出されているものの、主柱穴は不明である。a・c が柱穴でない場合は、深さ 43cm の b が貯蔵穴にあたると考えられる。中心軸のやや南寄り、東壁寄りの位置に円形の炉が設けられる。北辺・西辺の床面外周は幅 1m 前後で数 cm 高くなっており、調査記録には内側の低い側の床面のみが相対的に堅緻であるとの記述がある。ベッド状遺構の痕跡とも考えられるが、南東部床面は連続しており、断定できない。土層断面の記録はなく、竪穴建物の拡張や建て替えが行われたか否かも不明である。床面周溝は全周し、部分的に小穴が伴う。

遺物は、床面レベルから土器 1 ～ 8・12 が出土している。ハケメ調整台付甕 2、甕 4 は非在地的な形式で、甕 3 も口縁端部の櫛状工具による刻目状刺突文に在地的形態との折衷的様相が認められる。11 は高杯杯部に似るが破断部幅が脚柱部としてはかなり細いため、蓋の可能性がある。受口状口縁甕 5 は S 字状口縁台付甕とは異なる系統の外来系土器と見られる。いずれも中台式期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土土器の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

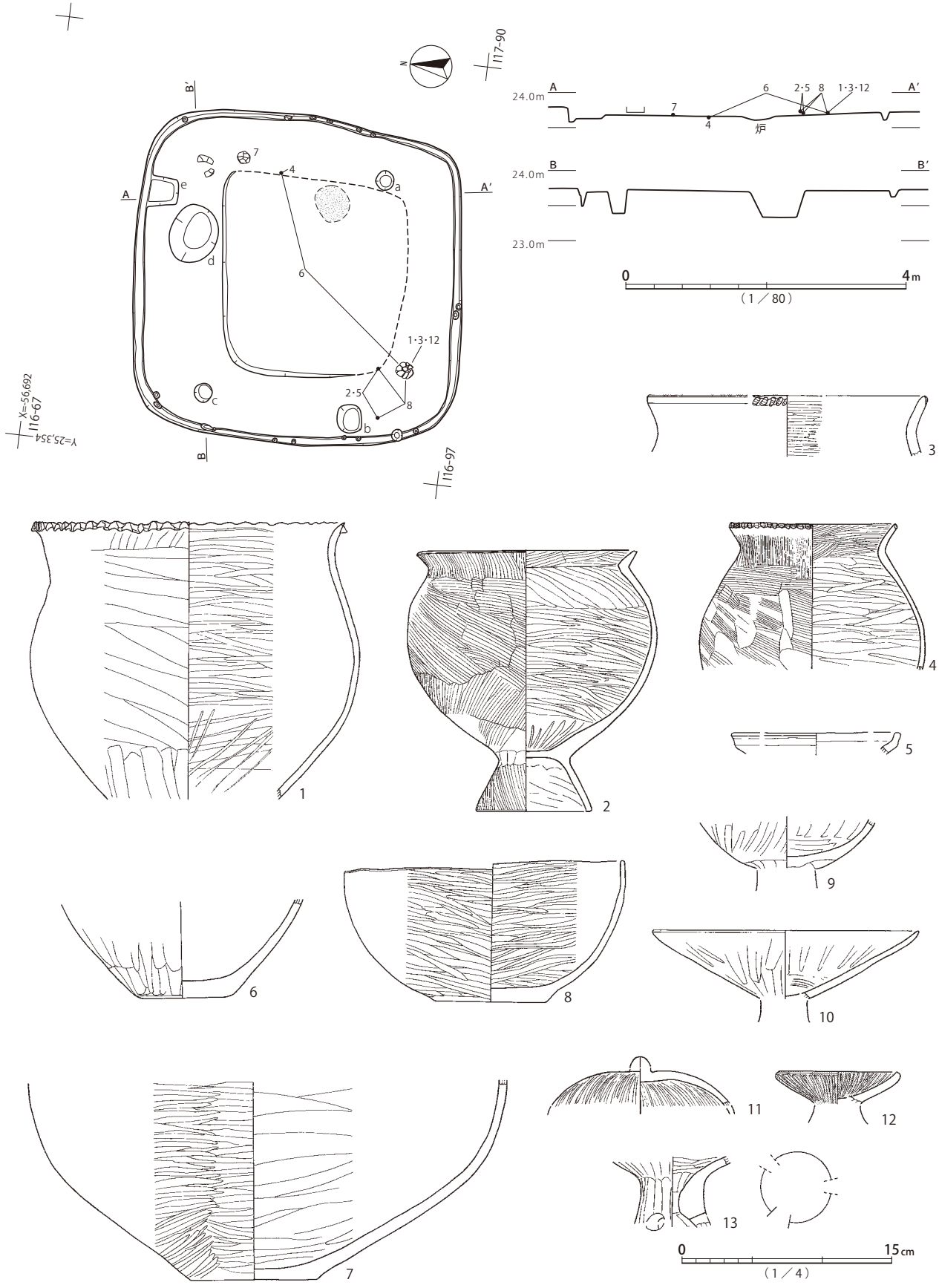
SI0034（第 64 図、図版 26・27・137・138・191）

5.1 × 4.9m、深さ 35cm 程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴 a ～ d、貯蔵穴 e が検出されている。床面周溝は南東部のみに見られ、西側は小穴の連続が認められる。中心軸上北寄り、a・b 間ラインと交差する位置に炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

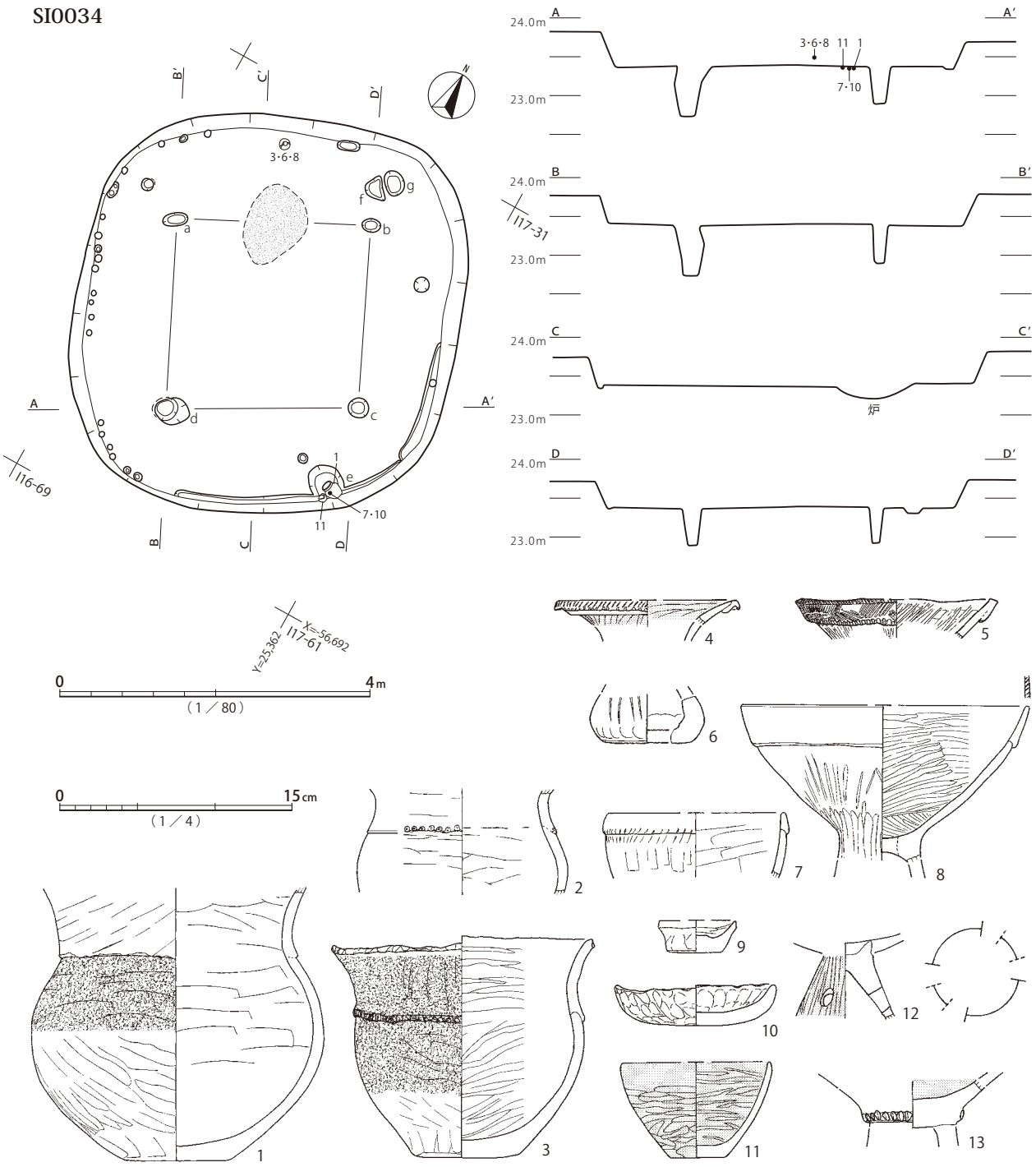
遺物は床面レベルを中心に出土しており、貯蔵穴と炉の北側に集中を見せる。甕 1・3 の外面には被熱による炭化物付着と黒変が目立つ。高杯 8 は杯口縁部側面が無文化しており、無文の小型鉢 11 とともに弥生時代後期末から終末期前半の特徴を示す。小型土器 6 は一見、炉器台受部にも見えるが、縦方向の沈線が 4 本描かれており、壺の文様イメージに基づく可能性がある。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半、中台 1 式期の所産と考えられる。

SI0033



第63図　SI0033遺構・遺物



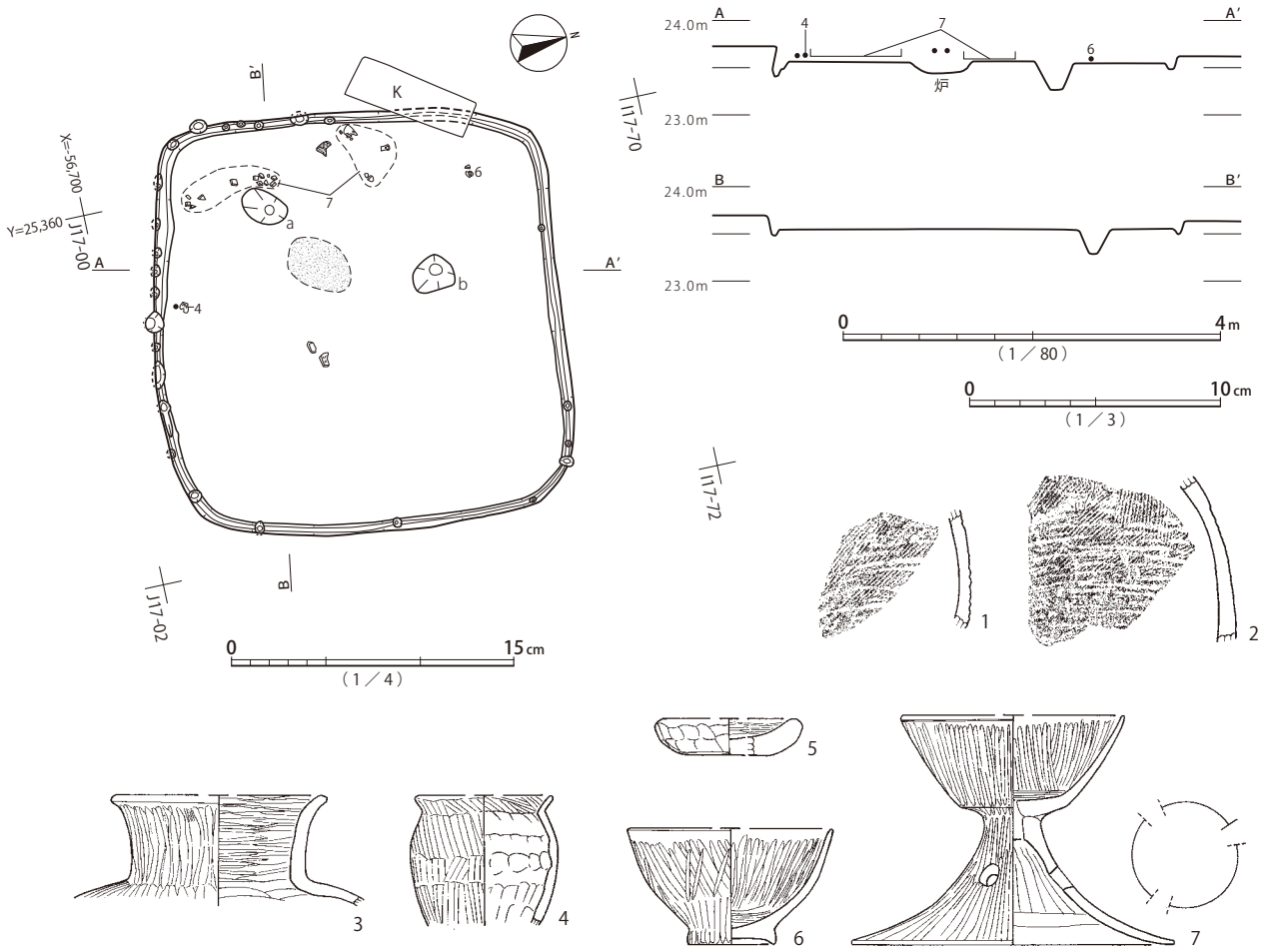
第64図　SI0034遺構・遺物

SI0035（第 65 図、図版 27・138・191）

4.5 × 4.3m、深さ 15cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、深さ 26cmのa、31cmのbが目立つ程度である。中心から南西隅に寄った位置に炉が設けられる。床面周溝は全周し、小穴が伴う。南辺の小穴には壁面に抉り込んだ形態が見られる。床面はソフトロームで形成されるが、硬化している。

遺物は床面レベルにおいて、炉と西壁の間を中心に西側で多く出土している。小型鉢6は高台状の底部が特徴的でヘラミガキが底面に及ぶ精製品である。高杯7は破片が散らばった状態で検出さ

SI0035



第65図　SI0035遺構・遺物

れている。タタキ調整甕1・2は覆土一括取り上げ遺物だが、他の土器との共伴関係に齟齬はない。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0036（第66図、図版27・191）

4.1×4.0m、深さ20cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるaが検出されている。中心軸上西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いは弱い。

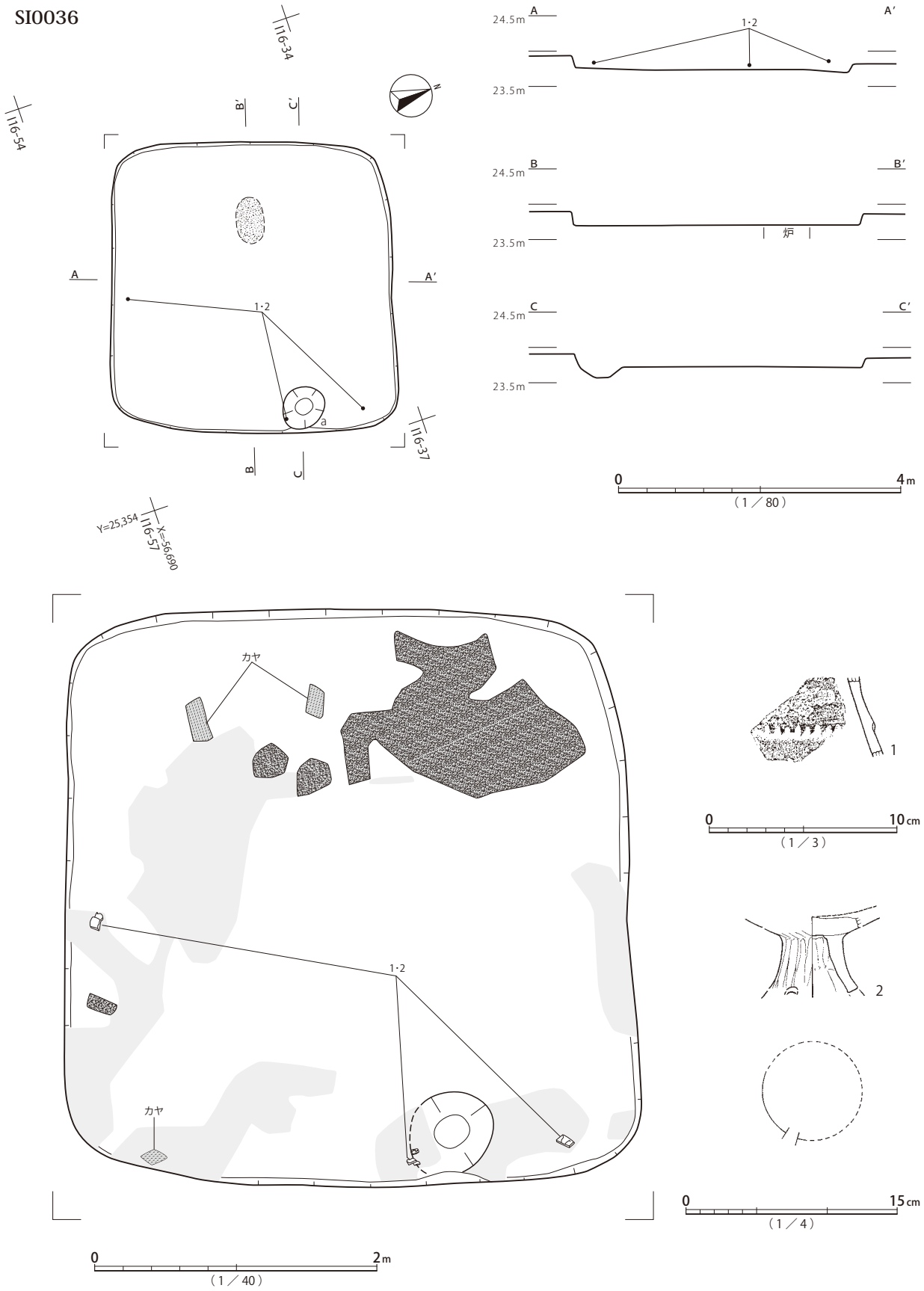
床面直上には、焼土・炭化物が広く検出されており、廃絶時に火の伴う処分が行われた可能性が高い。炭化物には屋根材と見られるカヤ状の単位も認められる。土器片も焼土に混入して検出されている。

図化できた遺物は甕1と高杯2だけであり、建物が不時に廃絶したようには見えない。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

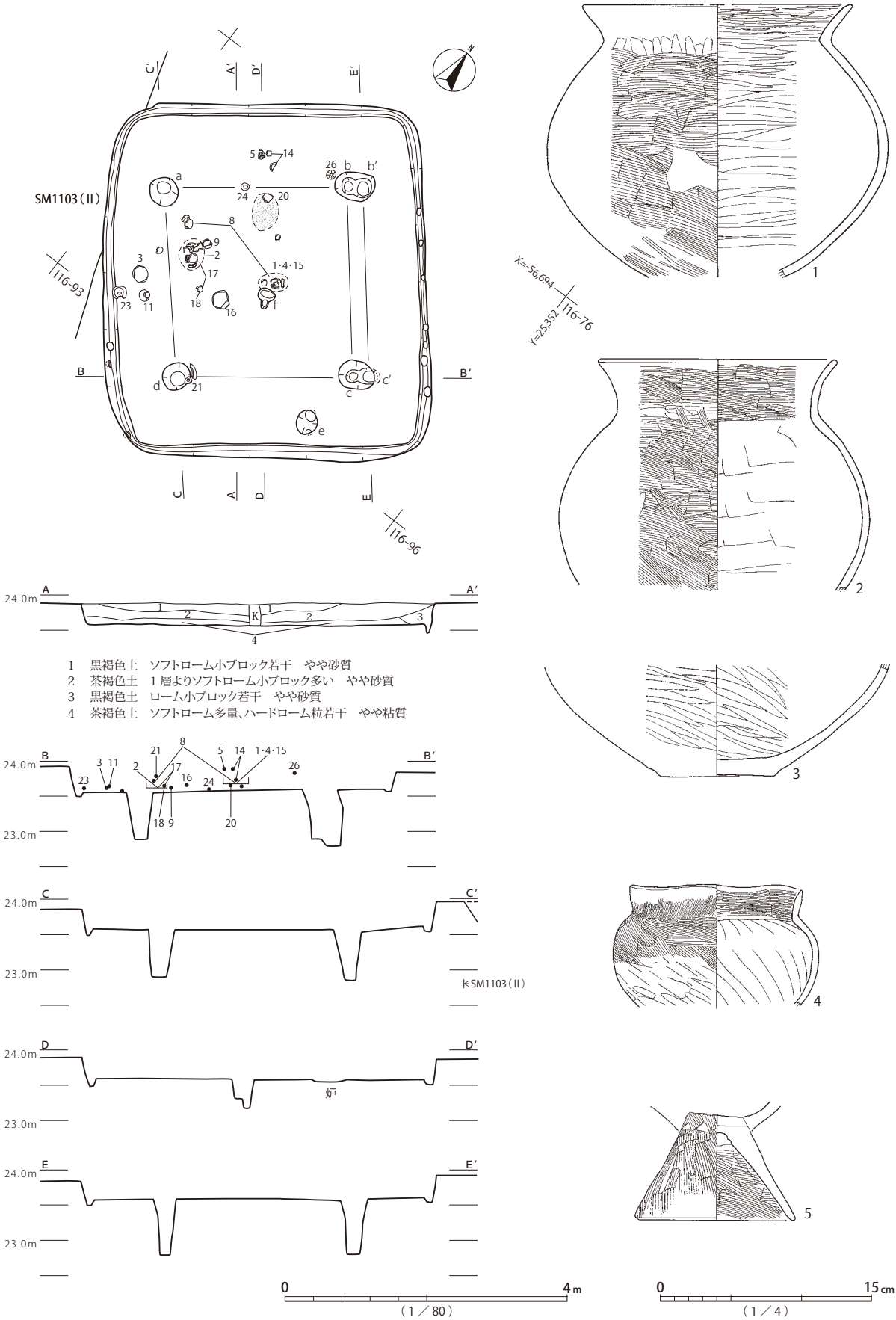
SI0037（第67・68図、図版27・56・138・191・192・328）

5.0×4.6m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴と見られるe



第66図　SI0036遺構・遺物

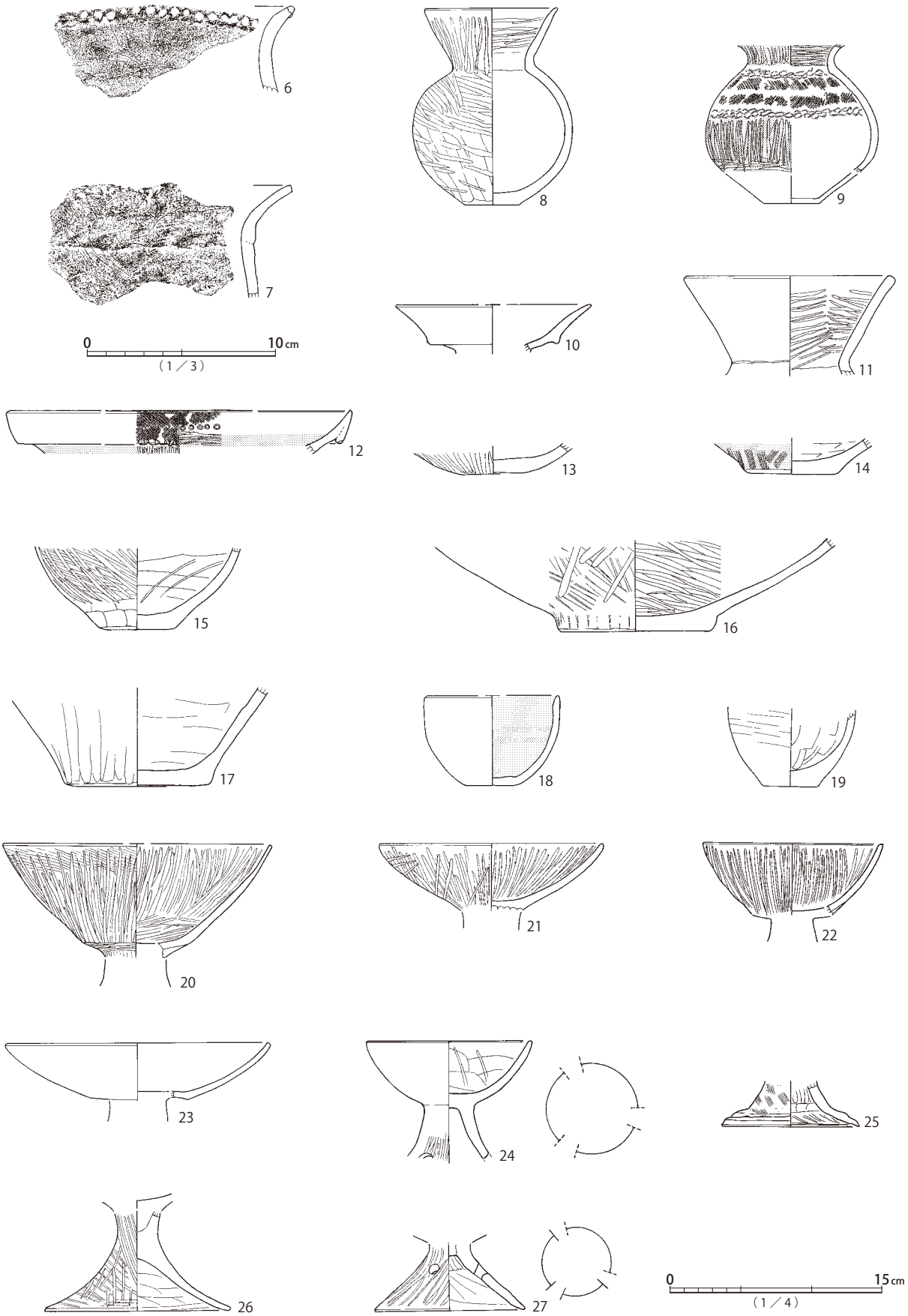
SI0037



1　黒褐色土　ソフトローム小ブロック若干　やや砂質
2　茶褐色土　1層よりソフトローム小ブロック多い　やや砂質
3　黒褐色土　ローム小ブロック若干　やや砂質
4　茶褐色土　ソフトローム多量、ハードローム粒若干　やや粘質

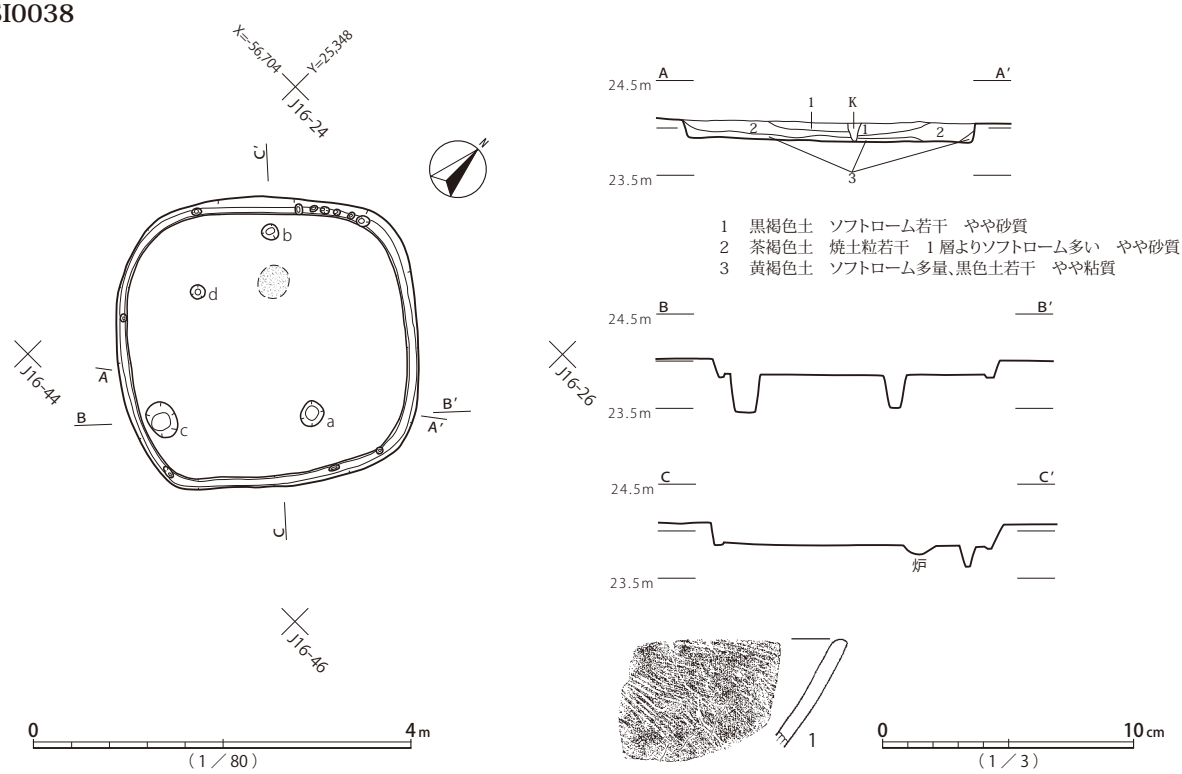
第67図　SI0037遺構、SI0037遺物（1）

SI0037



第68図　SI0037遺物（２）

SI0038



第69図　SI0038遺構・遺物

が検出されている。b・c列については、それぞれb'・c' が外側に伴い、組み合わせの先後関係は不明だが、建物の更新が行われたと考えられる。中心軸上、a・b間より内側に楕円形の炉が設けられる。炉の被熱の度合いは弱く、利用期間が短かった可能性がある。床面周溝は全周し、疎らに小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、やや軟弱だが、柱間は楕円形の範囲で硬化する。SM1103東側周溝と重複し、竪穴西隅近くが破壊されている。

遺物は床面近くから上位にわたって出土している。上層からは、台付甕5、壺14、高杯21・26など、下位からは、甕1・2、小型甕4、小型壺8・9、小型鉢18などが検出されている。甕1はハケメの施されたくの字状口縁甕だが、口縁内面をヘラミガキで仕上げる特徴があり、頸部屈曲の緩やかな甕2と共に過渡的な様相を示す。壺9は結節文区画の単節縄文帯が施される在地的な特徴を残すが、頸部屈曲が明瞭化し、文様も1帯化しており、壺8の直口壺と同時期の所産と考えられる。小型鉢18が組成する点も勘案すると、大部分の土器は中台2式に位置づけられると思われる。

本遺構は平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半に帰属すると考えられる。

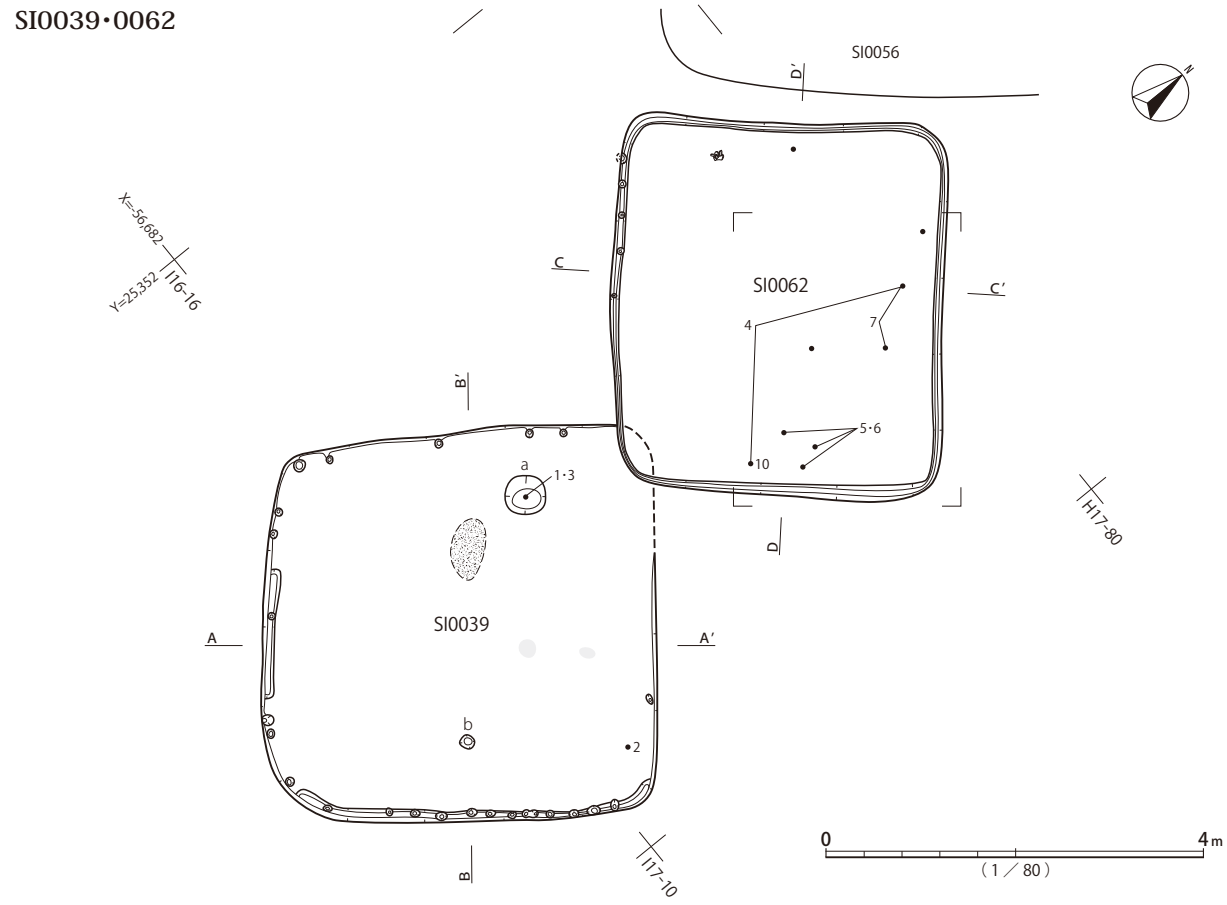
SI0038（第69図、図版27・192）

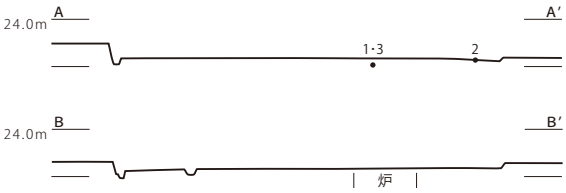
3.0×3.2m、深さ20cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴と見られるa他が検出されるのみである。中心軸上、北寄りに円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、一部に小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、あまり硬化していない。

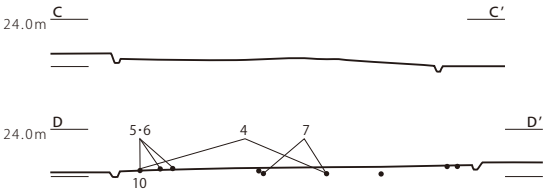
覆土は、初期のロームが多く混じる層から漸移的に自然堆積した状況が読み取れる。

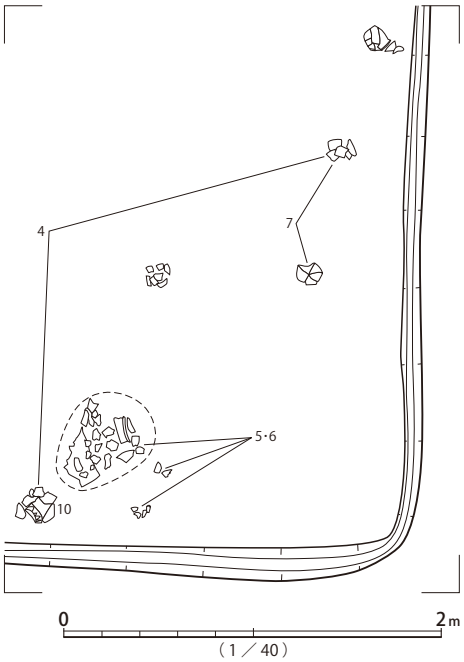
出土遺物は僅少で、覆土一括取り上げ資料の鉢1が図化できた程度である。

SI0039・0062

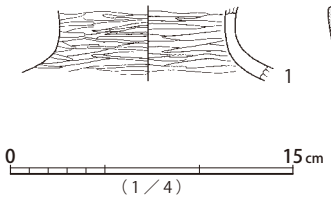


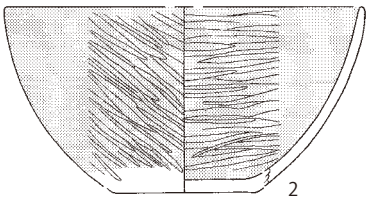


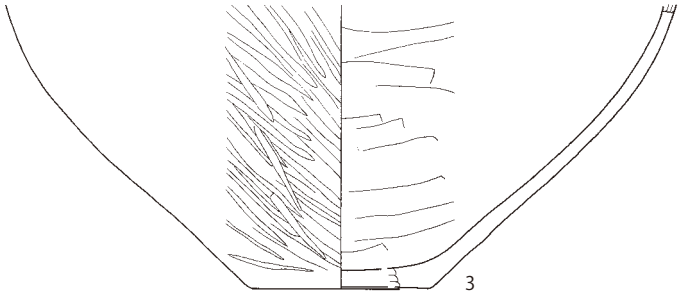




SI0039

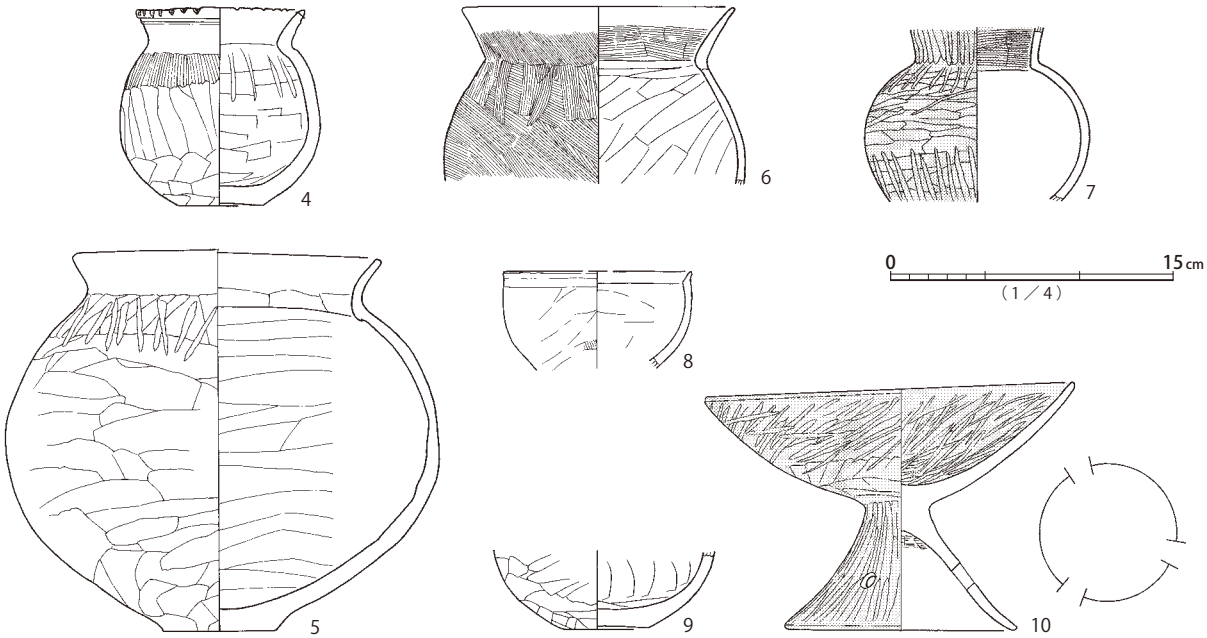






第70図　SI0039・SI0062遺構、SI0039遺物

SI0062



第71図　SI0062遺物

本遺構は平面形と出土土器から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0039・SI0062（第 70・71 図、図版 2・27・146・192・196）

4.1m四方、深さ 10cm程度の隅円方形竪穴建物跡のSI0039と、4.0×3.5m、深さ数cmの隅円方形竪穴建物跡SI0062である。SI0039北隅とSI0062南隅が切り合う。

SI0039には主柱穴が認められず、a・bが検出された程度である。bがハシゴ穴に相当する可能性がある。中心軸上、西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南側の2辺において断続的に検出され、部分的に小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いはやや弱いが、中央部は比較的堅緻である。

覆土はほとんど削平されており、遺存状態は良くない。一部に焼土が検出されている。

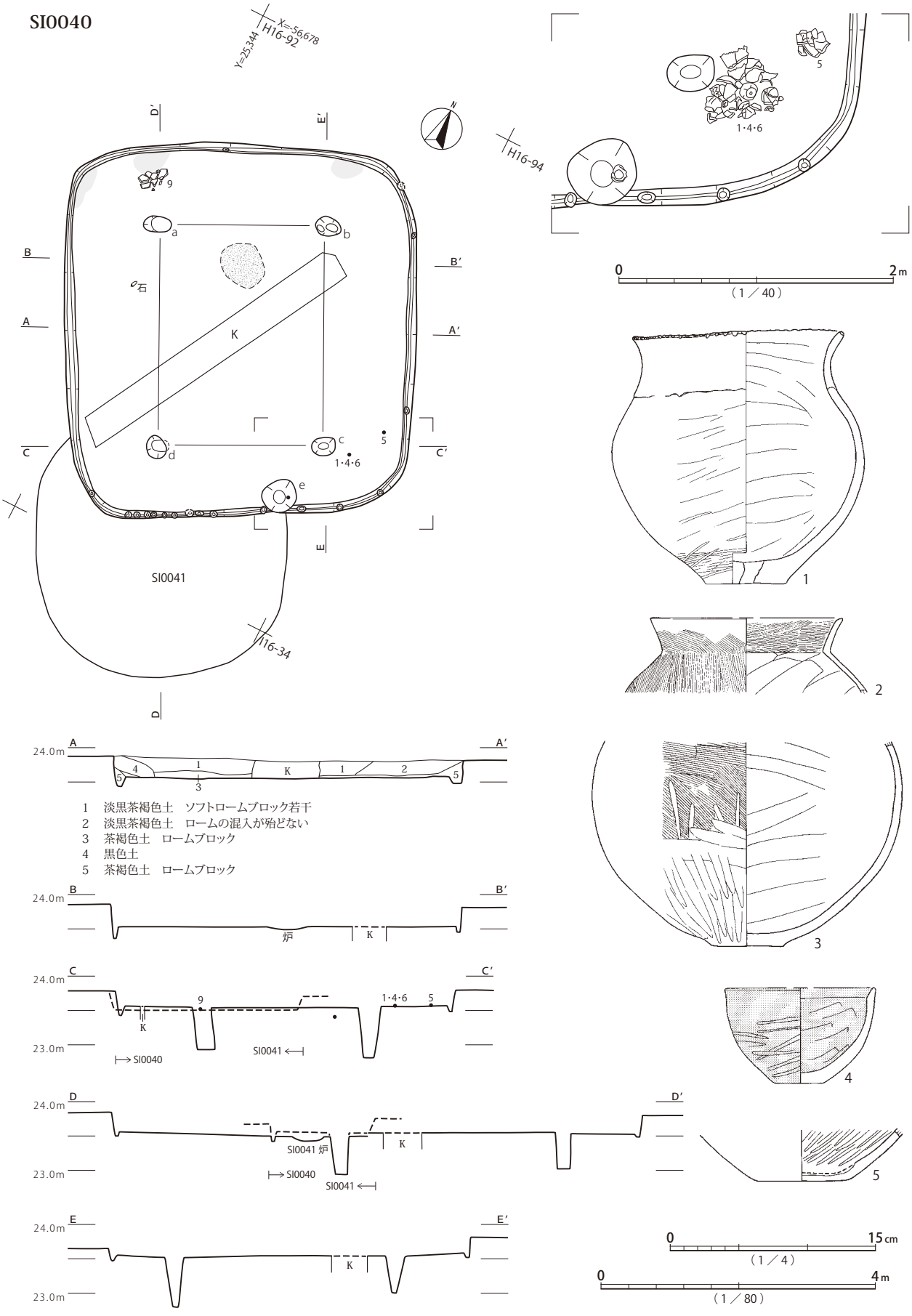
遺物は床面レベルで無文の鉢2、ピットa内から壺1・3が出土している。いずれも中台式に位置づけられる。

SI0062には床面施設がまったく検出されていない。床面周溝は全周し、南西辺の一部に小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、使用面が不明瞭である。

覆土はほぼ遺存せず、SI0039より遺存状態が悪い。

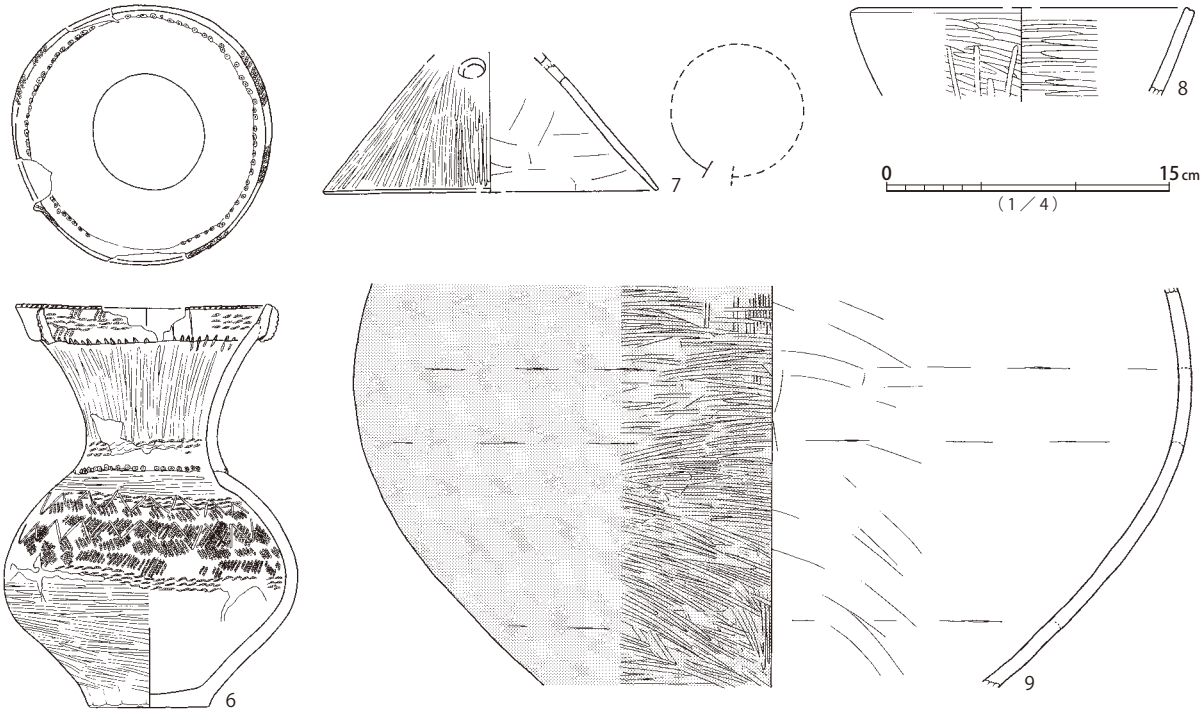
遺物は床面レベルから、小型甕4、甕5・6、小型壺7、高杯10が出土している。小型甕4は口縁端部に、交互押捺ではなく、ハケメ原体による刻目状刺突文が施される。4・5・6・7とも頸部が明確に屈折しており、草刈式の特徴を示す。小型甕4の装飾と、ハケメをナデ消した甕5の過渡的様相を勘案すると、草刈1式に位置づけられる。

出土遺物の比較から、SI0062がSI0039を切って構築されていると考えられる。SI0039が弥生時代終末期、中台式期、SI0062が古墳時代前期前半、草刈1式期に位置づけられる。



第72図　SI0040遺構、SI0040遺物（1）

SI0040



第73図　SI0040遺物（２）

SI0040（第 72・73 図、図版 28・138・139・192・328）

5.4 × 5.1m、深さ 30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a・b・c・d、貯蔵穴と見られるeが検出されている。中心軸上、やや北寄りの位置に、不整円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、一部に小穴が伴う。柱間の床面は比較的堅緻で、中央付近がやや軟質である。

弥生時代後期竪穴建物跡SI0041の北東部を破壊して構築されている。床面レベルは若干、SI0040の方が高い。

覆土は漸移的で、焼土の集中が北壁沿いに見られる他は、人為的な埋め戻し土による堆積は記録されていない。

遺物は床面直上から、甕1、小型鉢4、鉢5、壺6が出土している。いずれも弥生時代終末期前半、中台１式に位置づけられる。草刈式の特徴を示す甕2・3については、「東側表採」の注記を持ち、遺構外で検出された遺物の可能性が高い。

本遺構は平面形と出土遺物の様相から弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

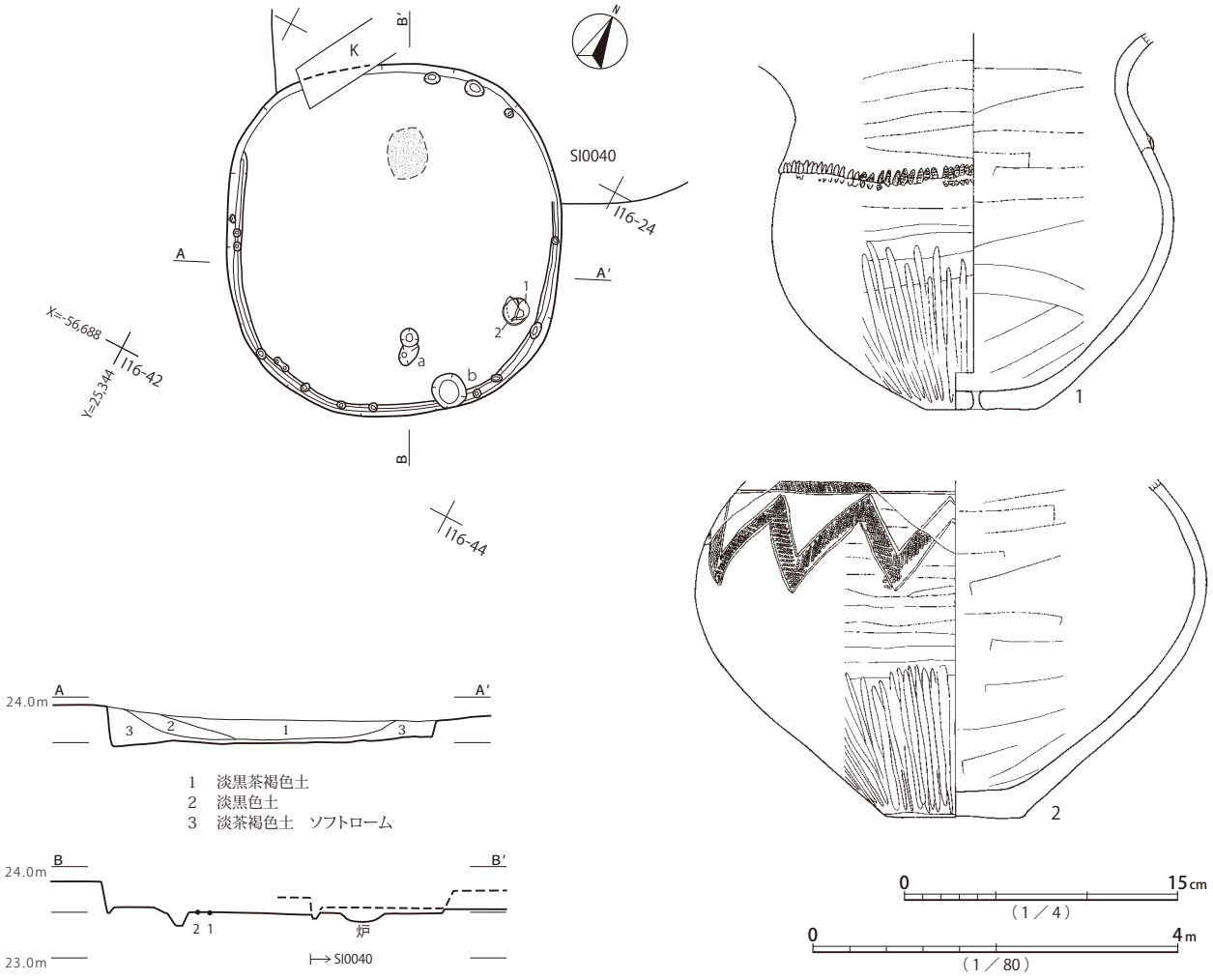
SI0041（第 74 図、図版 28・139）

3.8 × 3.7m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は見られず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。中心軸上、北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南側においてU字形に連続し、部分的に小穴が伴う。床面は中心軸沿いの長楕円形に踏み締められている。

北東部がSI0040と切り合い、破壊を受けている。

覆土は、漸移的な堆積状況を示している。

SI0041



第74図　SI0041遺構・遺物

遺物は東壁近くの床面から、甕転用甑1と壺2がまとまって出土している。

本遺構は弥生時代後期前半、久ヶ原式期の所産と考えられる。

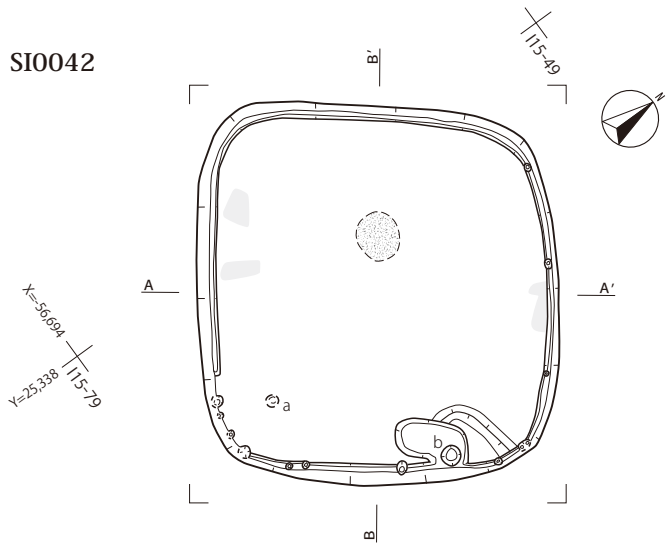
SI0042（第 75 ～ 80 図、図版 15・16・28・29・129・139・140・141・142・192・193・299・328・329）

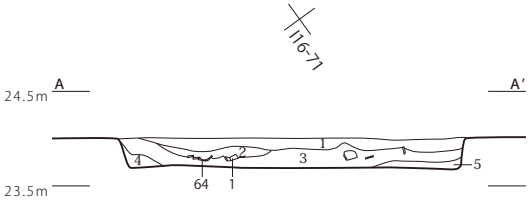
4.0 × 3.8m、深さ 30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められない。貯蔵穴の可能性があるbが検出され、蓋受けとしての機能は不明ながら、堤状の高まりが北側床面に認められる。中心軸北西寄りに円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成されるが、比較的堅緻に踏み締められる。床面周溝はほぼ全周し、一部に小穴が伴う。

覆土は、壁際の床面近くに炭化物混じりの焼土層が多く検出されている。建物・建材の焼却処分が行われた可能性が高い。

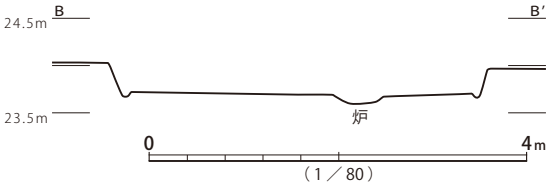
遺物は、覆土中位を中心に、多量の土器が出土している。第3層の埋没過程に集中を見せ、同時期の遺物の集積と見られる。台付甕と、くの字状口縁甕は非在地的な形式だが、ナデ・ヘラミガキ仕上げの台付甕2・8、頸部屈曲が緩くナデ仕上げの平底甕10・12など、過渡的な様相が認められる。輪台技法による土器底部23・24・26 ～ 29、タタキ調整甕34 ～ 36・38 ～ 42、受口状口縁甕37・

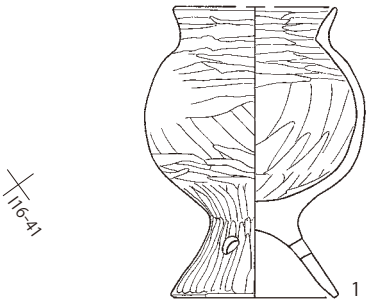
SI0042

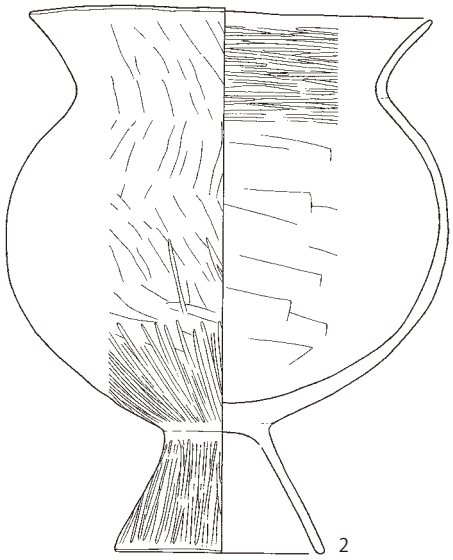


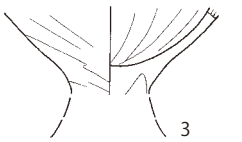


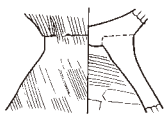
1　淡黒褐色土　ソフトローム若干、焼土微粒　砂質
2　茶褐色土　ソフトローム、焼土粒若干　やや粘質
3　黒褐色土　ソフトローム若干　1層よりソフトローム少ない　砂質
4　黄褐色土　部分的に黒色土　粘質
5　淡茶褐色土　焼土粒多量、炭化物　砂質

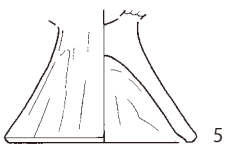


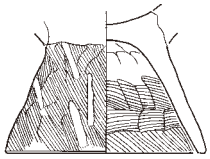


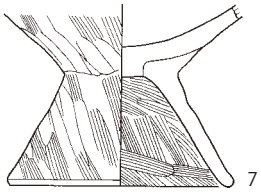


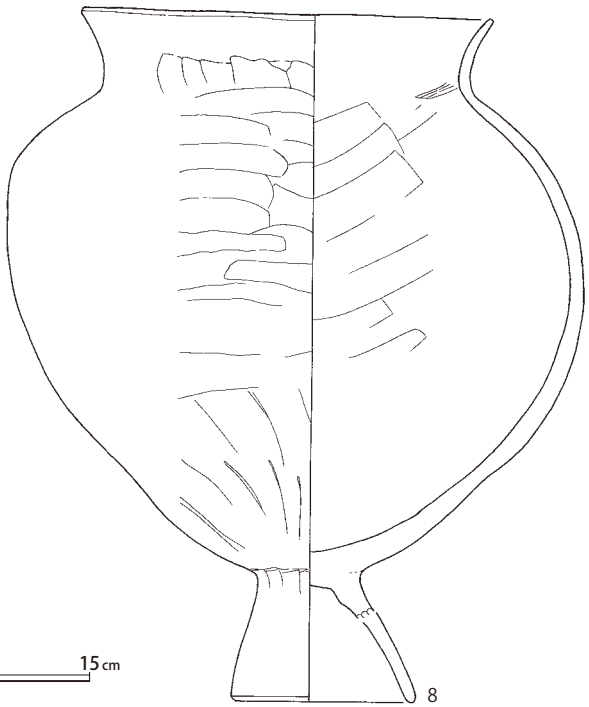


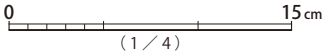






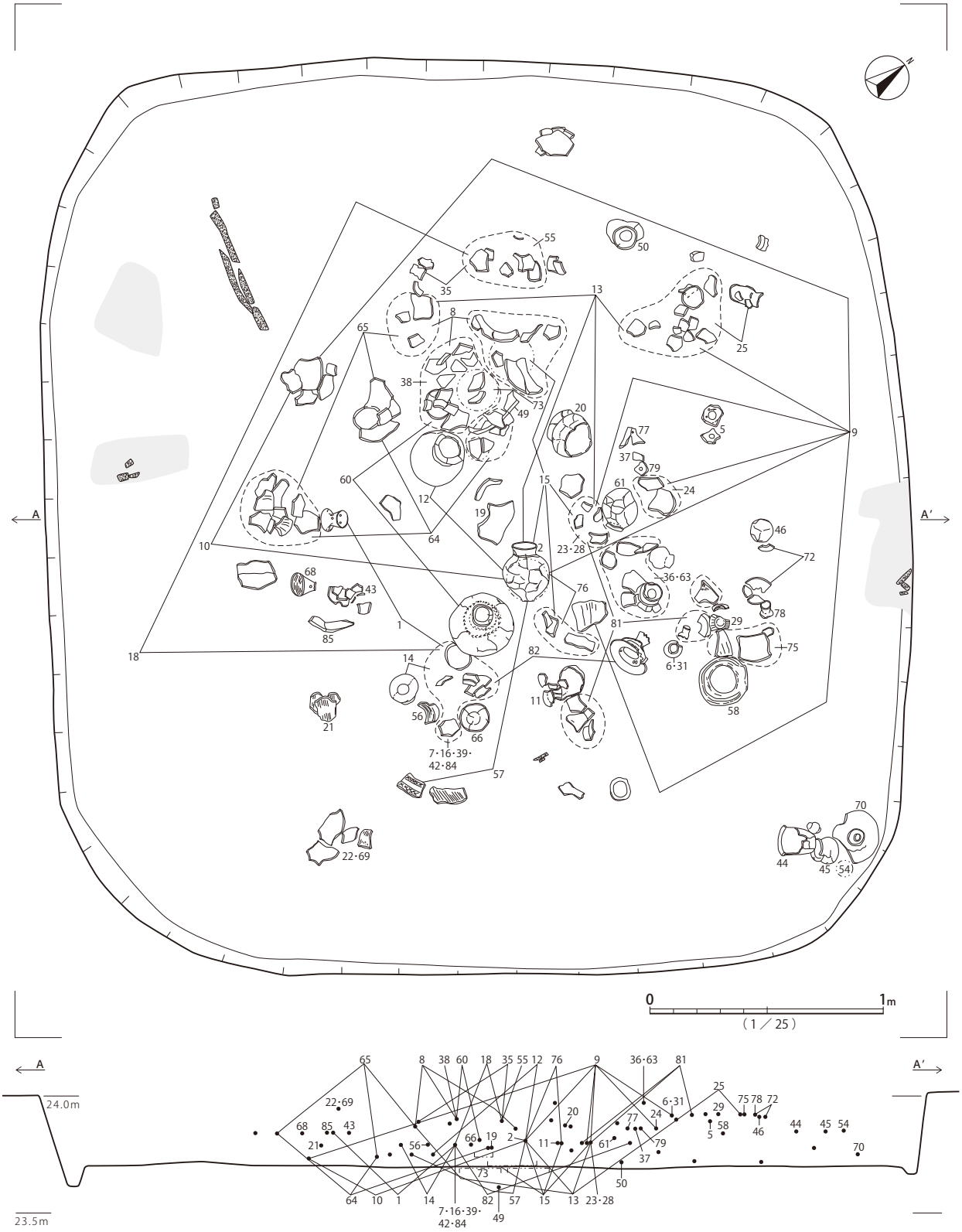






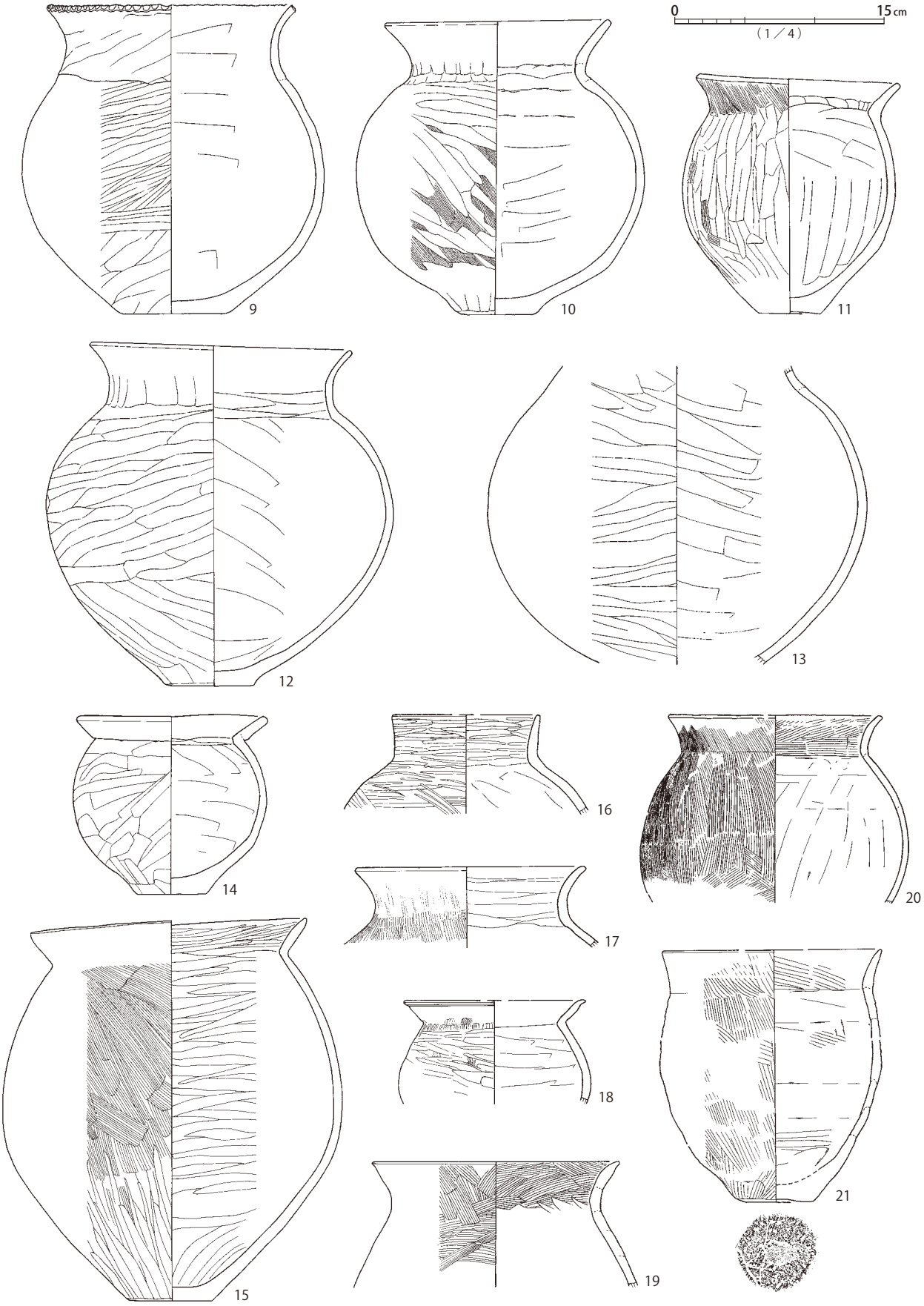
第75図　SI0042遺構(1)、SI0042遺物(1)

SI0042



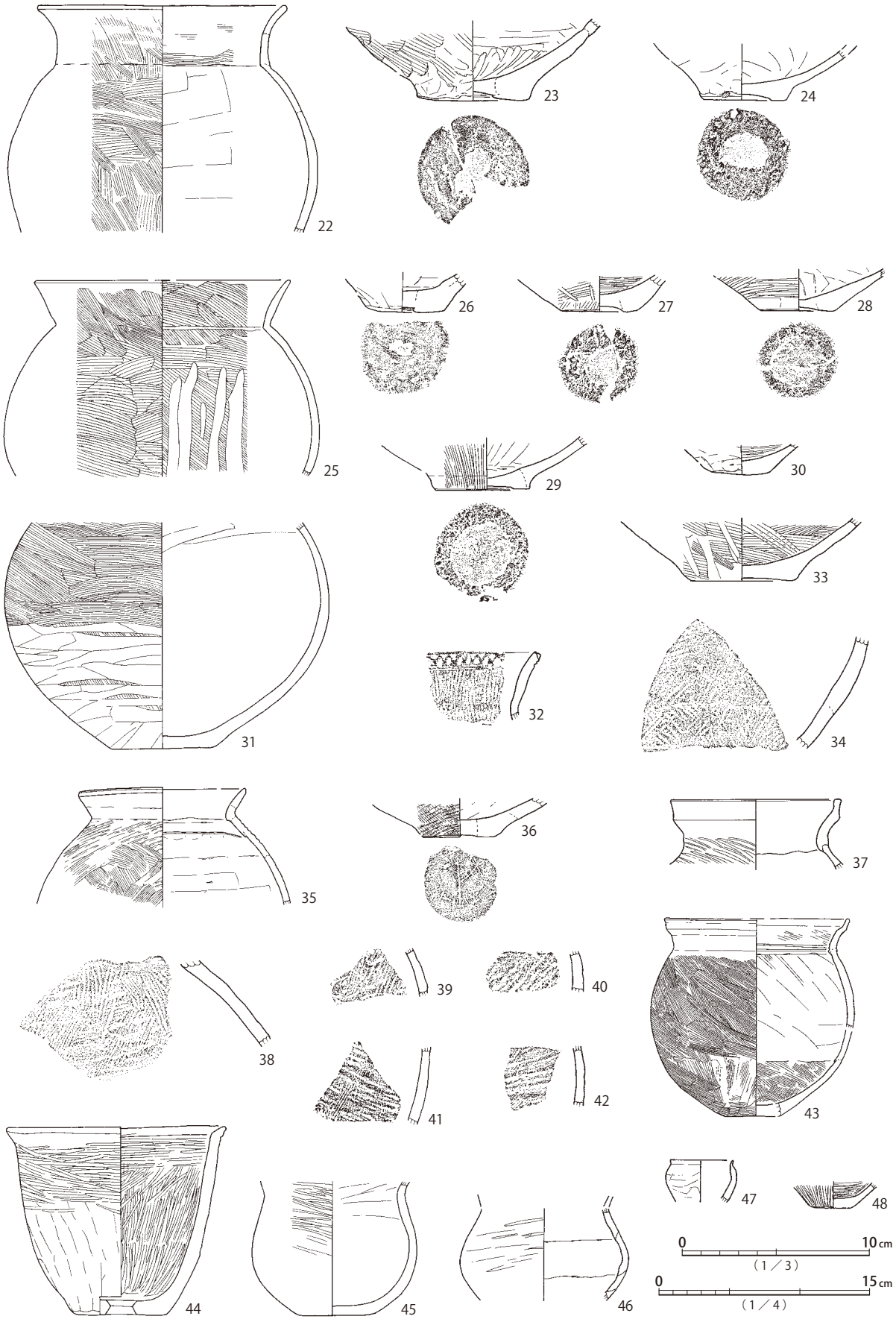
第76図　SI0042遺構（2）

SI0042



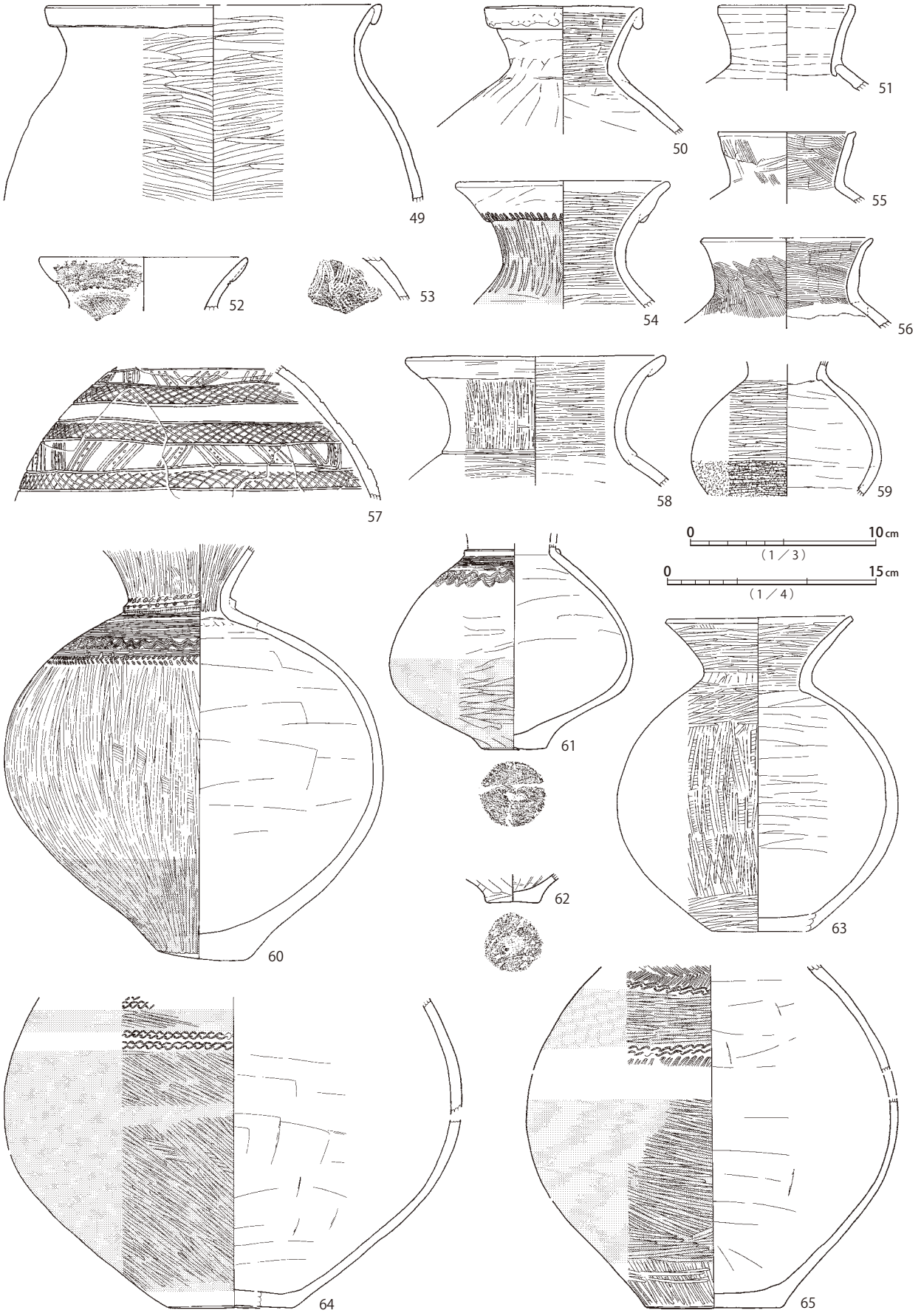
第77図　SI0042遺物（２）

SI0042



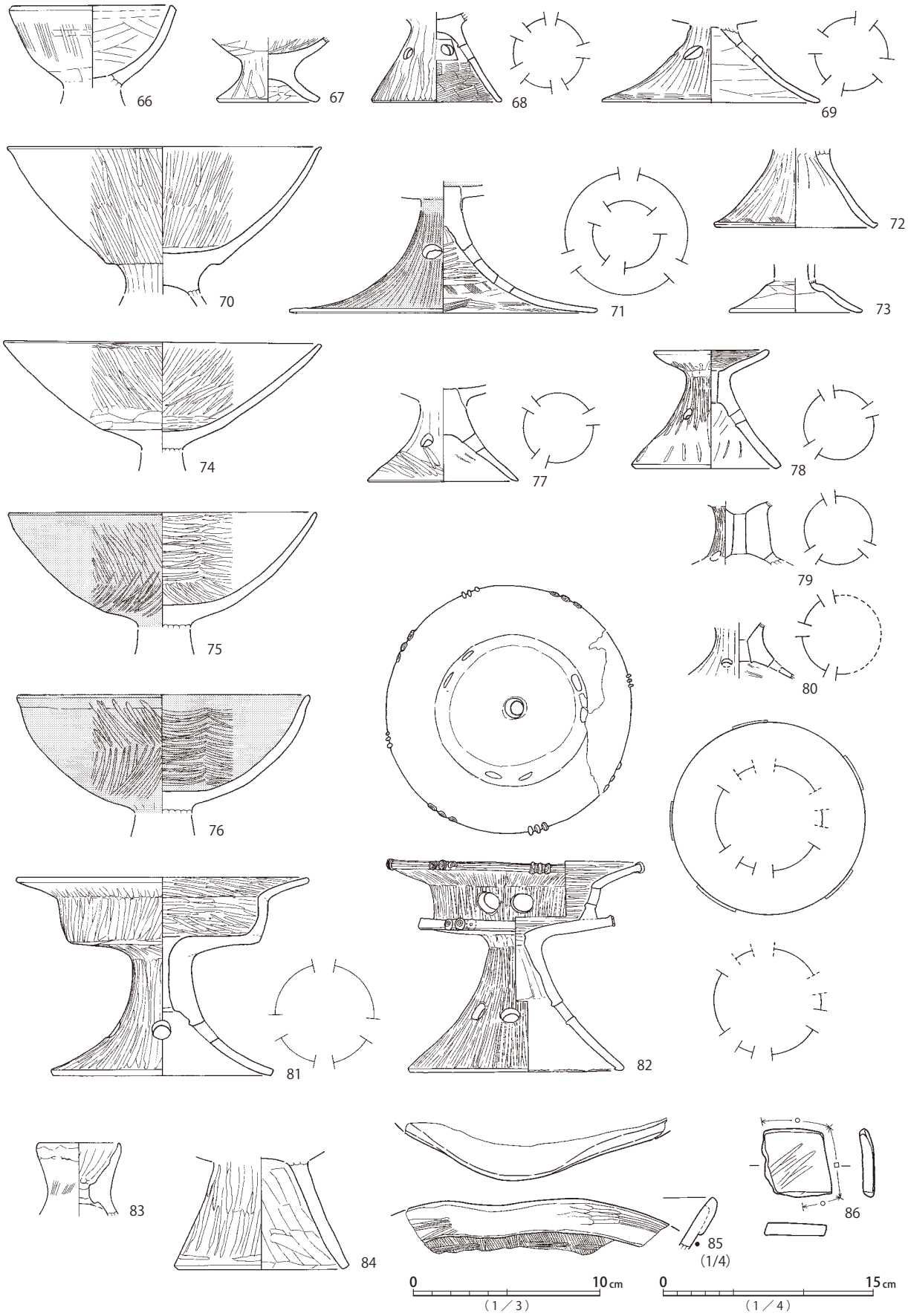
第78図　SI0042遺物（３）

SI0042



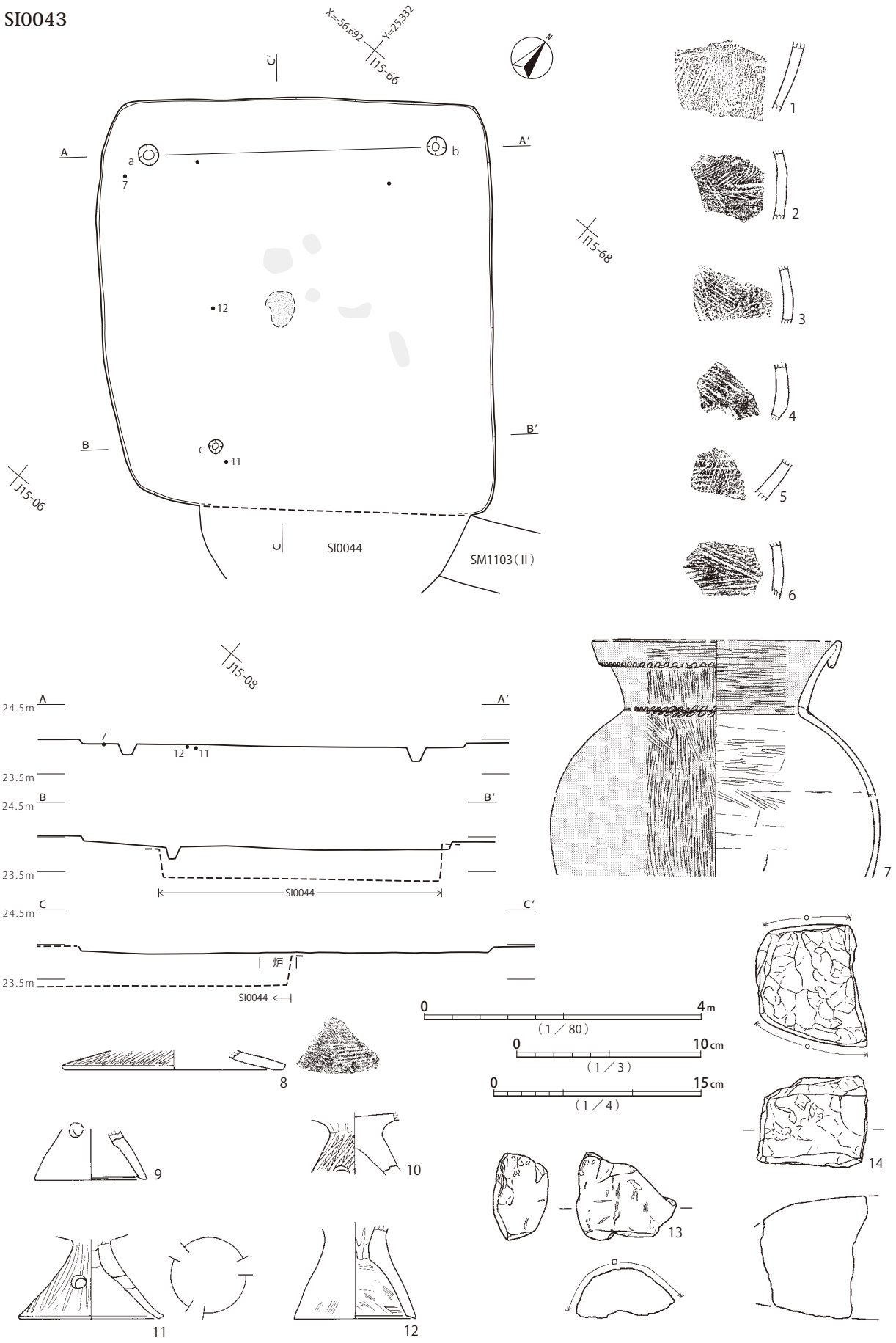
第79図　SI0042遺物（4）

SI0042



第80図　SI0042遺物（5）

SI0043



第81図　SI0043遺構・遺物

43も外来系の技法と形式である。壺は在地的な結節文区画の壺64・65の他、網目状撚糸文帯を持つ安房形系統の57と東海西部系と見られる櫛描文壺60・61が認められる。高杯は東海西部系が多く（68 ～ 76）、小型器台78等も同系と見られる。ほぼ完形の装飾器台81・82については、82が古墳時代前期に増加する装飾器台（結合器台）の起源的な形態を示す。85は片口を持つ大型鉢と見られる特殊な形態を呈する。いずれも弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。その他、土器片転用砥石86が出土している。

出土量の多さに加えて、多器種が組成し、装飾器台や大型片口土器という特殊な形態が含まれる点を勘案すると、他遺構の例と比べ、一竪穴建物跡の処分に関わる儀礼として規模が合致しないようにも感じられる。複数系統の外来系土器が組成する様相は、弥生時代終末期の時代背景によるもので、規模の大きさは関係する社会集団の広さを反映している可能性がある。諏訪台1号墳等、周辺における墳墓築造等との関連性を含め、検討が必要である。

本遺構は、覆土中位の土器群が弥生時代終末期、中台式期に属することから、同じく中台式期の所産と考えられる。建物機能時と土器群堆積時の時間差は確実に存在するものの、土器型式に想定される時間幅に概ね収まると考えておきたい。

SI0043（第 81 図、図版 29・142・194・302）

5.9×5.6m、深さ10cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴はa・bを想定することもできるが、配置は不明瞭である。炉は床面中央付近に設けられるが、周辺の焼土との差は小さいように見受けられ、不確定である。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いは弱い。床面周溝は見られない。

SM1103周溝とSI0044北部と切り合う。覆土はほぼ遺存しないが、検出状況から、切り合うSI0044の覆土上層にSI0043床面が構築されたと想定される。

遺物は、広口壺7、高杯11、小型器台12が床面から出土している。覆土一括取り上げ資料だが、タタキ調整甕1 ～ 5や、内弯気味の高杯脚部9も含まれることから、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、軽石製砥石13、輝石安山岩製石皿14が出土している。

本遺構は出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期の所産と考えられる。

SI0044（第 82 図、図版 29・194）

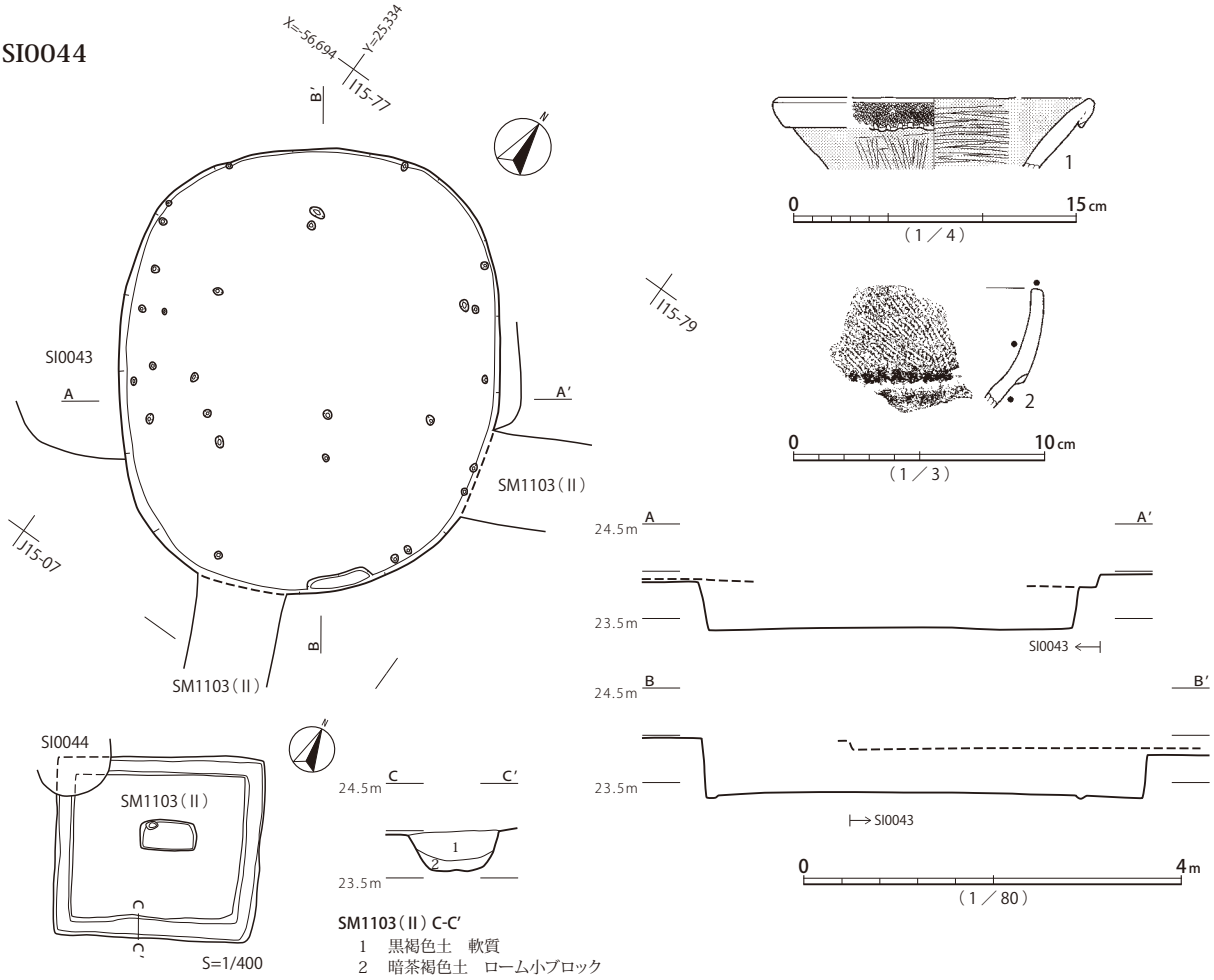
4.7 × 4.0m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は見られず、直径10cm前後の小穴が多数検出されている。床面はハードローム層に形成され、全体的に平滑かつ堅緻である。

土層断面記録がないため位置は不明だが、中央部やや東寄りに焼土集中部が3箇所、検出されたとの記述が残る。

SI0043とSM1103と切り合い、両遺構に破壊を受けている。なお、SPC-C’はSM1103周溝覆土の土層断面図である。

遺物は、弥生土器の壺1・鉢2が覆土一括取り上げ資料として出土したのみである。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半に帰属すると考えられる。



第82図　SI0044遺構・遺物

SI0045（第 83 図、図版 2）

5.9？×5.0？mの規模が推定される竪穴建物跡である。竪穴は削平され、覆土はまったく遺存しないため、平面形は不明である。主柱穴a～dが検出されている。a・b間ライン上、やや東寄りの位置に長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、若干硬化している。

SI0043とSI0046の間に位置するが、両遺構覆土にSI0045の痕跡が認められないことから、両遺構の間に収まる規模と平面形だった可能性が高い。

本遺構は、遺物が出土していないため積極的な根拠を持たないが、推定平面形から弥生時代後期の所産と考えられる。

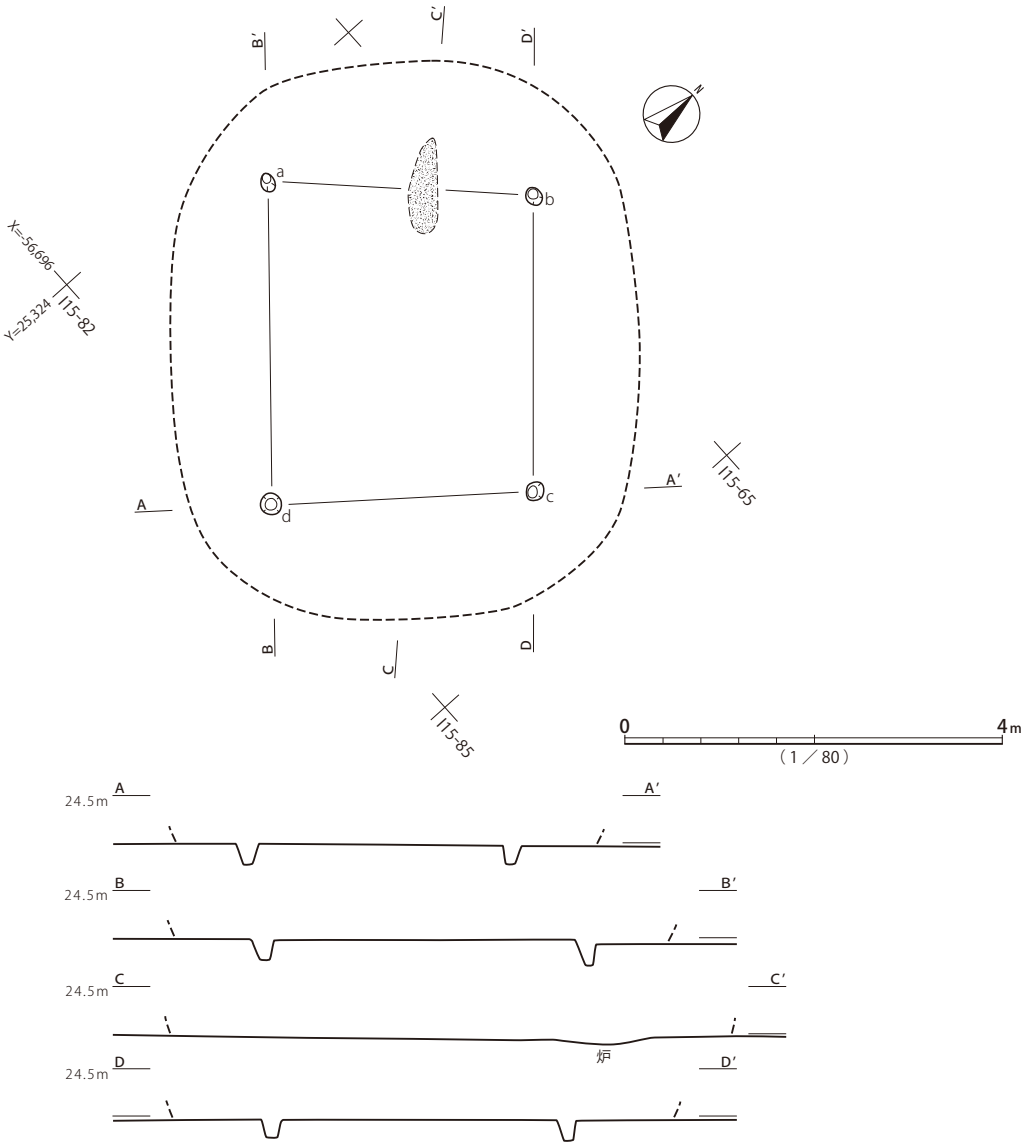
SI0046A・B（第 84 図、図版 29・142・194）

4.4×4.3mの隅円方形竪穴建物跡である。2段階の床面が形成されており、上層をSI0046A、下層をSI0046Bとする。Aが30cm程度の深さ、Bがそこから約15cm下がったレベルに貼床が構築されている。床面周溝の位置が一回り外にあることから、AはB段階の竪穴を拡張して、建て直しが行われたことが明らかである。

覆土については土層に関する記録が残されていないため不明である。

A床面にはa～cの他、下層の貯蔵穴と位置の合うc’が検出されている。中央からやや北東に寄

SI0045



第83図　SI0045遺構

った位置に長楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、北東隅に小穴が伴う。貼床層は比較的、堅緻に硬化している。

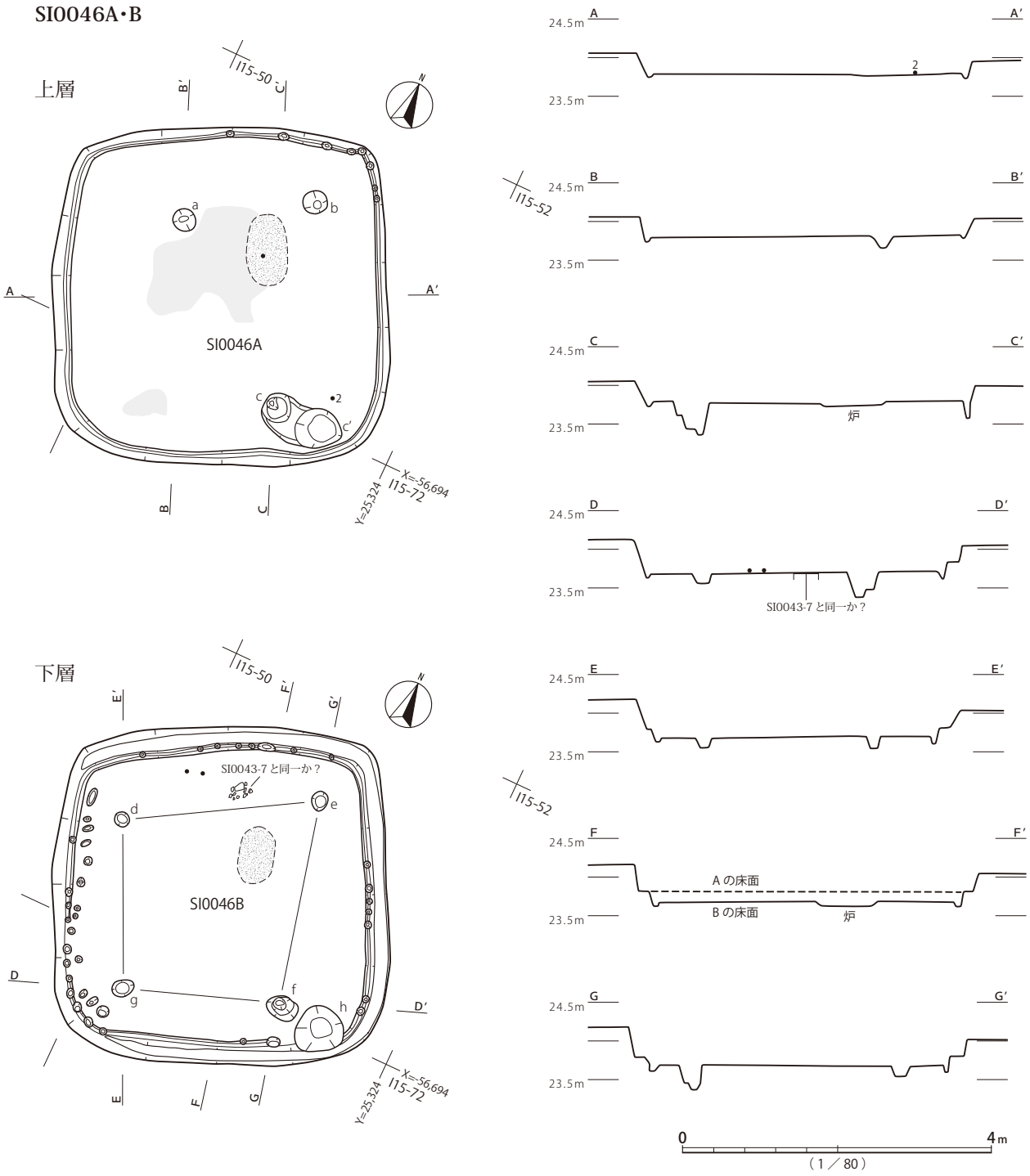
炉の西側床面を中心に、7 ～ 10cmの厚さで焼土が堆積する。建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

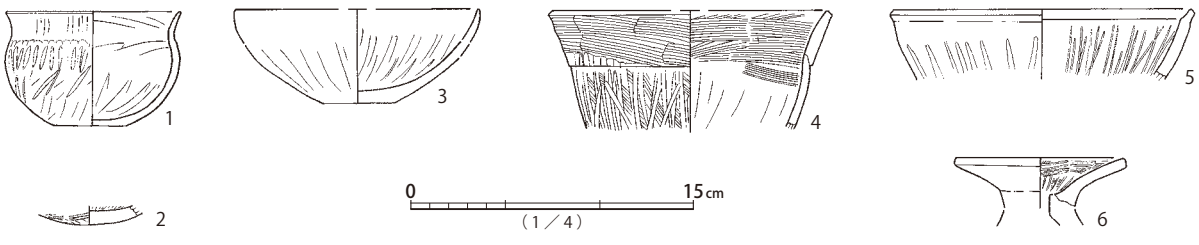
Aの出土遺物は、b付近で小型丸底壺が出土したという記述が残されており、小型鉢1がそれに当たる可能性が考えられるが、確定できない。

B床面には主柱穴と見られるd ～ g、貯蔵穴hが検出されている。Aの炉と近い位置に同様の炉が設けられている。床面は平滑だが硬化の度合いは強くない。床面周溝は南西を除いてほぼ全周し、小穴が伴う。

Bの出土遺物は、炉と貯蔵穴h付近から、赤彩された複合口縁片（複合部に刻み）・器台受部が出土したという記述が残るものの、位置と遺物の対応は記録がなく不確定である。複合口縁片は、SI0043の広口壺7と接合した破片を指し、遺構間接合した可能性が考えられる。器台受部について

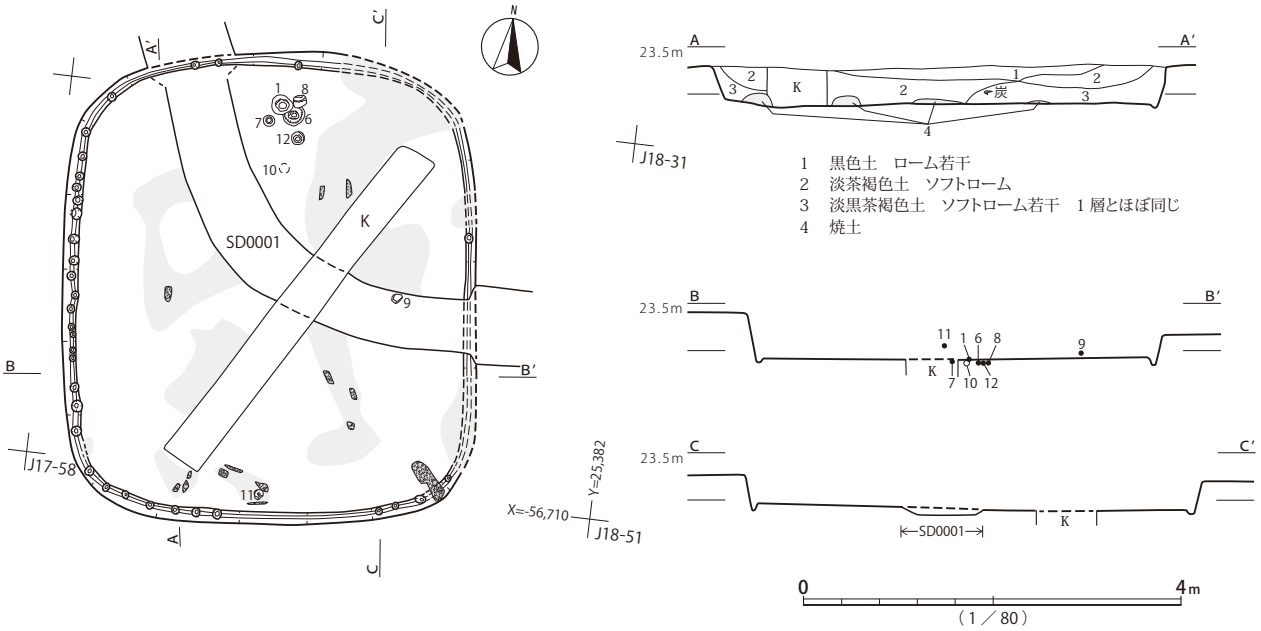
SI0046A・B

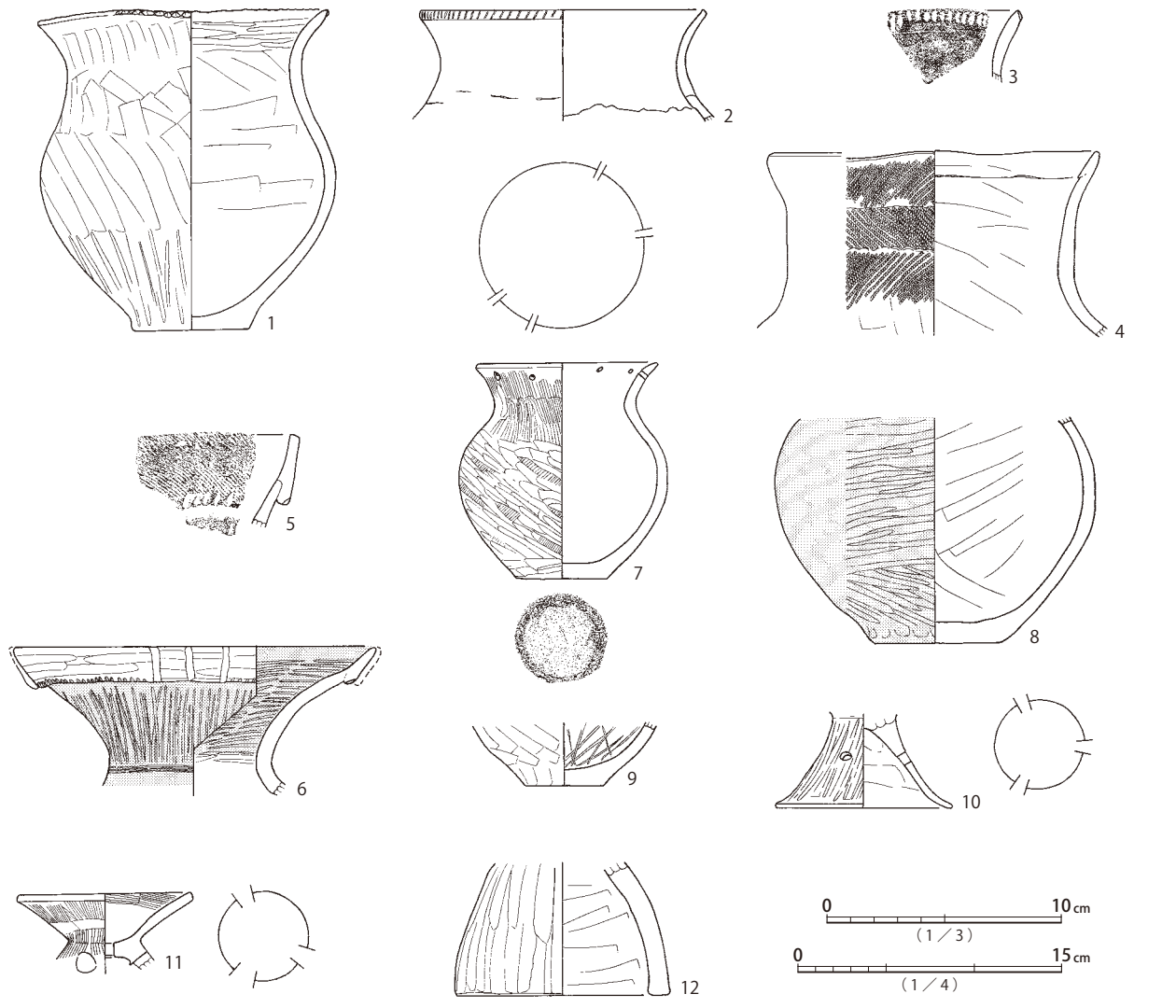




第84図　SI0046A・B遺構・遺物

SI0047





第85図 SI0047遺構・遺物

は位置が確定できないものの、小型器台6の1点のみが出土しておりBに伴う遺物と判断できる。

B床面の形成時期は、弥生時代終末期、中台式期と考えられ、SI0043に近い時期が想定できる。上層に連続的に形成されたA床面は、弥生時代終末期後半、中台2式期から古墳時代前期前半、草刈1式期に帰属する可能性がある。

SI0047（第85図、図版30・142・194・329）

5.0×4.4m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴などの施設は検出されていない。床面周溝は全周していたと見られ、小穴も伴う。床面は比較的堅緻に硬化する。

SD0001南西角と切り合い、床面下まで破壊を受ける。炉も破壊部に含まれる可能性がある。

覆土は、床面レベルから炭化物混じりの焼土が広い範囲で検出されている。炭化物には長軸が放射方向に近いものがあり、建材がある程度原位置を保った状態で火を受けた様相が推定できる。

遺物は、北壁中央付近の床面に完形に近い土器が集中する。甕1、壺6・8、小型広口壺7、高杯10、炉器台12が出土しているが、SD0001による撹乱が大きいため、本来の遺存個体が欠落している可能性がある。甕1は口縁端部の装飾が交互押捺ではなく1方向の刺突であり、弥生時代終末期の変容した在地系甕と見られる。縄文帯が伴わない櫛描文区画の壺6や無文の壺7も同様の過渡的な特徴を示す。土器群は、弥生時代終末期、中台1式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半、中台1式期の所産と考えられる。

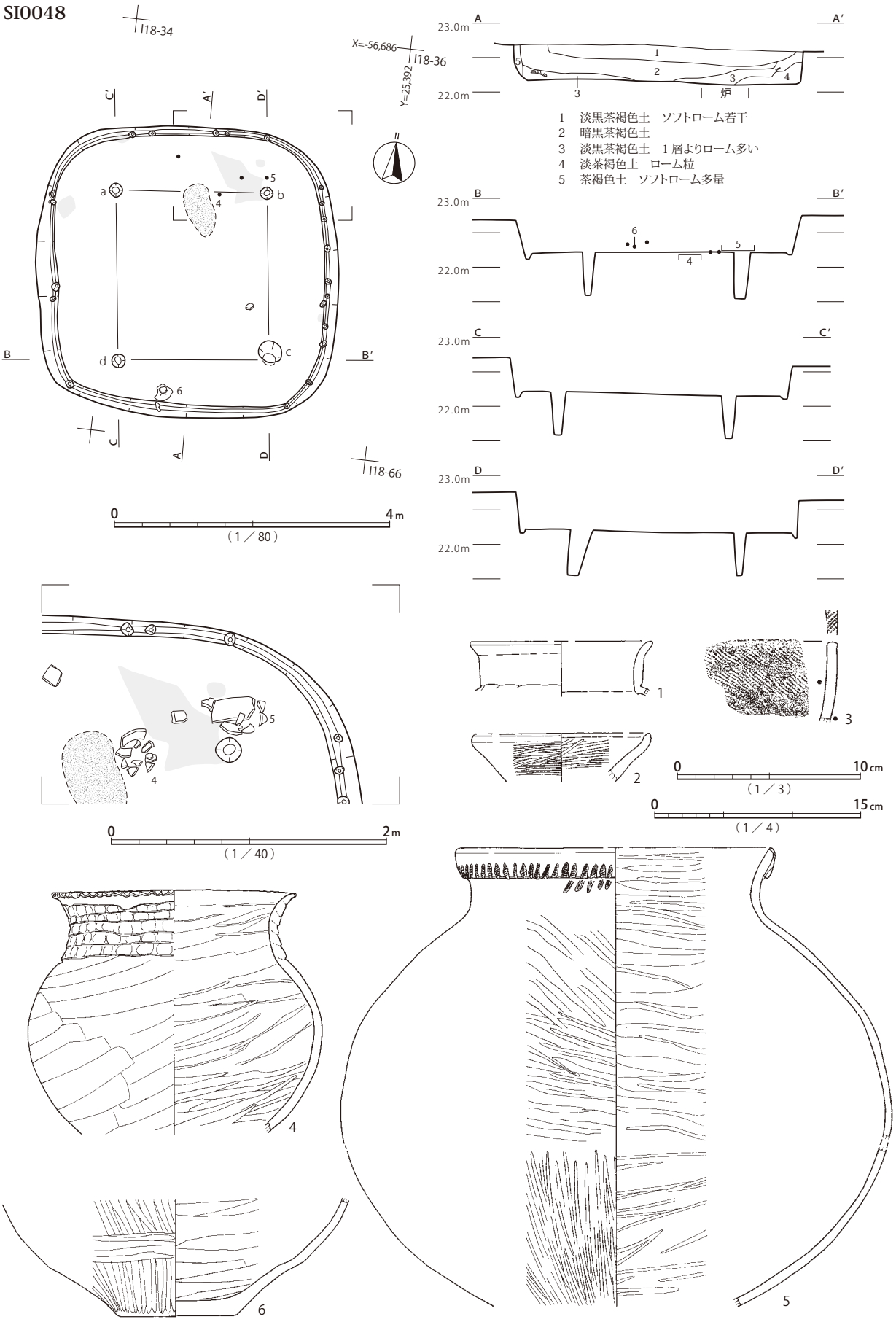
SI0048（第86図、図版30・142・194）

4.2×4.4m、深さ50cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～dが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置から中央寄りに、楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央部が中心軸方向の楕円形に硬化する。床面周溝は全周し、一部に小穴が伴う。

覆土は、床面レベルに焼土が認められ、以上は漸移的な埋積過程を示唆する。建物・建材の焼却処分が行われた可能性が考えられる。

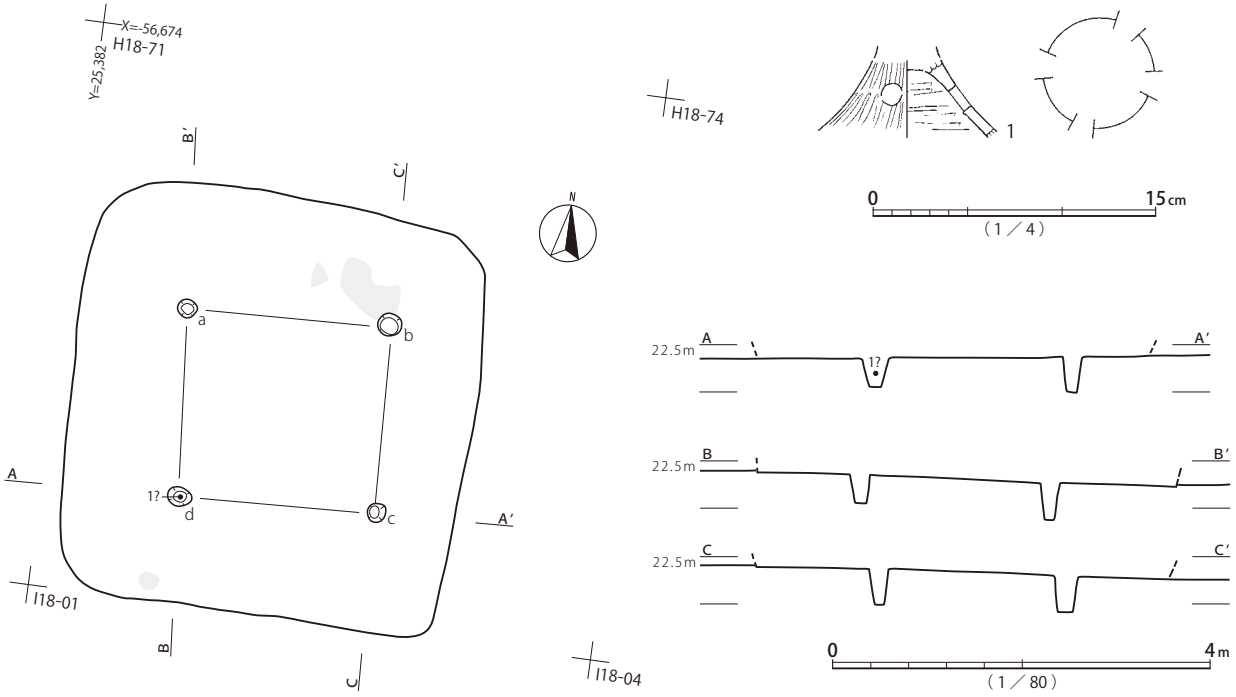
遺物は、床面レベルにおいて、甕4、大型広口壺5、壺6が出土している。輪積痕装飾の甕4は、胴部最大径が口縁径より大きく、口頸部高が全体高に対して割合が小さいため、弥生時代終末期に位置づけられる。広口壺5も口縁肥厚部が押捺を除いて装飾を失っている点は新相を呈するものの、頸部屈曲はなだらかなままであり、同時期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半、中台1式期に位置づけられる。



第86図 SI0048遺構・遺物

SI0049



第87図　SI0049遺構・遺物

SI0049（第 87 図、図版 2・194）

4.4 × 4.3mの隅円方形と見られる竪穴建物跡である。床面近くまで削平され、覆土はほとんど遺存しない。炉は検出されておらず、a ～ dが主柱穴と見られる。

覆土は、北東部に厚さ5cm程度の焼土が堆積する。

遺物は、高杯1が出土するのみである。dの中に高杯が検出されたとの記述があり、高杯1がこれに該当すると考えられる。脚部透孔が推定で4孔配置される特徴は、弥生時代終末期に目立つことから、中台式に位置づけられる可能性がある。

本遺構は、積極的根拠は乏しいものの、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。

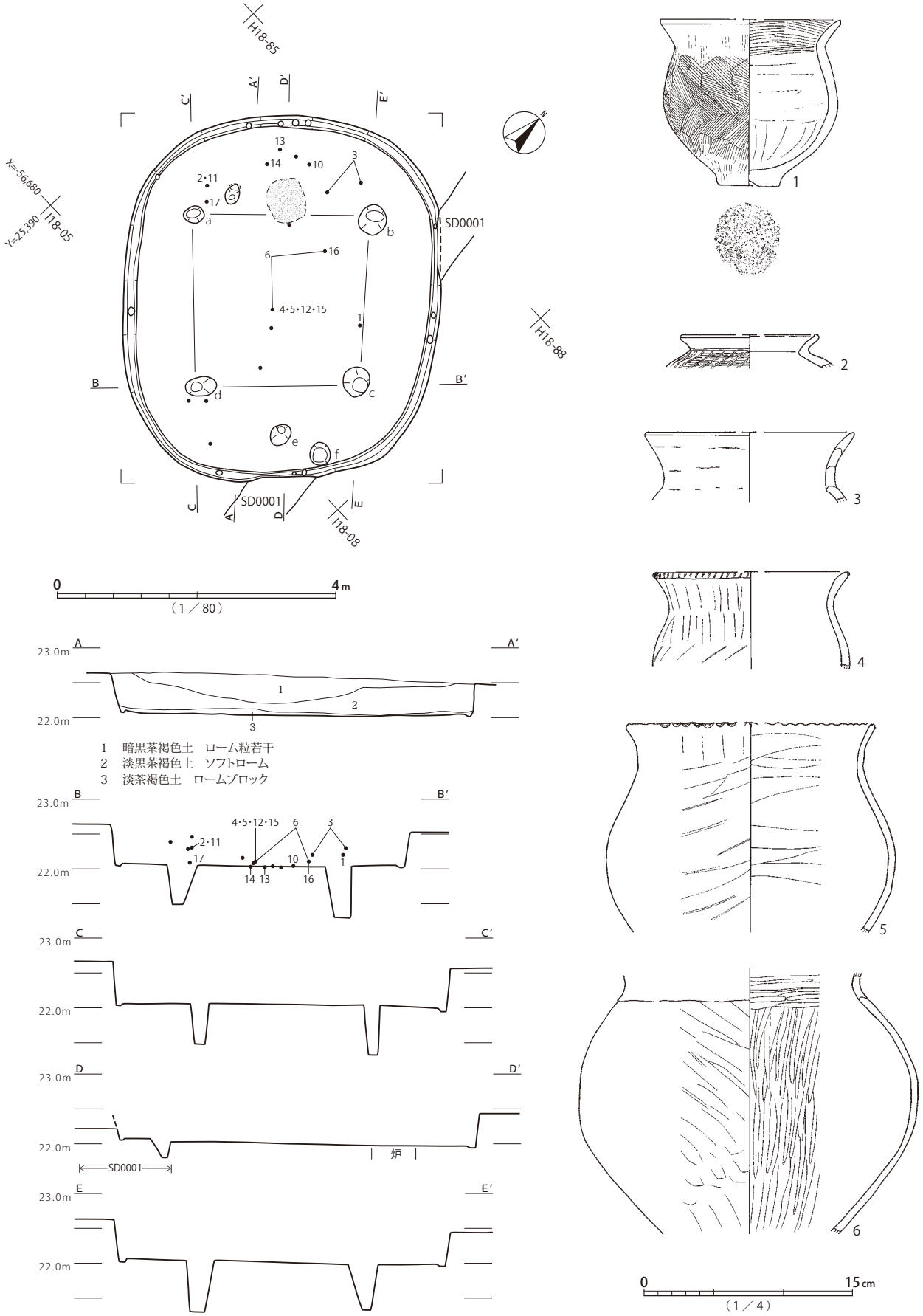
SI0050（第 88・89 図、図版 30・142・143・194・195）

5.2 × 4.6m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置からやや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、一部に小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に硬化する。

SD0001と切り合い、東辺・南辺にかけて覆土が破壊される。

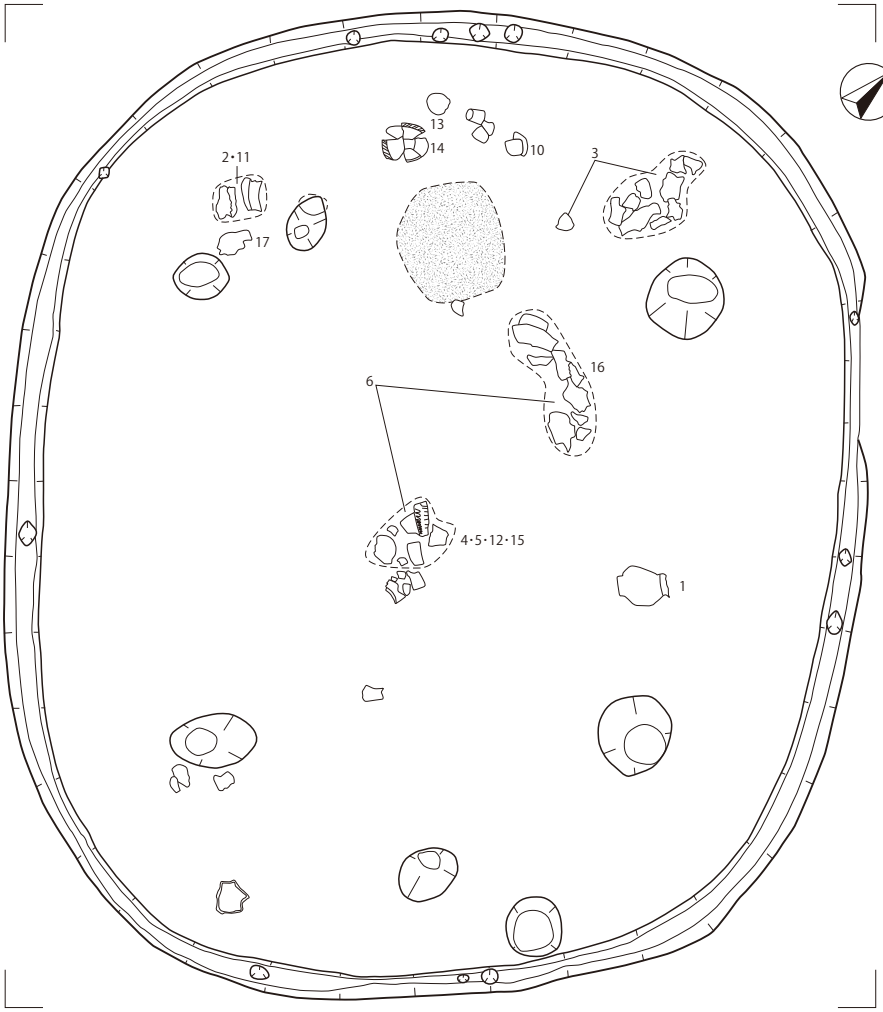
遺物は、床面レベルから覆土中位にかけて出土している。床面近くからは、甕4・5・6、壺10・13、壺（転用甑）12、鉢14、高杯（鉢）15、高杯16・17、中位からは、小型甕1、受口状口縁甕2、甕3、広口壺11が検出されている。ハケメ調整で、くの字状口縁を呈する小型甕1は一見、古墳時代前期の草刈式にも見えるが、輪台技法の底部を持ち、口縁端部もつまみ上げるようなヨコナデが施されることから、中台式期の所産と見られる。土器群の出土位置に高低差は認められるが、帰属

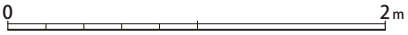
SI0050



第88図　SI0050遺構(1)、SI0050遺物(1)

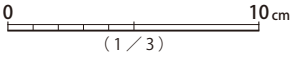
SI0050

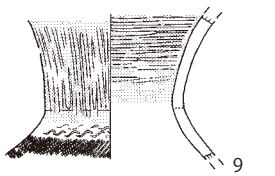


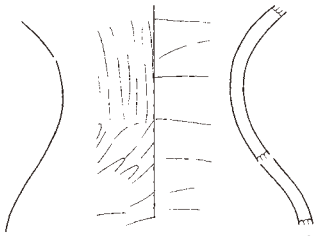


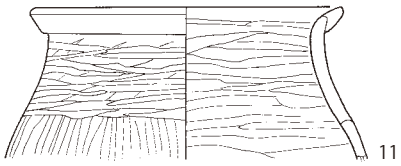


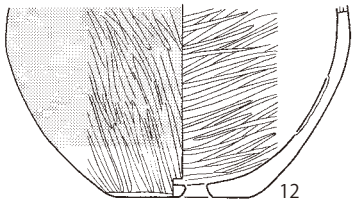


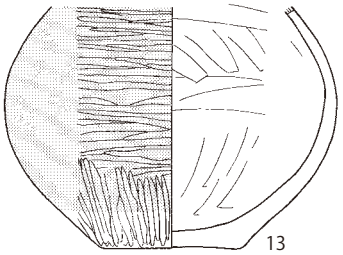


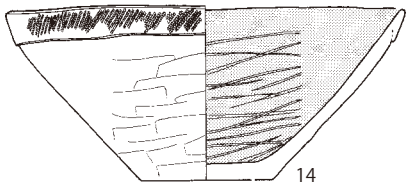


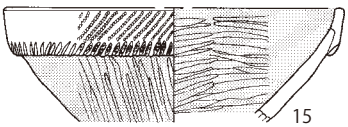


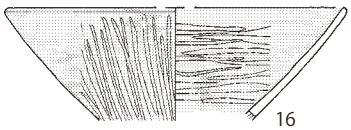


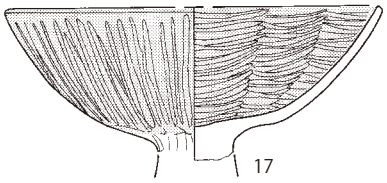


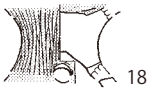






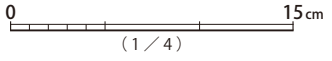






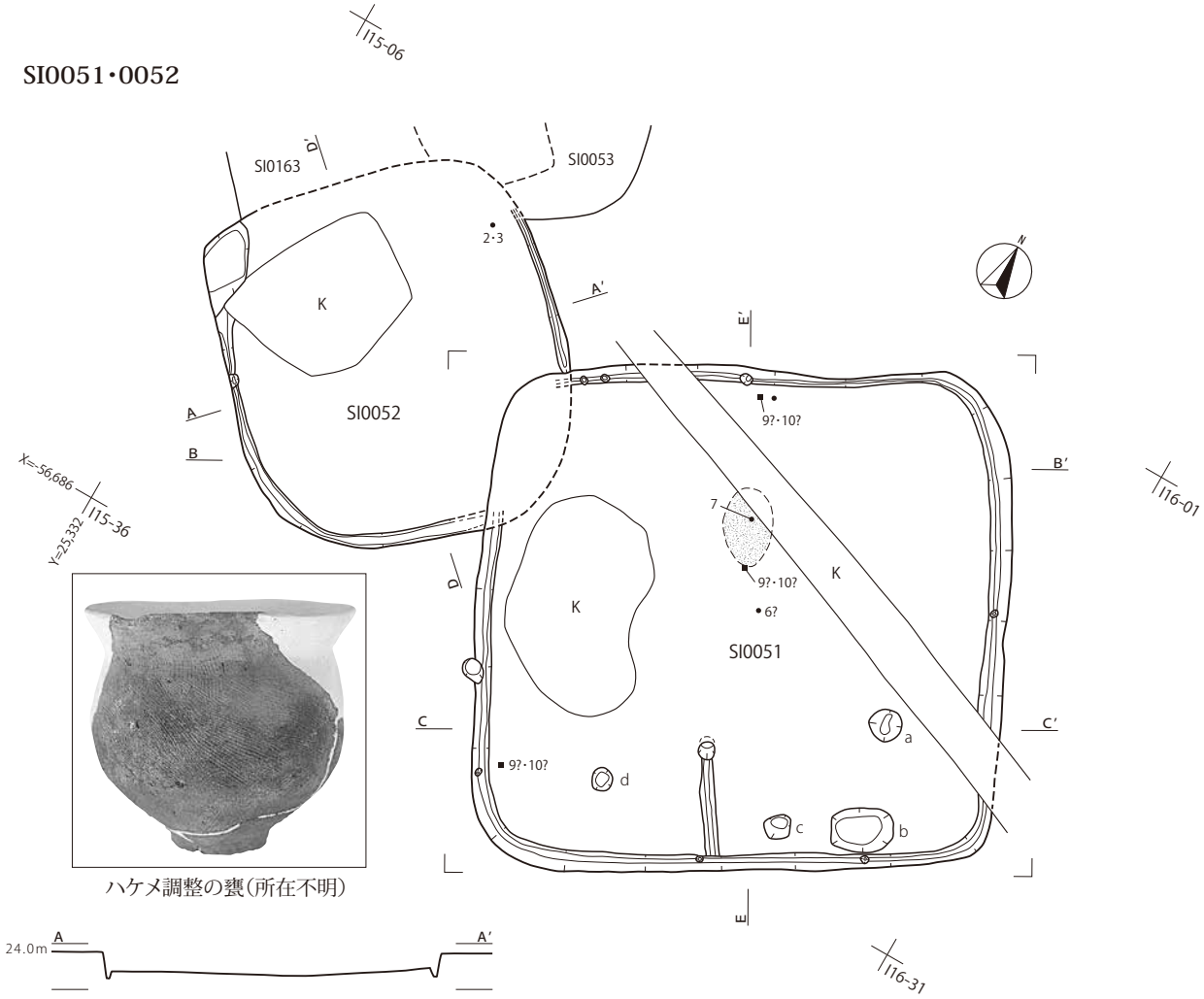




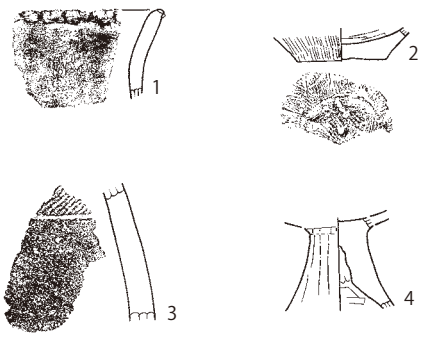


第89図　SI0050遺構(2)、SI0050遺物(2)

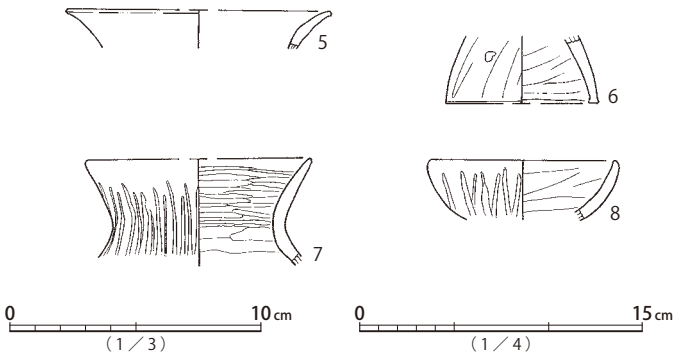
SI0051・0052



SI0052



SI0051



第90図　SI0051遺構(1)、SI0052遺構、SI0051遺物(1)、SI0052遺物

時期の幅は同一型式に収まると考えられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0051・SI0052（第 90・91 図、図版 30・31・56・195・302）

4.0？×3.6m、深さ 20cm 程度の隅円方形竪穴建物跡 SI0052 と、5.5×5.8m、深さ 25cm 程度の隅円方形竪穴建物跡 SI0051 である。SI0052 の南東角が SI0051 の北西角に破壊される。

SI0052 には主柱穴等が検出されていない。床面北西部が大きく撹乱されており、その範囲に炉が存在した可能性がある。床面周溝は遺存部では全周している。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いは弱い。

遺物は、出土位置の記録されていない、甕 1・2、壺 3、高杯 4 のみである。南西隅の黒色土上層から、ハケメ調整と段部押捺を持つ甕と見られる個体が出土したとの記述が残るが、該当する遺物は確認できない（注記は異なるが SI0074 の 3 がこれに当たるか、もしくはその同一個体片が存在した可能性がある）。弥生時代終末期を主体とすると思われる。

SI0051 には a ～ d が検出され、a・d に柱穴の可能性があり、c がハシゴ穴、b が貯蔵穴と見られる。中心軸上やや北寄りに楕円形の炉が設けられる。炉とハシゴ穴 c を結んだ線の西約 50cm の位置に間仕切りと見られる溝が認められる。床面はソフトローム層に形成され、炉の周辺を中心に硬化する。

覆土は、床面レベルで焼土が広範囲に検出され、炭化物も伴う。北西角の焼土は SI0052 との切り合い部に及び、SI0051 床面が後から構築された状況を示す。

遺物は少なく、甕 5、台付甕 6、直口壺 7、椀 8、砂岩製礫石器 9・10 が出土している。炉覆土内から出土した壺 7 は、頸部屈曲がなだらかで、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。他に、本遺構出土品としてハケメ調整の甕（第 90 図）の遺物写真が残るものの、所在不明である。遺構写真（図版 31）には、北西隅の焼土層に底部片が認められ、本資料が対応する可能性もあるが、確定できない。

SI0052・SI0051 とも弥生時代終末期、中台式期の所産と考えられる。

SI0053・SI0054・SI0163（第 92 図、図版 31・55・195・329）

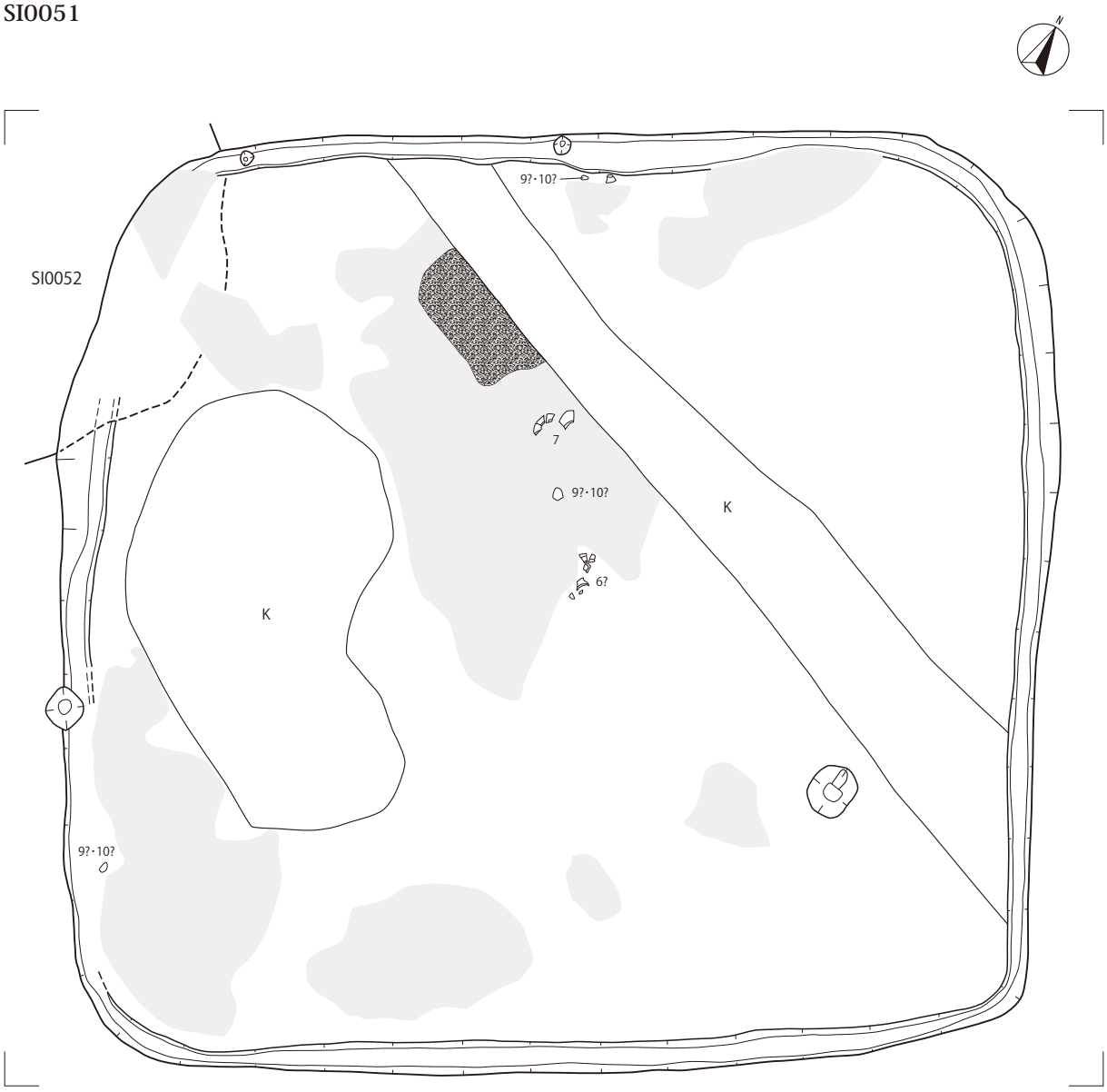
3.0×2.7？m、深さ 30cm 程度の方楕円形竪穴建物跡の SI0053、3.4？×3.5？m 四方、深さ 30cm 程度で推定隅円方形の竪穴建物跡 SI0163、4.5m 四方、深さ 50cm 程度の隅円方形竪穴建物跡 SI0054 である。SI0053 と SI0163 を SI0054 が破壊して構築されている。土層の記録がないため不明確だが、SI0163 は SI0053 を切って構築されたと見られる。

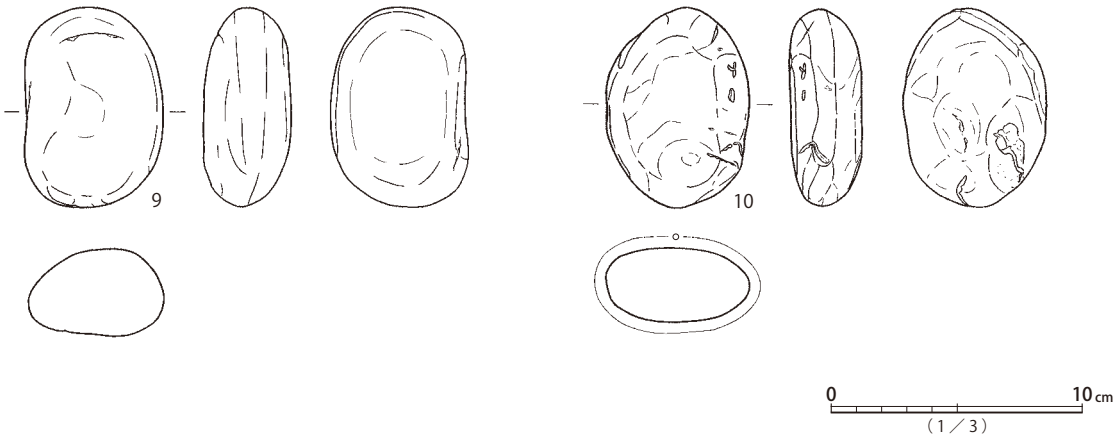
SI0053 は長軸北寄りに楕円形の炉が設けられる他は、主柱穴などは検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いは弱い。床面周溝はなく、小穴が並ぶ。

本遺構は、遺物が出土していないため不確定だが、平面形から弥生時代後期後半から終末期前半の所産と考えられる。南にある SI0052 との切り合い関係も不明だが、SI0053 が先行すると考えたい。

SI0163 は西辺の一部のみ遺存しており、平面形も確定できない。主柱穴などは検出されず、SI0054 に切られる位置に長楕円形の炉が部分的に検出されている。炉の長軸が竪穴の中心軸を兼ねていたとすると、推定線のような形状が復元できる。床面は SI0053 と近いレベルにあり、堅緻である。

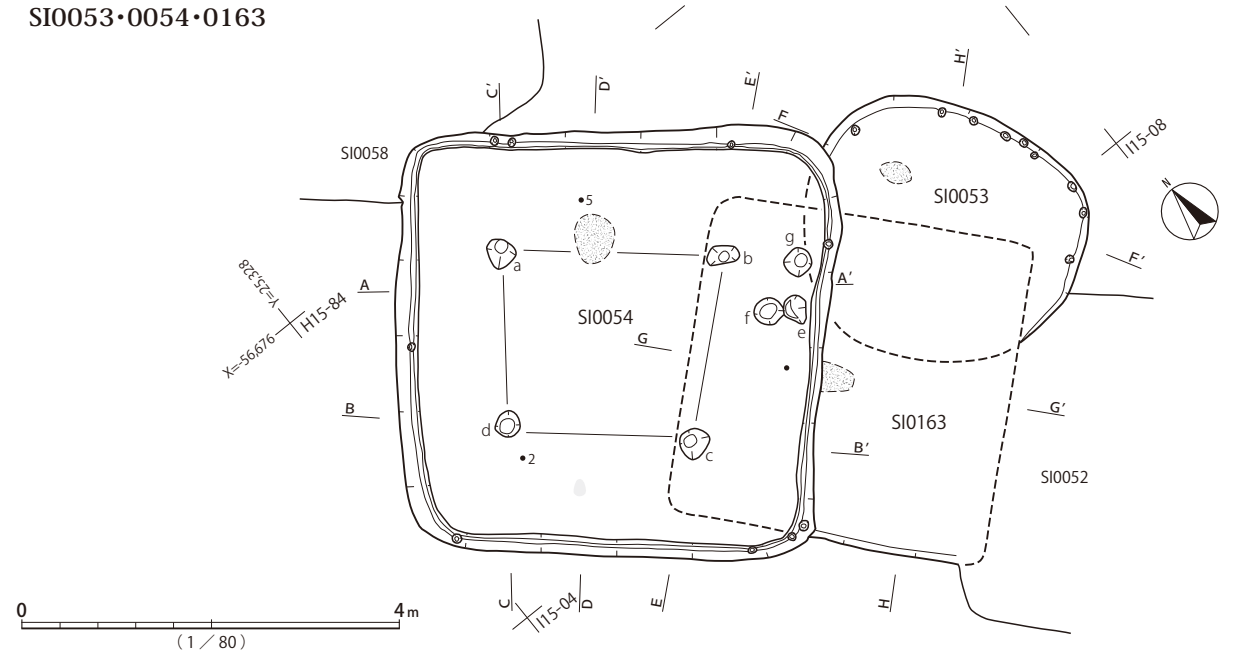
SI0051

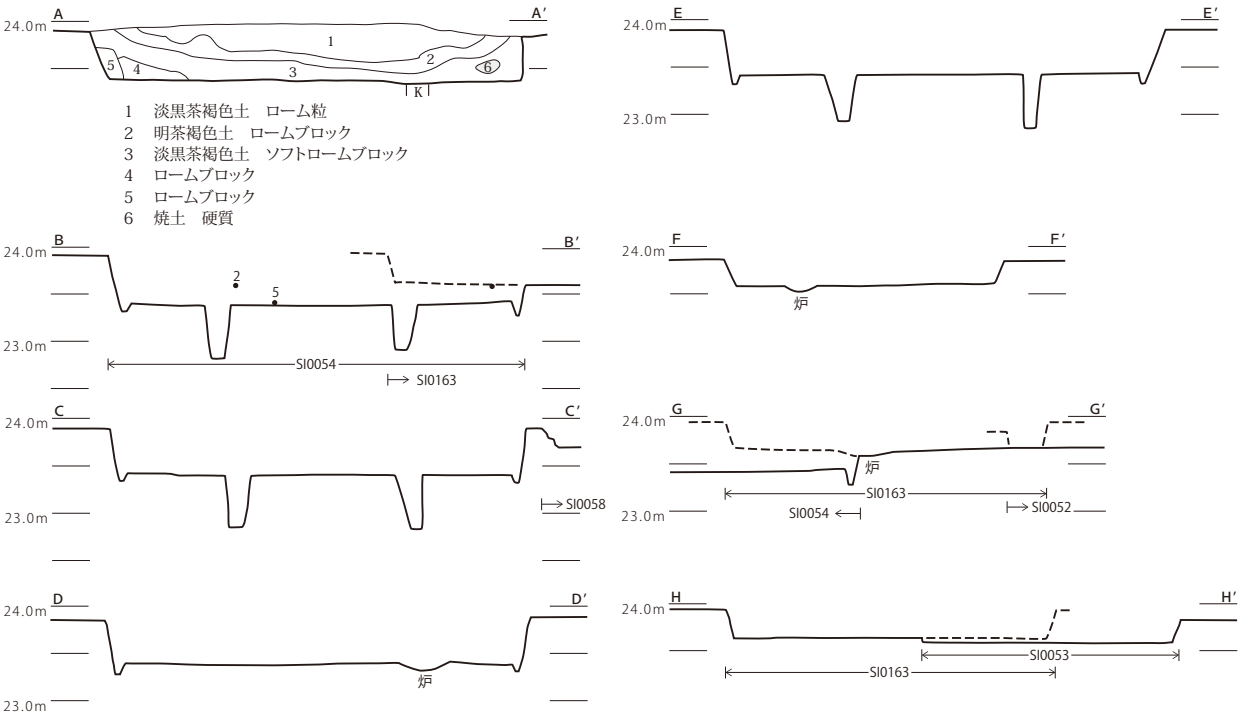




第91図　SI0051遺構(2)、SI0051遺物(2)

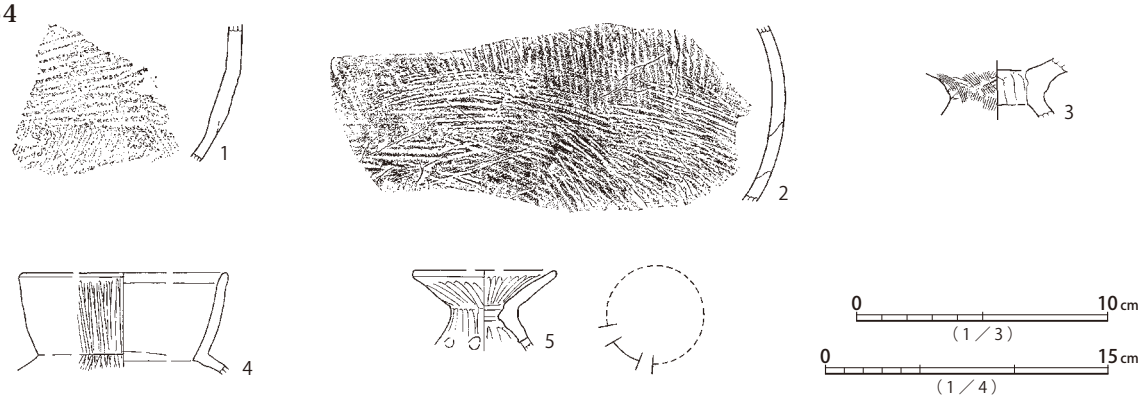
SI0053・0054・0163





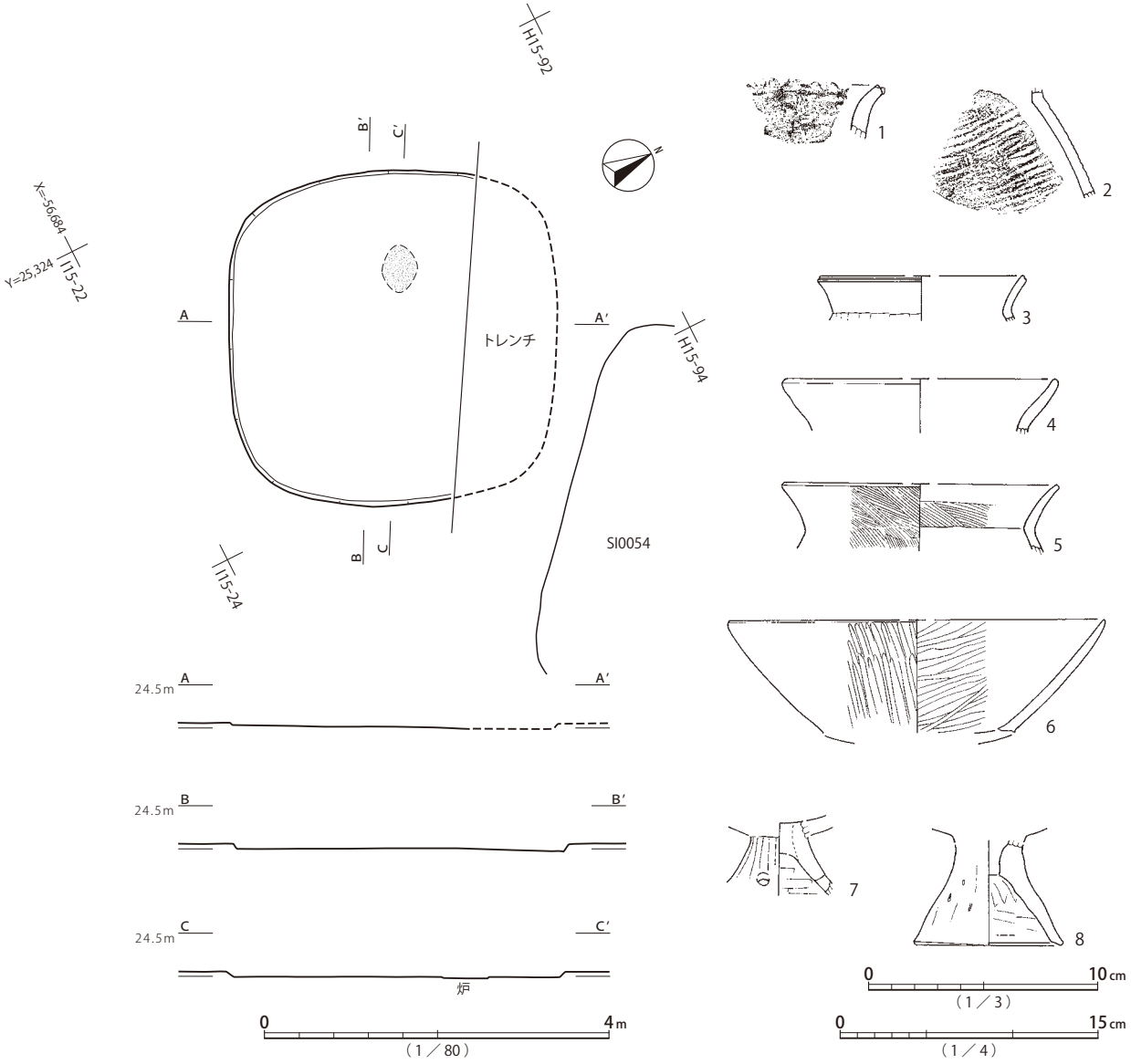
1　淡黒茶褐色土　ローム粒
2　明茶褐色土　ロームブロック
3　淡黒茶褐色土　ソフトロームブロック
4　ロームブロック
5　ロームブロック
6　焼土　硬質

SI0054



第92図　SI0053・SI0054・SI0163遺構、SI0054遺物

SI0055



第93図　SI0055遺構・遺物

床面周溝は遺存部に認められない。

SI0163は遺物が出土していないため、単独では時期決定が困難だが、切り合い関係の推定から、SI0053よりは新しく、SI0054に先行すると見られる。

SI0054は主柱穴a～d等が検出される。a・b間はc・d間より約40cm長く、竪穴北辺・南辺の長短差もこれに近似するため、柱間部外周幅はほぼ一定である。中心軸から西寄りの位置、a・b間ラインに交差するやや外側に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、疎らに小穴が認められる。床面は柱間部が堅緻に硬化している。

覆土は、初期堆積にロームブロック主体土が見られ、床面から下位層に焼土が認められる。建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

遺物は、少量の古式土師器が出土している。床面から検出された小型器台5は脚部透孔が4孔配置と見られ古相を示す。覆土一括取り上げ資料のタタキ甕1、タタキ台付甕3と同じく、弥生時代終末

期、中台式に位置づけられる。他に、東隅近くの床面上から、小型の鉢と見られる土器と礫石器が並んで検出されているが、所在不明である（図版31）。

SI0054は平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に位置づけられる。

3棟の竪穴建物跡は、切り合い関係に基づいて、SI0053、SI0163、SI0054の順に構築されたと推定でき、弥生時代後期後半以降、弥生時代終末期までの時期に位置づけられる。

SI0055（第93図、図版31・195）

3.9×3.8？m、深さ10cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。トレンチにより北東側約4分の1が欠損する。主柱穴等は検出されていない。中心軸上、西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。床面はソフトローム層に形成され、硬化の度合いはあまり強くない。

覆土はほとんど遺存せず、堆積状況は不明である。

遺物は、すべて覆土一括取り上げ資料である。タタキ甕2、高杯7、器台（台付甕？）8が弥生時代終末期の様相を呈する。ハケメ調整のくの字状口縁甕5は古墳時代前期への傾斜を示しているが、頸部屈曲はなだらかであり、過渡期の様相として捉えられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期の所産と推定できる。

SI0056・SI0057（第94・95・96・97・98・99図、図版15・32・143・144・145・146・195・196・329）

3.8×3.6m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI0057と、5.2×4.8m、深さ60cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0056である。SI0057を破壊してSI0056が構築されている。

SI0057では遺存部に主柱穴等が検出されず、炉も認められない。主柱穴は配置想定位置にないことから、もともと伴わなかった可能性がある。炉は破壊部分に存在したと思われる。床面周溝は見られず、小穴が部分的に認められる。床面はソフトローム層に形成され、あまり硬化していない。

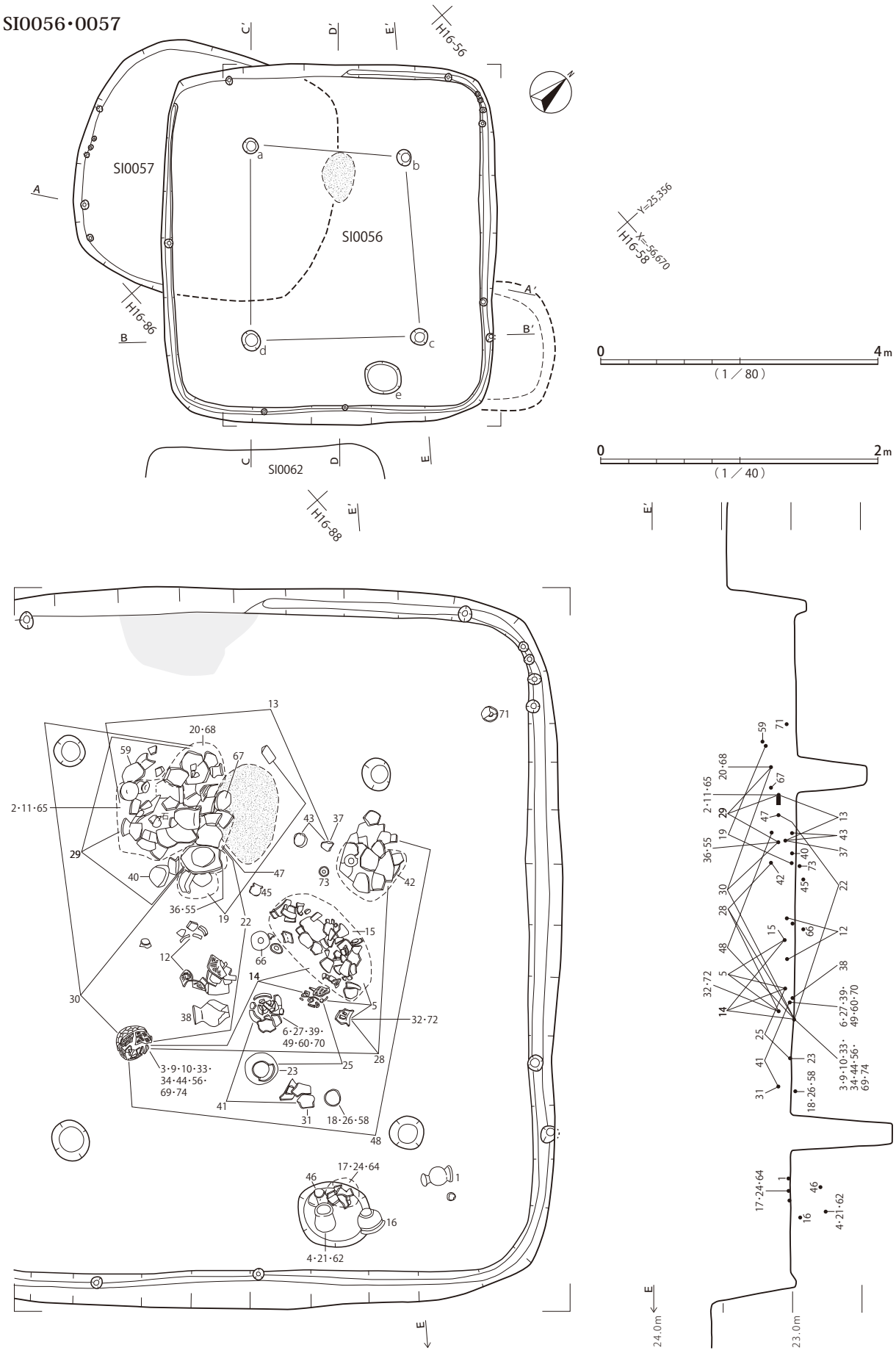
遺物は、タタキ甕77・78の2点を提示できるのみで、中台式期に位置づけられる。ただし、いずれも覆土一括取り上げ資料であるため、SI0056からの混入の可能性も否定できない。

SI0057は平面形と出土土器から弥生時代終末期、中台式期の所産と推定する。

SI0056は主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。床面周溝は北西辺西側で途切れる以外は連続し、一部に小穴が伴う。ほぼ中心軸上、a・b間ラインに内接する位置に、楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

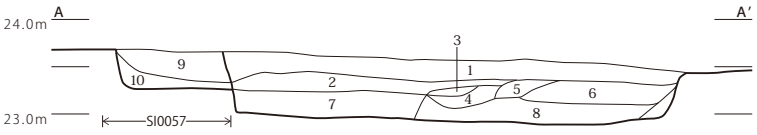
覆土は、床面レベルで焼土が検出されている。建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

遺物は床面直上から覆土中位にかけて大量の土器が出土している。床面直上からは、タタキ台付甕1、くの字状口縁タタキ調整甕30、直口壺38、鉢60、高杯66、炉器台73等が出土し、口縁端部に斜列点文の施されたナデ仕上げのくの字状口縁甕16が貯蔵穴の縁にかかり、貯蔵穴内へ落ち込むように、ハケ調整くの字状口縁甕21、壺46、小型鉢62、高杯64等の集中が見られる。2帯構成で擬縄文が施される壺47と、櫛描文区画の縄文横帯を持つ壺49は、過渡的な特徴を示す。出土土器の様相で注目すべきは、甕類の数量とバリエーションの多さであり、ナデ・ハケ・タタキ、平底・台付、くの字状口縁と頸部屈曲口縁等の複数系統の要素が組み合わさった多様な形状が組成する。出土層位に若干の幅が認められるものの、土器群は、弥生時代終末期、中台式に帰属すると考えられる。

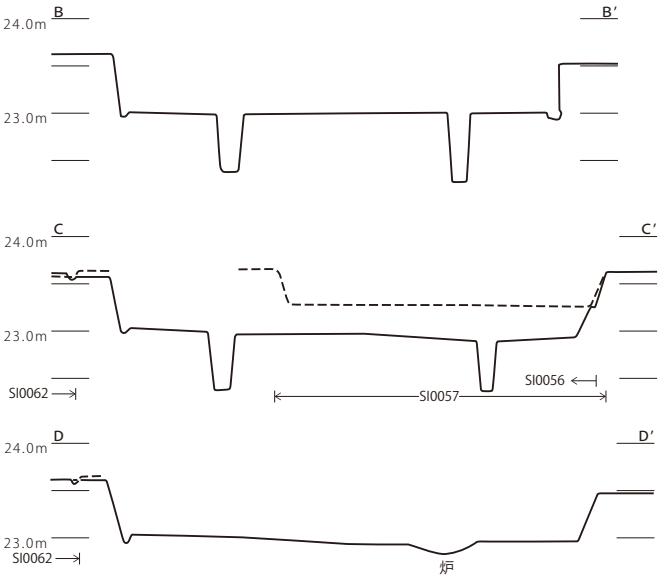


第94図　SI0056・SI0057遺構(1)

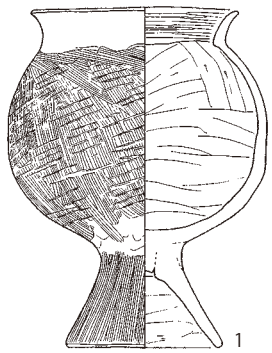
SI0056・0057

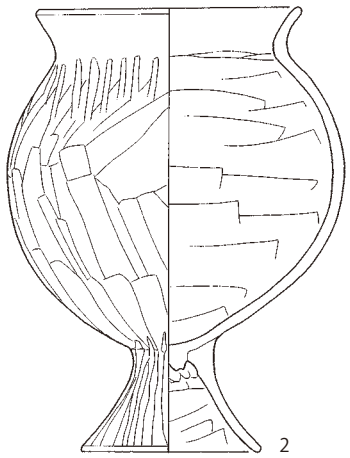


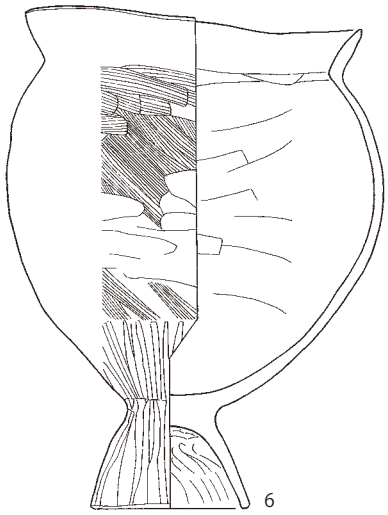
1　暗茶褐色土　軟質
2　明茶褐色土　部分的に若干のハードロームブロック・焼土粒(0.5 ～ 1cm)
3　黒褐色土　焼けた 1cm 大のロームブロック(2 ～ 3 個)　軟質
4　淡茶赤褐色土　ロームブロック、焼土粒
5　黒褐色土　3 層よりも明るい　若干のローム　3 層とほぼ同じ
6　茶褐色土　炭化物を少量　4 層とほぼ同じ
7　茶褐色土　焼けたロームブロック、焼土粒　非常に硬質
8　黒褐色土　3 層とほぼ同じ　軟質
9　暗茶褐色土　軟質
10　明黒褐色土　やや硬質

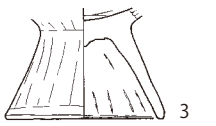


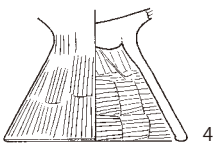
SI0056

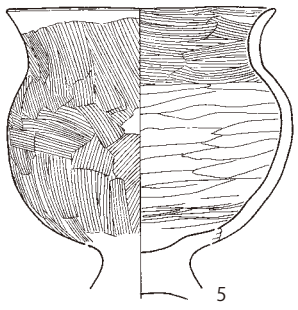


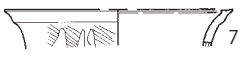




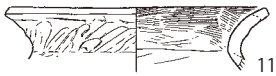




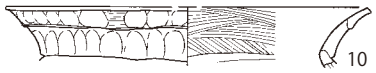








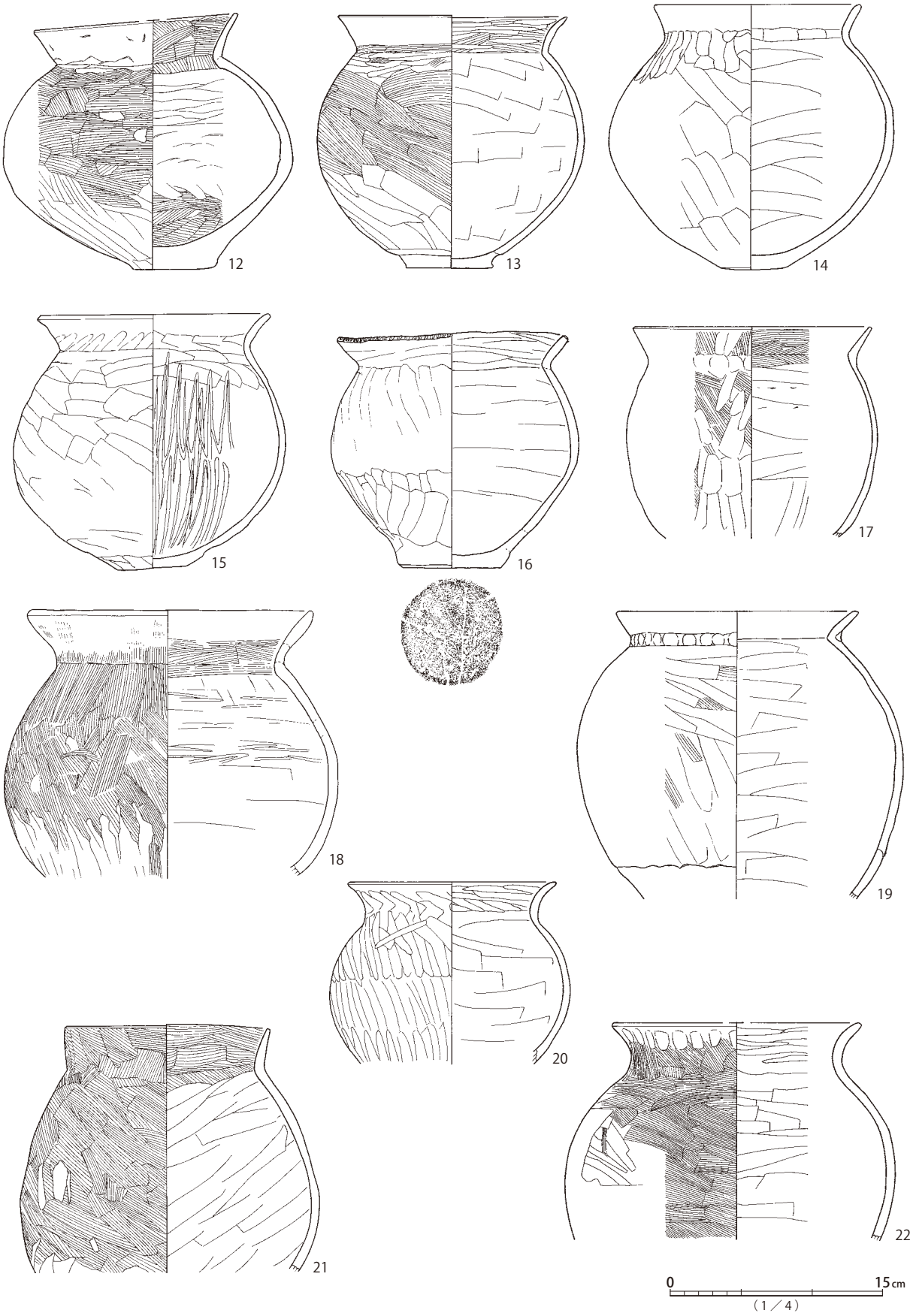






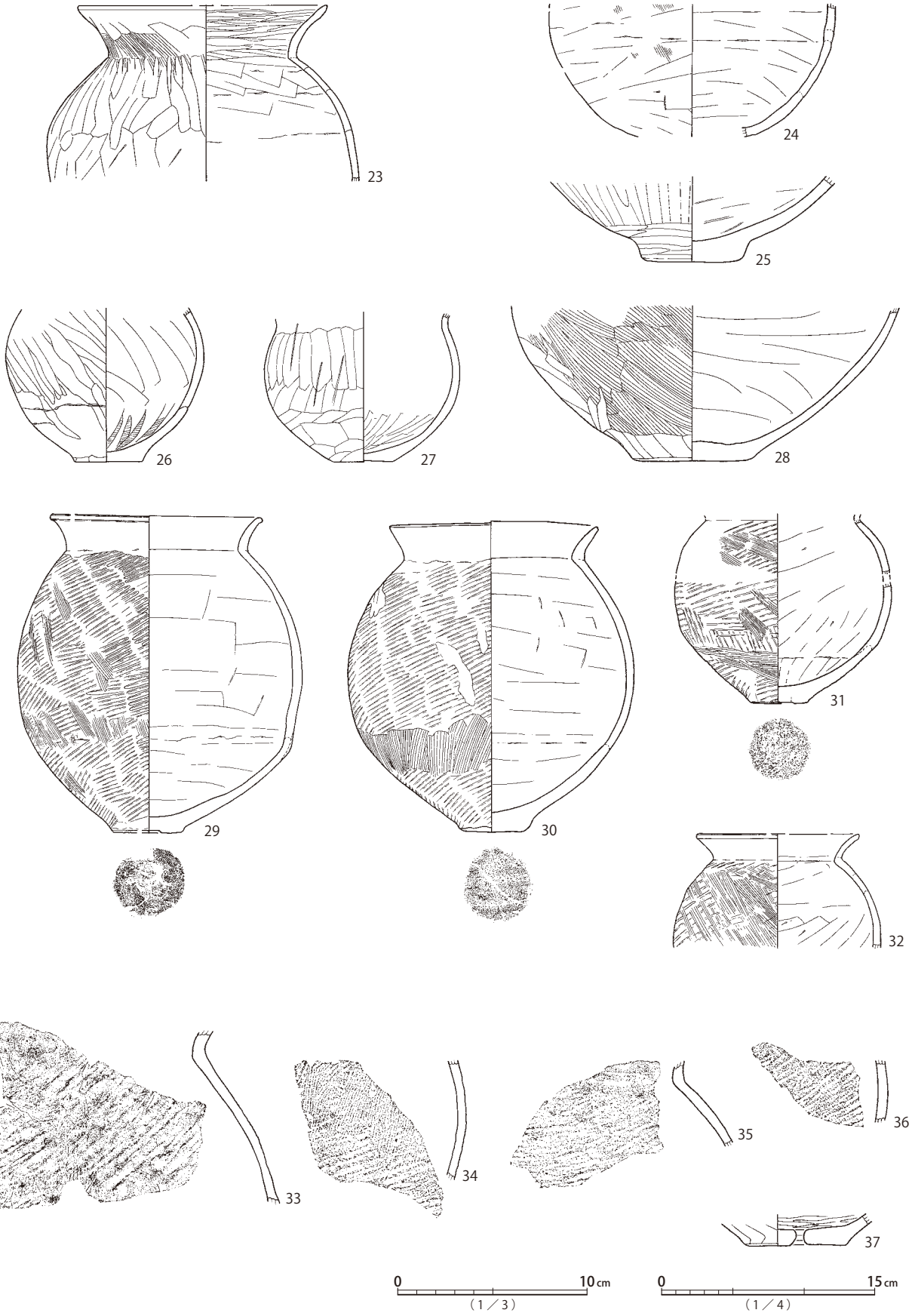
第95図　SI0056・SI0057遺構(2)、SI0056遺物(1)

SI0056



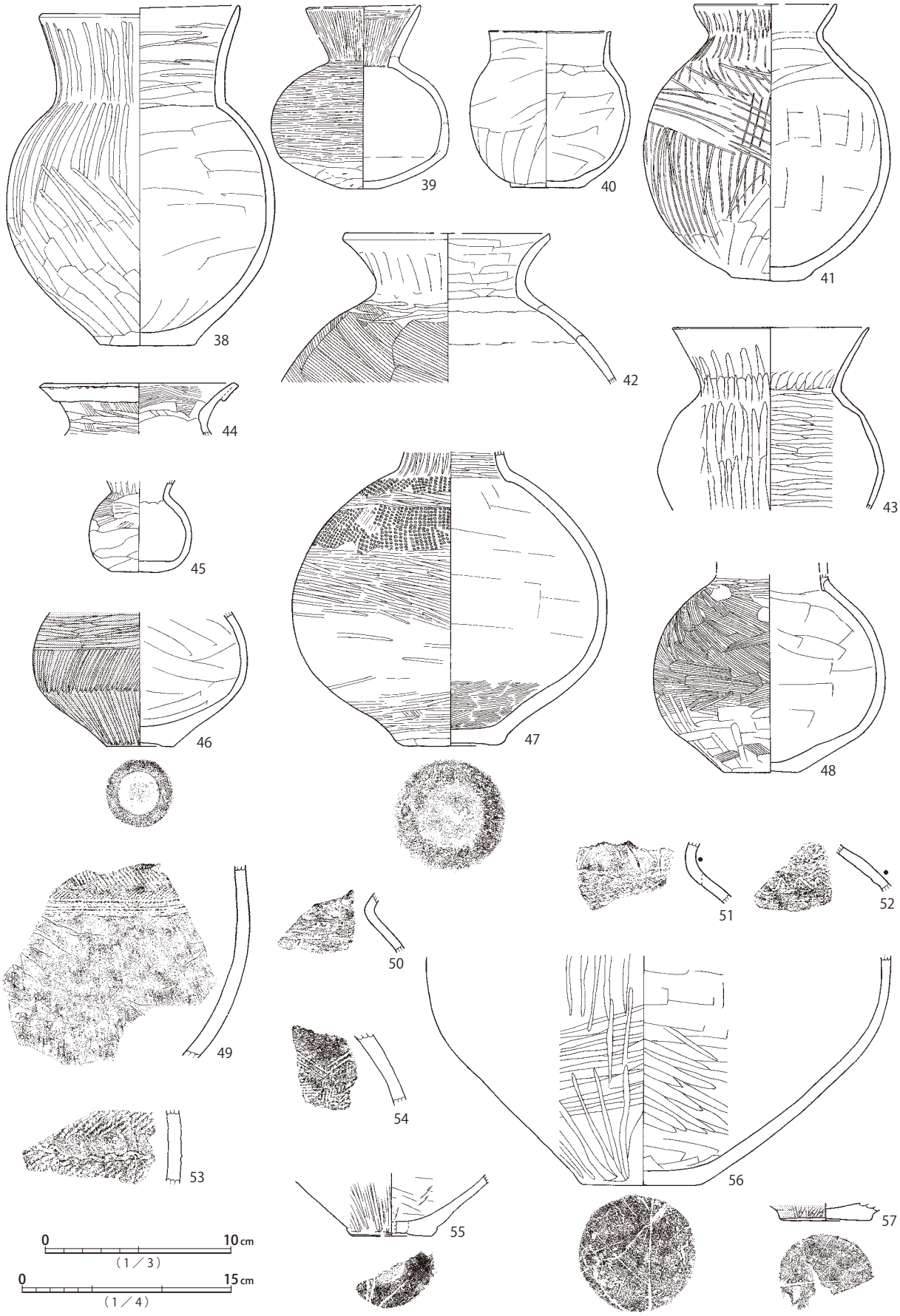
第96図　SI0056遺物(2)

SI0056



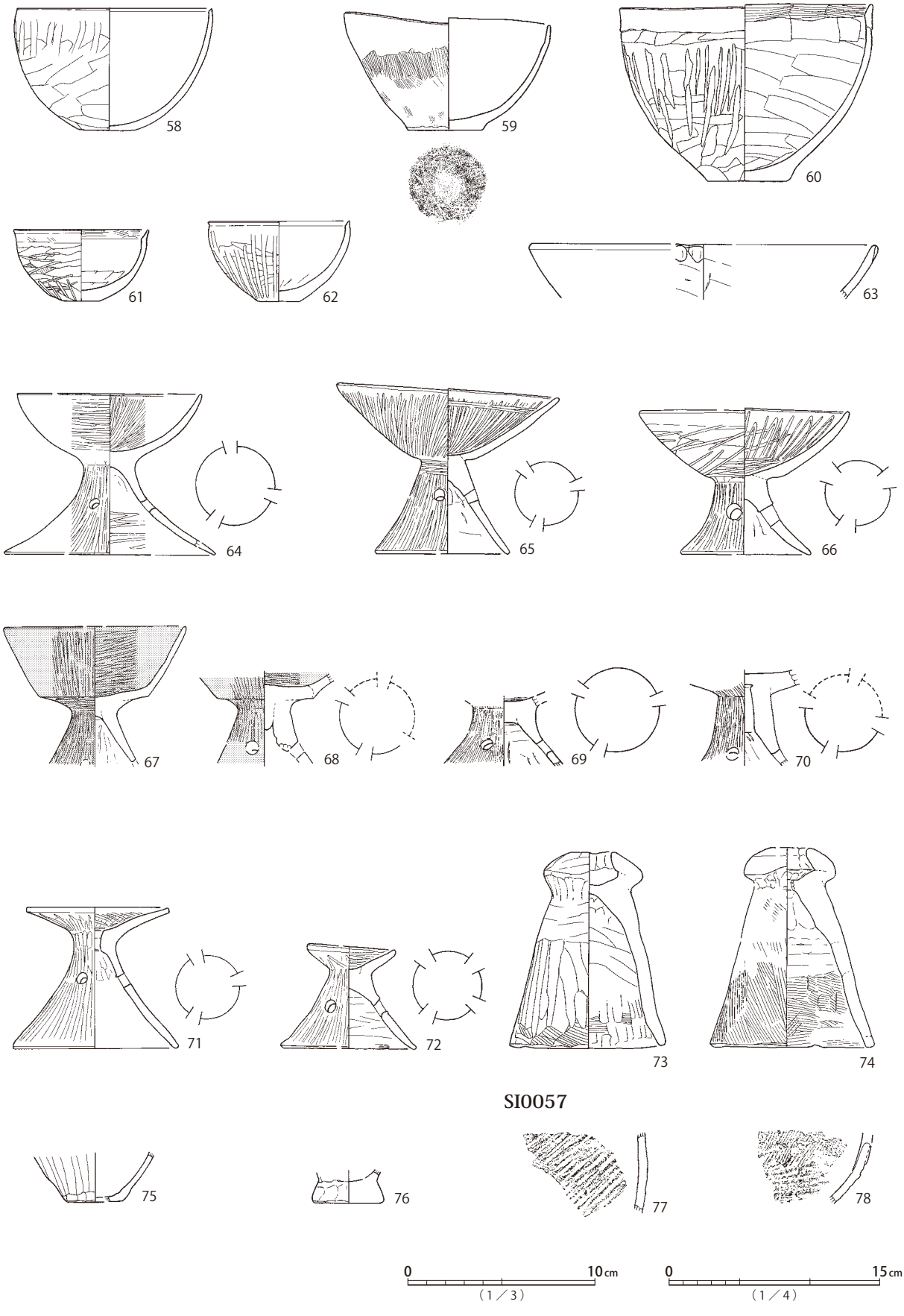
第97図　SI0056遺物（３）

SI0056



第98図　SI0056遺物（4）

SI0056



第99図　SI0056遺物（５）、SI0057遺物

なお、本遺構の属するTJ地区では、現場段階で個体番号（Po番号）を付与しブロックとして取り上げているため、整理作業において、混在する別個体の破片が他個体と接合する事例が目立ち、破片資料において結果的に図中の位置を共有する資料が多くなっている。

SI0056は平面形と出土遺物の様相から弥生時代終末期、中台式期の所産と考えられ、これに切られるSI0057が若干先行すると位置づけられる。

SI0058（第100図、図版32）

4.3？×4.0？m、深さ30cm程度の方楕円形と推定される竪穴建物跡である。主柱穴の可能性があるa～cが検出されている。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻である。床面周溝と小穴が途切れながら連続する。SI0059と北側で切り合い、北の柱穴と炉は破壊されている。西辺は古墳時代の地下式土坑SK2、南辺はSI0054により一部を破壊される。

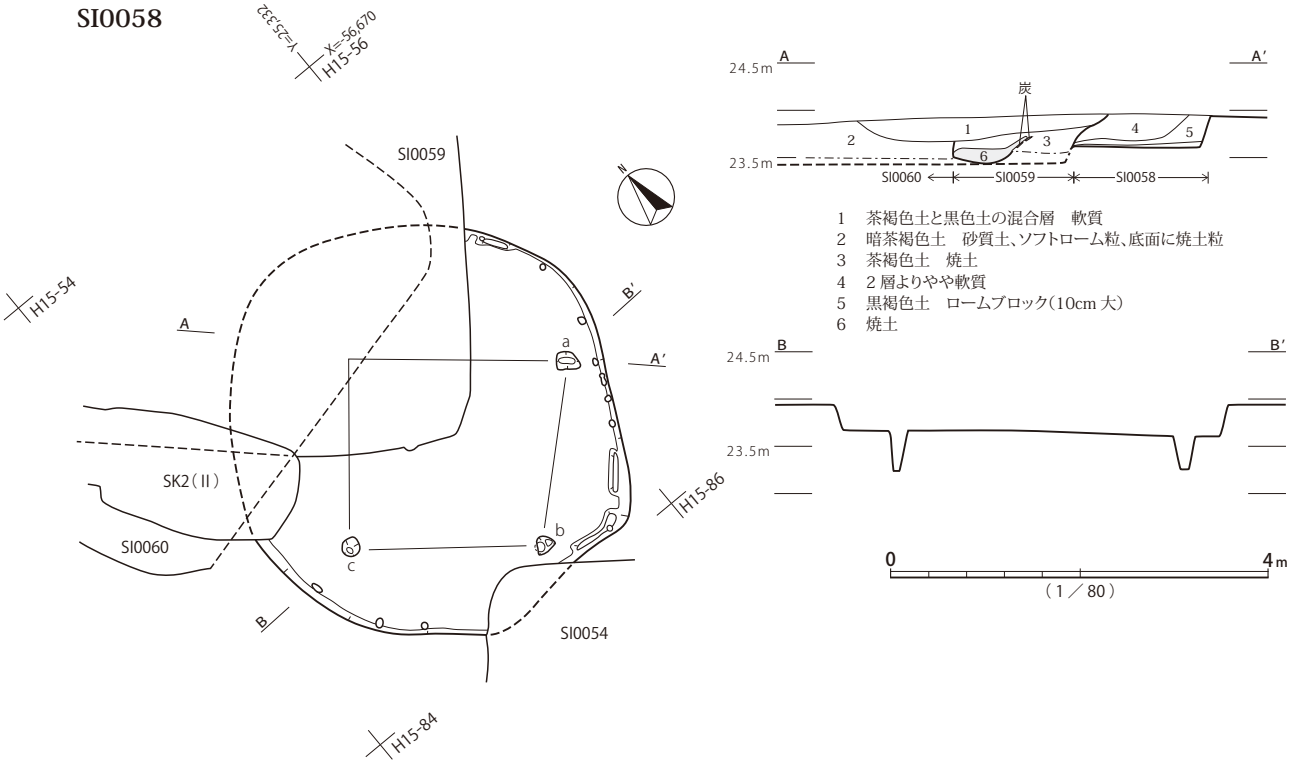
覆土は、下層にロームブロックが混じるが、概ね漸移的な堆積過程を示す。

遺物は出土していない。遺構写真には本遺構検出と見られる「鉄滓」状の塊が記録されているが、遺物は、所在不明であり不詳である（図版32）。

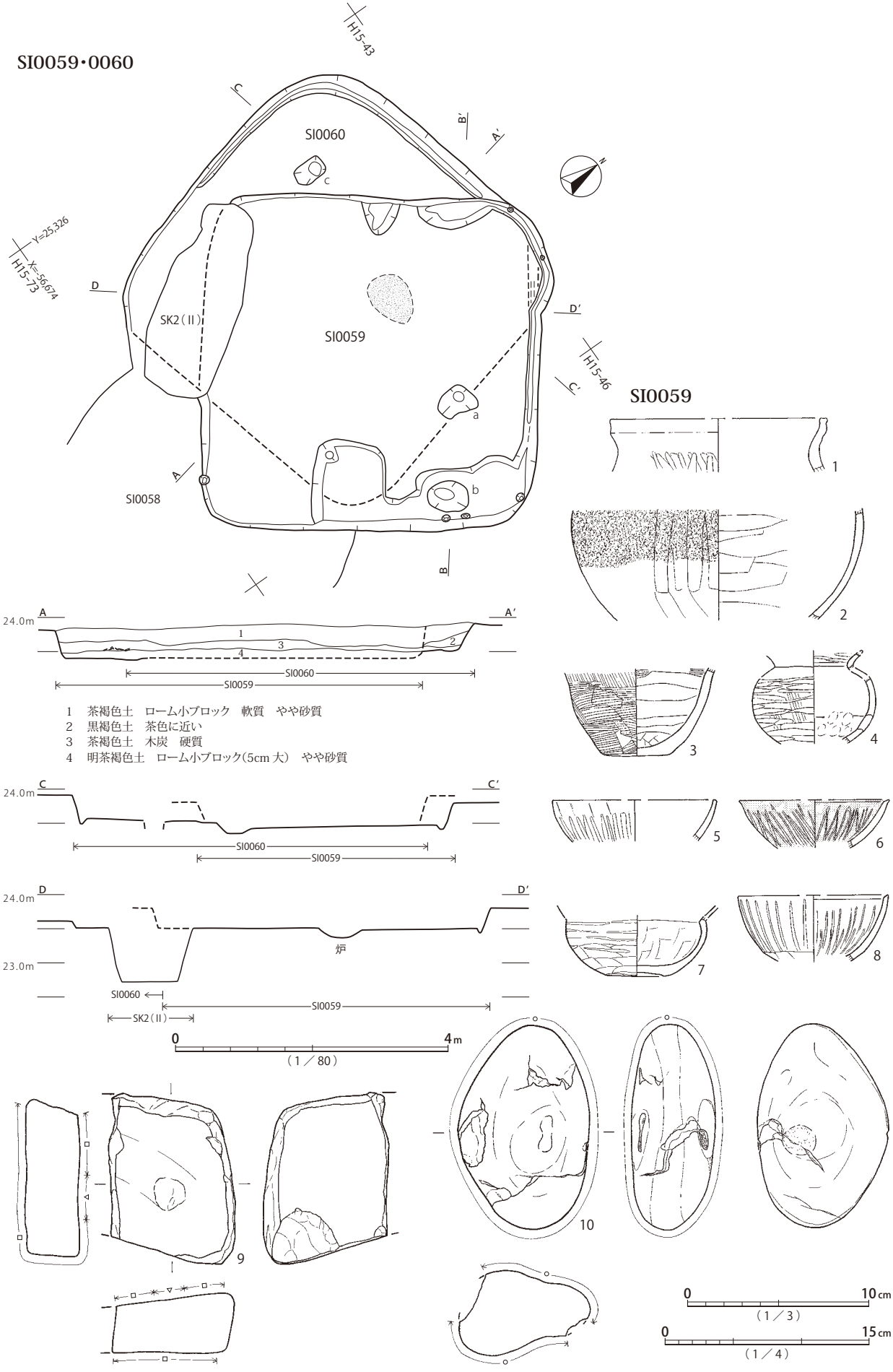
本遺構は、SI0054・SI0059との切り合い関係から、弥生時代終末期以前に位置づけられる。

SI0059・SI0060（第101・102図、図版33・146・196・302・329）

5.0m四方、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0060と、4.9×5.0m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0059である。大部分が重複し、床面レベルも近いことから不明瞭だが、SI0059覆土の焼土分布範囲が連続して検出されているため、SI0060が先行すると見られる。

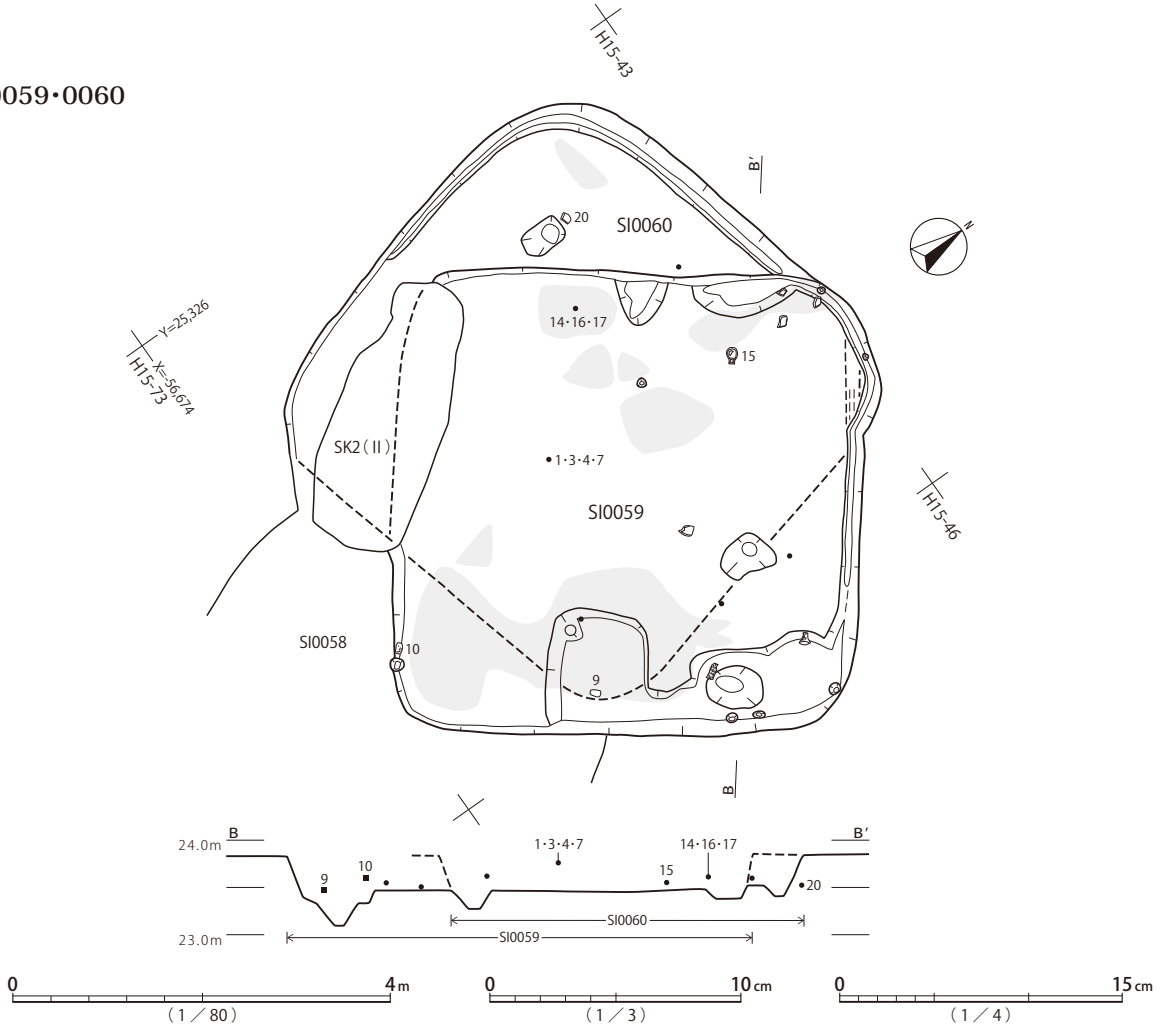


第100図　SI0058遺構

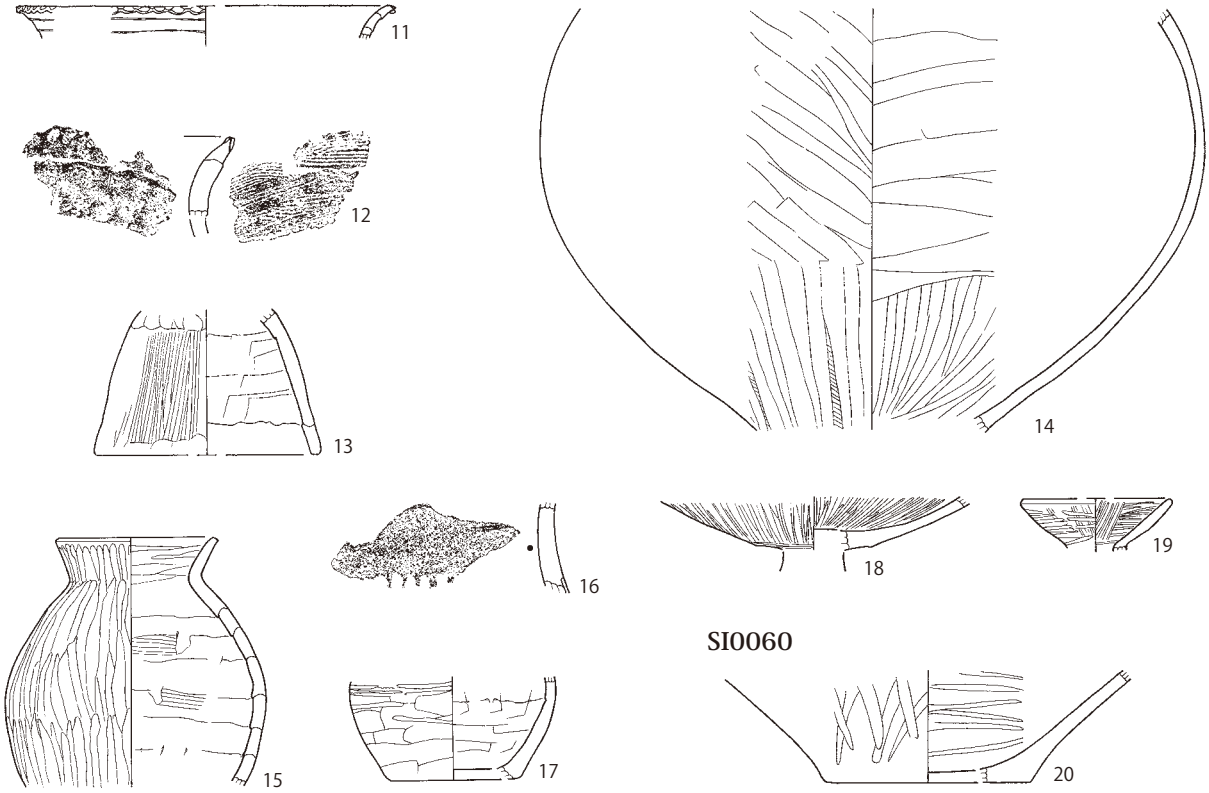


第101図　SI0059・SI0060遺構(1)、SI0059遺物(1)

SI0059・0060



SI0059



SI0060

第102図　SI0059・SI0060遺構（2）、SI0059遺物（2）、SI0060遺物

SI0060は主柱穴の可能性があるcのみが検出されている。推定南東角にある方形凹部は貯蔵穴の痕跡を含む可能性がある。床面周溝は遺存部北半に認められる。床面は堅緻である。

覆土は、土層断面記録によるとSI0059覆土と連続する状況だが、平面検出状況から考えて、本来、SI0060覆土にSI0059立ち上がりラインが検出されて然るべきである。色調等が似ていたため誤認したものと思われる。北西角付近で焼土が検出されている。

遺物は、位置記録を持つものは壺20に限られる。甕11・12、台付甕13、高杯18、小型器台19については、遺物注記は「H60」であるが、現場段階でこれら覆土一括取り上げ資料がSI0060範囲の覆土由来とは特定できないため、SI0059へ帰属させておく。

本遺構は、平面形と切り合い関係から、弥生時代終末期の所産と推定する。

SI0059はa・bが検出されるのみで、bが貯蔵穴と見られる。中心からやや北寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は部分的に認められる。床面は堅緻である。

覆土は、焼土が広範囲で検出されており、建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

遺物は、床面近くから壺15、焼土堆積層に混じるかたちで甕14などが出土している。その他には、若干、高い位置から、受口状口縁甕1、鉢3、小型壺4、小型丸底系土器7が検出されている。小型鉢7、甕14は古墳時代前期、草刈式に近いが、全体的には弥生時代終末期、中台式との過渡的な様相が目立つ。他に高杯脚部が東隅付近で検出されているが、所在不明である（図版33）。その他、砂岩製砥石9、流紋岩質凝灰岩10が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半、中台2式期から草刈1式期の所産と考えられる。

SI0060が弥生時代終末期、SI0059が弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半と考えられる。

SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・SI0066（第103～107図、図版33・34・147・196・197・303・330）

連続する5棟の竪穴建物跡である。隅円方形のSI0066、方楕円形のSI0065、楕円形と見られるSI0061、隅円方形のSI0064・SI0063で構成される。SI0066はSI0063とSI0065に切られる。SI0064とSI0063は中心軸・規模とも近似する。SI0064がSI0061を切り、SI0063はSI0066とSI0061を切る。SI0061はSI0066と切り合うが、床面レベルは同様で構築順を確定するのは難しい。積極的根拠に乏しいが、SI0061がSI0066を切ると推定する。

SI0066は、4.3×3.9m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴等は検出されていない。中心軸上、やや北寄りに楕円形の炉が設けられる。北辺壁際の小穴列を除いて床面周溝が連続する。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

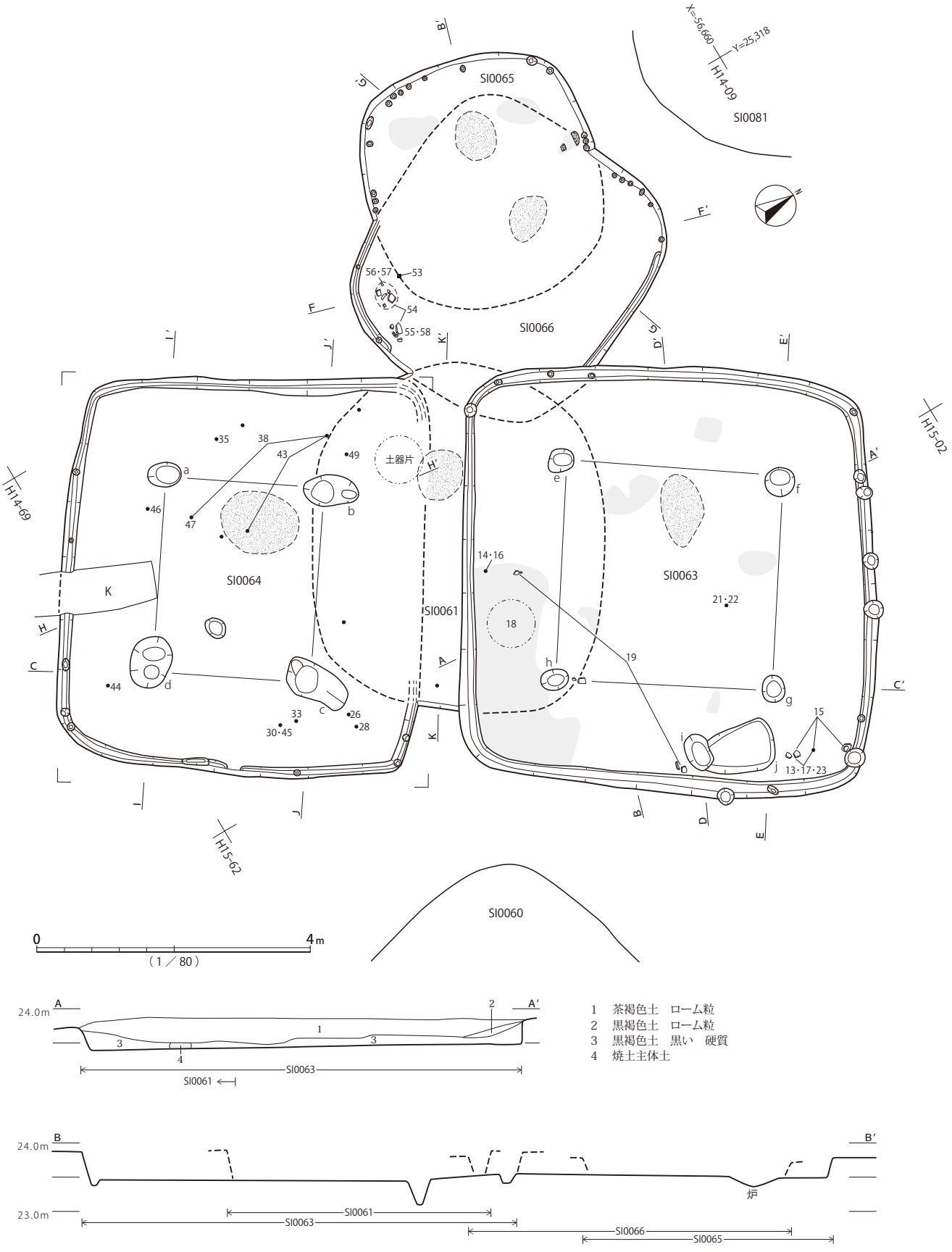
覆土は、SI0065・SI0063に破壊され、遺存部は少ない。

遺物は床面レベルから、後期弥生土器である転用鉢54、壺55・56・57・58、軽石製砥石53が出土している。土器は弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原式期の所産と考えられる。

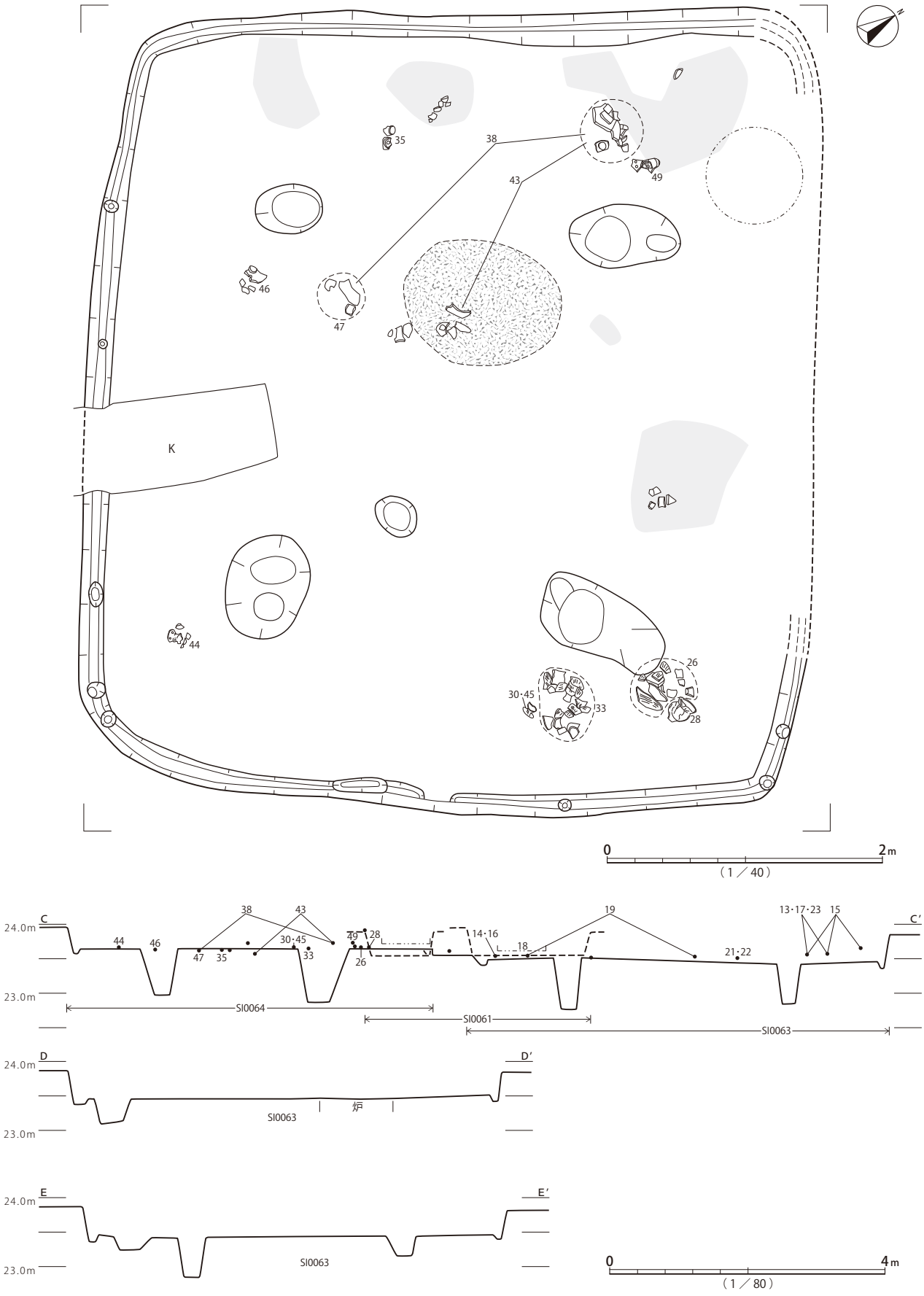
SI0065は、3.6？×3.4m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。中心軸上北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められないが、遺存部の壁際には小穴が並ぶ。床面は、比較的堅緻である。

SI0061・0063・0064・0065・0066



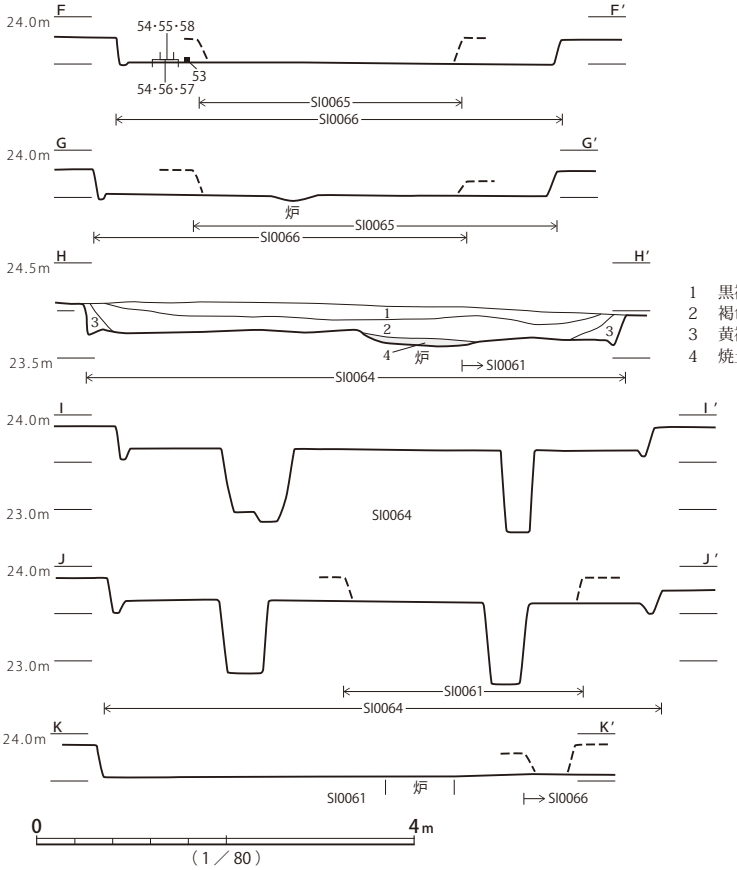
第103図 SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・SI0066遺構(1)

SI0061・0063・0064・0065・0066



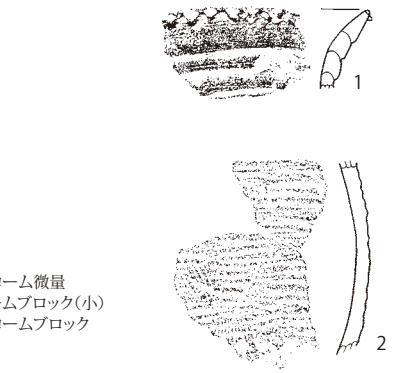
第104図　SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・SI0066遺構(2)

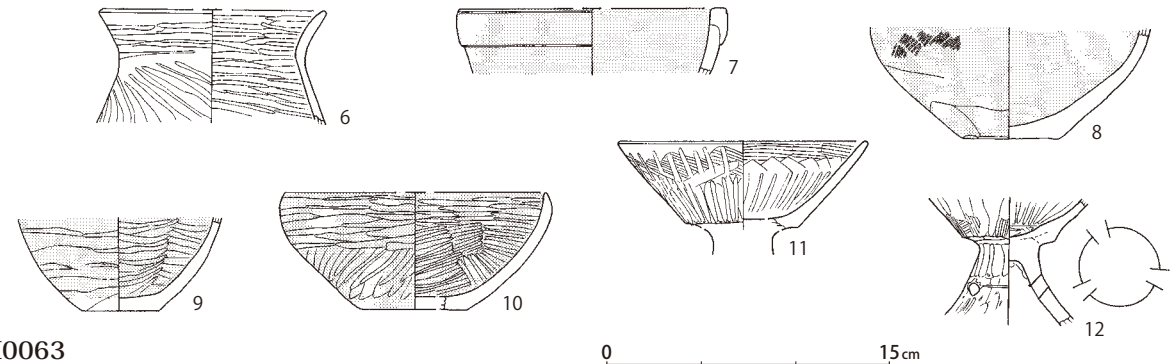
SI0061・0063・0064・0065・0066



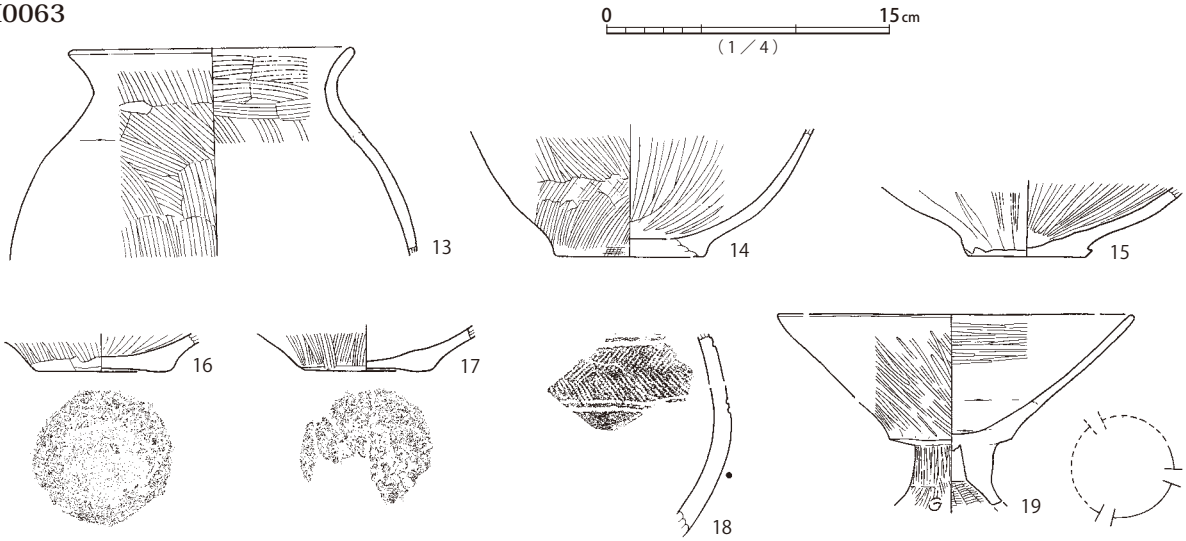
1　黒褐色土　ローム微量
2　褐色土　ロームブロック(小)
3　黄褐色土　ロームブロック
4　焼土(炉)

SI0061



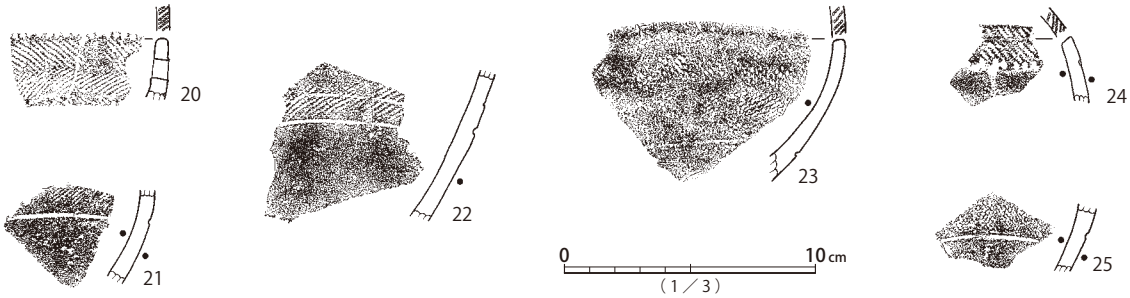


SI0063

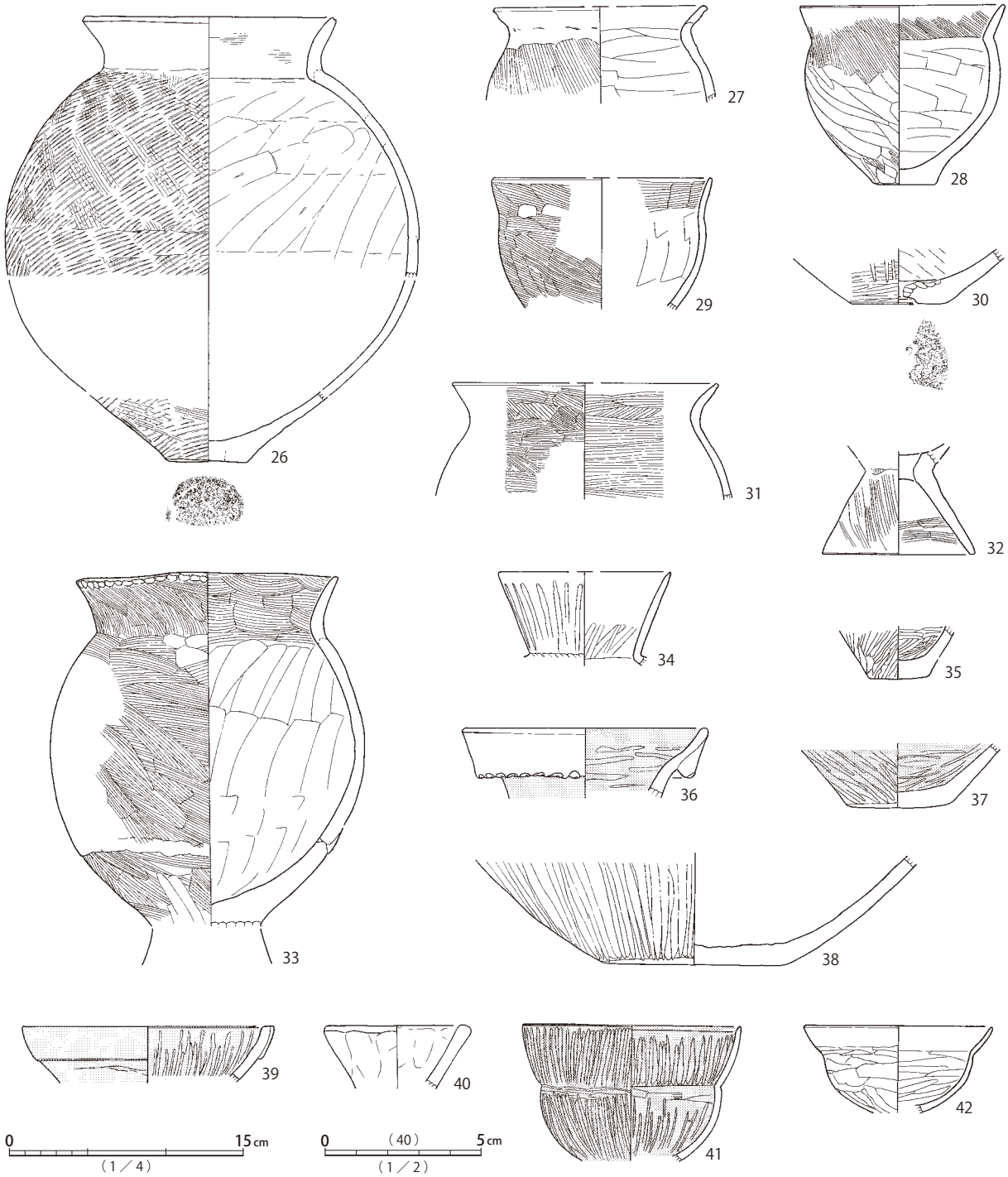


第105図　SI0061・SI0063・SI0064・SI0065・SI0066遺構(3)、SI0061遺物、SI0063遺物(1)

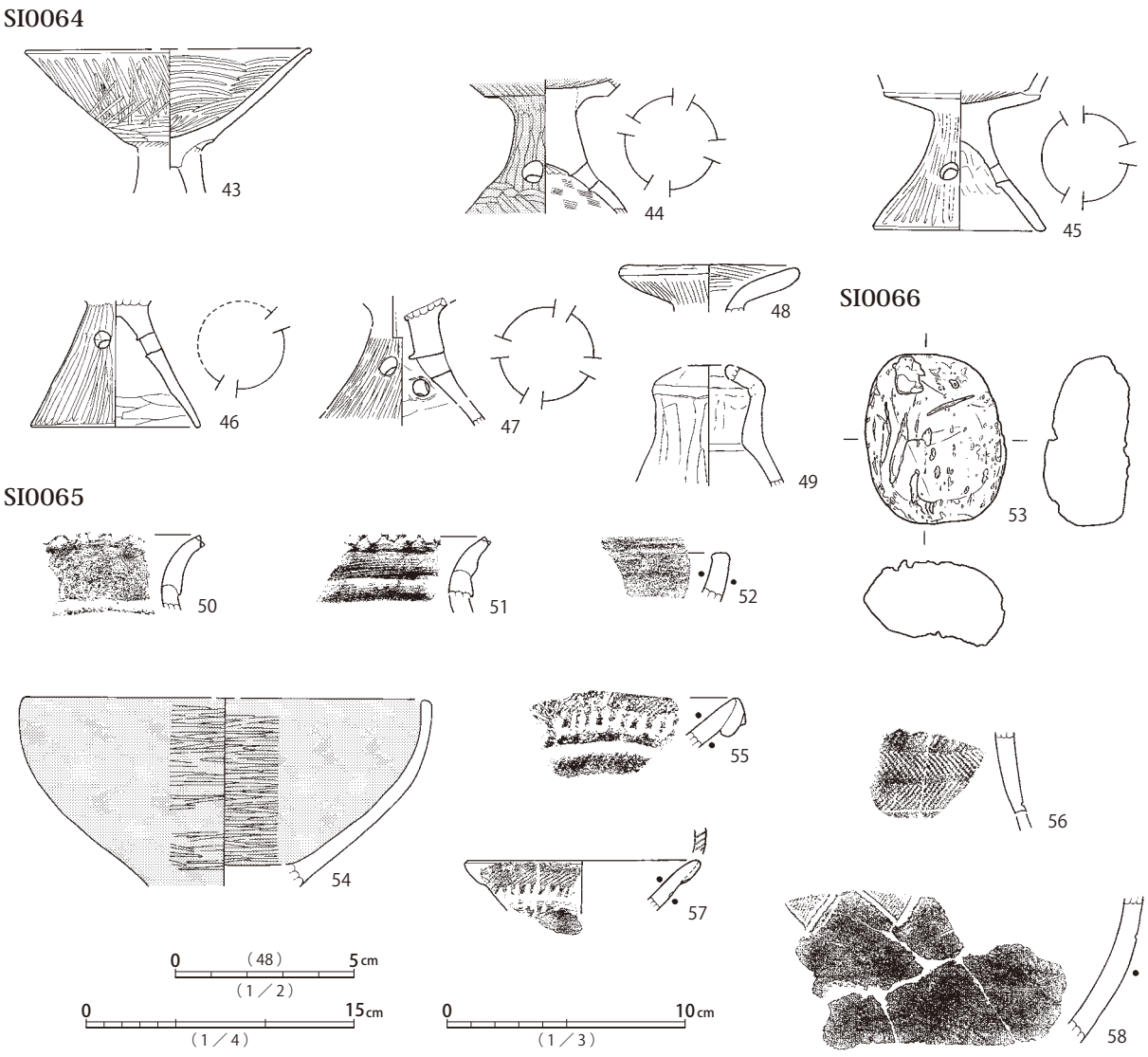
SI0063



SI0064



第106図　SI0063遺物（２）、SI0064遺物（１）



第107図　SI0064遺物(2)、SI0065・SI0066遺物

覆土は、床面上に厚さ10cm前後で焼土が検出されている。

遺物は、甕50・51、鉢52が出土しているが、いずれも覆土一括取り上げ資料の小片である。

本遺構は、平面形と切り合い関係から、弥生時代終末期の所産と推定できる。

SI0061は、5.1？×4.2？m、深さ30cm程度の楕円形と推定される竪穴建物跡である。推定中心軸の西寄りに楕円形の炉が設けられる。東西両側をSI0064・SI0063に破壊されており、主柱穴等は遺存していない。調査記録ではSI0064の床面周溝がSI0061に破壊されていると記述されるが、床面レベルはSI0061の方が低く、SI0064の貼床・床面周溝はSI0061覆土除去に伴い、図化される前に掘削された可能性がある。

遺物は、壺または鉢の破片が出土したとの記述が残り、鉢7～10が該当する可能性がある。甕1、タタキ甕2～5、広口壺6、高杯11・12を含め、覆土一括取り上げ資料である。いずれも弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。

本遺構は、切り合い関係と推定平面形から、弥生時代終末期に帰属する可能性がある。

SI0064は、5.8×5.2m、深さ20cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～dが検出され、b・c・

dに建て替えによると見られる重複する掘り込みが認められる。中心軸上北西寄り、柱間に収まる位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は遺存部においてほぼ全周し、小穴が一部に伴う。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に硬化する。

覆土は、初期堆積にロームブロックが目立つものの、漸移的に埋積が進んだ状況を示す。床面直上から5～10cmの厚さで焼土が堆積しており、建物・建材の焼却処分が行われた可能性がある。

遺物は床面レベルで、完形に近いものを含む遺存状態の良い土器群が出土している。タタキ甕26、くの字状口縁の小型甕28、台付甕33、高杯43・44・45・46・47、炉器台49は、いずれも弥生時代終末期、中台式の特徴を示す。タタキ甕26と台付甕33は外来的形式だが、胎土は在地産として違和感のないものである。直口壺34、小型丸底系鉢41・42は古墳時代前期前半、草刈式と見られるが、「黒土」出土とされる上層の覆土一括取り上げ資料である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期の所産と考えられる。建て替えが推定されるため、遺構構築時期は最終段階の土器が示す時期を若干遡る可能性がある。

SI0063は、6.2×6.0m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴e～h、ハシゴ穴i、貯蔵穴と見られるjが検出されている。中心軸上やや北西寄り、e・f間ラインの内側に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、疎らに小穴が伴う。床面は堅緻で、中央部が5cm程度高くなる。

覆土は、床面上に5～10cmの厚さで焼土が堆積している。建物・建材の焼却処分が行われた可能性が考えられる。

遺物は、甕13、高杯19等が出土している。床面レベルで、甕14・16、高杯19等、東隅付近の床面から若干高い位置から、甕13等が検出されている。いずれも埋没過程の早い段階に伴った遺物と思われる。甕13は、ハケメ仕上げで素口縁を持ち、頸部屈曲が緩やかという過渡的な特徴を示す。全体的に弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。

SI0066が弥生時代後期前半、SI0065・SI0061・SI0064・SI0063が弥生時代終末期に位置づけられる。SI0061は平面形・帰属遺物とも不明確だが、南東および北西壁面と炉の位置関係から、SI0064・SI0063に近い主軸方位が推定できるため、SI0065より新しい時期に構築されたと考えられる。

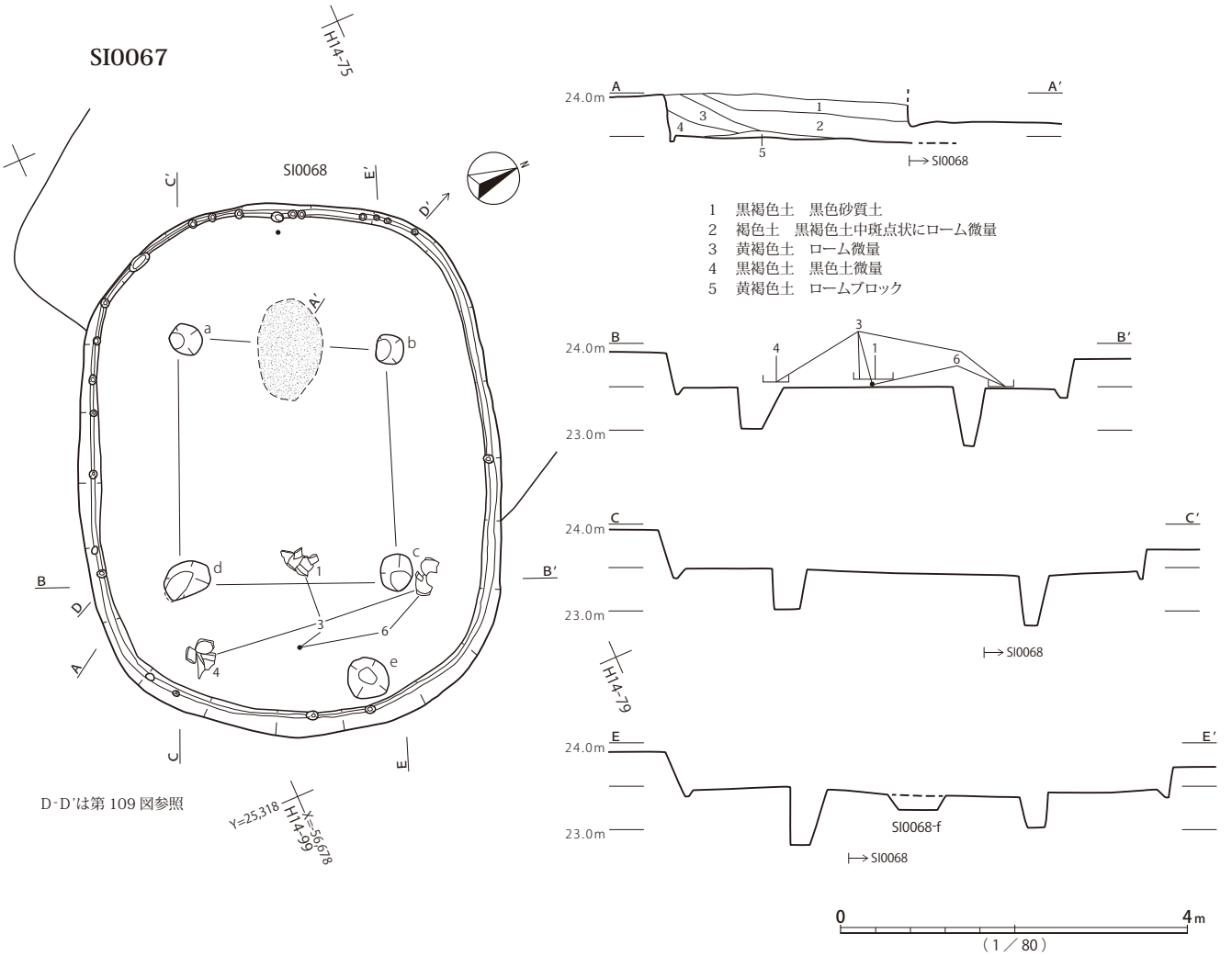
SI0067（第108図、図版34・147・197・198）

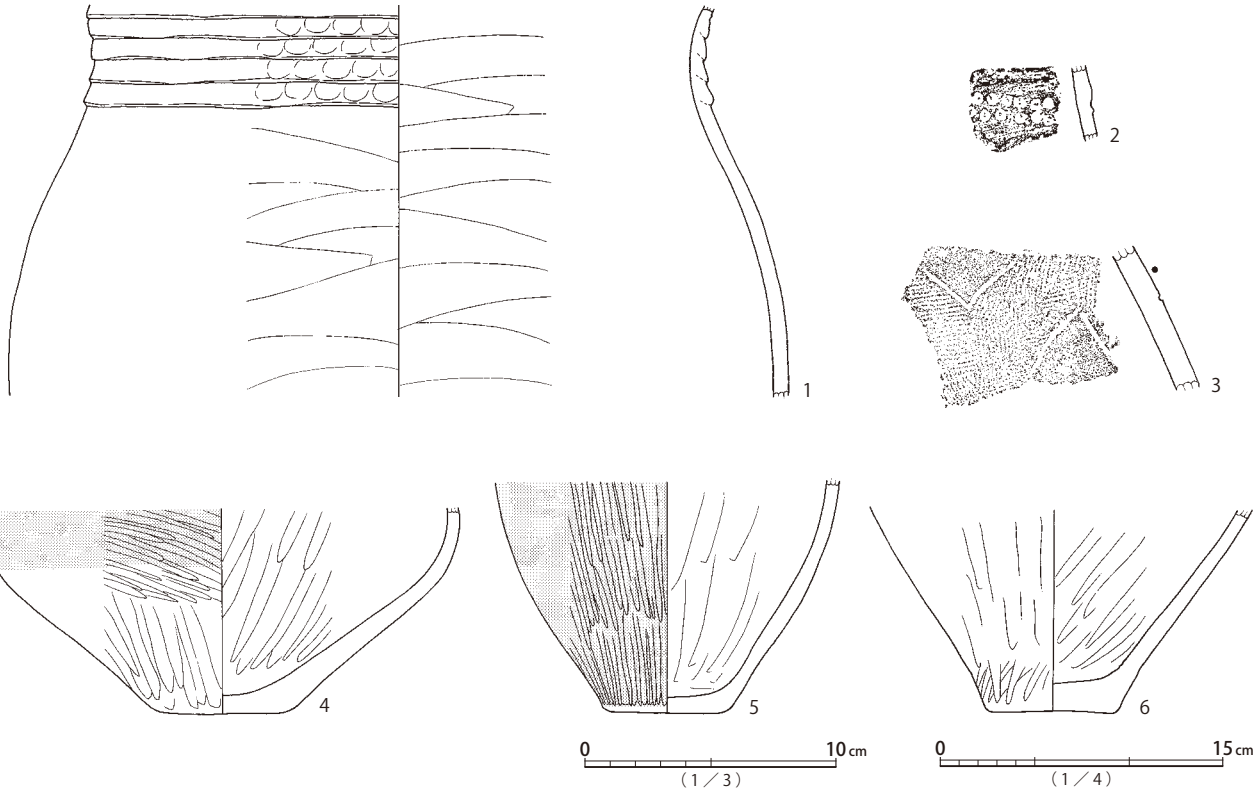
6.2×4.9m、深さ45cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝が全周し、部分的に小穴が伴う。床面はあまり硬化していない。

覆土は、床面直上にロームブロック混じりの層が見られるが、漸移的に埋積した状況を示す。SI0068と切り合い、北半の上位層が15cm程度、破壊されている。

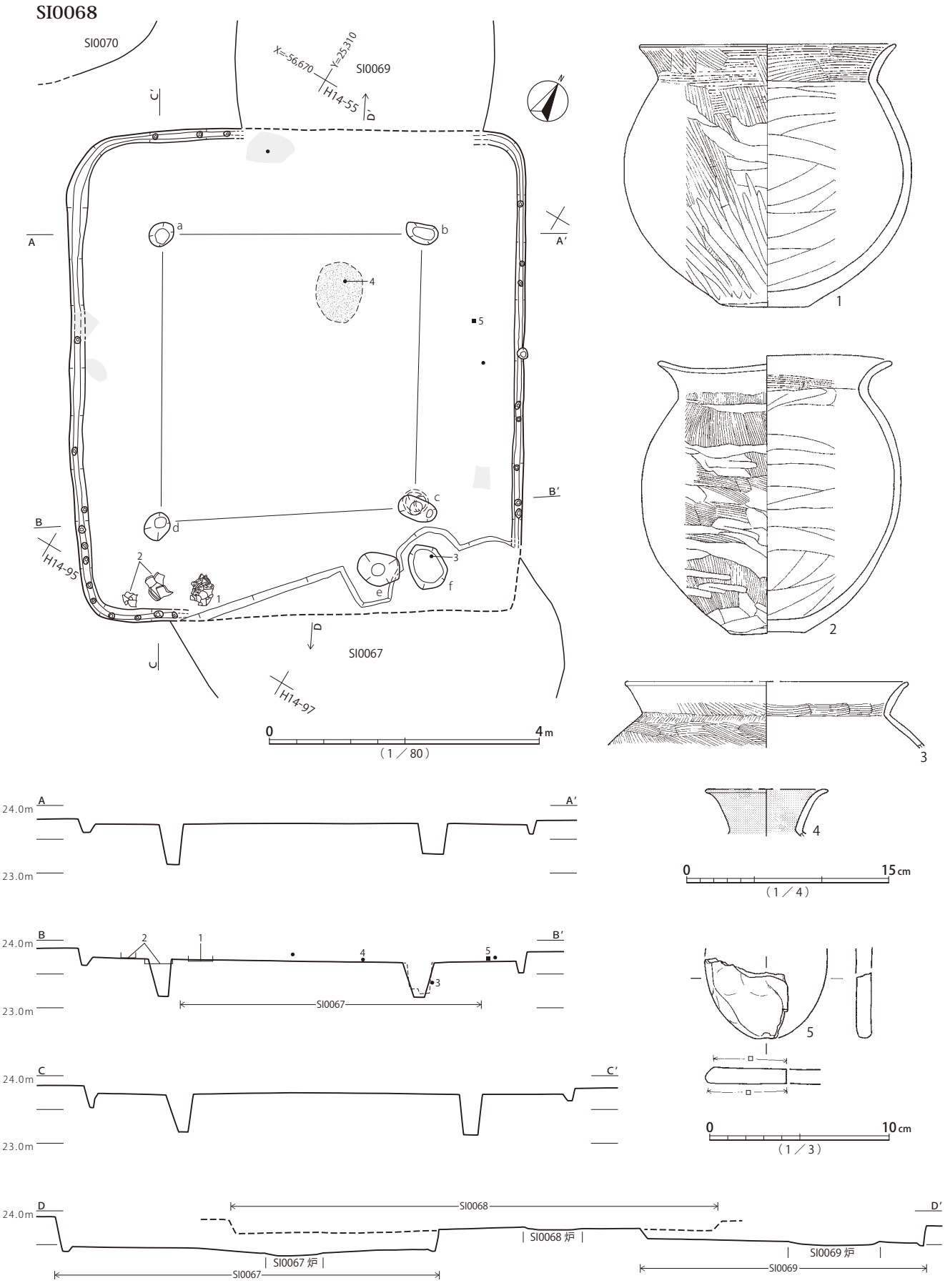
遺物は、床面レベルで、甕1、壺3・4・6が出土している。輪積み装飾を持ち頸部屈曲のなだらかな大型甕1と、山形文を持つ壺3は、弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原式期の所産と考えられる。





第108図　SI0067遺構・遺物



第109図　SI0068遺構・遺物

SI0068（第 109 図、図版 34・147・198・303）

7.2 × 6.7m、深さ 15cm程度の方形竪穴建物跡である。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴と見られるe、貯蔵穴fが検出されている。cについては破線部が床面、実線がSI0067で検出された掘方の形状を示す。中央やや北東寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は遺存部では全周し、部分的に小穴が伴う。床面はあまり硬化していない。

覆土は、外周の床面近くで焼土が部分的に検出されている。SI0067・SI0069と切り合い、両遺構覆土中に床面を形成する。

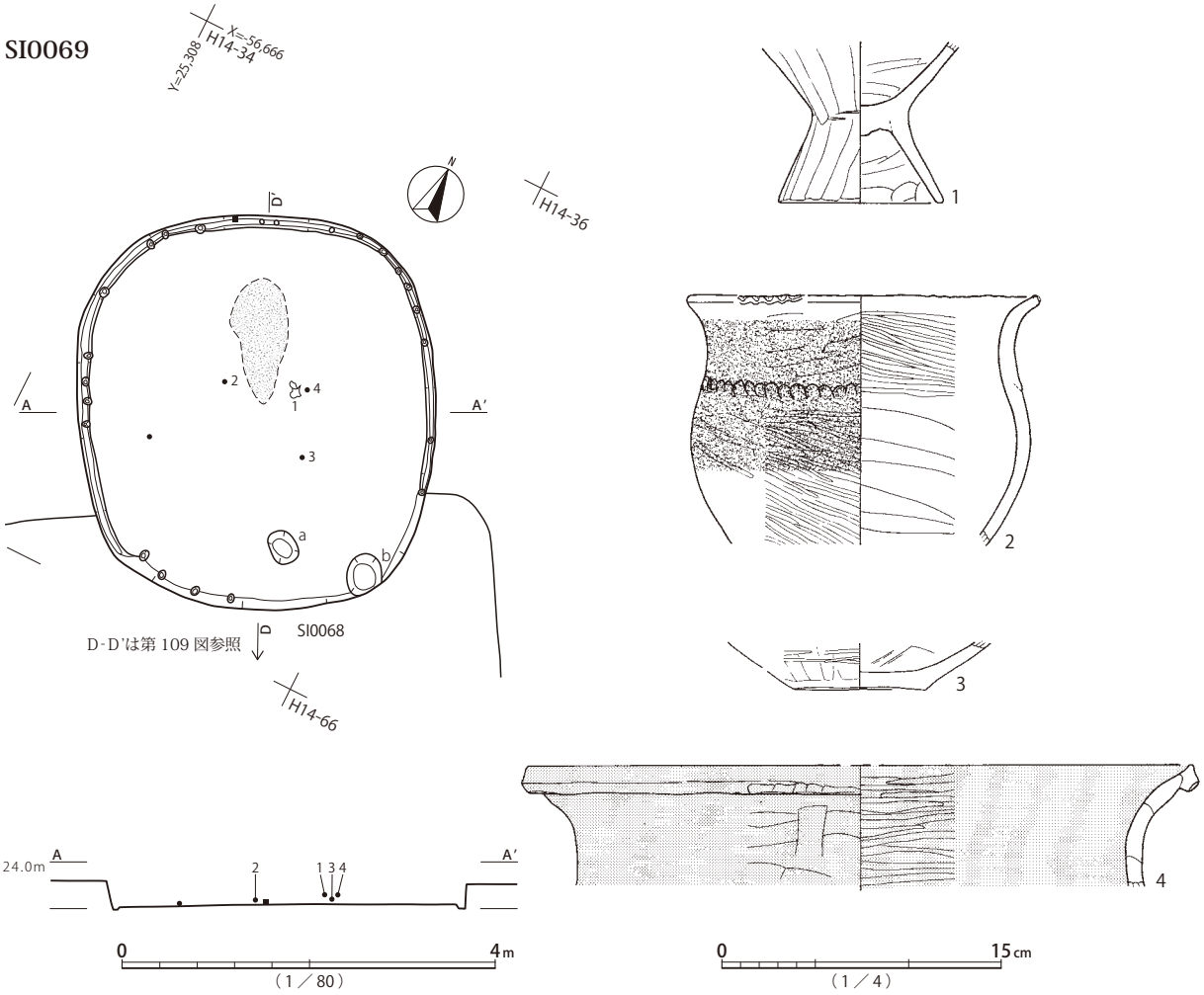
遺物は、床面レベルで甕1・2、軽石製砥石5が出土している。炉内から壺4、貯蔵穴内から甕3が出土している。土器は古墳時代前期前半、草刈式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半、草刈式期の所産と考えられる。

SI0069（第 110 図、図版 34・198）

4.2 × 3.8m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は見られず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。中心軸上北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南辺を除いて全周し、小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、中央部に硬化が認められる。

覆土は、南辺がSI0068と切り合い、上層が破壊されている。



第110図　SI0069遺構・遺物

遺物は、床面レベルから下層にかけて、台付甕1、甕2・3、広口壺4が出土している。いずれも弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半、山田橋式から中台1式と考えられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半、中台1式期の所産と考えられる。

SI0070・SI0071・SI0083（第 111 ～ 114 図、図版 16・34・36・37・149・198・201・303・330）

4.5？×4.0m、深さ30cm程度の楕円形竪穴建物跡SI0071、5.3×4.5m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI0070、3.8×3.7m、深さ35cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0083である。

SI0071は、主柱穴e～hが検出されている。中心軸上、e・f間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉の手前側には壺片を埋め込んでいる。床面周溝は見られず、小穴列が検出されている。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

覆土は、床面レベルで部分的に焼土の堆積が認められるが、上位は漸移的な堆積状況を示す。SI0070・SI0083と切り合い、両遺構に北東辺・南辺が床面まで破壊される。

遺物は、位置記録を持つものとしては炉内に埋置された山形文の壺5が出土するのみで、他は覆土一括取り上げ資料である。壺3は結節区画の縄文横帯を持つ。弥生時代後期に位置づけられる。

本遺構は、弥生時代後期前半以降の所産と考えられる。

SI0070は、主柱穴a～dが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に卵形の炉が設けられる。床面周溝は見られず、小穴列が認められる。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

覆土は、外周部に焼土が堆積し、壁際の初期堆積に乗るかたちで床面に及んでいる。第2層にはロームブロックが多く含まれており、建物・建材の焼却処分に続き、ある程度の埋め戻しが行われた可能性がある。南角がSI0071と切り合い、本遺構が破壊している。土層断面図にはSI0070の立ち上がりは記録されていないが、平面検出時の記述等から、SI0070の方が新しいと推定する。

遺物は、床面から鉢1が出土している。弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

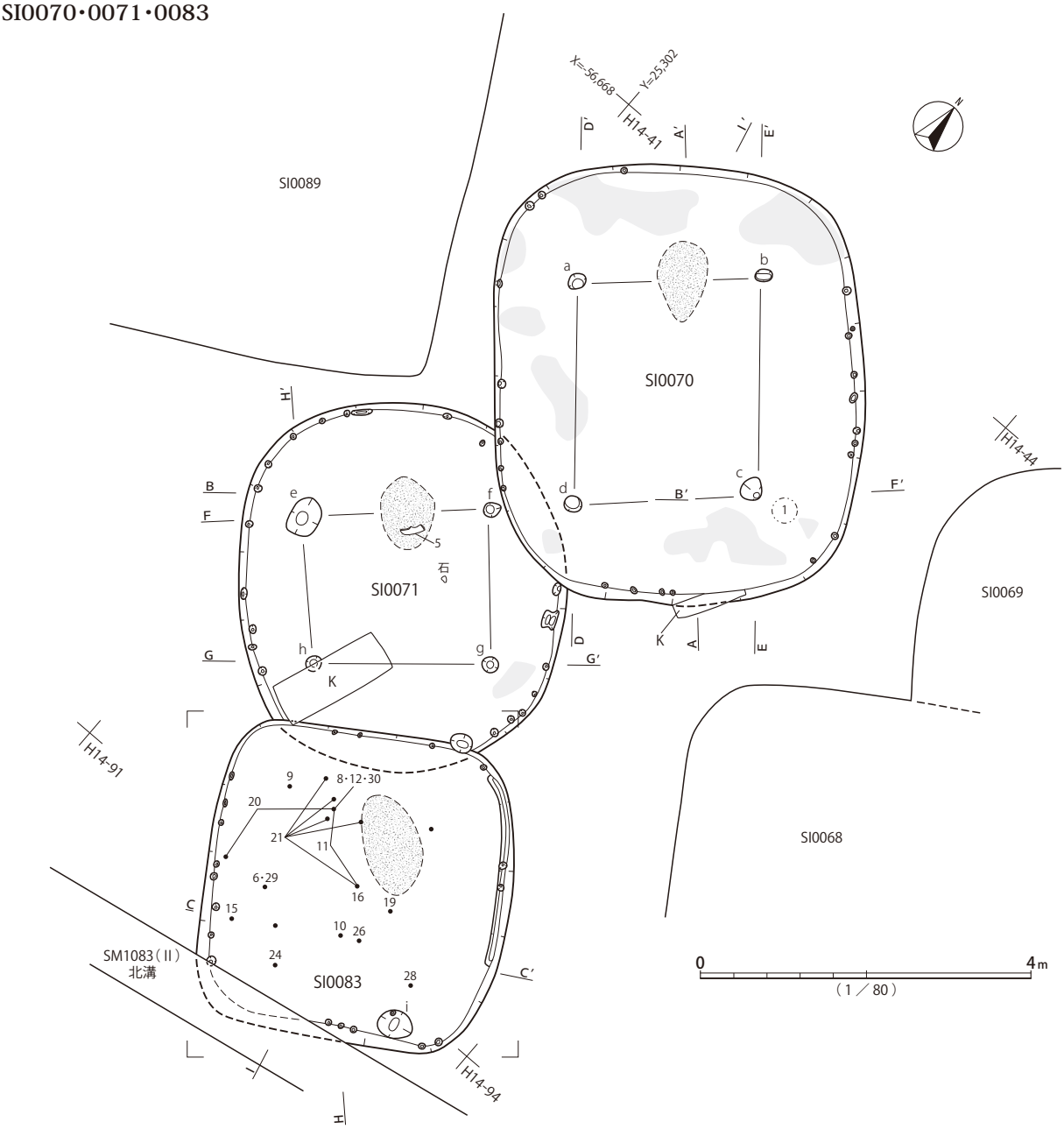
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

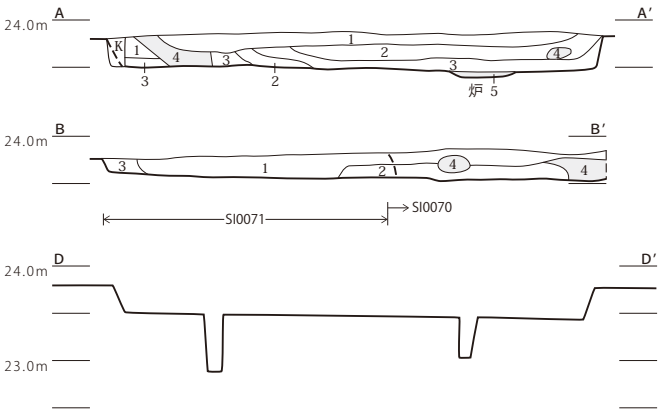
SI0083は、主柱穴は見られず、貯蔵穴と見られるiが検出されている。中央やや北寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は東辺だけ確認され、他は小穴が断続的に並ぶ。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

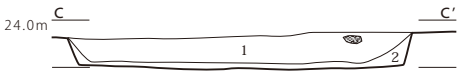
覆土は、漸移的な堆積状況を示している。北辺でSI0071、南西角でSM1083周溝と切り合い、後者に破壊されている。

遺物は、床面レベルから覆土下位にかけて多量に出土している。ハケメ調整のくの字状口縁甕6、受口状口縁甕8、輪積痕装飾の甕9、ヘラ描き斜線列文が施されたくの字状口縁甕11、タタキ甕12、櫛描文の壺18、頸部屈曲の緩い壺21、結合器台26、透孔が4孔配置の高杯28と小型器台29等が検出されている。31は軽石製砥石である。甕9は口縁端部が交互押捺ではなく、1方向の押圧が施される。全体的に縄文装飾が欠落する点とハケメ技法が採用されている様相は新相を呈するが、弥生時代終末期、中台式に相当する土器が主体を占める。装飾器台26は、SI0042出土資料と同様に、古墳時代前期前半に増加する結合器台の先行形態と考えられる。甕11の装飾は、SI0076の受口状口縁甕35等の影響による可能性がある。その他、軽石製砥石31が出土している。

SI0070・0071・0083







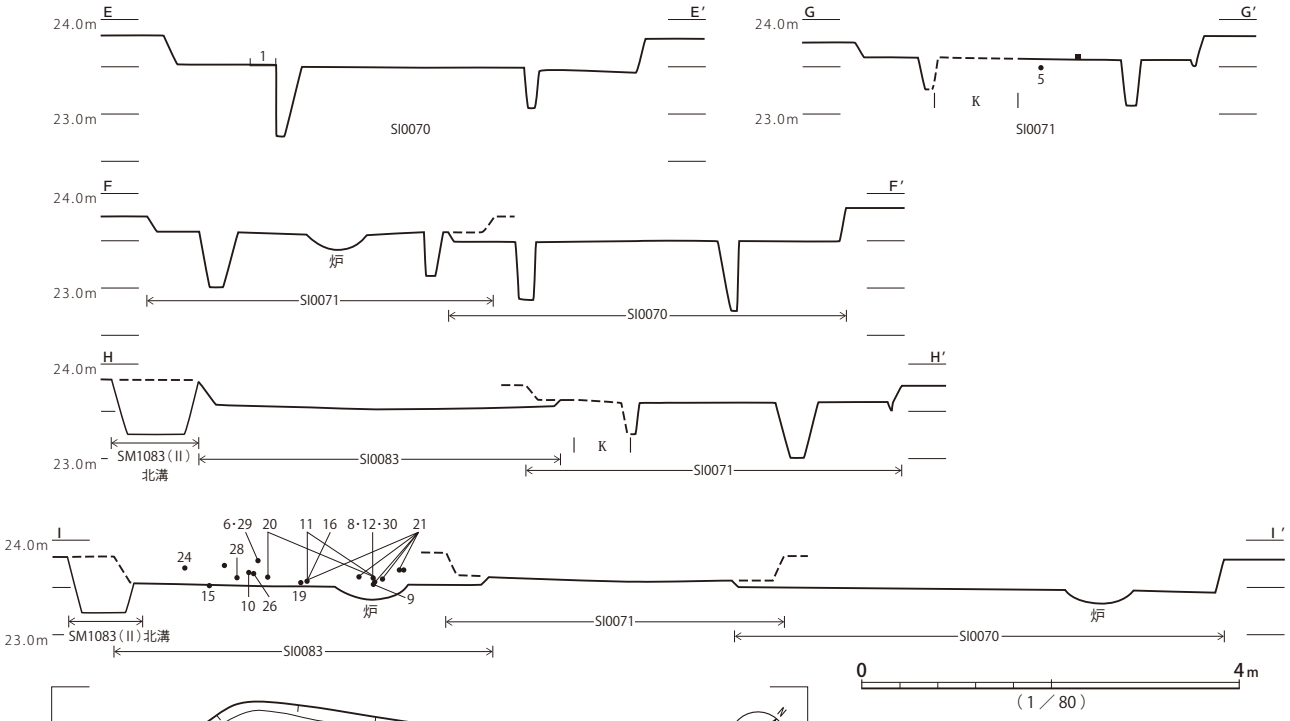
SI0070 A-A′
1　淡黒茶褐色土　ソフトローム若干
2　淡茶褐色土　ソフトロームブロック多量
3　暗黒茶褐色土　焼土粒若干
4　焼土
5　焼土　炉覆土

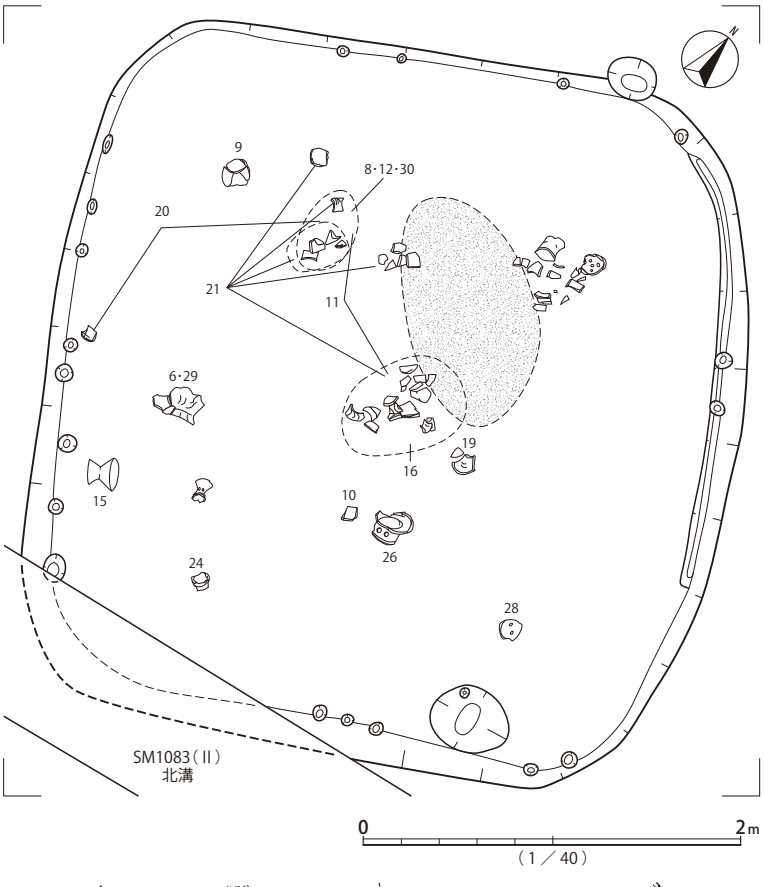
SI0071 B-B′
1　淡黒茶褐色土　ソフトローム若干
2　黒色土
3　淡茶褐色土　ソフトロームブロック
4　焼土

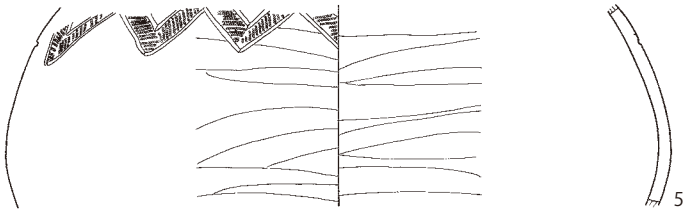
SI0083 C-C′
1　黒褐色土　炭化物・砂質黒色土微粒
2　褐色土　ロームブロック

第111図　SI0070・SI0071・SI0083遺構（1）

SI0070・0071・0083







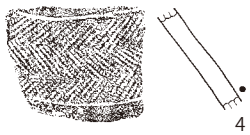
SI0070

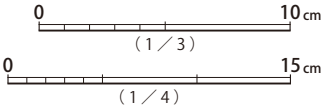


SI0071



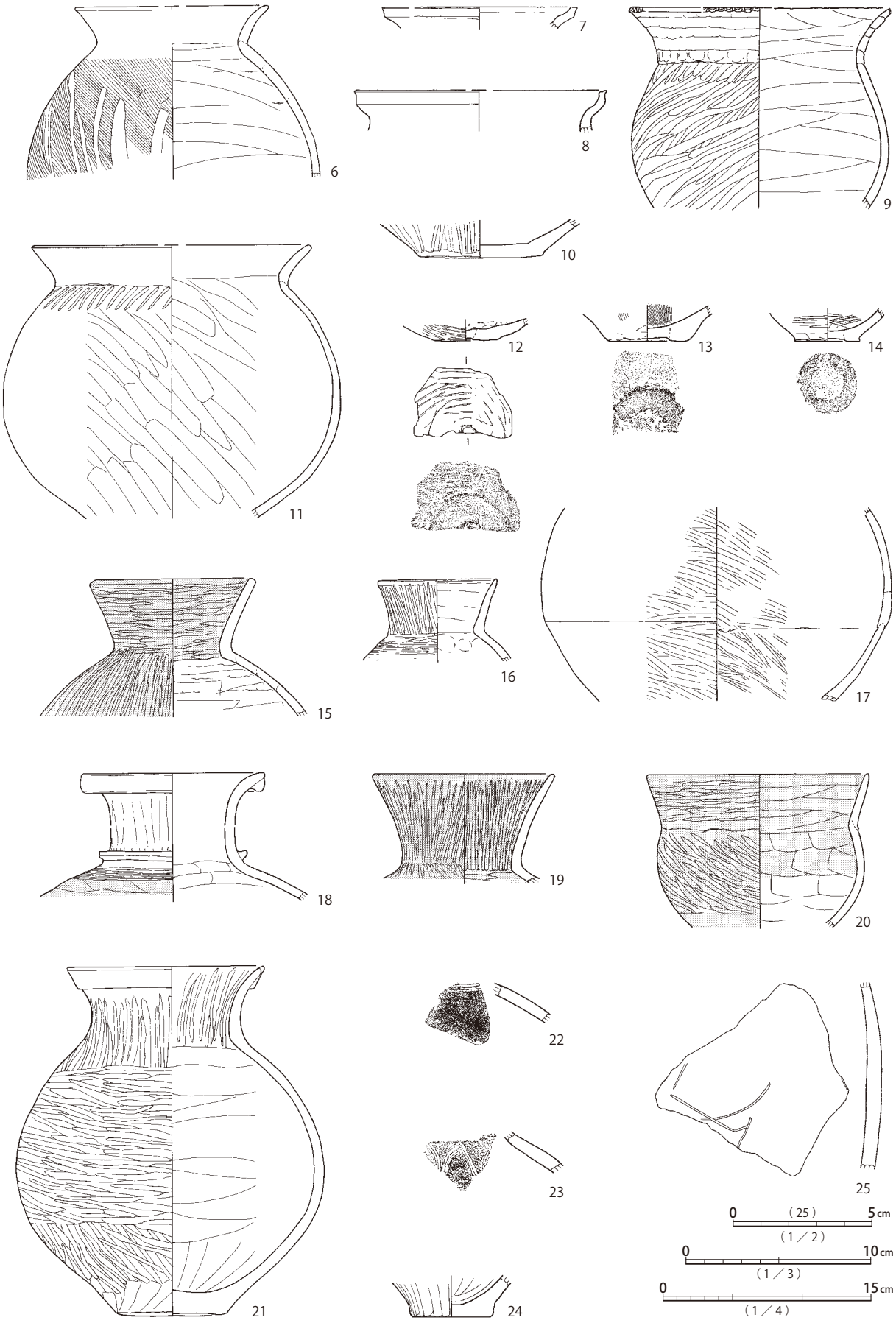






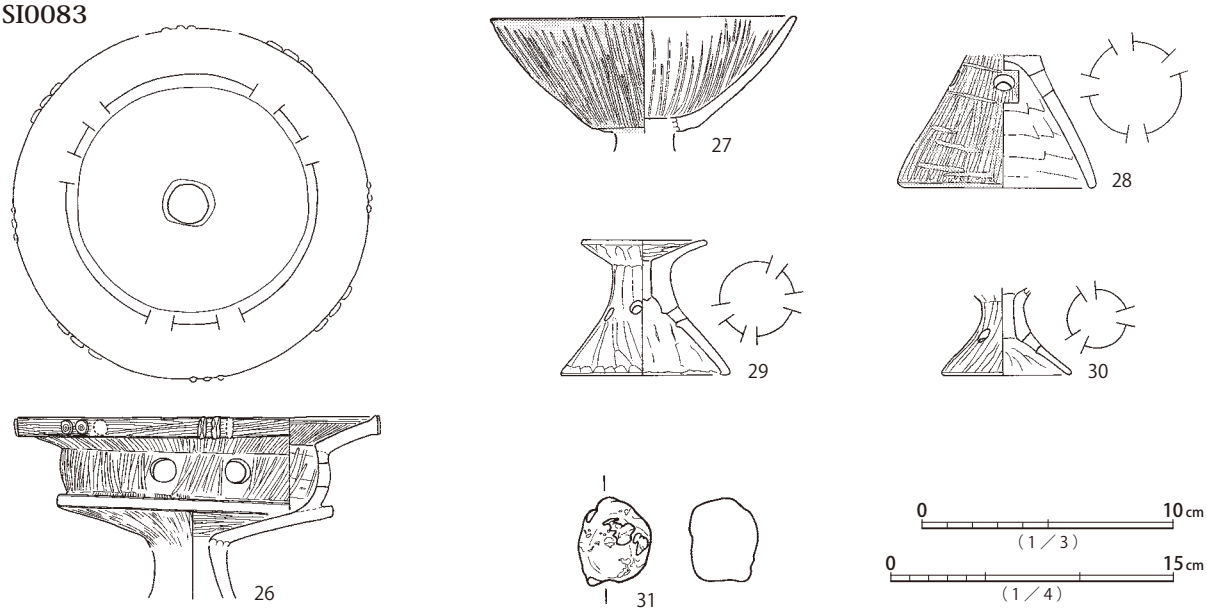
第112図　SI0070・SI0071・SI0083遺構(2)、SI0070・SI0071遺物

SI0083



第113図　SI0083遺物（1）

SI0083



第114図　SI0083遺物（2）

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。

弥生時代後期のSI0071、弥生時代後期後半のSI0070、弥生時代終末期SI0083という構築順が想定される。

SI0073・SI0160（第115図、図版35・55・198）

5.4？×5.0m、深さ5cm程度の楕円形竪穴建物跡SI0073と、4.1×3.5m、深さ5cm程度の方形竪穴建物跡SI0160である。両遺構とも覆土がほとんど遺存しない。

SI0073は、中心近くに炉が設けられ、他にハシゴ穴と見られるaが検出されている。床面周溝は認められず、小穴が等間隔に近く並ぶ。

覆土は、焼土の集中箇所が認められる。

遺物は、一括取り上げ資料の台付甕1と鉢2のみである。弥生時代後期から弥生時代終末期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期に帰属する可能性がある。

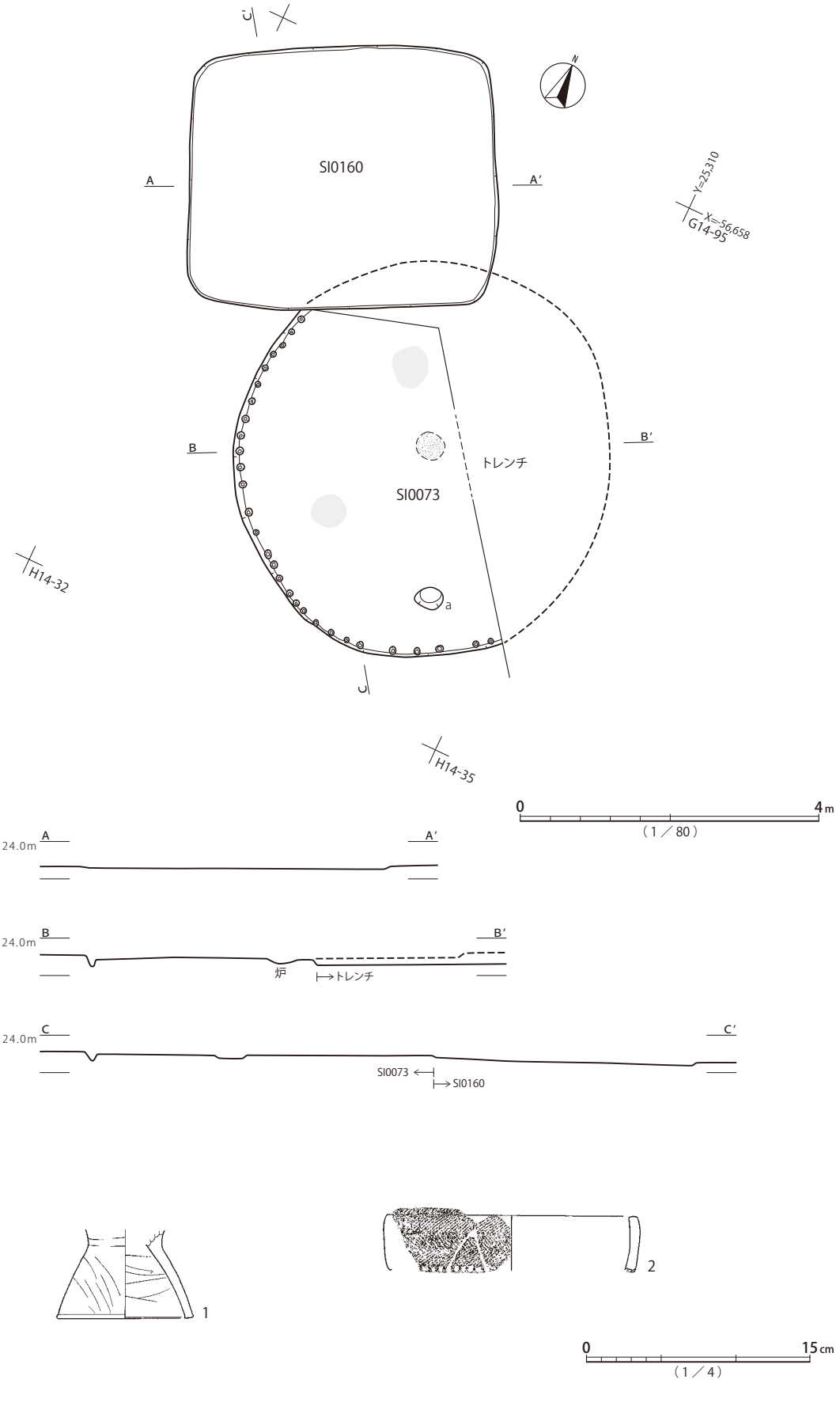
SI0160は、床面施設がまったく検出されず、出土遺物も確認されていない。積極的根拠は乏しいが、平面形と規模から古墳時代の竪穴建物跡と推定する。

SI0074・SI0075・SI0076・SI0077（第116～118図、図版15・35・147・148・198・199・303・330）

4棟の竪穴建物跡、方楕円形のSI0074・SI0077、方楕円形もしくは隅円方形のSI0076、隅円方形のSI0075が切り合う。

SI0074は、4.2×4.1m、深さ50cm程度の方楕円形の竪穴建物跡で、SI0075・SI0076と切り合う。主柱穴は見られず、貯蔵穴と見られるdが検出されている。中心軸上西寄りに長楕円形の炉が設けられ、貯蔵穴dとの中間に長さ40cm程度の楕円形の炉がもう1箇所検出されている。床面周溝は北西隅の一部しか見られず、小穴が並ぶ。

SI0073・0160



SI0073

第115図　SI0073・SI0160遺構、SI0073遺物

覆土は、壁際にロームブロックの多い初期堆積があり、以上は漸移的な堆積状況を示している。北西辺をSI0075に破壊されている。

遺物は、甕4、壺11・12・13等が覆土中位以下から出土している。小型甕3については、SI0052出土資料が注記時に混乱した可能性が考えられる。甕5とタタキ甕6は切り合い部から検出されているため、SI0076に由来する可能性がある。出土土器の主体は、輪積装飾の甕4、結節文区画の壺11等にあり、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半、山田橋式期の所産と考えられる。

SI0077は、4.8×5.0m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴の可能性があるa・bが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南西・南東辺の遺存部に見られ小穴が伴い、他は小穴が並ぶ。床面はソフトローム層に形成され、柱間は比較的堅緻である。

覆土は、漸移的な堆積状況を示している。

遺物は、広口壺38、底部輪台技法の甕39、高杯40・41、砂岩製砥石43が出土している。いずれも覆土一括取り上げ資料である。炉内から石が出土した記録もあるが、砂岩製砥石43とは注記が一致しない。高杯41の脚部透孔は2孔配置であり、透孔が2段で構成される開脚高杯の可能性もある。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期に帰属すると考えられる。

SI0076は、3.6以上×5.3？m、深さ25cm程度の隅円方形もしくは方楕円形と見られる竪穴建物跡である。各遺構と切り合い、南東辺と南西辺の一部だけ遺存する。柱穴・床面周溝は検出されず、炉も含め、他遺構覆土部分に配置されていた可能性がある。

土層断面図には立ち上がりが捉えられていないが、遺物の出土状況から推測して、SI0074覆土にSI0076床面が存在したと考えられる。

遺物は、甕5、タタキ甕6、受口状口縁甕35等がSI0076に伴うと見られる。いずれも弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器42が出土している。

本遺構は、推定平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期、中台式期の所産と考えられる。

SI0075は、4.6×4.4m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。貯蔵穴と見られるcが検出されている。中心のやや北東寄りに長楕円形の炉が設けられる。床面周溝はc付近を除く遺存部において連続し、小穴が伴う。床面はあまり硬化していない。

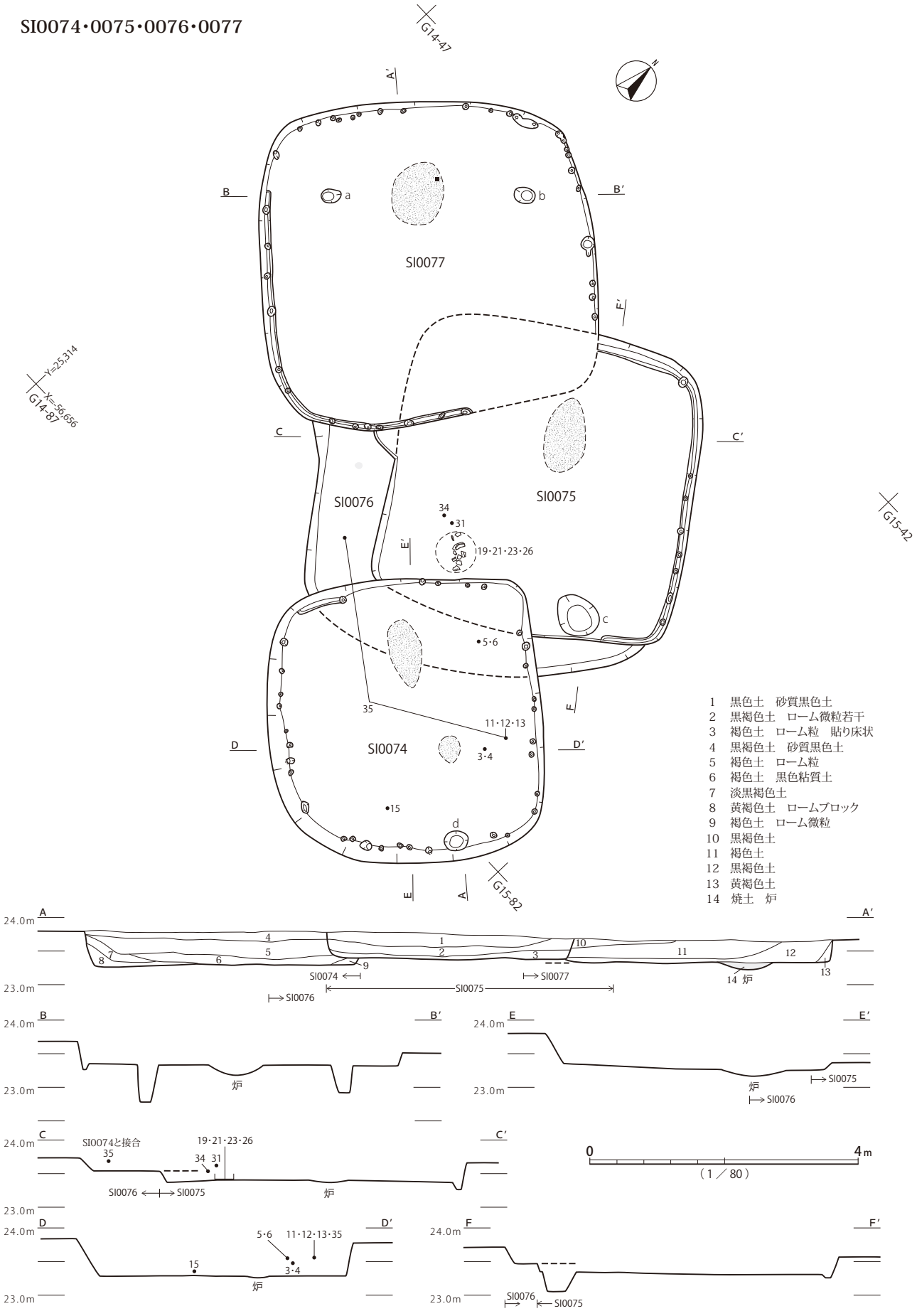
覆土は、SI0074・SI0077覆土を掘り込んで、本遺構が構築された状況を示す。貼床と連続するロームの多い最下層より上は、漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、甕19・21・23、壺26が床面レベルで検出され、有段口縁鉢31、高杯34等が覆土中位から出土している。鉢31は口縁部に段が形成されており、北陸南西部系の有段口縁に由来する可能性もある。全体的には、頸部屈曲の内外面屈折化が認められながらも、ナデ仕上げの土器も多く、過渡的様相を示すことから、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半、中台2式期から草刈1式期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半、中台2式期から草刈1式期の所産と考えられる。

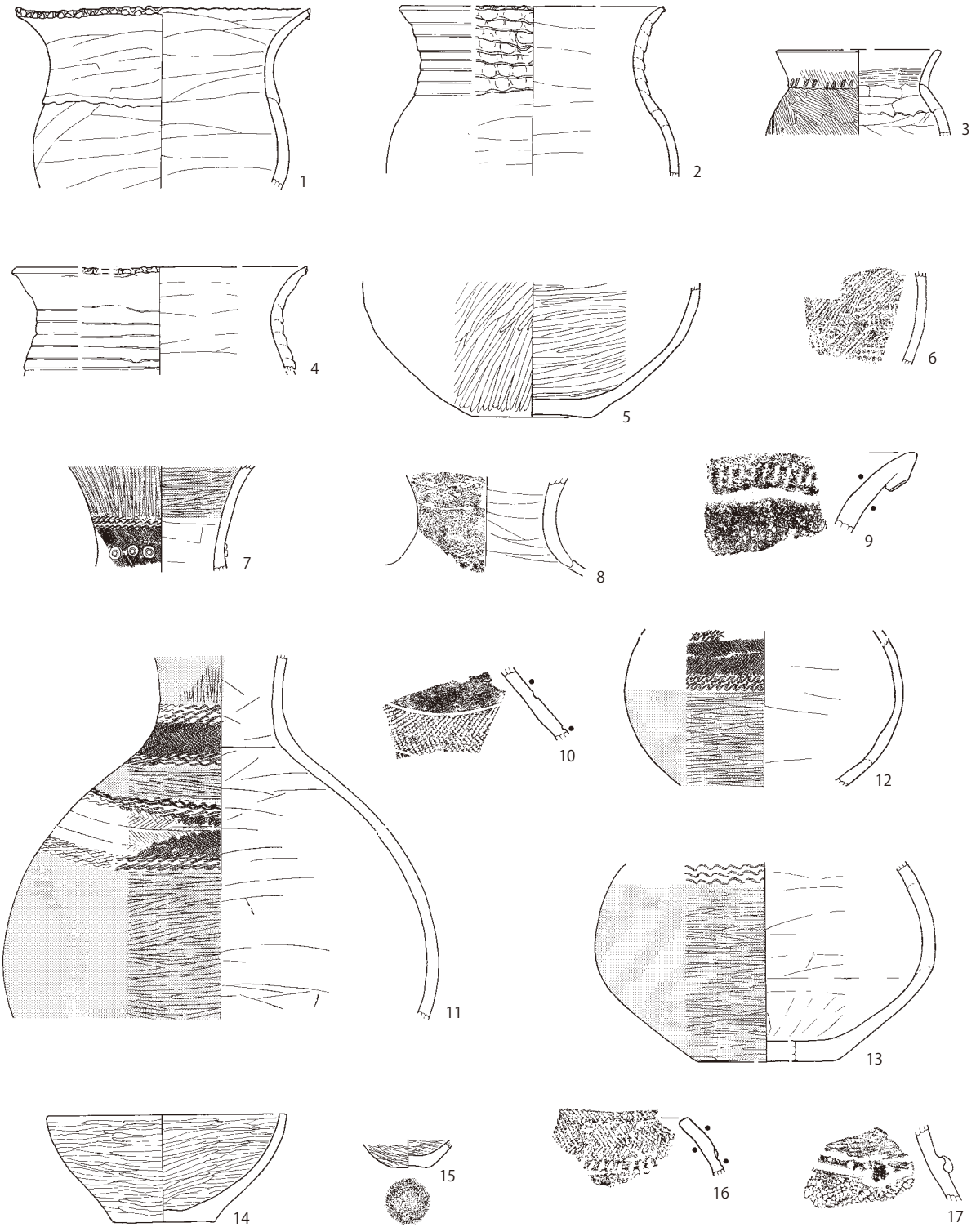
4棟の竪穴建物跡は、SI0074、SI0077、SI0076、SI0075の順に構築されたと考えられる。

SI0074・0075・0076・0077

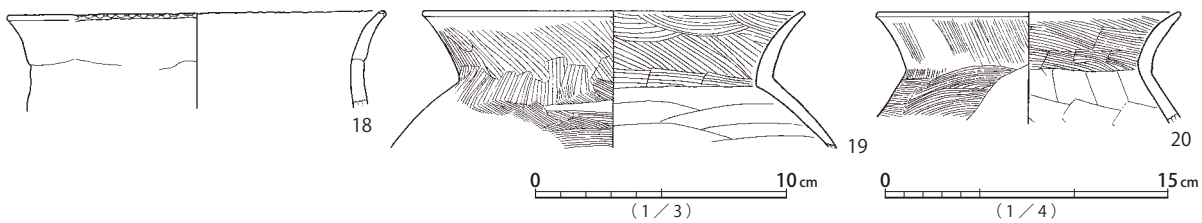


第116図 SI0074・SI0075・SI0076・SI0077遺構

SI0074

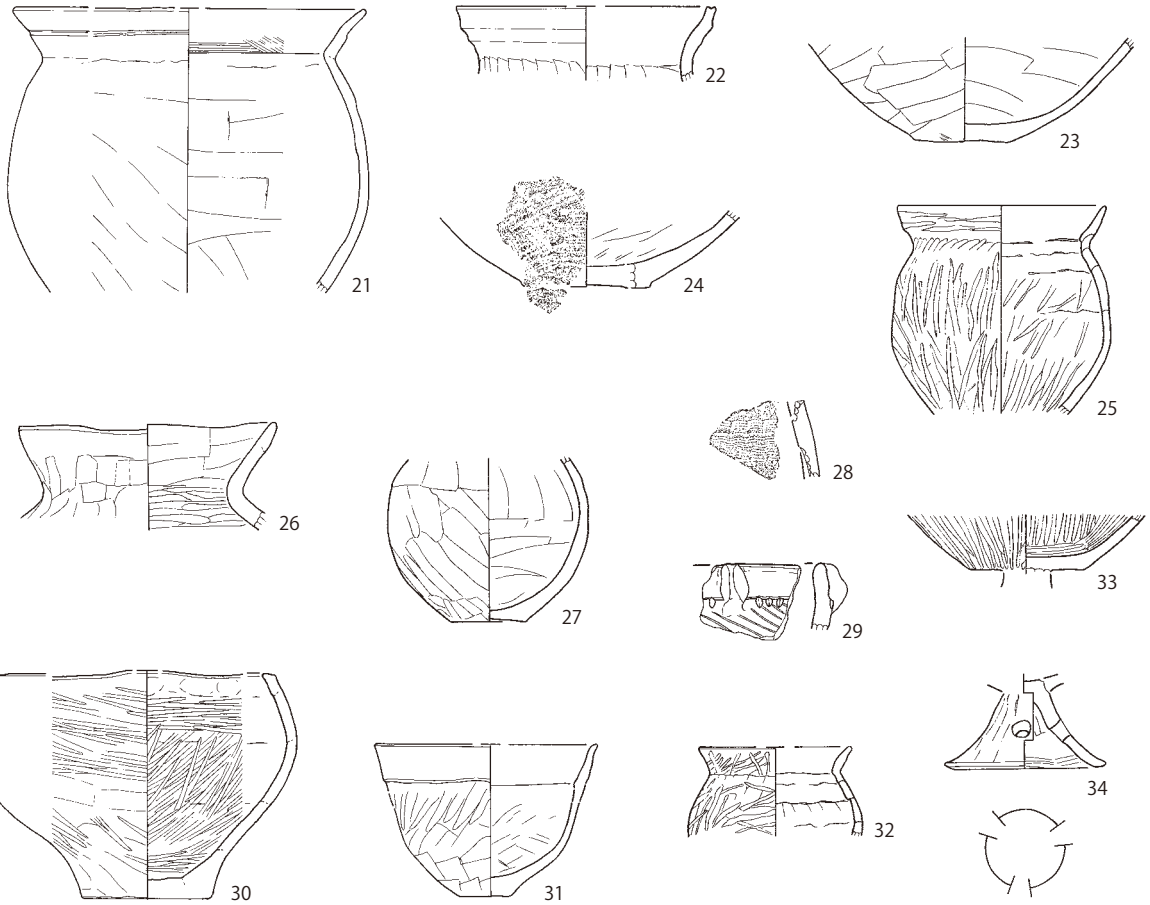


SI0075

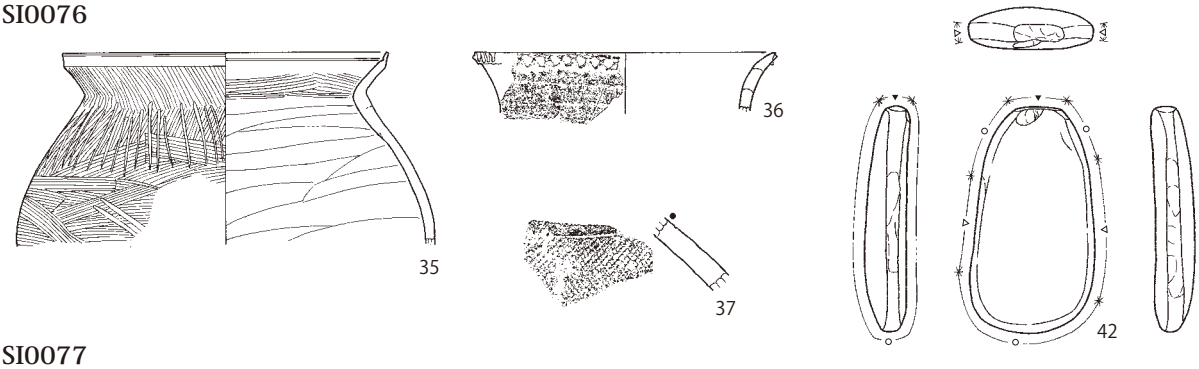


第117図　SI0074遺物、SI0075遺物（1）

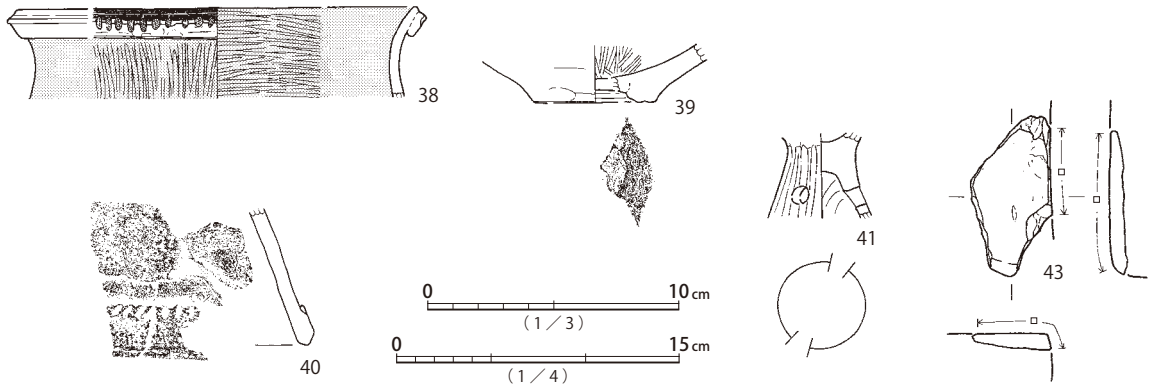
SI0075



SI0076



SI0077



第118図　SI0075遺物（２）、SI0076遺物、SI0077遺物

SI0078・SI0079（第 119・120・121・122 図、図版 35・148・199・200・303・330）

7.0 × 5.6m、深さ 40cm程度の長方楕円形竪穴建物跡SI0078と、3.7 × 4.0m、深さ 5cm前後の方形竪穴建物跡SI0079である。

SI0078は、主柱穴a ～ cが検出され、dが推定されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置から外側にかけて、楕円形の炉が設けられる。床面周溝はほぼ全周し、南辺を除いて小穴が伴う。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。

覆土は、炉の周辺を中心として、床面上から５～ 10cm程度の厚さで焼土の堆積が認められる。建材由来と見られる炭化物が混じるほか、柱穴a内からも焼土が検出され、柱抜き取りが行われた可能性も否定できない。検出状況は、建物解体後の建材の焼却処分が行われた可能性を示している。

遺物は、焼土・炭化物より高い位置の覆土中位から土器が多く検出されている。床面からは、甕4・15、小型鉢38、椀40、頁岩製礫石器41等、中位からは、甕1・2・3・5 ～ 7・10、壺19・26、鉢36等が出土し、概ね弥生時代後期前半、久ヶ原２式に位置づけられる。装飾を持つ甕５・８は、壺19に見られる山形文や縄文横帯内の斜格子状沈線と共通する様相を示し、興味深い。その他、砂岩製礫石器42が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原２式期の所産と考えられる。

SI0079は、主柱穴と床面周溝は検出されていない。中心から北角に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、ほぼ硬化していない。

覆土は、南辺がSI0078と切り合うが、先後関係を示す明確な記録は残されていない。

遺物は、石英斑岩製礫石器43と軽石製砥石44が出土するのみである。

本遺構は、平面形以外の積極的根拠が乏しいものの、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半に帰属すると考えられる。

SI0080（第 123・124・125・126 図、図版 35・36・148・149・200・303・330）

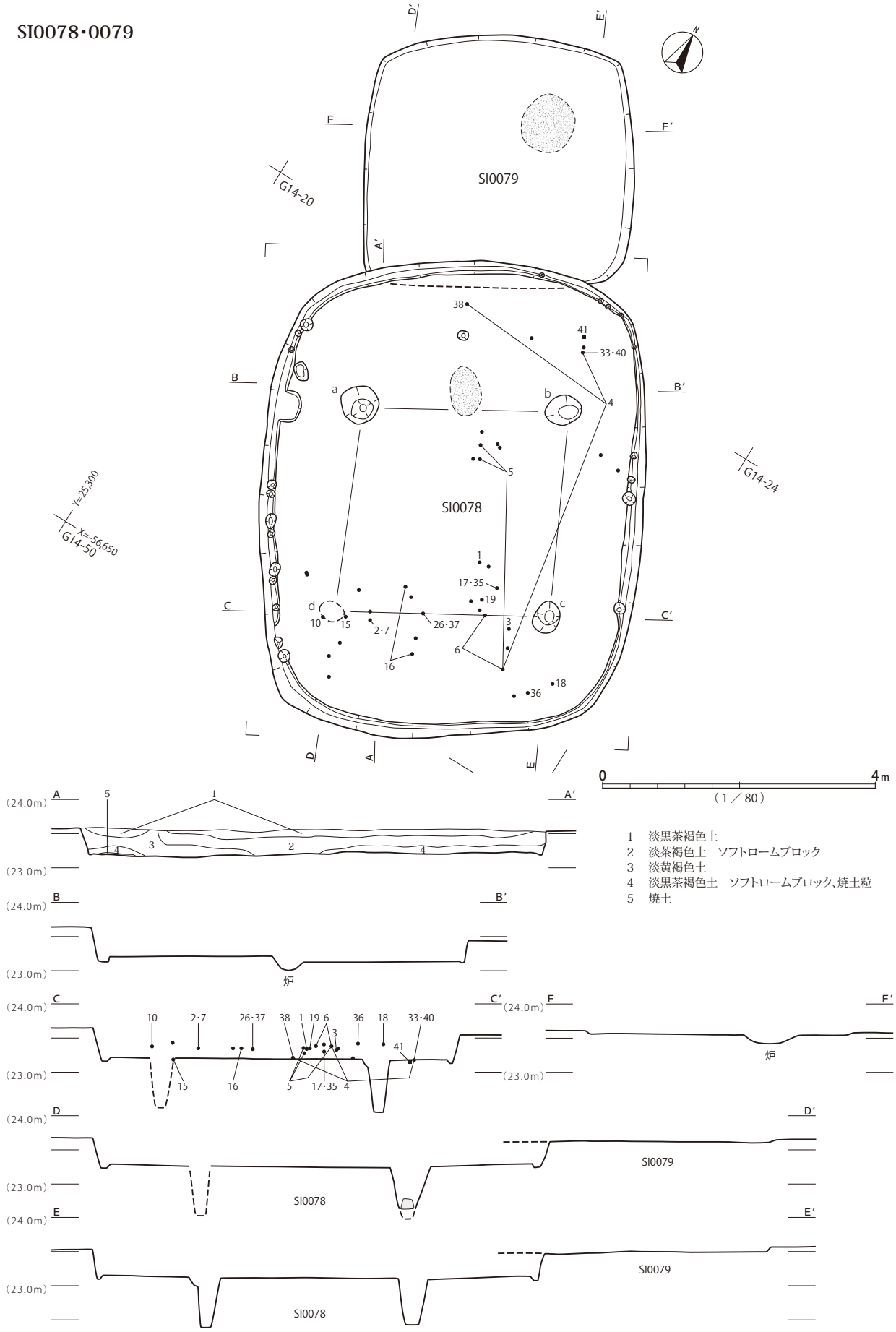
6.6 × 5.7m、深さ 25cm前後の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a ～ d、貯蔵穴と見られるe、壁際に配置されるピットf・g・hが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は西辺・東辺で連続し、東辺を除いて概ね小穴が伴う。床面はソフトローム層に形成され、堅緻である。

SM1125周溝内に収まる位置に検出され、北辺の一部が破壊されている。覆土は、土層記録が無いため不明確だが、焼土は検出されておらず、漸移的な埋積過程を経たように見受けられる。

遺物は、床面レベルから覆土上位にかけて比較的多量の土器が出土している。床面からは、甕2、壺17・21、砂岩製砥石34が検出されている。炉の南縁には、大型壺と見られる破片の埋設が確認されているものの、対応する実測遺物はない。自縄結節文区画の壺15・19、タタキ甕13は、出土位置の記録が無い覆土一括取り上げと上位検出であり、SM1125構築時等の整地に伴い竪穴内へ混入した可能性も考えられる。その他、軽石製砥石35、軽石36が出土している。

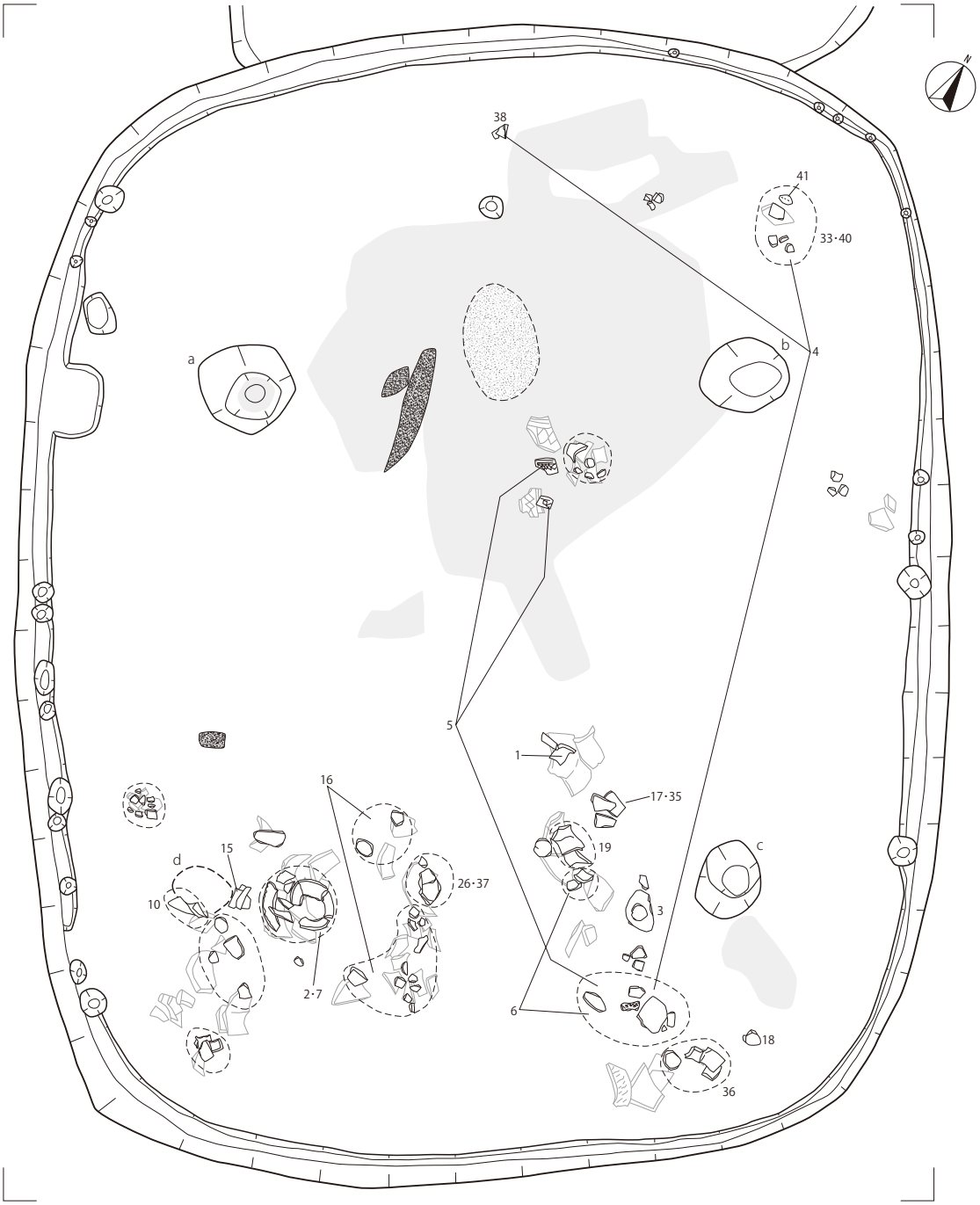
本遺構は、出土土器の主体を占める久ヶ原２式から、弥生時代後期前半に位置づけられる。

SI0078・0079

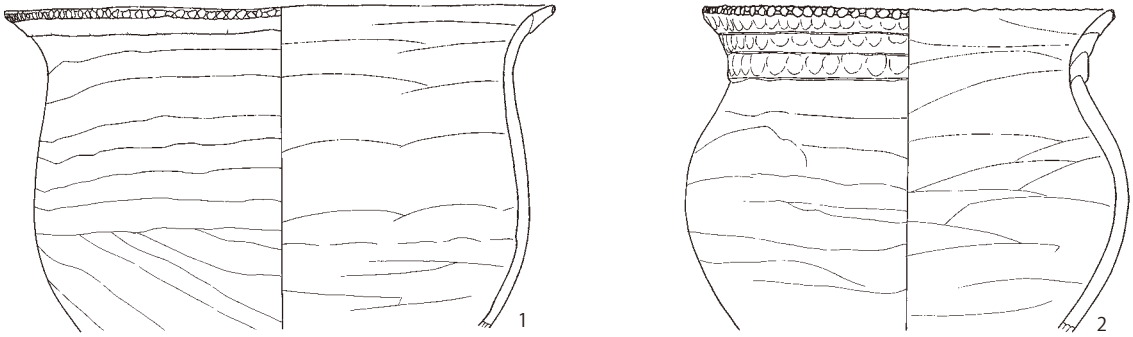


第119図　SI0078遺構（1）、SI0079遺構

SI0078

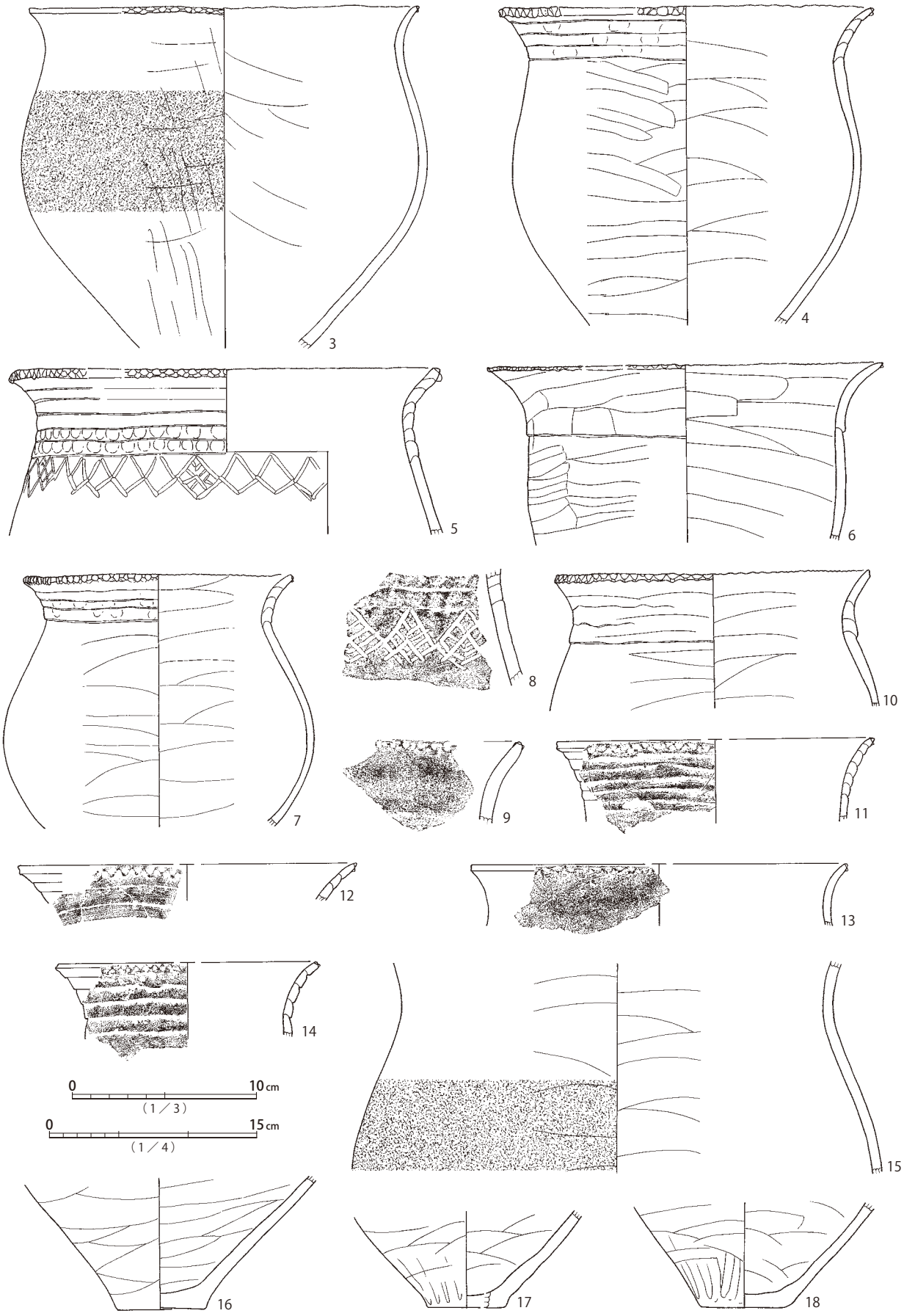


SI0078



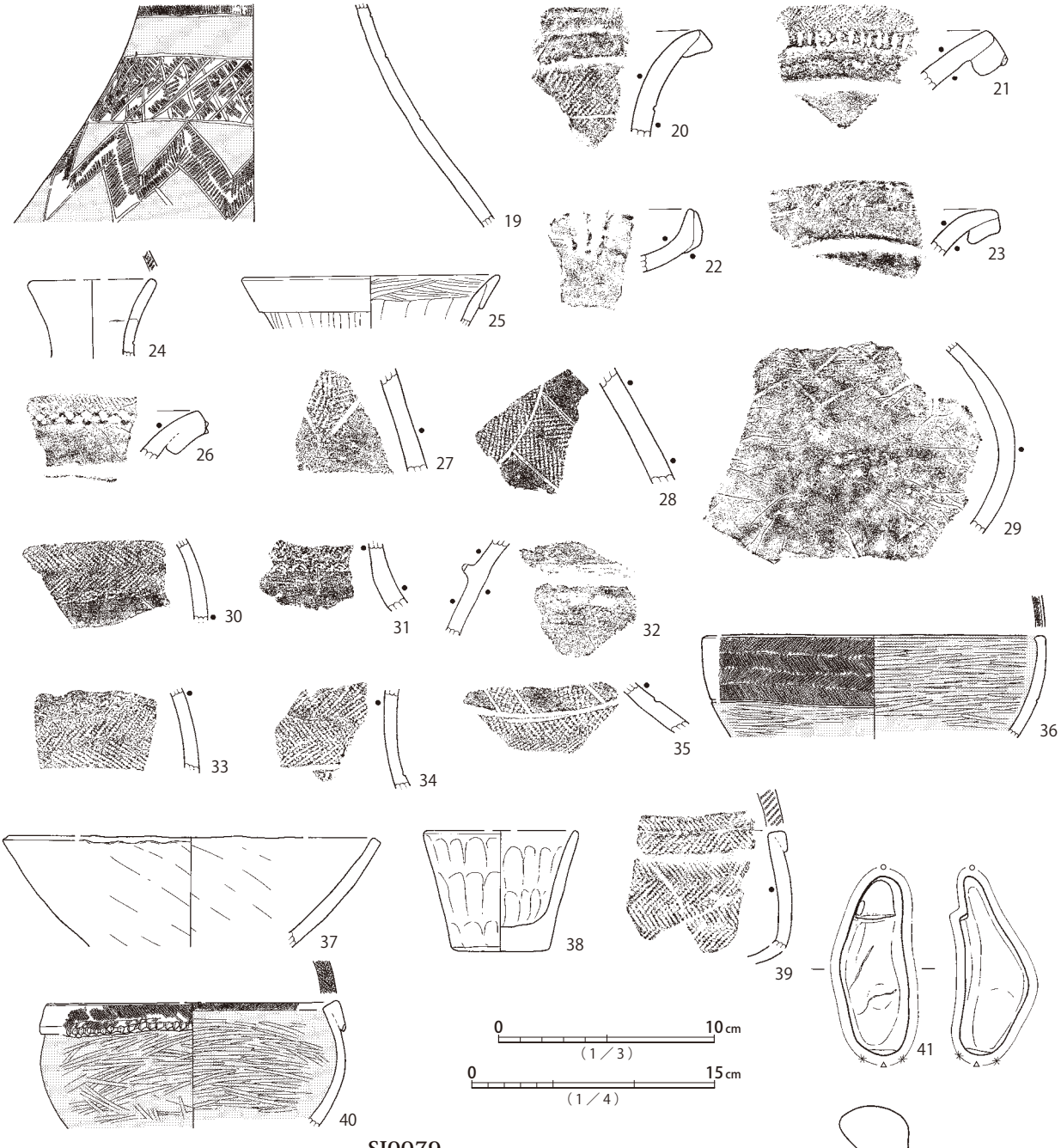
第120図　SI0078遺構（2）、SI0078遺物（1）

SI0078

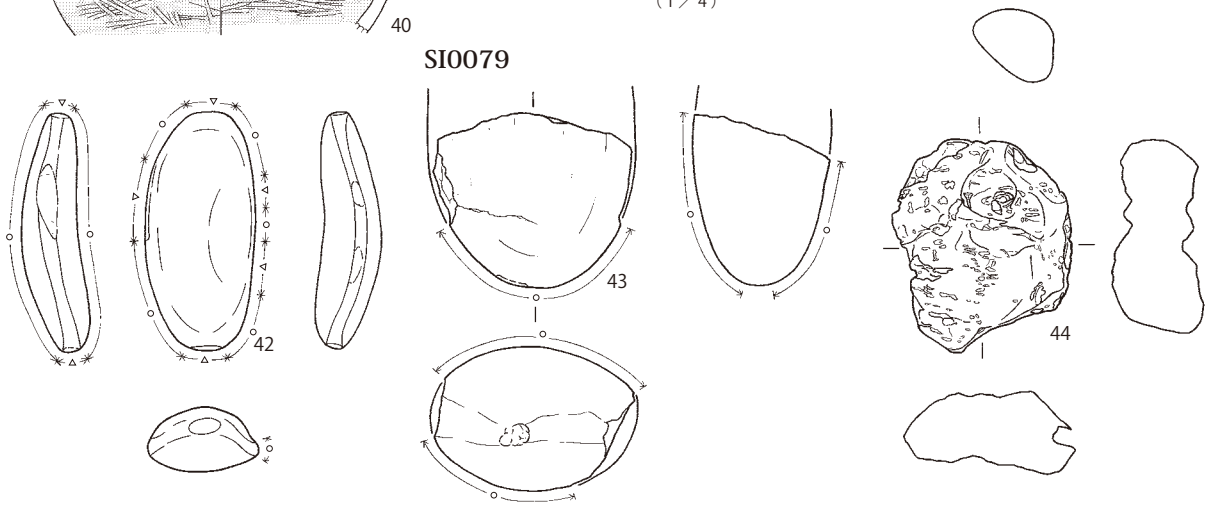


第121図　SI0078遺物（2）

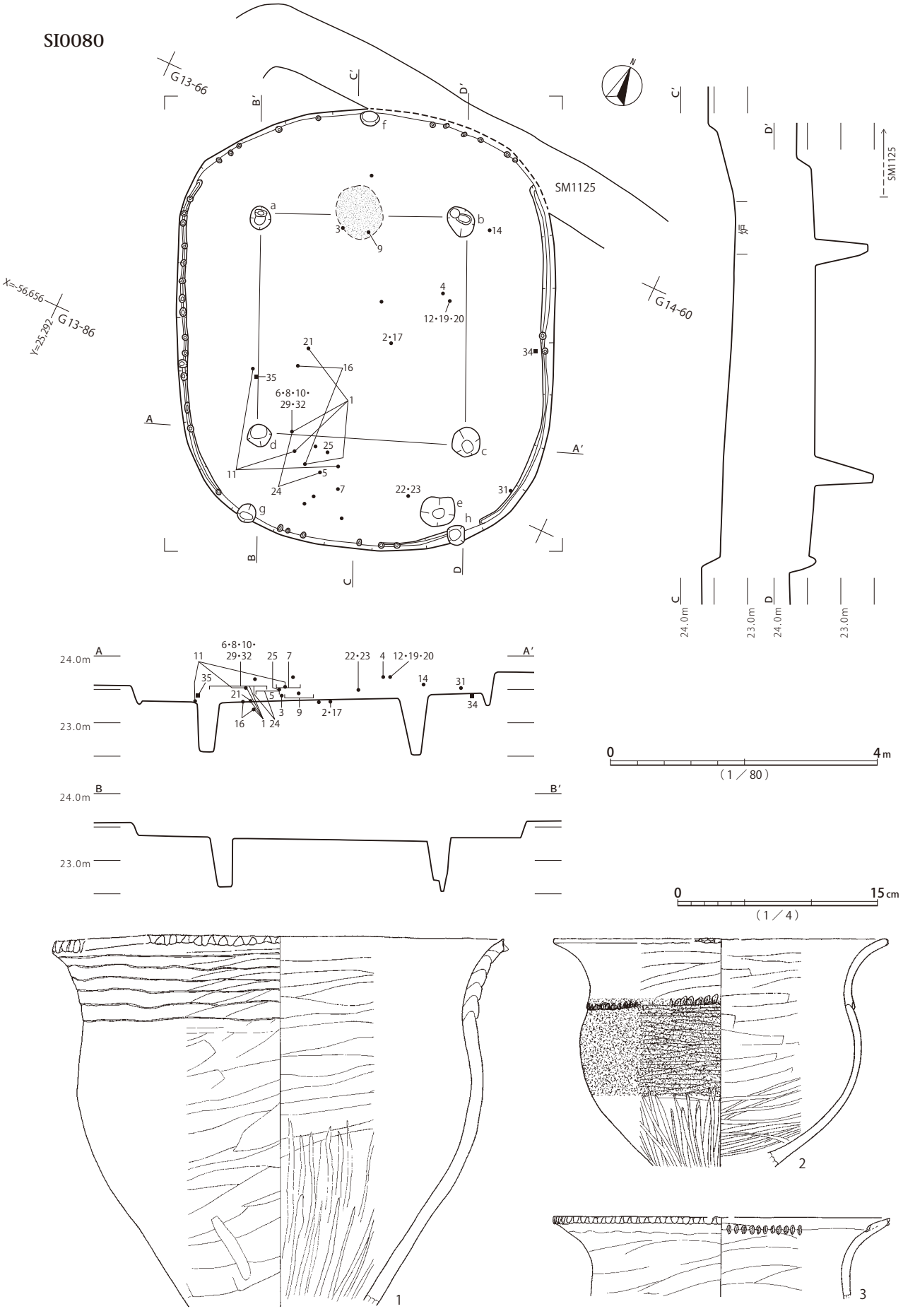
SI0078



SI0079

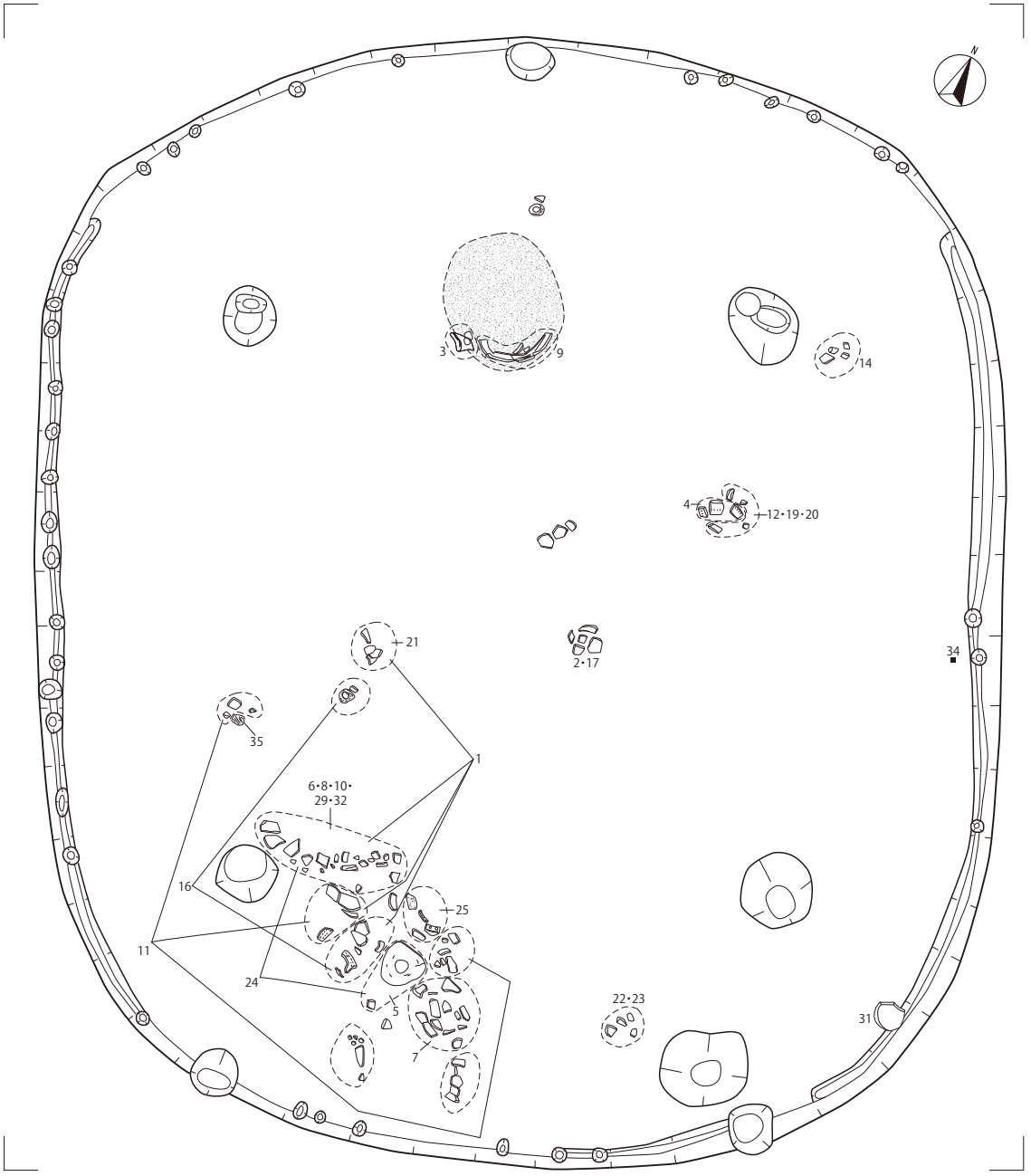


第122図　SI0078遺物（3）、SI0079遺物



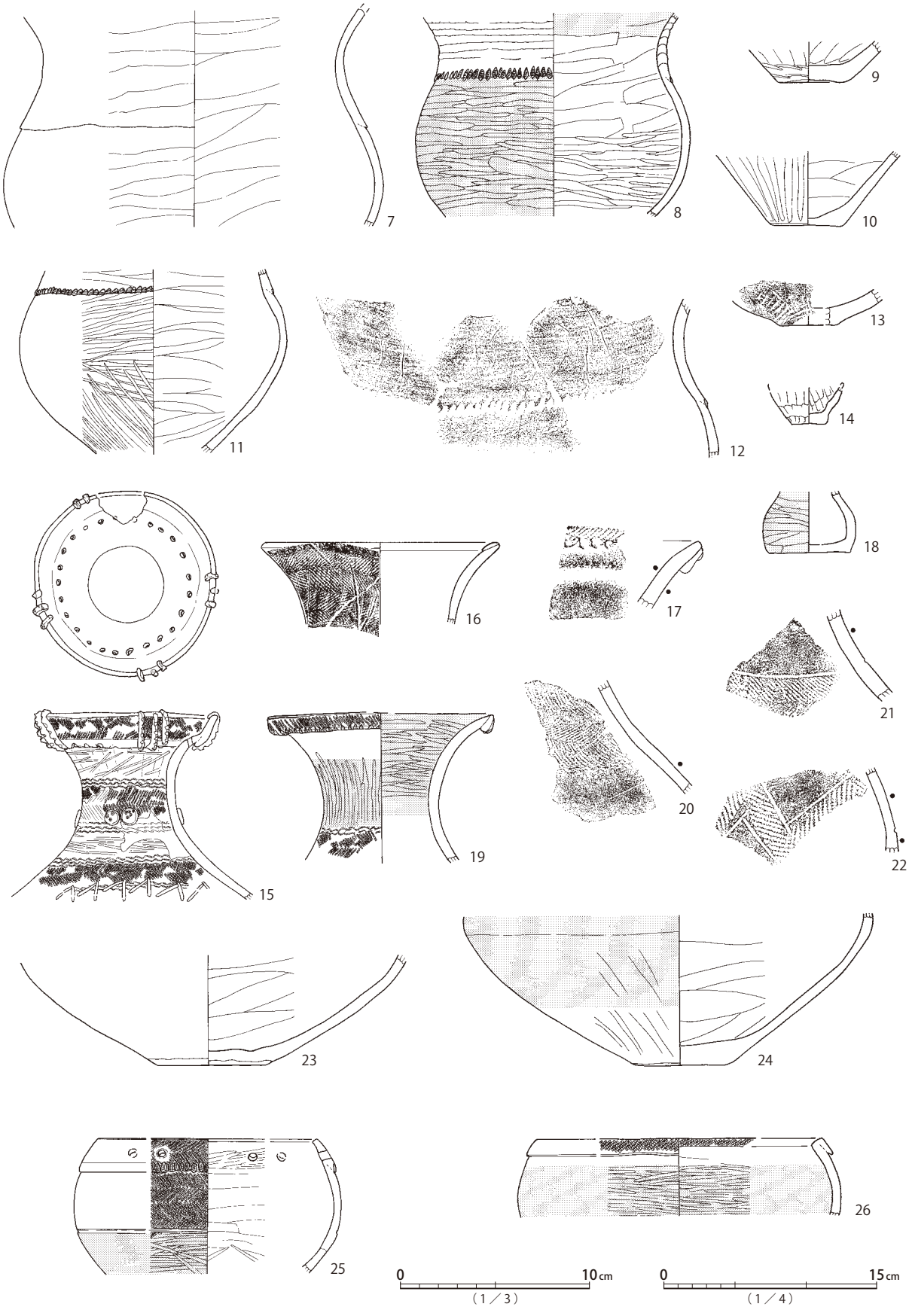
第123図　SI0080遺構(1)、SI0080遺物(1)

SI0080



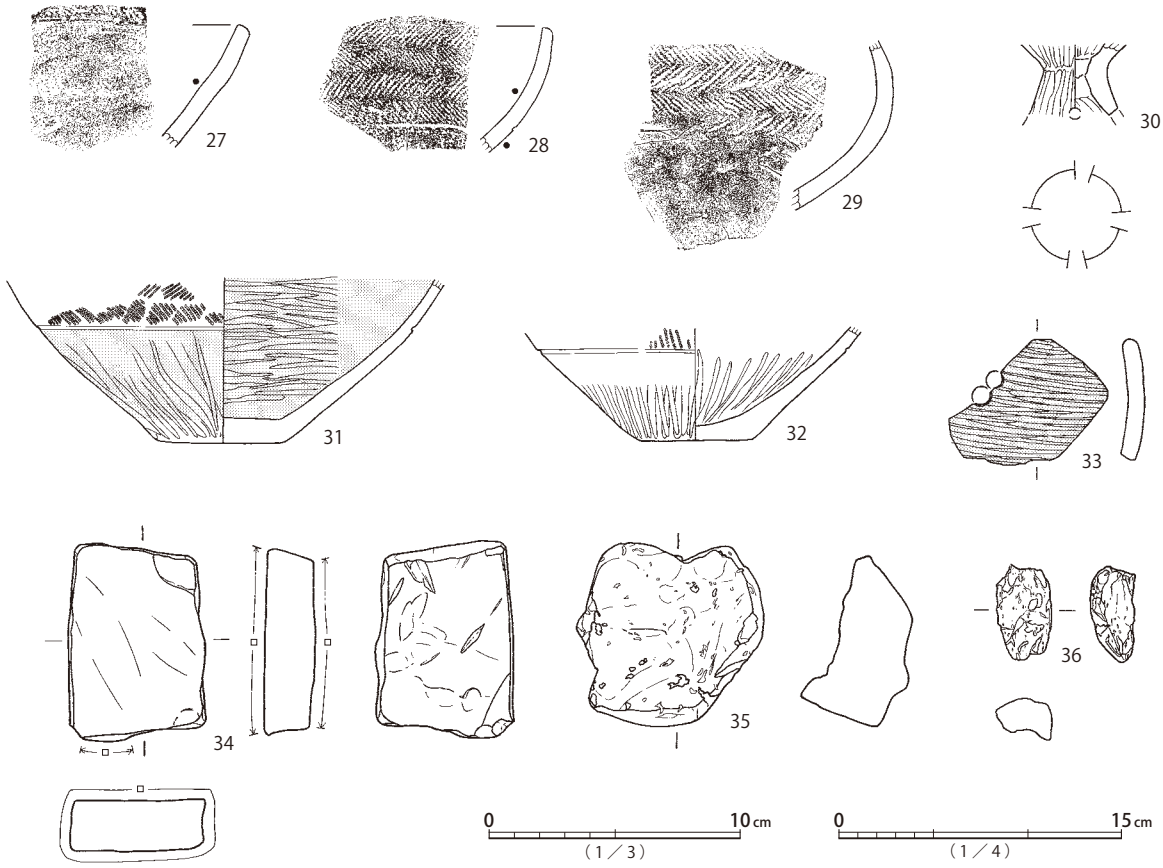
第124図　SI0080遺構(2)、SI0080遺物(2)

SI0080



第125図　SI0080遺物（3）

SI0080



第126図　SI0080遺物（4）

SI0081（第 127 図、図版 36・149・200・303）

4.8×3.8m、深さ30cm前後の不整長方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められない。長軸の西寄りに不整円形の炉が設けられる。床面周溝は無く、小穴が巡る。床面はソフトローム層に形成され、平坦だが固結の程度は弱い。

切り合う遺構は無く単独で検出されている。覆土は断面記録が無く不確定だが、焼土・炭化物の平面記録もないため漸移的な自然堆積を経たと見られる。

遺物は、床面上から完形に近い後期弥生土器甕1・2、鉢9等が出土している。その他、位置不明ながら軽石製砥石10が出土している。

本遺構は、出土土器の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

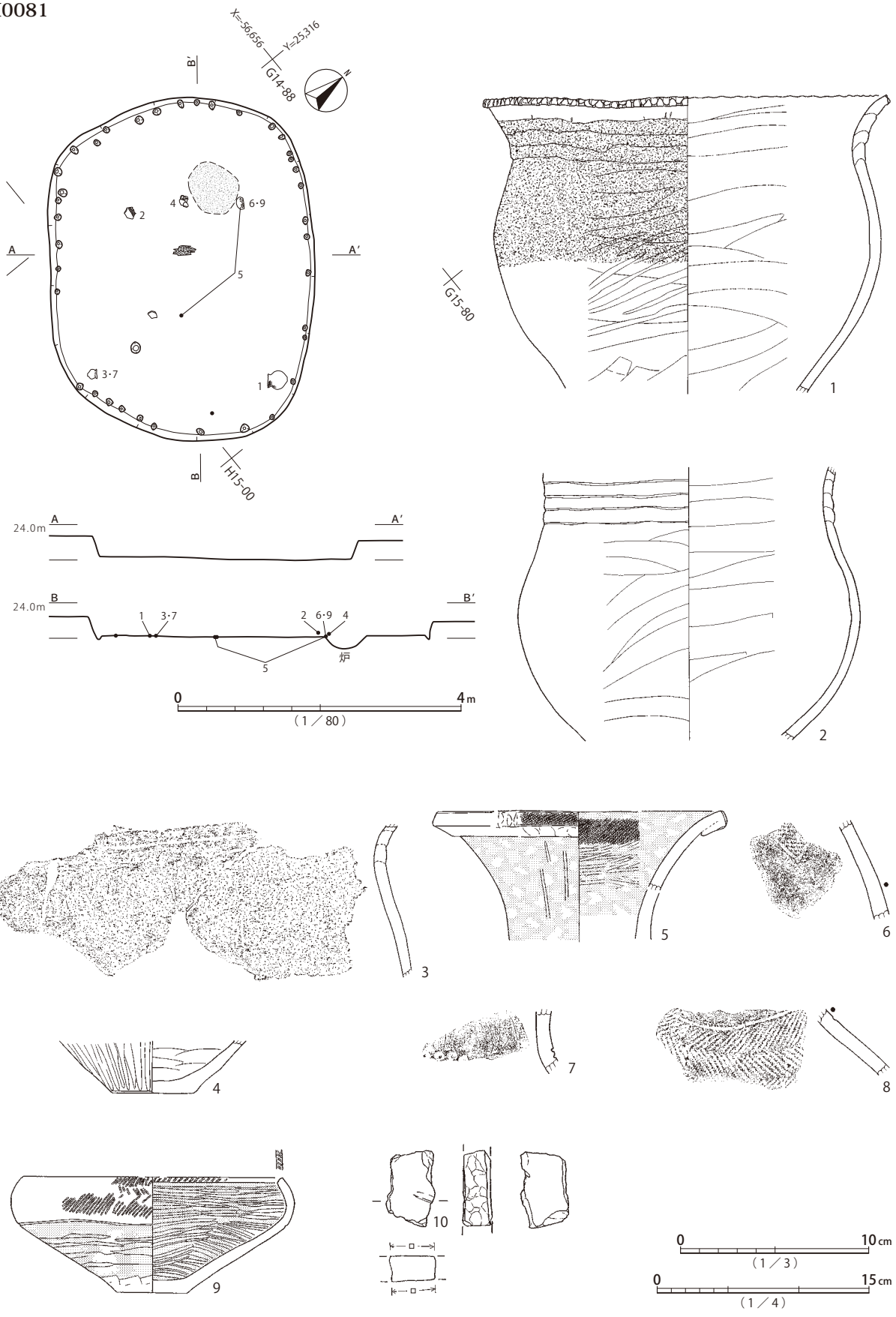
SI0082（第 128 図、図版 36・149・201・330）

4.4×4.3m、深さ50cm前後の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。a・b間ライン上に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は伴わず、南西辺を除き小穴がほぼ全周する。床面はハードローム層に形成され堅緻である。南壁付近が目立って硬化しており、出入口付近であることが示唆される。

覆土は、外周部最下層に焼土・炭化物が認められ、廃絶時に火を受けた可能性が高い。

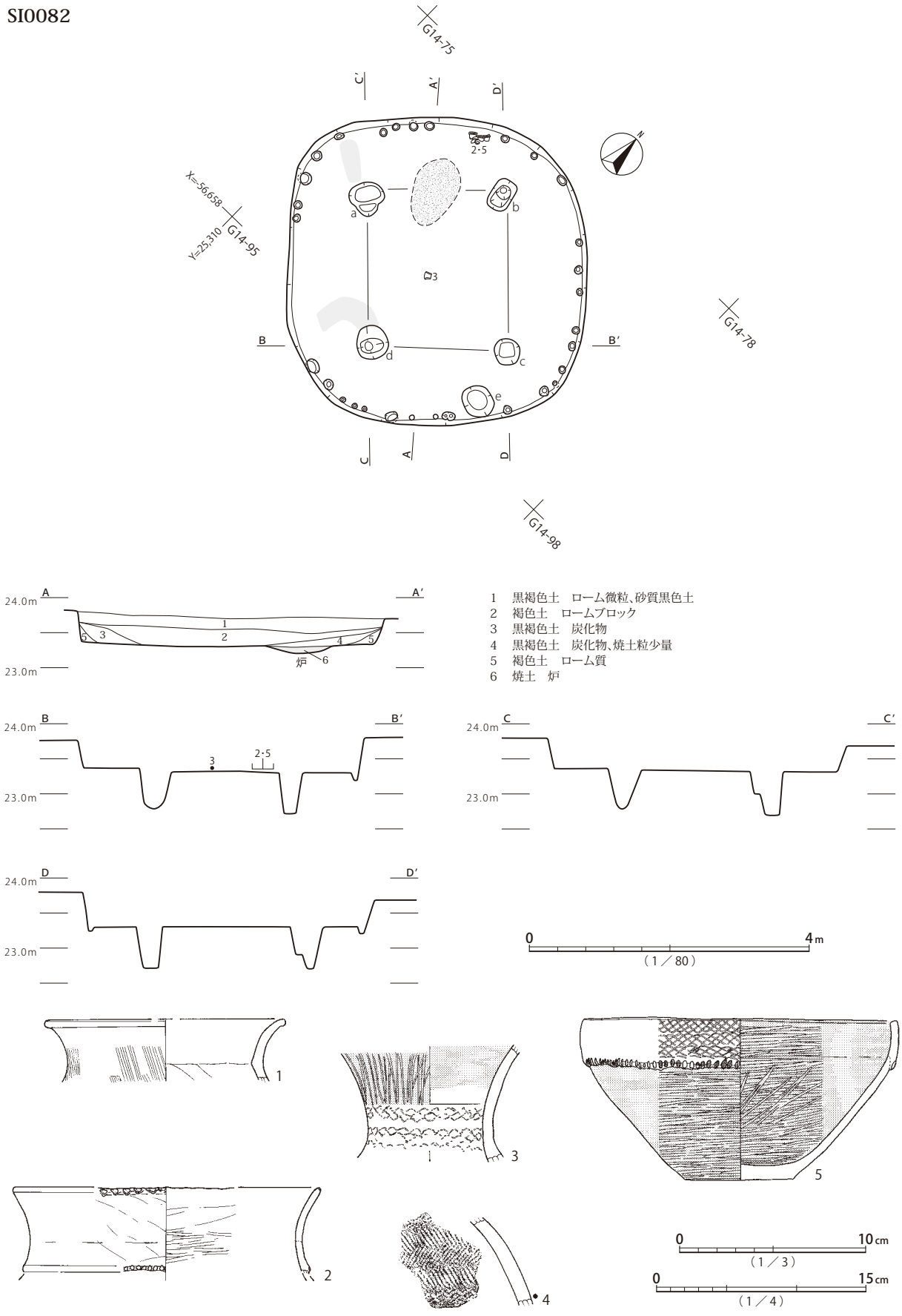
遺物は床面付近に、ほぼ完形の鉢5、壺3などが出土している。いずれも弥生時代後期後半、山田

SI0081



第127図　SI0081遺構・遺物

SI0082



第128図 SI0082遺構・遺物

橋式１～２式古段階に位置づけられ、本遺構の帰属時期を示す。

SI0084・SI0088（第 129 図、図版 37・38・149・201）

4.9 × 4.7m、深さ 15cm 前後の楕円形竪穴建物跡 SI0084 と、4.2 × 3.9m、深さ 10cm 程度の方形竪穴建物 SI0088 である。

SI0084 床面には、主軸上北東壁際にハシゴ穴 a がある他は、主柱穴は検出されていない。南西側に長楕円形の炉が設けられている。北側に接して別時期の炉が確認されている。床面はソフトローム層に形成され、固結の程度は弱い。床面周溝はほぼ全周し、北側に小穴が疎らに認められる。

覆土については断面記録が無く不明であるが、SI0088 床面が SI0084 内に貼床で形成されているとの記述があり、SI0088 が SI0084 の後に構築された可能性が高い。

遺物は覆土一括取り上げ遺物の、後期弥生土器壺 1、古式土師器小型器台３が出土している。小型器台については、上層で検出されているため、SI0088 に帰属する可能性がある。

SI0088 床面には、中央北西辺寄りに炉の一部が検出されている。炉の位置が中心軸上にあったとすると、北西－東南方向が主軸だった可能性がある。ピット b は深度不明であり、主柱穴でもないと見られる。床面はソフトローム層に形成され、あまり堅緻ではない。

遺物は、東角付近に土師器壺の可能性がある半完形品が出土したとの記載が残るものの、対応する資料は確認できない。

平面形と出土遺物の様相から、SI0084 が弥生時代後期、SI0088 が弥生時代終末期から古墳時代前期前半に帰属すると考えられる。

SI0085（第 130 図、図版 37・201・331）

5.5 × 4.8m、深さ 50cm 前後の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴 a ～ d が検出されている。a・b 間ラインに端が接する位置に楕円形の炉が設けられる。炉長軸端には土器片が埋設されており、遺物注記は一致しないものの、壺４が該当する可能性が高い。床面はハードローム層に形成され堅緻である。床面周溝はほぼ全周する。

覆土は、土層断面の記録がなく詳細は不明だが、北西側で切り合う SI0086 竪穴建物跡の床面が、本遺構中に形成されている。

遺物はいずれも後期弥生土器で、炉に埋設されたと見られる壺４のほか、床面近くで、甕 1、壺 2・3、半完形の鉢６等が出土している。

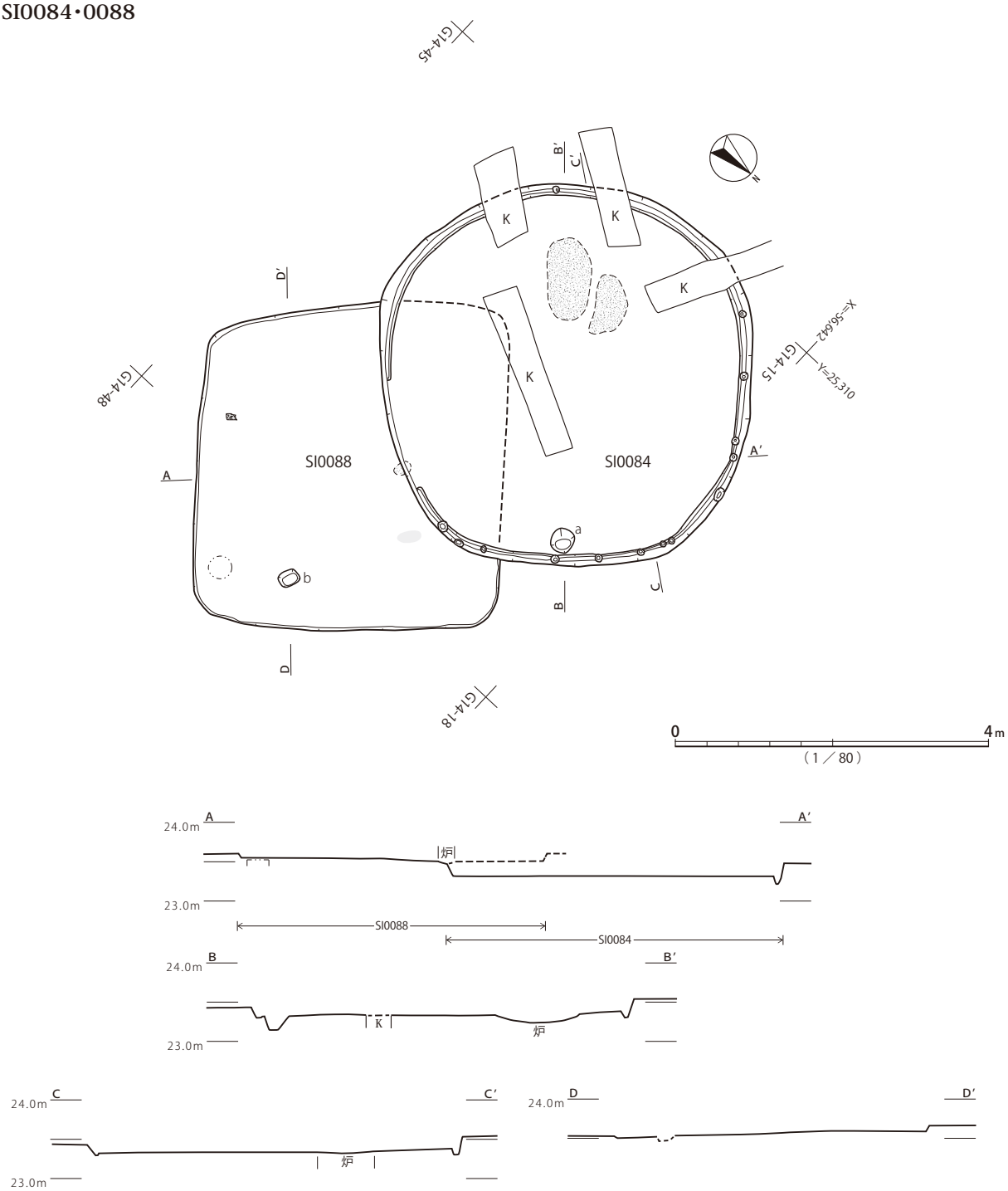
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原式期に位置づけられる。

SI0086（第 131 図、図版 37・149・201）

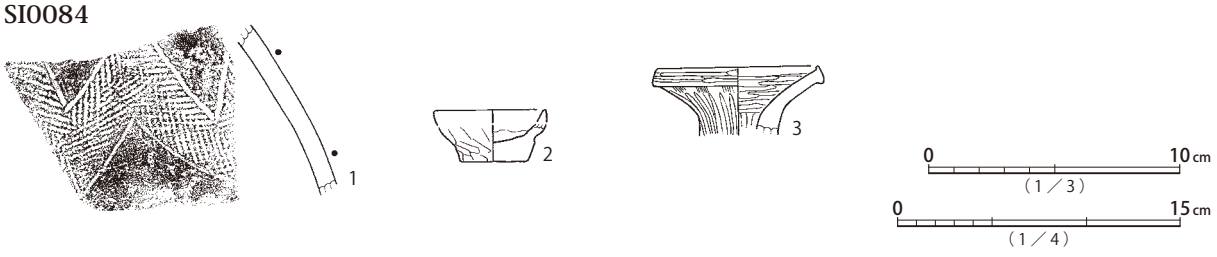
4.4 ？ × 3.9m、深さ 35cm 前後の楕円形竪穴建物跡である。a・b は SI0085 の主柱穴に当たり、本遺構に伴う主柱穴等は検出されていない。竪穴北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面は、南側において SI0085 覆土内に貼床が形成され、それ以外の部分は固結の程度がやや弱い。床面周溝は無く、小穴がほぼ全周する。

覆土は、土層断面の記録が無く詳細は不明だが、床面形成土は SI0085 床面から 8cm の層厚である。

SI0084・0088

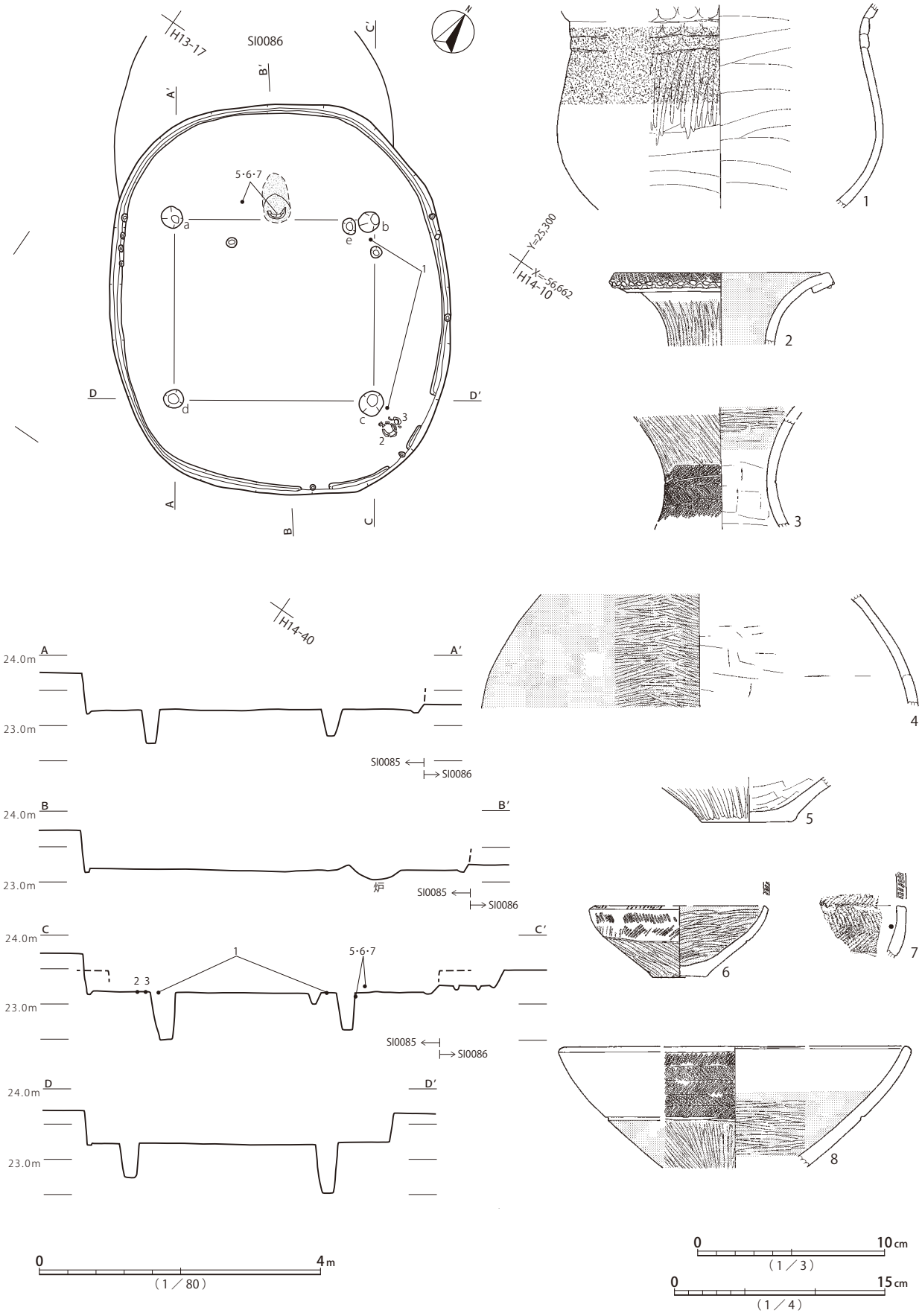


SI0084



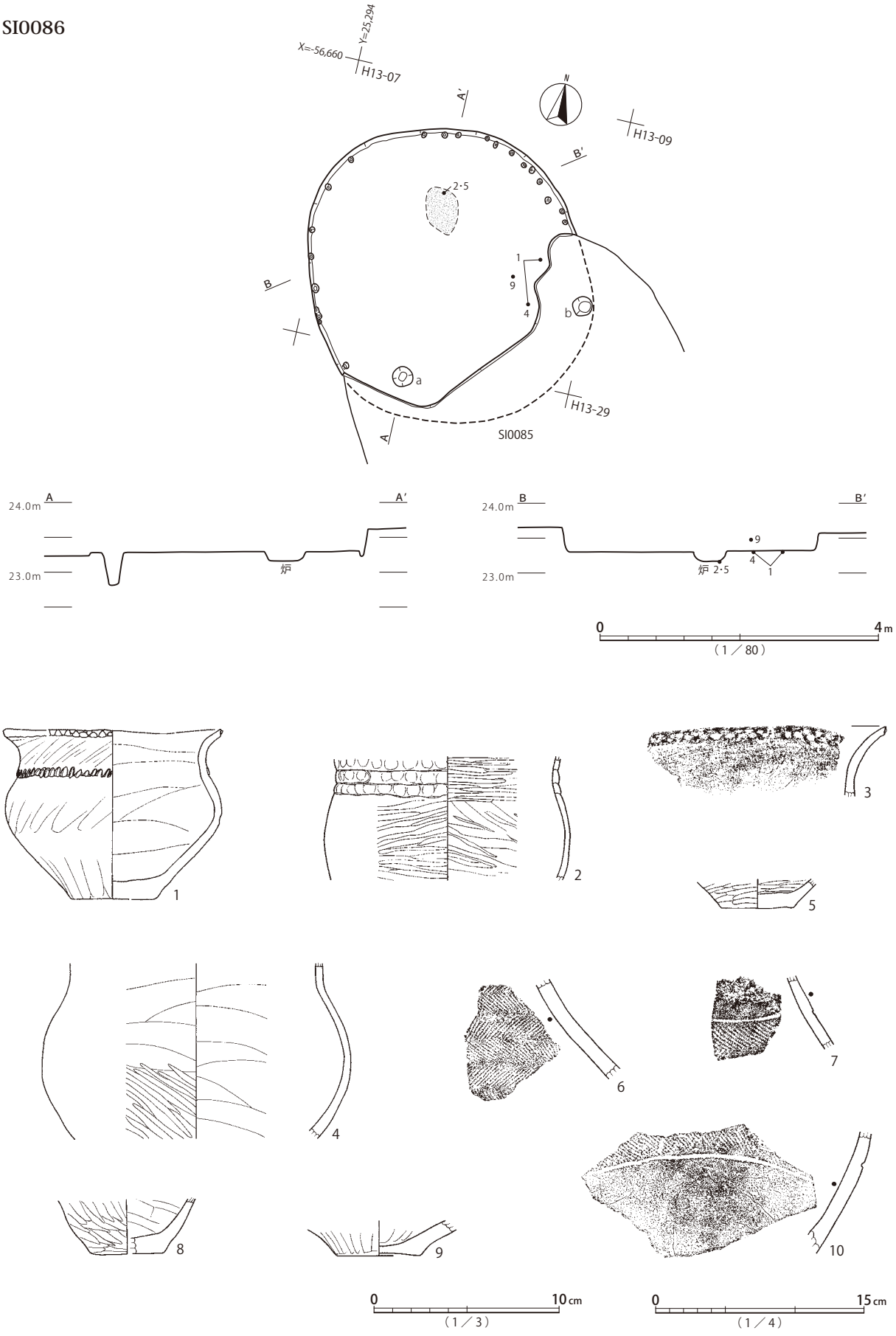
第129図　SI0084・SI0088遺構、SI0084遺物

SI0085

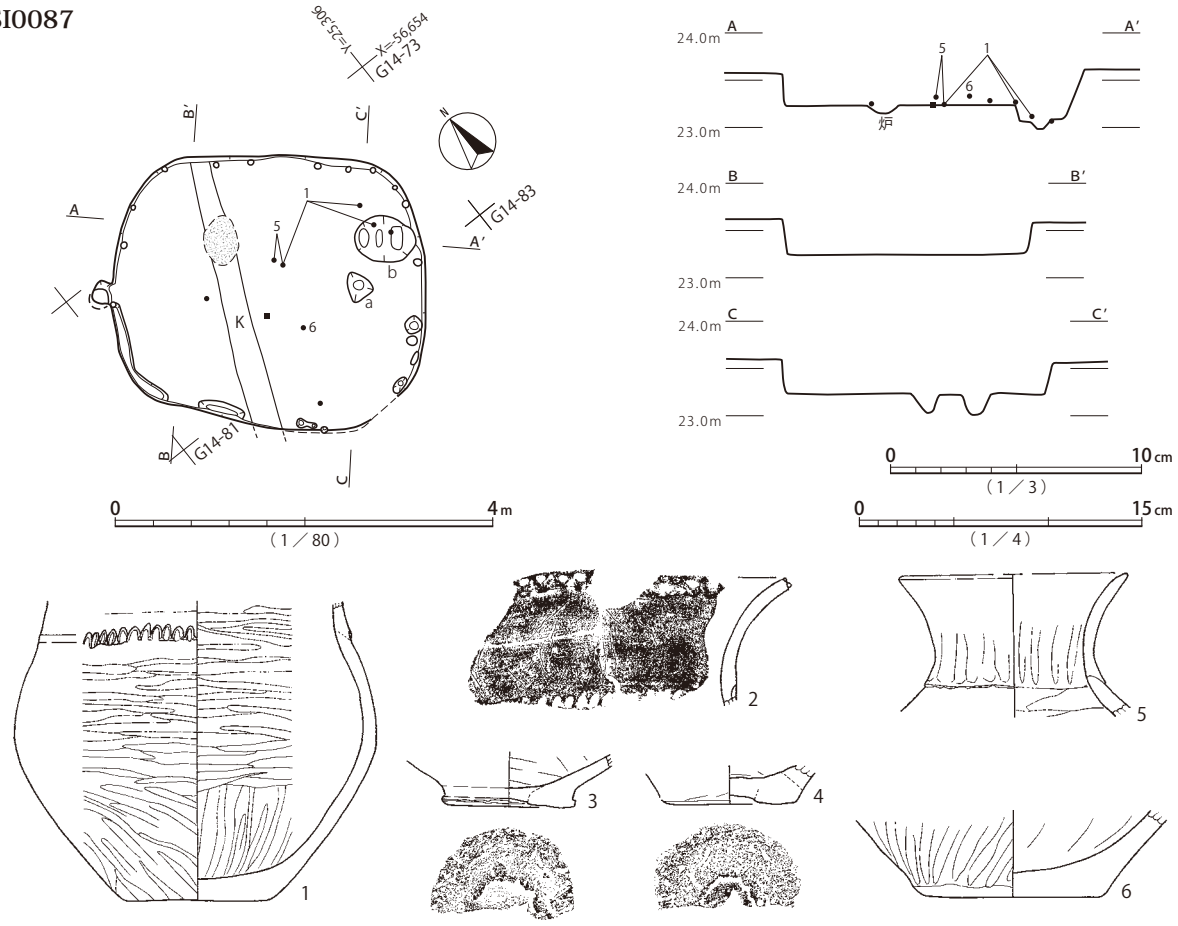


第130図　SI0085遺構・遺物

SI0086



第131図　SI0086遺構・遺物



第132図　SI0087遺構・遺物

遺物は、炉内から甕2・5が出土したほか、床面直上から半完形の甕1と甕4が検出されている。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原式期の所産と考えられる。切り合い関係によると、SI0085→SI0086の構築順である。

SI0087（第 132 図、図版 37・149・202）

3.3 × 2.9m、深さ 40cm 前後の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴と見られるa、貯蔵穴と見られるbが検出されている。炉は竪穴中心から北に寄った位置に設けられる。床面はハードローム層に形成され堅緻である。床面周溝は西側に部分的に認められ、他の部分は小穴が不規則な間隔で並ぶ。

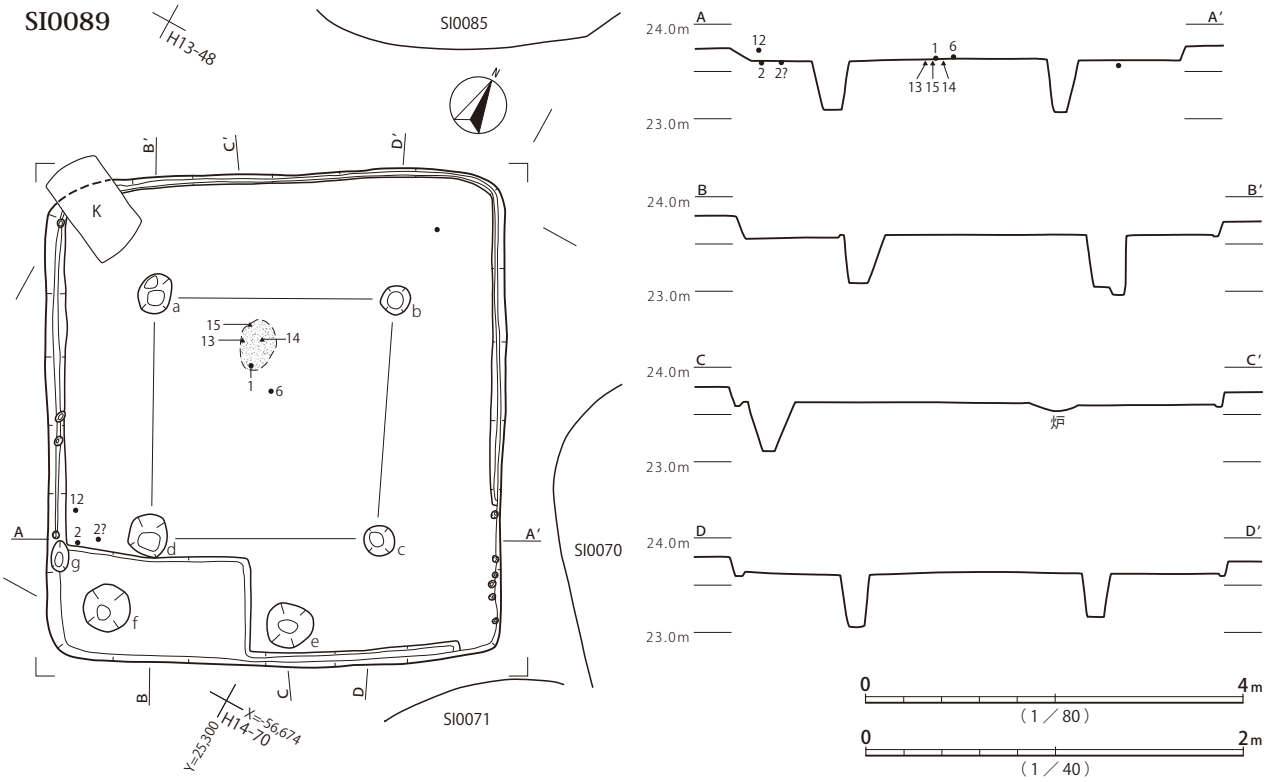
覆土は、土層断面の記録は無く不明だが、焼土・炭化物等の平面検出は記録されていないため、漸移的な自然堆積だった可能性がある。

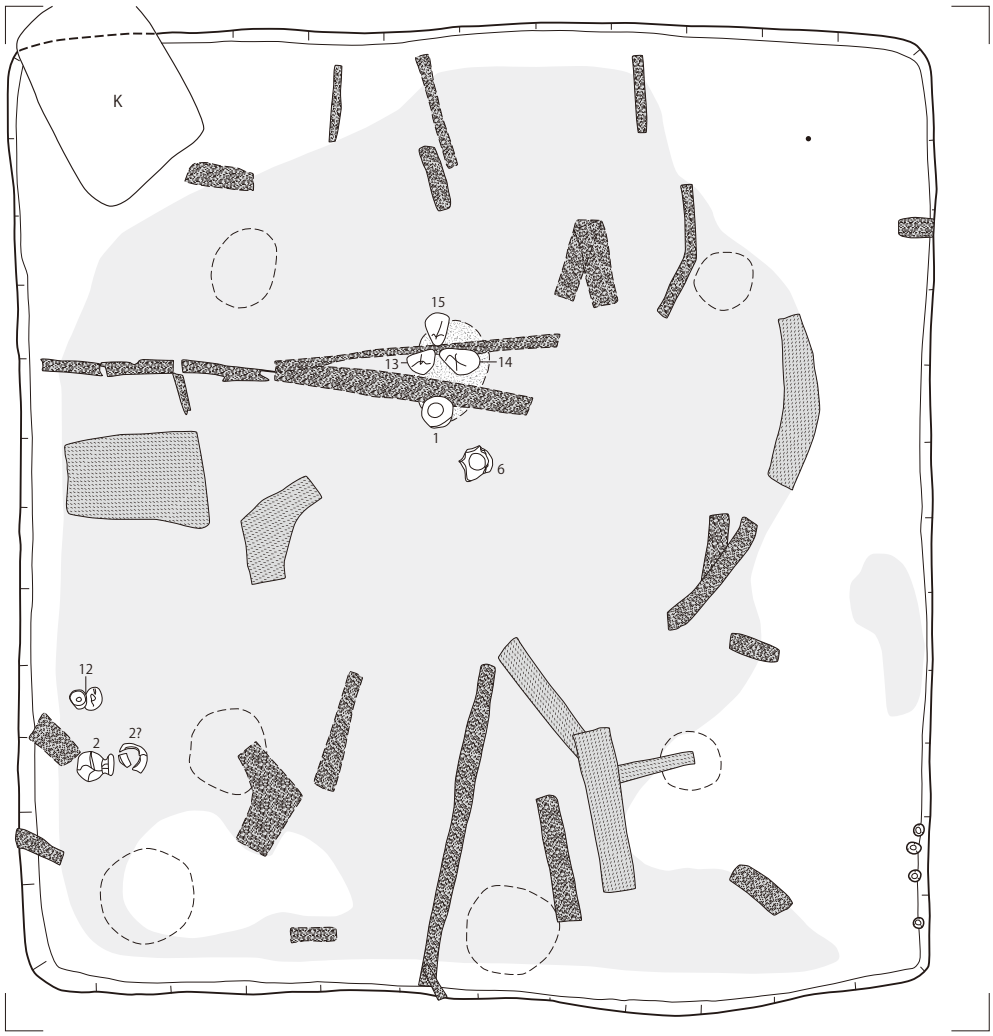
遺物は、床面近くから、甕1、素口縁で頸部段を持つ壺5等が出土している。輪台技法の底部片3・4は覆土上層の一括取り上げ資料である。壺5は中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0089（第 133・134 図、図版 38・131・150・202・331）

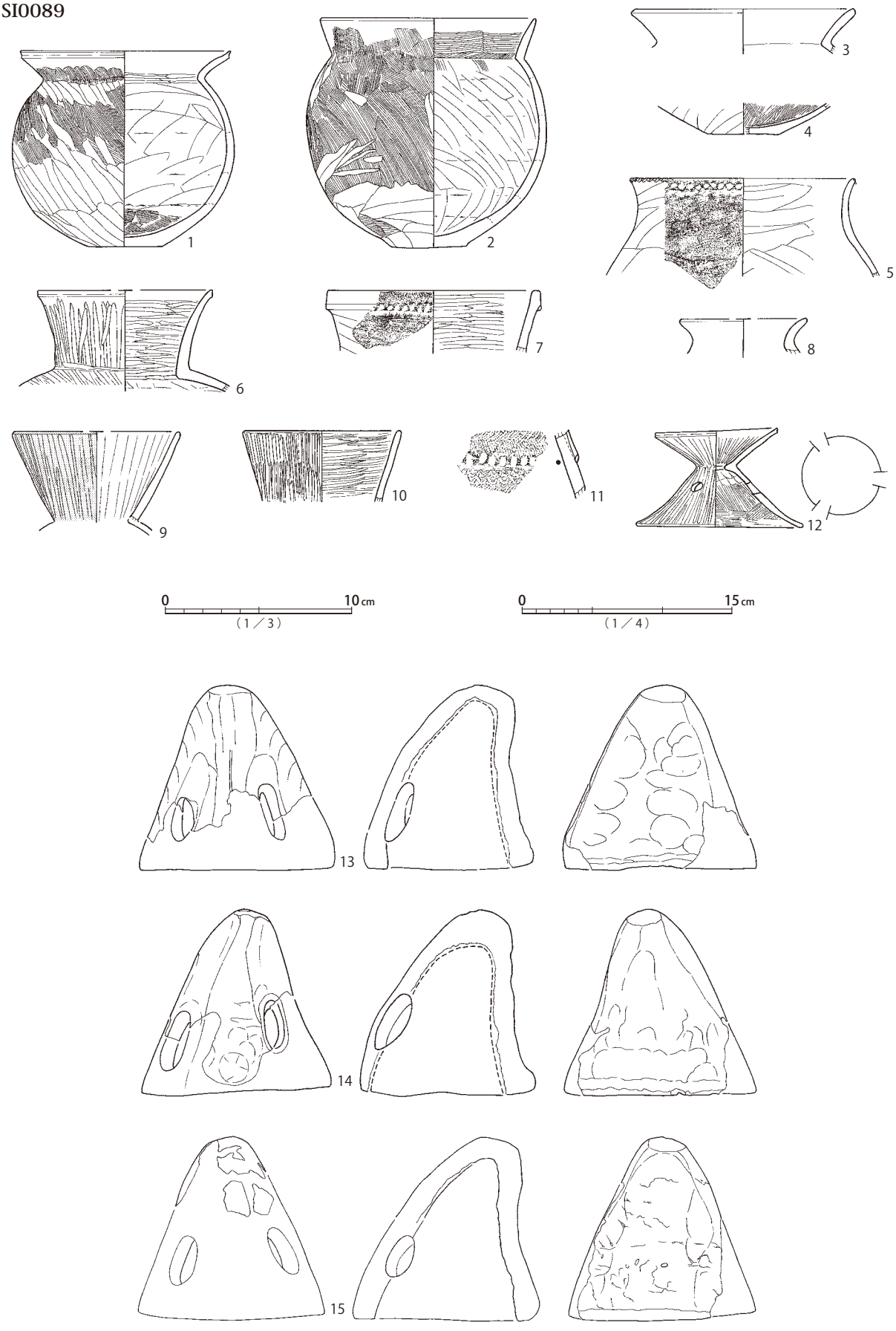
5.2 × 4.9m、深さ 15cm 前後の方形竪穴建物跡である。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出



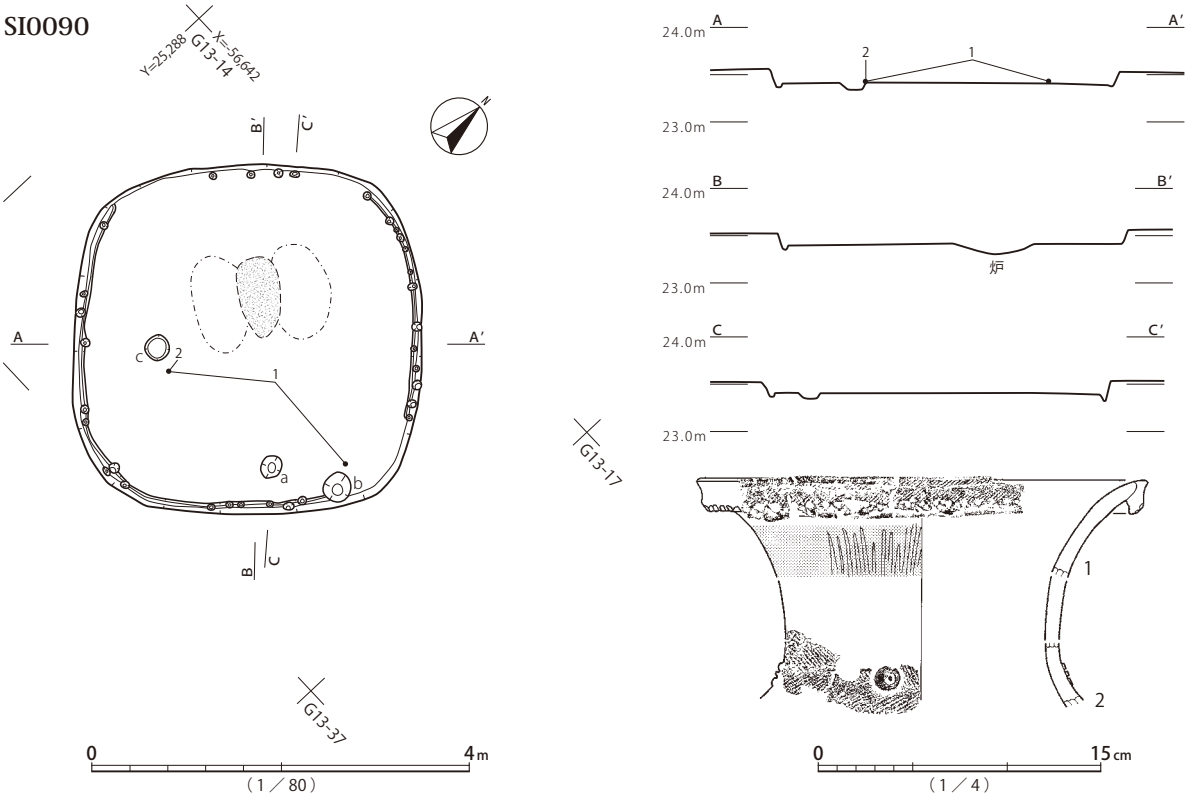


第133図　SI0089遺構

SI0089



第134図　SI0089遺物



第135図　SI0090遺構・遺物

されている。a・b間ラインと竪穴中心の中間の位置に楕円形の炉が設けられる。fの周囲の床面が深さ約5cmの長方形の落ち込みを呈するが、焼土の堆積状況とも対応するため、撹乱や調査時の掘り過ぎではなく元々の形状だったと見られる。

覆土は、床面上に広く焼土と炭化材が検出されている。放射状に検出された長い炭化材は、垂木などの建築材、焼土は屋根を覆っていた土層に由来すると見られる。

遺物は床面上を中心に、完形の甕1・2、素口縁壺6、小型器台12等が出土している。いずれも古墳時代前期前半、草刈式に位置づけられる。炉の内部に土製支脚13・14・15が使用状態を示す配置で検出され、炉の縁辺で出土した甕1がこれらと組み合う可能性が高い。廃絶時に火を受けているのは確実だが、出土遺物は限られており、不時の火災というよりは廃絶に伴う焼却処分を推定できる。

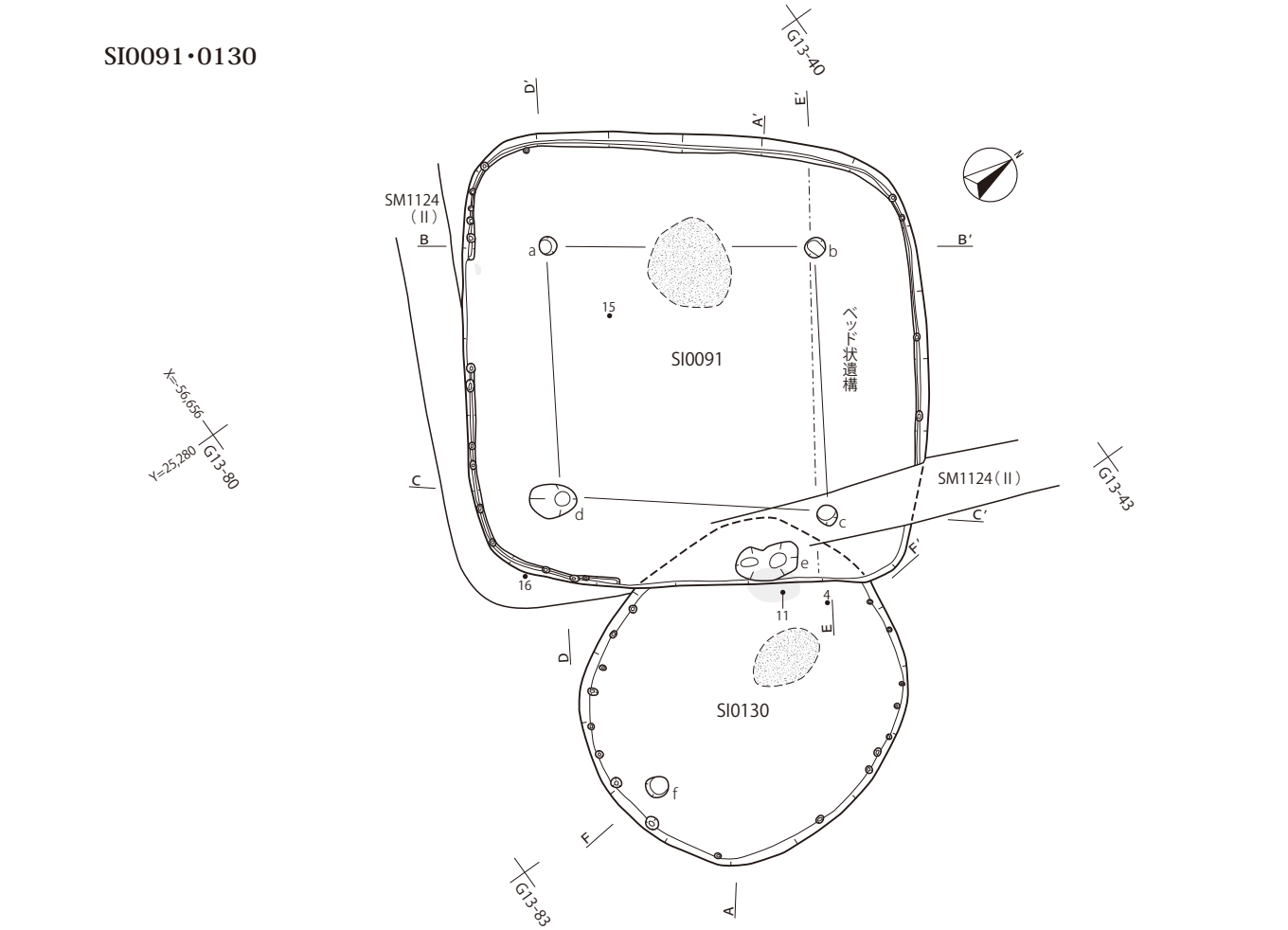
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と考えられる。東5mに位置するSI0068は主軸方向と長短比も近似し、同時期もしくは連続的に構築された可能性が高い。

SI0090（第 135 図、図版 38・202）

3.7×3.7m、深さ 15cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。明確な主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。床面中心のやや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に固結の程度は弱いが、炉の両側は踏み固められ堅緻である。床面周溝は北西辺と東角付近を除いて巡り、小穴が不均等な間隔で伴う。

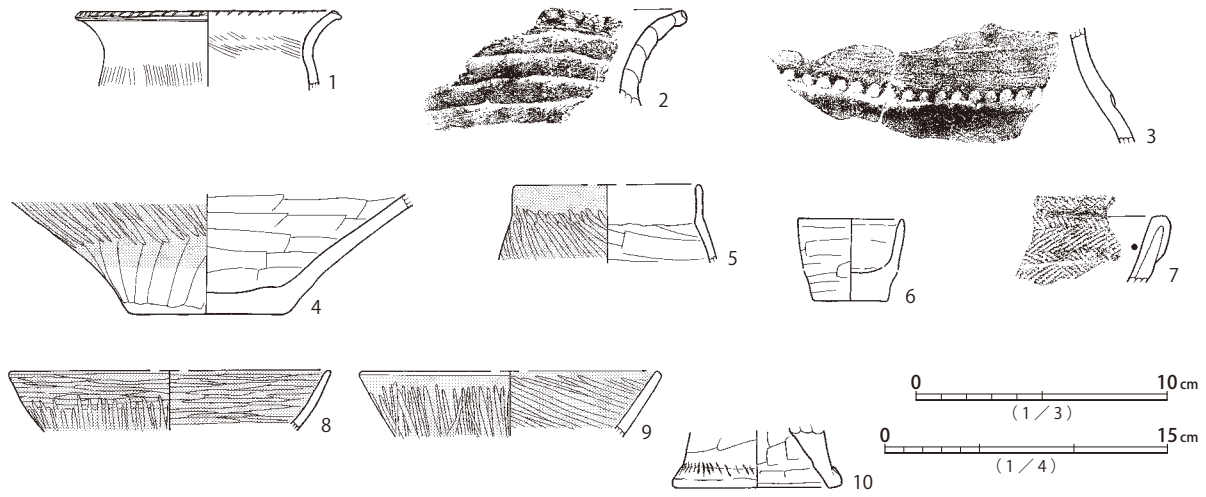
覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土等の平面記録もないため、漸移的な堆積状況と推定される。

SI0091・0130

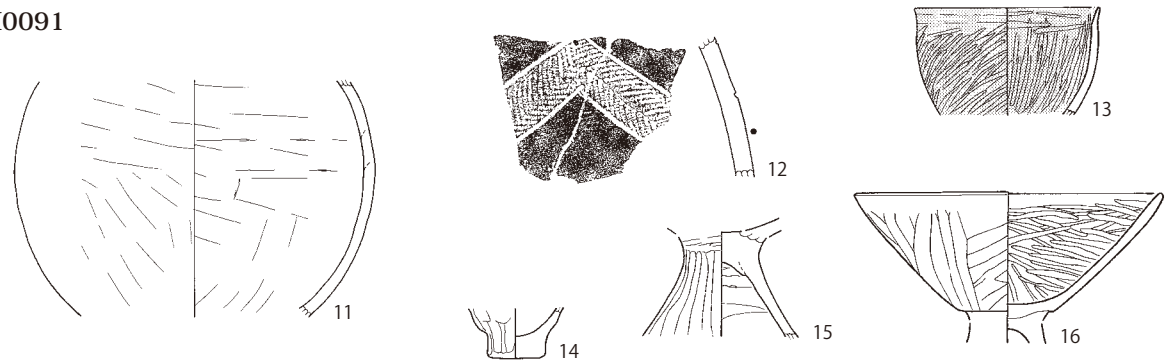


第136図　SI0091・SI0130遺構

SI0130



SI0091



第137図　SI0091・SI0130遺物

遺物は、同一個体と見られる弥生時代後期後半、山田橋式の壺1・2が床面近くで出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI0091・SI0130（第136・137図、図版38・39・46・150・153・202・209・332）

3.8×3.4m、深さ15cm前後の方楕円形竪穴建物跡SI0130と、5.0×5.2m、深さ25cm前後の隅円方形竪穴建物跡SI0091である。両竪穴が切り合う位置にSM1124周溝が重複する。

SI0130床面には主柱穴が認められず、ハシゴ穴と見られるfが検出されるのみである。主軸北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、炉の南東側が踏み固められ堅緻になっている。床面周溝は伴わず、小穴が間隔をおいて巡る。

覆土は、SI0091との切り合い部にある焼土を除いて、概ね漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面近くから壺4が検出されたほか、遺物注記によると、甕1・2・3、鉢5・6、高杯8・9が位置不明ながら床面から出土している。無文・素口縁の5・8・9が組成することから、概ね弥生時代終末期に位置づけられる。

SI0091床面には主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。a・b間ライン上に不整円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成されるが堅緻である。北東辺のb・c間ライン外側が約5cmの高まりを示し、ベッド状遺構と見られる。

覆土は、概ね漸移的な堆積状況を示すが、SI0130範囲内の焼土については本遺構から流出したものと推定でき、廃絶時に火を受けた可能性が考えられる。

遺物は、焼土範囲に重なる甕11、SM1124との切り合い部で検出された高杯16等、弥生時代終末期から古墳時代前期に位置づけられる。

切り合い関係と出土遺物の様相から、SI0130→SI0091の順に構築された可能性が高い。SI0130が弥生時代終末期、SI0091が弥生時代終末期から古墳時代前期前半に位置づけられる。

SI0092・SI0107（第138図、図版14・39・42・150・202）

5.0？×3.9？m、深さ10cm前後の長方楕円形竪穴建物跡SI0107と、3.0×2.9m、深さ25cm前後の方楕円形竪穴建物跡SI0092である。SI0092はSI0107の東半に大部分が重複する。

SI0107床面に主柱穴等は検出されていない。楕円形の炉が西寄りに設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に固結の程度は弱いが、中央部は踏み固められている。床面周溝は認められず、竪穴壁際には小穴が並ぶ。遺存状態は良くなく、竪穴北側は削平されている。

覆土は、土層断面記録がなく不明だが、焼土・炭化物の平面的な検出記録はないため、漸移的な堆積状況が推定できる。

遺物は、弥生土器の小片が出土しているが、実測対象遺物はない。

SI0092床面に主柱穴等は検出されていない。主軸北西寄りに長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、あまり固結しない。床面周溝は認められず、竪穴壁際には疎らに小穴が並ぶ。

覆土は、土層断面記録がなく不明だが、焼土・炭化物の平面的な検出記録はないため、漸移的な堆積状況が推定できる。SI0092覆土がSI0107覆土に切り込むとの所見が残される。

遺物は、炉の反対側の床面上から、完形に復元された幾何学文装飾壺2が出土している。弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

切り合い関係に基づくと、SI0107→SI0092の構築順が想定される。SI0092は弥生時代後期後半に位置づけられる。

SI0093（第139・140図、図版39・151・202・303・331）

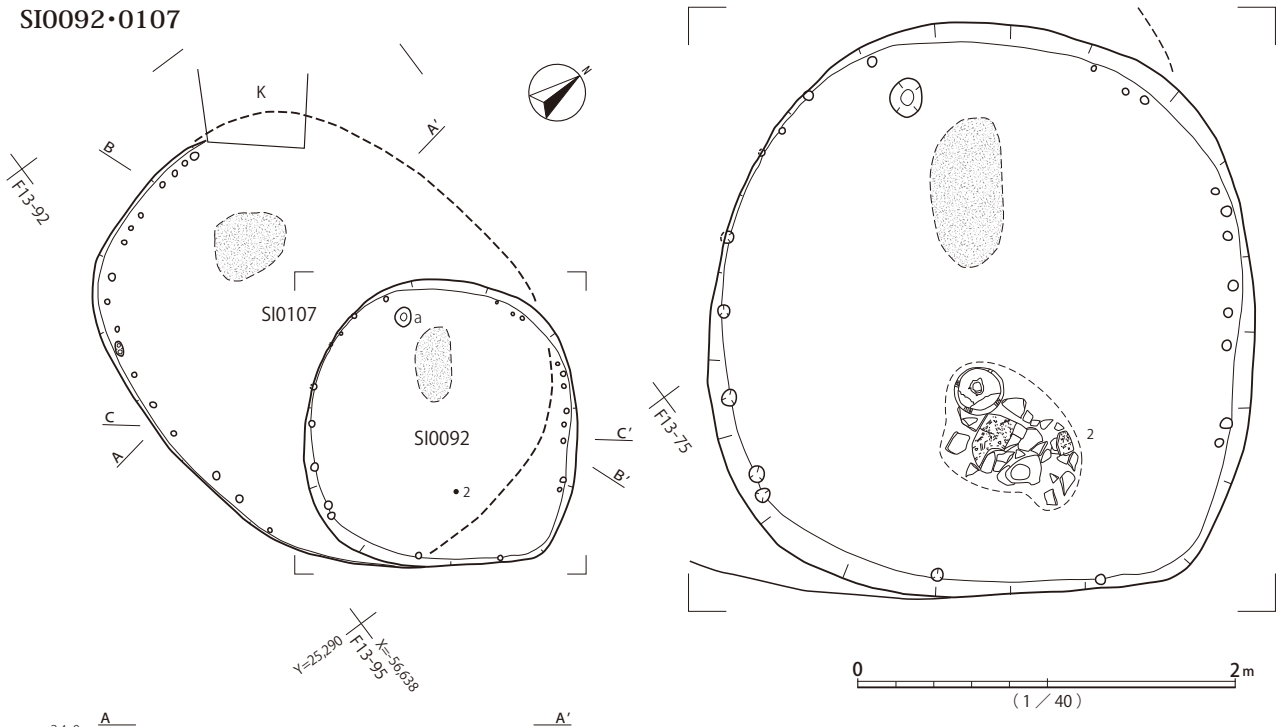
4.1×3.6m、深さ70cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、北壁際に貯蔵穴の可能性があるaが検出される程度である。中心やや北西寄りに円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され堅緻であり、中央部が円形に踏み固められている。床面周溝は無く、明確な小穴も伴わない。

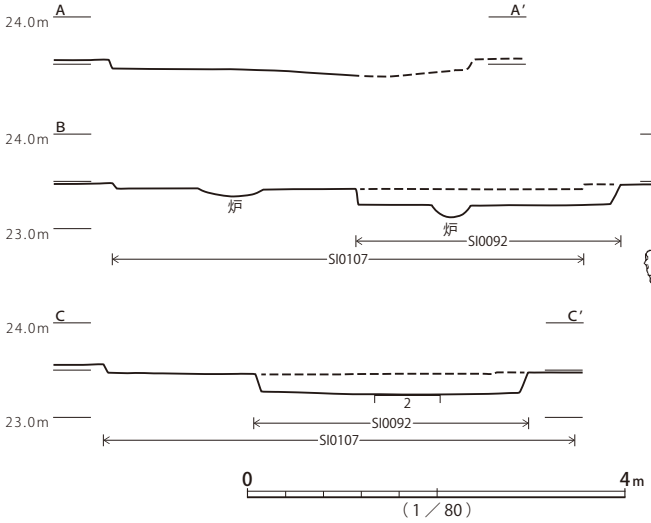
覆土は、廃絶時に火を受けたと見られ、外周を中心とした床面上に、炭化材を含む焼土層が部分的に検出されている。一部の層厚は10cmに及ぶ。上位の1・2層は漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面近くから、完形に近い甕3、砂岩製砥石21が出土している。土器は、弥生時代後期後半、山田橋式から、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。覆土上層から検出された古式土師器15～20は竪穴埋没後に埋没した可能性も推定される。

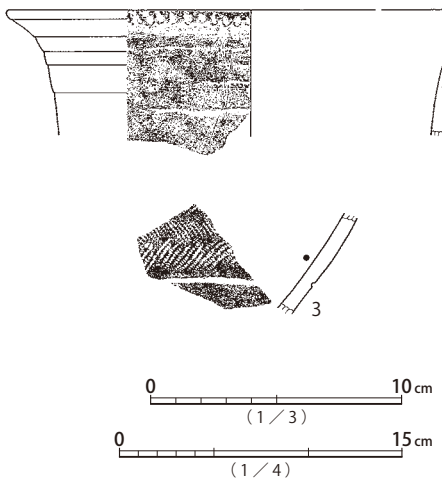
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から同終末期前半の所産と考えられる。

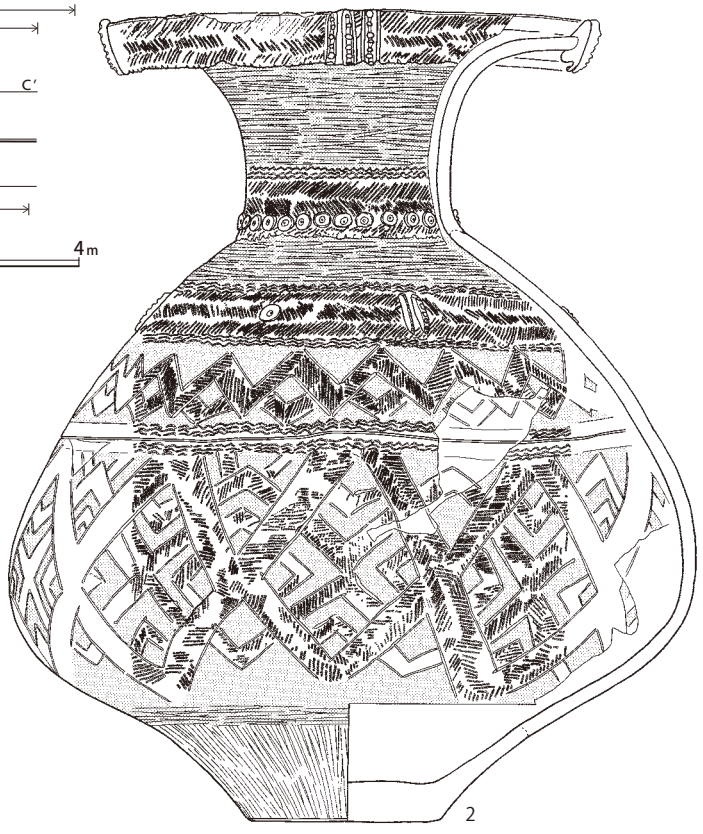
SI0092・0107





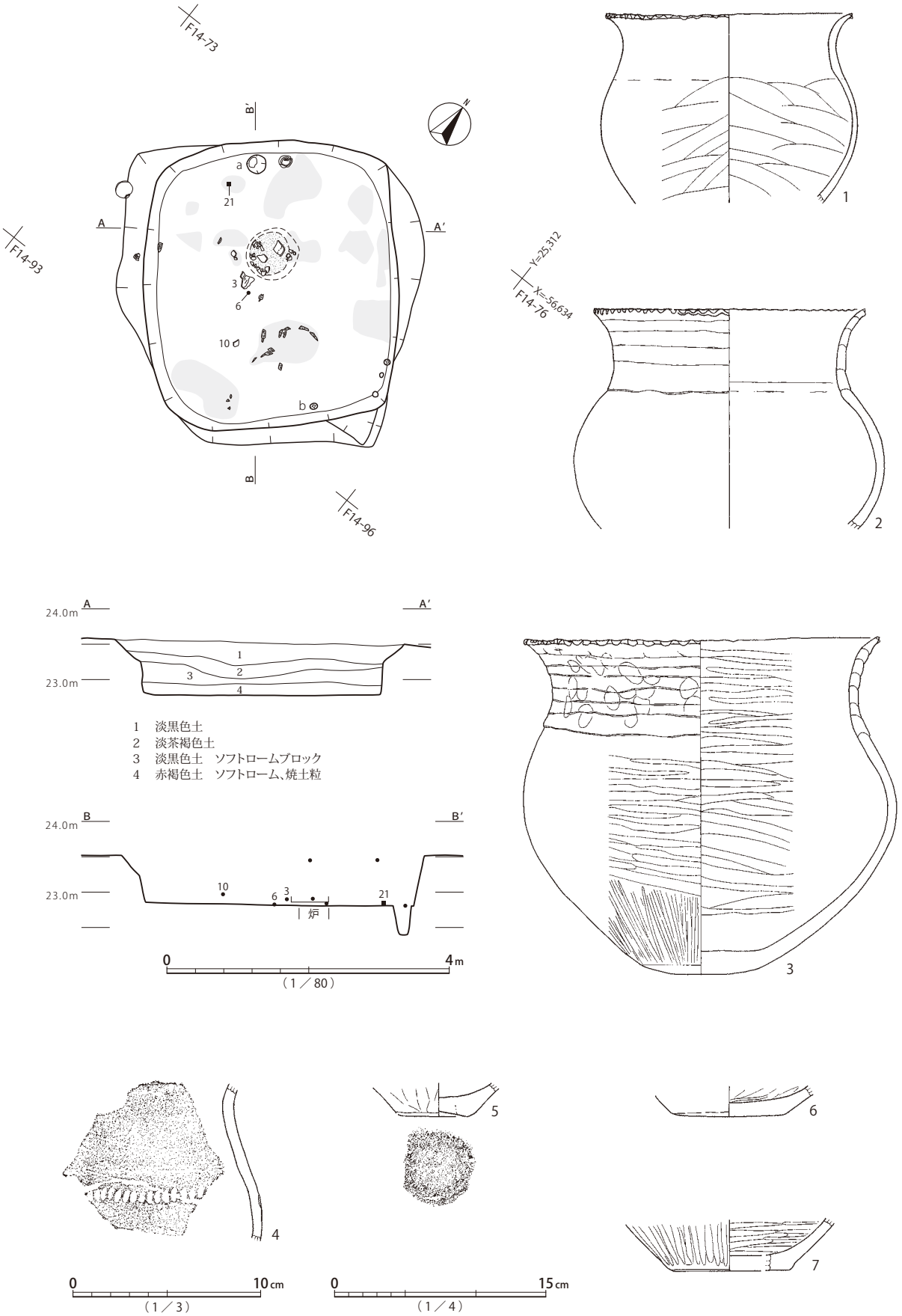
SI0092





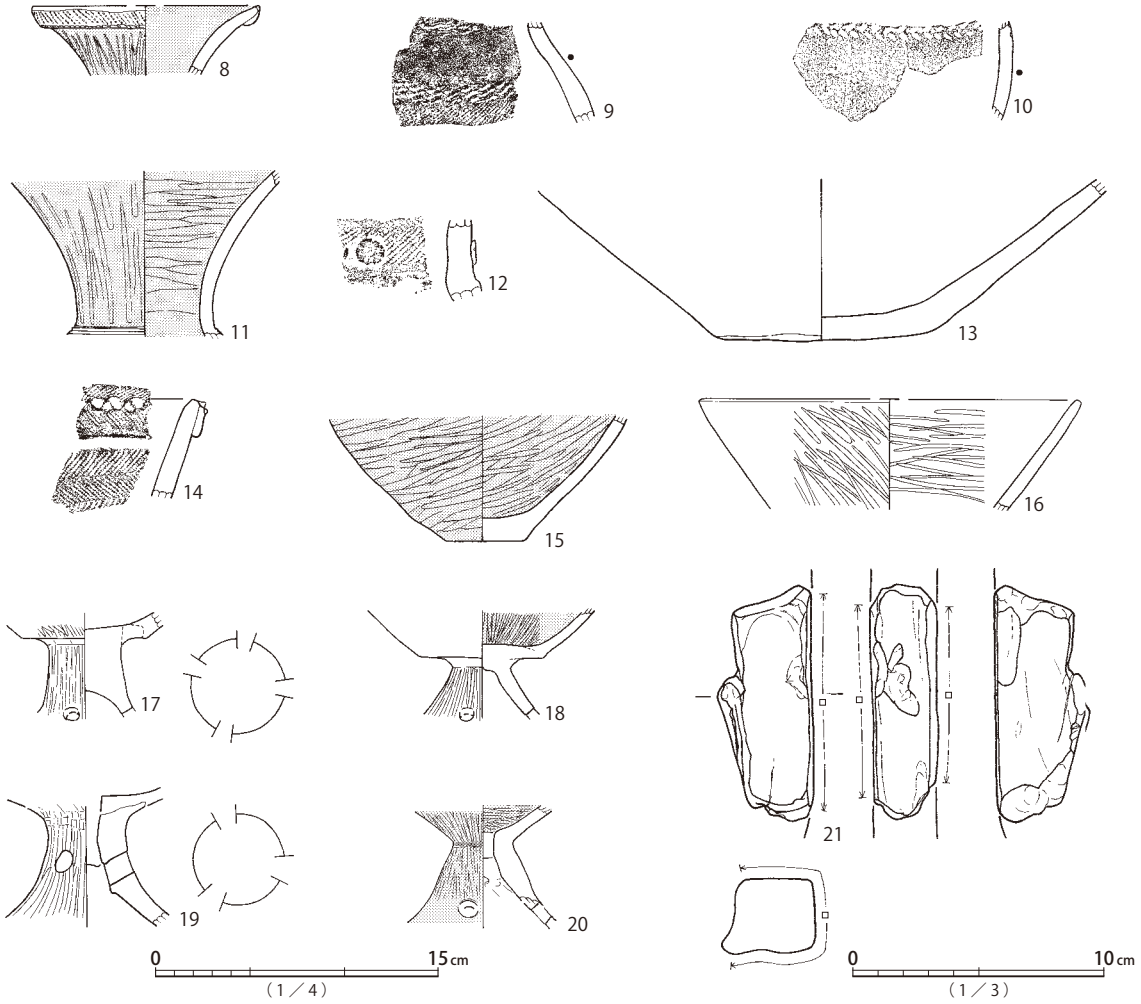
第138図　SI0092・SI0107遺構、SI0092遺物

SI0093



第139図　SI0093遺構、SI0093遺物（1）

SI0093



第140図　SI0093遺物（２）

SI0094・SI0164（第 141 図、図版 39）

3.0 × 3.3 ？ m、深さ 10cm 前後の楕円形竪穴建物跡 SI0094 と、3.6 × 3.8m、深さ 20cm 前後の円形竪穴建物跡 SI0164 である。

SI0094 床面には主柱穴等は検出されていない。中心から北寄りの位置に円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に踏み固められている。床面周溝は伴わない。

覆土は、土層断面記録がないため詳細不明だが、SI0164 が SI0094 を破壊して構築された旨の所見が残されている。

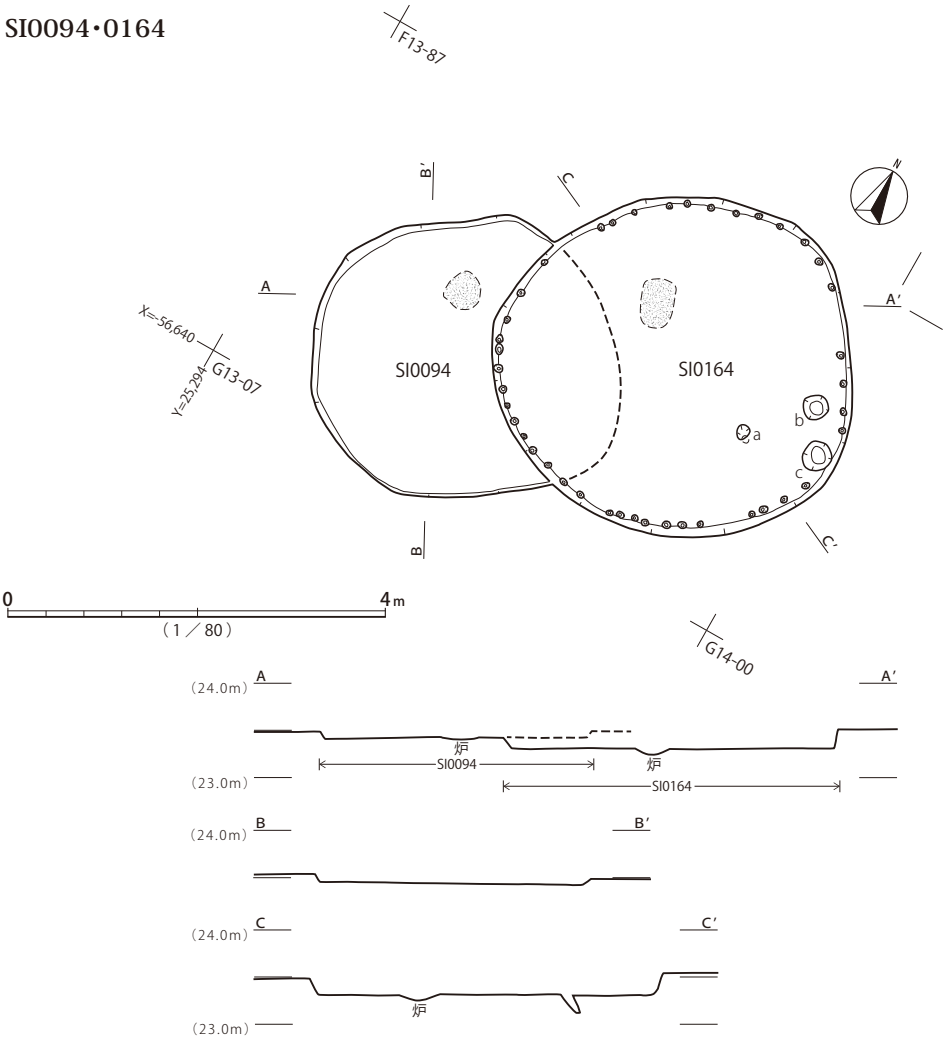
遺物は出土していない。

SI0164 床面にはハシゴ穴・貯蔵穴に対応する可能性があるピットａ～ｃが検出されている。中心から北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に固結の程度は弱いが、中央部は小判形に踏み固められている。床面周溝は認められず、壁際には小穴が比較的密に並ぶ。

覆土は詳細不明だが、SI0094 覆土を掘り下げて本遺構が形成されたと推定される。

出土遺物は皆無であり、実測対象遺物はない。

SI0094・0164



第141図　SI0094・SI0164遺構

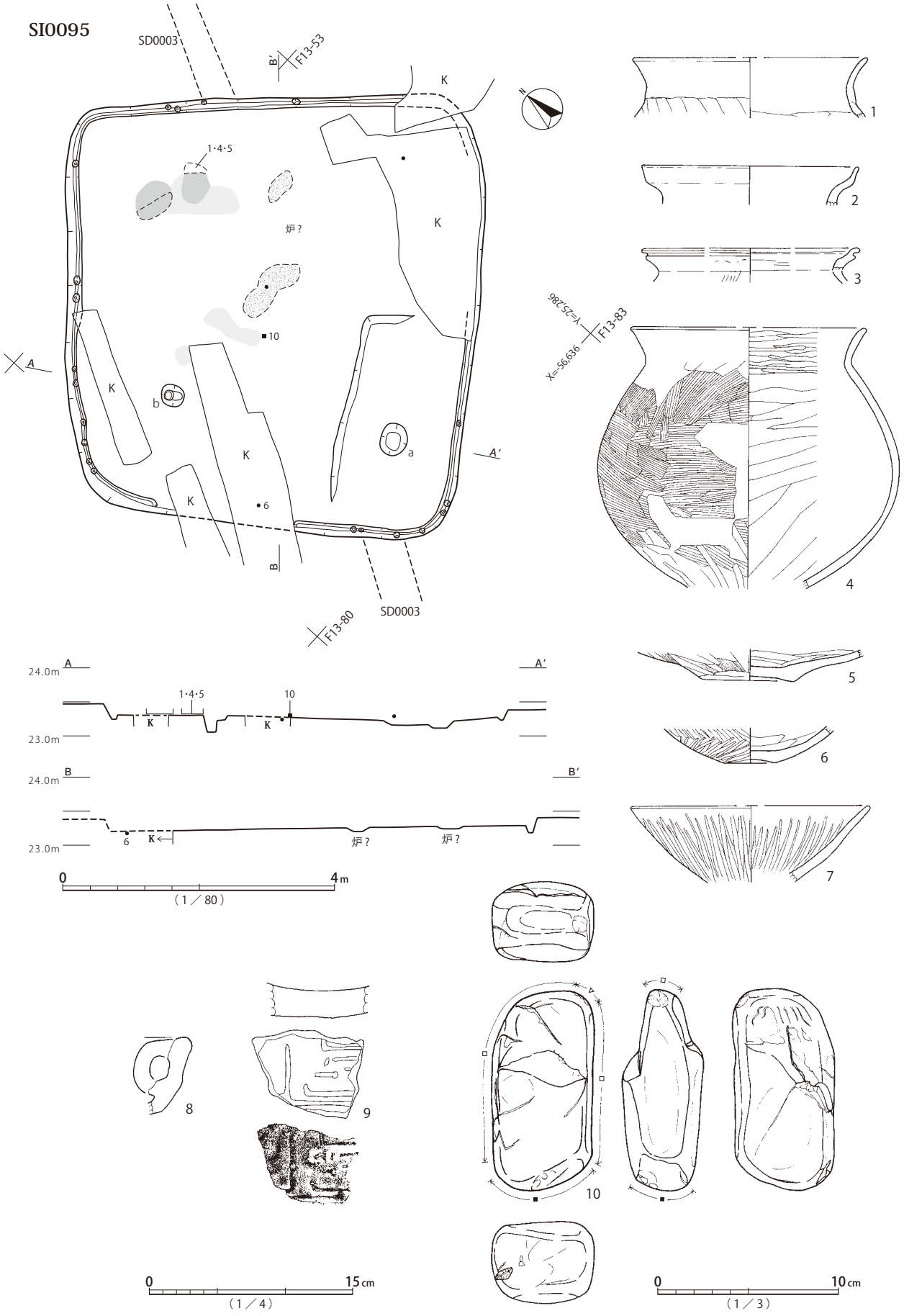
切り合い関係の調査所見に基づき、SI0094→SI0164の順に構築されたと考えられる。平面形と周辺の時期的傾向から、両遺構とも弥生時代後期に属する可能性がある。

SI0095（第142図、図版2・151・203・296・303）

6.5×6.2m、深さ15cm前後の方形竪穴建物跡である。主柱穴と見られるa・bが検出されている。床面被熱部が中心と北東寄りの2箇所で検出されており、いずれかが炉に該当する可能性がある。床面はソフトローム層に形成され、中央付近のみ比較的堅緻である。床面周溝は全周する可能性が高く、小穴が疎らに伴う。

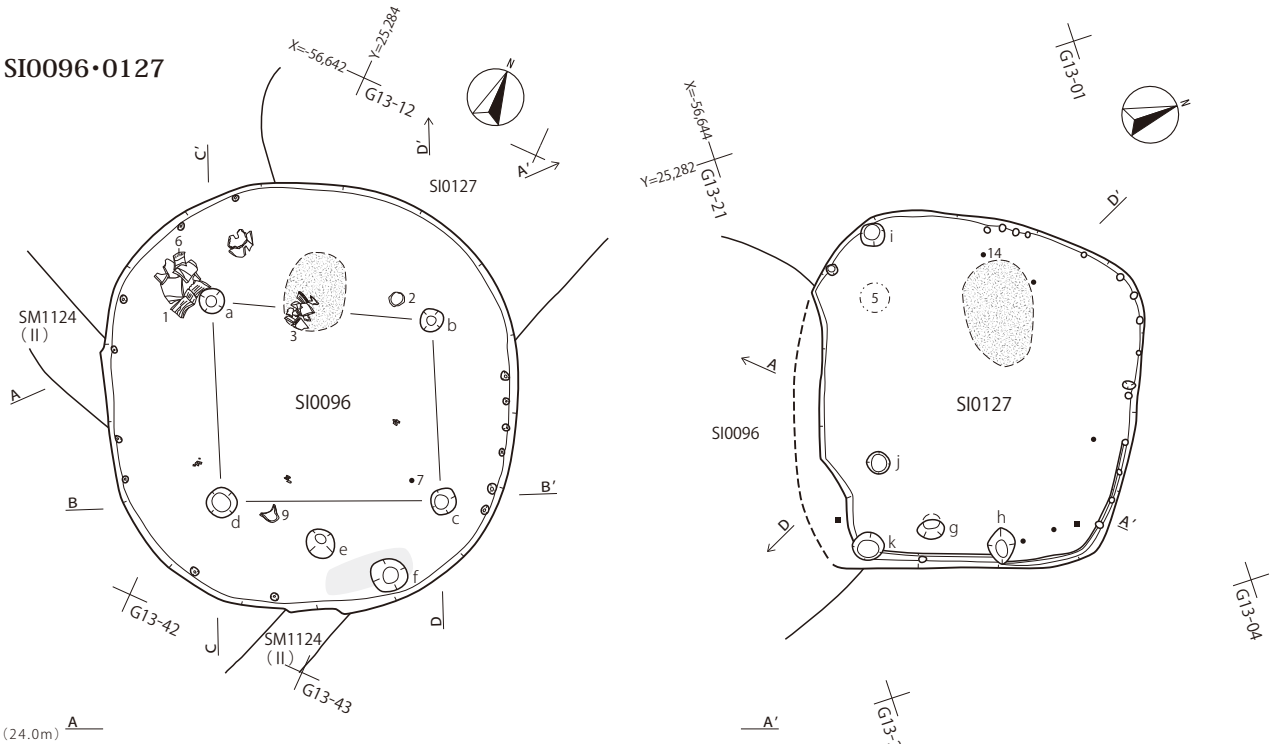
覆土は、床面中央部から北にかけて焼土が部分的に堆積する。近世以降の撹乱を多く受け、床面まで破壊が及んでいるところも目立つ。ピットa周辺にある長方形の落ち込みは竪穴と向きが合うため、元々の凹みの可能性がある。

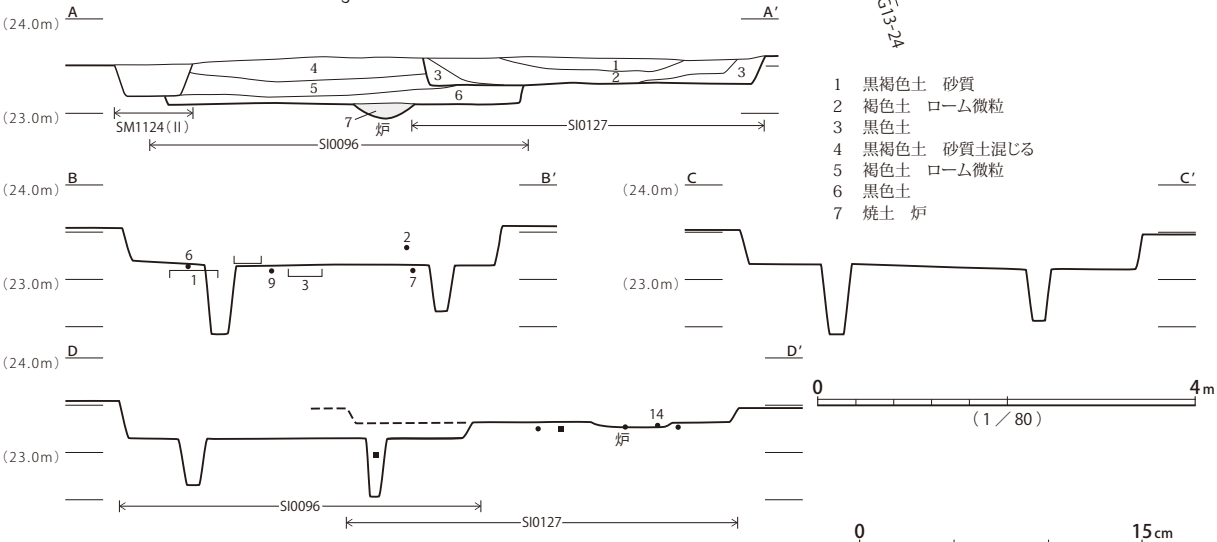
遺物は、古式土師器甕1・4、壺5・6が床面上から出土している。古墳時代前期前半、草刈式に位置づけられる。他に、菫青石ホルンフェルス製砥石10が同じく床面直上から検出されている。また、焙烙片8、陶器（常滑？）片9が混入している。



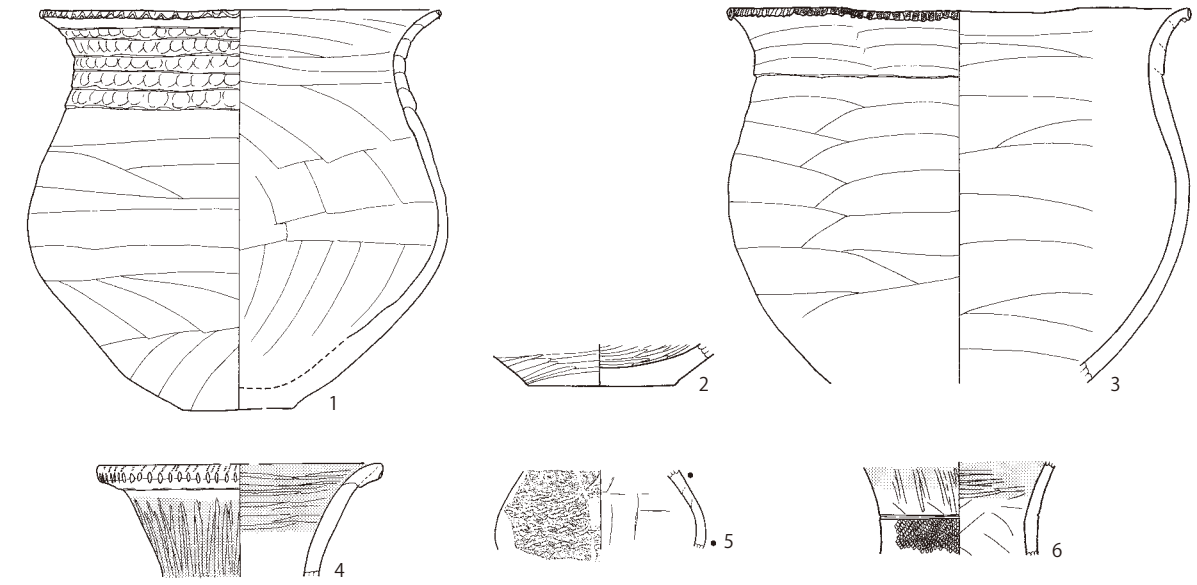
第142図　SI0095遺構・遺物

SI0096・0127



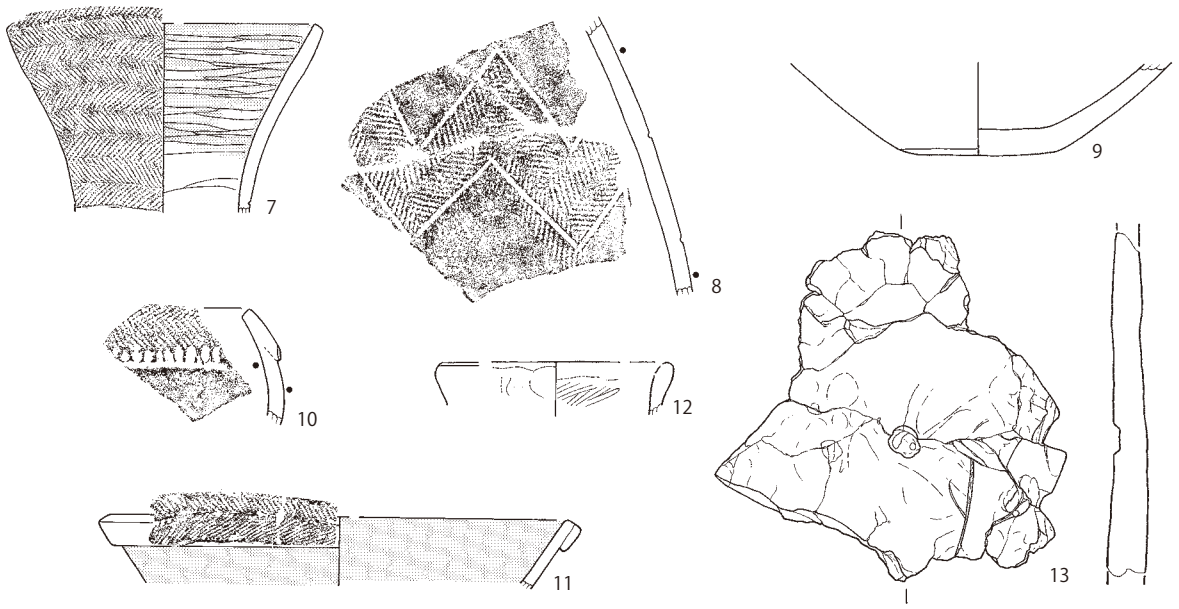


SI0096

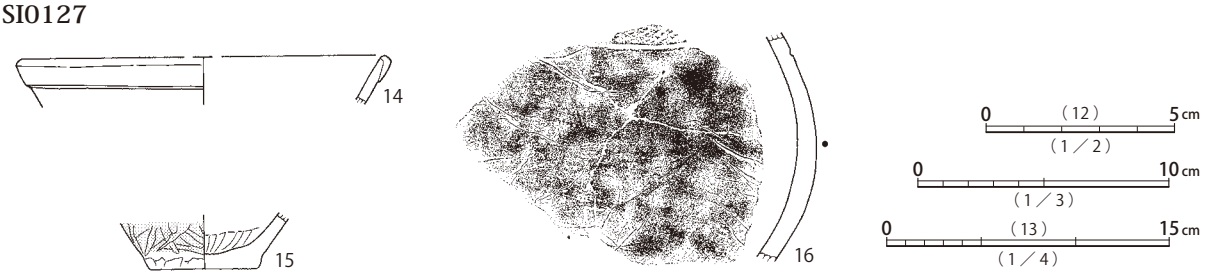


第143図　SI0096・SI0127遺構、SI0096遺物(1)

SI0096



SI0127



第144図　SI0096遺物（2）、SI0127遺物

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI0096・SI0127（第 143・144 図、図版 40・46・151・203・208・299）

4.6 × 4.3m、深さ 40cm 前後の方楕円形竪穴建物跡 SI0096 と、3.8 × 3.6 ？ m、深さ 25cm 前後の隅円方形竪穴建物跡 SI0127 である。SI0096 北東部に SI0127 南辺が重複し、SM1124 周溝が SI0096 覆土に形成されている。

SI0096 床面には、主柱穴 a ～ d、ハシゴ穴 e、貯蔵穴 f が検出されている。中心軸、a・b 間ライン上に楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され堅緻で、特に炉の周辺が踏み固められている。床面周溝は見られず、壁際には北東部を除き小穴が疎らに並ぶ。

覆土は、南東部床面近くに焼土・炭化物の堆積が認められる。上層には SI0127 床面の形成と覆土の堆積を確認できる。

遺物は、床面から半完形の甕 1、壺 6・7、炉内から甕 3 が出土している。いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。土製品 13 は焼成された粘土板で、器面調整が伴わないため炉の付帯物である可能性が考えられる。

SI0127 床面には、明確な主柱穴は認められず、ハシゴ穴の可能性がある g・h 等のピットが検出されている。中心軸近くの東寄りに楕円形の炉が設けられている。床面はソフトローム層に形成され、

全体的に踏み固められている。床面周溝は東側のみ検出され、小穴は遺存部の壁際に疎らに認められる。

覆土は、特に焼土・炭化物の検出について所見が無く、漸移的な堆積過程を経たと見られる。

遺物は、炉の周辺から、広口壺14等の土器片が若干出土している。弥生時代後期後半の山田橋式から弥生時代終末期の中台式に位置づけられる。

両遺構は、SI0096→SI0127の順に構築されており、出土遺物の様相から、SI0096は弥生時代後期前半、SI0127は弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI0097（第145図、図版40・151・203・303・326・331）

4.2×4.2m、深さ20cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸とa・b間ラインの交差する位置に、楕円形の炉が設けられる。床面周溝はほぼ全周し、疎らに小穴が伴う。床面は全体的に堅緻で、特に中央部が固結する。

覆土は、北壁際に焼土が検出されているが、概ね漸移的な堆積状況を示す。

遺物は床面から、甕1、広口壺2、壺5、半完形の小型鉢6等の土器のほか、礫岩製礫石器10、不明板状鉄製品11が出土している。土器は概ね、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0098（第146図、図版40・203）

4.8×4.9m、深さ10cm前後の方形竪穴建物跡である。ハシゴ穴と見られるa、貯蔵穴bが検出されている。中心から北東寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央部が踏み固められている。床面周溝は西辺を除き、ほぼ全周し、やや疎らに小穴が並ぶ。

覆土は、廃絶時に火を受けたために、焼土が8cm前後の厚さで広く堆積している。遺物は断片的に検出されるのみであり、不時の失火ではなく、焼却処分等の意図的な背景が推定できる。貯蔵穴上面には粘土層が15cmの厚さで検出されており、これも人為的な堆積と見られる（図版40）。

遺物は、半完形の炉器台8等の古式土師器が少量出土している。弥生時代終末期の中台式から、古墳時代前期前半の草刈式に位置づけられる。

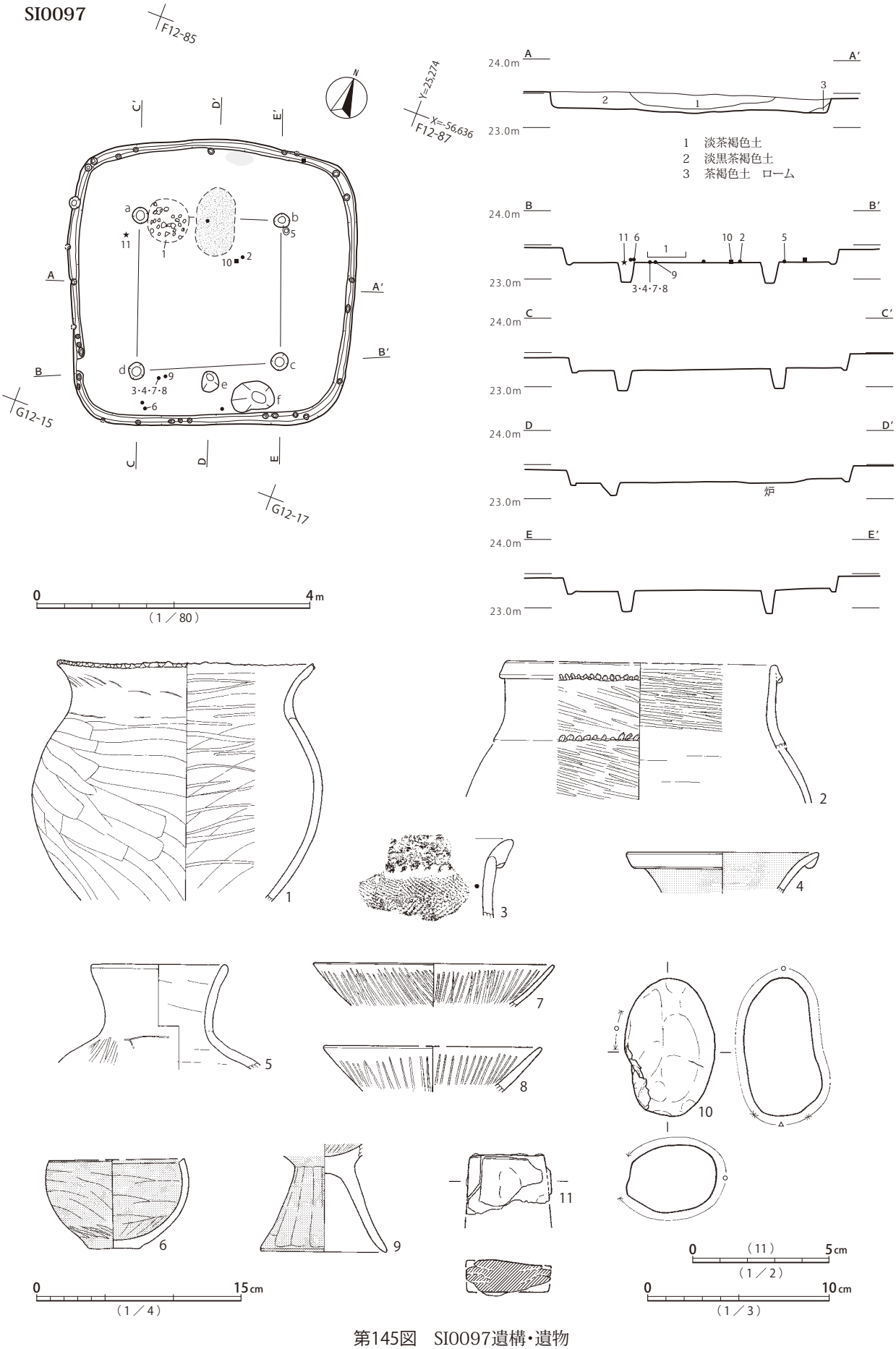
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期から古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI0099（第147図、図版40・203）

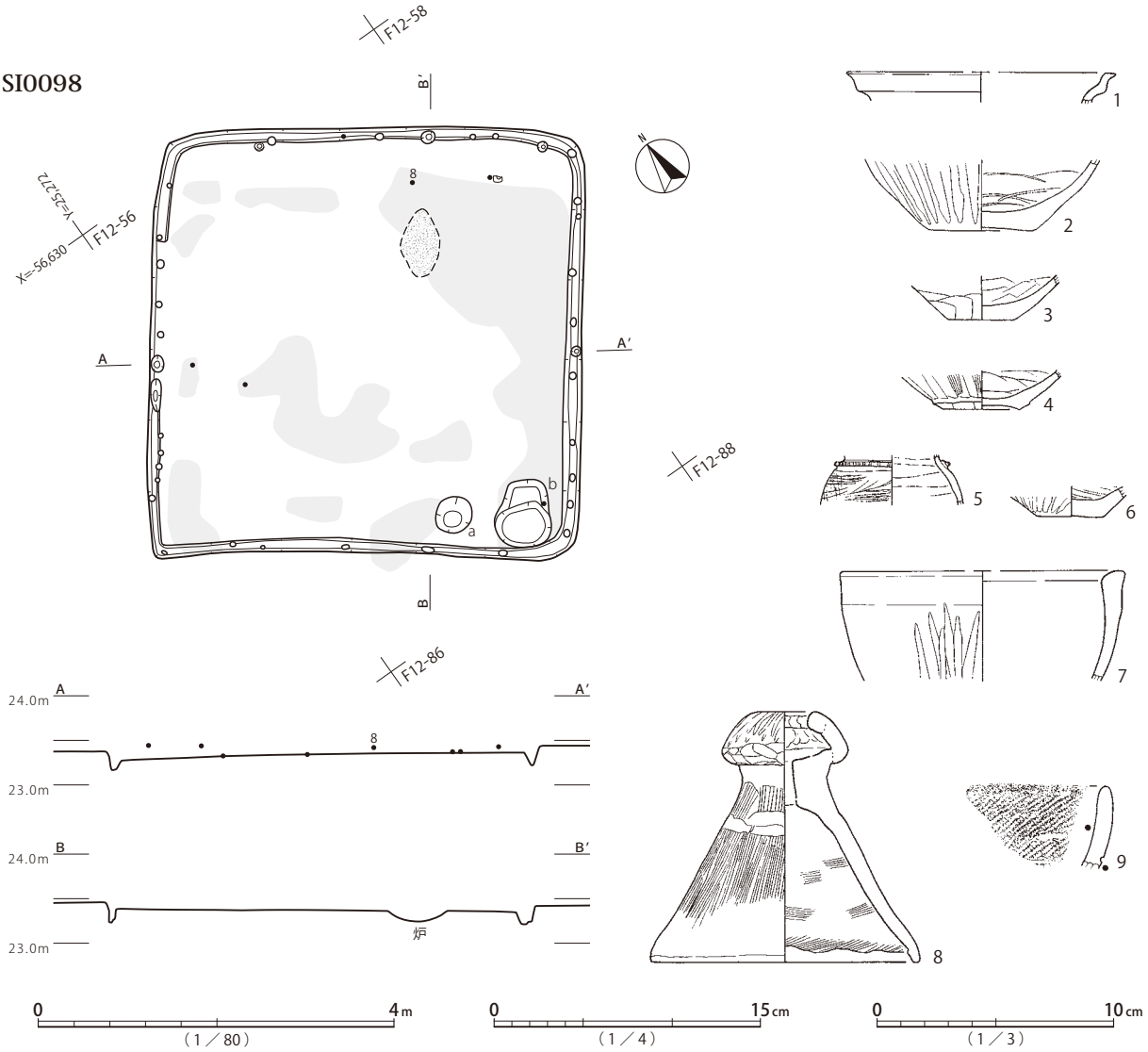
4.8×4.9m、深さ25cm前後の方形竪穴建物跡である。主柱穴a～dが検出されている。近世以降の溝状遺構SD0003に撹乱されているが、中心からやや北角寄り、a・b間ラインより内側に楕円形の炉が設けられている。床面はソフトローム層に形成され、全体的に踏み固められている。床面周溝は南側で途切れながら全周し、疎らに小穴が伴う。

覆土は、焼土や埋め戻し土層は不明確であり、漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、古式土師器の甕1、直口壺2、高杯3、小型器台4等が出土している。遺物注記は対応しないが、調査時の所見から、高杯3、小型器台4については床面近くで検出されたと見られる。概ね、古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。他に、覆土からは頭蓋骨に接して鉄鍋（第696図9）と玉



第145図　SI0097遺構・遺物



第146図　SI0098遺構・遺物

類（図版326）が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と考えられる。覆土に切り込むSD0003は道路跡と見られ、鉄鍋の伴う頭蓋骨は、掘方等の検出状況は記録されていないものの、道路脇への異常死者の埋葬に由来すると考えられる。

SI0100（第 148 図、図版 41）

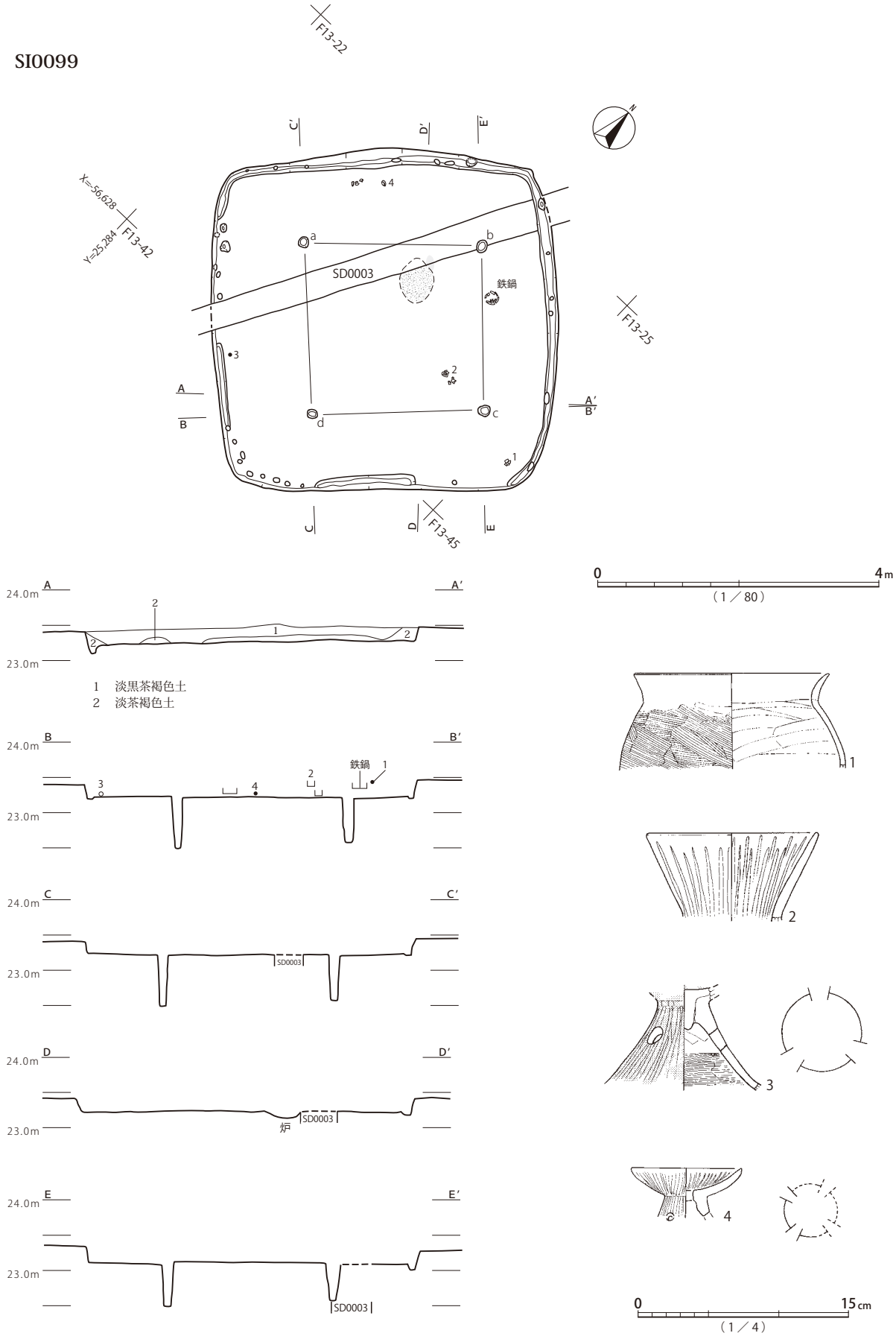
3.4 × 3.6 ？ m、深さ 25cm 前後の不整方形竪穴建物跡である。平面形状については輪郭が不明瞭との所見が残り、全体形を検出しきれていない可能性もある。主柱穴等は検出されていない。中心からやや西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に踏み固められている。床面周溝は認められない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細不明だが、竪穴輪郭が不鮮明という所見は、遺存状態のみならず漸移的な堆積状況に起因すると思われる。

遺物は皆無で、実測対象遺物もない。

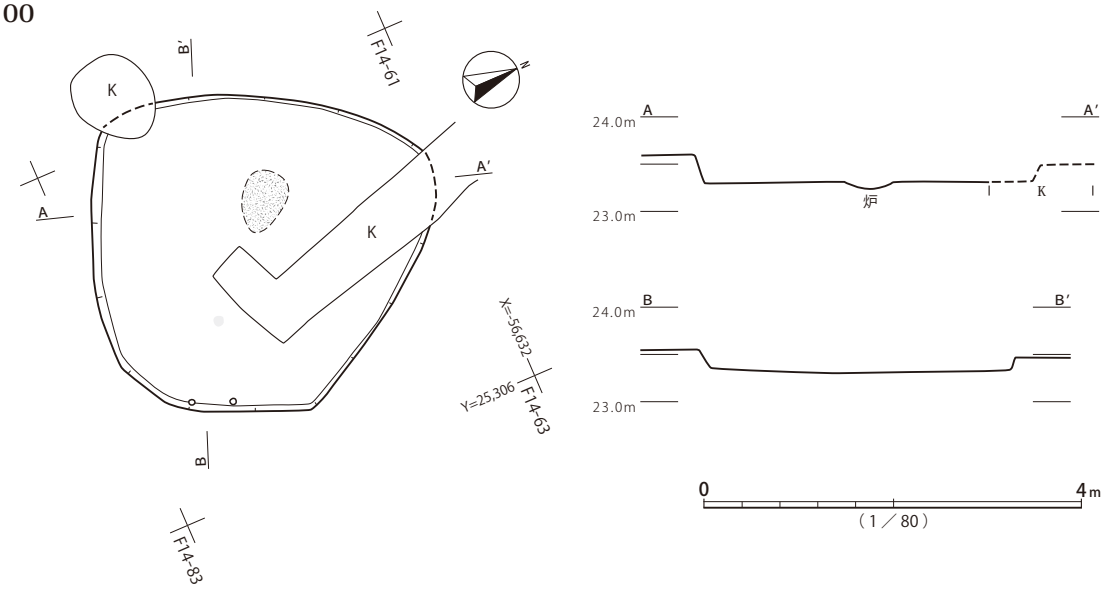
本遺構は、帰属時期を示す遺物が無く、平面形も不確定であるが、近辺で展開する遺構群の分布

SI0099



第147図　SI0099遺構・遺物

SI0100



第148図　SI0100遺構

傾向を踏まえ、弥生時代後期から弥生時代終末期の所産と推定する。

SI0101・SI0102・SI0106（第 149～152 図、図版 41・42・131・151・152・203・204・205・331）

重複する３棟の竪穴建物跡である。SI0101は、3.9×3.6m、深さ15cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。SI0102は、4.0×3.6m、深さ30cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。SI0106は、5.2×4.5m、深さ40cm前後の方楕円形竪穴建物跡である。SI0101の西角とSI0102の東角が重複し、SI0106の北辺とSI0102の南辺が大きく重なる。

SI0106床面には、主柱穴a・c・dが検出されている。bは他柱穴の深度と配置から存在が推定されるものである。中心軸とa・b間ラインの交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され堅緻で、中央部が特に踏み固められている。床面周溝は東辺を除いて部分的に巡り、一部に小穴が伴う。

覆土は、床面上に焼土と建材由来と見られる炭化物が散在し、廃絶時に火を受けた可能性が高い。上層には、重複して構築されたSI0102の覆土が切り込んでいる。

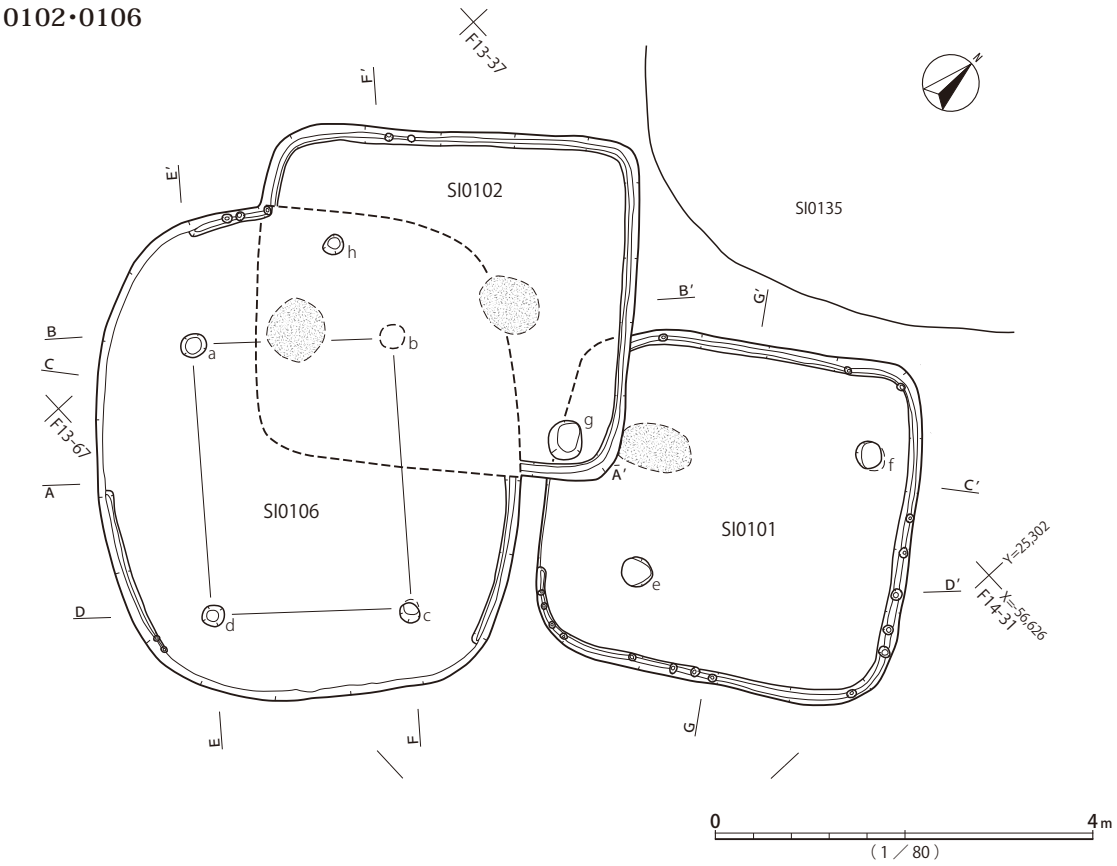
遺物は、弥生土器が比較的多く出土している。平面記録はないが、東壁床面近くに、瓢形に類する異形の広口壺（もしくは甕）10、鉢19、高杯21が出土したとの所見が残る。その他、床面近くからは、壺13等が出土しており、弥生時代後期後半、山田橋式を主体とする。古式土師器高杯24等については、出土位置が高く、SI0102等からの混入品と考えられる。

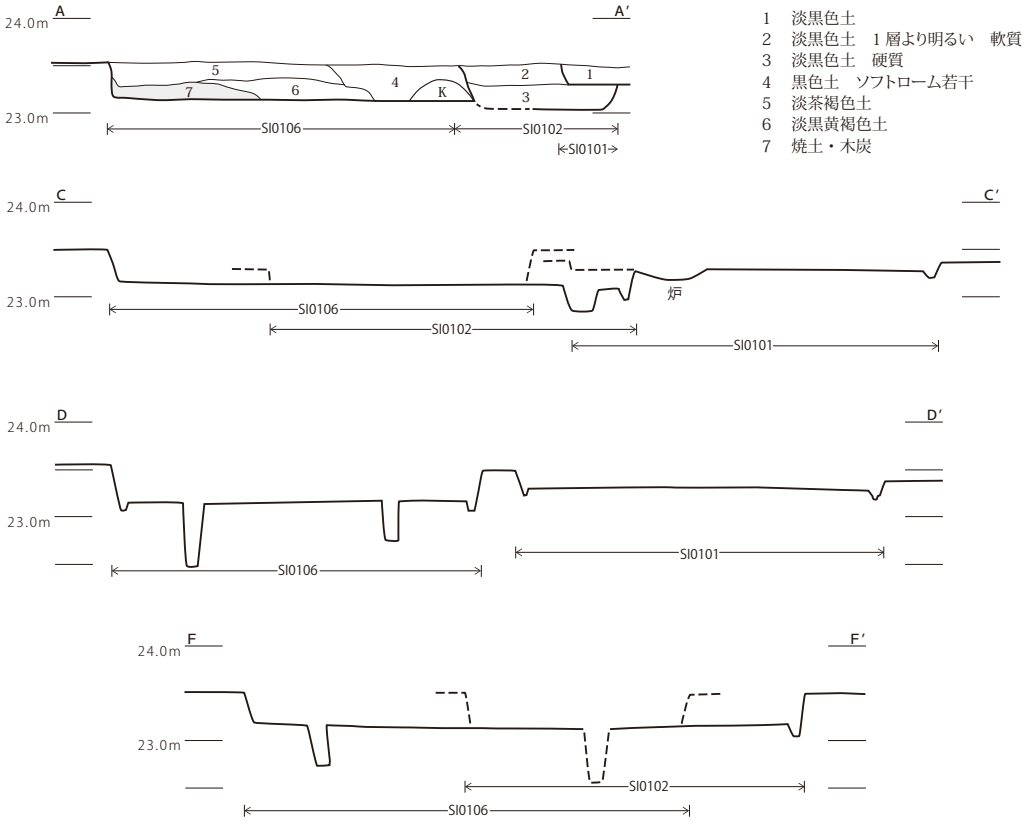
SI0102床面には、主柱穴は認められず、貯蔵穴の可能性があるgとピットhが検出されている。中心から北東寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、部分的に硬化範囲が認められる。床面周溝はSI0106との重複部を除き認められ、本来は全周した可能性がある。

覆土は、焼土・粘土の部分的な堆積が認められる。

遺物は、古式土師器が主体で、床面から甕31、高杯41、下層から高杯42等が出土している。高杯脚部42は緻密な横ヘラミガキ仕上げの精製品である。椀40は遺物注記から床面直上検出と見られるものの平面位置が記録されていない。出土土器の大部分は古墳時代前期前半、草刈式に位置づ

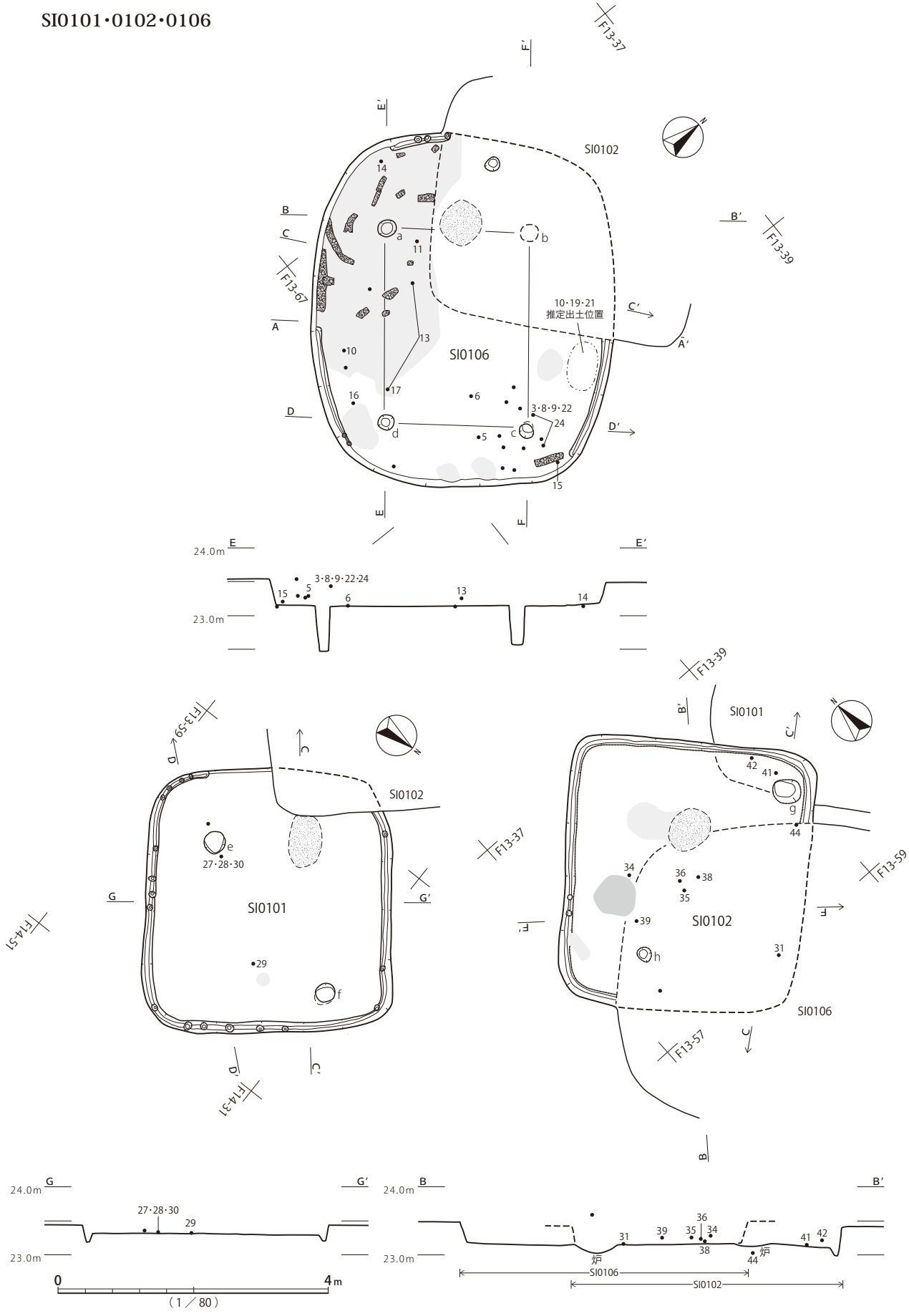
SI0101・0102・0106





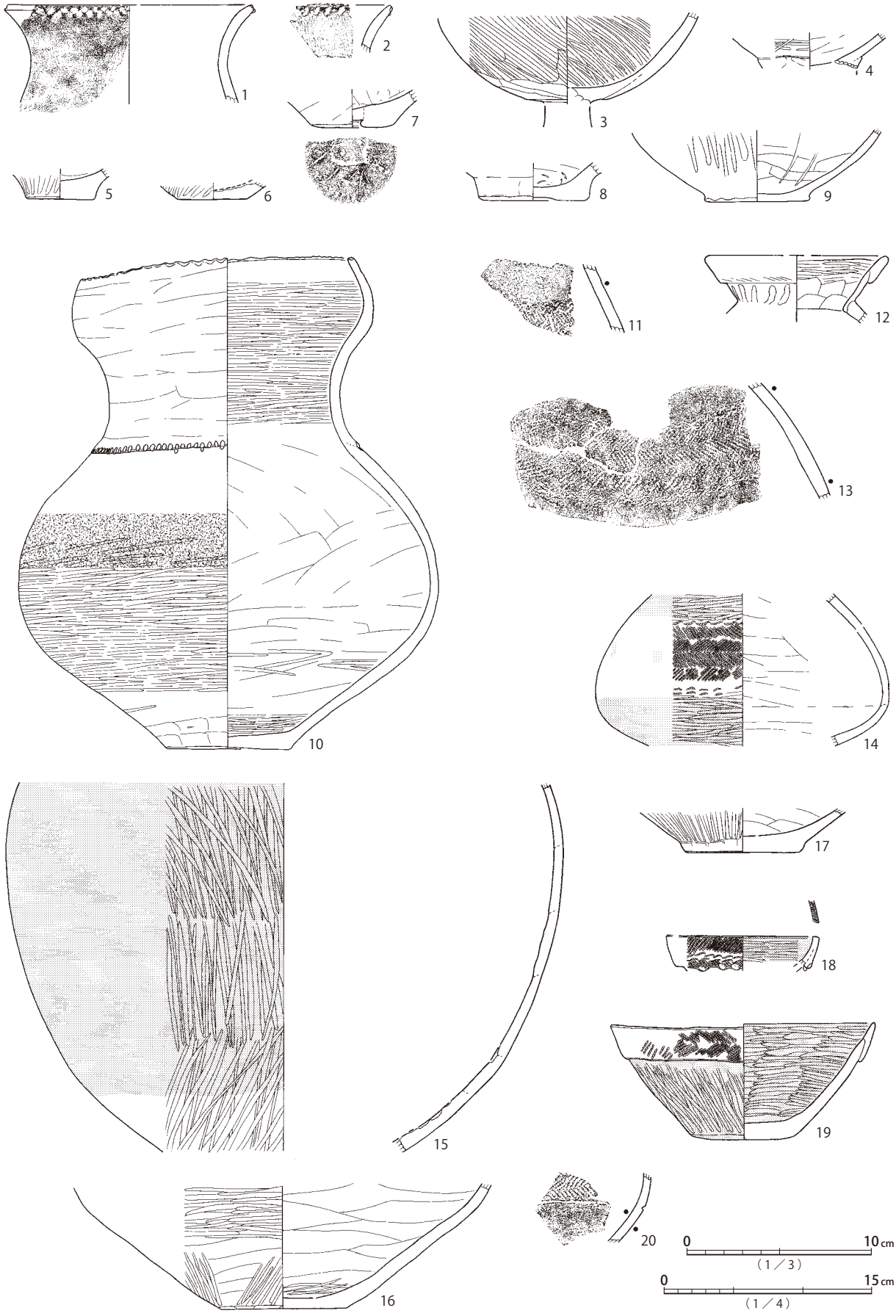
第149図 SI0101・SI0102・SI0106遺構(1)

SI0101・0102・0106



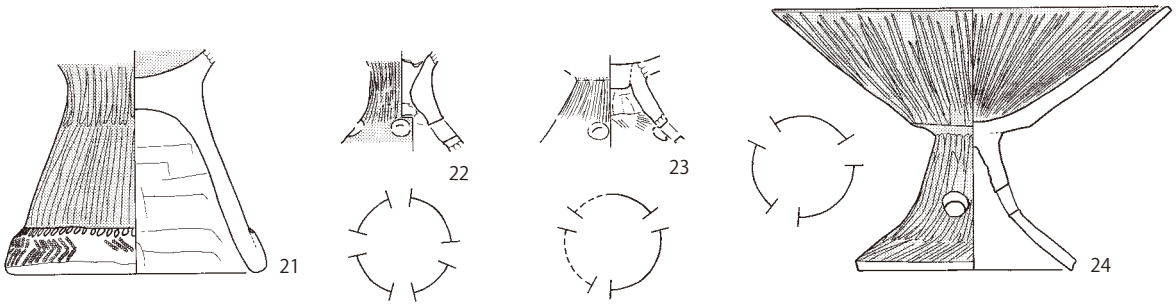
第150図　SI0101・SI0102・SI0106遺構(2)

SI0106

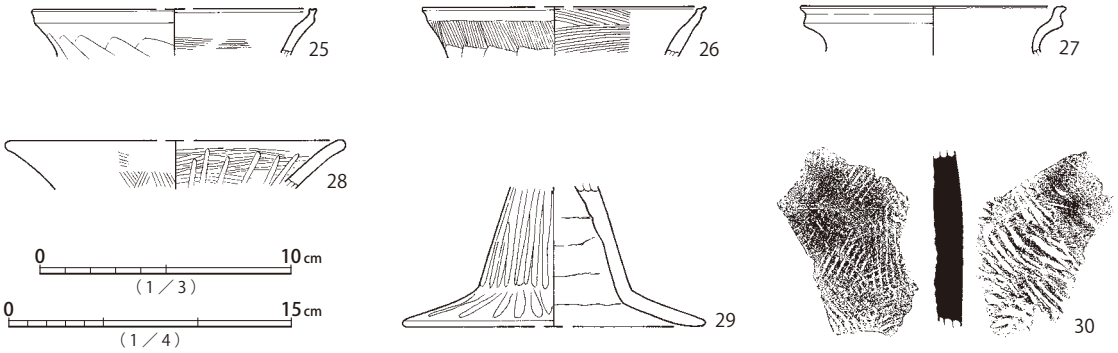


第151図　SI0106遺物（1）

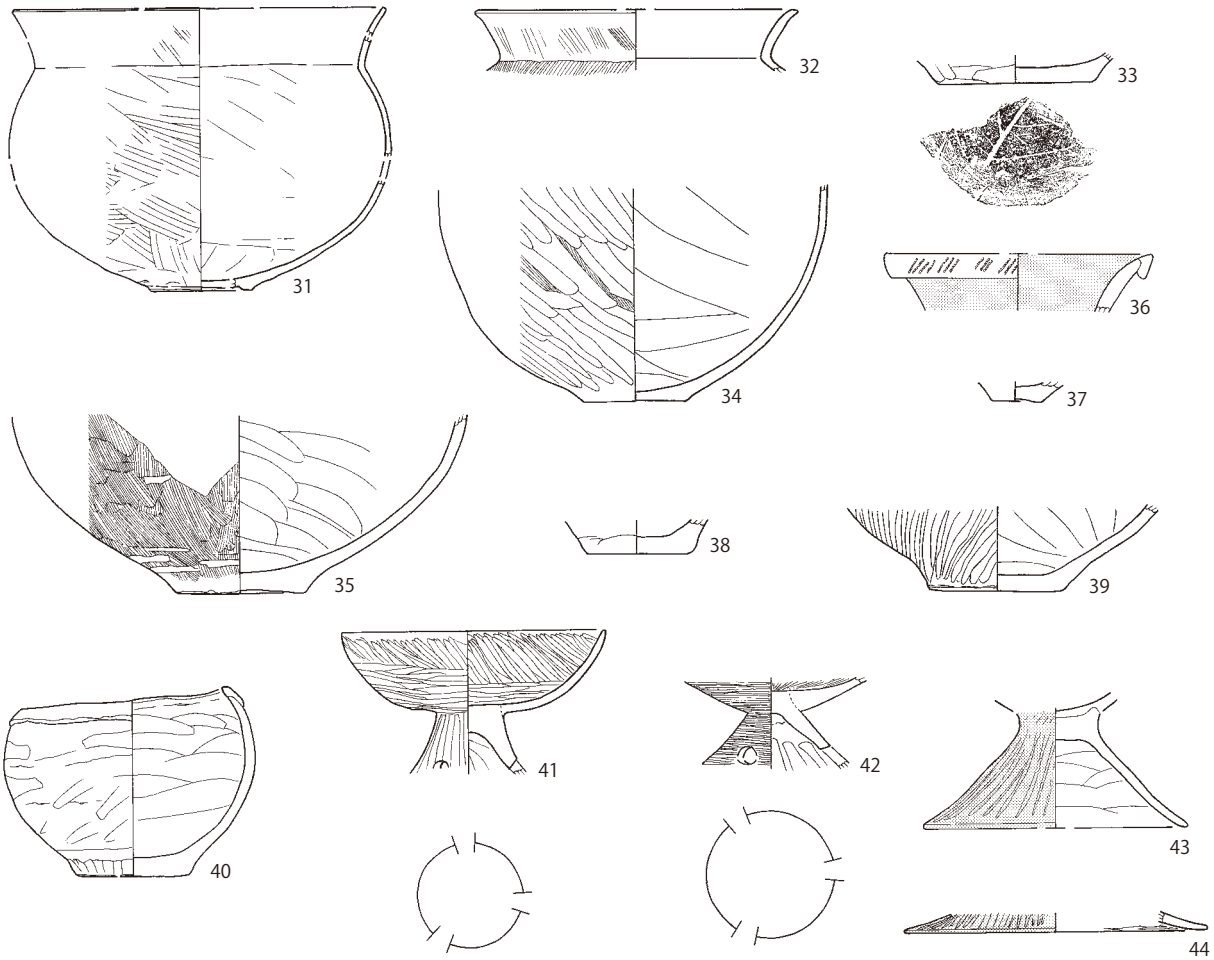
SI0106



SI0101



SI0102



第152図　SI0101・SI0102遺物、SI0106遺物（2）

けられる。

SI0101床面には、ピットeと貯蔵穴の可能性があるfが検出されている。中心から西角寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、平坦だが固結の程度はあまり強くない。床面周溝は、SI0102との重複部と西辺を除いて巡り、疎らに小穴が伴う。

覆土は、SI0102覆土と連続的な堆積状況が記録されている。土層断面図の切り合い関係は、出土遺物の比較等による推定復元である。

遺物は、床面近くから、受口状口縁甕27、壺もしくは高杯28、高杯29、須恵器甕30が出土している。受口状（S字状）口縁甕27は受口状口縁甕25・26とともに弥生時代終末期、中台式に位置づけられるが、高杯29は古墳時代中期前半の和泉式、須恵器甕30は古墳時代中期以降に帰属する。遺物注記に基づくと、古墳時代中期以降の土器が床面上に検出されたことになるが、本TJ調査区においては、平面図位置記録と遺物注記の対応に齟齬のある場合が少なくないため、29・30は混入品である可能性が否定できない。同時に中台式と見られる25～27についても、積極的な評価はできなくなる。

切り合い関係の想定に基づくと、重複する3棟の竪穴建物跡は、SI0106→SI0102→SI0101の順に構築されたと考えられる。出土遺物の様相から、SI0106が弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半、SI0102が古墳時代前期前半、SI0101がそれ以降、古墳時代前期の所産と推定する。

SI0103・SI0113・SI0123（第153～156図、図版41・43・45・151～153・204・206・299・331）

重複する3棟の竪穴建物跡である。SI0103は、6.6×5.8m、深さ50cm前後の方楕円形竪穴建物跡、SI0113は、4.1×4.0？m、深さ15cm前後の方形竪穴建物跡、SI0123は、3.3×3.1？m、深さ30cm前後の方楕円形竪穴建物跡である。SI0113の東側とSI0103の北西部、SI0123の西側1/3程度とSI0103の東角が重なり合う。

SI0123床面には、主柱穴は認められず、貯蔵穴gが検出されている。中心から北寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、踏み固められて比較的堅緻な中央部を除き、外周部は固結の程度が弱い。床面壁際には小穴がほぼ全周する。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、SI0103覆土が切り込んだ堆積状況を示す。また、焼土層が平面的に確認されている。

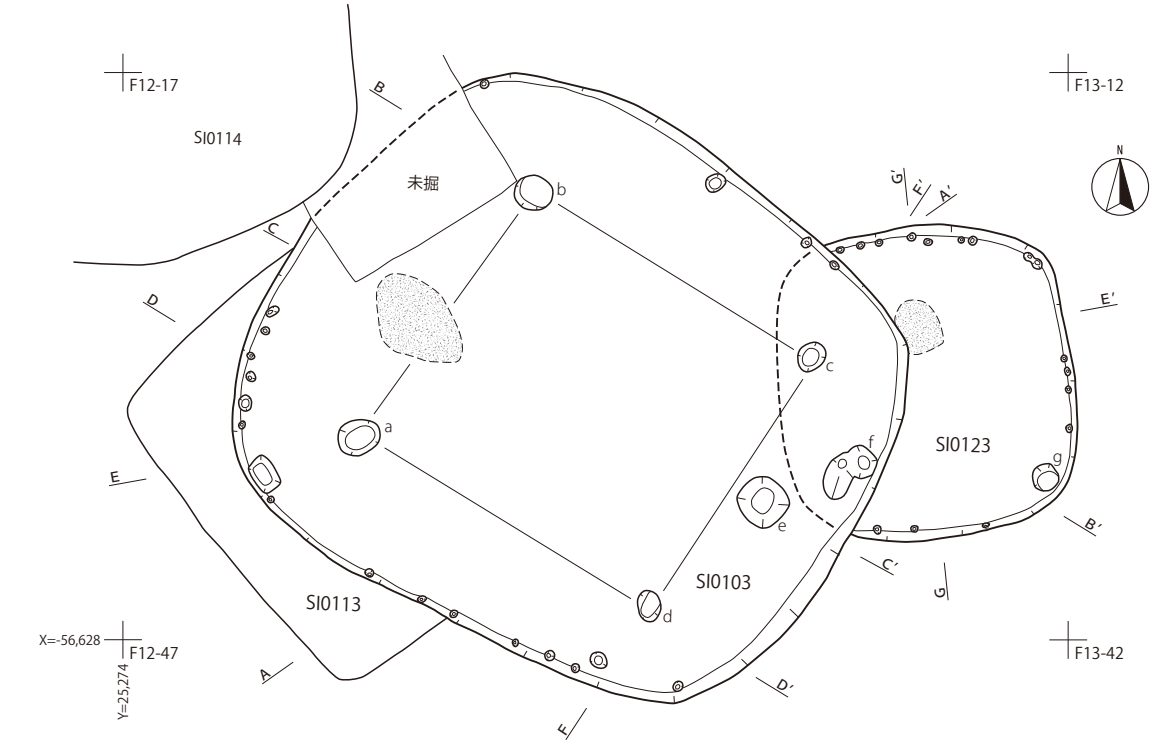
遺物は、床面から覆土中位にかけて、半完形の甕1・2、壺3が出土している。結節文区画の文様を持つ壺3は、山田橋式の特徴を示す。

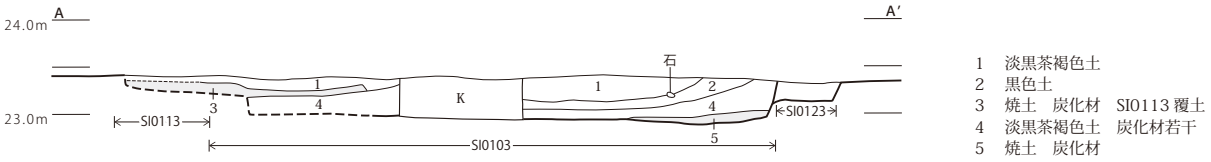
SI0103床面には、主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸からやや南西寄り、a・b間ラインと交差する位置に、楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝が全周するとの所見も残るものの、平面図に記録が無いため、図のとおり、竪穴壁際には小穴が並んでいたと想定する。

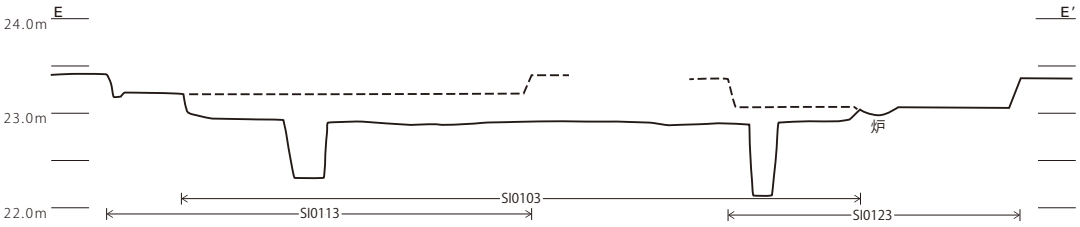
覆土は、床面近くに炭化材を含む焼土層が広く検出されており、廃絶時に火を受けた状況を示す。また、SI0113覆土に伴う焼土層が本遺構範囲に切り込む堆積状況が認められる。

遺物は、焼土層とその上位にかけて土器が出土している。また、深度は不明ながら、貯蔵穴f内から壺4が出土したとの所見がある。壺4は、概ね弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる特徴を示すが、東京湾岸形装飾壺5は斜行帯区画線が2本になり充填される沈線が4～5本と多条化して

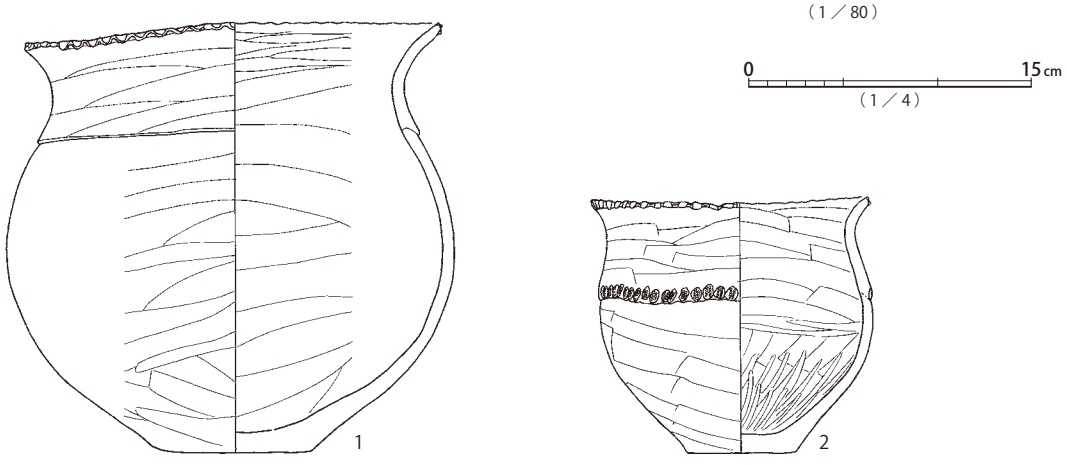
SI0103・0113・0123





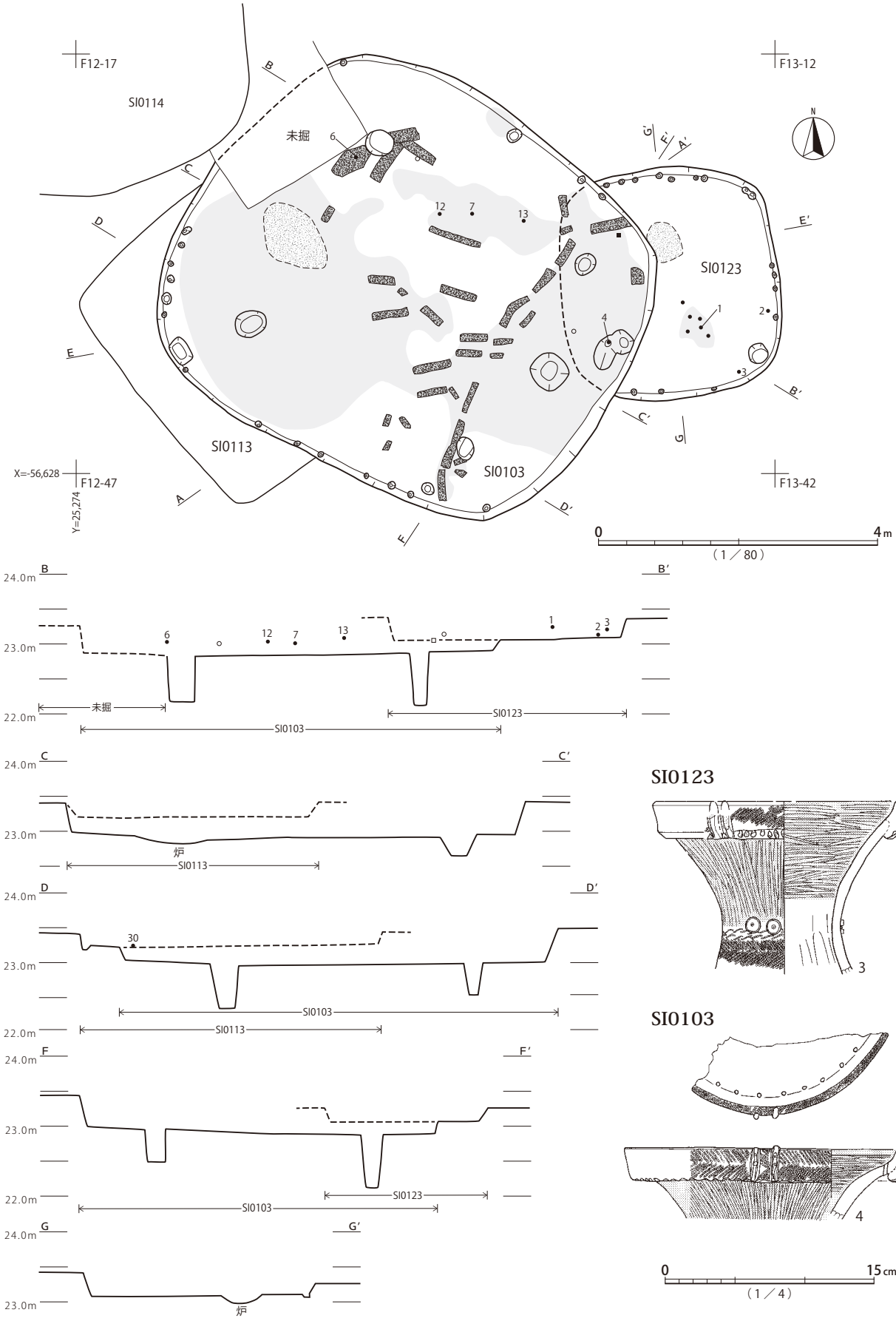


SI0123



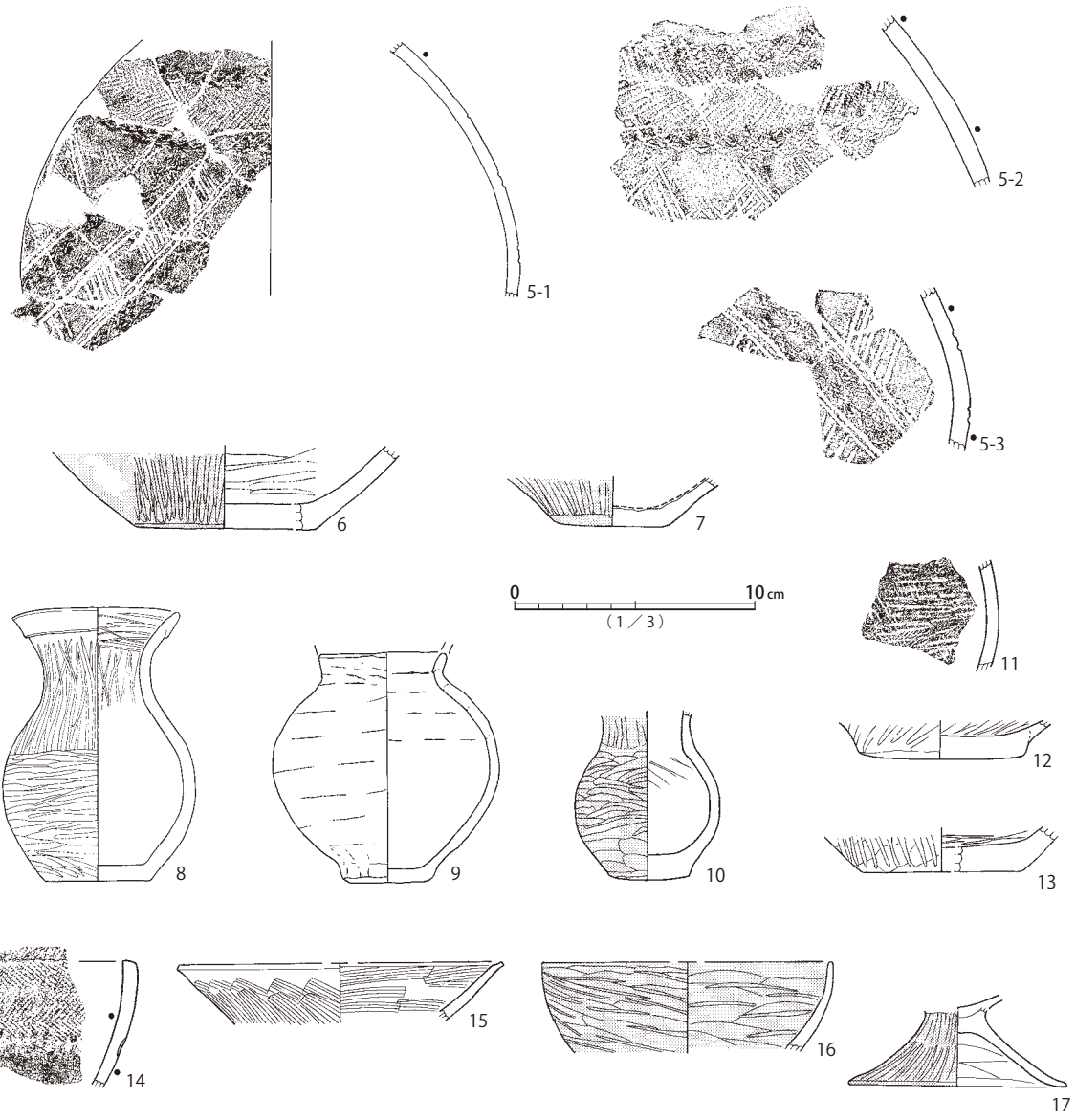
第153図　SI0103・SI0113・SI0123遺構(1)、SI0123遺物(1)

SI0103・0113・0123

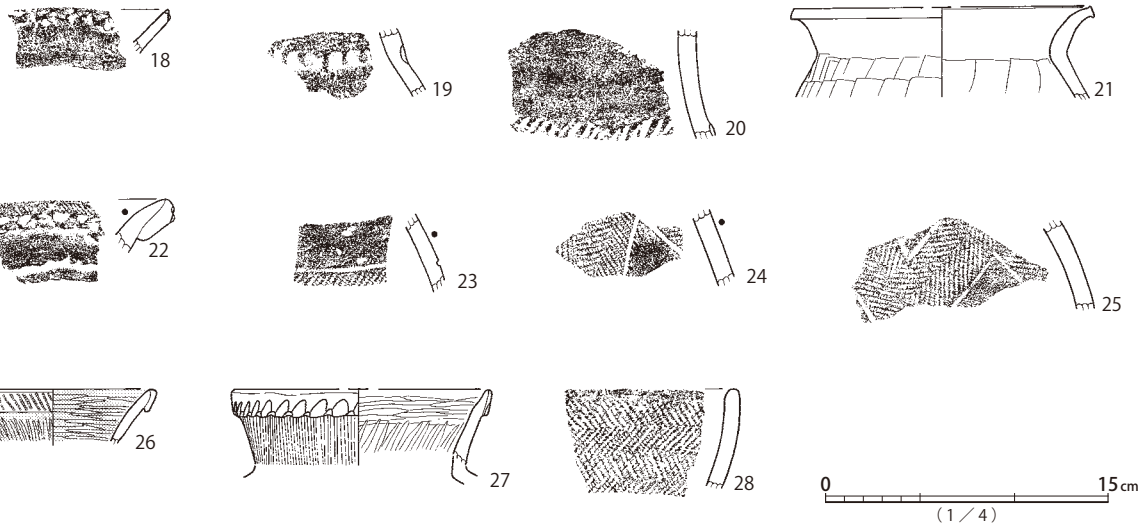


第154図　SI0103・SI0113・SI0123遺構(2)、SI0103遺物(1)、SI0123遺物(2)

SI0103

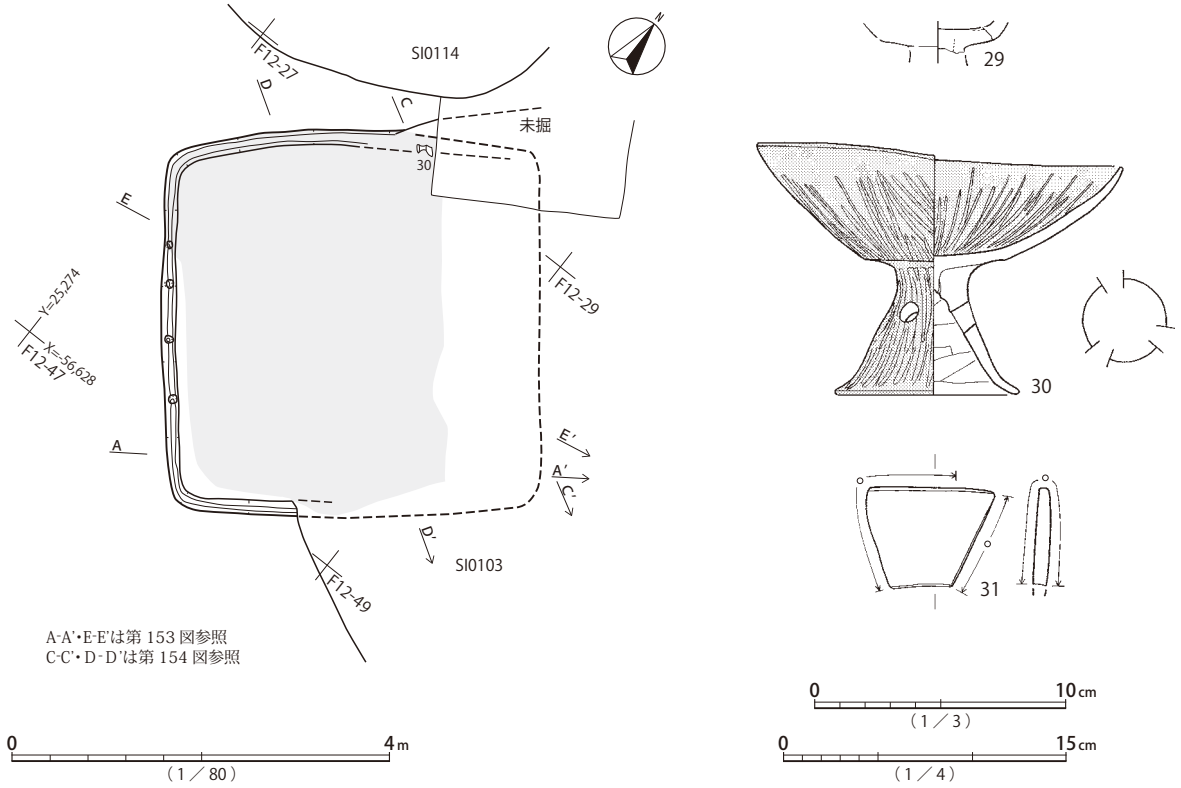


SI0113



第155図　SI0103遺物（２）、SI0113遺物（１）

SI0113



第156図　SI0113遺構(3)、SI0113遺物(2)

いる点に、弥生時代終末期、中台式への傾斜が認められる。無文壺8・9も中台式と考えられる。なお、無文壺8は報告書Ⅱにおいて遺構外遺物とされた資料（Fig.534－3）と同一品であり、今回、帰属遺構が判明したものである。

SI0113床面には、主柱穴と炉が検出されていない。床面はSI0103覆土内に形成された部分が多く、あまり固結していない。遺存部には床面周溝が巡り、南西側には小穴が伴う。

覆土は、炭化物混じりの焼土層が、ほぼ床面全体に検出されている。焼却処分などの人為的な廃絶過程によると推察される。

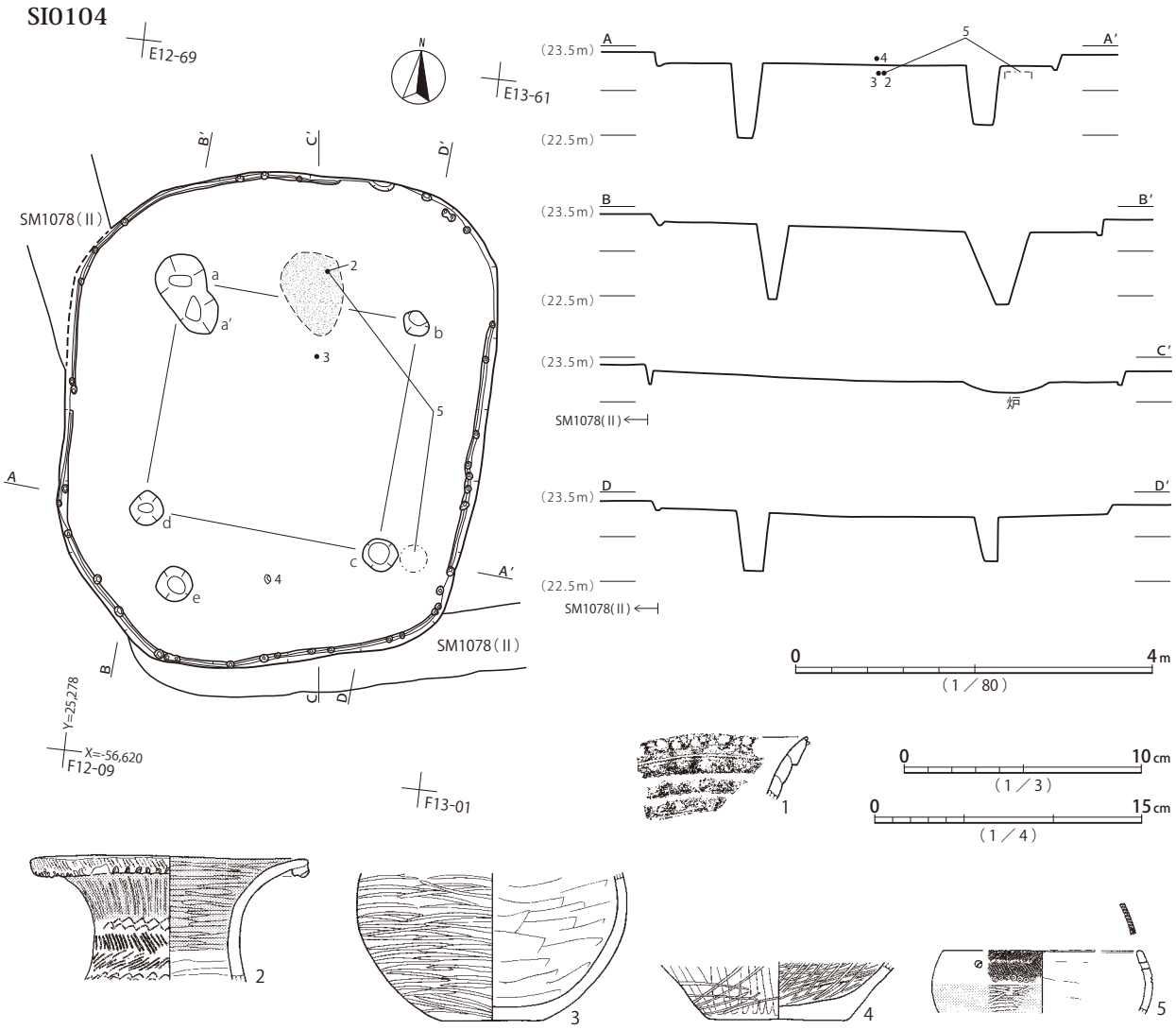
遺物は、ほぼ完形の高杯30が床面で検出されている。弥生時代終末期後半、中台2式から古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。他に、土器片転用砥石31が出土している。

焼土層の存在と限定的な遺物出土状況からは、廃絶時における焼却処分などの意図的な背景が推定できるが、主柱穴と炉が伴わない構造を勘案すると、建物自体に生活痕跡が希薄になるような性質があったとも考えられる。儀礼的な用途を持つ建物が、意図的に焼却処分された可能性もある。

切り合い関係に基づくと、SI0123→SI0103→SI0113の構築順が復元される。出土遺物の様相から、SI0123が弥生時代後期後半、SI0103が弥生時代終末期前半、SI0113が弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半に位置づけられる。

SI0104（第 157 図、図版 41・151・204）

5.6 × 4.8m、深さ 10cm 前後の不整隅円方形竪穴建物跡である。床面には達していないが、SM1078西側周溝が掘り込まれている。竪穴南辺が外側に広がり、平面形は五角形状を呈する。主



第157図　SI0104遺構・遺物

柱穴a～d、ハシゴ穴と見られるeが検出されている。aは建て替えによるものか、a'が竪穴中心側に接してあり、eと組み合って建て替え後の主柱穴を構成する可能性がある。その場合、竪穴平面形の歪みも、建て替えに伴う形状とも考えられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は北東部を除いてほぼ全周し、疎らに小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、特に焼土・炭化物の検出記録もないため、漸移的な堆積状況を辿ったと思われる。

遺物は、炉内から壺2、鉢5、床面近くから壺3・4等、弥生土器片が出土している。自縄結節文区画の壺2は、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

本遺構は、建て替えの行われた可能性があるものの、竪穴を共有することから前後時期とも弥生時代後期後半の所産と想定する。

SI0105・SI0112（第158・159図、図版41・42・43・152・204・205・206・331）

3.9？×3.2m、深さ20cm前後の不整隅円長方形竪穴建物跡SI0112と、7.2×6.5m、深さ40cm

前後の隅円方形竪穴建物跡SI0105である。SI0112の北西側の大半がSI0105東角周辺と重複する。

SI0112床面には明確な主柱穴等は検出されていない。竪穴推定範囲内のピットiについては、SI0105床面から65cmと深く、SI0112に伴うハシゴ穴である可能性は低いと思われる。床面は、ソフトローム層に形成され、比較的堅緻である。床面周溝は東側のみ確認され、壁際には小穴が疎らに伴う。

覆土は、土層断面記録はないものの、10cm前後の厚さの焼土層が検出されたとの所見が残る。東角床面には粘土集中部が認められ、その上に弥生土器片が出土している（対応遺物不明）。

遺物は、古式土師器の直口壺1・2、弥生土器壺3が図示できる程度である。床面から出土した、弥生時代後期後半、山田橋式の壺3がSI0112の帰属時期を示すと思われる。

SI0105床面には、主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。柱間ラインより内側、竪穴中心からやや北の位置に炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は全周し、小穴が伴う。小穴列は竪穴壁面に掘方が及んでおり、建物の構造に関係すると見られる。

覆土は、焼土と炭化材が検出されたとの記述が残るが、土層断面図には所見が無く、概ね床面に散在したものと思われる。

遺物は、貯蔵穴付近の床面近くから小型甕7、床面近くから小型鉢17、高杯19～23等が出土している。なお、貯蔵穴底面に土器片の残る遺構写真があり、遺物注記の共通する7・9・21・22はこれらと対応する可能性がある（図版42）。いずれも弥生時代終末期後半、中台2式から、古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。竪穴南東部において土製勾玉の出土を示す調査記録があるものの、対応遺物が確認できず詳細は不明である。

切り合い関係から、SI0112→SI0105の順に構築されたと考えられる。出土遺物の様相から、SI0112が弥生時代後期後半、SI0105が弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半に位置づけられる。なお、SI0105はSI0068と平面プランと規模が近似しており、存続時期が並行もしくは連続する可能性が推定できる。

SI0108・SI0110・SI0115（第160・161・162図、図版42・43・152・205・206・303・331）

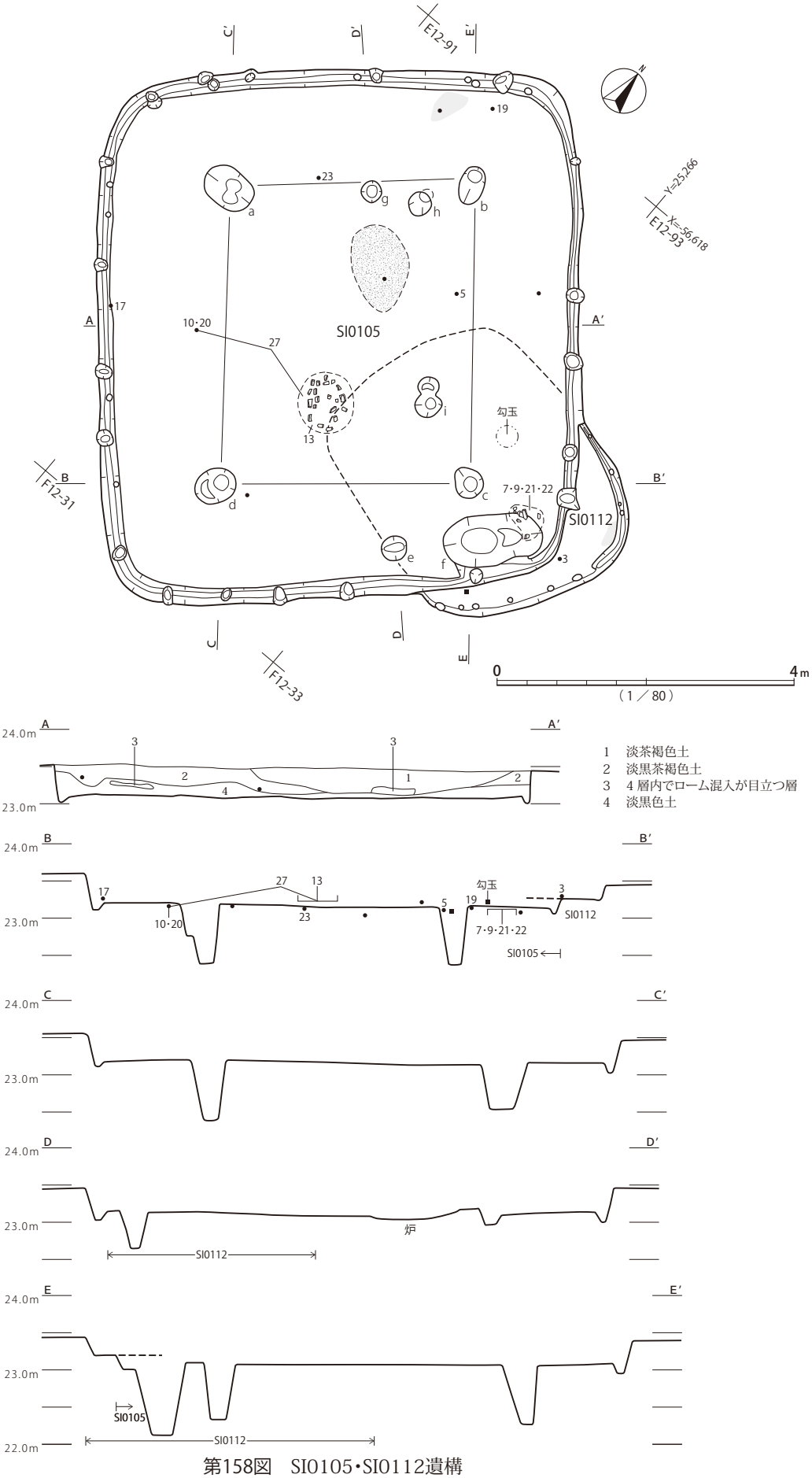
重複する3棟の竪穴建物跡である。4.6×4.4m、深さ50cm前後の方楕円形竪穴建物跡SI0110、5.4×4.7m、深さ5cm前後の隅円方形竪穴建物跡SI0108、5.6×5.0m、深さ15cmの隅円方形竪穴建物跡SI0115である。SM1078周溝東部が3棟の覆土に掘り込まれている。

SI0110床面には、主柱穴等は検出されていない。中心やや北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、全体的に堅緻で、特に炉周辺と中央部が硬化する。床面周溝は無く、西辺に疎らに小穴が認められる。

覆土は、土層断面図ではSI0115との切り合い関係が示されていないが、平面図においてはSI0115床面がSI0110覆土内に及んでいるため、復元的に切り合い関係を示している。SM1078周溝覆土も同様で、本来は1・2層を周溝覆土が横切っているはずだが、分層されていない。SI0110は、SI0111とSI0115と重複し、SI0115には確実に切り込まれている。

遺物は、床面から、甕1・2・3、壺5、鉢6、小型鉢7が出土している。概ね弥生時代後期後半、山

SI0105・0112

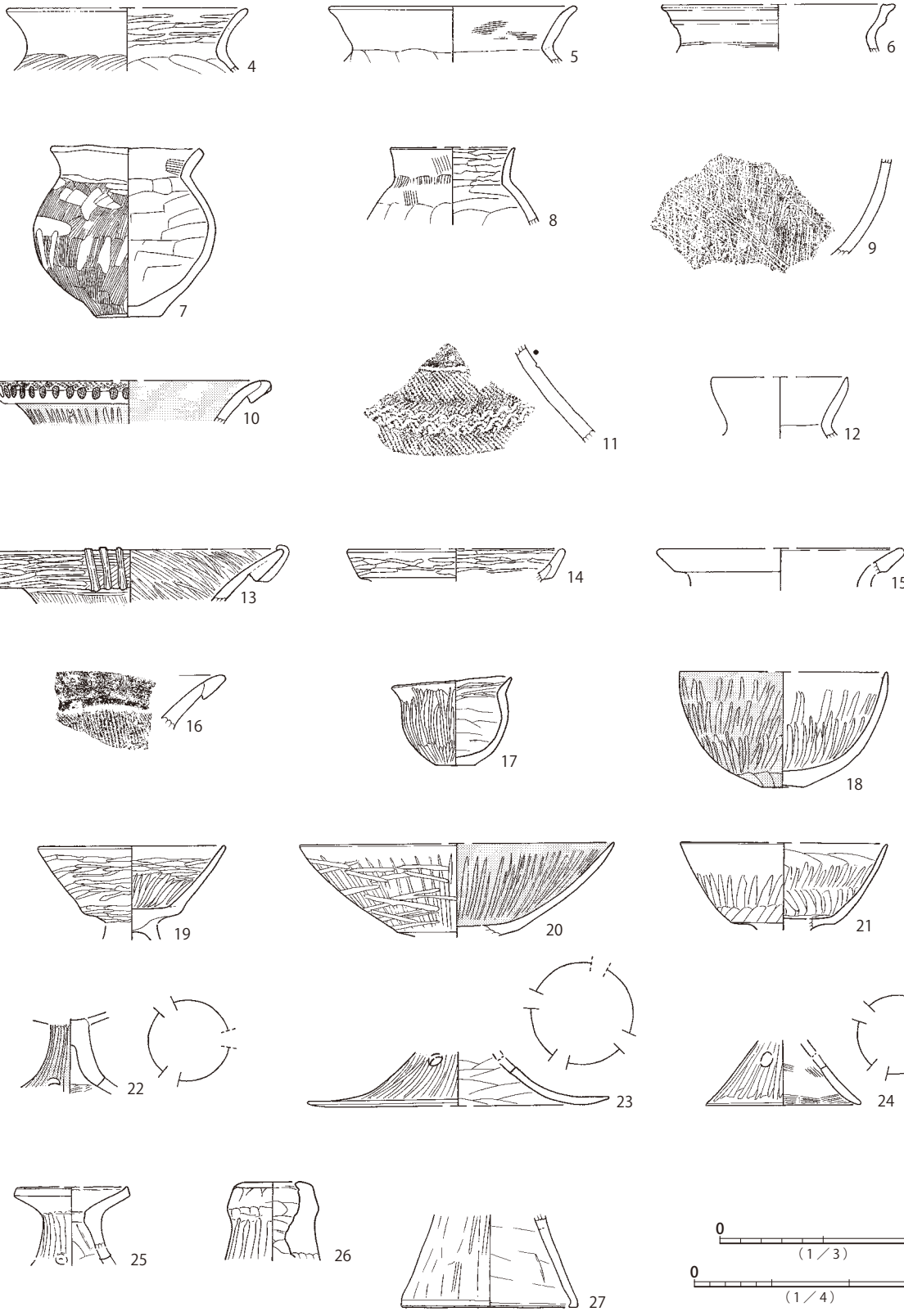


第158図　SI0105・SI0112遺構

SI0112

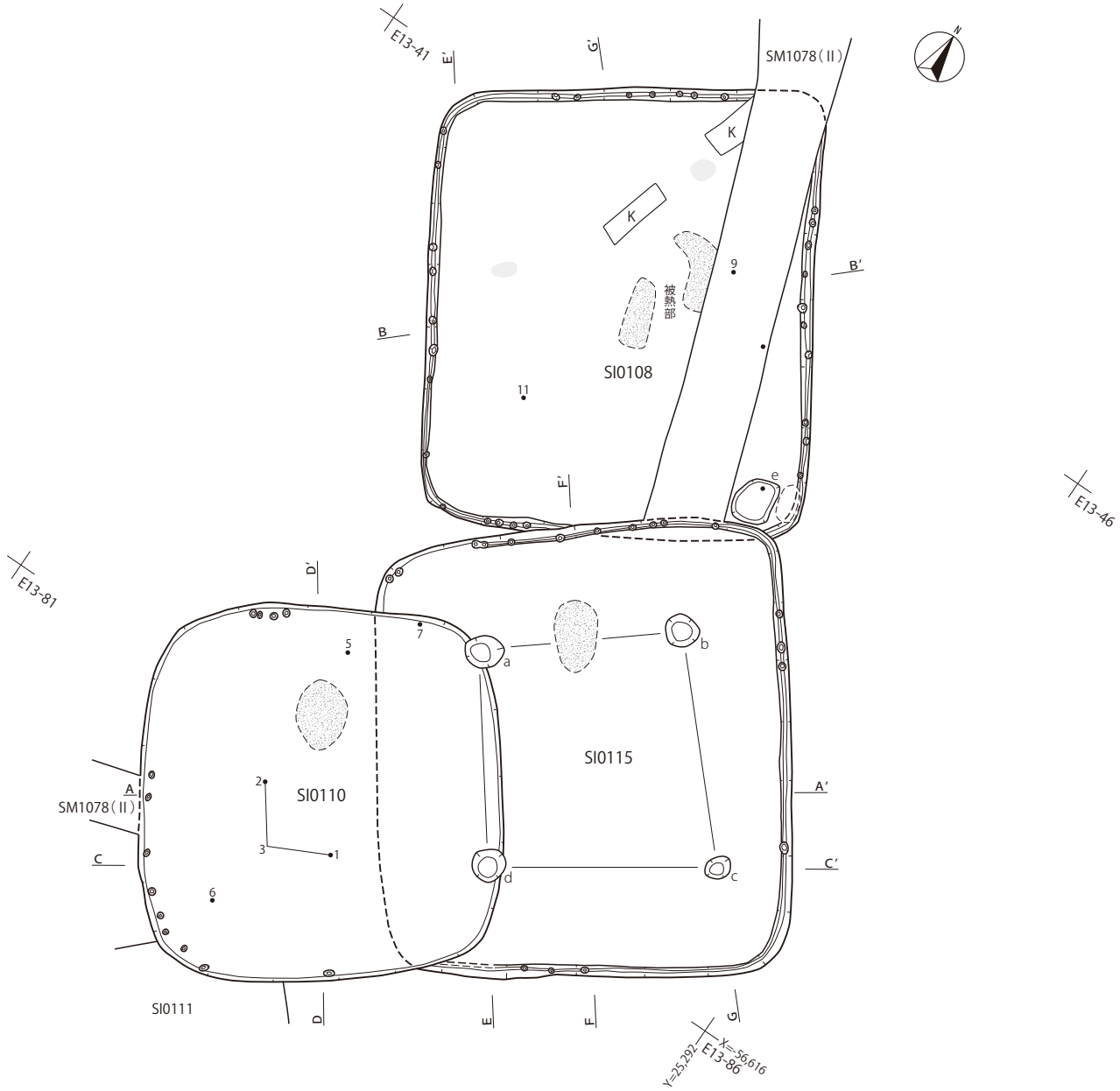


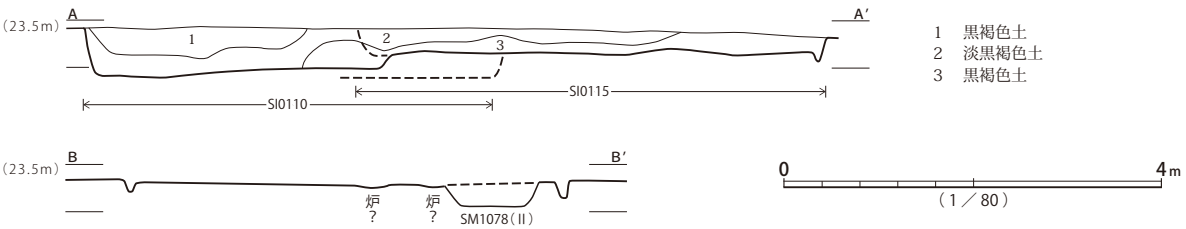
SI0105



第159図　SI0105・SI0112遺物

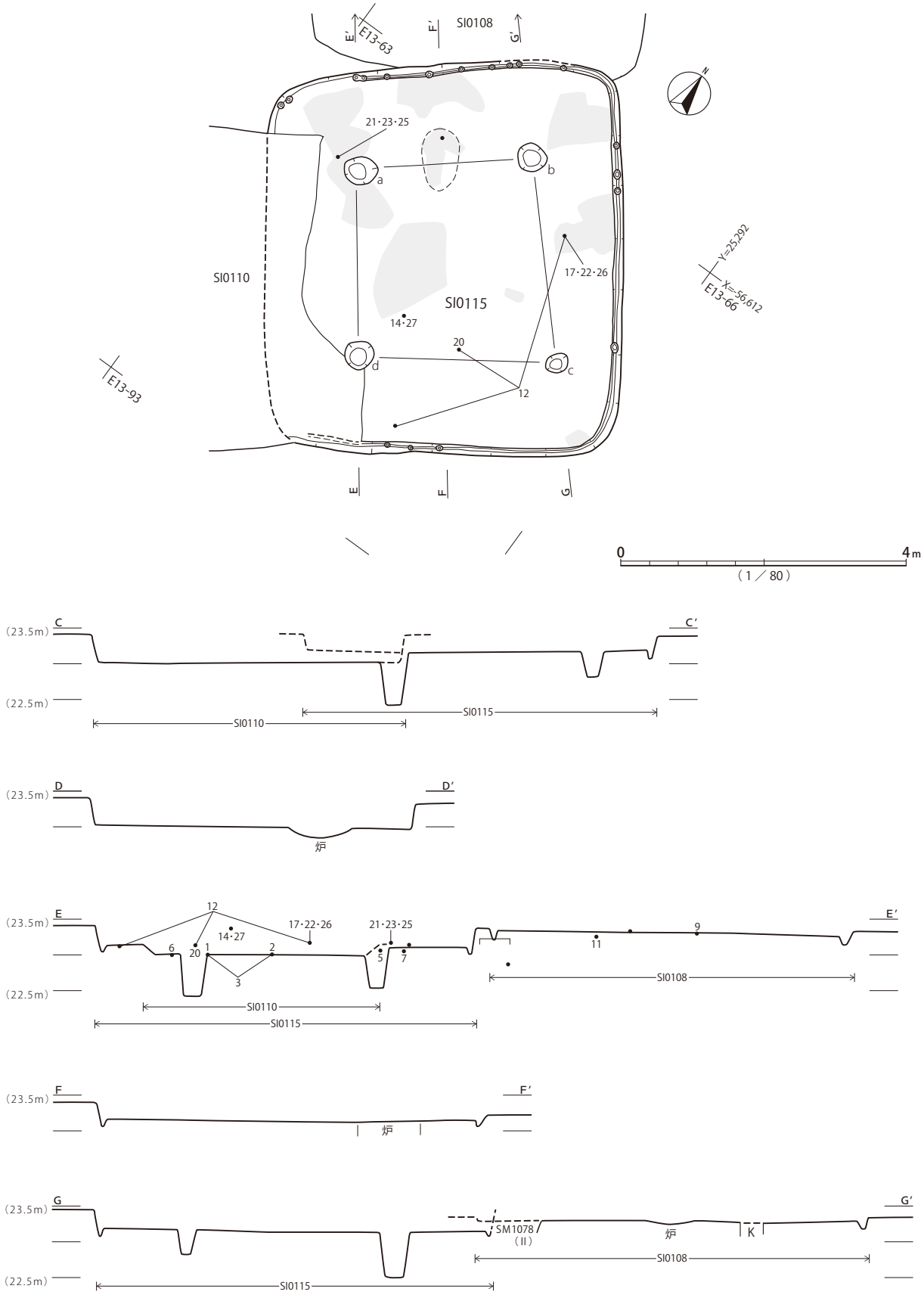
SI0108・0110・0115





第160図　SI0108・SI0110・SI0115遺構(1)

SI0108・0110・0115



第161図　SI0108・SI0110・SI0115遺構(2)

田橋２式から弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。小型鉢７は一見すると、古墳時代前期の小型丸底系土器に似るが、頸部屈曲に凸帯が伴う点から、弥生時代終末期の外来系土器と思われる。その他、軽石状流紋岩製砥石（石皿片）８が出土している。

SI0108床面には、主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるｅのみが検出されている。中央北寄りの床面に火を受けて赤変した範囲があるものの、明確な炉は検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、中央部が比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は全周し、小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土が部分的に検出されている。床面被熱部の存在を勘案すると、廃絶時に火を受けた可能性が高い。

遺物は、古式土師器の壺９・10、高杯11が出土している。弥生時代終末期、中台式から古墳時代前期前半、草刈式に位置づけられる。貯蔵穴内から土器片が検出されているが、対応する遺物は不明である（図版42）。

SI0115の床面には、主柱穴ａ～ｄが検出されている。ｃの位置がやや東に偏っている。中心軸とａ・ｂ間ラインの交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、SI0110覆土には厚さ15cm前後の貼床層が及ぶ。床面周溝は西角を除く遺存部を全周し、疎らに小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録には注記されていないが、焼土層が広範囲に散在して検出されている。

遺物は、古式土師器の甕12～15、受口状口縁甕16、壺19～23、高杯24～26、装飾器台27が出土している。弥生時代終末期、中台式を主体とする。甕12は素口縁ながら頸部屈曲は緩く、高杯脚部25は円形透孔が４方向に穿たれており、これらの点はやや古相を示すと言える。三角形透孔の伴う装飾器台27は、本遺跡において中台式期の類例が存在することから、古墳時代前期に位置づける根拠とはならない。

切り合い関係に基づくと、SI0110→SI0115の構築順は確実である。SI0115とSI0108については、重複部分がSM1078周溝に破壊されており、また、SI0108出土遺物も乏しいことから確定は難しいものの、３棟の位置関係から、SI0110→SI0108→SI0115の順に変遷したと推定する。出土遺物の様相から、SI0110が弥生時代終末期前半以前、SI0115が弥生時代終末期後半、SI0108がその中間に位置づけられる。SI0110が重複するSI0111については、SI0111が後に構築されたと推定する。

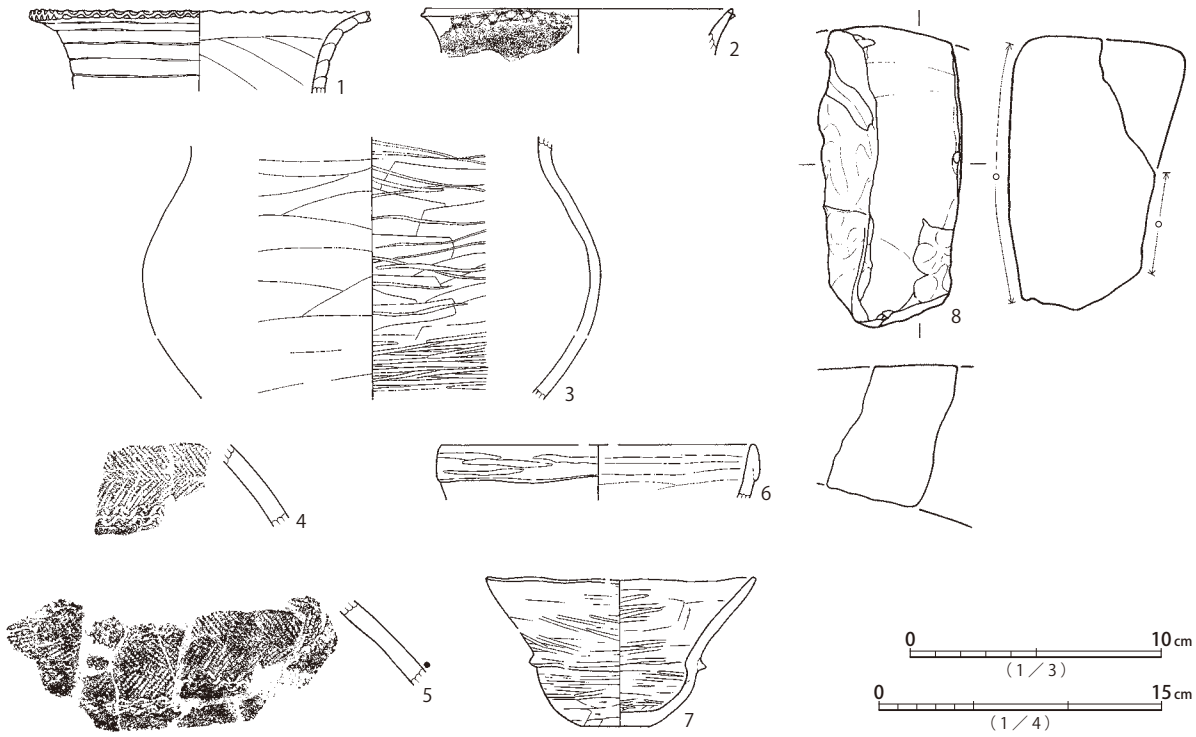
SI0111（第163図、図版42・152・206・331）

4.1×4.1m、深さ15cm前後の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴ａ・ｂ・ｄが検出されている。ｃの推定位置は床面まで及ぶ撹乱内に当たり、破壊された可能性もあるが、他柱穴の深度から推定すると、撹乱は床面下3cmと記録されており、検出できなかったと考えられる。中心やや北東寄り、柱間範囲内に楕円形の炉が設けられる。SI0110の南角と重複し、本来はSI0111床面がSI0110覆土内に形成されたと推定される。

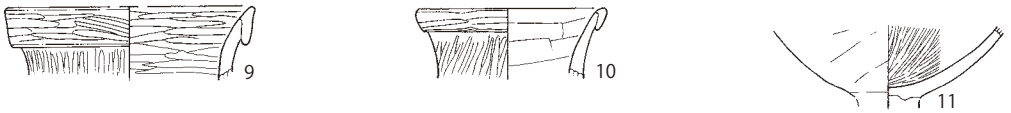
覆土は、土層断面記録が無く詳細不明だが、５～10cmの厚さで焼土層が検出されている。廃絶時に火を受けたと見られる。

遺物は、床面上を中心に、古式土師器の甕１～３、壺６、甕（壺？）７、高杯10、炉器台11等が出土している。甕１はハケ調整のくの字状口縁甕で、古墳時代前期に通有の形式に近い。炉器台11は中空であり、烏帽子形で中実の土製品タイプとは別系統と思われる。いずれも、概ね弥生時代終末

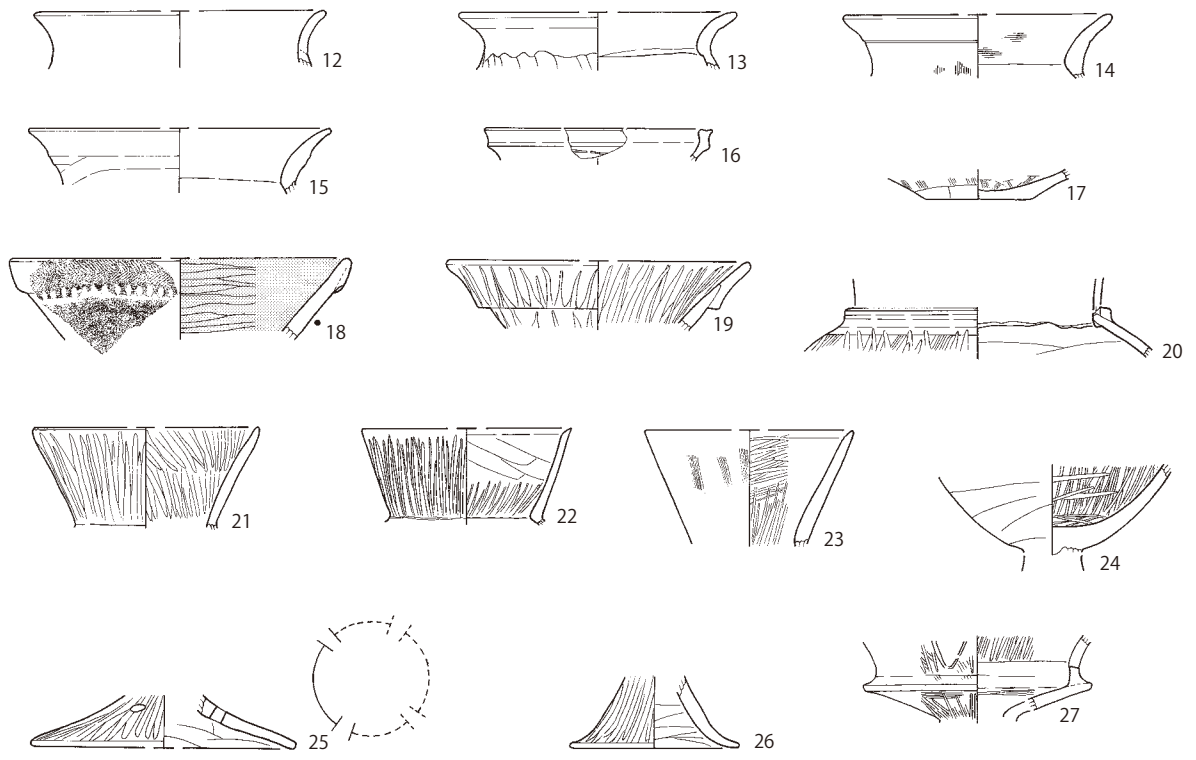
SI0110



SI0108

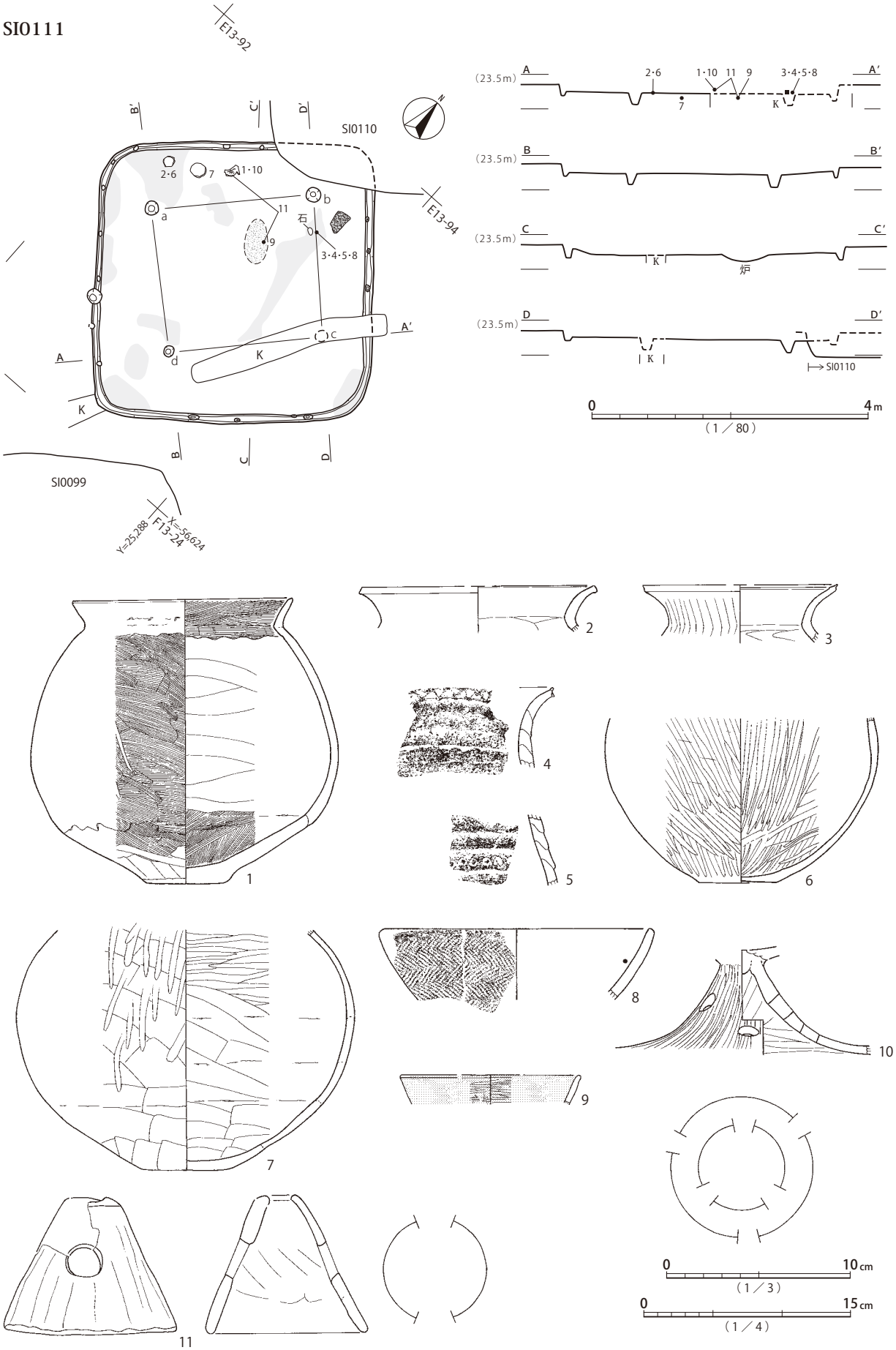


SI0115



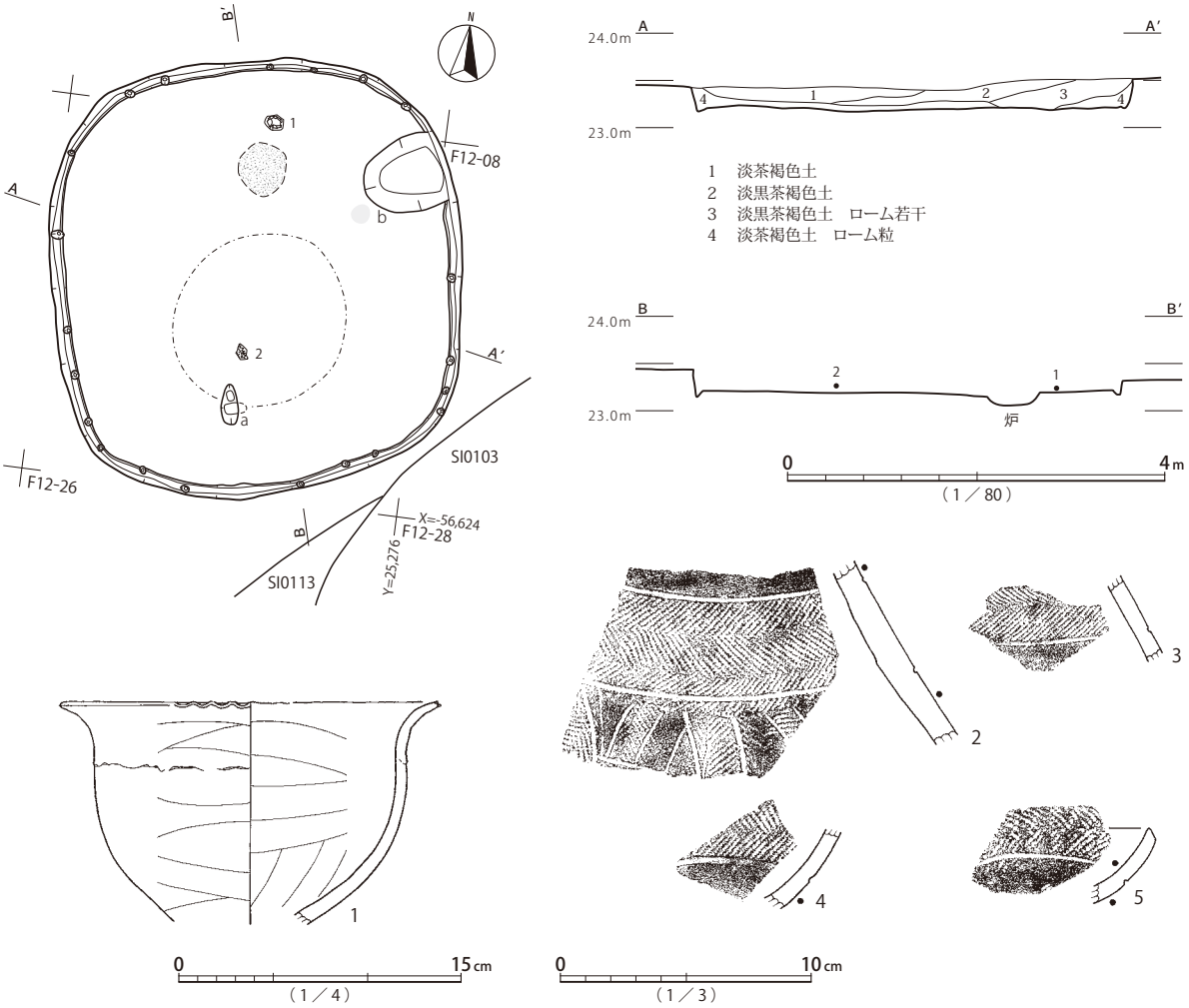
第162図　SI0108・SI0110・SI0115遺物

SI0111



第163図　SI0111遺構・遺物

SI0114



第164図　SI0114遺構・遺物

期後半、中台２式から古墳時代前期前半、草刈１式に位置づけられる。

本遺構は、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半に位置づけられる。

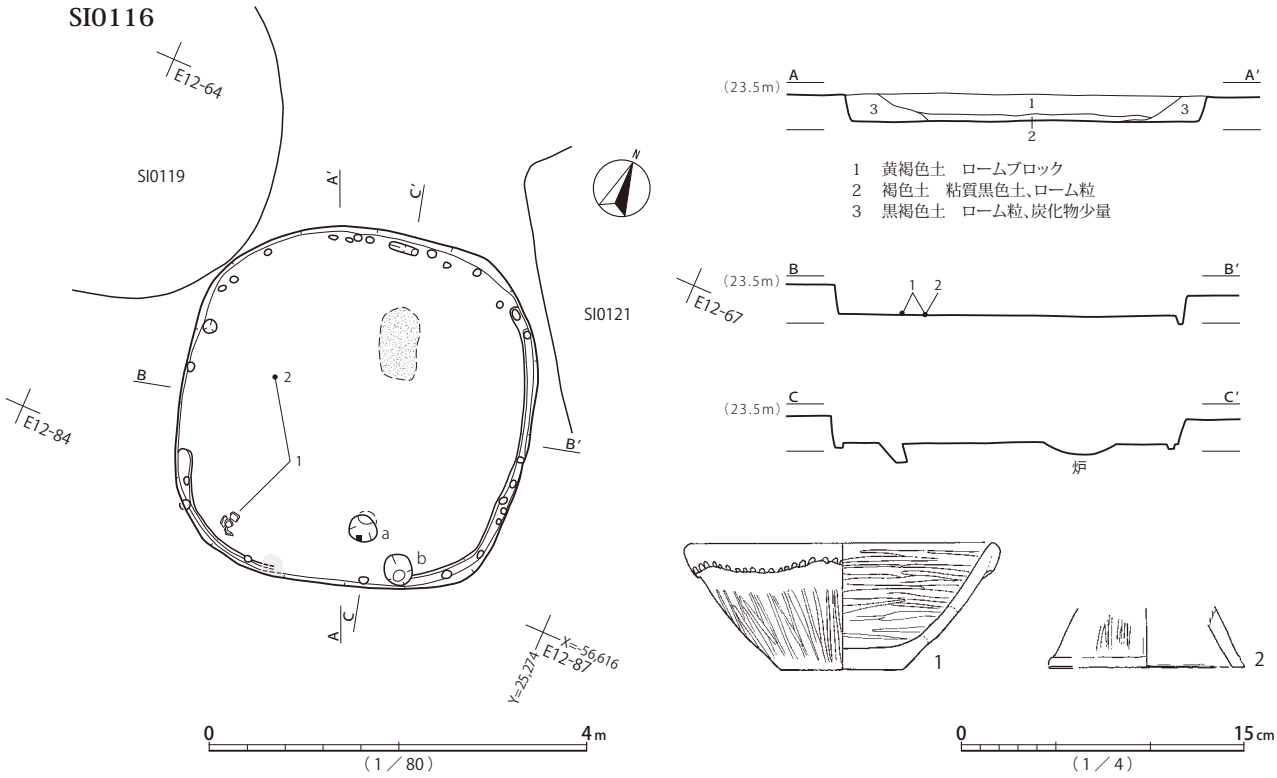
SI0114（第 164 図、図版 43・152・206）

4.6 × 4.4m、深さ 20cm 前後の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴と見られるａと貯蔵穴状のｂが検出されている。ａについては、傾斜する構造を持ち、粘土が密封状態で貼り付けられていた旨の所見があり、通有のハシゴ穴とは異なる形態だった可能性がある。ハシゴ等の出入口施設の支持構造を穴に据え、粘土で固定した痕跡とも思われる。中心からやや北寄りの位置に不整円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央部が踏み固められている。床面周溝は全周し、小穴が伴う。

覆土は、土層断面に漸移的な堆積状況が記録されている。一部に焼土が検出されている。

遺物は、炉の脇の床面上から弥生土器の甕１、下層から壺２が出土している。いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原２式に位置づけられる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。



第165図　SI0116遺構・遺物

SI0116（第 165 図、図版 44・152・206）

3.8 × 3.7m、深さ 30cm 前後の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴 a と貯蔵穴 b が検出されている。a は断面形が竪穴外方へ傾く。床面はソフトローム層に形成され、中央部が比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は東側のみ連続し、小穴を伴い断続的に認められる。

覆土は、初期堆積の３層は炭化物が少量含まれる程度で特に人為的な様相は読み取れないが、１層はロームブロックを含む黄褐色土層であり、埋め戻しが示唆される。南壁際に焼土少量が伴う。

遺物は、床面から鉢１、高杯２が出土している。鉢１は無文化しながらも口縁肥厚部と段部押捺装飾を維持していることから、弥生時代終末期、中台式でも古相を示す。裾部外周を肥厚する在地的な高杯脚部の２と合わせ、中台１式に位置づけられる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

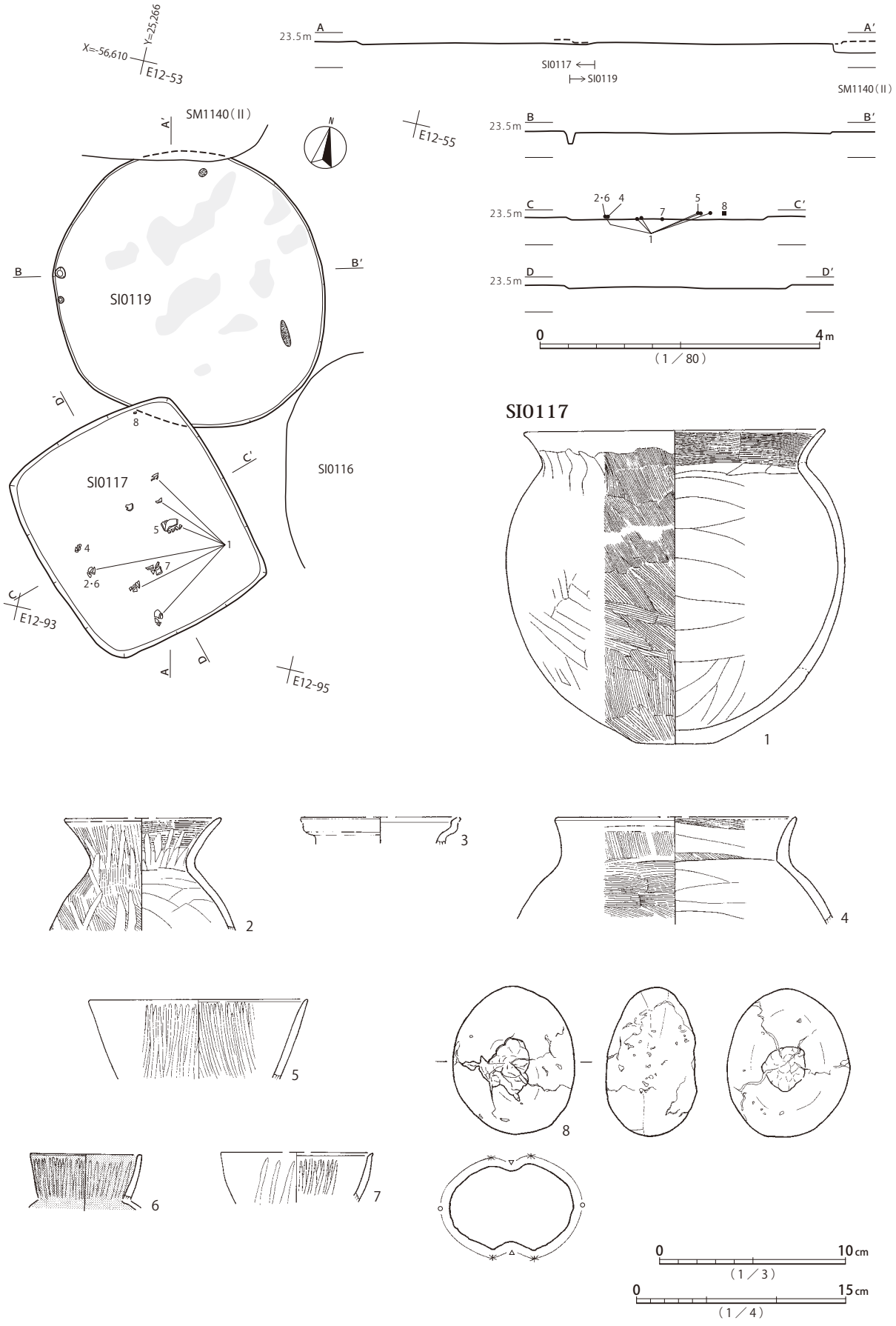
SI0117・SI0119（第 166 図、図版 44・153・206・304）

4.1 × 3.8m、深さ 5cm 程度の円形竪穴建物跡 SI0119 と、3.2 × 2.9m、深さ 5cm 程度の方形竪穴建物跡 SI0117 である。

SI0119 は主柱穴が認められず、炉も検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、軟弱である。床面周溝は認められない。

覆土は、炭化材を伴う焼土層が２～ 5cm の厚さで検出されている。遺物は皆無であり、不時の火災ではなく意図的な焼却が推定できる。SI0117 と南側の一部で切り合うが、複合部の土層の詳細は不明である。

SI0117・0119



第166図　SI0117・SI0119遺構、SI0117遺物

SI0117は主柱穴が認められず、炉も検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、平坦だが軟弱である。床面周溝は認められない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土等も検出された記録がないため、漸移的な堆積状況だったと思われる。

遺物は床面近くから、半完形のハケ調整くの字状口縁甕1、甕4、直口壺2・5・6、小型椀（高杯）7が出土したほか、玄武岩製礫石器8が検出されている。甕1・4は素縁くの字状口縁を呈するが、頸部屈曲は明瞭ながら鋭くはなく、過渡的な形態を示す。壺類も文様が施されず、素口縁である点は新しい様相と言えるが、内弯気味の口縁を持つ点は古相を示している。概ね、弥生時代終末期、中台式から、古墳時代前期前半、草刈1式の範疇にあると思われる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半、草刈1式期に位置づけられる。切り合うSI0119は平面形が円形であり、弥生時代後期に属すると見られ、先行する可能性が高い。SI0119→SI0117という順に構築されたと考えられる。

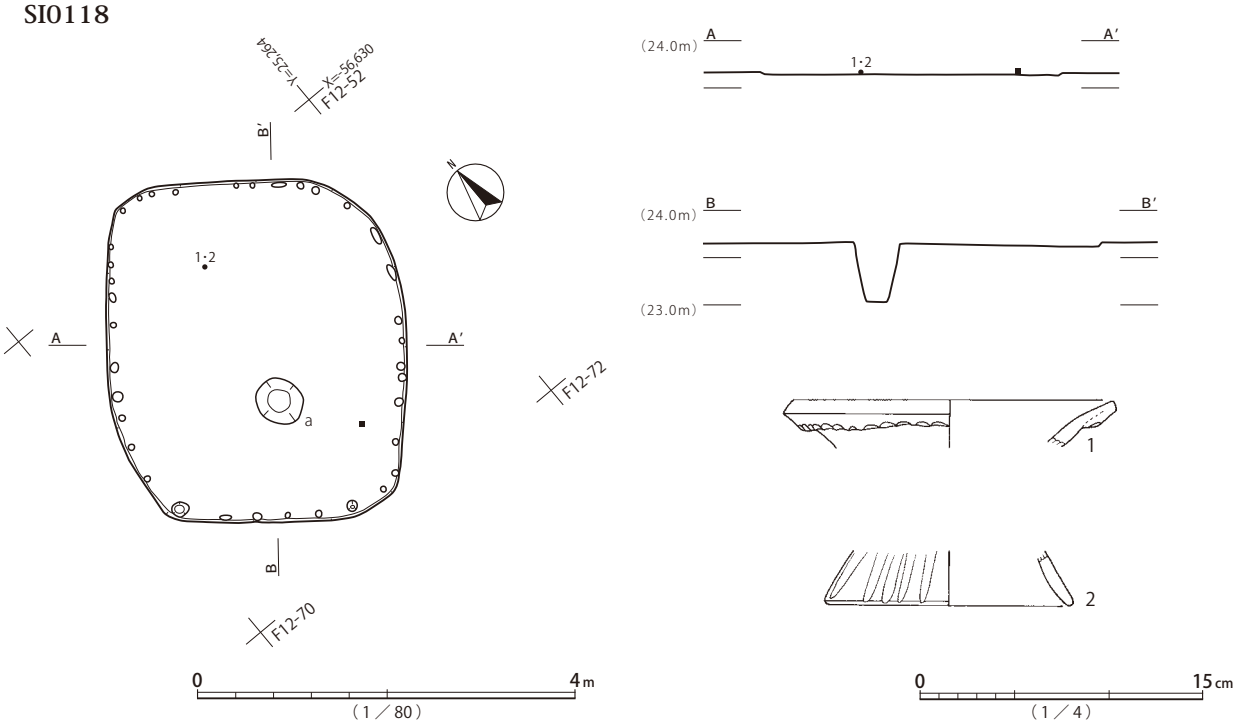
SI0118（第167図、図版44・206・331）

3.6×3.2m、深さ5cm以下の隅円方形竪穴建物跡である。中心やや南寄りにピットaが検出されるほか、主柱穴は認められない。炉は検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、中央部を除き堅緻ではない。床面周溝は伴わず、小穴のみが比較的密に巡る。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、漸移的な堆積状況と考えられる。

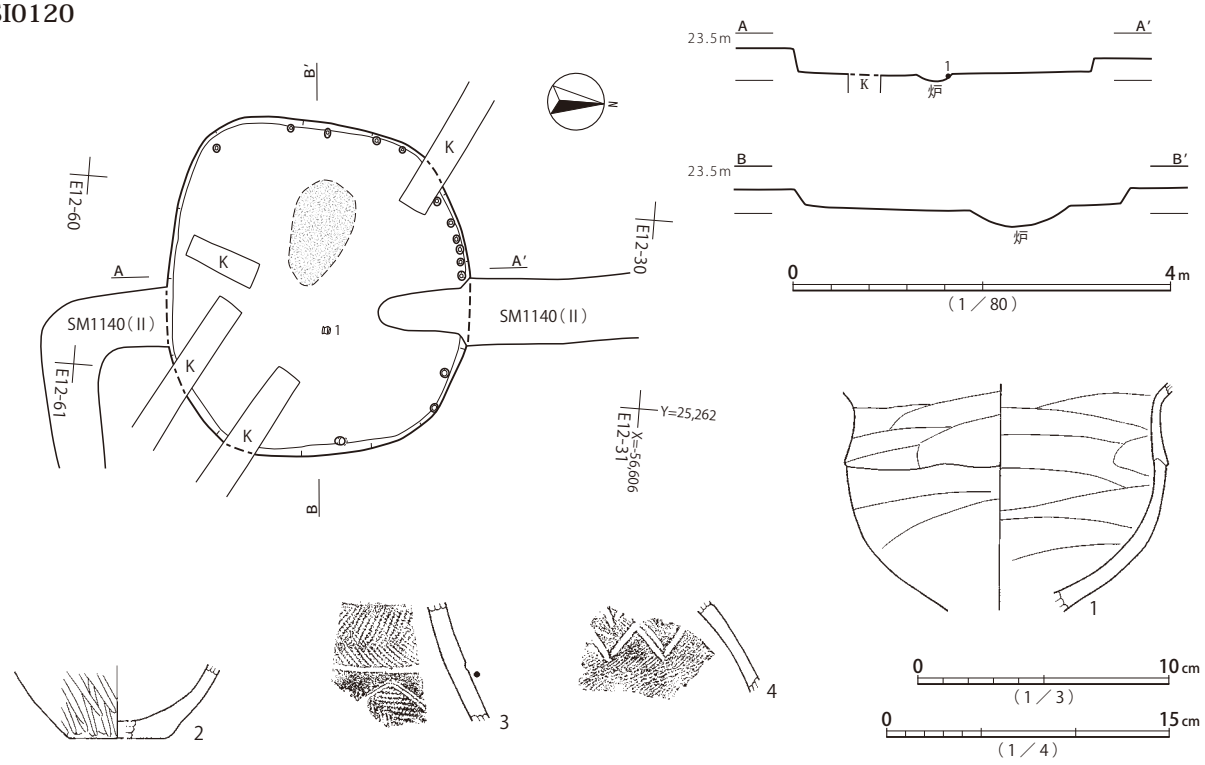
遺物は、弥生時代終末期の中台式と見られる、古式土師器の壺1、高杯もしくは炉器台の脚部2が床面近くから出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。



第167図　SI0118遺構・遺物

SI0120



第168図　SI0120遺構・遺物

SI0120（第 168 図、図版 44・206）

3.6 × 3.2m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められない。中心軸上、西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、炉周辺を中心に堅緻である。床面周溝は認められず、小穴が北西辺に伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。切り合うSM1140西側周溝に床面近くまで破壊され、耕作に伴う長方形の撹乱（イモ穴）が及んでいる。

遺物は、弥生土器が主体で、床面から甕1・2が出土したほか、覆土から壺3・4が検出されている。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期の所産と考えられる。

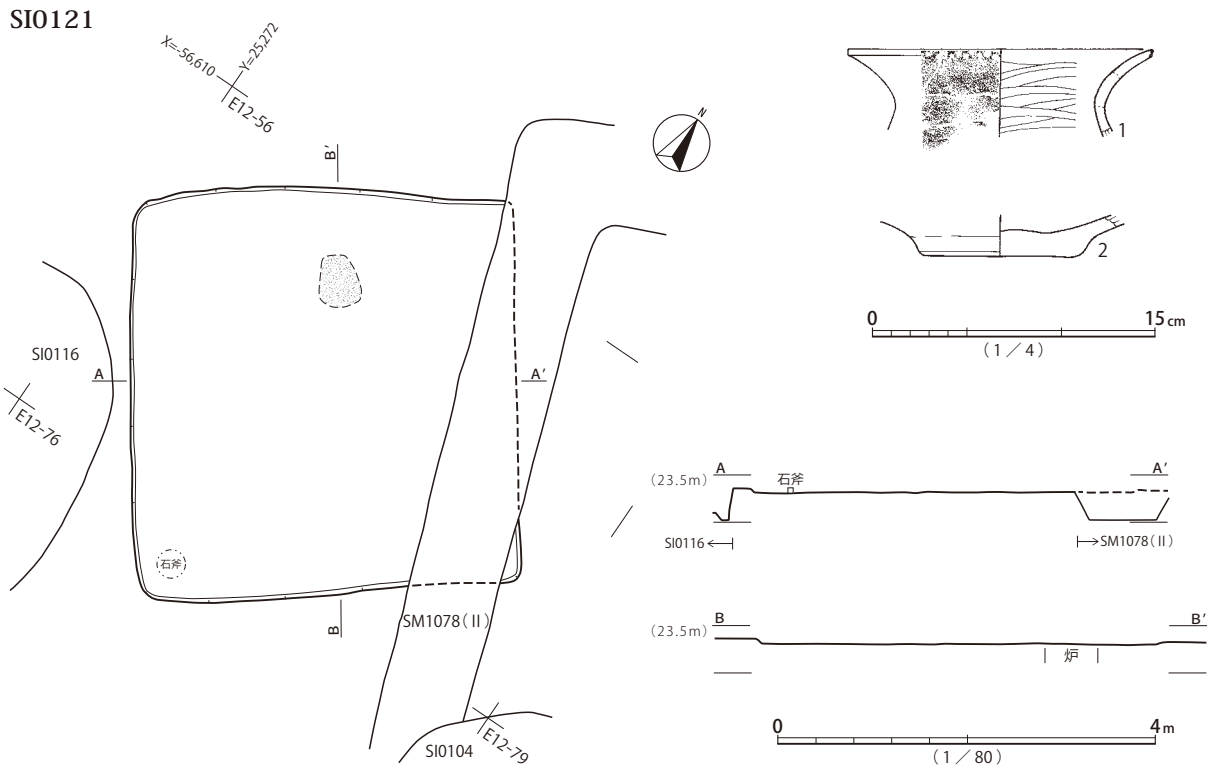
SI0121（第 169 図、図版 44・207）

4.4 × 4.1m、深さ 10cm以下の方形竪穴建物跡である。平面図記録が存在せず、写真等から形状を想定している。主柱穴は検出されていない。中心軸上、北西寄りに不整楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、あまり堅緻ではない。床面周溝は認められない。

竪穴が深く削平されており、覆土の詳細は不明である。SM1078西側周溝が東辺と重複し、覆土を撹乱している。

遺物は、弥生土器甕1・2が出土したほか、縄文時代遺物と見られる磨製石斧が南西角付近で検出されたとの所見が残るが、詳細不明である。甕1・2については、炉覆土中から「壺形土器」1個体程度の破片が出土したとの記録があり、これに相当する可能性がある。

本遺構は、出土遺物の様相から弥生時代終末期～古墳時代前期前半に帰属すると思われる。



第169図　SI0121遺構・遺物

SI0122（第 170・171 図、図版 44・45・153・207・331）

4.2 × 4.0m、深さ 20cm 前後の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、南辺両角付近で貯蔵穴と見られるa・bが検出されている。炉は中心から北寄りの位置に設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央付近がやや堅緻に踏み固められている。床面周溝は認められず、間隔を置いて小穴が巡る。北東角がSM1080周溝と重複し、床面下まで破壊されている。

覆土は、外周部に焼土層が5 ～ 10cm堆積し、廃絶時に火を受けている。大型壺の上半部が北西部床面から出土するなど、土器が多く検出されており、意図的な廃絶過程が推定できる。

遺物は、床面近くから弥生時代終末期、中台式を主体とする土器が出土している。甕1・4は無文化・素口縁化に新しい様相が見られるものの、頸部屈曲の緩さに弥生後期以来の特徴が残存する。大型の壺9は肩部に自縄結節文区画の単節縄文横帯が2帯施され、弥生後期後半、山田橋式と類似する。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。

SI0124（第 172 図、図版 45）

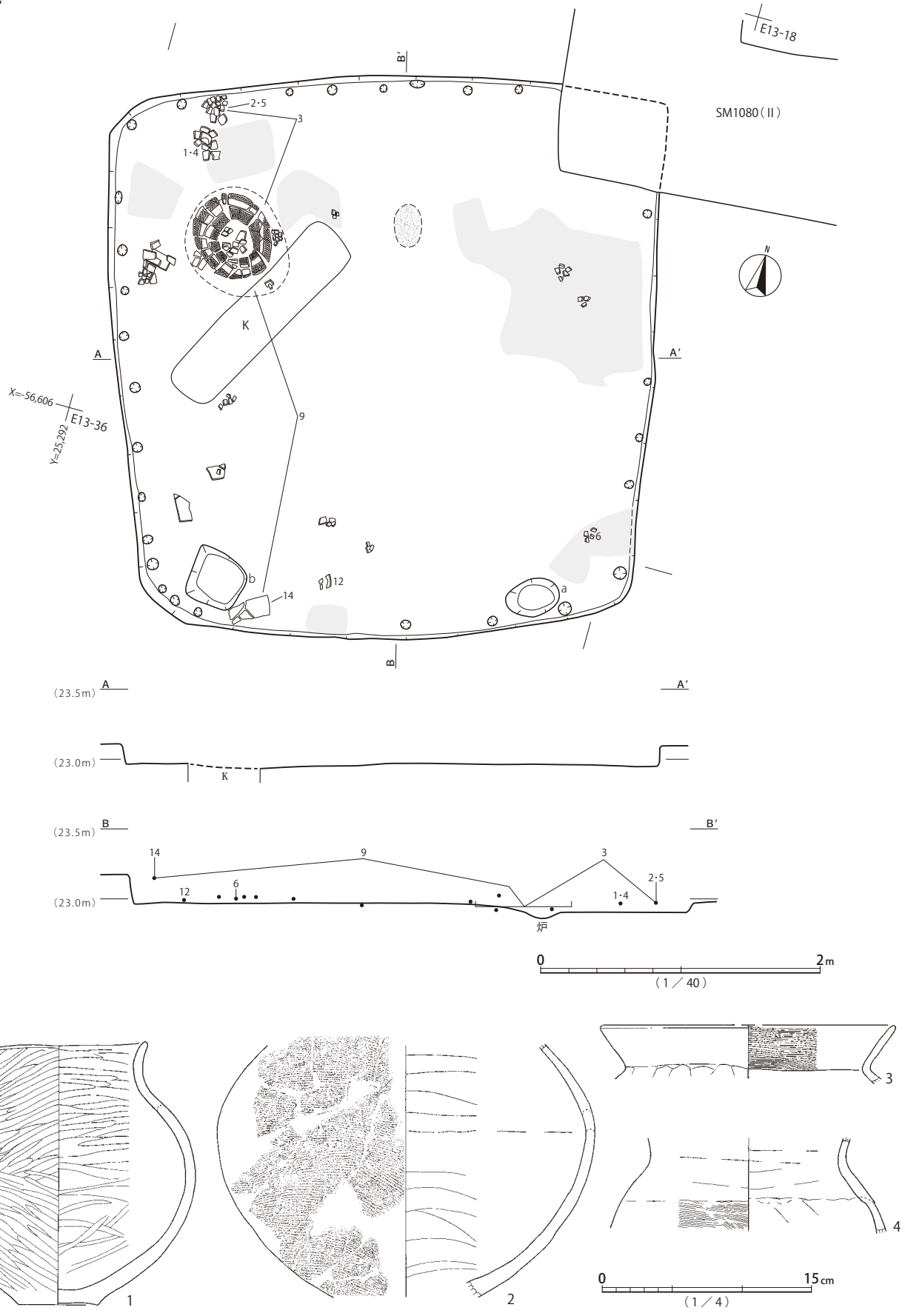
4.2 × 3.6m、深さ 10cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴の可能性のあるa・bが対角線上に検出されている。炉は認められない。床面はソフトローム層に形成され、あまり堅緻ではない。床面周溝は認められない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。検出が困難だったとの所見があり、漸移的な色調を呈していたと見られる。

遺物は皆無で、帰属時期を示す資料は得られていない。

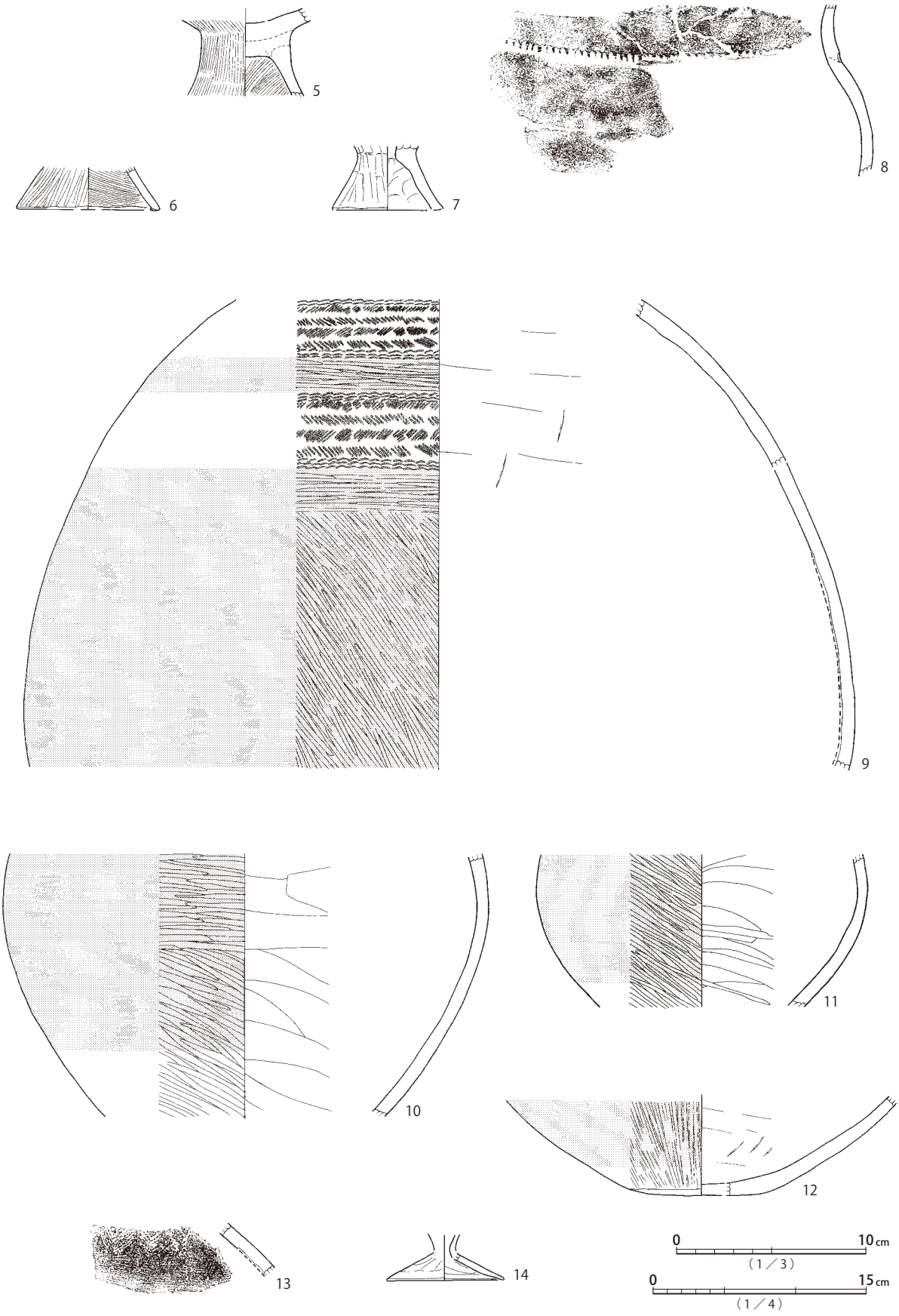
本遺構は、平面形から、弥生時代終末期から古墳時代前期の所産の可能性がある。

SI0122



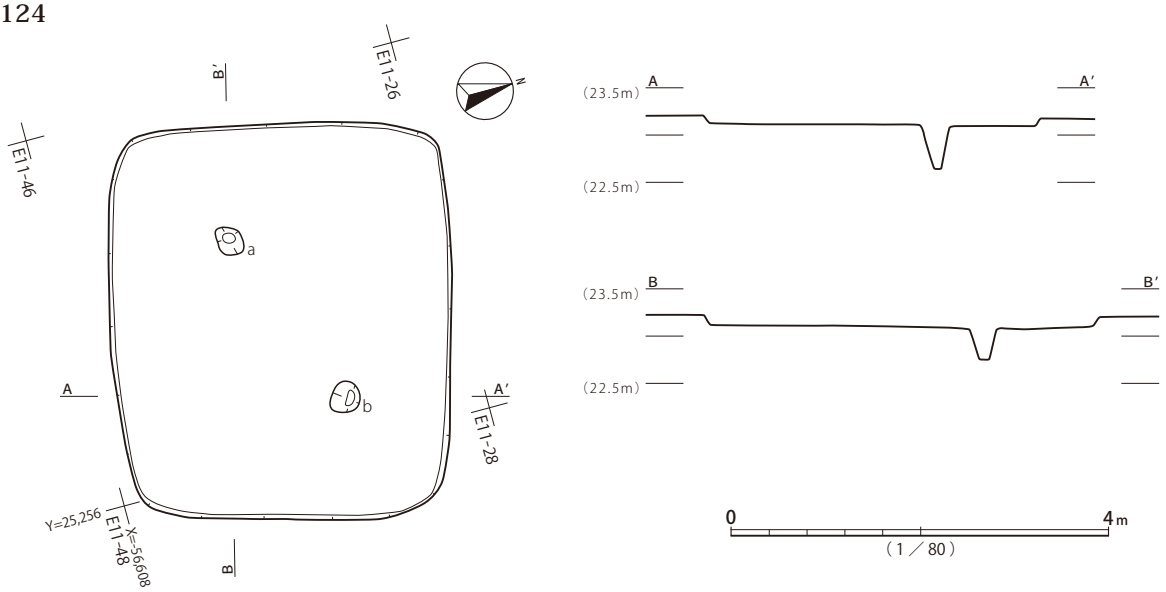
第170図　SI0122遺構、SI0122遺物(1)

SI0122



第171図　SI0122遺物（２）

SI0124



第172図　SI0124遺構

SI0125・SI0135（第 173・174・175 図、図版 45・48・153・154・187・207・210・304・326）

6.6？×5.8？m、深さ 40cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI0135と、6.3×6.4m、深さ 60cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0125である。SI0125東部とSI0135西部が半分程度ずつ重複する。

SI0135は、主柱穴の可能性のあるkと南東辺東寄りに貯蔵穴とも考えられるピットが検出されている。後者は、平面図に記録が無く、記述と写真から位置を推定復元したもので、深さは不明である。炉はSI0125との重複部に位置したと見られ、破壊された可能性が高い。床面はソフトローム層に形成され、中央部を中心に踏み固められ堅緻である。床面周溝が遺存部に認められ、小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。SI0125覆土上に床面が形成された痕跡は確認されておらず、SI0135が先行して構築、埋没した後に破壊された様相を示す。

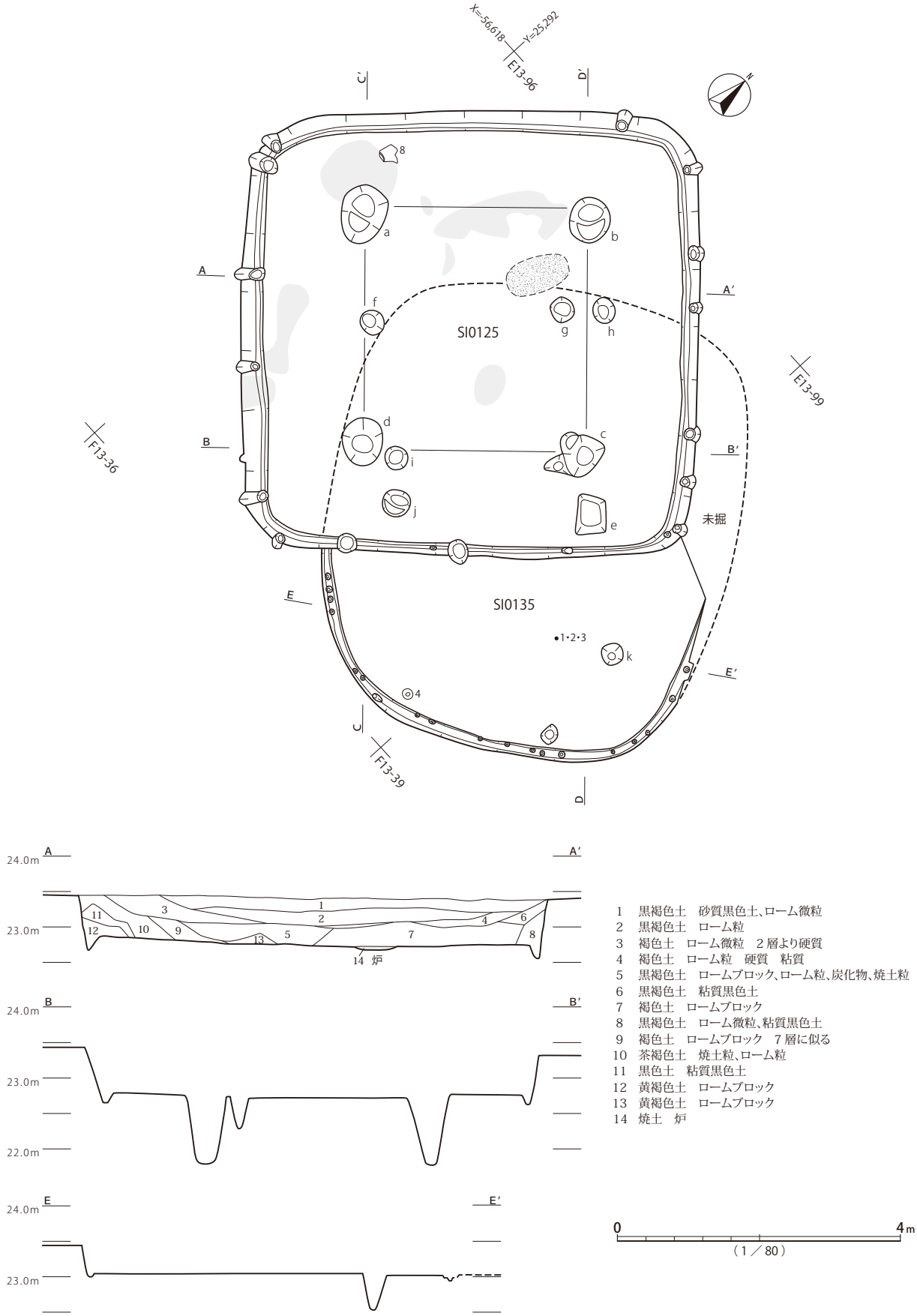
遺物は、弥生土器が出土しており、床面から装飾壺1、壺2、小型鉢3、南壁際の覆土中から鉢4が検出されている。壺の形状と文様から弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

本遺構は、出土遺物の様相から弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI0125は、主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。その他のピットf～jについては、主柱穴配置と対応するような穴も含まれるが、性格は不明である。i・jはハシゴ穴等、出入口施設に関係するものとも考えられる。中心から北に寄った位置に、楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、全面的に堅緻である。床面周溝は全周し、北西部を除いて竪穴壁面へ掘り込む形で小穴列が確認されている（図版45）。

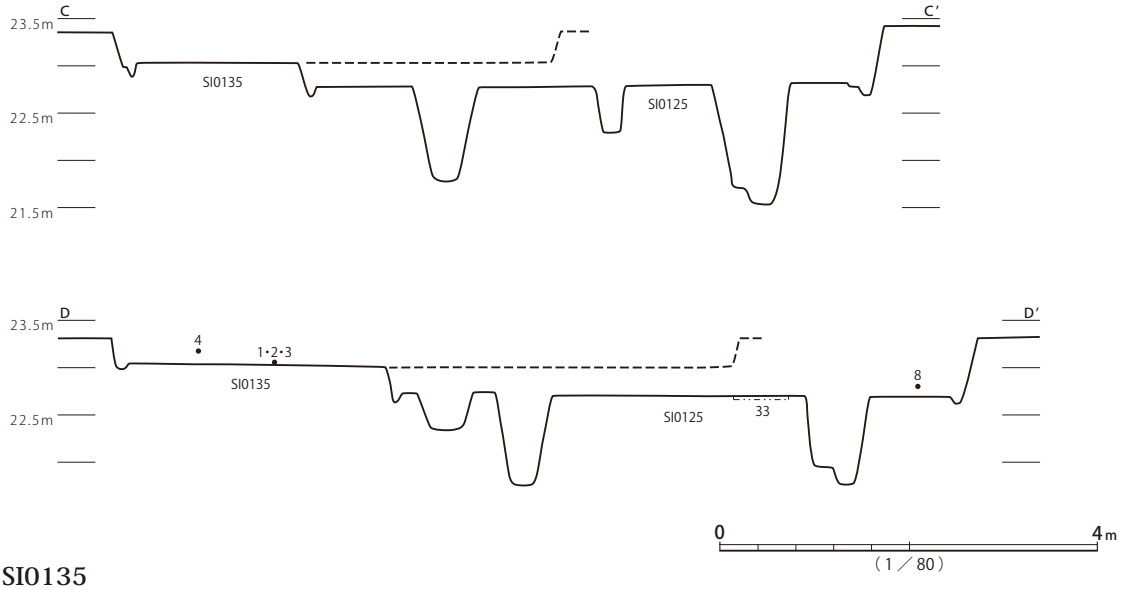
覆土は、焼土が炉の近くの床面に数cmの厚さ、西側および中央部が10～20cm前後の高さで部分的に検出されている。床面近くから下層にかけてはロームブロックを含む層が目立ち、埋め戻しなどによる急激な堆積状況が推定される。焼土層の存在を勘案すると、焼却処分と埋め戻しが廃絶プロセスで意図的に行われた可能性がある。

遺物は、比較的多くの土器が出土している。出土位置が明確な甕8は、ハケメ仕上げで底面に木葉圧痕があり、器形も含めて在地的伝統から離れた特徴を示す。柱穴b西側から4孔の高杯脚部が

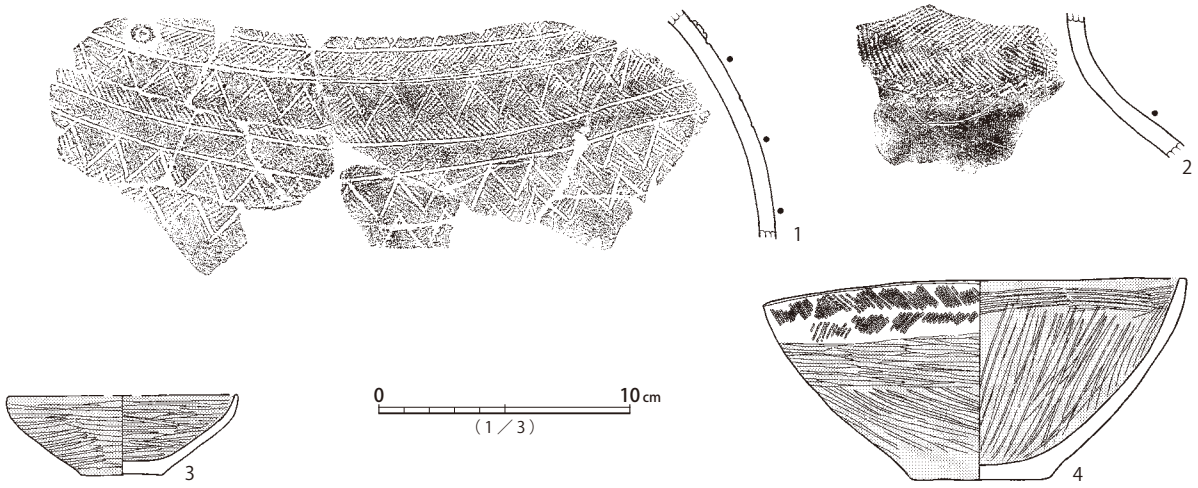


第173図　SI0125・SI0135遺構(1)

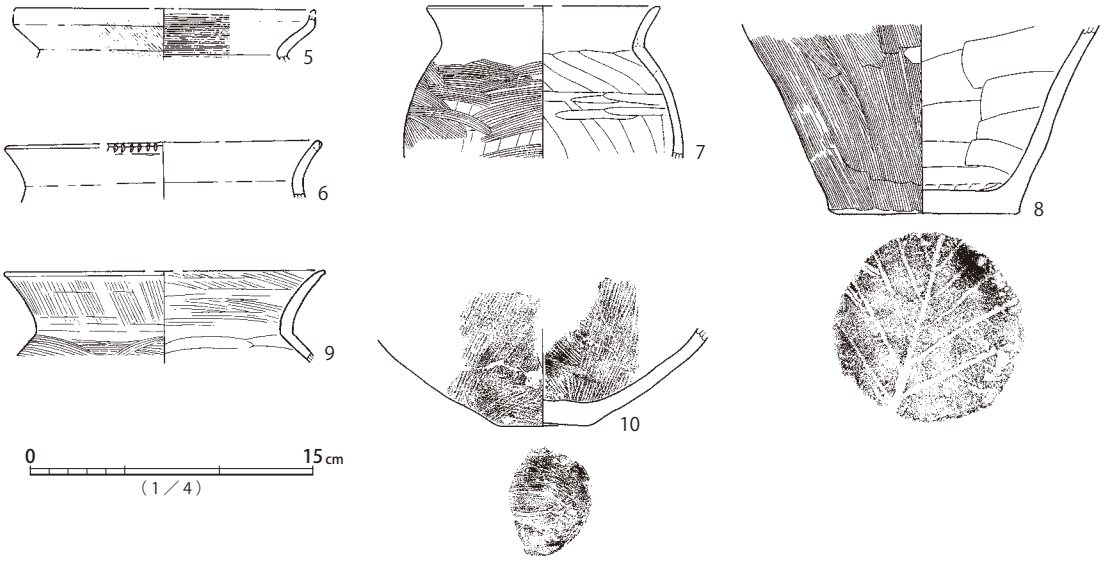
SI0125・0135



SI0135

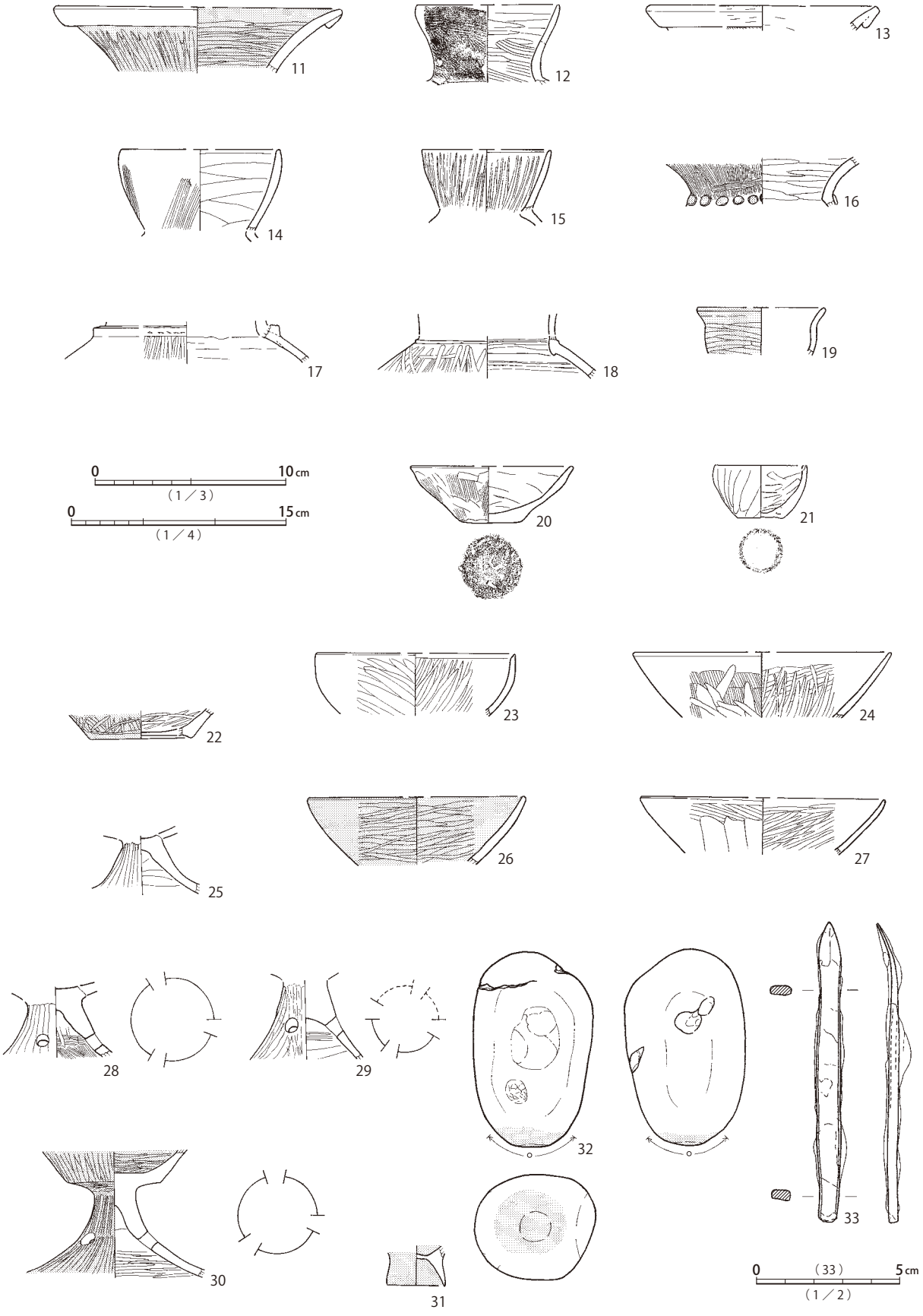


SI0125



第174図　SI0125・SI0135遺構(2)、SI0125遺物(1)、SI0135遺物

SI0125



第175図　SI0125遺物（２）

出土したとの記述があり、高杯29がこれに対応する可能性がある。受口状口縁甕5、刻目状刺突文口縁甕6、壺11 ～ 18、底部輪台技法の見られる小型鉢20等は過渡的様相を呈し、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

砂岩製礫石器32は長軸の一端に赤色顔料が付着しており、石杵として利用されている。赤色顔料（試料1）は、蛍光X線分析の結果、水銀朱と確認されている（第3章第2節）。特徴的な遺物として、炉中から鉄製ヤリガンナ33が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。弥生時代後期後半のSI0135→弥生時代終末期のSI0125という構築順が想定できる。

SI0126（第 176・177 図、図版 45・46・153・208・304・331）

5.7×5.9m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。d’は建て替えに伴うd代替の柱穴の可能性がある。中心の北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、柱穴間は堅緻に踏み固められている。床面周溝は全周し、部分的に小穴が伴う。炉の形状と位置、柱穴b-cライン上に配置される貯蔵穴等、平面プランがSI0125に近似する。

覆土は、西側に偏って焼土を含む層が認められる。SI0134覆土を本遺構が切って構築された堆積状況が確認されている。

遺物は、床面近くから土器が比較的多く出土している。ナデ仕上げの台付甕1、輪積み装飾甕6、透孔を持たない器台脚部18等、過渡的な様相が認められ、概ね弥生時代終末期、中台式を主体とする。ハケメ調整くの字状口縁甕5は口縁端部内面に細い隆帯状の高まりが作られており、庄内形・布留形甕の影響を推定できる。西壁に接し完形の壺が出土したものの盗難にあったとの記述が残る。砂岩製砥石20は両広面と1側縁が研磨に用いられている。

本遺構は、出土遺物の様相から弥生時代終末期、中台式期に位置づけられる。SI0134→SI0126という構築順が推定できる。

SI0128（第 178 図、図版 46）

4.7×4.2m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d（cは推定）、貯蔵穴eが検出されている。中心軸とa・b間ラインが交差する位置に不整楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝と小穴が断続的に巡る。

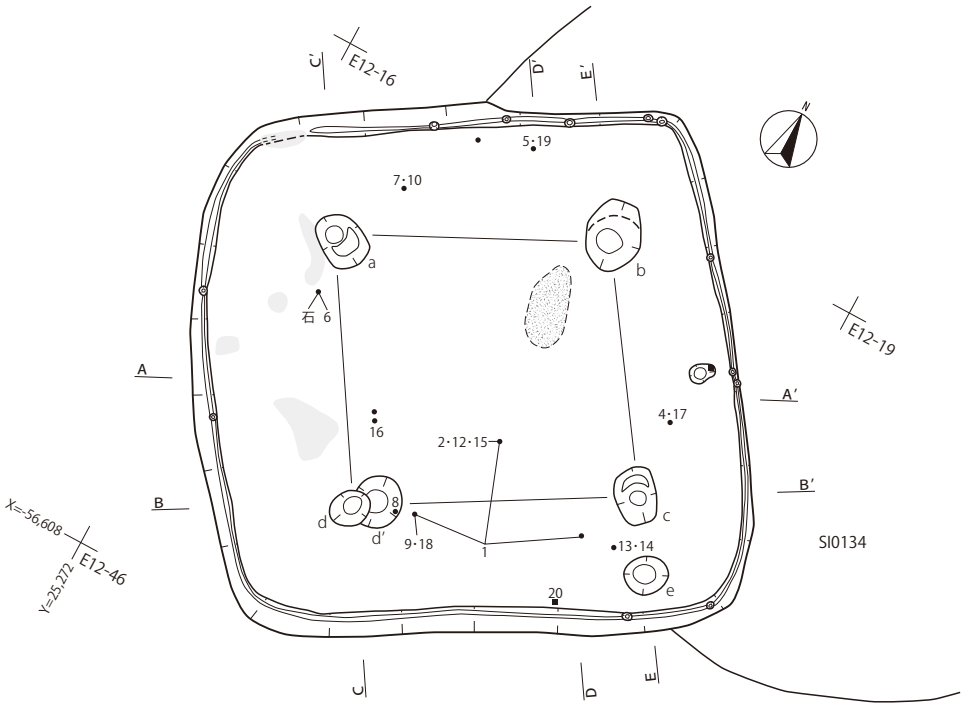
覆土は、褐色土を主体とし漸移的な堆積状況が示唆される。遺物は検出されていない。

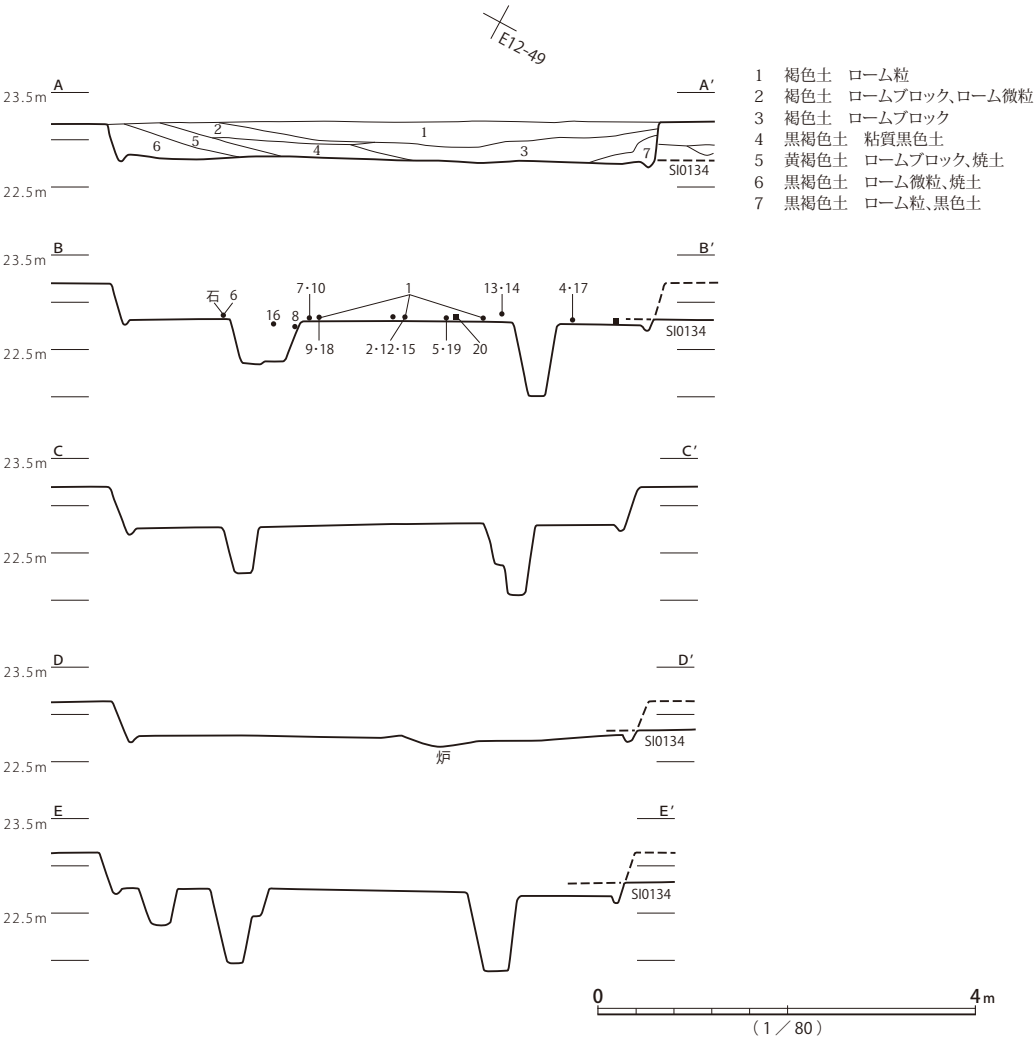
本遺構は、平面形から弥生時代後期の所産と考えられる。

SI0129（第 179 図、図版 46・153・208・332）

4.3×4.4m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を床面まで受けている。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるaのみが検出されている。中心軸上、北寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央付近は堅緻だが壁際は硬化していない。床面周溝は見られず、南辺を除き小穴が並ぶ。大半は壁を掘り込んで穿たれている。

SI0126

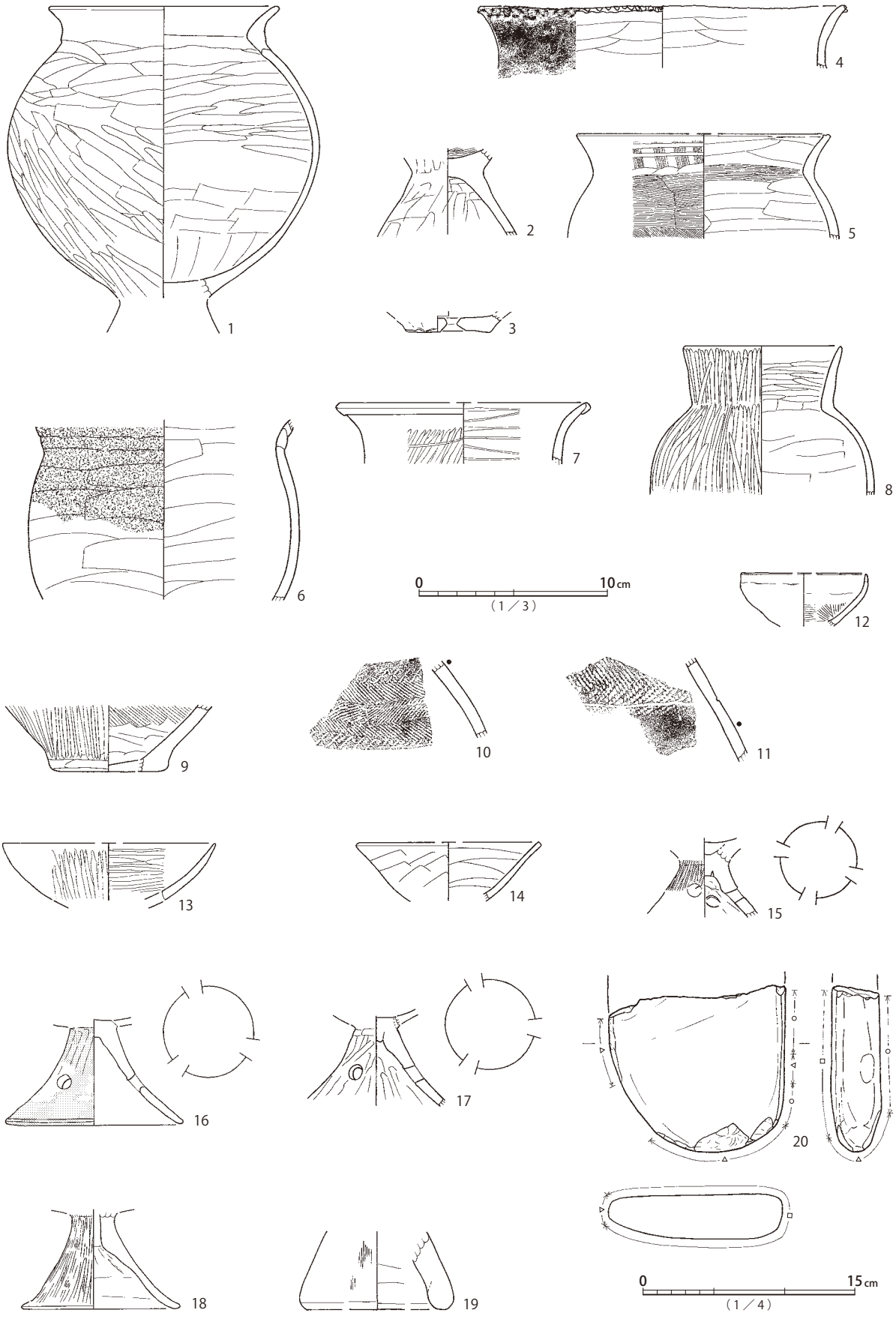




1　褐色土　ローム粒
2　褐色土　ロームブロック、ローム微粒
3　褐色土　ロームブロック
4　黒褐色土　粘質黒色土
5　黄褐色土　ロームブロック、焼土
6　黒褐色土　ローム微粒、焼土
7　黒褐色土　ローム粒、黒色土

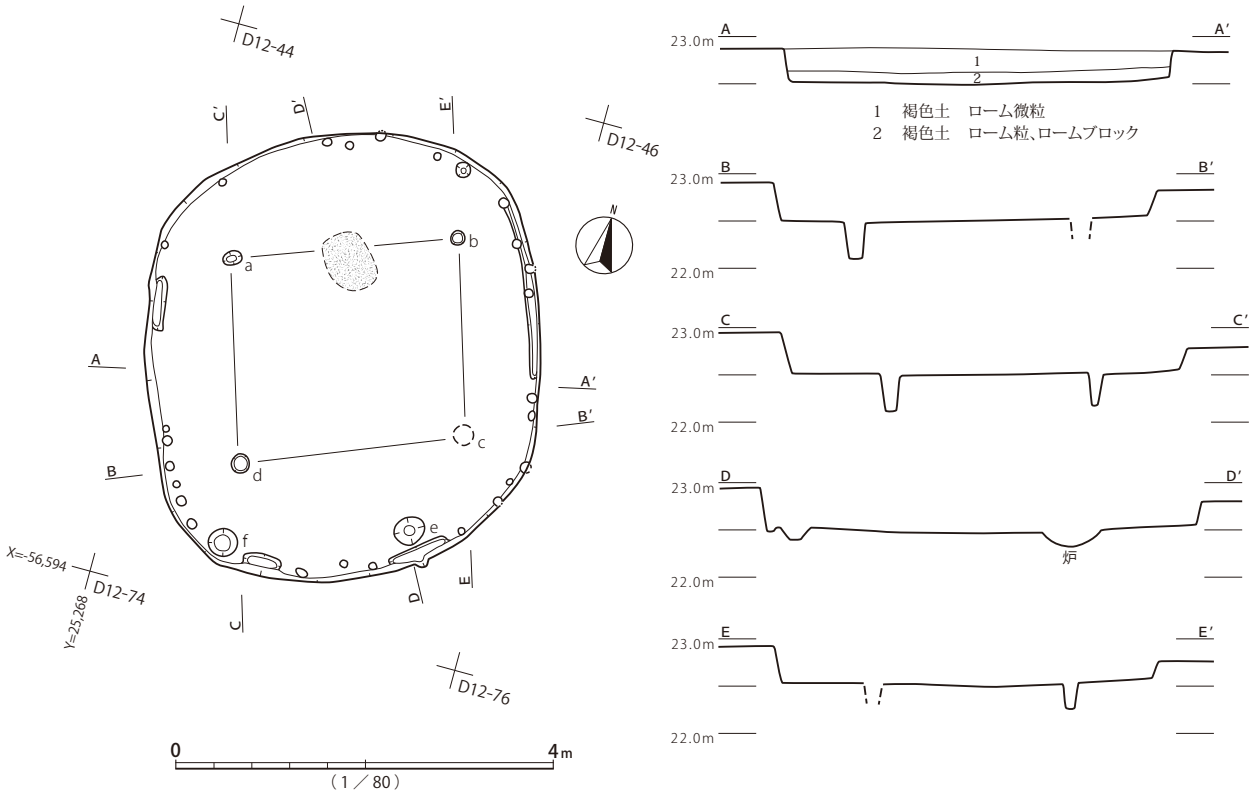
第176図　SI0126遺構

SI0126



第177図　SI0126遺物

SI0128



第178図　SI0128遺構

覆土は、下層に炭化物混じりの焼土層が検出されている。廃絶過程で火を受けた可能性が高い。

遺物は、床面等から弥生土器が出土している。床面上で検出された、甕1・3・4、大型壺9、壺10は、弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI0131（第 180 図、図版 46・47・209・304・332）

4.9？×4.0m、深さ25cm程度の不整隅円長方形竪穴建物跡である。南辺が中台2式期のSS2南側周溝と重複し、破壊を受けている。主柱穴は認められず、深さ35cmのaのみが検出されている。中心から北北西に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は西側に認められ、小穴が疎らに伴う。小穴の多くは、壁面を掘り込んで穿たれている。床面下層に炉穴が伴う。

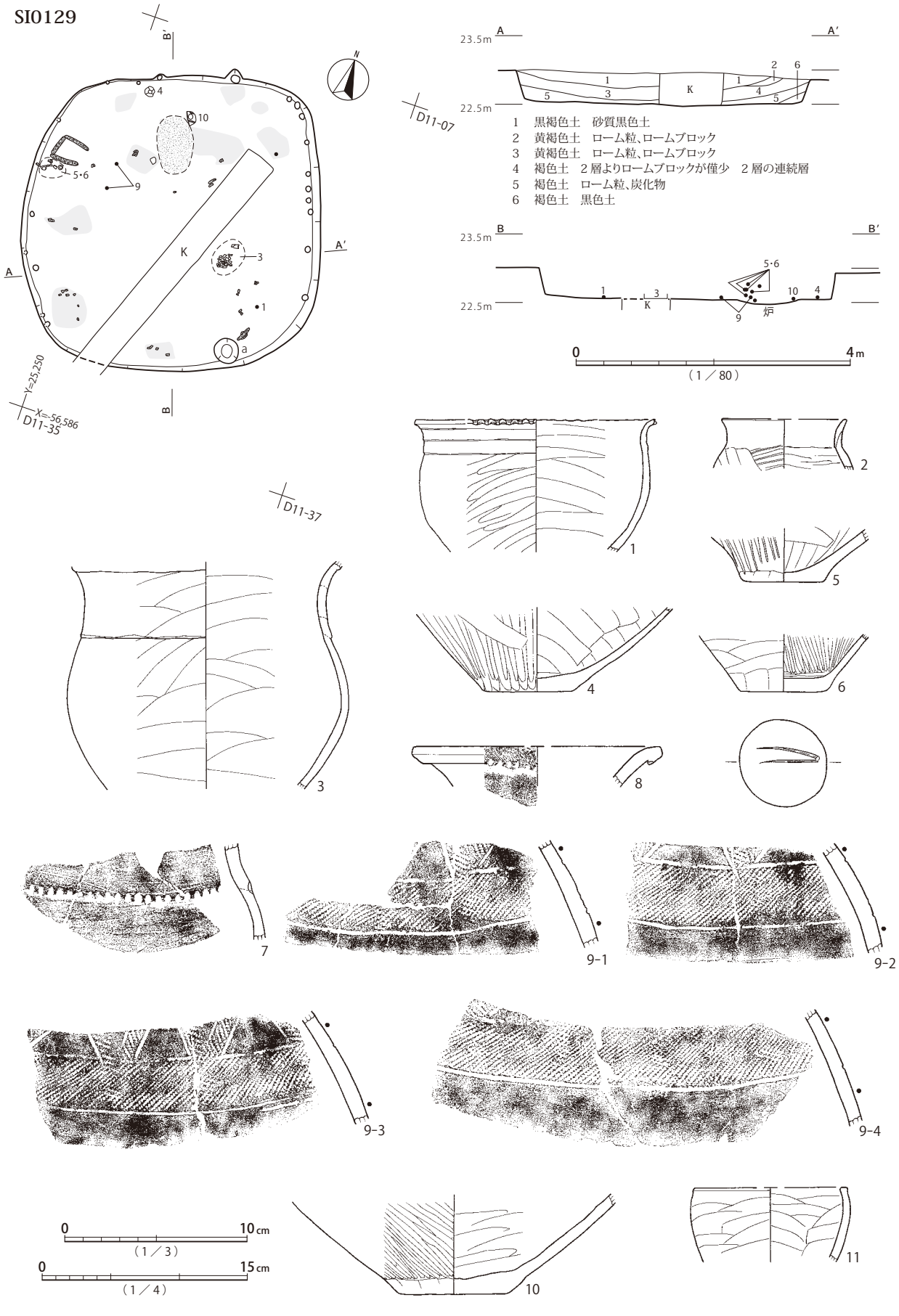
覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。貼床層の下に、縄文時代の炉穴が検出されたとの記述が残る。

遺物は僅少で、後期弥生土器の甕1、鉢2、輝石安山岩製礫石器3が図化対象となるのみである。鉢2の口縁部は横回転の擬縄文が施されている。

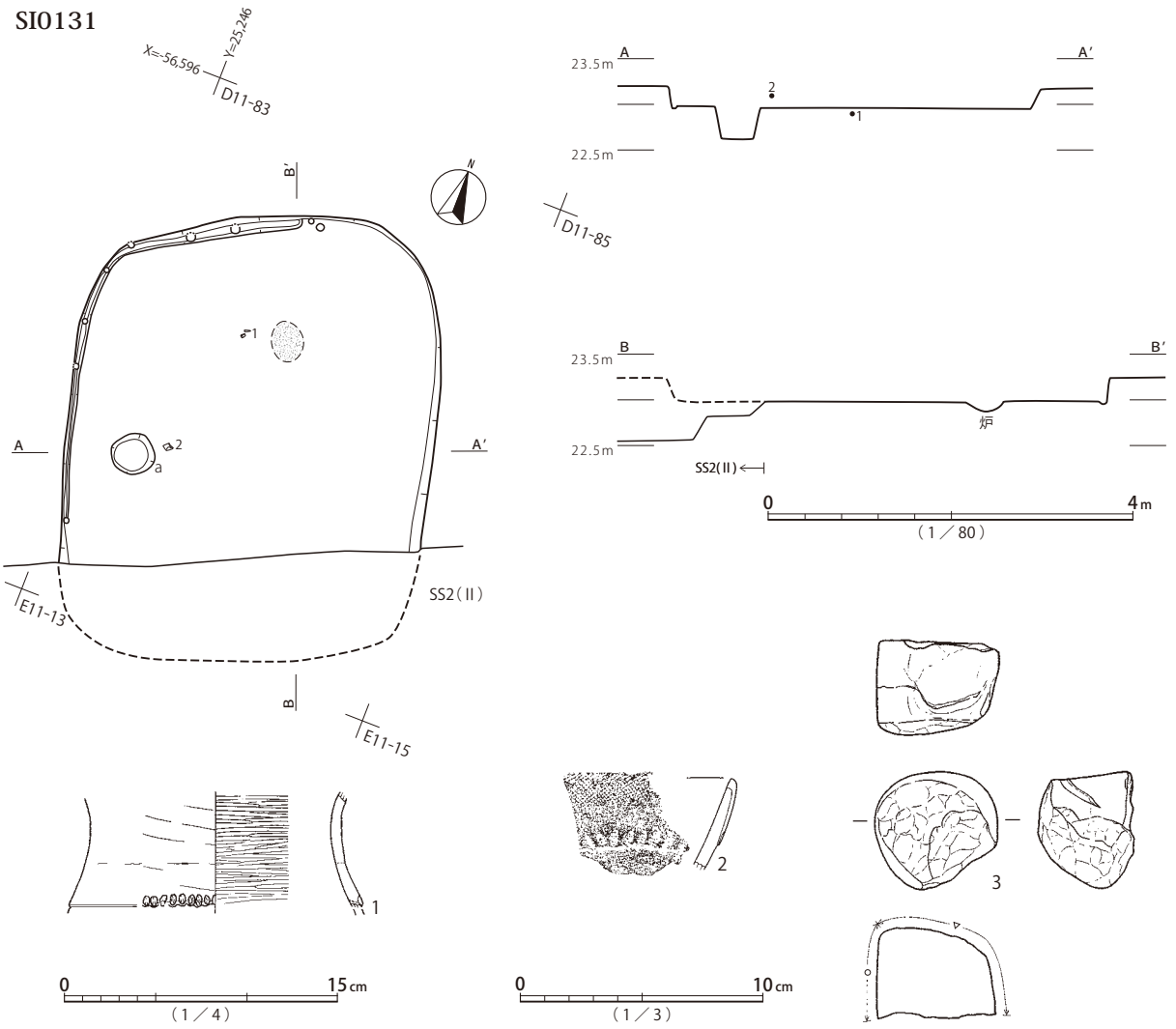
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期の所産と考えられる。

SI0132（第 181 図、図版 47・153・209）

5.5×5.3m、深さ15cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を受けるほか、中台



第179図 SI0129遺構・遺物



第180図　SI0131遺構・遺物

2式期のSS1周溝南角が大きく重複し、床面まで破壊を受けている。主柱穴a～dが検出されている。中心軸とa・b間ラインの交差する位置に、長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められている。床面周溝は南西角付近を除いて連続し、疎らに小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。

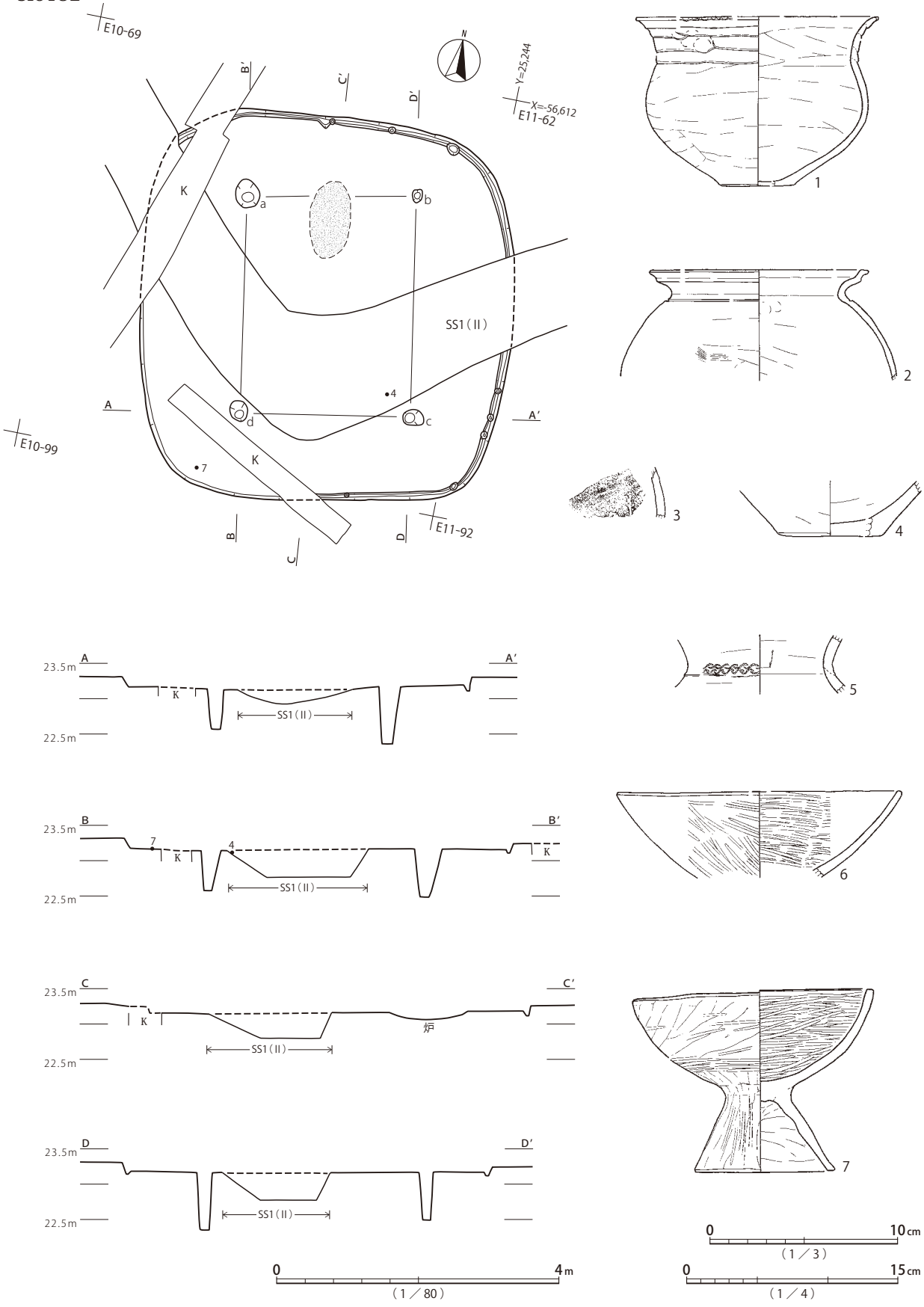
遺物は、床面等から弥生時代終末期の過渡的な様相を示す土器が出土している。輪積痕の甕1は薄手の作りで口縁端部の装飾が一方向の押捺で施されている。床面直上から出土した、丸底杯部の素口縁無文高杯7は弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。周溝範囲で検出されたと見られる受口状口縁甕2のほか、タタキ甕3、壺5、鉢6も同様と思われる。

本遺構は、SS1との切り合い関係から、中台2式期以前と位置付けられる。出土遺物の様相を勘案すると、弥生時代終末期前半、中台1式期の所産と考えられる。

SI0133（第182図、図版47・154・209・304）

5.4×5.0m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。中台2式期のSS2周溝北西角と約1mしか離れておらず、本遺構はSS2築造前に存在していたと見られる。主柱穴a～d、ハシゴ穴e・f、

SI0132



第181図　SI0132遺構・遺物

貯蔵穴gが検出されている。eは外傾する掘方を持ち、fと組み合って、ハシゴと支持部の据え付け穴として機能した可能性がある。中心軸上､柱間ラインより内側の位置に不整円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に堅緻に踏み固められている。特に炉の周辺から南東壁の範囲が硬化している。床面周溝は全周し、小穴が比較的密に伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。東角付近で部分的な焼土層が検出されている。

遺物は、床面他から土器と石器が出土している。台付甕3、壺もしくは甕6、頁岩製礫石器11、ドレライト製磨製石斧12が床面上で検出されている。覆土検出の甕1は輪積痕下端と頸部屈曲が一致し、口縁端部の装飾も一方向の押捺で施されており、弥生時代終末期の過渡的な様相を示す。貯蔵穴内からは、小型甕2、台付鉢7、器台10が出土している。器台10はヘラミガキ仕上げが不明瞭で精製の度合いが弱く、台付甕からの派生型式、あるいは炉器台の一種のようにも見受けられる。いずれの土器も弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、中台2式期のSS2との位置関係と、出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0134（第183・184図、図版47・209・304・332）

8.4×7.4？m、深さ40cm程度の楕円形竪穴建物跡である。遺構平面図が確認できなかったため、形状等を航空写真他から推定復元している。西側がSI0126とSI0137と重複する。主柱穴a～d、貯蔵穴と見られるe・fが検出されている。中心軸上、やや北西寄り、柱穴間範囲に収まる位置に方楕円形の炉が設けられる。床面周溝は遺存部では全周し、小穴が伴う。

覆土は、南東部に焼土層が検出されている。上位層は褐色を呈し、概ね漸移的に堆積の進んだ様子が窺える。SI0126覆土が本遺構に切り込んだ様相が捉えられている。

遺物は、後期弥生土器を主体に、古式土師器が出土している。出土位置記録が確認できないため不明だが、甕2、壺10・11・12については遺物注記がドット取り上げ資料であることを示す。タタキ甕5や壺12・13は本来、SI0126に帰属する可能性がある。その他、軽石製砥石14、砂岩製砥石15・16が出土している。

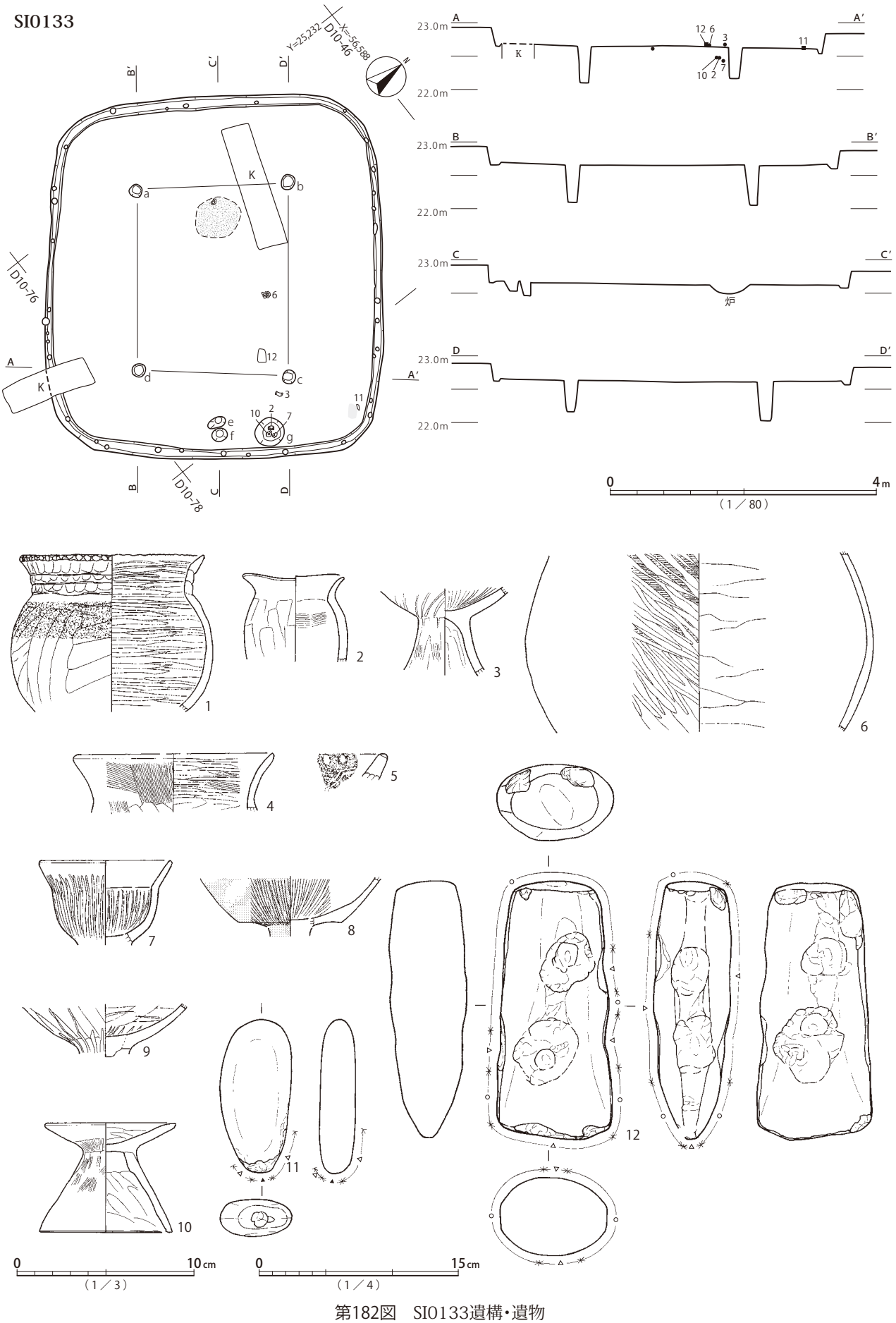
本遺構は、切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期のSI0126に先行する弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI0136（第185図、図版48・154・210）

3.3×3.2m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。遺構平面図が確認できなかったため、形状等を航空写真他から推定復元している。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるピットaのみが検出されている。中心軸上、西寄りに長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められる。図面記録がないため詳細は不明だが、全周する床面周溝内には小穴があり、大半が壁を削り込んで穿たれていたとされる。

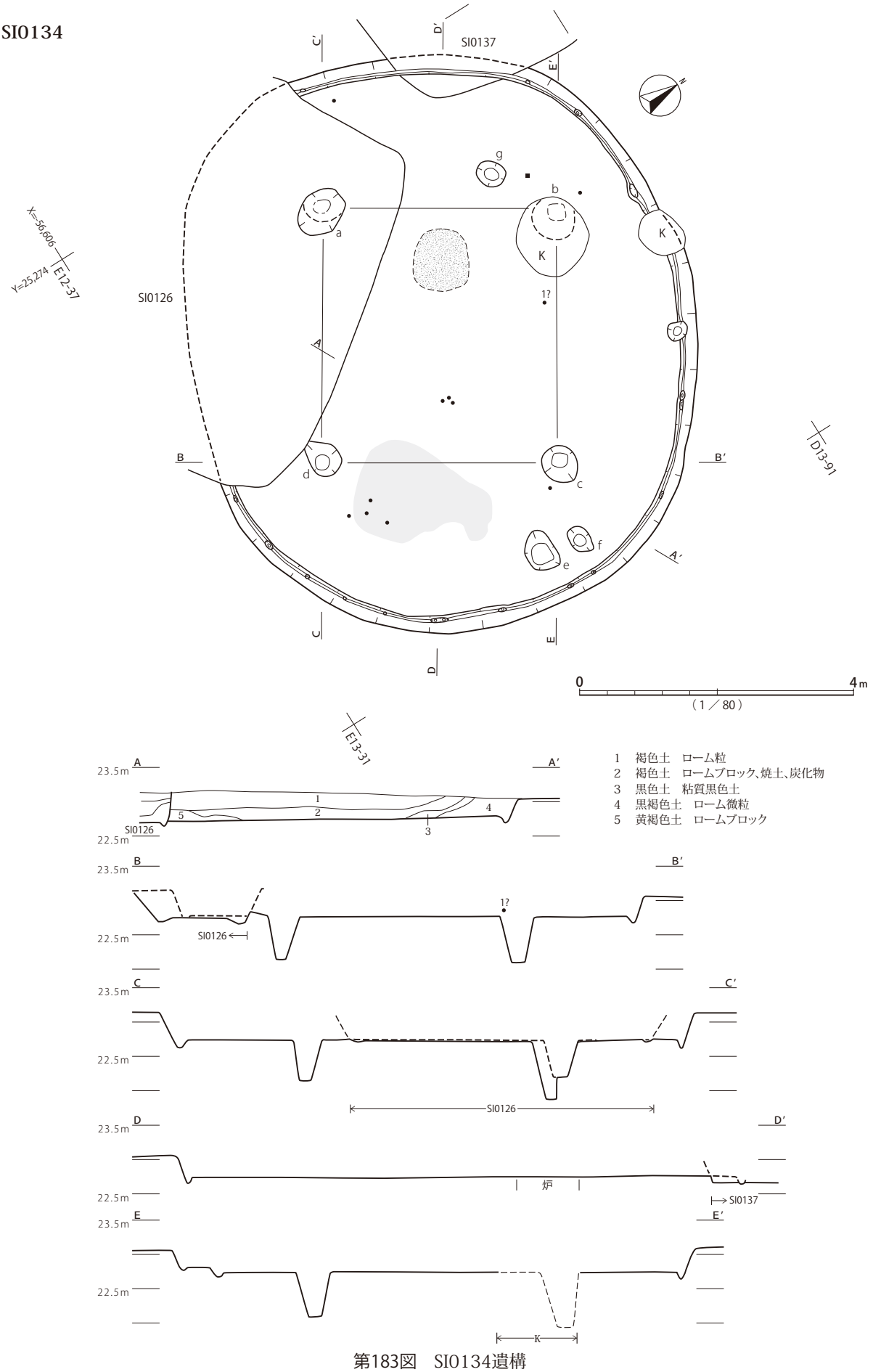
覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。

遺物は、南東隅付近で甕2が出土している。小型鉢4は遺物注記から、床面直上出土の可能性が高いが、位置は不明である。甕3を除き、弥生時代終末期、中台1式に位置づけられる。



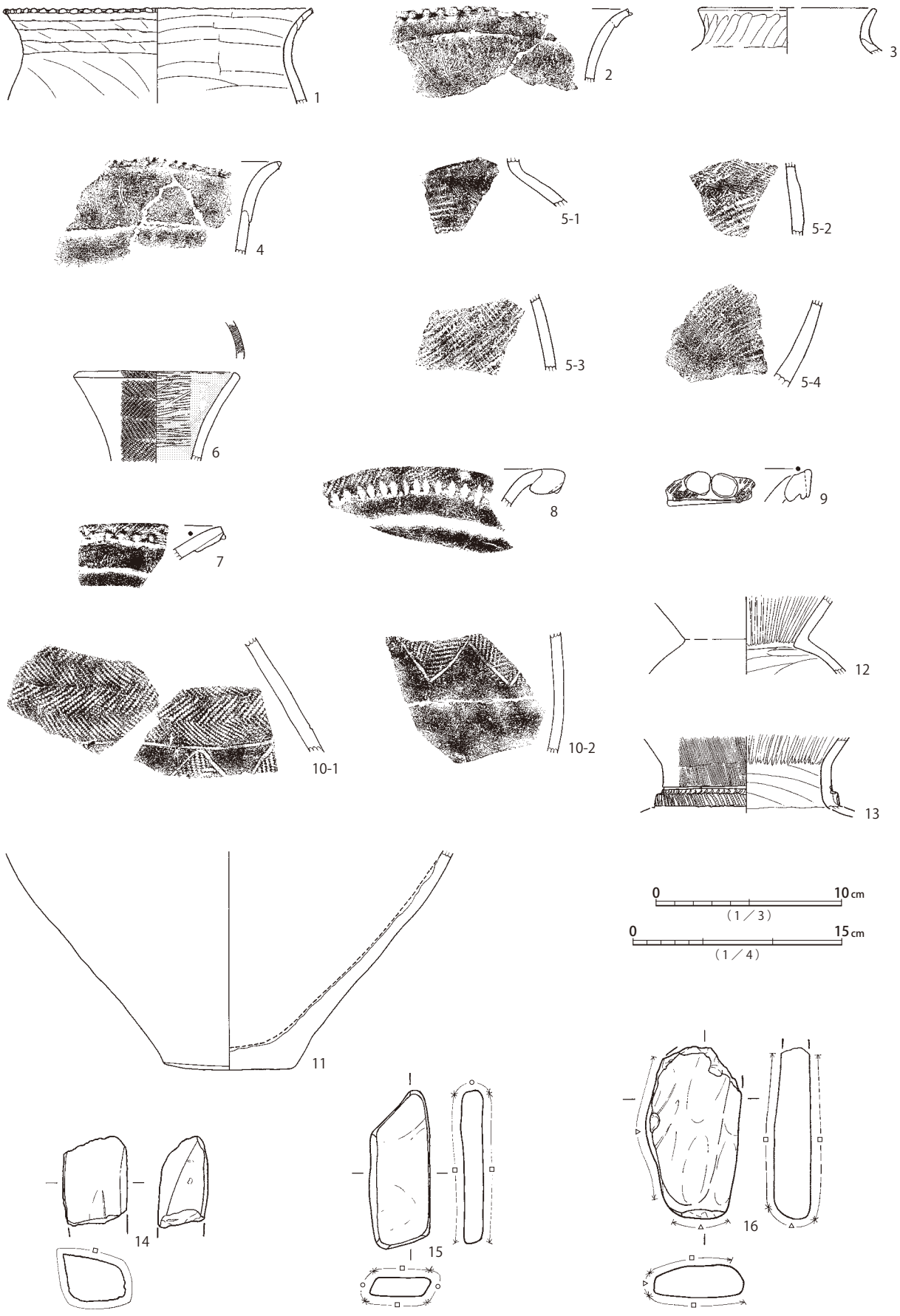
第182図　SI0133遺構・遺物

SI0134

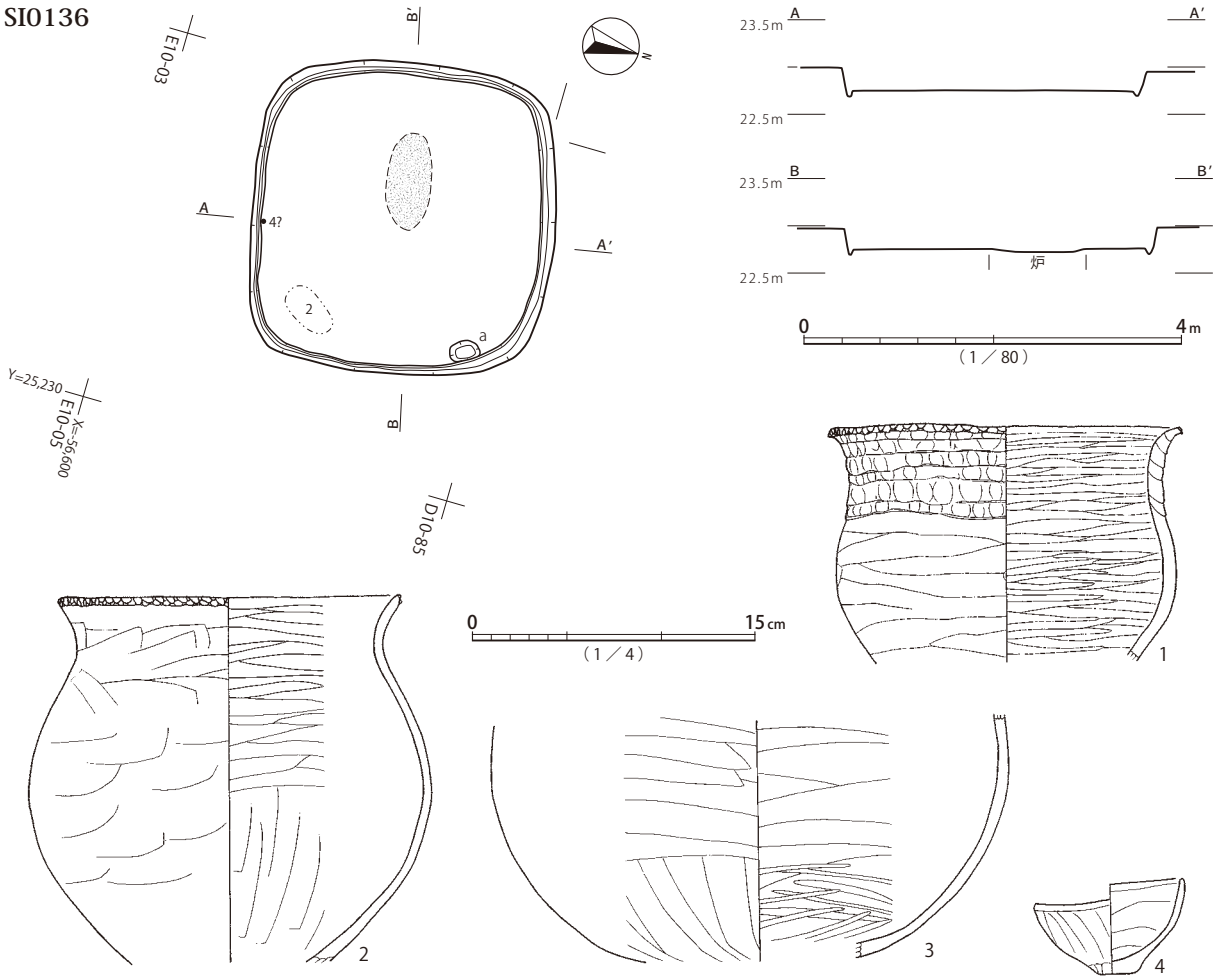


第183図 SI0134遺構

SI0134



第184図　SI0134遺物



第185図　SI0136遺構・遺物

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI0137（第 186 図、図版 48・154・210）

6.0 × 5.0m、深さ 45cm 程度の隅円長方形竪穴建物跡である。遺構平面図が確認できなかったため、形状等を航空写真他から推定復元している。主柱穴 a ～ d、貯蔵穴 e が検出されている。中心軸上、a・b 間ラインに接する位置内側に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は全周し、小穴が伴う。小穴の大半は壁面に掘り込まれ、斜めに穿たれるとの所見が残されている。

覆土は、特に焼土層が断面図に記録されておらず、概ね漸移的な堆積状況を示す。南東角が SI0134 と重複する。

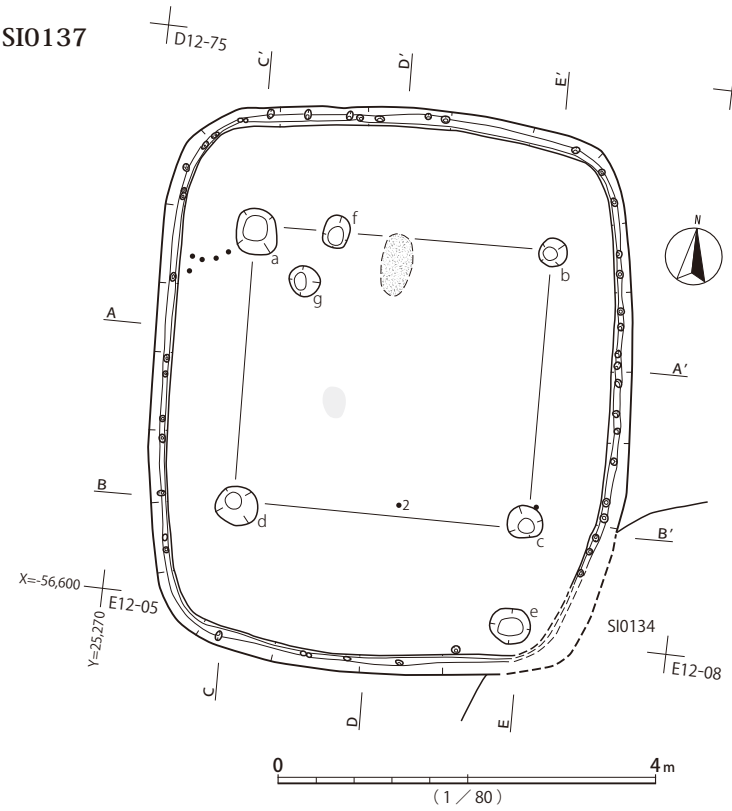
遺物は、甕 1、小型広口壺 2、素口縁鉢 4、高杯 6 等が床面上から出土している。無文で頸部屈曲の緩い小型広口壺 2、口縁肥厚部を持たない鉢 4 は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

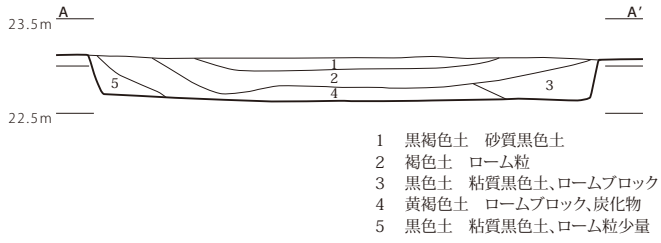
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI0138（第 187 図、図版 48・154・210・304）

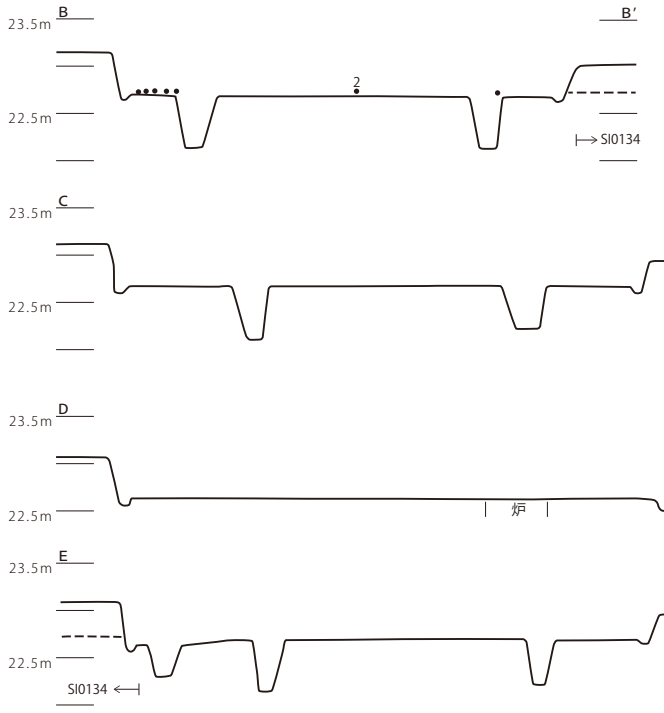
5.3 × 5.0m、深さ 10cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。南西辺が北東辺に比べ 70cm 程短く、

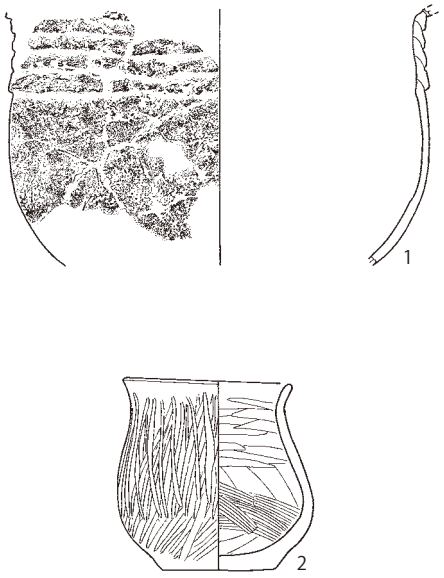
SI0137





1　黒褐色土　砂質黒色土
2　褐色土　ローム粒
3　黒色土　粘質黒色土、ロームブロック
4　黄褐色土　ロームブロック、炭化物
5　黒色土　粘質黒色土、ローム粒少量





0　10cm
（1／3）
0　15cm
（1／4）

第186図　SI0137遺構・遺物

台形気味のプランを呈する。主柱穴a ～ d、貯蔵穴の可能性があるeが検出されている。中心軸上、a・b間ラインに接する位置内側に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められる。床面周溝は全周し、小穴が伴う。溝底に穿たれるほかに、壁に掘り込むタイプがある。

覆土は、遺存部が少なく詳細は不明である。

遺物は、古式土師器の壺1・3、炉器台2の他、流紋岩質凝灰岩製礫石器4が出土している。いずれも覆土一括取り上げ資料である。土器は概ね弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。

SI0139（第188・189図、図版49・154・155・210・211・326・332）

4.4 × 3.8m、深さ55cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。中心軸上、北西寄りに方楕円形の炉が設けられる。床面はハードローム層に形成され、堅緻である。床面周溝は全周し、小穴が疎らに伴う。小穴の多くは壁面に掘り込まれる。

覆土は、北半を中心に炭化物混じりの焼土層が10 ～ 15cmの厚さで堆積する。本遺構は廃絶時に火を受けた可能性が高い。炉覆土に3cm程の灰層が確認されている。

遺物は、床面近くから中層にかけて比較的多く弥生土器が出土している。甕2・3・5、甕転用甑6、壺下半26は床面近くで検出されている。沈線区画の単節縄文横帯2帯を施される壺20は床面から20cm程の位置で検出され、甕4と沈線区画単節縄文横帯の鉢28も同様の高さで出土している。出土レベルに幅があり、出土土器群の堆積時期に差はあったと見られるが、大部分は弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。鉄製刀子32は遺物注記が不明なため帰属は不確実で、混入品と思われる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。完形に近い土器が示す、久ヶ原2式期に帰属すると推定される。

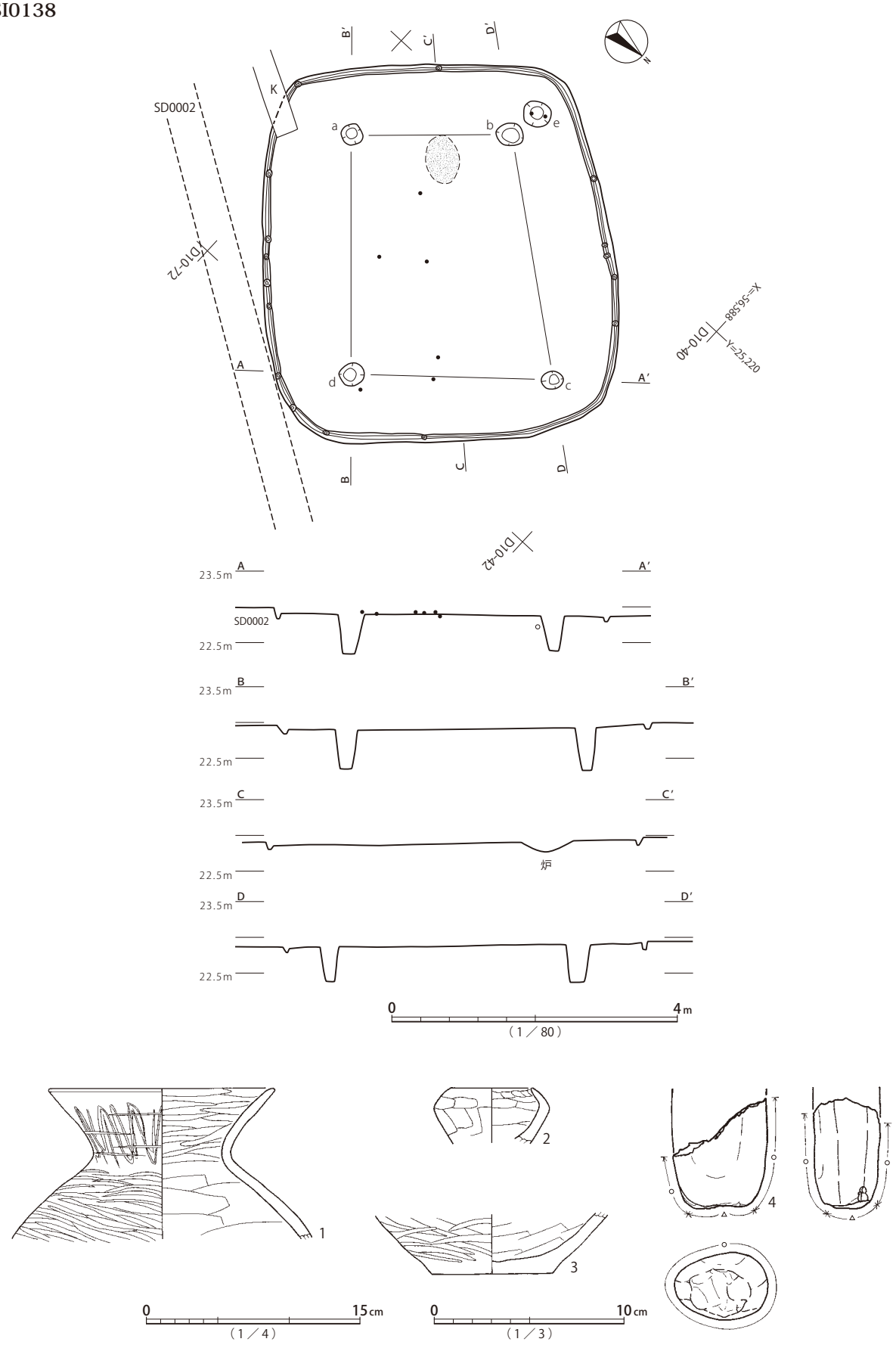
SI0140（第190・191図、図版49・155・211・299・304・332）

9.0？ × 8.2m、深さ50cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。平面図が確認できないため、航空写真・断面図・ノート等から形状・遺物出土位置を推定復元している。北西辺をSD0002が掘り込むほか、北側に撹乱を多く受けている。主柱穴a・c・d・e、貯蔵穴・ハシゴ穴の可能性があるf・gが検出され、柱位置から主柱穴bが推定される。中心軸とa・b間ラインの交差する位置のやや東寄りに、掘り込みのごく浅い楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻である。床面の南側には火を受け焼結した箇所が認められる。床面周溝は全周し、小穴が伴うとの記述がある。

覆土は、概ね漸移的な堆積状況を示すが、床面近くに焼土が堆積していたとの所見が残る。床面の焼結状態と関係する可能性が高く、発泡土器片32の出土も見られることから、本遺構は廃絶過程で火を受けたと考えられる。中央付近の1層には土器片の集中範囲が認められる。

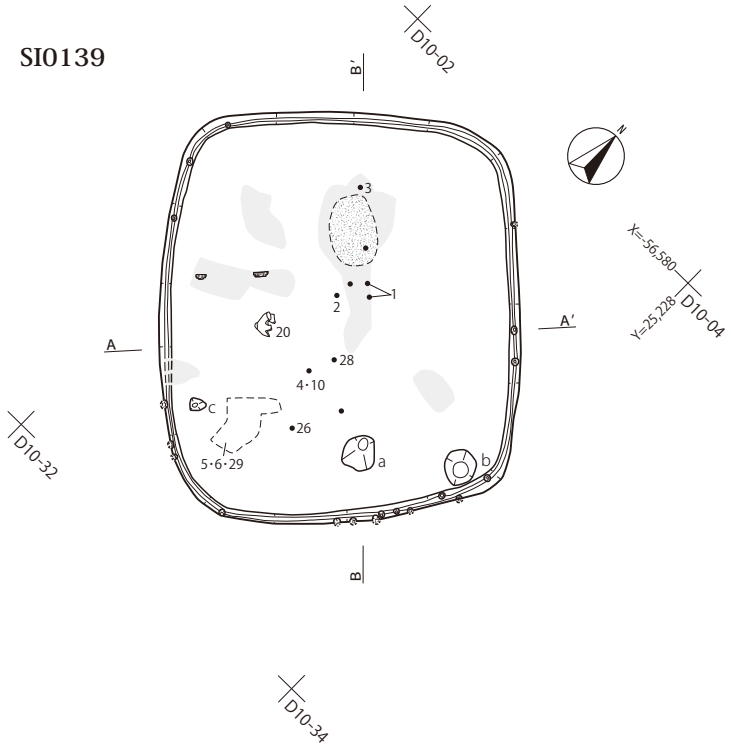
遺物は、弥生土器が床面直上と覆土中に分かれて出土している。床面上からは、結節文区画壺5・14、椀21等、20cm以上高い位置から鉢18等が検出されている。いずれも弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。その他、ホルンフェルス製礫石器33が出土している。また、「有孔円板」が出土したとの記述及びスケッチが残るものの、遺物は所在不明である。外縁寄りに1箇所穿孔さ

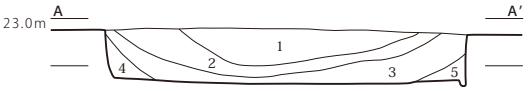
SI0138



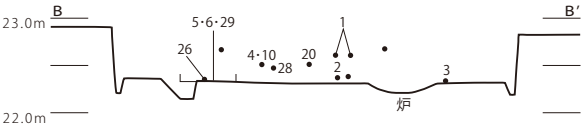
第187図　SI0138遺構・遺物

SI0139

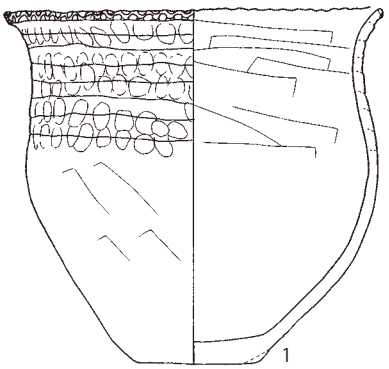


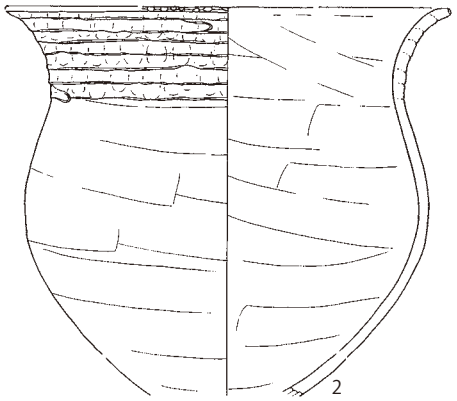


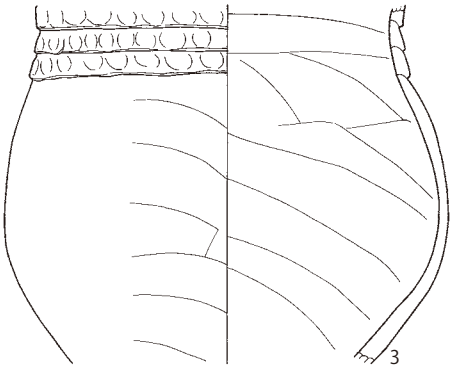
1　黒色土　焼土
2　黒褐色土　ローム粒
3　褐色土　ロームブロック、焼土、炭化物
4　黒褐色土　ロームブロック、黒色土
5　黒色土　粘質黒色土

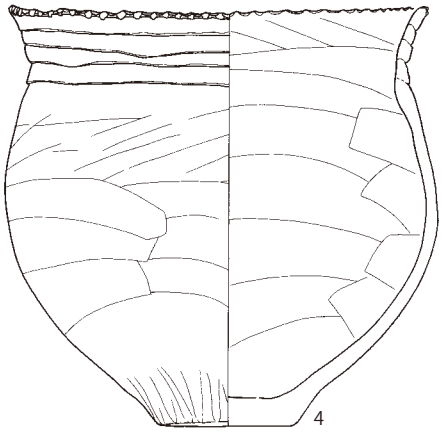


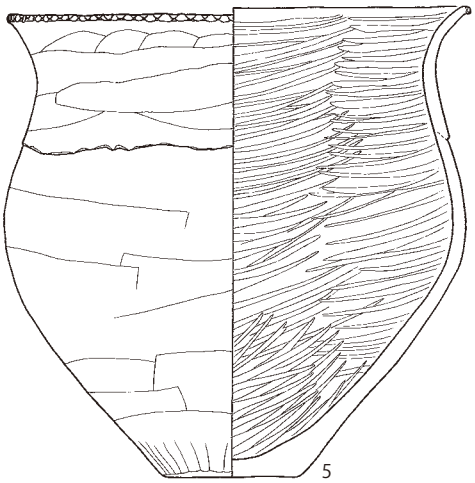
（1／80）







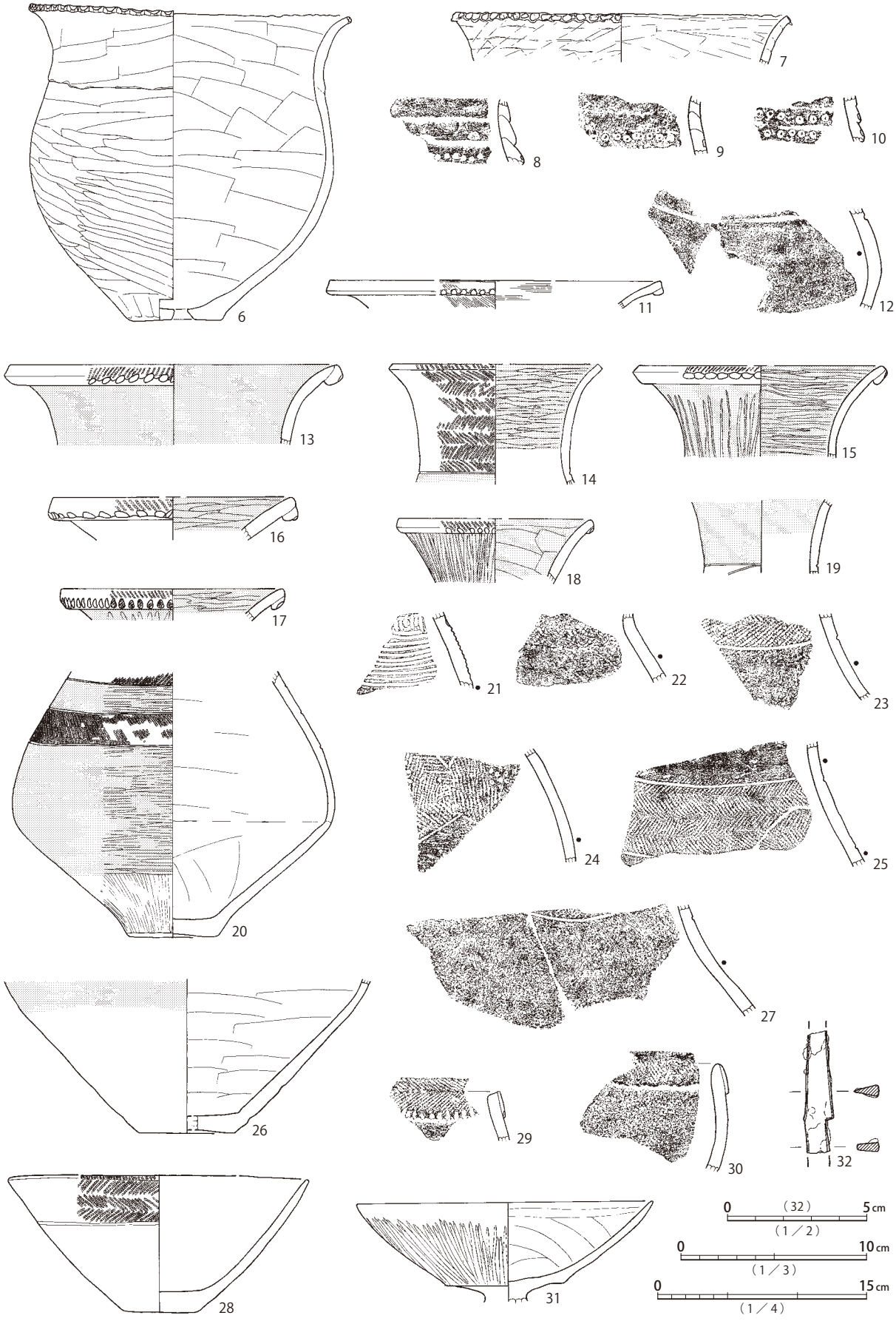




（1／4）

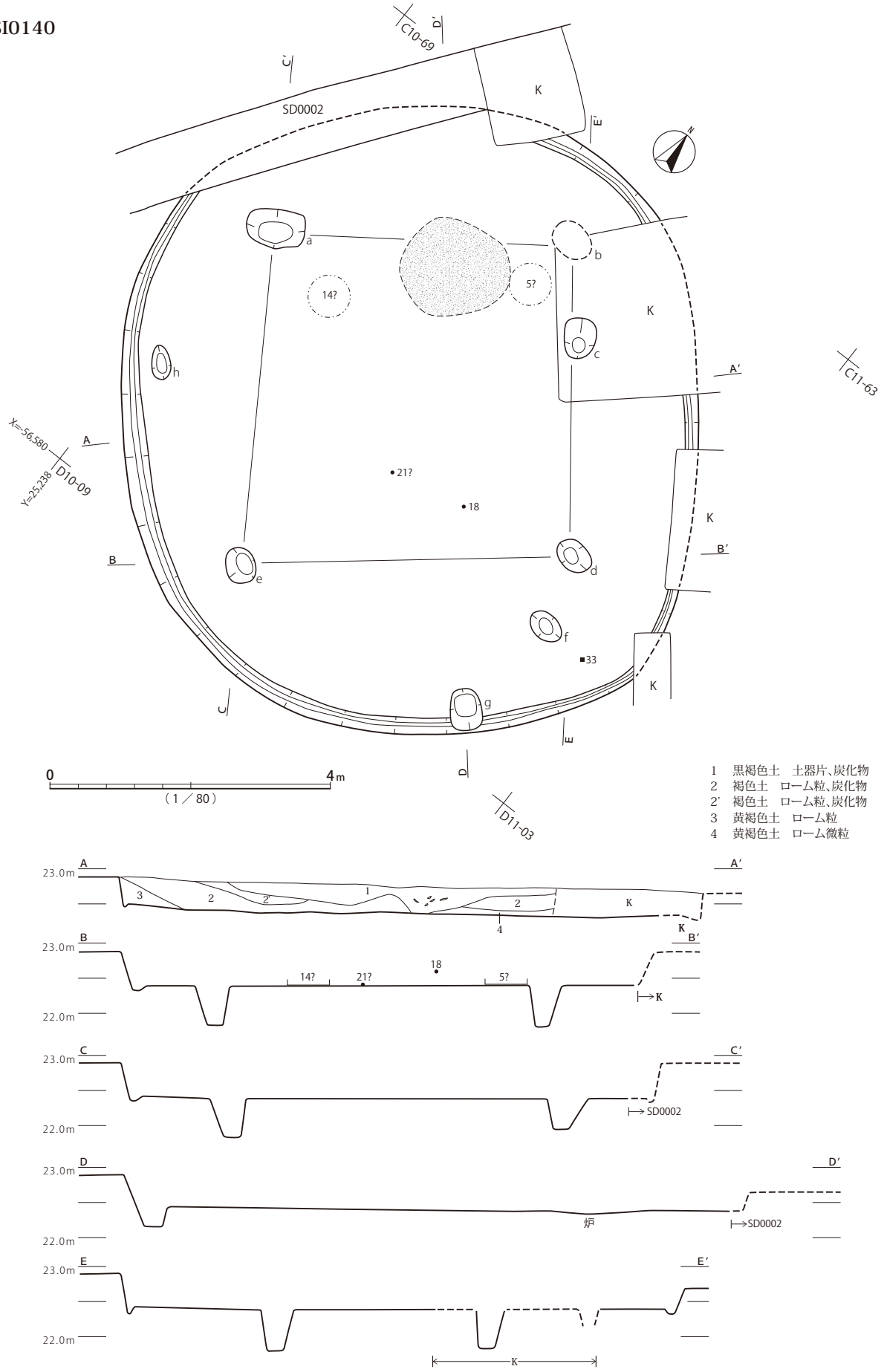
第188図　SI0139遺構、SI0139遺物（1）

SI0139



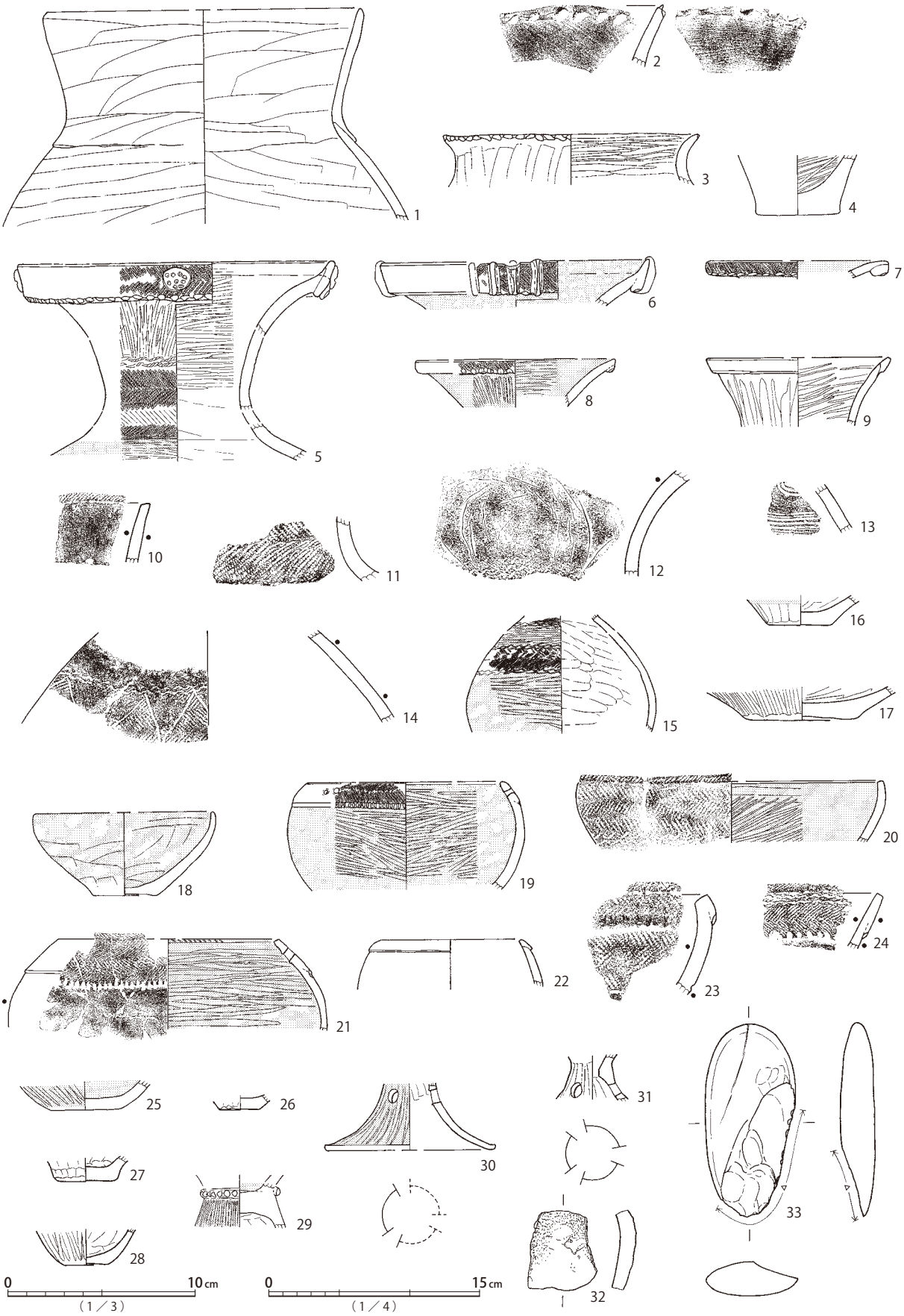
第189図　SI0139遺物（２）

SI0140



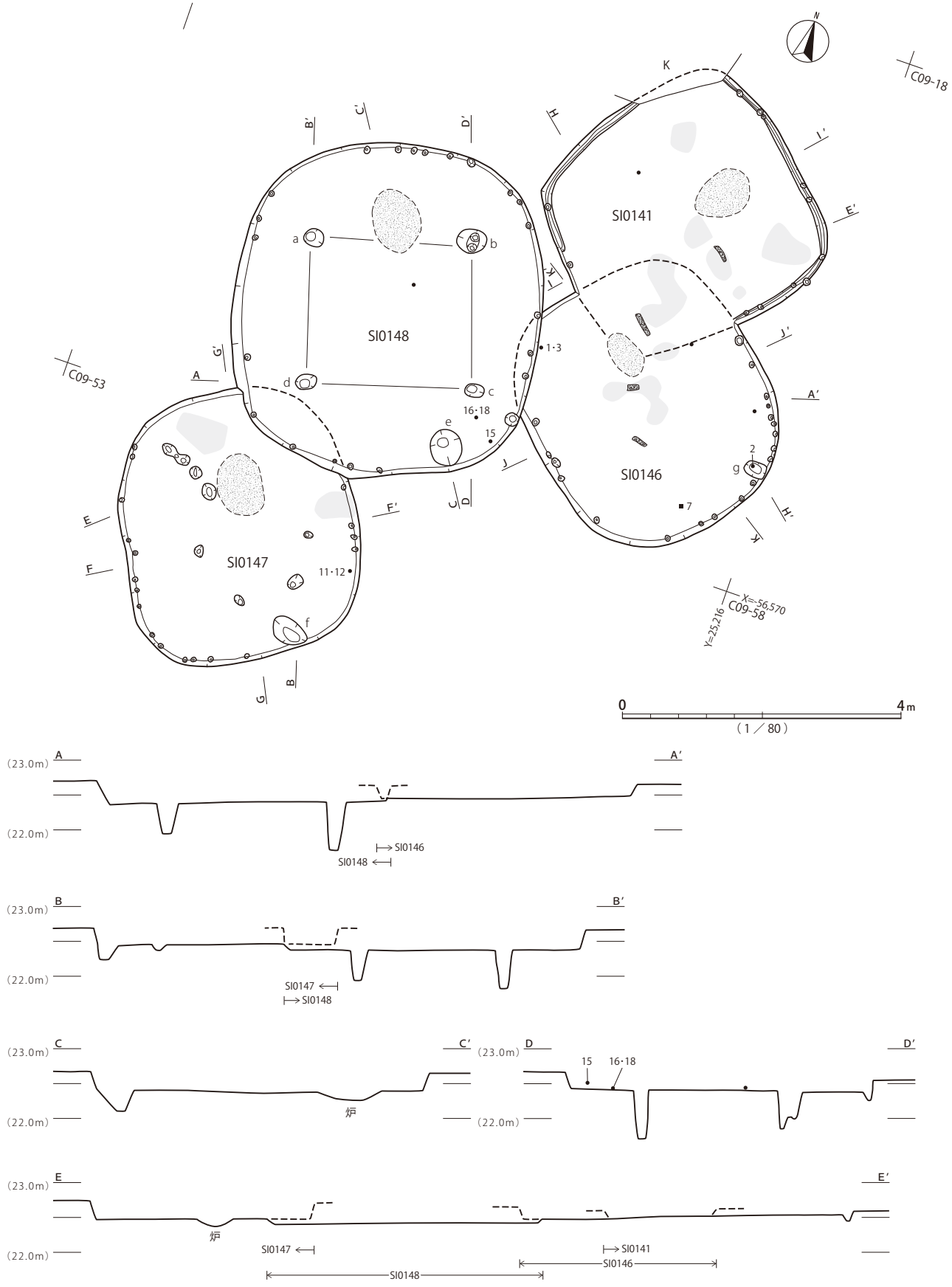
第190図 SI0140遺構

SI0140



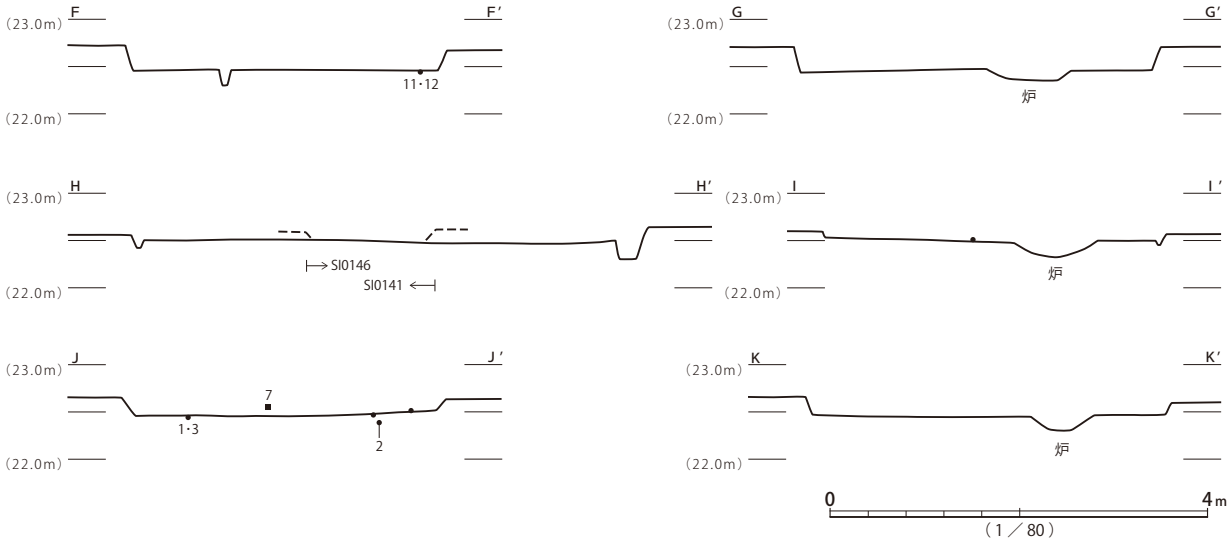
第191図　SI0140遺物

SI0141・0146・0147・0148

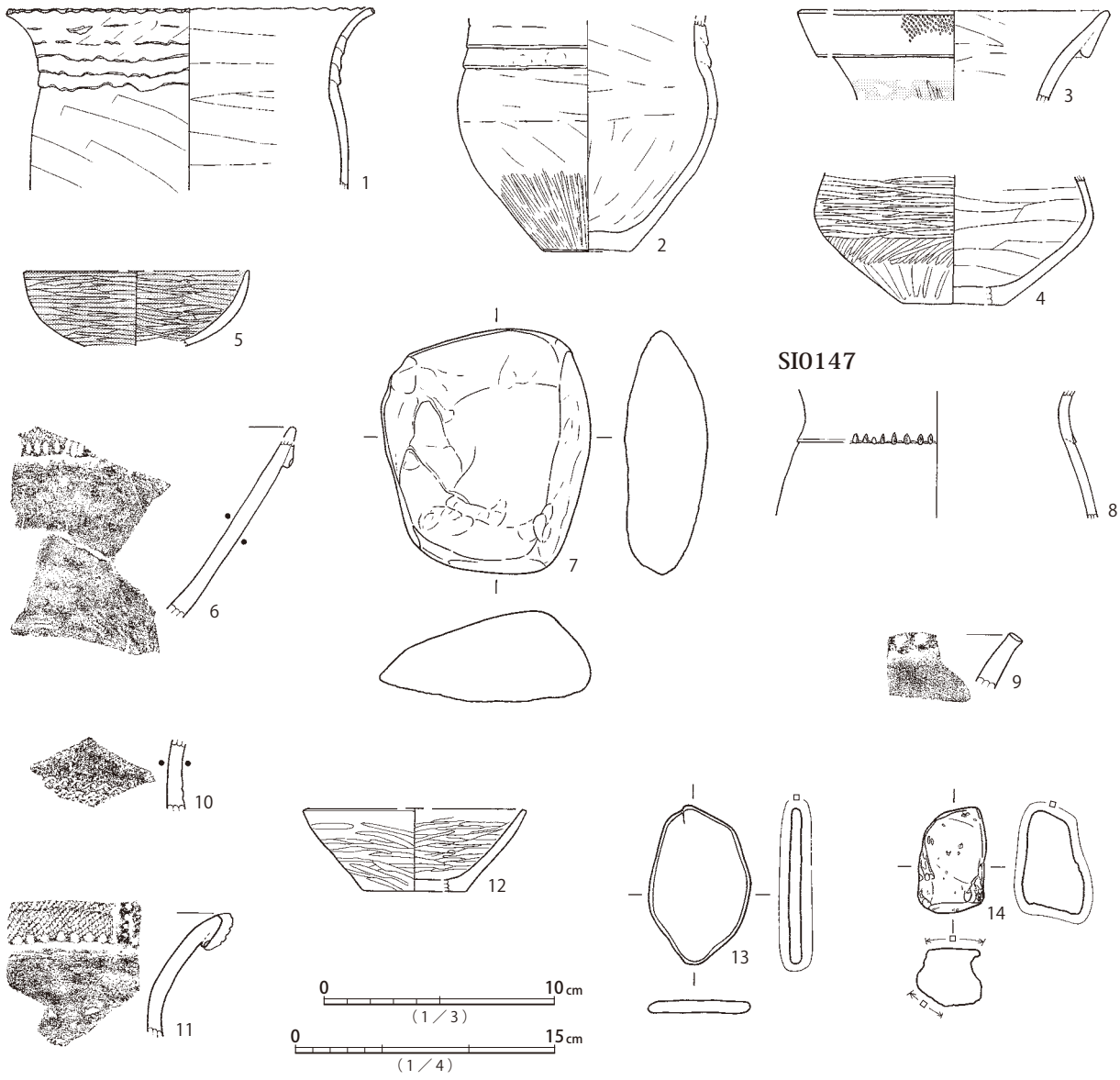


第192図　SI0141・SI0146・SI0147・SI0148遺構(1)

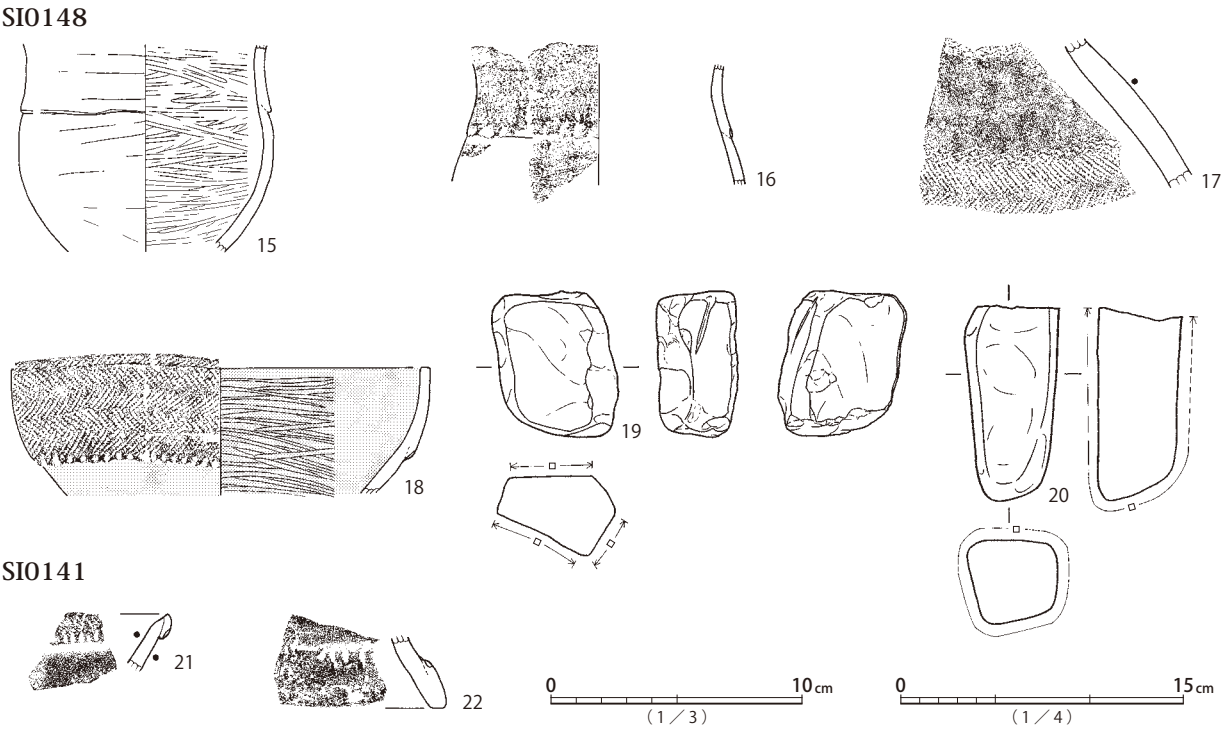
SI0141・0146・0147・0148



SI0146



第193図　SI0141・SI0146・SI0147・SI0148遺構(2)、SI0146・SI0147遺物



第194図　SI0141・SI0148遺物

れており、古墳時代の滑石製模造品ではなく弥生時代の円形板状石製品（垂飾）と推定される。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI0141・SI0146・SI0147・SI0148（第 192・193・194 図、図版 49・51・211・213・305・332）

重複する４棟の竪穴建物跡である。SI0141は、3.7×3.5m、深さ10cm程度の隅円方形竪穴建物跡、SI0146は、3.8×3.4m、深さ20cm程度の方楕円形竪穴建物跡、SI0147は、3.8×3.4m、深さ25cm程度の方楕円形竪穴建物跡、SI0148は、4.8×4.4m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。SI0141とSI0146、SI0148とSI0146・SI0147の一部同士が重複する。

SI0146は、主柱穴が認められず、貯蔵穴と見られるピットｇのみが検出されている。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められている。床面周溝は認められず、小穴が巡る。大半は壁面を掘り込んで穿たれている。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、中央から西側にかけて炭化材混じりの焼土が堆積している。廃絶時に火を受けた可能性が高い。類似したSI0141覆土との境界は不明瞭である。

遺物は、床面上から後期弥生土器の甕1、壺3、貯蔵穴内から甕2が出土している。他に砂岩製砥石7が覆土から検出されている。甕1、壺3については出土位置が境界近くにあるため、SI0148覆土に由来する可能性も考えられる。土器は概ね弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

SI0146は出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI0148は主柱穴ａ～ｄ、貯蔵穴ｅが検出されている。中心軸とａ・ｂ間ラインの交差する位置の外寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。特に柱間内部は硬化しており、南北方向に幅1m程が明瞭に堅い。床面周溝はなく、小穴が巡り、

一部は壁面を掘り込んでいる。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、平面図等に焼土・炭化物に関する記録もないため、概ね漸移的な堆積過程を経たものと推測できる。

遺物は、床面上から弥生土器甕16、鉢18、下層から小型甕15が出土している。いずれも弥生時代後期後半に位置づけられる。他に砂岩製砥石19、輝石安山岩製砥石20が覆土中から出土している。

SI0148は、推定される切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI0147は明確な主柱穴はなく、貯蔵穴と見られるfと小ピットが検出されている。中心軸上、北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は無く、小穴が巡る。小穴の多くは壁面を掘り込んで穿たれている。北東角がSI0148と重複するが、検出・堆積状況など先後関係を示す記録はない。

覆土は、焼土層の堆積が北西部で約30cm、東部で約10cm確認されている。

遺物は、床面上から弥生土器壺11、小型鉢12が出土している。素口縁で無文の小型鉢12は弥生時代後期後半から弥生時代終末期に位置づけられる。その他、砂岩製砥石13、軽石製砥石14が覆土一括取り上げ資料として出土している。

本遺構は、推定される切り合い関係と出土遺物の様相より、弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半に帰属するものと思われる。

SI0141は主柱穴等のピットが検出されていない。中心軸上、北東寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝はほぼ全周し、疎らに小穴が伴う。切り合うSI0146床面はほぼ同レベルにあるが、SI0141の床面周溝は検出されておらず、SI0146床面構築土の性質など、何らかの理由で調査時に認識できなかった可能性がある。

覆土は、炭化材混じりの焼土が広く検出されており、10cm程度の層厚が認められる。廃絶過程において火を受けたと見られ、出土遺物の僅少さを勘案すると焼却処分による可能性が考えられる。

遺物は、一括取り上げ資料として、壺21、高杯22が出土した程度である。高杯22は脚裾肥厚部が無文化している点が新相を示しており、弥生時代後期後半から弥生時代終末期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に帰属するものと思われる。

4棟の竪穴建物跡は、弥生時代後期前半のSI0146→後期後半のSI0148→後期後半～終末期前半のSI0147→終末期のSI0141、の順に構築されたと推定する。

SI0142（第195・196図、図版49・50・155・212・304）

5.3×4.8m、深さ30cm程度の楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。fがdの脇、柱筋に見られるが、建て替えに伴う柱穴かは不明である。中心軸とa・b間ラインの交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、あまり踏み固められず軟質である。床面周溝は見られず、小穴が疎らに巡る。小穴は部分的に壁面を掘り込んでいる。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、床面に炭化材混じりの焼土層が広がっており、南東部では10～15cmの厚さが確認されている。焼却処分などにより廃絶時に火を受けたと見られる。

遺物は、床面から下層にかけて後期弥生土器が比較的多く出土している。床面上から、甕3、壺6・8、片口深鉢13、高杯（鉢）14、下層から甕1・4等が検出されている。概ね久ヶ原2式に位置づけられる。

他に大きく研ぎ減った軽石製砥石15が出土している。出土位置から、土器の多くは廃絶時に伴うものと思われる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原2式期に帰属すると考えられる。

SI0143・SI0165（第197図、図版50・155・212・305・332）

ほぼ重なる位置に構築された2棟の竪穴建物跡、SI0143とSI0165である。SI0143は、3.8？×3.1？m、深さ25cm程度の隅円長方形竪穴建物跡、SI0165は、5.0？×4.4？m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。SI0165の南辺は近現代道路により撹乱を受けているため、検出状況が乱されたと判断し、形状を推定復元している。

SI0165は撹乱等の影響で全体形を検出しきれていない可能性がある。平面形については、南西・北東角の位置を北西・南東角位置に基づき推定し、復元したものである。

覆土は、記録が無く詳細は不明である。平面的な焼土範囲は検出位置からSI0165覆土に伴う可能性が高い。調査段階の平面図はSI0165覆土が全面的に掘り下げられる前のSI0143床面が部分的に遺存する状況を示すものと思われる。北西辺の床面周溝は、SI0143床面を掘り下げた部分にのみ確認されており、本来は西へ続くものと見られる。東側の焼土範囲はSI0165床面から7cmの高さが記録されており、SI0143床面より数cm低い位置にあるため、SI0165覆土に由来すると判断できる。床面はソフトローム層に形成されるが、堅く踏み固められている。

遺物は、出土位置記録のあるものは基本的に本遺構に帰属すると見られるが、壺底部7については、SI0143に伴う可能性も否定できない。覆土一括取り上げ遺物は、両遺構ごとに振り分けるのは不可能である。出土土器には結節区画の縄文横帯を持つ壺5・6も含まれるが、古式土師器の壺2、高杯10・11の存在を勘案すると、弥生時代終末期、概ね中台式に位置づけられる。土器のほかには、ホルンフェルス製棒状磨石14が出土している。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期に位置づけられる。

SI0143は、平面的には北辺の一部のみ遺存し、主柱穴等は検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、堅く踏み固められている。床面周溝は北西角に認められ、小穴が伴う。

遺物は、帰属の確実なものは認められない。

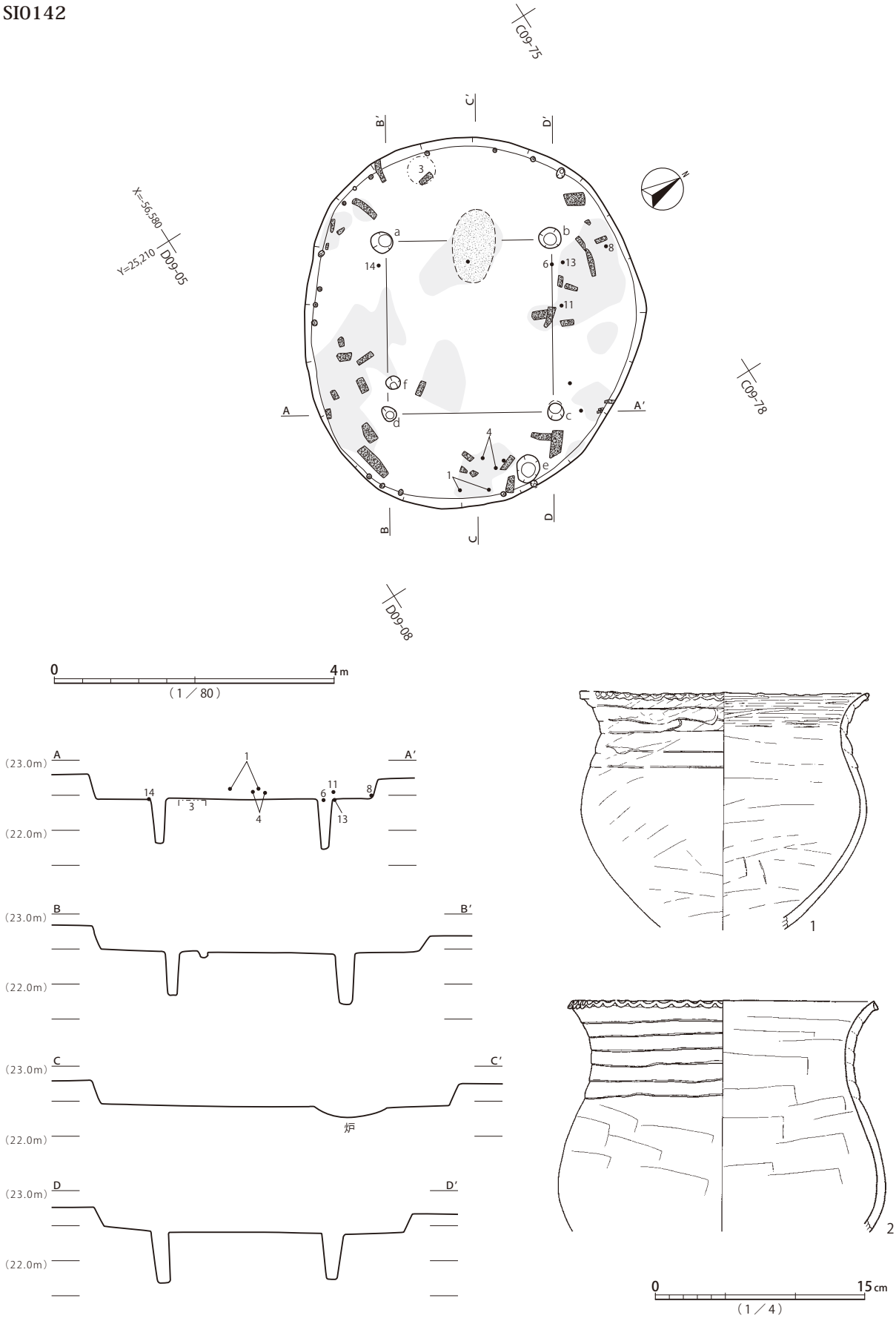
本遺構は、切り合い関係と平面形から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

2棟の竪穴建物跡は、SI0165→SI0143の順に構築されたと推定でき、いずれも弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0144・SI0166（第198・199図、図版50・55・155・212）

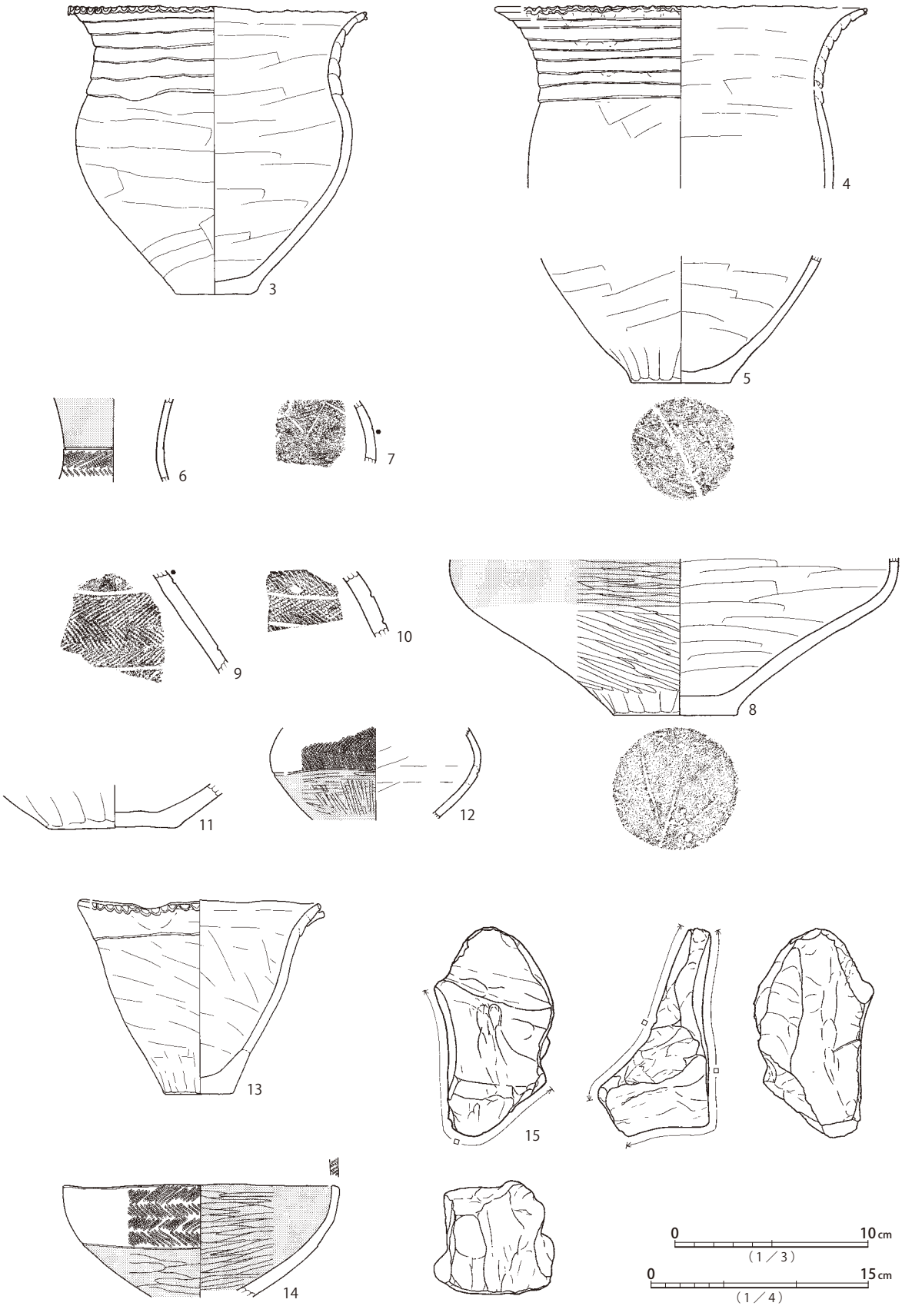
ほぼ重なる位置に構築された2棟の竪穴建物跡、SI0144とSI0166である。両遺構の形状は、平面実測図が確認できないため、写真・記述から推定復元したものである。SI0144は、6.2×7.1m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡、SI0166は、5.6？×4.8？m以下、深さ20cm程度の隅円方形と推定される竪穴建物跡である。SI0144範囲内にSI0166の南側の大部分が含まれるかたちで重複する。SI0166はSI0150とも切り合う。古道SD0002がSI0144南東部を通過するが、撹乱は覆土内10～20cm程度で床面には及んでいない。

SI0142



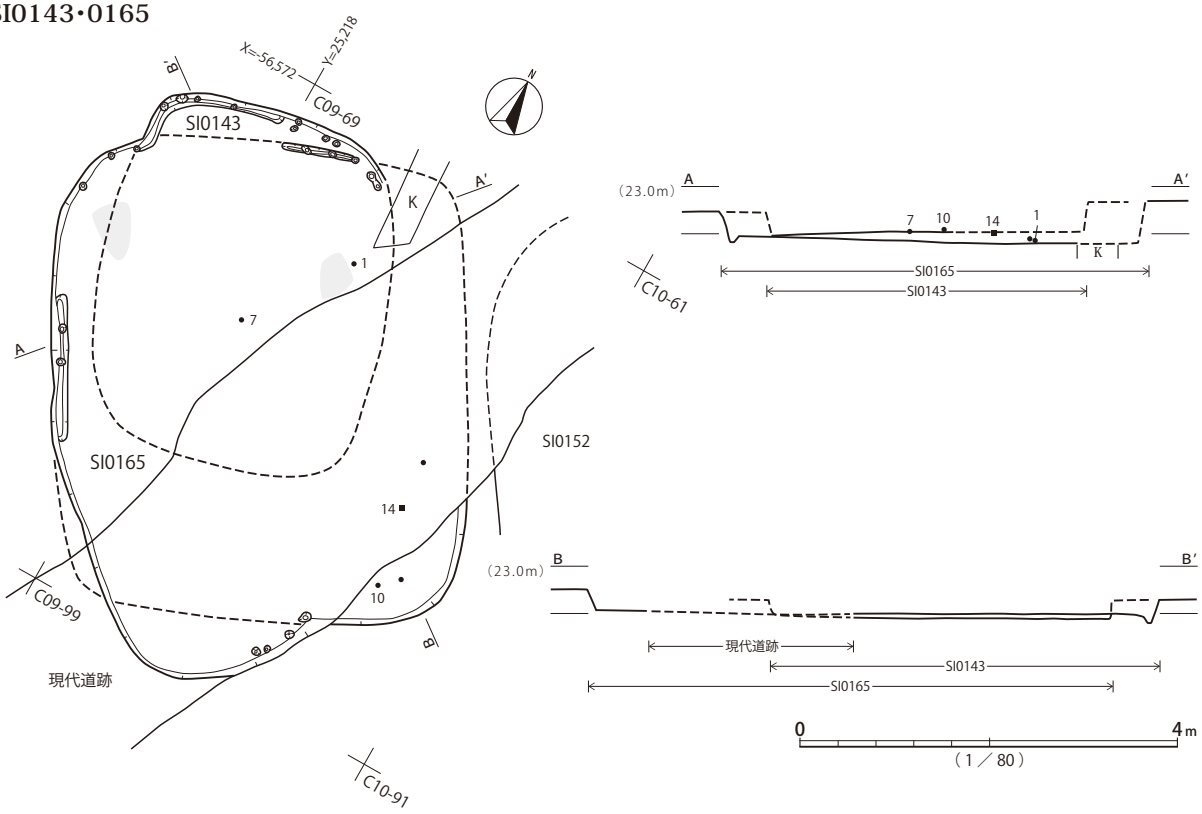
第195図　SI0142遺構、SI0142遺物（1）

SI0142

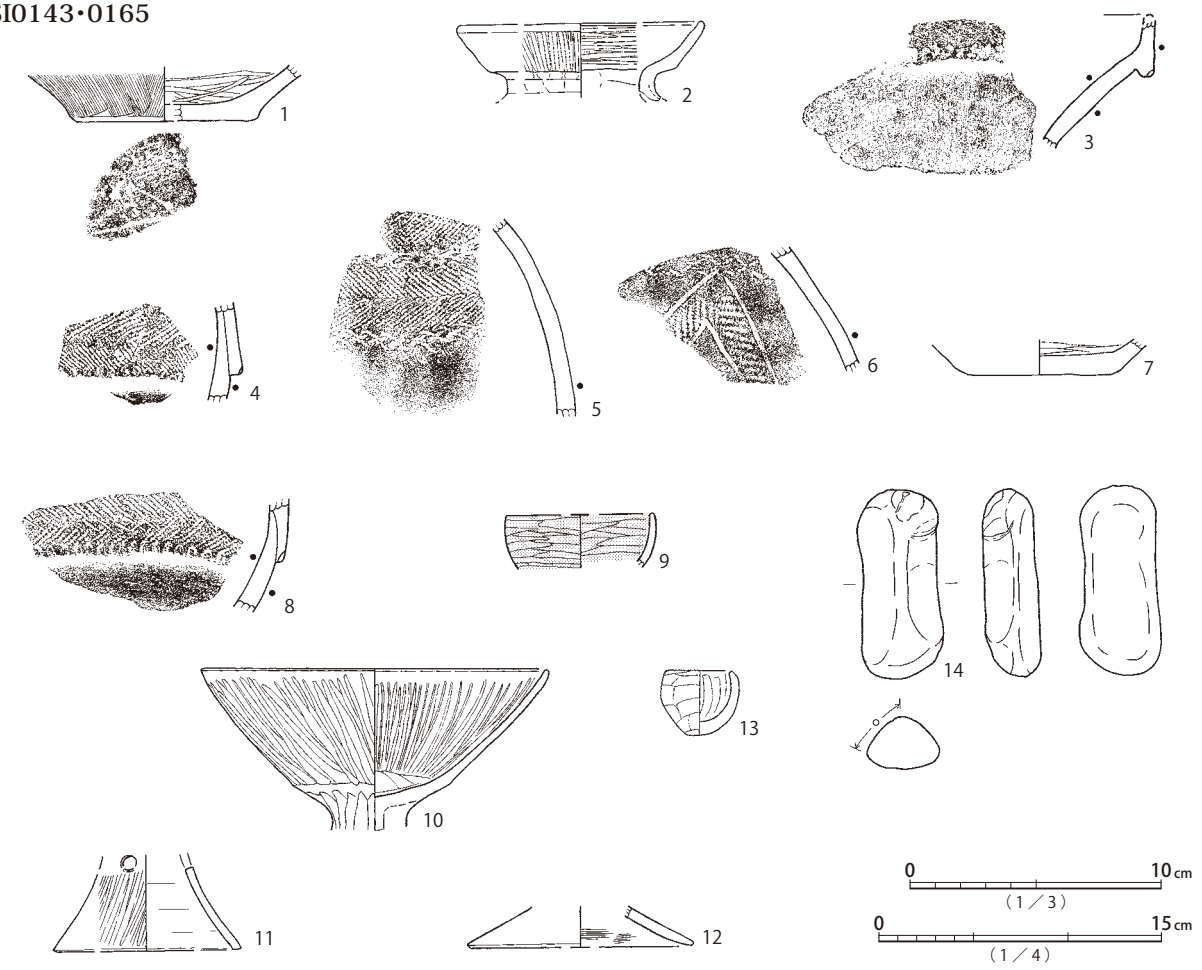


第196図　SI0142遺物（２）

SI0143・0165



SI0143・0165



第197図　SI0143・SI0165遺構、SI0143・SI0165遺物

SI0166は、主柱穴等は検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、床面周溝が巡る。

覆土・遺物については記録が無く、詳細は不明である。切り合い関係については、SI0144がSI0166を破壊しているという所見から、本遺構がSI0144に先行すると考えられる。SI0150との重複部については記録が無く不確定だが、SI0166の方が新しいと推測する。

SI0144は、主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。炉は確認されていない。床面はソフトローム層に形成され、柱間の中心部付近が比較的堅く踏み固められている。床面周溝は全周し、小穴はほとんど伴わない。

覆土は、遺物注記から黒色土層の堆積が分かる程度で、焼土等については特に情報が無く、漸移的な堆積状況が推定できる。

遺物は、詳細な出土位置記録がないものの、中央部に壺・高杯の破片群が出土したほか、南西角付近の床面から10～15cmの高さに甕1・3の検出が推定できる。甕1・2・3は、在地的な平底甕の特徴を引き継ぎ、過渡的な形状・技法を示す。小型椀形高杯8、東海系有段高杯9は古墳時代前期前半の型式に類似するが、頸部屈曲が緩い過渡的な甕1・2・3や安房形装飾壺由来の櫛描文の壺4等との共伴状況を勘案すると、弥生時代終末期前半、中台1式期に帰属すると思われる。他に、遺構写真とメモには床面上での、明確な外反口縁を持つ高杯（もしくは装飾器台）杯部と見られる破片と、3孔脚部を持つ完形の小型器台の出土が記録されているが、対応する遺物は不明である（図版50）。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

2棟の竪穴建物跡は、SI0166→SI0144の順に構築されたと推定できる。SI0166は弥生時代後期後半から終末期前半と見られるSI0150を切って構築された可能性があることから、両遺構とも弥生時代終末期前半に構築されたと考えられる。

SI0145（第200・201図、図版50・51・155・156・212・213・299・305・332）

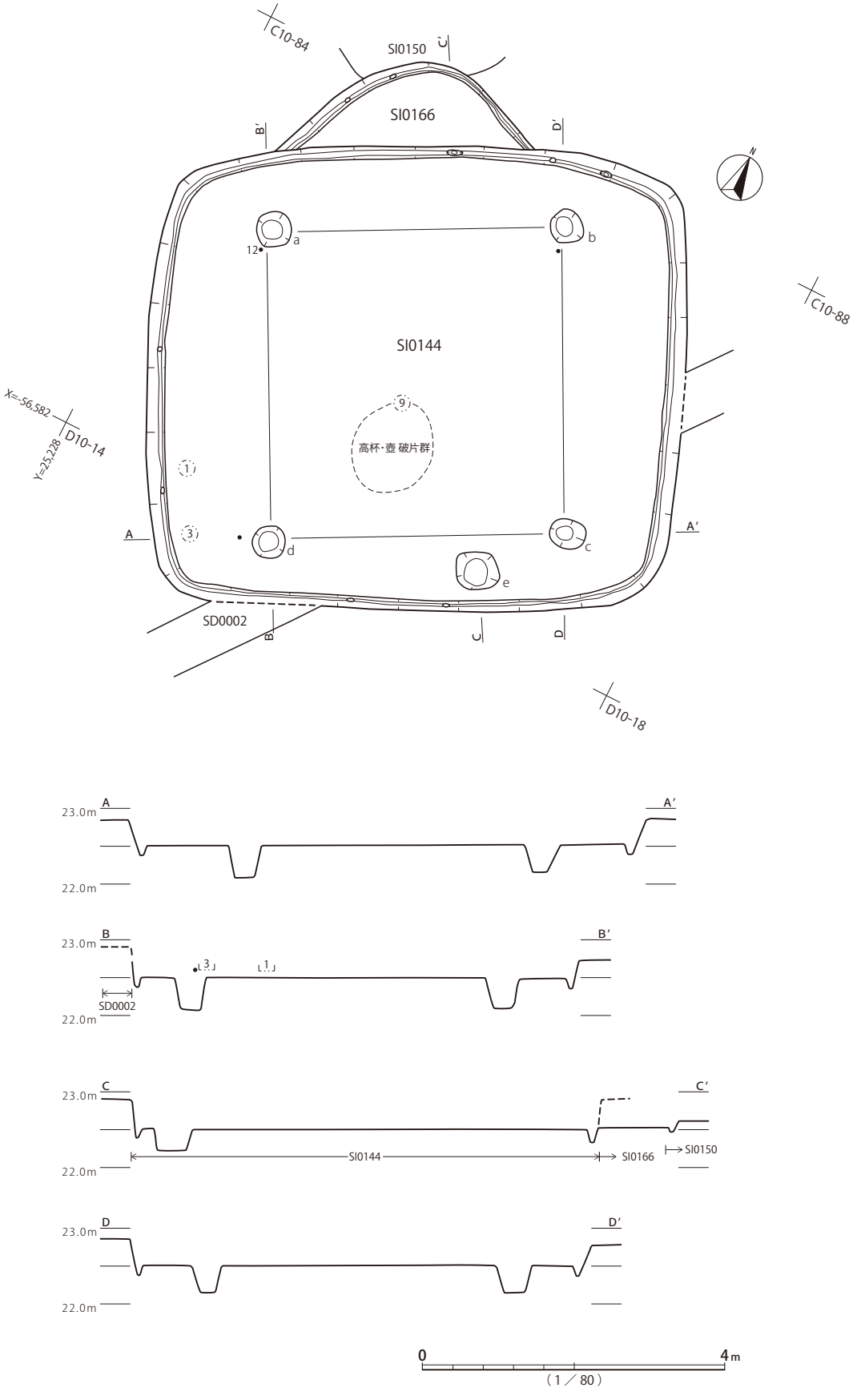
5.1×4.9m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインに接しない内側に楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、中央付近ほど堅く踏み固められている。床面周溝は全周し、疎らに小穴が伴う。小穴は壁面を掘り込み、傾斜して穿たれるものが目立つ。

覆土は、概ね漸移的な堆積状況が見て取れるが、一部に炭化材が検出されており、廃絶過程で火を受けた可能性も考えられる。

遺物は、床面上から覆土下層にかけて、弥生時代終末期の過渡的な特徴を示す土器が出土している。甕1・4、転用甑2・3は胴部最大径が口縁径を上回り、口頸部高の割合も小さい。甕（壺）5は非在地的な輪台技法による底部を持つ。壺6は安房形装飾壺由来の網目状撚糸文を施されながら二重外反口縁という特徴的な形状を併せ持つ。東側床面周溝内から出土した素口縁無文小型鉢12は、無文肥厚口縁の椀11と共に、無文化の進んだ過渡的な様相である。いずれも概ね、弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。他に、手びねりで作られた不定形の土製品15、軽石製砥石16が出土している。

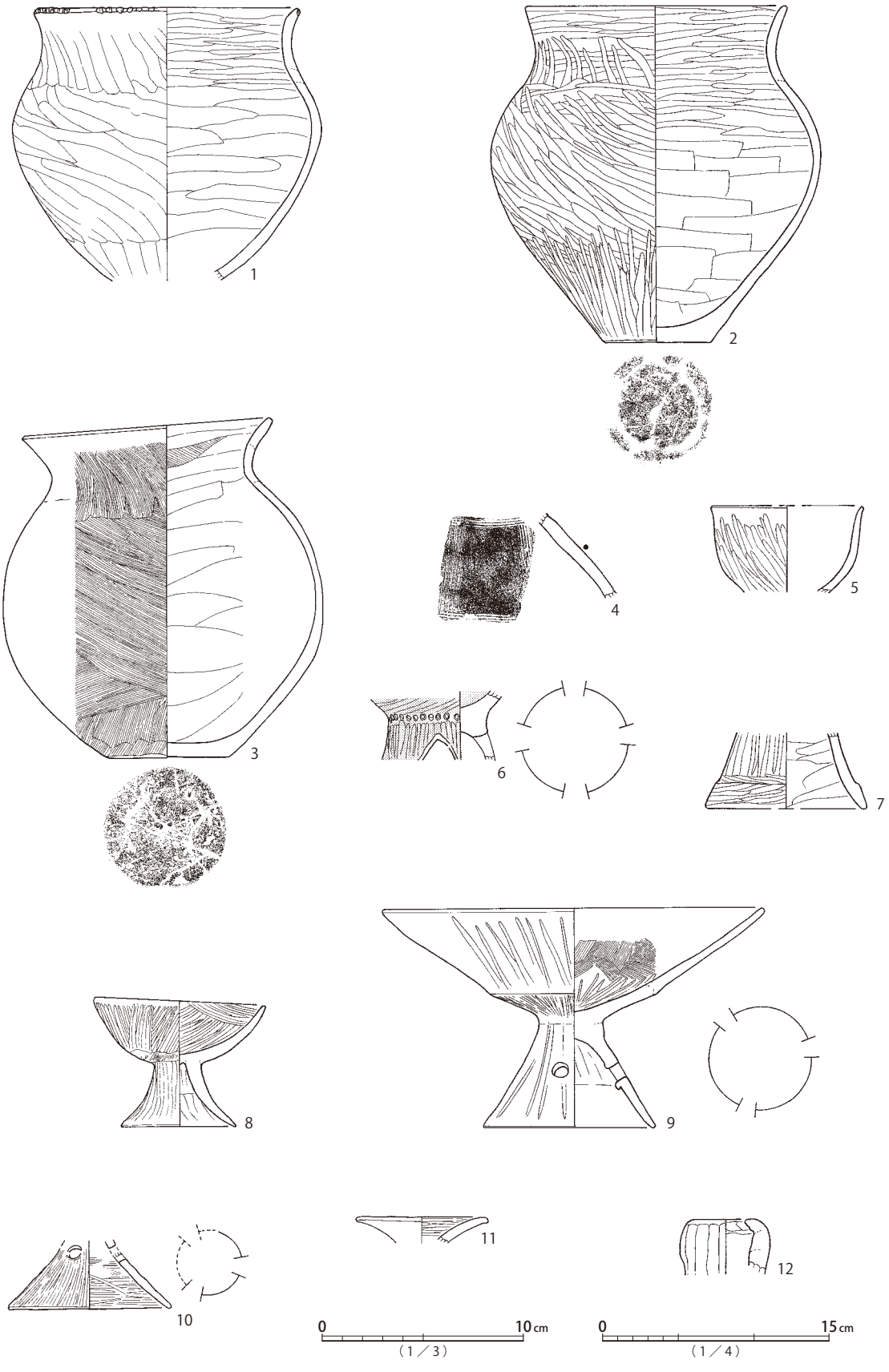
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI0144・0166



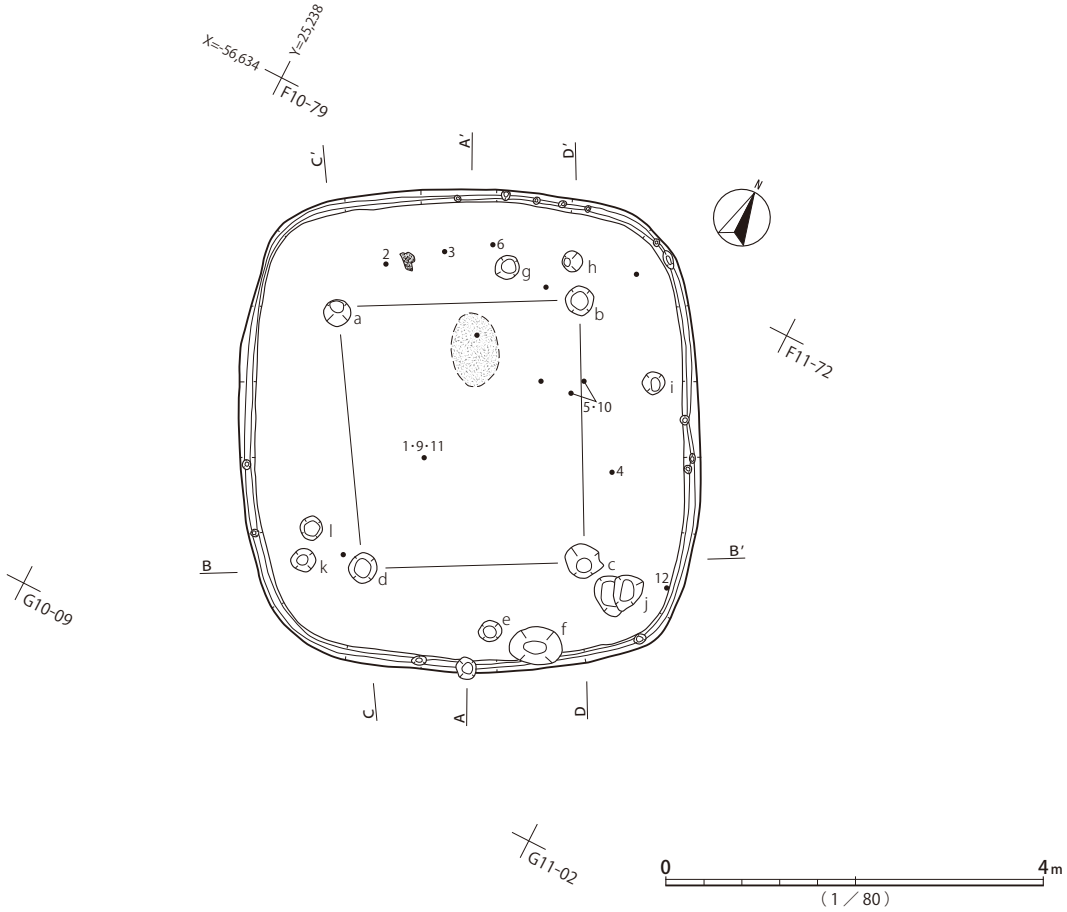
第198図　SI0144・SI0166遺構

SI0144・0166



第199図　SI0144・SI0166遺物

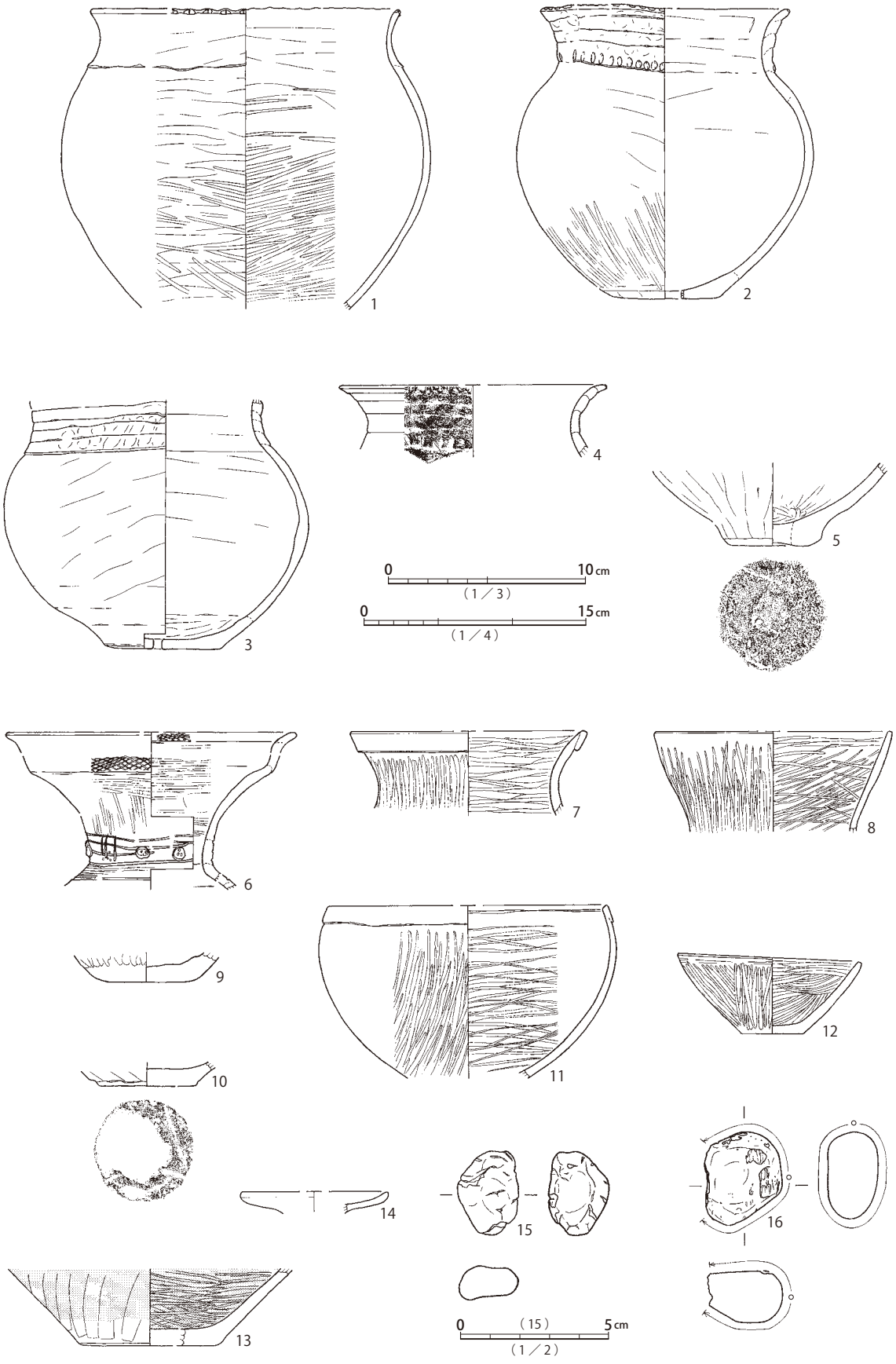
SI0145



1　黒褐色土　ローム微粒
2　褐色土　ローム粒
3　焼土

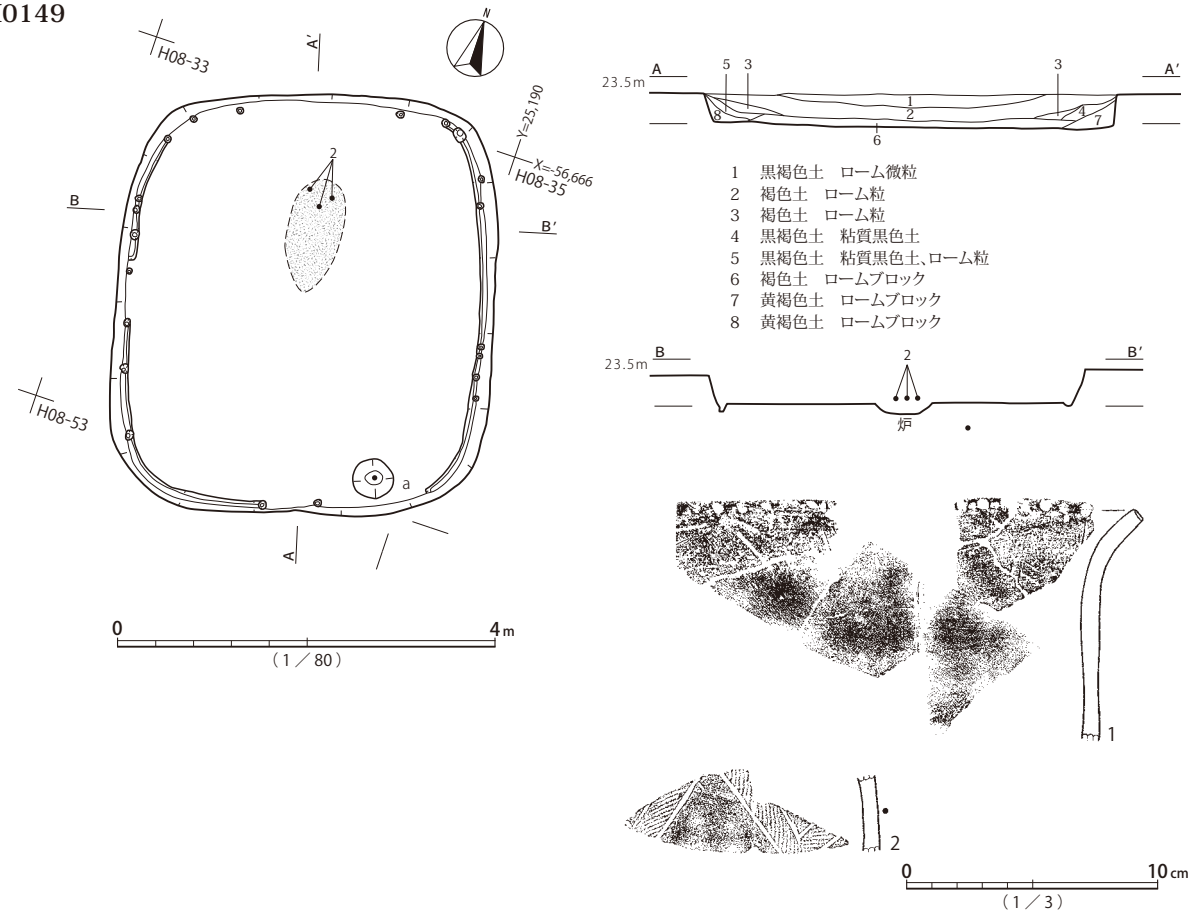
第200図　SI0145遺構

SI0145



第201図　SI0145遺物

SI0149



第202図　SI0149遺構・遺物

SI0149（第 202 図、図版 52・213）

4.5 × 4.0m、深さ 35cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。SM1086方台部内に位置する。主柱穴は認められず、貯蔵穴と思われるaのみが検出されている。中心軸上、北寄りに長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は北辺と西・南辺の一部を除いて巡り、疎らに小穴が伴う。

覆土は、最下層壁際にロームブロック混じりの黄褐色土による初期堆積があり、以後は上層へ漸移的に堆積の進んだ状況が窺える。

遺物は、出土量が少なく詳細な位置記録を持つ資料はないが、炉内に壺破片が検出されたとの記述があり、壺2がそれに当たると考えられる。また、貯蔵穴a内から土器1点が出土したとされるが、甕1と対応するかは確定できない。いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原式に相当すると思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI0150・SI0152（第 203・204 図、図版 52・53・156・213・214・305・332）

3.8 × 3.3m、深さ 15cm程度の不整楕円形竪穴建物跡SI0150と、7.1 ？ × 6.2m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI0152である。SI0150の北西部がSI0152南東角に接するように一部が重複する。SI0152の北辺は、現代道路により破壊されている。SI0150の南辺はSI0166と切り合う。諏訪台1号墳の南側外縁にあたり、検出面が削平されている可能性がある。

SI0152は主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸とa・b間ラインが交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められている。柱間内部から南西部にかけて顕著に硬化する。床面周溝は遺存部に全周し、小穴が疎らに伴う。図化されていないが、南西辺南寄りに間仕切り溝と思われる小溝が検出されたとの所見が残る。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、南東部に床面から5～15cmの高さに焼土層が検出されている。廃絶過程で火を受けたと見られる。

遺物は、床面上などから後期弥生土器を中心に出土している。甕6、壺8・9、高杯（鉢）13が床面近くから、壺11が炉内で検出されている。2帯の沈線区画縄文横帯が施される小型壺12も、出土レベルの記録が無いため不確定だが、メモ類から炉内で検出されたと推定できる。いずれも、概ね弥生時代後期前半、久ヶ原2式に相当すると見られる。結節文区画横帯の壺10と古式土師器高杯14は一括取り上げ資料であり、上層覆土への混入品の可能性が高い。その他、軽石製砥石15が出土している。なお、南東壁近くで石斧の出土が記録されているが対応する資料は確認できない。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原2式期に位置づけられる。

SI0150は、主柱穴等は検出されていない。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅く踏み固められている。床面周溝は伴わず、壁際に小穴が疎らに巡る。

覆土の詳細は不明だが、床面中央付近に下末吉層由来と見られる粘土ブロックが検出されている。

遺物は、北西部床面より小型壺2、蓋もしくは浅鉢3、小型鉢4が出土している。いずれも無文で弥生土器の特徴は乏しいが、古墳時代前期前半、草刈式に位置づける積極的要素もないため、弥生時代後期後半、山田橋2式から、弥生時代終末期前半、中台1式に相当すると思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から同終末期前半の所産と推定する。

2棟の竪穴建物跡は、弥生時代後期前半のSI0152→弥生時代後期後半から同終末期前半のSI0150の順に構築されたと考えられる。SI0150と切り合う隅円方形竪穴建物跡SI0166については、SI0150が先行すると推定する。

SI0151（第205図、図版52・213）

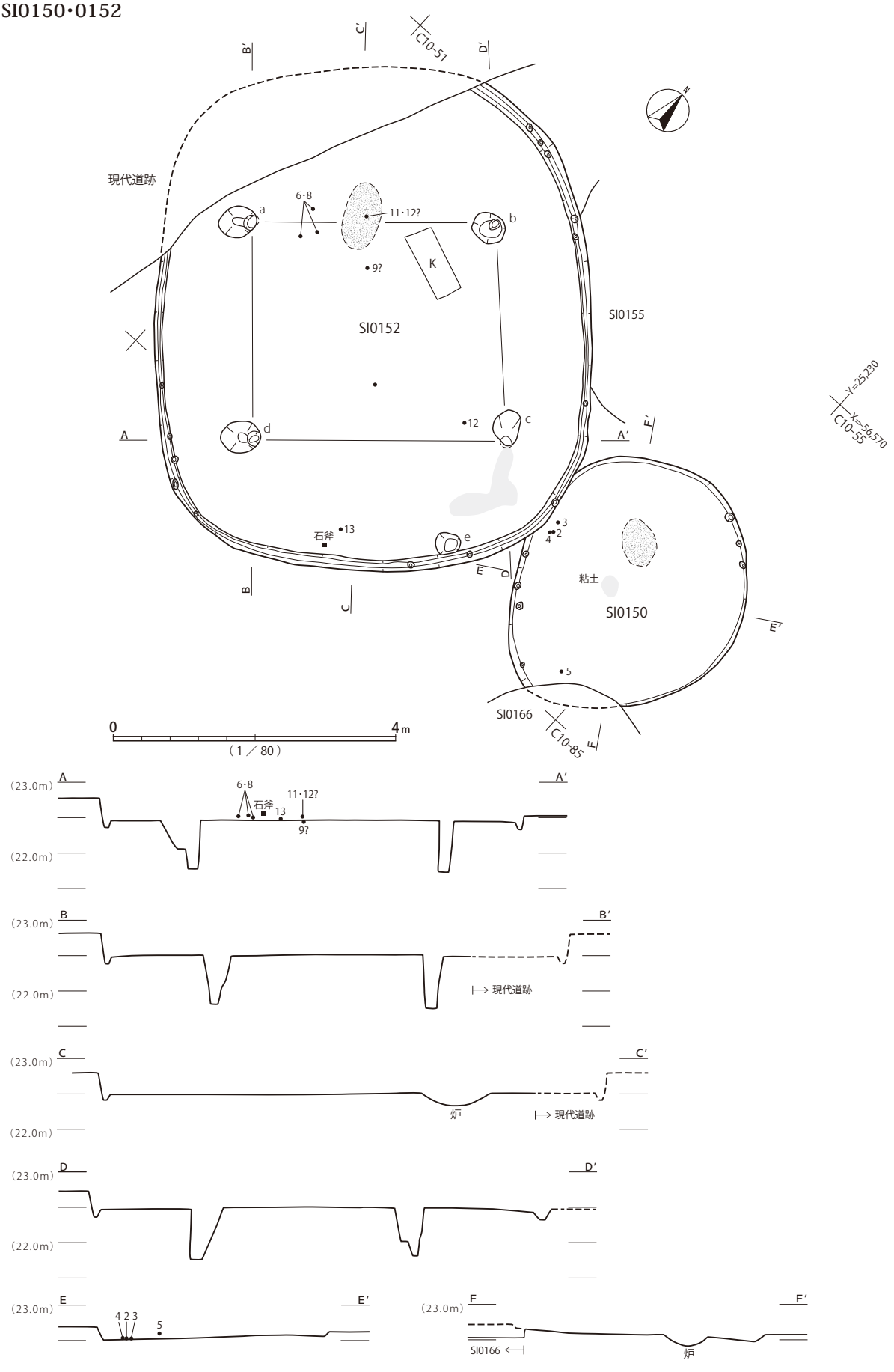
3.8×3.8m、深さ15cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。東辺を地下式土坑墓SK1に破壊され、北辺もイモ穴による撹乱を受ける。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるaが検出されている。中心軸上、大きく北によって楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められており、中央部の硬化が顕著である。床面周溝は遺存部で全周し、小穴が南西部を除き疎らに巡る。小穴の一部は壁面を掘り込んで穿たれている。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土の検出記録はないため、漸移的な堆積過程を経たものと思われる。

遺物は、床面上から小型甕1と外面肥厚口縁の鉢2が出土した可能性が高い。いずれも弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

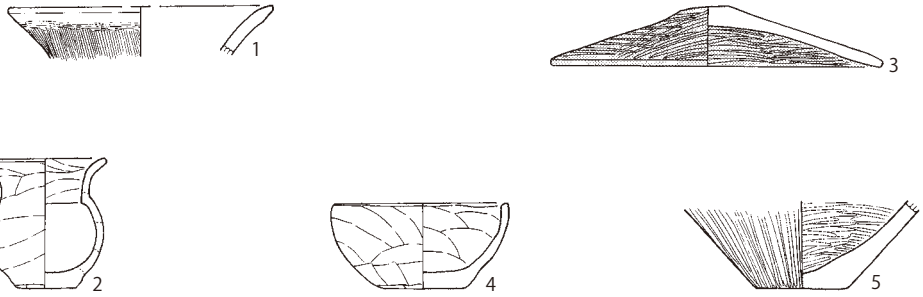
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0150・0152

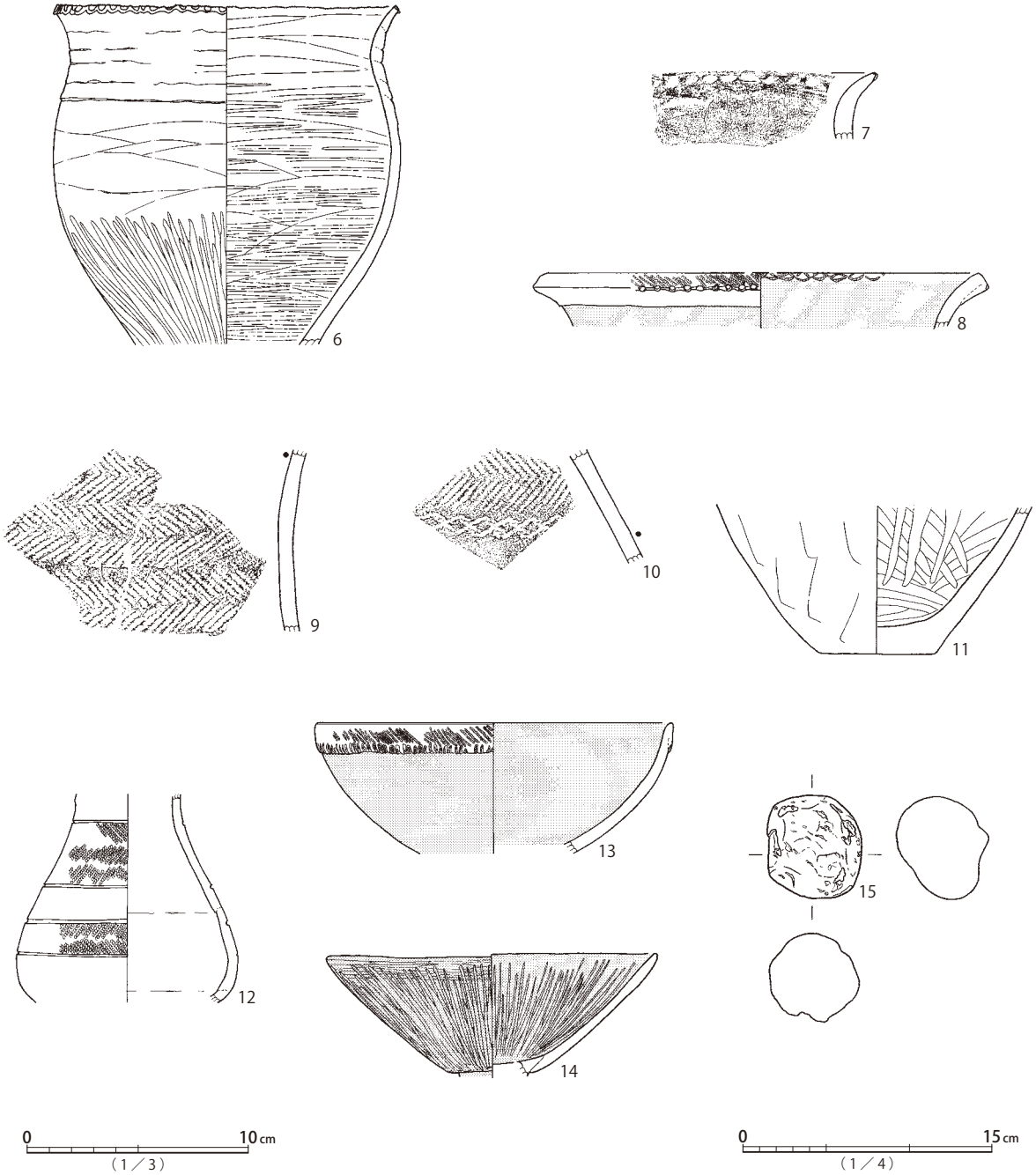


第203図　SI0150・SI0152遺構

SI0150

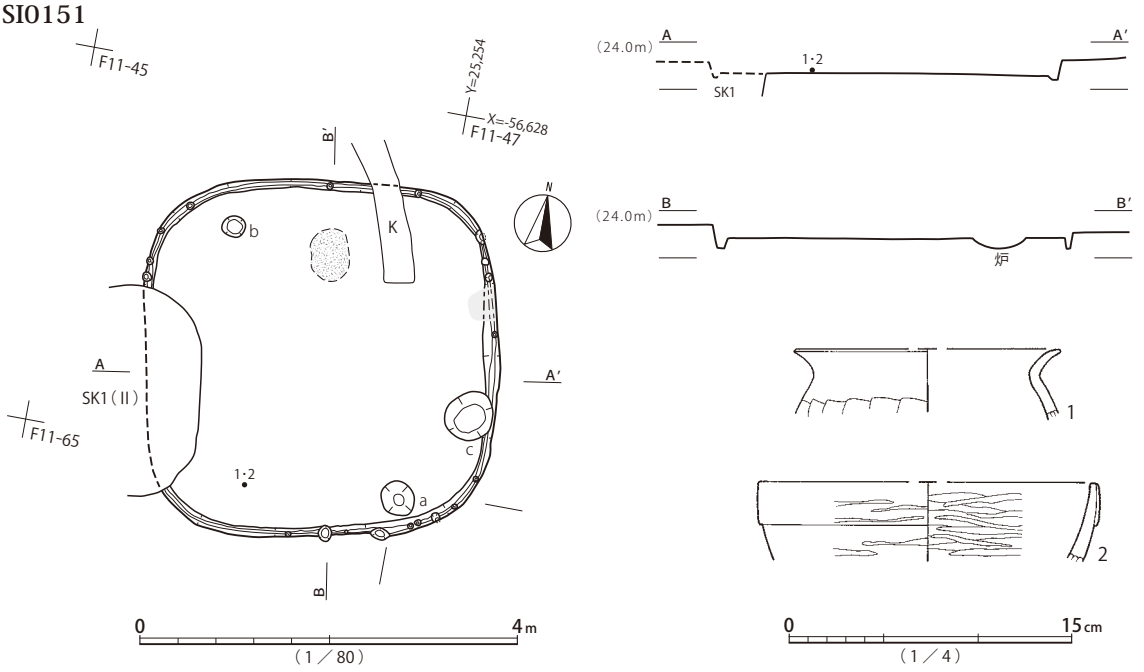


SI0152



第204図　SI0150・SI0152遺物

SI0151



第205図　SI0151遺構・遺物

SI0153・SI0154（第 206・207 図、図版 53・156・214・299・305・332）

4.4 × 4.0 ？ m、深さ 15cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0153と、4.2 × 3.8 ？ m、深さ 25cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI0154である。両遺構とも平面図が確認できないため、写真・メモ類から形状を推定復元している。SI0153の北東部とSI0154の南西部が広く重複している。SI0154の北東側は諏訪台1号墳突出部近くの現代道に破壊されている。

SI0153は、明確な主柱穴は捉えられず、貯蔵穴等の可能性があるa・bのみ検出されている。炉はSI0154との重複部に設けられていた可能性がある。床面はソフトローム層に形成され、外周部を除き比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は伴わない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土についても記録が無く、漸移的な堆積過程を想定できる。

遺物は、古式土師器を主体とした土器が出土している。口縁端部が交互押捺で装飾される甕1と外面肥厚口縁の壺9は弥生時代後期に位置づけられる可能性があるものの、ハケメ調整を持つ甕2・3・4、素口縁無文鉢11等は弥生時代終末期、中台式から古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。土器の他には、不明棒状土製品13、輝石安山岩製礫石器14が出土している。

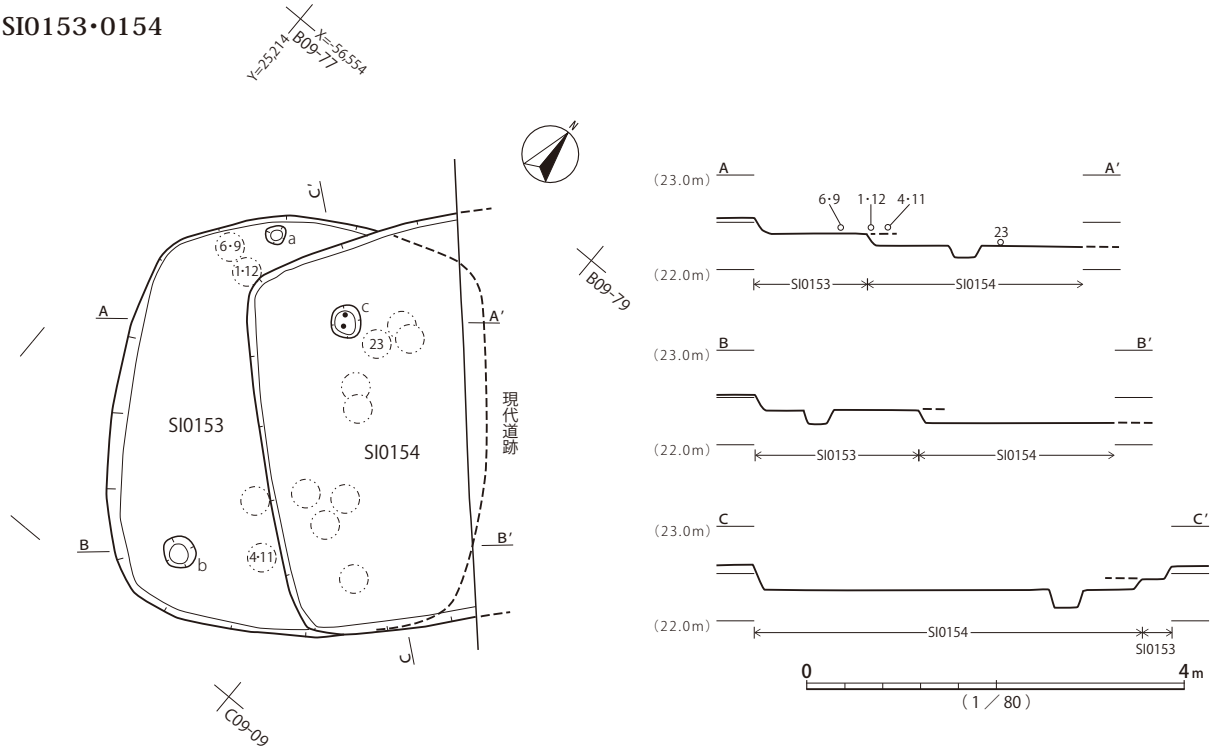
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI0154は、主柱穴とおぼしきcが検出されているが、他の柱推定位置に穴は認められない。遺存範囲内には炉も検出されていない。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。

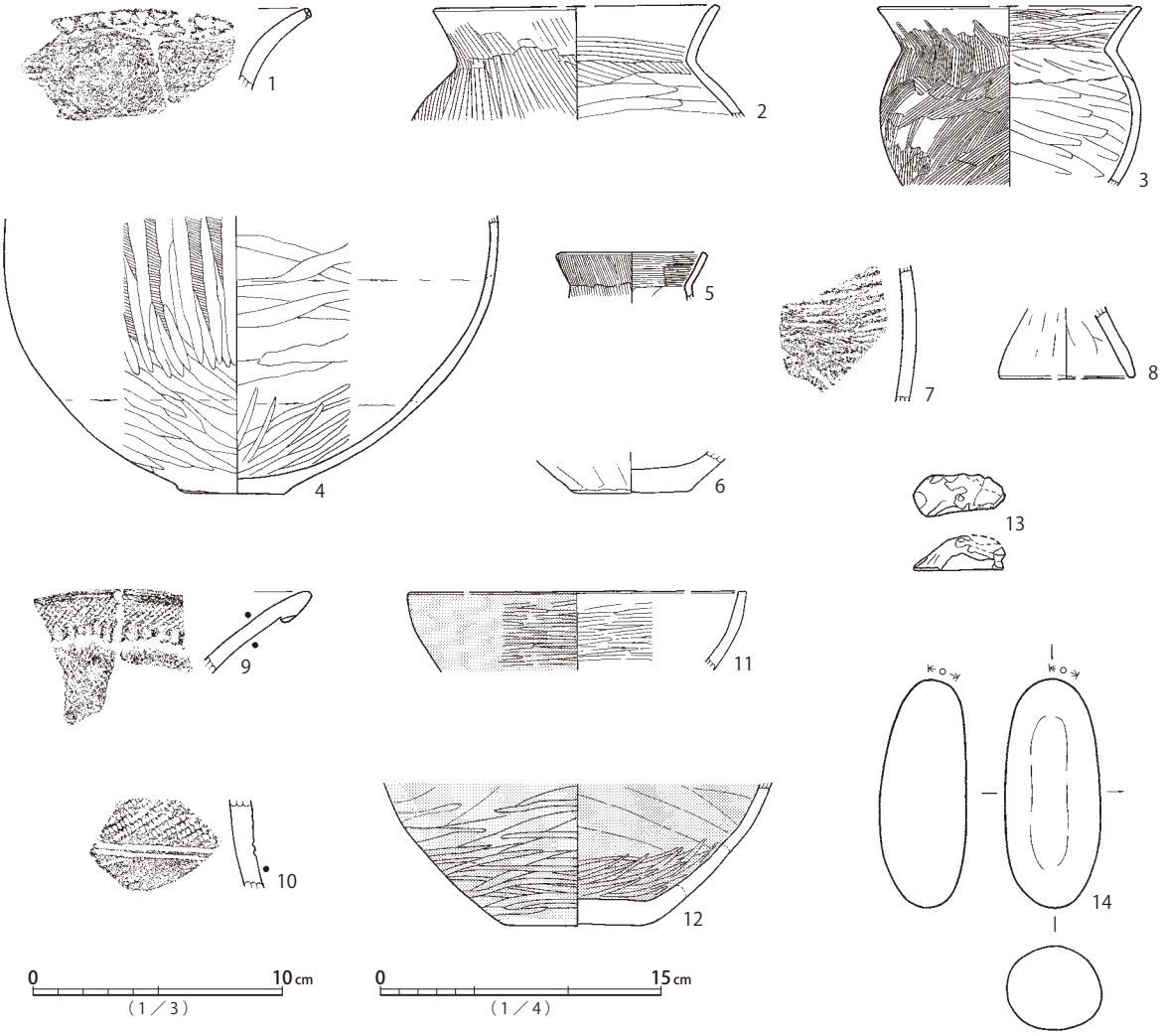
覆土は、様相が不明だが、焼土等に関する記述もなく、漸移的な堆積状況が推定される。

遺物は、弥生土器・古式土師器が混在して出土している。位置記録はないものの、小型甕16は遺物注記から南部床面上10cmの高さで検出された可能性がある。無文素口縁壺20は、口縁端部端面が平坦で頸部屈曲がなだらかな特徴を示すことから、小型甕16と合わせ、弥生時代終末期、中台式

SI0153・0154

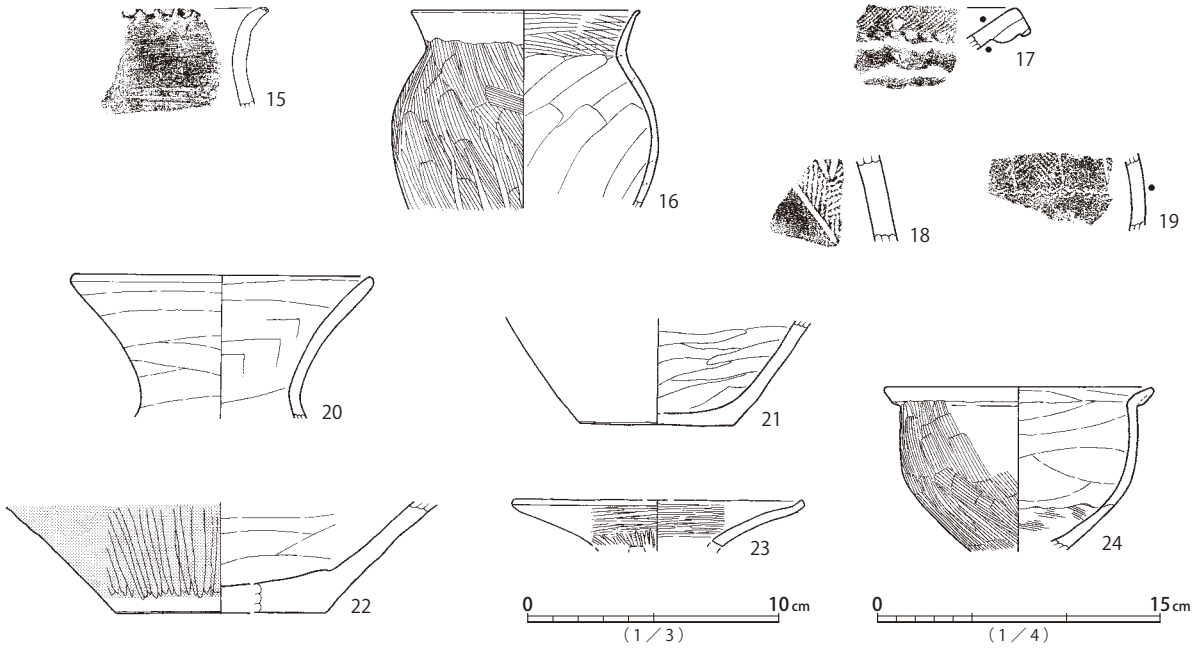


SI0153



第206図　SI0153・SI0154遺構、SI0153遺物

SI0154



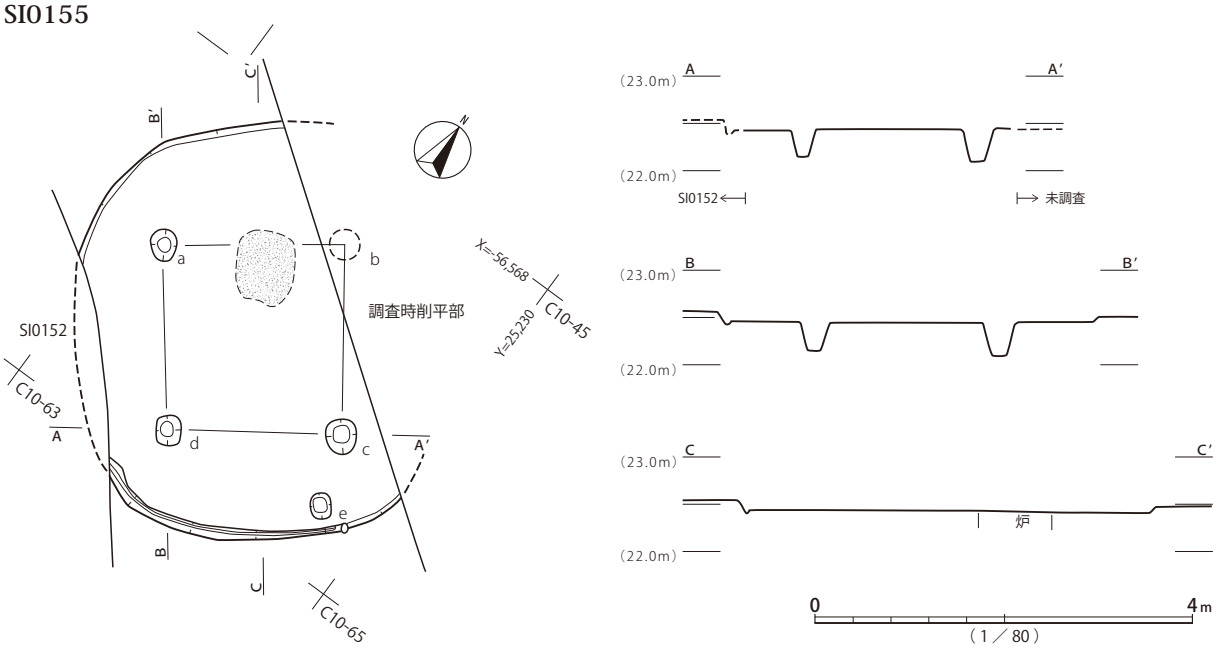
第207図　SI0154遺物

から古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。器台受部と見られる23、折り返し状口縁鉢24も同様に考えられる。他に、遺構写真によると、ピットc内から、壺もしくは甕下半部と見られる破片と、受部の欠損する小型器台が出土しているが、対応する遺物は不明である（図版53）。

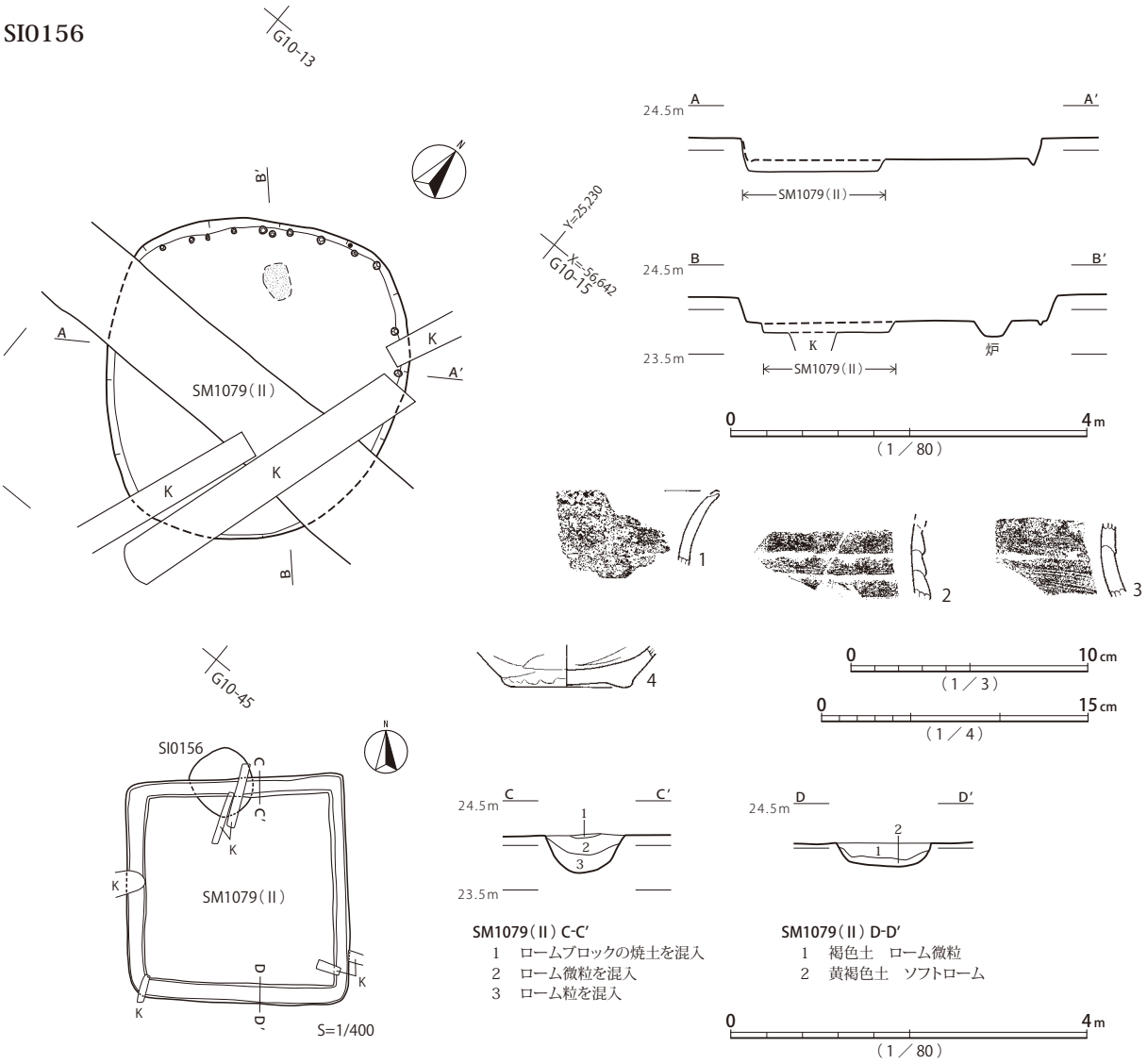
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半に帰属すると考えられる。

2棟の竪穴建物跡は、弥生時代終末期のSI0153→弥生時代終末期後半から古墳時代前期前半のSI0154の順に構築されたと見られる。

SI0155



第208図　SI0155遺構



第209図　SI0156遺構・遺物

SI0155（第 208 図、図版 53）

4.4 × 4.0 ？ m、深さ 5cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。平面図が確認できないため、写真等から形状を推定復元している。北東部3分の1程度が諏訪台1号墳外周にあたり、調査時には削平されている。遺存部には、主柱穴a・c・d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸と推定柱筋が交差する位置に方楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、堅緻に踏み固められる。

覆土は削平により遺存状態が悪く、詳細も不明である。

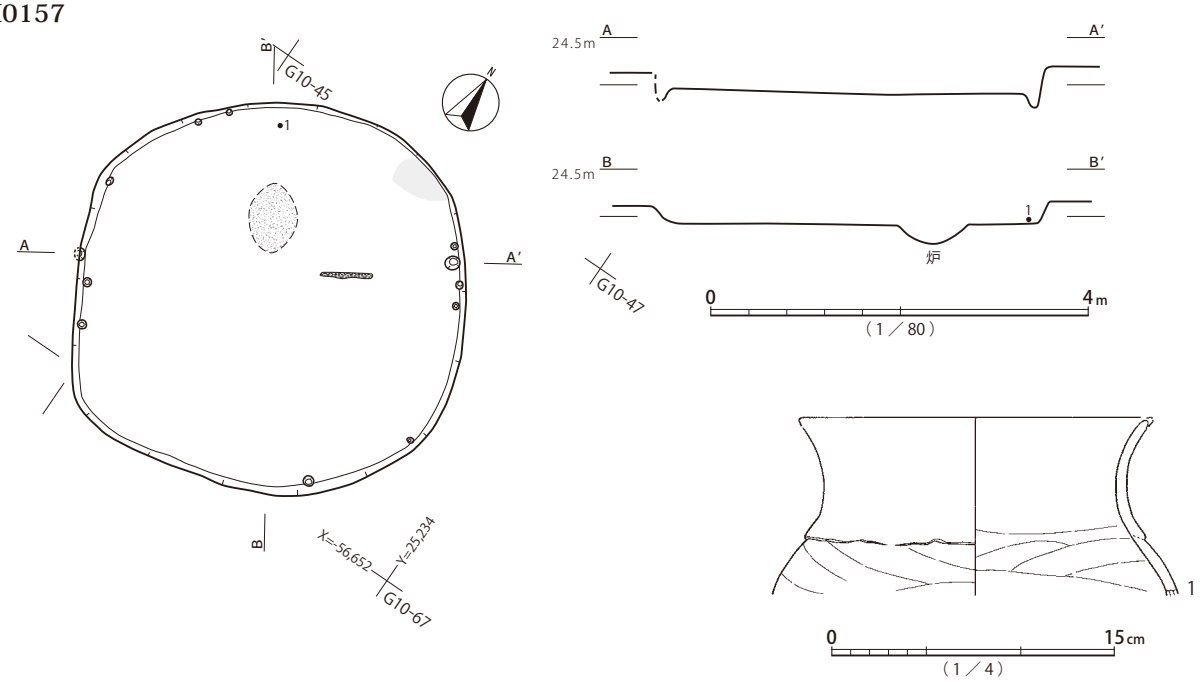
遺物は、弥生土器と見られる小片が出土したとの記述があるが、実測対象遺物はない。

本遺構は、平面形から、弥生時代後期から弥生時代終末期に属するものと思われる。

SI0156（第 209 図、図版 53・54・214・332）

3.6 × 3.4m、深さ 25cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。SM1079北周溝が東西方向に横断し、床面まで掘り込まれるのに加え、イモ穴による撹乱も受けている。主柱穴等は見られず、中心

SI0157



第210図　SI0157遺構・遺物

軸上の北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、平坦だが軟質である。床面周溝は見られず、北側壁際に小穴が並ぶ。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土等について記述が無いため、漸移的な堆積過程を経た可能性がある。

遺物は、一括取り上げ資料として少量の弥生土器が出土している。甕1・2・3・4は、いずれも弥生時代後期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から弥生時代後期の所産と推定される。

SI0157（第 210 図、図版 54・214）

4.2 × 4.2m、深さ 25cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。SM1079 方台部内に位置する。主柱穴等は検出されていない。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は見られず、まばらに小穴が巡る。小穴の一部は壁面を掘り込んで穿たれている。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土と炭化材が検出されている。図示されていないが、炉の北西側にも放射状に炭化材が3箇所認められたとのメモが残る。廃絶過程で焼却処分により火を受けた可能性が高い。

遺物は、甕1が北西壁際の床面から出土している。弥生時代後期中葉に位置づけられる。他に遺構写真によると、5cm程度の軽石が炭化材脇の床面で検出されているものの、対応遺物は不明である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

SI0158（第 211 図、図版 54・214）

4.7 × 4.2m、深さ 45cm程度の楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期のSS1 北西周溝が北部で重複し、部分的に床面まで破壊されている。主柱穴と炉は認められず、ハシゴ穴の可能性がある a

と貯蔵穴bが検出されるのみである。床面はソフトローム層に形成され、堅く踏み固められている。床面周溝は見られず、壁際には小穴が疎らに巡る。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、床全面に約10cm厚さで焼土層が検出されたとの所見が残る。建物に由来する炭化材が放射状に検出され、一部は小穴に対応する位置に見受けられる、とも記述される。平面図に記録された焼土・炭化物は床面近くに遺った一部分と考えられる。

遺物は、後期弥生土器が覆土中から出土している。甕1・2・3・4・5、壺6、鉢7のいずれも、弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。甕2・3・5は床面から10cm以上高い位置で検出されており、焼土層の上位にあったと見られる。床面近くにおける遺物の不在と、広範囲の焼土層と放射状の炭化材の検出を勘案すると、火を伴う廃絶過程は竪穴内が片付けられた後の人為的な焼却処分であったと考えられる。なお、ハシゴ穴aの西側に「鉄」と記された出土遺物範囲が記録されているものの、対応する遺物は不明である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半に位置づけられる。

SI0159（第212・213図、図版54・156・215・332・333）

4.9×4.6m、深さ40cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期のSS2北周溝と南辺が重複し、床面以下まで破壊を受けている。遺存部で主柱穴a～cが検出されている。中心軸と、a・b間ラインの交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。炉の中ほどには大型壺体部片を転用して埋め込まれている。床面はソフトローム層に形成され、堅く踏み固められている。床面周溝は北西・北東で連続する他は断続的に巡り、小穴が疎らに伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、西角付近に厚さ10cmの焼土層が検出されており、廃絶過程で火を受けた可能性が高い。遺物の出土状況からも焼却処分等、人為的な過程が示唆される。

遺物は、炉の周辺に集中し、床面から下層にかけて検出されている。輪積装飾の甕1、甕底部8、壺11、大型壺17が床面近く、鉢21と高杯脚部24がやや上位から出土している。土器は概ね、弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。結節文区画の鉢22は一括取り上げ資料であり、覆土の堆積が進んだ後の混入品と考えられる。

本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半に位置づけられる。

SI0161（第214図、図版55・215）

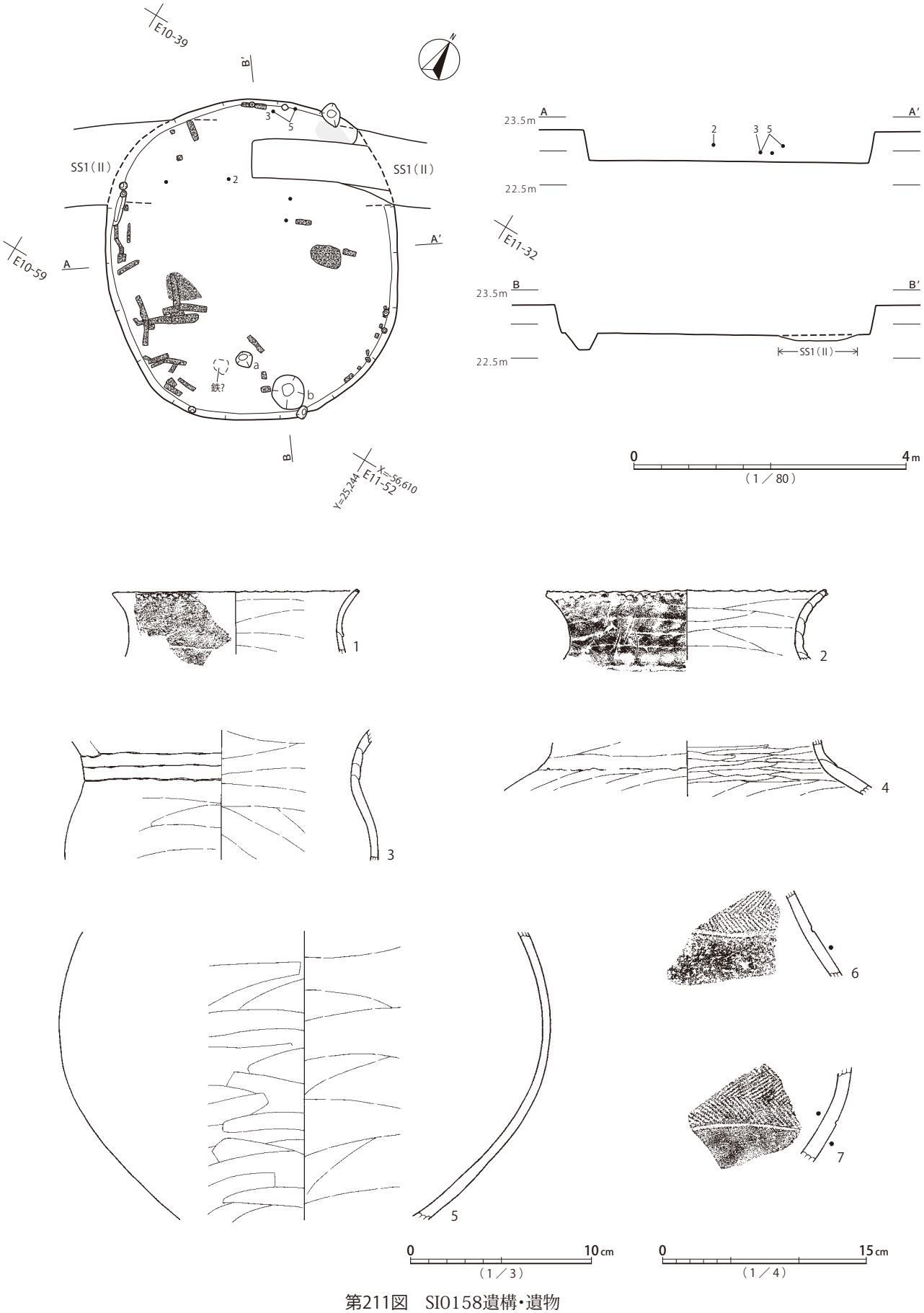
4.2×3.9m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北東角がSM1086周溝に切り込まれている。ハシゴ穴あるいは貯蔵穴と見られるaのみが検出されている。中心からやや北西に寄った位置に長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、比較的堅緻に踏み固められている。床面周溝は伴わず、壁際には小穴が疎らに並ぶ。小穴は壁面を掘り込んで穿たれるものが多い。

覆土は、初期堆積の6層の上面に貼床状の土層が認められることから、埋積が進む前に竪穴内で埋め戻し等の人為的な行為があった可能性が高い。

遺物は、下側のみ自縄結節文で区画される縄文横帯の施される壺1が図示できる程度である。弥生時代後期後半、山田橋2式から、弥生時代終末期前半、中台1式に相当する可能性がある。

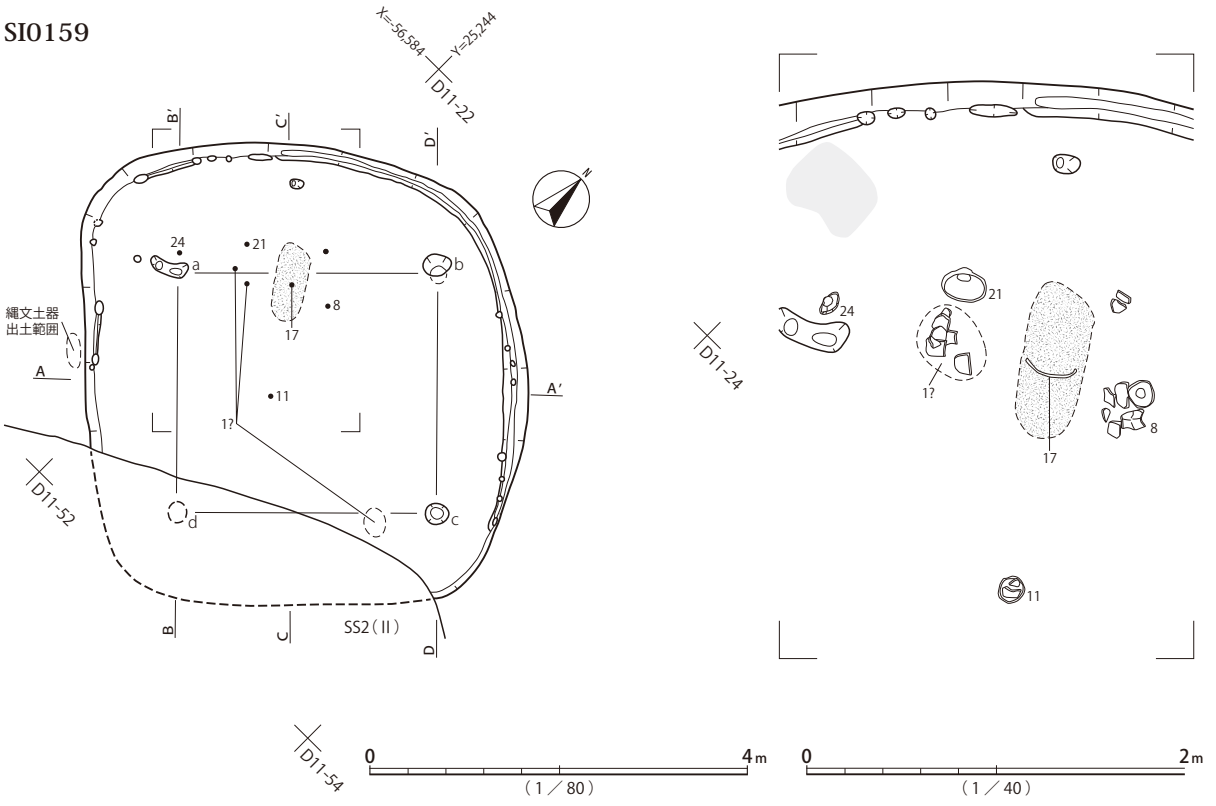
本遺構は、平面形と出土遺物の様相より、弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半の所産と考

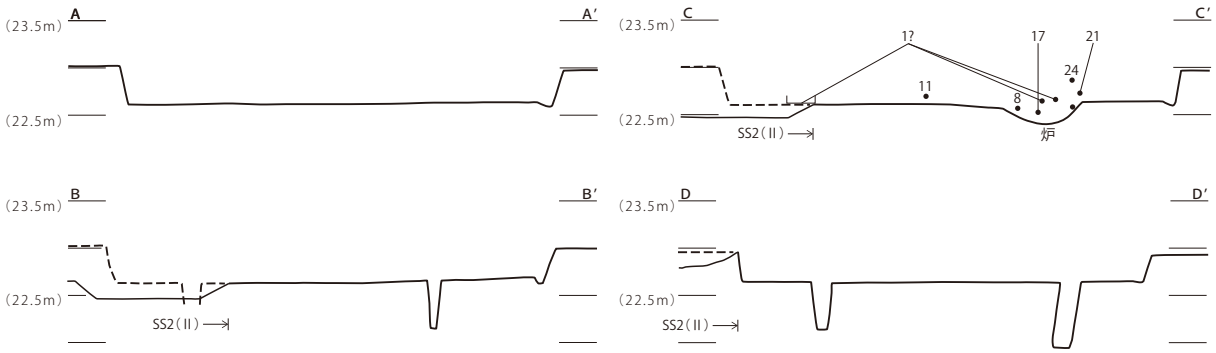
SI0158

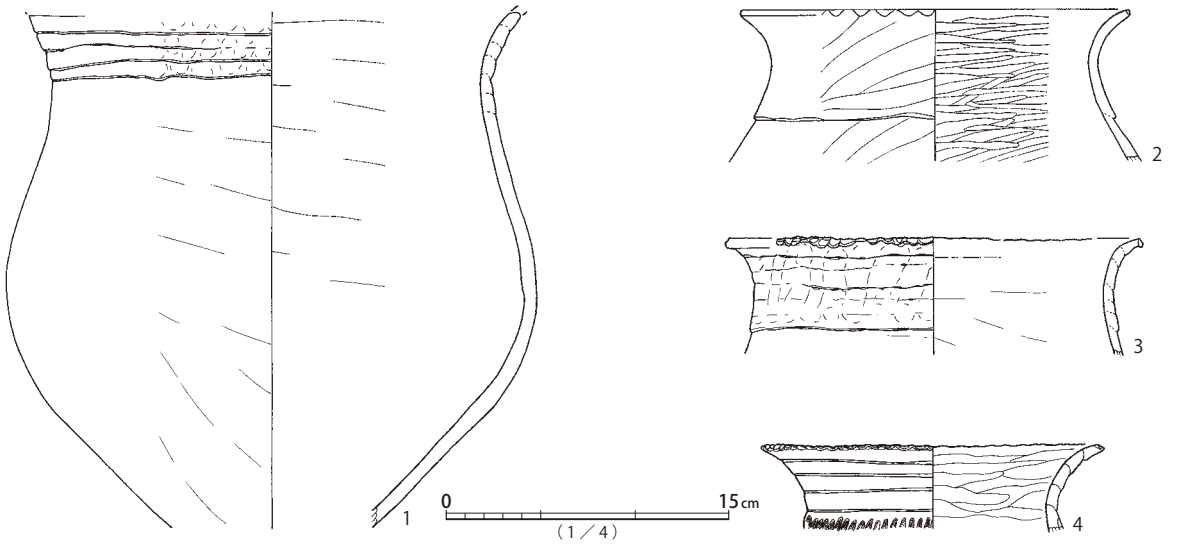


第211図　SI0158遺構・遺物

SI0159

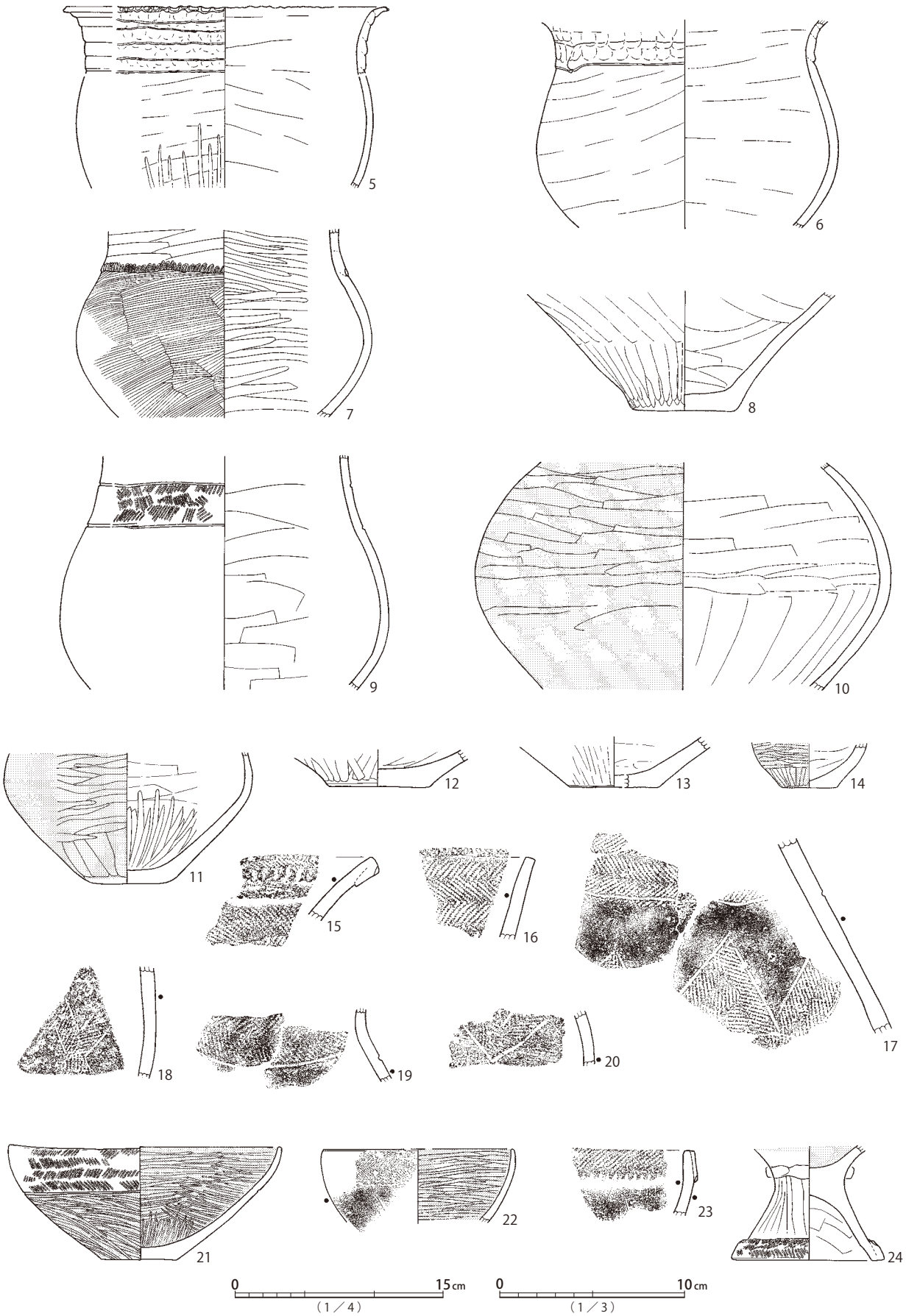




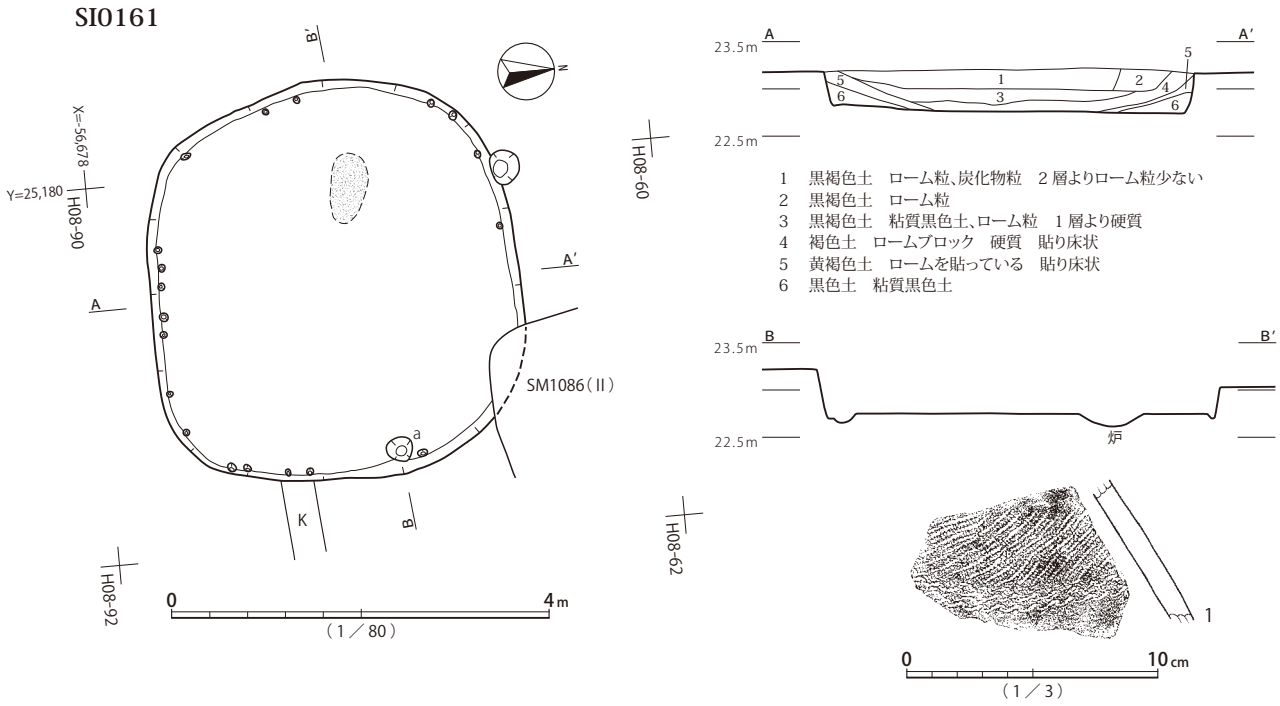


第212図　SI0159遺構、SI0159遺物(1)

SI0159



第213図　SI0159遺物（２）

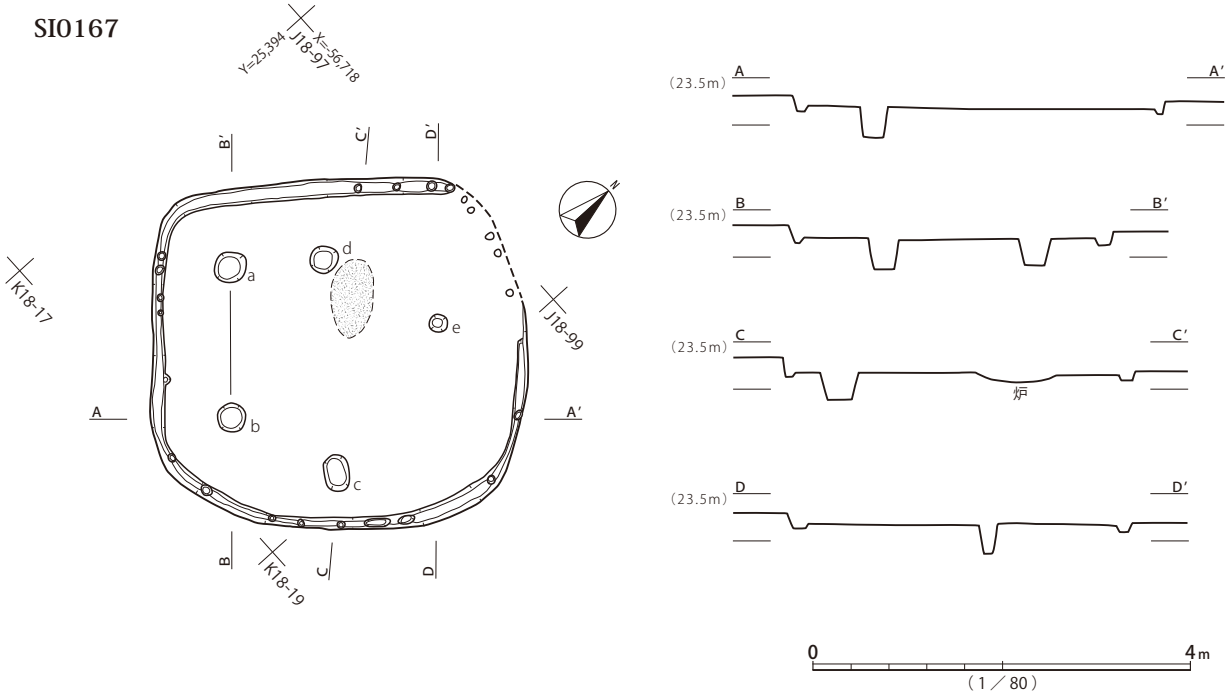


第214図　SI0161遺構・遺物

えられる。

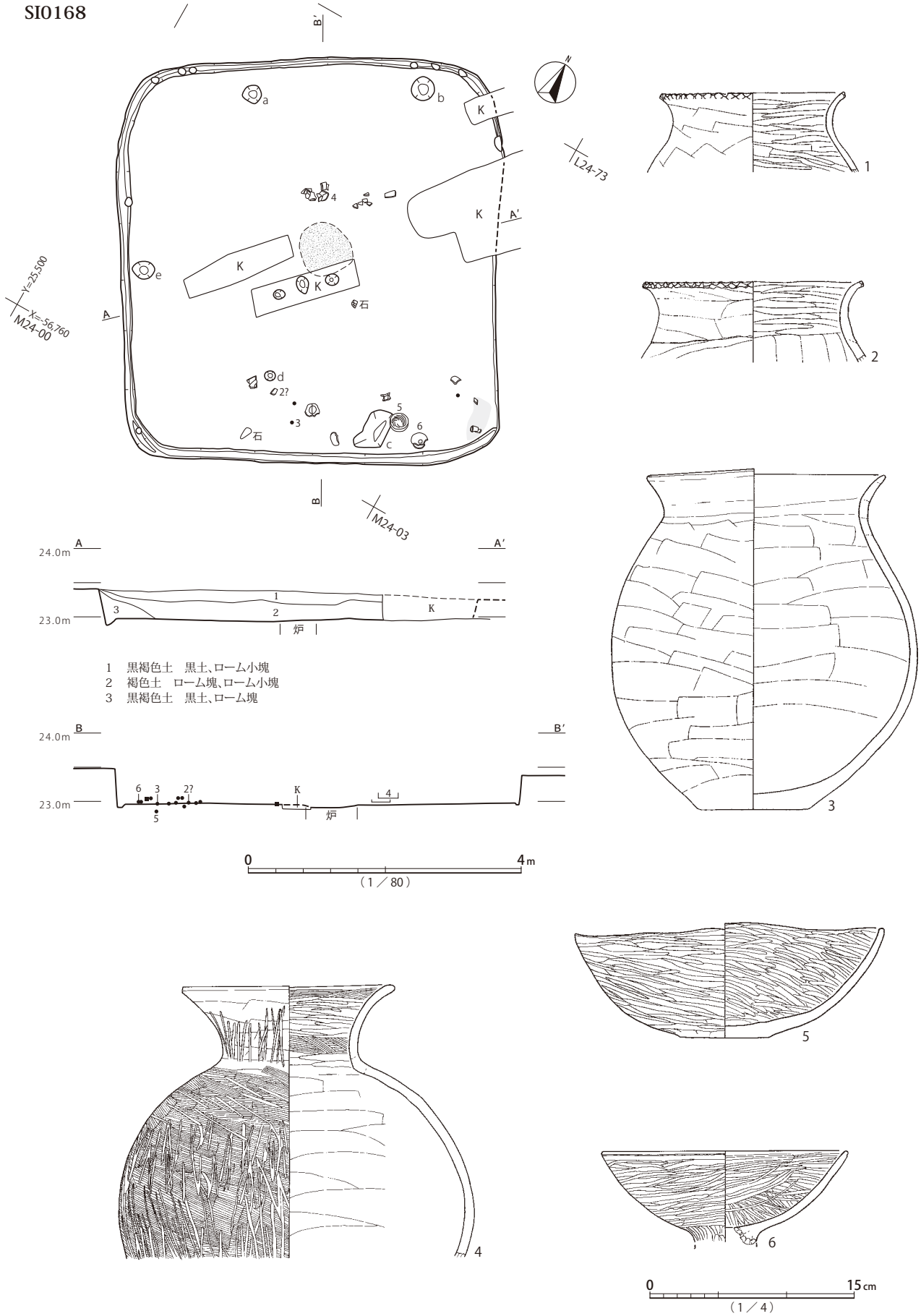
SI0167（第215図、図版55・56）

3.7×4.0m、深さ10cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴と見られるa・b、ハシゴ穴の可能性があるcが検出されている。中心のやや北西寄りに長楕円形の炉が設けられる。床面はソフトローム層に形成され、全体的に軟質だが、炉から出入口側にかけての範囲がV字形に踏み固め

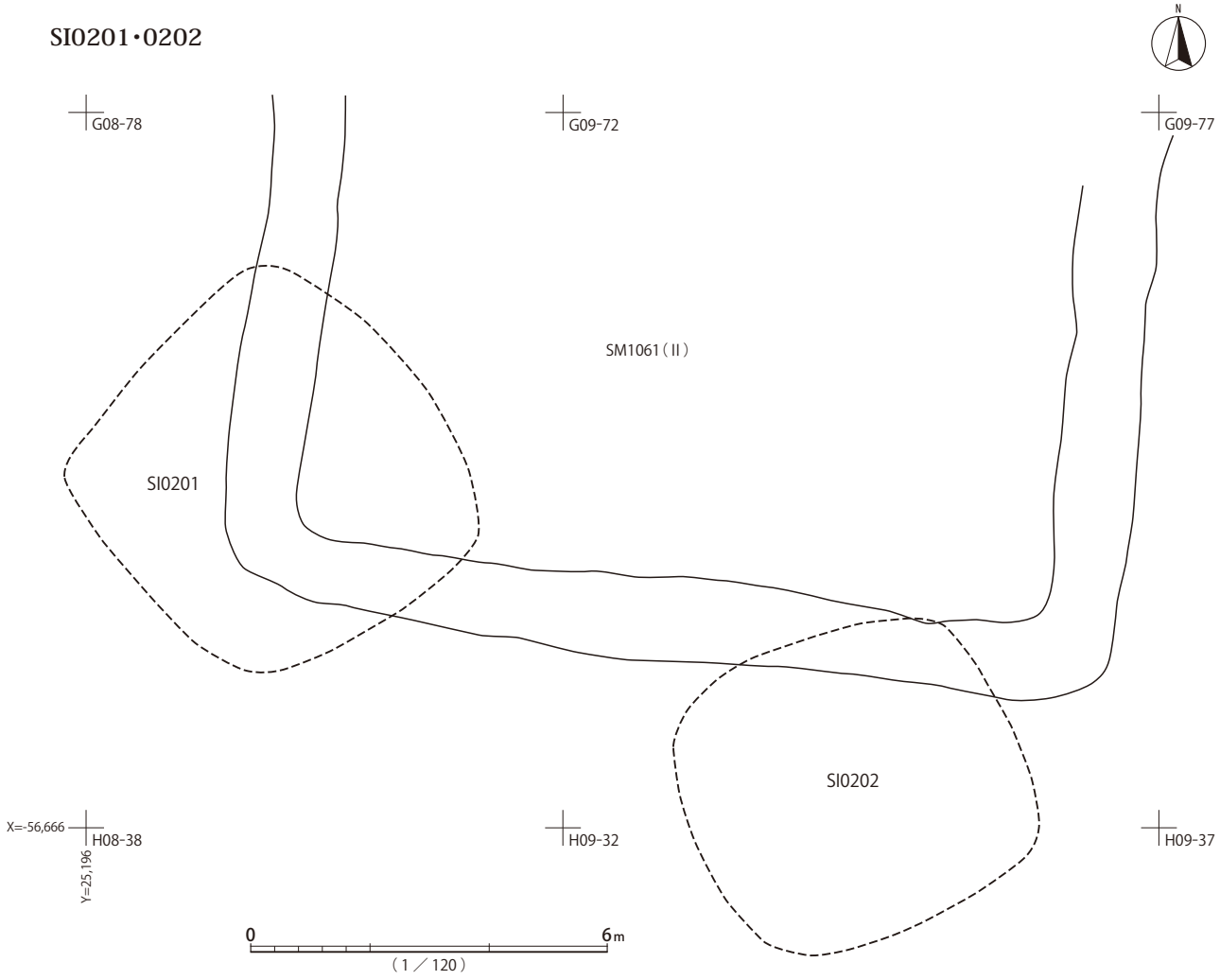


第215図　SI0167遺構

SI0168



第216図　SI0168遺構・遺物



第217図　SI0201・SI0202遺構

られている。床面周溝は北角付近を除いて全周し、断続的に小穴が伴う。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明で、遺物も出土していない。

本遺構は、平面形の特徴から、弥生時代終末期の所産と推定される。

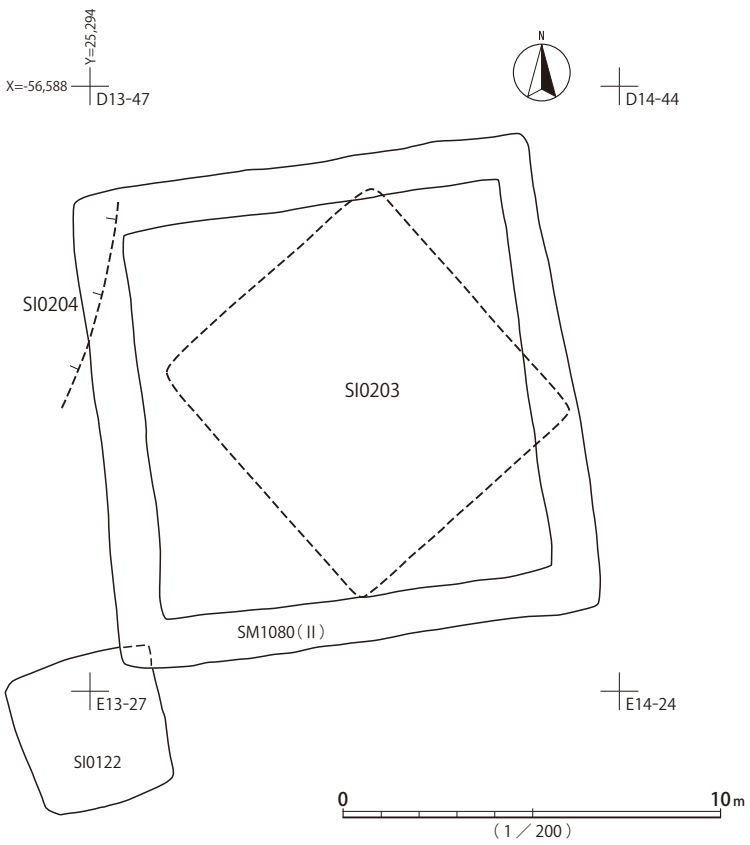
SI0168（第 216 図、図版 56・156・215）

6.0 × 5.7m、深さ 45cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴あるいは貯蔵穴の可能性があるｃとその他の穴が検出されている。北東辺から中央にかけては、イモ穴による撹乱を床面まで受けている。炉はほぼ中央に設けられる。床面はハードローム層に形成され、堅緻に踏み固められており、炉周辺の楕円形範囲が顕著である。床面周溝は北東辺を除いて全周し、西側に小穴が疎らに伴う。

覆土は、黒褐色から褐色を主体とするローム混じりの土である。埋め戻しを示す形跡は認められないが、東角付近に焼土層が検出されており、廃絶過程で火を受けた可能性がある。

遺物は、床面上と最下層から遺存状態の良い土器が出土している。甕1・2は口縁端部が交互押捺で装飾され、弥生土器の特徴を残す。素口縁無文の甕3は一見、古墳時代中期のナデ仕上げの甕に類するが、弥生時代終末期の過渡的な在地系ナデ平底甕である。素口縁の壺4も同様、頸部屈曲に

SI0203・0204



第218図　SI0203・SI0204遺構

鋭さはなく、過渡的な様相である。素口縁丸底杯部の高杯6も含め、いずれも弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。石製品も検出されているが、南壁付近の石は「石器」、中央付近の石は「自然石」と記されており、前者が遺構に伴う石器の可能性があるものの、対応する遺物は確認できない。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に位置づけられる。

SI0201・SI0202（第 217 図、図版 2）

古墳時代終末期以降の方形墳墓SM1061周溝と重複する竪穴建物跡と推定される変色部2箇所である。南西コーナーに当たる方をSI0201、南東コーナー近くの方をSI0202とした。

検出状況のみが記録されており、その後の調査成果は不明である。

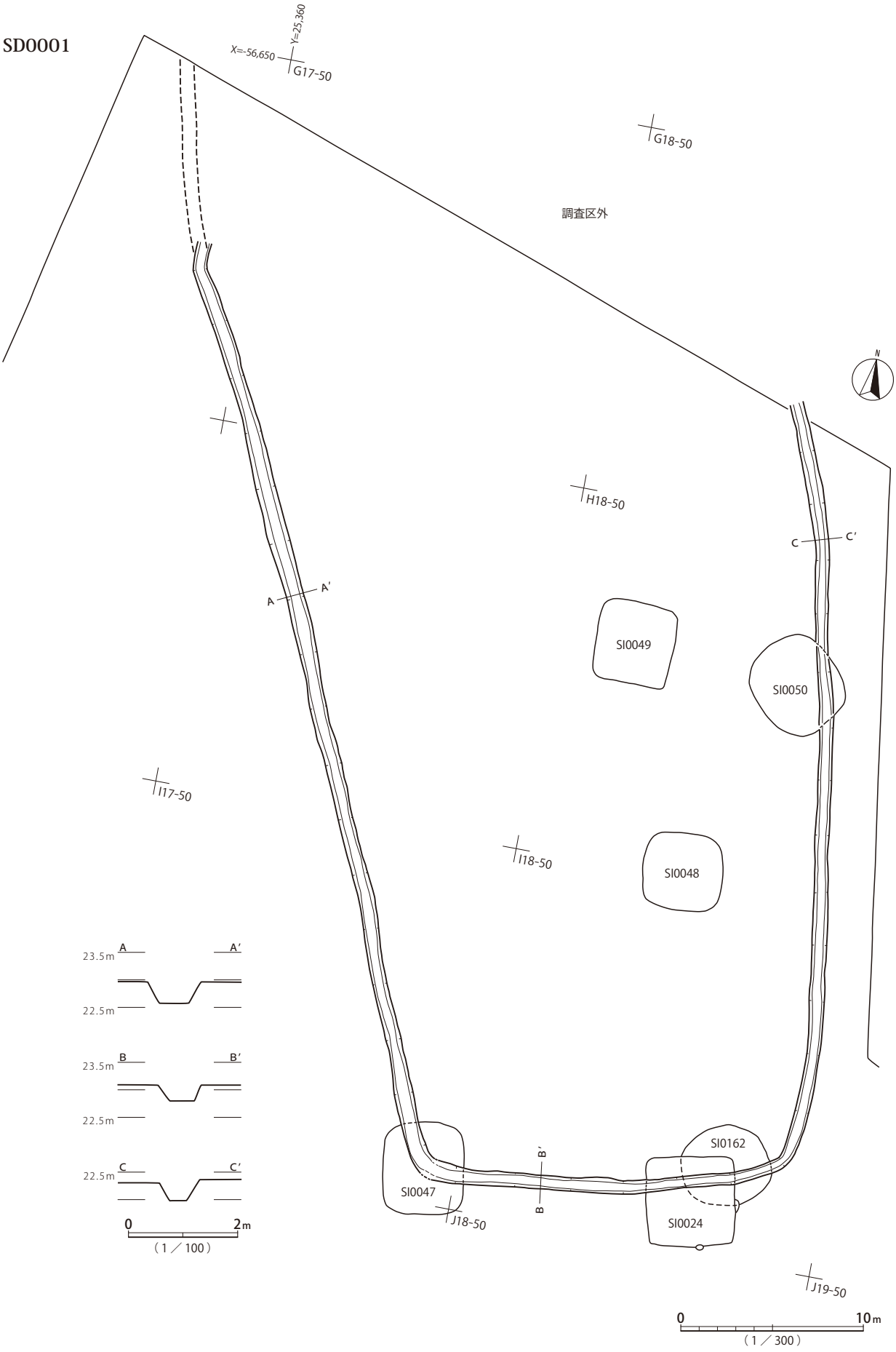
SI0203・SI0204（第 218 図、図版 2）

古墳時代終末期以降の方形墳墓SM1080と重複する竪穴建物跡と推定される変色部2箇所である。方台部に位置する方をSI0203、周溝北西部と重複する方をSI0204とした。

検出状況のみが記録されており、その後の調査成果は不明である。

SD0001（第 219 図、図版 56）

深さ50cm前後、幅70cm前後の溝状遺構で、TJ地区中央東寄りから北西側へ、小支谷と一致する形状でコの字形に連続する。西辺が約55m、南辺が約20m、東辺が約40m検出されている。弥生時



第219図　SD0001遺構

代後期以前のSI0162、弥生時代終末期のSI0047・SI0050、古墳時代前期のSI0024と重複し、それぞれの覆土を破壊して掘り込まれている。断面形はU字形を呈するとの記述が残る。

なお、周辺と区画内に位置する古墳時代前期の竪穴建物跡群の一部は、本遺構と軸向きが揃うように見受けられるが、本遺構自体が小支谷に沿って成立しているため、傾斜方向に起因する現象と思われる。周辺では、蛇谷遺跡において谷に向かう同様の溝状遺構が検出されている。

出土遺物は確認されておらず、明確な時期決定は難しいが、古代以降の所産と考えられる。

第2節　099地区

099地区概要（第220図、図版3・4）

TJ地区の南に隣接する広範囲の調査区である。主な検出遺構として、竪穴建物跡148棟、弥生時代中期方形周溝墓17基、弥生時代後期～終末期墳墓22基、古墳時代前期方墳3基、円墳3基、古墳時代終末期～古代方形墳墓41基、近世以降の溝状遺構7条が検出されている。

SI1001（第687図、図版3・4・253・317）

遺構番号と遺物注記のみ記録が残り、位置・形状等の詳細は不明である。遺物については、表採遺物と合わせて第687図に示した。

SI1002（第221図、図版58・157・216・305・326）

4.6×4.4m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴aと貯蔵穴bのみが検出されている。中心軸北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は伴わない。

覆土は、黒褐色から暗褐色を呈し、最下層が比較的堅緻である。焼土・炭化材の検出は、平面・断面とも特に記録されていない。

遺物は、床面上から上層にかけて、弥生土器を主体に出土している。甕1、小型広口壺4が北東隅から検出されている。結節文区画の縄文壺5は覆土一括取り上げ資料である。概ね弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。その他、緑色岩製礫石器7、砂岩製礫石器8、ヤリガンナ状の平棒状鉄製品9が出土している。鉄製品9は一括取り上げ資料であり、本遺構への帰属は不確定である。

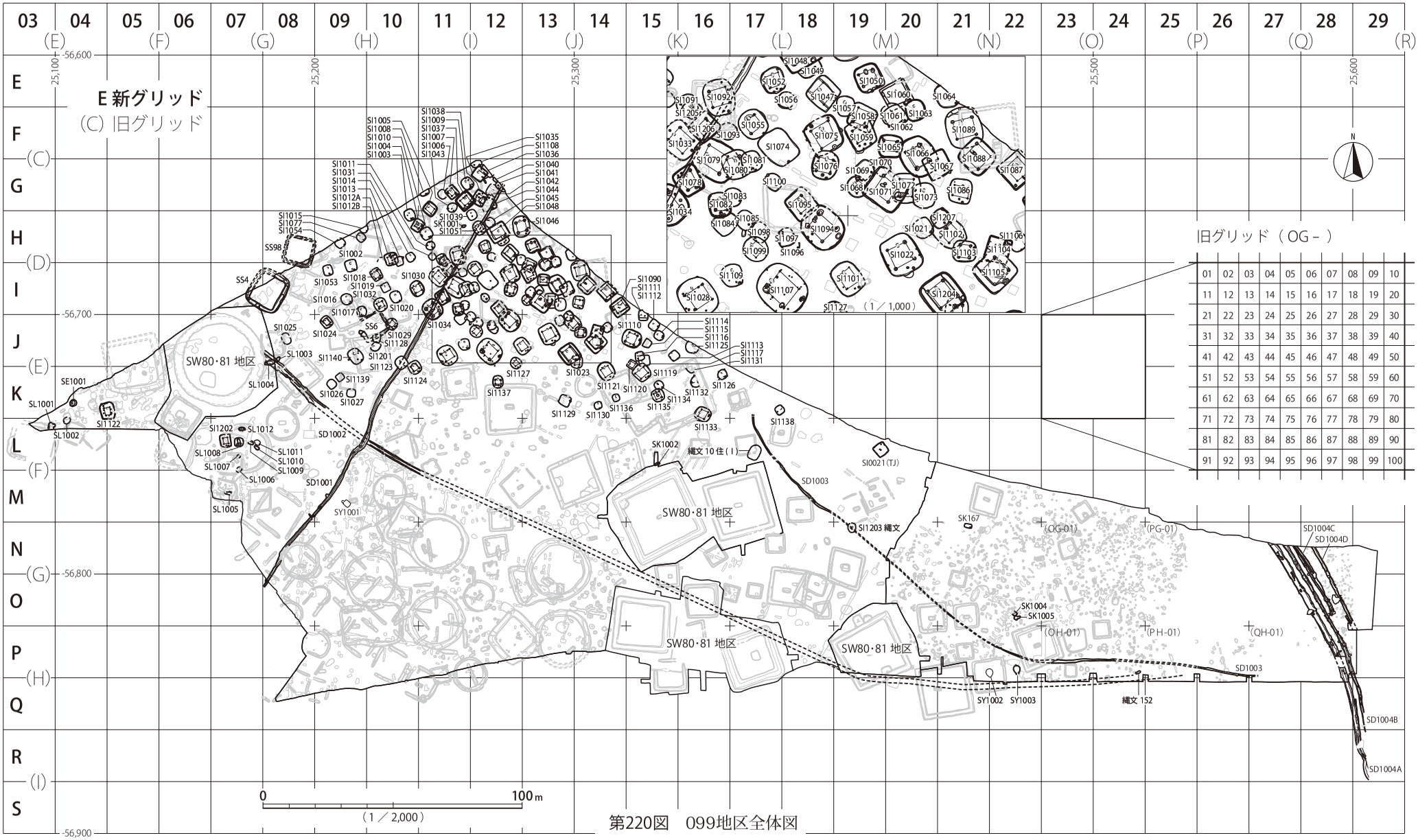
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定する。

SI1003（第222図、図版58）

4.6×4.1m、深さ10cm以下の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、ハシゴ穴の可能性があるaと貯蔵穴と見られるbが検出されるのみである。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面は黒色部が目立ち、貼床土はロームと黒色土が混合されている。床面周溝は北側のみに確認されている。

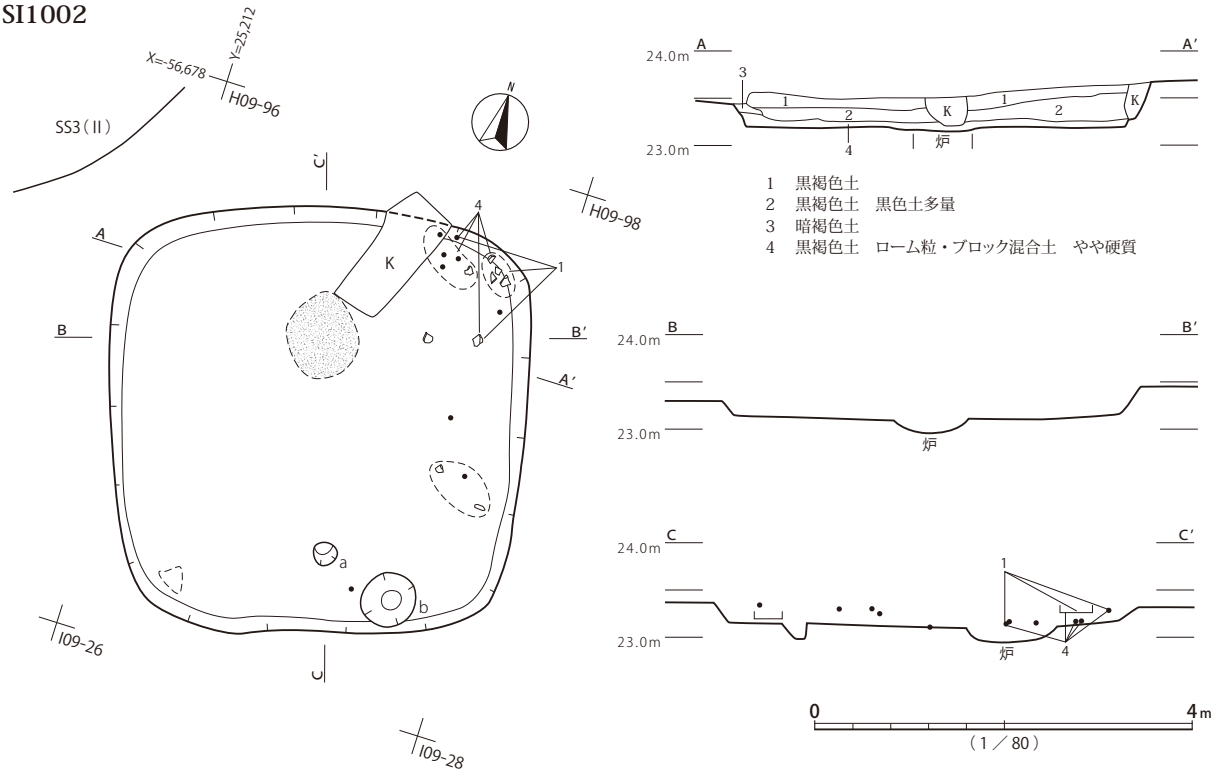
覆土について詳細記録は無い。遺物は、土器片が少量出土しているのみで図示資料はない。

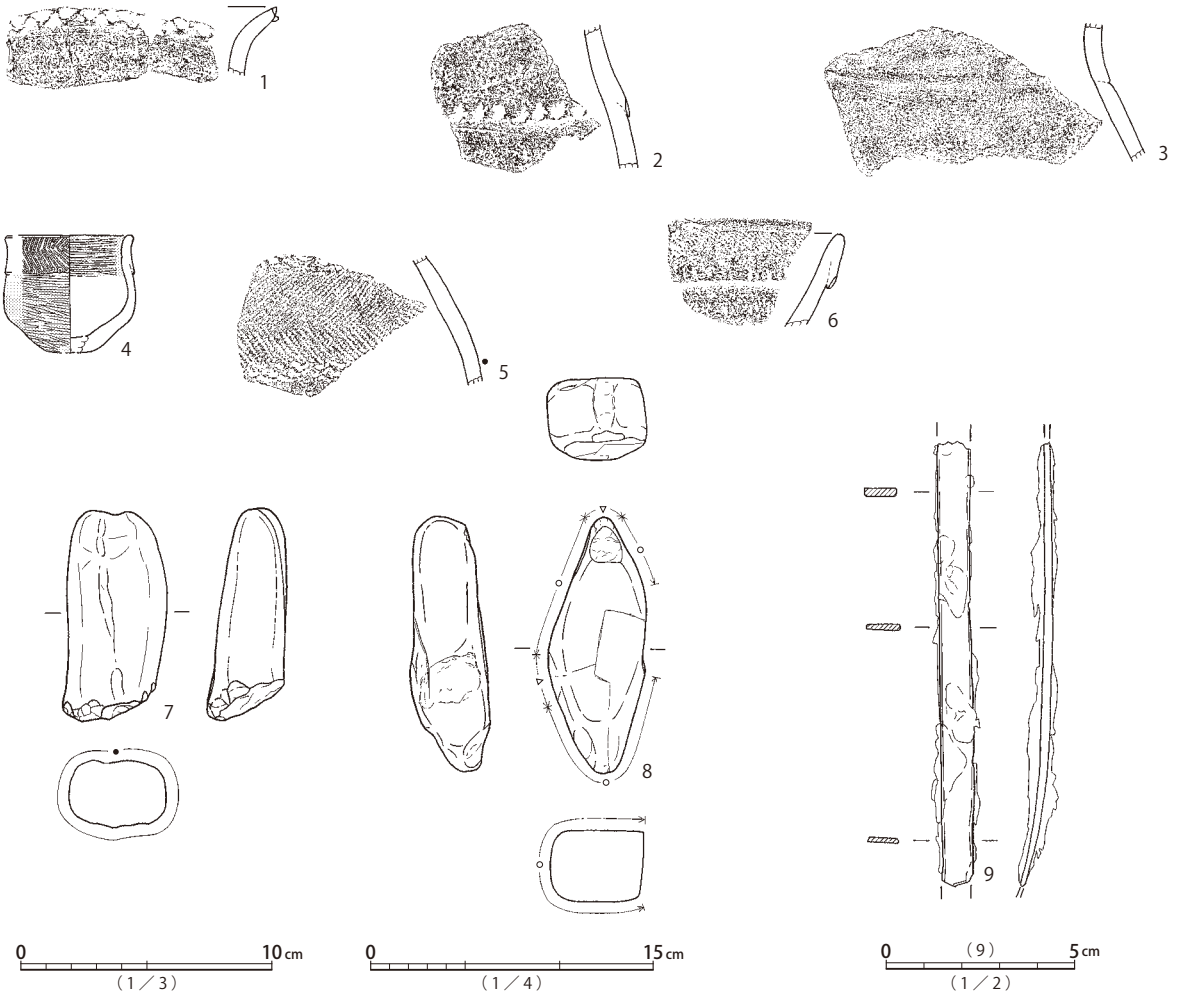
本遺構は、平面形から弥生時代後期の所産と推定される。



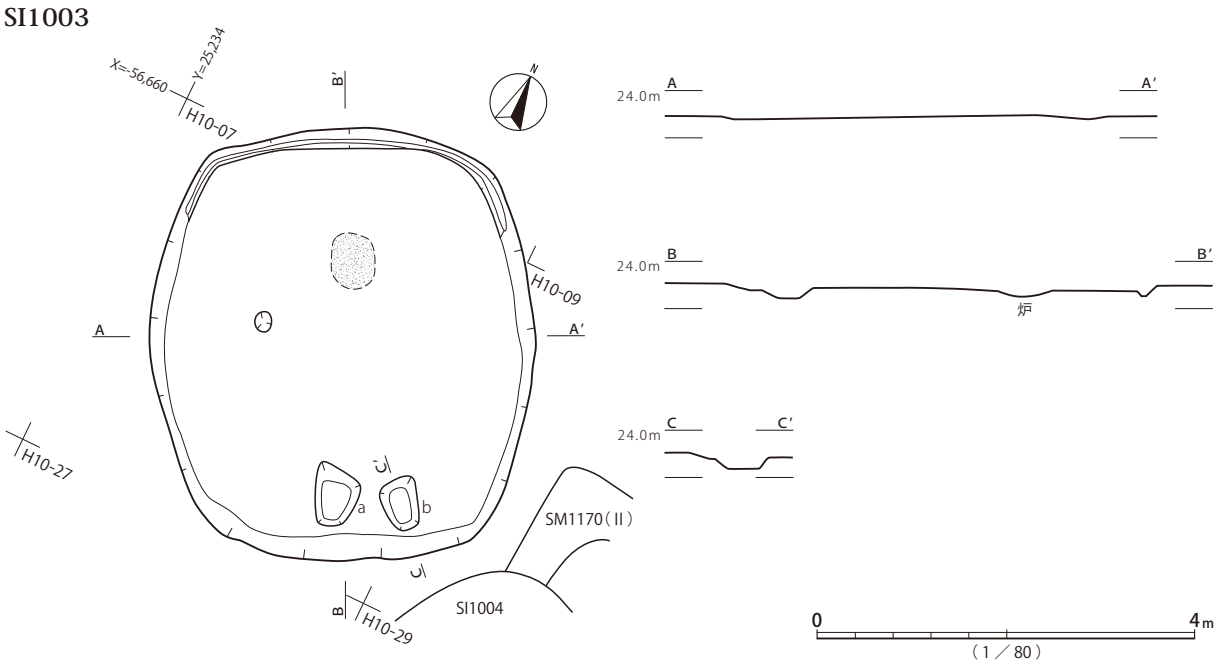
第220図　099地区全体図

SI1002





第221図　SI1002遺構・遺物



第222図　SI1003遺構

SI1004（第 223 図、図版 58・157・216）

4.8×4.2m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されたほか、c・d間の柱筋上にハシゴ穴の可能性もあるfが認められる。柱間範囲内の北側、柱穴bへ寄った位置に長楕円形の炉が設けられる。床面周溝は北東辺と貯蔵穴脇を除き、検出されている。

覆土は、竪穴壁際の初期堆積にロームの混入が目立つが、上層は概ね漸移的な堆積過程を示す。貯蔵穴覆土にも焼土・炭化物に関する記録は見られず、全体的に自然堆積を示唆する。

遺物は、弥生時代終末期の土器等が出土している。甕1・2はタタキ調整後、部分的にハケメを施す甕である。甕1・2と壺3は覆土一括取り上げ資料、壺4と高杯6は東角とcの間の床面からまとまって出土している。小型壺5は北東壁近くの床面から検出されている。無文の壺4は素口縁ながら、頸部屈曲はなだらかで古相を示す。東海系高杯6は杯部外面屈曲部が垂下気味に若干盛り上がり、裾端部が平坦面を持ち、やや内弯する脚部の形状と、透孔が4方配置である点に古相の特徴が認められる。出土土器は概ね、弥生時代終末期前半、中台1−2式に位置づけられる。鉢形の7はミニチュア土器である。その他、石製品の出土が記録されているが詳細不明である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

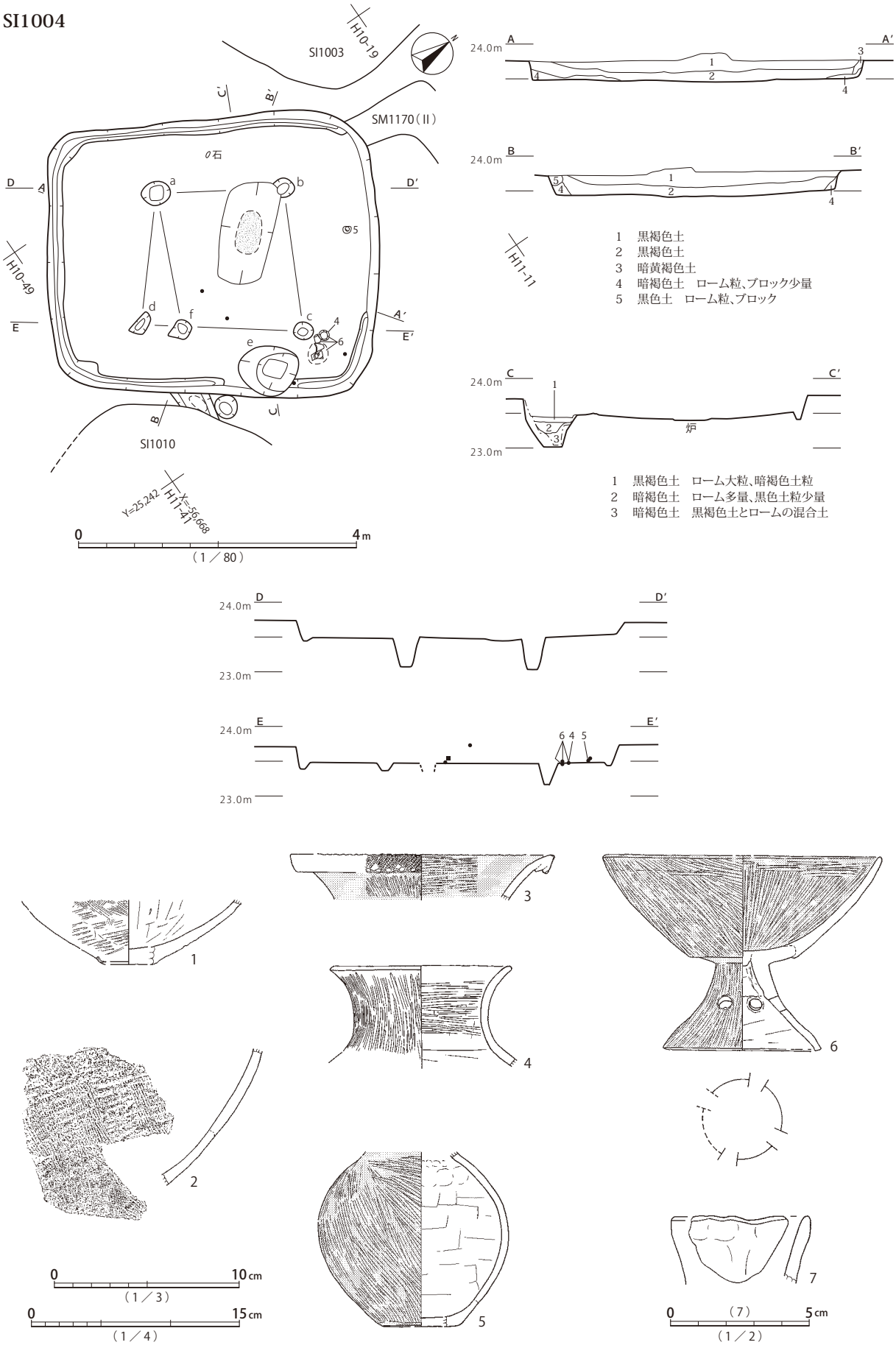
SI1005（第 224・225・226 図、図版 59・157・216・217・299・305）

5.2×4.8m、深さ50cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～dが、竪穴平面形に近似する平行四辺形に歪んだ配置で検出されている。中心軸上、a・b間ラインより内側に、楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周する。

覆土は、北壁際の層にロームの集中が認められるものの、焼土・炭化材の検出はなく、漸移的な堆積過程を経た可能性が高い。

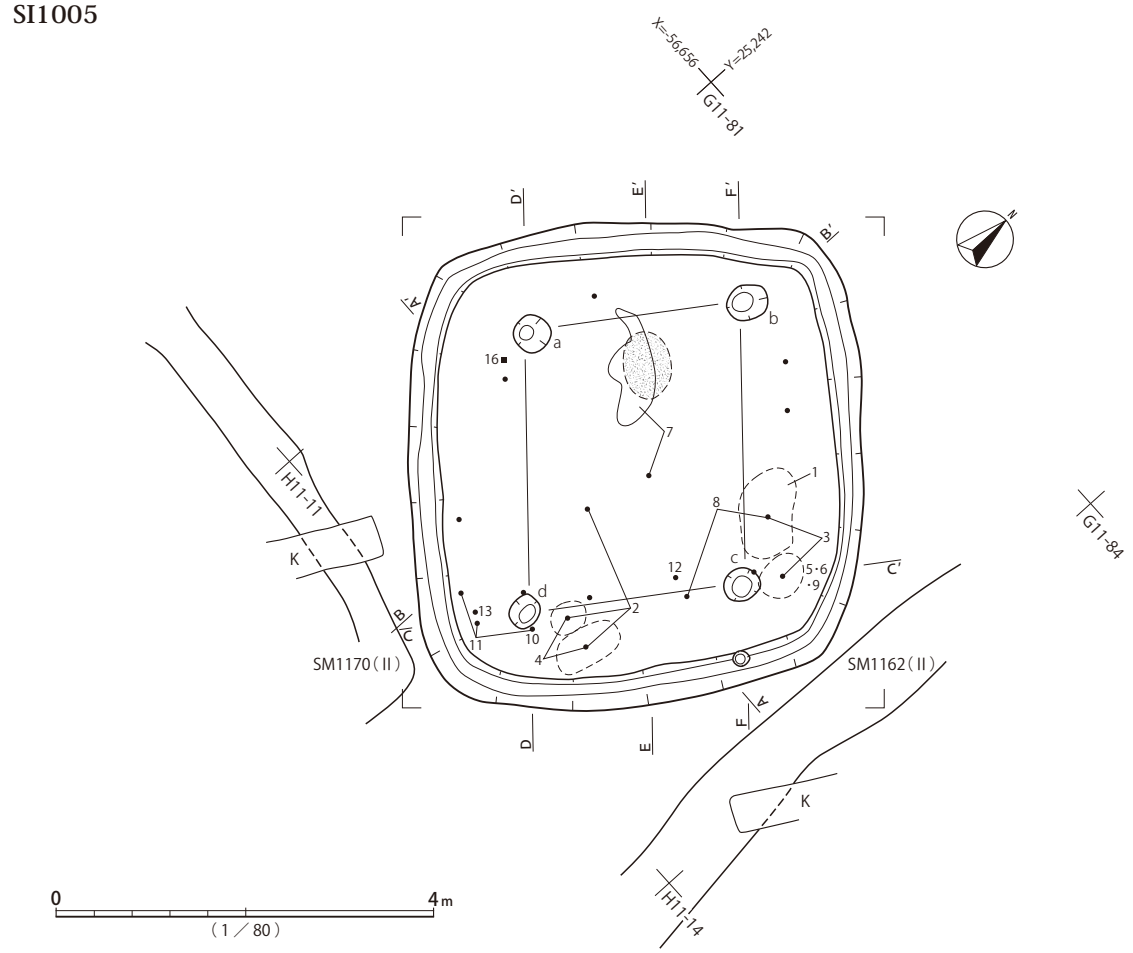
遺物は、弥生時代終末期の土器群が床面直上を中心に多く検出されている。竪穴建物廃絶時に遺

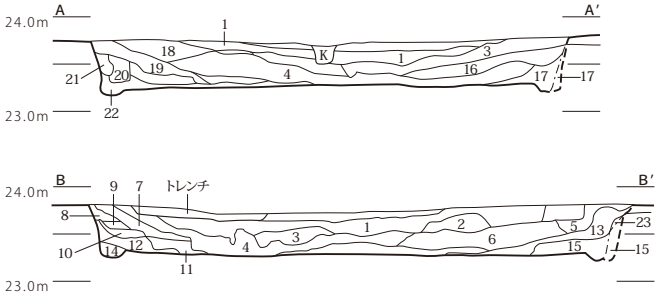
SI1004



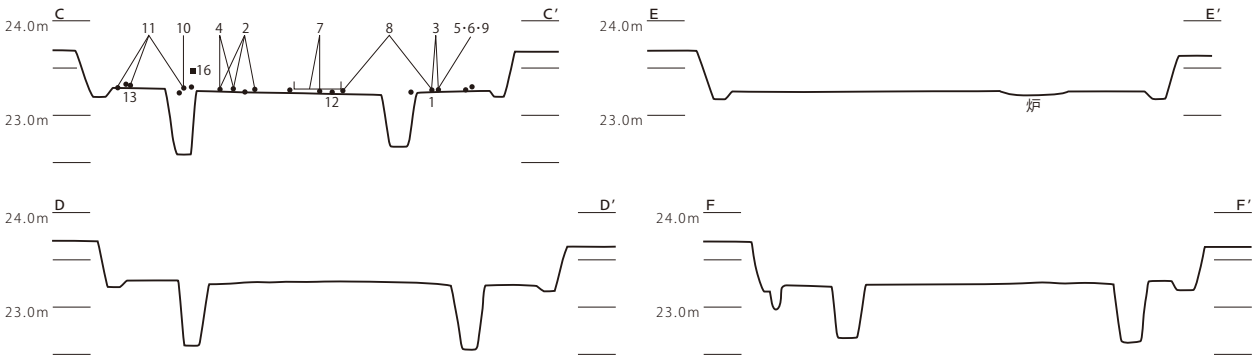
第223図　SI1004遺構・遺物

SI1005



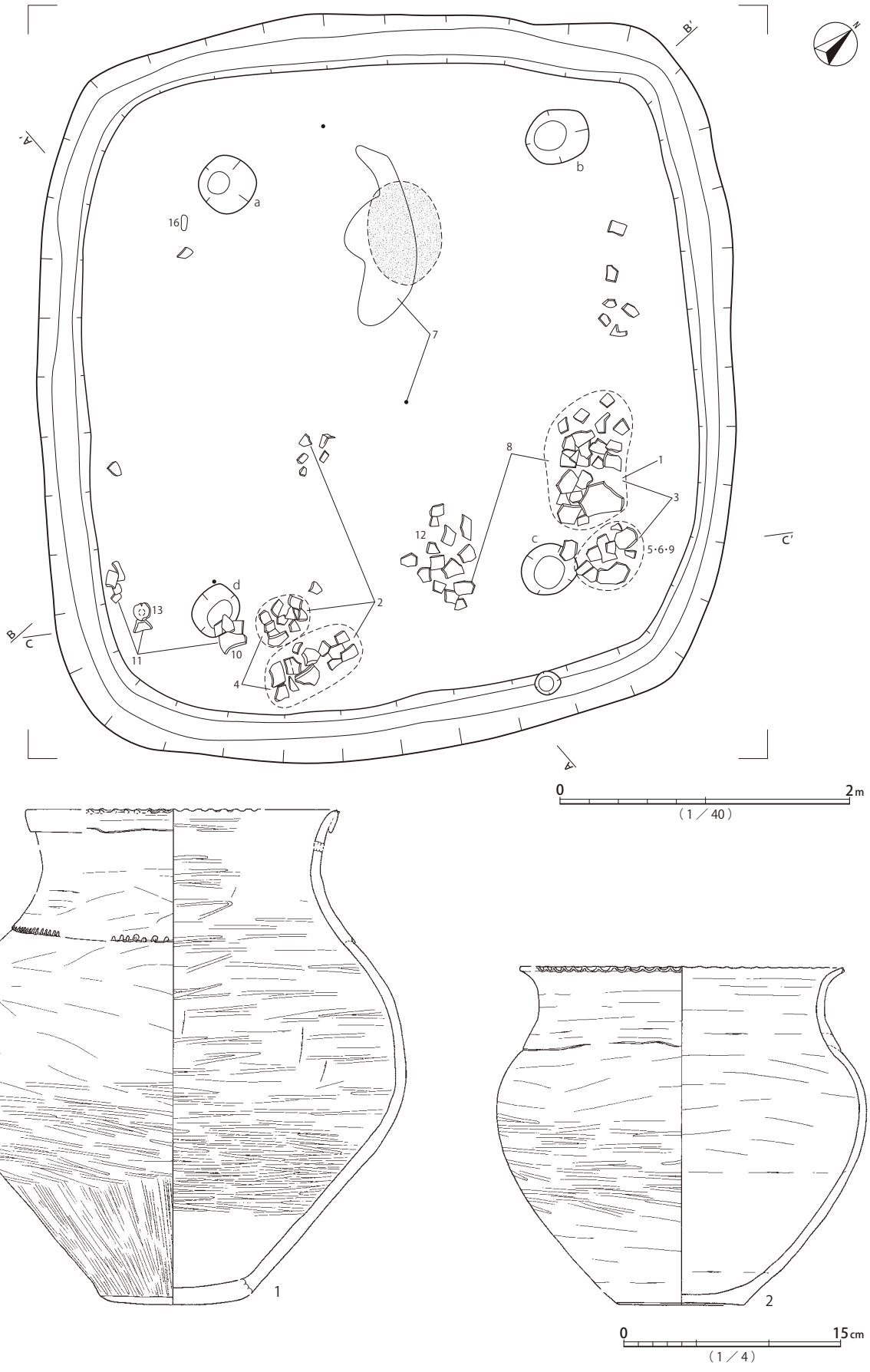


1 黒褐色土 ローム粒、ブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒、ブロック
3 黒褐色土 黒色土、ローム粒
4 暗褐色土 ローム粒、ブロック、黒褐色土
5 黒色土 ローム粒
6 暗褐色土 ローム粒、ブロック、黒褐色土
7 黒褐色土 ローム粒
8 黒褐色土
9 暗褐色土
10 暗褐色土 ローム粒
11 黒褐色土
12 暗褐色土
13 黒色土 ローム粒、ブロック若干
14 黒褐色土
15 暗褐色土 ローム粒、ブロック多量
16 黒色土 ローム粒少量
17 黒褐色土
18 褐色土 ローム粒
19 褐色土 ローム粒、黒色ブロック
20 暗黄褐色土
21 黒色土 ローム粒、ブロック
22 暗褐色土 ローム粒
23 暗黄褐色土



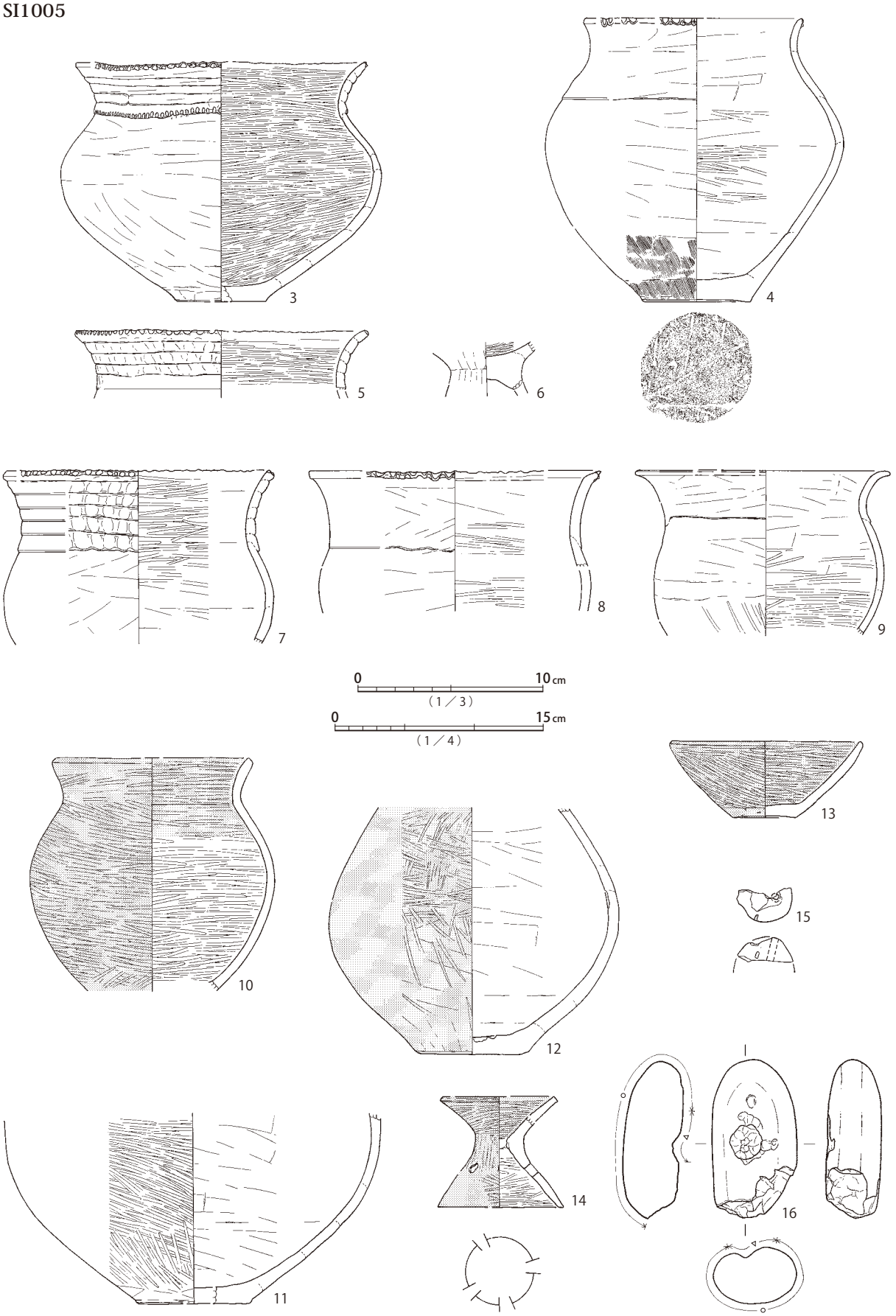
第224図 SI1005遺構(1)

SI1005



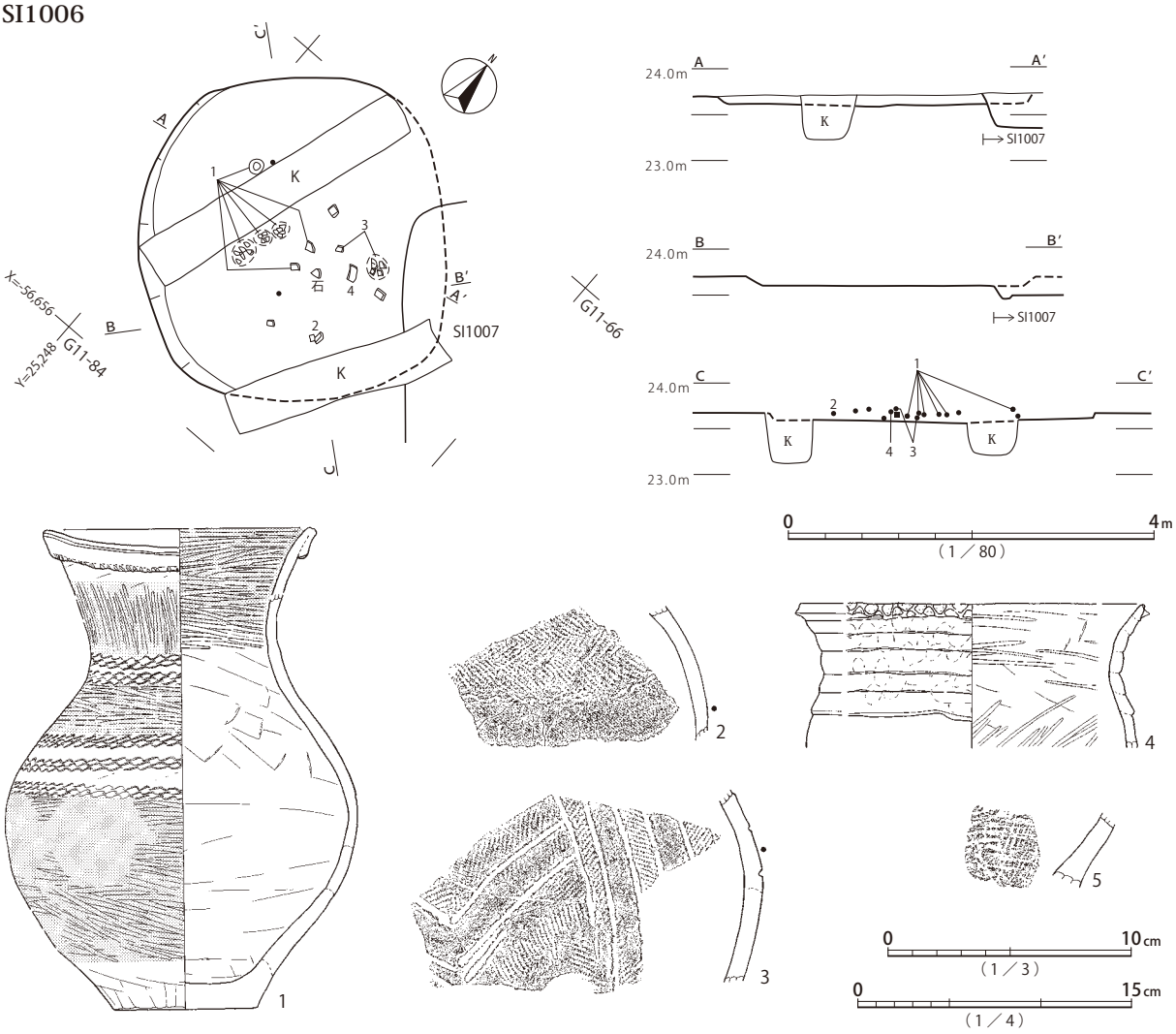
第225図　SI1005遺構(2)、SI1005遺物(1)

SI1005



第226図　SI1005遺物（２）

SI1006



第227図　SI1006遺構・遺物

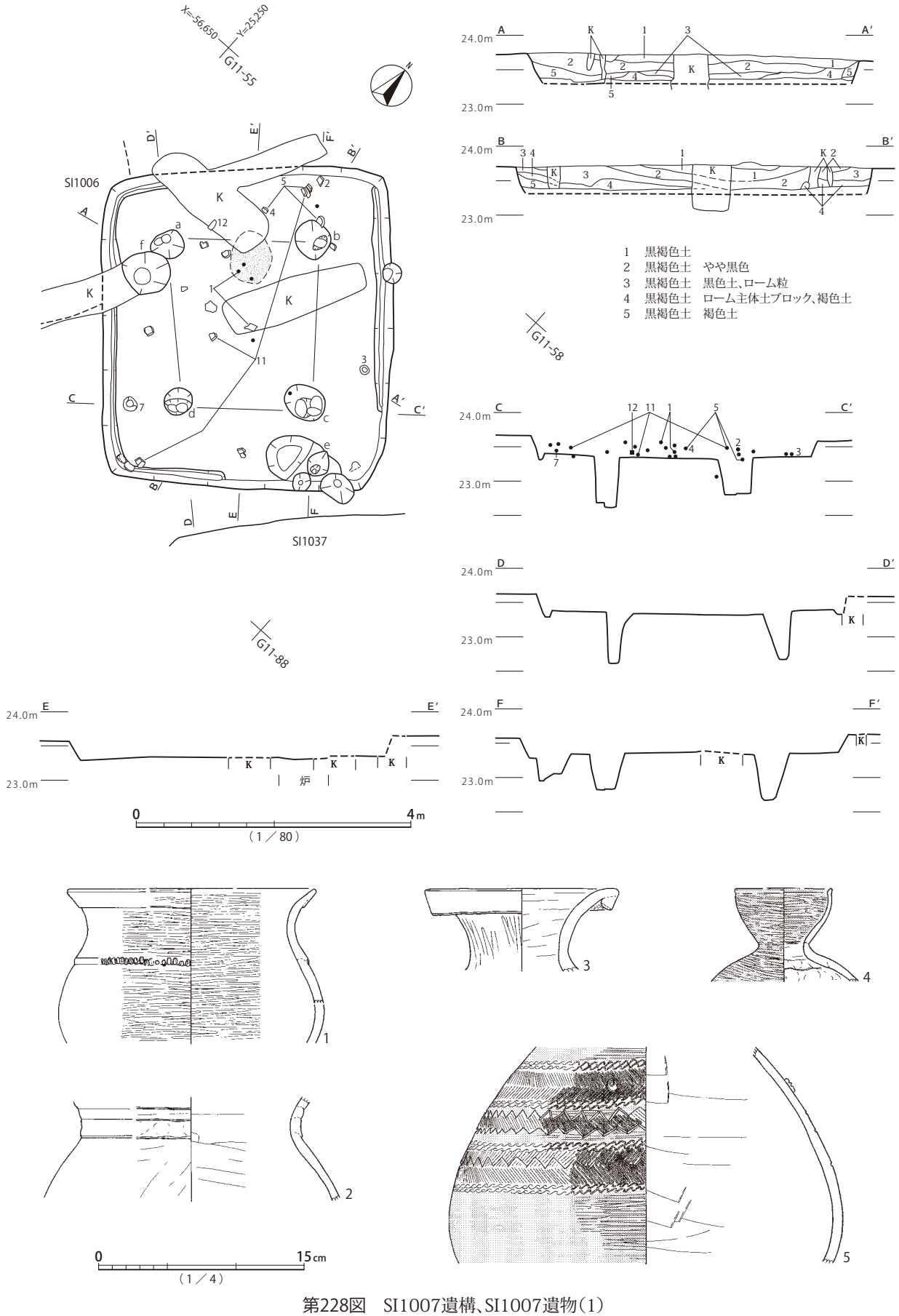
棄されたものと考えられる。1・2・3・4は遺存良好な在地系の甕である。甕4は底面に木葉圧痕があり、在来の伝統的技法からの逸脱を示す。甕の胴部最大径が口径・器高を上回り、口頸部高の器高に対する比率が小さい点には、弥生時代終末期の過渡的な様相を読み取ることができる。炉周辺の破片群からは輪積痕甕7が出土している。台付甕6は、甕5・9と同一注記を持つ。無文広口壺10・無文素口縁鉢13を含め、床面から出土した土器は、いずれも中台1−1式に位置づけられる。小型器台14はグリッド検出資料だが、受部端部が明瞭な平坦面を持ち、透孔が4方配置される点において古相を示し、本遺構に伴う可能性がある。覆土一括取り上げ資料の土製品15は有孔球状の破片で、玉形を意図したものであろうか。その他、溶結凝灰岩製礫石器16が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI1006（第 227 図、図版 59・157・217）

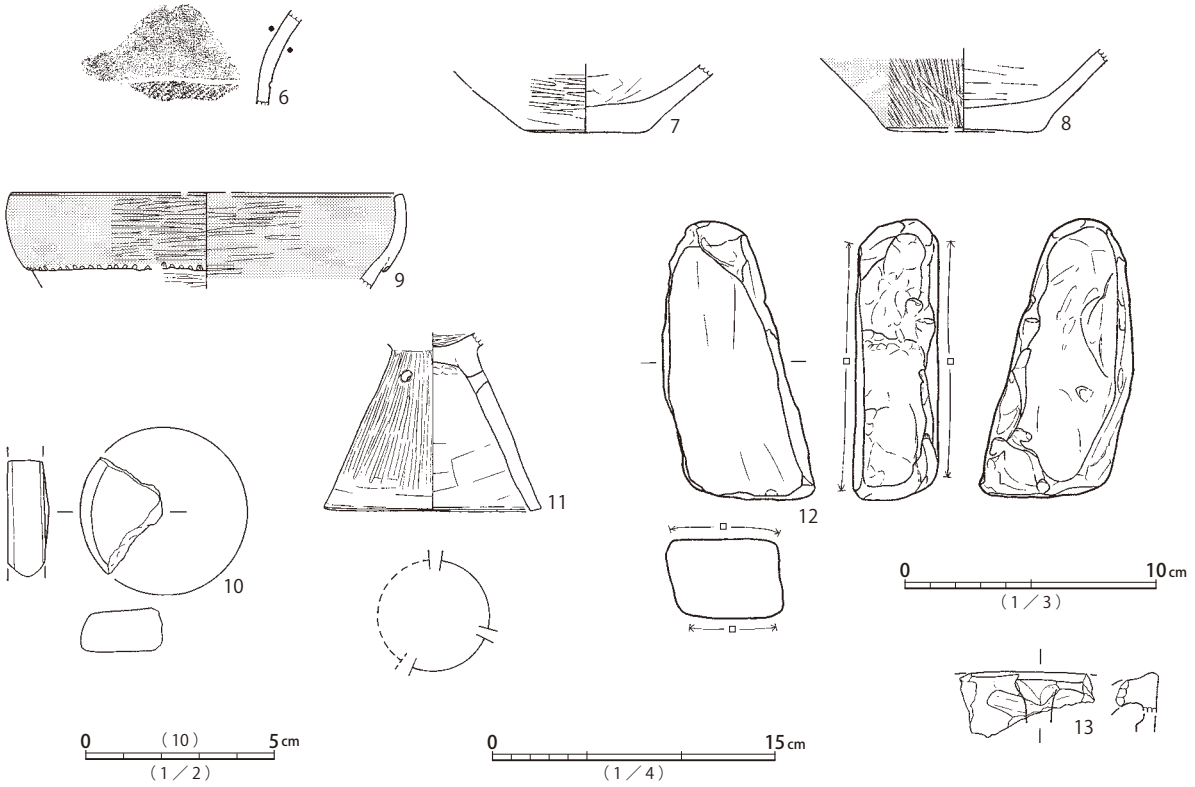
3.5 × 3.4 ？ m、深さ 10cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を受けるほか、竪穴北東側は立ち上がりが検出されず、遺存状況は不良である。主柱穴と炉も確認されず、床面周溝も認められない。

SI1007



第228図　SI1007遺構、SI1007遺物（1）

SI1007



第229図　SI1007遺物（２）

覆土の詳細は不明だが、SI1007覆土が本遺構上層を切り込んでおり、SI1007に先行する。

遺物は、覆土最下層に残存したと見られる土器等が出土している。完形に近い壺１は、口縁肥厚部は無文だが、頸部と肩部に自縄結節文を重ねた文様帯を持つ。壺２・３と合わせて、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。

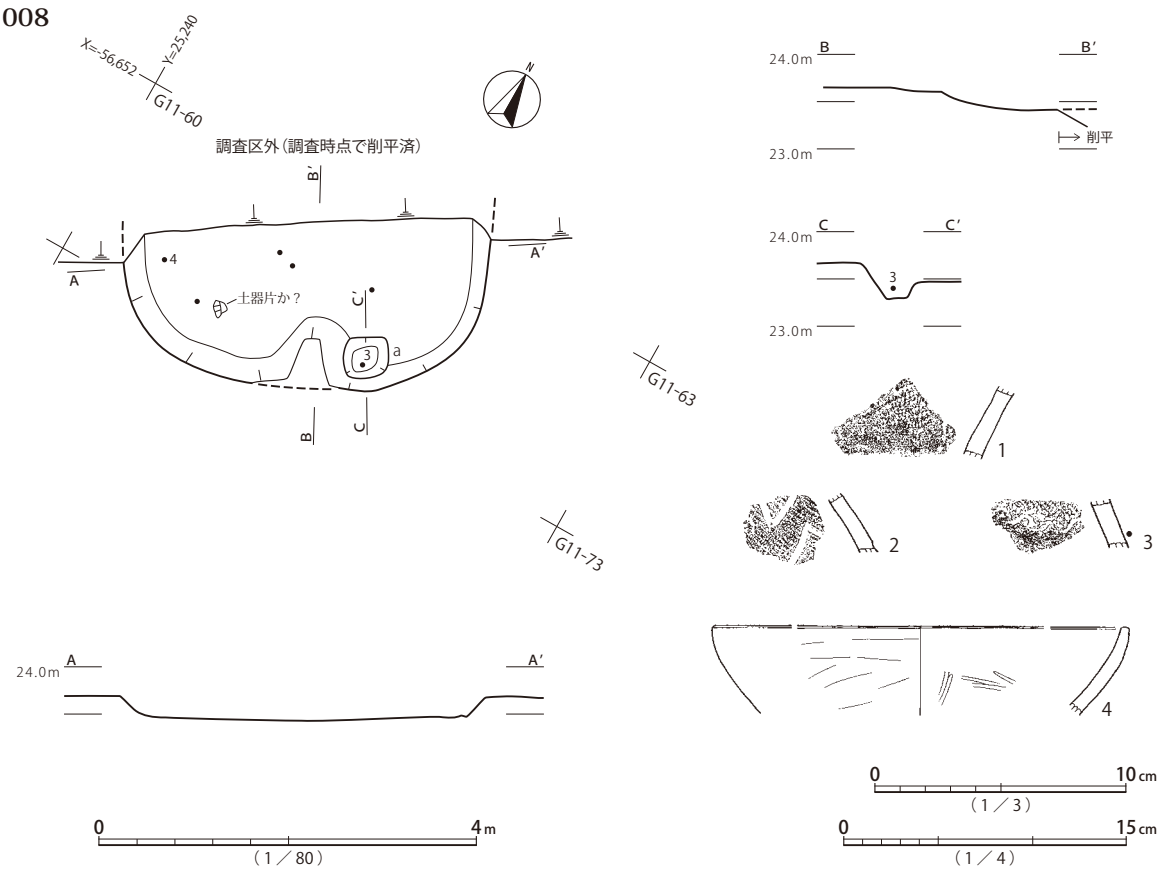
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1007（第 228・229 図、図版 59・157・217・296・299・305）

4.7×4.2m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸とa・b間ラインの交差する位置、やや内側に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は、北西辺と東角付近を除いて確認されている。北西側にイモ穴による撹乱が集中する。

覆土は、焼土・炭化物を伴わず、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面上から覆土下部にかけて、土器片が少なからず出土している。壺５は、東京湾岸形壺の一種で、文様構成と体部の刺突円形浮文が、弥生時代後期末から終末期前半の過渡的な特徴を示す。頸部屈曲のなだらかな在地系の壺３も、無文ながら厚みのある垂滴状外面肥厚を呈する口縁を持ち、壺５と同時期と位置付けられる。瓢形壺４は口縁端部内面に外傾する平坦面が作られている。透孔の位置が屈曲部に接近する高杯脚部11と同様、東海西部系の影響を認められる。出土土器は概ね、弥生時代終末期前半、中台１−１式に位置づけられる。その他、一括取り上げ資料として円盤形土製品10、覆土下層から砂岩製砥石12が出土している。10は平滑にヘラミガキの施された土製円



第230図　SI1008遺構・遺物

盤の一部で、断面が台形であった可能性があり、土製紡錘車とも考えられる。内耳土器片13は混入品である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI1008（第230図、図版59・217）

1.8m以上×3.9m、深さ25cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北半部がTJ地区に連続していたはずだが、検出されずに未調査となっている。表土掘削深度の影響による可能性が考えられる。主柱穴は認められず、南辺東寄りに貯蔵穴aが検出されるのみである。aの西側は出入口施設に関わるものか、高まりが記録されている。覆土は土層断面記録がなく、詳細は不明である。

遺物は、土器が少量出土している。貯蔵穴内から結節文区画壺3が検出されたほか、無文素口縁の鉢4が出土している。弥生時代後期後半、山田橋式から、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から弥生時代終末期前半の所産と推定できる。

SI1009（第231・232・233図、図版59・157・158・217・218・305・306・333）

4.9×4.3m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。南側が奈良時代方形区画墓SM1181と重複し、一部は床面に達している。主柱穴の可能性があるa・b、ハシゴ穴c、貯蔵穴の可能性があるd・

e等が検出されている。中心軸上、北西寄りに長楕円形の炉が設けられる。なお、柱穴の深度は一部を除き記録が無く不明である。

覆土は、東側の床面直上層に焼土粒の集中が認められるが、炭化材は検出記録が無く、下部は概ね漸移的な堆積過程を経たと考えられる。第2層はロームが目立ち、周辺の遺構掘削の影響とも推定できるが、下位に土器片が多く出土することから、これに伴う人為的な埋め戻しの可能性もある。

遺物は、床面から中層にわたって土器片が多く出土している。在来的な甕2～8も含まれるが、縄文の欠落した壺9・10、無文の椀・高杯18・20・21、鉢22は土師器との過渡的な特徴を持つ。東海系高杯25・26は当地域の外来系土器として古相を示し、高杯27・28は折衷的な形態である。概ね弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器31、軽石製砥石32・33が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI1010（第234図、図版59・158・218）

4.7×4.4m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北西側は、弥生時代終末期前半のSI1004と同時存在が難しい距離で接しており、本遺構が先に構築されたと見られる。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。

覆土は、黒褐色から暗褐色土層が主体で、焼土・炭化材・ロームブロックは伴わず、漸移的な堆積過程が推定できる。

遺物は、床面近くのレベルで北半部を中心に出土している。在地的な口縁端部交互押捺の甕1と同様の小型甕2は一見、弥生時代後期の型式のようだが、無文素口縁で頸部屈曲の緩やかな壺6、口縁端部内面が面取りされる小型鉢7、4方配置の透孔を持つ東海系高杯9が組成することから、土器群は全体的に弥生時代終末期前半、中台1-1式に位置づけられる。段部を持つ外反口縁の高杯10は、杯底部内面が丸底である点においては在地的だが、無文で外反する口縁は外来的な特徴と見られ、折衷的な様相を示している。1は炉と竪穴壁面の間、2・6・7・9は壁際の床面にまとまって検出されており、廃絶時に意図的に遺棄されたものと思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI1011（第235図、図版60・218）

3.3×3.4m、深さ5cm程度の円形竪穴建物跡である。明確な主柱穴は見られず、貯蔵穴の可能性があるb等が検出されている。中心から南東に寄った位置に、長楕円形の炉が設けられる。遺存状態は不良で、床面近くまで削平を受けている。

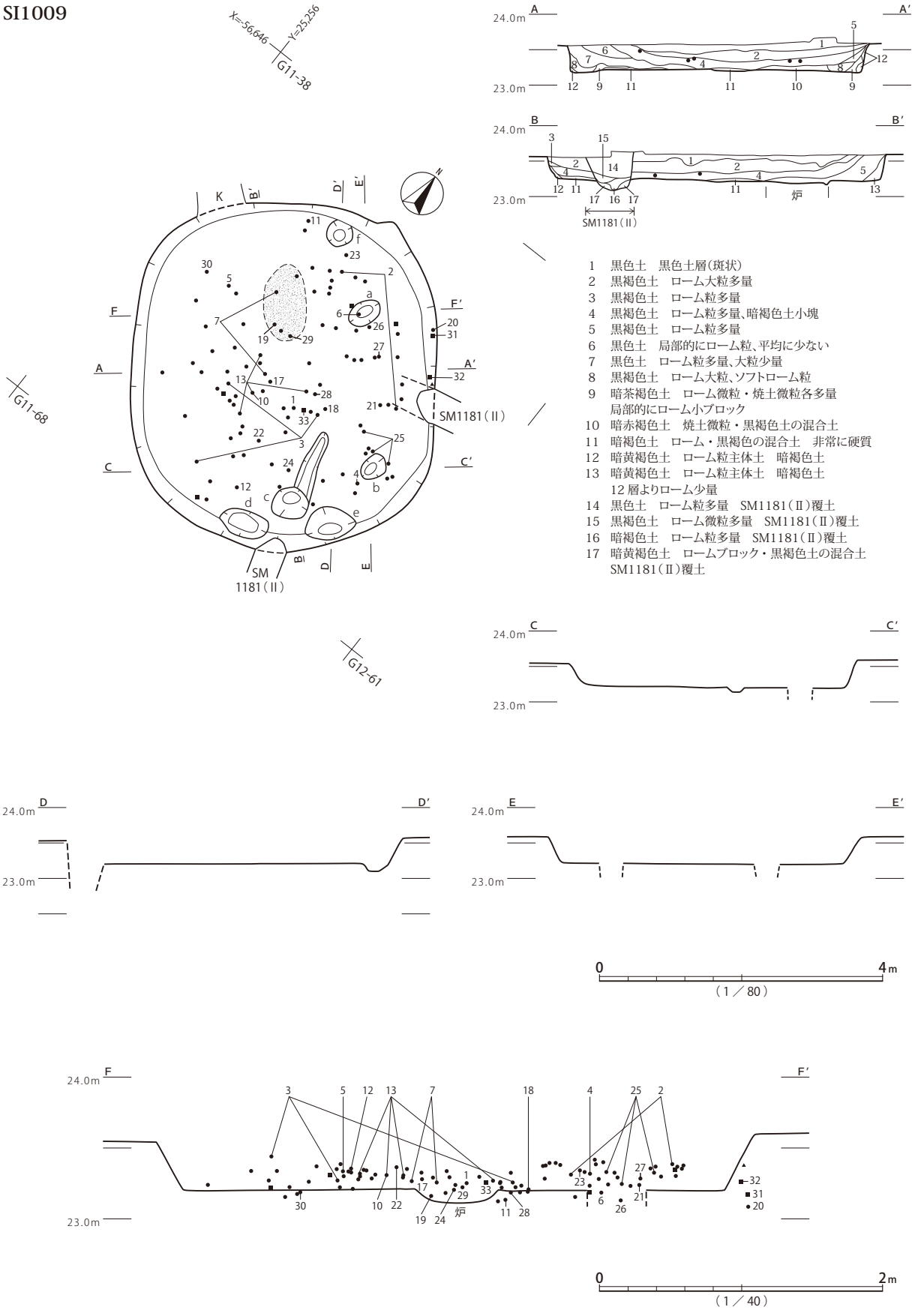
遺物は、弥生土器が少量出土している。沈線区画文様の壺1・2・3は弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI1012A・B（第236・237図、図版60・158・218・306）

4.9×5.0m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1012Aと、その西辺に隣接して検出され

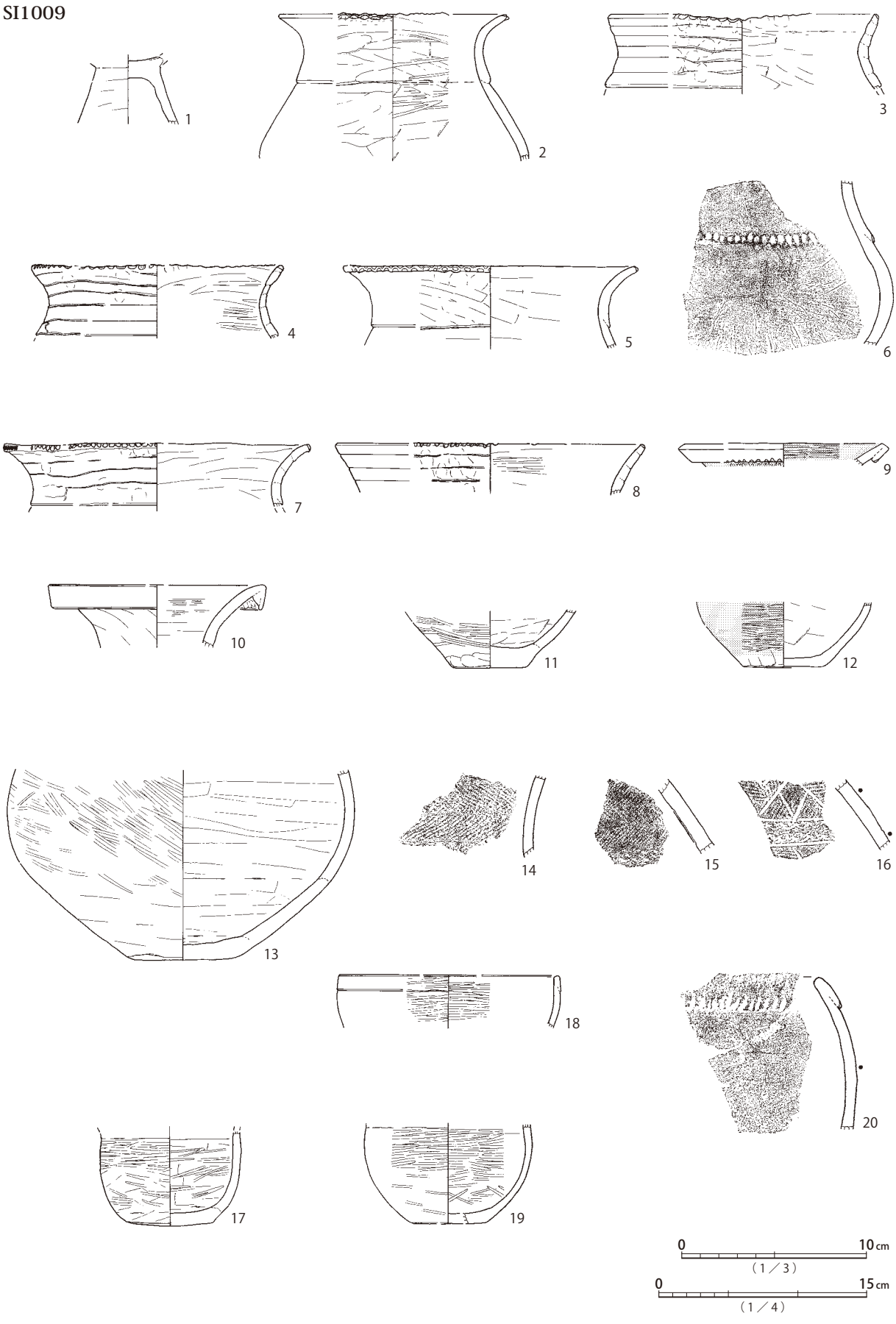
SI1009



1 黒色土 黒色土層(斑状)
2 黒褐色土 ローム大粒多量
3 黒褐色土 ローム粒多量
4 黒褐色土 ローム粒多量、暗褐色土小塊
5 黒褐色土 ローム粒多量
6 黒色土 局部的にローム粒、平均に少ない
7 黒色土 ローム粒多量、大粒少量
8 黒褐色土 ローム大粒、ソフトローム粒
9 暗茶褐色土 ローム微粒・焼土微粒各多量
局部的にローム小ブロック
10 暗赤褐色土 焼土微粒・黒褐色土の混合土
11 暗褐色土 ローム・黒褐色の混合土 非常に硬質
12 暗黄褐色土 ローム粒主体土 暗褐色土
13 暗黄褐色土 ローム粒主体土 暗褐色土
12層よりローム少量
14 黒色土 ローム粒多量 SM1181(Ⅱ)覆土
15 黒褐色土 ローム微粒多量 SM1181(Ⅱ)覆土
16 暗褐色土 ローム粒多量 SM1181(Ⅱ)覆土
17 暗黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土の混合土
SM1181(Ⅱ)覆土

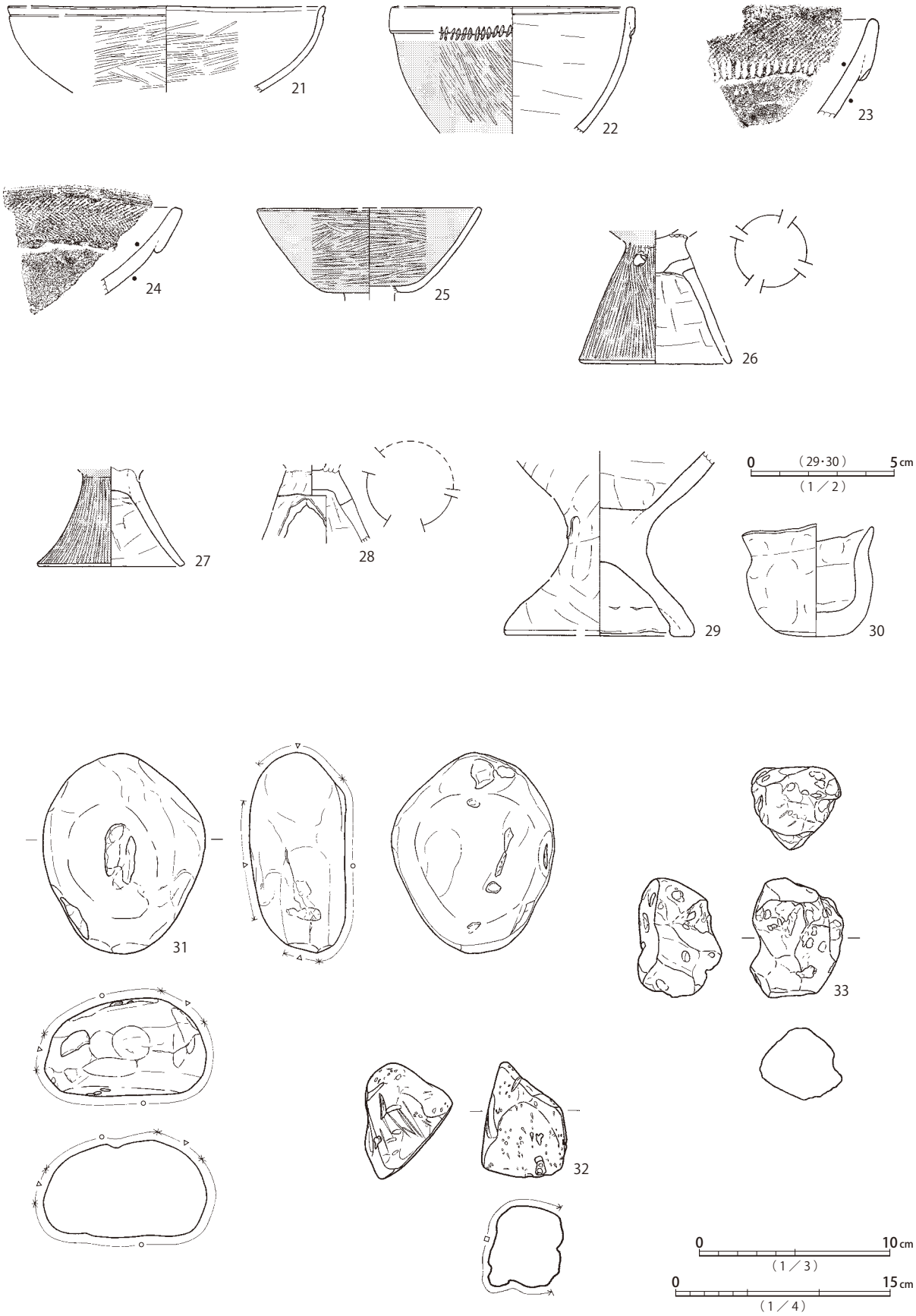
第231図 SI1009遺構

SI1009



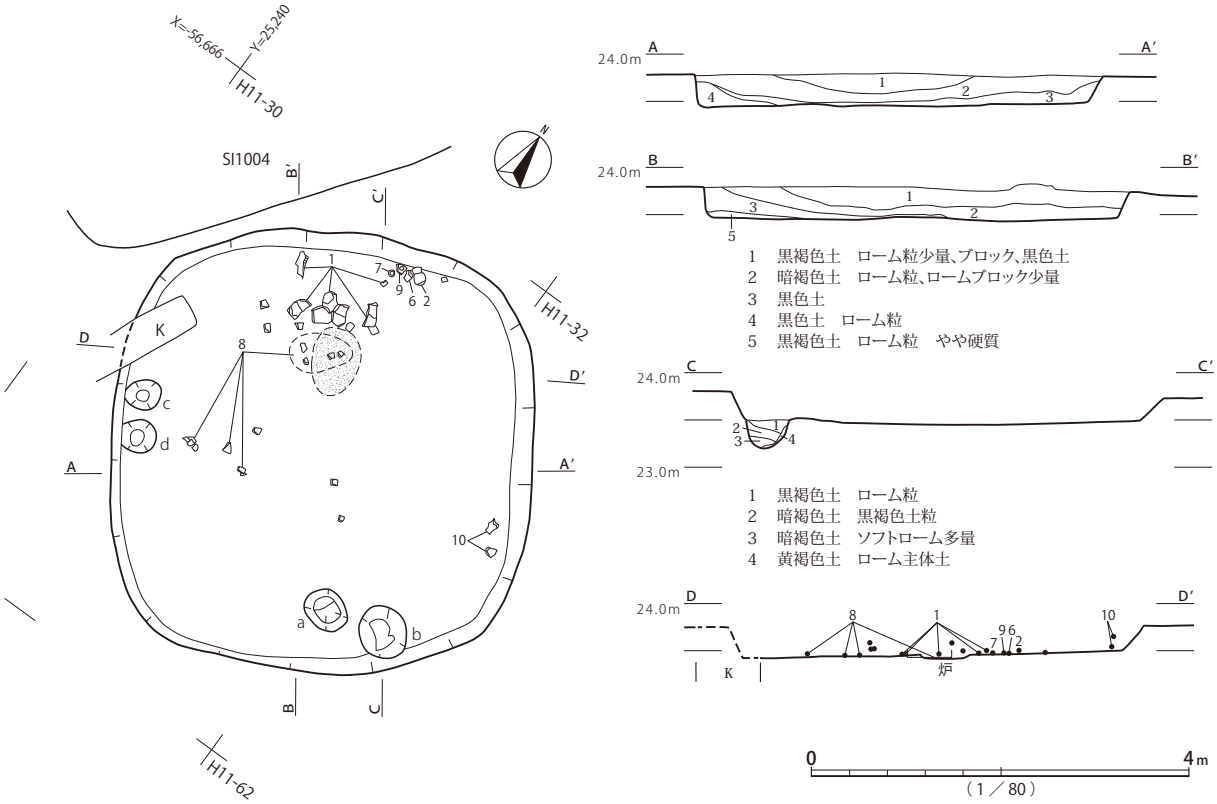
第232図　SI1009遺物（1）

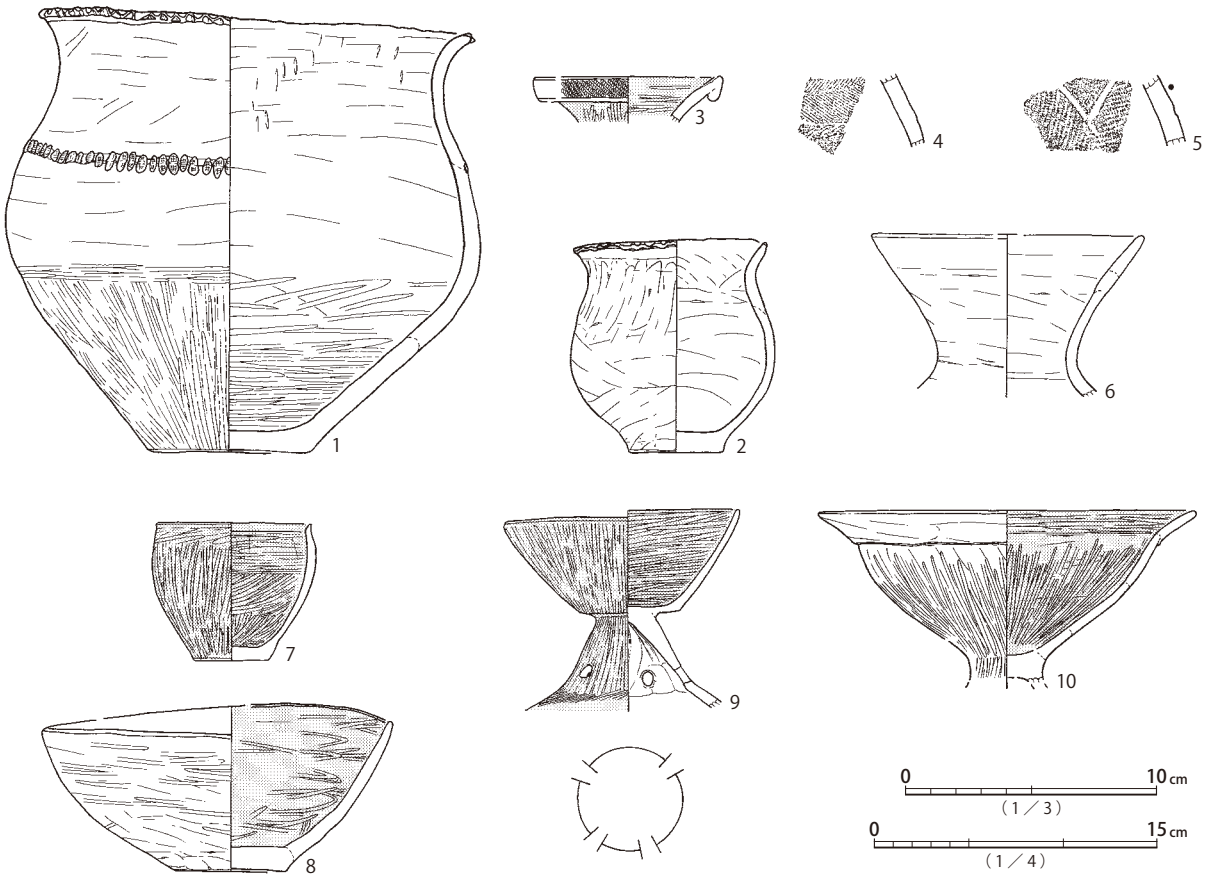
SI1009



第233図　SI1009遺物（２）

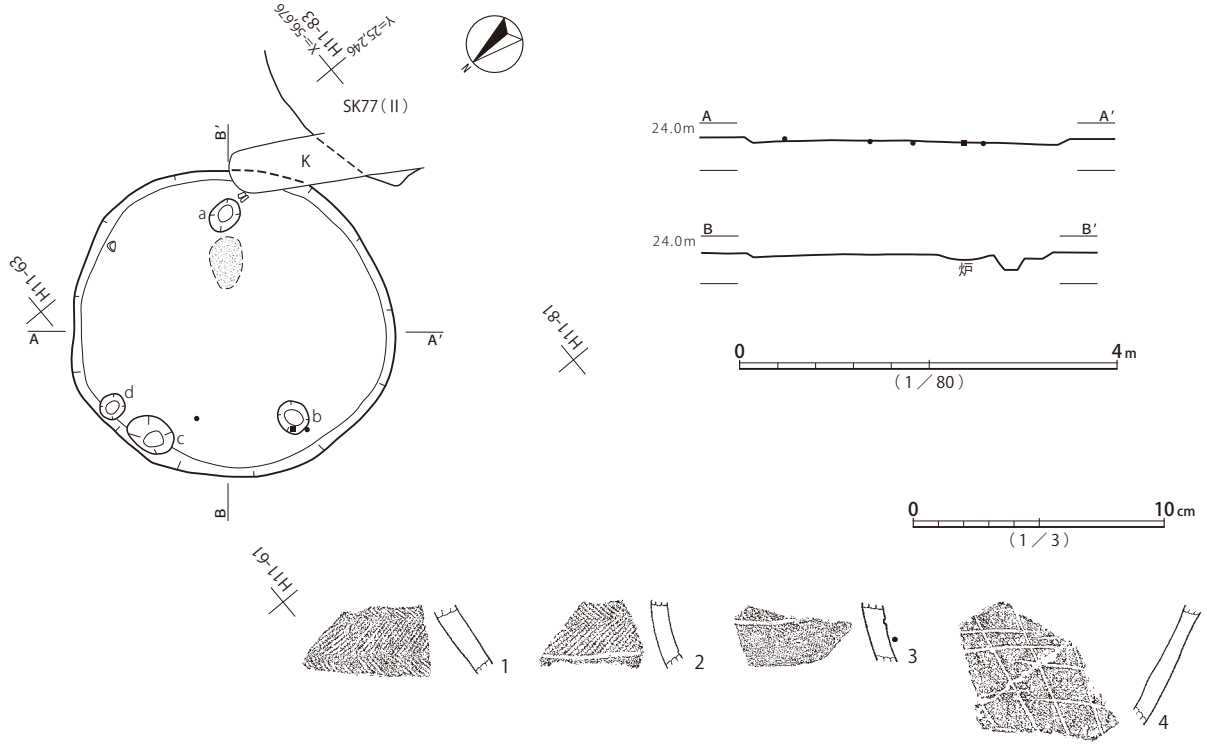
SI1010





第234図　SI1010遺構・遺物

SI1011



第235図　SI1011遺構・遺物

た形状不明、深さ15cm程度の竪穴建物跡と推定される遺構SI1012Bである。土層断面記録では、SI1012B覆土が遺物と共に、SI1012A覆土へ切り込む状態が観察されているが、土器片群がA側に広がりを見せない点が不自然であり、BがAに先行する可能性が勝ると考えられる。なお、SI1012Aは中台式期の可能性がある方形墓SS9とも重複するが、切り合い関係は捉えられていない。

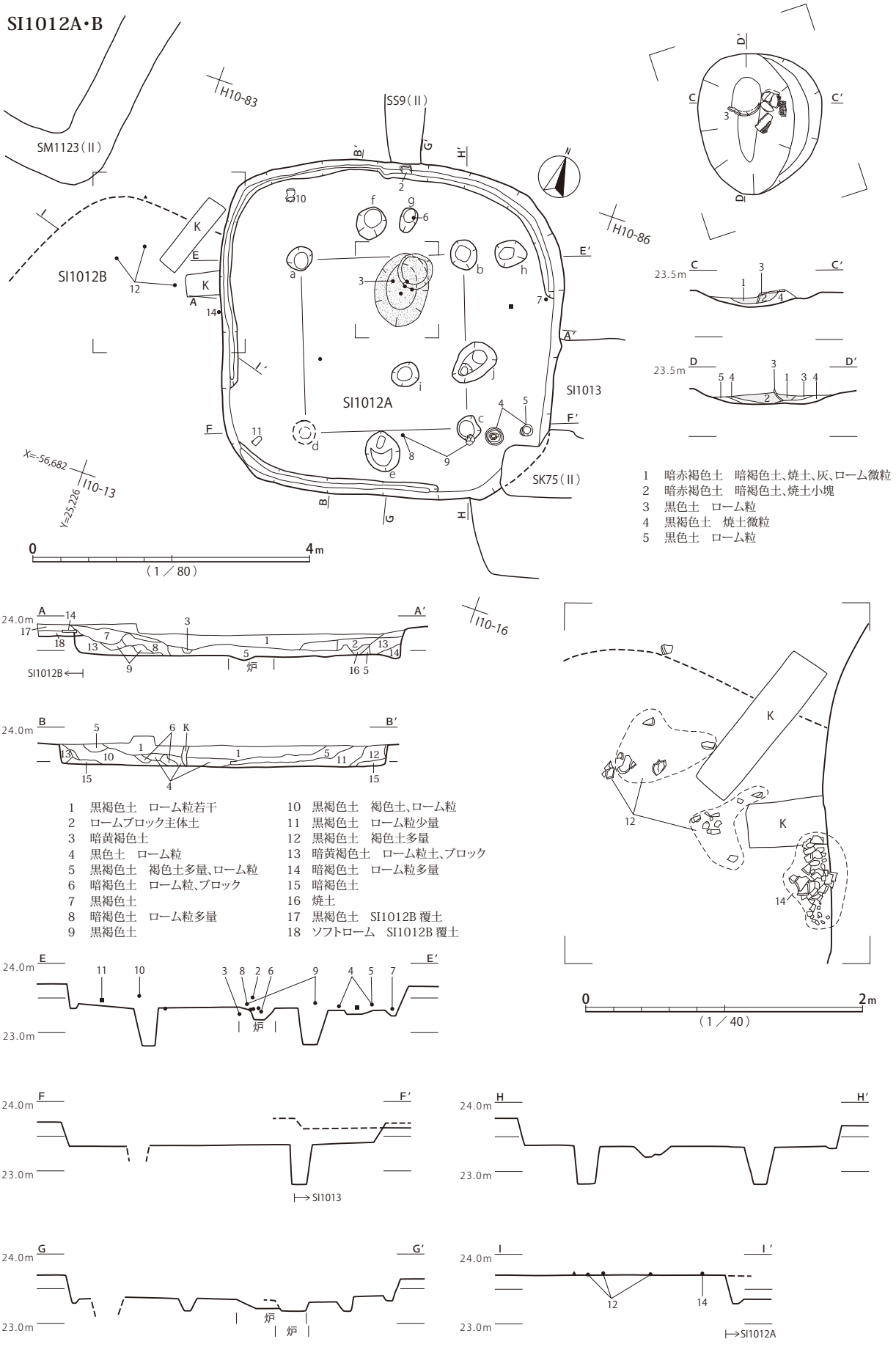
SI1012Bは、切り合い部の西側でも写真に黒味の強い土層が確認でき、土器片も集中することから、遺構としてある程度、面的な広がりを持っていたと推定される。遺物は、弥生土器のみが出土している。壺12・13は結節文区画を持ち、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。壺14は大型品で、図示した以外に接合不能の破片が多くある。

本遺構は、弥生時代後期後半の竪穴建物跡であり、周辺遺構の構築によって削平を受けた可能性が考えられる。

SI1012Aの床面には、主柱穴a～c、ハシゴ穴e他が検出されている。a・bは明確な掘り込みを持つことから、未検出のdの位置にも柱穴が存在した可能性がある。中心軸より若干東寄り、a・b間ラインの内側に接する位置に、楕円形の炉が設けられる。炉内中央奥寄りには、焼土層に広口壺片3が埋置されている。東側に結節文区画と見られる装飾を持つ壺体部片も検出されているが、対応遺物は確認できない。おそらく形態の近い壺4・6等の同一個体と思われる。床面周溝は南西角と南東部を除いて検出されている（写真では南東部も色調が異なり、全周していた可能性もある）。

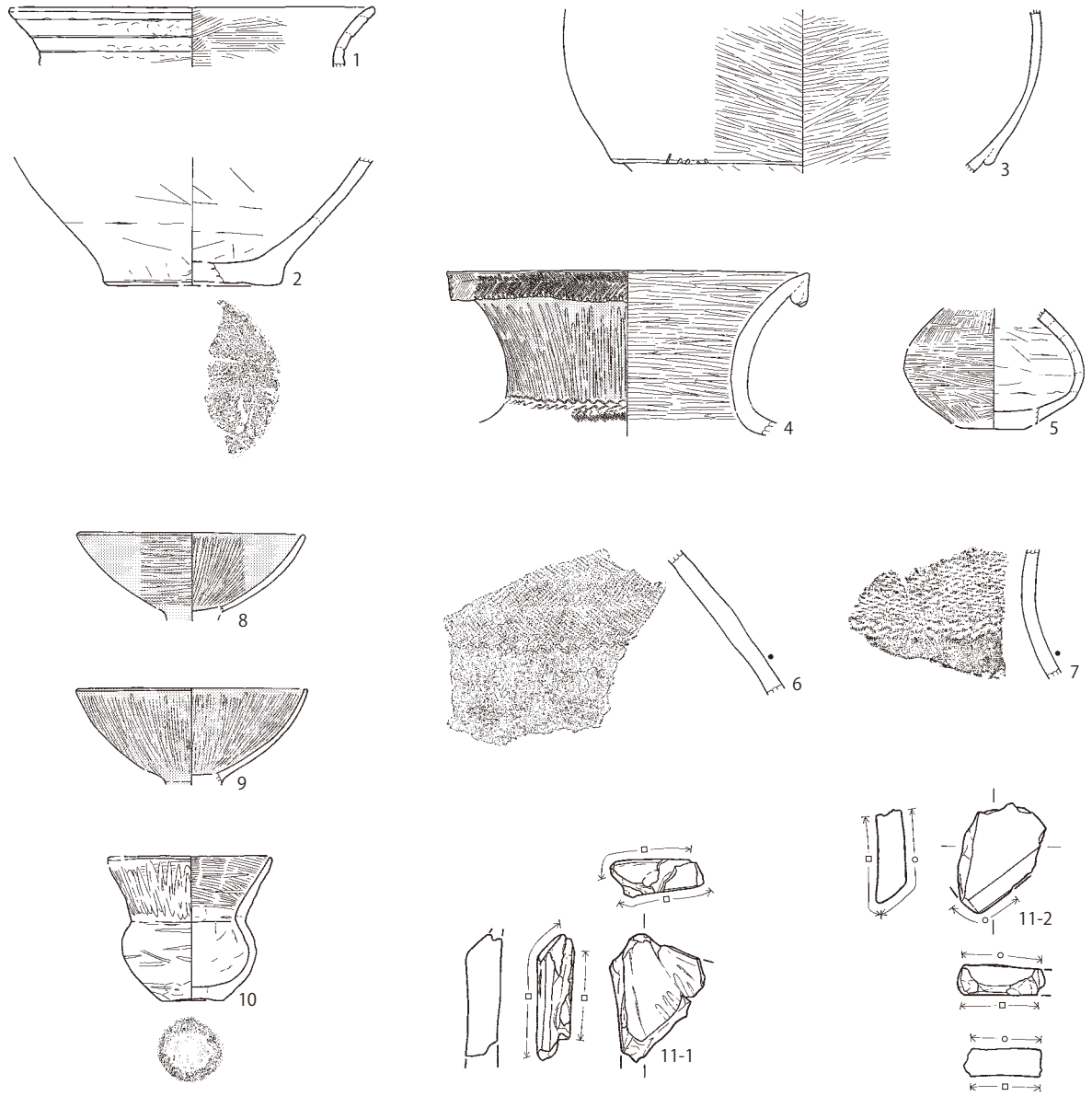
覆土は、下層に焼土の集中が見られ、褐色土・黄褐色土も目立ち、火と埋め戻しを伴う人為的な廃絶過程を経た可能性がある。

遺物は、炉内の他、床面近くから下層にかけて土器を主体に出土している。壺4は床面に口縁を

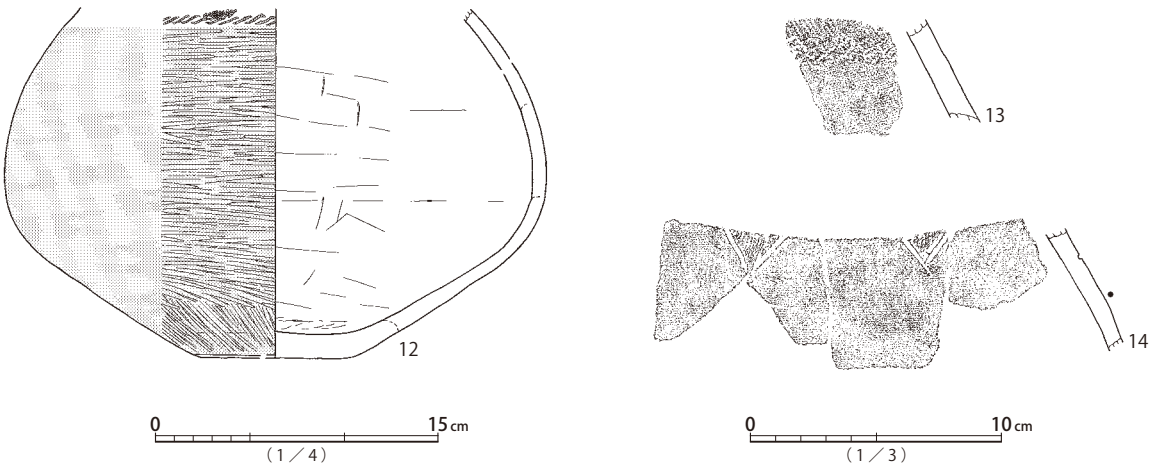


第236図　SI1012A・B遺構

SI1012A

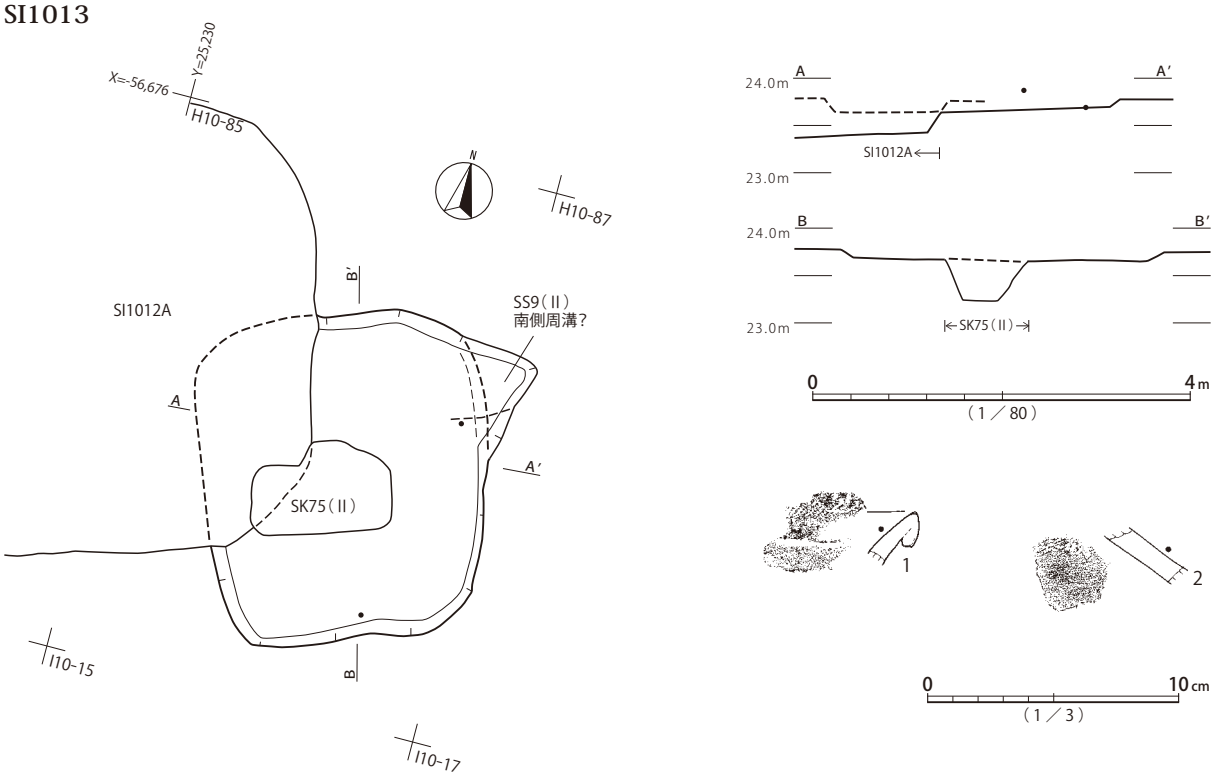


SI1012B



第237図　SI1012A･B遺物

SI1013



第238図　SI1013遺構・遺物

下に向けた状態で、ほぼ完形の小型鉢10は北西角付近の覆土中位から出土している。小型鉢10の底面外周は若干高くなっており、非在地的な輪台充填技法によって底部が形成されている。椀形高杯8・9は東海系土器の影響を受けた折衷的な杯部丸底の形態である。甕1、小型壺5を含め、概ね弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。他に、砂岩製砥石11が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

重複する2遺構は、弥生時代後期後半のSI1012B→弥生時代終末期のSI1012Aの構築順が想定できる。南東部が重複するSI1013との先後関係は不明だが、SI1012Aが新しいと推定する。

SI1013（第238図、図版60・219）

3.5×3.0m、深さ10cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴等の穴、炉は検出されていない。北東角が東へ突出する部分は、中台2式期と推定される方形墓SS9の南側周溝に当たる可能性がある。覆土については、土層断面記録が無く、切り合い関係についても詳細は不明だが、SI1012AとSS9より先に構築されていたと推定する。

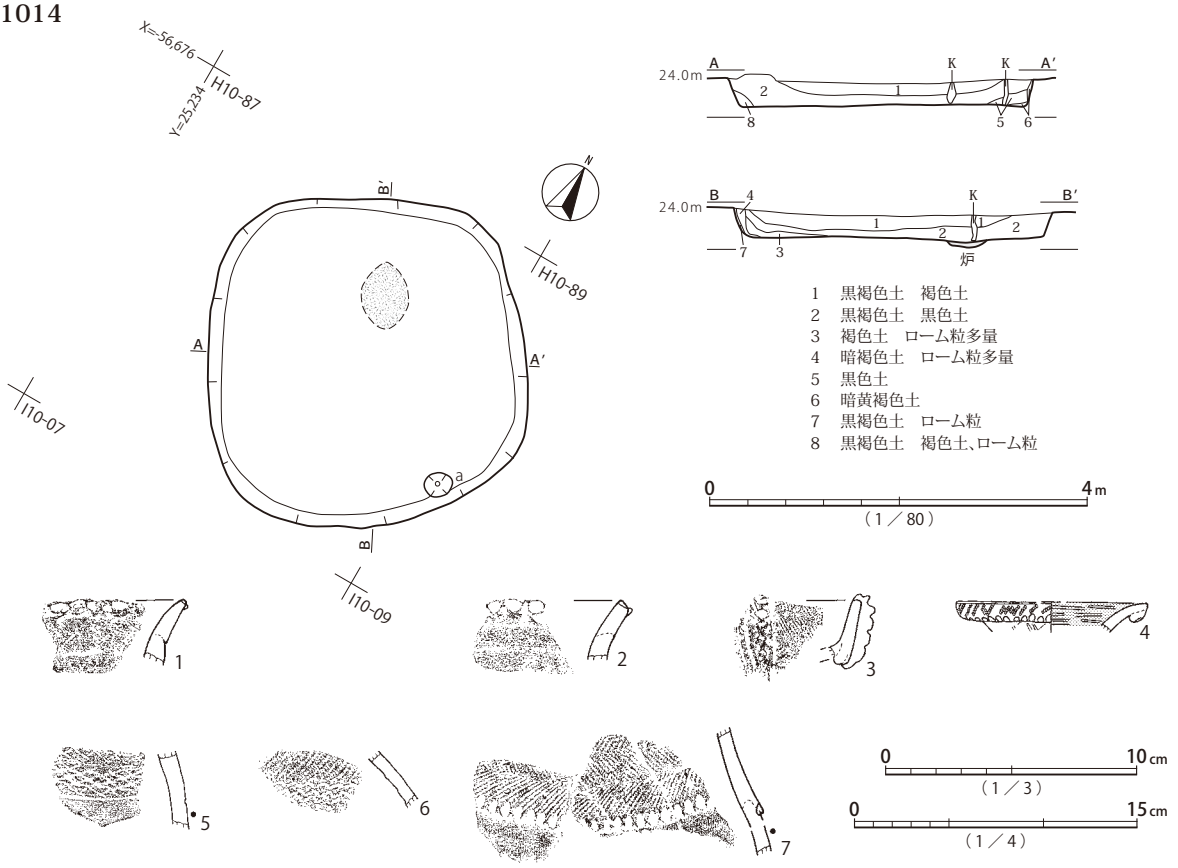
遺物は、弥生土器の壺1・2が図化できる程度である。いずれも覆土一括取り上げ資料だが、壺2は結節文区画の文様を持つことから、弥生時代後期後半以降に位置づけられる。

本遺構は、周辺遺構との先後関係の想定から、弥生時代後期後半の所産と推定する。

SI1014（第239図、図版60・219・333）

3.5×3.4m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、貯蔵穴の可能性があるaのみが検出されている。中心からやや北に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面周

SI1014



第239図　SI1014遺構・遺物

溝は伴わない。

覆土は、壁面近くの初期堆積を除き、黒褐色土層を主体とし、概ね漸移的な堆積過程が想定できる。

遺物は、弥生土器が少量出土している。甕1・2、壺3～6、広口壺7はいずれも覆土一括取り上げ資料である。壺3は受口状に高い複合口縁を持ち、壺6は結節文区画の文様が施されており、いずれも弥生時代後期後半に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1015（第240図、図版60・158・219）

2.5m以上×3.2m、深さ20cm程度の円形竪穴建物跡である。北西部がTJ地区に続くものの、調査時の掘削深度の影響のためか、検出されていない。遺存部床面に主柱穴は認められず、貯蔵穴の可能性があるaが検出されるのみである。

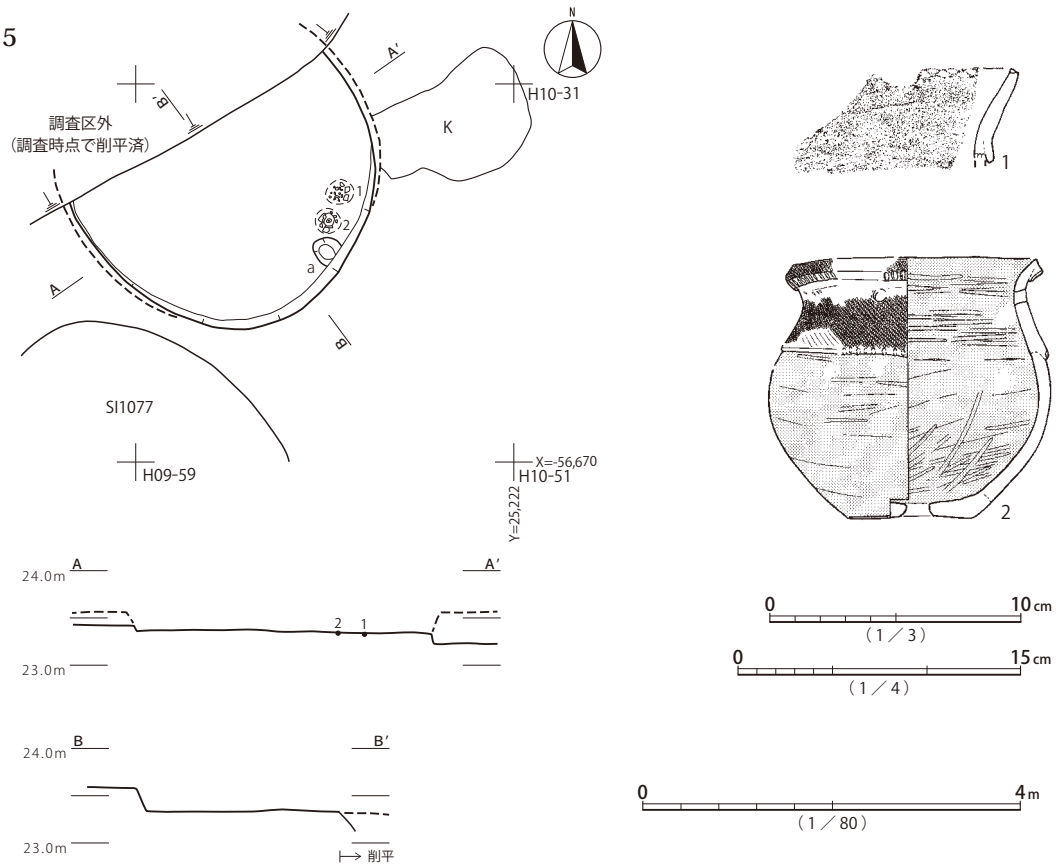
覆土は、土層断面記録がなく、詳細は不明である。

遺物は、床面直上から甕1と広口壺2が出土している。広口壺2は、焼成後底部穿孔され、二次焼成を受けており、転用甑の可能性もある。2は弥生時代後期後半、山田橋1式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

SI1016（第241図、図版60・219・306・326・333）

4.3×4.4m、深さ30cm程度の円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期方形墓SS8と重複するほ



第240図　SI1015遺構・遺物

か、覆土上位を大きく撹乱されている。明確な主柱穴は見られず、貯蔵穴bが検出される程度である。中心から北に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は伴わない。

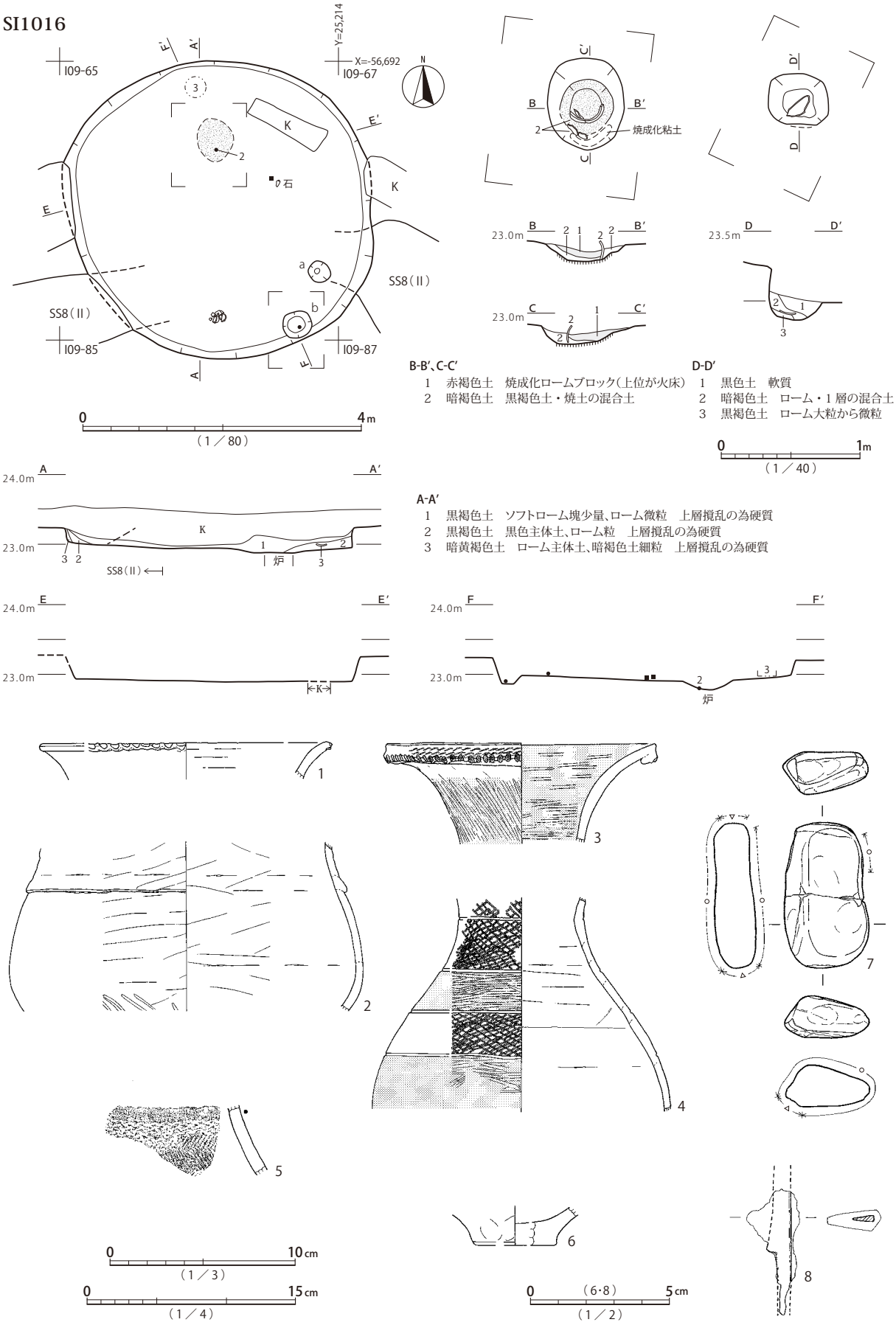
覆土は、撹乱の影響で硬化している。壁面近くを除き、黒褐色土層を主体とする漸移的様相を示す堆積状況が認められる。

遺物は、床面近くから弥生土器を主体として出土している。甕2は炉内に転用・埋置されていた。結節文多段の施される壺3は炉の北側の床面から検出されている。現状では遺物注記と対応しないが、南側の土器片集中部から沈線区画網目状文の壺4が出土した可能性がある。貯蔵穴b内の土器片は対応する遺物が確認できない。壺3・4の装飾と形状を勘案すると、概ね弥生時代後期中葉、久ヶ原2式新段階に位置づけられるものと思われる。結節文区画の壺5については、覆土一括取り上げ資料であり、SS8等からの混入の可能性が考えられる。その他、砂岩製礫石器7、鉄製刀子8が出土しており、後者は混入品と見られる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

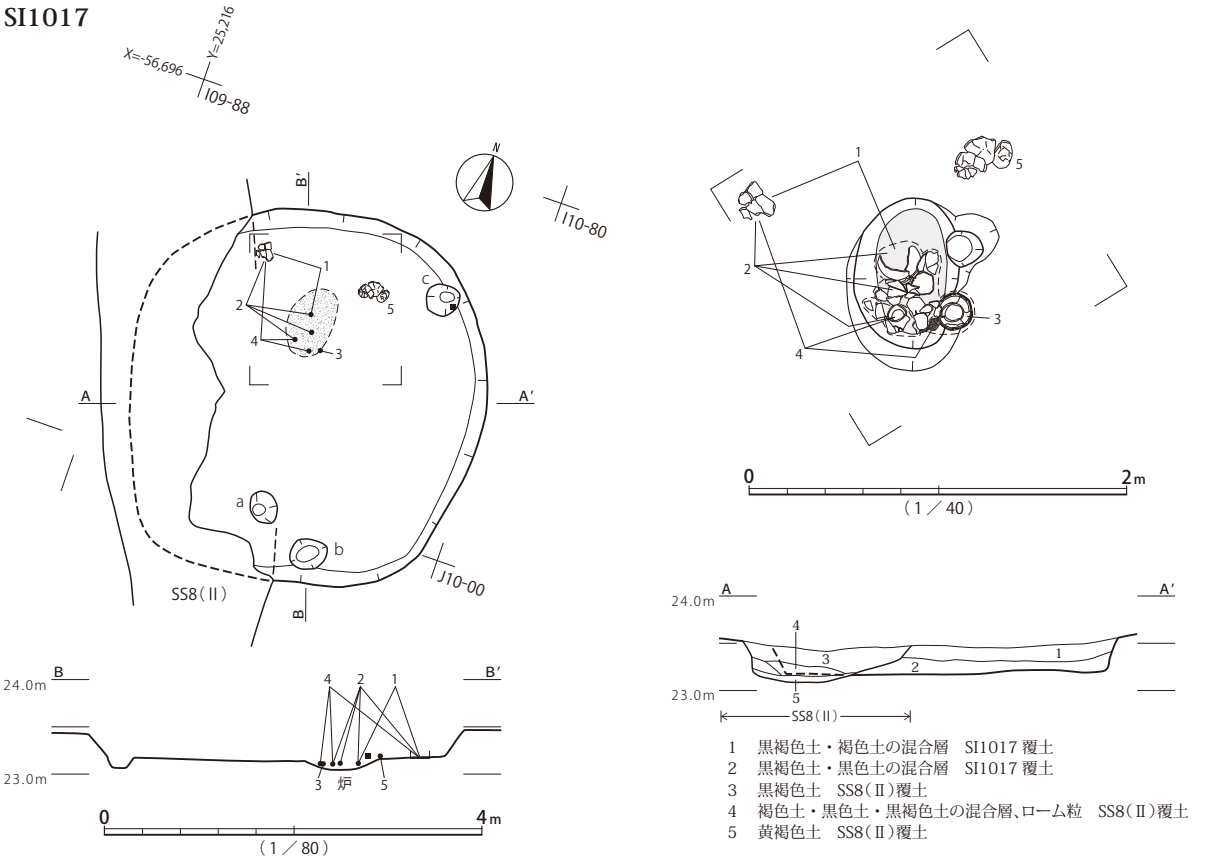
SI1017（第242図、図版61・158・219・333）

4.0×3.8？m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。西側が弥生時代終末期方形墓SS8周溝と重複し、床面以下まで破壊を受けている。主柱穴は見られず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bの他、深さ10cmのcが検出されるのみである。推定中心軸上、北寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は確認されていない。

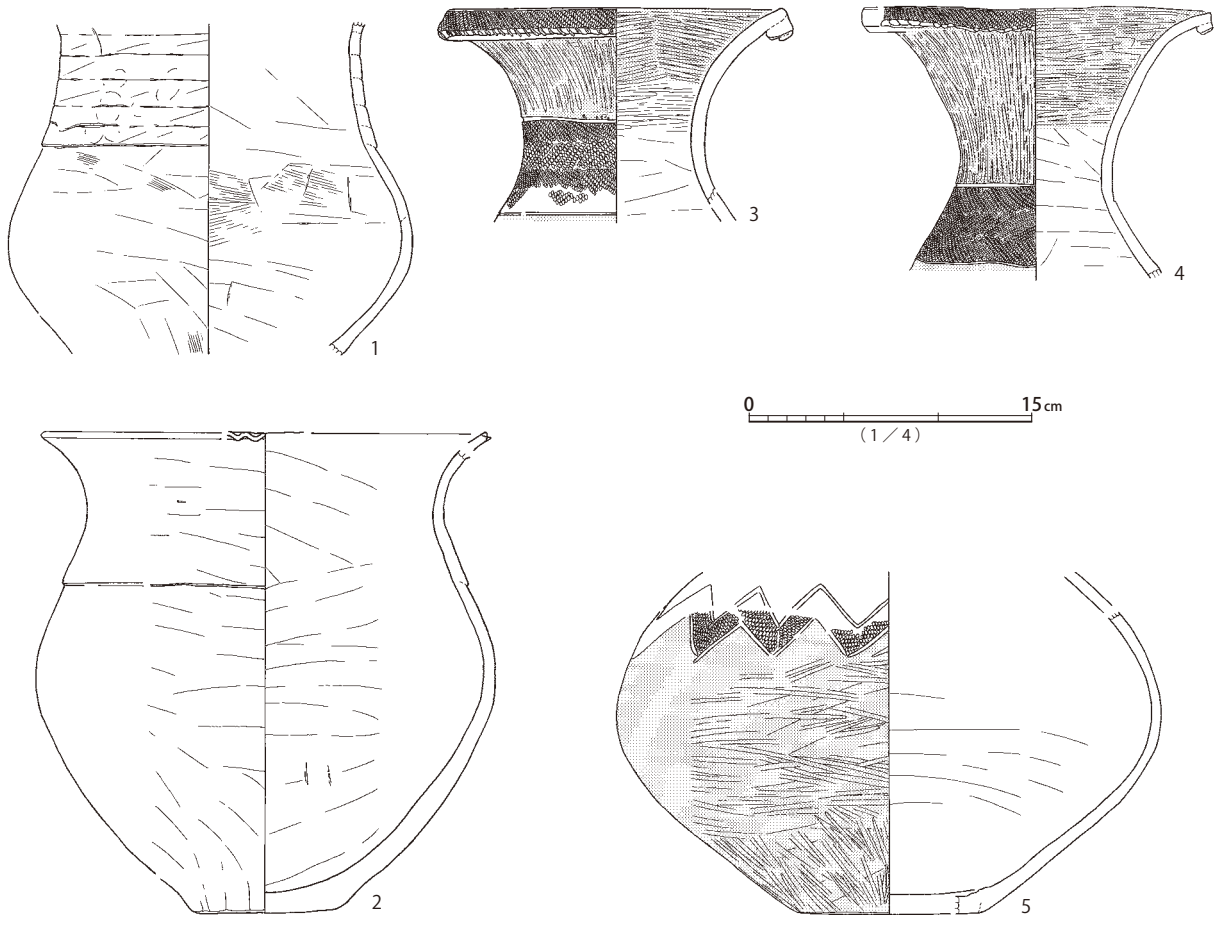


第241図　SI1016遺構・遺物

SI1017

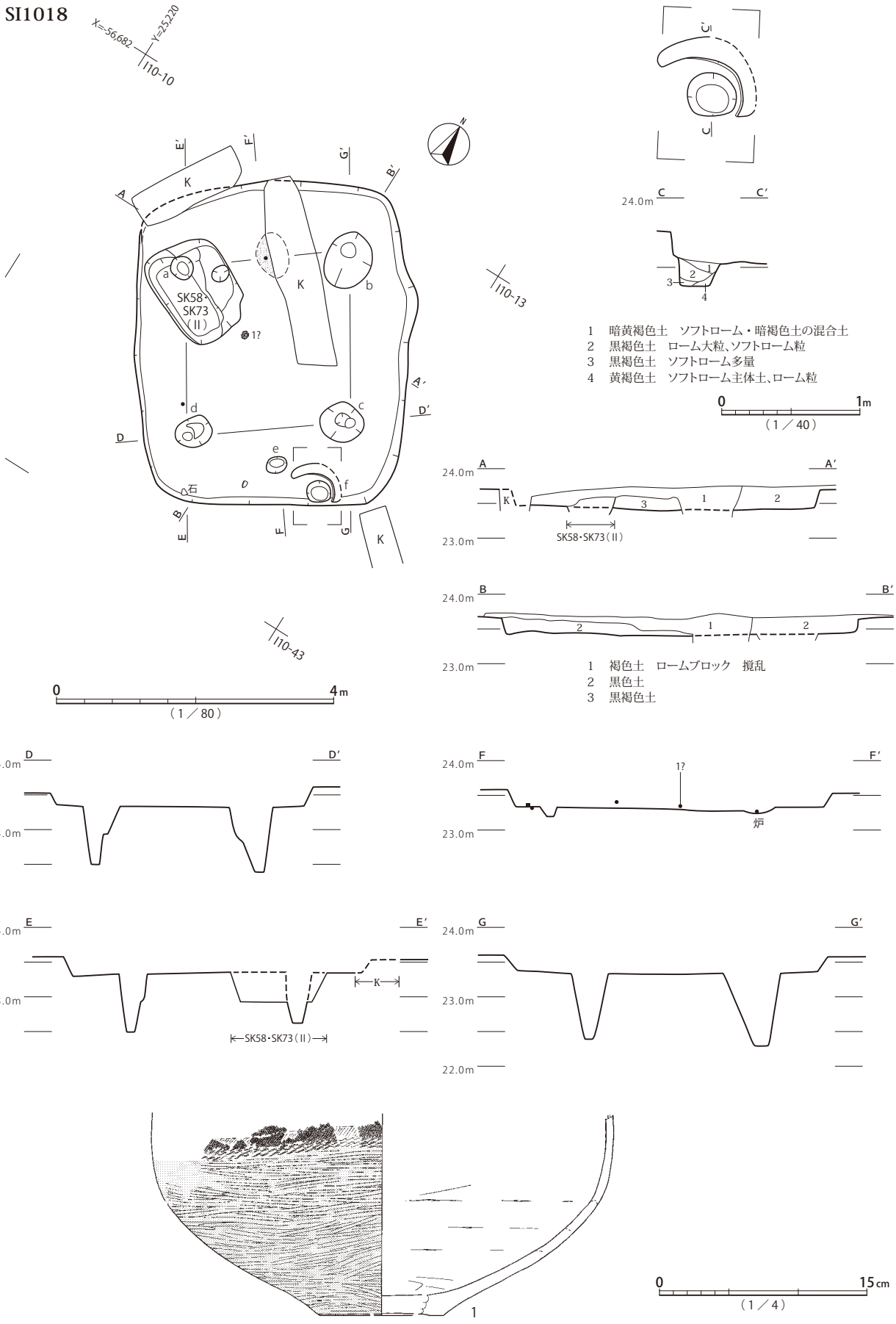


1　黒褐色土・褐色土の混合層　SI1017 覆土
2　黒褐色土・黒色土の混合層　SI1017 覆土
3　黒褐色土　SS8(Ⅱ)覆土
4　褐色土・黒色土・黒褐色土の混合層、ローム粒　SS8(Ⅱ)覆土
5　黄褐色土　SS8(Ⅱ)覆土



第242図　SI1017遺構・遺物

SI1018



第243図　SI1018遺構・遺物

覆土は、黒褐色土を主体とする連続的な土層で、焼土・炭化物は特に集中が確認されず、漸移的な堆積状況を想定できる。

遺物は、炉内と周辺に集中して弥生土器が検出されている。輪積み痕を残す甕1、ナデ消す甕2、沈線文区画の文様を持つ壺3・4、山形文の壺5があり、いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。炉内から検出される壺口頸部は転用器台であるケースが目立つが、本例は二次焼成および破断面の摩滅が確認されないため、異なる脈絡で遺棄されたものと思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI1018（第 243 図、図版 61・158）

4.7 × 4.1m、深さ 30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を受けるほか、時期不明土坑SK73・SK58とも重複し、床面以下まで破壊を受けている。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。aはSK73・SK58内に残欠が確認されている。楕円形の炉がa・b間ライン上に検出されているが、東半を撹乱で失っている。貯蔵穴fの北・東外周には低い堤状の高まりが伴い、蓋受けとして機能した可能性が考えられる。

覆土は、黒色から黒褐色を呈する連続的な土層で、漸移的な堆積過程が想定できる。

遺物は、出土位置記録はあるものの対応注記が不明で、弥生土器壺1が中央部から出土した可能性が考えられる程度である。壺1は結節文区画の装飾を持ち、弥生時代後期後半、山田橋式から、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から弥生時代終末期に帰属すると考えられる。SK73・SK58については、古墳時代以降に構築された可能性が高く、プランを共有することから同一の埋葬遺構であると思われる。

SI1019（第 244 図、図版 61・219）

3.4 × 3.2mと推定される隅円方形竪穴建物跡である。イモ穴により東辺が撹乱されるほか、全体が床面レベルまで削平を受けており、覆土は貼床層と混然とし、ほとんど遺存していない。主柱穴等は検出されていない。中心からやや北西に寄った位置に、楕円形の炉が設けられる。

遺物は、土器が僅かに出土している。鉢1・2は弥生後期の土器で、鉢2は沈線区画を持ち弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

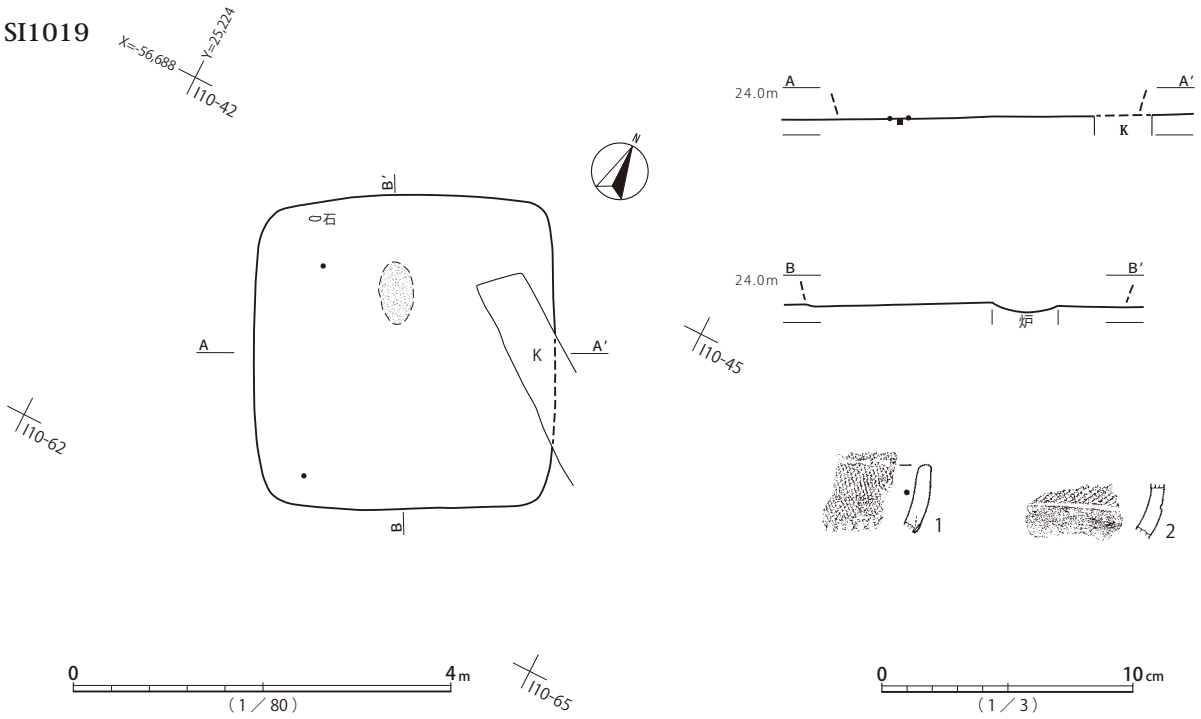
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期から弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI1020（第 245 図、図版 61・159・219・299・333）

4.6 × 4.2m、深さ 35cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北壁の一部がイモ穴により撹乱されている。主柱穴は認められず、貯蔵穴の可能性があるa・bが壁際に検出されるのみである。中心軸上、やや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。

覆土は、北西壁付近床面に焼土の集中が認められ、廃絶過程初期に火を受けた可能性が高い。以上の層は、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面から上層にかけて、土器片が北側にやや偏って出土している。甕1・2・3は口縁端部



第244図　SI1019遺構・遺物

を棒状工具で交互押捺している。甕3については、床面と最上層に破片が分かれて検出されている。広口壺4、椀5と合わせ、弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。無文の小型椀6については弥生時代終末期、中台式とも考えられるが、覆土一括取り上げ資料であり、混入品である可能性もある。その他、手びねりによる不定形の土製品9が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

SI1021（第 246 図、図版 61・159・219・306）

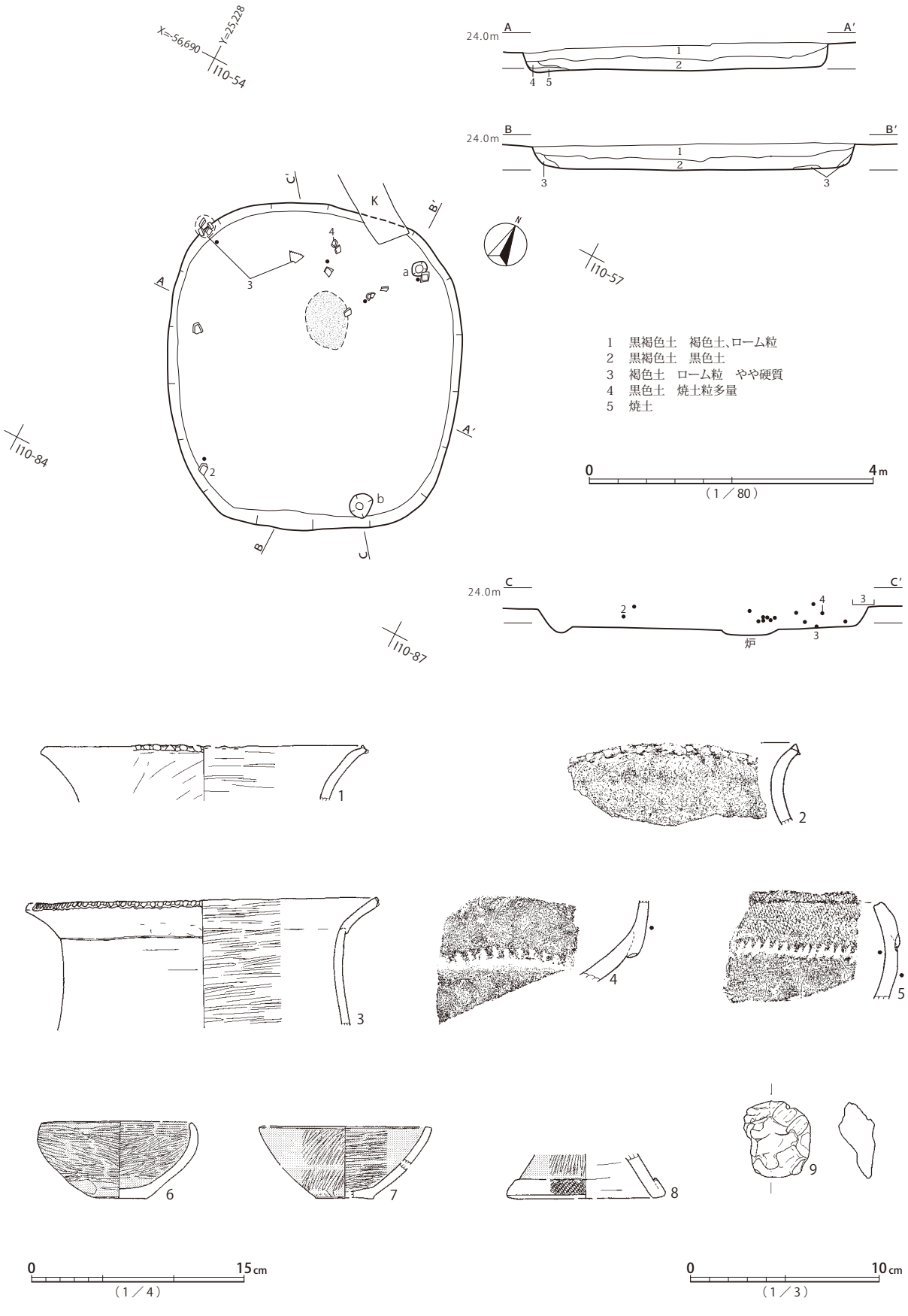
3.8 × 3.5m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。中央から西側にかけて床面までの撹乱を広範囲に受け、遺存状態は良くない。南東角がSI1102 と重複するほか、東側に同時存在の難しい距離でSI1207が隣接する。明確な記録はないが、弥生時代後期前半のSI1102の覆土を本遺構が切る可能性が高い。主柱穴は確認されず、貯蔵穴aのみが検出されている。炉は撹乱を受けている部分、中心からやや北西に寄った位置に存在したと見られる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、床面から下層にかけて焼土と炭化材が検出されている。床面上に完形に近い土器群が残されることから、焼却処分を伴う廃絶過程における儀礼の行われた可能性がある。

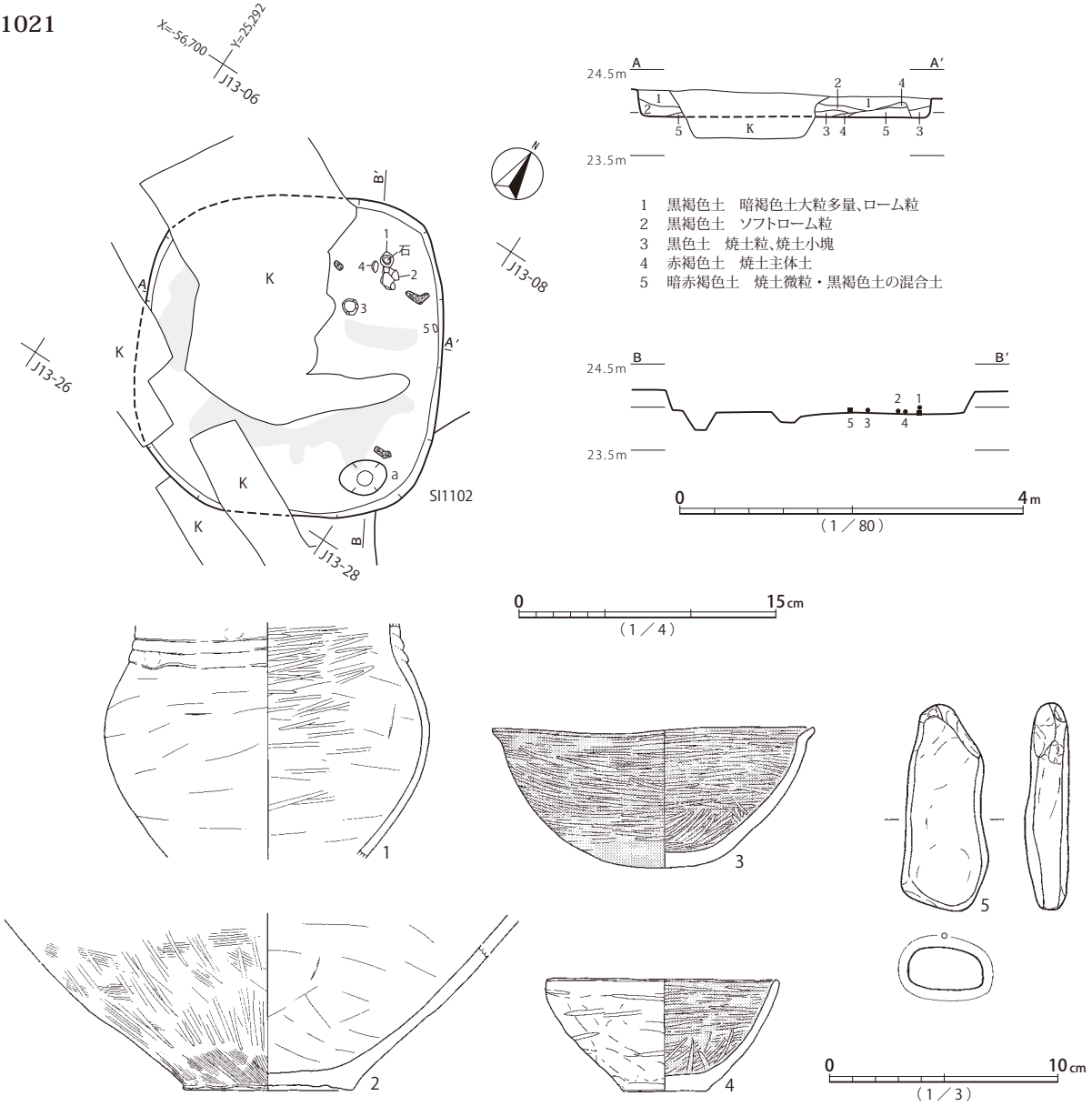
遺物は、北側床面近くに集中して土器1 ～ 4と石器が検出されている。在来的な輪積み装飾を持つ甕1、小さく屈折する口縁端部内面に平坦面を持つ半球形の鉢3、無文素口縁の小型鉢4は、いずれも弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。鉢3は口縁を床面に接する状態で検出されている。その他、砂岩製砥石5が出土している。

本遺構は、切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI1020



第245図 SI1020遺構・遺物



第246図　SI1021遺構・遺物

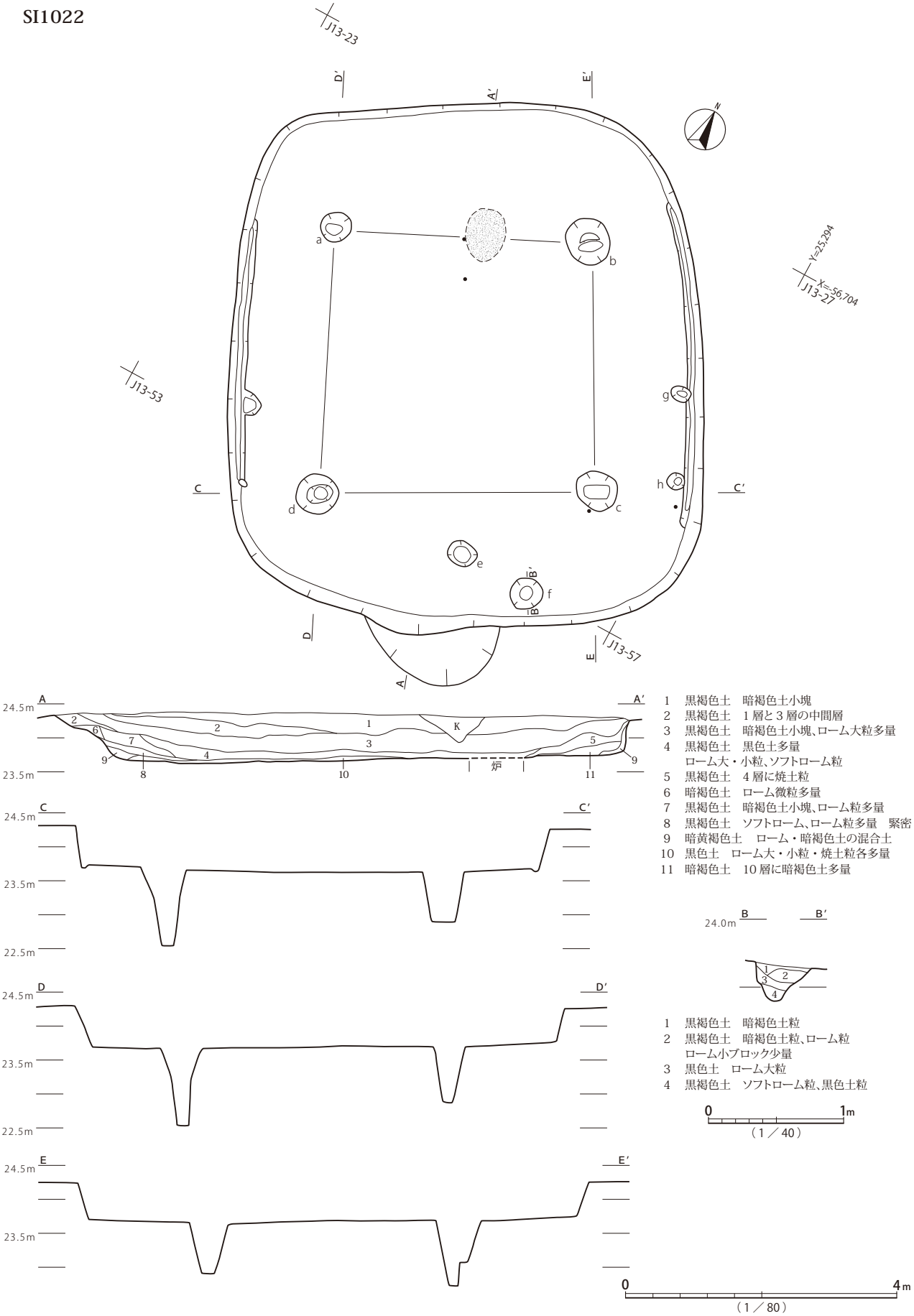
SI1022（第 247・248・249 図、図版 62・159・219・220・306・326・333・334）

7.8 × 7.0m、深さ 65cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴 a ～ d、ハシゴ穴 e、貯蔵穴 f が検出されている。中心軸やや東寄り、a・b 間ライン上の位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は西・東辺のみ部分的に確認されている。

覆土は、床面直上にローム・焼土粒の多い黒色土層が見られるが、面的な焼土・炭化材の検出は記録されていない。廃絶に伴う建物解体が行われた後の竪穴に漸移的な堆積が進んだ状況が推定できる。

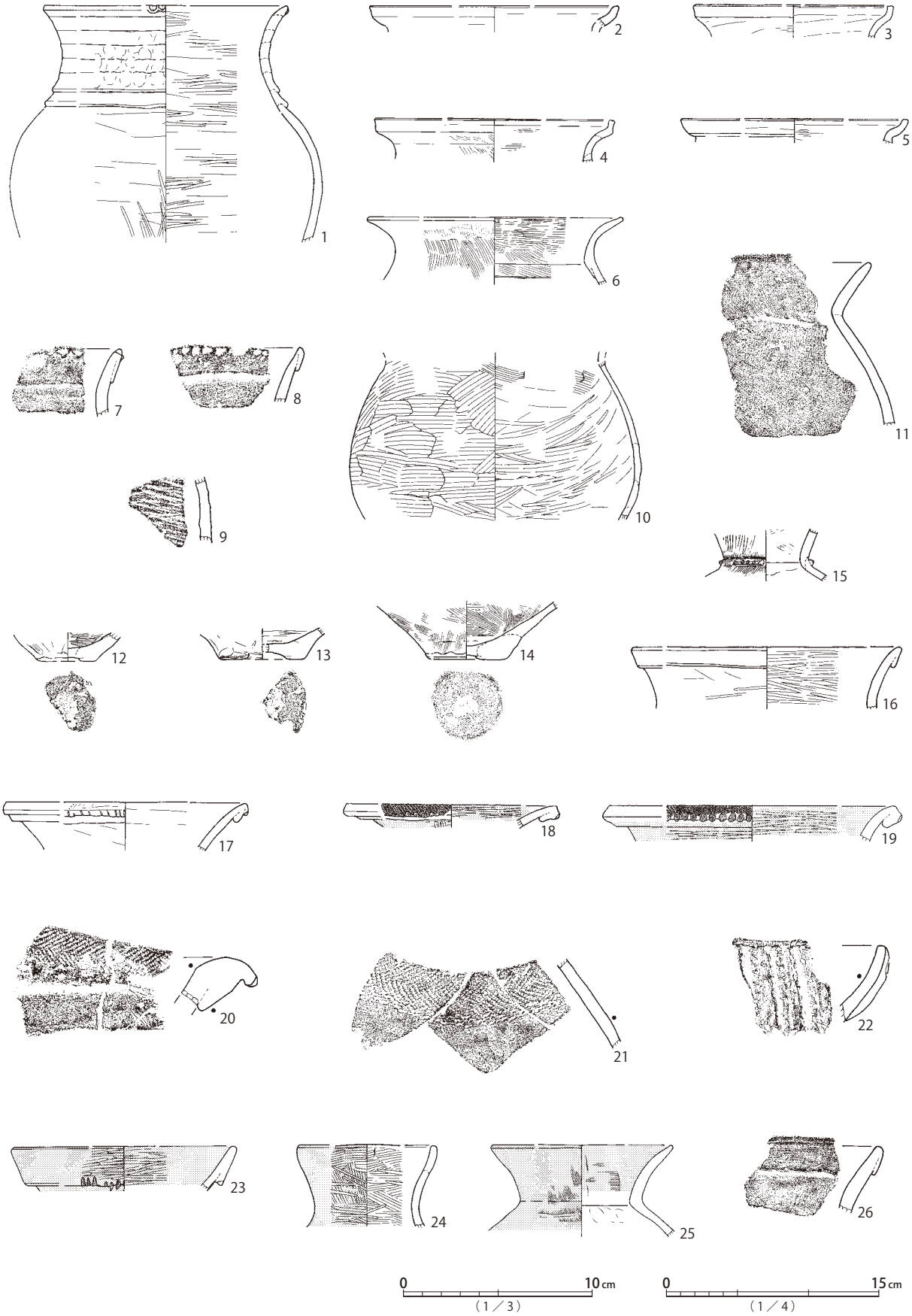
遺物は、土器片が比較的多く出土しているが、出土位置記録と対応する資料が無く、覆土一括取り上げ資料のみである。在来系の輪積み痕装飾を持つ甕 1 の他に、受口状口縁甕 2 ～ 5、タタキ甕 9、輪台技法の底部片 12 ～ 14、高杯 32 ～ 35 など、外来的な土器が目立つ。壺 18 ～ 21、椀 27、鉢（高杯）28 は在来的な後期弥生土器であり、数量が少ないこれらが混入品と見込まれる。過渡的な形態のも

SI1022



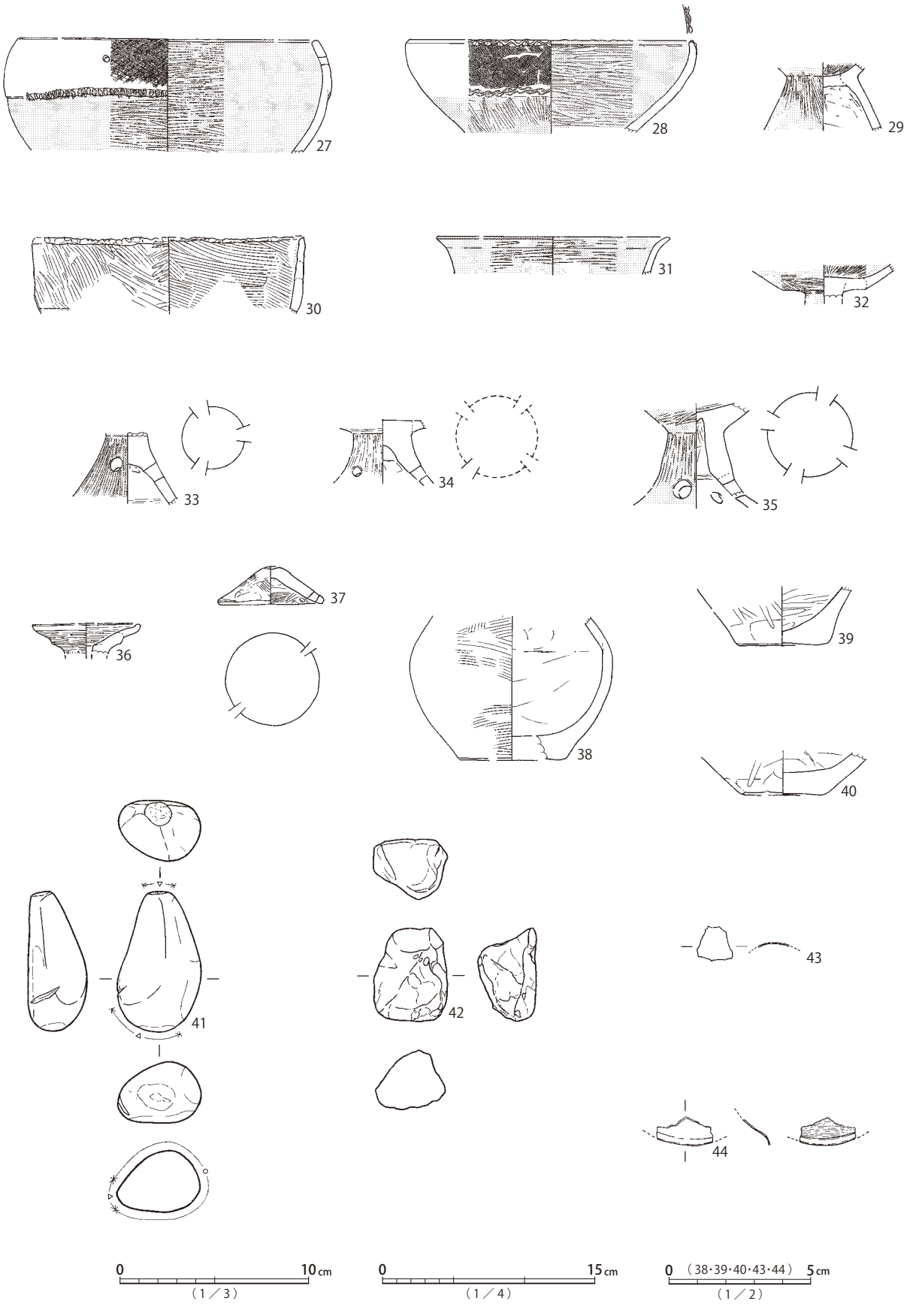
第247図 SI1022遺構

SI1022



第248図　SI1022遺物(1)

SI1022



第249図　SI1022遺物（２）

のを含め、出土土器の多くは、弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器41、軽石42、不明銅製品43・44も出土しているが、いずれも覆土一括取り上げ資料である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI1023・SI1204（第250・251・252・253図、図版62・159・172・220・251・252・306・317・339）

5.2？×4.4？m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1023と、7.4×7.0m、深さ50cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1204である。SI1023の北西部とSI1204南東辺が重複している。SI1204がSI1023の後に構築されており、床面レベルはSI1204の方が低い。

SI1023は、主柱穴h～j、貯蔵穴kが検出されている。北西主柱穴はSI1204床面の推定位置に検出されておらず、eがこれに対応する可能性も否定できない。中心軸上、北寄りに楕円形の炉が設けられるが、北西側は遺存しない。

覆土は、土層断面記録が無く不明だが、焼土・炭化材の平面分布も認められず、漸移的な堆積過程を経たものと思われる。

遺物は、外周部の床面近くのレベルで土器片が出土している。在来的な交互押捺口縁の甕1、結節文多段文様の壺2は弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器5が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

SI1204は、西・東辺に幅1m強、高さ10cm程度のベッド状遺構が伴い、これに接する位置に主柱穴a～dが検出されている。ハシゴ穴もしくはSI1023主柱穴の可能性があるeは、竪穴南辺を破壊する撹乱内に遺存し、貯蔵穴と見られるf・gが南壁際と南東角に確認されている。中心軸上やや北西寄り、a・b間ラインの内側に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は遺存部において全周する。

覆土は、炉周辺に焼土粒を含む土層はあるものの、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。ベッド状遺構部分は中央部床面貼床層と連続的に形成されたと見られる。

遺物は、覆土上層と下層に分離して検出されている。竪穴掘り込み面に近い上層からは、ハケメ甕6、無文小型壺22、広口壺（鉢）32、無文素口縁鉢30・33などが出土している。床面近くからは、転用甑21、小型鉢34、高杯37等が出土し、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。上層出土土器は下層よりも新相を示し、弥生時代終末期後半、中台2-2式から古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。特徴的な土器としては、ヘラ描きの斜格子状文様の施された甕15と北陸西部系の影響を受けた有段口縁小型鉢29がある。甕15と同様の資料はベッド状遺構の伴うSI1048にもあり、両遺構の共通性が興味深い。他に、輝石安山岩製礫石器39、チャート製礫石器41、砂岩製礫石器42、軽石製砥石40・43が出土している。

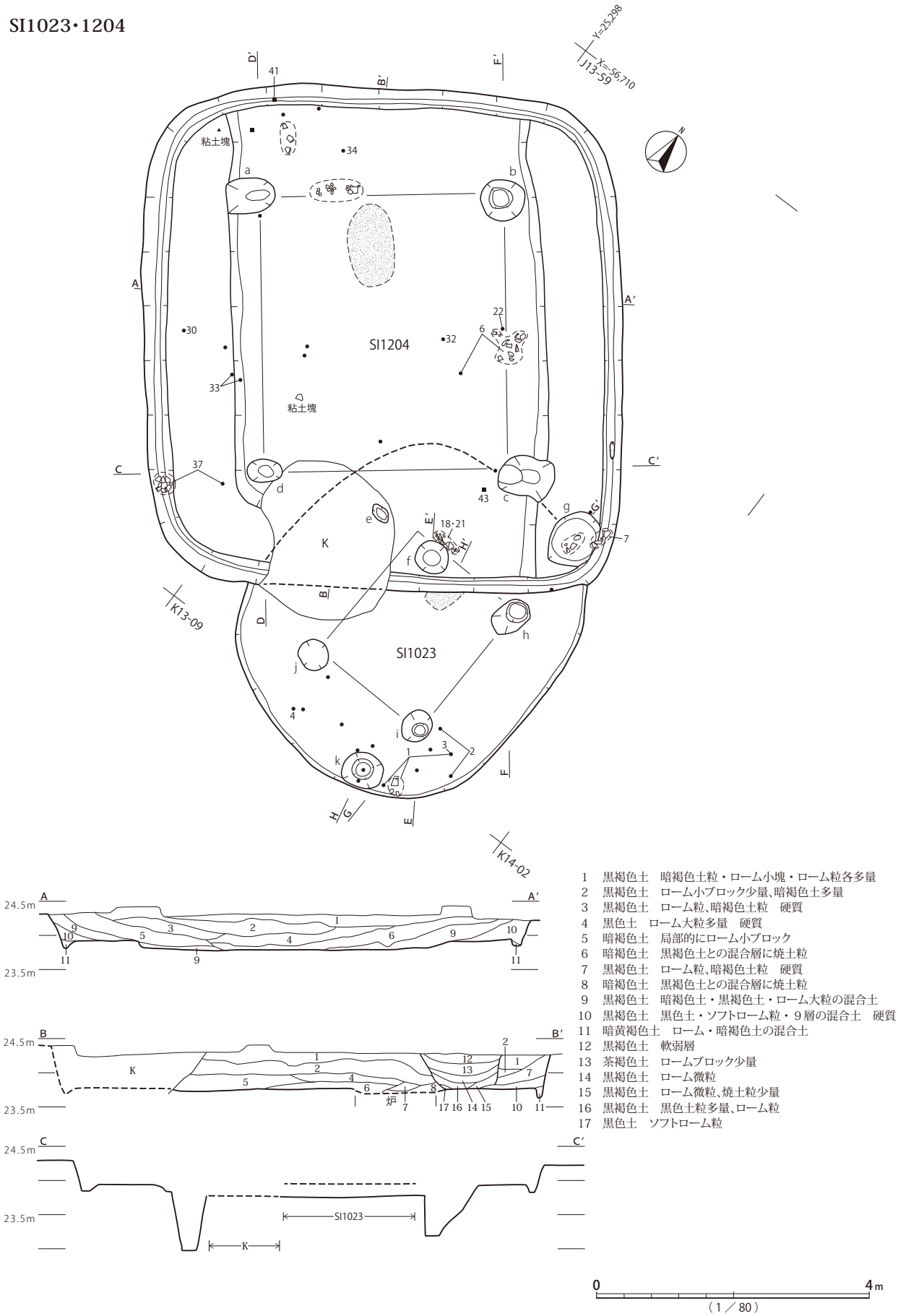
本遺構は、下層出土遺物の様相から、弥生時代終末期に帰属すると考えられる。

重複する2棟の竪穴建物跡は、弥生時代後期後半のSI1023→弥生時代終末期のSI1204、という構築順序が想定できる。

SI1024（第254図、図版62・159・220）

4.6×4.0m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。東側が弥生時代終末期方形墓SS8周溝

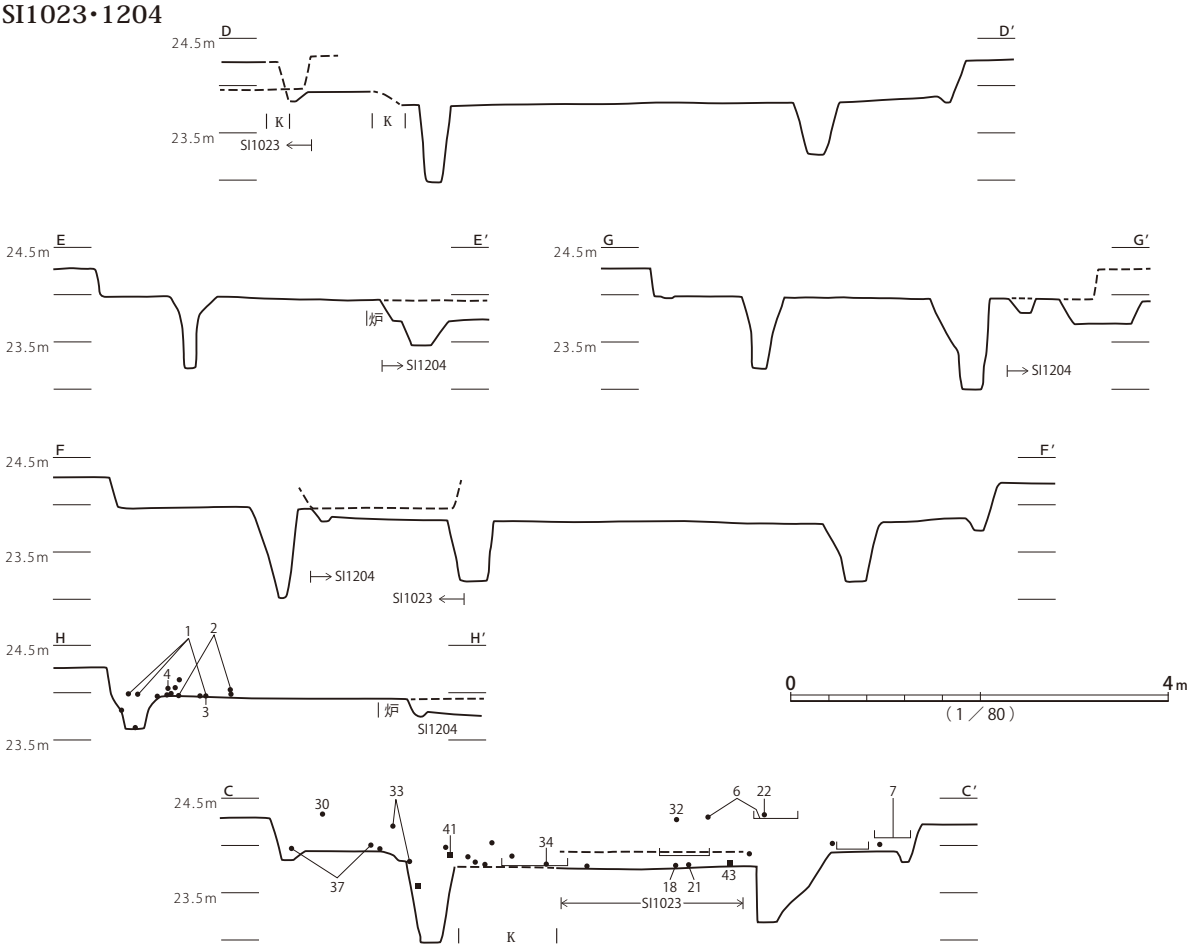
SI1023・1204



1 黒褐色土 暗褐色土粒・ローム小塊・ローム粒各多量
2 黒褐色土 ローム小ブロック少量、暗褐色土多量
3 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒 硬質
4 黒色土 ローム大粒多量 硬質
5 暗褐色土 局部的にローム小ブロック
6 暗褐色土 黒褐色土との混合層に焼土粒
7 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒 硬質
8 暗褐色土 黒褐色土との混合層に焼土粒
9 黒褐色土 暗褐色土・黒褐色土・ローム大粒の混合土
10 黒褐色土 黒色土・ソフトローム粒・９層の混合土 硬質
11 暗黄褐色土 ローム・暗褐色土の混合土
12 黒褐色土 軟弱層
13 茶褐色土 ロームブロック少量
14 黒褐色土 ローム微粒
15 黒褐色土 ローム微粒、焼土粒少量
16 黒褐色土 黒色土粒多量、ローム粒
17 黒色土 ソフトローム粒

第250図 SI1023・SI1204遺構(1)

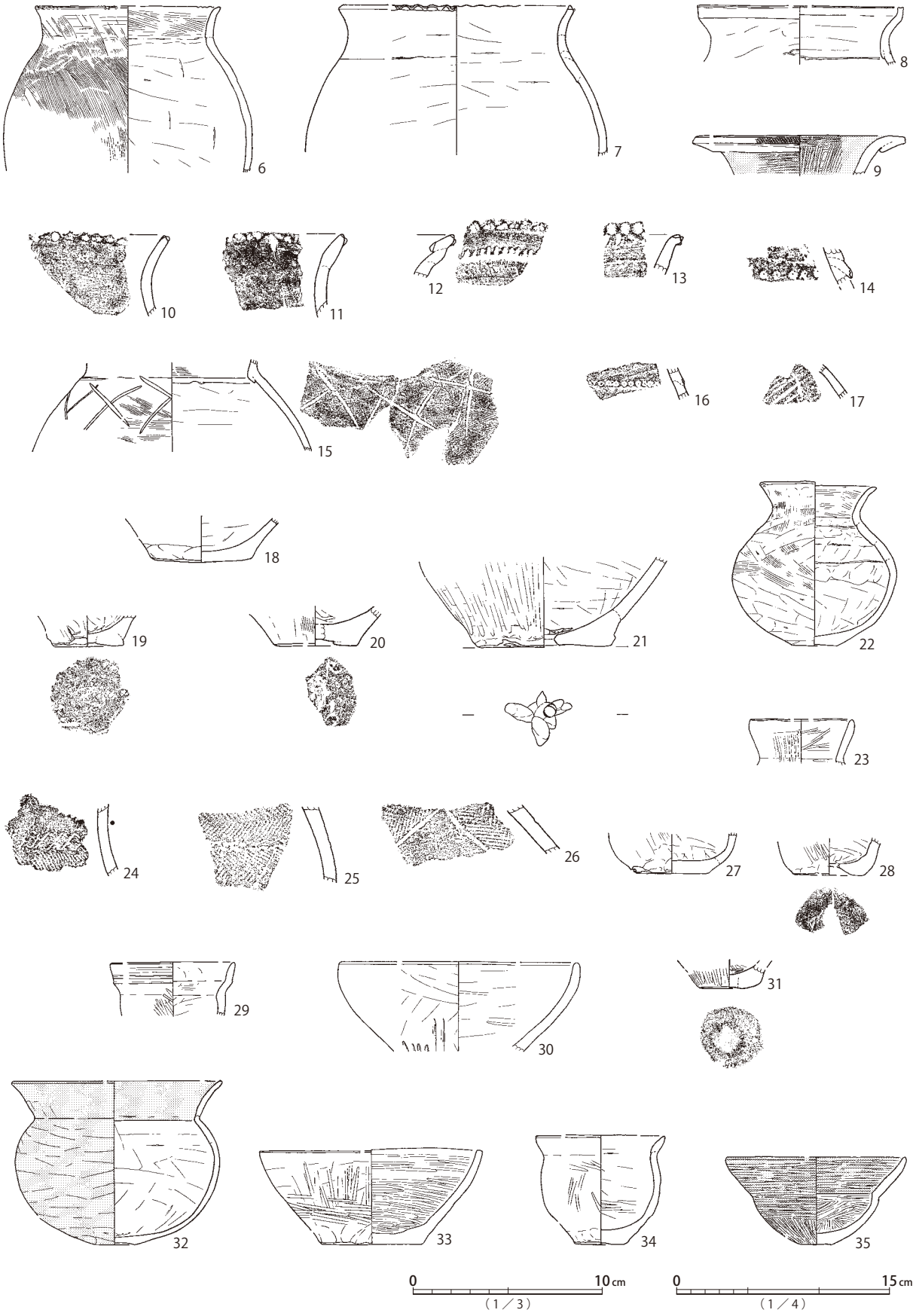
SI1023・1204



SI1023

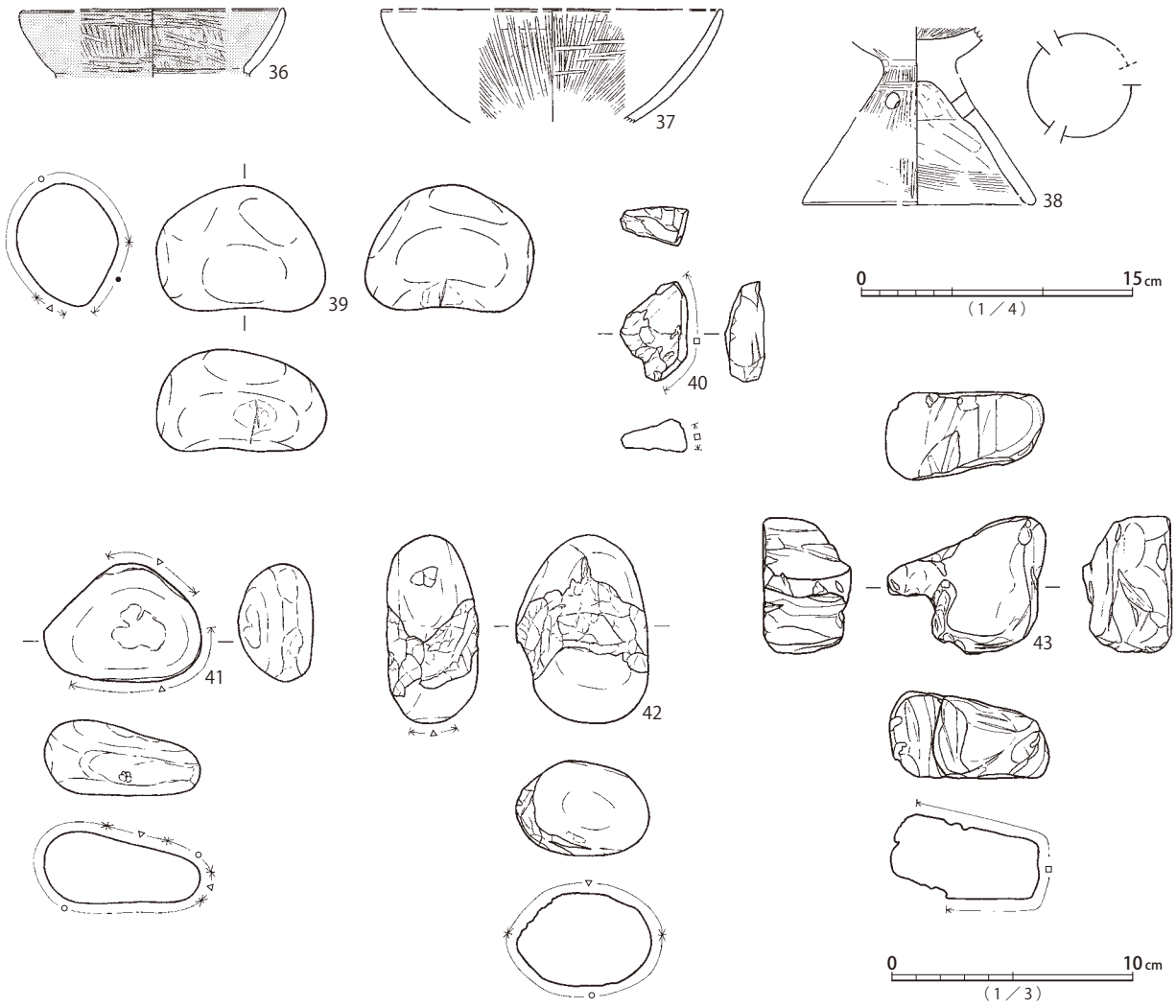
第251図　SI1023・SI1204遺構(2)、SI1023遺物

SI1204



第252図　SI1204遺物（1）

SI1204



第253図　SI1204遺物（2）

に近接する。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。a・d間、b・c間の柱筋にg・iも位置するが、深さは不揃いで組み合う可能性は低い。中心軸上、a・b間ラインに不整円形の炉が設けられる。柱間内部は若干掘り下げられた記録があるものの、積極的にベッド状遺構とは認識されておらず、貼床土層が一定ではなかった可能性がある。

覆土は、壁際にロームブロックが目立つが、焼土・炭化材の集中部は見られず、概ね漸移的な堆積過程が想定できる。埋没後に上層撹乱の影響で上位層が硬化した可能性があり、周辺墳墓の築造などが影響したとも考えられる。

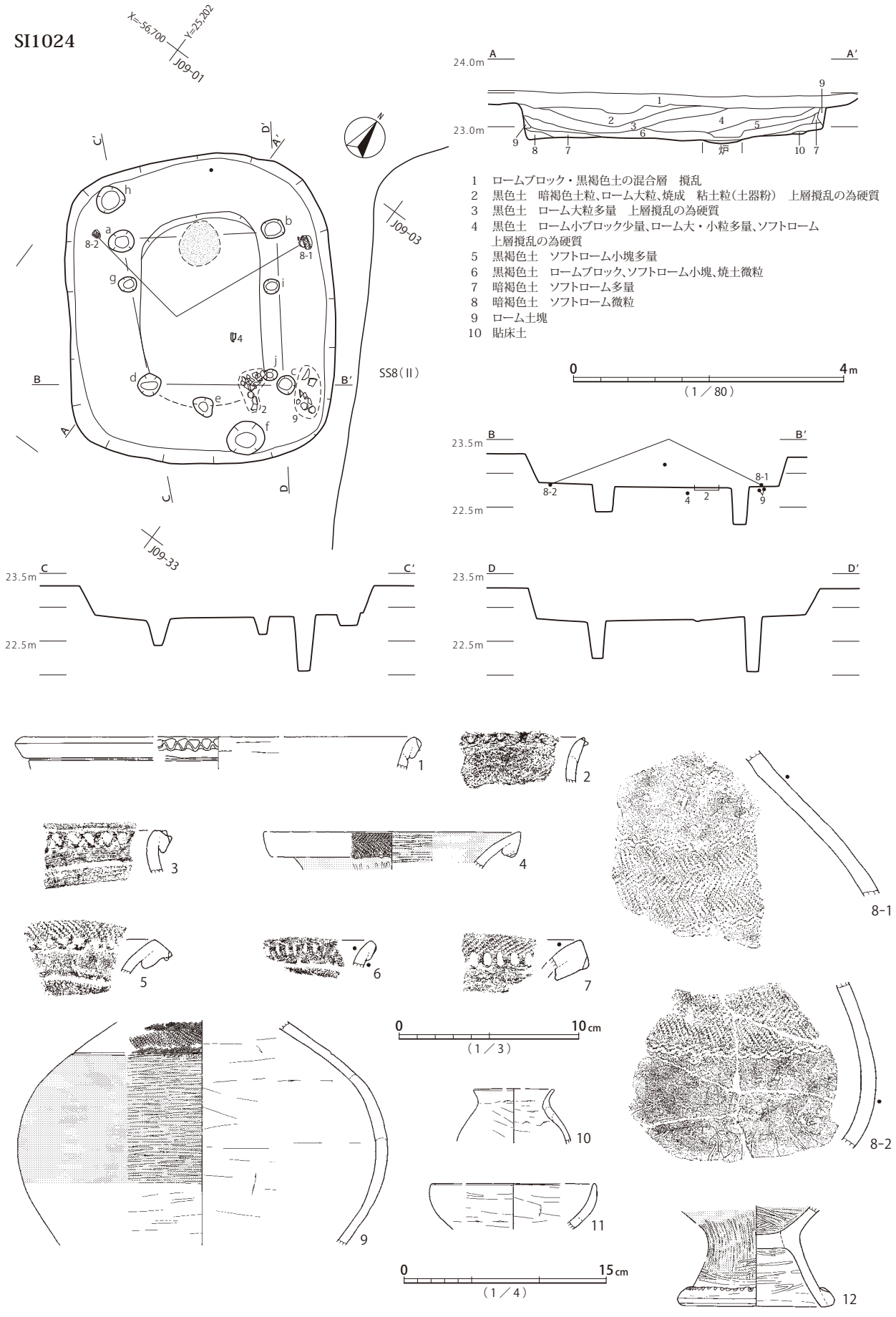
遺物は、床面直上から弥生土器が比較的多く出土している。壺8は結節文区画の文様、壺9は沈線区画の文様が施されている。概ね弥生時代後期後半、山田橋1式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1025（第255図、図版3・4）

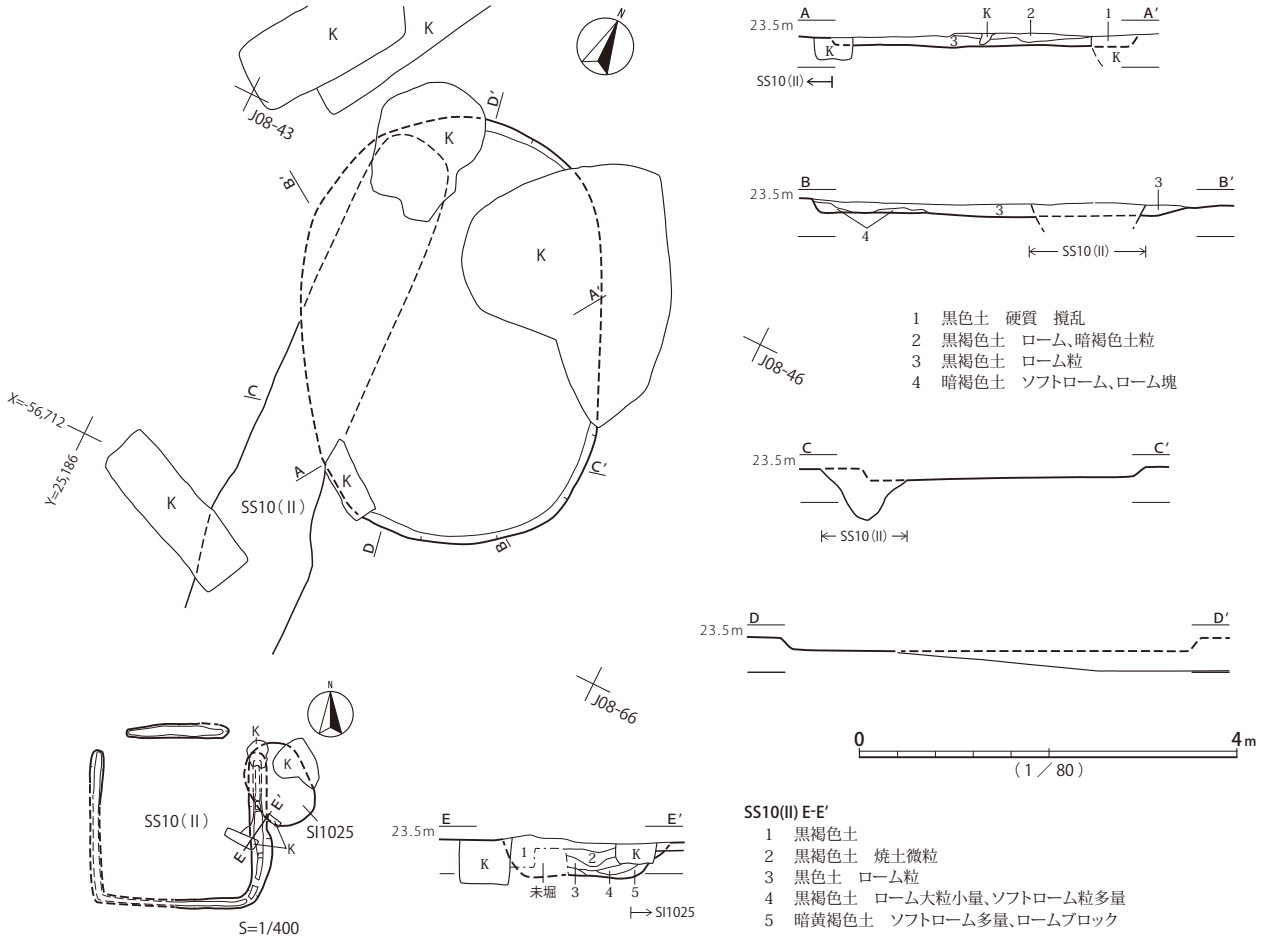
4.5×3.2？m、深さ10cm程度の長楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期と見られる方形墓

SI1024



第254図 SI1024遺構・遺物

SI1025



第255図　SI1025遺構

SS10東側周溝と重複するほか、北部を中心に大きく撹乱を受ける。主柱穴・炉等は検出されず、床面周溝も確認されていない。

覆土は、黒褐色土を主体とする漸移的な土層であり、焼土・炭化物等の集中は認められない。

出土遺物は僅少で、図化可能遺物はない。

本遺構は、平面形から弥生時代後期に帰属する可能性が考えられる。

SI1026（第256図、図版62）

3.6×3.3m、深さ10cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴・炉等は検出されず、床面周溝も確認されていない。

覆土は、最下層のロームが多く混じる土層から漸移的に黒褐色土に移行する。

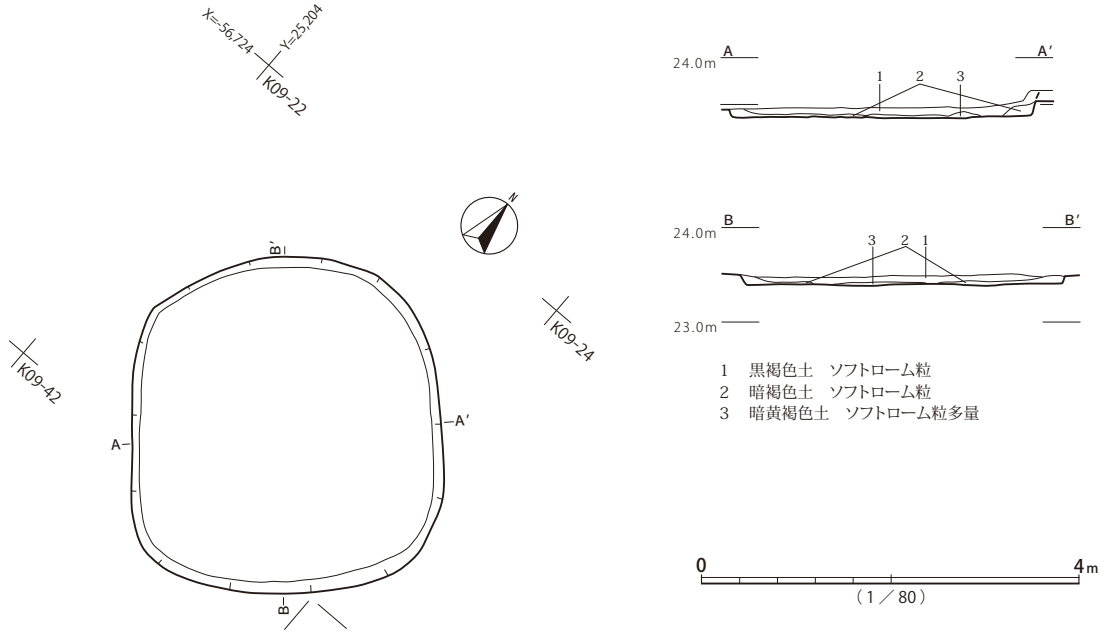
出土遺物は僅少で、図化可能遺物はない。

本遺構は、平面形に基づき、弥生時代後期から弥生時代終末期に帰属する可能性が考えられる。

SI1027（第257図、図版62）

3.1？×3.4m、深さ15cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。北辺が方形区画墓SM1150南側周

SI1026



第256図　SI1026遺構

溝と重複し、破壊を受けている。主柱穴・炉等は検出されず、床面周溝も確認されていない。

覆土は、土層断面記録がなく詳細は不明である。

出土遺物は僅少で、図化可能遺物はない。

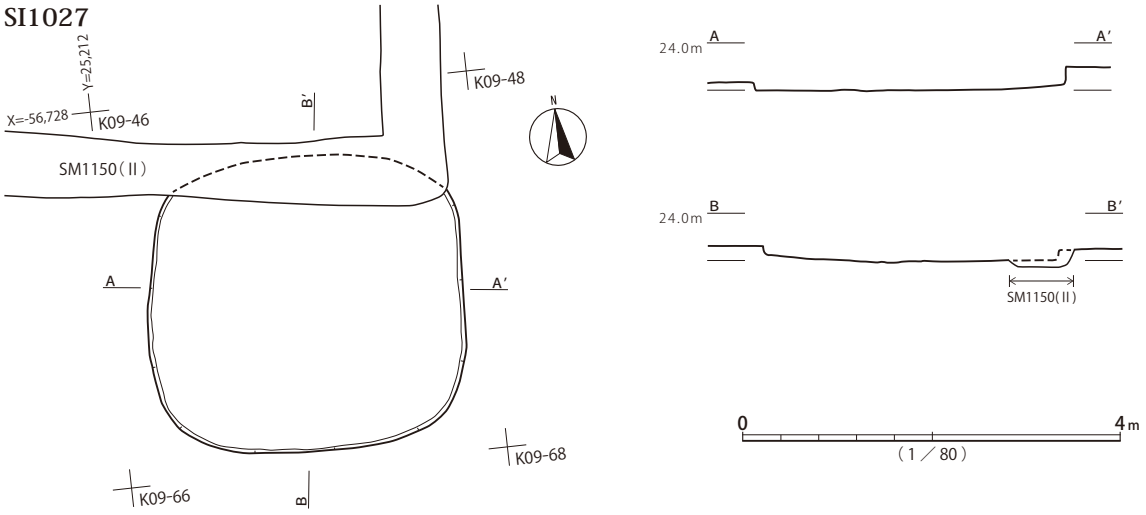
本遺構は、平面形に基づき、弥生時代後期から弥生時代終末期に帰属する可能性が考えられる。

SI1028（第 258・259 図、図版 62・159・221・306・334）

7.8 × 6.8m、深さ 55cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。部分的に撹乱を受ける。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴eが検出されている。中心軸上、a・b間ラインの外に接する位置に長楕円形の炉が設けられる。柱間内の長軸方向に床硬化面が認められる。

覆土は、下層にロームブロックが多く混じり、人為的な埋積土である可能性が示唆される。上位

SI1027



第257図　SI1027遺構

は黒褐色土主体層が漸移的に堆積した状況が読み取れる。

遺物は、床面直上から下層にかけて弥生土器が出土している。口縁端部が交互押捺により小波状を呈する甕5、沈線区画文様の壺9、無文の鉢17、結節文区画の鉢18等が見られる。壺9は弥生時代後期前半、久ヶ原式の特徴を示し、鉢18は同後半、山田橋式に属するため、概ね山田橋1式に位置づけられる。その他、覆土一括取り上げ資料ながら滑石製勾玉19が出土している。なお、甕5の胴部外面最大径付近付着の炭化物を試料として放射性炭素年代測定を行った結果、測定年代値1890±20年（yrBP）が得られている（第3章第1節）。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

SI1029（第260図、図版62・159・221・326・334）

4.4×4.4m、深さ45cm程度の不整円形竪穴建物跡である。イモ穴の撹乱を多く受けるほか、北東部が弥生時代終末期方形墓SS7と重複し、遺存状態は良くない。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上やや東寄り、a・b間と交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉内には土器片が立てて埋め込まれている。床面は外周部を除き、硬化面が認められる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、最下層にロームが目立つが、焼土・炭化物は伴わず、概ね漸移的な堆積過程が想定できる。

遺物は、弥生土器が少量出土している。甕1・2、壺4は在地的な特徴を示すが、壺3は擬縄文文様と口縁端部等の形状が非在地的で東海東部系の影響を受けた可能性がある。その他、鉄滓状の不明板状鉄製品6が出土しているが、覆土一括取り上げ資料であり混入品と思われる。

本遺構は、切り合い関係と平面形、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1030（第261・262図、図版63・221・299・306）

5.9×5.1m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴の可能性があるe・fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉内には土器片が立てて埋め込まれている。床面周溝は西・東辺で部分的に検出されている。

覆土は、最下層と壁際にローム土が多いものの、焼土・炭化材は検出されず、漸移的な堆積過程が想定できる。

遺物は、土器を中心に少量出土している。輪積み装飾の甕1、壺4・5は在来的な後期弥生土器の特徴を示すが、受口状口縁甕2、素口縁で頸部屈曲の緩い甕3、無文素口縁の鉢6・7、小型鉢8は過渡的な形状を持ち、全体的に弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。その他、破断面の磨られた結節文区画壺片（転用砥石）9、砂岩製砥石10、軽石製砥石11が出土している。

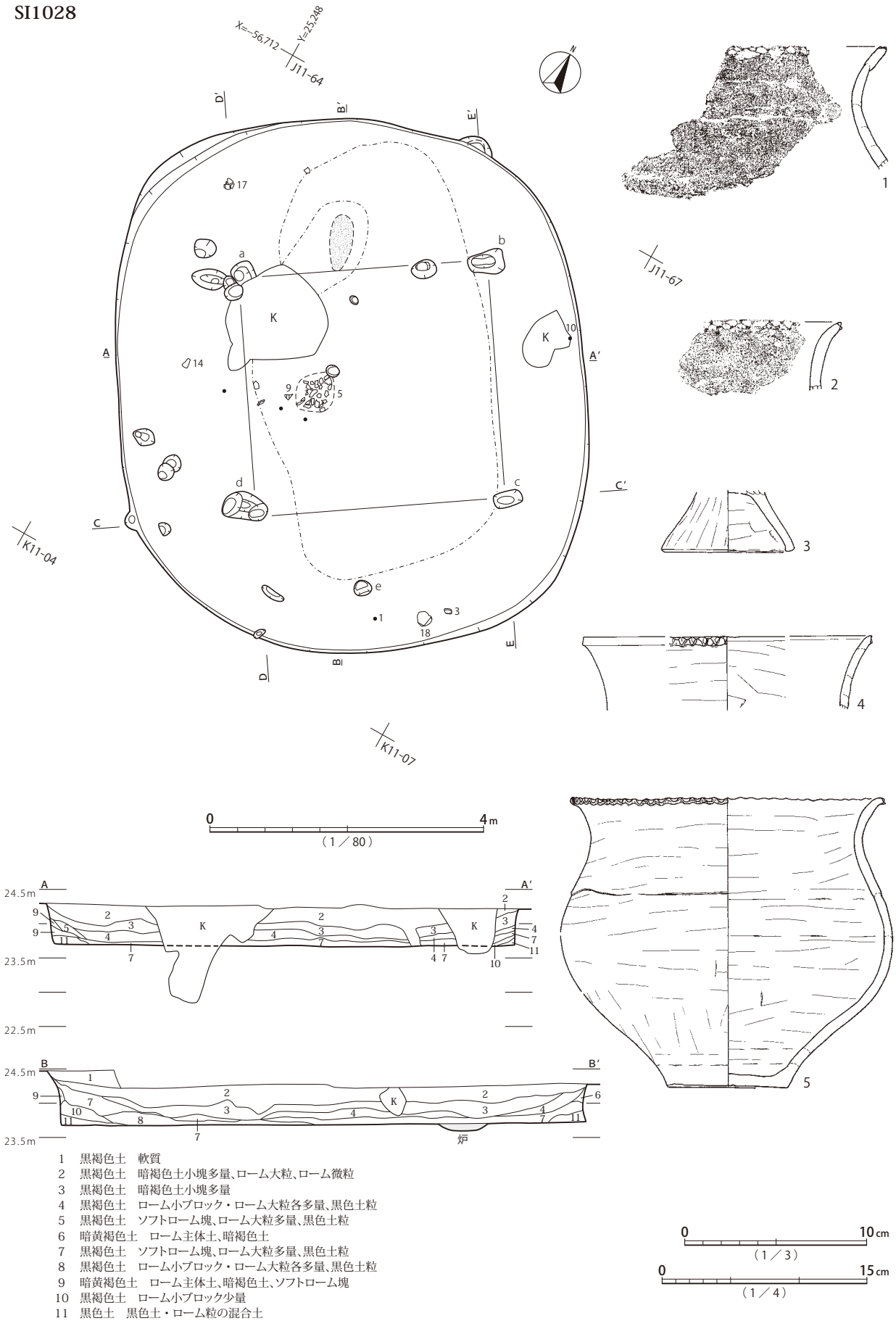
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI1031（第263図、図版60・63・221）

2.7×2.6m、深さ10cm程度の隅円竪穴建物跡である。北角に撹乱を受けるほか、時期不明の木棺土坑墓SK77と重複する。主柱穴・炉ともに検出されていない。

覆土は、土層断面記録がなく詳細は不明である。

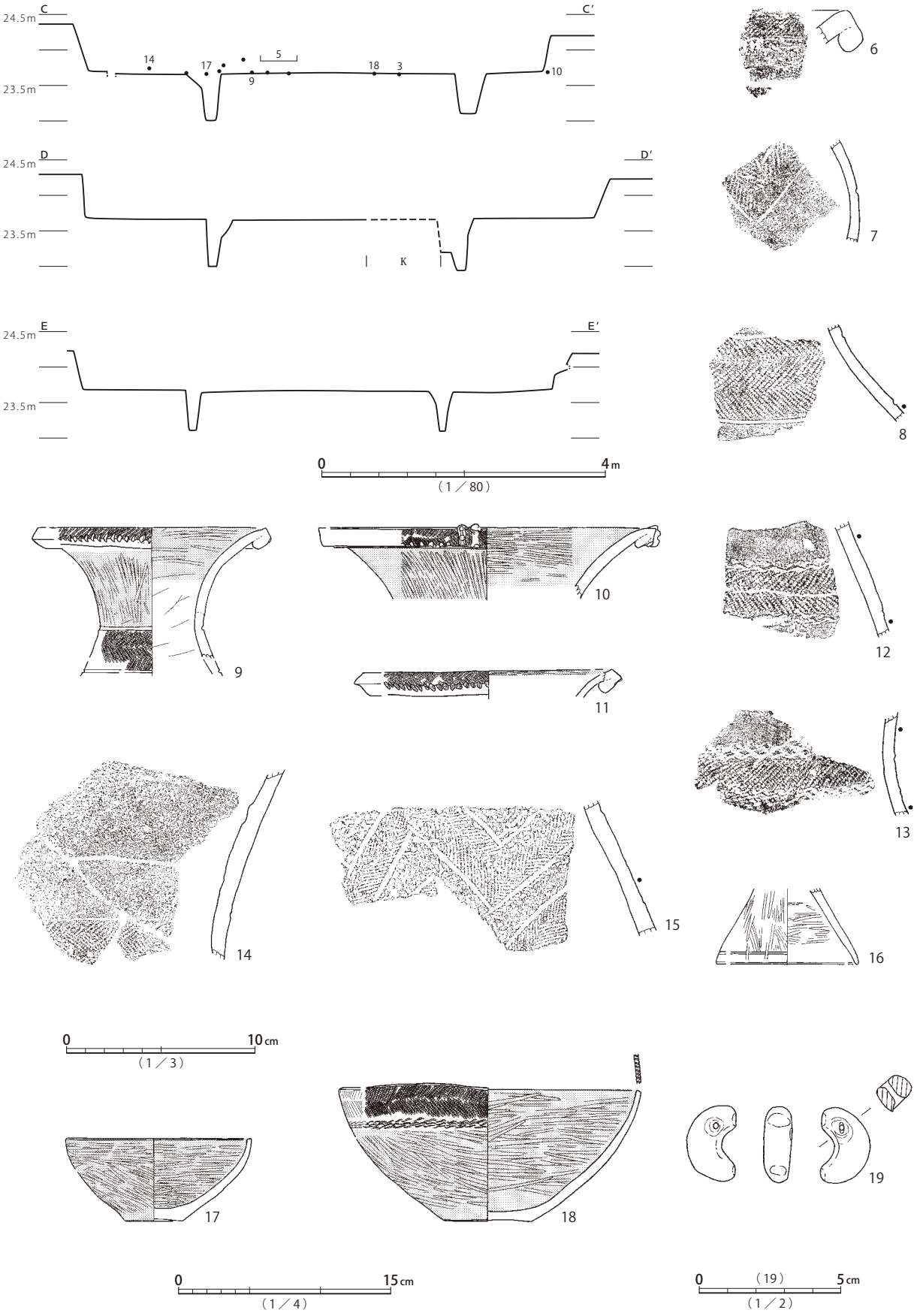
SI1028



1　黒褐色土　軟質
2　黒褐色土　暗褐色土小塊多量、ローム大粒、ローム微粒
3　黒褐色土　暗褐色土小塊多量
4　黒褐色土　ローム小ブロック・ローム大粒各多量、黒色土粒
5　黒褐色土　ソフトローム塊、ローム大粒多量、黒色土粒
6　暗黄褐色土　ローム主体土、暗褐色土
7　黒褐色土　ソフトローム塊、ローム大粒多量、黒色土粒
8　黒褐色土　ローム小ブロック・ローム大粒各多量、黒色土粒
9　暗黄褐色土　ローム主体土、暗褐色土、ソフトローム塊
10　黒褐色土　ローム小ブロック少量
11　黒色土　黒色土・ローム粒の混合土

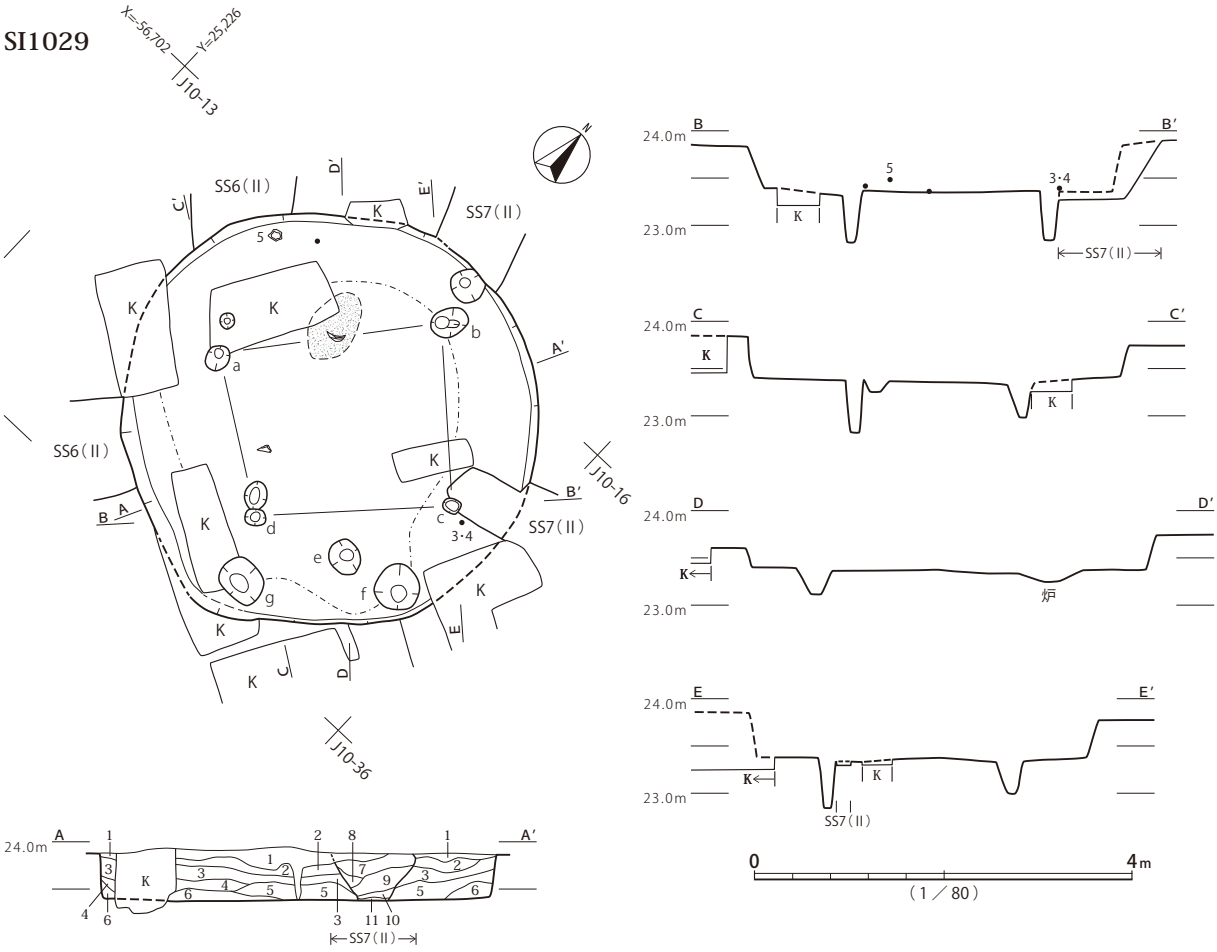
第258図　SI1028遺構(1)、SI1028遺物(1)

SI1028

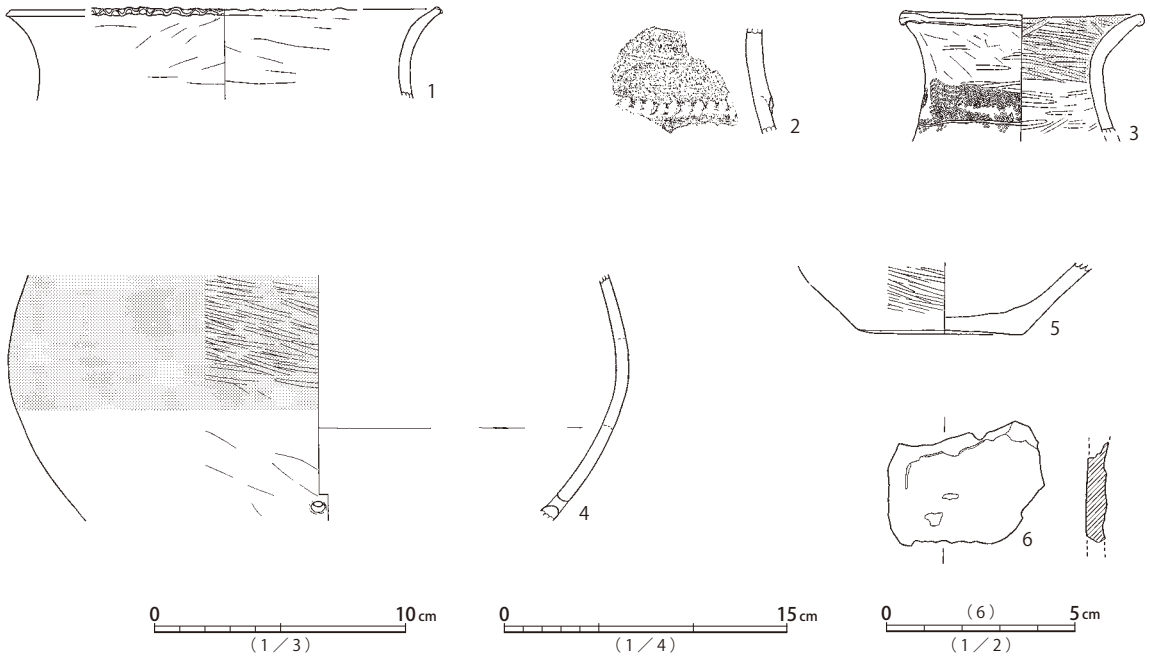


第259図　SI1028遺構(2)、SI1028遺物(2)

SI1029

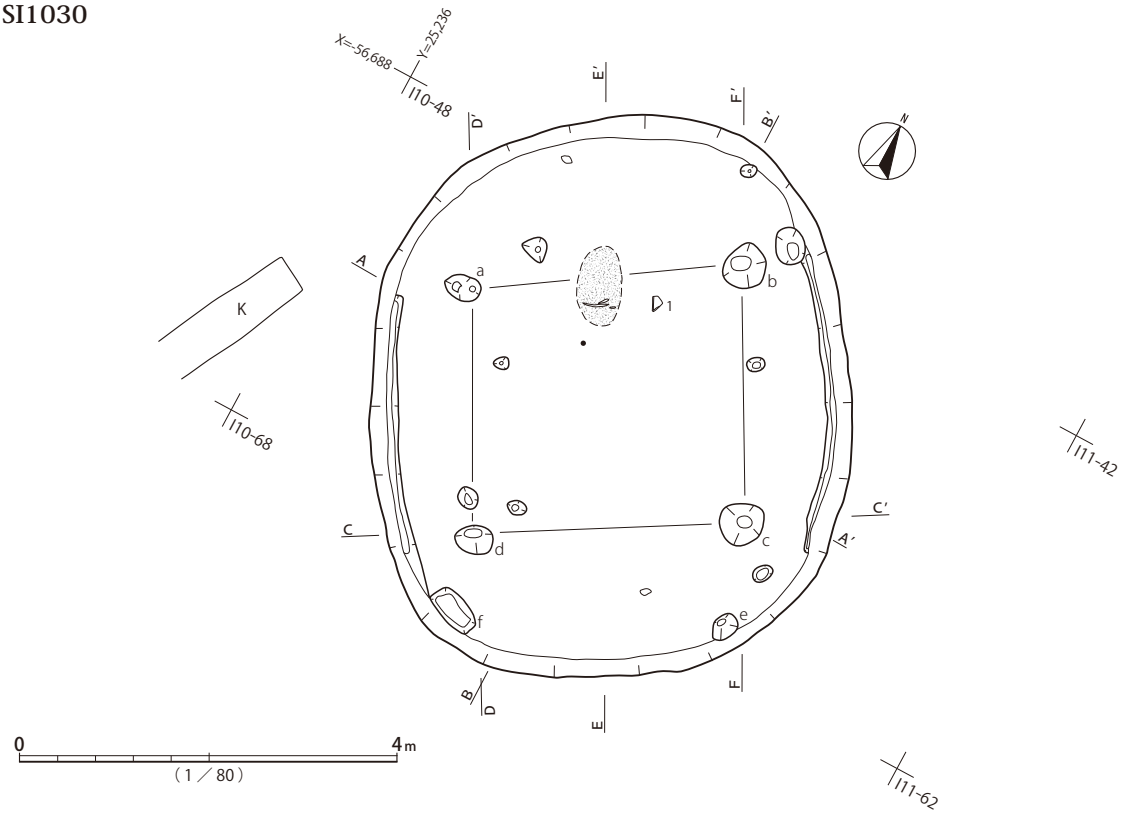


1　黒褐色土　暗褐色土小塊　軟質黒褐色土で撹乱気味
2　黒褐色土　黒色土粒、ローム微粒
3　黒褐色土　ローム大粒、ローム小粒
4　黒褐色土　ロームブロック少量、ローム大粒多量
5　黒褐色土　ソフトローム塊多量、ローム粒多量
6　黒色土　ソフトローム塊
7　黒褐色土　軟質黒褐色土、ローム粒　SS7(Ⅱ)覆土
8　黒褐色土　暗褐色土粒　SS7(Ⅱ)覆土
9　黒褐色土　ローム微粒　SS7(Ⅱ)覆土
10　黒褐色土　ソフトローム、ローム粒　SS7(Ⅱ)覆土
11　黒色土　軟質黒色土　SS7(Ⅱ)覆土

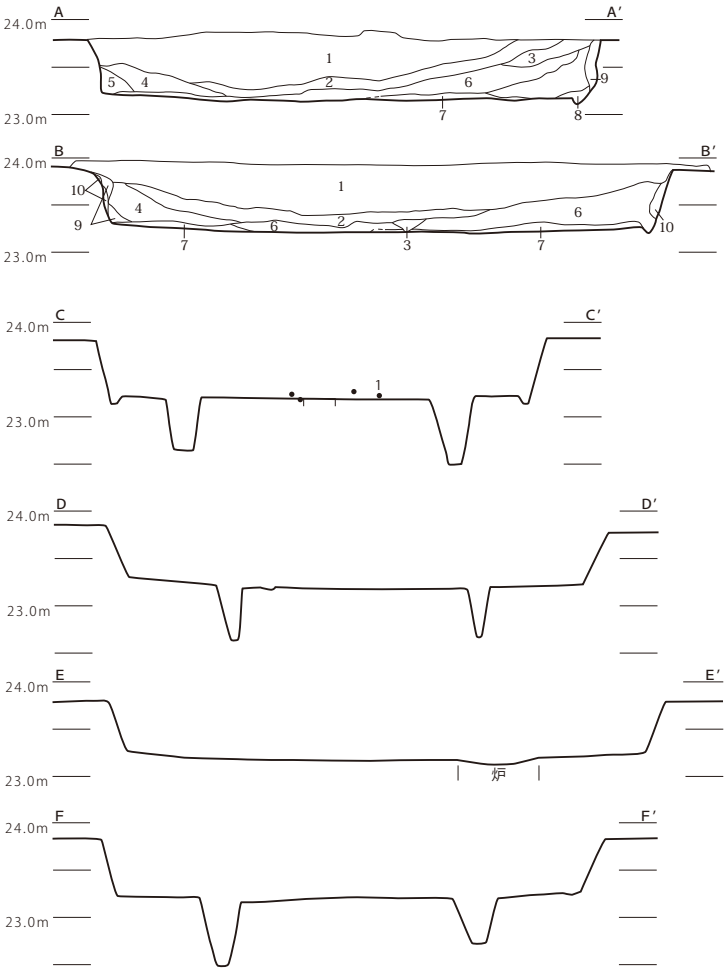


第260図　SI1029遺構・遺物

SI1030

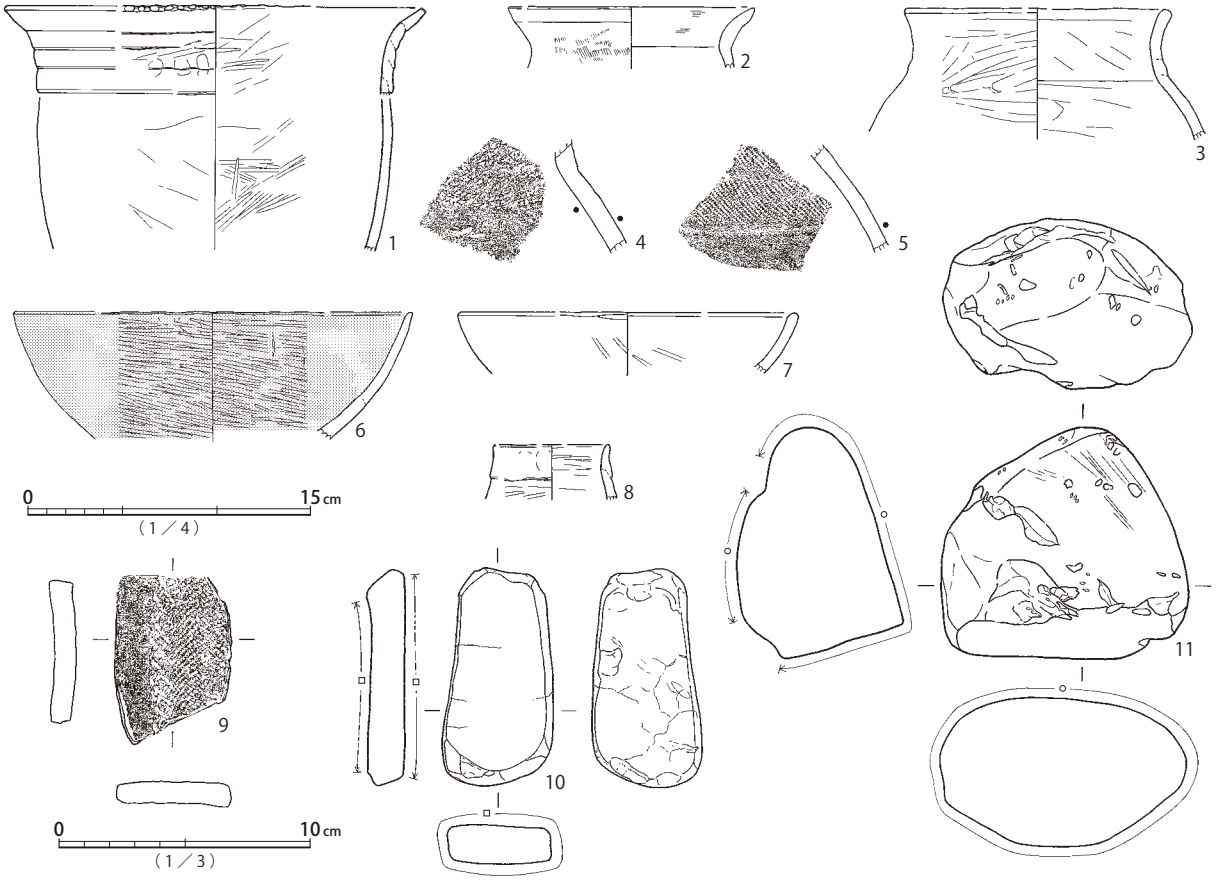


1　黒褐色土　ローム粒
2　黒色土　ローム粒、ブロック
3　褐色土　ローム粒、ブロック
4　黒褐色土、黒色土混入
5　褐色土　ローム粒
6　褐色土　ローム粒、ブロック
7　暗褐色土　ローム粒
8　褐色土
9　褐色土　ローム粒
10　暗黄褐色土



第261図　SI1030遺構

SI1030



第262図　SI1030遺物

遺物は、古式土師器片が少量出土している。くの字状口縁のハケメ整形甕1、タタキ甕2、壺もしくは器台3、透孔を持たない高杯脚部4があり、いずれも覆土一括取り上げ資料である。概ね弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

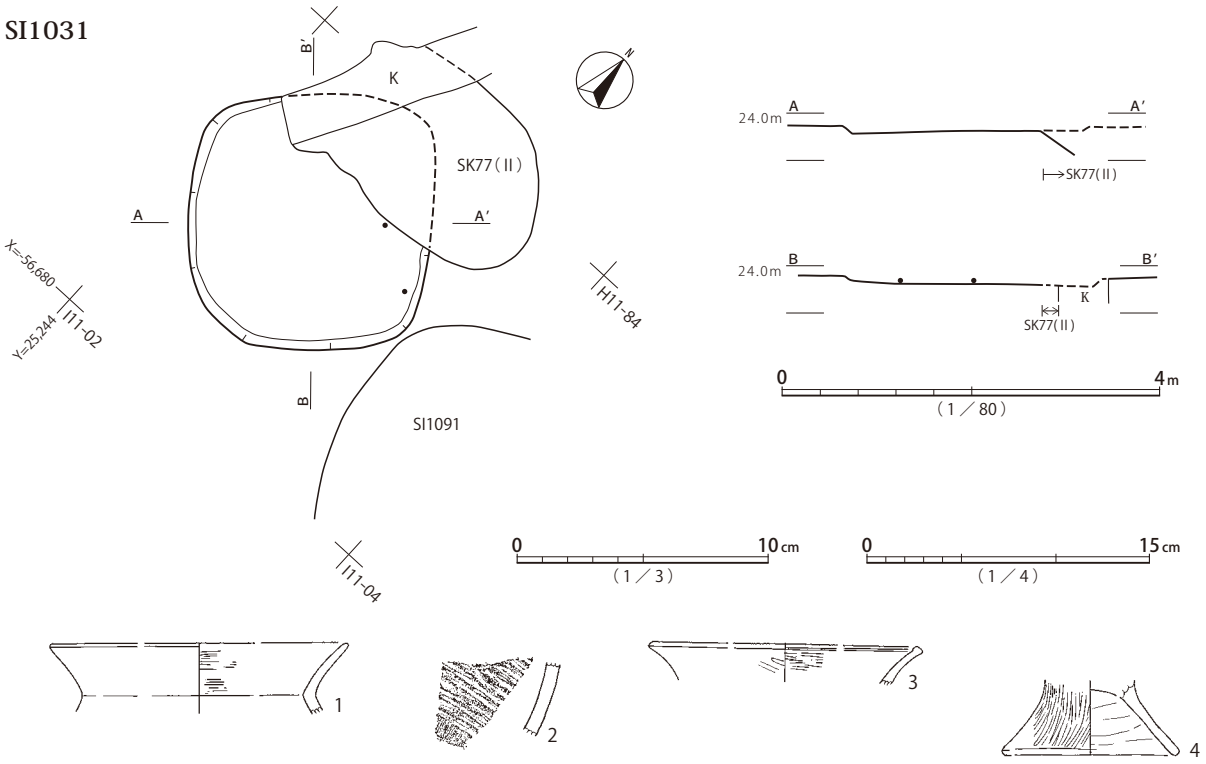
SI1032（第 264・265 図、図版 63・221・306）

5.3 × 4.7m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期方形墓SS6の北東角に接する位置にある。主柱穴a ～ d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸上、a・b間ライン外側に接する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。

覆土は、黒褐色土層主体の漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面レベルから下層にかけて土器片が出土している。段部押捺のある甕1が下層出土、壺2・3・4・5、椀6は覆土一括取り上げ資料である。いずれも概ね弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。その他、軽石7が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。



第263図　SI1031遺構・遺物

SI1033（第 266 図、図版 63・221・326）

7.3 × 6.1m、深さ 20cm 程度の長方楕円形竪穴建物跡である。北東辺がイモ穴等による撹乱を受け、弥生時代終末期竪穴建物跡SI1206及び古代方形墓SM1115と重複し、南東辺はSD1001と重複する。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸とa・b間ラインが交差する位置に不整円形の炉が設けられる。床面周溝は確認されていない。なお、北東辺は内側に歪んだ形状で検出・記録されているが、写真では当該箇所の地山が黒ずんでおり、その一部はSI1206覆土の延長部にも見えるため、本来は通有の外張りの平面形態をとっていたものと思われる。

覆土は、焼土・炭化材が伴わず、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

出土遺物は少量で、すべて覆土一括取り上げ資料である。頸部屈曲の緩いハケメ整形の甕1、高杯3・4は、概ね弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、鉄滓5も出土しているが、混入品と思われる。

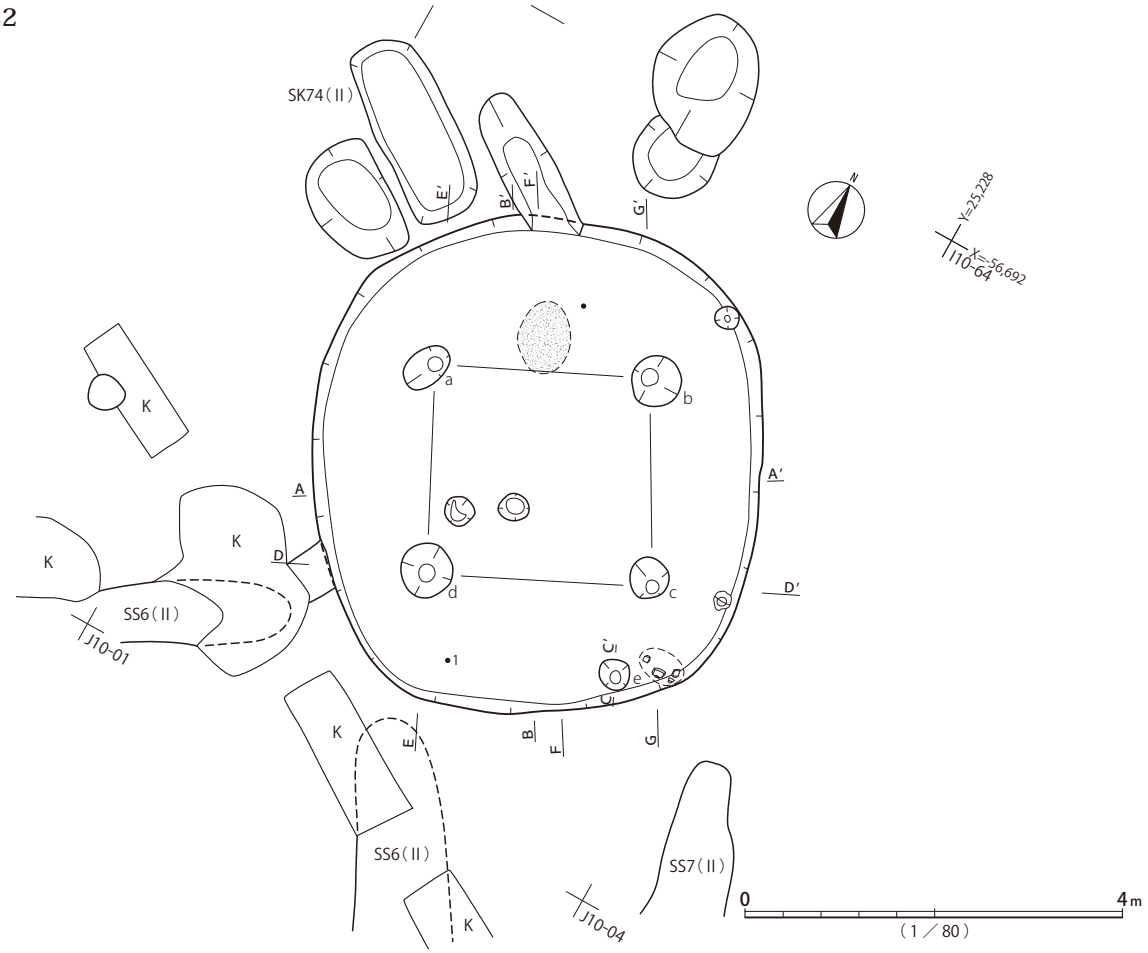
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

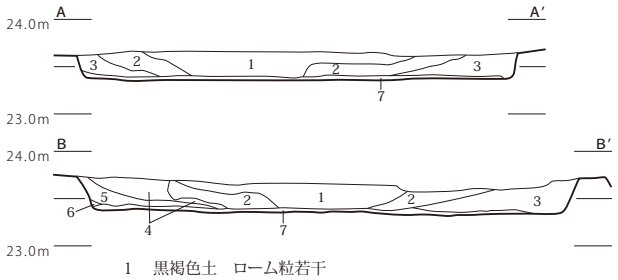
SI1034（第 267・268・269 図、図版 63・159・222・307・334）

7.8 × 7.2m、深さ 25cm 程度の方楕円形竪穴建物跡である。中央より北西側はイモ穴列とSD1001により撹乱される。北東辺はSI1078と同時存在できない距離で接している。主柱穴a ～ d、貯蔵穴e等が検出されている。主柱穴は上端が大きく開く断面形を呈し、柱抜き取りの行われた可能性がある。中心軸上、a・b間ラインより内側に、楕円形の炉が設けられ、北西側60cmほど離れて炉状の焼土範囲が検出されている。

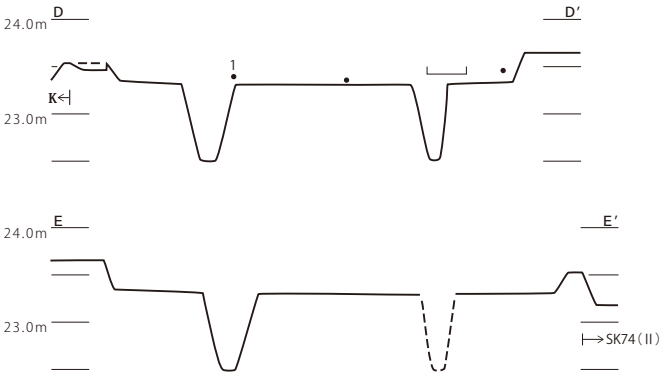
覆土は、焼土・炭化材の伴わない黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。貯蔵穴e

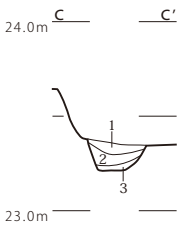
SI1032





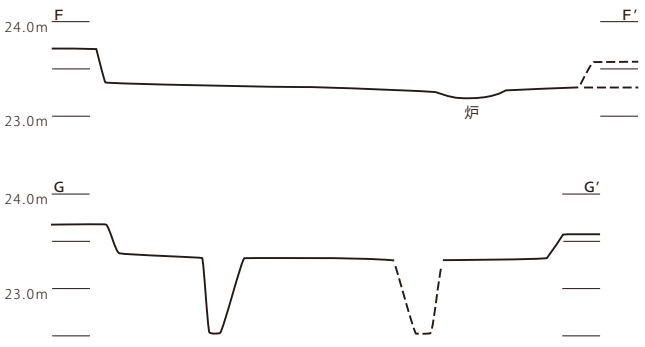
1　黒褐色土　ローム粒若干
2　褐色土　ローム粒、ブロック、黒褐色土
3　黒褐色土（黒色土）
4　黒褐色土　ロームブロック少量、ローム粒
5　黒褐色土　黒色土
6　暗黄褐色土
7　黒褐色土　ローム粒、ブロック　やや硬質



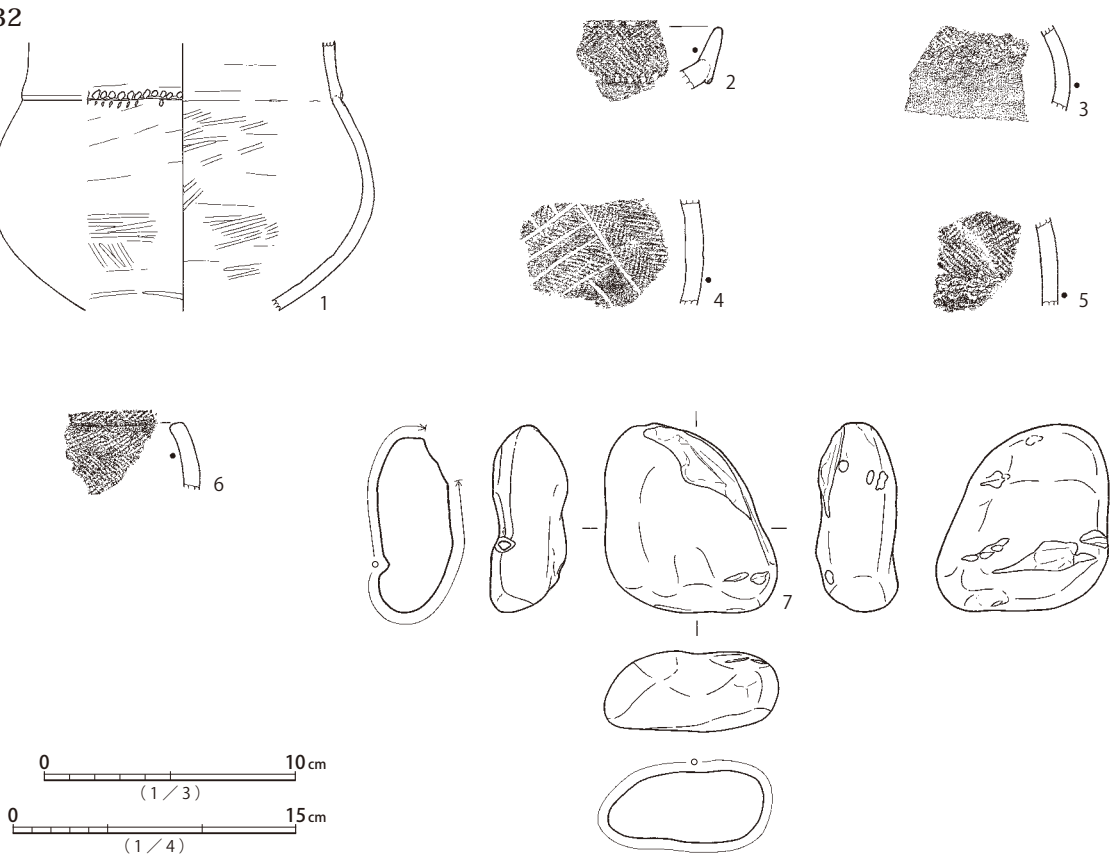


1　黒褐色土　ソフトローム粒少量
2　黒褐色土　ソフトローム塊多量
3　暗褐色土　ローム主体土、黒褐色土粒

0　1m
（1／40）



第264図　SI1032遺構



第265図　SI1032遺物

の覆土は下層が黄褐色土層で、その堆積後、黒褐色土層中から土器15が逆位で出土している。

遺物は、弥生土器を主体とする土器が出土している。口頸部段を持つ甕1・2、タタキ甕5、無文で細頸の壺6、広口壺7、文様のある壺8・9・11 ～ 14、小型壺15、椀16がある。大型壺10は器壁が異常に分厚い箇所のある破片で、成形時に補強した痕跡と見られる。弥生時代後期の土器も混在するが、甕2・3、広口壺7、出土状況の明確な甕1と小型壺15は弥生時代終末期、中台式の範疇に含まれる。その他、輝石デイサイト製砥石17が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定できる。

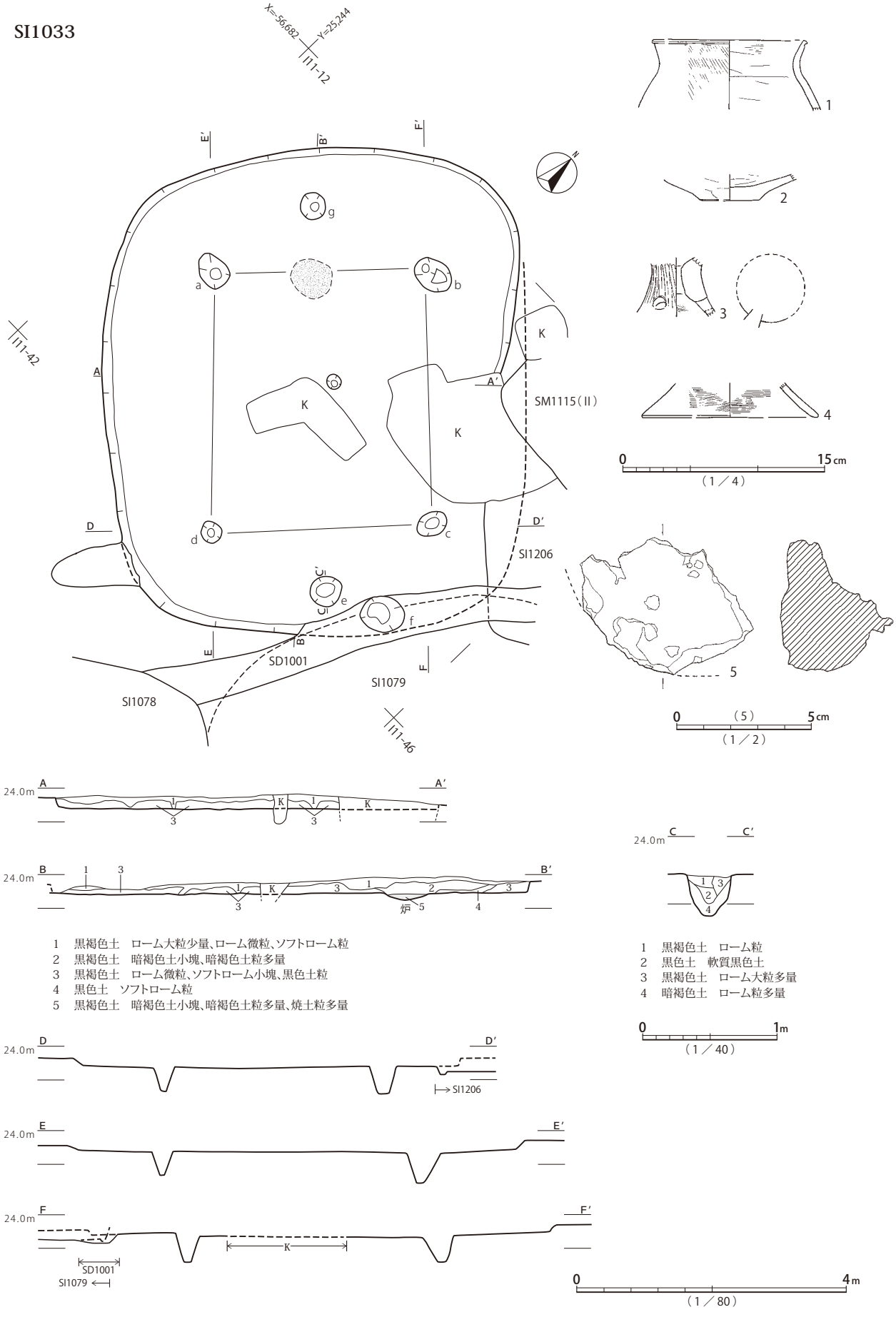
SI1035・SI1036（第270・271図、図版14・63・64・159・186・187・222・307）

5.4 ×（2.0）m、深さ25cm程度の隅円方形と見られる竪穴建物跡SI1036と、5.0 × 5.0m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1035である。SI1035北角は弥生時代終末期竪穴建物跡SI1108南辺、SI1035北東辺から東角はSI1036西側と重複する。SI1035北西辺と南角はそれぞれ、古代方形墳墓SM1053・SM1181と重複し、覆土を切り込まれている。

SI1036は099調査区境界に位置し、北東部の大半が未調査で欠失している。平面全体形は原形が不明確だが、SI1035南東辺にかかる突出部についてはSI1035周囲の地山漸移層と考え、北西辺と南角の位置関係から方形もしくは隅円方形と想定できる。主柱穴等は遺存部に検出されていないが、炉は欠失部に設けられていたと推定される。

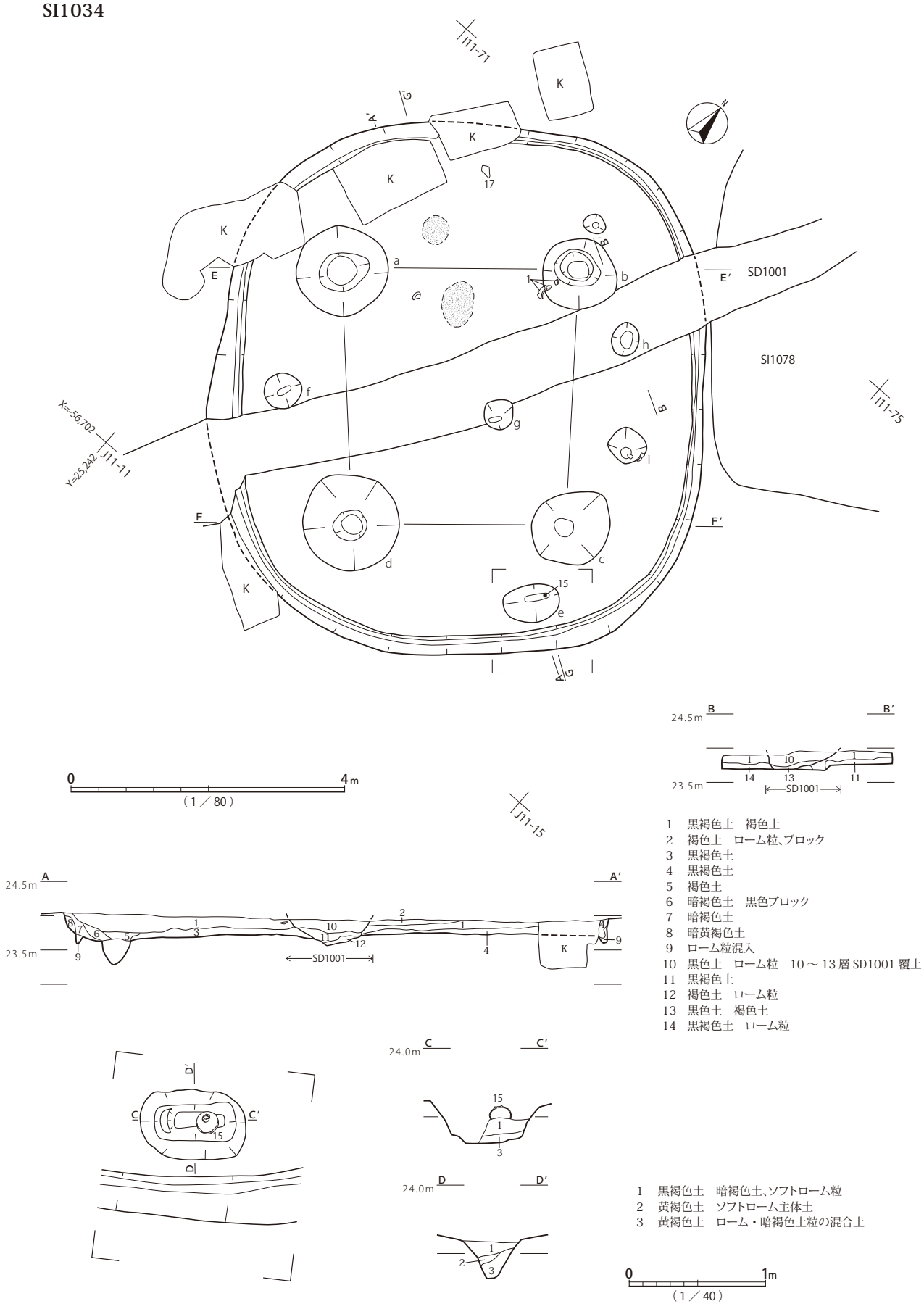
覆土は、下位にロームの目立つ漸移的な堆積状況が認められる。遺存部の検出状況の範囲では、

SI1033



第266図 SI1033遺構・遺物

SI1034

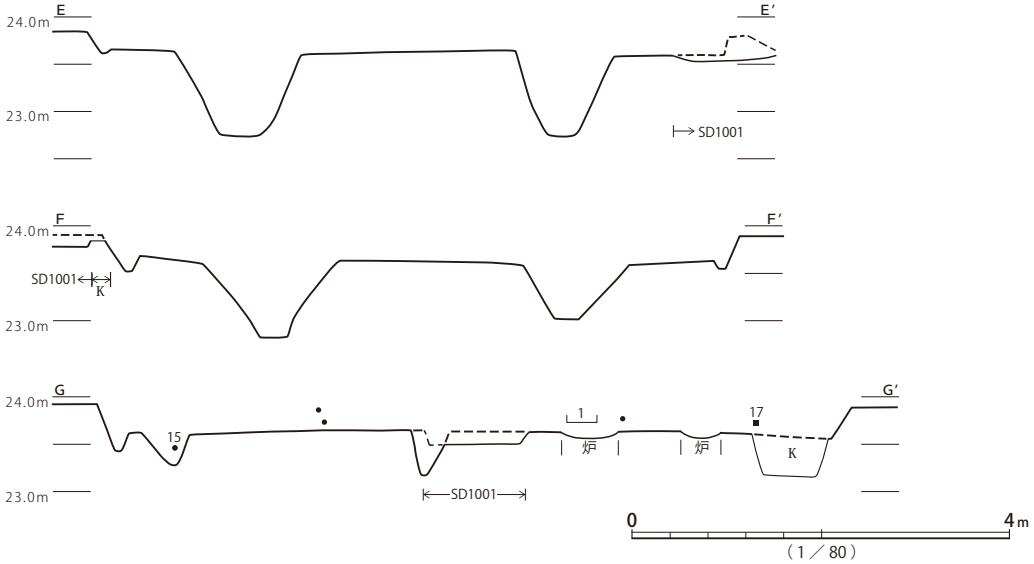


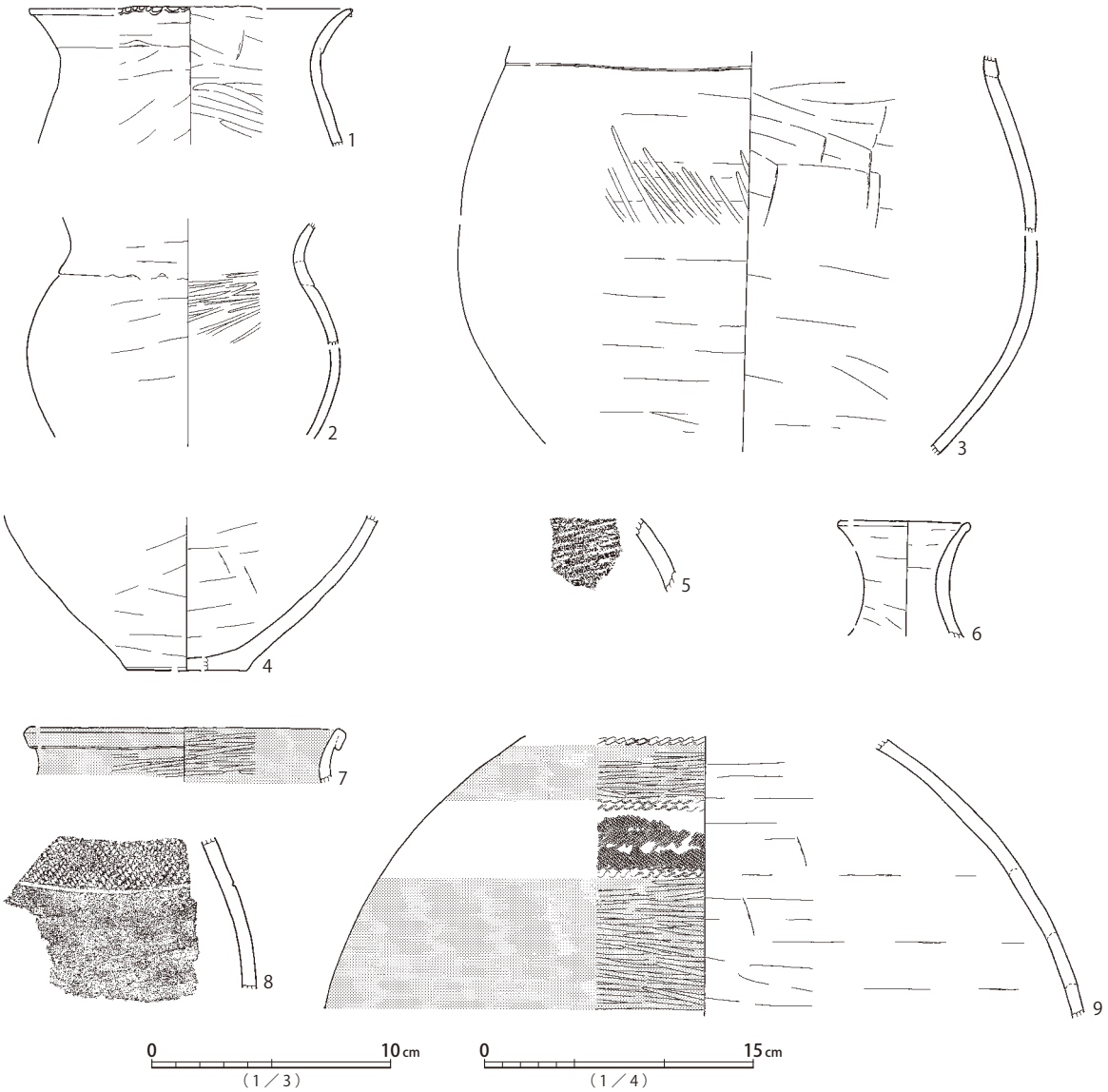
1　黒褐色土　褐色土
2　褐色土　ローム粒、ブロック
3　黒褐色土
4　黒褐色土
5　褐色土
6　暗褐色土　黒色ブロック
7　暗褐色土
8　暗黄褐色土
9　ローム粒混入
10　黒色土　ローム粒　10 ～ 13 層 SD1001 覆土
11　黒褐色土
12　褐色土　ローム粒
13　黒色土　褐色土
14　黒褐色土　ローム粒

1　黒褐色土　暗褐色土、ソフトローム粒
2　黄褐色土　ソフトローム主体土
3　黄褐色土　ローム・暗褐色土粒の混合土

第267図　SI1034遺構（1）

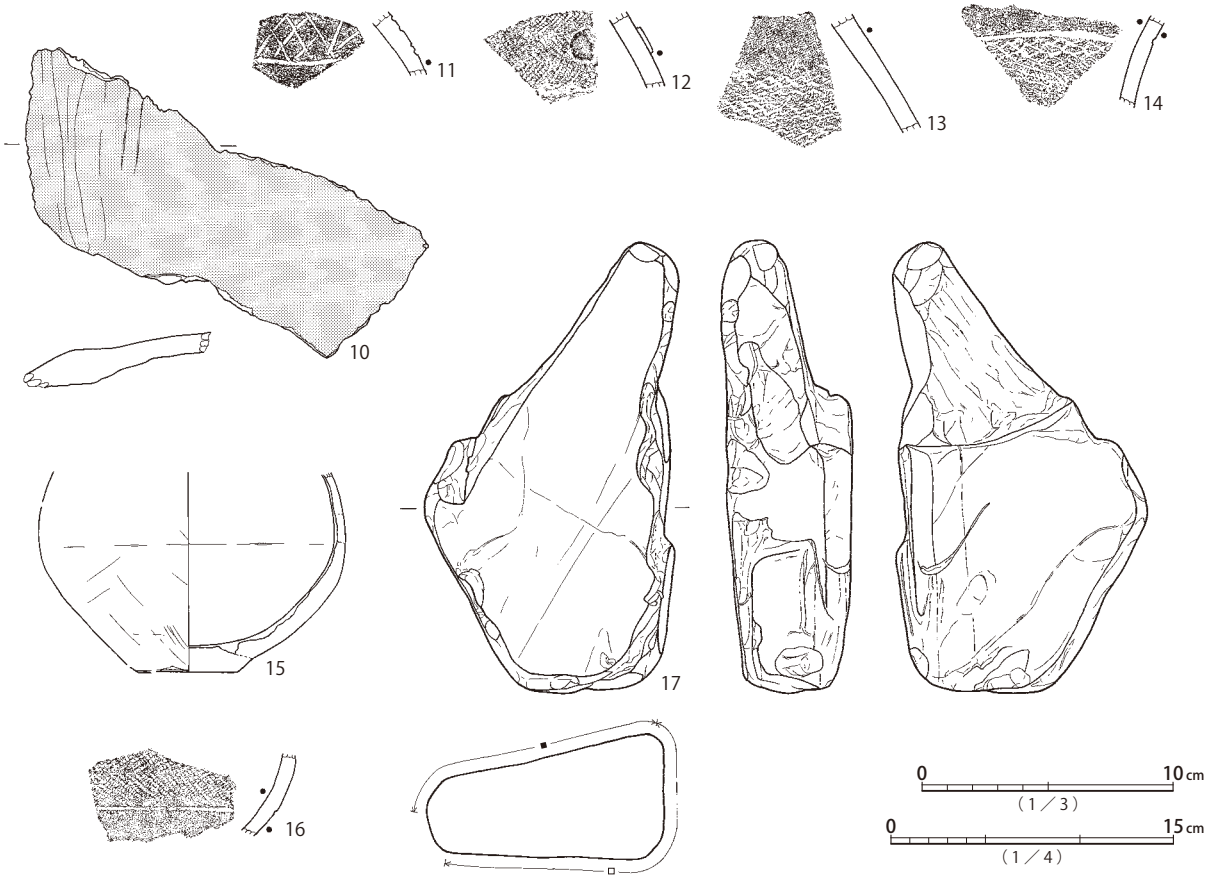
SI1034





第268図　SI1034遺構(2)、SI1034遺物(1)

SI1034



第269図　SI1034遺物（２）

焼土・炭化物の集中は記録されていない。

遺物は、土器片が少量出土している。出土位置が明確なのは小型壺５のみで、在来系の甕1、受口状口縁甕２・3、頸部屈曲の緩いハケメ整形の甕４、小型鉢6、東海系高杯７は覆土一括取り上げ資料である。概ね、弥生時代終末期前半、中台１式に位置づけられる。

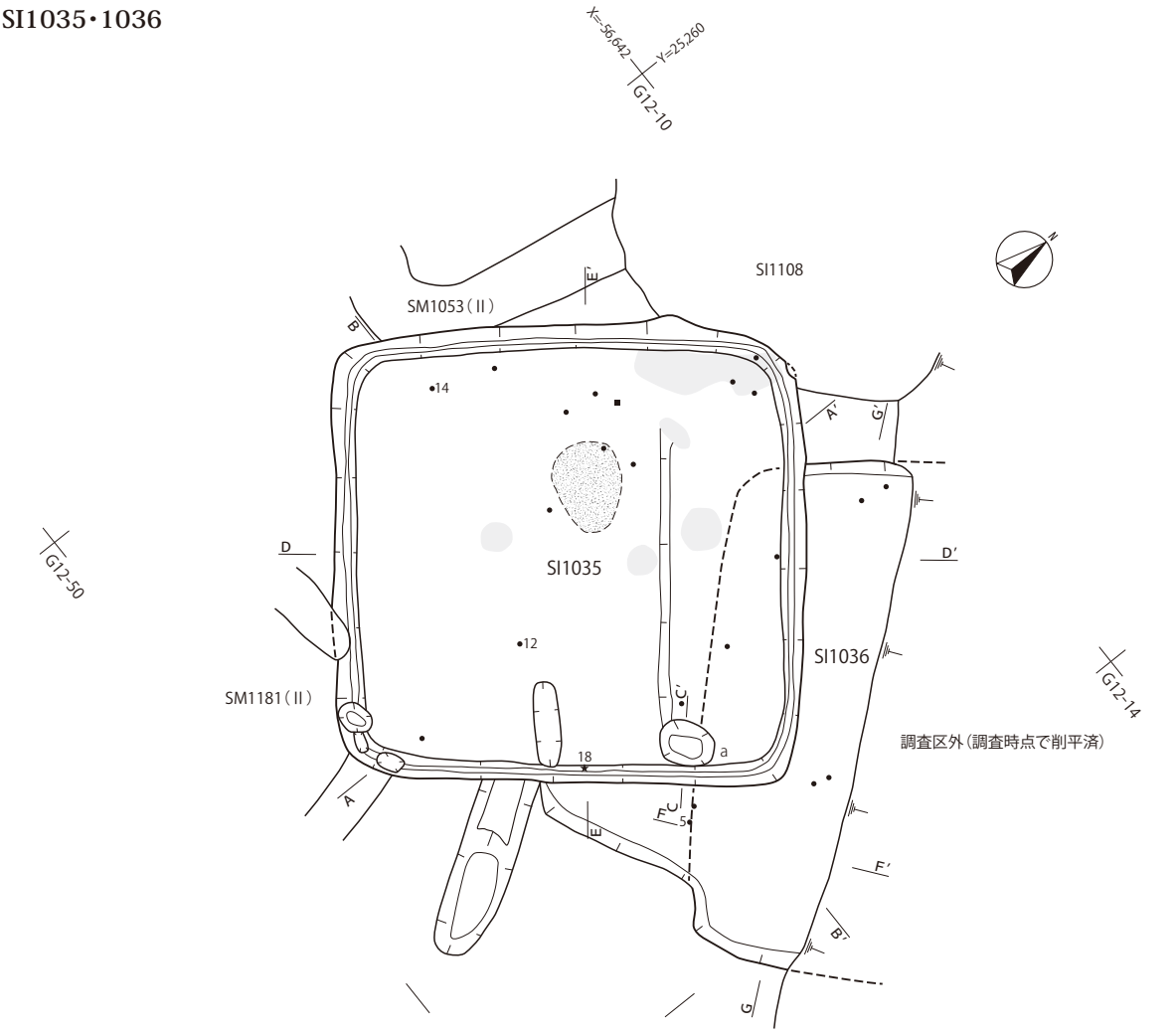
本遺構は、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる可能性がある。

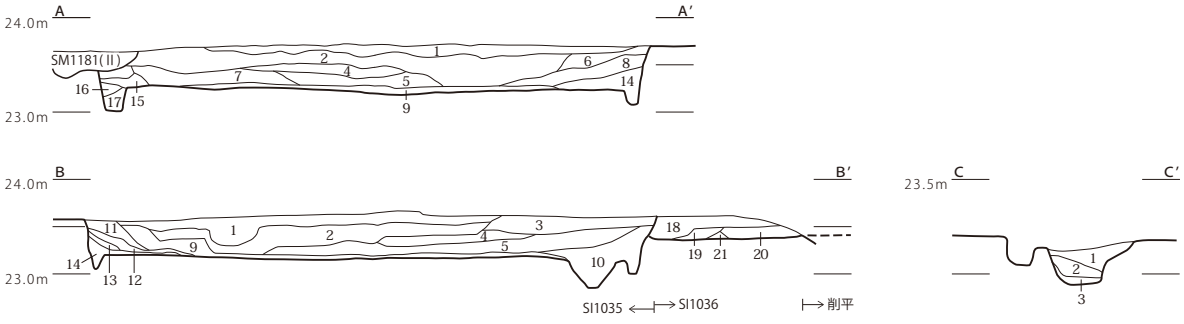
SI1035は、主柱穴が認められず、貯蔵穴aのみが検出されている。中心からやや北西寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は全周し、南東壁際から間仕切り状の浅い溝が検出されている。貯蔵穴aの脇から竪穴北東辺に並行する向きに低い段が確認されているが、粗掘り部の貼床層を掘り下げた可能性も否定できない。

覆土は、北側を主体として床面外周下層に焼土層・焼土粒包含層が検出され、廃絶時に火を受けた可能性が高い。その後の堆積過程には、埋め戻しに伴うローム主体土層は認められず、埋没まで漸移的な自然堆積を経たものと思われる。重複遺構については、本遺構がSI1036覆土を切って、掘り込まれている状況が確認されている。

遺物は、少量の土器と石器、小銅鐸が出土している。受口状口縁甕８～11、赤彩壺12、東海系高杯13・14、小型鉢15、小銅鐸18が出土している。出土位置が明確なのは、赤彩壺12、東海系高杯14、小銅鐸18で、その他は覆土一括取り上げ資料である。受口状口縁甕は、切り合うSI1036で

SI1035・1036

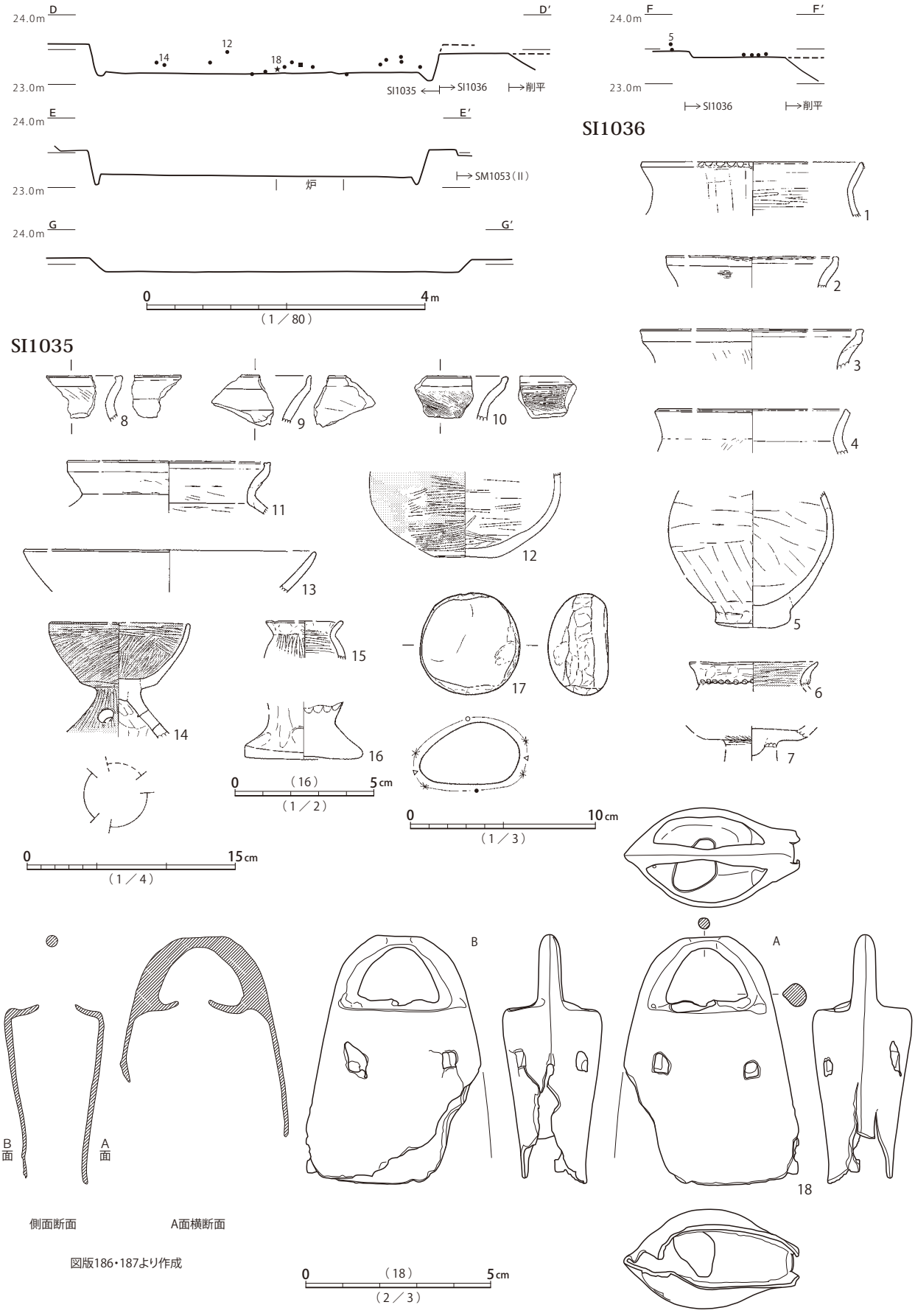




1　黒褐色土
2　褐色土　黒褐色土、ローム粒、ロームブロック
3　黒褐色土　黒色土
4　黒褐色土　ローム粒、黒色土
5　黒褐色土　褐色土、ローム粒
6　黒褐色土
7　黒褐色土
8　黒褐色土
9　黒褐色土　ローム粒　硬質
10　黒褐色土
11　黒褐色土　褐色土多量
12　暗黄褐色土
13　褐色土　ローム粒、焼土
14　褐色土
15　黒褐色土　焼土
16　黒褐色土
17　褐色土　ローム粒
18　黒褐色土　黒色土
19　黒色土
20　暗褐色土　ローム粒、ロームブロック
21　ローム主体土

1　暗褐色土　ローム粒多量
2　黒褐色土　ローム微粒少量
3　暗褐色土　ソフトローム

第270図　SI1035・SI1036遺構(1)



第271図　SI1035・SI1036遺構（2）、SI1035・SI1036遺物

も出土しており、他遺構に由来する可能性も考えられ、本遺構に帰属するかは不確定だが、下層出土の高杯14は概ね、弥生時代終末期後半、中台2−1式の範疇にあると思われる。小銅鐸18は南東壁際の下層覆土中から検出されている。小銅鐸の詳細については遺物観察表と別項（第4章第2節）で記載する。その他、炉器台（支脚）の可能性がある16、砂岩製礫石器17が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半に帰属する可能性が考えられる。

重複する2棟の竪穴建物跡と周辺遺構は、弥生時代終末期前半、中台1−1式期のSI1108→中台1−2式期のSI1036→弥生時代終末期後半、中台2−1式期のSI1035の順に構築されたと考えられる。

SI1037（第272・273・274図、図版64・159・223・307・334）

6.2×6.4m、深さ60cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。東角が、弥生時代終末期竪穴建物跡SI1038の西角と重複し、その覆土に切り込んでいる。主柱穴a〜d、ハシゴ穴の可能性があるe・h・i・n、貯蔵穴と見られる方形のf・g、円形のkが検出されている。eとiの間には出入口施設に関わるものか、高まりが認められる。柱間エリアの中心からやや北に寄った位置に、楕円形の炉が設けられる。a・b間には炉に対応するかのようなピットl・mが認められる。床面周溝は二重に全周し、外側南角と内側東角近くに小穴が伴う。

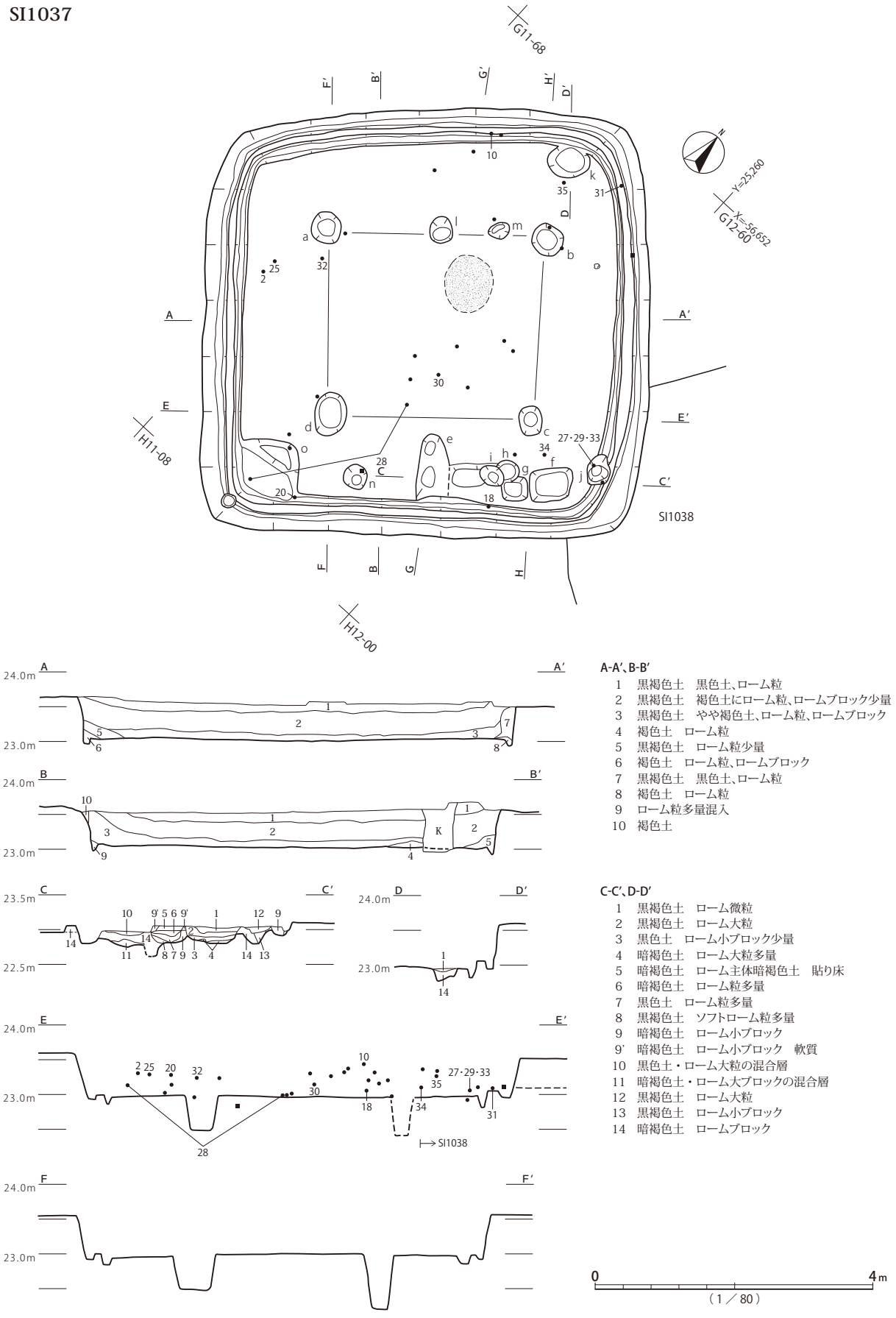
覆土は、最下層と床面周溝に褐色土が見られる他は、黒褐色土層を主体とする漸移的な堆積状況を示す。東角周辺に並ぶ、貯蔵穴と見られるf・gの土層は、fがgの後に掘削された状況が認められ、掘り直しの行われた可能性を示唆する。

二重の床面周溝と複数の貯蔵穴の存在から、竪穴の拡張とそれに伴う建て直しの行われた可能性が高い。主柱穴については不明確だが、同じ位置に設定されたものと思われる。床面レベルも内側が若干低い程度で、大規模には改変されなかったように見受けられる。

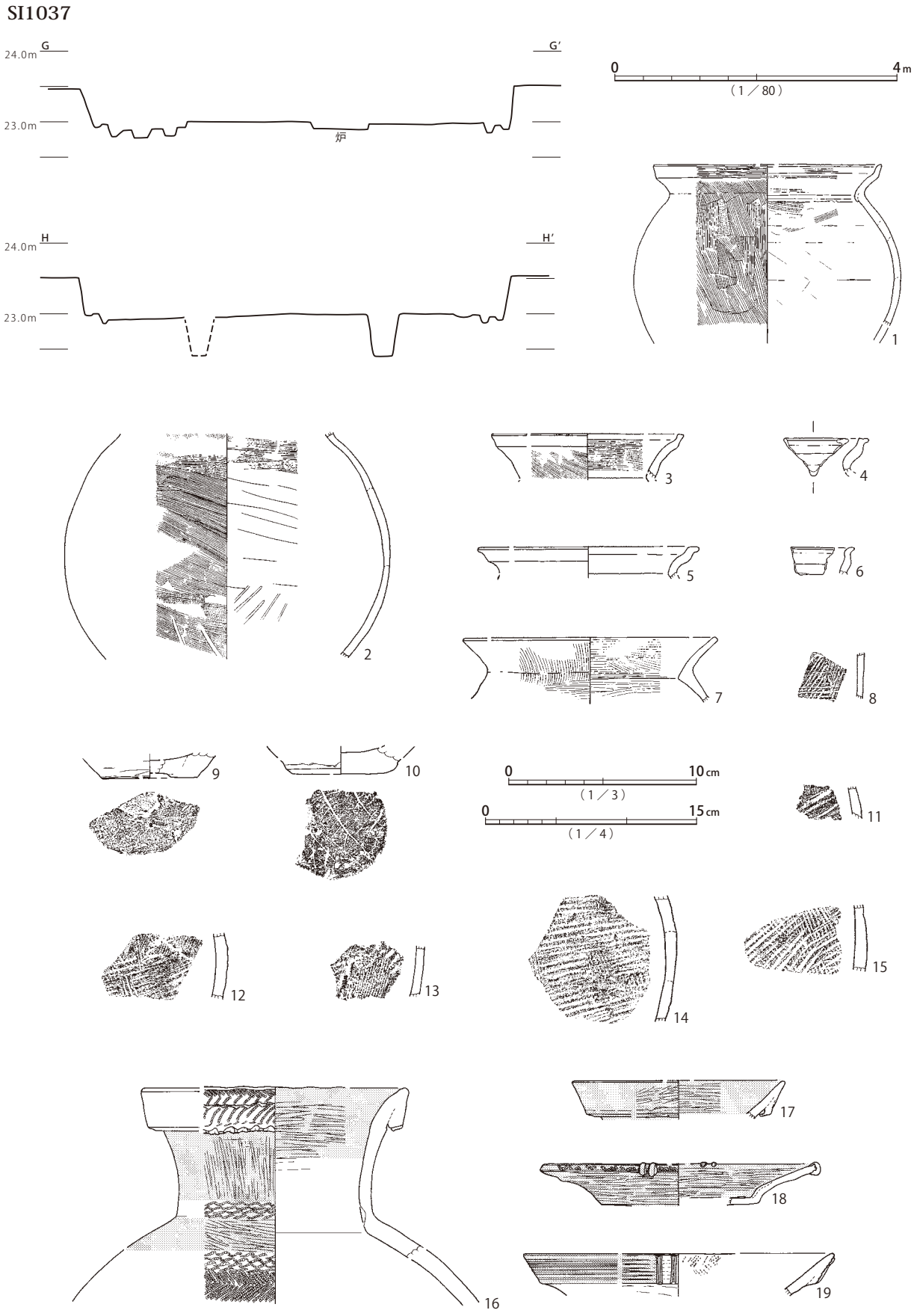
遺物は、床面から上層にわたって古式土師器と石製品が出土している。受口状口縁甕1・3〜6、S字状口縁台付甕8、タタキ甕11〜15は覆土一括取り上げ資料である。壺には、在来的な縄文施文壺16や外面肥厚口縁の壺17の他、非在地的な二重口縁壺（器台）18、パレススタイル壺19・21があり、18・19・21は、胎土も肉眼観察では非在地的な特徴を示す。また、18の赤彩部は肉眼観察ではベンガラよりも水銀朱に近い発色が認められ、SI0125出土礫石器（石杵）（第175図32）、SI1048出土の水銀朱赤彩高杯（第297図39）の存在からも、水銀朱による赤彩の可能性がある。小型鉢23・24は覆土一括取り上げ資料であり、非在地的な刻目凸帯を持つ小型鉢25は中層から出土している。高杯27〜33は下層から中層にかけて検出され、在来的な形態を残す28と東海系高杯31が床面近くで出土している。高杯脚部とも思われる34は頂部に接合痕も目立たず、推定裾部径が甕等の口縁に近いことから蓋と見られる。下層出土遺物は概ね、弥生時代終末期後半、中台2式に位置づけられる。その他、高台付鉢形のミニチュア土器35、軽石36・38、珪質頁岩製剥片37、砂質頁岩製礫石器39が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半の所産と推定できる。床面周溝が拡大する前の時期がどの程度遡るかは不明だが、主柱穴位置に変化がないために比較的短期間と見込まれ、建て直し前後の建物ともに同一時期に帰属すると考えられる。炉・主柱穴・ハシゴ穴・貯蔵

SI1037

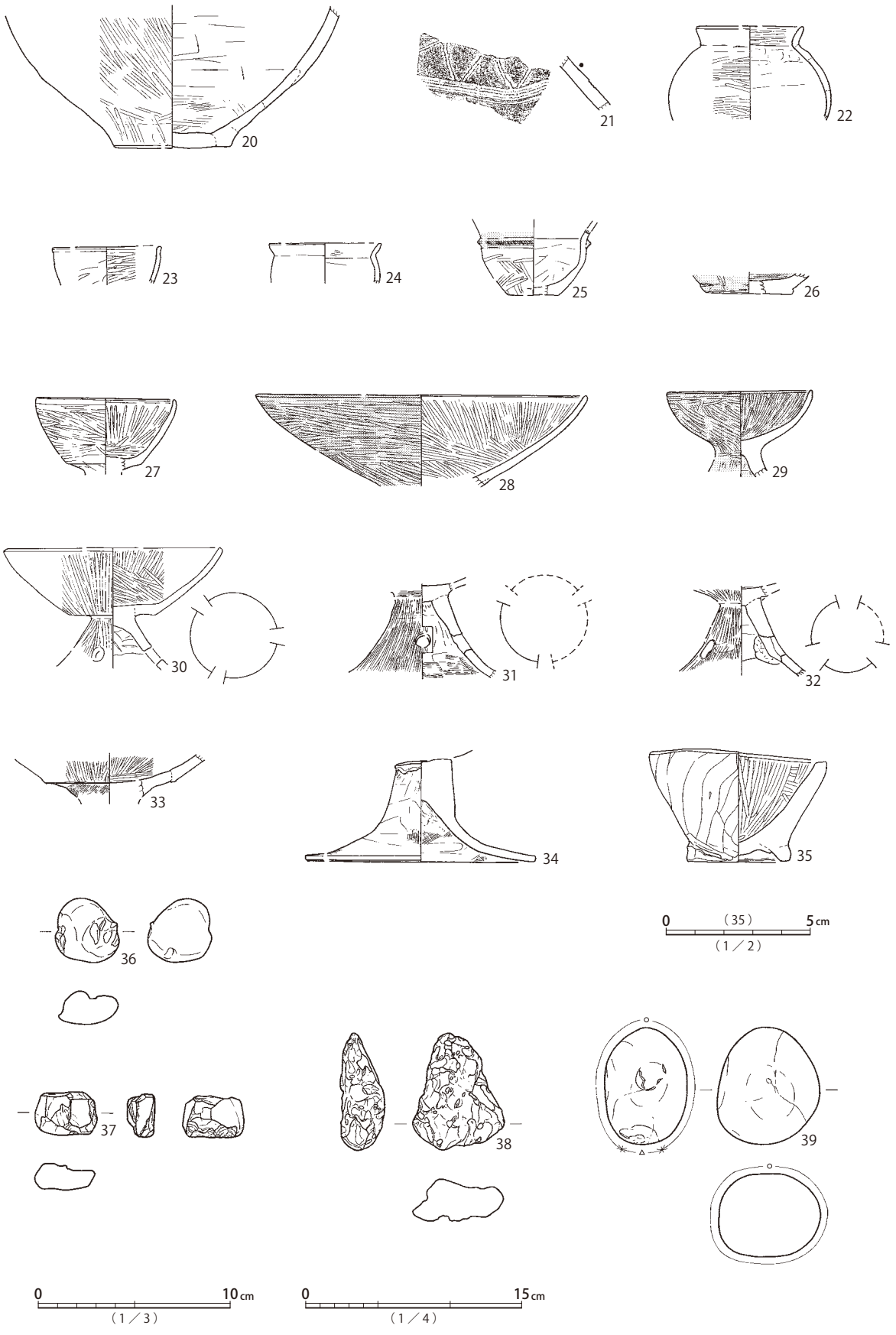


第272図 SI1037遺構(1)



第273図　SI1037遺構(2)、SI1037遺物(1)

SI1037



第274図　SI1037遺物(2)

穴の位置や構造はSI1038に近似しており、連続的に構築された可能性も考えられる。また、水銀朱使用土器の出土したSI1048も同様の平面プランを共有しており、帰属時期と系統に関連性が窺われる。

SI1038（第275・276図、図版64・224・307）

5.0×5.6m、深さ55cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。西角が弥生時代終末期後半のSI1037、北角が長方形撹乱と古代の方形墳墓SM1181周溝、南東辺がSI1044と重複する。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。d底面には直径15cm程度の柱アタリが確認されている。中心の若干北西寄りに楕円形の炉が設けられ、a・b間ラインの北西外側にピットg・hが認められる。炉とjの中間には竪穴の中心（角間交点）が位置する。床面周溝は切り合い部を除いて全周し、dとの間に間仕切り溝が検出されている。炉等の位置関係は、SI1037と類似する。

覆土は、床面直上に焼土の集中が認められ、廃絶時に火を受けた可能性が高い。遺物の出土量は多くないため、不時の廃絶ではなく、意図的な焼却処分等が行われたと推定できる。上層は、黒褐色土を主体とする層が漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、土器片が床面から下層にかけて出土している。受口状口縁甕1～3、タタキ甕4・5、外面肥厚口縁の壺6・9・10、壺7・8、縄文施文の肥厚部を持つ鉢12、高杯13・14、鉢形のミニチュア土器15が出土し、うち6・9・13が床面近くの検出、他は覆土一括取り上げ資料である。口縁外面肥厚部に縄文の伴わない壺6・9と、東海系の影響を受けた高杯13は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、軽石製砥石16が出土している。

本遺構は、SI1044を切りSI1037に切られる重複関係と、平面形及び出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半、中台1式期に帰属すると考えられる。

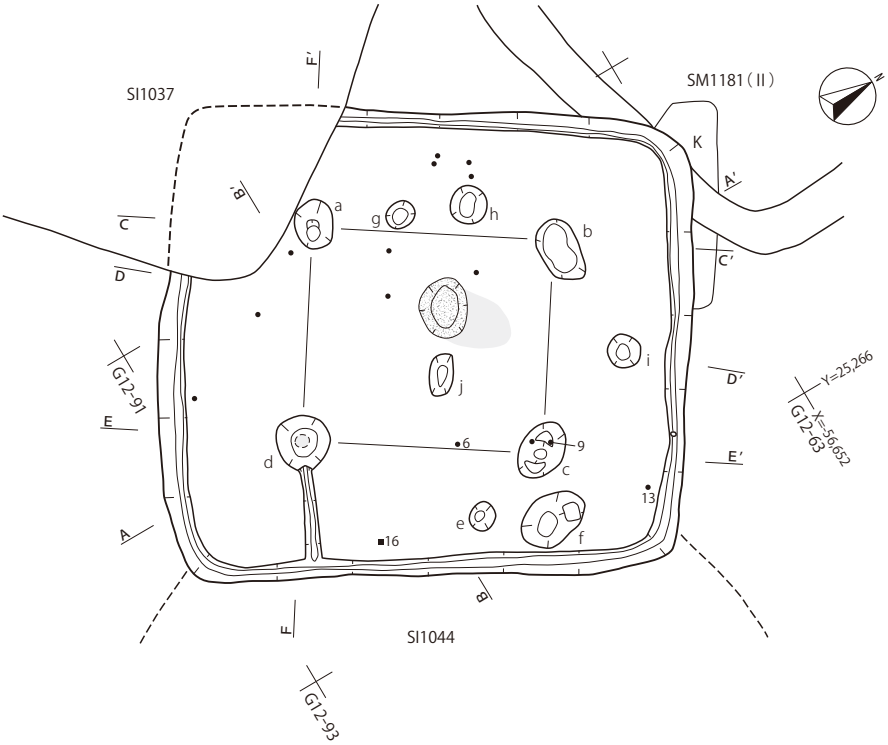
SI1039（第277・278・279図、図版65・129・159・160・224・307・334）

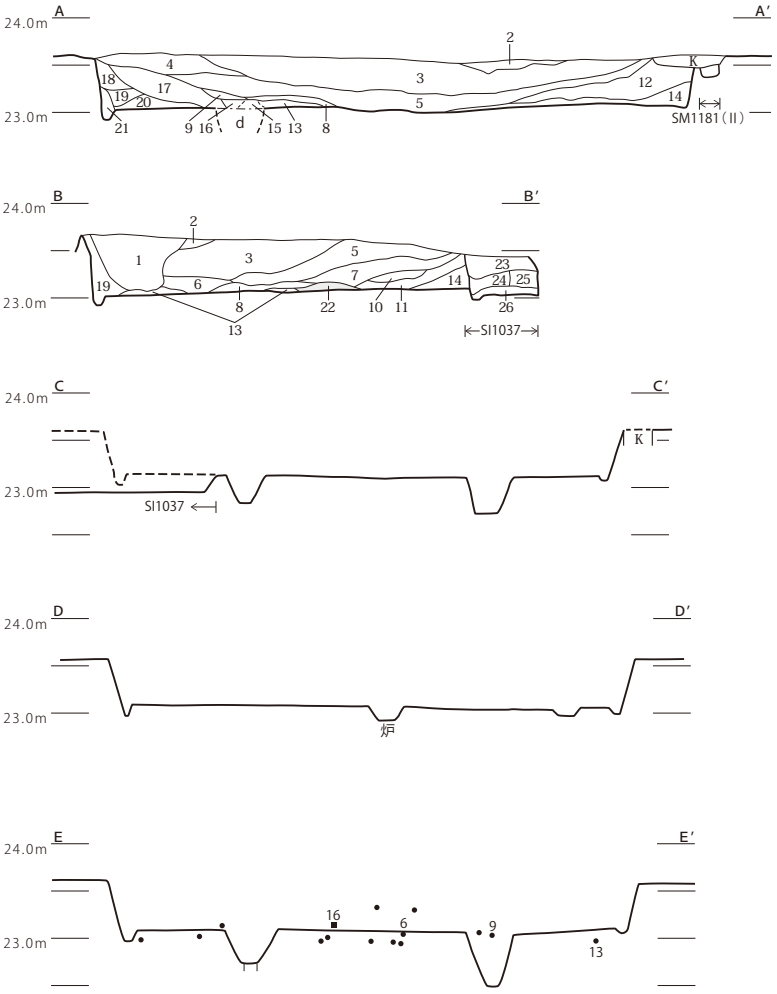
4.1×3.7m、深さ35cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期後半のSI1037と弥生時代後期後半のSI1051の中間に、同時存在不能な距離で位置する。主柱穴は認められず、中心から40cmほど南の位置にaが検出されるのみである。中心軸上、北に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は確認されていない。

覆土は、焼土・炭化材が床面上において、多数の完形土器と共に検出されている。廃絶時に焼却処分等が行われた可能性が高い。中層以上は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面直上から多くの土器が検出されている。在来的な甕1～3・5、くの字状口縁甕4、タタキ甕6、台付甕7、広口壺9、壺10～15、椀16・17、鉢18～30、高杯33、炉器台34等が出土している。下層から中層にかけて出土した甕1は、輪積装飾を伴いながらも口頸部の比率が小さく、過渡的な形状を示す。中層から上層にかけて出土した甕4は、くの字状口縁を持つが頸部屈曲が鋭くなく、口縁端部に平坦面を持ち、過渡的な形態である。タタキ甕6はタタキメ後にハケメを施す、非在地系土器である。出土位置は床面より約10cm離れるが、混入品ではなく、下層土器群と同時期の資料と位置付けられる。広口壺9は口縁肥厚部および口頸部下端段部への押捺を持つが、縄文は脱落している点で過渡的様相を示す。頸部段を持ち肩部に沈線区画単節縄文横帯を施される壺15

SI1038

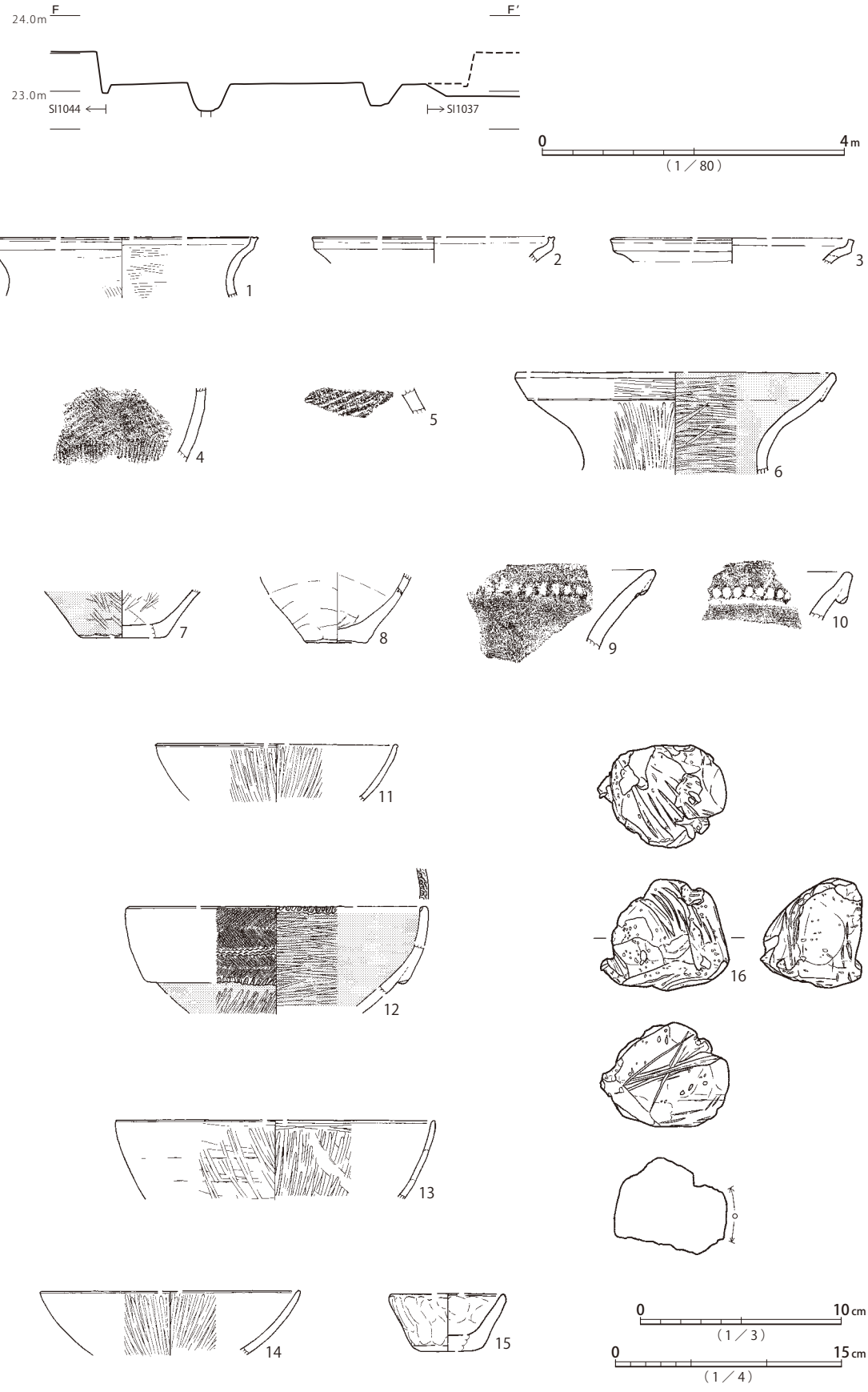




1　黄褐色土　ロームブロック主体土、褐色土
2　暗黄褐色土
3　暗褐色土　ローム粒、ロームブロック
4　黒褐色土
5　黒色土
6　黒褐色土　ローム粒
7　黒褐色土　黒色土、ローム粒
8　黒褐色土　焼土粒
9　黒色土　焼土粒
10　褐色土　ローム粒
11　黒褐色土　ローム粒
12　黒褐色土　褐色土大粒、ローム粒、ロームブロック
13　黒褐色土　炭化物粒少量、ロームブロック
14　黒褐色土　ローム粒
15　褐色土　ローム粒
16　黒褐色土
17　褐色土　黒褐色土、ローム粒、ロームブロック
18　黒褐色土　黒色土、ローム粒
19　黒褐色土　ローム粒
20　黒褐色土
21　褐色土　ローム粒、ロームブロック
22　焼土
23　黒褐色土　23 ～ 26 層 SI1037 覆土
24　黒褐色土
25　黒褐色土　褐色土、ローム粒
26　黒褐色土　ローム粒、ロームブロック

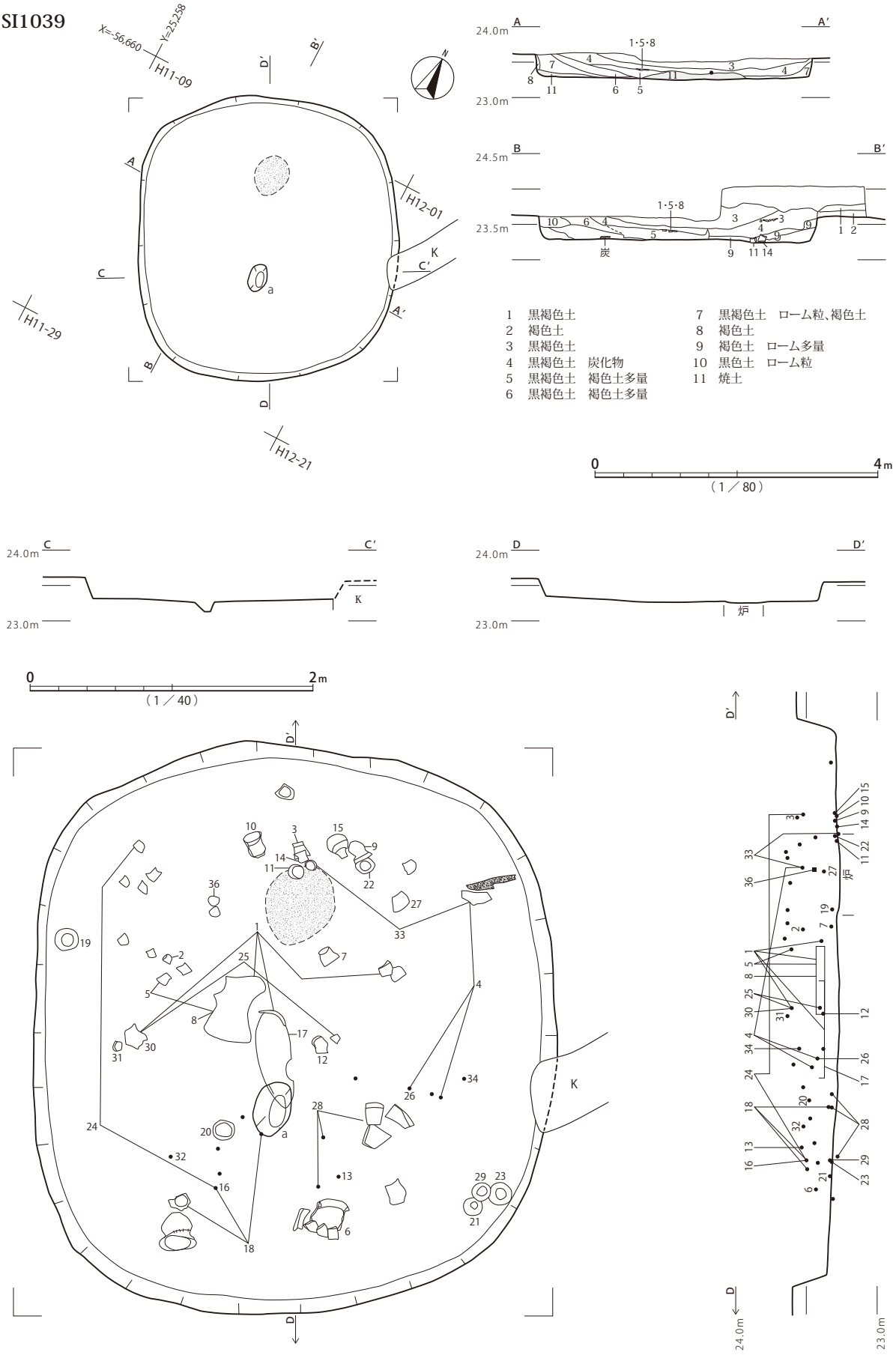
第275図　SI1038遺構（1）

SI1038



第276図　SI1038遺構(2)、SI1038遺物

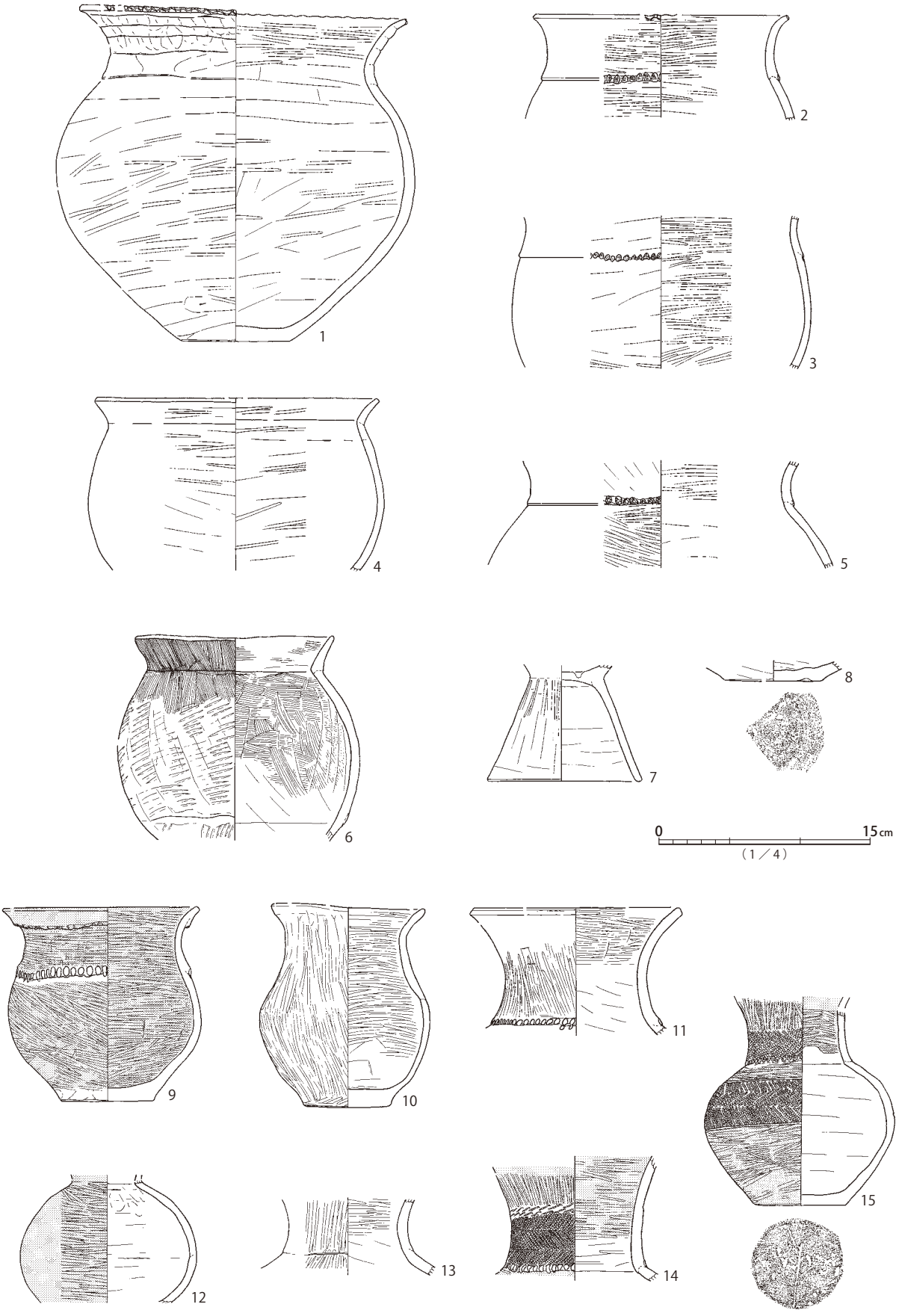
SI1039



1 黒褐色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土 炭化物
5 黒褐色土 褐色土多量
6 黒褐色土 褐色土多量
7 黒褐色土 ローム粒、褐色土
8 褐色土
9 褐色土 ローム多量
10 黒色土 ローム粒
11 焼土

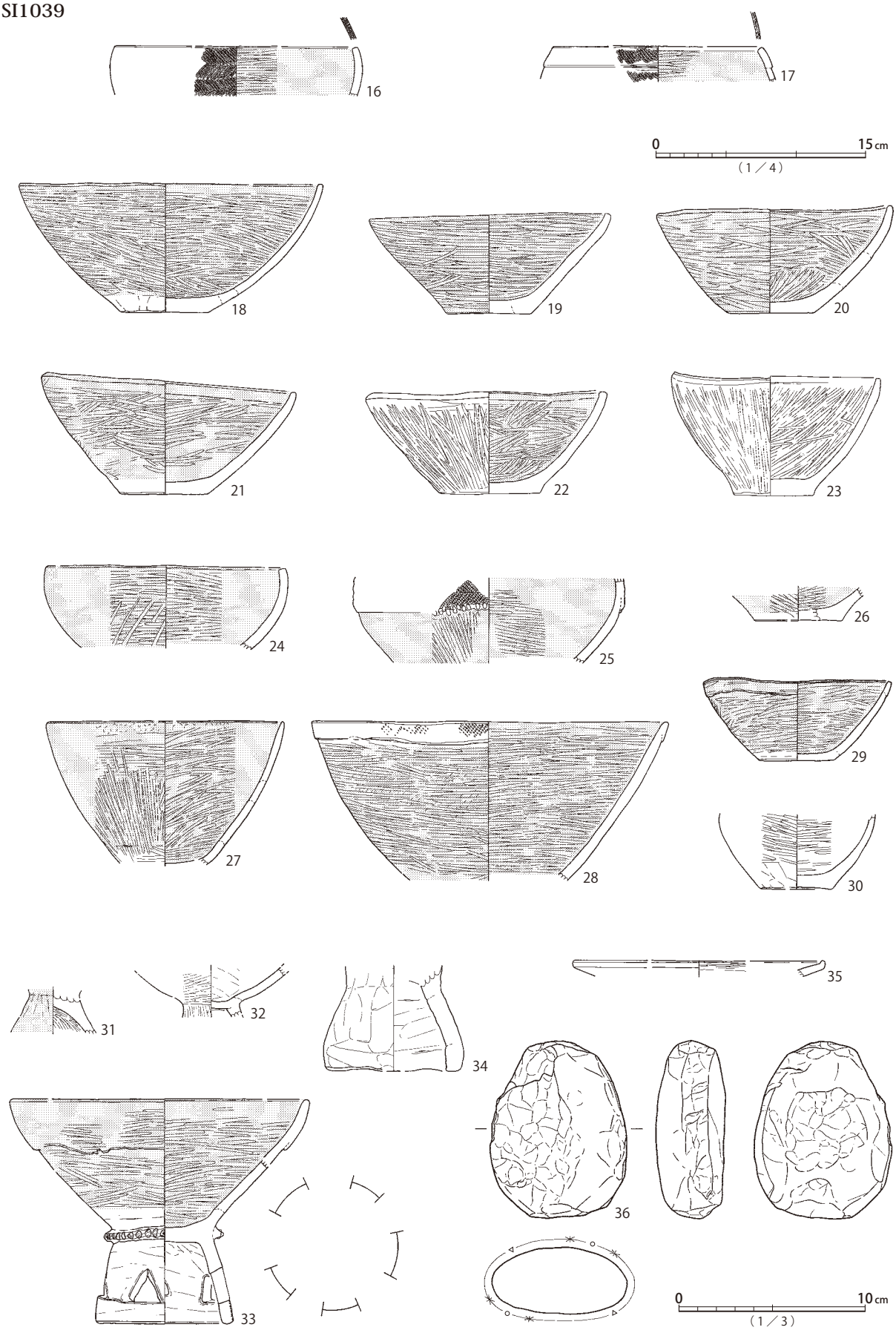
第277図　SI1039遺構

SI1039



第278図　SI1039遺物（1）

SI1039



第279図　SI1039遺物（２）

は一見、弥生時代後期前半に位置づけられる特徴も備えるが、底面に木葉痕があるなどイレギュラーな形態であり、弥生時代終末期初頭の所産と思われる。壺15内には少量の炭化物が遺存しており、放射性炭素年代測定を行った結果、1960±20（yrBP）の測定年代が得られている（第3章第1節）。測定値は建物木材の古木効果の影響と考えられる。無文素口縁の鉢18～23は、肥厚部及び縄文を持たない在来系の形態である。19・21・22・23は床面近くのレベルで検出されている。鉢もしくは高杯27は深い形態を呈し、東海西部系高杯の影響を受けた可能性がある。床面直上出土の無文小型鉢29は在来系で、痕跡的な肥厚部を持つ。床面直上出土の高杯33は、脚部に三角形透孔5箇所が配される点は弥生時代後期的だが、肥厚部の縄文及び押捺装飾が欠落する点は後出的な特徴であり、過渡的な形態と言える。

床面直上から下層にかけて出土した土器群は、弥生時代終末期前半、中台1−1式に位置づけられる。天神台遺跡調査区内で類例の多い受口状口縁甕と東海系高杯が含まれない様相は、本遺構出土土器群の特徴と言える。その他、火山礫凝灰岩製礫石器36が出土している。なお、現場写真および平面図によると、口頸部段押捺を持つ完形に近い甕が、土器群の南西端で出土しているものの、対応資料は確認できない。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI1040・SI1041（第280図、図版65・224）※断面図はSI1042

規模不明、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1040と、5.1×4.5？m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1041である。099調査区西縁に位置し、東側の大部分が削平されている。

SI1041は南西辺でSI1042と重複し、SI1042がSI1041覆土を切り込んでいる。北東側3分の2が失われているが、主柱穴a・bと炉の一部が検出されている。炉はおそらく主柱穴間ライン上に設けられたと思われる。

覆土は、最下層と壁際にロームの集中が見られるが、上層は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。近世遺構の溝状遺構SD1001が交差し、覆土上層を一部破壊している。

遺物は、土器が少量出土している。弥生土器の壺6・7、鉢8～10の他、古式土師器の台付甕4、受口状口縁甕5、小型鉢11がある。床面直上からの出土記録があるのは鉢8のみで、他は覆土一括取り上げ資料である。8は弥生時代後期後半、山田橋式の範疇と思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

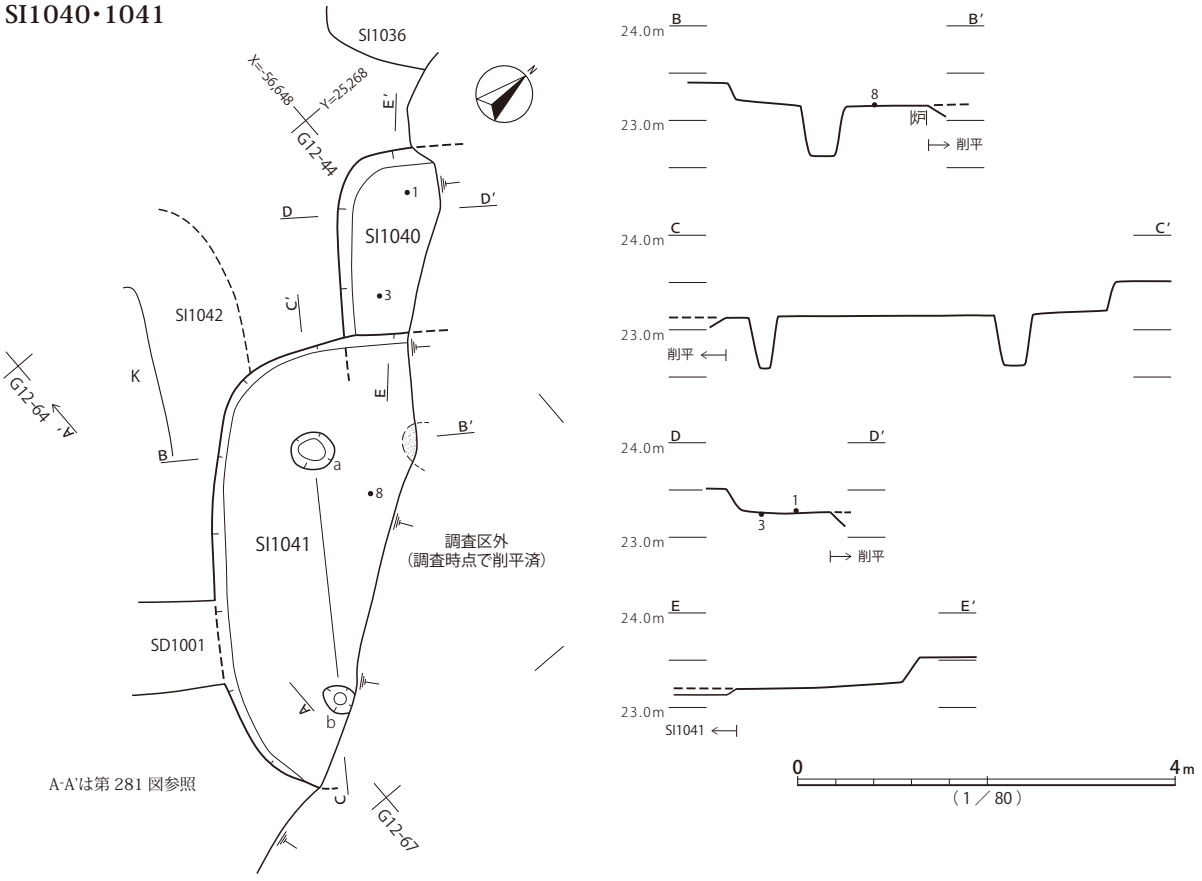
SI1040は、西角が検出されるのみで、遺存状態が悪く、竪穴内部施設は不明である。床面レベルはSI1041より若干高い位置にある。覆土については、記録が無く詳細は不明である。

遺物は、土器が少量出土している。床面からは、ミガキ仕上げのくの字状口縁甕1と受口状外面肥厚口縁の在来系の壺3が検出されている。タタキ甕2は覆土一括取り上げ資料である。甕1とタタキ甕は弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

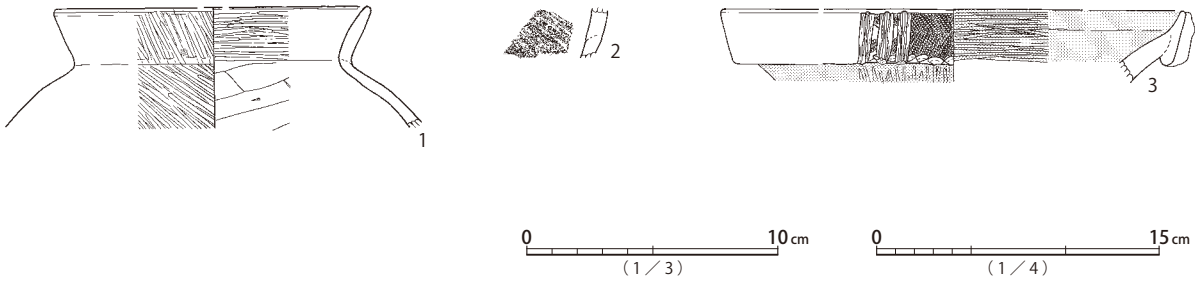
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

重複する2棟の竪穴建物跡は、弥生時代後期後半のSI1041→弥生時代終末期のSI1040の順に構築されたと考えられる。また、SI1042はSI1041より後出する可能性が高い。

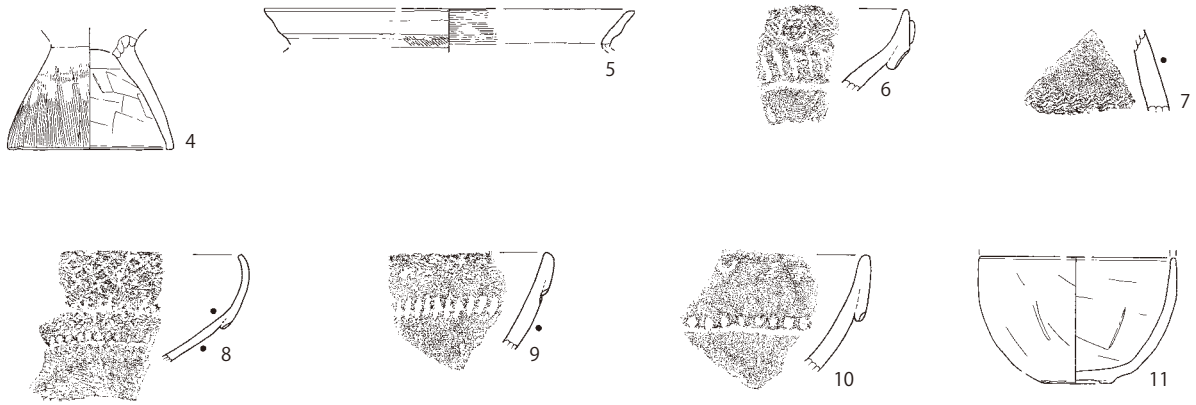
SI1040・1041



SI1040



SI1041



第280図　SI1040・SI1041遺構、SI1040・SI1041遺物

SI1042（第 281 図、図版 3・4・66・225・326）

4.5？×4.3？m、深さ 10cm程度の隅円方形の可能性がある竪穴建物跡である。連続する撹乱に中心部分が深く破壊され、また、南東辺がSD1001と重複し、遺存状態は悪い。主柱穴等は確認されず、炉も北東側が大部分撹乱されている。

覆土は、焼土の散布が部分的に認められる。

遺物は、土器と鉄製品が少量出土しているが、すべて覆土一括取り上げ資料である。壺3・4と鉢7が弥生土器、甕1・2、壺5、椀6、鉢8が古式土師器である。その他、環頭部を持つ釘状鉄製品9が出土している。また、常滑甕胴部片（型式不明、43.5g）が混入している。

本遺構は、推定される平面形と、古式土師器の出土、SI1041との切り合い関係に基づき、弥生時代終末期から古墳時代前期前半に位置づけられる。

SI1043（第 282 図、図版 66・160・225）

3.5×3.7m、深さ 15cm程度の不整円形竪穴建物跡である。古墳時代以降の方形墳墓SM1162の周溝北東部と重複し、床面近くまでの破壊を受ける。北東部はSI1037南西辺と近接する。主柱穴は見られず、ピットaのみが伴う可能性がある。中心からやや南西寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積を示し、床面より若干高い位置において貝層が、60×40cm程度の範囲に検出されている。貝層の重量は2362.3gあり、ハマグリ（L：59点442.5g、R：63点448.2g）・イボキサゴ（679点475.4g）・シオフキ（L：36点166.3g、R：44点213.6g）・マガキ（L：54点137.1g、R：39点134.4g）を主体とし、他にツメタガイ・カガミガイ・マテガイ・アサリ等が含まれる。少量ながら、タニシ（9点7.7g）・オオタニシ（4点1.7g）が見られる点は、弥生時代の水田稲作との関連を示唆しており興味深い（第3章第4節）。

遺物は、少量の土器が出土している。遺存する覆土が薄いため、概ね本来の床面近くのレベルで検出されている。在来的な甕1・2、高台状底部3、縄文の施された壺4～9、三角形透孔の高杯脚部11、鉢12がある。これらは、結節文区画の文様を持つ壺4、幾何学文の壺9、高杯11の特徴から、概ね弥生時代後期後半、山田橋2式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

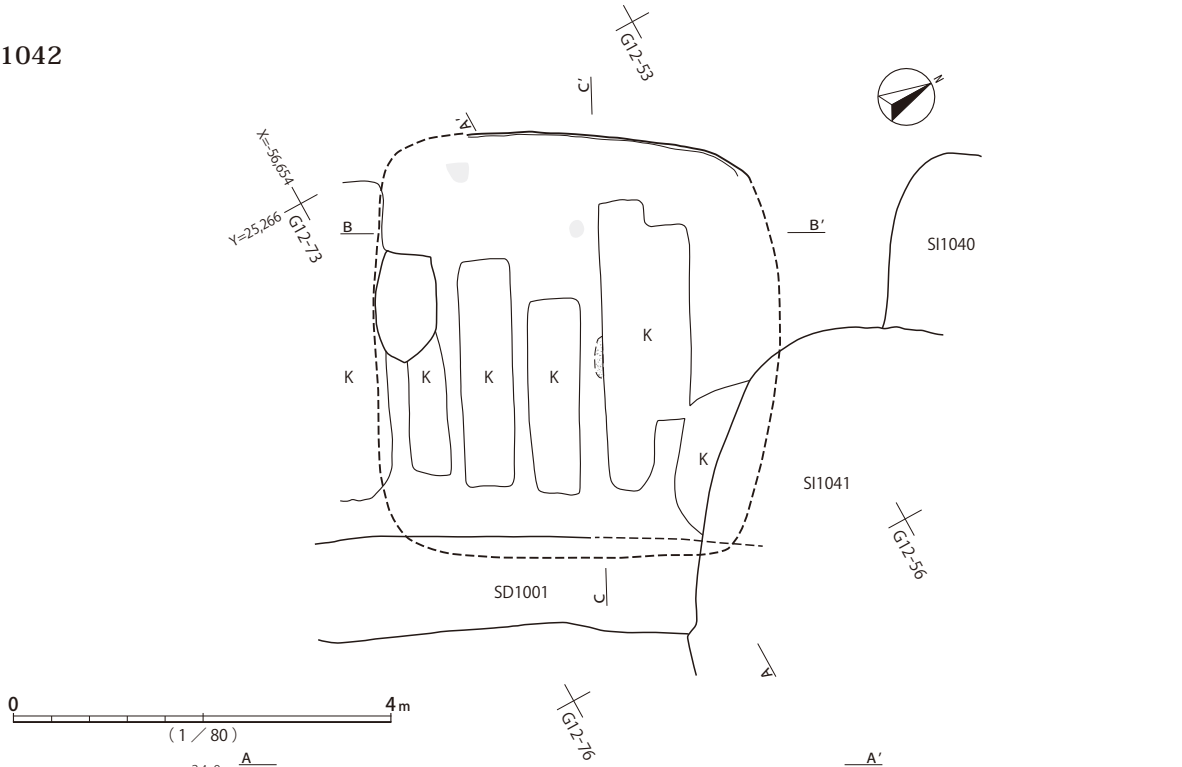
SI1044（第 283 図、図版 66・160・225・307・308）

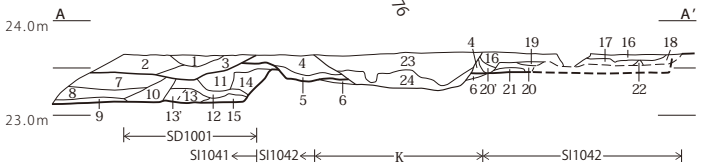
6.0？×5.7？mの隅円方形竪穴建物跡である。長方形撹乱列と近世以降の溝跡SD1001に中央部を床面まで破壊され、遺存状態は悪い。北西部が弥生時代終末期竪穴建物跡SI1038と、南東角が地下式埋葬施設を持つ古代方形墳墓SM1169周溝北西部と重複する。平面形は炉と見られる被熱赤変箇所と貯蔵穴と見られるcから推定している。主柱穴の可能性があるa、ハシゴ穴もしくは主柱穴と思われるbが検出されている。床面周溝が遺存部に認められ、本来は全周していた可能性がある。

覆土は、土層断面記録がなく詳細は不明である。平面図に焼土・炭化材の検出記録はない。

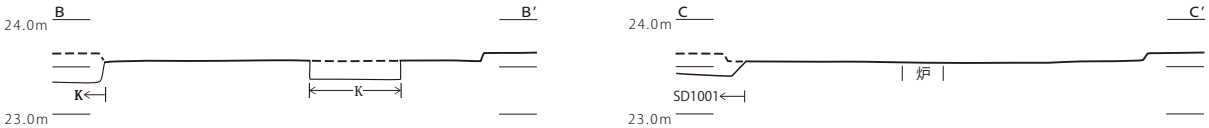
遺物は、床面直上から素口縁赤彩小型壺1、貯蔵穴覆土上層から鉢（高杯）2が検出されている。壺1は頸部屈曲がなだらかな点、2は横方向のヘラミガキと口縁端部の平坦面という特徴から、弥生

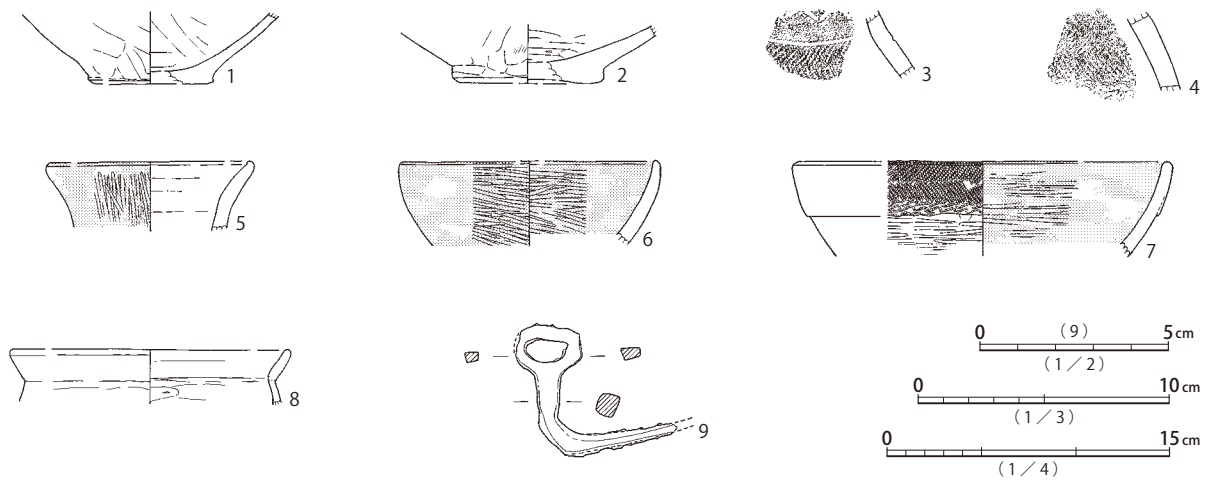
SI1042



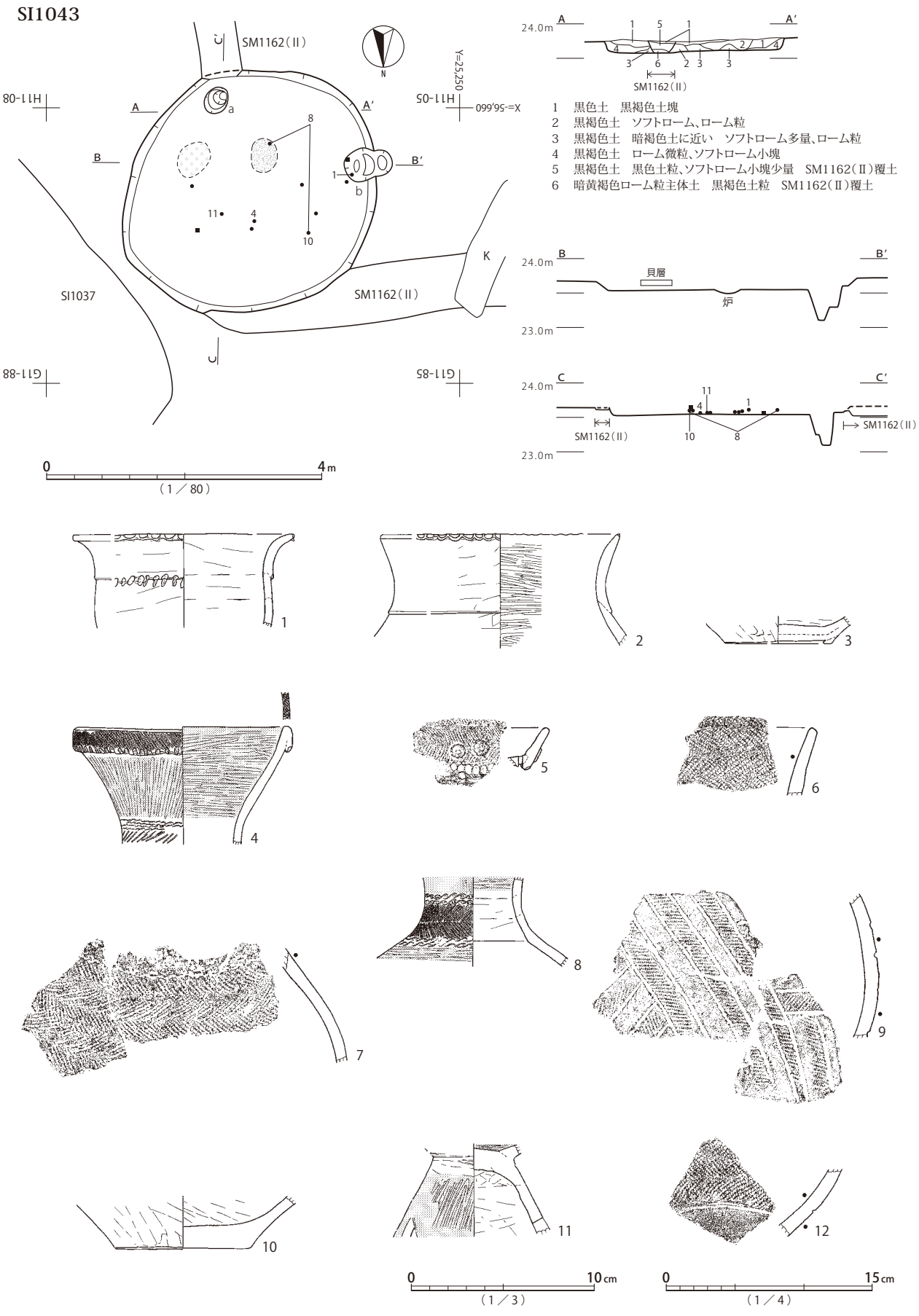


1　黒褐色土　黒色土、暗褐色土　SD1001 覆土
2　黒色土　暗褐色土塊　SD1001 覆土
3　黒褐色土　黒色土、暗褐色土　1 層より黒色土多量　SD1001 覆土
4　黒褐色土　ローム、ソフトローム小塊　硬質　SI1042 覆土
5　黒褐色土　ローム小ブロック、黒色土粒　SI1042 覆土
6　暗黄褐色土　ローム、黒褐色土　貼り床
7　暗褐色土　黒色土、ローム大粒　7 ～ 15 層 SI1041 覆土
8　黒褐色土　ローム大粒
9　暗褐色土　ローム大粒多量
10　暗褐色土　ローム大粒、黒色土粒　軟質
11　黒褐色土　黒色土、暗褐色土、ローム大・小・微粒各多量
12　黒褐色土　黒色土、ソフトローム粒多量
13　黒褐色土　炭微粒、ローム粒、ソフトローム少量
13'　黒褐色土　ローム多量
14　暗褐色土　ローム多量
15　暗褐色土　黒褐色土
16　黒褐色土　ローム微粒　SI1042 覆土
17　黒褐色土　暗褐色土塊　SI1042 覆土
18　黒褐色土　17 層より明るい　ローム多量　軟質　SI1042 覆土
19　暗褐色土　硬質　貼り床状
20　黒褐色土　黒色土、暗褐色土　硬質　SI1042 覆土
20'　黒褐色土　黒色土、暗褐色土　軟質　SI1042 覆土
21　暗褐色土　暗褐色土、ローム粒　硬質　SI1042 覆土
22　ロームブロック　SI1042 覆土
23　暗褐色土　ローム小ブロックやや多量　撹乱覆土
24　黒褐色土　ローム小ブロックやや多量、鉄片、焼土塊　撹乱覆土

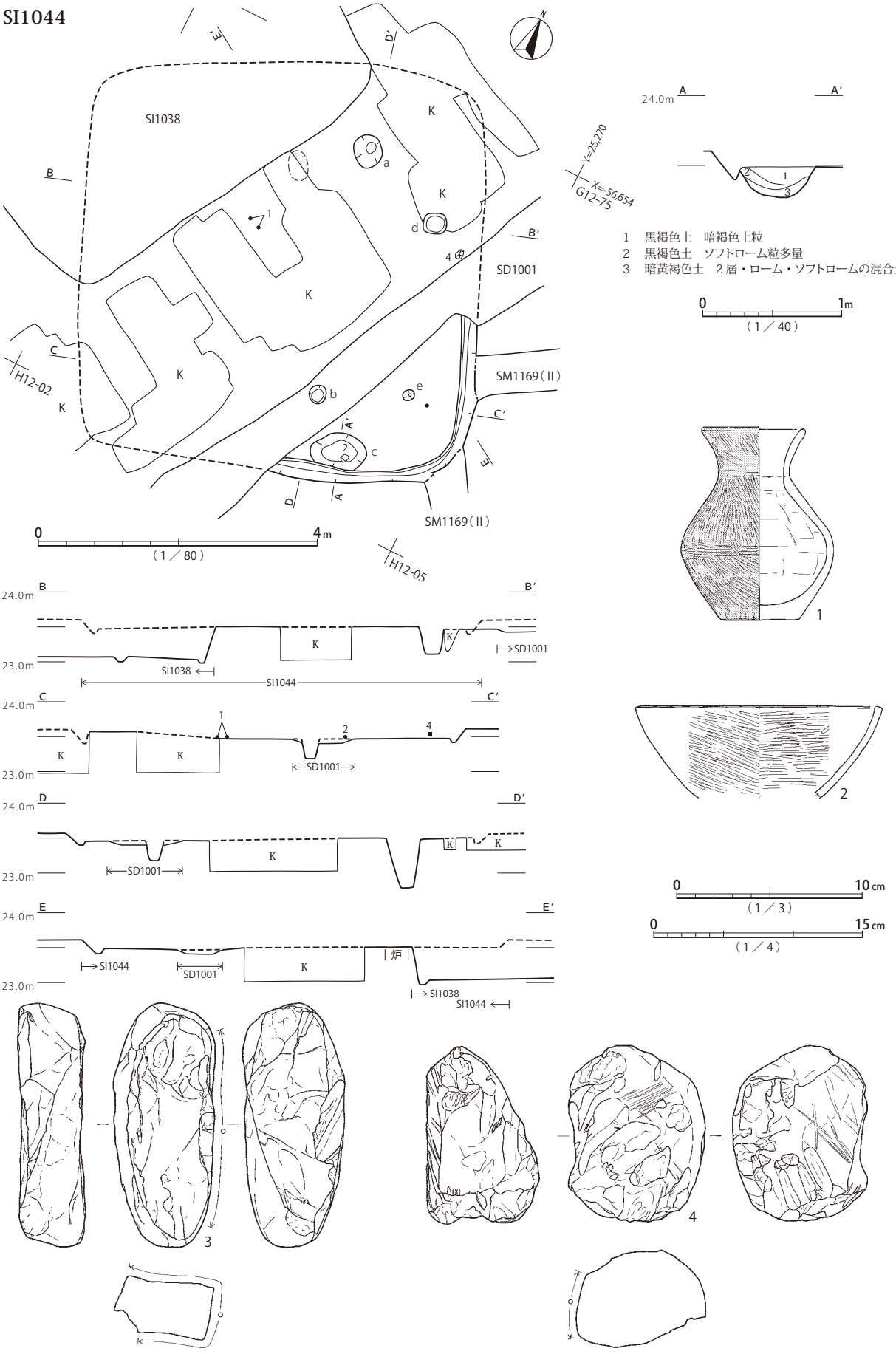




第281図　SI1042遺構・遺物

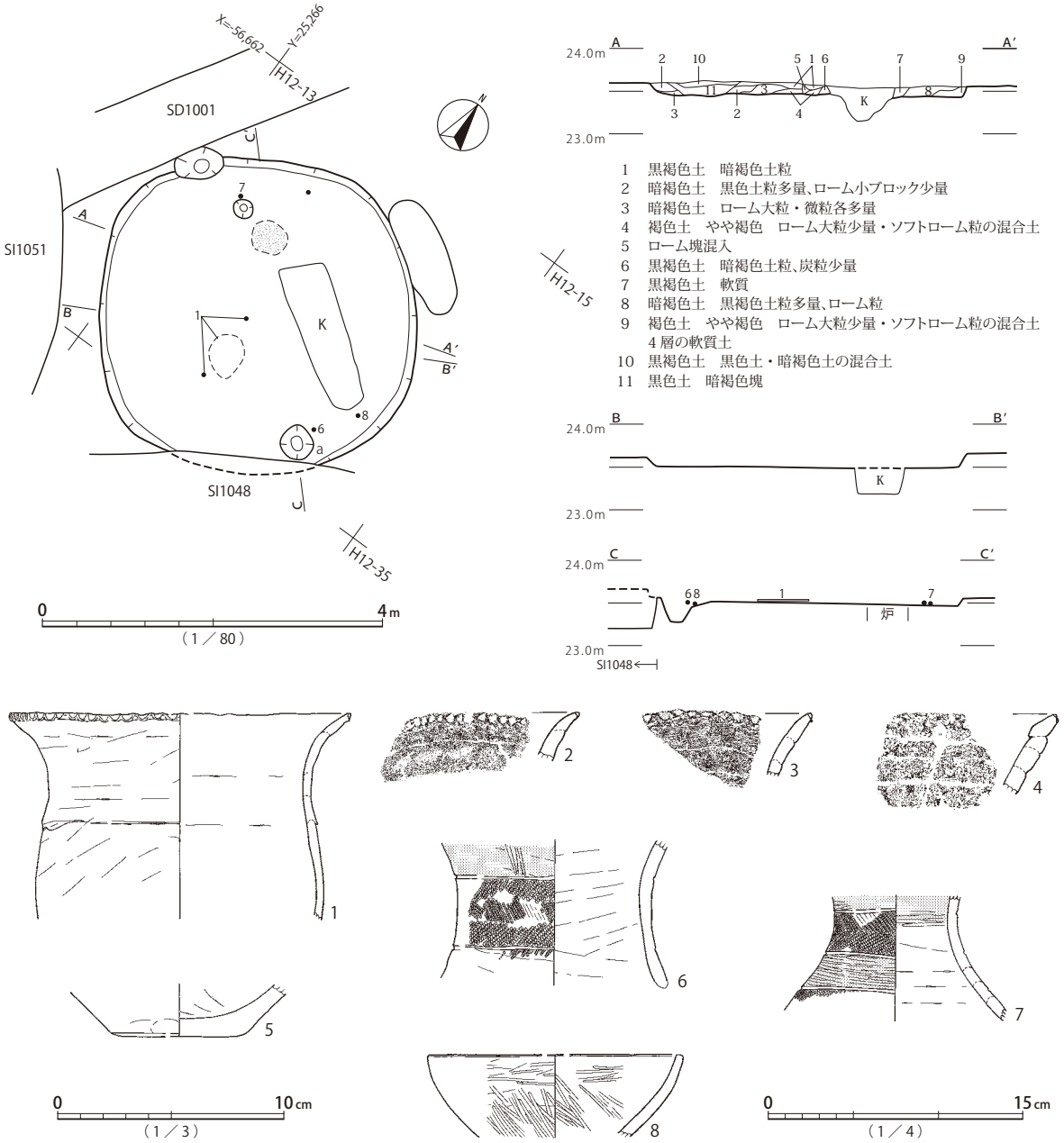


第282図　SI1043遺構・遺物



第283図　SI1044遺構・遺物

SI1045



第284図　SI1045遺構・遺物

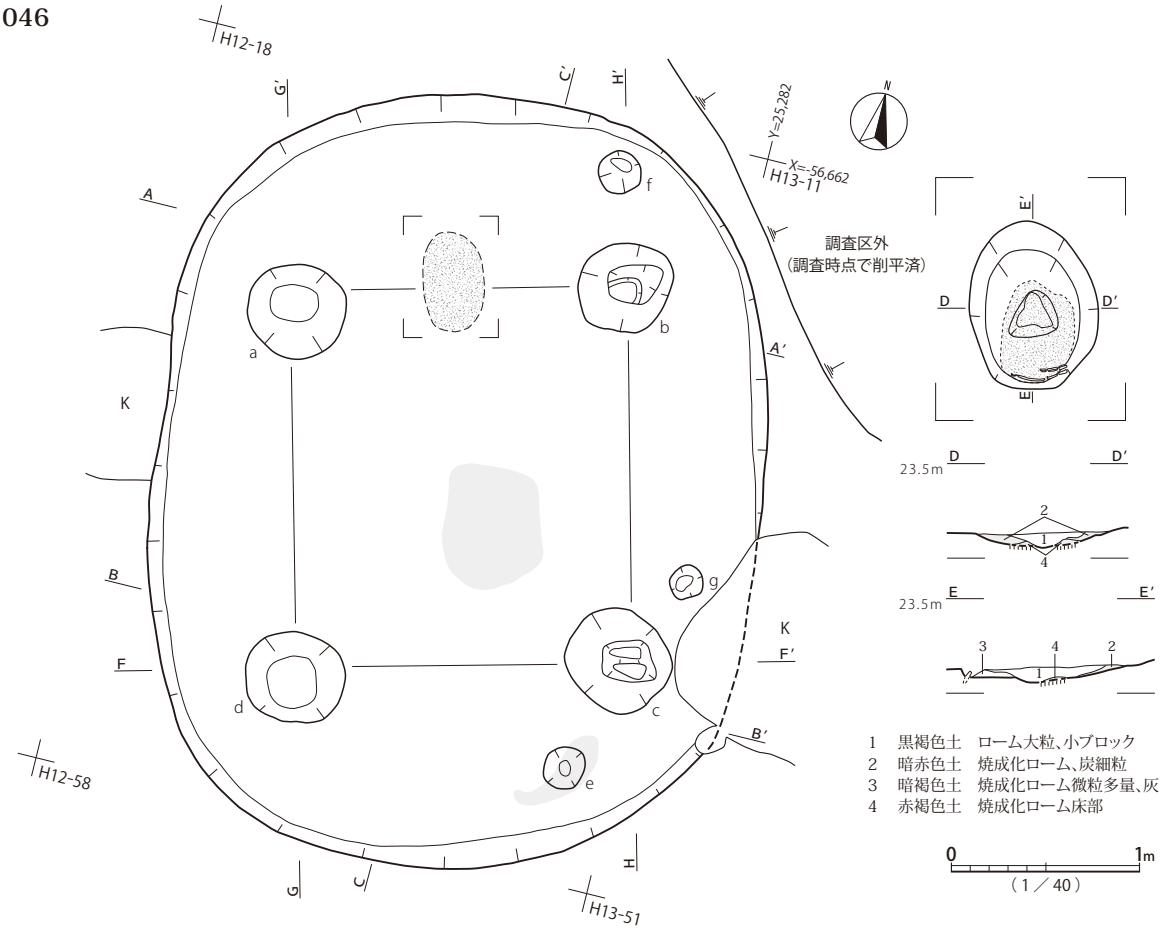
時代終末期前半、中台1式の範疇と見られる。他に、覆土一括取り上げ資料のホルンフェルス製礫石器（砥石）3、北東壁際下層出土の軽石製砥石4が伴う。

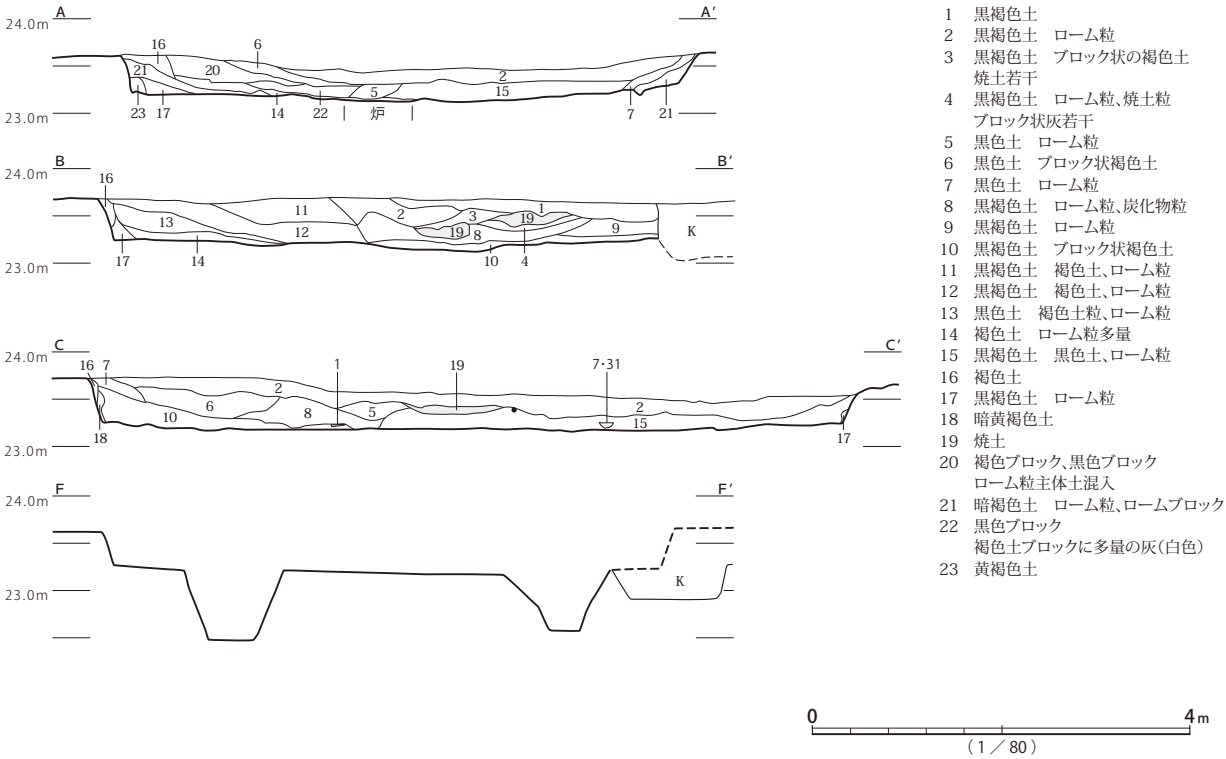
本遺構は、推定平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と推定される。

SI1045（第 284 図、図版 66・225）

3.8×3.7m、深さ 15cm程度の不整円形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を床面まで受けるほか、南辺が弥生時代終末期竪穴建物跡SI1048と重複し、掘り込まれている。主柱穴は認められず、貯蔵穴aが検出される程度である。中心と北西壁の中間位置より若干外寄りに、不整円形の炉が設けられる。

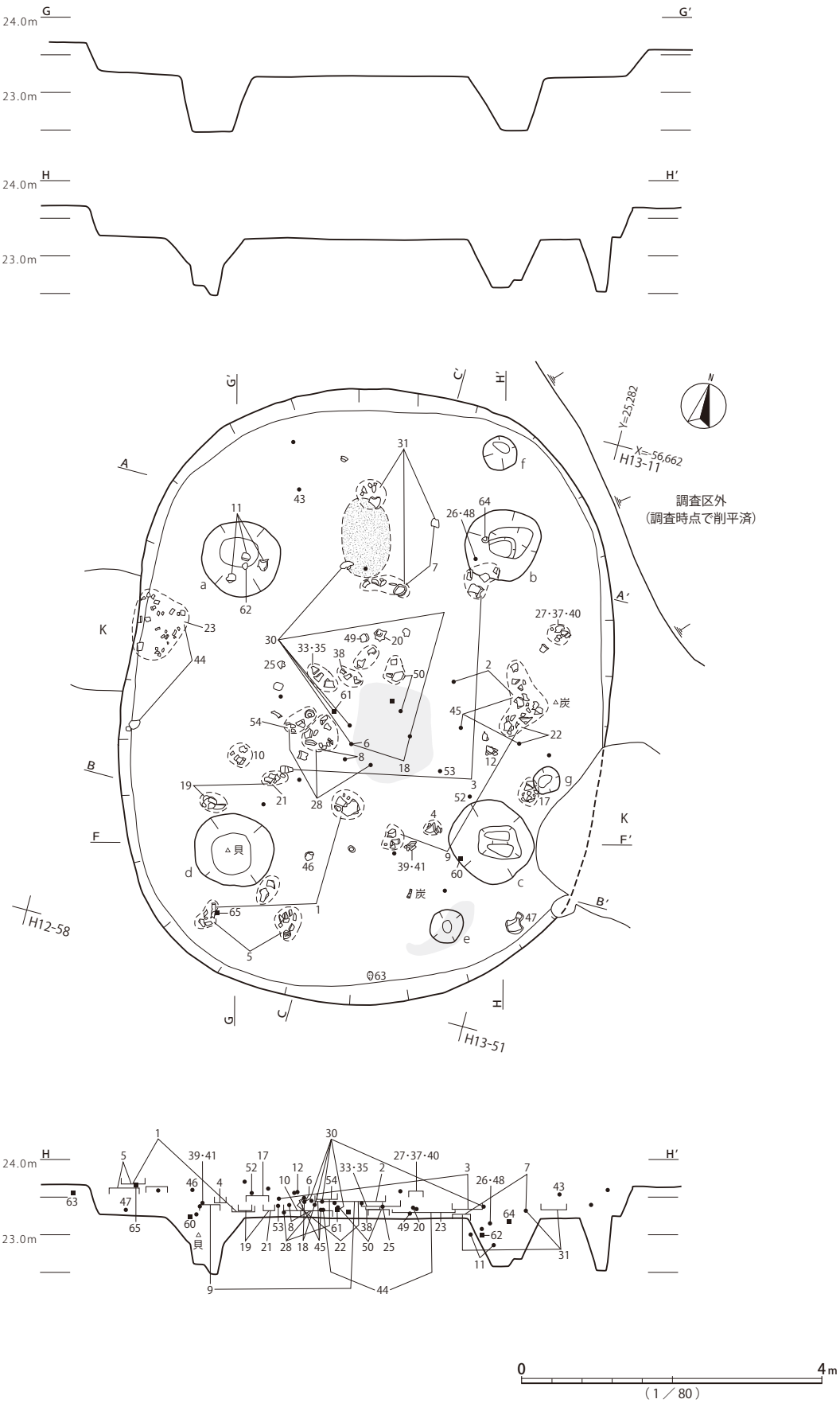
SI1046





第285図　SI1046遺構(1)

SI1046



第286図　SI1046遺構（2）

覆土は、床面直上と壁際に褐色土、以上が黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が確認できる。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、床面直上から土器片が検出されている。口頸部段を持ち口縁端部が交互押捺で小波状を呈する甕1は破片が散らばって出土している。在来的な甕2 ～ 4、沈線区画縄文横帯の壺6・7、無文素口縁の鉢8があり、いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。なお、壺6は破断面が摩滅しており、転用器台として用いられた可能性がある。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI1046（第 285・286・287・288・289・290・291 図、図版 66・161・225・226・227・308・309・334）

8.2 × 6.5m、深さ 45cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。東西辺に撹乱を受け、東側は床面まで達している。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴もしくは貯蔵穴のe等が検出されている。a・b間ラインと中心軸の交差する位置に、長楕円形の炉が設けられる。炉の竪穴中心寄りには、土器外面が外向きになるかたちで土器片が立てて埋設されている。床面周溝は認められない。

覆土は、壁際にロームの多い層が認められ、西側下層に褐色土層が目立つ。中央付近から南にかけて、床面から15cmほどの高さに、土器多数が伴う焼土層の広がりが検出されている。焼土は床面直上ではないことから、ある程度埋積してからの窪地利用に伴う可能性もある。また、主柱穴d内にはハマグリを主体とする小規模な貝層が堆積している。貝殻重量は419.7gあり、ハマグリ（L：31点193.2g、R：29点218.6g）・イボキサゴ（13点7.9g）が検出されている（第3章第4節）。

床面近くから出土した遺物は、交互押捺口縁の甕1・7、ヘラ描き鋸歯文の壺28、広口壺31等であり、概ね久ヶ原2式新段階に位置づけられる。焼土層に近い高さで検出された、自縄結節文区画の壺30は山田橋式の特徴が濃厚だが、形状は他の土器の多くが帰属する久ヶ原2式新段階に近似するため、山田橋1式の古相に位置づけられる可能性がある。土器群は、久ヶ原式と山田橋式の過渡的様相を示す。その他、軽石（黒雲母）製砥石56、軽石製砥石57 ～ 60、火山礫凝灰岩製礫石器61、チャート製礫石器62、輝石安山岩製礫石器63、スコリア質凝灰岩製礫石器64、泥岩製礫石器65が出土している。

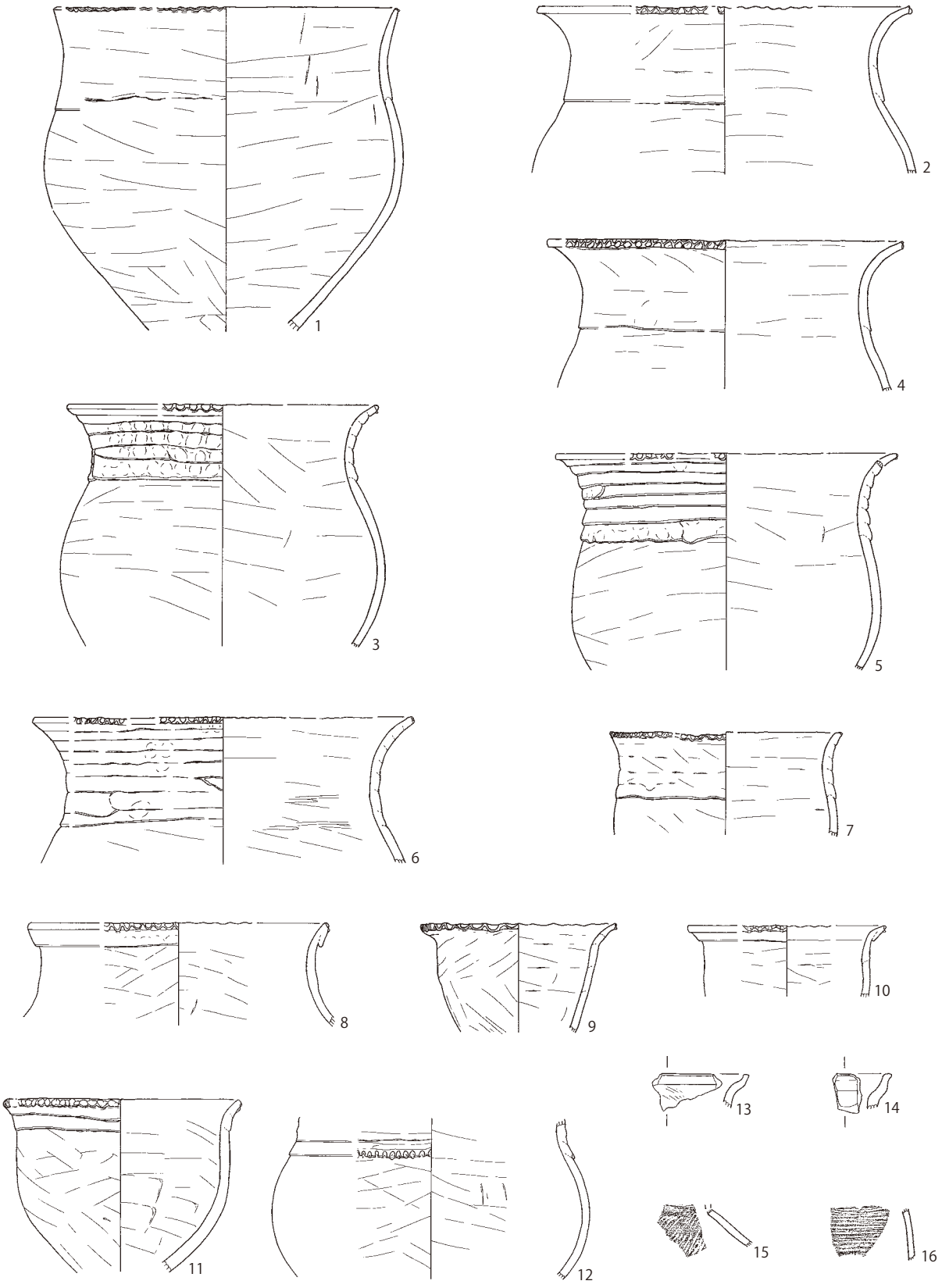
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産と考えられる。強いて細分すると、建物機能時が久ヶ原2式新段階期で、埋没後の焼土堆積時が山田橋1式期と推定される。

SI1047（第 292・293 図、図版 66・161・227・308・309）

5.4 × 5.5m、深さ 35cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。それぞれ弥生時代後期の竪穴建物跡SI1049とSI1057の中間に、同時存在できない距離で近接する。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインの内側に接する位置に楕円形の炉が設けられる。竪穴外周の南西側と北東側には、主柱穴を結ぶ範囲の外側に、高さ10cm程度のベッド状遺構が構築されている。貯蔵穴fの周囲にも連続し、堤状に囲んでいる。床面周溝は確認されていない。

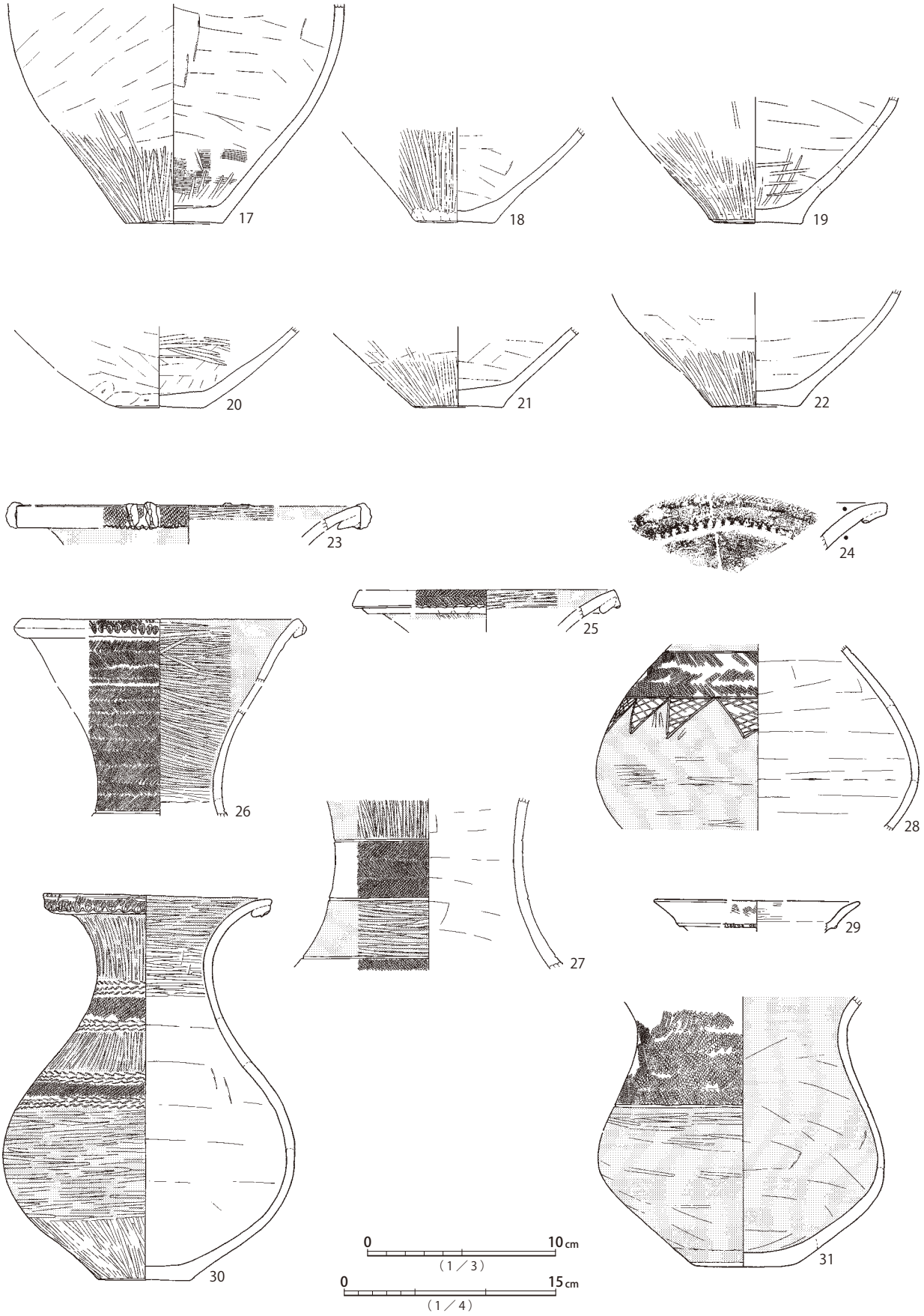
覆土は、床面上から焼土層が検出されており、廃絶時に明らかに火を受けている。床面検出の遺物は限られるため、火災ではなく片付け後に意図的な焼却処分が行われた可能性がある。貯蔵穴内は竪穴中心側からロームの多い層が堆積しているが、焼土の記録は見られない。

SI1046



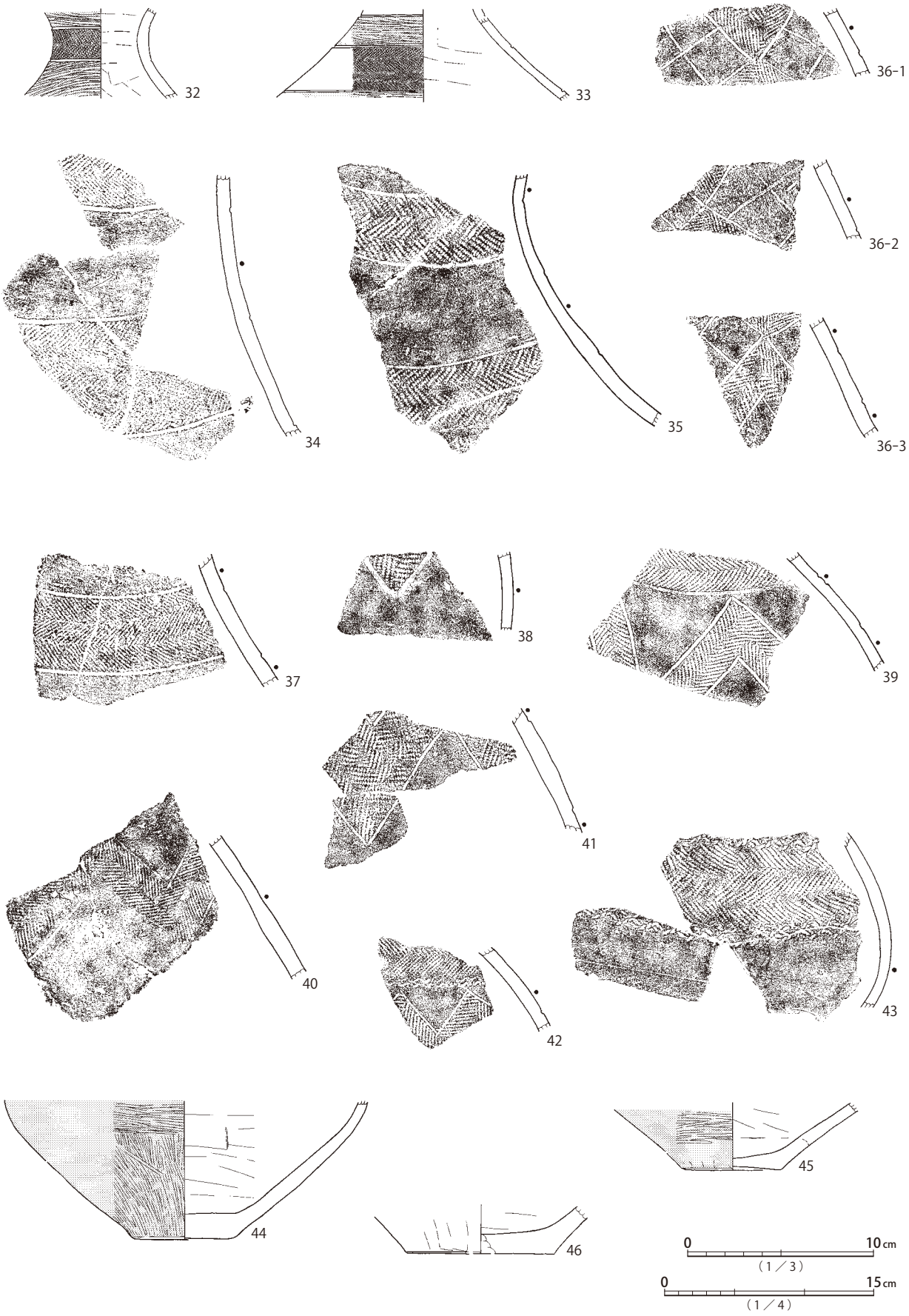
第287図　SI1046遺物（1）

SI1046



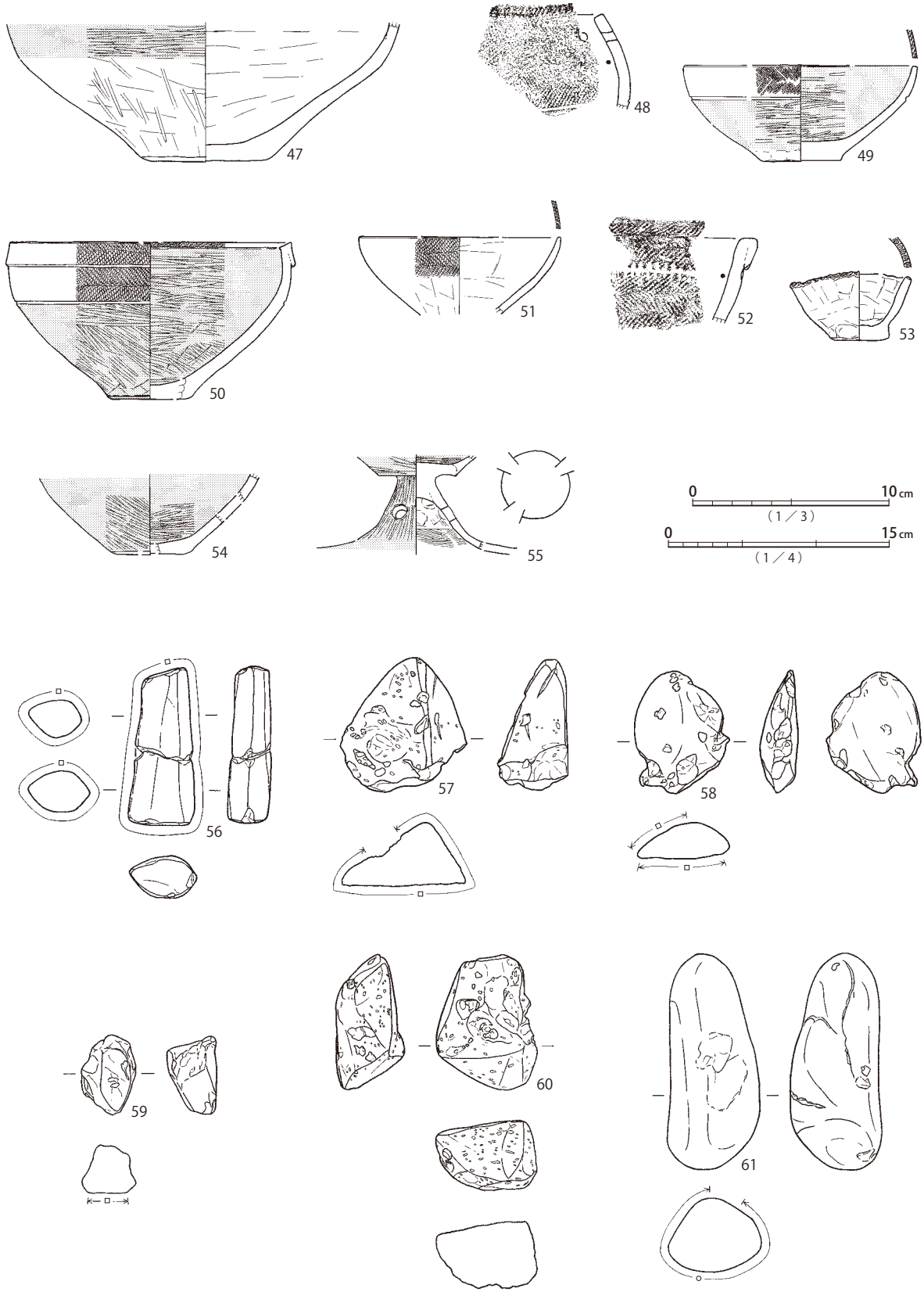
第288図　SI1046遺物（２）

SI1046



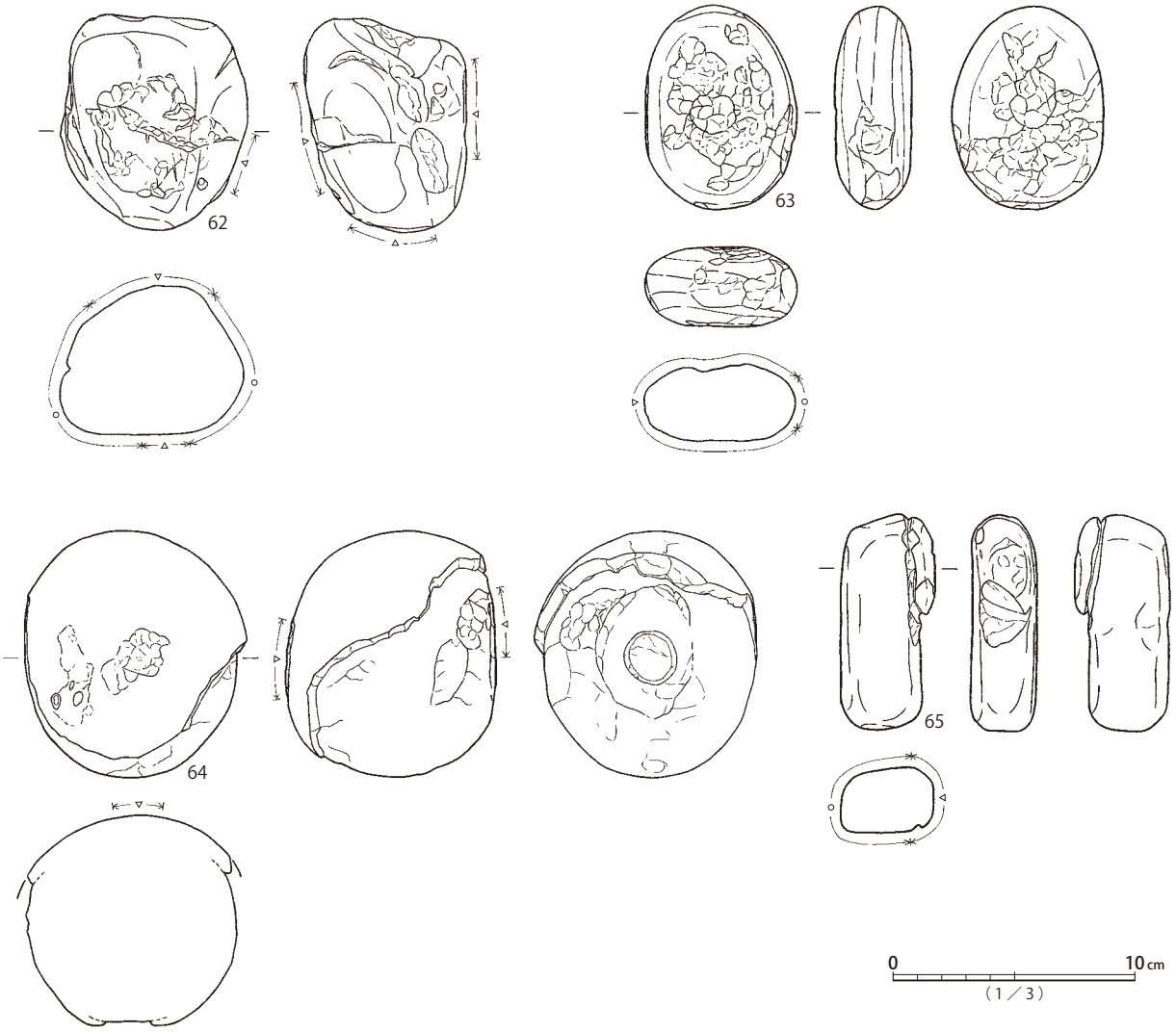
第289図　SI1046遺物（3）

SI1046



第290図　SI1046遺物（4）

SI1046



第291図　SI1046遺物（5）

遺物は、炉の北西端に甕1・2が床面に接して出土している。在来的な口頸部段を持つ甕1は一見、弥生時代後期の型式にも類似するが、器高に対する口頸部高の比率が小さく、また、胴部最大径が口径を上回る点で、弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。並んで出土した、甕2についても同様と考えられる。その他、チャート製礫石器8、砂質頁岩製礫石器9、輝石安山岩製礫石器10、軽石11が出土している。

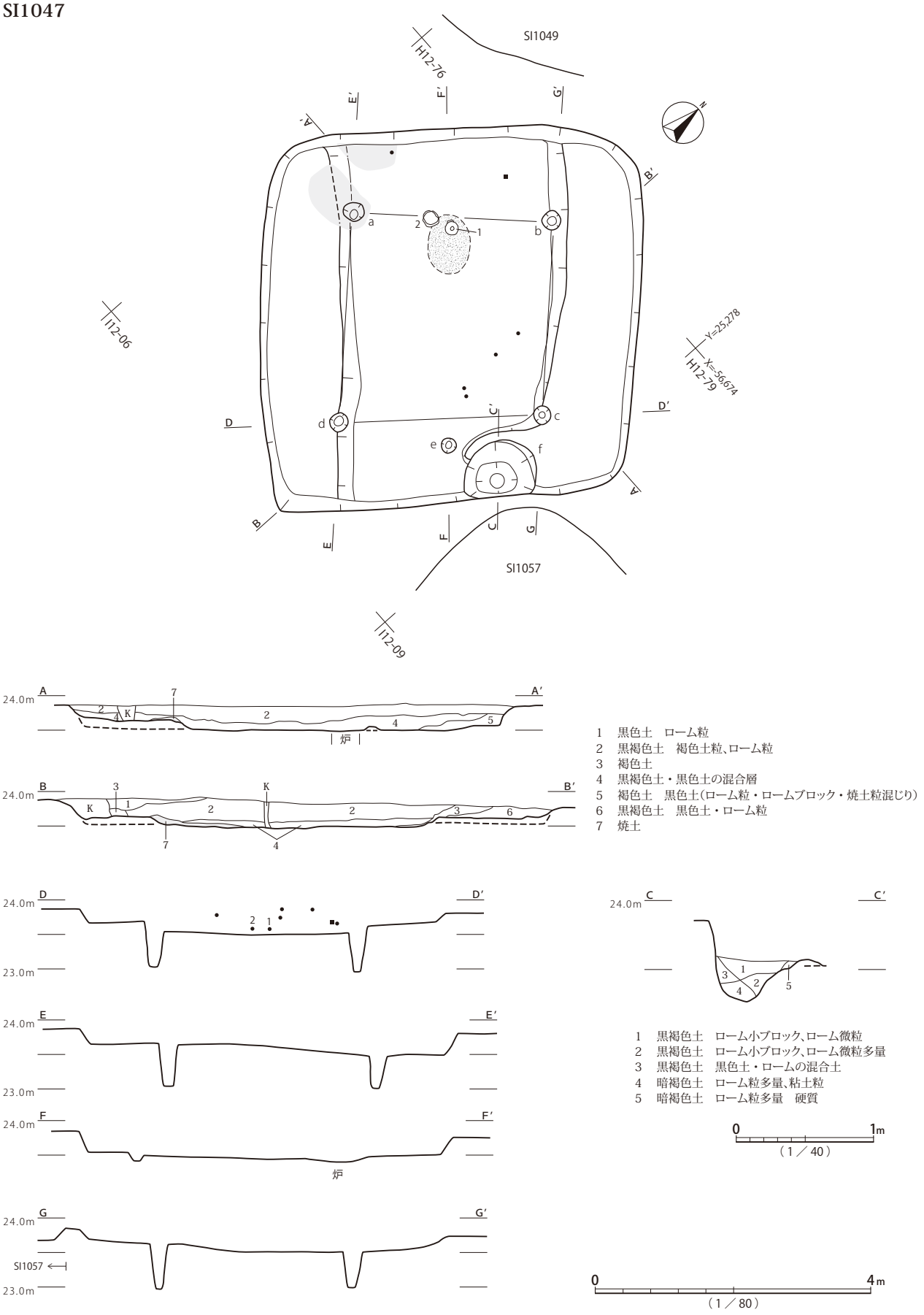
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に位置づけられる。

SI1048・SI1049（第294・295・296・297図、図版66・67・161・187・227・228・299・309・335）

6.6×7.5m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1048と、（2.2）×4.6m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1049である。SI1048南東部とSI1049北西部が重複する。SI1048がSI1049覆土を掘り込んでいる。

SI1049は北西側の大部分をSI1048に破壊されており、主柱穴f・g、ハシゴ穴hが検出される程度である。本来、炉は北西側に存在したと思われる。床面周溝は認められない。

SI1047

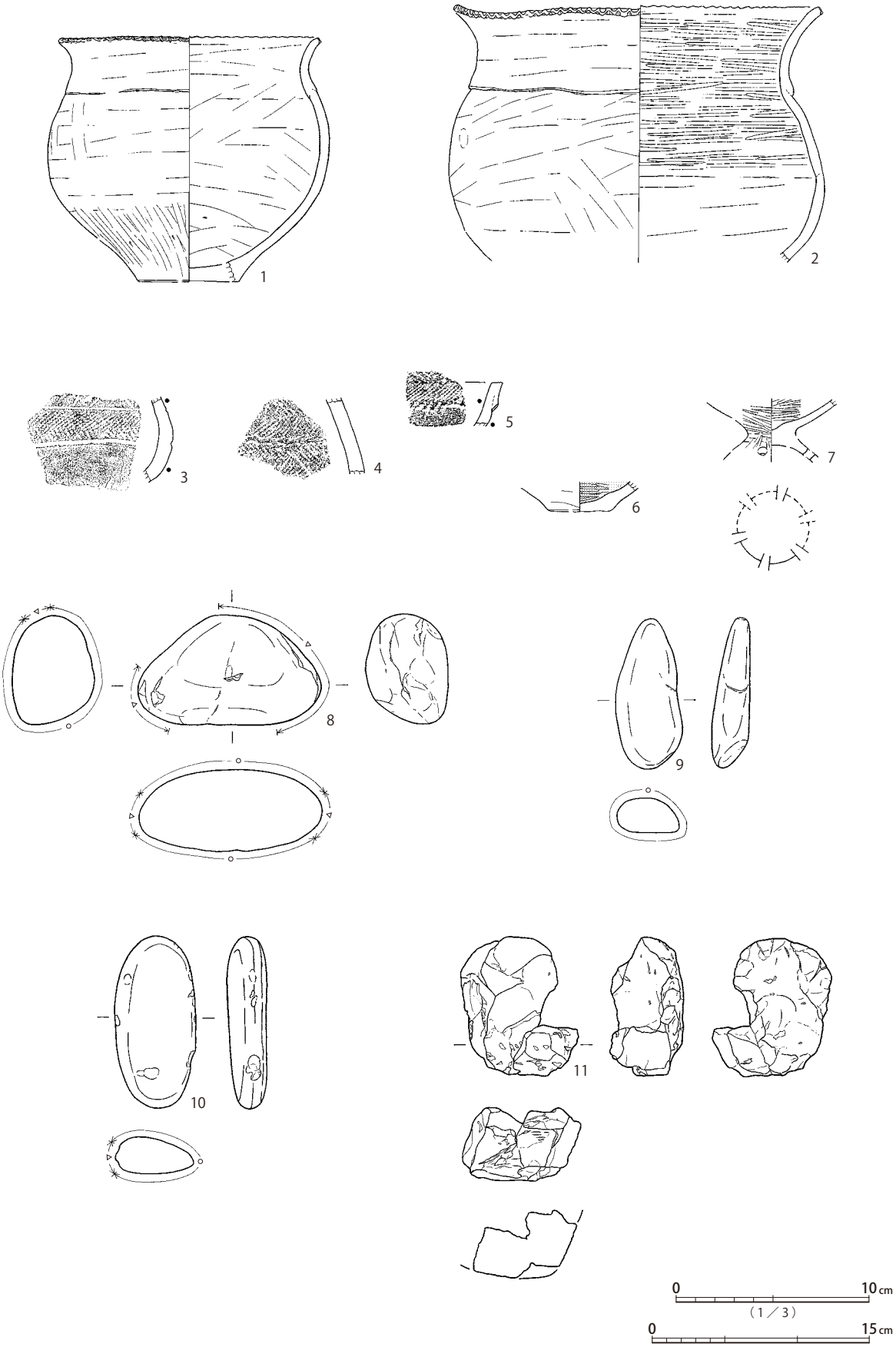


1　黒色土　ローム粒
2　黒褐色土　褐色土粒、ローム粒
3　褐色土
4　黒褐色土・黒色土の混合層
5　褐色土　黒色土（ローム粒・ロームブロック・焼土粒混じり）
6　黒褐色土　黒色土・ローム粒
7　焼土

1　黒褐色土　ローム小ブロック、ローム微粒
2　黒褐色土　ローム小ブロック、ローム微粒多量
3　黒褐色土　黒色土・ロームの混合土
4　暗褐色土　ローム粒多量、粘土粒
5　暗褐色土　ローム粒多量　硬質

第292図　SI1047遺構

SI1047



第293図　SI1047遺物

覆土は、壁際にロームの多く含む褐色土と焼土集中部が検出されている。廃絶時に火を受けた可能性が高い。上層は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面直上に土器が少量出土している。口頸部段を持つ甕1、単節縄文の施された壺4、網目状撚糸文の施された壺5、壺底部6・7、縄文施文の鉢8～10などが検出されている。出土位置が明確なのは甕1、壺6・7、底部片3で、他は覆土一括取り上げ資料である。特徴となる部位が乏しいため、幅をとって弥生時代後期に位置付けておきたい。

本遺構は、切り合い関係及び平面形、出土遺物の様相から、弥生時代後期の所産と思われる。

SI1048は、主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。北西辺が弥生時代後期前半のSI1045と接するように重複し、本遺構が切り込む。北西辺から東角にかけて床面までの撹乱を部分的に受けている。竪穴中心から若干北に寄った位置に不整円形の炉が設けられる。南西外周には、概ね柱筋に沿う形で高さ10～15cm程度のベッド状遺構がL字形に配置されている。床面周溝はベッド状遺構を含め全周する。

覆土は、西側外周下層に焼土層が検出され、廃絶時に火を受けた可能性が高い。また、ベッド状遺構屈折部近くには粘土の集中が認められる。壁際及び最下層のロームの多い褐色土層から上層は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面直上から下層にかけて土器が出土している。臼井南式の甕11と、印旛沼・手賀沼周辺地域の過渡的な古式土師器甕12は、非在地的な形態を示す。11は床面近くで検出されているが、混入品と見られる。甕体部片17は破断面が摩滅しており、皿のように転用された可能性がある。受口状口縁甕13～15、タタキ甕18、輪台技法底部19～21・30、櫛描文壺23・28・29、無文直口壺26・27、口縁端部内面に平坦面を持ち小さく外反させる小型鉢31、東海系高杯33～36・38は、東海以西の技法及び形態的特徴を示す。甕16の肩部に施されたヘラ描き斜格子文も東海西部から近江地域の影響を受けた可能性が考えられる。類品がSI1204にも見られる。無文小型高杯39は、蛍光X線分析の結果、水銀朱によって赤彩されたことが判明しており、TJ地区SI0125出土の、水銀朱が付着した石杵（第175図32）との関連性も推定しうる（第3章第2節）。出土土器の多くは、弥生時代終末期中葉、中台1-2式～2-1式に位置づけられる。その他、鉢形の小型土器40、垂飾（錘）状土製品41、軽石製砥石42、軽石43・44、砂岩製礫石器45が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期中葉の所産と考えられる。

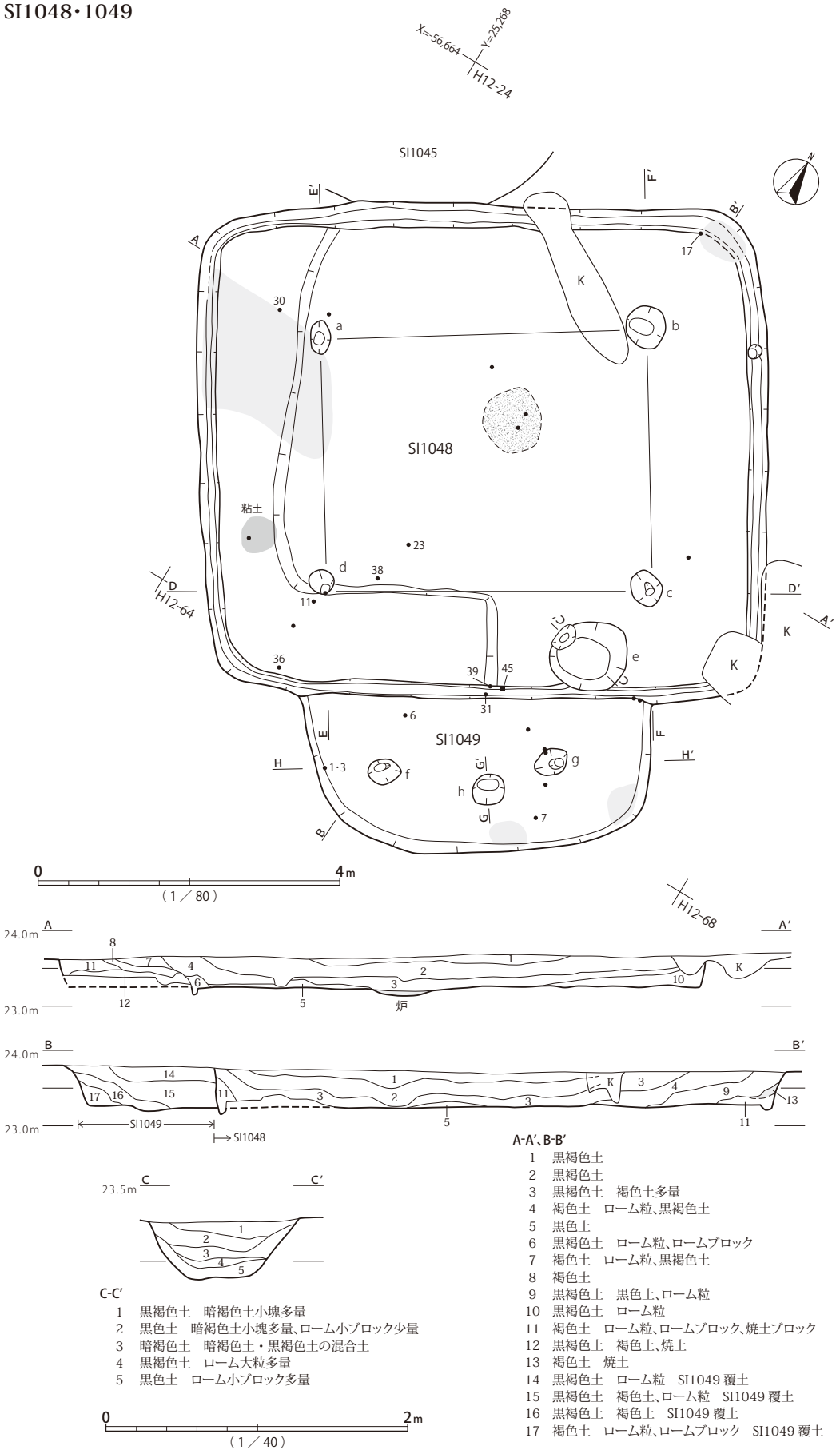
重複する2棟の竪穴建物は、弥生時代後期のSI1049→終末期中葉のSI1048の順に構築されたと想定される。

SI1050（第298・299図、図版67・162・228・335）

5.2×5.1m、深さ35cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。南東角が時期不明の土坑SK80と重複し、床面まで破壊を受ける。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。南辺やや西寄りには壇状の高まりに挟まれ、壁面を掘り込む穴fがあり、出入口施設とも考えられる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は壇状部を除いて全周する。

覆土は、焼土・炭化材は検出されておらず、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、床面から上層にかけて、土器が少量出土している。タタキ甕1は口縁端部にハケメ工具

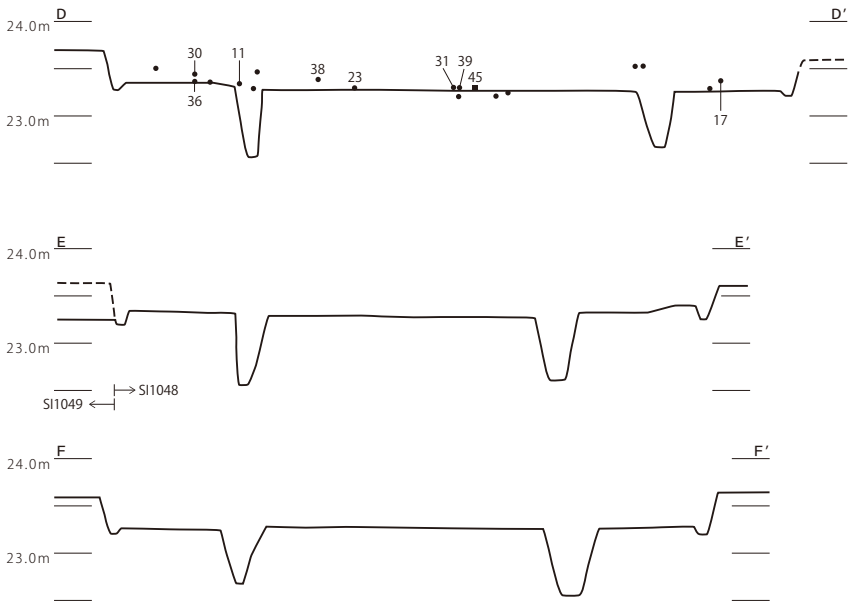


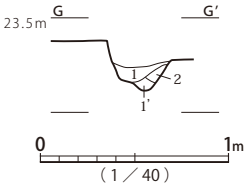
C-C′
1 黒褐色土 暗褐色土小塊多量
2 黒色土 暗褐色土小塊多量、ローム小ブロック少量
3 暗褐色土 暗褐色土・黒褐色土の混合土
4 黒褐色土 ローム大粒多量
5 黒色土 ローム小ブロック多量

A-A′、B-B′
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土 褐色土多量
4 褐色土 ローム粒、黒褐色土
5 黒色土
6 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック
7 褐色土 ローム粒、黒褐色土
8 褐色土
9 黒褐色土 黒色土、ローム粒
10 黒褐色土 ローム粒
11 褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土ブロック
12 黒褐色土 褐色土、焼土
13 褐色土 焼土
14 黒褐色土 ローム粒 SI1049 覆土
15 黒褐色土 褐色土、ローム粒 SI1049 覆土
16 黒褐色土 褐色土 SI1049 覆土
17 褐色土 ローム粒、ロームブロック SI1049 覆土

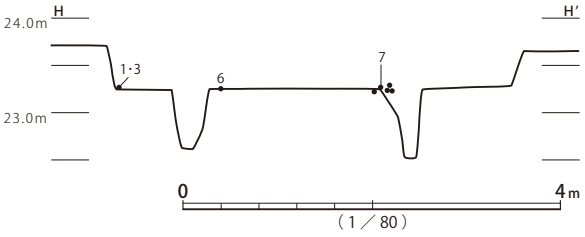
第294図 SI1048・SI1049遺構(1)

SI1048・1049

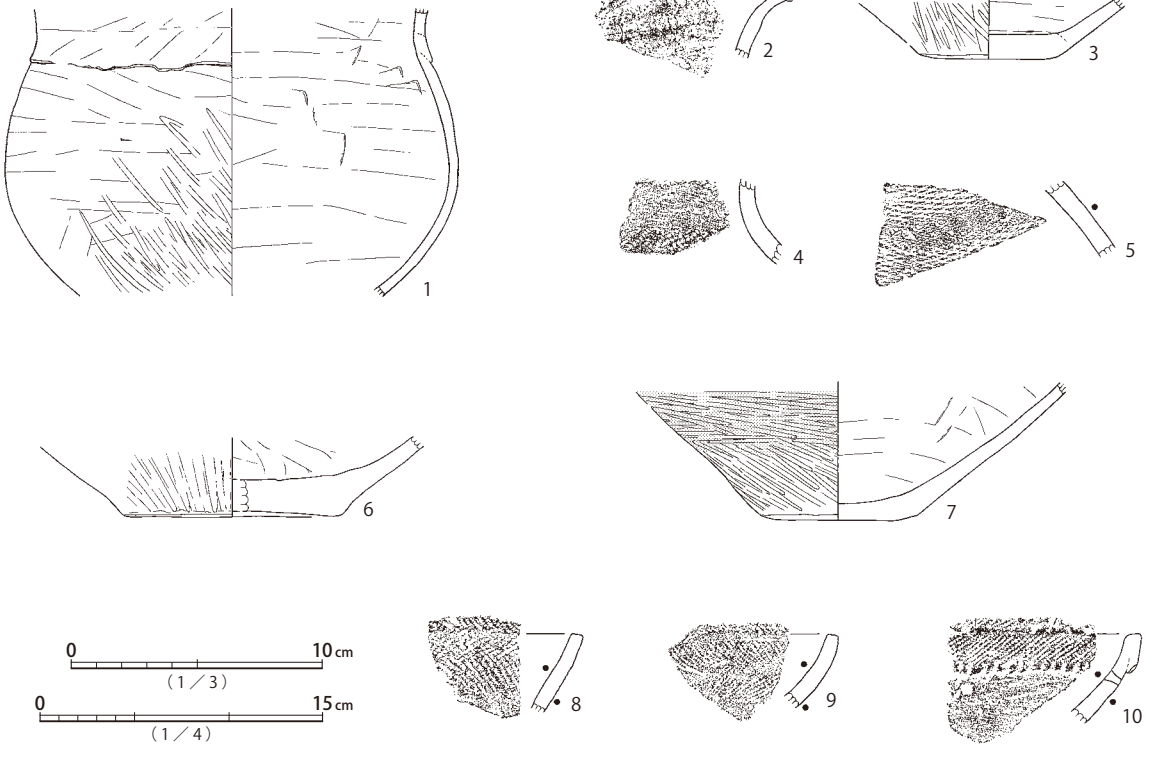




1　黒褐色土　ローム微粒少量
1′　黒褐色土　1層に黒色土粒
2　暗褐色土　ローム大粒多量

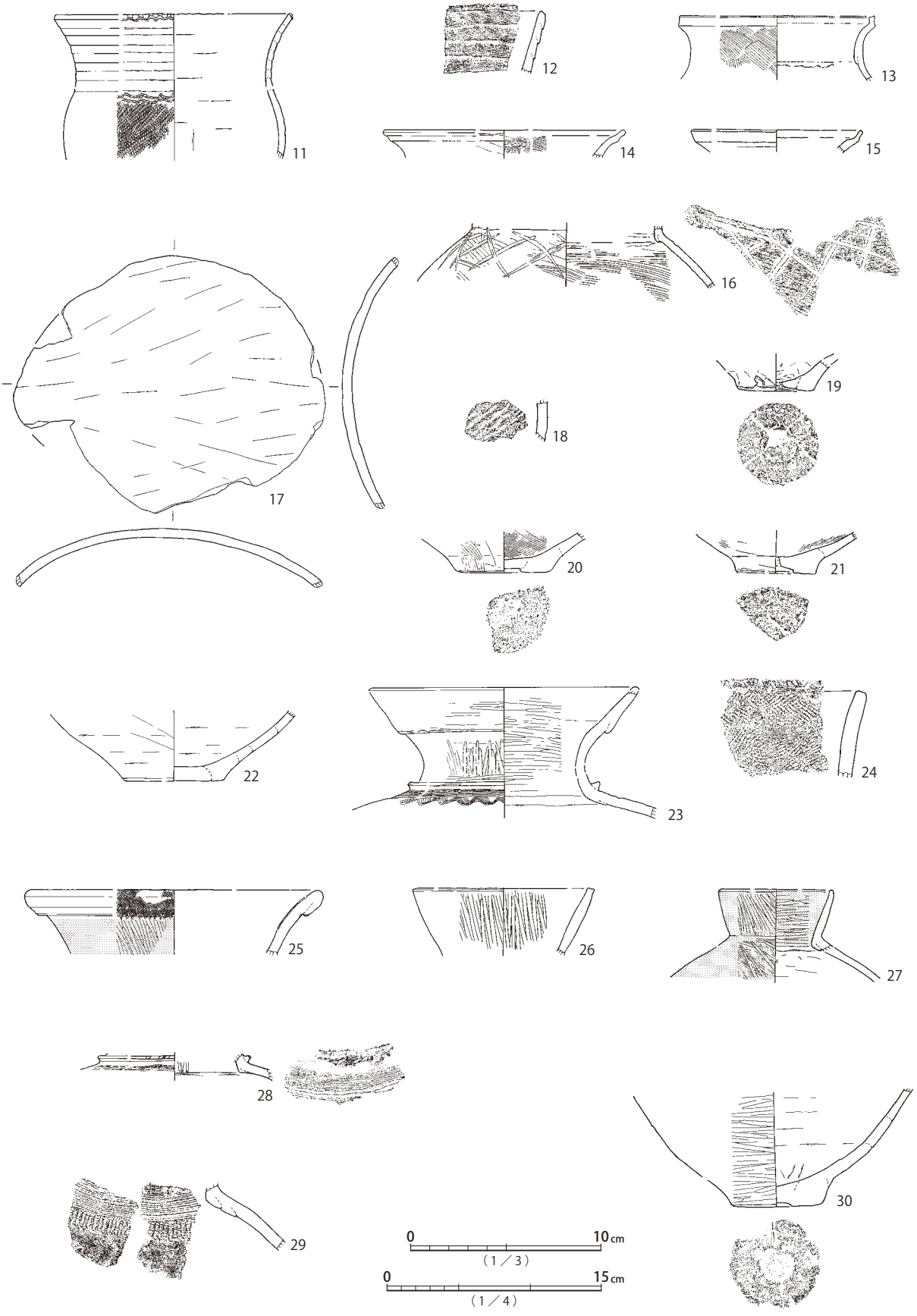


SI1049



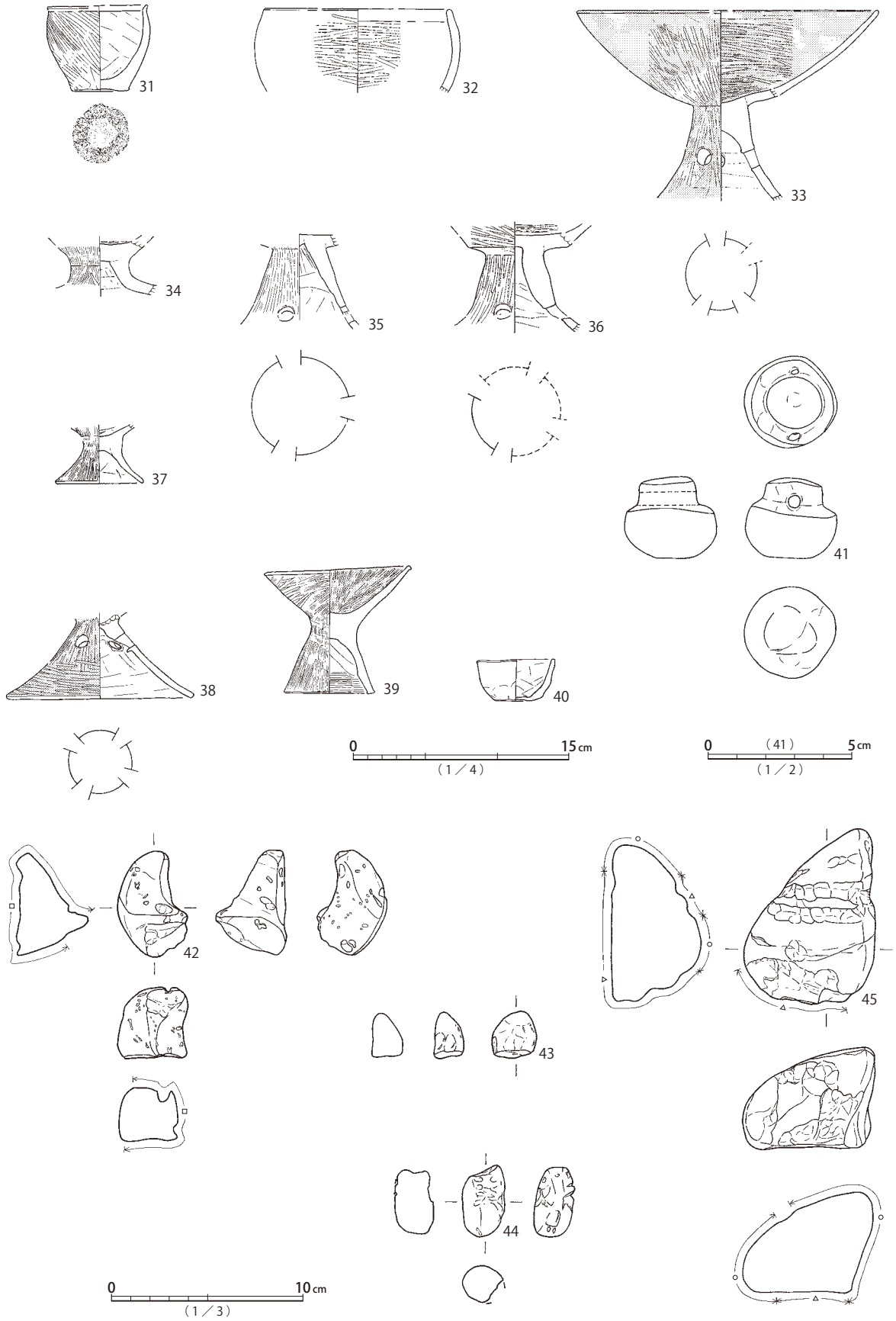
第295図　SI1048・SI1049遺構(2)、SI1049遺物

SI1048



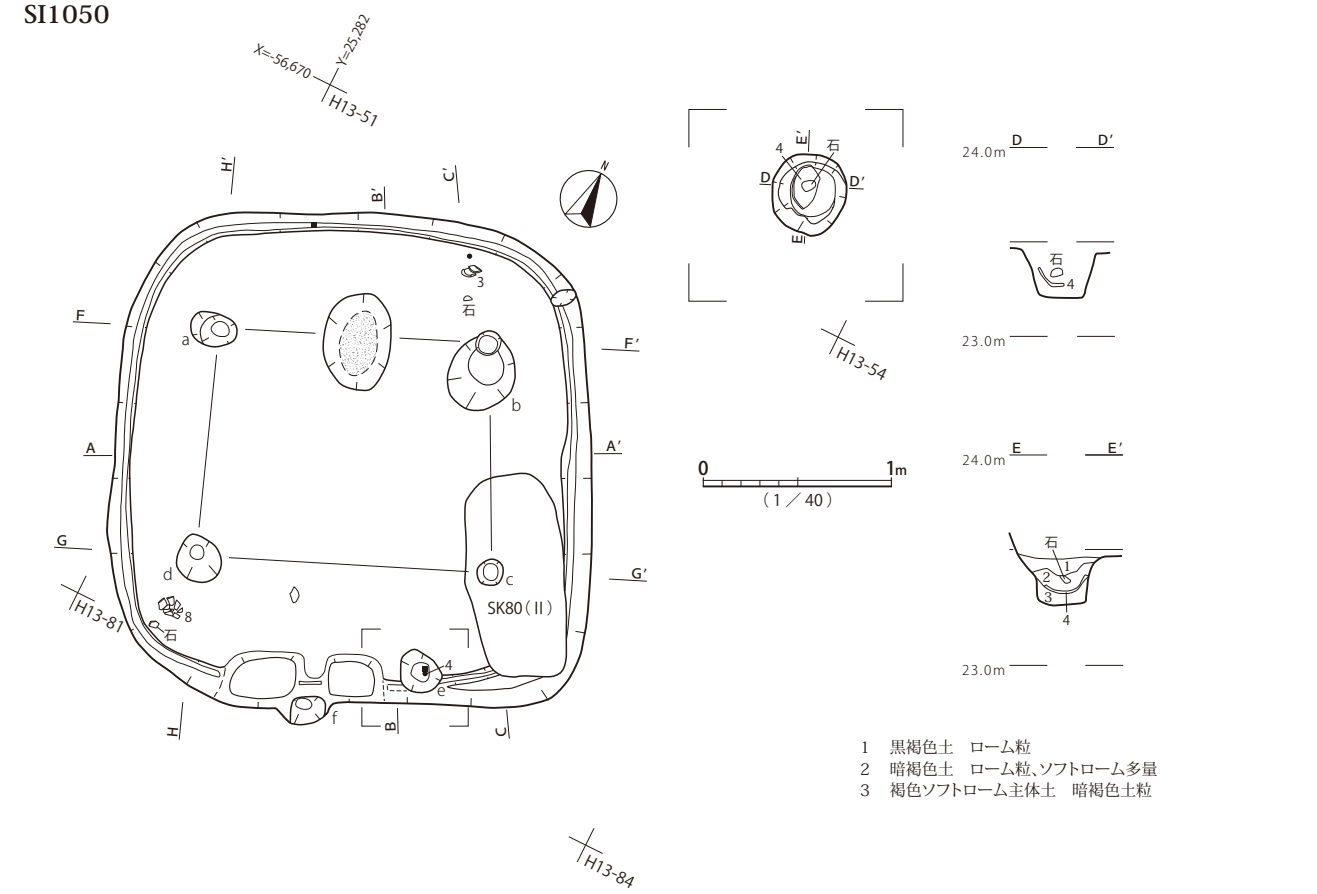
第296図　SI1048遺物（1）

SI1048



第297図　SI1048遺物（２）

SI1050

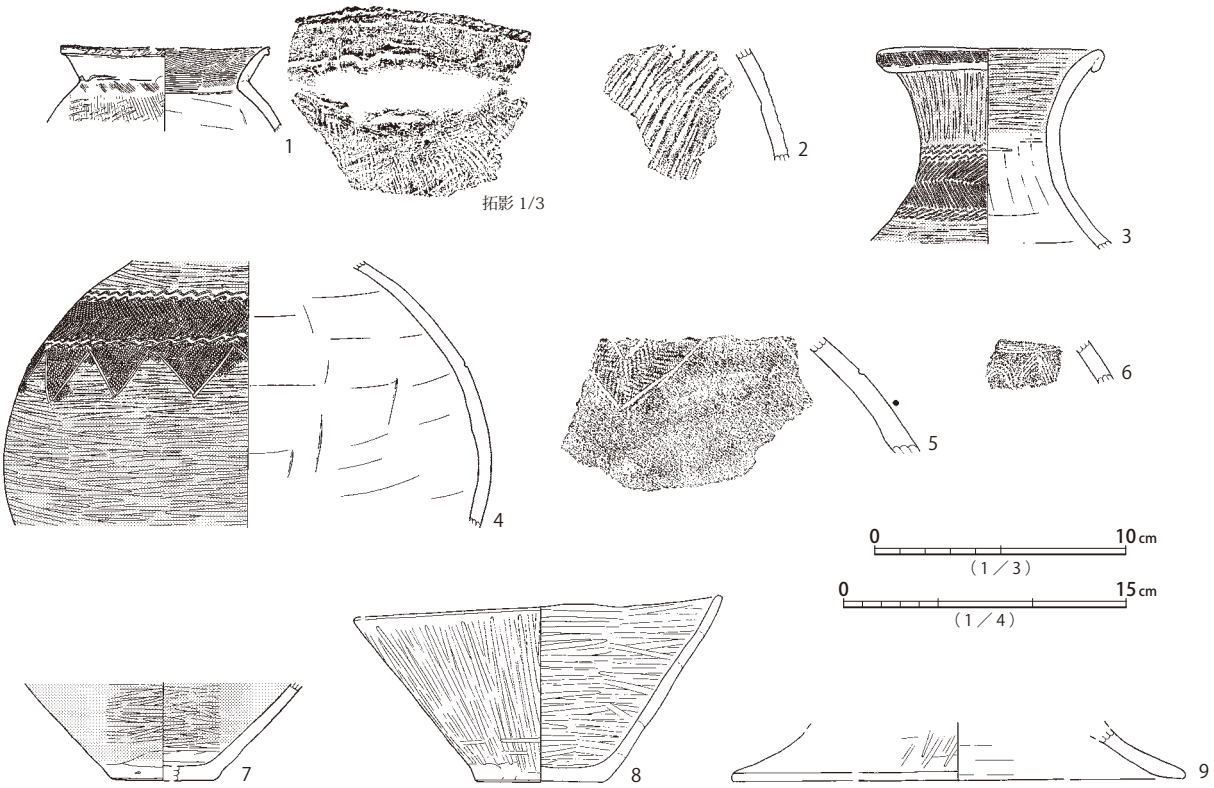


1　黒褐色土　ローム粒
2　暗褐色土　ローム粒、ソフトローム多量
3　褐色ソフトローム主体土　暗褐色土粒

1　黒褐色土
2　黒褐色土　ローム粒、褐色土ブロック
3　黒褐色土
4　黒色土　黒褐色土
5　黒色土　黒褐色土、褐色土ブロック
6　黒褐色土　黒色土
7　暗褐色土　黒褐色土
8　褐色土　黒色土
9　褐色土
10　黒褐色土　褐色土
11　暗褐色土
12　暗褐色土
13　黒褐色土　暗褐色土小塊多量　13 ～ 20 層 SK80(Ⅱ)覆土
14　黒褐色土　暗褐色土小塊多量、ローム粒、ソフトローム粒
15　黒褐色土　暗褐色土小塊・黒色土粒各多量
16　黒褐色土　暗褐色土小塊多量、ローム微粒、黒色土粒
17　黒色土　暗褐色土粒多量、ローム微粒
18　暗褐色土　ローム・黒褐色土・暗褐色土粒の混合土
19　暗褐色土　ローム粒・黒褐色土の混合土　柱痕か?
20　明褐色土　ソフトローム

第298図　SI1050遺構

SI1050



第299図　SI1050遺物

によると見られる斜列点文が加えられている。タタキ甕1・2、櫛描文壺6はいずれも覆土一括取り上げ資料であり、混入品と見られる。結節文区画の壺3は覆土上層から、壺4は貯蔵穴内下層から出土している。無文素口縁の鉢8は南西角床面直上からまとまって出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

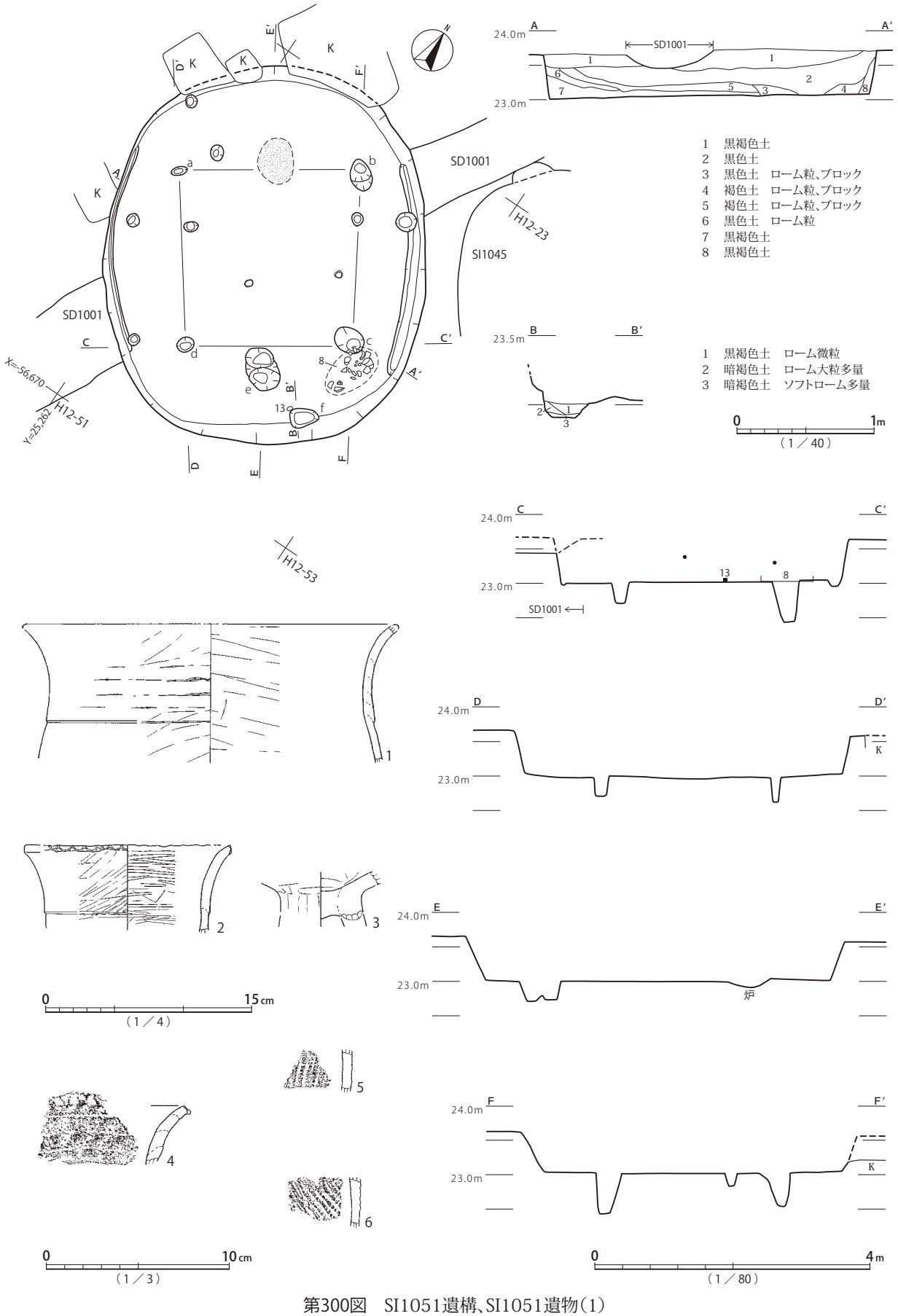
SI1051（第300・301図、図版67・161・228・309）

5.5×4.7m、深さ65cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。弥生時代後期前半竪穴建物跡SI1045が東側に同時存在不能な距離で近接する。北西部をイモ穴列により撹乱されているほか、中央部をSD1001が横切り、覆土上位が掘削されている。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は南西・北東の両長辺に部分的に確認されている。

覆土は、焼土・炭化材の検出は記録されていない。下層に褐色土主体の初期堆積と見られる層があり、上層は黒褐色から黒色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

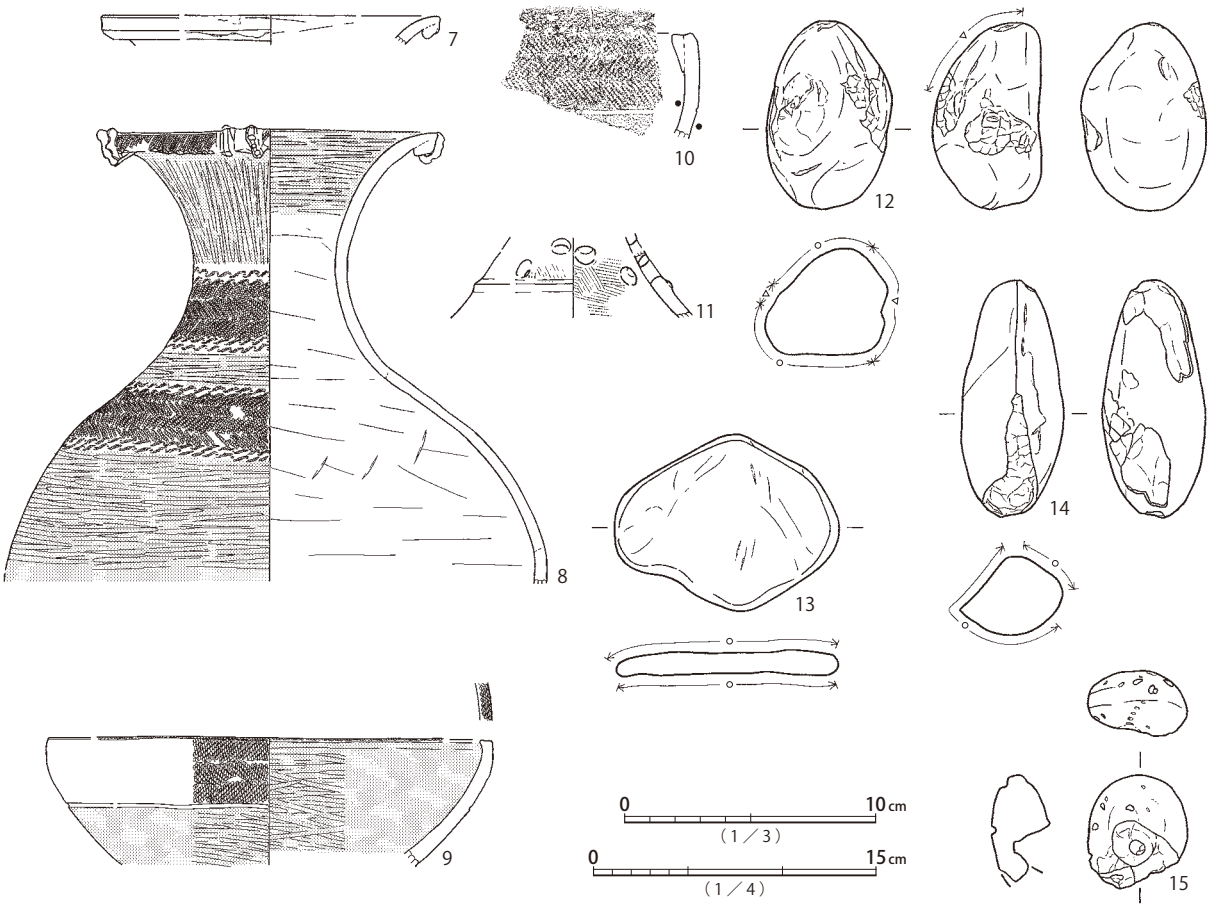
遺物は、土器と石製品が少量出土している。在来的な甕1・2・4、壺8、沈線区画の文様を持つ鉢9、椀10のほか、非在地的なタタキ甕5・6、器台11が出土している。結節文区画の壺8のみが床面直上検出で、他は覆土一括取り上げ資料である。壺8は弥生時代後期後半、山田橋1式に位置づけられる。その他、チャート製礫石器12、砂岩製砥石13、橄欖石玄武岩製礫石器14、軽石製凹石15が出土している。また、瀬戸・美濃系擂鉢（古瀬戸後期様式Ⅳ～大窯期、48.4g）の小片が混入している。

SI1051



第300図　SI1051遺構、SI1051遺物(1)

SI1051



第301図　SI1051遺物（2）

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1052（第 302・303・304 図、図版 67・162・229・309・310）

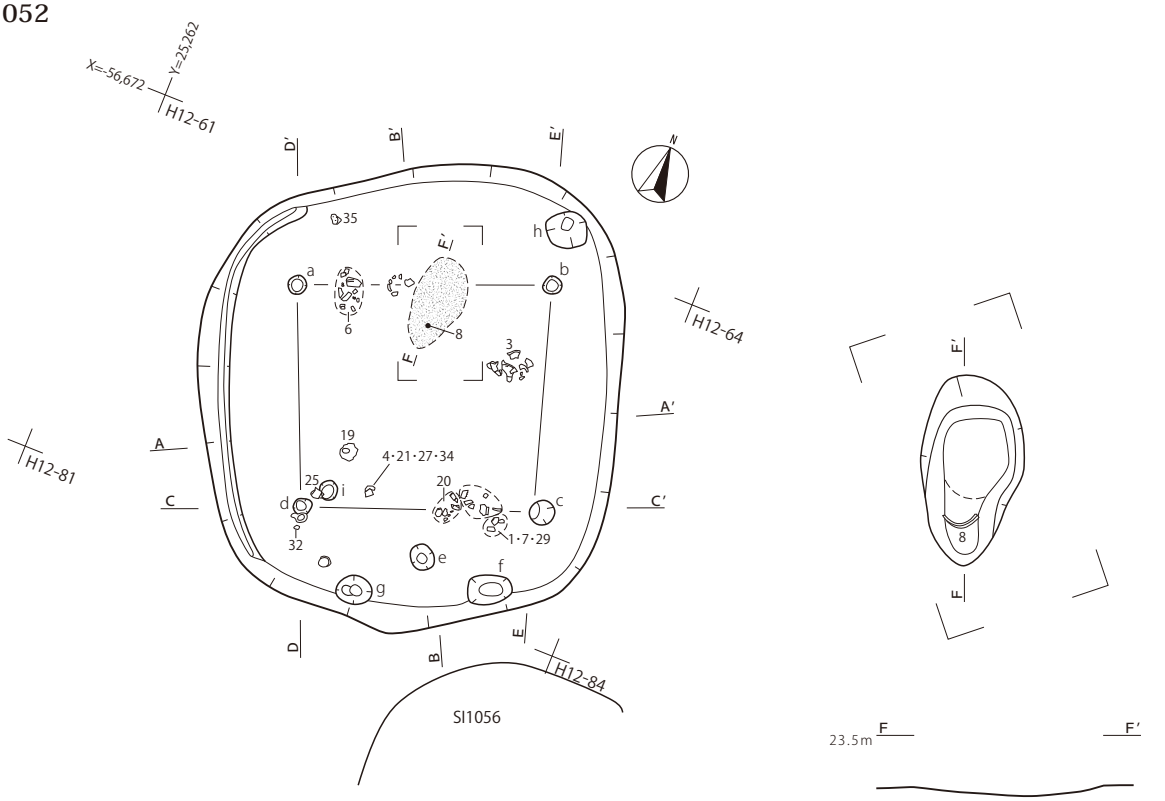
5.0 × 4.5m、深さ 50cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。南東側にSI1056 と同時存在できない距離で近接する。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴の可能性があるf・g・hが検出されている。中心軸からやや東寄り、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられ、竪穴中心側に土器8が立てて埋置されている。床面周溝は西辺のみに確認されている。

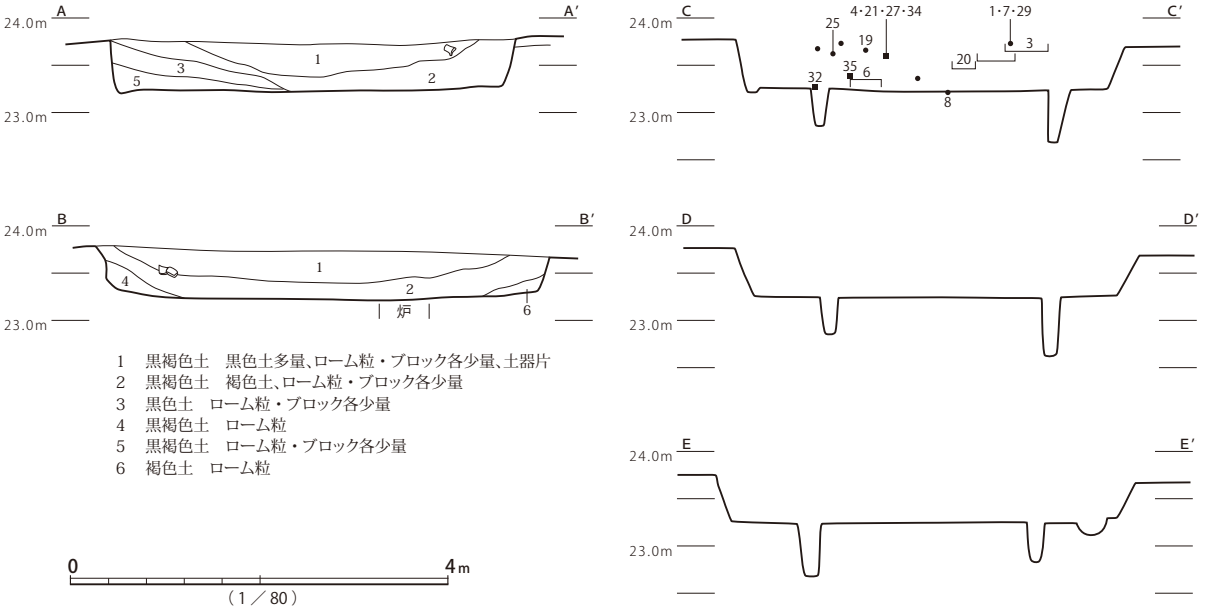
覆土は、壁際に初期堆積の褐色土が目立つほかは、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、土器片が比較的多く見られ、床面から最下層と、上層とに分かれて検出されている。位置の確定できる下位出土資料は、炉内に置かれた輪積痕の甕8と下層出土の甕6である。上層からは、外面肥厚口縁と口頸部段を持つ甕3、椀21、高杯もしくは鉢25等が出土している。上層資料の主体は弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられ、下層資料も大きくは異ならないと思われる。その他、軽石製砥石32・33、軽石34、溶結凝灰岩製礫石器35が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

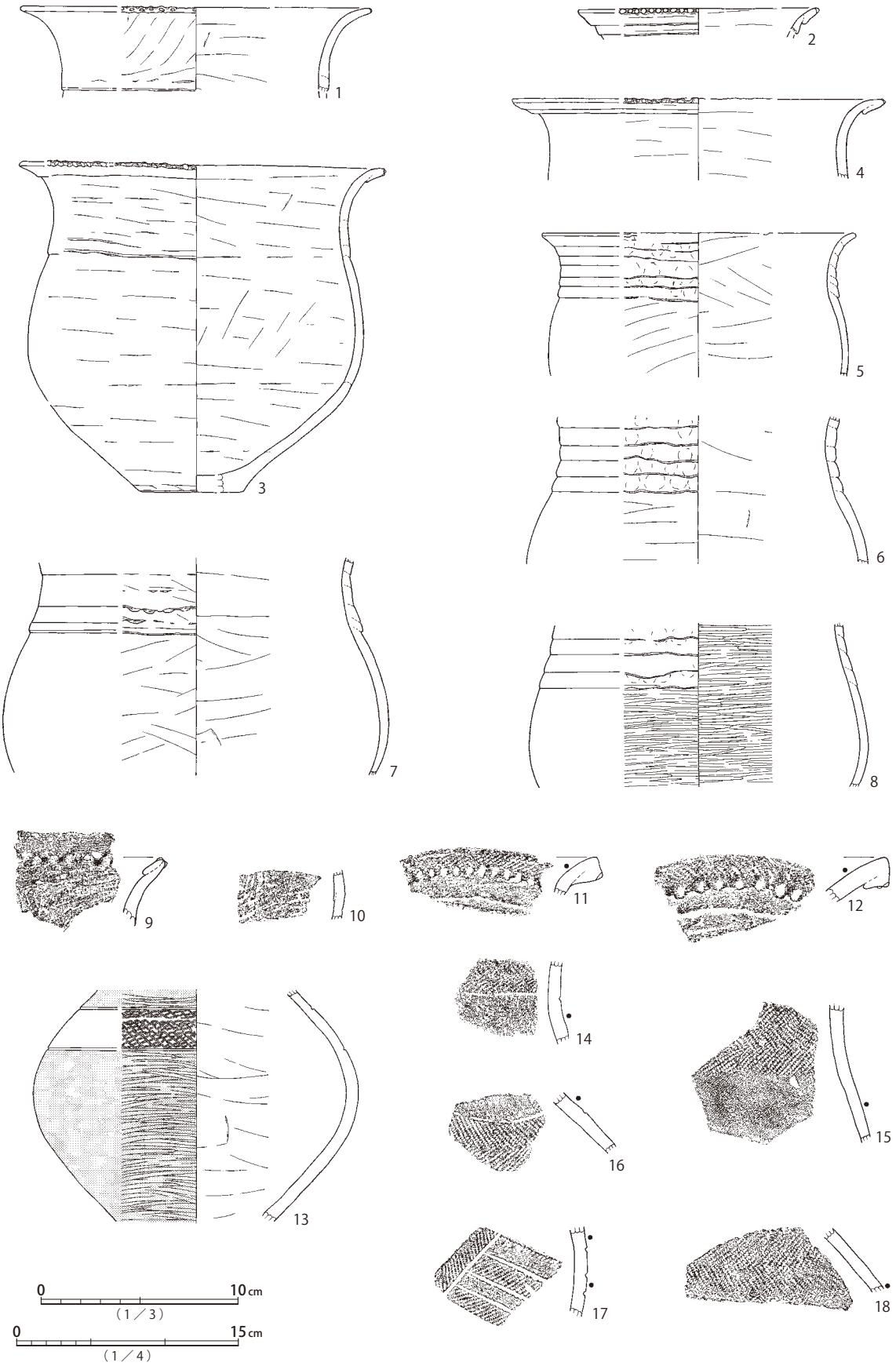
SI1052





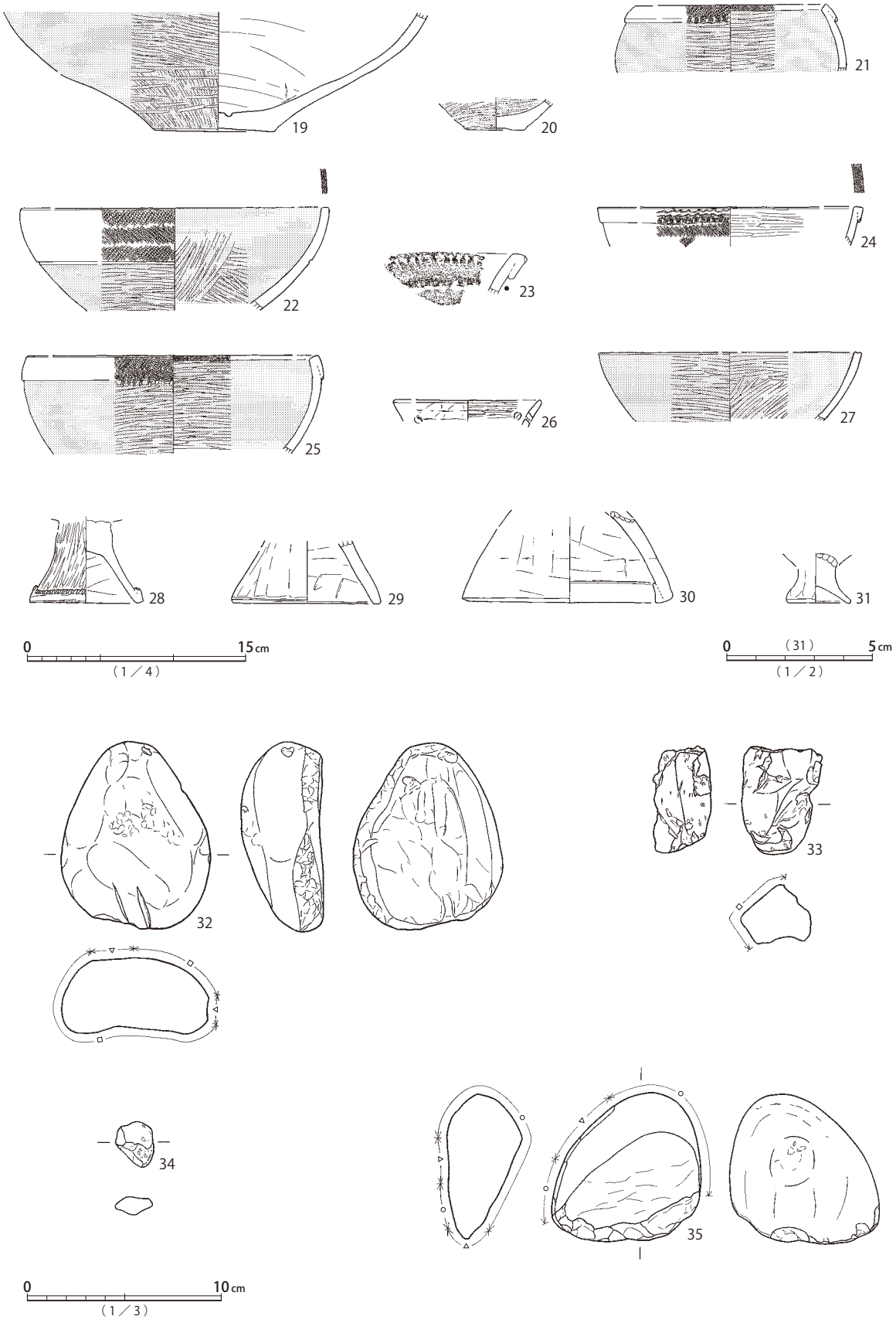
第302図 SI1052遺構

SI1052



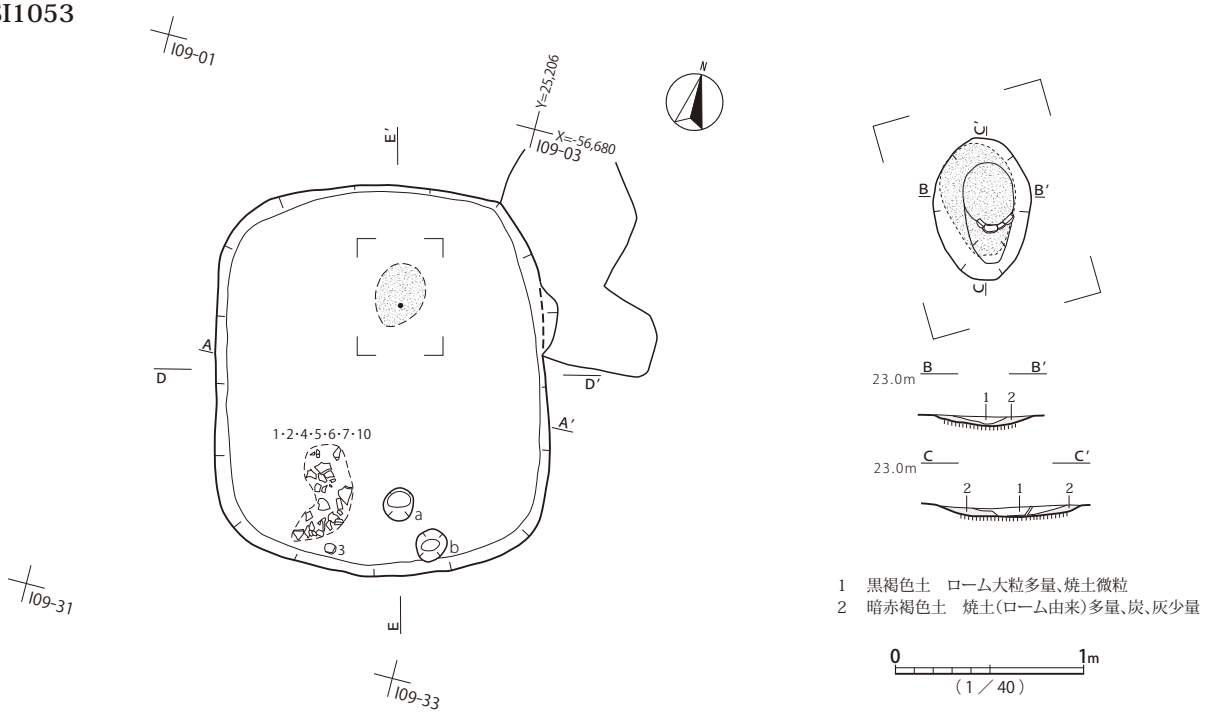
第303図　SI1052遺物（1）

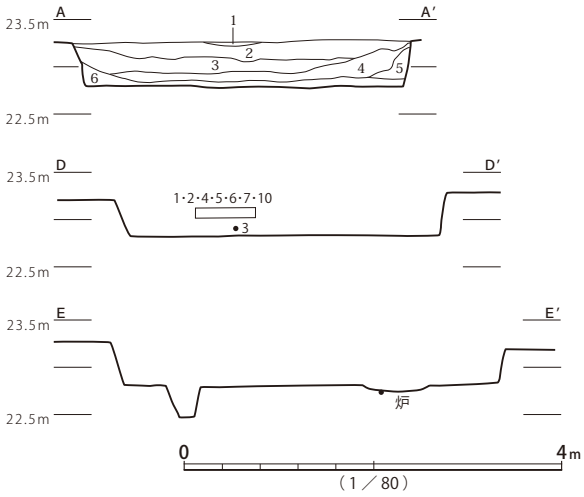
SI1052



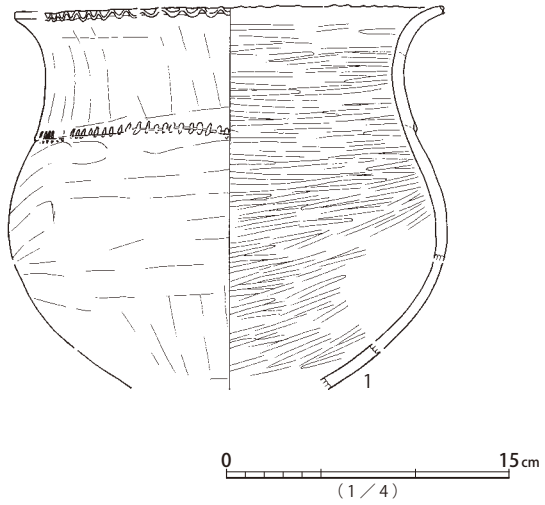
第304図　SI1052遺物（２）

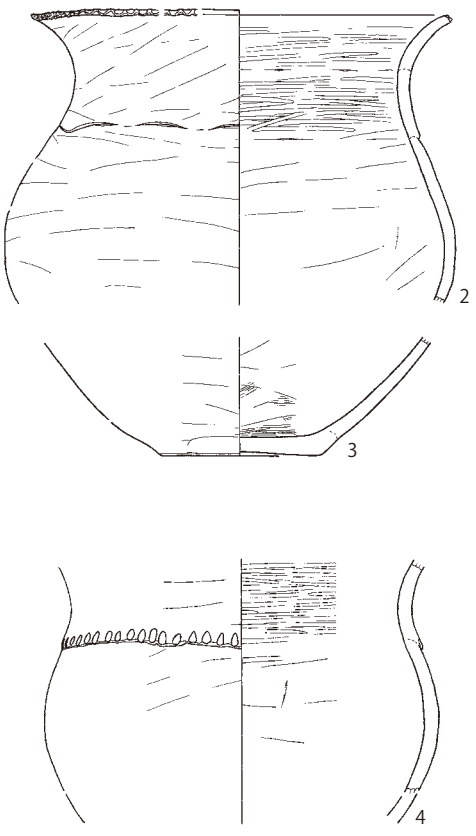
SI1053





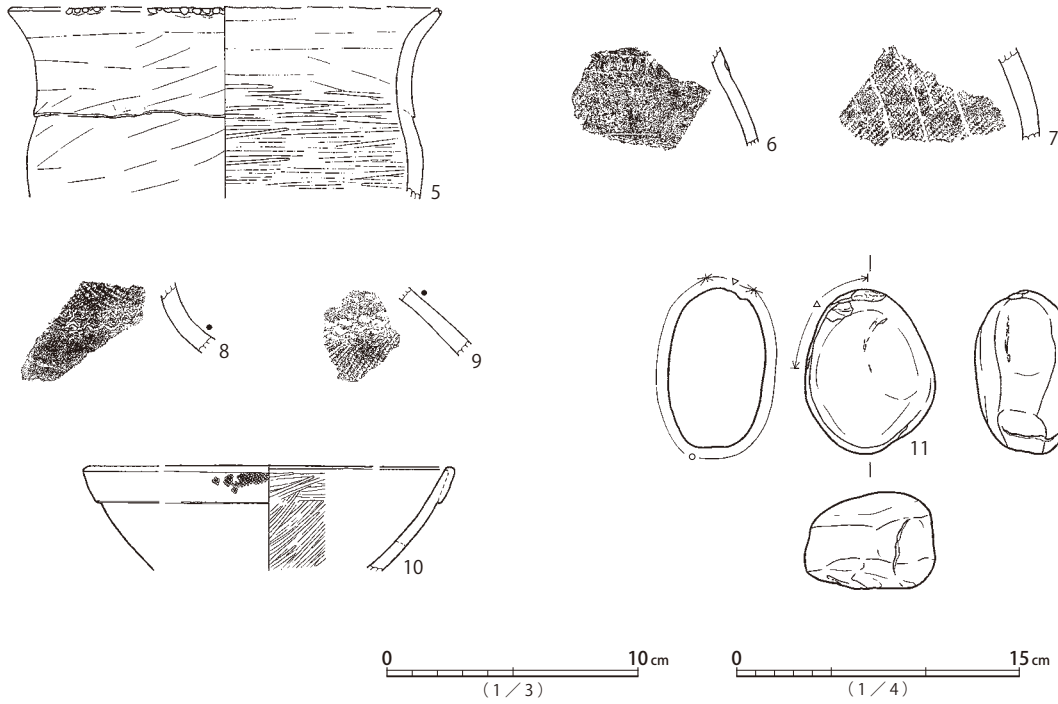
1 ロームブロック混入
2 黒褐色土
3 黒色土
4 褐色土
5 褐色土　ローム粒
6 褐色土　ローム粒





第305図　SI1053遺構、SI1053遺物(1)

SI1053



第306図　SI1053遺物（2）

SI1053（第 305・306 図、図版 67・162・230・310）

4.2×3.5m、深さ 45cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。北東部が撹乱の可能性がある落ち込みと重複する。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されている。中心からやや北東に寄った位置に楕円形の炉が設けられ、土器片が埋置されている。床面周溝は確認されていない。

覆土は、壁際から最下層にかけてロームの多い褐色土が見られ、以上は黒褐色主体の漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の検出は記録されていない。

遺物は、中層にまとまって土器片が出土している。口縁端部交互押捺の甕1・2・5、段部押捺のある甕4・6、幾何学文壺7、肥厚口縁の鉢10がそこに含まれ、覆土一括取り上げ資料の結節文区画壺8・9を合わせ、概ね弥生時代後期後半、山田橋1式の範疇と思われる。その他、チャート製礫石器11が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定できる。

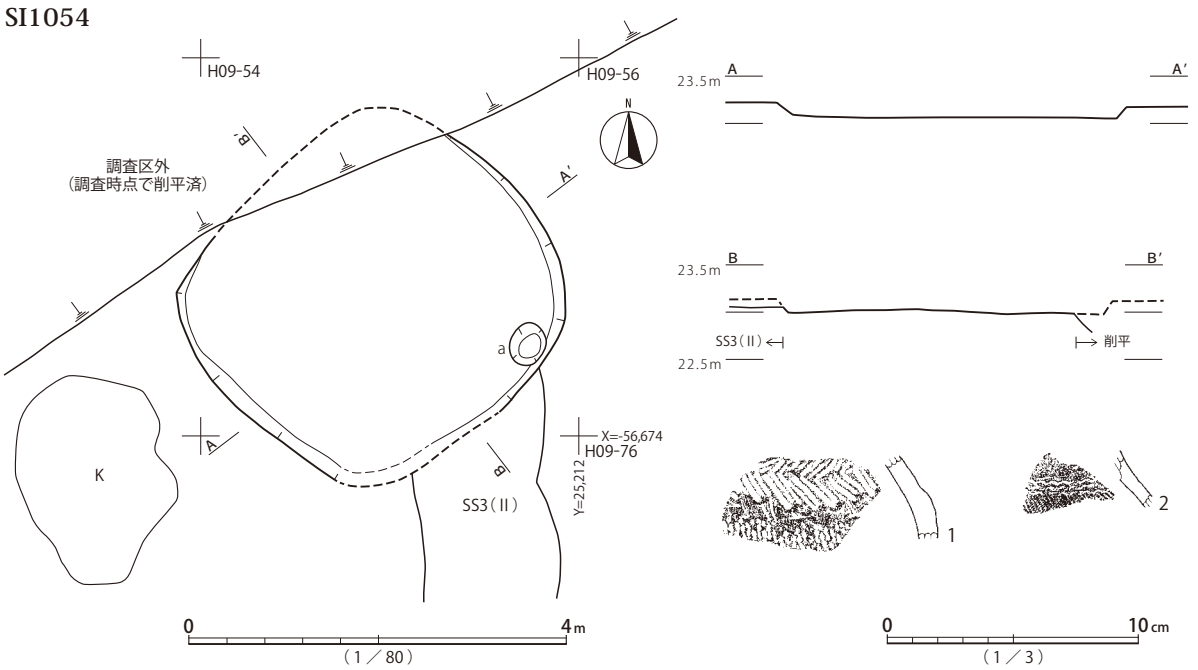
SI1054（第 307 図、図版 3・4・230）

3.4×3.7m、深さ 15cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。099地区北西縁辺に位置し、竪穴北側が削平を受けている。南東辺は弥生時代終末期方形墓SS3周溝と重複し、掘り込まれている。

覆土は、土層断面記録がなく詳細は不明である。

遺物は、壺1・2が得られた程度で僅少である。壺2は結節文区画の文様が施され、弥生時代後期後半以降の型式に位置づけられる。

本遺構は、切り合い関係と平面形に基づき、弥生時代後期後半から終末期の所産と推定する。



第307図　SI1054遺構・遺物

SI1055（第 308・309 図、図版 67・162・230・310・326・335）

5.7 × 5.2m、深さ 40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。南東側が弥生時代後期前半竪穴建物跡SI1074 と同時存在不能な距離で近接する。貯蔵穴eの外周にはわずかな高まりが検出されている。

覆土は、床面と壁際にロームを多く含む層が見られるが、上層にかけて黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。東側下層の6層に焼土を多く含む様相が認められるものの、平面図に残すほどの集中度ではなかったと見られ、焼土・炭化材の検出については他に記録されていない。

遺物は、床面レベルより若干高い位置から上層にかけて土器片が比較的多く検出されている。在来系の輪積痕装飾の甕1・2、結節文区画の壺5 ～ 7、頸部段と結節文区画の文様を持つ壺9、完形の素口縁鉢17、炉器台19等が出土している。また、貯蔵穴eの覆土中には、結節文区画の文様を持つ小型椀14が検出されている。いずれも概ね、弥生時代後期後半、山田橋2式古段階に位置づけられる。外来的なタタキ甕3や赤彩鉢15は混入品と見られる。その他、菫青石ホルンフェルス製礫石器20、軽石製砥石21、チャート製砥石22、珪質頁岩製礫石器23が出土している。また、小銅環（青銅製帯状小円環）24が床面上から検出されている。

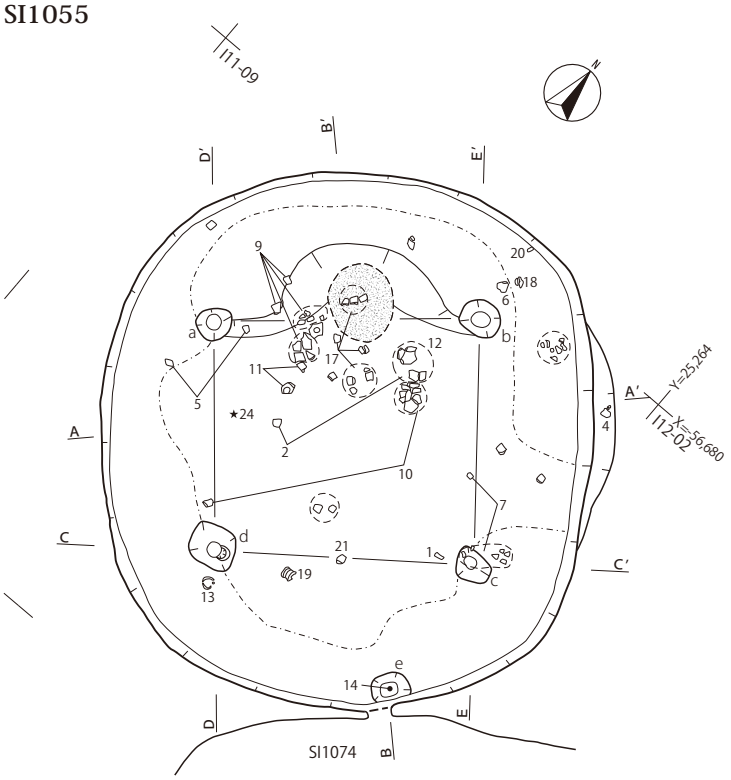
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

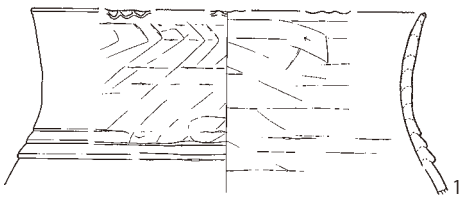
SI1056（第 310 図、図版 68・231・310）

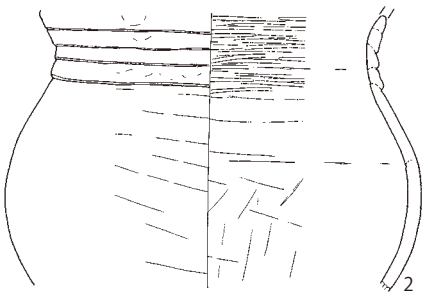
3.1 × 3.0 ？ m、深さ 15cm程度の不整円形竪穴建物跡である。弥生時代後期前半竪穴建物跡SI1052が北西側、同時存在不能な距離で近接する。東半部を大きく撹乱により床面まで破壊されている。主柱穴等は認められない。炉状に散布する焼土検出部は中心から北西の壁際に寄った位置に確認されている。床面周溝は検出されていない。

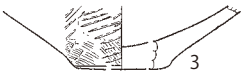
覆土は、掘方より 10cm程度高い位置で貼床状に締まった層が検出されているが、建て替えの有無については不明である。全体的に、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

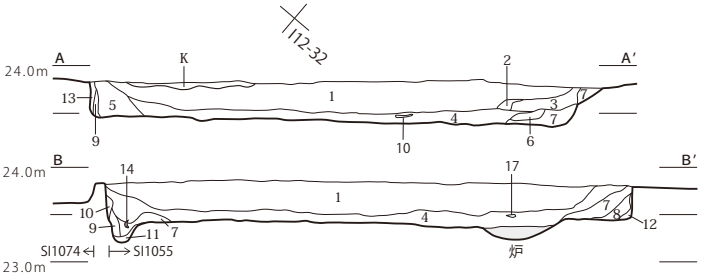
SI1055

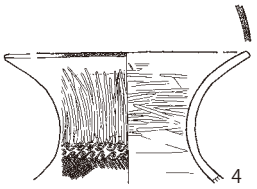






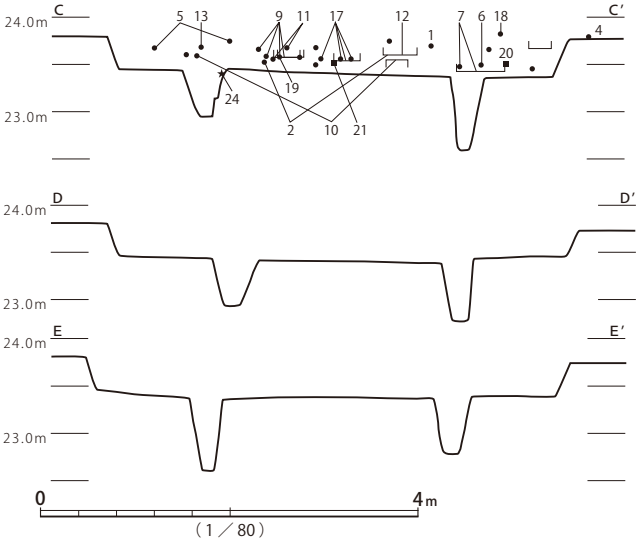




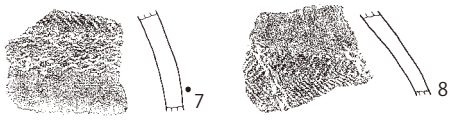


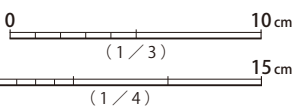
1 黒褐色土 ローム粒若干
2 暗黄褐色土 ロームブロック、褐色土
3 黒褐～黒色土 ローム粒若干
4 黒褐～褐色土 ローム粒多量
5 黒褐色土 黒色、ローム粒
6 黒褐色土 焼土多量
7 黒褐色土 暗褐色土多量
8 黒褐色土 褐色土少量
9 褐色土
10 暗黄褐色土
11 黒色土 ソフトローム粒
12 暗黄褐色土
13 暗褐色土 ローム粒





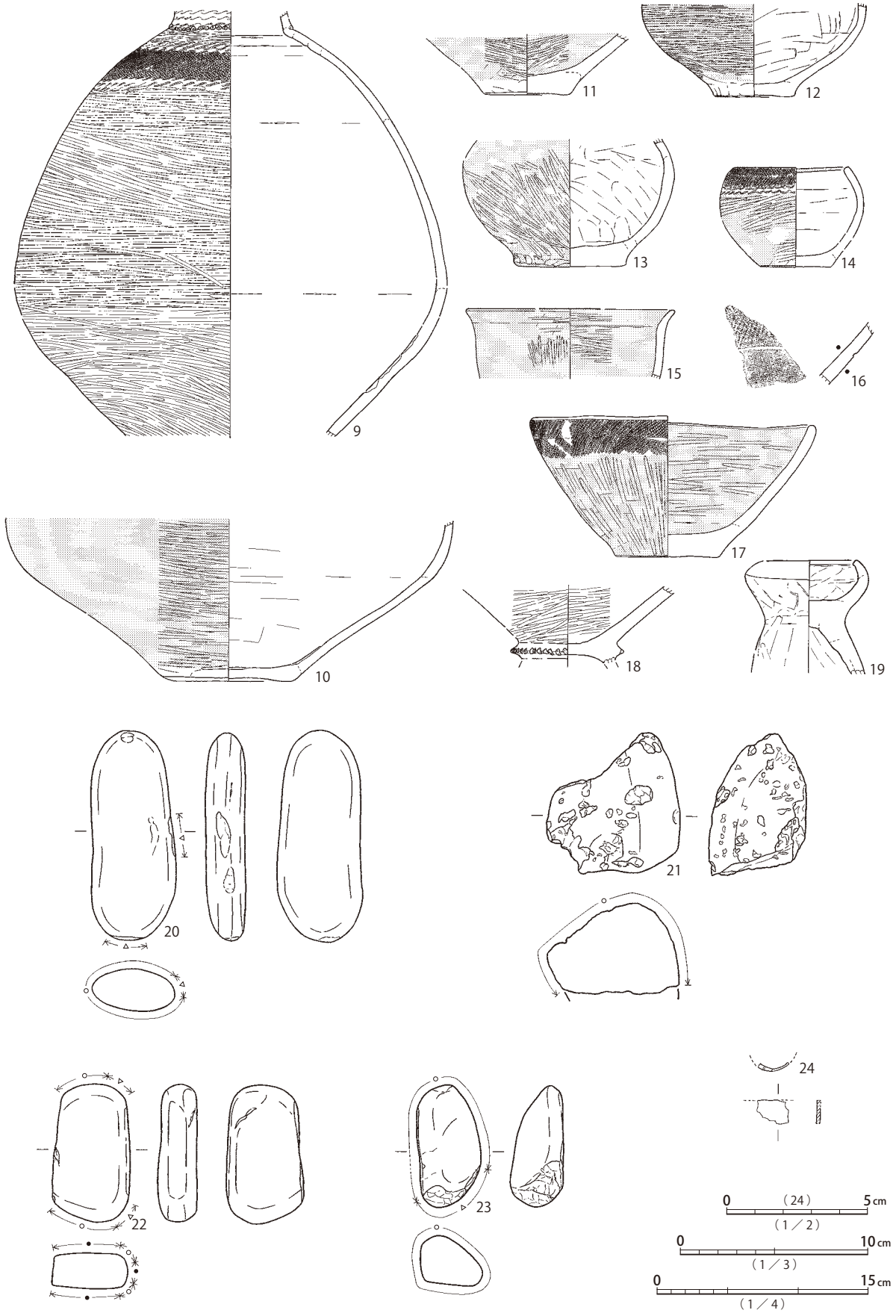






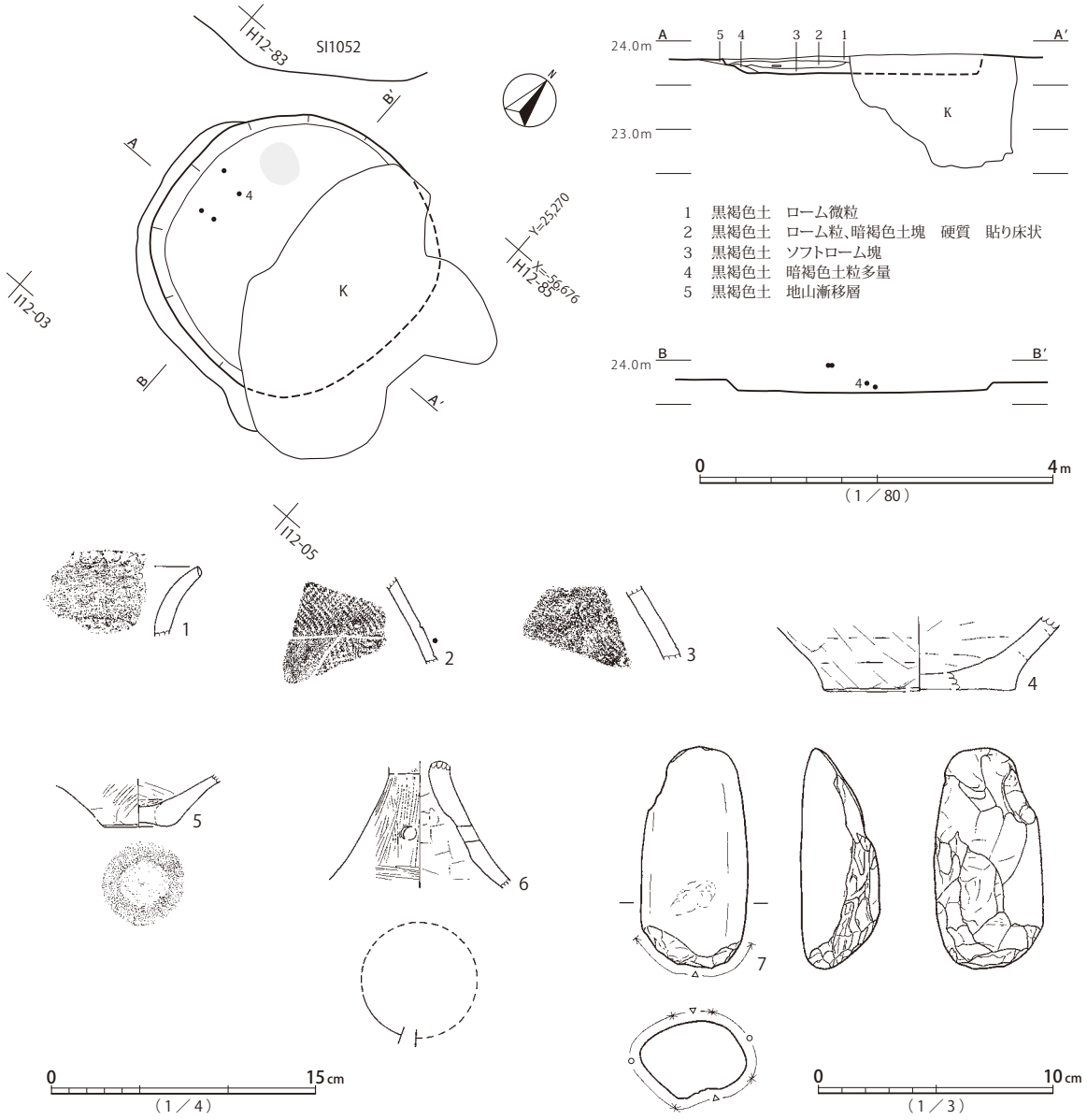
第308図 SI1055遺構、SI1055遺物(1)

SI1055



第309図　SI1055遺物（２）

SI1056



第310図　SI1056遺構・遺物

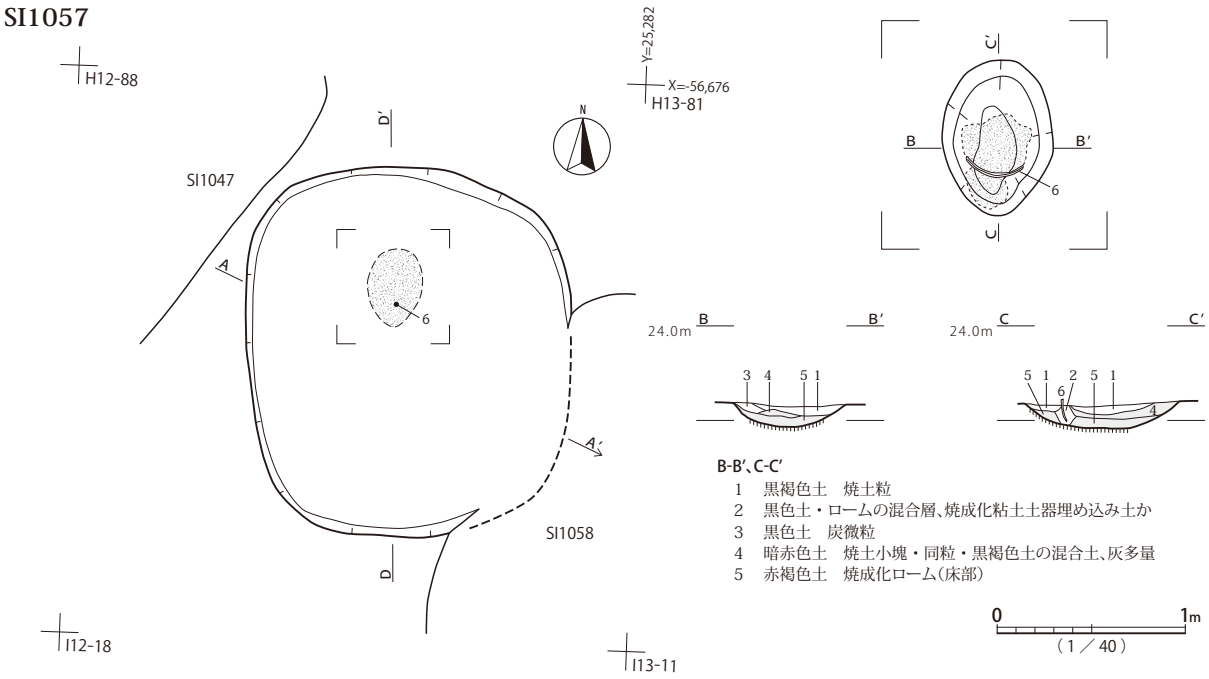
遺物は、少量の土器のほか、ドレライト製礫石器7が出土している。甕1、沈線区画文様の壺2・3は在来的な後期弥生土器であり、輪台技法底部5、高杯6は外来的な技法と形態を示す過渡的な土器である。下層から出土した壺4は、特徴が乏しいものの、弥生時代後期から終末期に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相に基づき、弥生時代後期から終末期の所産と推定される。

SI1057（第 311 図、図版 68・231）

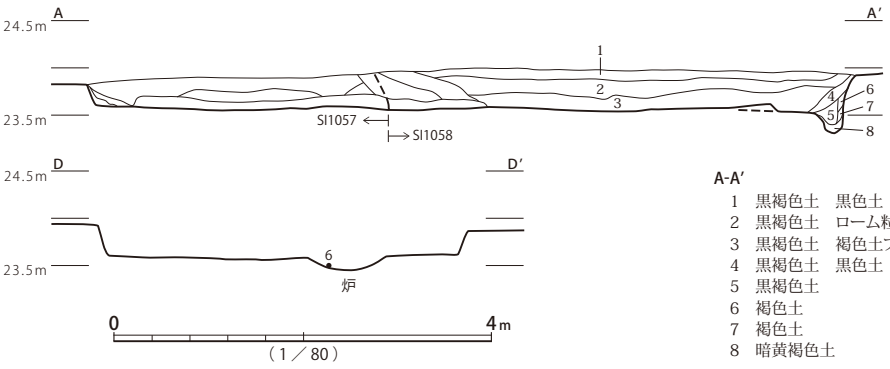
3.9×3.4m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。南東側を、弥生時代終末期竪穴建物跡SI1058と重複し、覆土が掘り込まれている。北西側は弥生時代終末期竪穴建物跡SI1047と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴等は認められず、中心から北西に寄った位置に楕円形の炉が検出されるのみである。炉の竪穴中心寄りの位置には大型壺の破片を立てて埋置されている。床面周溝は確認されていない。

SI1057



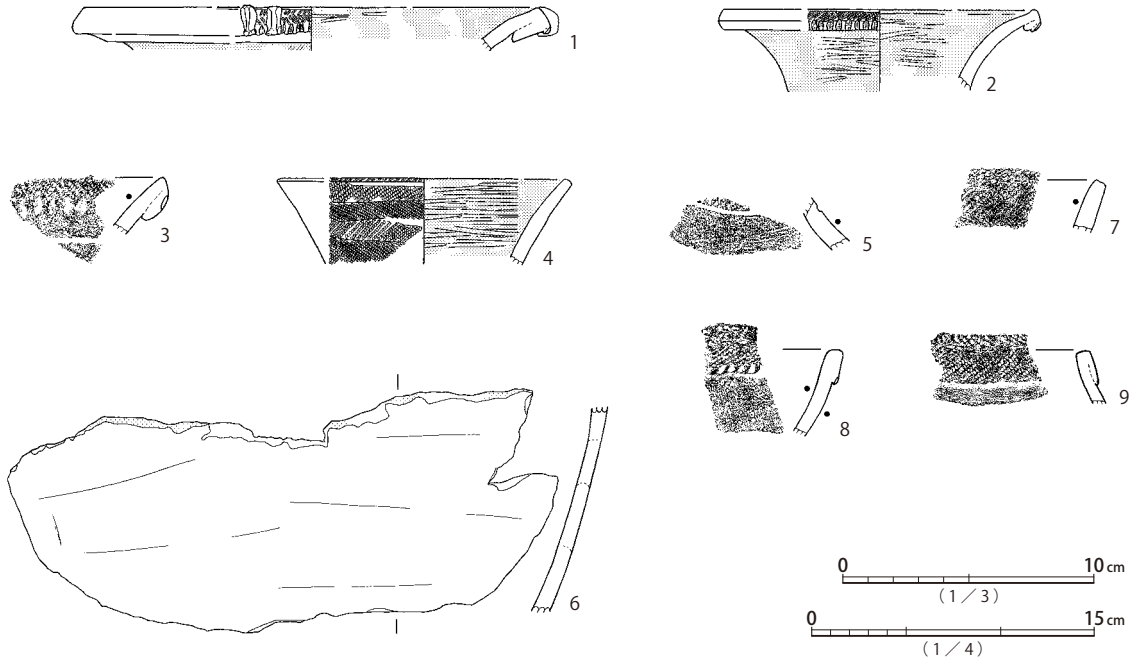
B-B′、C-C′

1　黒褐色土　焼土粒
2　黒色土・ロームの混合層、焼成化粘土土器埋め込み土か
3　黒色土　炭微粒
4　暗赤色土　焼土小塊・同粒・黒褐色土の混合土、灰多量
5　赤褐色土　焼成化ローム（床部）



A-A′

1　黒褐色土　黒色土　1～8層 SI1058 覆土
2　黒褐色土　ローム粒、褐色土ブロック
3　黒褐色土　褐色土ブロック多量、ローム粒
4　黒褐色土　黒色土
5　黒褐色土
6　褐色土
7　褐色土
8　暗黄褐色土



第311図　SI1057遺構・遺物

覆土は、土層断面図は作成されているものの、土層注記がなく、詳細は不明である。

遺物は、土器が少量出土しているが、炉内の大型壺6以外は覆土一括取り上げ資料である。壺1 ～ 6、鉢7・8、椀9は概ね、弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

SI1058（第 312・313 図、図版 13・68・162・231）

5.1 × 4.8 ？ m、深さ 40cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。北西辺を弥生時代後期前半竪穴建物跡 SI1057、南西部を弥生時代後期後半竪穴建物跡 SI1059 と重複し、両遺構を掘り込んでいる。主柱穴 a ～ d、貯蔵穴 e が検出されている。中心軸上の北西寄り、柱間範囲の内側に円形の炉が設けられる。貯蔵穴 e の周りには、蓋受けを兼ねたと見られる 30 ～ 40cm 幅の堤状の高まりが検出されている。床面周溝は西角付近のみ確認されている。重複部は、SI1059 覆土中に本遺構の床面が形成されている。

覆土は、壁際に褐色土主体の初期堆積土があり、上層は黒褐色土の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、下層から上層にかけて土器が出土している。在来的な土器として、甕 2 ～ 6、壺 8 ～ 10、鉢 11、椀 12、鉢もしくは小型広口壺 13 がある。受口状外面肥厚口縁の壺 15、高杯もしくは鉢 18・20 は縄文の欠落など過渡的な特徴を持つ。壺 14・16 は体部が無文で土師器的だが、底部径が大きく、在来的様相を残す。小型壺 22 の安房形由来と見られる装飾も同様である。高低差を伴って出土しているが、土器群は概ね、弥生時代終末期中葉、中台 1－2 式から 2－1 式に位置づけられる。

特徴的な遺物には、絵画土器 14 がある（詳細は第 4 章第 3 節参照）。破片が中層から上層にかけて検出されているが、壺 15・16、鉢 18、小型壺 21・22 と同時期の所産と考えられる。右向きの準構造船を表現したと見られる絵は、焼成前のヘラ状工具による刻線で描かれ、赤彩及びヘラミガキは描画後に施されている。船首は右端の縦刻線に合わせ上方へ 2.4cm の位置まで細くなり、その上には船体側へ横刻線が延び、直角三角形に近い形をとって舳先としたと見られる。船上には櫂 14 本と、中央付近の柱から船尾を向く吹き流し 4 本以上が表されている。船体→櫂・（柱→吹き流し）の順に描かれ、櫂と柱の順は、櫂→柱の可能性がある。底部は焼成前に穿孔されている。赤彩を施されているが、二次焼成のために不明瞭になっている。体部下位に焼成前穿孔のある小型壺 21、在来的な装飾壺がミニチュア化されたような小型壺 22 についても、儀礼的な用途が推定され、絵画土器 14 と同じ脈絡で使用された可能性が考えられる。

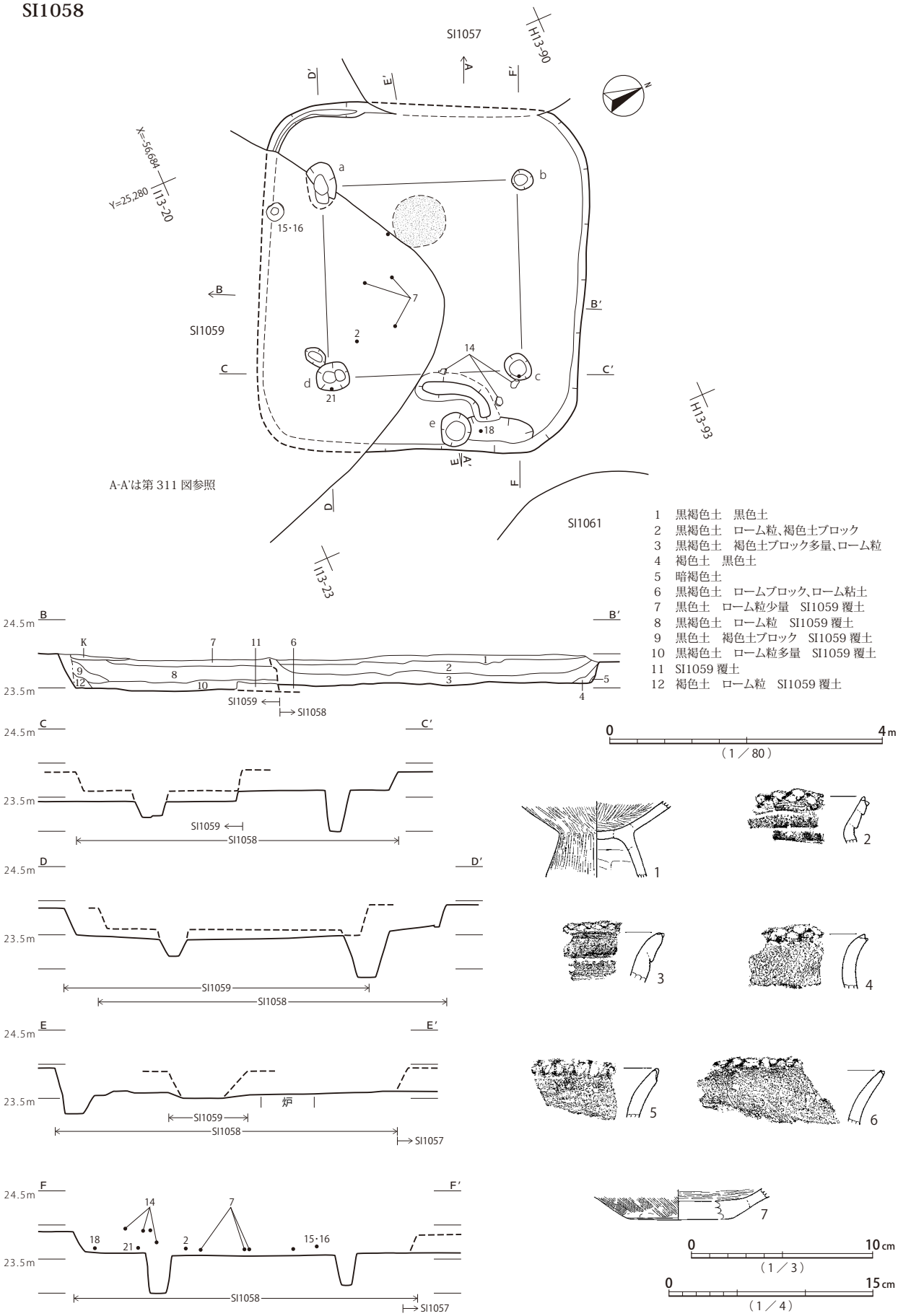
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期中葉の所産と考えられる。

SI1059（第 314 図、図版 68・231・310）

5.8 × 5.3m、深さ 40cm 程度の隅円方形竪穴建物跡である。北部が弥生時代終末期中葉竪穴建物跡 SI1058 と重複し、掘り込まれている。南東側は弥生時代終末期竪穴建物跡 SI1065 と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴 a ～ d、ハシゴ穴 e、貯蔵穴 f が検出されている。柱配置は平行四辺形を呈し、a・b・c の推定柱筋は竪穴平面形に近似する。中心軸からやや東寄り、a・b 間ライン上に不整円形の炉が設けられる。床面周溝は西辺のみ検出されている。

覆土は、壁際の初期堆積が褐色土を主体とし、上層は黒褐色土から黒色土の漸移的な堆積状況を

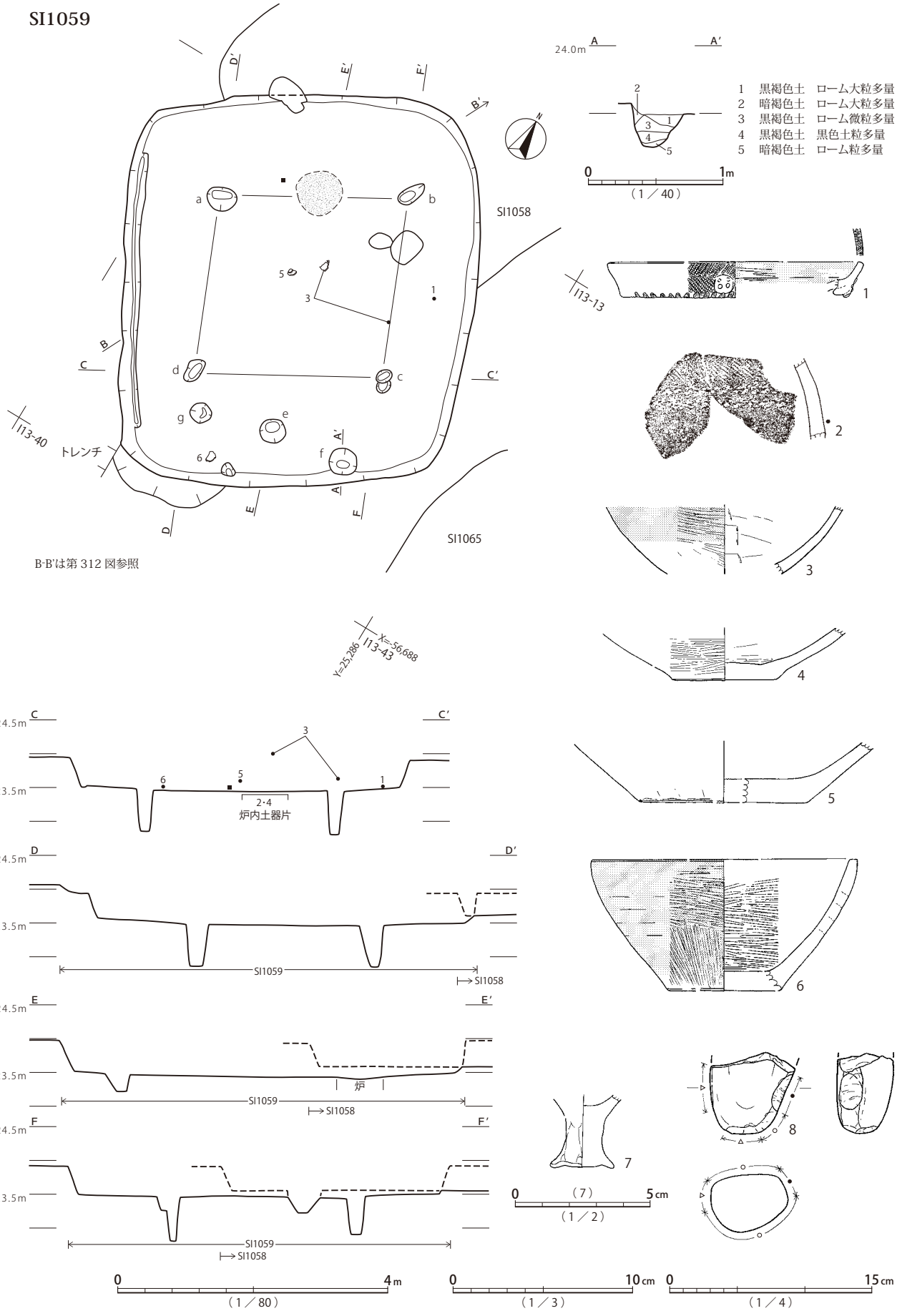
SI1058



第312図 SI1058遺構、SI1058遺物(1)

SI1058

第313図　SI1058遺物（２）



第314図　SI1059遺構・遺物

示す。焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、床面近くから上層にかけて、土器が少量出土している。外面受口状肥厚口縁の壺1、無文素口縁の鉢6が床面近くで、炉内から結節文区画の文様を持つ壺2と壺底部4が検出されている。概ね、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。その他、橄欖石玄武岩製礫石器8が出土している

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SI1060（第315図、図版68・69・162・231・310）

5.0？×5.2m、覆土がほぼ遺存しない方形竪穴建物跡である。北東角がイモ穴による撹乱を受けるほか、古代方形墳墓SM1182南西周溝と重複し、南辺がそれぞれ弥生時代終末期建物跡であるSI1061・SI1062・SI1063と重複する。

覆土は、土層断面記録がなく詳細は不明であるが、ほぼ床面レベルまで削平された状態で検出されたと見られる。外周を巡る幅50cm以上の溝は、壁立ち建物と関連させる積極的根拠もなく、床面周溝と竪穴粗掘り痕跡が連続して掘り下げられた可能性がある。SI1071の床面外周も似た様相を示す。主柱穴は認められないが、貯蔵穴の可能性のあるａ～ｃが検出されている。中心から北に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。

遺物は、床面レベルから土器・石製品が少量出土している。くの字状口縁甕1、受口状口縁甕2・3、台付甕4、直口壺5、高杯8等、弥生時代終末期の外来的な特徴を示す土器が主体で、概ね中台式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器9が出土している。

本遺構は、推定平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半の所産と推定される。

SI1061・SI1062（第316図、図版69・162・163・232）

4.2？×4.3m、深さ15cm程度の不整楕円形竪穴建物跡SI1061と、4.1×4.0m、深さ20cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1062である。SI1061南東部とSI1062北西部が大きく重複し、SI1061床面がSI1062覆土中に形成されている。SI1062の東角はSI1063と接し、同時存在不能であり、また、北側が弥生時代終末期竪穴建物跡SI1060と重複する。

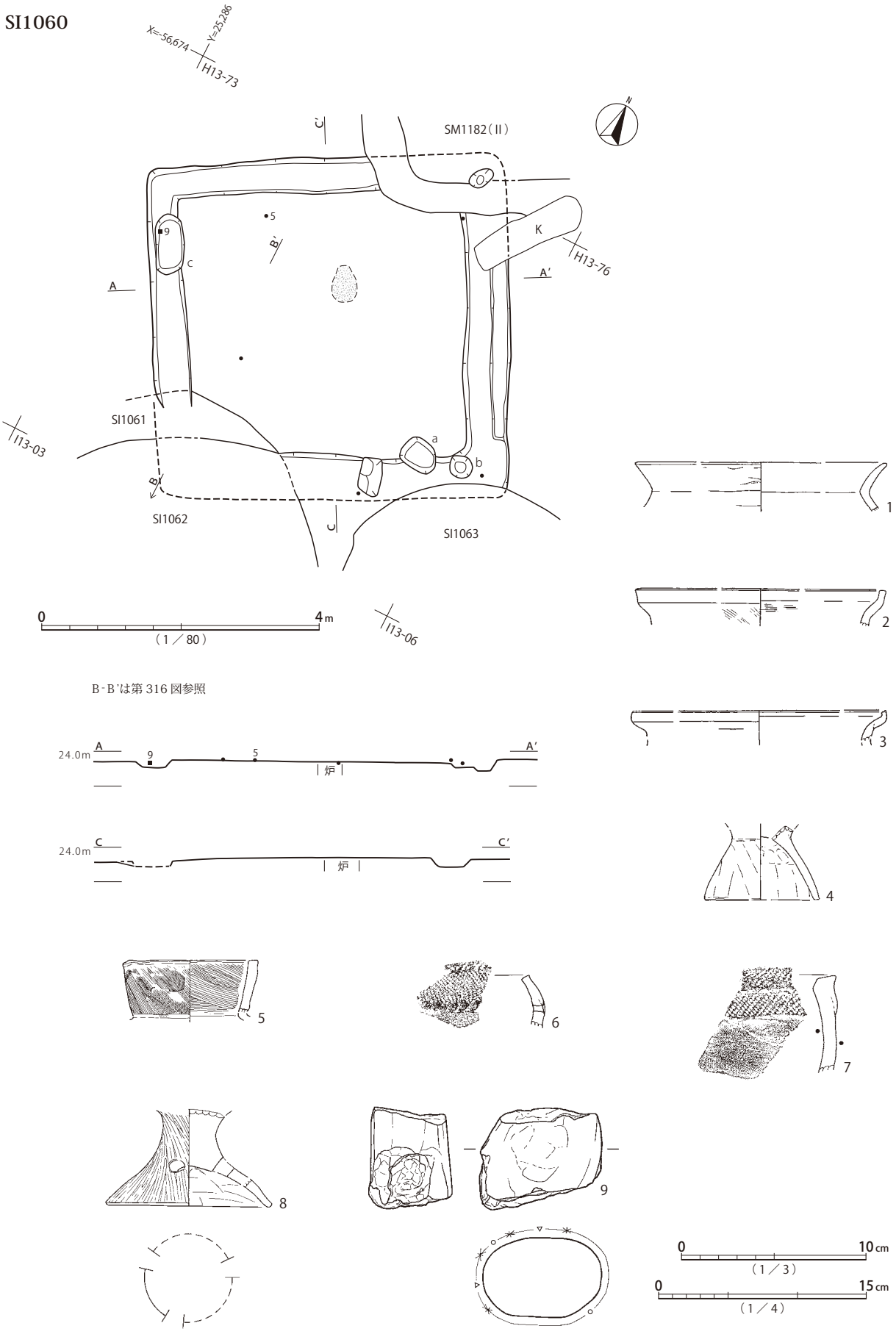
SI1062は、主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bのみが検出されている。中心軸上、やや北西寄りに長楕円形の炉が設けられる。炉の周囲の床面は円形に硬化している。

覆土は、11・14層に焼土が含まれるものの、面的な集中範囲は記録されていない。床面から10cm程度でSI1062床面が検出されている。

遺物は、土器が少量出土している。刻目状の口縁端部押捺を施される在地的な甕1は床面直上から出土している。在来的な交互押捺口縁の甕2・3、輪積痕の甕4、無文の椀10のほか、外来的な特徴と形態を持つ、受口状口縁甕5、タタキ甕6・7、櫛描文壺8、赤彩小型鉢9が出土している。甕1は胴部最大径が口径を大きく上回り、口縁端部が交互押捺ではなく一方向になっている点で、弥生時代終末期前半、中台1-1式に位置づけられる。他は覆土一括取り上げ資料だが、近い時期の遺物と見られる。

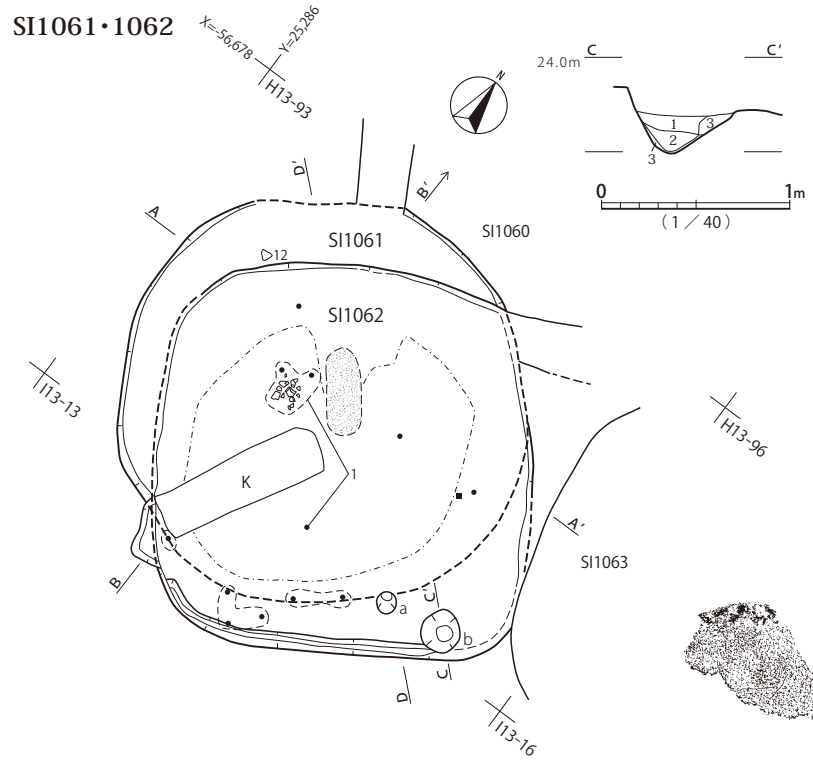
本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えら

SI1060



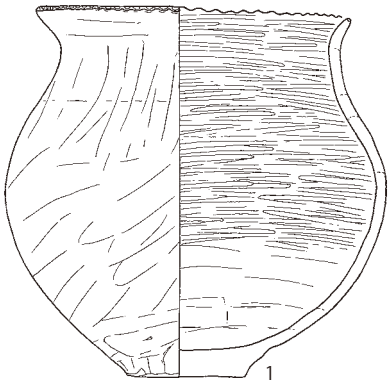
第315図　SI1060遺構・遺物

SI1061・1062



1　黒褐色土　暗褐色土粒多量
2　黒色土　ソフトローム微粒
3　暗褐色土　ローム・1層の混合土

SI1062



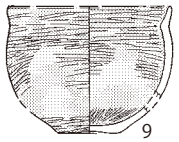


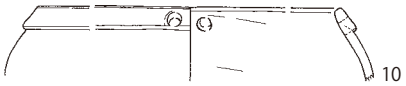






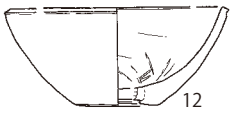








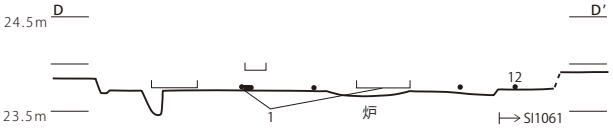
SI1061

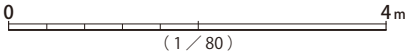


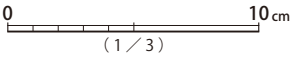


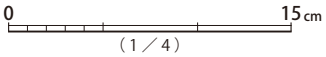
SI1060・SI1061・SI1062

1　暗褐色土　ソフトローム粒　硬質
2　黒褐色土　ローム微粒　硬質　貼り床状
3　黒褐色土　ロームブロック少量
4　暗褐色土　ローム多量
5　黒褐色土　ローム、黒色土粒多量　硬質　貼り床状
6　暗褐色土　ローム微粒
7　黒褐色土　ローム、黒色土粒多量　硬質　貼り床状
8　暗褐色土　ソフトローム微粒多量　軟質
9　暗褐色土　ローム微粒　軟質
10　暗赤色土　暗褐色土・焼土の混合土　炉跡?
11　黒褐色土　暗褐色、焼土・ローム大粒各少量
12　暗褐色土　ソフトローム小塊
13　黒褐色土　ロームブロック
14　黒褐色土　10層より暗い　ローム大粒、焼土
15　暗黄褐色土　ローム多量
16　暗褐色土・黒褐色土の混合層
17　暗褐色土　黒色土粒、ローム微粒　硬質
18　黒褐色土　暗褐色土小塊
19　暗褐色土　黒褐色土小塊
20　暗褐色土
21　暗褐色土　焼土微粒少量、ローム微粒
22　黒褐色土　ローム粒　撹乱気味



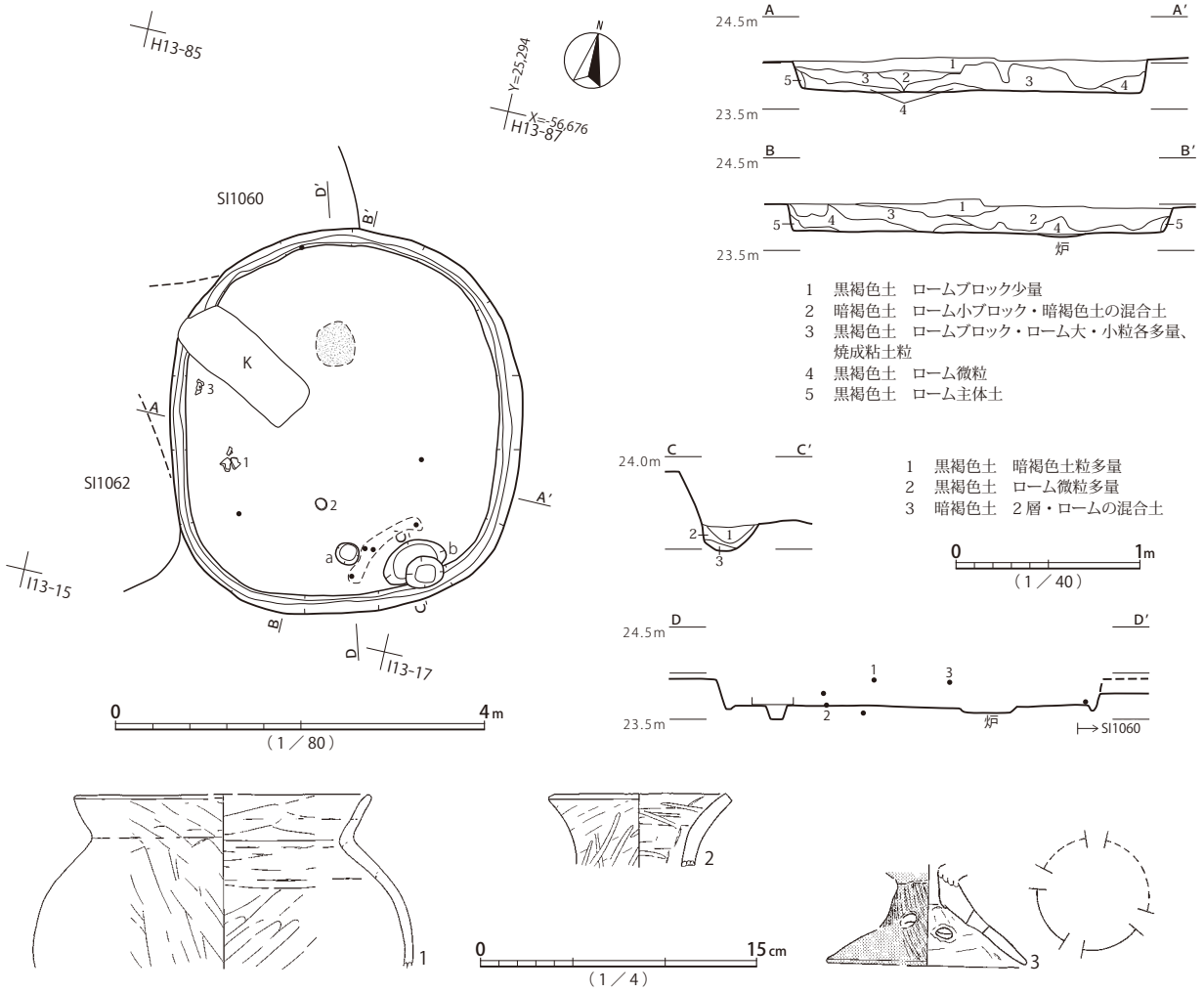






第316図　SI1061・SI1062遺構、SI1061・SI1062遺物

SI1063



第317図　SI1063遺構・遺物

れる。

SI1061は、主柱穴等の内部施設は検出されていない。床面硬化部と炉跡の可能性のある焼土含有層が土層断面図に記録されるが、詳細は不明である。

覆土は、SI1062覆土中にロームの多い土層で床面を形成した状況が認められ、上層まで硬質である。焼土集中部の一部は炉と無関係のものと見られ、その場合、廃絶時に火を受けた可能性がある。

遺物は、輪台技法底部の小型鉢12が床面直上で出土したのみである。覆土一括取り上げ資料はすべてSI1062に帰属しており、混在する可能性が高い。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に帰属すると推定される。

SI1063（第317図、図版69・232）

4.2×3.8m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。イモ穴による撹乱を受け、部分的に床面まで破壊される。北西部が弥生時代終末期竪穴建物跡SI1060、南西部を同SI1062と重複する。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されるのみである。中心から若干北西寄りの位置に、

不整円形の炉が設けられる。

覆土は、焼土・炭化材の検出は記録されておらず、ローム混じりの黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、竪穴中心とaの中間、やや西の位置に器台に転用された可能性のある壺口縁2が床面直上から検出されている。くの字状口縁のナデ甕1、透孔4方配置の高杯脚部3は上層からの出土である。いずれも過渡的な特徴を示すことから、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と推定される。

周辺遺構の構築順序は、弥生時代終末期前半、中台1-1式期のSI1062→同終末期前半のSI1063→同終末期前半のSI1061→同終末期後半のSI1060、と推定できる。

SI1064（第318図、図版69・163・232・299・335）

4.8？×（3.8）m、深さ15cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。099地区北東辺のTJ地区との境界に位置し、北東部が遺構検出高の相違から未調査で失われている。南側が弥生時代後期竪穴建物跡SI1089と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるaが検出される程度である。炉は貯蔵穴との位置関係を勘案すると、北側の未調査範囲に存在した可能性が高い。床面周溝は検出されていない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。焼土・炭化材は検出記録が無く、漸移的な堆積状況と推定される。

遺物は、土器等が少量出土している。口頸部段を持つ甕2は在地的な形状だが、幅広の器体は新相を呈する。受口状口縁甕1、櫛描文壺5、輪台技法底部7は外来的な技法と形状を持ち、無文赤彩壺6は過渡的な様相を示す。北陸系の可能性があるヘラケズリの施された底部3を除き、土器は床面から10cm前後の高さで検出されている。いずれも概ね、弥生時代終末期前半、中台1式の範疇と思われる。その他、埴輪片8が出土している。諏訪台古墳群において埴輪の伴う古墳が確認されていないため、混入経緯と供給源が問題となる資料である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と推定される。

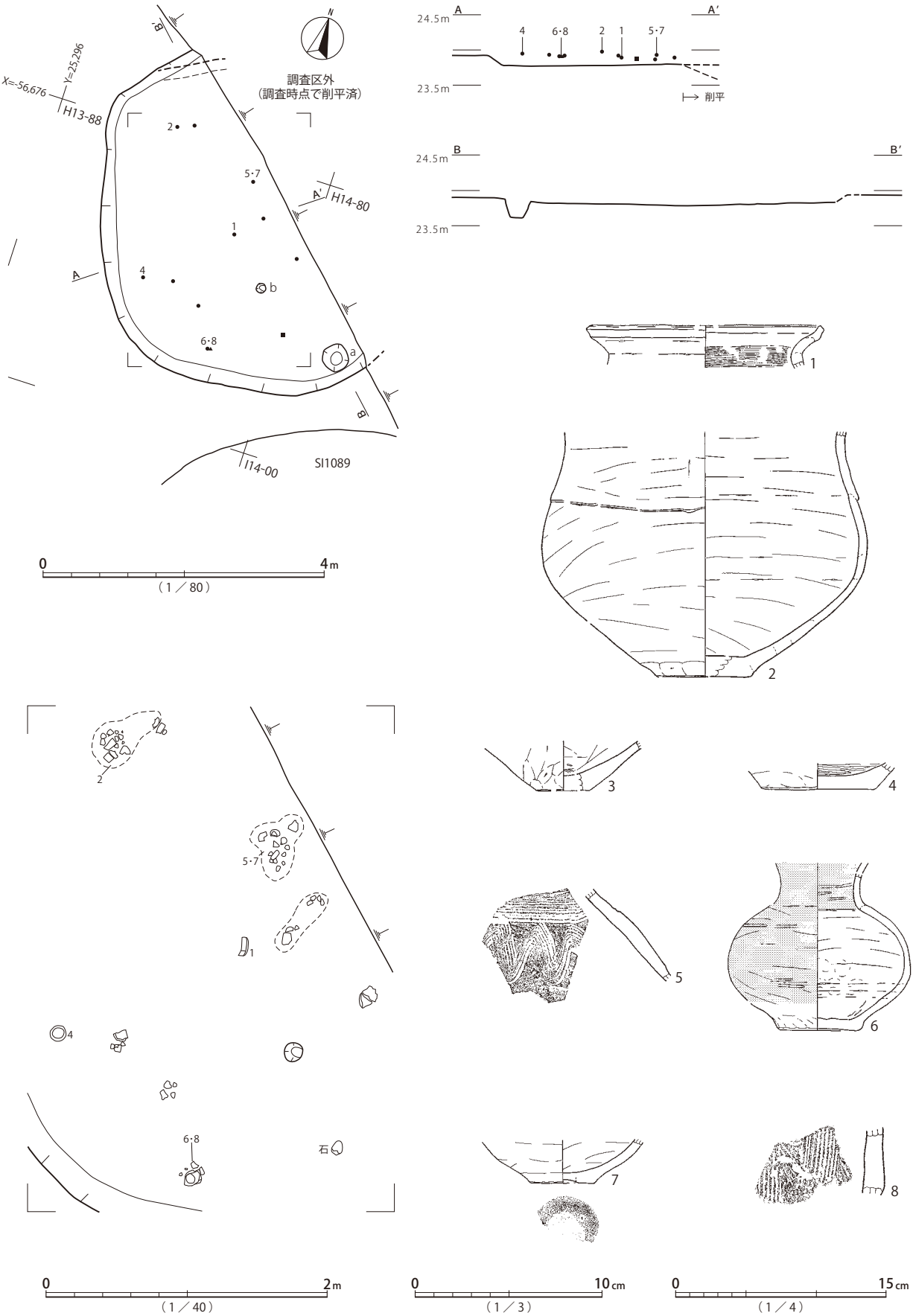
SI1065（第319・320図、図版69・163・232・310・335）

4.8×4.4m、深さ20cmの方楕円形竪穴建物跡である。東辺が弥生時代後期竪穴建物跡SI1066北西部と重複し、本遺構が掘り込む。南西側に弥生時代後期竪穴建物跡SI1070が同時存在不能な距離で近接する。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。中心軸やや南寄り、a・b間ラインに内接する位置に、楕円形の炉が縦に2箇所連結する形で認められる。

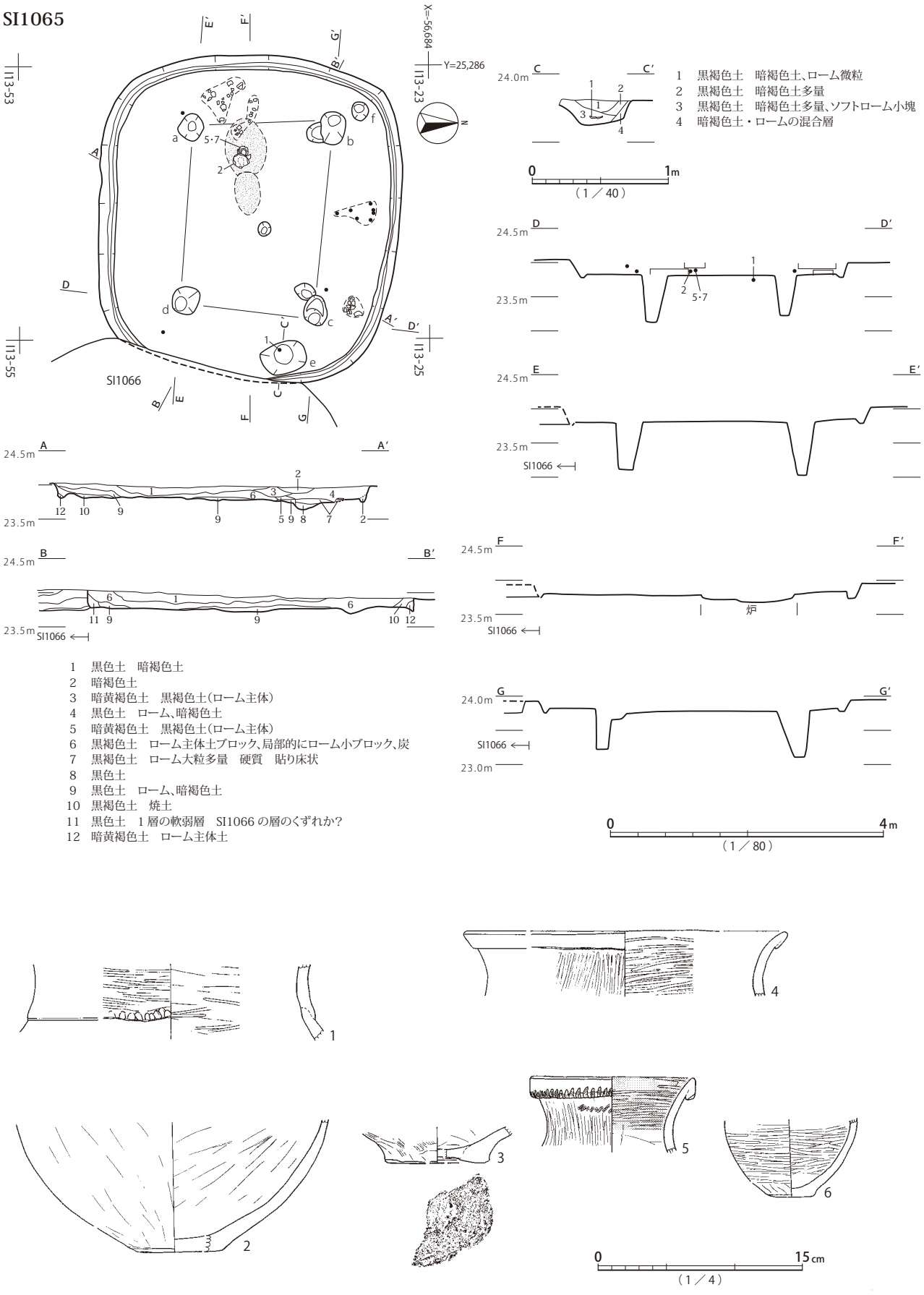
覆土は、壁際床面にローム主体土の初期堆積が見られ、下層の焼土・炭化物粒を含む黒褐色土を経て、概ね漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の集中部は、貯蔵穴内も含め検出されていない。

遺物は、床面レベルから下層にかけて土器が少量出土している。押捺の伴う口頸部段を持つ甕1が貯蔵穴内から、ナデ仕上げの甕2、垂滴状外面肥厚口縁の壺5、甕等の転用品の可能性がある鉢7

SI1064

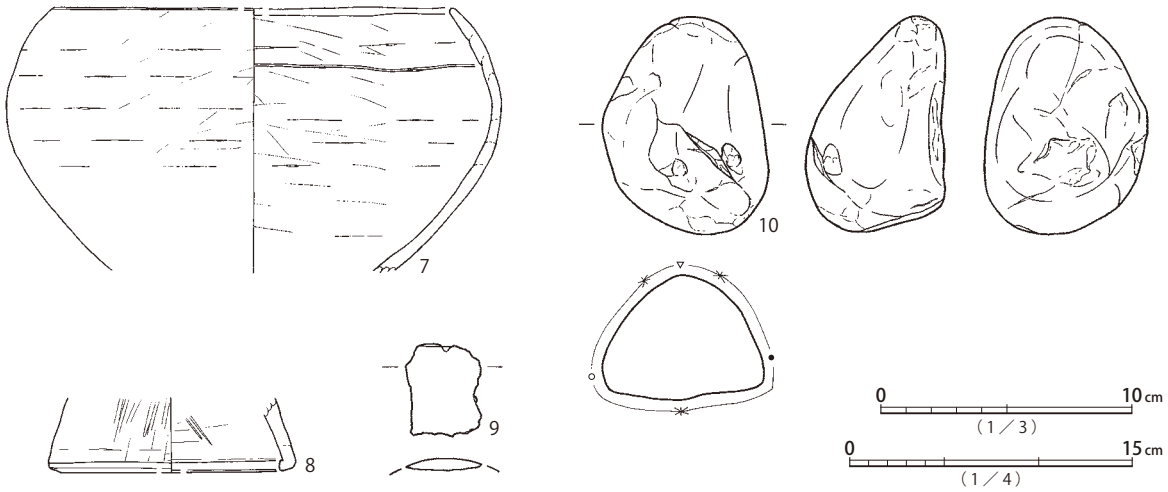


第318図　SI1064遺構・遺物



第319図　SI1065遺構、SI1065遺物(1)

SI1065



第320図　SI1065遺物（２）

が下層から出土している。概ね、弥生時代終末期中葉、中台式１−２式から２−１式に位置づけられる。その他、変質凝灰岩製磨製石斧９、頁岩製礫石器10が出土している。なお、SI1066との切り合い部床面で検出されたSI1066の小型椀10は本遺構に帰属する可能性がある。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期中葉の所産と考えられる。

SI1066・SI1067（第 321・322・323 図、図版 69・232・299・310・326）

8.0 × 6.6m、深さ 30cmの長方楕円形竪穴建物跡SI1066と、4.8 × 5.0m、深さ 30cmの方形竪穴建物跡SI1067である。方形撹乱がSI1066北東側とSI1067南部の床面まで破壊している。SI1066南東部とSI1067北西部が重複し、SI1067が掘り込む。SI1066北西部は弥生時代終末期竪穴建物跡SI1065と、同じく東辺は古墳時代前期前半竪穴建物跡SI1067北西部と重複し、それぞれ床面まで掘り込まれている。また、南西部は弥生時代終末期竪穴建物跡SI1072と重複する。

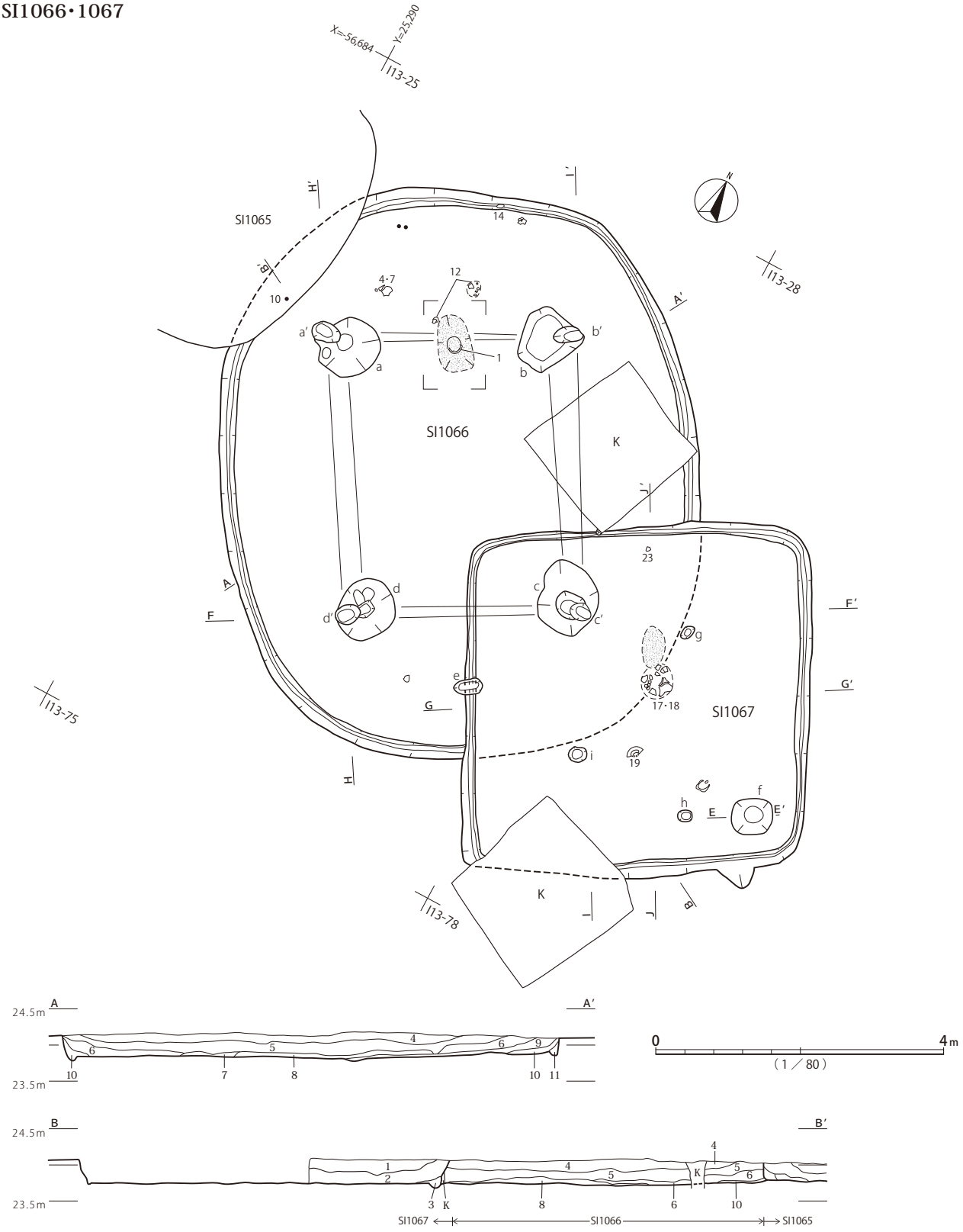
SI1066で検出された主柱穴はａ～ｄの４本配置で、それぞれに柱抜き取りもしくは建て替えに伴う可能性のある穴、a’～ d’ が認められる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。火床面に土器１が立てて埋置されている。その他、ハシゴ穴ｅが検出されている。床面周溝は遺存部で確認され、本来は全周したものと思われる。

覆土は、壁際及び床面上にロームの多い土層が堆積するが、上層にかけて黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材集中部は検出されていない。

遺物は、炉内の甕１を除き、床面からやや離れた高さで検出されている。壺４・７の他は、覆土一括取り上げ資料である。小型椀10は床面から検出されているが、切り合うSI1065に伴う可能性がある。高杯12は炉の北側床面から出土している。網目状撚糸文（附加条３種）の施された壺５・６、鉢11は弥生時代後期後半、山田橋１式の範疇と思われる。その他、小型袋状土製品13、チャート製礫石器14・15、角棒状鉄製品16が出土している。土製品13は手びねりで指紋が残る。鉄製品16は撹乱等からの混入品と思われる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

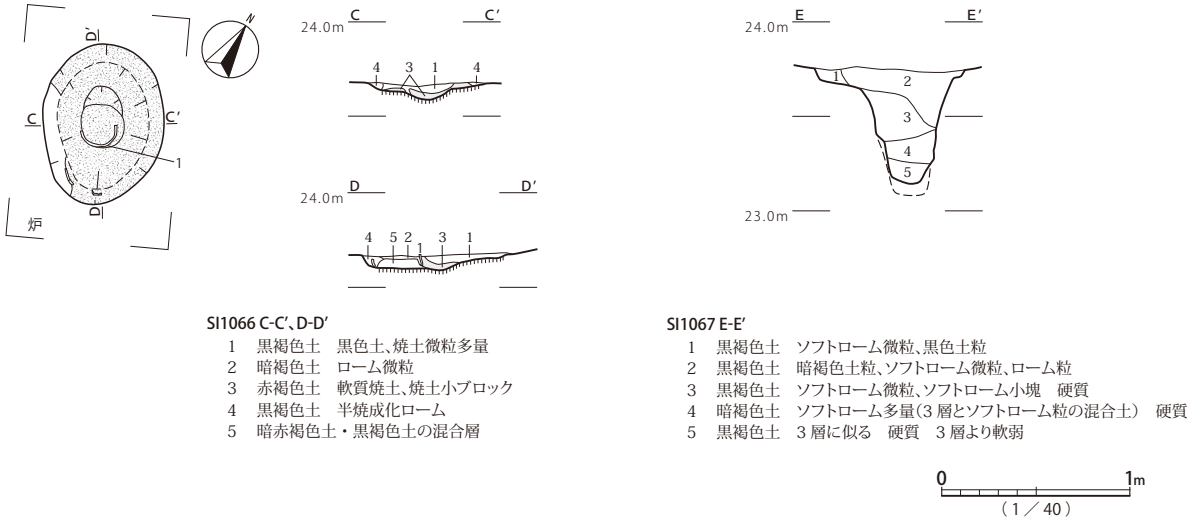
SI1066・1067



1　黒褐色土　ローム小ブロック少量、暗褐色土小塊、ローム微粒
2　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム大粒、1層に準ずる
3　暗褐色土　2層土・ローム大粒・小ブロックの混合土
4　黒褐色土　暗褐色土小塊多量
5　黒褐色土　暗褐色土小塊多量、ローム大粒多量
6　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム大粒、黒色土多量
7　暗褐色土　ローム大粒多量
8　暗黄褐色土　ローム小ブロック・暗褐色土・3層土粒の混合土
9　黒褐色土　全体は黒色土に近い　6層に黒色土多量
10　暗褐色土　ローム大粒多量
11　暗黄褐色土　ローム小ブロック・暗褐色土・6層土粒の混合土

第321図　SI1066・SI1067遺構（1）

SI1066・1067



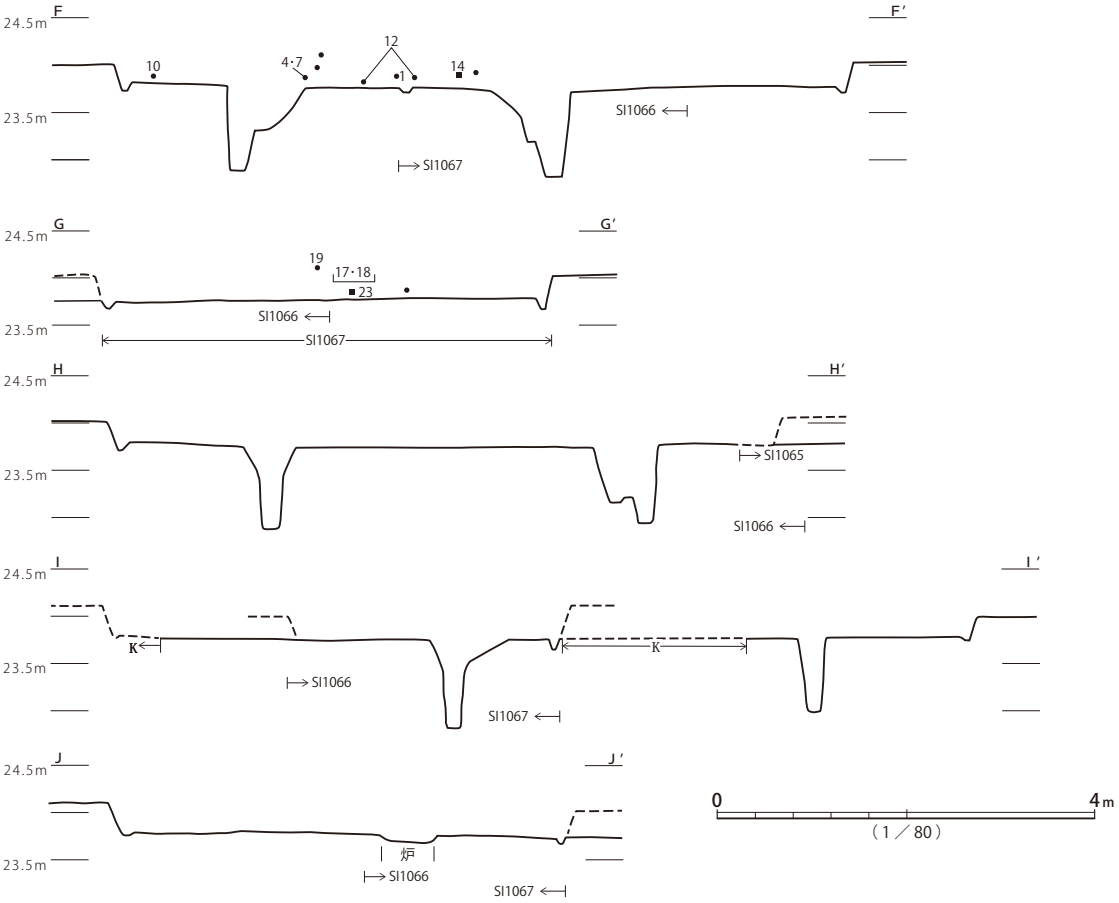
SI1066 C-C′、D-D′

1　黒褐色土　黒色土、焼土微粒多量
2　暗褐色土　ローム微粒
3　赤褐色土　軟質焼土、焼土小ブロック
4　黒褐色土　半焼成化ローム
5　暗赤褐色土・黒褐色土の混合層

SI1067 E-E′

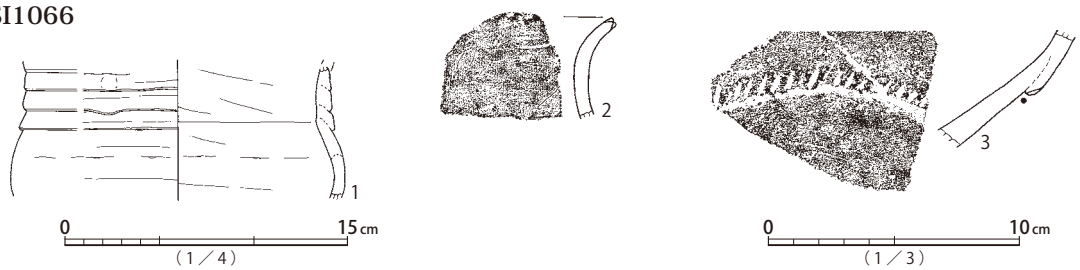
1　黒褐色土　ソフトローム微粒、黒色土粒
2　黒褐色土　暗褐色土粒、ソフトローム微粒、ローム粒
3　黒褐色土　ソフトローム微粒、ソフトローム小塊　硬質
4　暗褐色土　ソフトローム多量（3 層とソフトローム粒の混合土）　硬質
5　黒褐色土　3 層に似る　硬質　3 層より軟弱

0　1m
（1／40）



0　4m
（1／80）

SI1066

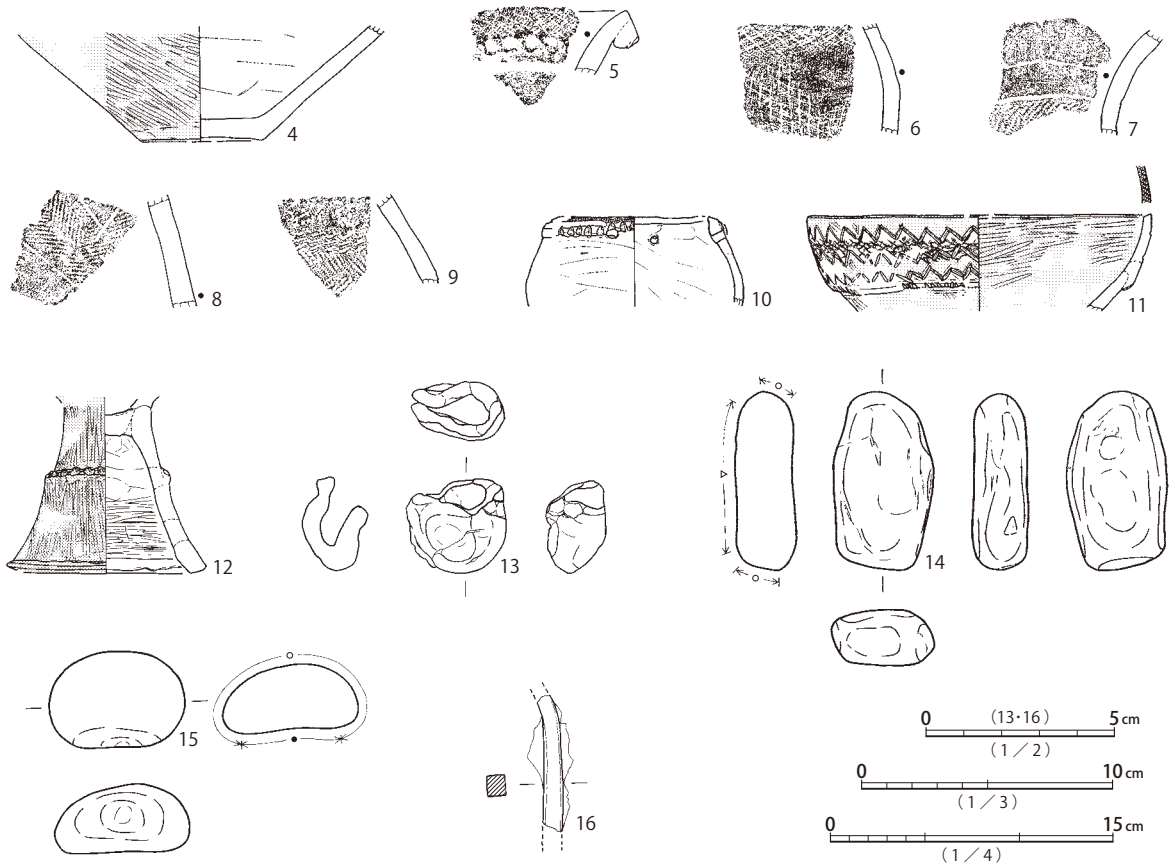


0　15cm
（1／4）

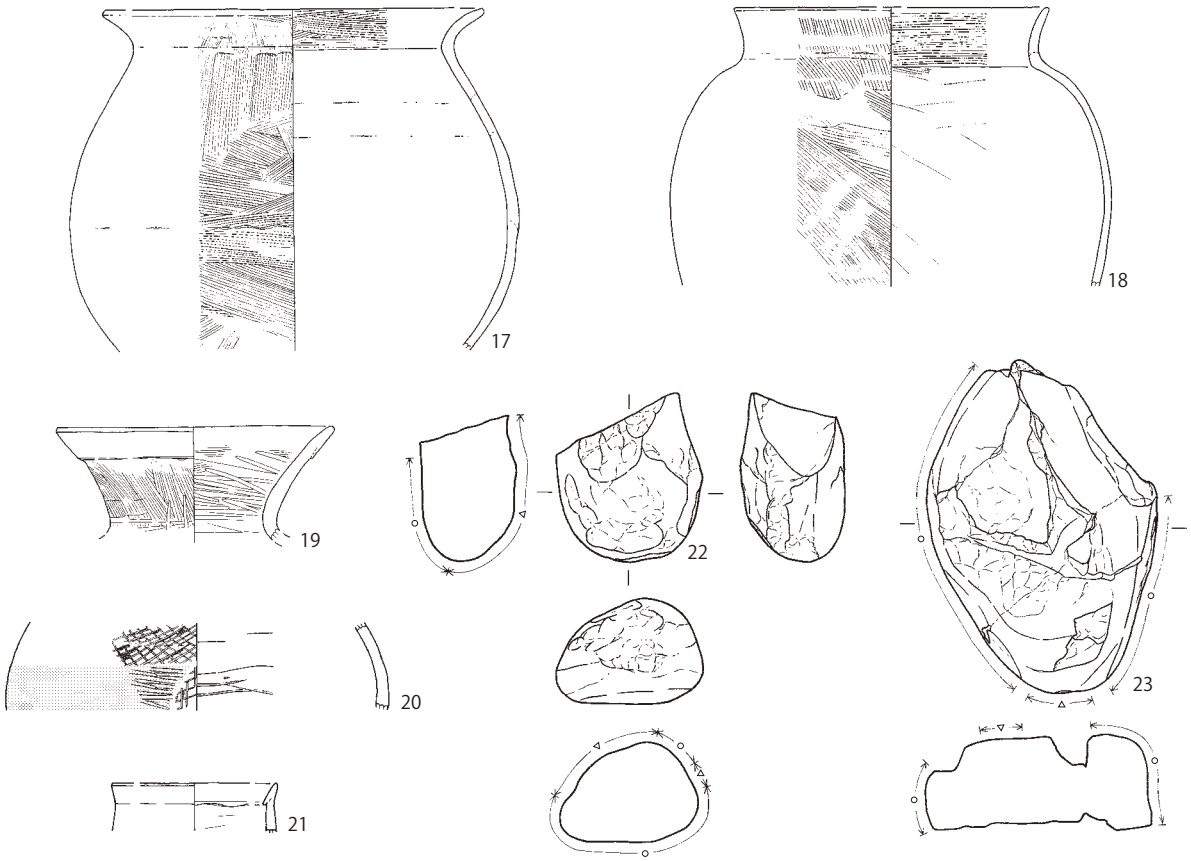
0　10cm
（1／3）

第322図　SI1066・SI1067遺構（2）、SI1066遺物（1）

SI1066



SI1067



第323図　SI1066遺物（２）、SI1067遺物

SI1067は、主柱穴は認められず、ハシゴ穴の可能性があるh、貯蔵穴fが検出されるのみである。中心からやや北寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝が遺存部に認められ、本来は全周した可能性が高い。

覆土は、周溝覆土にロームブロックが多く混じるが、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、土器等が少量出土している。くの字状口縁のハケメの甕17・18は、炉の前の上層で検出されている。折り返し状肥厚口縁の壺19も上層からの出土である。これらは、古墳時代前期前半、草刈1式に位置づけられる。網目状撚糸文（附加条3種）の壺20はSI1066に由来すると思われる。その他、ホルンフェルス製礫石器22、砂岩製礫石器23が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と考えられる。

各遺構の構築順は、弥生時代後期後半のSI1066→弥生時代終末期中葉のSI1065→古墳時代前期前半のSI1067と想定できる。

SI1068・SI1069・SI1070（第324・325図、図版70・163・233・310・335）

4.2×3.8？m、深さ15cm程度の楕円形竪穴建物跡SI1068、3.2？×3.8m、深さ20cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1069、3.3？×3.1m、深さ25cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1070である。

SI1068は、北東側がSI1069と重複し、現場図面では本遺構が切り込んでいるように記録されているが、反対に掘り込まれている可能性がある。主柱穴a～d、ハシゴ穴eが検出されている。bは性格不明の掘り込みと切り合う。貯蔵穴は本来、SI1071との重複部に位置し、破壊された可能性がある。cの東側には焼土を含む楕円形範囲が写真に認められ、別の竪穴建物跡もしくは炉穴等の縄文時代遺構が切り合っていた可能性がある。遺構番号は付与していないが、炉とした場合、ピットiがハシゴ穴あるいは貯蔵穴として組み合う可能性も否定できない。

覆土は、SI1069覆土と切り合う状況が認められる。現場段階ではSI1069覆土を本遺構が掘り込むかたちで土層断面図が記録されているものの、写真によるとSI1069床面が本遺構床面を切るように見受けられる。床面直上に焼土混じりの黒色土層が検出されているが、焼土・炭化材の集中部は認められず、概ね漸移的な堆積過程を経たものと思われる。

遺物は、土器が少量出土しており、すべて覆土一括取り上げ資料である。胴部が大きく張り出す甕12と受口状口縁甕16は、切り合う他遺構に由来すると思われる。甕13～15、壺19、壺21～23は弥生時代後期前半、久ヶ原式、壺18・24は同後期中葉に位置づけられる。

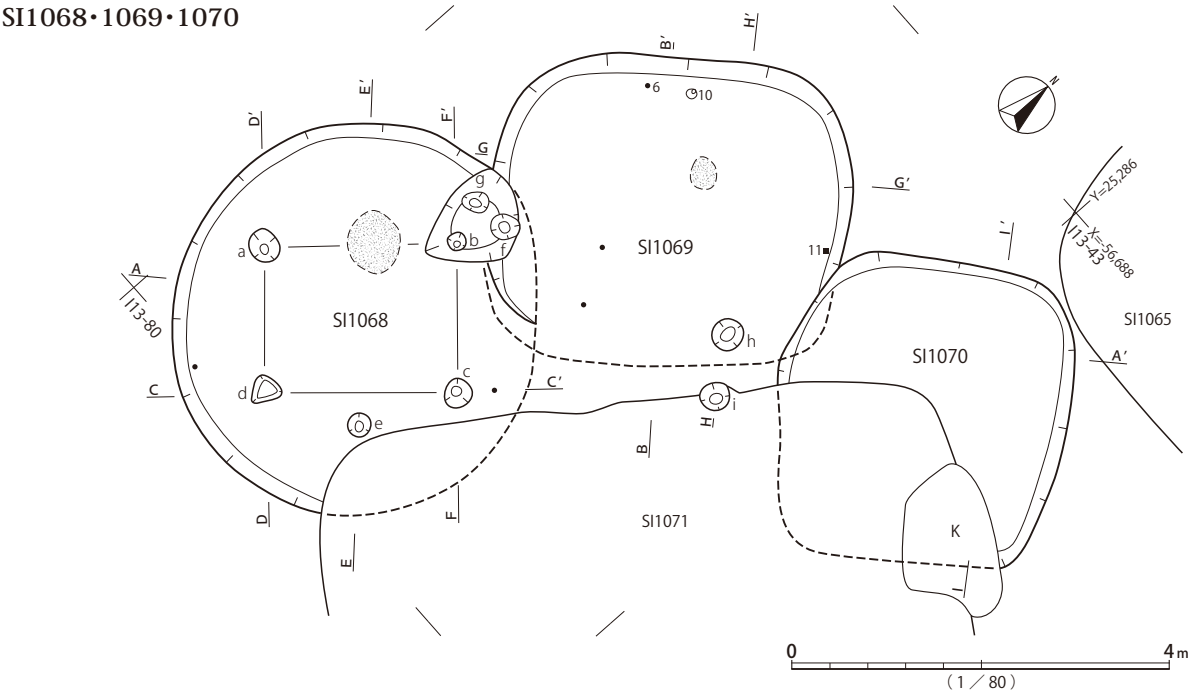
本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

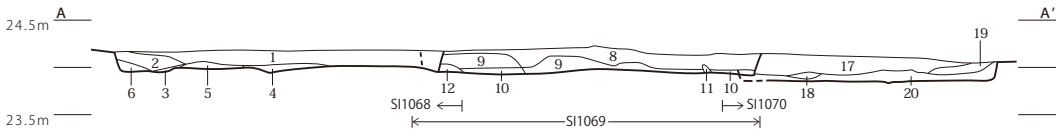
SI1070は、主柱穴等は認められず、炉も検出されていない。北西辺がSI1069と、南西部がSI1071と重複し、いずれからも掘り込まれている。床面周溝は検出されていない。

覆土は、ローム粒・ブロックを含む暗褐色から黒褐色土層で漸移的な堆積状況を示す。遺存部において、焼土・炭化材の集中は認められない。

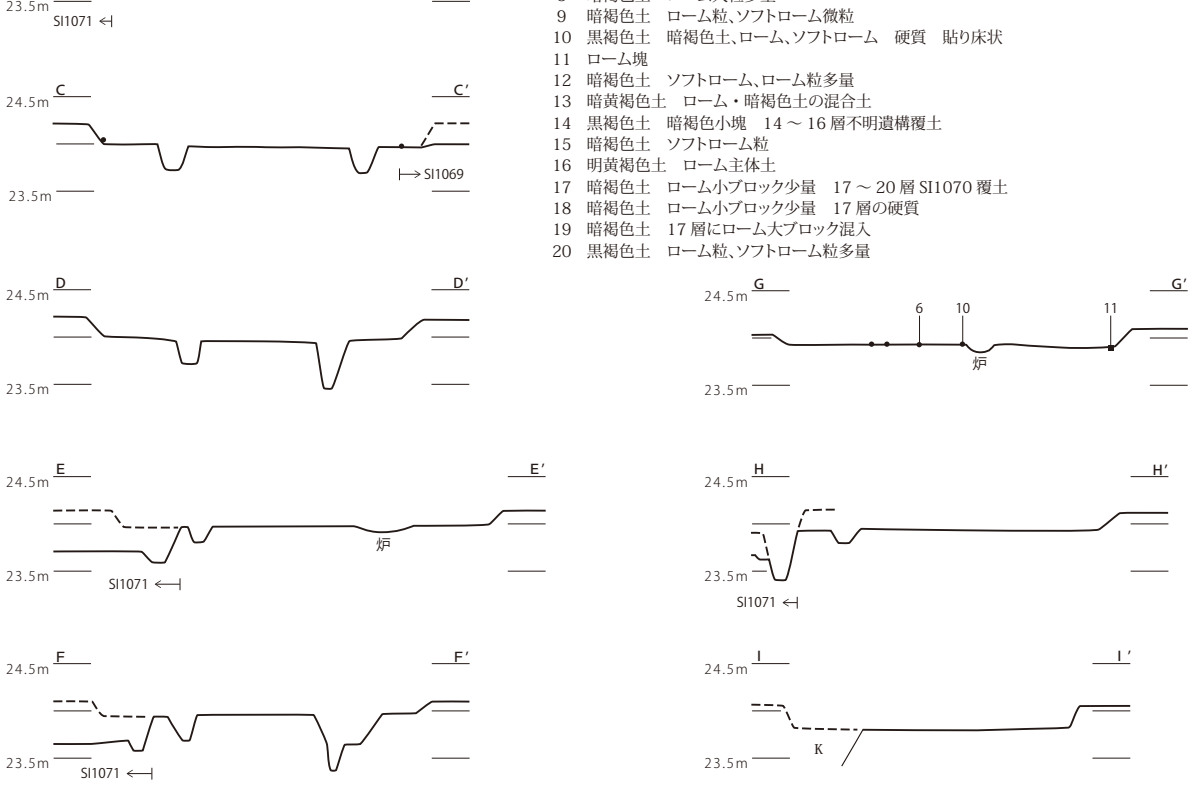
遺物は、土器少量が出土しており、いずれも覆土一括取り上げ資料である。受口状口縁甕1は弥生時代終末期、口縁端部内面肥厚の甕2は弥生時代後期、山形文の壺3は弥生時代後期後半、山田橋式以降に位置づけられる。

SI1068・1069・1070





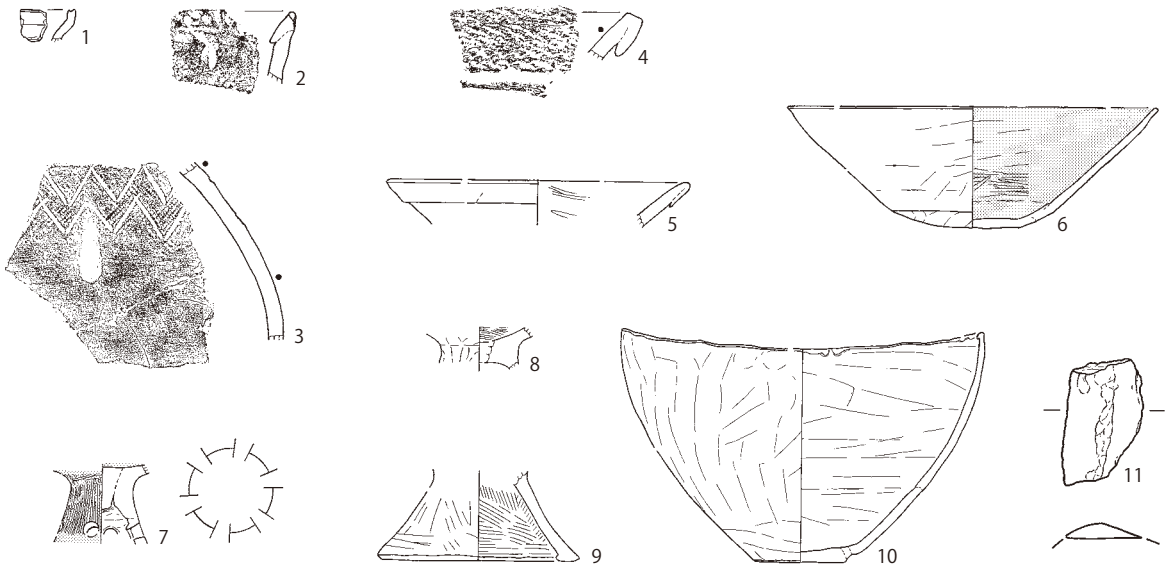
1　黒褐色土　暗褐色土、ローム大小粒、焼成粘土粒　1 ～ 6 層 SI1068 覆土
2　黒褐色土　暗褐色土小塊多量
3　暗褐色土　ローム・2 層の混合土
4　黒色土　ローム粒、焼土
5　暗黄褐色土　ローム主体土、1 層土
6　暗褐色土　ローム・2 層の混合土
7　黒褐色土　暗褐色土塊、ローム　7 ～ 13 層 SI1069 覆土
8　暗褐色土　ローム大粒多量
9　暗褐色土　ローム粒、ソフトローム微粒
10　黒褐色土　暗褐色土、ローム、ソフトローム　硬質　貼り床状
11　ローム塊
12　暗褐色土　ソフトローム、ローム粒多量
13　暗黄褐色土　ローム・暗褐色土の混合土
14　黒褐色土　暗褐色小塊　14 ～ 16 層不明遺構覆土
15　暗褐色土　ソフトローム粒
16　明黄褐色土　ローム主体土
17　暗褐色土　ローム小ブロック少量　17 ～ 20 層 SI1070 覆土
18　暗褐色土　ローム小ブロック少量　17 層の硬質
19　暗褐色土　17 層にローム大ブロック混入
20　黒褐色土　ローム粒、ソフトローム粒多量



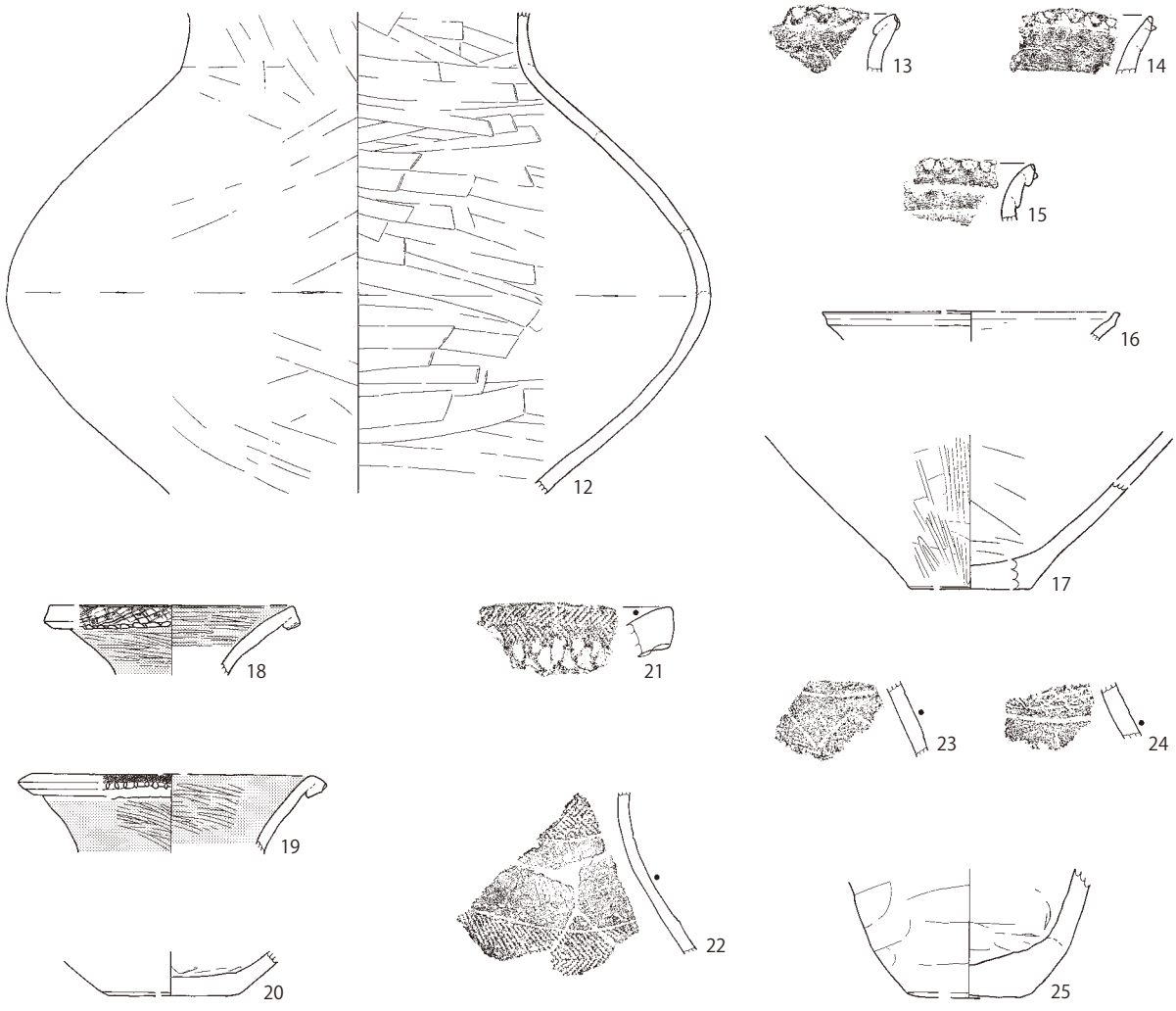
第324図　SI1068・SI1069・SI1070遺構

SI1070

SI1069



SI1068



0 15cm (1／4)　0 10cm (1／3)　0 (9・25) 5cm (1／2)

第325図　SI1068・SI1069・SI1070遺物

本遺構は、平面形と切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から終末期の所産と推定される。

SI1069は、南西辺をSI1068と、東角をSI1070と重複し、南東側でSI1071と重複、もしくは同時存在不能な間隔で近接する。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるｈのみが検出されている。中心から北に寄った位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。

覆土は、貼床と見られる最下層を除き、ローム粒・ブロックを含む暗褐色土層による漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化物の集中は検出されていない。

遺物は、土器等が少量出土している。弥生土器は、結節多段文様の壺4のみで、床面直上から出土した鉢6・10等は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、緑色片岩製石棒状石製品11が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

重複する3遺構は、弥生時代後期前半のSI1068→弥生時代後期後半から終末期のSI1070→終末期のSI1069の順に構築されたと考えられる。SI1069の南東辺とSI1071北西辺の間には別遺構の存在が推定される。

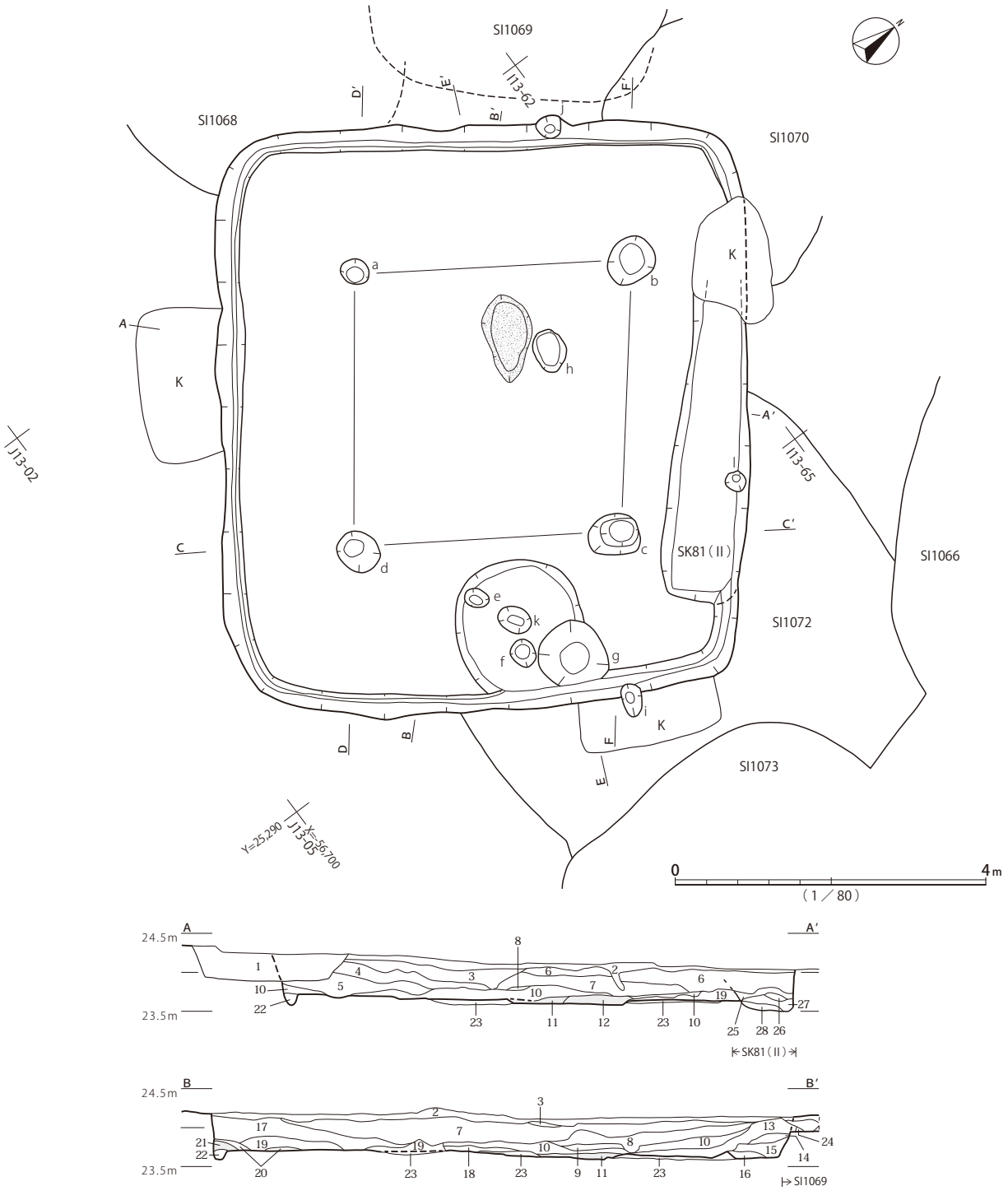
SI1071（第326・327・328図、図版70・163・233・234・299・310・326・335）

7.7×6.8m、深さ50cm程度の方形竪穴建物跡である。西角がSI1068、北角がSI1070と重複し、いずれの覆土にも本遺構が掘り込んでいる。東角はSI1072と重複し、南西・北東・南東辺に撹乱を受けている。北東辺には、報告時に近世と推定された長方形土坑SK81が床面まで掘り込んでいる。主柱穴ａ～ｄ、ハシゴ穴の可能性があるｅ・ｆ、貯蔵穴ｇが検出されている。中心軸からやや北西寄り、柱間エリアに収まるかたちで楕円形の炉が設けられる。床面周溝は遺存部で検出されており、本来は全周したものと見られる。ピットｋ・ｌはSI1072の主柱穴にあたり、ｊはSI1069南東側に推定される遺構に伴う可能性がある。

覆土は、床面中央付近に炉覆土由来の可能性もある被熱土・焼土が検出されるほか、西側他の壁際に焼土の集中部が見られ、廃絶時に火を受けたと見られる。上層は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。SK81の掘り込みは、北東辺と長軸向きが一致しており、覆土上層からの撹乱的な掘削状況が捉えられていないため、積極的根拠は薄弱だが、竪穴廃絶後に構築された屋内土坑墓である可能性も否定できない。

遺物は、土器を主体に土製品・石製品・鉄製品が出土している。受口状口縁甕6、くの字状口縁甕7～13、台付甕15～17、直口壺18、小型鉢21～23、小型椀24、鉢25、小型器台28、ミニチュア土器29・30等が出土している。床面直上あるいは同レベルからは、甕8～11、小型台付甕15、壺18、ミニチュア土器30、下層から、受口状口縁甕6、甕7・12、台付甕17、小型鉢23、鉢25、ミニチュア土器29が出土している。4方透孔の小型器台28は貯蔵穴底面に検出されている。鉢25は小型丸底壺に類似する点で新相を呈するが、他の土器は弥生時代終末期後半、中台2-2式の範疇と思われる。その他、直径1.1～1.3cmの有孔球状土製品1、軽石2・3、砂岩製礫石器4、不明鉄製品5が出土している。1は床面直上で検出されている。土製勾玉と同様の性質のものであろうか。5は混入品と思われる。なお、小型鉢23の内面胴部下位の凹みには、赤色顔料が溜まるように付着し

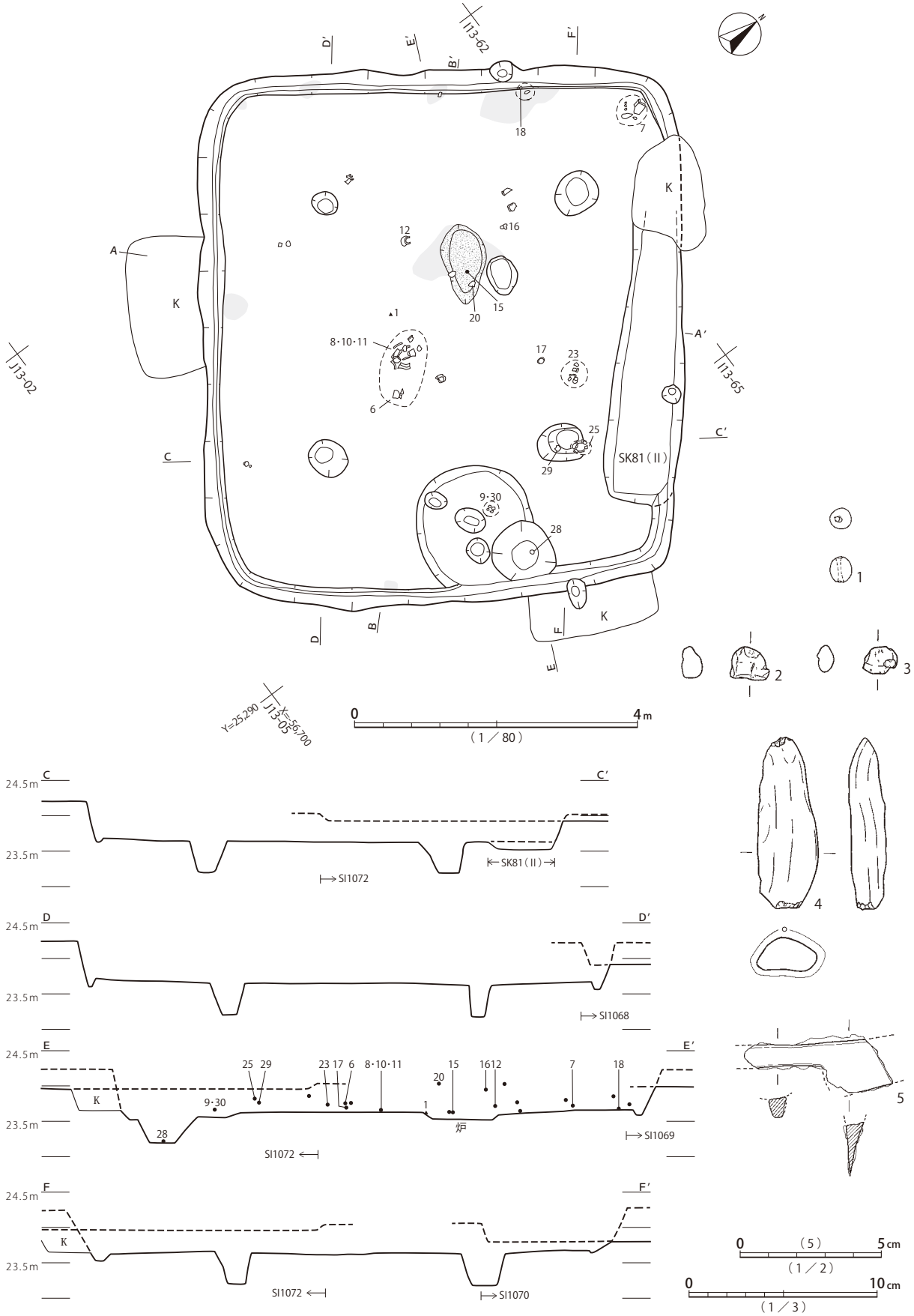
SI1071



1　暗褐色土　ロームブロック(局部的) 攪乱覆土
2　黒褐色土　暗褐色土小塊
3　黒色土　黒色土主体土、暗褐色土
4　黒褐色土　黒色土粒、暗褐色土塊多量
5　暗褐色土　黒褐色土粒、暗褐色土塊、ローム粒
6　黒褐色土　黒色土粒・暗褐色土塊各多量
7　黒褐色土　黒色土粒、暗褐色土塊多量
8　黒色土　黒色土主体土、暗褐色土
9　黒褐色土　ローム大粒
10　黒褐色土　暗褐色土塊多量
11　明茶褐色土　被熱ロームブロック、焼土　炉跡上層覆土
12　暗赤色土　焼土・暗褐色土の混合土
13　暗褐色土　黒褐色土粒、暗褐色土塊、ローム粒
14　暗褐色土　ソフトローム粒
15　暗褐色土　ローム大粒、ソフトローム粒
16　暗褐色土　ソフトローム粒
17　暗褐色土　ローム大粒、ソフトローム粒
18　暗褐色土　黒褐色土粒、暗褐色土塊、ローム粒
19　暗黄褐色土　黒褐色土・ロームの混合土
20　暗褐色土　ローム大粒、ソフトローム粒、炭　軟質
21　暗赤色土　焼土・暗褐色土の混合土
22　暗黄褐色土　ローム主体土、暗褐色土粒
23　暗黄褐色土　暗褐色土粒、ローム小ブロック　貼床層
24　暗黄褐色土　ローム微粒多量
25　暗褐色土　6層と同じでやや暗い　SK81(Ⅱ)覆土
26　暗褐色土　6層と同じ、焼土微粒多量　SK81(Ⅱ)覆土
27　暗褐色土　6層と同じ、ロームブロック少量　SK81(Ⅱ)覆土
28　暗褐色土　6層と同じ、ロームブロック多量　SK81(Ⅱ)覆土

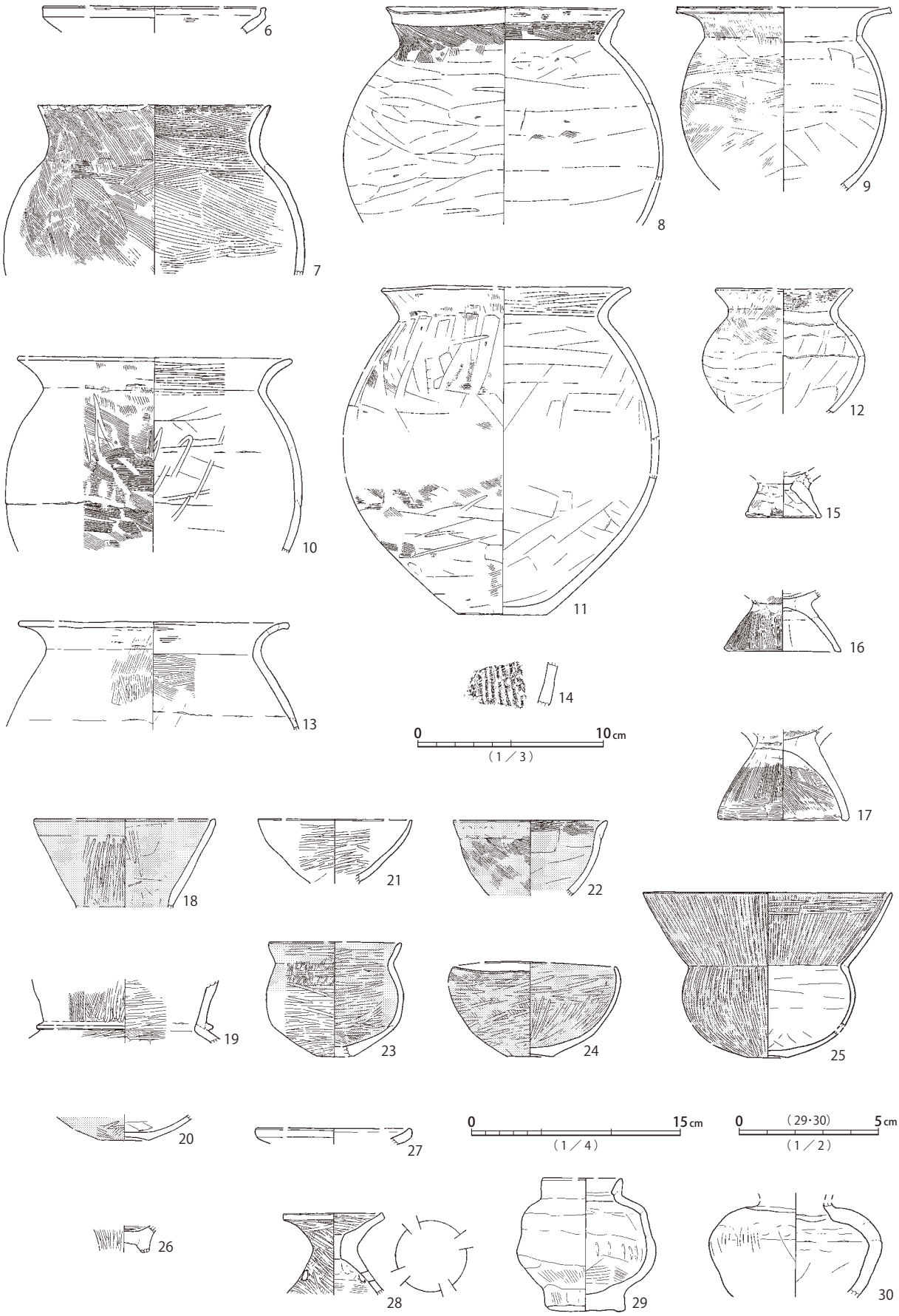
第326図　SI1071遺構(1)

SI1071



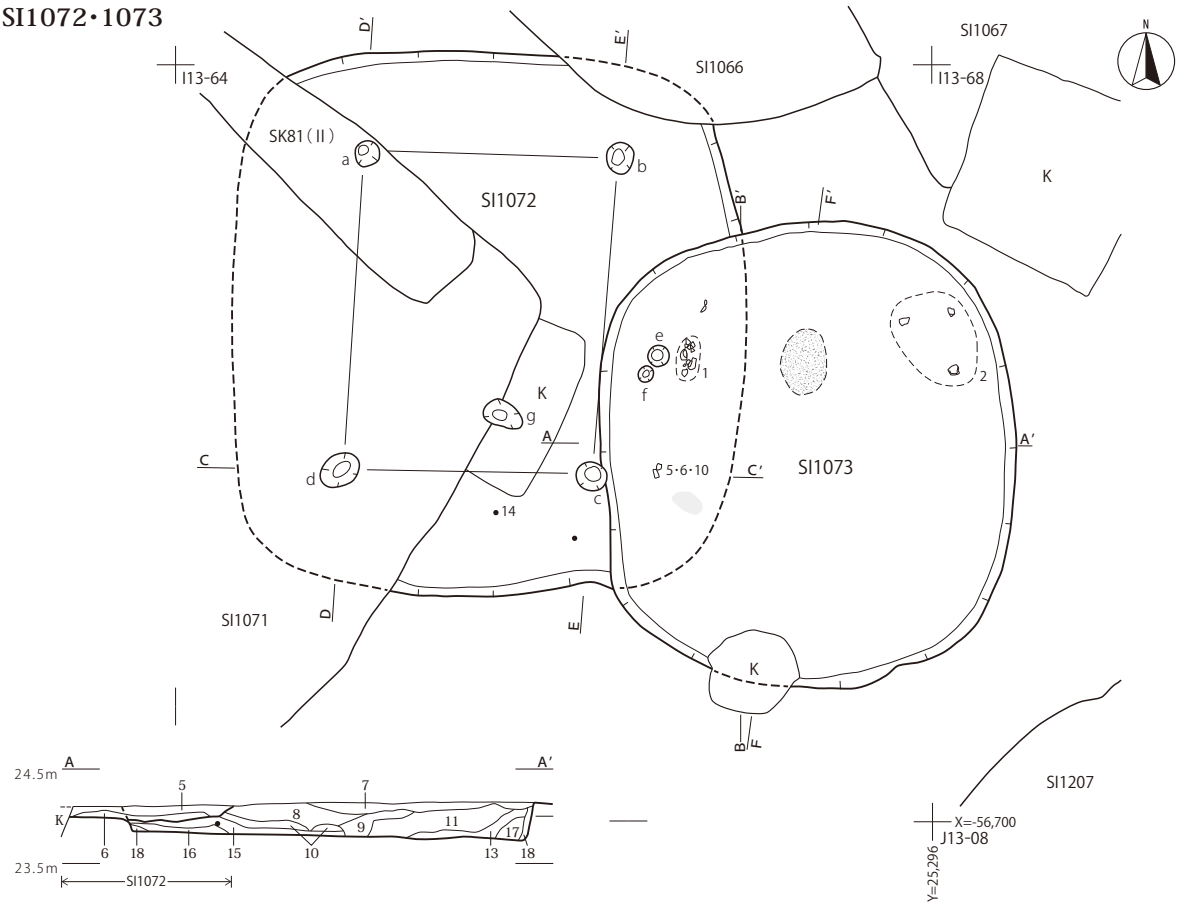
第327図　SI1071遺構（2）

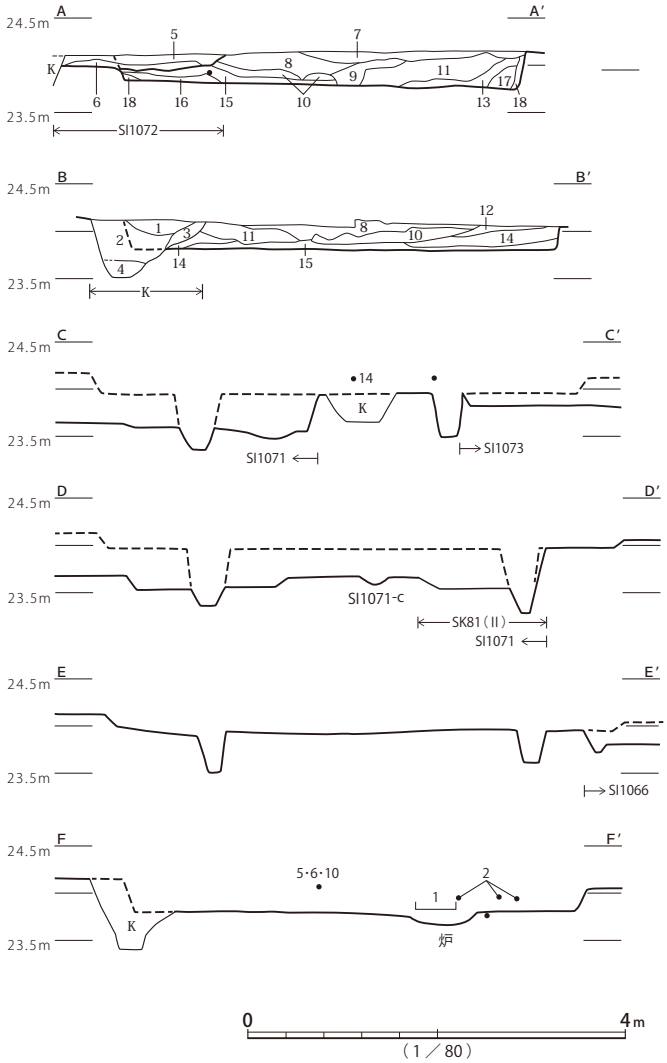
SI1071



第328図　SI1071遺物

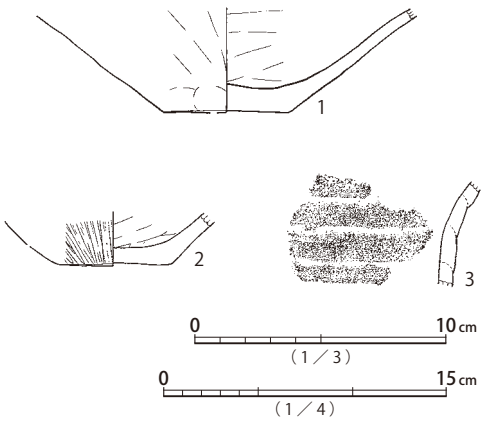
SI1072・1073





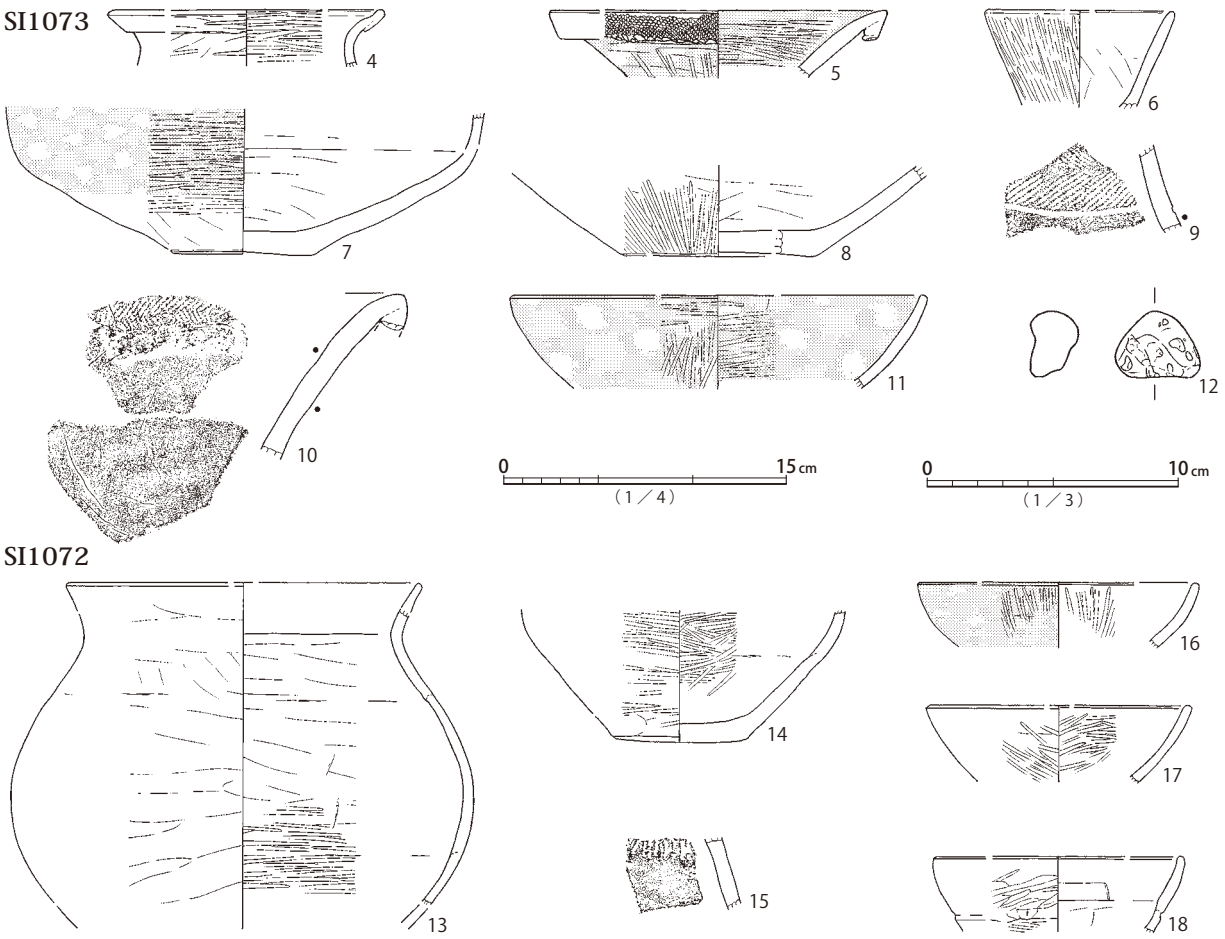
1　黒色土　ローム多量　軟質　撹乱覆土
2　黒褐色土　ソフトローム塊　軟質　撹乱覆土
3　明褐色土　ロームブロック主体土　撹乱覆土
4　黒色土　ソフトローム粒　軟質　撹乱覆土
5　黒褐色土　ソフトローム塊・同微粒　SI1072 覆土
6　黒褐色土　ローム大・小粒　硬質　貼り床状　SI1072 覆土
7　黒褐色土　ローム粒少量　軟質
8　黒色土　ローム大・小粒各多量
9　黒褐色土　ローム微粒、暗褐色土小塊
10　黒褐色土　ローム　硬質
11　暗褐色土　ローム小ブロック、ローム大粒多量
12　黒褐色土　ローム粒少量　軟質
13　黒色土　ローム大・小粒各多量
14　黒褐色土　ローム微粒、暗褐色土小塊
15　黒褐色土　8 層土にソフトローム小塊、16 層土
16　黒色土　焼土、炭、ソフトローム粒
17　黒褐色土　ローム微粒、暗褐色土小塊
18　褐色土　暗褐色土粒・ソフトローム粒の混合土

SI1073



0　4m　（1／80）

第329図　SI1072・SI1073遺構、SI1073遺物（1）



第330図　SI1072遺物、SI1073遺物（2）

ており、赤色顔料容器だった可能性がある。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

SI1072・SI1073（第 329・330 図、図版 72・234・311）

5.8 × 5.4 ？ m、深さ 15cm程度の隅円長方形と推定される竪穴建物跡SI1072と、5.0 × 4.4m、深さ35cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1073である。SI1072は西側が大きくSI1071東部と重複し、北東角がSI1066、南東部がSI1073と重複する。

SI1073は、主柱穴等は検出されておらず、中心から北に寄った位置に楕円形の炉が認められるのみである。床面周溝は検出されていない。

覆土は、壁際に褐色土があり、上層にかけて黒褐色土から黒色土の漸移的な堆積状況が認められる。焼土集中部が西側中ほどに検出されているが、規模が小さく、廃絶時に火を受けたかは不明である。SI1072床面が本遺構上層に形成される状況が土層断面に捉えられている。

遺物は、土器等が少量出土している。甕1 ～ 3、壺5・7・9・10は在来的な形態を示し、広口壺4、直口壺6、鉢11は外来的な様相の影響を受けた折衷的な形状を持つ。図示資料には床面レベルで検出された遺物は無く、やや高い位置で出土している。そのうち5・6・10は、遺物注記と標高が正しければ、SI1072覆土に帰属する可能性がある。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期から弥生時代終末期前半の所産と推定される。

SI1072は主柱穴a～dが検出されている。遺存部に炉は確認されておらず、SI1071との重複範囲に存在した可能性がある。床面周溝は検出されていない。

覆土は、黒褐色土主体の土層で、特に焼土・炭化材の集中は検出されていない。

遺物は、土器が少量出土している。胴部最大径の張る甕13、広口壺（？）14、櫛描文壺15、鉢16～18があり、床面から10cm以上高い位置で検出された14を除き、覆土一括取り上げ資料である。概ね、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形および切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

周辺遺構は、弥生時代後期後半のSI1066→SI1073→弥生時代終末期のSI1072→同終末期後半SI1071の順に構築されたと想定できる。

SI1074（第331・332図、図版70・163・234・235・311・335・336）

7.3×5.9m、深さ35cm程度の不整長方楕円形竪穴建物跡である。北西辺が弥生時代後期後半の竪穴建物跡SI1055と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、貯蔵穴と見られるaが検出される程度である。

覆土は、下層にロームブロック混じりの褐色土層が目立ち、建物廃絶後に埋め戻しがある程度、行われた可能性が示唆される。SI1055等の竪穴掘削に伴う現象であろうか。上層は黒褐色土主体で漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、東側の覆土上層から北西部の下層にかけて土器片が比較的多く検出されている。上層出土資料は、一定程度埋積が進んだ後に遺棄・廃棄された土器を含む可能性が高い。口頸部段を持つ甕1・5・7、輪積痕装飾の甕2・3・8、単節多段口縁の壺11、外面肥厚口縁の壺13・14、山形文の伴う沈線区画文様の壺12、鉢19～22、高杯23等、概ね弥生時代後期前半、久ヶ原式の特徴を示す。上層出土の甕2、壺12は久ヶ原2式新段階、下層の甕3・8、壺11は久ヶ原2式古段階の範疇と思われる。高杯脚部23は縄文施文後に粘土を追加し、焼成前に補修している。大型壺16も同様の痕跡と見られる。その他、チャート製礫石器24、砂質頁岩製礫石器25、砂岩製礫石器26が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

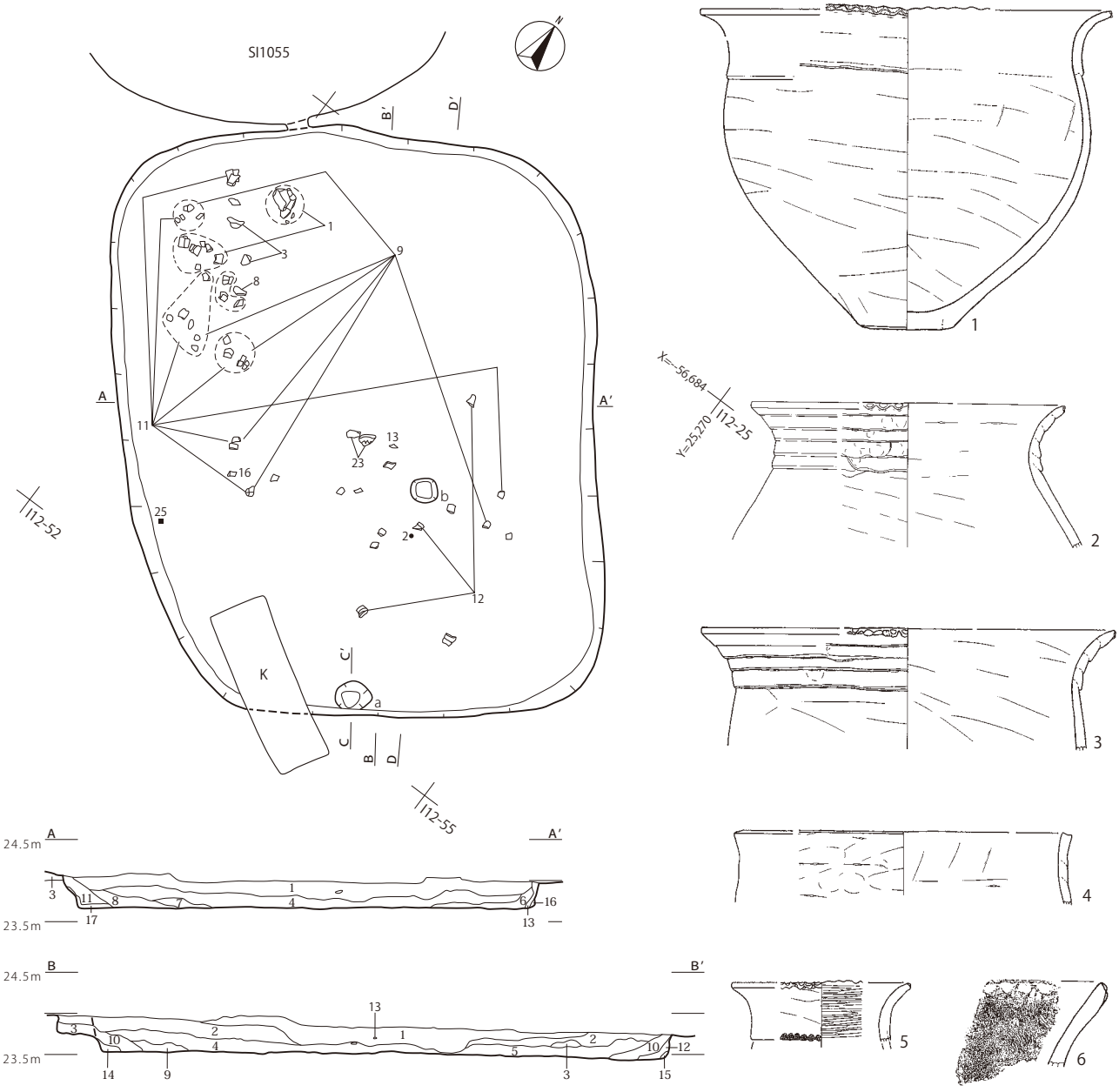
SI1075（第333・334図、図版70・163・235・311）

6.9×6.6m、深さ30cm、隅円方形竪穴建物跡である。北西辺・南西辺が撹乱で床面まで破壊を受けている。南西角が弥生時代後期前半の竪穴建物跡SI1076と重複し、その覆土中に床面を形成する。主柱穴a～d、貯蔵穴の可能性があるe・f・gが検出されている。中心からやや北西の位置、柱間範囲の内側に、楕円形の炉が2箇所連結した状態で検出されている。遺存部には床面周溝が確認され、本来は全周したと見られる。

覆土は、床面から15cm前後の高さで部分的に焼土層が検出されている。他は、北壁際初期堆積の褐色土層を除き、概ね黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、土器・石製品が少量出土している。口頸部段を持つ甕1、垂滴状外面肥厚口縁を持つ壺

SI1074



1　黒褐色土
2　褐色土　ローム主体土ブロック
3　暗黄褐色土　ローム主体土ブロック
4　暗褐色土　ロームブロック多量、黒褐色土ブロック、褐色土粒
5　褐色土、ローム粒、ロームブロック、黒褐色土ブロック混入
6　暗褐色土
7　ローム粒土、ロームブロック混入
8　褐色土、黒褐色土混入
9　黒褐色土　褐色土
10　黒色土
11　褐色土　黒褐色土
12　黒色土、ローム粒混入
13　褐色土、黒褐色土混入
14　黒褐色土
15　褐色土
16　褐色土　ローム粒
17　褐色土粒混入

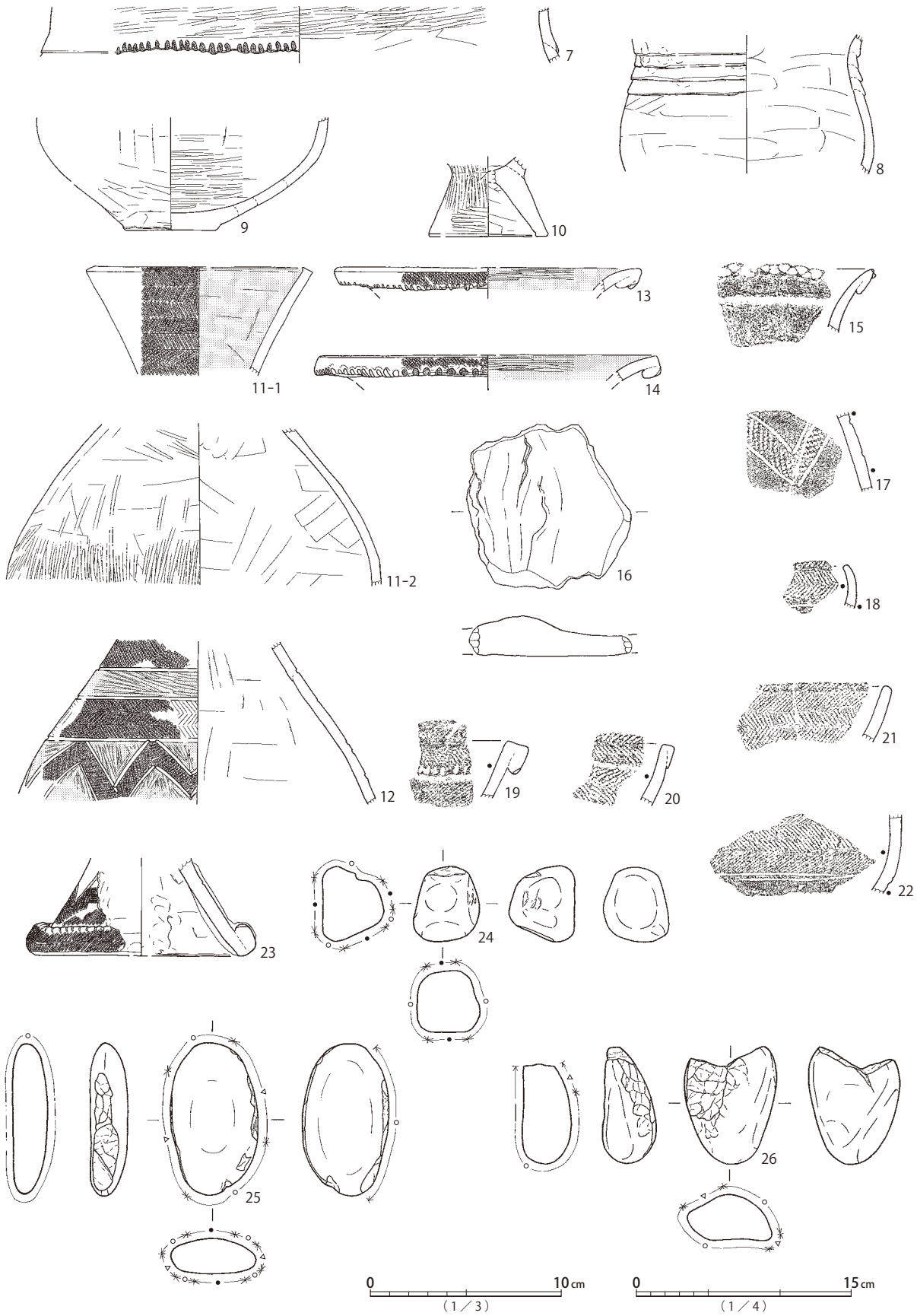
0　10cm　（1／3）
0　15cm　（1／4）

1　黒褐色土　暗褐色土
2　黒褐色土　ソフトローム粒
3　暗褐色土　ソフトローム・２層の混合土

0　1m　（1／40）
0　4m　（1／80）

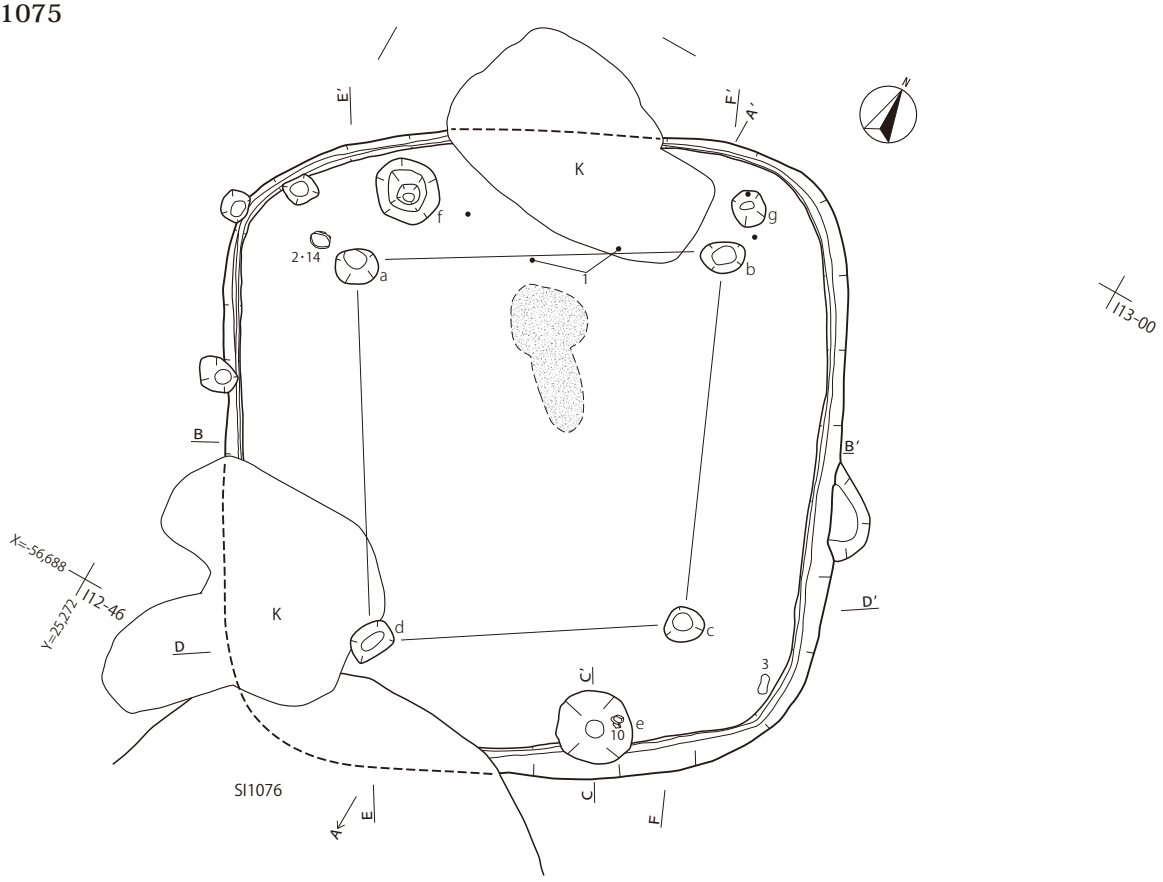
第331図　SI1074遺構、SI1074遺物（1）

SI1074

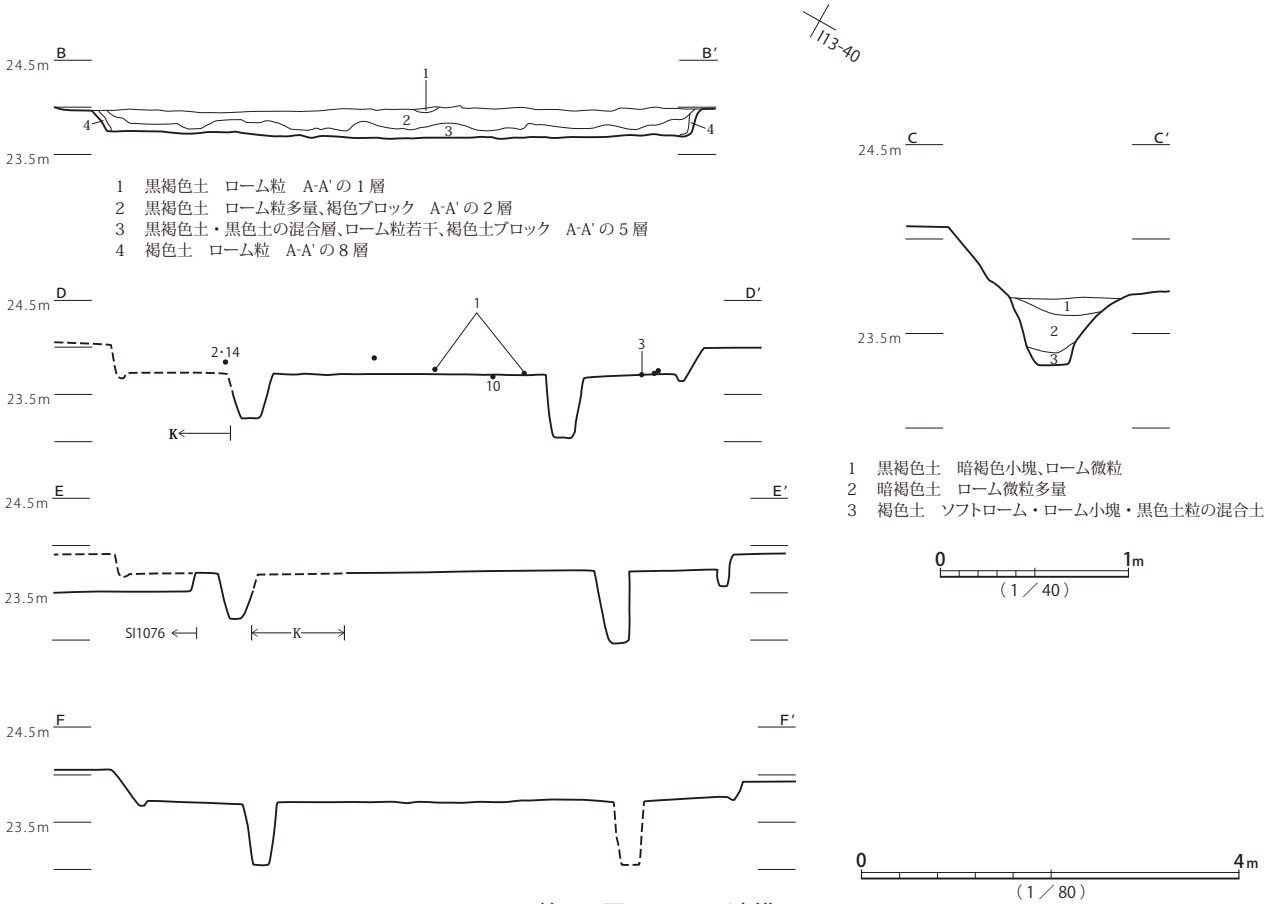


第332図　SI1074遺物（２）

SI1075

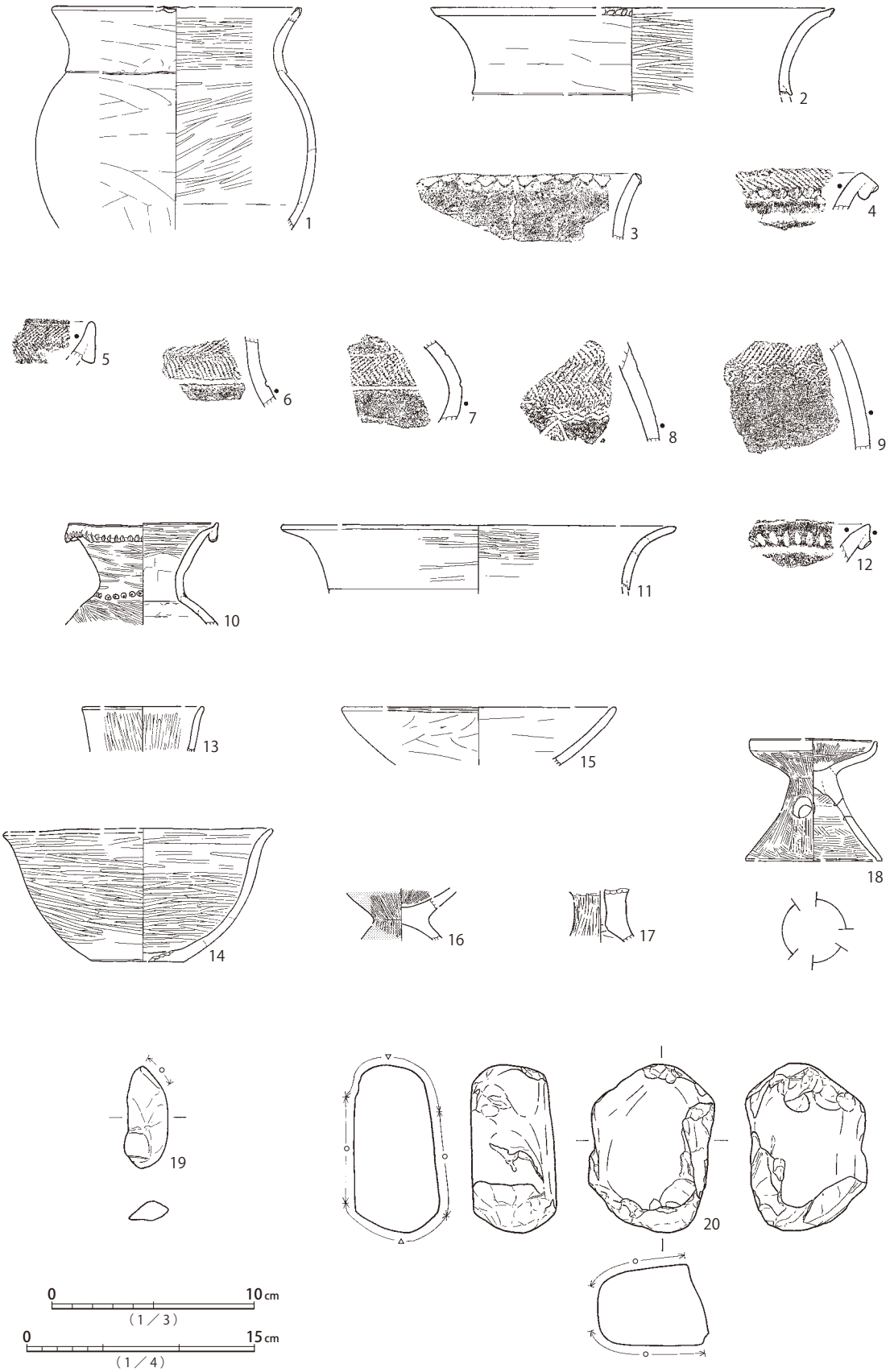


A-A'は第 335 図参照



第333図　SI1075遺構

SI1075



第334図　SI1075遺物

10等が床面直上、口頸部段を持つ甕2、外反口縁の鉢14等が下層から検出されている。在来的な特徴を残しながらも過渡的な様相を示すことから、概ね弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。小型器台18はグリッド取り上げ遺物で層位の対応は不明だが、本遺構覆土に由来する可能性が高い。その他、赤玉製礫石器19、ホルンフェルス製礫石器20が出土している。20は遺物注記によると、貯蔵穴e内から出土したと見られる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半に帰属すると考えられる。

SI1076（第335・336図、図版70・164・235・311・336）

5.7×5.0m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北辺が弥生時代終末期前半の竪穴建物跡SI1075と重複し、覆土が掘り込まれる。北西辺は撹乱され、床面まで破壊を受ける。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。主柱穴c・dには北側に接して、建て替えに伴う、あるいは副え柱と見られるc'・d'が認められる。h・gも柱筋に近く、揃って北寄りの位置にあり、建物に関係する機能も推定できる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は西辺のみ検出されている。

覆土は、土層断面記録に注記が無く詳細は不明だが、焼土・炭化材の集中部が平面図に記録されていないため、概ね連続的、漸移的な堆積状況と思われる。

遺物は、床面直上から比較的遺存状態の良い土器が検出されている。輪積痕装飾の甕1、甕2、沈線区画文様の壺4、沈線区画文様の外面肥厚口縁鉢14があり、弥生時代後期前半、久ヶ原2式新段階に位置づけられる。網目状撚糸文広口壺3、結節多段壺5、口縁部単節縄文多段壺7、山形文壺10、鉢12・13、器種不明（炉器台？）11は、いずれも覆土一括取り上げ資料である。炉器台の可能性がある11は本遺構に伴うとすると、初源的な例とも考えられる。口縁端部内外面に押捺の加えられる壺6は、SI1089出土片と遺構間接合している。これも覆土一括取り上げ資料のため、同時存在等の積極的根拠にはできないが、両遺構が近い時期に営まれた可能性を示唆する。その他、珪質頁岩製礫石器15、砂岩製砥石16・17、砂岩製礫石器18、軽石製砥石19が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

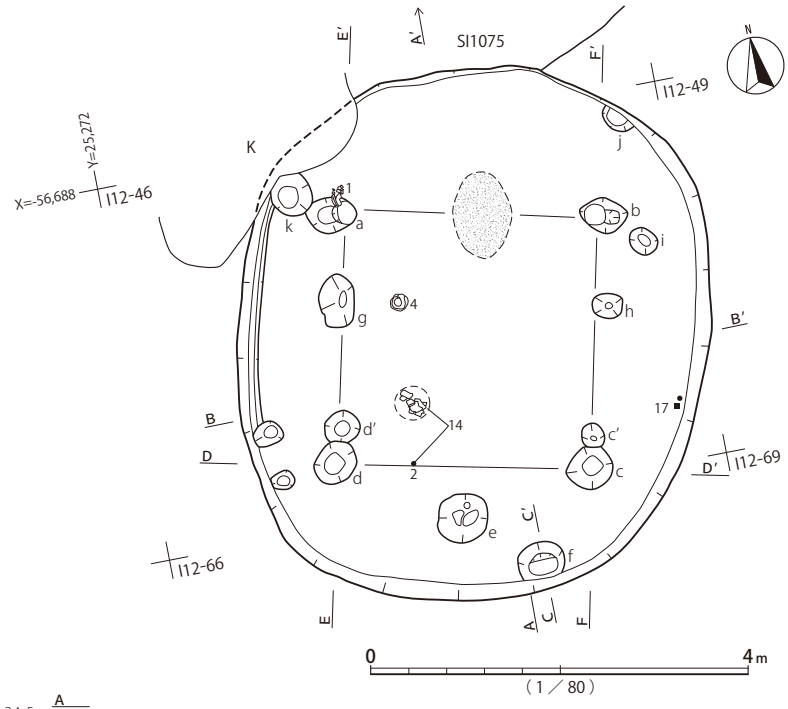
SI1077（第337図、図版3・4・235・311・336）

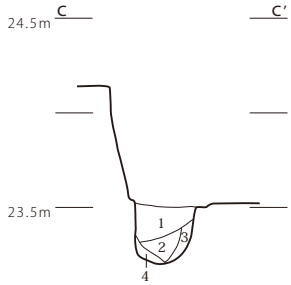
3.5×3.2m、深さ30cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。古墳時代後期以降の方形墓SM1123周溝北西部が重複し、覆土を床面近くまで掘り込んでいる。北側は、弥生時代後期後半の竪穴建物跡SI1015と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、楕円形の炉が中心軸上、北西壁寄りに検出されている。炉の反対側には、ハシゴ穴及び貯蔵穴の可能性がある凹部が航空写真に認められるが、詳細は不明である。

覆土は、暗褐色から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、床面直上から下層にかけて土器が少量出土している。端部交互押捺の外面肥厚口縁を持つ甕1、底部2、沈線区画文様椀3が検出されており、弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。その他、花崗閃緑岩製礫石器5が出土している。

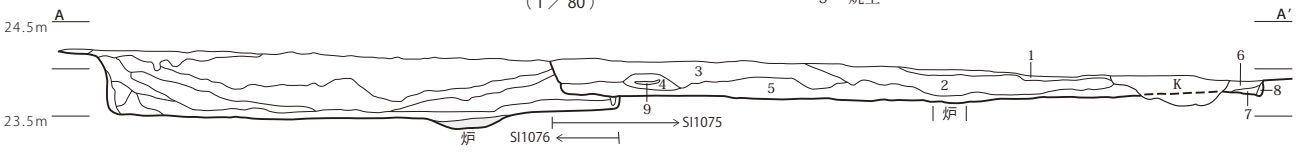
SI1076

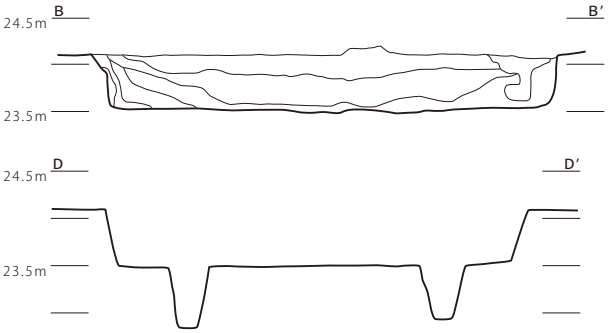


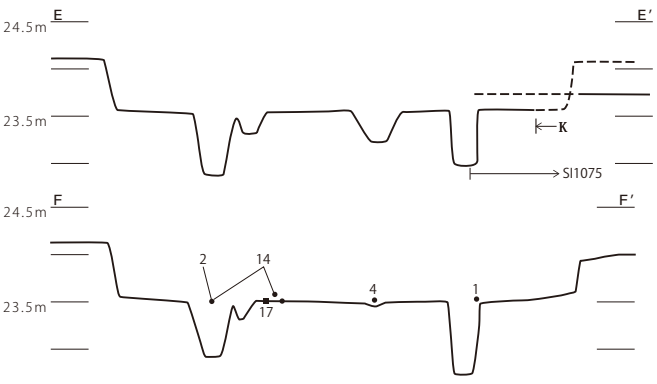


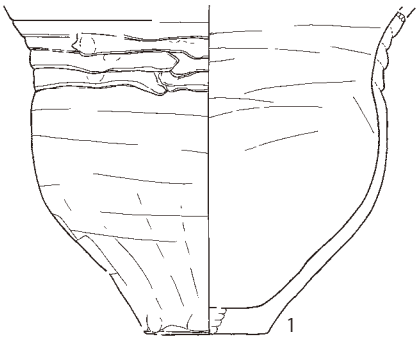
1　黒褐色土　ローム微粒、ローム小ブロック少量
2　黒褐色土　黒色土と１層にローム大粒混入
3　黒褐色土　ローム大粒多量
4　黒褐色土　ローム微粒多量

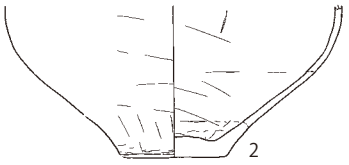
1　黒褐色土　ローム粒
2　黒褐色土　ローム粒多量、褐色ブロック
3　黒褐色土　褐色土ブロック若干
4　黒褐色土　焼土
5　黒褐色土・黒色土の混合層、ローム粒若干、褐色土ブロック
6　黒褐色土　ローム粒
7　黒褐色土
8　褐色土　ローム粒
9　焼土

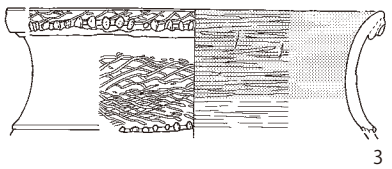


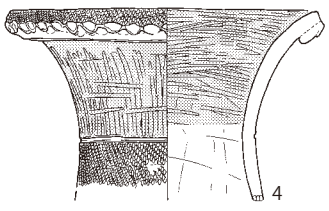


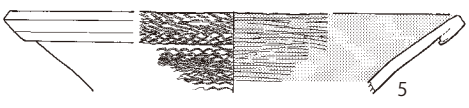












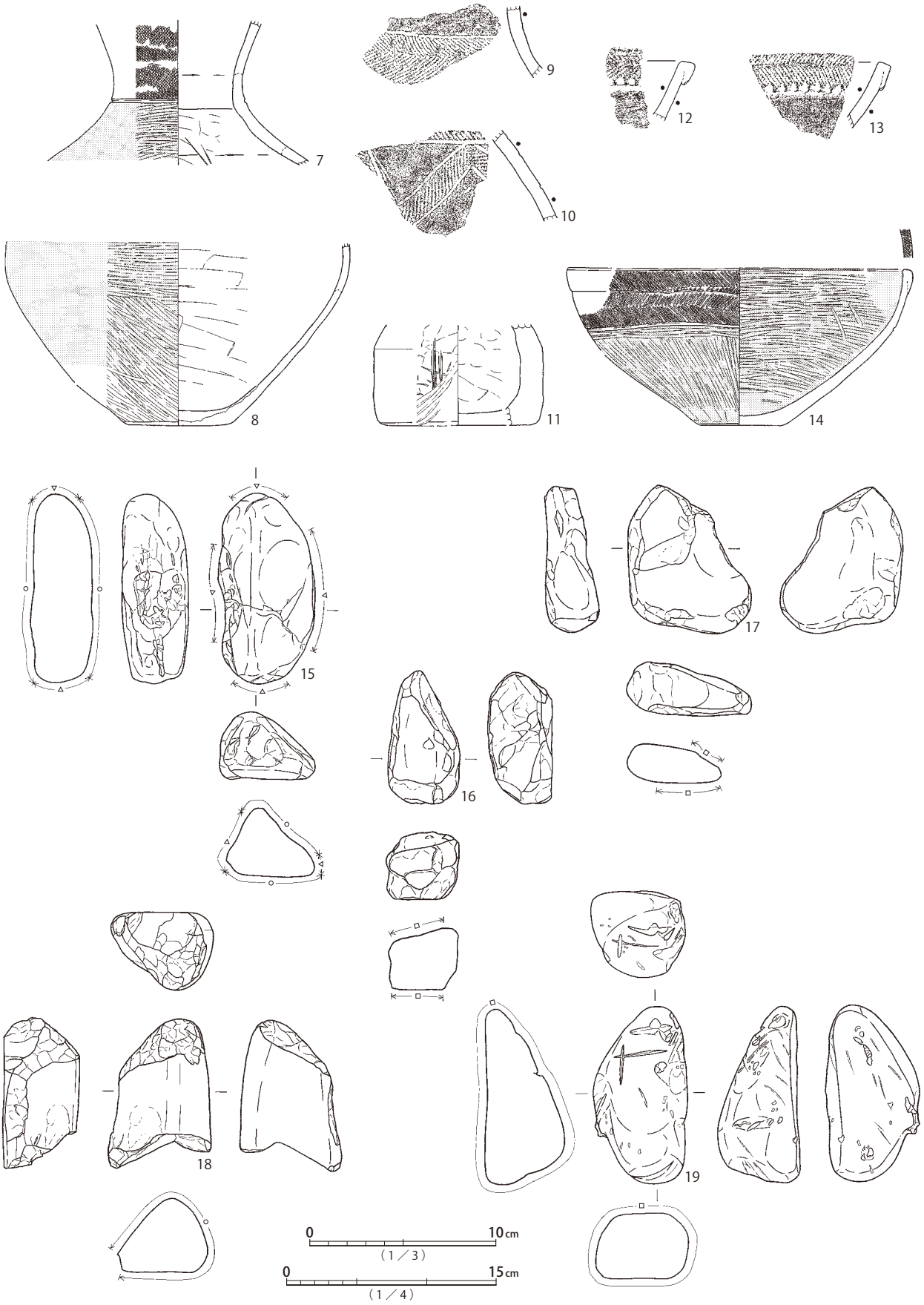


0　10cm　（1／3）

0　15cm　（1／4）

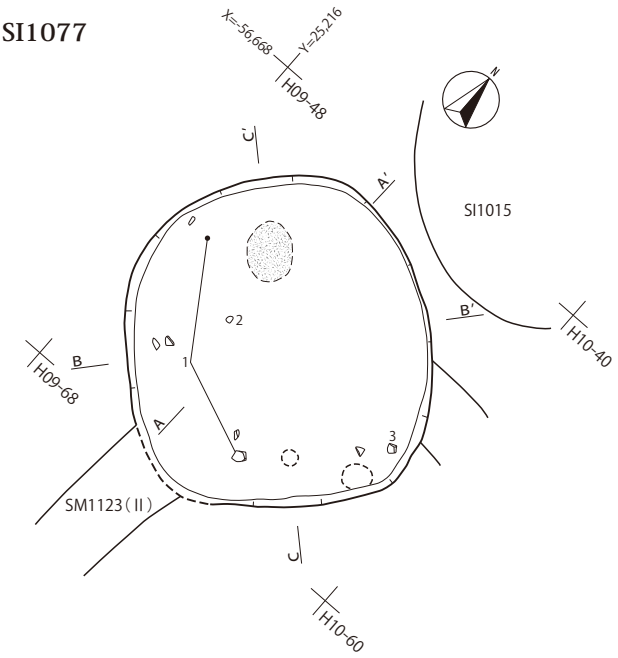
第335図　SI1076遺構、SI1076遺物（1）

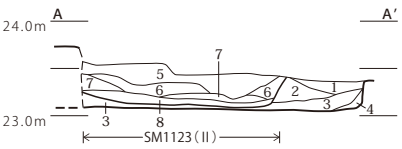
SI1076



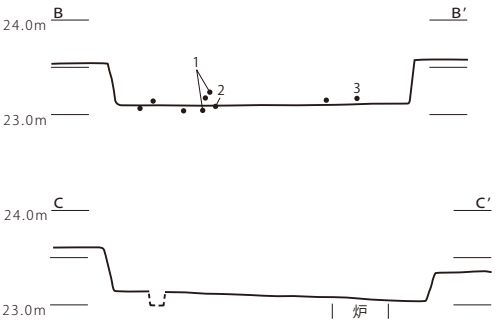
第336図　SI1076遺物（２）

SI1077

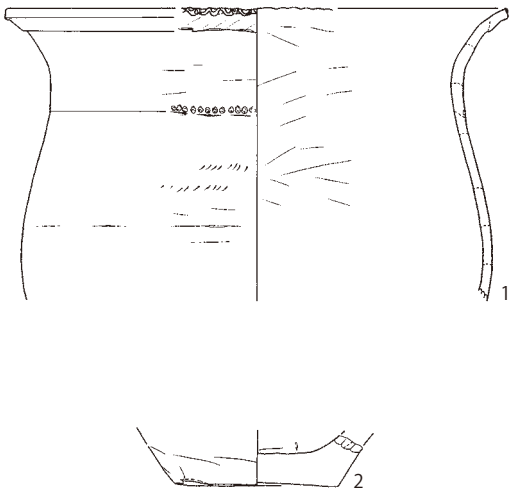




1　黒褐色土　ローム粒
2　暗褐色土　ローム・ソフトローム・黒褐色土粒各多量
3　黒褐色土　ローム小ブロック少量、ローム微粒
4　暗褐色土　ローム・黒褐色土が同程度混じる
5　黒褐色土　ソフトローム小塊　SM1123(Ⅱ)覆土
6　黒褐色土　ソフトローム小塊多量　SM1123(Ⅱ)覆土
7　黒色土　ソフトローム小塊少量　SM1123(Ⅱ)覆土
8　黒褐色土　ソフトローム小塊・ローム粒各多量　SM1123(Ⅱ)覆土



0　4m
(1／80)

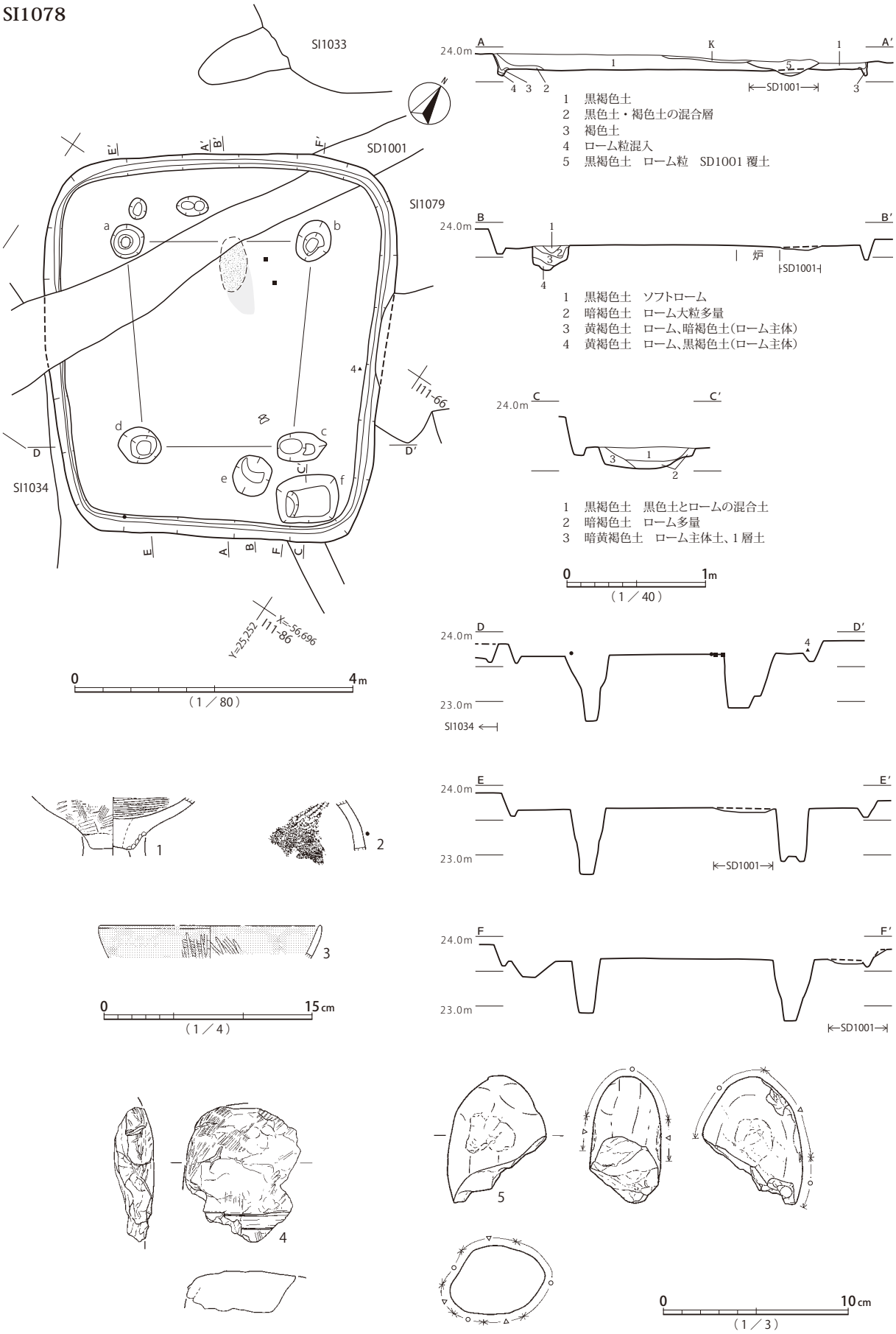


0　10cm
(1／3)

0　15cm
(1／4)

第337図　SI1077遺構・遺物

SI1078



第338図　SI1078遺構・遺物

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。SI1015に先行して構築された可能性が高い。

SI1078（第338図、図版71・236・299・311）

5.6×5.0m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。南西辺から北角にかけて、近世以降の溝状遺構SD1001と重複し、床面まで掘り込まれている。北東辺は、弥生時代後期後半の竪穴建物跡SI1079、時期不明の掘り込みと重複する。南西側は弥生時代終末期の竪穴建物跡SI1034と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸からやや東寄り、a・b間ライン内側に接する位置に楕円形の炉が設けられる。炉は南東側に焼土もしくは火床面が連結されて検出されている。柱配置は北西側a・b間が広く、南東側c・d間が狭くなり、竪穴形状と相似的である。床面周溝は遺存部で検出されており、本来は全周したと見られる。

覆土は、初期堆積の褐色土を除き、概ね黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。炉の南東側に焼土集中部が検出されているが、炉覆土に由来すると見られ、廃絶時に火を受けたかは不確定である。炉周辺の他は、断面・平面ともに焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、植物圧痕を持つ板状焼成粘土塊4が床面で出土したほかは、覆土一括取り上げ資料である。タタキ台付甕1、結節文区画壺2、赤彩鉢3があり、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、チャート製礫石器5が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI1079（第339・340図、図版71・236・336）

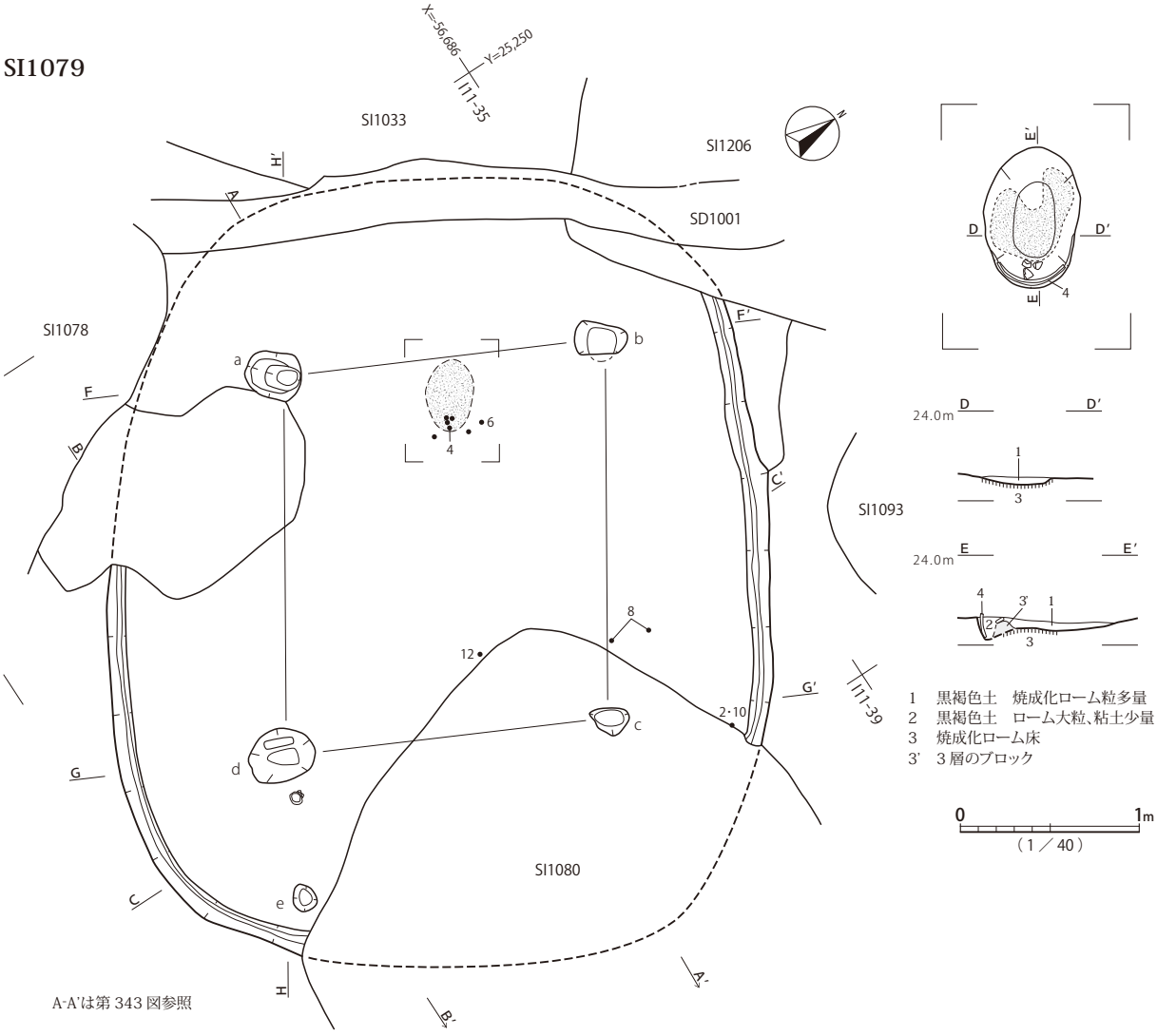
8.8？×7.4m、深さ25cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北西側が弥生時代終末期の竪穴建物跡SI1033・SI1078・SI1206、南東部が弥生時代終末期前半の竪穴建物跡SI1080と重複する。SI1080による掘り込みは本遺構の床面を破壊している。南西辺は時期不明の掘り込み、北西辺は近世以降の溝状遺構SD1001が重複し、全体的に遺存状態は良くない。主柱穴a～d、ハシゴ穴の可能性があるeが検出されている。中心軸上、a・b間ライン内側に接する位置に楕円形の炉が設けられ、竪穴中心側縁部に土器片を立てて埋置している。遺存部に床面周溝が検出されており、本来は全周したと見込まれる。

覆土は、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。遺構写真では中央やや南寄りの覆土中に焼土の散布を認められるが、明確な焼土・炭化材の集中部は記録されていない。

遺物は、炉に埋置された大型壺4を含め、床面近くから土器が少量出土している。タタキ甕3は覆土一括取り上げ資料であり、周辺の弥生時代終末期竪穴建物跡に由来する可能性が高い。口縁端部交互押捺の甕1、沈線区画文様壺6、結節文区画壺8、椀10、鉢12が床面レベルで検出されている。網目状撚糸文の壺7と鉢11は覆土一括取り上げ資料で、弥生時代後期中葉に位置づけられる。壺6は弥生時代後期前半、久ヶ原式、壺8は弥生時代後期後半、山田橋式の特徴を示す。

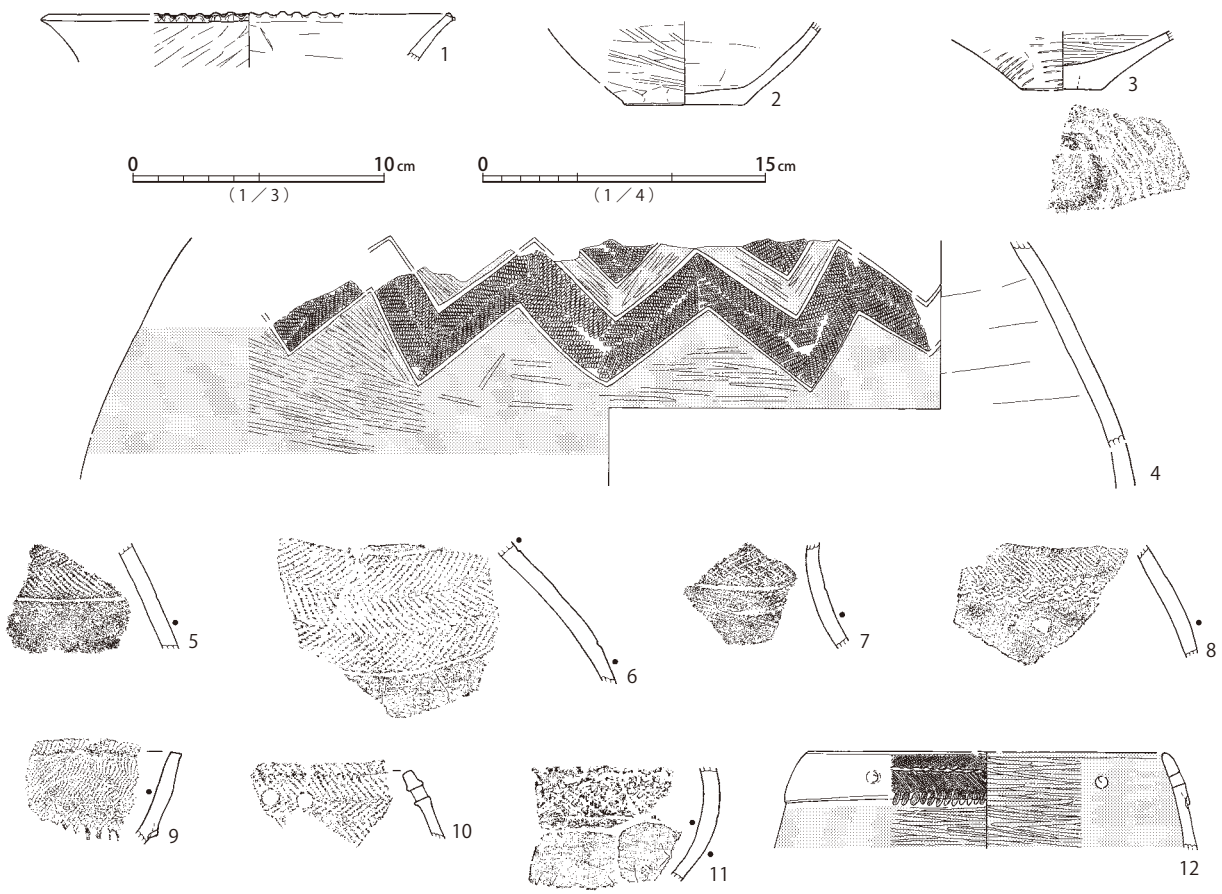
本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

SI1079



第339図　SI1079遺構

SI1079



第340図　SI1079遺物

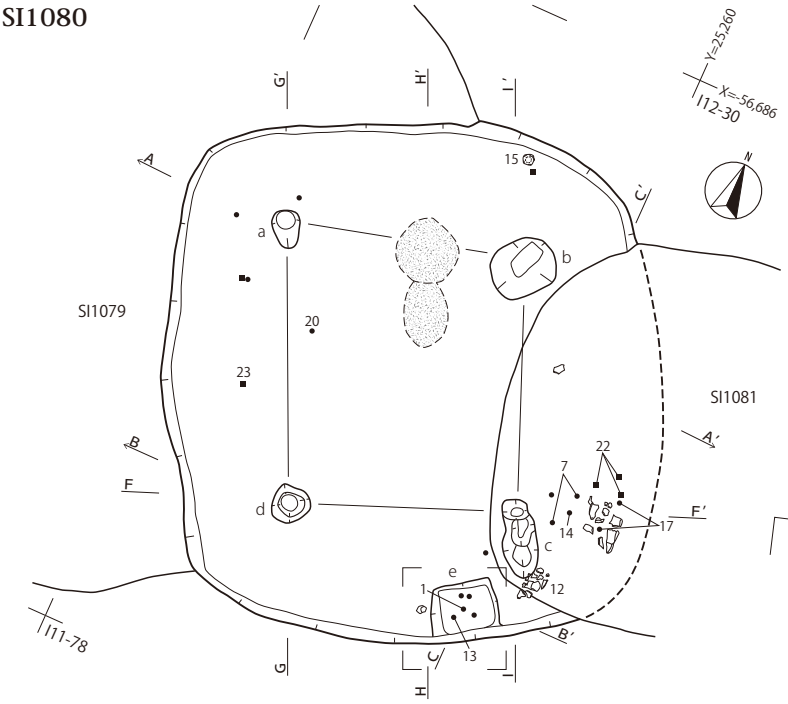
SI1080（第 341・342 図、図版 71・72・164・236・311）

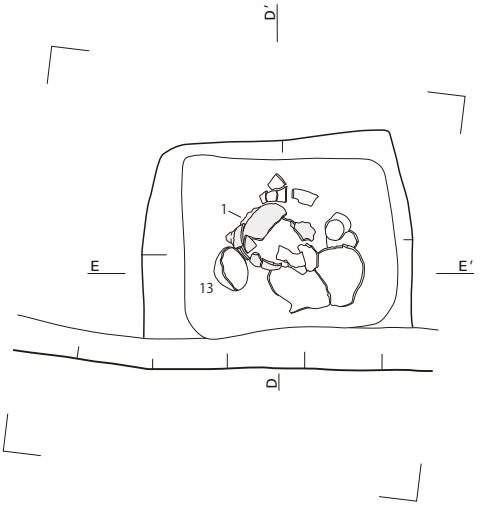
5.6 × 5.3m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。西側が弥生時代後期後半の竪穴建物跡SI1079、東側が弥生時代後期中葉の竪穴建物跡SI1081 と重複し、SI1081 覆土中に床面を形成している。主柱穴a ～ d、貯蔵穴eが検出されている。貯蔵穴eは、b・c間ラインより中央側に位置し、明確な方形を呈する。中心軸からやや東寄り、a・b間ラインと交差する位置に炉が設けられる。炉は火床面が竪穴中央側に連結する形で検出されている。床面周溝は検出されていない。

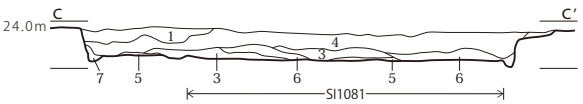
覆土は、暗褐色から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材は検出されていない。SI1081 覆土との切り合い部は床面として硬化している。

遺物は、床面直上を中心に貯蔵穴内からも土器が出土している。貯蔵穴内からは、折衷的な形態のハケメ台付甕1、赤彩小型鉢13、床面レベルからは、押捺の伴う外面肥厚口縁の壺7、大型壺12、小型鉢14、鉢17等が検出されている。覆土一括取り上げ資料には、受口状口縁甕2・3、櫛描文壺11等が含まれる。台付甕1は口縁端部が在来的な交互押捺装飾を持ちながら、器面仕上げがハケメになっており、折衷的、過渡的な様相を示す。鉢14・15・17は口縁部を小さく屈折・外反させる形態が特徴的であり、床面及び貯蔵穴出土土器は、中台1－1式に位置づけられる。その他、ミニチュア土器19・20、軽石製砥石21、チャート製礫石器22、砂岩製礫石器23、流紋岩質結晶凝灰岩製礫石器24、礫質砂岩製礫石器25が出土している。

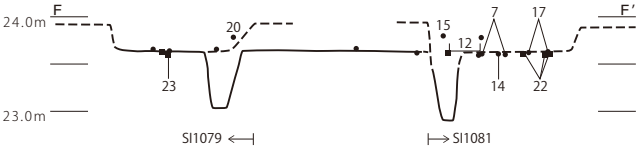
SI1080

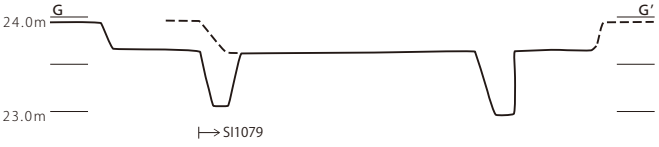


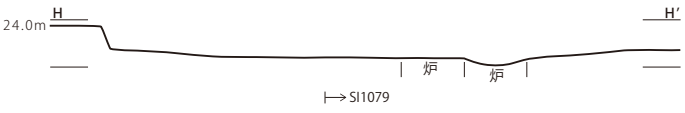


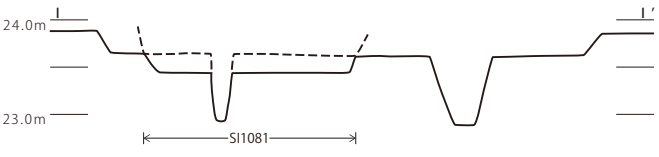


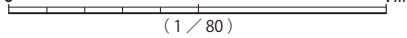
1　暗褐色土　黒褐色土粒、ロームブロック少量、ソフトローム塊　SI1080 覆土
3　黒褐色土　暗褐色土塊　硬質　SI1080 覆土
4　黒褐色土　硬質　SI1080 覆土
5　黒褐色土　硬質　4 層より硬い　貼り床状　SI1081 覆土
6　黒褐色土　褐色土塊(ローム主体)多量　4 層と同系　SI1080 覆土
7　暗褐色土　ソフトローム塊、ハードローム小塊　SI1080 覆土



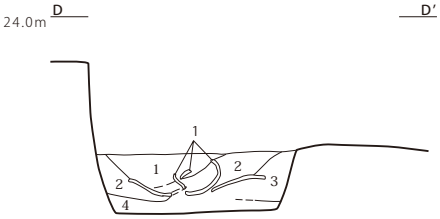






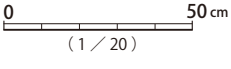


（1／80）



1　黒褐色土　暗褐色土小塊多量
2　黒褐色土　ローム大粒多量
3　黒褐色土　ローム微粒多量
4　暗褐色土　ローム・黒褐色土の混合土

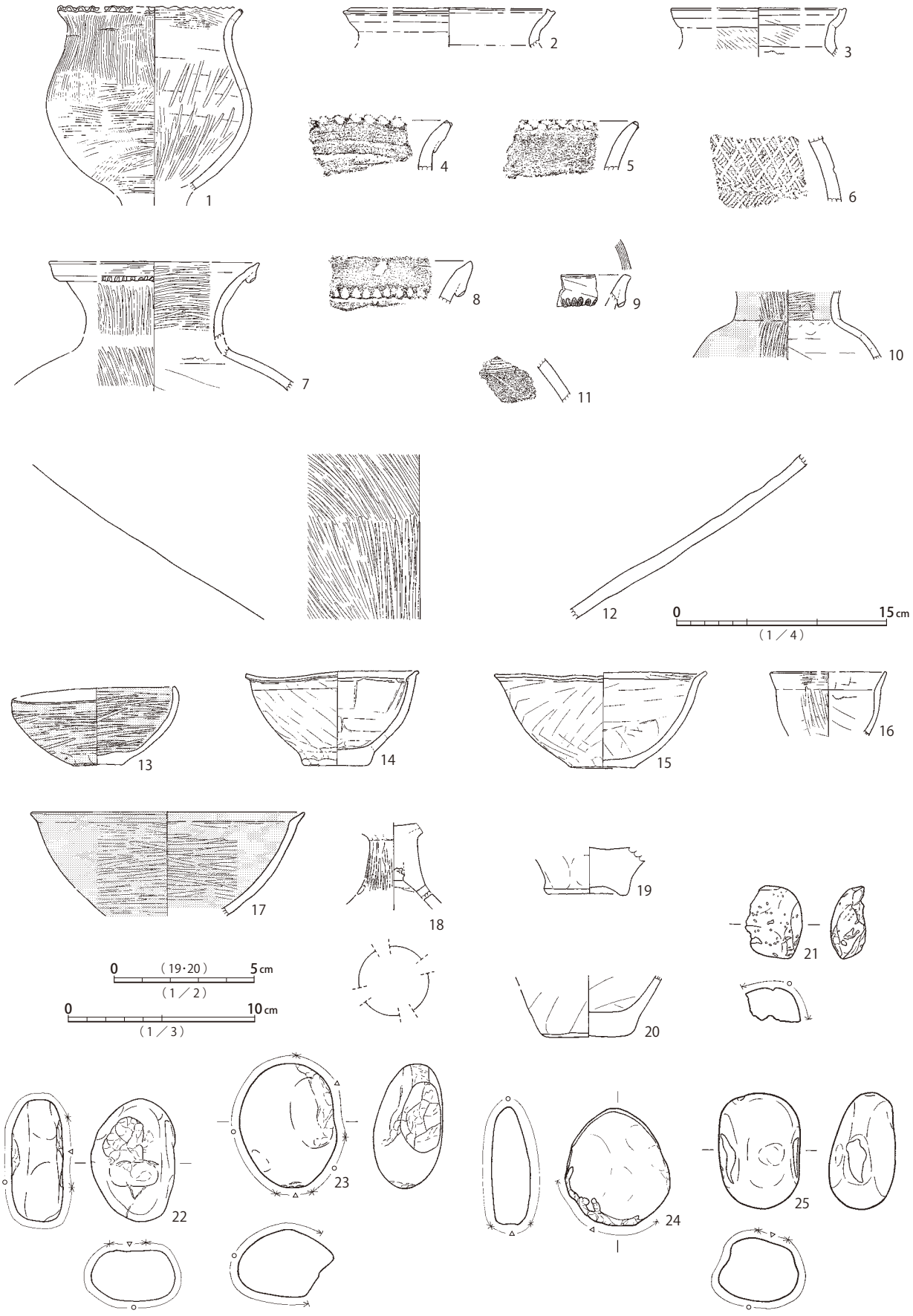




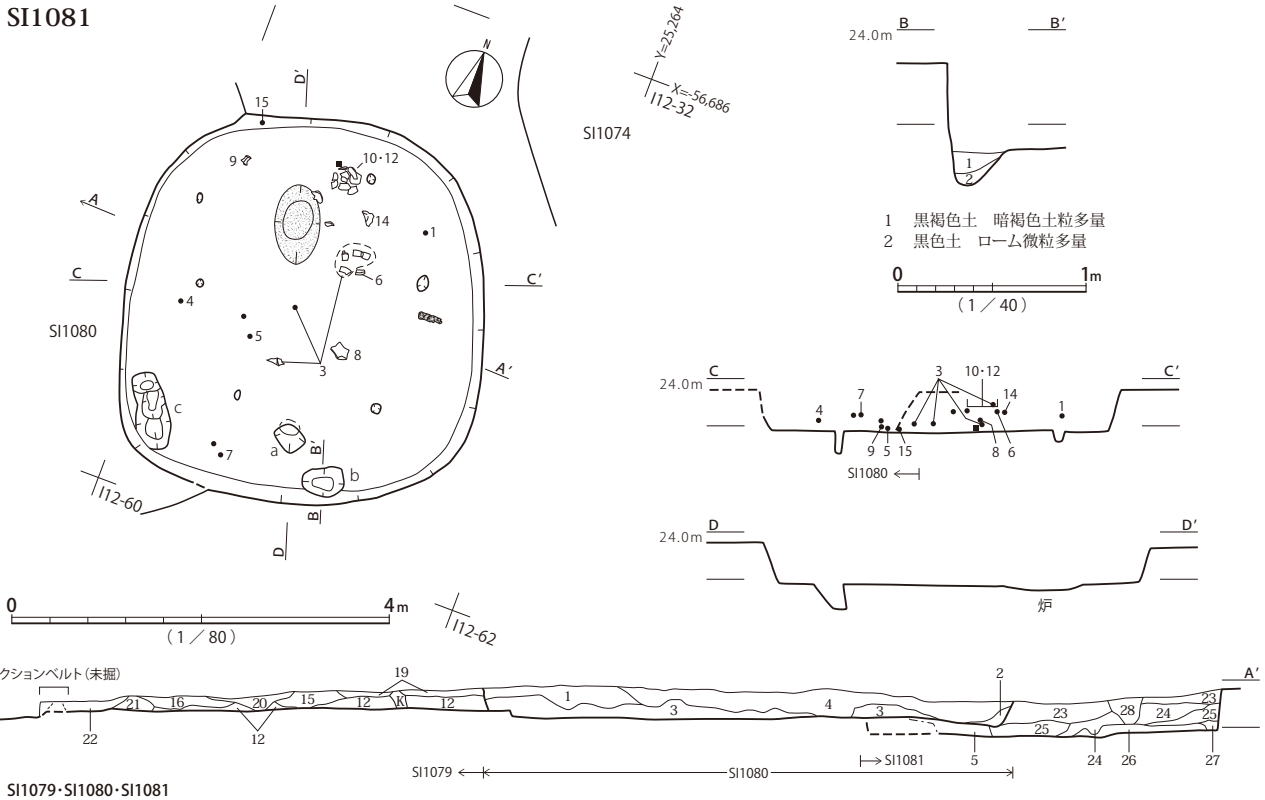
（1／20）

第341図　SI1080遺構

SI1080

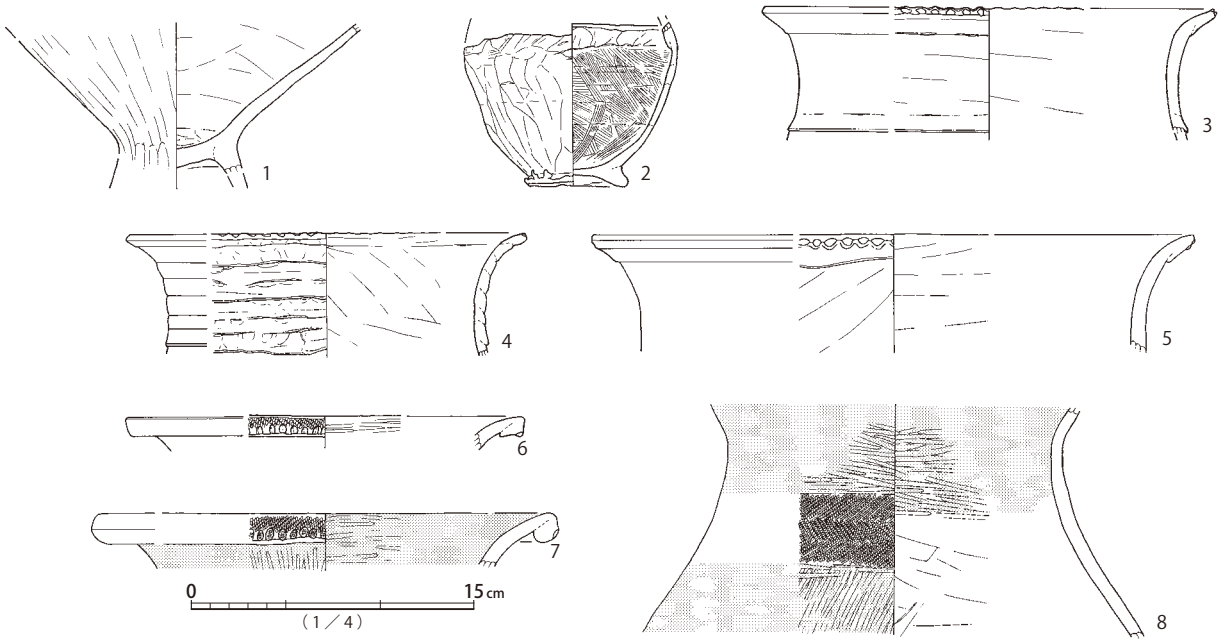


第342図　SI1080遺物



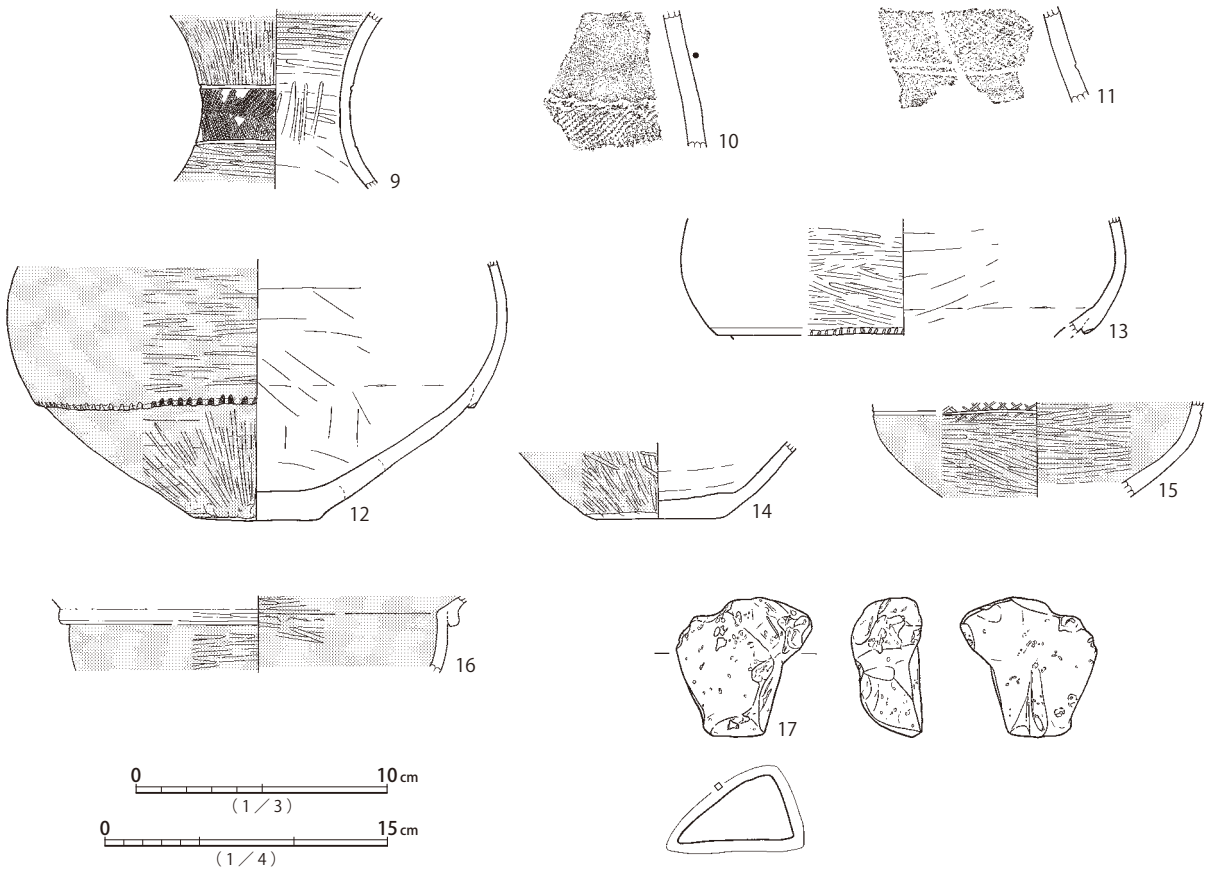
SI1079・SI1080・SI1081

1 暗褐色土 黒褐色土粒、ロームブロック少量、ソフトローム塊 1～4層 SI1080 覆土
2 黒褐色土 暗褐色土粒、焼土微粒
3 黒褐色土 暗褐色土塊 硬質
4 黒褐色土 硬質
5 黒褐色土 硬質 4層より硬い 貼り床状 SI1081 覆土
6 黒褐色土 褐色土塊（ローム主体）多量 4層と同系 SI1080 覆土
7 暗褐色土 ソフトローム塊、ハードローム小塊 SI1080 覆土
8 暗褐色土 ソフトローム塊、10層を混入 8～22層 SI1079 覆土
9 暗褐色土 ローム小ブロック少量、10層を混入
10 黒茶褐色土 黒褐色土、暗褐色土粒
11 黒褐色土 ソフトローム粒、ローム小ブロック
12 黒褐色土 ソフトローム塊
12' ローム塊
13 黒色土 ソフトローム塊
14 暗褐色土 黒褐色土、ローム 貼り床
15 黒褐色土 暗褐色土、ソフトローム微粒
16 黒褐色土 15層に黒色土多量
17 暗褐色土 15層にソフトローム粒多量
18 褐色土 ローム主体土
19 暗褐色土 ローム多量 硬質
20 黒色土 暗褐色土粒少量 浅い掘り込み覆土
21 黒褐色土 ローム粒多量、ローム小ブロック
22 黒褐色土 ローム粒少量
23 黒褐色土 暗褐色土多量、ローム 24層と同系 23～28層 SI1081 覆土
24 黒褐色土 ソフトローム、暗褐色土塊、ローム粒 23層と同系
25 黒色土 ソフトローム粒多量
26 黒色土 ローム大粒 硬質 貼り床状
27 褐色土 ローム、暗褐色土
28 黒褐色土 黒褐色土、暗褐色土 軟質
29 黒色土 黒褐色土、ローム小ブロック少量 土坑覆土
30 暗褐色土 ローム大粒多量、ロームブロック 土坑覆土
31 黒褐色土 ローム粒 土坑覆土
32 暗褐色土 黒褐色土、ローム 土坑覆土
33 褐色土 ローム、ロームブロック 土坑覆土



第343図 SI1081遺構、SI1081遺物（1）

SI1081



第344図　SI1081遺物（2）

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

周辺遺構は、弥生時代後期後半のSI1079・SI1081→弥生時代終末期前半のSI1080→同終末期のSI1033→SI1206・SI1078、という順で構築されたと想定される。

SI1081（第343・344図、図版71・72・164・236・237・312）

4.1×3.8m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。西側が弥生時代終末期前半の竪穴建物跡SI1080と重複し、北東側が同後期前半の竪穴建物跡SI1074、西側が同後期中葉の竪穴建物跡SI1079と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bが検出されるのみである。aは断面形が外方へ傾斜し、側壁がオーバーハングする。

覆土は、概ね黒褐色から黒色土を主体とする漸移的な堆積状況を示すが、床面上10cm程度において炭化材が検出されており、廃絶過程で火を受けた可能性がある。西側で重複するSI1080床面が覆土中に形成され、その範囲には硬化が認められる。

遺物は、床面から上層にかけて土器片等が出土している。ナデ台付甕1、小型台付甕2、在来系の甕3～5、壺6～11、広口壺12・13、鉢（高杯）15・16等がある。5・9・15は床面近くで出土しており、概ね弥生時代後期中葉、久ヶ原2式新段階から山田橋1式に位置づけられる。出土位置不明の小型台付甕2は、SI1080等の周辺遺構に由来する可能性も考えられる。その他、軽石17が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産と推定される。

SI1082・SI1083（第 345・346 図、図版 72・164・237・312）

5.0 × 4.2m、深さ 35cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1082と、3.5 × 3.5m、深さ 30cm程度の不整円形竪穴建物跡SI1083である。SI1082北東部とSI1083南西部が重複し、SI1083覆土が切り込んでいる。SI1082とSI1083の床面はほぼ同じレベルにあり、連続的である。SI1082南辺は弥生時代終末期竪穴建物跡SI1084北部と重複し、SI1084床面がSI1082覆土上面に形成されている。

SI1082は、主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e・f、貯蔵穴gが検出されている。fはeと壁面の間に位置し、出入口施設に関係する可能性がある。h・iは柱筋に位置し、hはbの建て替えとも考えられる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に不整円形の炉が設けられる。床面周溝は北辺を除いて検出され、南半部に疎らに小穴が伴う。

覆土は、焼土が南東壁際に部分的に検出されている。廃絶時に火を受けた可能性はあるが、上層は黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、土器等が少量出土している。口頸部段を持つ甕1・2、胴部段を持つ広口壺3、沈線区画文様の壺4・5、鉢6があり、1が床面直上、3が中層から検出されている。甕1は胴部最大径が張り、弥生時代後期中葉以降、広口壺3は胴部段に押捺が伴わない点で同後期後半から終末期に位置づけられる可能性がある。その他、砂岩製礫石器8、軽石製砥石9が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

SI1083は、主柱穴は認められず、ハシゴ穴の可能性があるj、貯蔵穴kが検出されている。中心から北西寄りの位置に、楕円形の炉が設けられる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、焼土が中央部の床面から下層にかけて堆積し、炭化材が並んで検出されている。中心軸に向かう垂木の放射状構造を反映するように見受けられる。廃絶時に建物構造がある程度残った状態で焼却処分された可能性が考えられる。

遺物は、土器等が出土している。床面直上から、口縁端部交互押捺の甕11、炉器台18・19が、覆土上層から外面肥厚口縁の壺14、鉢（広口壺）16が検出されている。古式土師器の、くの字状口縁甕12・13、輪台技法底部15、高杯17は、いずれも覆土一括取り上げ資料である。床面出土遺物は概ね、弥生時代後期後半、山田橋2式の範疇と思われる。その他、軽石製砥石20が出土している。

本遺構は、切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

周辺遺構は、弥生時代後期後半のSI1082→SI1083→同終末期のSI1084、の順に構築されたと想定される。

SI1084（第 347 図、図版 72・237）

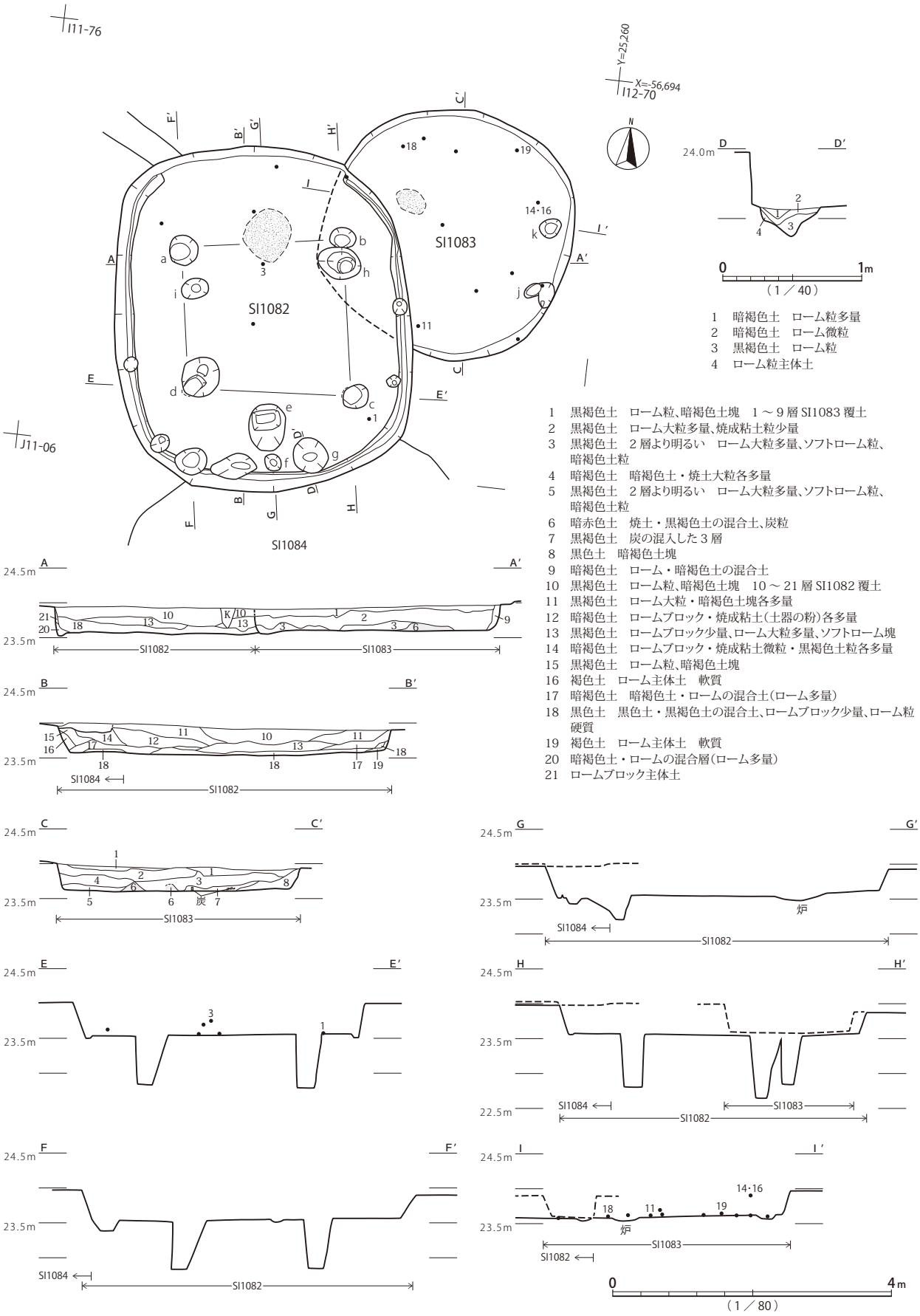
4.2 × 4.6m、深さ 5cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。北部が弥生時代後期後半の竪穴建物跡SI1082、東角が弥生時代後期前半の竪穴建物跡SI1085と重複する。SI1082及びSI1085覆土上層に本遺構床面が及んでいたが、一体的に調査されたらしく、土層断面図以外の記録はない。主柱穴は認められず、南東辺の東角寄りの位置に貯蔵穴と見られるaが検出されるのみである。

覆土は、詳細不明だが、SI1082の11層と連続的に認識されており、黒褐色土層だったと見られる。

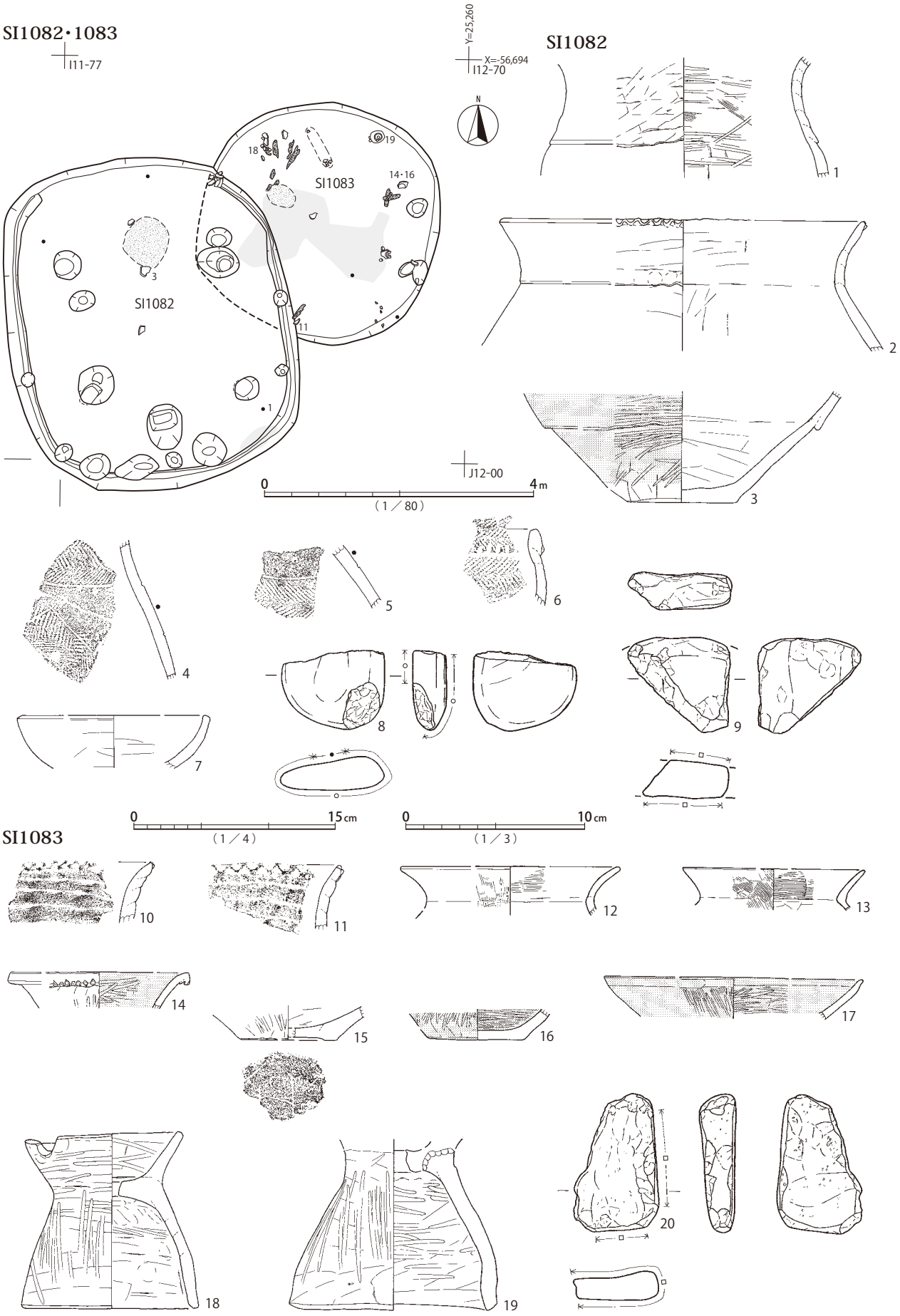
遺物は僅少で、高杯1を図示できる程度である。弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

SI1082・1083

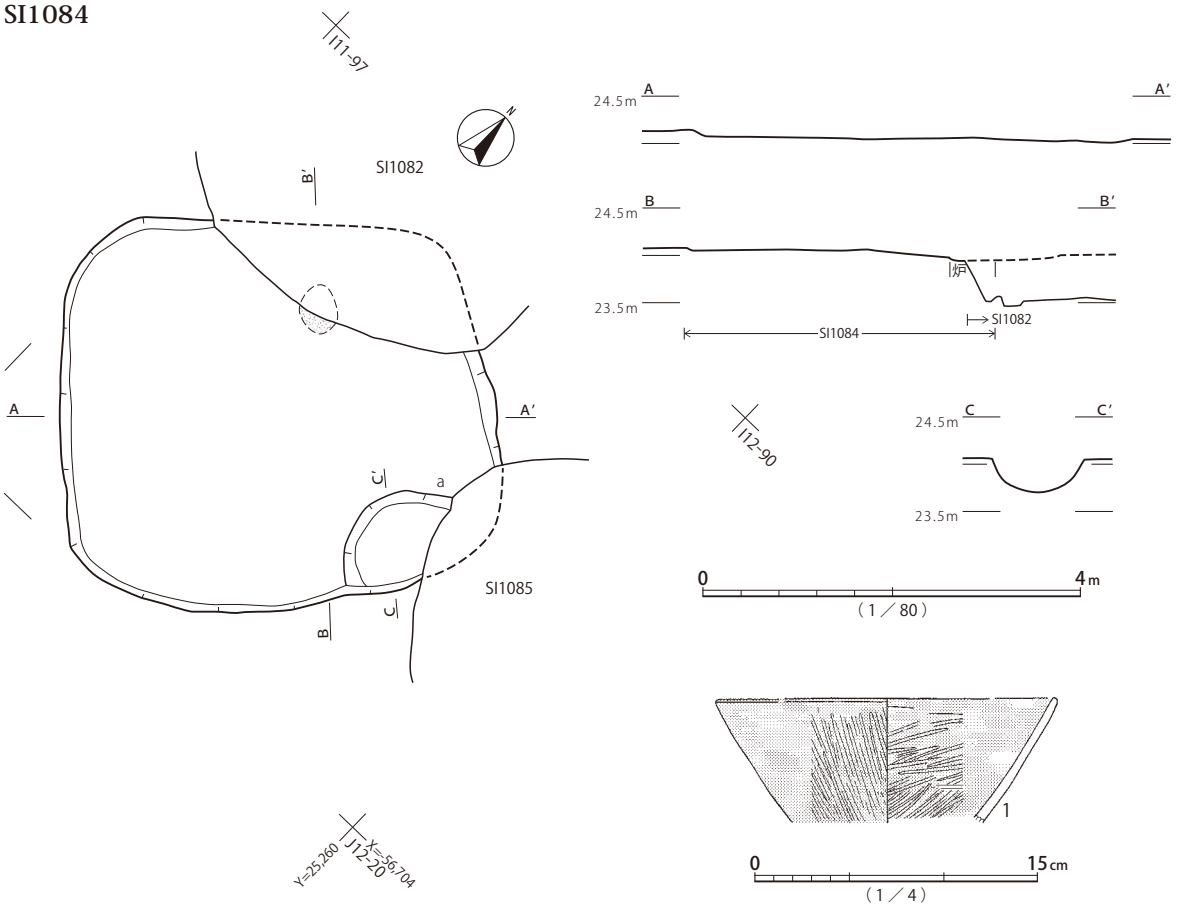


第345図 SI1082・SI1083遺構（1）



第346図　SI1082・SI1083遺構(2)、SI1082・SI1083遺物

SI1084



第347図　SI1084遺構・遺物

SI1085（第 348 図、図版 72・237）

3.8 × 3.4m、深さ 35cm 程度の楕円形竪穴建物跡である。西側が弥生時代終末期の竪穴建物跡 SI1084、南東側が弥生時代後期前半の竪穴建物跡 SI1098 と重複する。両遺構とも切り合い関係を示す明確な記録はないが、SI1084 に切られる可能性がある。主柱穴は見られず、ハシゴ穴 a、貯蔵穴 b が検出されるのみである。中心から北西に寄った位置に長楕円形の炉が設けられる。床面周溝は検出されていない。

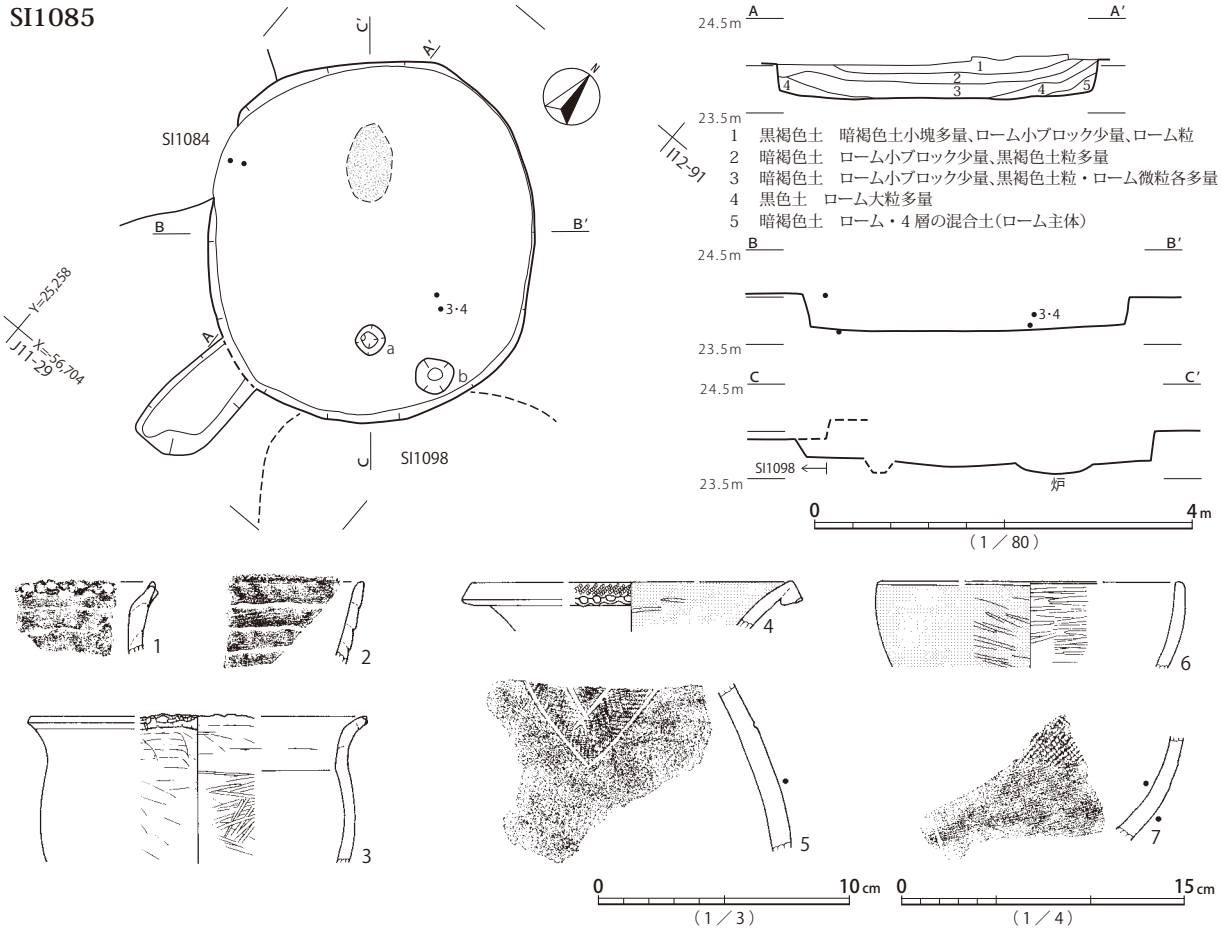
覆土は、壁際の初期堆積にロームを多く含む土層が見られ、上層に漸移的に黒褐色土層が堆積する。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、土器が少量出土している。在来的な、口縁端部交互押捺の甕 1・3、壺 4・5、鉢 6・7 のほか、輪積痕の甕 2 が検出されている。甕 3 と壺 4 は下層から出土しており、概ね弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。甕 2 は手賀沼周辺の弥生時代終末期頃の台付甕に類似する。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

SI1086（第 349 図、図版 72・164・237・336）※周辺の個別遺構写真なし

4.8 × 4.4m、深さ 35cm 程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴 a ～ d、ハシゴ穴 e、貯蔵穴 f が検出されている。a・b 間ライン上、東寄りの位置に長楕円形の炉が設けられる。床面は壁際を除いて、明確な硬化面が確認できる。床面周溝は検出されていない。



第348図　SI1085遺構・遺物

覆土は、柱穴内と竪穴壁際の初期堆積にロームが目立ち、上層は黒褐色土主体の概ね漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材の集中部は検出されていない。

遺物は、土器が少量出土しているが、2・4を除き、覆土一括取り上げ資料である。床面近くから出土した、ナデ甕底部2、広口壺4は、弥生時代後期前半、久ヶ原式の範疇と思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

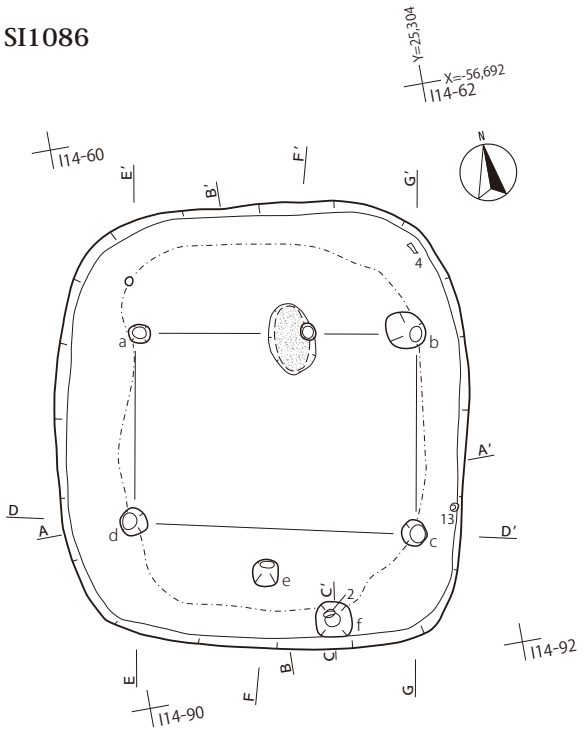
SI1087（第350・351・352図、図版73・164・165・238・312・336）

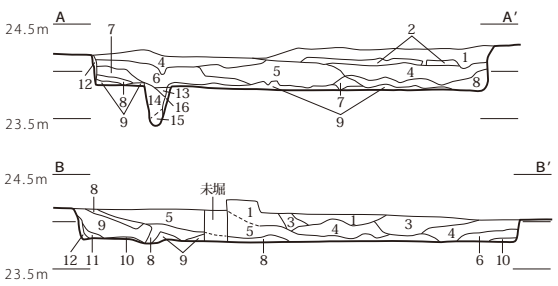
5.9×6.1？m、深さ30cm程度の方形竪穴建物跡である。099地区北縁に位置し、調査区外にあたる北東辺が削平されている。古代方形墳墓SM1083周溝南東部と重複し、床面まで掘り込まれている。主柱穴a・c・d、貯蔵穴の可能性があるe・fが検出されている。bの位置に見込まれる主柱穴は、SM1083周溝により破壊されている。推定中心から北西寄りに楕円形の炉が設けられるものの、南側の一部のみ遺存する。南西・南東辺に床面周溝が検出されており、南東辺には間仕切り溝が接続する。

覆土は、焼土・炭化材の集中部は記録されていないが、写真によると西角覆土に焼土散布のあった可能性がある。その他は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

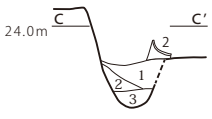
遺物は、遺存良好な土器が少なからず出土している。ハケ調整の台付甕1・2、頸部屈曲の緩い素口縁ハケ調整甕3、タタキ甕4、輪台技法底部5、無文広口壺（転用甑）6、直口壺7、小型壺8、小型

SI1086

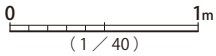


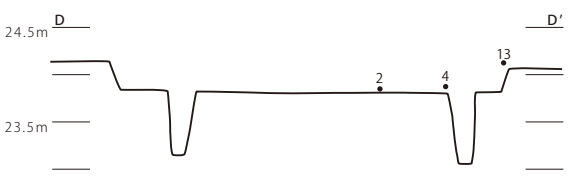


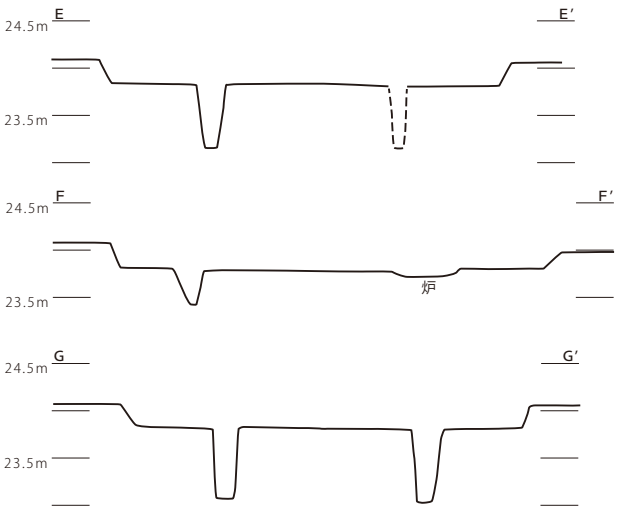
1　黒色土
2　黒褐色土　黒色土と暗褐色土塊の混合土
3　暗黄褐色土　ローム微粒多量、暗褐色土
4　黒褐色土　暗褐色土粒
5　黒褐色土　暗褐色土粒、ローム微粒、ソフトローム
6　黒色土　ローム微粒、焼土粒
7　黒褐色土　暗褐色土粒
8　黒褐色土　ソフトローム小塊、ローム小ブロック少量
9　暗褐色土　ローム多量
10　ローム主体土
11　黒色土　ローム微粒、焼土粒
12　褐色土　ローム粒多量
13　暗褐色土　ローム粒多量
14　暗褐色土　13層内にローム小ブロック
15　暗黄褐色土　ローム小ブロック多量
16　褐色土　ローム粒多量

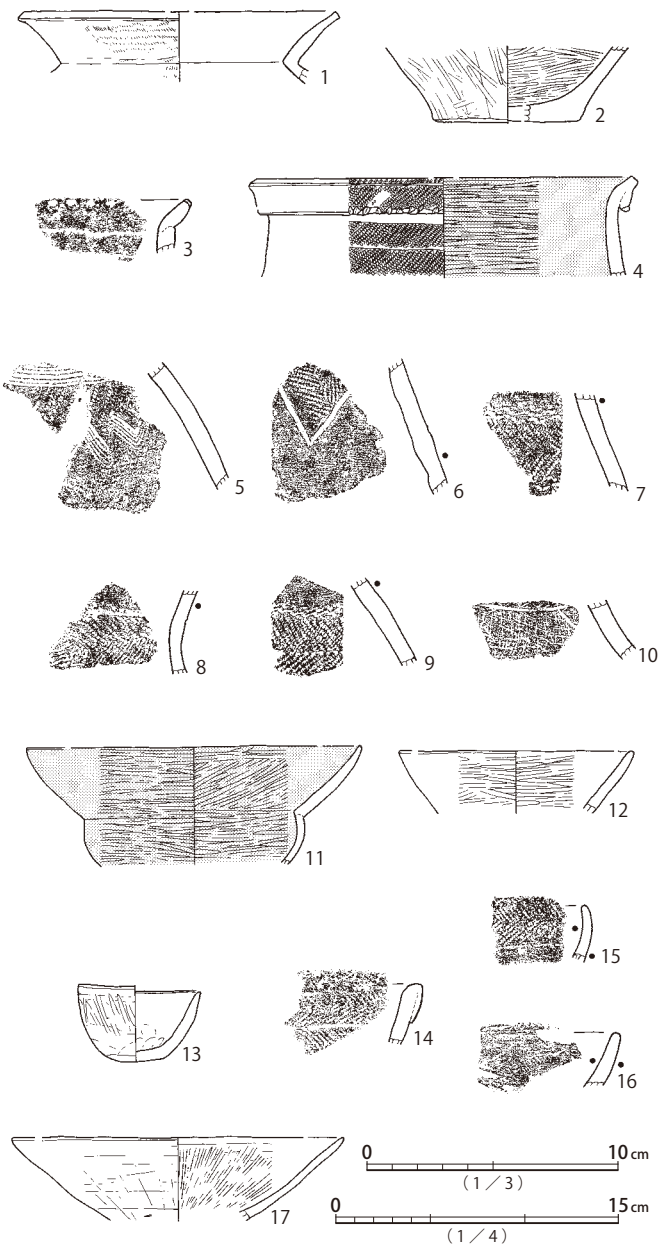


1　黒褐色土　暗褐色土
2　黒色土　ソフトローム小塊
3　黒色土　ソフトローム粒



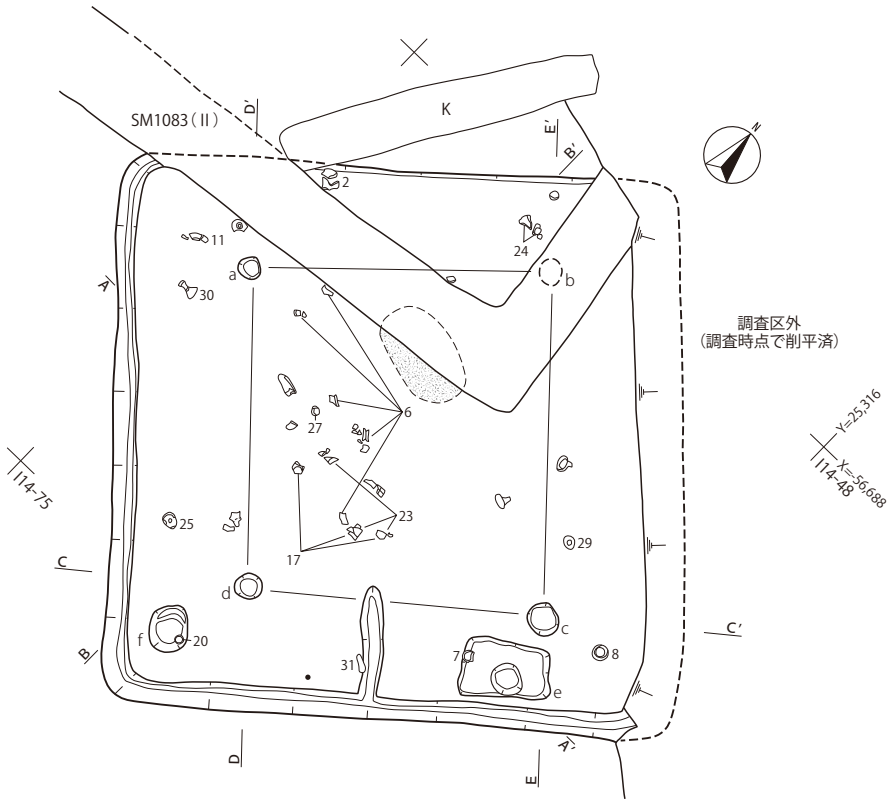




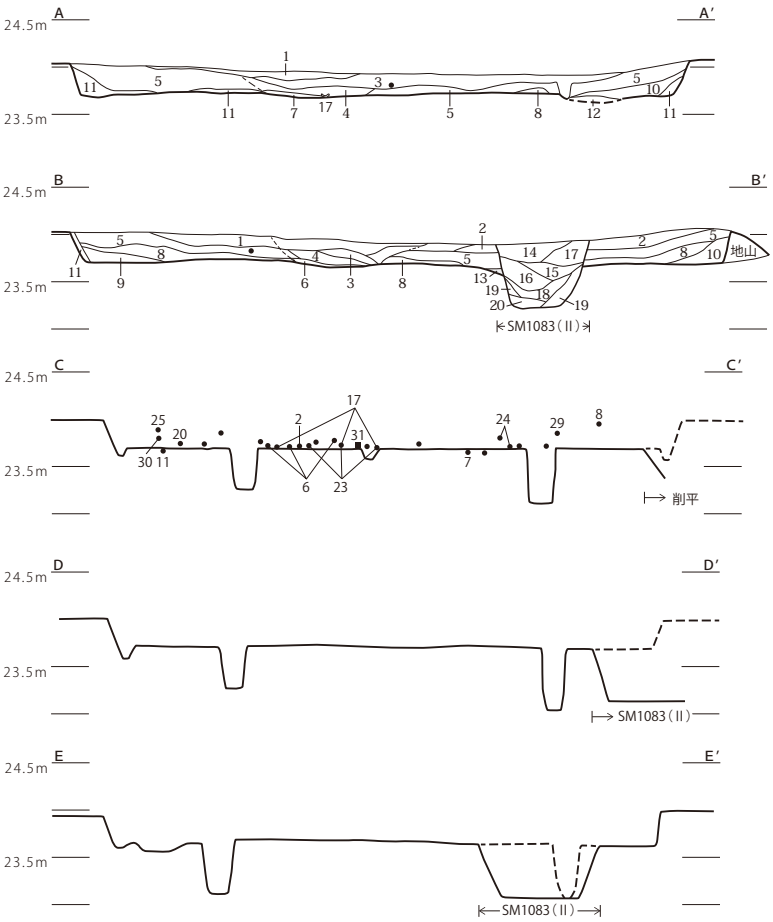


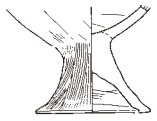
第349図　SI1086遺構・遺物

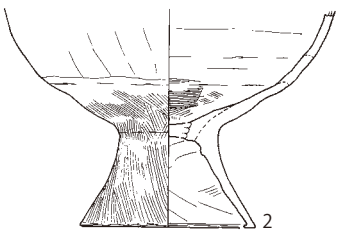
SI1087



1　黒褐色土　暗褐色土小塊
2　黒褐色土　暗褐色土小塊
3　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム粒、焼土粒
4　黒色土　暗褐色土粒
5　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム、ソフトローム多量
6　黒色土　ローム大粒、半焼成ローム大粒
7　黒色土　ローム大粒、半焼成ローム大粒
8　黒褐色土　ソフトローム粒多量
9　黒褐色土　ロームブロック少量、暗褐色土粒多量
10　黒褐色土　ローム微粒多量
11　暗褐色土　暗褐色土とロームの混合土
12　暗褐色土　ローム大粒多量
13　黒色土　焼土大粒混入　炉
14　黒色土　暗褐色土小塊　14 ～ 20 層 SM1083（II）覆土
15　黒色土　暗褐色土小塊
16　黒色土　暗褐色土小塊
17　黒褐色土　暗褐色土小塊
18　黒褐色土　暗褐色土粒、ソフトローム粒
19　暗褐色土　黒褐色土粒、暗褐色土粒、ローム粒
20　暗褐色土　ローム小ブロック多量



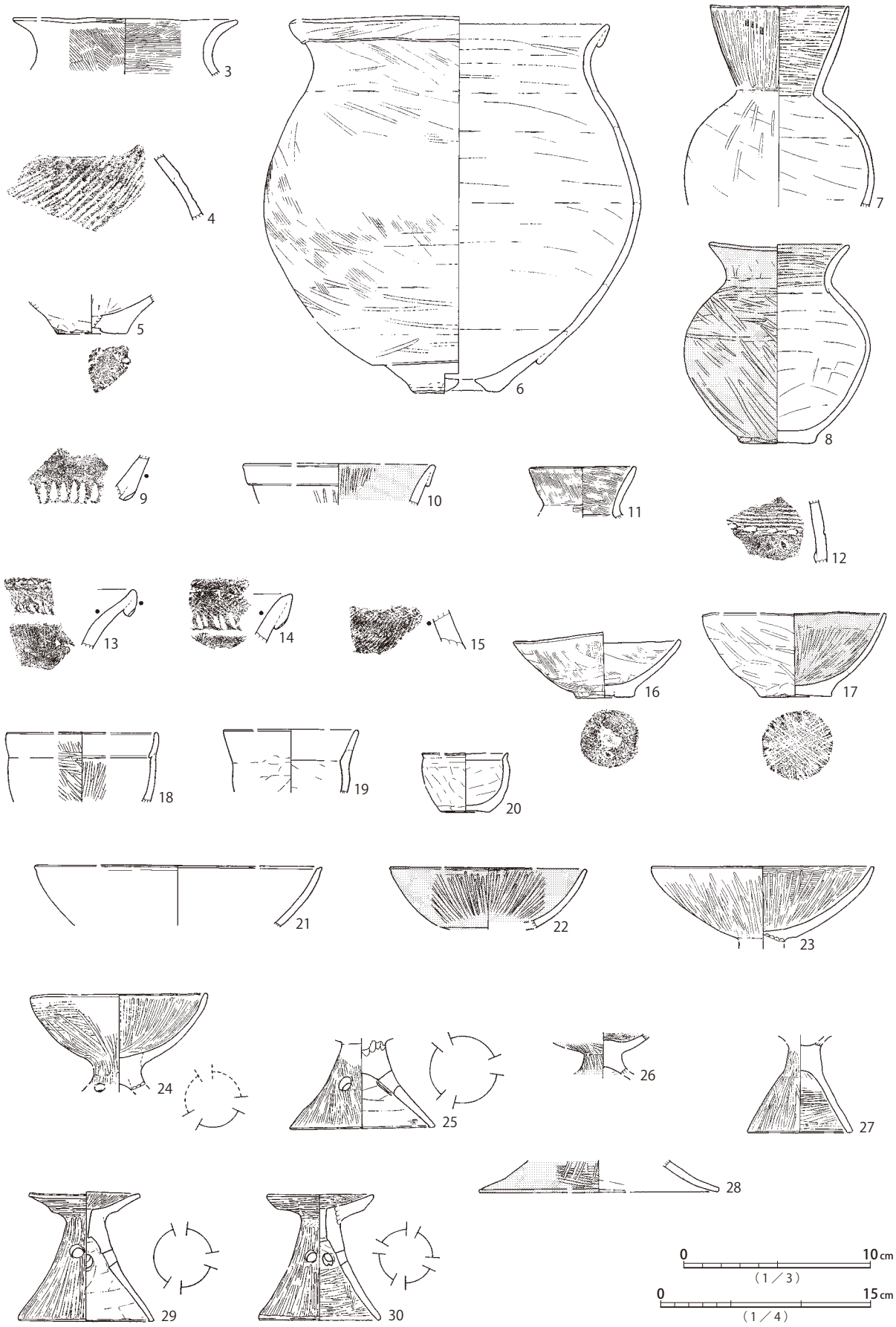




0　15cm
（1／4）

第350図　SI1087遺構、SI1087遺物（1）

SI1087



第351図　SI1087遺物（２）

SI1087



第352図　SI1087遺物（3）

鉢16・17・20、高杯21 ～ 26、小型高杯27、小型器台29・30等が検出されている。床面近くからは、台付甕2、広口壺6、直口壺7、小型鉢17・20、高杯23、小型器台30が出土している。広口壺6の胴部段の位置は低いものの頸部屈曲は緩い。直口壺7は口縁内面を横ヘラミガキで仕上げる精製品である。小型鉢17は器形が開放気味で、小型鉢20は小さく屈折外反する口縁端部を持つ。高杯24は杯部がやや開放的な形態を持つ。小型器台30は貫通孔が長く、脚部透孔が4方に穿たれる。これらは古墳時代前期前半までは下らない様相を示し、概ね、弥生時代終末期後半、中台2式に位置づけられる。その他、砂質頁岩製礫石器31、砂岩製礫石器32、花崗斑岩製礫石器33が出土し、31が間仕切り溝近くの床面上で検出されている。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半に位置づけられる。

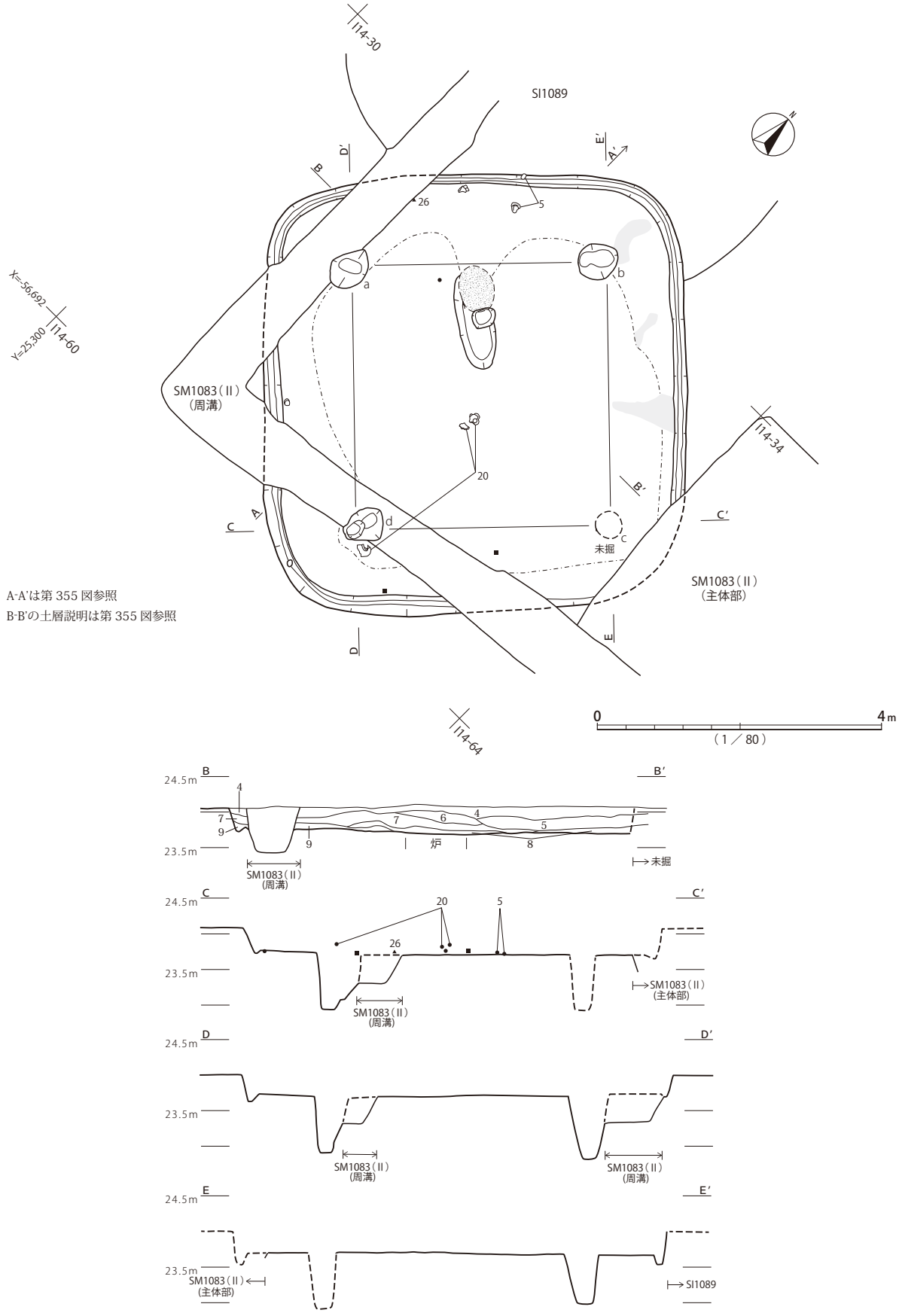
SI1088（第 353・354 図、図版 73・238・299・312）

6.2 × 5.9m、深さ 40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。古代方形墳墓SM1083南西部と重複し、周溝及び地下式埋葬施設により床面まで破壊を受ける。北西辺はSI1089南辺と重複し、覆土中に本遺構床面が形成されている。主柱穴はa・b・dが検出されている。SM1083埋葬施設の調査時に一部が掘り残されたためか、図面記録は残されていないが、cの位置にも柱穴が存在する。中心軸上、a・b間ラインの内側に接する位置に楕円形の炉が設けられる。火床面が連続したかは不明だが、竪穴中心側に窪みが連結されている。外周を除き、床面は硬化し、床面周溝はほぼ全周する。

覆土は、北東辺下層に焼土の集中部が認められ、廃絶時に火を受けた可能性が高い。上層は概ね黒褐色土主体の漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、土器等が少量出土している。甕5、短頸壺20が床面近くで検出されたほかは、覆土一括取り上げ資料である。在来系の甕1 ～ 4、壺7 ～ 16、鉢21 ～ 23等が出土している。短頸壺20と、

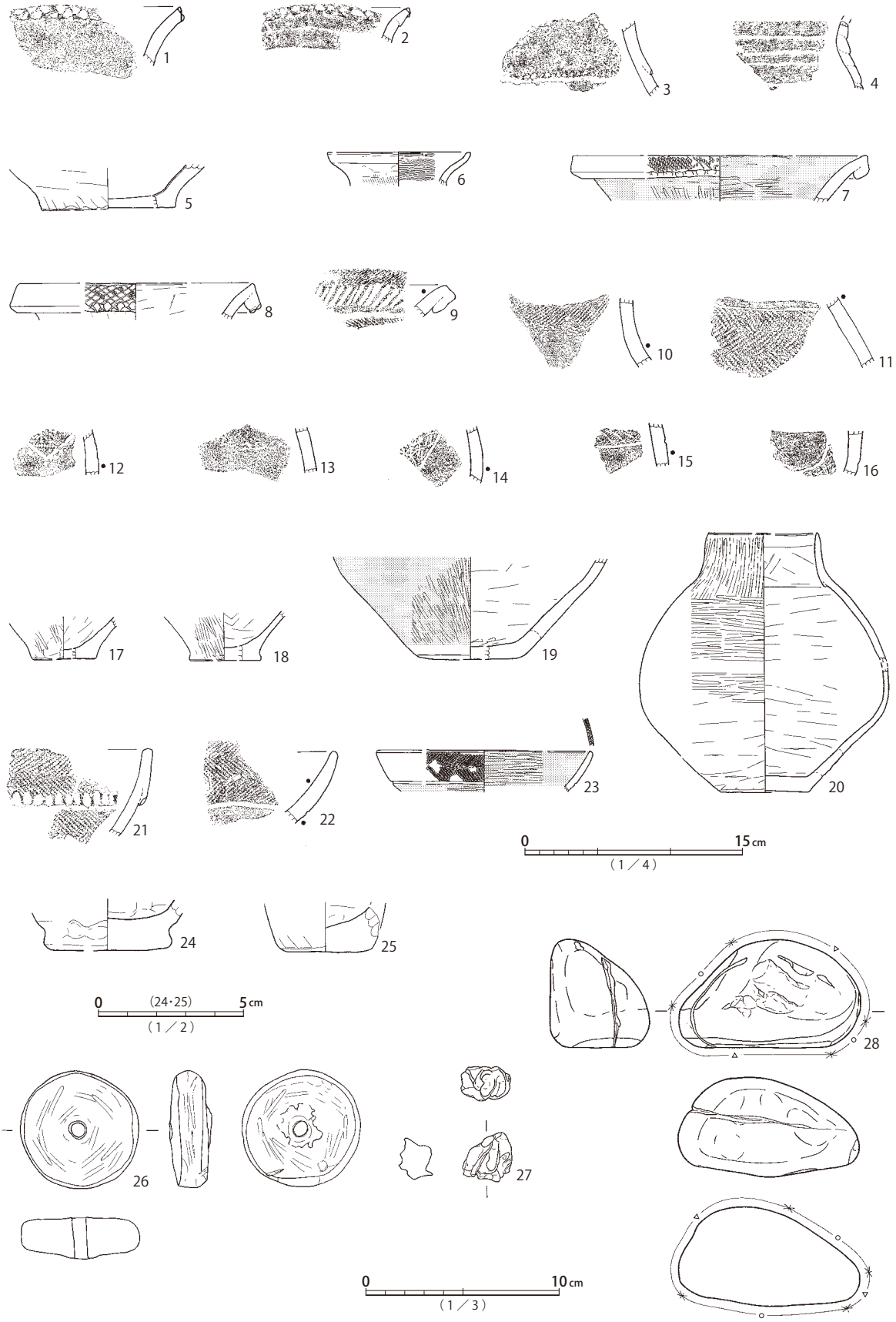
SI1088



A-A'は第 355 図参照
B-B'の土層説明は第 355 図参照

第353図　SI1088遺構

SI1088



第354図　SI1088遺物

受口状に近い口縁部のハケ甕6、SI1089との境界出土の高杯（第355図14）は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、ミニチュア土器24・25、土製紡錘車26、手びねり状不定形土製品27、砂岩製礫石器28が出土している。土製紡錘車26については、山田橋大山台遺跡24号竪穴（大村他2004）に弥生時代後期後半の似た例があるものの、直径3cm強と本例より小さい。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

SI1089（第355・356図、図版73・165・239・336）

7.9×6.8m、深さ55cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。099調査区北東縁辺に位置し、北東部の一部が未調査で削平されている。古代方形墳墓SM1083と重複し、周溝北西部が床面まで掘り込んでいる。南辺は弥生時代終末期の竪穴建物跡SI1088と重複し、覆土中にSI1088床面が形成されている。主柱穴a～dが検出されているのみだが、SI1088調査後に掘り下げた記録がないため、重複部にハシゴ穴と貯蔵穴が存在した可能性がある。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。北辺西側の床面には、低い段状の部分が検出されている。床面周溝は認められない。

覆土は、北東部に焼土集中部が検出されており、廃絶時に火を受けたものと見られる。下層から中層のレンズ状堆積にロームブロックが多く含まれており、埋没過程において近辺の竪穴掘削等に伴い人為的埋積があったと見込まれる。上層は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、遺存状態の良い個体を含む土器が少量出土している。交互押捺口縁と口頸部段を持つ甕1、輪積痕の甕2・6、壺11が床面レベルで検出されており、弥生時代後期前半、久ヶ原2式新段階に位置づけられる。高杯（台付甕）14はSI1088との境で検出され、出土位置も高いことから、本来はSI1088に帰属する遺物と思われる。受口状口縁甕7、輪台技法底部8も弥生時代終末期に位置づけられる混入品である。

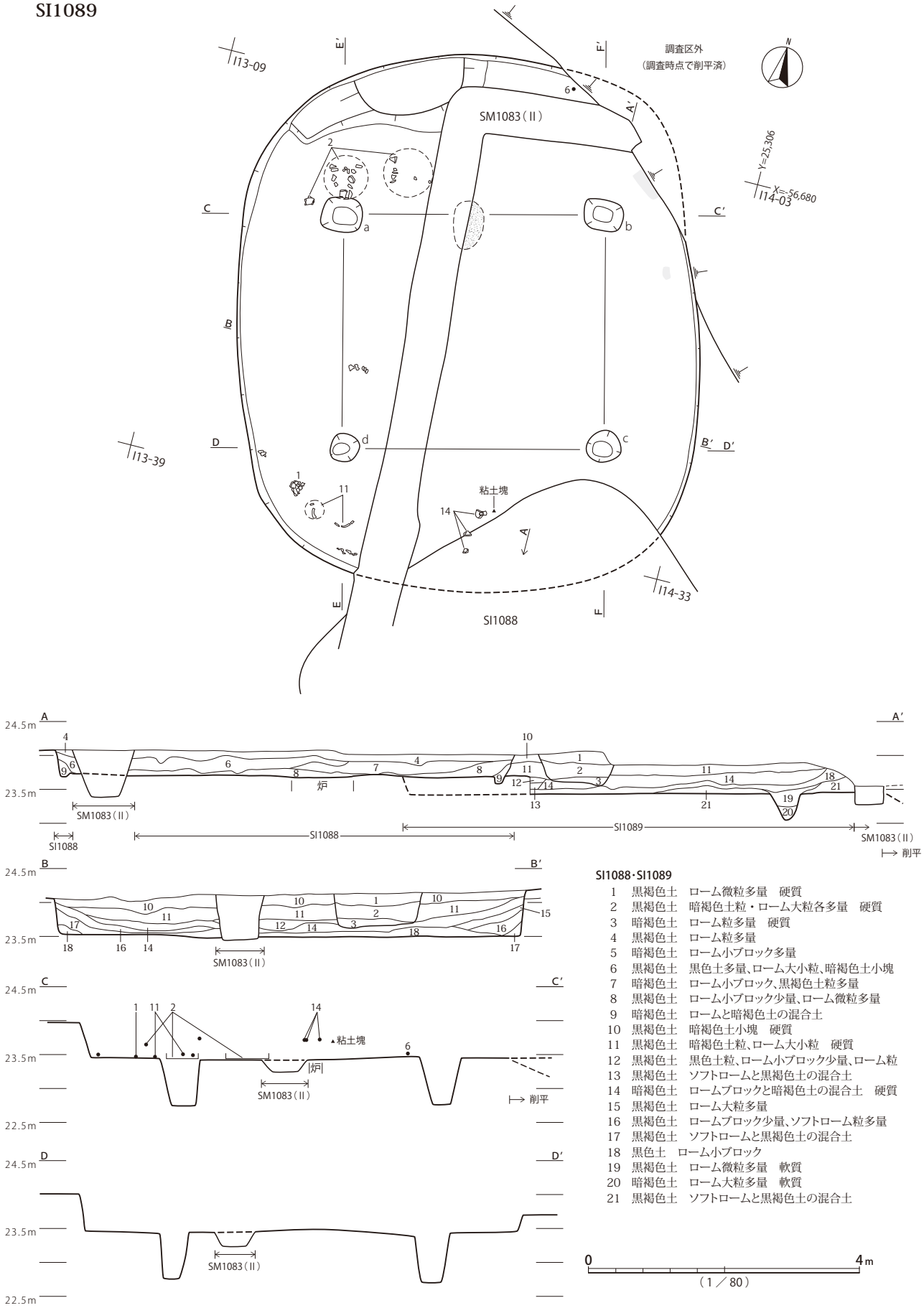
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

SI1090（第357・358図、図版73・165・239・312・336）

6.3×5.9m、深さ15cm程度の方形竪穴建物跡である。南西角が古代方形墳墓SM1161周溝北東部と重複し、床面まで掘り込まれる。北東側にTJ地区の弥生時代終末期から古墳時代前期前半に建て替えの想定されるSI0046が、同時存在不能な距離で近接する。主柱穴はa～dの位置に推定範囲が記録されたのみで、さらに掘り下げられたかは不明である。南側外周に高さ10cm前後のベッド状遺構が伴い、貯蔵穴と見られるe・f・gが南西辺北寄りと北東辺南寄りに検出されている。床面中心付近から北側にかけて、炉もしくは縄文時代炉穴残欠と見られる被熱面が6箇所検出され、a・b間ライン上、東寄りのものか、その南側のものが当初の平面プランに対応すると思われる。切り合い部以外に床面周溝は全周し、f脇の間仕切り溝が接続する。なお、099調査区内では間仕切り溝が出入口施設側にある例が目立つため、南西辺がそれに当たる可能性も否定できない。

覆土は、土層断面記録が無く、詳細不明だが、床面近くにおいて焼土・炭化材の集中は確認されていないため、漸移的な堆積過程を経た可能性が考えられる。

SI1089



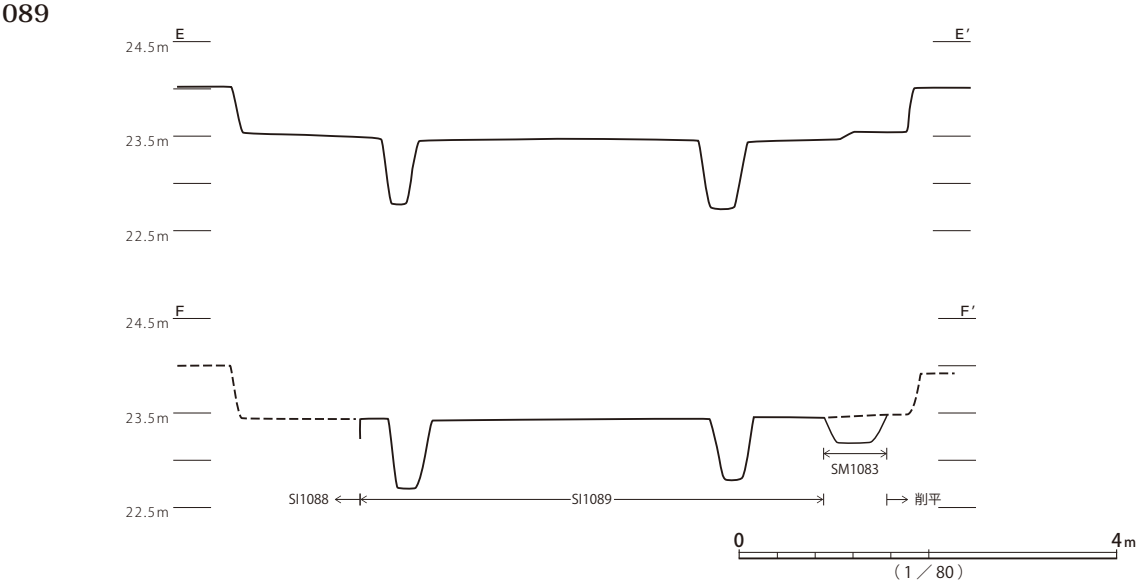
SI1088・SI1089

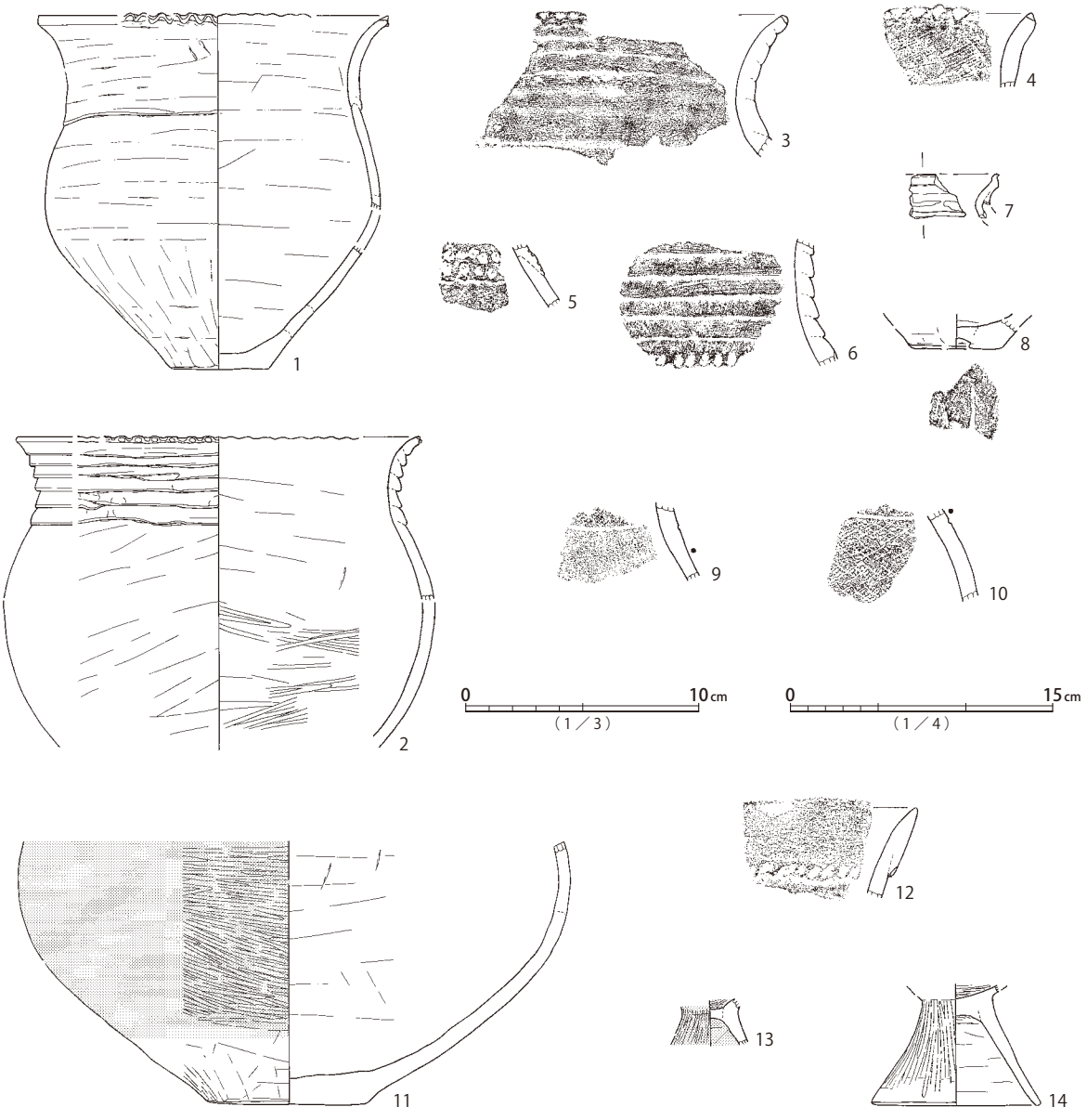
1　黒褐色土　ローム微粒多量　硬質
2　黒褐色土　暗褐色土粒・ローム大粒各多量　硬質
3　暗褐色土　ローム粒多量　硬質
4　黒褐色土　ローム粒多量
5　暗褐色土　ローム小ブロック多量
6　黒褐色土　黒色土多量、ローム大小粒、暗褐色土小塊
7　暗褐色土　ローム小ブロック、黒褐色土粒多量
8　黒褐色土　ローム小ブロック少量、ローム微粒多量
9　暗褐色土　ロームと暗褐色土の混合土
10　黒褐色土　暗褐色土小塊　硬質
11　黒褐色土　暗褐色土粒、ローム大小粒　硬質
12　黒褐色土　黒色土粒、ローム小ブロック少量、ローム粒
13　黒褐色土　ソフトロームと黒褐色土の混合土
14　暗褐色土　ロームブロックと暗褐色土の混合土　硬質
15　黒褐色土　ローム大粒多量
16　黒褐色土　ロームブロック少量、ソフトローム粒多量
17　黒褐色土　ソフトロームと黒褐色土の混合土
18　黒色土　ローム小ブロック
19　黒褐色土　ローム微粒多量　軟質
20　暗褐色土　ローム大粒多量　軟質
21　黒褐色土　ソフトロームと黒褐色土の混合土

0　4m
（1／80）

第355図　SI1089遺構（1）

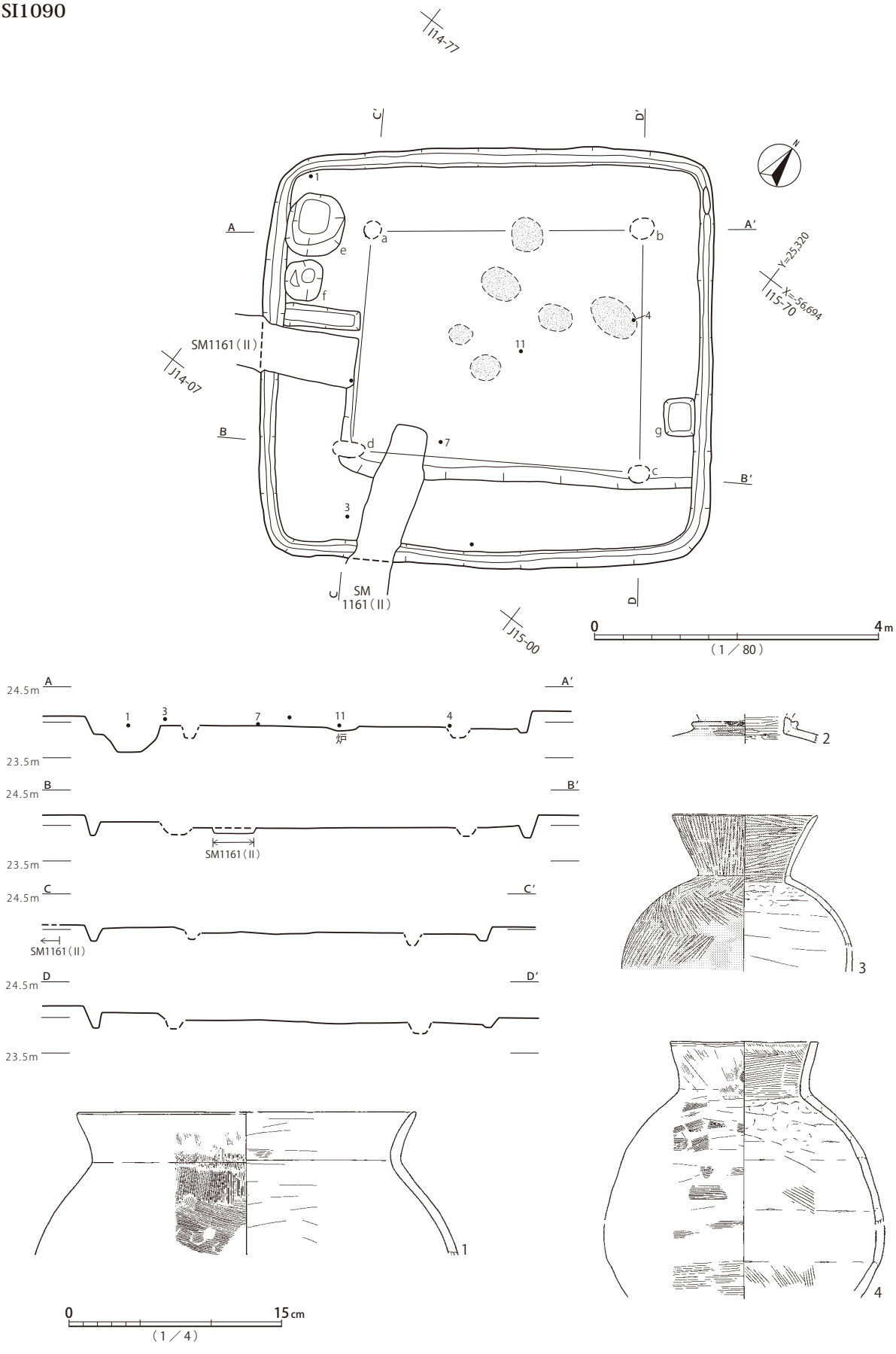
SI1089





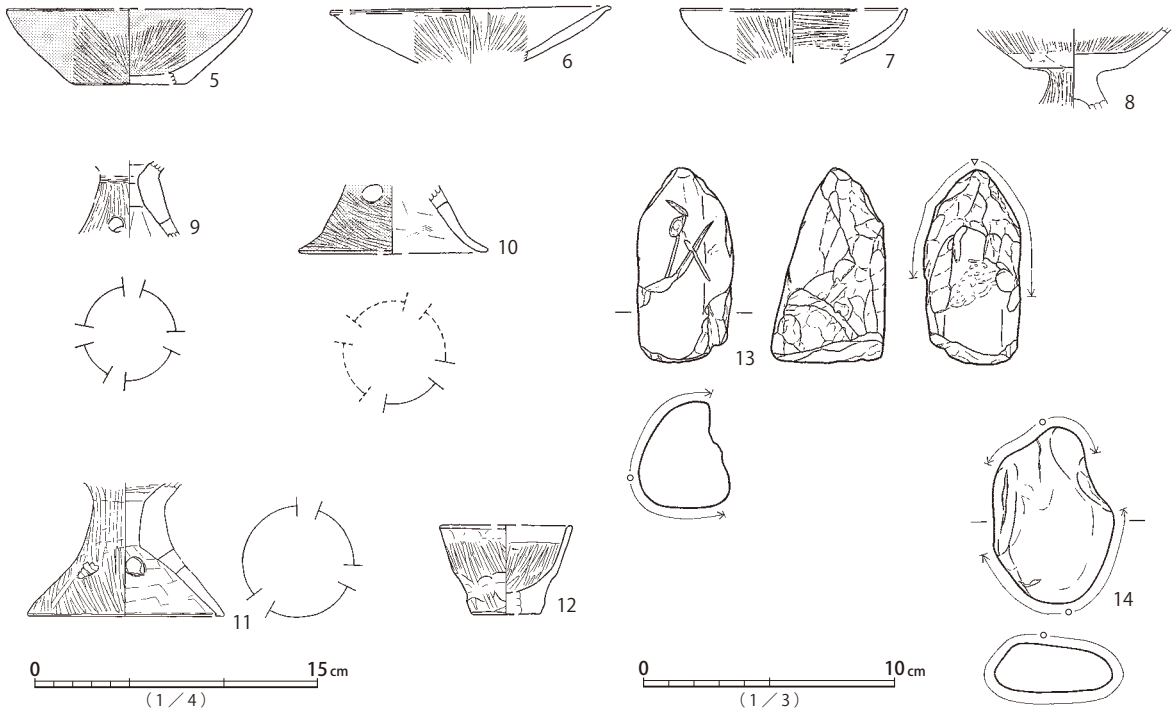
第356図　SI1089遺構(2)、SI1089遺物

SI1090



第357図　SI1090遺構、SI1090遺物（1）

SI1090



第358図　SI1090遺物（2）

遺物は、土器等が少量出土している。くの字状口縁ハケ甕1、直口壺3・4、高杯7、小型器台11が床面近くから検出されており、古墳時代前期前半、草刈1式の範疇と思われる。その他、ミニチュア土器12、砂岩製礫石器13・14が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と推定される。

SI1091・SI1205（第359図、図版73・239・252・312・317）

4.0？×3.8？m、深さ20cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1091と、3.4？×3.3m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1205である。SI1091南東部とSI1205北西部が大きく重なり、古代方形墳墓SM1115西側周溝が両床面まで掘り込んでいる。SI1091西側には弥生時代終末期の竪穴建物跡SI1031が同時存在不能な距離で近接する。

SI1091は、主柱穴a～dが検出されている。推定中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。

覆土は、壁際初期堆積にロームブロック混じりの土層が認められるが、焼土・炭化材の集中部は検出されておらず、上層は黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。SI1205覆土が本遺構の床面を切り込んで堆積している。

遺物は、土器等が少量出土している。在来的な後期弥生土器、甕1、壺2・3のほか、過渡的な、外面肥厚口縁の鉢4が検出されている。いずれも覆土一括取り上げ資料である。その他、砂岩製礫石器5が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

SI1205は、南東側がイモ穴群で撹乱されるほか、SM1115周溝が南北方向の対角線上に重複し床

面まで掘り込まれ、遺存状態は良くない。南東辺推定位置がSI1206と接するが、切り合い関係は不明である。主柱穴は検出されず、ハシゴ穴eのみが認められる。中心からやや北西寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、焼土・炭化材の集中は検出されておらず、概ね黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が窺える。

遺物は、土器等が少量出土している。在来的な弥生土器の、甕6、広口壺8、壺9・10のほか、タタキ状の粗いハケメの甕7が検出されるが、いずれも覆土一括取り上げ資料である。壺9・10は弥生時代後期後半、山田橋式の範疇と思われる。その他、砂岩製礫石器12が出土している。

本遺構は、切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定する。

両遺構は、弥生時代後期前半のSI1091→同後半のSI1205、の順に構築されたと考えられる。

SI1092（第360・361図、図版73・239・312・336）

7.1×5.8？m、深さ45cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。近世以降の溝状遺構SD1001が重複するほか、北西部をイモ穴列により床面まで撹乱されている。また、古代方形墳墓SM1115周溝北東部が床面まで掘り込んでおり、遺存状態は良くない。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。床面周溝は検出されていない。

覆土は、焼土微粒は認められるが、炭化材を伴う集中部は検出されず、黒褐色土を主体とする概ね漸移的な堆積状況を想定できる。

遺物は、土器等が少量出土している。床面近くから検出されたのは、ナデ甕8、甕底部10、壺16、鉢（広口壺）18、高杯（鉢）23であり、他は覆土一括取り上げ資料である。遺構の帰属時期を示唆する形態的特徴を示す資料は少ない。鉢23が古式土師器高杯ではなく、無文素口縁の在地的な鉢とすれば、結節文区画壺13の存在を積極的に評価し、床面出土資料を弥生時代後期後半、山田橋式と位置づけることも不可能ではない。その他、軽石24、砂岩製礫石器25が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半に位置づけられる可能性がある。

SI1093・SI1206（第362・363図、図版73・240・252）

3.3？×3.2m、深さ5cm程度の不整円形竪穴建物跡SI1093と、5.0×4.7？m、深さ10cm程度の方形竪穴建物跡SI1206である。SI1093北西部とSI1206東角がほぼ接する位置関係にあるが、古代方形墳墓SM1115南側周溝が重複し両遺構の床面まで掘り込んでいるため、切り合い関係は不明である。SI1206はイモ穴による撹乱と、近世以降の溝状遺構SD1001が床面に至り、遺存状態は悪い。

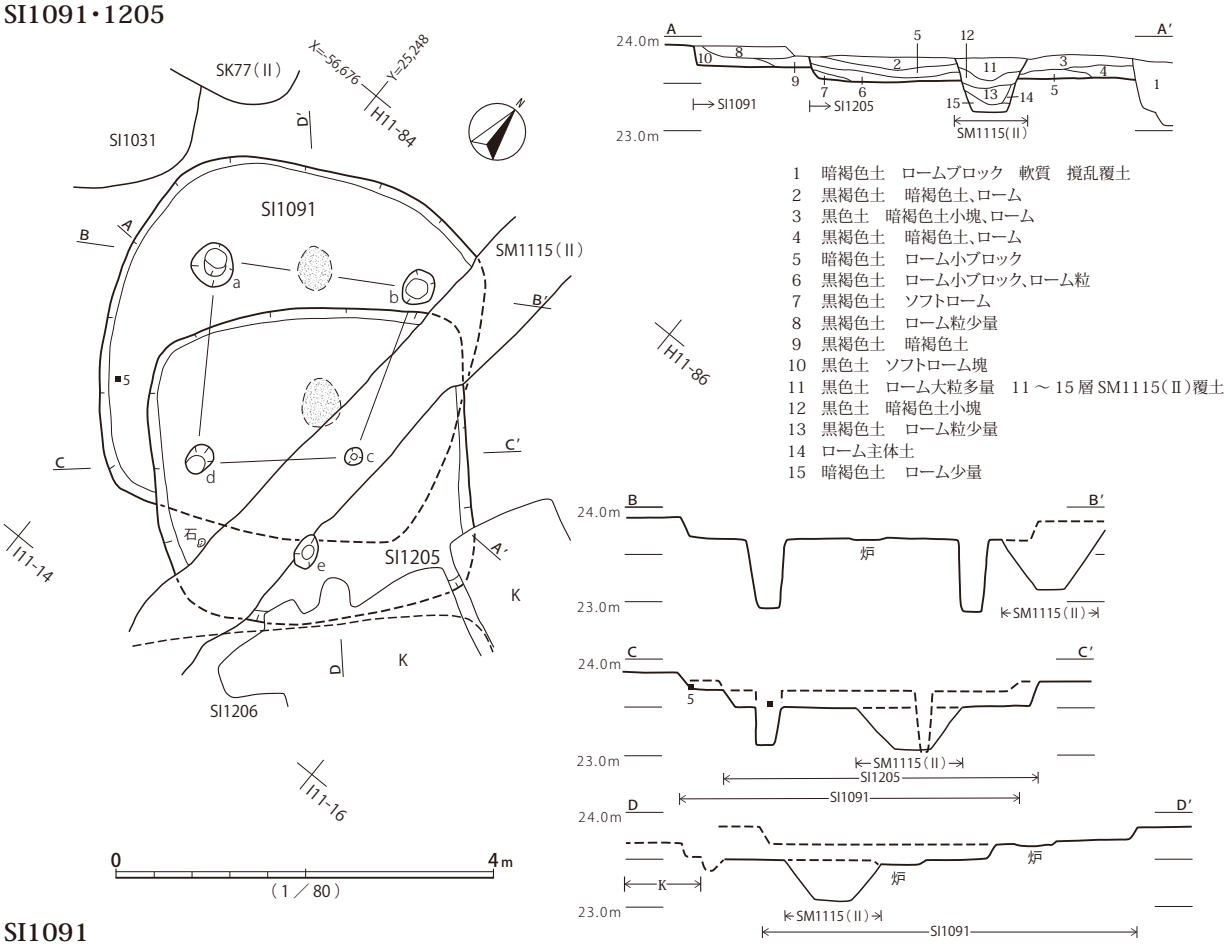
SI1093は、内部施設が検出されておらず、炉はSM1115周溝との重複部に存在したと考えられる。床面周溝も検出されていない。

覆土は、土層断面記録がなく、詳細は不明である。焼土・炭化材の集中部も検出されていない。

遺物は、土器がごく少量出土している。在来系の後期弥生土器の、交互押捺口縁の甕1、広口壺2、網目状撚糸文の椀4、鉢5のほか、古式土師器である刻目状列点文凸帯を持つ壺3、器台6があり、すべて一括取り上げ資料である。

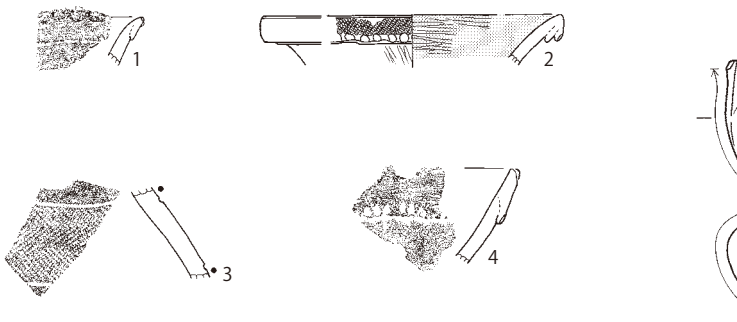
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半に位置づけられる可能性がある。

SI1091・1205

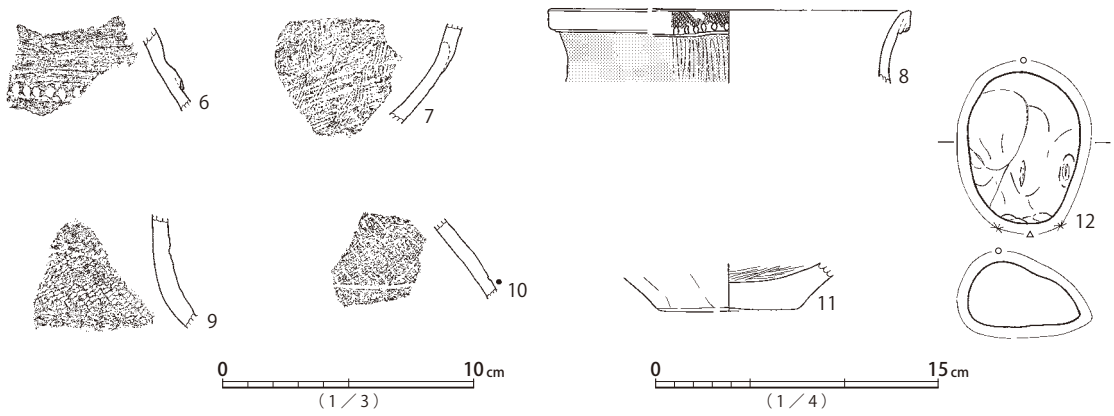


1　暗褐色土　ロームブロック　軟質　撹乱覆土
2　黒褐色土　暗褐色土、ローム
3　黒色土　暗褐色土小塊、ローム
4　黒褐色土　暗褐色土、ローム
5　暗褐色土　ローム小ブロック
6　黒褐色土　ローム小ブロック、ローム粒
7　黒褐色土　ソフトローム
8　黒褐色土　ローム粒少量
9　黒褐色土　暗褐色土
10　黒色土　ソフトローム塊
11　黒色土　ローム大粒多量　11～15層 SM1115（II）覆土
12　黒色土　暗褐色土小塊
13　黒褐色土　ローム粒少量
14　ローム主体土
15　暗褐色土　ローム少量

SI1091

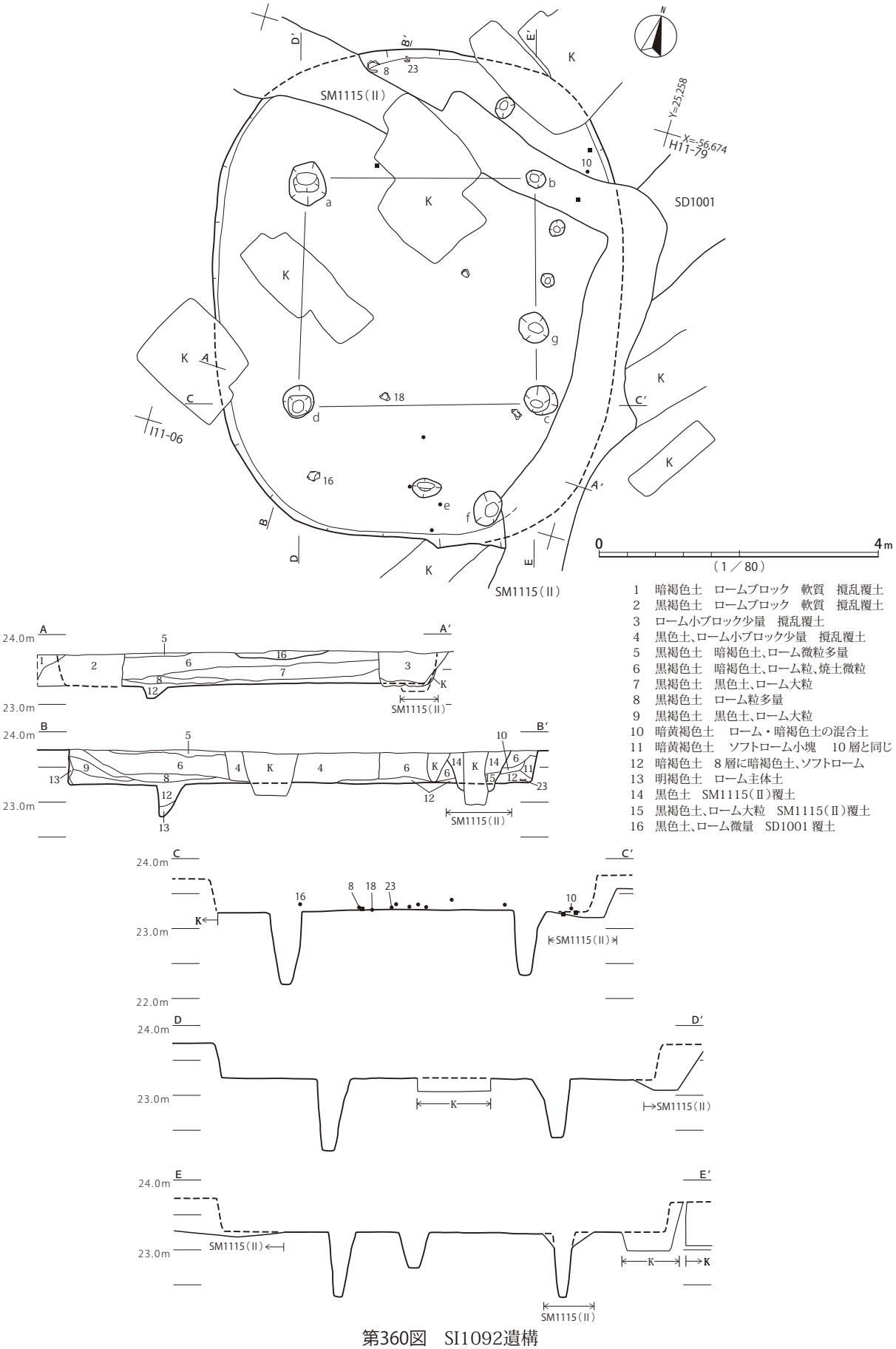


SI1205



第359図　SI1091・SI1205遺構、SI1091・SI1205遺物

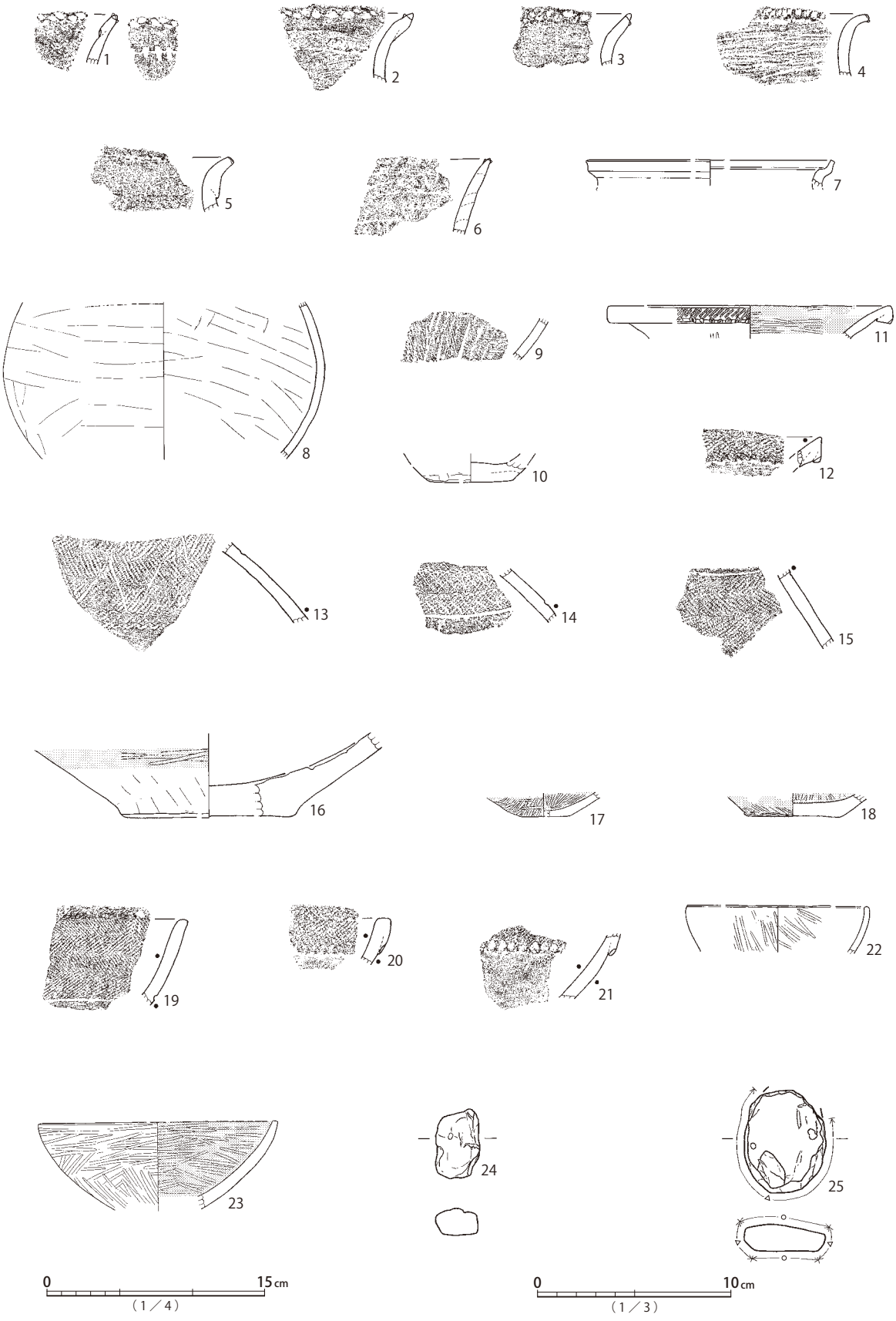
SI1092



1　暗褐色土　ロームブロック　軟質　撹乱覆土
2　黒褐色土　ロームブロック　軟質　撹乱覆土
3　ローム小ブロック少量　撹乱覆土
4　黒色土、ローム小ブロック少量　撹乱覆土
5　黒褐色土　暗褐色土、ローム微粒多量
6　黒褐色土　暗褐色土、ローム粒、焼土微粒
7　黒褐色土　黒色土、ローム大粒
8　黒褐色土　ローム粒多量
9　黒褐色土　黒色土、ローム大粒
10　暗黄褐色土　ローム・暗褐色土の混合土
11　暗黄褐色土　ソフトローム小塊　10層と同じ
12　暗褐色土　8層に暗褐色土、ソフトローム
13　明褐色土　ローム主体土
14　黒色土　SM1115(Ⅱ)覆土
15　黒褐色土、ローム大粒　SM1115(Ⅱ)覆土
16　黒色土、ローム微量　SD1001 覆土

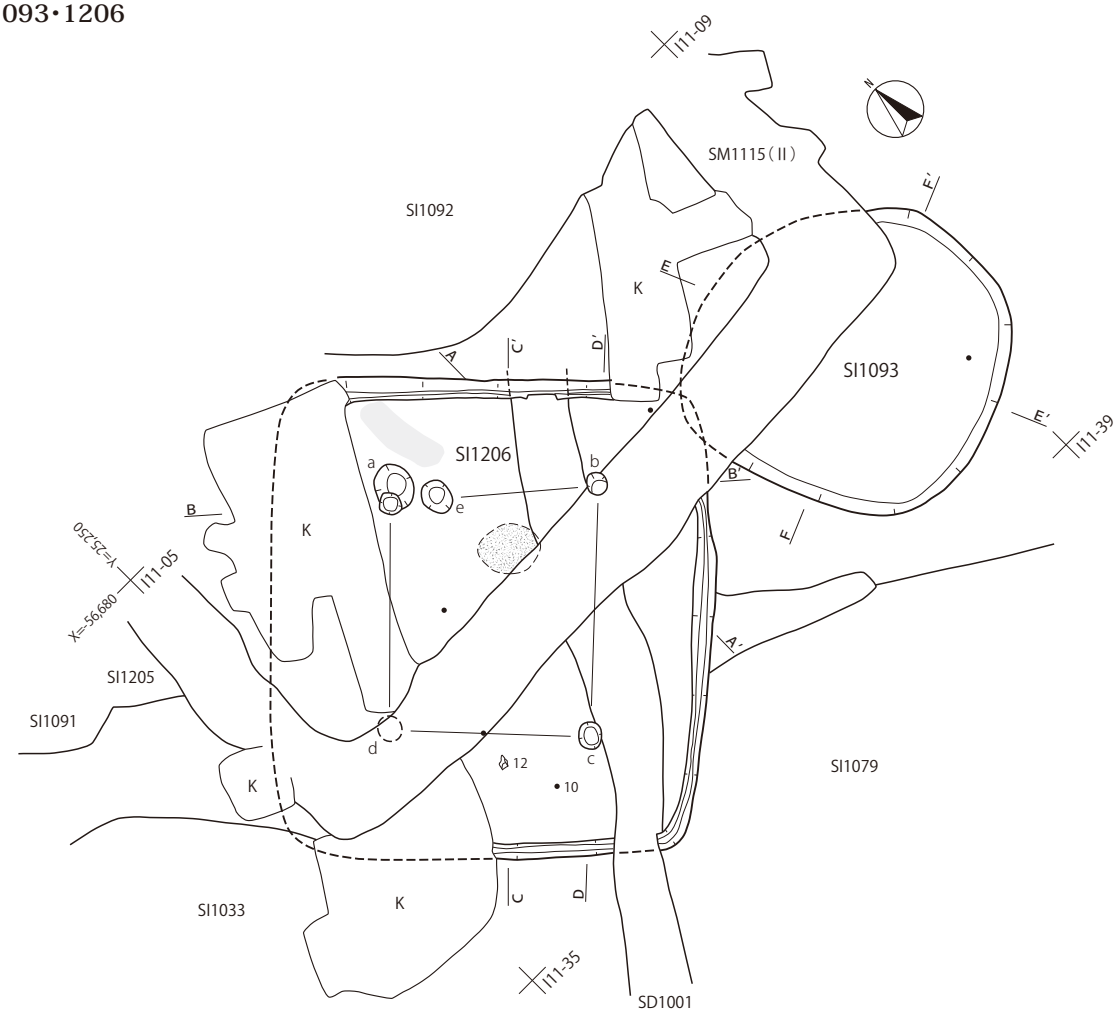
第360図　SI1092遺構

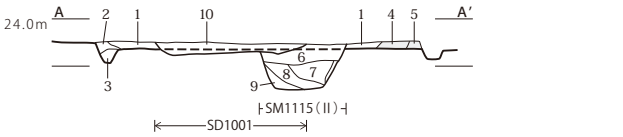
SI1092

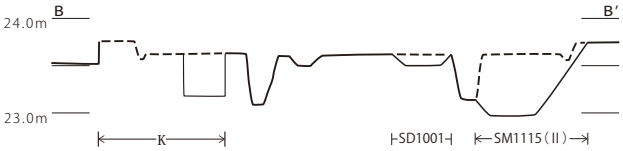


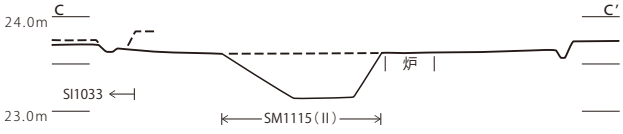
第361図　SI1092遺物

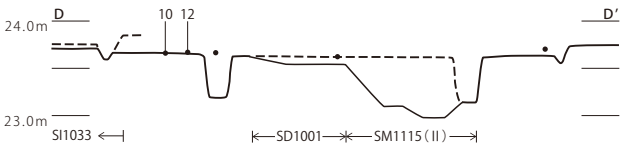
SI1093・1206





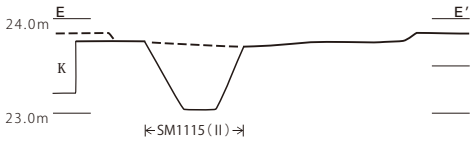


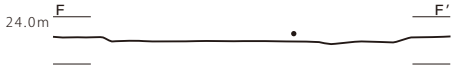


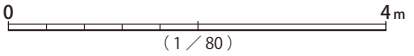


SI1206

1　黒褐色土　焼土微粒
2　暗褐色土　ソフトローム多量
3　暗黄褐色土　ローム・ソフトローム各多量
4　赤褐色土　焼土
5　暗赤褐色土
6　黒褐色土　ローム粒、焼土粒多量　SM1115(Ⅱ)覆土
7　黒色土　暗褐色土小塊　SM1115(Ⅱ)覆土
8　黒色土　ソフトローム小塊　SM1115(Ⅱ)覆土
9　暗褐色土　ソフトローム、ローム多量　SM1115(Ⅱ)覆土
10　黒色土　ローム粒　SD1001 覆土

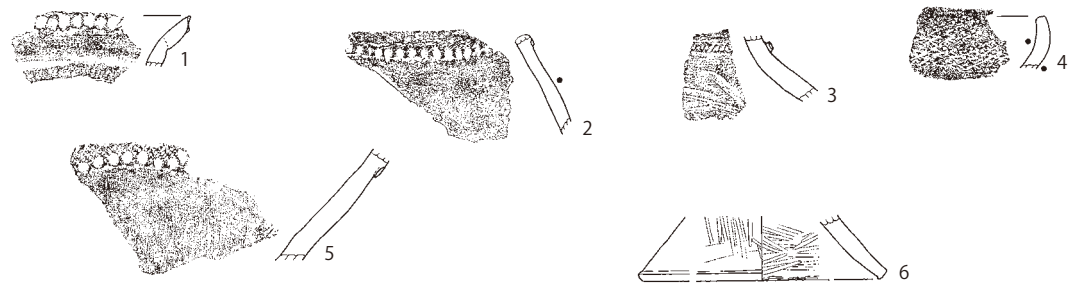




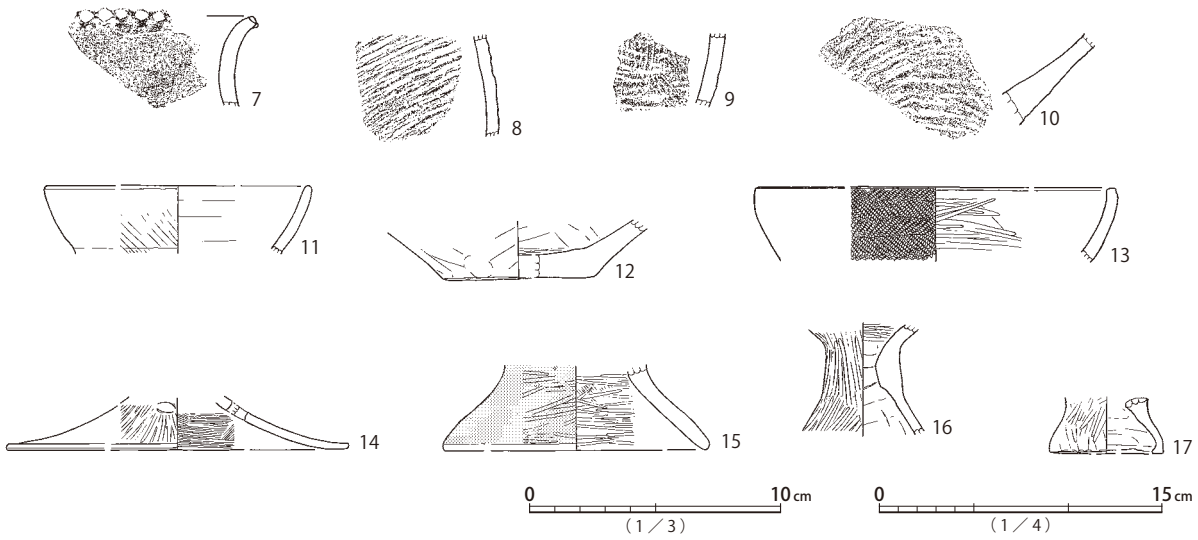


第362図　SI1093・SI1206遺構

SI1093



SI1206



第363図　SI1093・SI1206遺物

SI1206は、主柱穴と見られるａ～ｃが検出されている。ａ～ｃと対応するｄの推定位置は、SM1115周溝と重複するため、破壊された可能性がある。ｂ・ｃ間の柱筋と南東辺との間隔に基づき、ａ・ｄ間ラインと北西辺の位置関係が推定される。中心軸からやや東寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。遺存部には床面周溝が検出され、本来は全周したものと見られる。

覆土は、最下層に焼土集中部と焼土粒包含層が認められ、廃絶時に火を受けたものと見られる。

遺物は、土器が少量検出されている。床面直上から、タタキ甕10、壺12が出土したほか、覆土一括取り上げ資料として、タタキ甕８・９、壺11、高杯14・15、器台16等が伴う。概ね、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

２棟の竪穴建物跡は、切り合い関係を持たないものの、同時存在不能な距離で近接する。弥生時代後期後半のSI1093→同終末期のSI1206の順に構築されたと考えられる。

SI1094（第 364・365・366・367・368 図、図版 74・165・166・240・241・312・313・336・337）

8.4？×7.3m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。イモ穴群により撹乱を受け、北東・南西辺が床面まで破壊されている。北西辺は、弥生時代終末期の竪穴建物SI1095と重複し、西部は古代方形墳墓SM1117南東周溝が床面まで掘り込んでいる。主柱穴ａ～ｄ、貯蔵穴ｅが検出されている。

中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に不整楕円形の炉が設けられる。炉の南東縁には大型壺体部片2片が、立てて埋設されている。内側の破片は床面レベルと比べると埋没しており、2片が段階的に使用されたとも考えられる。bは柱痕跡の外周掘方部から土器19が検出されており、柱抜き取りの行われた可能性がある。炉の北東縁部に、掘り込み面は不明ながらピットgが切り込んでいる。壁面遺存部には南部を除き、床面周溝が検出されており、本来はほぼ全周していたと見込まれる。

覆土は、最下層に焼土粒が多く含まれ、炭化材も多数検出されており、廃絶時に火を受けた様相が認められる。土器多数が伴っているものの、出土層位に幅があり、生活状態のままには見えない。不時の火災というよりは、焼却処分を含む意図的な廃絶過程が想定される。貯蔵穴覆土は下層にロームを多く含む初期堆積があり、その上に焼土・炭化物粒を含む層が検出されている。炉に掘り込んでいるgからは土器38が出土しており、これを含め出土遺物の多くは、廃絶に伴う儀礼的活動に伴った可能性がある。柱抜き取りを含む建物解体→炉脇穴掘削→建材等焼却処分・土器遺棄、というプロセスが推定される。

遺物は、後期弥生土器が多数出土している。輪積痕の甕1 ～ 6、口頸部段の甕7・9・11、外面肥厚口縁の甕10、内面肥厚口縁の甕18、段部押捺の甕19、楔形刺突による文様を持つ広口壺もしくは甕20、壺24 ～ 38、大型壺45 ～ 47、椀48、鉢49 ～ 52等が出土している。壺24は位置不明ながら炉内から、山形文を持つ壺32、椀48、鉢49は床面近くで出土している。甕19は主柱穴bの掘方に落ち込む状態で、壺38は炉に掘り込む穴g覆土下層から検出されている。床面等から下層にかけて出土した土器群は概ね、弥生時代後期前半、久ヶ原2式古段階に位置づけられる。覆土一括取り上げ資料の、受口状口縁甕22・23、ミニチュア土器44と、床面から15cm程度高い位置で検出された高杯55は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられ、SI1095等の他遺構に由来する可能性が高い。その他、ミニチュア土器43、凝灰岩製礫石器57、軽石製砥石58、軽石59・60、溶結凝灰岩製礫石器61、軽石製砥石62、砂岩製砥石63が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

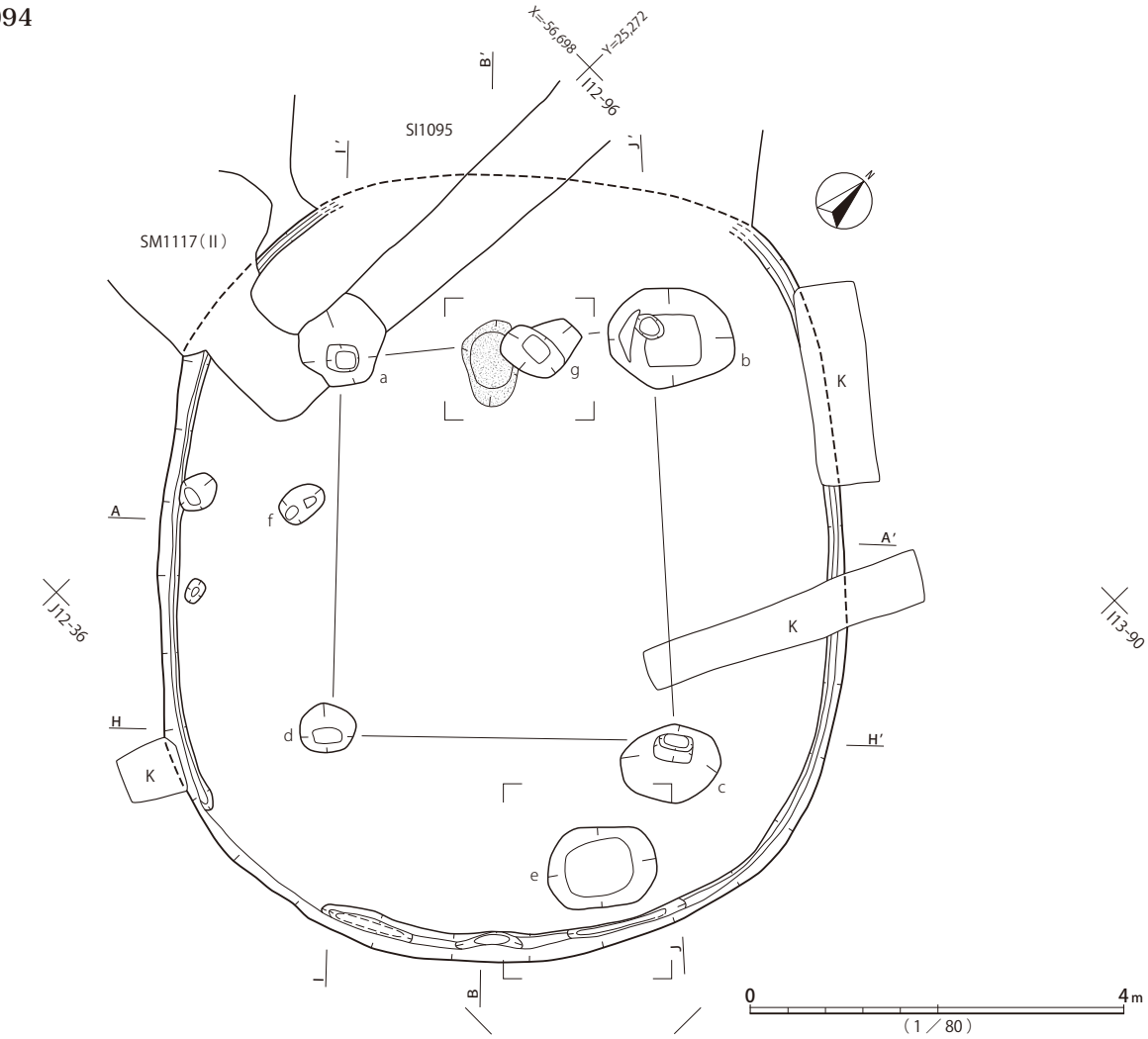
SI1095（第369図、図版74・166・241・313・337）

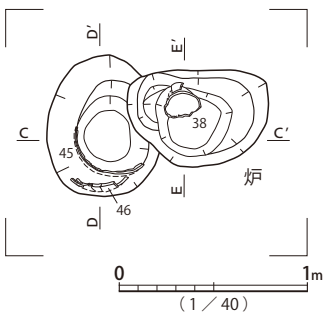
5.4？×5.0m、深さ15cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。北東辺がイモ穴により床面まで破壊される。東部が古代方形墳墓SM1117周溝北東部と重複し、床面まで掘り込まれている。南東辺が弥生時代後期前半の竪穴建物跡SI1094と重複する。主柱穴a ～ d、貯蔵穴と見られるeが検出されている。中心軸やや北東寄り、柱筋の内側に楕円形の炉が設けられ、2箇所の火床面が連結されるかたちで検出されている。遺存部に床面周溝が検出されており、本来は全周した可能性が高い。

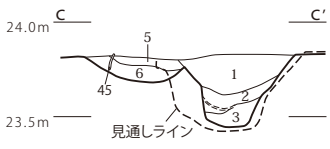
覆土は、外周部床面に焼土が広く検出されている。廃絶時に火を受けたと見られる。上層は、暗褐色土主体の土層で、埋め戻しの有無は不詳である。

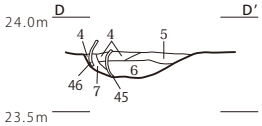
遺物は、土器等が少量出土している。古式土師器の、素口縁甕1、庄内式甕2、タタキ甕3、底部片4、小型壺7のほか、弥生土器の鉢5、高杯6が検出されている。床面上からの底部4と、SM1117周溝覆土内の小型壺7を除き、覆土一括取り上げ資料である。鉢5はSI1094等他遺構に由来する可能性が考えられる。庄内式甕2は技法及び胎土が明確に非在地的で、大和型甕の搬入品である。甕1は口縁部が、くの字状を呈する点で新相を示すが、端部への強いヨコナデで受口状口縁との中間的形

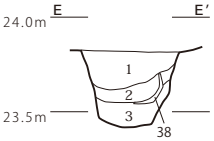
SI1094











A-A′、B-B′

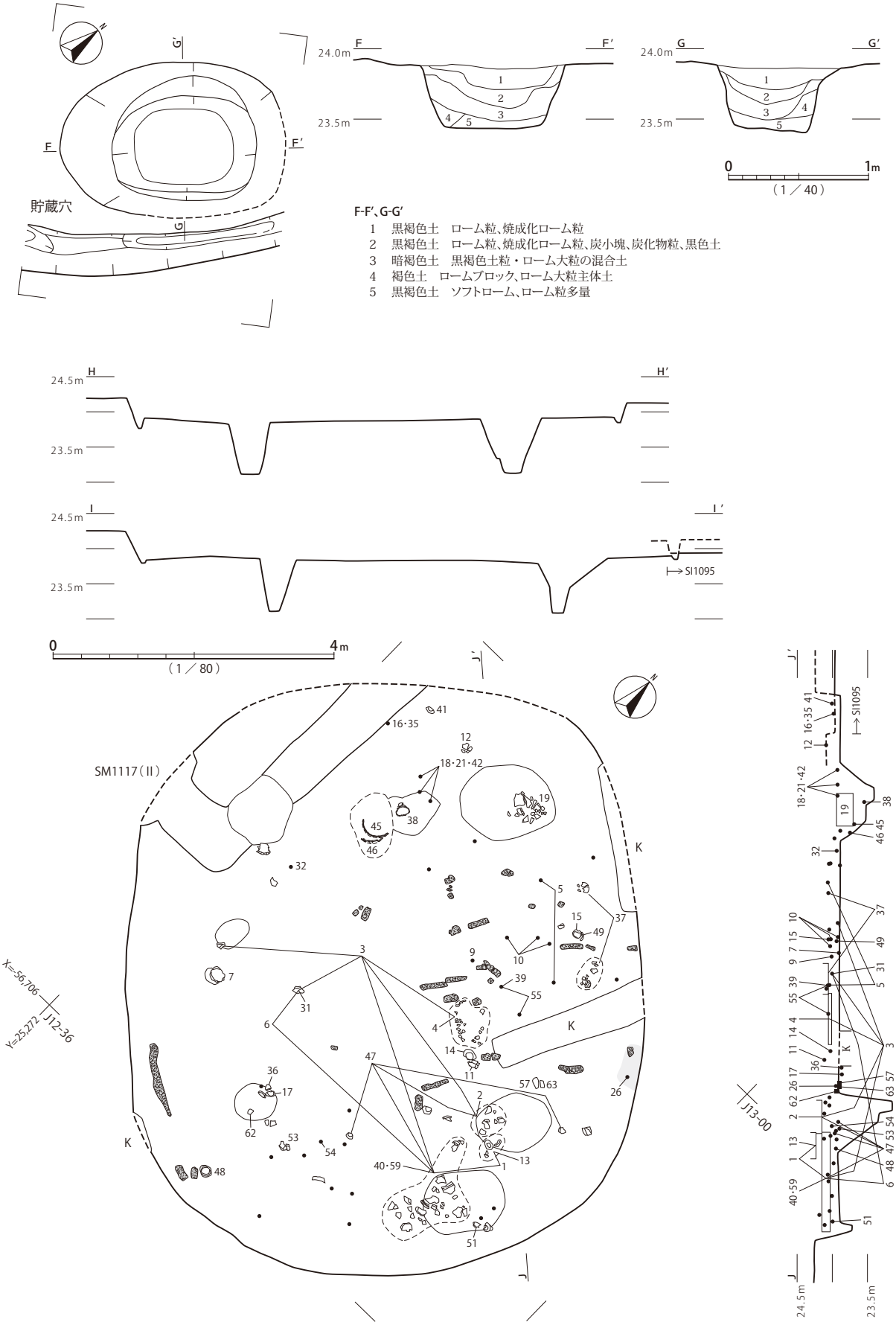
1　黒褐色土　ローム微粒
2　黒褐色土　暗褐色土
3　暗褐色土　ローム小ブロック　貼り床状に硬化する
4　黒色土　焼土粒
5　黒褐色土　暗褐色土
6　暗褐色土　黒褐色土塊、ローム大粒
7　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム多量
8　暗褐色土　黒褐色土・ローム各多量、焼土微粒
9　黒色土　7層に焼土大粒多量
10　黒褐色土　暗褐色土小塊多量
11　暗褐色土　黒褐色土小塊・ローム各多量、焼土微粒
12　黒褐色土　7層に黒色土粒
13　黒褐色土　ローム大粒、炭、焼土小塊多量
14　黒褐色土　ソフトローム塊・焼土小粒各少量
15　黒褐色土　ローム大・小粒・炭・焼土微粒各多量
16　黒褐色土　ソフトローム塊・焼土小粒各少量
17　暗褐色土　ローム粒多量、炭、焼土微粒多量
18　黒色土　軟質
19　撹乱気味の17層
20　明褐色土　ローム主体土
21　褐色土　貼り床層

C-C′、D-D′、E-E′

1　黒褐色土　ローム大粒、暗褐色土粒多量
2　暗褐色土　ローム小ブロック多量
3　暗褐色土　黒色土粒、ローム大・小粒各多量、炭塊少量
4　黒褐色土　ローム・焼土各微粒
5　暗褐色土　黒褐色土・ローム・焼土粒・炭粒の混合土
6　焼土・ロームの混合層、暗茶褐色土、炭、底部には薄い焼土がある
7　黒褐色土　粘土粒少量

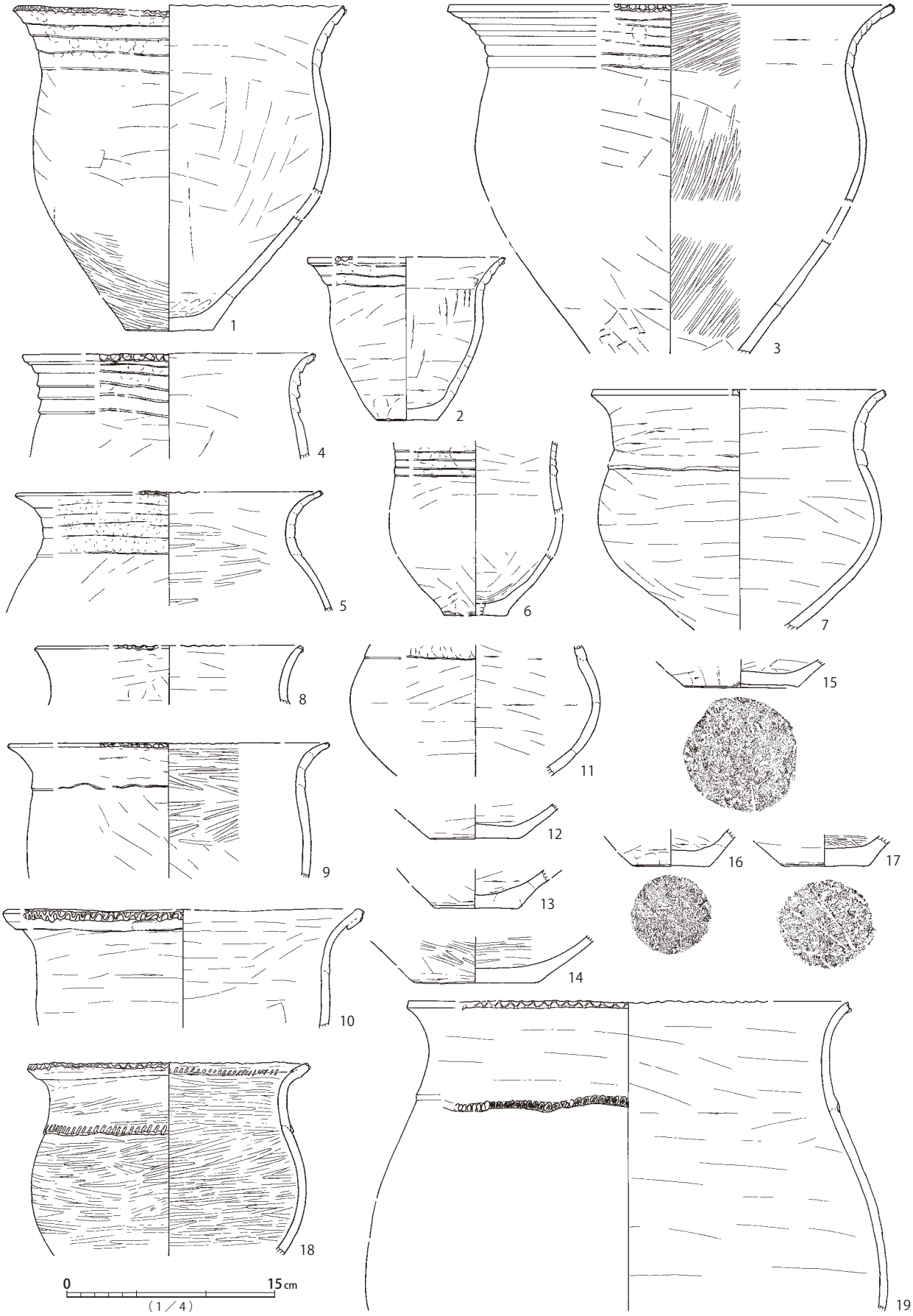
第364図　SI1094遺構(1)

SI1094



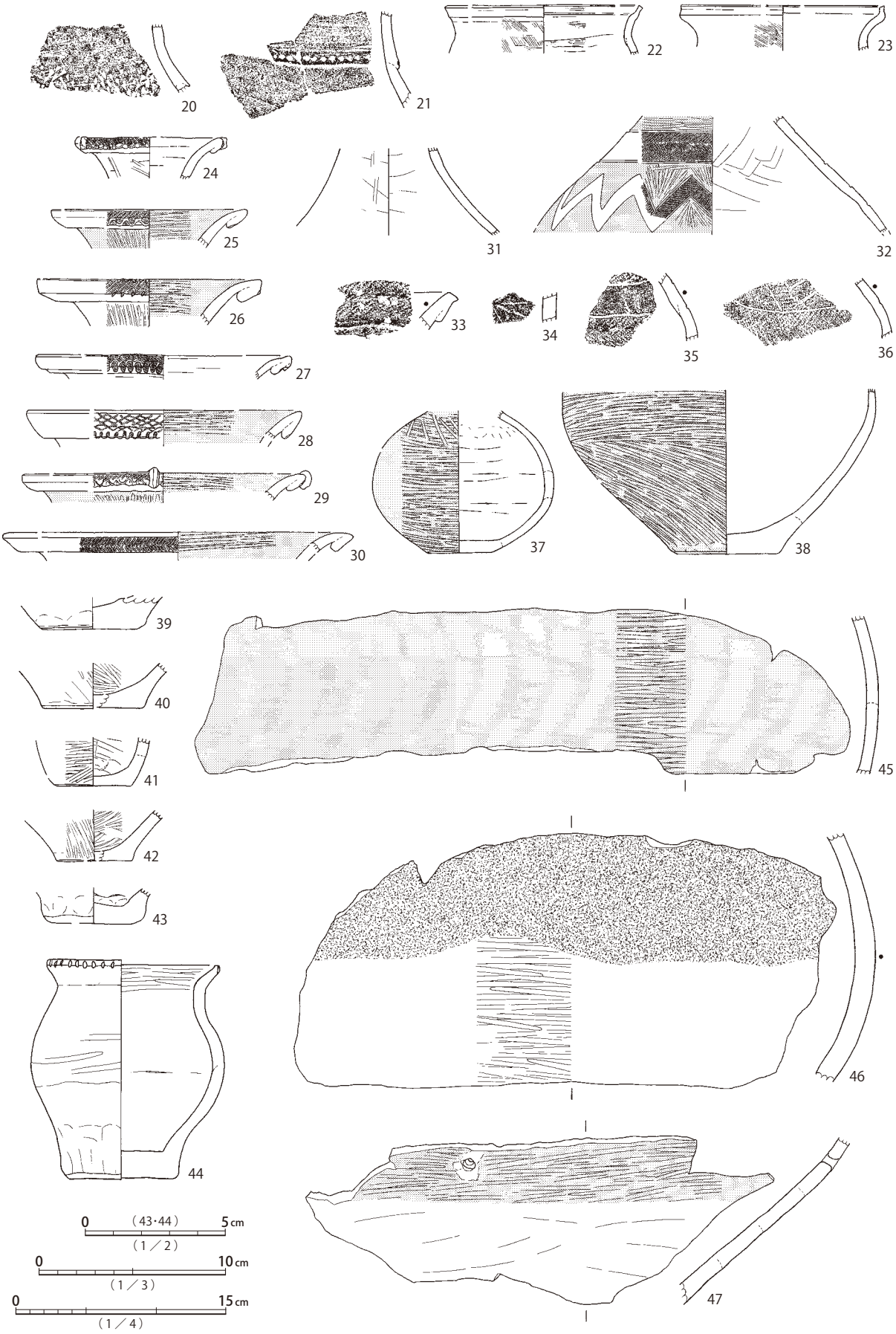
第365図 SI1094遺構(2)

SI1094



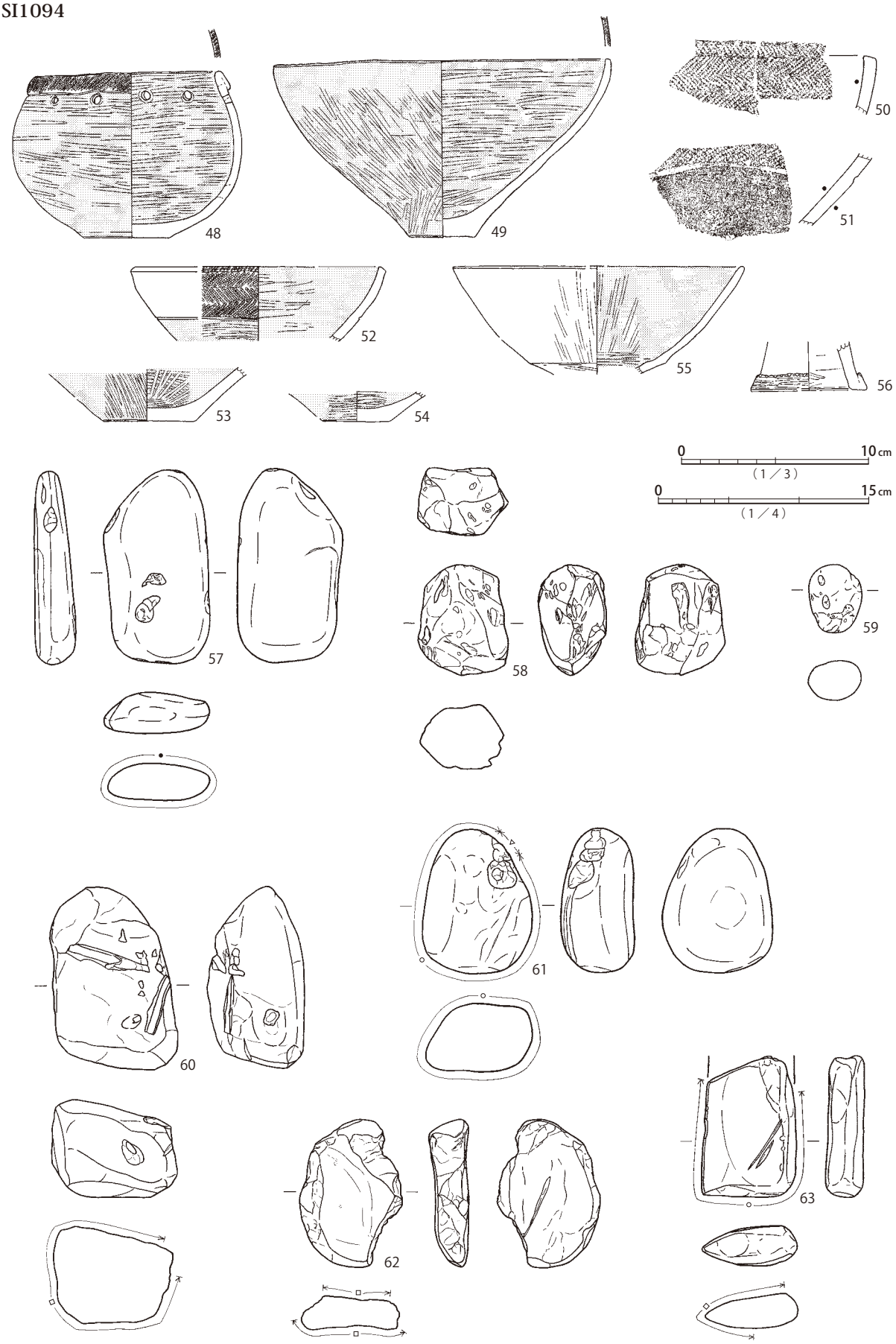
第366図　SI1094遺物（1）

SI1094



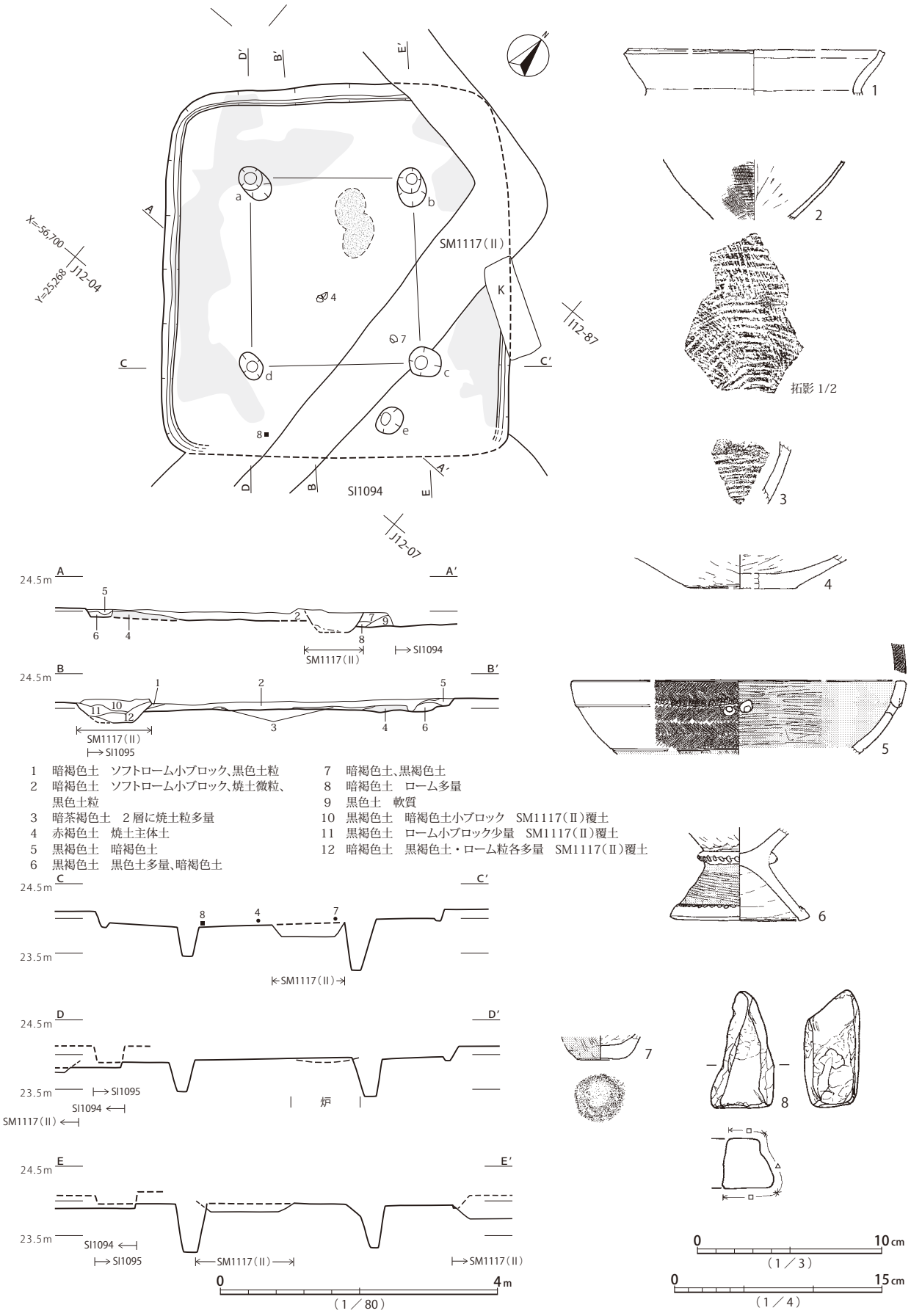
第367図　SI1094遺物（２）

SI1094



第368図　SI1094遺物（3）

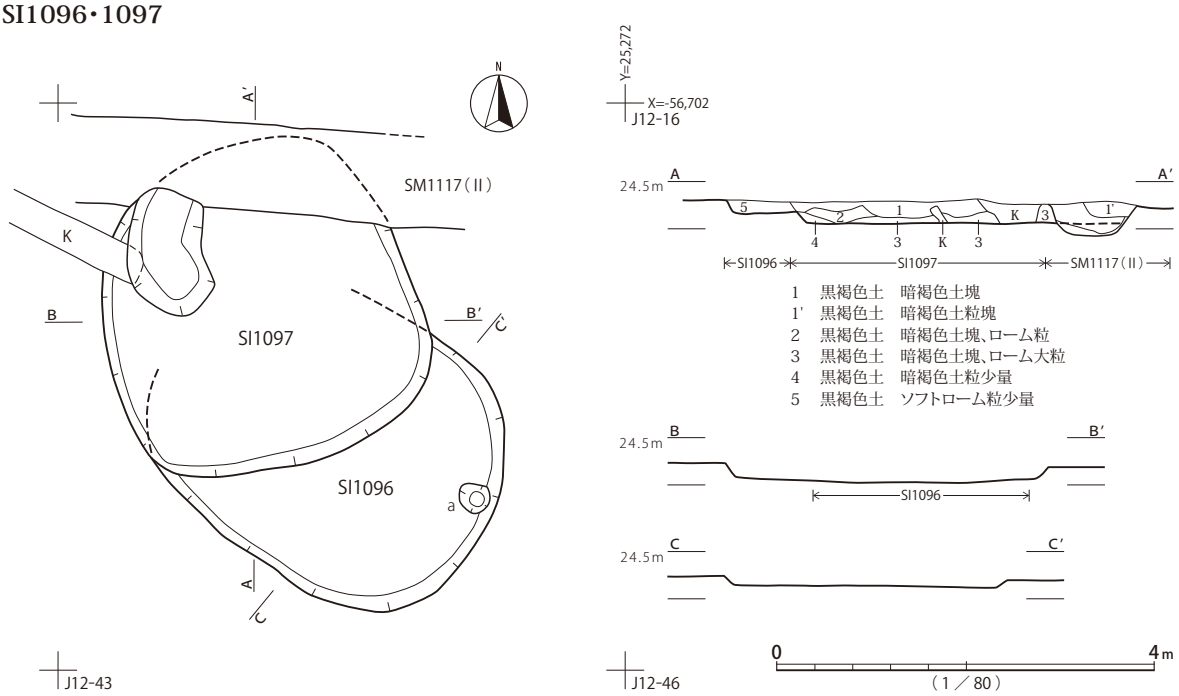
SI1095



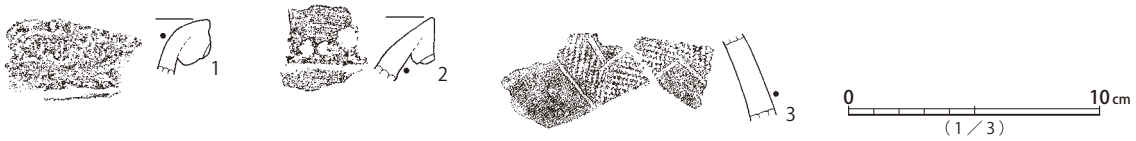
1　暗褐色土　ソフトローム小ブロック、黒色土粒
2　暗褐色土　ソフトローム小ブロック、焼土微粒、黒色土粒
3　暗茶褐色土　２層に焼土粒多量
4　赤褐色土　焼土主体土
5　黒褐色土　暗褐色土
6　黒褐色土　黒色土多量、暗褐色土
7　暗褐色土、黒褐色土
8　暗褐色土　ローム多量
9　黒色土　軟質
10　黒褐色土　暗褐色土小ブロック　SM1117(Ⅱ)覆土
11　黒褐色土　ローム小ブロック少量　SM1117(Ⅱ)覆土
12　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒各多量　SM1117(Ⅱ)覆土

第369図　SI1095遺構・遺物

SI1096・1097



SI1097



第370図　SI1096・SI1097遺構、SI1097遺物

態になっており、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI1096・SI1097（第 370 図、図版 74・241）

3.4？×3.0m、深さ 10cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1096と、3.4？×3.3m、深さ 15cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1097である。SI1096北西部とSI1097南部が大きく重なる。SI1097北辺は、古代方形墳墓SM1117南側周溝と重複するほか、撹乱を受けている。

SI1096は、主柱穴と炉が検出されず、貯蔵穴の可能性のあるaのみが確認されている。床面周溝は伴わない。炉については、写真ではSI1097重複部内床面に小さな赤変部が見られ、その位置に存在した可能性もある。

覆土は、焼土・炭化材の検出は認められず、黒褐色土主体の漸移的な堆積と見られる。

出土遺物は皆無であり、時期決定はSI1097との切り合い関係から推定せざるを得ない。

SI1097も、主柱穴および炉は認められない。北側の遺存状態はあまり良くないが、それぞれの推定位置に検出されておらず、炉については不明瞭な形態だった可能性がある。写真ではSM1117周溝の北側上端に竪穴覆土の可能性も推定できる黒ずんだ層が見られ、竪穴が方台部側に延びていたとも考えられる。その場合は、SM1117周溝内に炉が位置していた可能性も否定できない。

覆土は、焼土・炭化材は検出されておらず、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況を示す。SI1096覆

土との重複関係は不明瞭だが、SI1097の方が後出すると推定する。

遺物は、少量の土器が出土している。弥生土器壺1・3、古式土師器壺2は、いずれも覆土一括取り上げ資料であり、遺構時期を限定するのは難しい。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期の所産と考えられる。SI1096はこれに先行すると推定されるものの、同じく弥生時代後期に帰属すると思われる。

SI1098・SI1099（第371・372・373図、図版72・74・75・128・166・167・241・242・337）

3.8？×3.5？m、深さ10cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1098と、5.0×4.6m、深さ30cm程度の楕円形竪穴建物跡SI1099である。SI1098は、北西側が弥生時代後期前半のSI1085、南西側をSI1099北辺、東側を古代方形墳墓SM1117周溝と重複し、遺存状態は良くない。

SI1098は、主柱穴は認められず、ハシゴ穴と見られるピットgが検出される程度である。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面周溝は検出されていない。

覆土は、土層断面記録がなく、詳細は不明である。SI1099覆土に切り込まれる様相が認められる。

遺物は、床面近くから土器が少量出土している。底部1・3、壺2・4があり、沈線区画の網目状撚糸文の壺4は弥生時代後期中葉に位置づけられる。

本遺構は、推定平面形および切り合い関係、出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

SI1099は、主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。北壁際にも貯蔵穴状のピットfが認められる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。床面は、外周部を除いて硬化面が検出されている。

覆土は、南西側床面上に焼土集中層が検出され、廃絶時に火を受けたと見られる。最下層には焼土粒が認められるものの、以後は概ね、漸移的な過程により堆積が進んだように見受けられる。最上層には褐色土ブロックが多く含まれ、周辺遺構の掘削に由来する可能性も考えられる。

遺物は、床面直上を中心に、完形を多く含む土器群が出土している。火災による不時の廃絶もしくは、焼却処分を伴う儀礼が行われ、土器多数が遺棄された可能性が考えられる。床面出土の土器群は、在来的な口縁端部押捺の甕5～10、広口壺11・12・21、壺14～16・18・22、椀23、高杯24で構成され、弥生時代後期中葉、山田橋1式に位置づけられる。結節文と沈線を併用する区画の文様を持つ広口壺12、沈線区画の網目状撚糸文の施された広口壺21、結節文区画を上下帯だけでなく単節縄文帯の間に挟む壺18など、過渡的な様相を示し、興味深い。

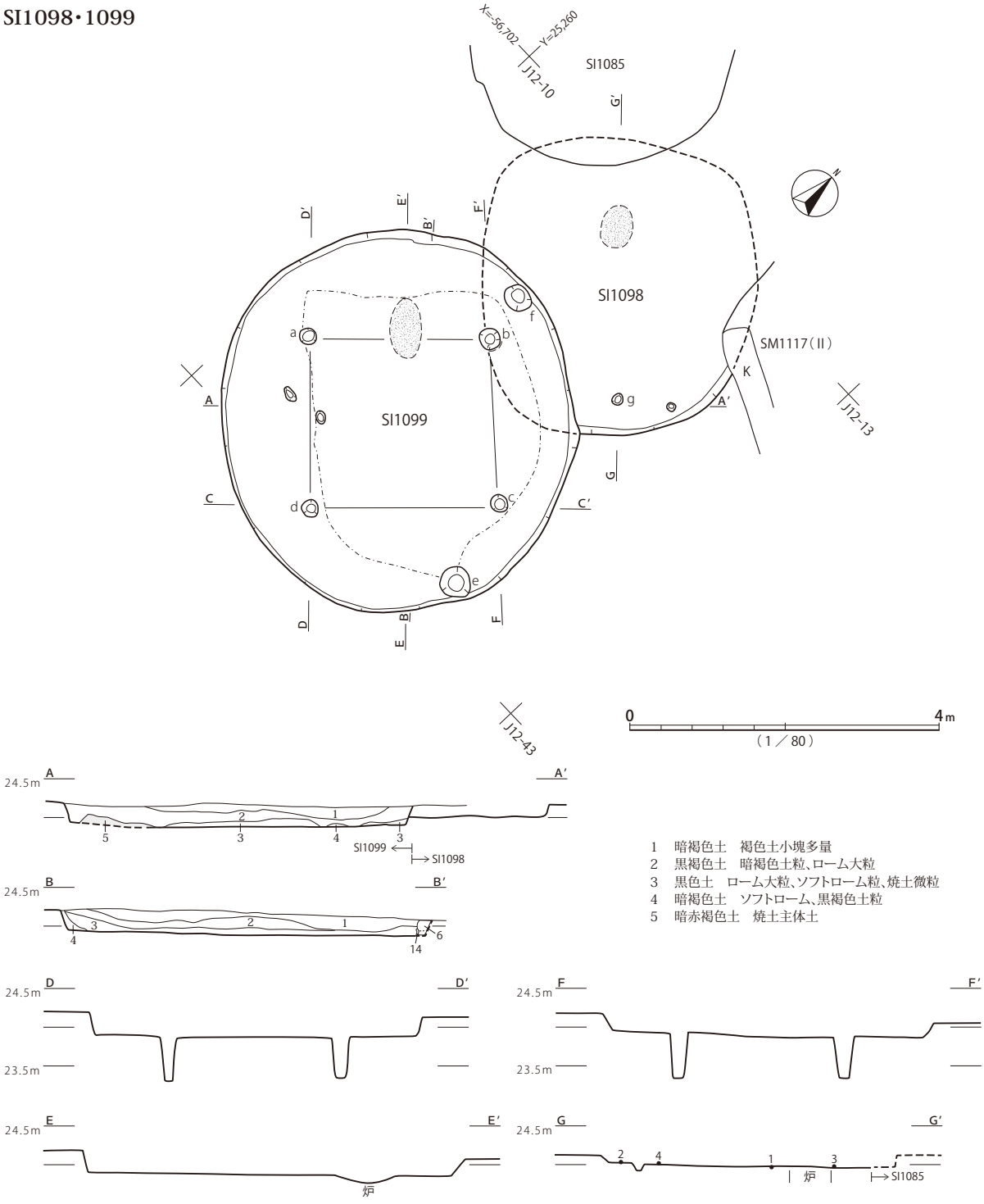
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉、山田橋1式期に位置づけられる。

重複する両遺構は、弥生時代後期前半のSI1098→同後半のSI1099、という順で構築されたと想定できる。SI1085とSI1098の先後関係は不確定だが、SI1085が先行すると推定する。

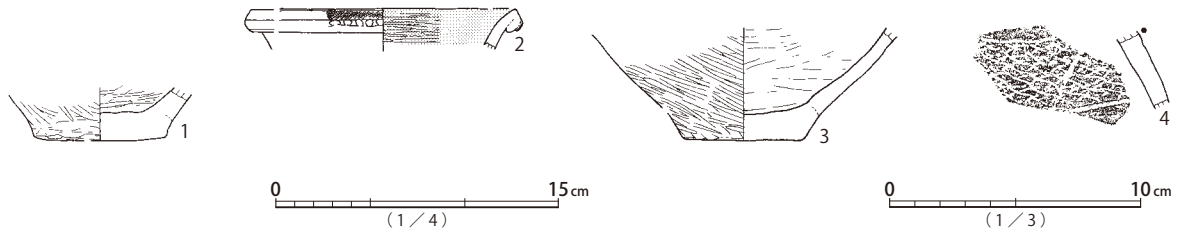
SI1100（第374図、図版75・242・337）

3.5×2.9m、深さ20cm程度の不整長方楕円形竪穴建物跡である。南側が、古代方形墳墓SM1117北側周溝と重複し、床面以下まで破壊を受ける。主柱穴は認められず、ハシゴ穴と考えられるピットaが検出されるのみである。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。

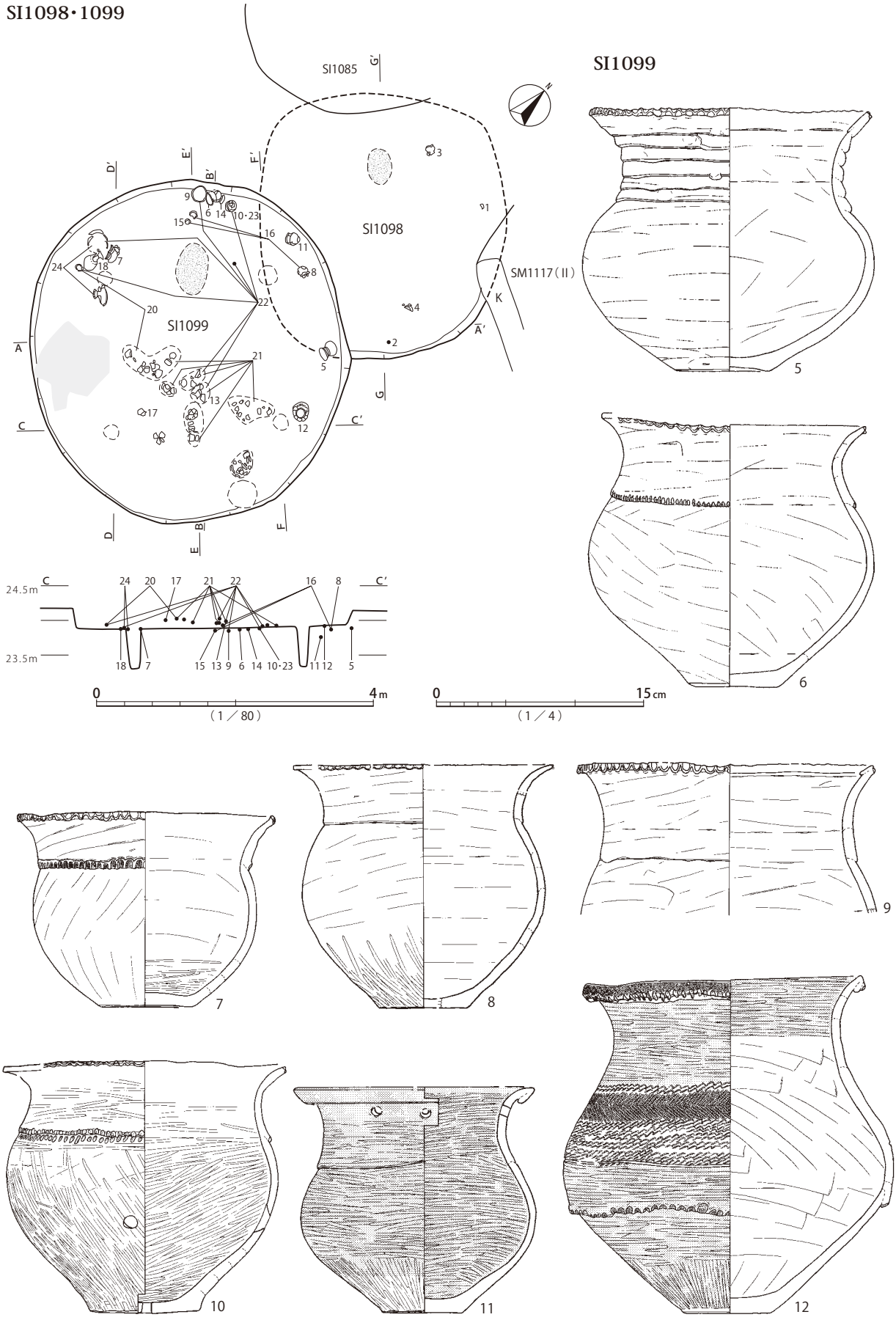
SI1098・1099



SI1098

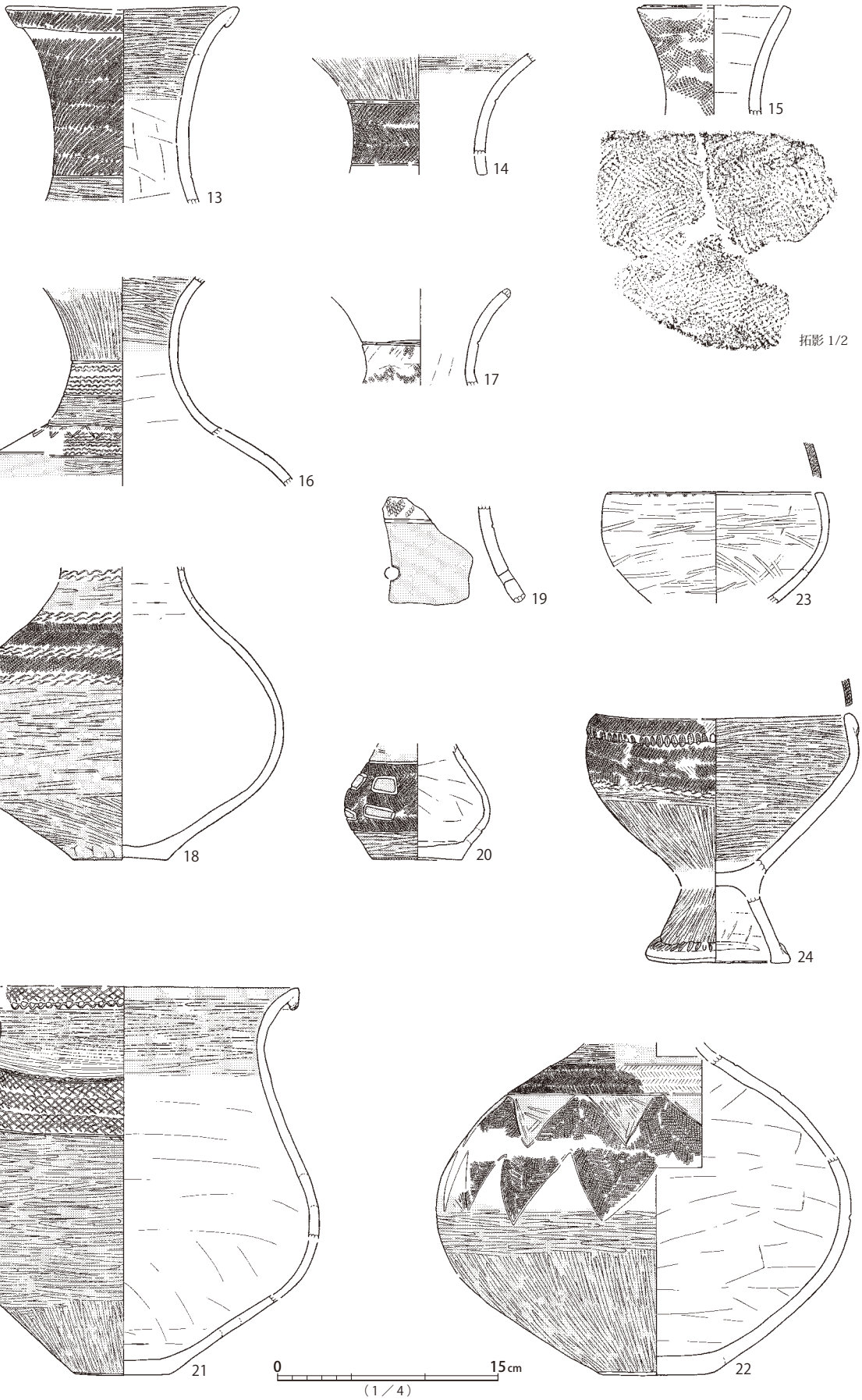


第371図　SI1098・SI1099遺構（1）、SI1098遺物



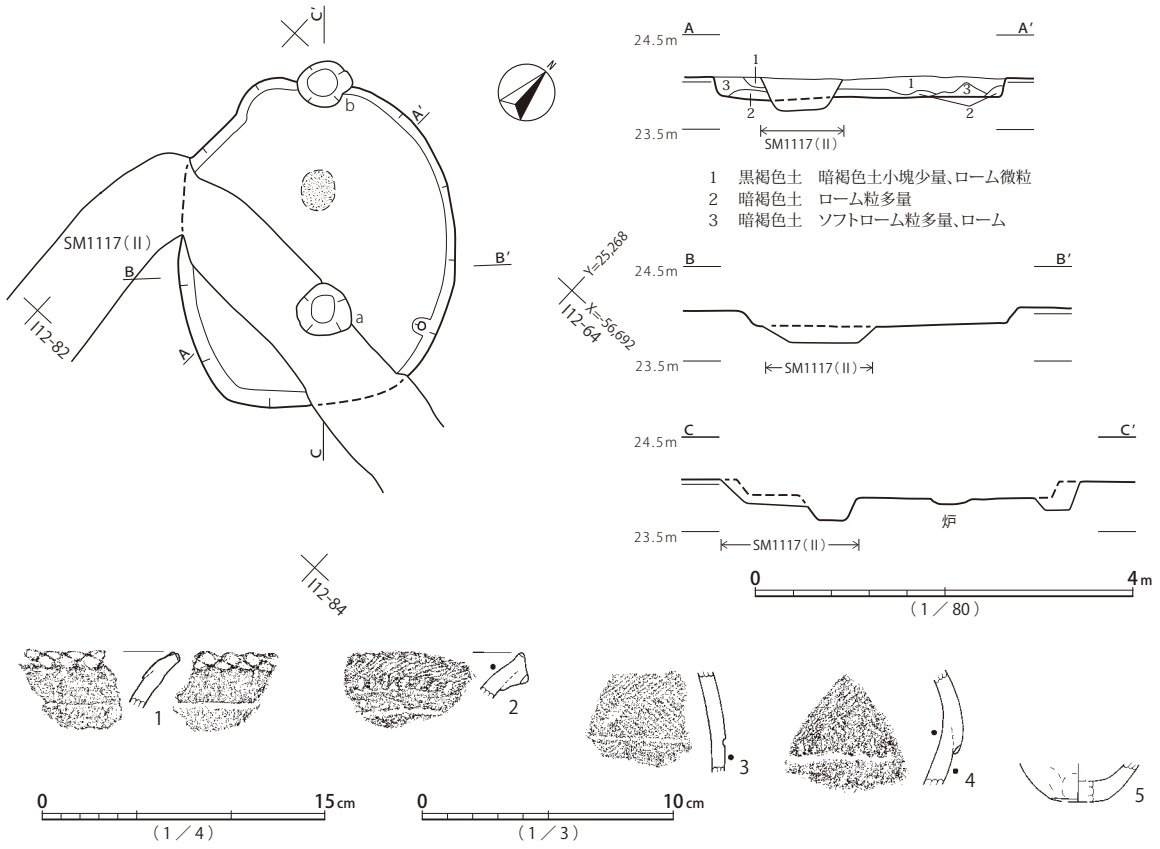
第372図　SI1098・SI1099遺構(2)、SI1099遺物(1)

SI1099



第373図　SI1099遺物(２)

SI1100



第374図　SI1100遺構・遺物

覆土は、下層にローム粒を多く含む暗褐色土から黒褐色土の漸移的堆積を示す。焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、土器が少量出土しており、すべて覆土一括取り上げ資料である。口縁端部交互押捺の甕1、壺2・3、鉢もしくは高杯4は、いずれも弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。

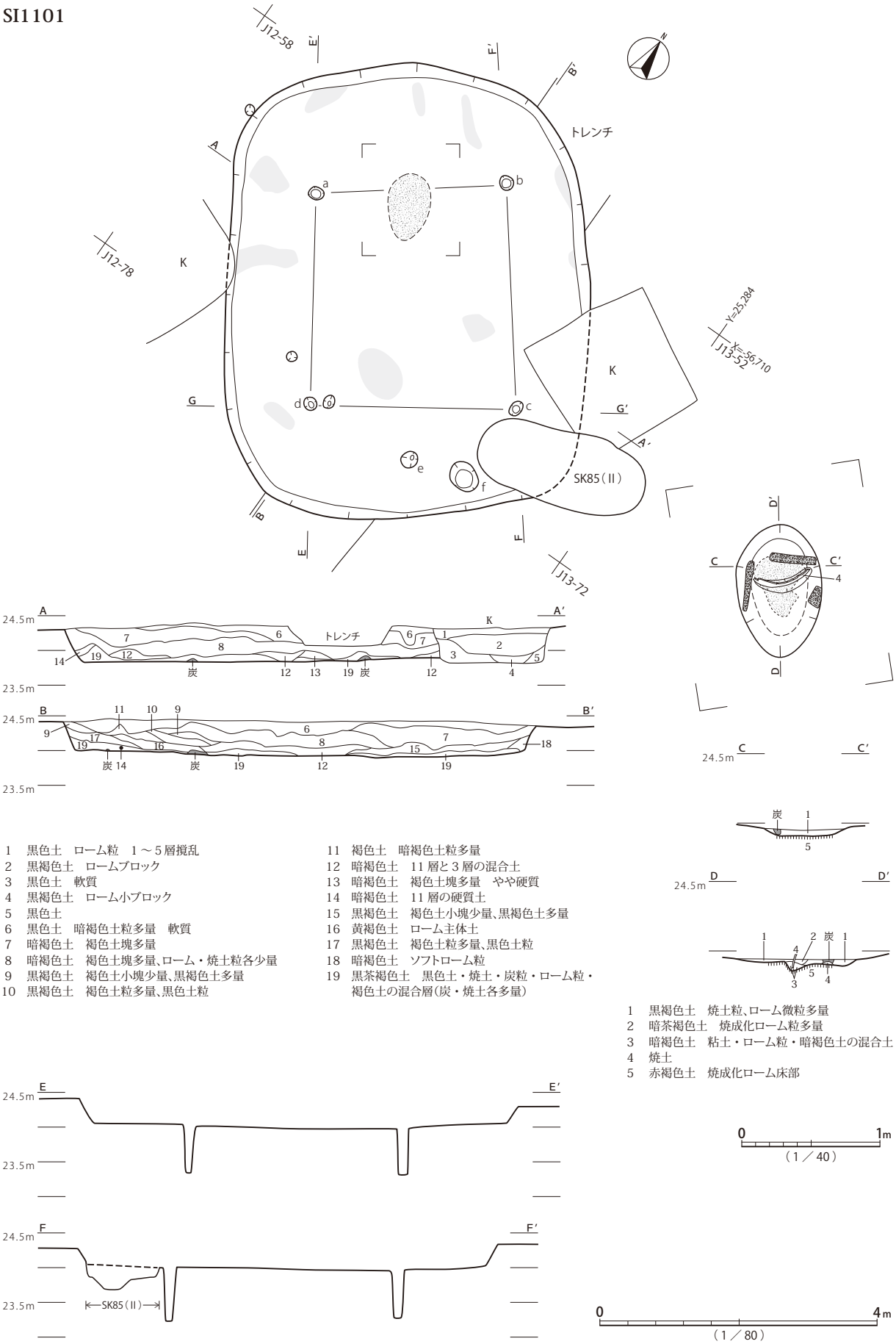
SI1101（第375・376・337図、図版75・167・242・313）

6.6×5.3m、深さ45cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。東西辺にイモ穴の撹乱を受けるほか、南東角が土坑SK85と重複し、床面まで破壊を受ける。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉内中心部には、大型の甕胴部片4が、元の外面を竪穴中心側に向け、立てて埋置されている。

覆土は、床面上に焼土と炭化材の集中部が検出され、廃絶過程で火を受けた様相を示す。焼土層の上にはローム主体土が堆積し、被熱しなかった屋根葺き材もしくは埋め戻し土と推定される。完形近くに復元できる土器も複数含まれるが、不時の廃絶を示唆するほどの遺物量ではないため、建物あるいは建材の焼却処分を想定できる。中位以上はレンズ状堆積を呈し、概ね漸移的堆積過程が認められる。

遺物は、弥生土器と石製品が床面上を中心に出土している。床面近くの資料は、口縁端部交互押捺の甕1～3・5、壺6～12・14があり、弥生時代後期前半、久ヶ原1式～2式古段階に位置づけら

SI1101



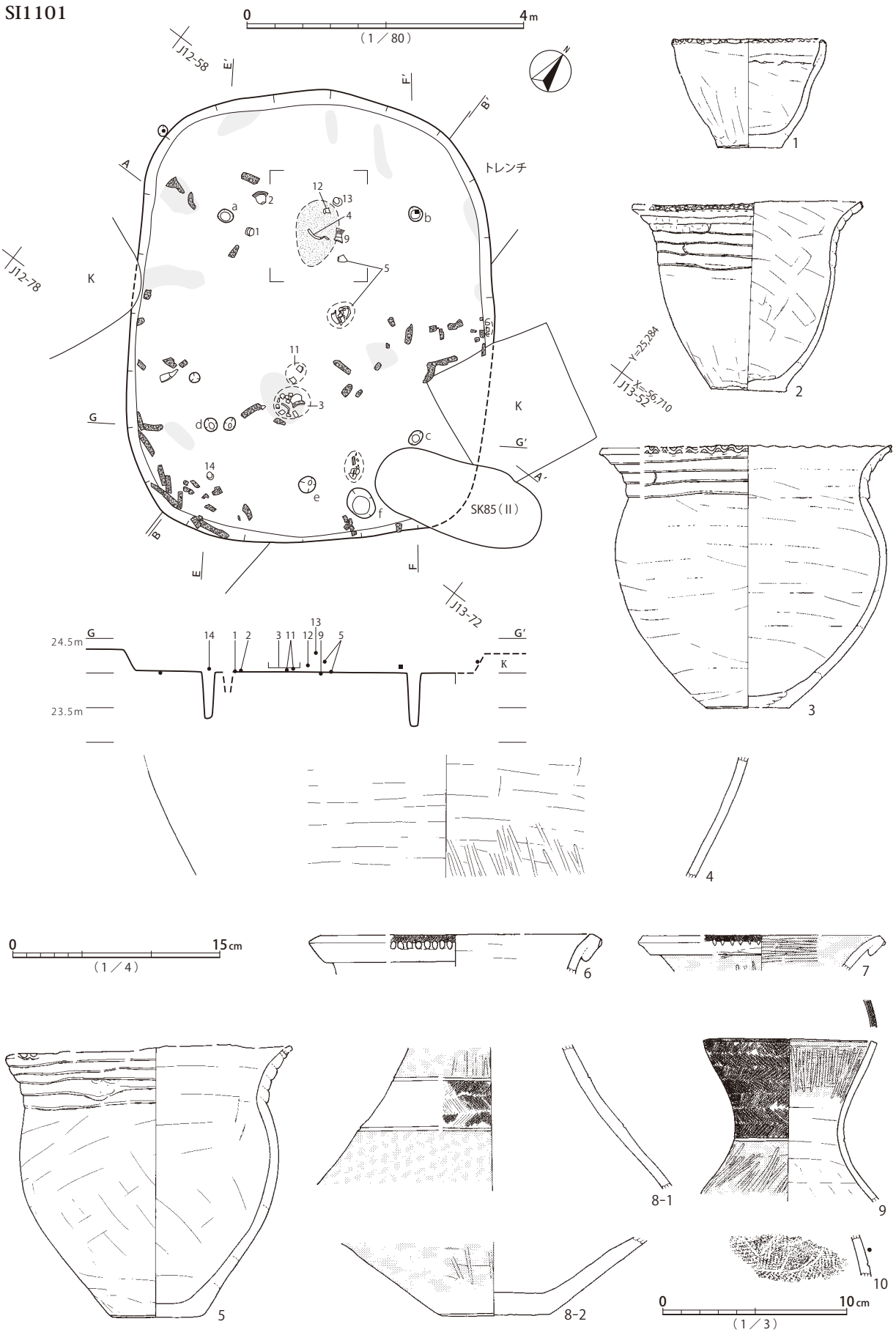
1　黒色土　ローム粒　1～5層攪乱
2　黒褐色土　ロームブロック
3　黒色土　軟質
4　黒褐色土　ローム小ブロック
5　黒色土
6　黒色土　暗褐色土粒多量　軟質
7　暗褐色土　褐色土塊多量
8　暗褐色土　褐色土塊多量、ローム・焼土粒各少量
9　黒褐色土　褐色土小塊少量、黒褐色土多量
10　黒褐色土　褐色土粒多量、黒色土粒
11　褐色土　暗褐色土粒多量
12　暗褐色土　11層と3層の混合土
13　暗褐色土　褐色土塊多量　やや硬質
14　暗褐色土　11層の硬質土
15　黒褐色土　褐色土小塊少量、黒褐色土多量
16　黄褐色土　ローム主体土
17　黒褐色土　褐色土粒多量、黒色土粒
18　暗褐色土　ソフトローム粒
19　黒茶褐色土　黒色土・焼土・炭粒・ローム粒・褐色土の混合層（炭・焼土各多量）

1　黒褐色土　焼土粒、ローム微粒多量
2　暗茶褐色土　焼成化ローム粒多量
3　暗褐色土　粘土・ローム粒・暗褐色土の混合土
4　焼土
5　赤褐色土　焼成化ローム床部

0　1m
（1／40）

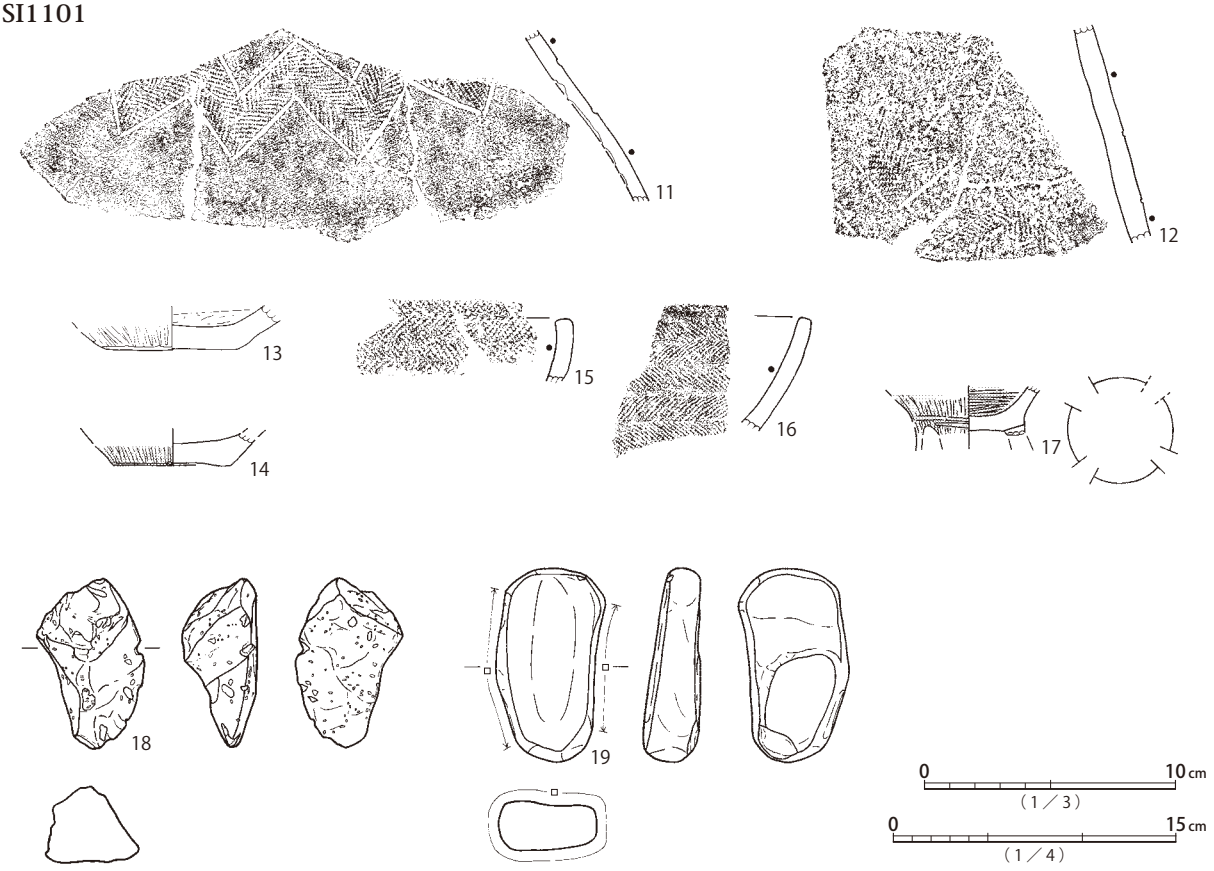
0　4m
（1／80）

第375図　SI1101遺構（1）



第376図　SI1101遺構(2)、SI1101遺物(1)

SI1101



第377図　SI1101遺物（2）

れる。その他、軽石18、砂岩製砥石19が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半古相の所産と考えられる。

SI1102・SI1207（第378・379図、図版75・76・172・242・252・313）

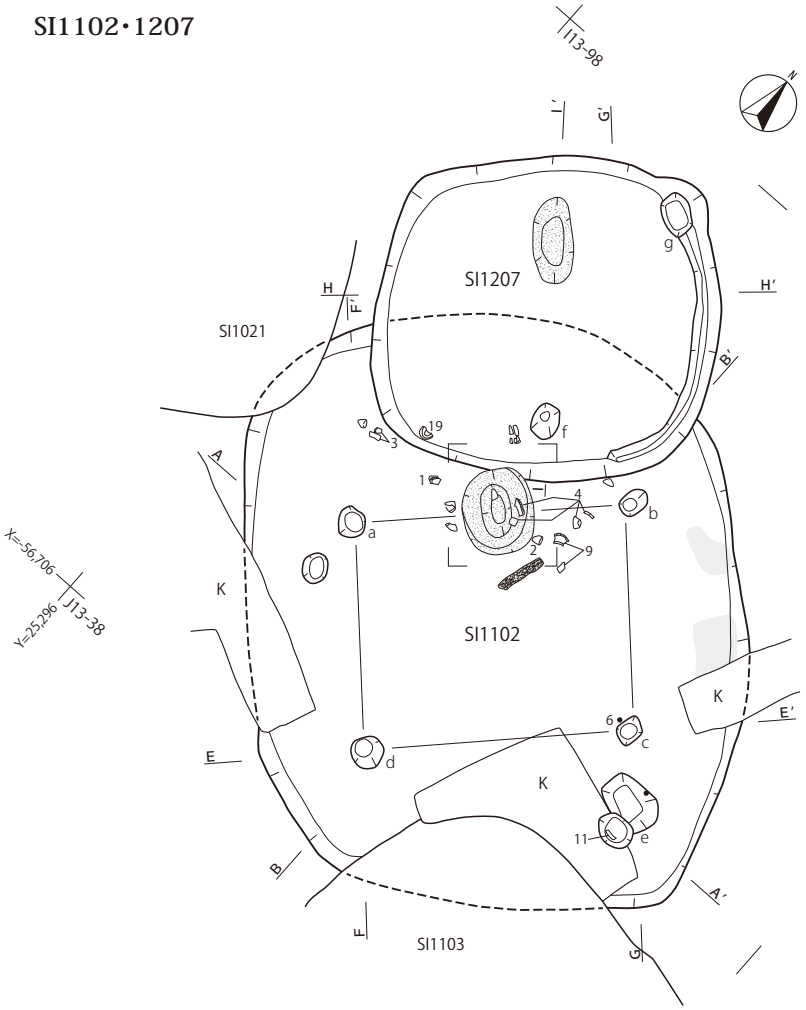
6.3×5.3m、深さ25cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡SI1102と、3.4×3.7m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡SI1207である。SI1102北西部とSI1207南東部が大きく重複し、後者がSI1102覆土を床面より深く切り込む。SI1102は、イモ穴による撹乱を受けるほか、弥生時代終末期のSI1021・SI1103と重複し、床面まで破壊されている。

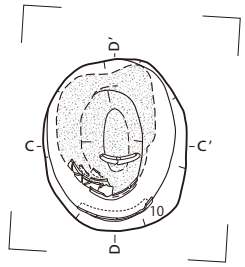
SI1102は、主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。eは、掘方が2基に分かれ、建物存続期間の2時期に対応する可能性がある。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉内には、中心近くから外縁に向けて、立てて埋置された3グループの土器片が検出されている。炉中心寄りの破片には埋置に伴う土層は検出されないが、中央の破片は粘土、外縁の破片は黒色土によって固定されている。中央片と外縁片の間に焼土は認められない。床面は中央付近が硬化する。床面周溝は検出されていない。

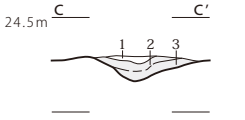
覆土は、北寄りの床面直上に焼土の集中が見られ、一部に炭化材が検出されている。廃絶過程で焼却処分など火を受けたと見られる。下層以上は、ローム混じりの暗褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

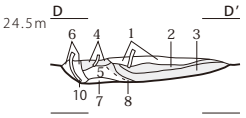
遺物は、炉周辺の床面近くを中心に土器等が出土している。甕1・2、底部片4、壺6・9が床面近

SI1102・1207

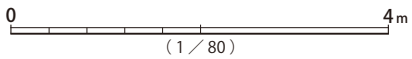








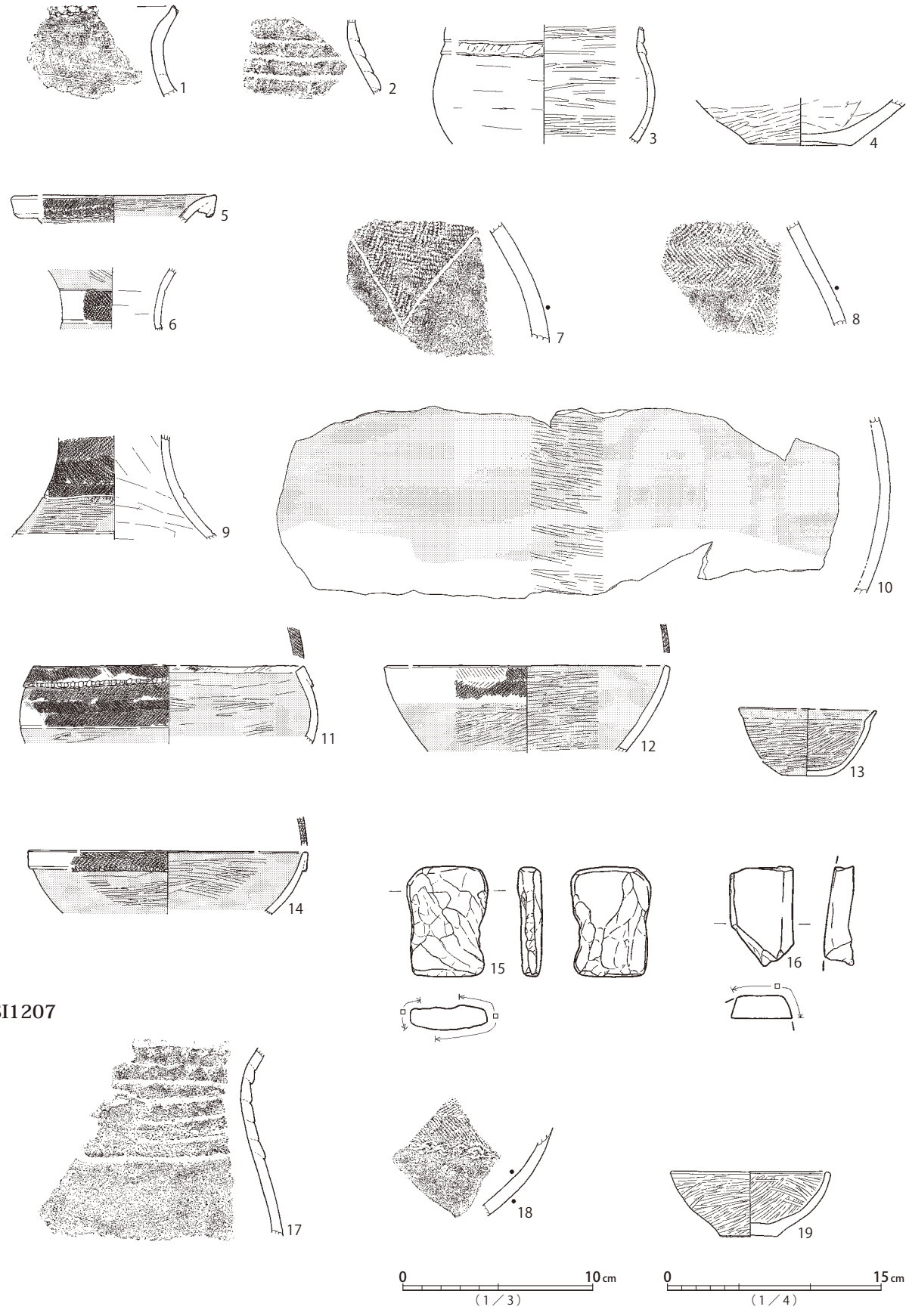
1　暗褐色土　ローム微粒、焼土粒
2　赤褐色土　焼成化ローム粒
3　焼成化ローム床　硬質
4　暗赤褐色土　ローム粒、半焼成化粘土、暗褐色土粒
5　褐色土　ローム・灰・焼土・黒褐色土の混合土
6　黒褐色土　外側埋設器の埋め込み（粘土）
7　暗茶褐色土　焼土・ローム大粒の混合土、黒色土粒
8　暗赤褐色土　強く焼けた壁状焼土



1　暗褐色土・黒褐色土・ローム大粒・ソフトローム粒の混合土　撹乱覆土
2　黒色土　軟弱　撹乱覆土
3　黒褐色土　ローム微粒
4　暗褐色土　ソフトローム多量、黒褐色土粒
5　暗赤褐色土　焼土多量
6　暗褐色土　ローム粒
7　黒褐色土　3層土粒多量
8　暗黄褐色土　ローム多量
9　暗褐色土
10　ローム
11　暗褐色土　ローム粒多量
12　暗褐色土小塊多量
13　暗褐色土　ソフトローム塊
14　暗褐色土　ローム粒

第378図　SI1102・SI1207遺構

SI1102



第379図　SI1102・SI1207遺物

くから出土し、貯蔵穴e内から椀11が検出されている。大型壺10は炉最外縁に埋置された土器片である。その他、軽石製砥石15、砂岩製砥石16が覆土一括取り上げ資料として出土している。なお、甕3はSI1207南西角との切り合い部分上位で検出されており、SI1207に伴う可能性が否定できない。覆土一括取り上げ資料の古式土師器の屈折口縁小型鉢13は、大ぶりの類品がSI1021から出土しており、SI1021もしくはSI1103に由来する可能性が考えられる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。なお、3段階と推定される炉埋置土器片、2段階の貯蔵穴が認められるため、建物が比較的長期間にわたって使用されたことが示唆される。

SI1207は、主柱穴は認められず、ハシゴ穴fが検出される程度である。中心軸上、北西寄りに長楕円形の炉が設けられる。北東壁際に床面周溝が検出され、不明ピットgに連続する。床面は全体的に硬化する。

覆土は、焼土・炭化物の集中は検出されていない。土層断面記録は部分的だが、ロームを多く含む暗褐色土主体の漸移的な堆積状況が見受けられる。

遺物は、土器が少量出土している。出土位置が明確なのは、下層から出土した古式土師器小型無文鉢19のみで、輪積痕甕17と結節文区画鉢18は覆土一括取り上げ資料である。小型鉢19は、弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から終末期前半に帰属すると考えられる。

周辺の遺構は、弥生時代後期前半のSI1102→同後期後半～終末期前半のSI1207→同終末期前半のSI1021・SI1103の順に構築されたと想定できる。

SI1103（第380図、図版76・243）

4.6×4.2m、深さ55cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北西角がSI1102南東辺と重複し、本遺構が切り込む。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。貯蔵穴fの上端外周には、蓋受けの機能を持つものか、堤状の高まりがL字状に設けられている。中心軸からやや南寄り、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。火床面はダルマ形に連結・拡張されている。床面は全体的に硬化し、床面周溝が南辺のみ部分的に検出されている。

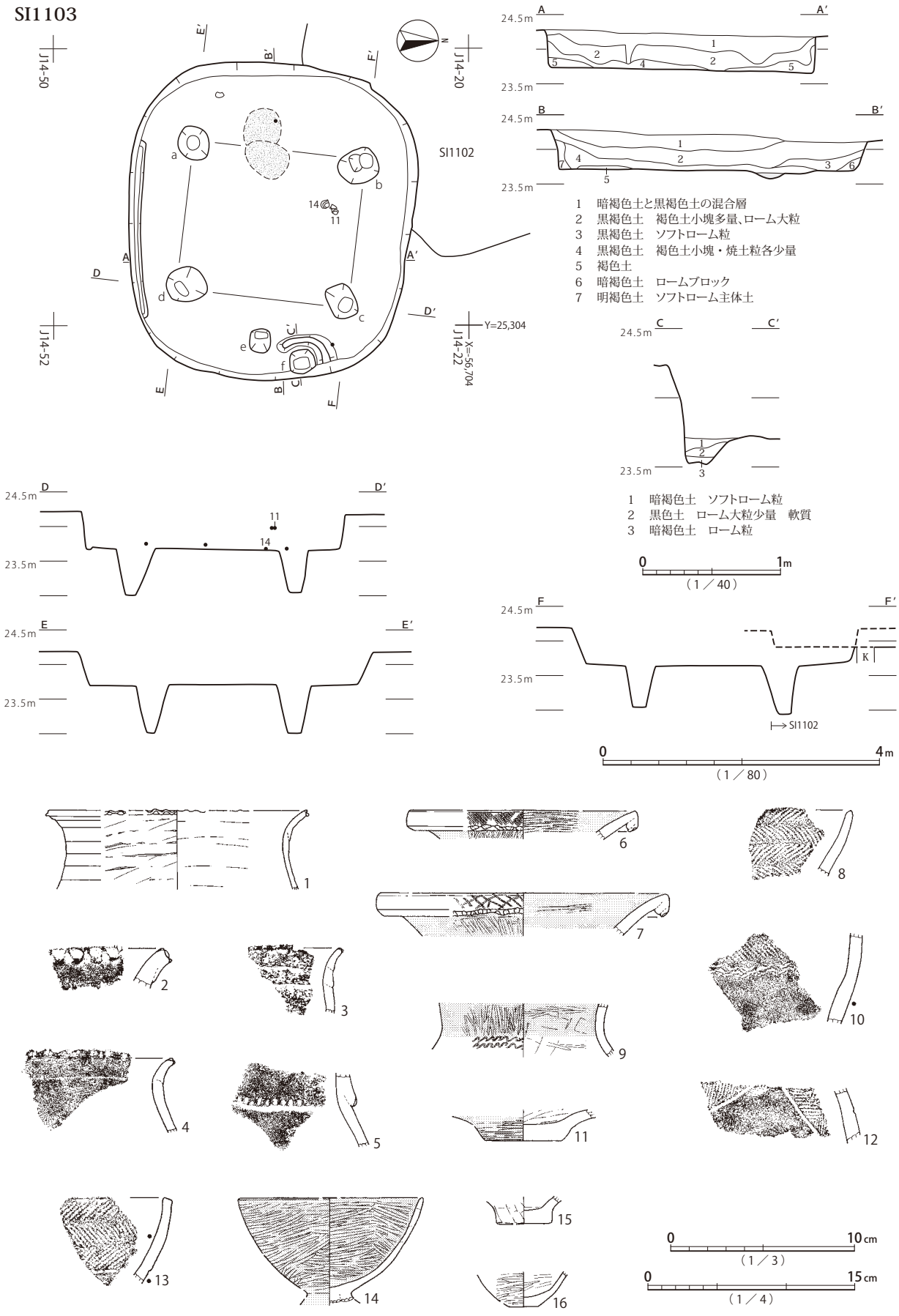
覆土は、焼土・炭化材は検出されていない。初期堆積にロームブロック・ローム主体土が目立つほかは、暗褐色土から黒褐色土の概ね漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、土器が少量出土している。出土位置が明確な図化資料は、中層の壺底部片11と、床面上から検出された高杯14に限られる。在来的な甕1～5、壺6～10・12、鉢13、小型土器15・16は、いずれも覆土一括取り上げ資料である。高杯14は弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられる。その他、渥美甕胴部片（1b～2b型式）1点（82.2g）が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と推定される。

SI1104（第381・382・383図、図版76・167・168・243・313・337）

4.6×5.0？m、深さ30cm程度の方形竪穴建物跡である。南辺がイモ穴等の撹乱を受けるほか、



第380図　SI1103遺構・遺物

弥生時代終末期のSI1105北角と重複し、北東角が弥生時代後期のSI1106南西辺と切り合う。主柱穴は認められず、貯蔵穴aのみが検出されている。貯蔵穴aの上端外周には、20～30cmの間隔をとってJ字形の堤状高まりが設けられる。中心から北西寄りに楕円形の炉が設けられ、その東側に一回り小さい炉もしくは被熱部が認められる。床面は、炉の周辺が目立って硬化している。

覆土は、床面直上に焼土層が広がり、放射状に炭化材が多数検出されている。建物構造を反映している可能性があり、火を受けた時点で建物が存在したと見られる。焼土層は屋根上の葺き土が被熱・赤変し、堆積したと考えられる。現場記録ではスサと表現される部分もあり、屋根材あるいは壁材に由来するワラやアシの束状炭化植物が含まれていたと見られる。貯蔵穴覆土は最上層に焼土粒が含まれるほか、下層に焼土・炭化物が目立たず、廃絶時にある程度埋没が進んでいた可能性も考えられる。床面直上からは、完形もしくは完形近くに復元できた土器が多く検出されている。甕が炉の周辺に目立つ点は、日常的な配置・使用状況を示唆するが、小型器台と完形の甕が北東部の貯蔵穴周辺で検出されるなど、廃絶時における儀礼的な遺棄・配置である可能性もあり、判然としない。

遺物は、比較的多数の古式土師器を主体とする土器が床面上から出土している。弥生土器甕1、非在地的胎土の布留式と見られる甕片2、刻目状刺突の伴うくの字状口縁甕3、受口状口縁甕4・5、輪台技法の底部12、弥生土器壺14～19は、いずれも覆土一括取り上げ資料である。甕3～5・12については、SI1105覆土に由来する可能性がある。床面直上からは、ハケ調整のくの字状口縁を主体とする甕6～9・11・13、甕もしくは転用甑10、小型鉢21、丸底系鉢23、小型器台24～26が検出されている。炉の位置において甕7・8・11、貯蔵穴内から丸底系鉢23、その周辺から小型器台3個体と甕6・転用甑10が出土している。床面出土土器は概ね、古墳時代前期前半、草刈2式古相に位置づけられる。その他、シルト岩製砥石状石製品29、砂岩製砥石30が出土している。

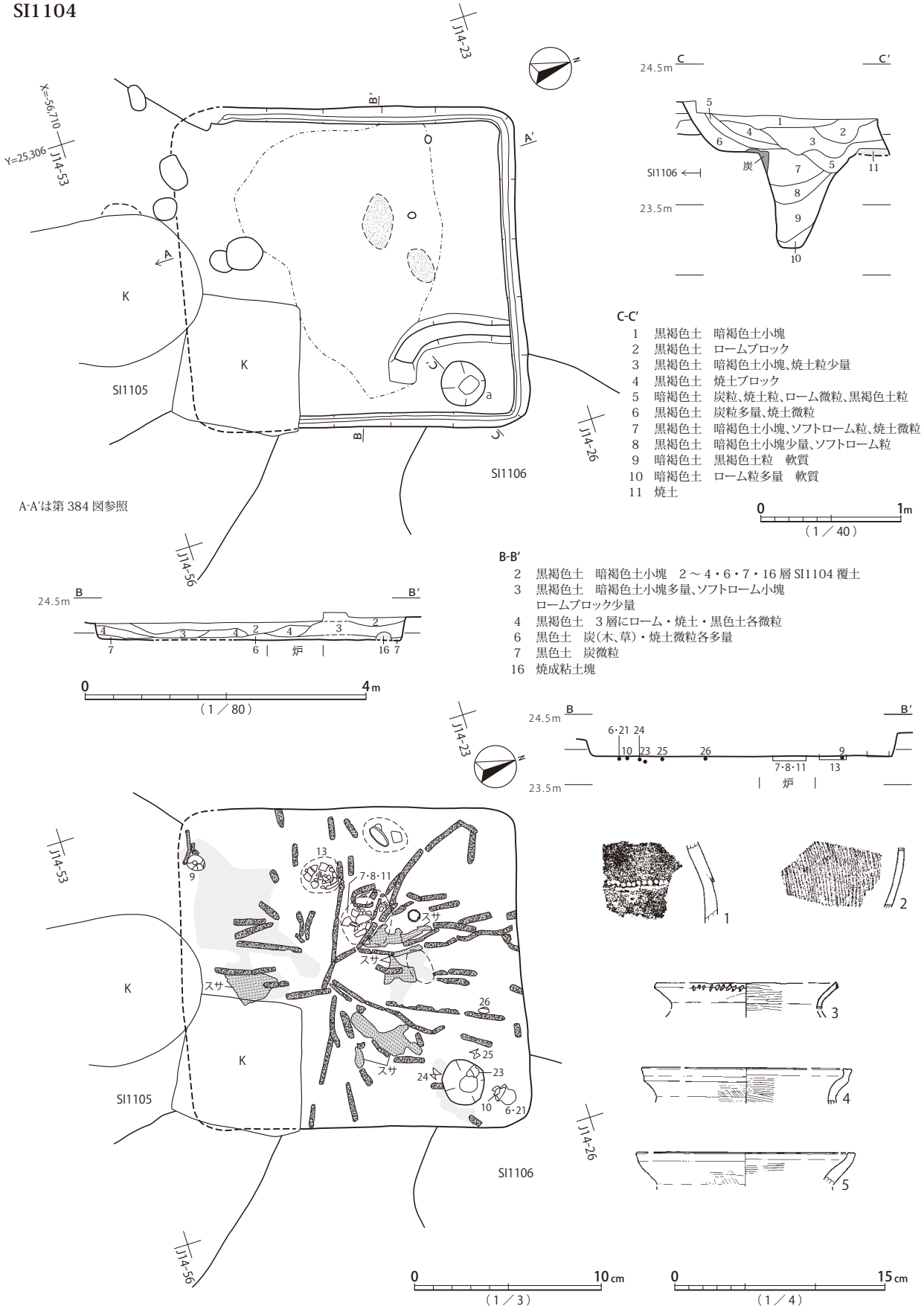
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、古墳時代前期前半の所産と考えられる。

SI1105（第384・385図、図版76・168・243・313・337）

6.9×7.0m、深さ35cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。中央部から東側にかけて大きく撹乱を受けるほか、北東角が古墳時代前期前半のSI1104南部と重複し、SI1104床面が覆土中に形成されている。主柱穴a～d、ハシゴ穴と見られるeが検出されている。竪穴南西側にはa・d間の柱筋に沿って、高さ10cm弱のベッド状遺構がL字形に設けられている。写真の色調を見る限り、削り出しされた地山ローム層ではなく、床面構築土を連続的に高くすることで構築されたように見受けられる。北東側にも同様に存在した可能性はあるものの、撹乱等により不明瞭になったためか検出されていない。中心軸上、a・b間ラインの内側に楕円形と推定される炉が設けられるが、大部分は撹乱により破壊されている。床面周溝は西側のみで確認されている。

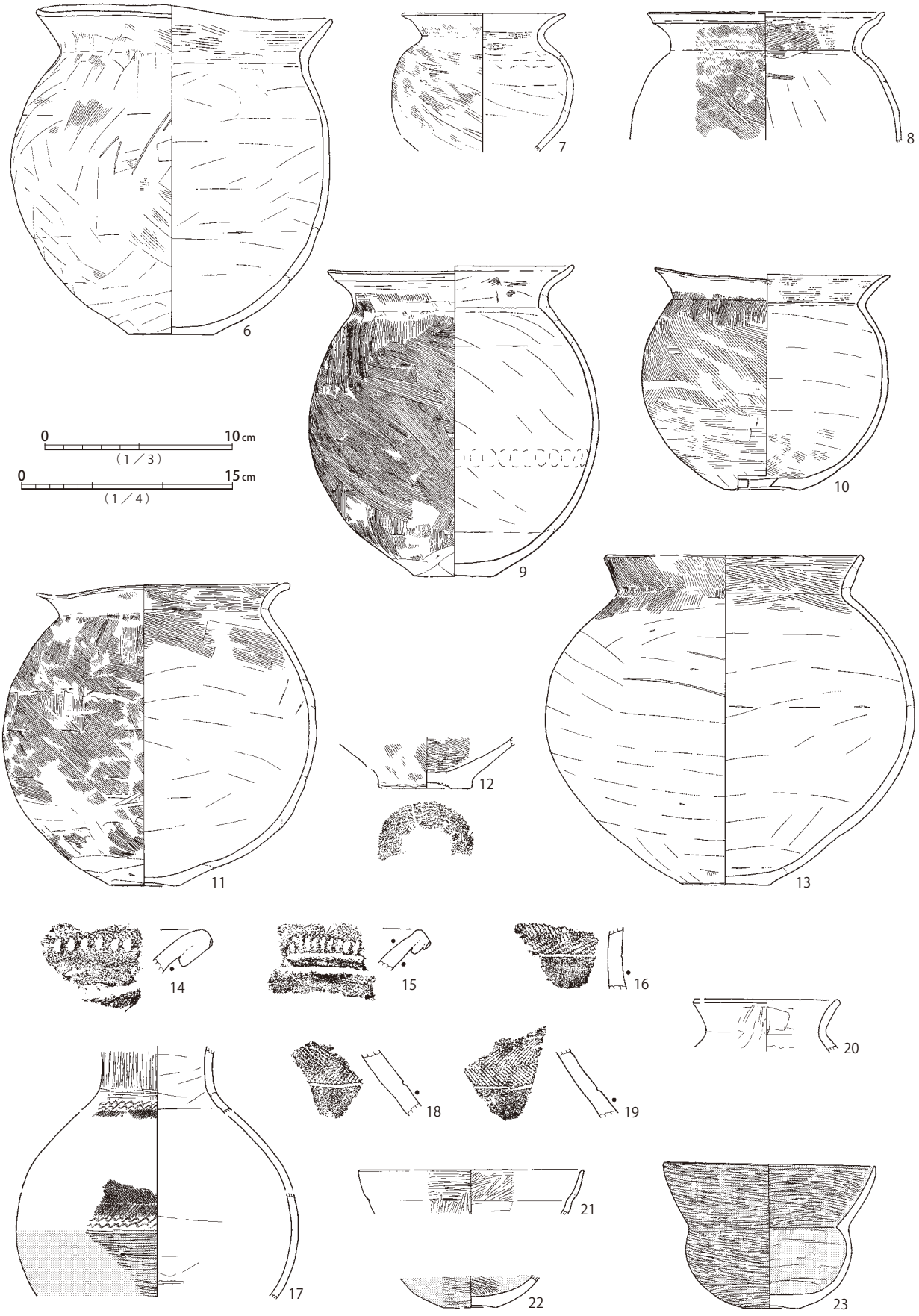
覆土は、外周部床面直上に焼土の集中が認められ、廃絶時に火を受けたものと見られる。床面からは完形に近い土器も複数出土しているが、不時の廃絶というよりは、廃絶過程の儀礼に伴う遺棄が示唆される。下層以上は暗褐色土から黒褐色土を主体とする、レンズ状の漸移的堆積状況が認められる。B-B’の14層直下は床面から若干高くなっており、ベッド状遺構が北西辺に連続していていた可能性を示す。

SI1104



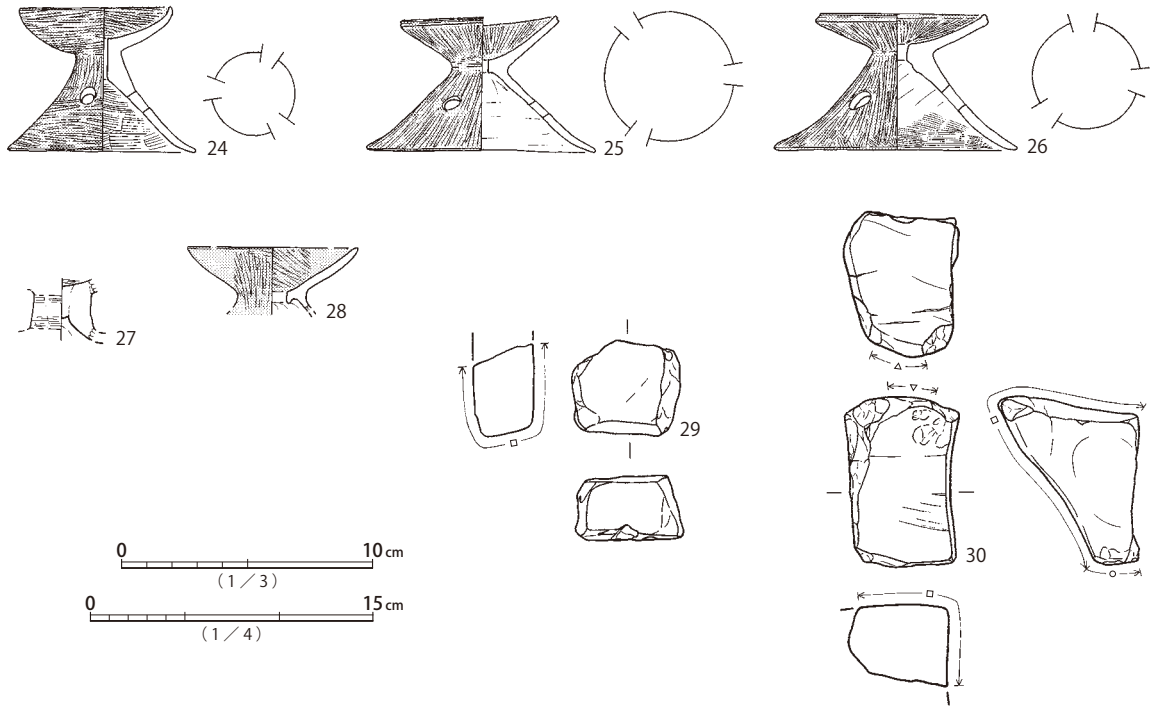
第381図 SI1104遺構、SI1104遺物(1)

SI1104



第382図　SI1104遺物（２）

SI1104



第383図　SI1104遺物（3）

遺物は、床面上を中心に古式土師器等が出土するほか、南東辺上端付近に土器片集中部が認められる。床面からは、タタキ甕6、直口壺8・9、輪台技法の底部11、小型鉢13・16、高杯17・18、小型土器21が出土し、柱穴a内から小型鉢14が検出されている。その他は鉢12を除き、覆土一括取り上げ資料である。直口壺8は口縁端部に平坦面を持ち、頸部屈曲も緩い。小型鉢14は、くの字状口縁を持ちながらも、底部が輪台技法で形成されている。直口壺9も、くの字状口縁だが、大きく張り出す胴部と頸部直径、器高のバランスから、古墳時代前期にまでは下らないと考えられる。床面出土土器は概ね、弥生時代終末期後半、中台2式に位置づけられる。その他に、頁岩製礫石器22が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半の所産と考えられる。周辺遺構は、弥生時代後期のSI1106→同終末期後半のSI1105→古墳時代前期前半のSI1104、の順に構築されたと推定される。

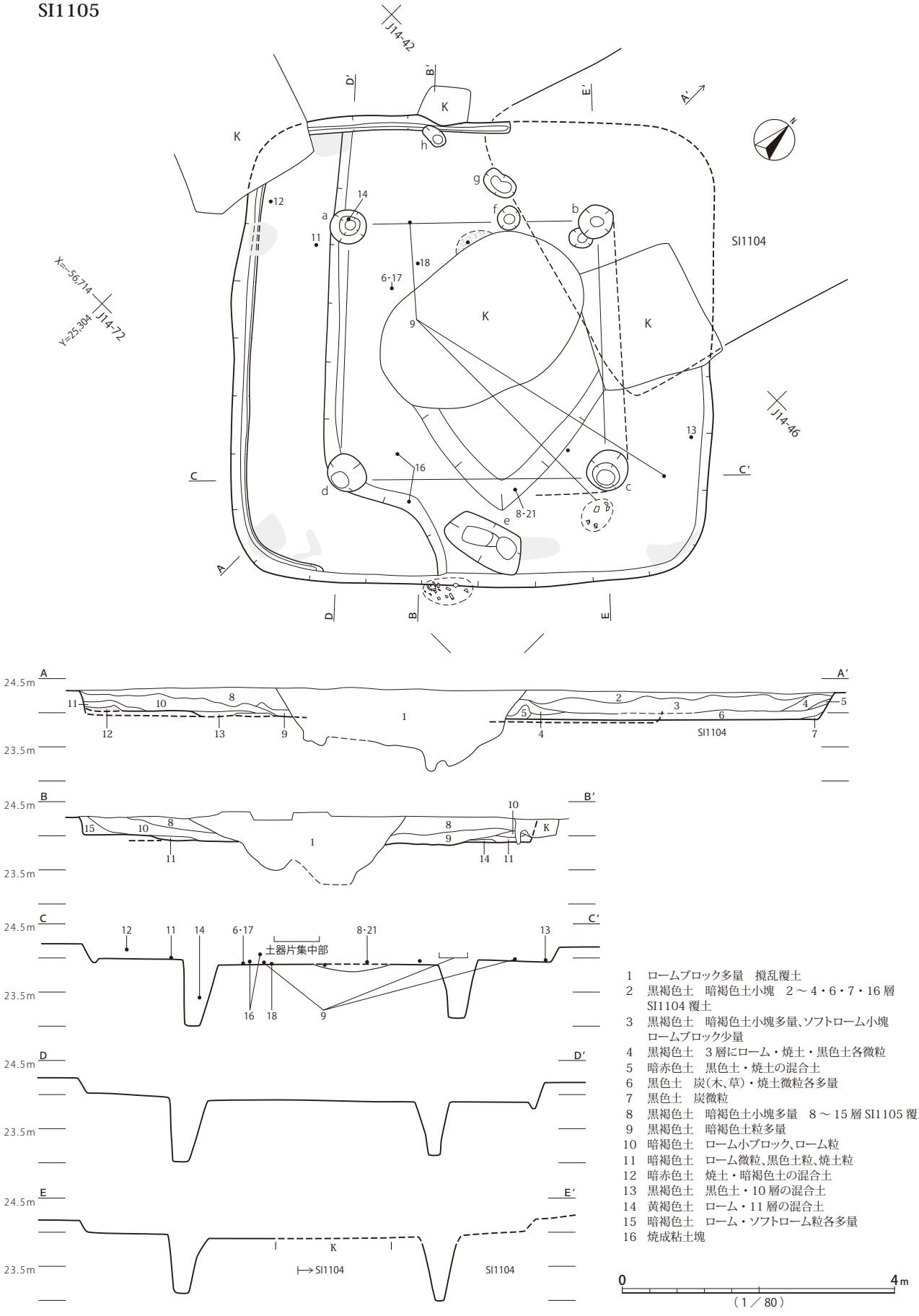
SI1106（第386図、図版76・244）

3.6×3.6m、深さ25cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。西角が古墳時代前期前半のSI1104、東側が古代方形墳墓SM1161西側周溝と重複し、前者に床面まで掘り込まれている。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bのみが検出されている（aの位置・規模は写真から推定）。中心から北西寄りの位置に、楕円形の炉が設けられる。

覆土は、壁際の初期堆積にロームが多く含まれるものの、概ね黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、少量の土器片が出土している。出土位置が明確なのは、輪積痕の甕4と高杯脚部10のみである。輪積み痕の甕1～5、壺7・8、鉢9は在来的な弥生時代後期の土器であり、概ね後期中葉

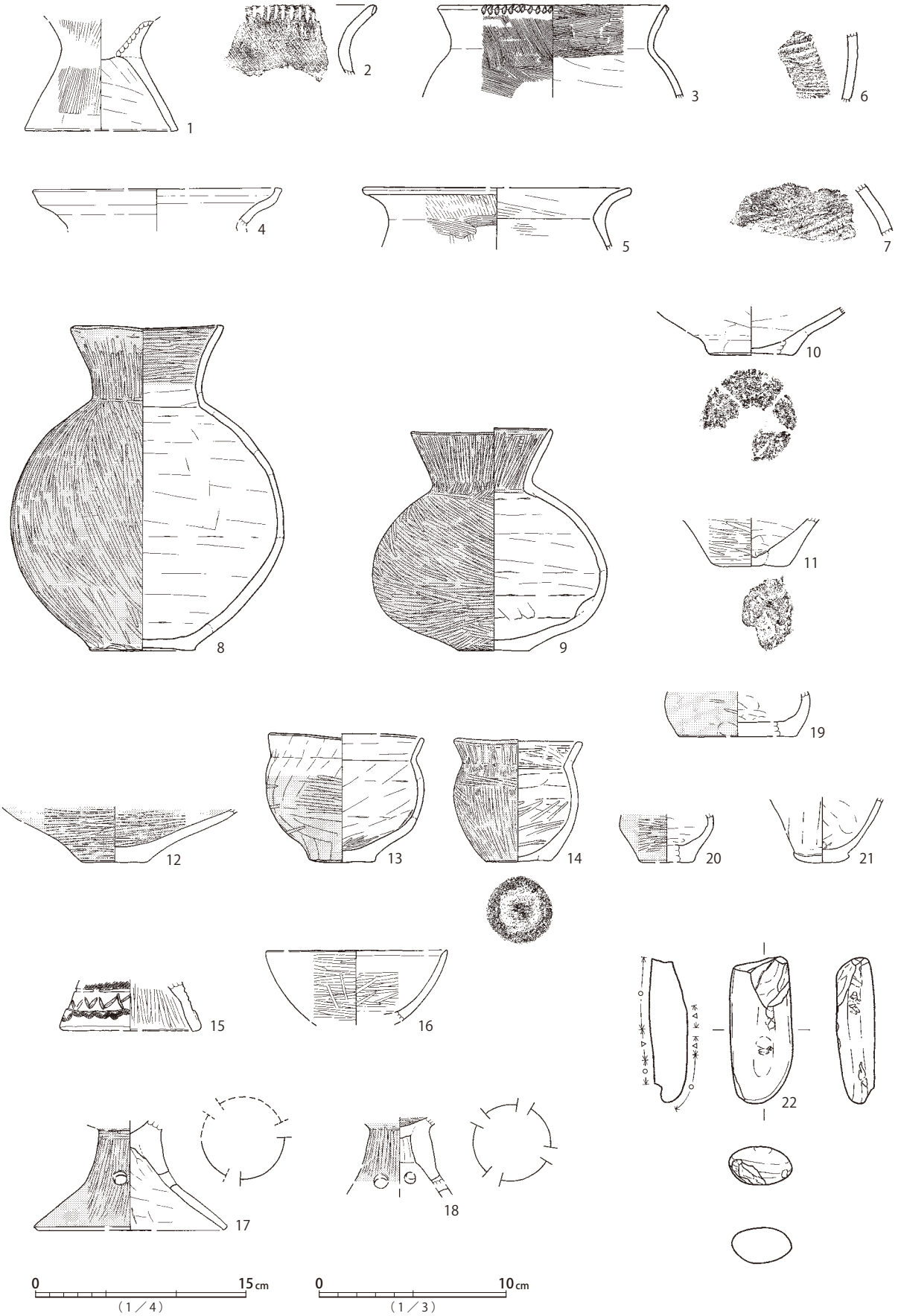
SI1105



1　ロームブロック多量　撹乱覆土
2　黒褐色土　暗褐色土小塊　2～4・6・7・16層 SI1104 覆土
3　黒褐色土　暗褐色土小塊多量、ソフトローム小塊 ロームブロック少量
4　黒褐色土　3層にローム・焼土・黒色土各微粒
5　暗赤色土　黒色土・焼土の混合土
6　黒色土　炭(木、草)・焼土微粒各多量
7　黒色土　炭微粒
8　黒褐色土　暗褐色土小塊多量　8～15層 SI1105 覆土
9　黒褐色土　暗褐色土粒多量
10　暗褐色土　ローム小ブロック、ローム粒
11　暗褐色土　ローム微粒、黒色土粒、焼土粒
12　暗赤色土　焼土・暗褐色土の混合土
13　黒褐色土　黒色土・10層の混合土
14　黄褐色土　ローム・11層の混合土
15　暗褐色土　ローム・ソフトローム粒各多量
16　焼成粘土塊

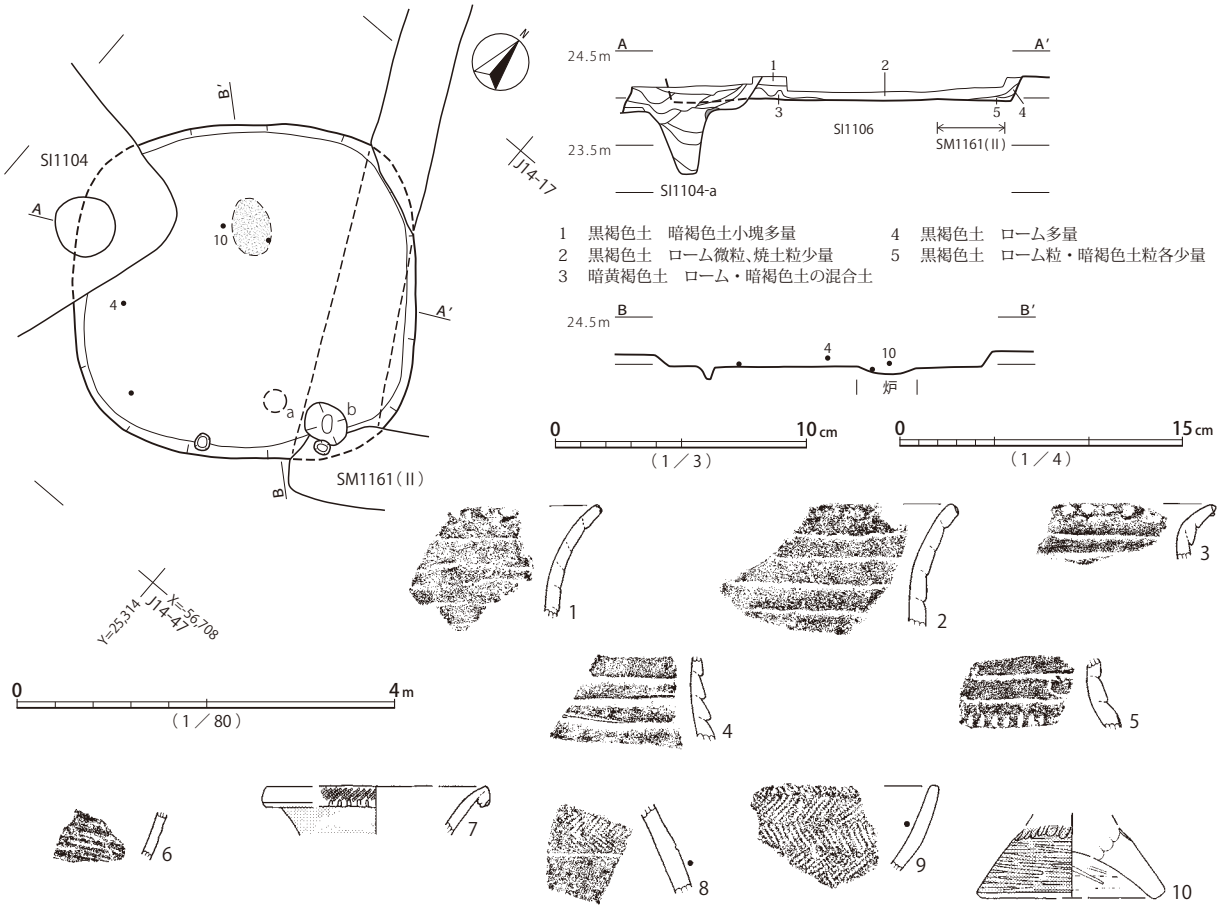
第384図　SI1105遺構

SI1105



第385図　SI1105遺物

SI1106



第386図　SI1106遺構・遺物

に帰属すると考えられる。タタキ甕6も同じく覆土一括取り上げ資料で、他遺構に由来する。

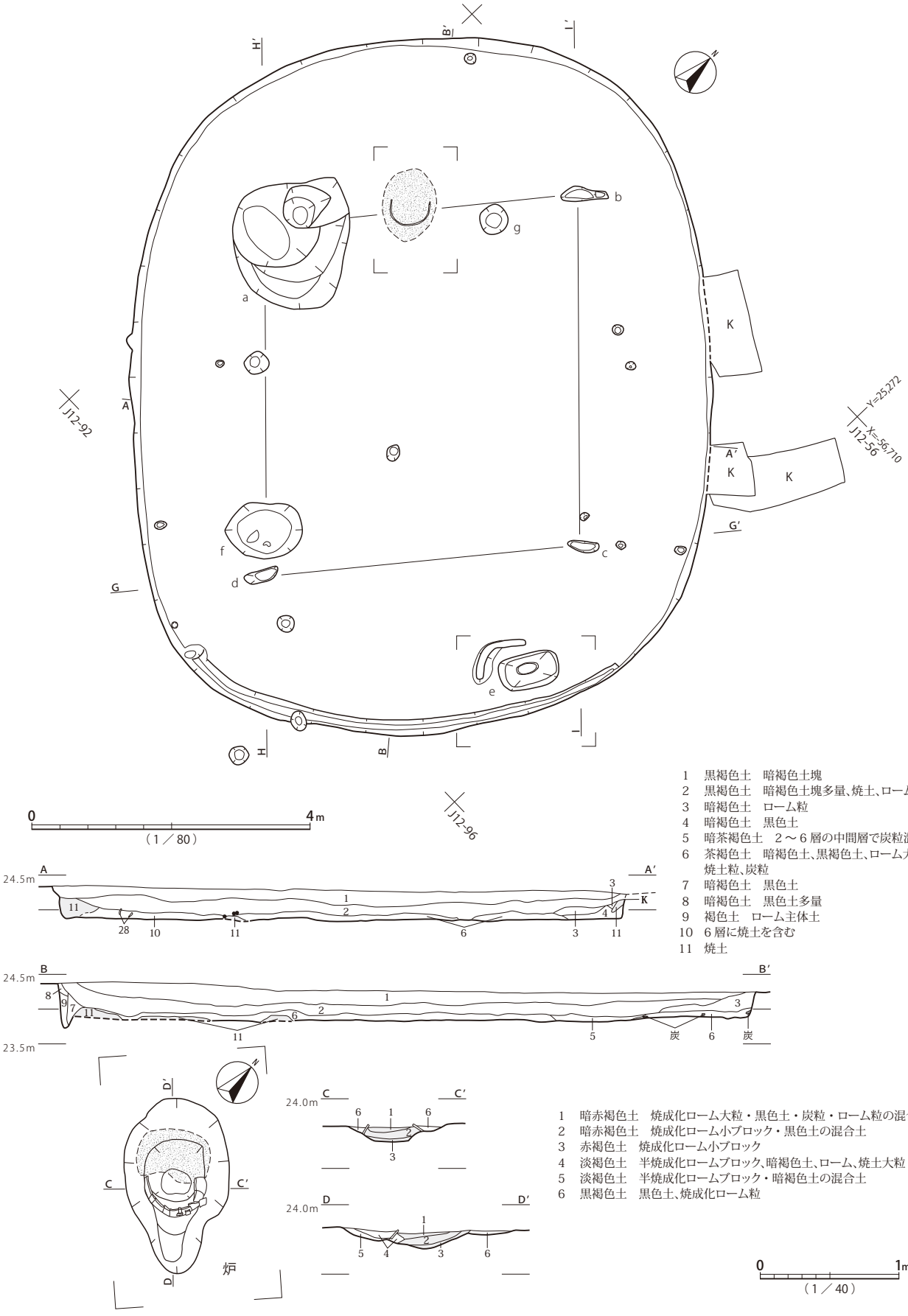
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産の可能性がある。

SI1107（第387・388・389・390・391図、図版76・77・128・168・169・244・313・314・337・338）

10.0×8.4m、深さ45cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北東辺にイモ穴による撹乱を受けるが、概ね遺存状態は良好である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。長方形を呈する貯蔵穴eの外周には、蓋受けの機能を果たしたと見られる、高さ数cm、幅30cm程度の堤状の緩やかな高まりが伴う。aは覆土上層からの掘り込みを受けており、本来の形状は不明である。ピットfは、aと同様、上位からの掘り込みと見られる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。炉の南東側には、直径40cm以上ある大型土器片を内外のロームブロックで固定し、立てて埋置している（対応遺物は不明）。床面周溝は南東辺のみで検出されている。

覆土は、床面外周に焼土と放射状の炭化材が検出され、廃絶時に火を受けた様相を示す。焼土の目立つ初期堆積より上位は、暗褐色土から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。貯蔵穴eの覆土は、最下層の6層のみ焼土・炭化物を含まないため、廃絶当初は木製の蓋があり、火を受けた後の土層が一定期間後に陥没・流入した状況を推定できる。完形に近い土器が多く出土しており、不時の火災による可能性も考えられる。

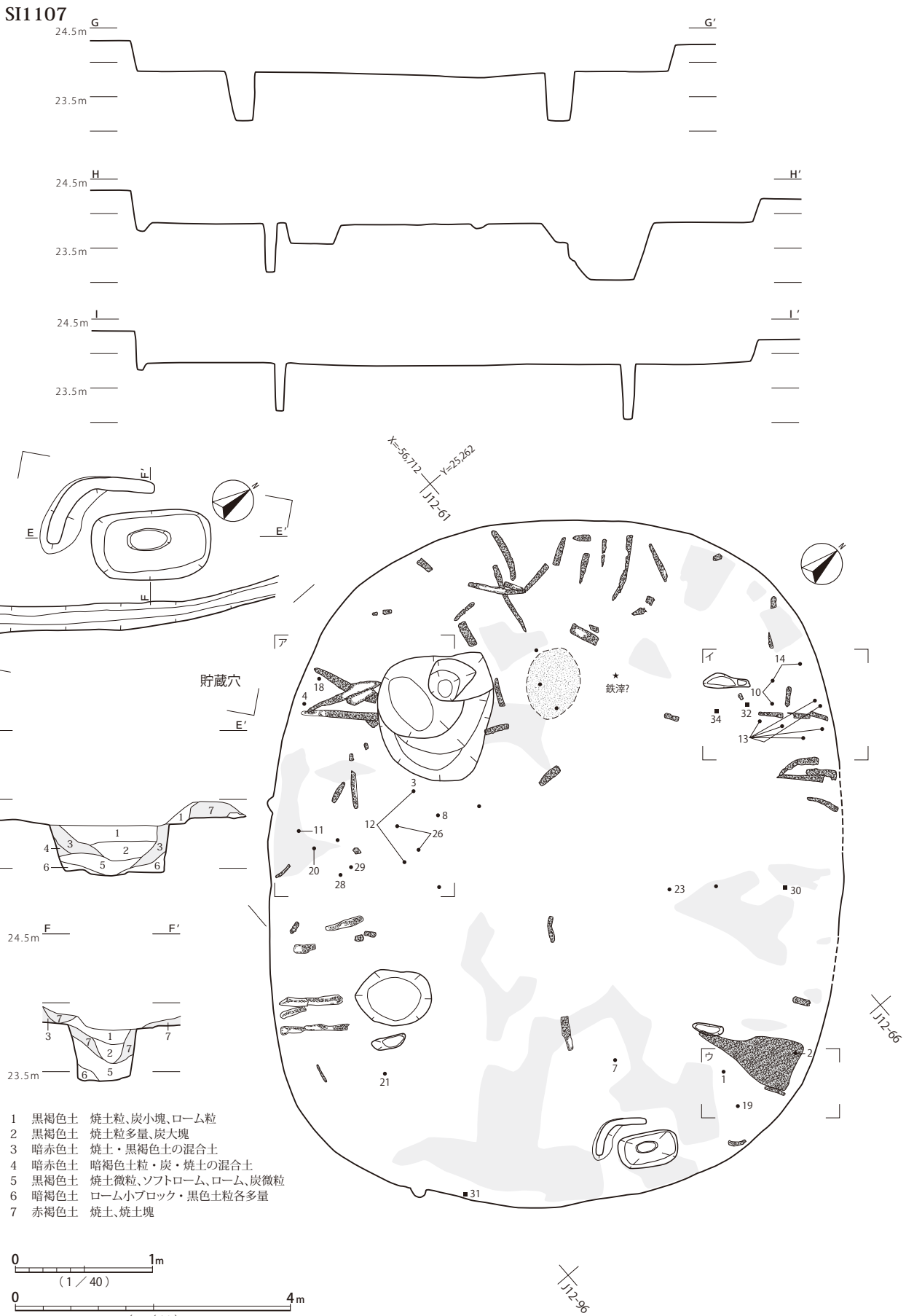
SI1107



1　黒褐色土　暗褐色土塊
2　黒褐色土　暗褐色土塊多量、焼土、ローム大粒
3　暗褐色土　ローム粒
4　暗褐色土　黒色土
5　暗茶褐色土　2～6層の中間層で炭粒混入
6　茶褐色土　暗褐色土、黒褐色土、ローム大粒、焼土粒、炭粒
7　暗褐色土　黒色土
8　暗褐色土　黒色土多量
9　褐色土　ローム主体土
10　6層に焼土を含む
11　焼土

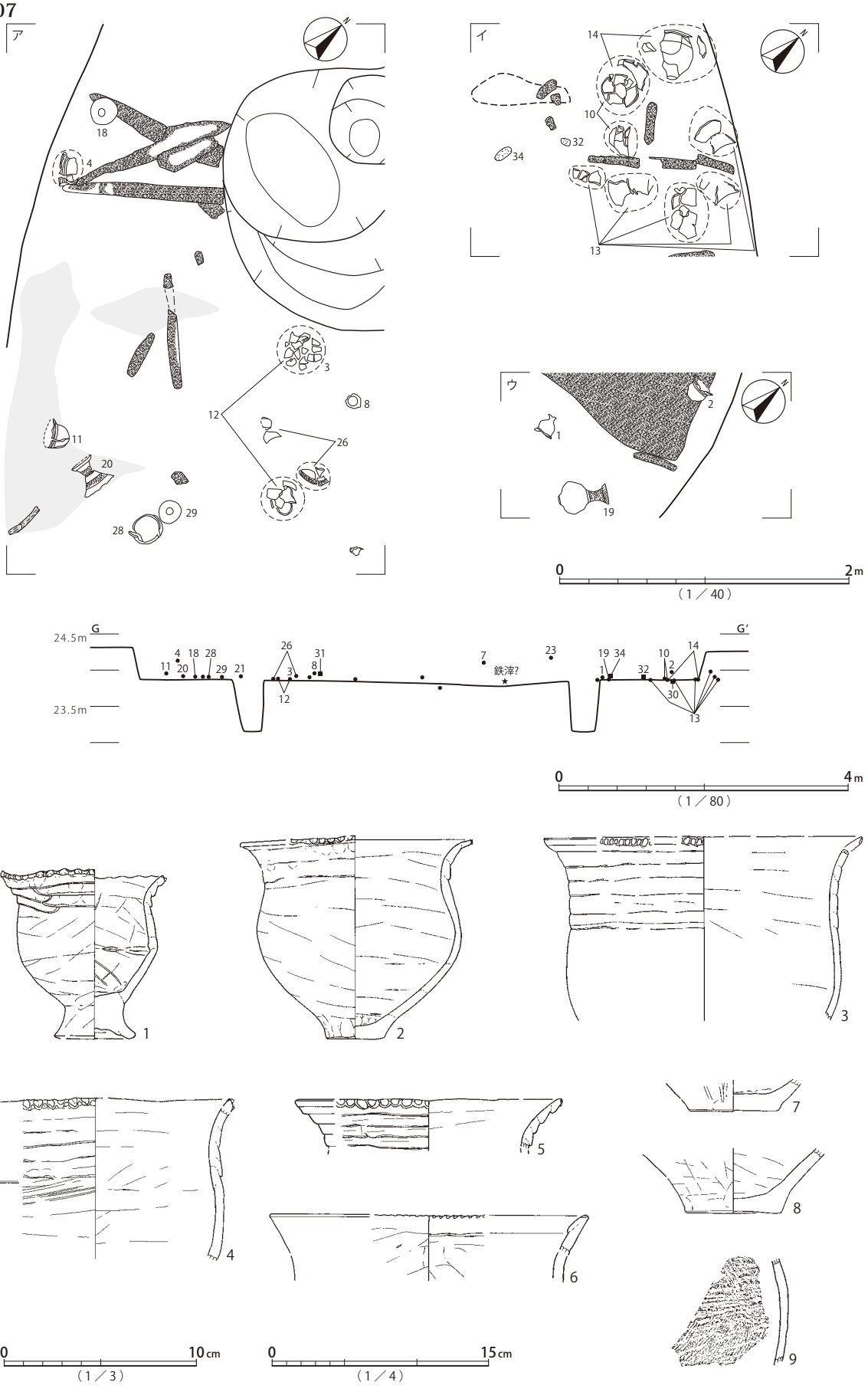
1　暗赤褐色土　焼成化ローム大粒・黒色土・炭粒・ローム粒の混合土
2　暗赤褐色土　焼成化ローム小ブロック・黒色土の混合土
3　赤褐色土　焼成化ローム小ブロック
4　淡褐色土　半焼成化ロームブロック、暗褐色土、ローム、焼土大粒
5　淡褐色土　半焼成化ロームブロック・暗褐色土の混合土
6　黒褐色土　黒色土、焼成化ローム粒

第387図　SI1107遺構（1）



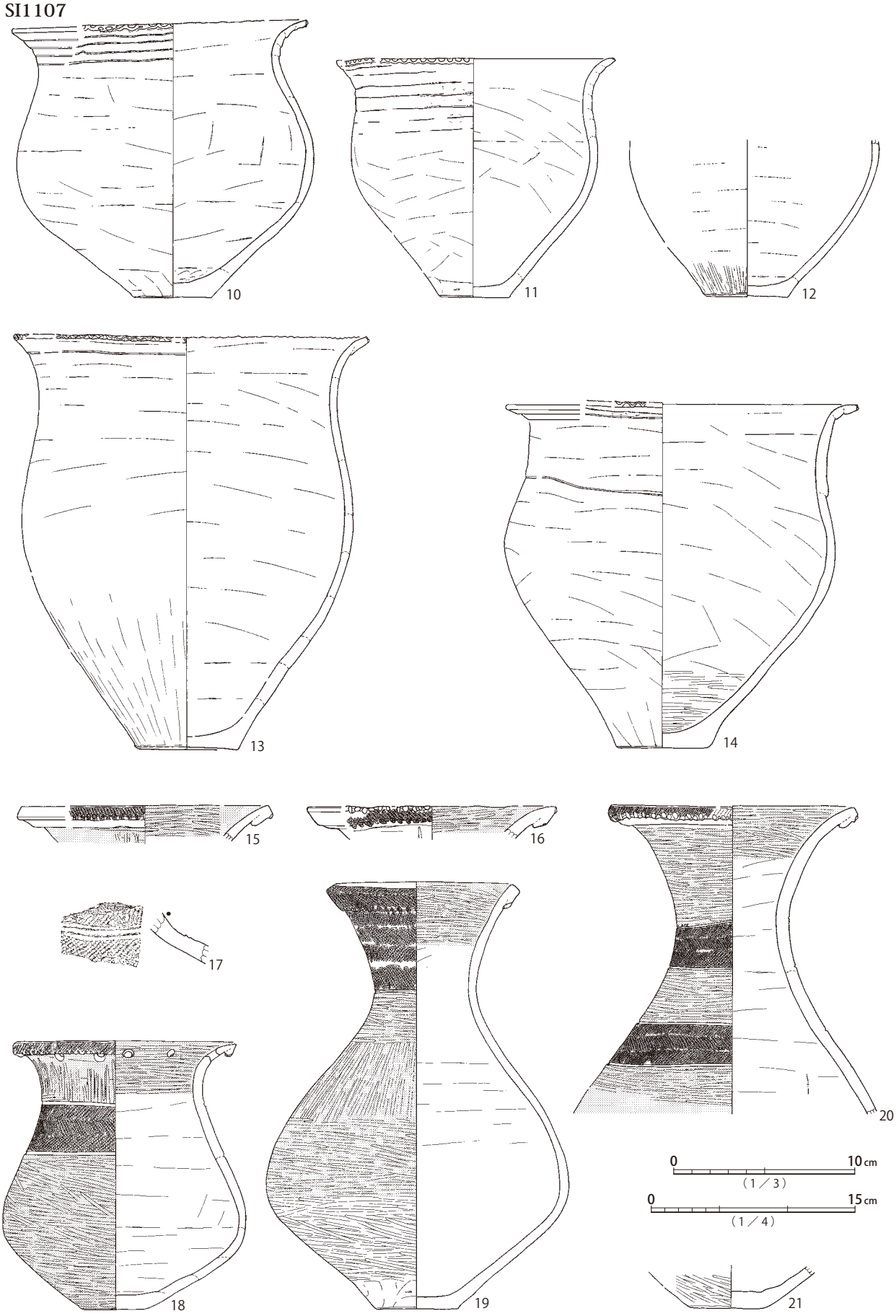
第388図　SI1107遺構（2）

SI1107



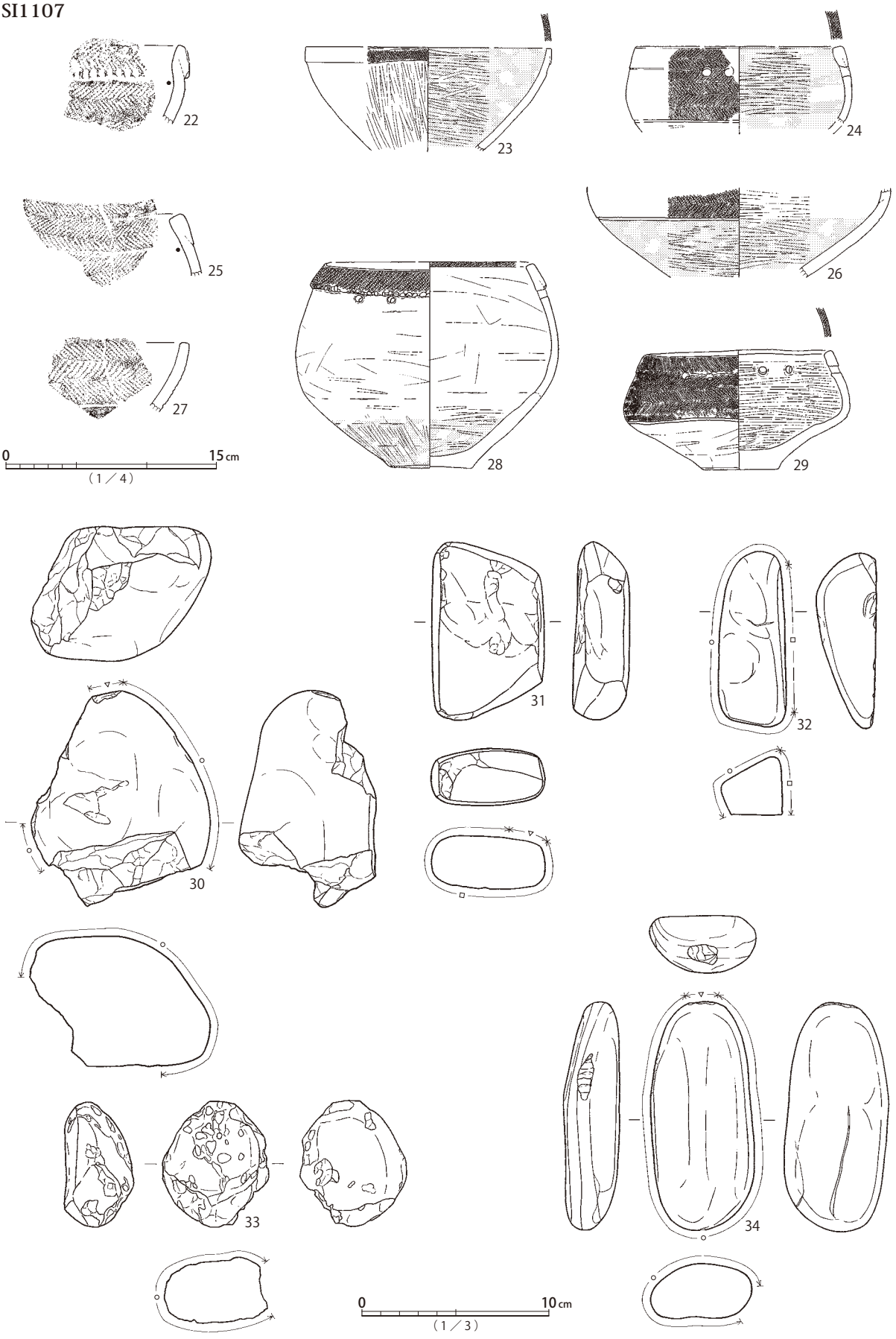
第389図　SI1107遺構(3)、SI1107遺物(1)

SI1107



第390図　SI1107遺物（2）

SI1107



第391図　SI1107遺物（3）

遺物は、焼土・炭化材の間に混じり、床面直上を主体として弥生土器と石製品が検出されている。輪積装飾の小型台付甕1、交互押捺口縁の甕2、口縁部縄文施文の壺19は、南東部床面上で近接して出土している。輪積装飾の甕3・4・11、甕下半部12、底部8、広口壺18、沈線区画縄文帯の壺20、高杯26、椀28・29は南西側で検出されている。輪積装飾の甕10、外面肥厚口縁の甕13・14、ホルンフェルス製礫石器（砥石）32、ホルンフェルス製礫石器（磨石）34は、北東部に集中して出土している。タタキ甕6、壺17は覆土一括取り上げ資料で、混入品と考えられる。床面出土の土器群は概ね、弥生時代後期前半、久ヶ原2式古段階に位置づけられる。その他、斑糲岩製置き砥石30、軽石製砥石31・33が伴う。なお、炉の東側床面近くのレベルにおいて「スラグ」の出土記録があるものの、当該資料を確認できないため、鉄滓か否かは確定できない。ただ、砥石も組成することからすると、本遺構の規模の大きさを勘案し、鉄器製作との関わりを示唆する興味深い資料と言える。甕13の外面最大径付近付着炭化物を対象に、放射性炭素年代測定を行った結果、測定年代値1930±20年（yrBP）が得られている（第3章第1節）。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半に位置づけられる。

SI1108（第392・393図、図版77・169・170・244・338）

2.6m以上×4.0m以上、深さ20cm程度の方楕円形と推定される竪穴建物跡である。099地区北端に位置し、北側の大部分が調査前に失われている。南側は、古代方形墳墓SM1053東側周溝と弥生時代終末期のSI1035と重複し、後者の掘り込みは床面下に及んでいる。南東側に位置する弥生時代終末期のSI1036とは同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は可能性のあるaのみで、他に深さ31cmの貯蔵穴と見られるbが検出されている。炉は遺存部になく、北西側に存在したと見られる。調査範囲内には床面周溝は検出されていない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。焼土・炭化材は平面記録になく、写真からは、最下層にロームブロックが混じる黒褐色土層が主体の漸移的な堆積状況が想定できる。また、南辺のSI1035との重複部には、床面レベルでSI1035覆土の焼土層が露出しており、本遺構の平面検出時点の状況は不明だが、SI1035が本遺構覆土に切り込んでいたと推定される。

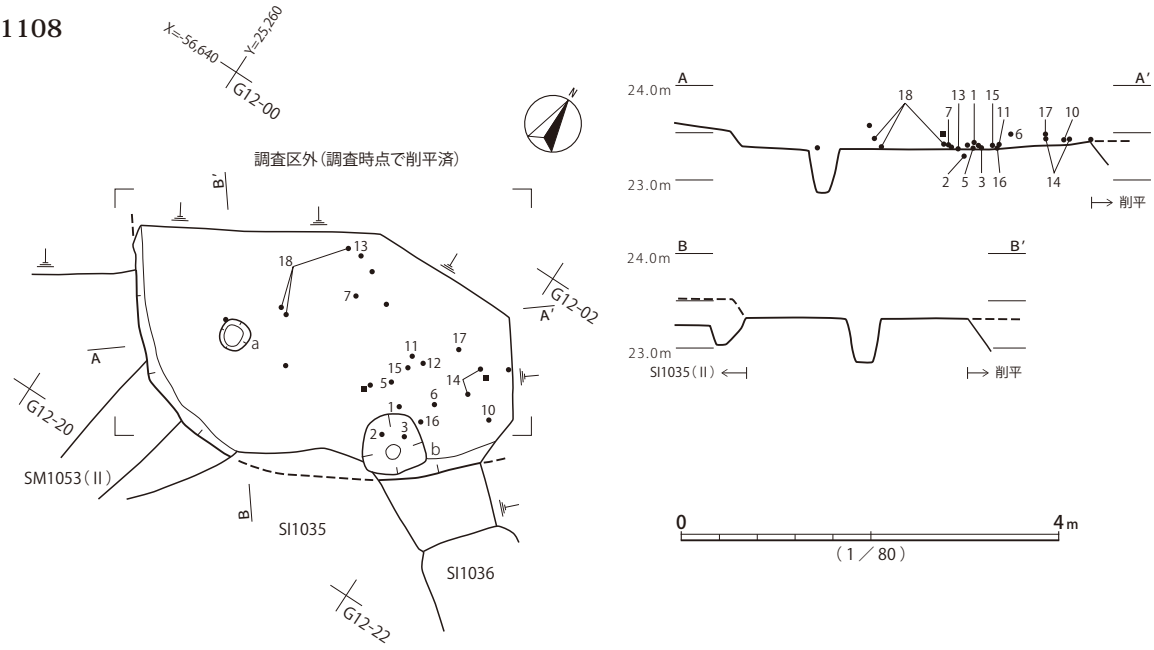
遺物は、貯蔵穴周辺の床面近くから竪穴中心側にかけて、完形土器が集中して検出されている。素口縁で頸部段を持つ頸部屈曲のなだらかな甕1、口縁端部に平坦面を持つ屈曲頸部の直口壺5、頸部段を持つ外面肥厚口縁の壺6、外面肥厚口縁の大型椀（無頸壺）10は、在来的な後期弥生土器型式の特徴を保ちながら、無文化が進んでおり、甕2・3・4が在来的な特徴を残すのとは異なり、過渡的な様相を示す。無文素口縁の鉢9・11～17、高杯18も、同様に過渡的な様相が認められる。土器群は、弥生時代終末期前半、中台1−1式の範疇と思われる。東海西部系土器型式の特徴が明確に伴う土器の出土しているSI1035に先行する可能性が高い。

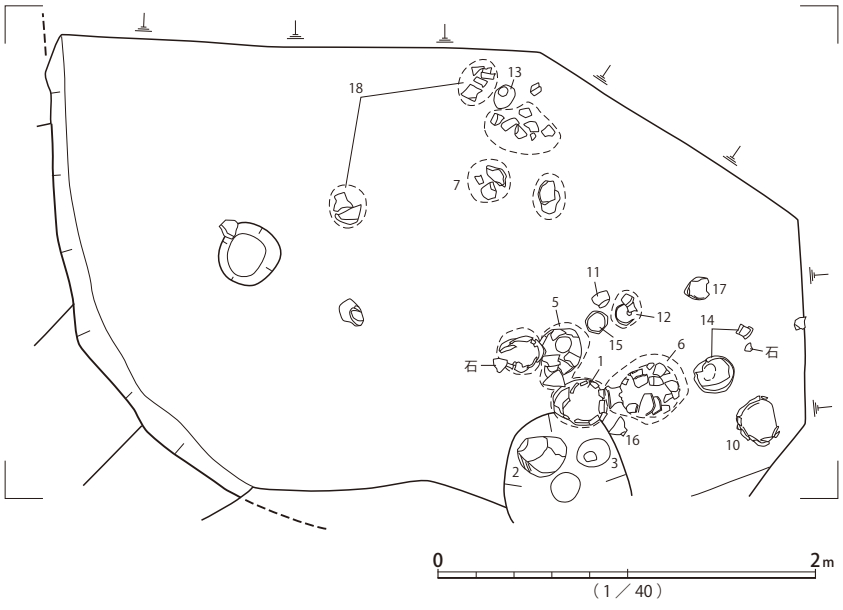
本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

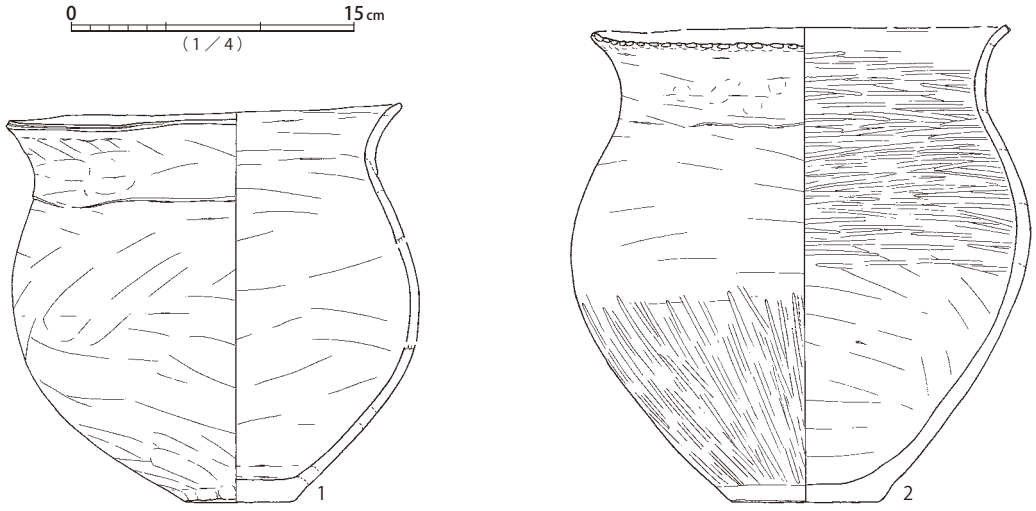
SI1109（第394図、図版77・244）

4.4×4.2m、深さ20cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。北西部が撹乱され、床面まで破壊

SI1108

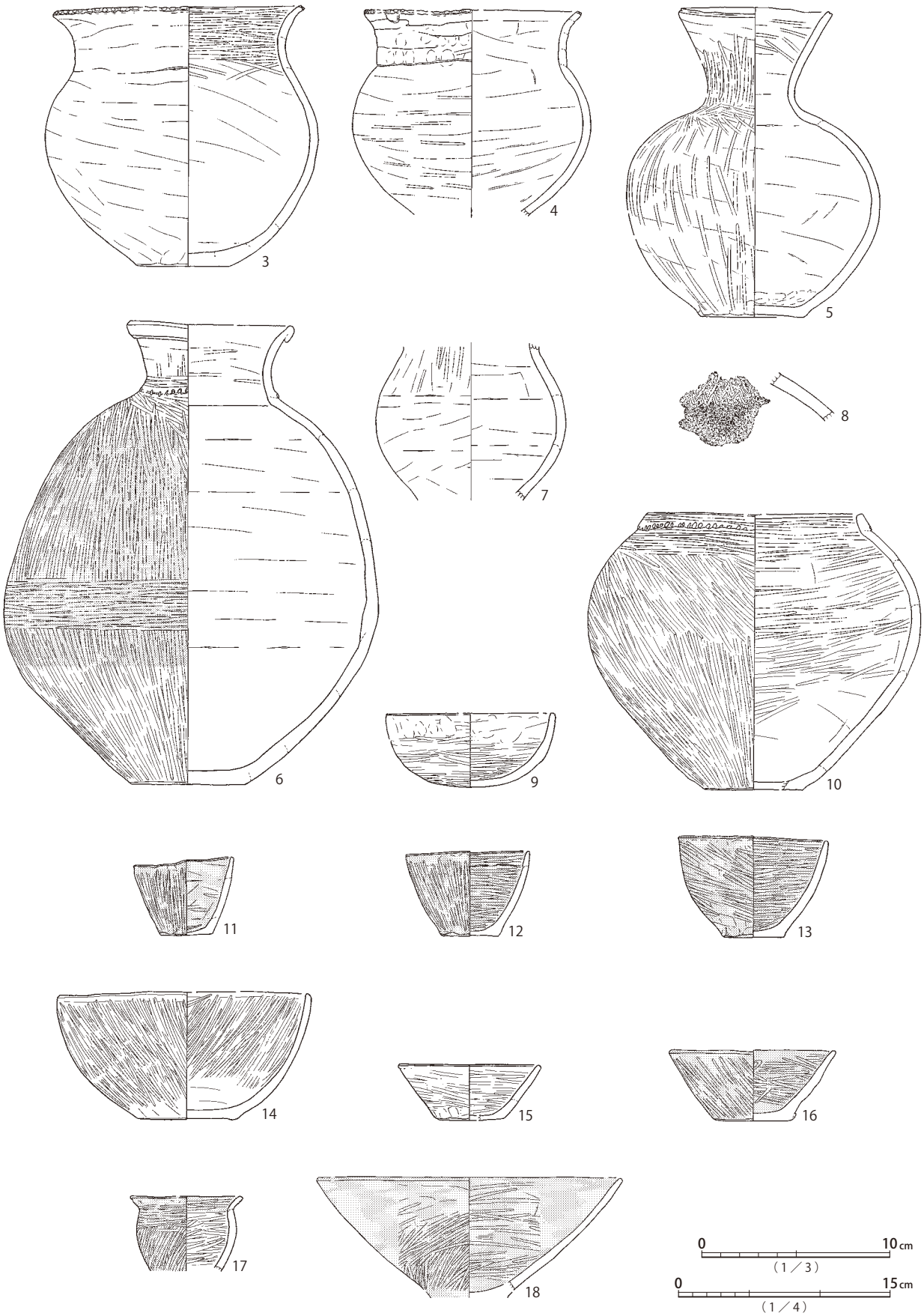






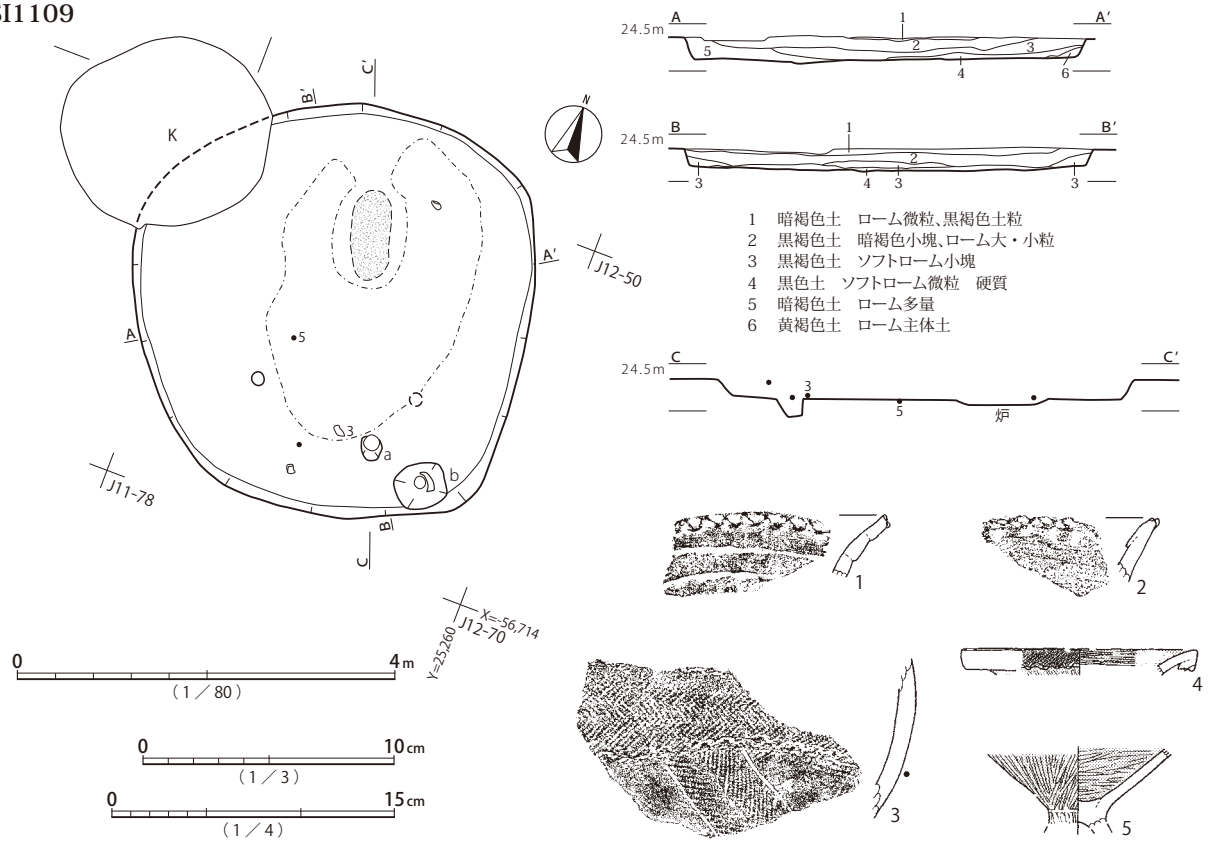
第392図　SI1108遺構、SI1108遺物（1）

SI1108



第393図　SI1108遺物（2）

SI1109



第394図　SI1109遺構・遺物

を受けている。主柱穴は検出されず、ハシゴ穴a、深さ24cmの貯蔵穴bが認められるのみである。中心から北寄りの位置に長楕円形の炉が設けられる。炉の周囲からa付近までの床面が明確に硬化している。硬化面縁辺には柱穴とも考えられる小穴が2箇所検出されているが、詳細は不明である。

覆土は、初期堆積にロームを多く含む層が目立つ。上位は、黒褐色土主体の漸移的なレンズ状の堆積状況を示す。焼土集中部と炭化材は検出されていない。

遺物は、土器片が少量出土している。口縁端部交互押捺の甕1・2、結節文区画の装飾壺3、壺4、高杯5があり、いずれも在来的な特徴を示す。概ね弥生時代後期後半、山田橋式の範疇と思われる。

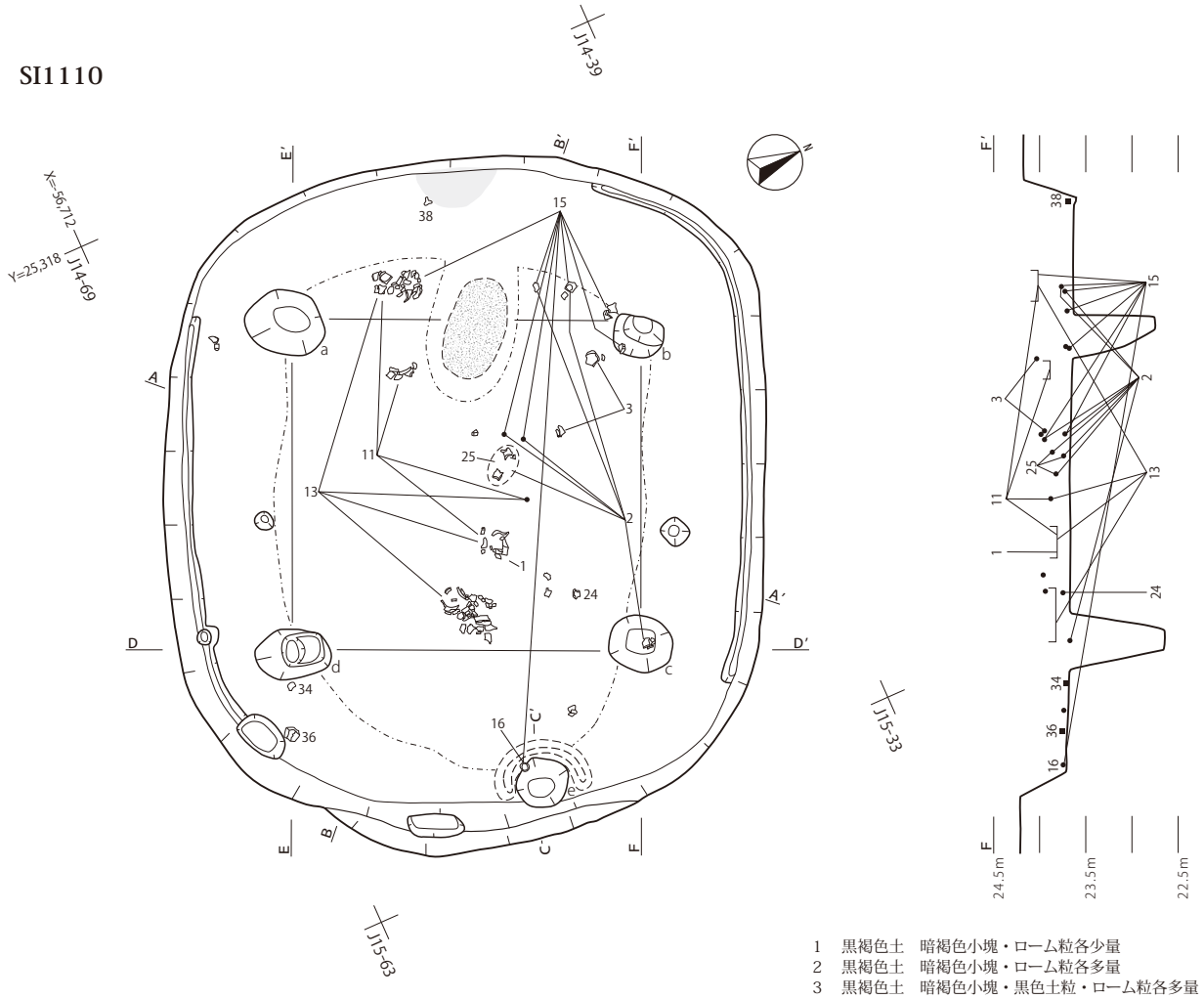
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

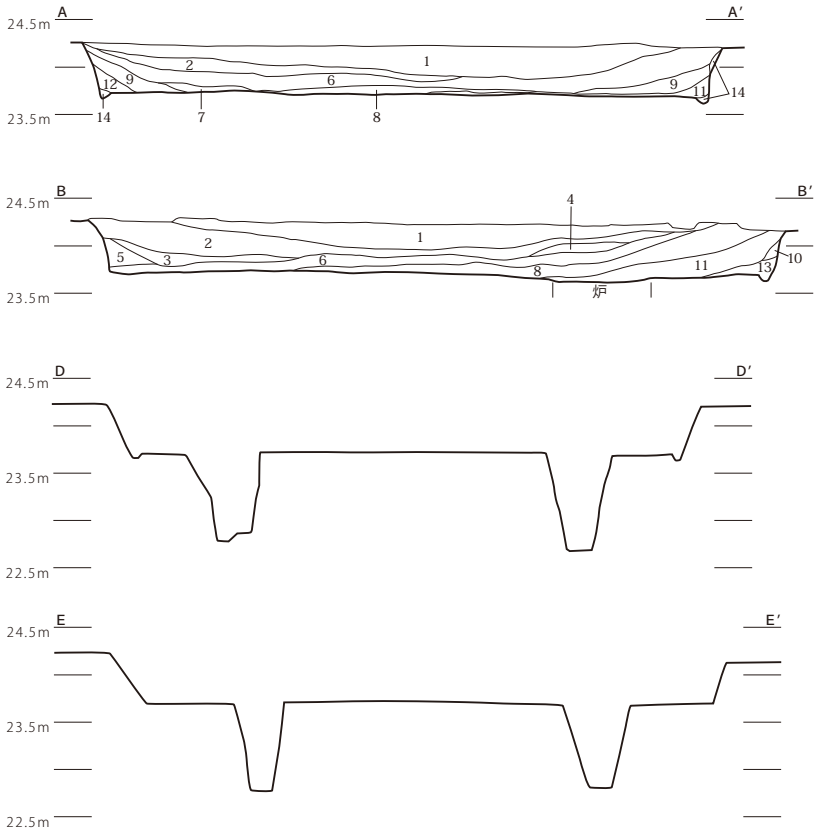
SI1110（第395・396・397図、図版77・170・245・299・314・315・326・338）

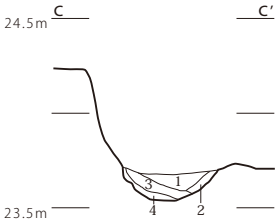
7.6×6.5m、深さ50cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴a～d、貯蔵穴eが検出されている。貯蔵穴eの上端外周には高さ5cm強の堤状の高まりが伴う。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。床面は外周部を除いて硬化している。床面周溝は北辺と南辺に検出されている。

覆土は、床面外周部に焼土が検出されており、廃絶時に火を受けたものと見られる。初期堆積にロームが目立ち、下層ほどロームを多く含む様相があり、埋め戻しが行われた可能性も否定できない。中位以上は、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。貯蔵穴eの覆土に、焼土・炭化物は見られず、廃絶時には埋没していた可能性がある。

SI1110







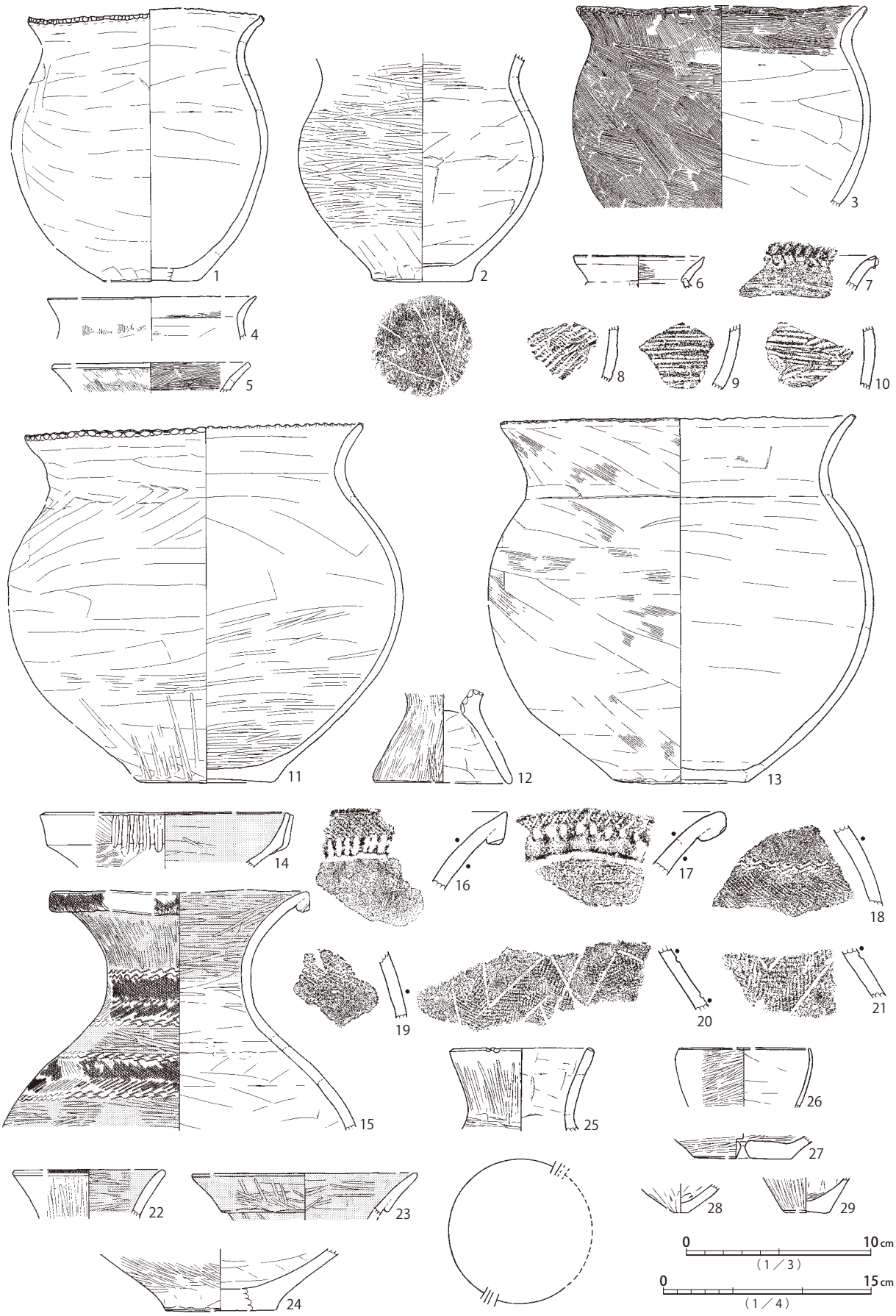
1　黒褐色土　暗褐色小塊・ローム粒各少量
2　黒褐色土　暗褐色小塊・ローム粒各多量
3　黒褐色土　暗褐色小塊・黒色土粒・ローム粒各多量
4　黒色土　暗褐色土粒、ローム大粒少量
5　暗褐色土　ソフトローム多量
6　黒褐色土　暗褐色土粒・ローム大粒各多量
（2層に比べローム粒多い）
7　暗褐色土　ロームブロック
8　暗褐色土　暗褐色土粒・ロームブロック・ローム大粒・黒色土粒・半焼成ローム粒各多量
9　黒褐色土　暗褐色小塊・黒色土粒・ローム粒各多量
10　ローム塊
11　黒褐色土　ロームブロック、ロームブロック大粒、焼土
12　暗褐色土　ソフトローム
13　暗褐色土　ローム、ソフトローム多量、焼土粒
14　ローム主体土　暗褐色土

1　黒褐色土　暗褐色土粒多量
2　黒褐色土　ローム小ブロック
3　黒色土　暗褐色土粒
4　暗褐色土　黒色土粒

0　1m
（1／40）
0　4m
（1／80）

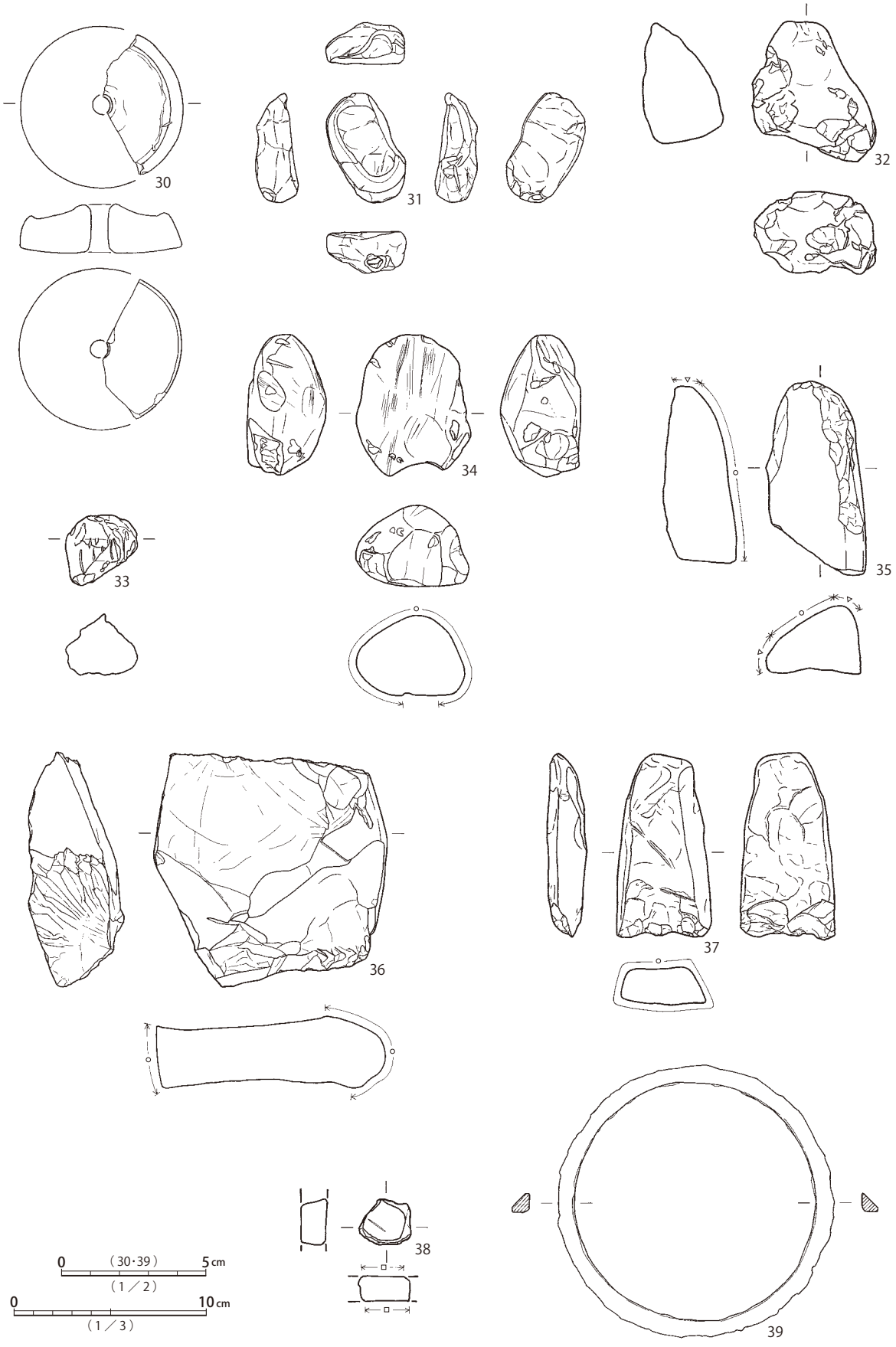
第395図　SI1110遺構

SI1110



第396図　SI1110遺物（1）

SI1110



第397図　SI1110遺物（２）

遺物は、床面近くと中層以上に分かれ、比較的多くの土器・土製品・石製品が出土している。口縁端部に押捺の施される甕1・11・13は遺存良好だが、床面から15cm以上高い位置で検出されており、竪穴機能時から時間差を持つ資料の可能性がある。東京湾西岸系と見られるハケメ調整で口縁端部に刻目状刺突文の施される甕3についても、中位で検出されている。中層以上の土器は概ね、弥生時代終末期前半、中台1式に位置づけられるだろう。床面近くからは、結節文区画壺15、壺16が出土し、弥生時代後期後半、山田橋式に位置づけられる。受口状口縁甕6、タタキ甕8、棒状浮文壺14は、いずれも覆土一括取り上げ資料である。その他、土製紡錘車30、有孔鉢状土製品31、軽石製砥石32・34、軽石33、火山礫凝灰岩製礫石器35、ホルンフェルス製石核36、ひん岩製礫石器（石斧？）37、砂岩製砥石38、環状鉄製品39が出土している。39は覆土一括取り上げ資料であり、混入品の可能性が高い。

本遺構は、平面形と下層出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

SI1111（第398図、図版77・245・315）

3.7×4.1？m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。099地区北辺に位置し、北東角が調査以前に失われている。主柱穴は見られず、貯蔵穴の可能性のあるaとピットbが検出されるのみである。中心から西寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。南側壁際には、幅約1m、高さ10cm前後のベッド状遺構が設けられている。

覆土は、焼土・炭化材は検出されず、初期堆積にロームが目立つほかは、暗褐色土から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、土器片が少量出土している。結節文区画の壺1、山形文壺2、壺底部3があり、1・3が床面近くで検出されている。概ね、弥生時代後期後半、山田橋式から同終末期、中台式の範疇にある。その他、砂岩製砥石4が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期に帰属する可能性が考えられる。

SI1112（第398図、図版78・170・245・338）

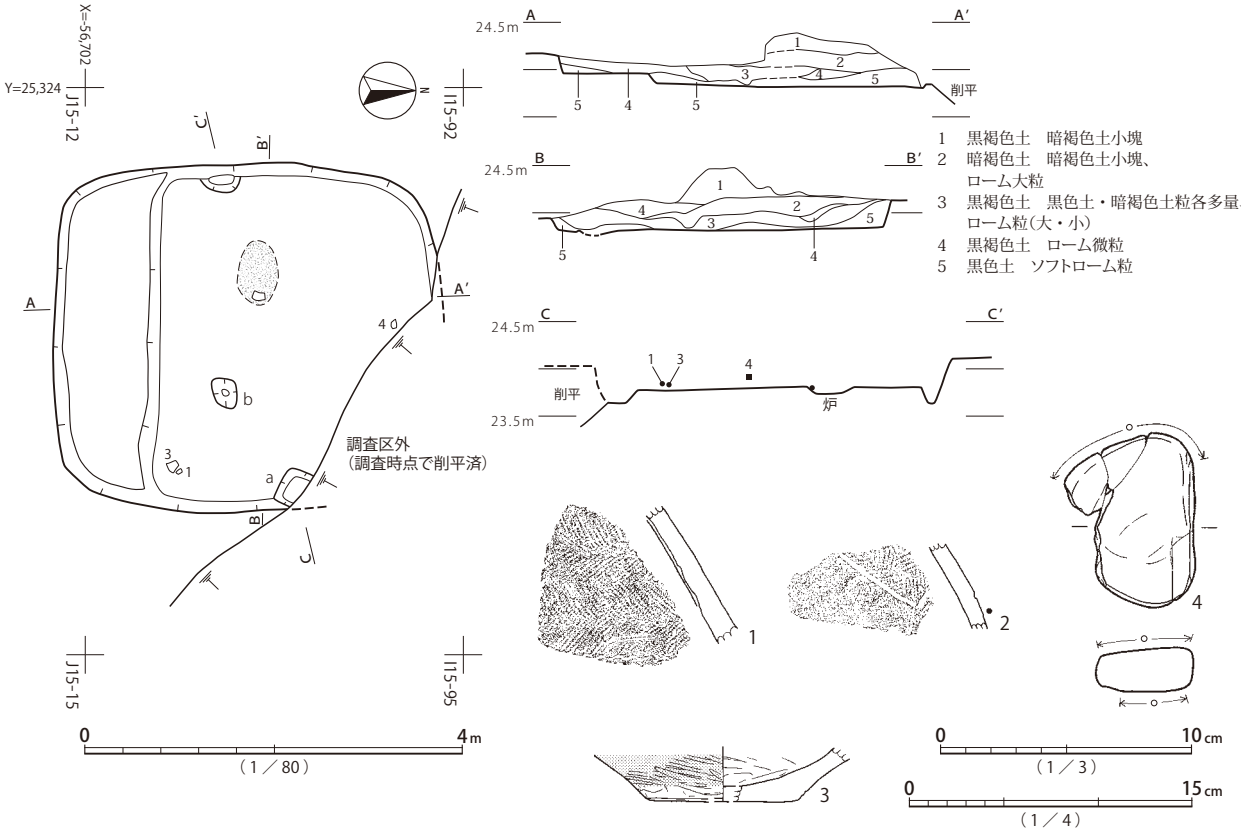
3.8×4.0m、深さ15cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。099地区の北辺に位置し、竪穴北東辺が調査前に削平を受けている。南西辺はイモ穴により床面まで撹乱されている。主柱穴は認められず、貯蔵穴aのみが検出されている。中心からやや北西寄りの位置に楕円形の炉が設けられ、周囲の床面が硬化している。本遺構の平面形と規模、炉及び貯蔵穴の位置はSI1111と酷似する。SI1111床面南側にはベッド状遺構が設けられるが、本遺構の炉の位置と硬化面範囲は、同様の使用形態を示唆する。

覆土に、焼土集中部・炭化材は確認されていない。ローム主体の初期堆積以上は、黒褐色土の漸移的な堆積を示す。

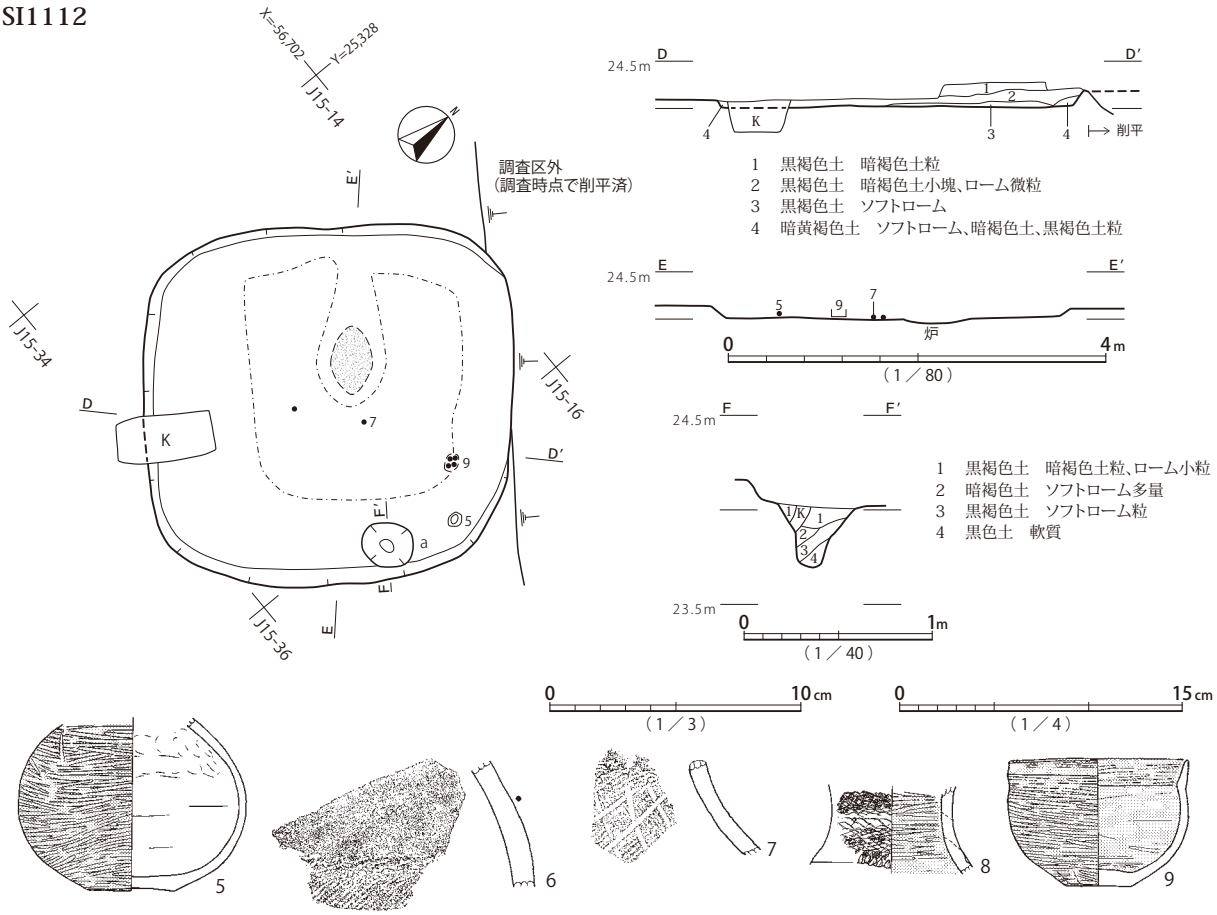
遺物は、若干数の土器が検出されている。弥生土器の壺7、古式土師器の壺5、有段口縁の小型鉢9が床面レベルで検出されている。壺7は弥生時代後期後半から終末期、壺5と小型鉢9は弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。形態の酷似する

SI1111



SI1112



第398図　SI1111遺構・遺物、SI1112遺構・遺物

SI1111と、同時もしくは近い時期に構築されたと見込まれる。

SI1113（第399図、図版78・245・315）

3.6×3.6m、深さ30cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴・炉等の施設は検出されていない。ただし、土層断面記録によると南西側に幅1m強の貼床状の高まりが見られるため、不明確なベッド状遺構が南西壁際に設けられていた可能性が考えられる。南側壁際に、床面周溝状の落ち込みが疎らに検出されている。

覆土は、焼土・炭化材の集中は検出されていない。初期堆積にロームを多く含むほかは、暗褐色土から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、土器と石製品が少量出土している。出土位置の明確な資料は、在来的な甕1、甕底部2、縄文文様の壺3で、概ね弥生時代後期から終末期に位置づけられる。その他、軽石製砥石6、粗粒砂岩製礫石器7が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

SI1114（第400図、図版78・170・245・315）

3.9×3.5m、深さ35cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北西側に、弥生時代終末期のSI1112が同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bのみ検出されている。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面は外周部分を除き、硬化する。

覆土は、床面上に焼土が検出されており、廃絶時に火を受けた可能性が高い。壁際の初期堆積にロームが多いほかは、暗褐色土から黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、床面から下層にかけて、土器・石製品が出土している。段部押捺の甕1、甕（転用鉢）2、結節多段文様の広口壺3、結節文区画縄文帯の壺4、底部5があり、2・4・5が下位で検出されている。壺4は弥生時代後期後半、山田橋1式に位置づけられ、他の土器も同様と考えられる。その他、軽石製砥石6、砂岩製砥石7が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半、山田橋1式期の所産と考えられる。

SI1115（第401図、図版78・245・315）

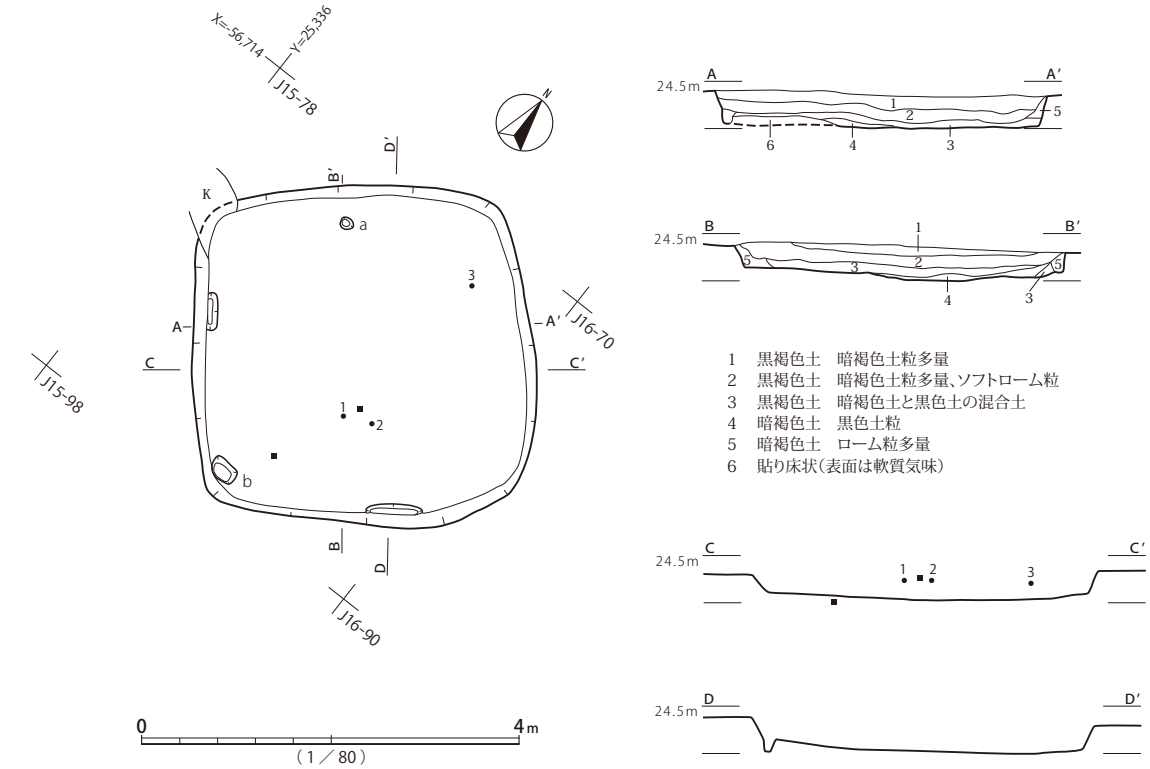
3.4×2.8m、深さ15cm程度の不整長方形竪穴建物跡である。北東辺を横断する形で、イモ穴により床面まで撹乱を受けている。主柱穴・炉等の施設は検出されていない。床面は部分的に硬化する。

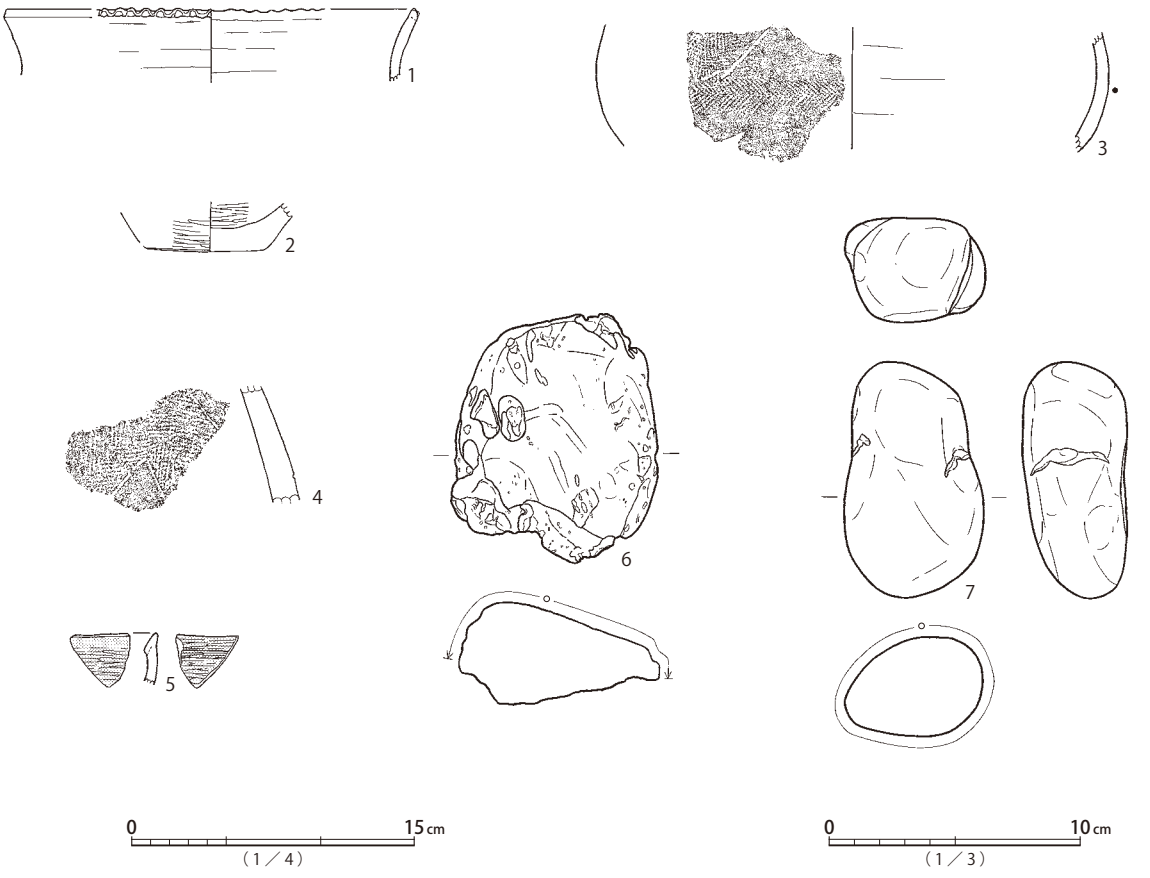
覆土は、壁際の初期堆積のソフトローム主体土から上位へ、黒褐色土主体の漸移的な堆積が進んだ状況が認められる。

遺物は僅少で、古式土師器甕（広口壺）1と溶結凝灰岩製礫石器2が覆土一括取り上げ資料として出土するのみである。

本遺構は、形態的属性が不明瞭で出土遺物も僅少なため積極的根拠には乏しいが、弥生時代終末期から古墳時代前期前半に帰属する可能性が考えられる。

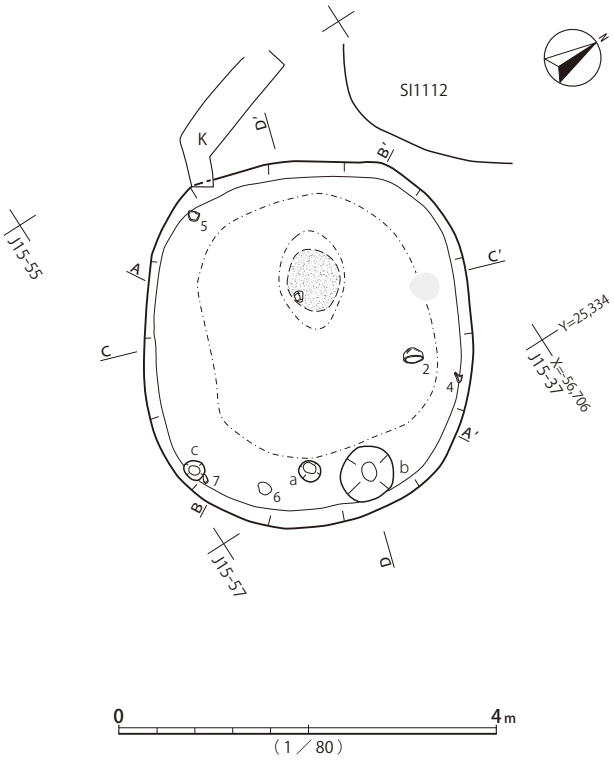
SI1113

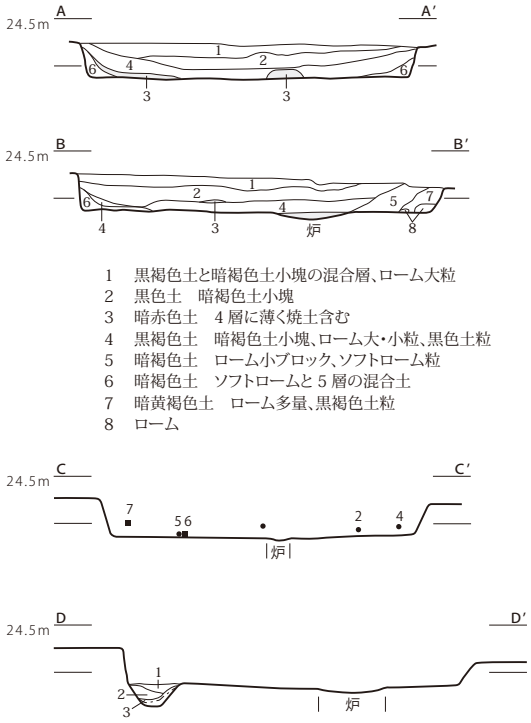




第399図　SI1113遺構・遺物

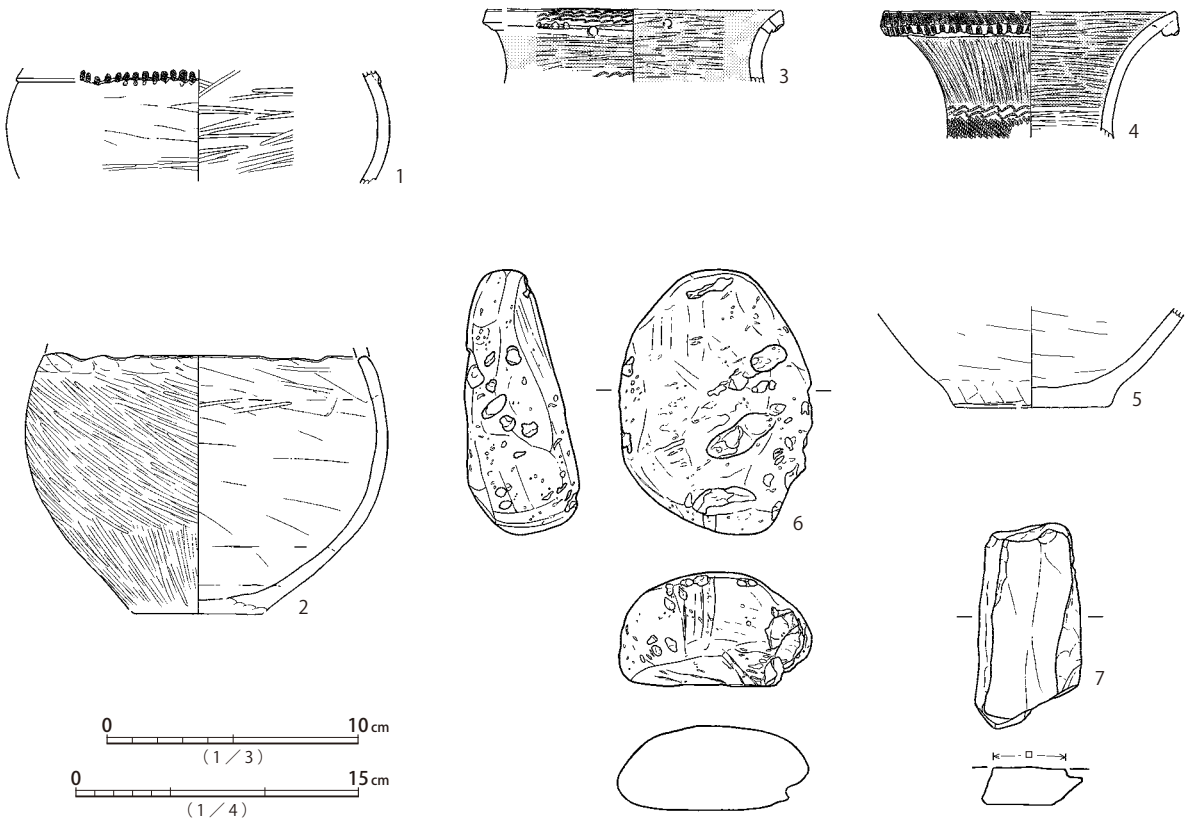
SI1114



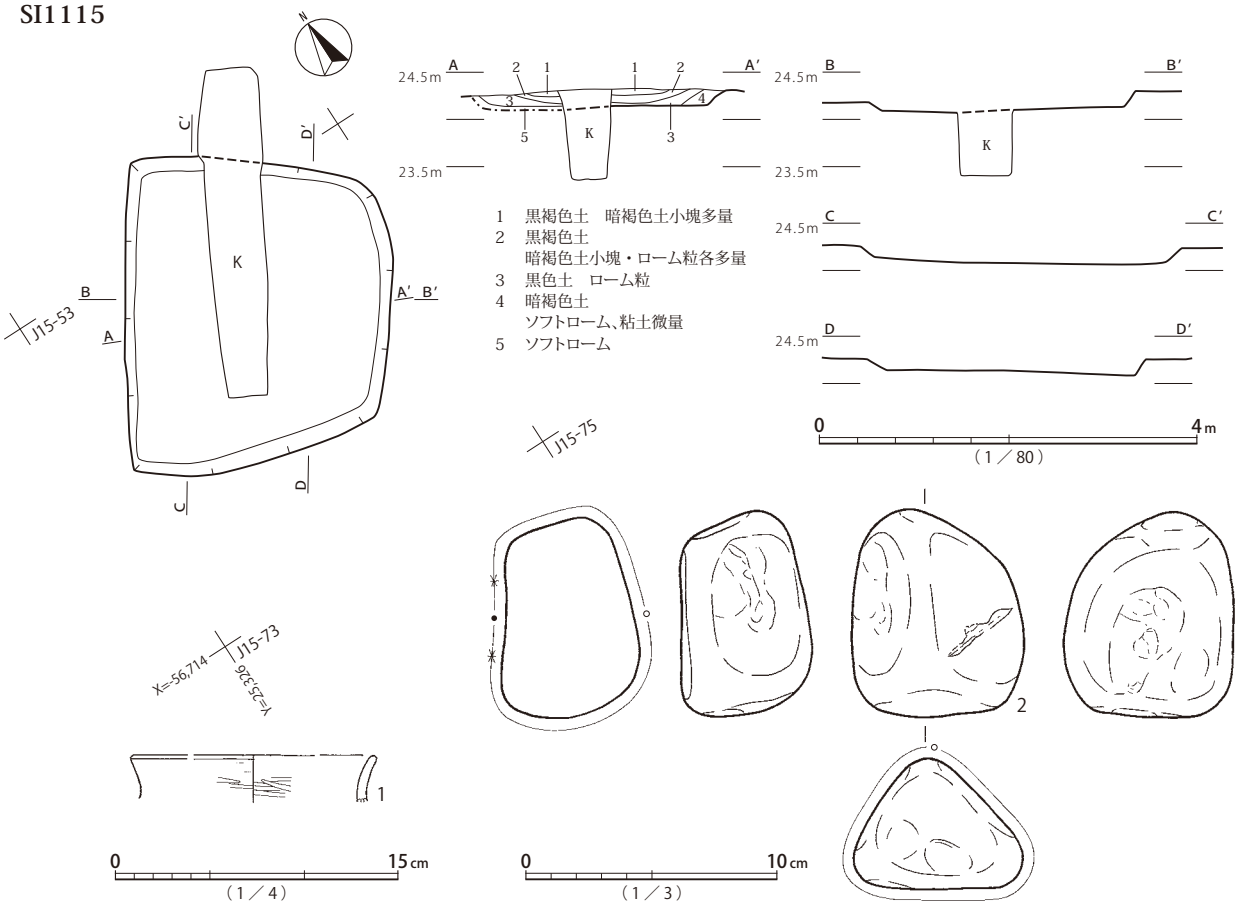


1　黒褐色土と暗褐色土小塊の混合層、ローム大粒
2　黒色土　暗褐色土小塊
3　暗赤色土　4層に薄く焼土含む
4　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム大・小粒、黒色土粒
5　暗褐色土　ローム小ブロック、ソフトローム粒
6　暗褐色土　ソフトロームと5層の混合土
7　暗黄褐色土　ローム多量、黒褐色土粒
8　ローム

1　黒褐色土　暗褐色土粒多量、ローム大粒少量
2　黒色土　暗褐色土小塊、ローム粒少量
3　黒褐色土　暗褐色土粒・ソフトローム粒各多量



第400図　SI1114遺構・遺物



第401図　SI1115遺構・遺物

SI1116・SI1117（第 402 図、図版 78・246）

3.5 × 3.4m、深さ 20cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1116と、4.3 × 4.0m、深さ 15cm程度の隅円方形竪穴建物跡SI1117である。SI1116南東部とSI1117北西部が重複し、前者覆土内に後者床面が形成されている。SI1116は北東部をイモ穴により床面まで撹乱されている。SI1117は南西部が弥生時代終末期前半のSI1119北角と重複する。

SI1116は、柱穴の可能性があるa・b、貯蔵穴と見られるcが検出されている。中心から西寄りの位置に長楕円形の炉が設けられる。

覆土は、黒褐色土主体の層が漸移的に堆積する。焼土・炭化材は検出されていない。写真ではSI1117覆土がSI1116床面レベルに検出されたようにも見えるが、撮影時点でSI1117床面構築土が残存していたと考えられ、本遺構が先行すると推定できる。

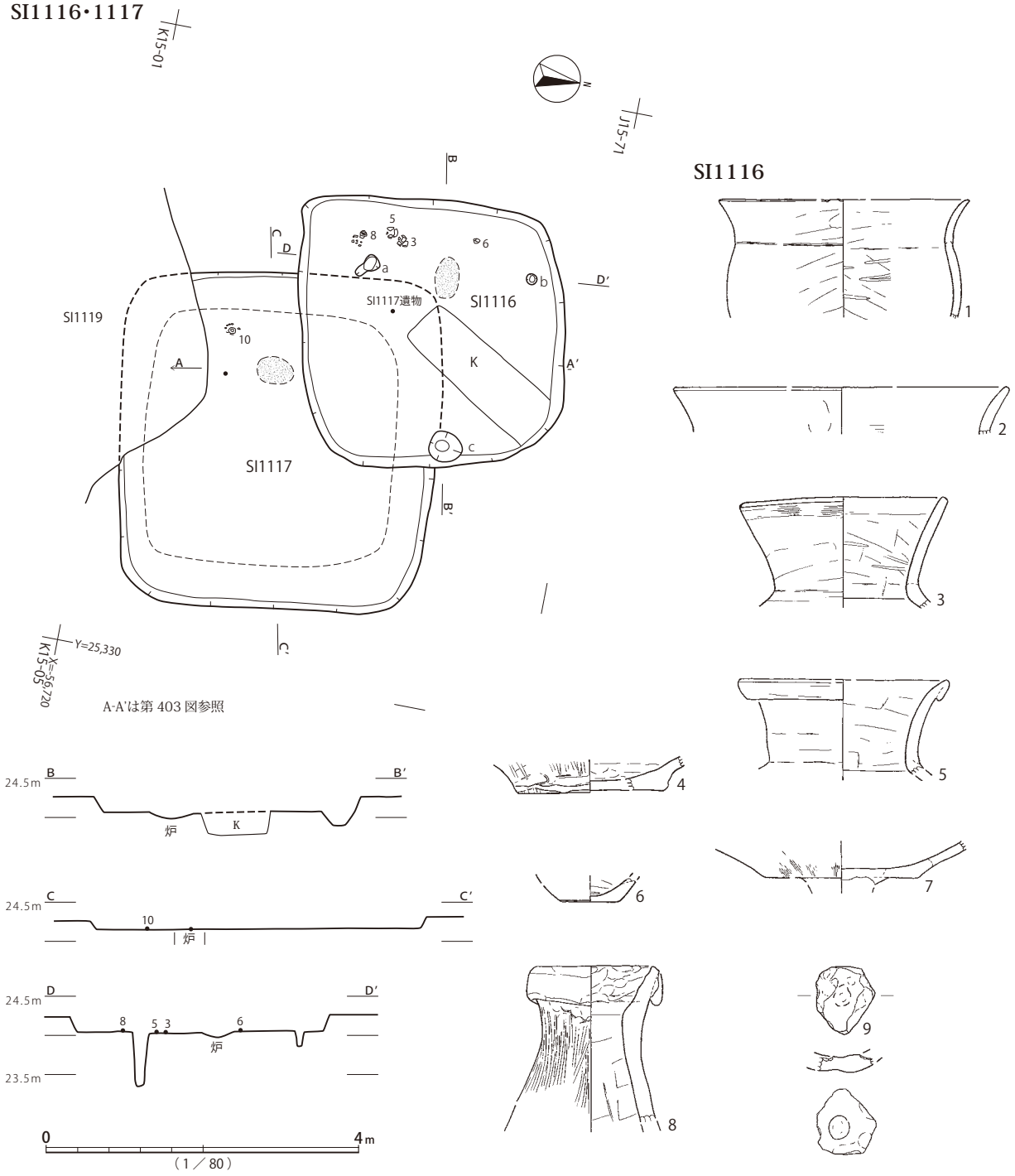
遺物は、床面上から土器が少量、出土している。素口縁で頸部段を持つ甕1、直口壺3、外面肥厚口縁壺5、炉器台8は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。3・5・6・8は床面直上で検出されている。9は壺底部と見られるミニチュア土器である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と考えられる。

SI1117には、主柱穴等が検出されていない。中心軸上、西寄りの位置に楕円形の炉が設けられる。床面は、SI1116・SI1119覆土内に形成され、黒味を帯びた床面構築土・硬化面が検出されている。

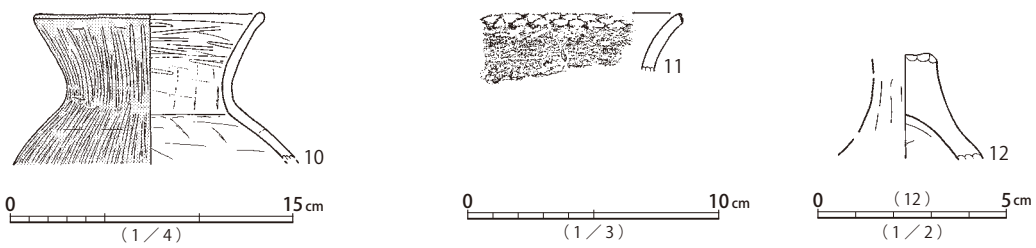
覆土は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示し、焼土・炭化物は検出されていない。

SI1116・1117



SI1116

SI1117



第402図　SI1116・SI1117遺構、SI1116・SI1117遺物

遺物は、少量の土器が出土している。床面からは、頸部屈曲の緩やかな直口壺10が検出されている。在来的な、口縁端部交互押捺の甕11と高杯形と見られるミニチュア土器12は覆土一括取り上げ資料である。壺10は、概ね弥生時代終末期後半、中台2式に位置づけられる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半の所産と推定される。

SI1119（第403・404・405図、図版78・170・187・246・315・316・326・338）

6.4×6.0m、深さ45cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北西辺が弥生時代終末期のSI1120、北角が弥生時代終末期のSI1117、南東辺が古墳時代終末期の前方後方墳SM1009と重複する。SI1117は本遺構覆土内に床面を形成している。西側には弥生時代終末期の方形墓SS12周溝が、同時存在不能な距離で近接する。竪穴内には、主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸のやや西寄り、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面は外周部を除き、硬化面が検出されている。

覆土は、壁際下層の初期堆積を除き、暗褐色土から黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。焼土と炭化材の集中は検出されていない。北寄りの範囲には下層から続くロームを多く含む硬化した層があり、SI1117構築に関連する可能性も考えられる。

遺物は、土器・石製品等が比較的多く出土し、多くは床面からやや離れた位置で検出されている。出土位置が明確な資料には、頸部屈曲の緩い甕3、底部片5、壺7、小型鉢16、丸底杯部の高杯17、円孔2個1対が3方向に穿たれる高杯18がある。壺口縁部7は在来的な後期弥生土器型式の特徴を持つが、肥厚部は薄く変化しており過渡的様相を示す。高杯17は横ヘラミガキ仕上げで在来的な丸底杯部を持つが、脚部は内弯する東海西部的な形状の影響が認められる。高杯18は東海西部系の高杯であり、脚部上位に寄っている円孔が古相を示す。鉢（高杯？）15は東海西部系高杯の影響を受けながら、口縁部に単節縄文と円形赤彩文が施されている。これらは概ね、弥生時代終末期前半、中台1-1式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器19、シルト岩製砥石状石製品20、砂岩製礫石器21、軽石製砥石22・23、角棒状鉄製品24が出土している。鉄製品24は覆土一括取り上げ資料で、混入品と見られる。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

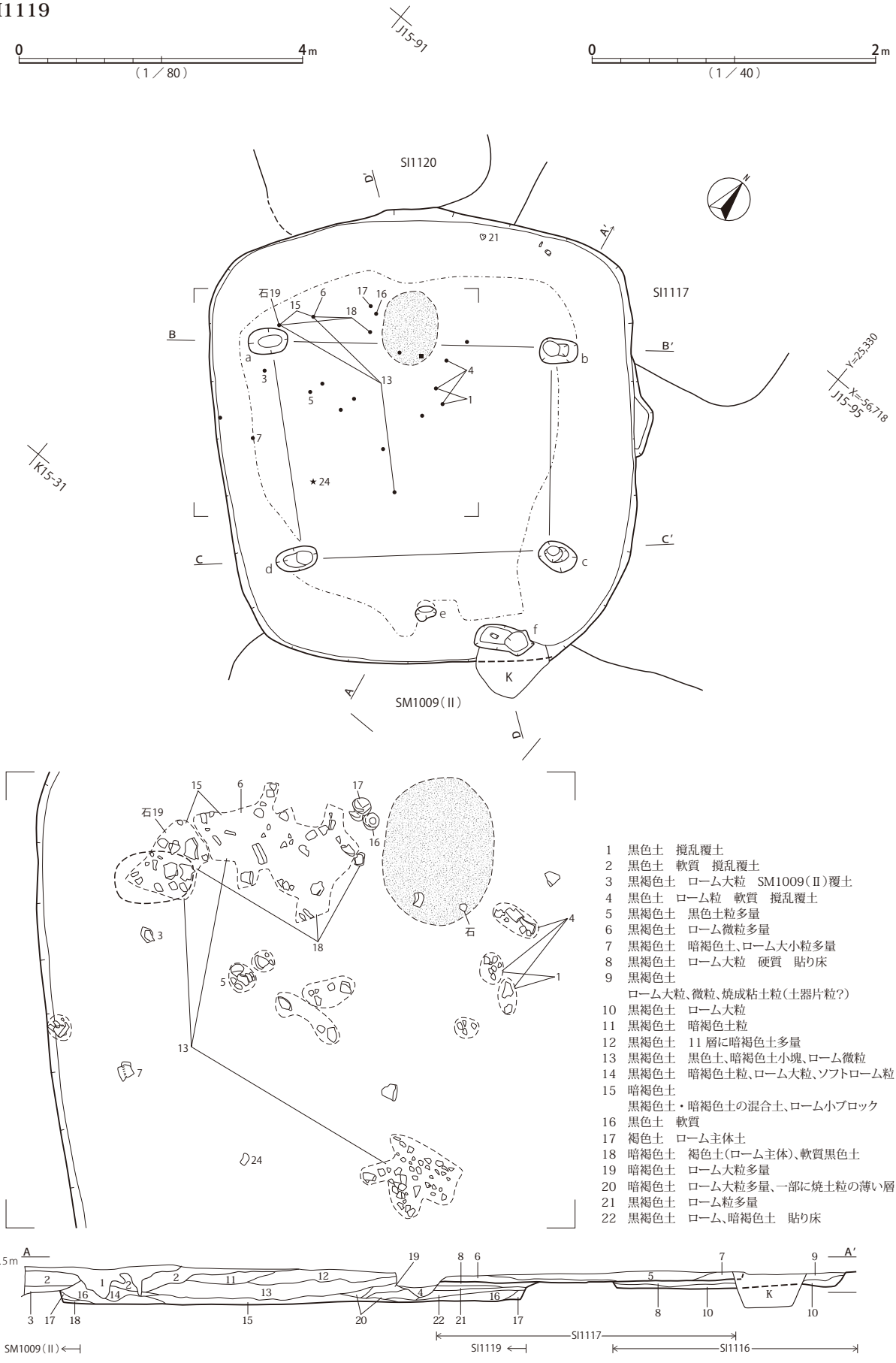
SI1120（第406・407・408・409図、図版78・79・131・170・171・246・247・248・338）

3.5×3.2m、深さ25cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。南東辺が、弥生時代終末期前半のSI1119と重複し、同終末期後半の方形部SS12北側周溝と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴a～dが検出されている。中心軸よりやや南西寄り、a・b間ラインと交差する位置に長楕円形の炉が設けられる。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、高低差を持って多数の土器が検出されている。甕1・7・15、台付甕11、タタキ甕12、壺25、高杯41を除いて、出土位置が記録されている。甕2～10は、くの字状口縁を持ちながらも頸

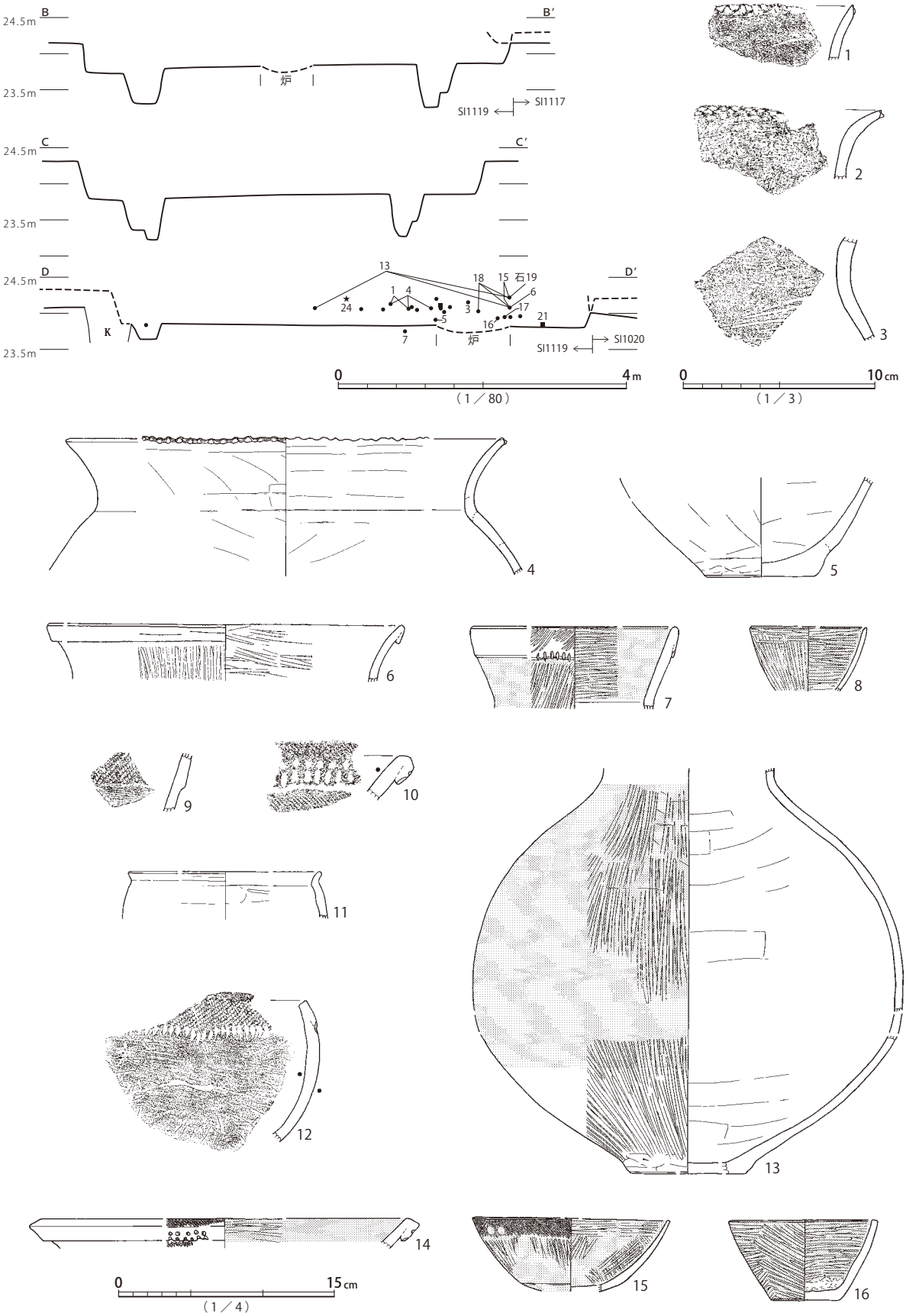
SI1119



1　黒色土　撹乱覆土
2　黒色土　軟質　撹乱覆土
3　黒褐色土　ローム大粒　SM1009（Ⅱ）覆土
4　黒色土　ローム粒　軟質　撹乱覆土
5　黒褐色土　黒色土粒多量
6　黒褐色土　ローム微粒多量
7　黒褐色土　暗褐色土、ローム大小粒多量
8　黒褐色土　ローム大粒　硬質　貼り床
9　黒褐色土
ローム大粒、微粒、焼成粘土粒（土器片粒?）
10　黒褐色土　ローム大粒
11　黒褐色土　暗褐色土粒
12　黒褐色土　11層に暗褐色土多量
13　黒褐色土　黒色土、暗褐色土小塊、ローム微粒
14　黒褐色土　暗褐色土粒、ローム大粒、ソフトローム粒
15　暗褐色土
黒褐色土・暗褐色土の混合土、ローム小ブロック
16　黒色土　軟質
17　褐色土　ローム主体土
18　暗褐色土　褐色土（ローム主体）、軟質黒色土
19　暗褐色土　ローム大粒多量
20　暗褐色土　ローム大粒多量、一部に焼土粒の薄い層
21　黒褐色土　ローム粒多量
22　黒褐色土　ローム、暗褐色土　貼り床

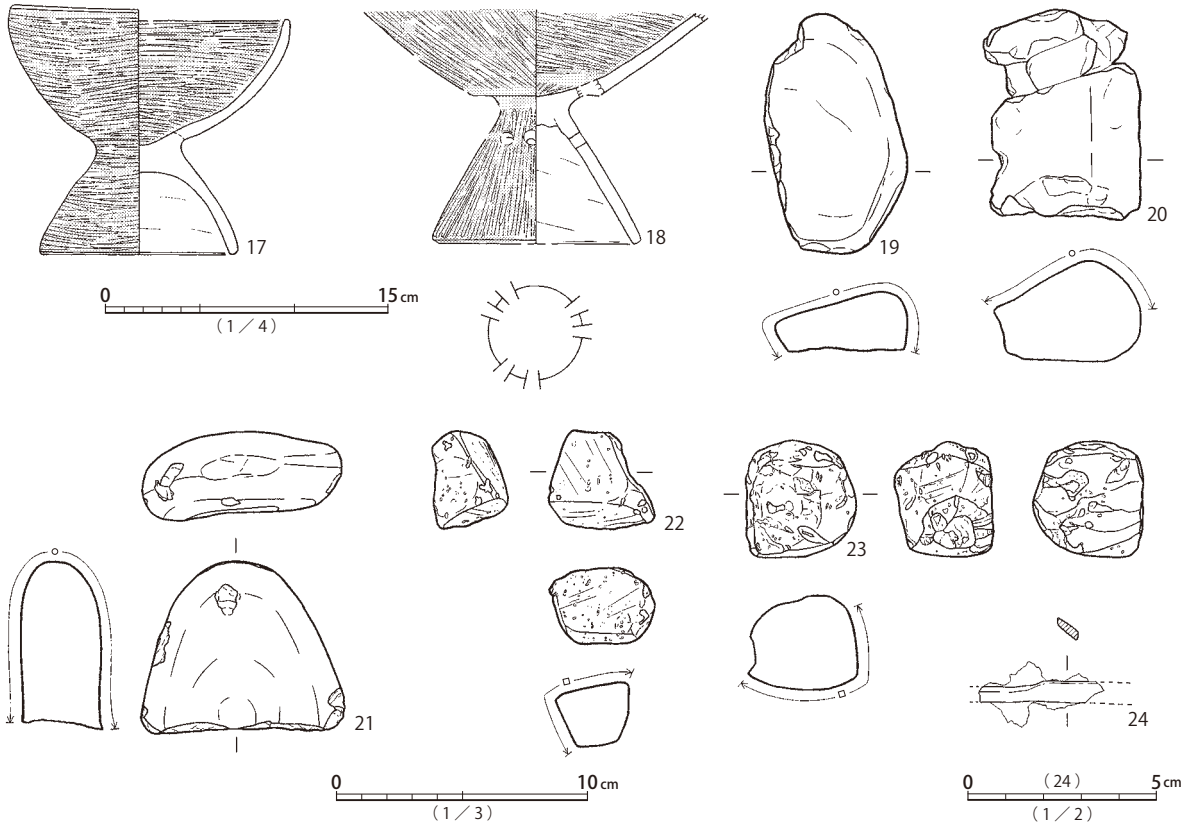
第403図　SI1119遺構（1）

SI1119



第404図　SI1119遺構(2)、SI1119遺物(1)

SI1119



第405図　SI1119遺物（2）

部屈曲が緩い点、素口縁ながらナデ・ヘラミガキ仕上げされる点、底部輪台技法が見られる点が特徴的である。甕4は口縁端部へ強いヨコナデが施され、内側に突出部が形成されており、受口状口縁甕あるいは庄内式・布留式の製作技法の影響とも思われる。壺18 ～ 24・26 ～ 29は、素口縁である点は新相を示しながら、肩部に文様を施される個体があり、過渡的様相が認められる。19・29のヘラ描き文様、27の刺突文はいずれも外来的な技法である。18・24の底部輪台技法は甕と共通する。壺20は、甕のような交互押捺される口縁端部が異質である。台付直口壺30は非在地的形式である。鉢31の外面肥厚口縁は在来的な形態だが、縄文を失っている点は新相を示す。高杯33・34は、東海西部系と在地的な杯部丸底高杯との折衷的形態である。高杯36 ～ 41に4方配置の円孔が認められる点は過渡的な特徴と思われる。出土位置にばらつきはあるものの、同時期の土器と見られ、弥生時代終末期後半、中台2式の範疇にある。遺構の位置関係から、弥生時代終末期後半、中台2式期に位置づけられるSS12の周溝北部出土土器群より、若干先行する可能性が高い。

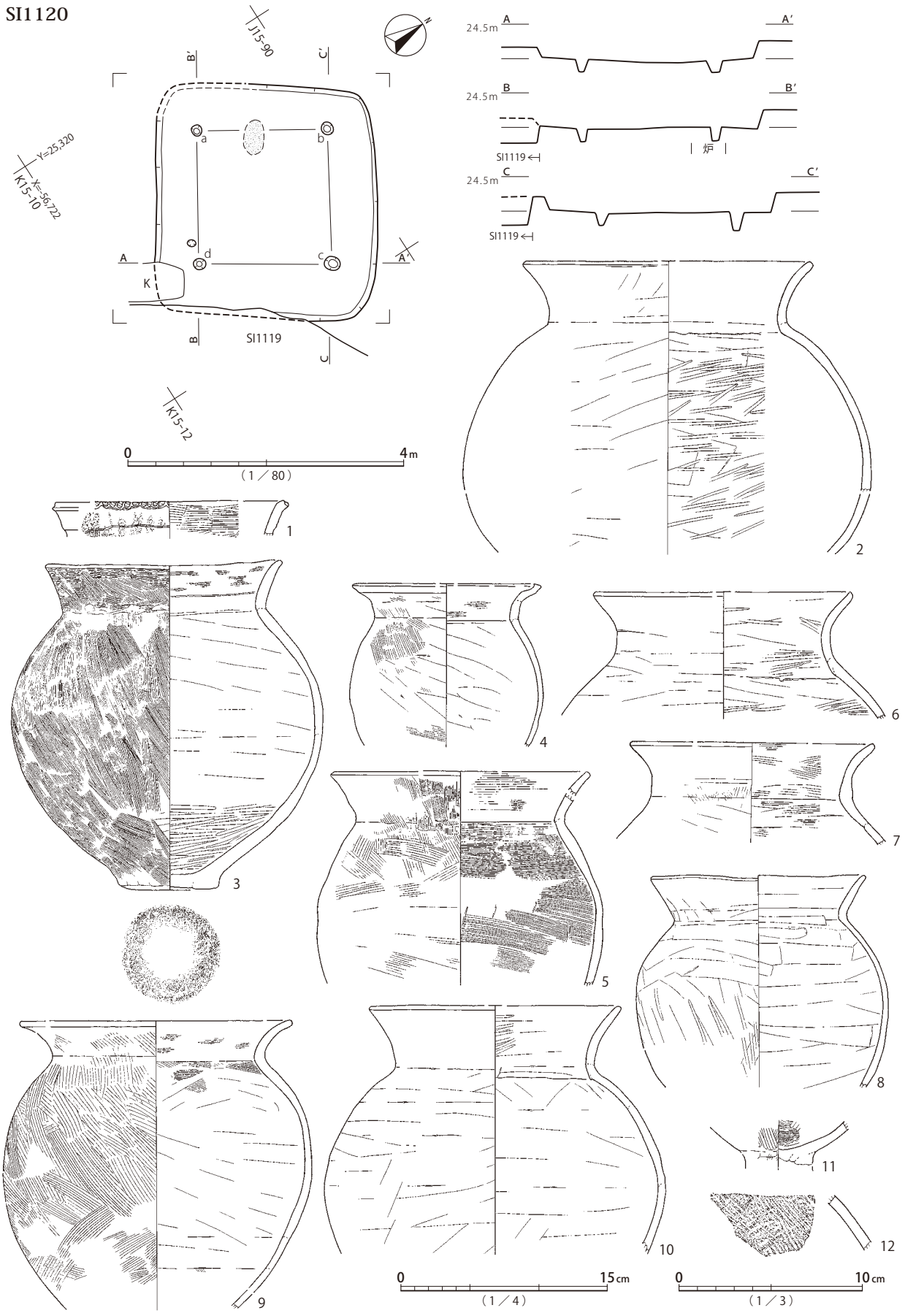
本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代終末期後半に位置づけられる。

周辺遺構は、弥生時代終末期前半のSI1119→同終末期のSI1116→SI1117→同終末期後半のSI1120→同終末期後半、中台2式期の方形墓SS12、の順に構築されたと想定される。

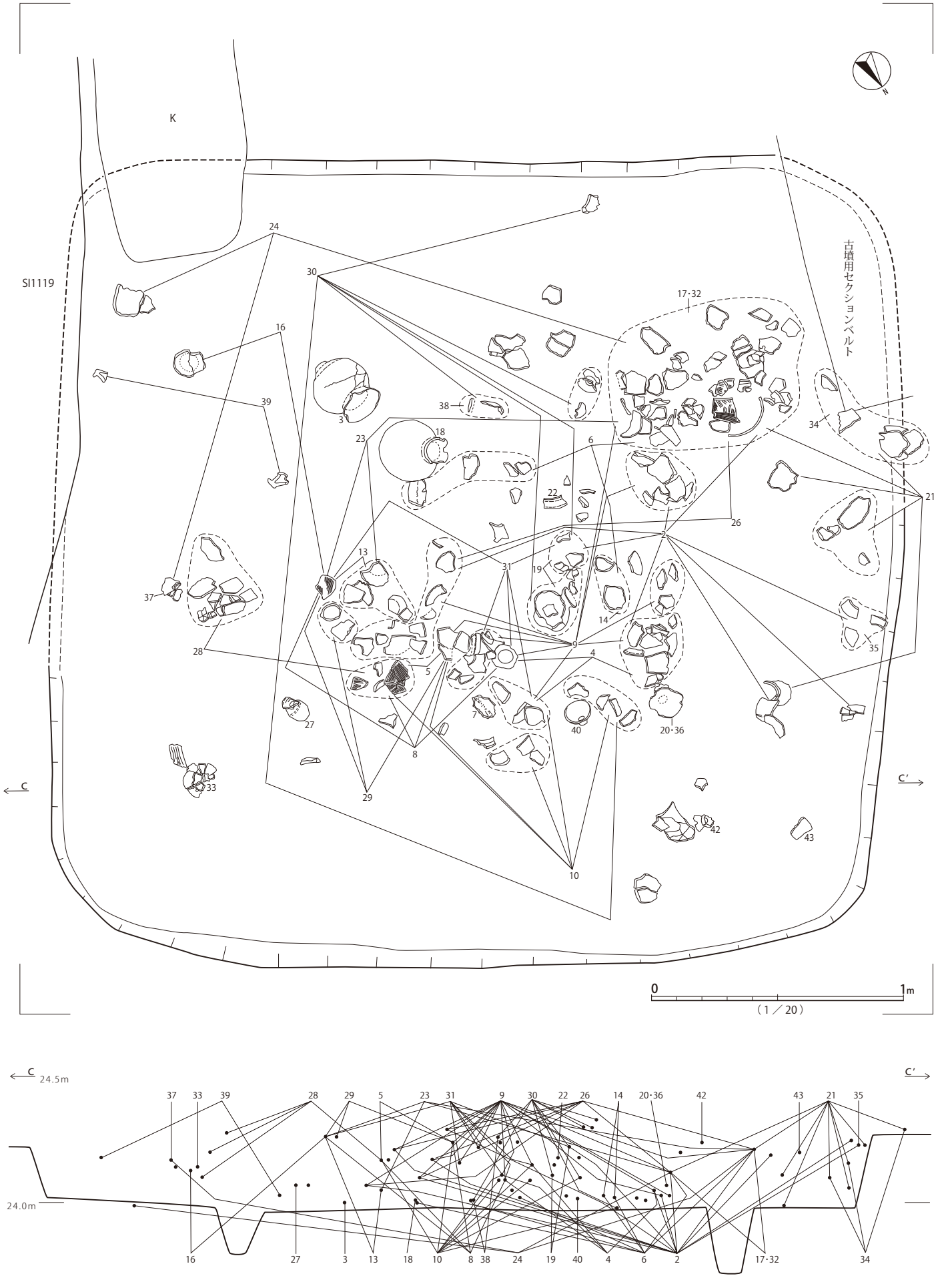
SI1121（第410・411・412図、図版79・171・172・248・299・316・326・338・339）

7.1？×6.2m、深さ50cm程度の楕円形竪穴建物跡である。南部が、弥生時代終末期の方形墓SS12北西周溝と重複し、床面まで切り込まれている。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴eが検出されている。

SI1120

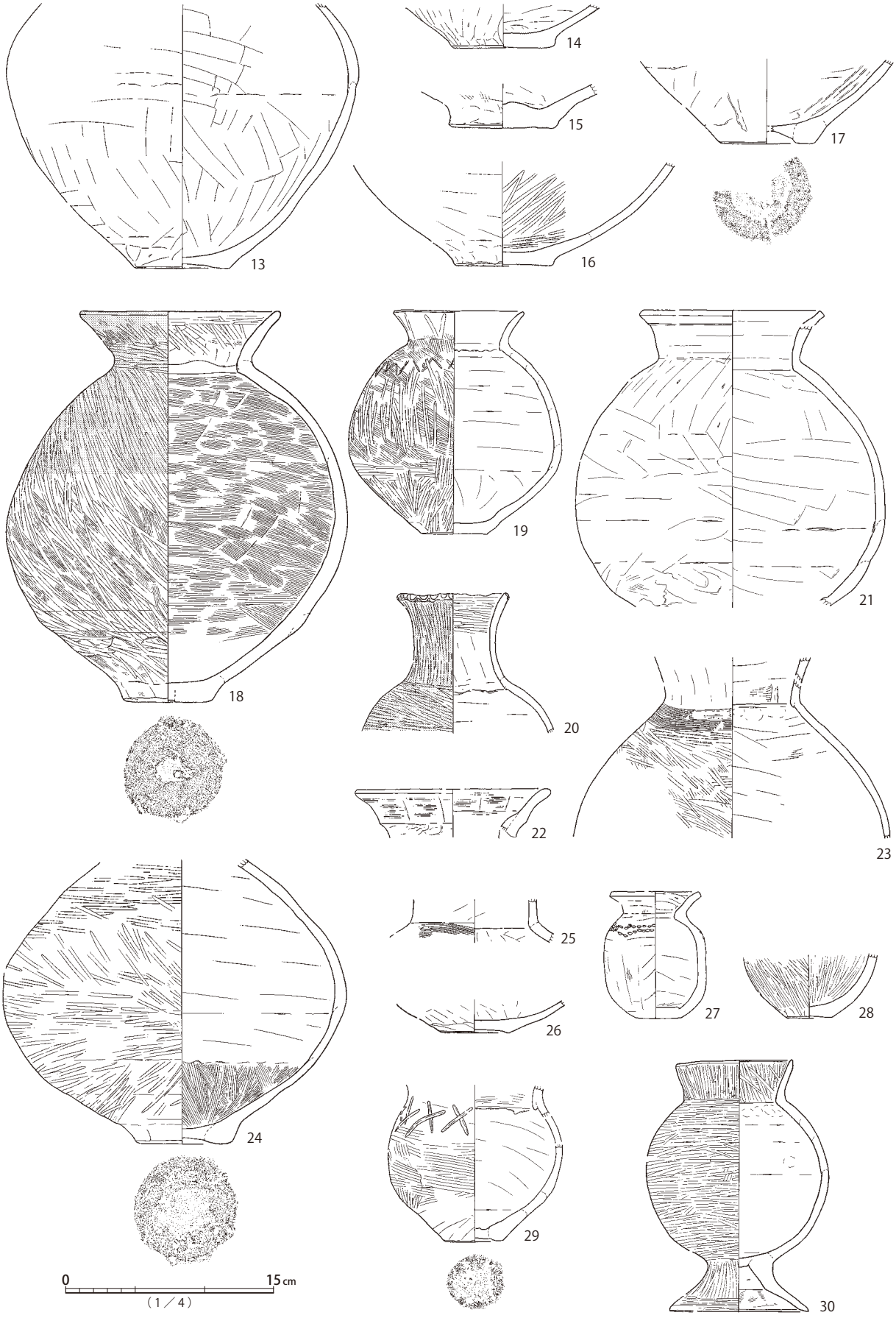


第406図　SI1120遺構(1)、SI1120遺物(1)



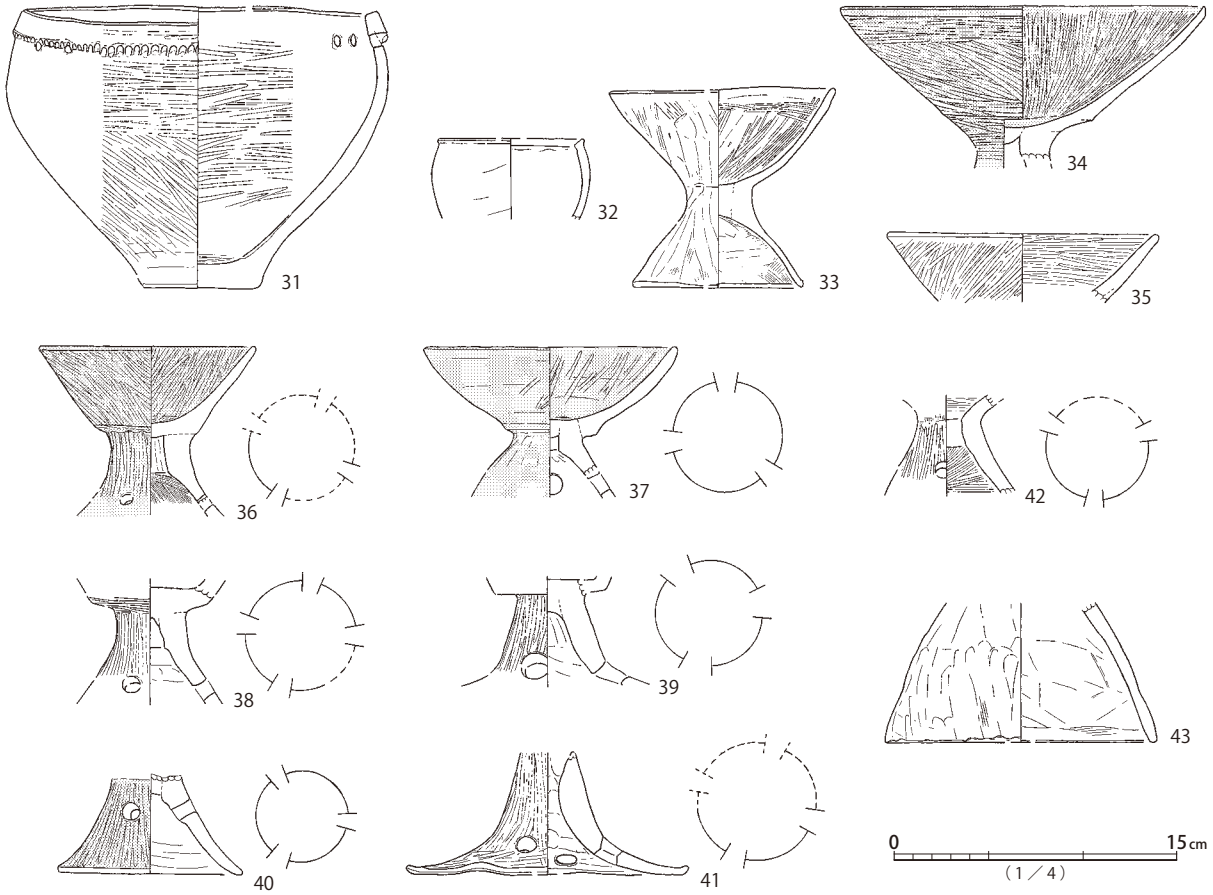
第407図　SI1120遺構（２）

SI1120



第408図　SI1120遺物（２）

SI1120



第409図　SI1120遺物（3）

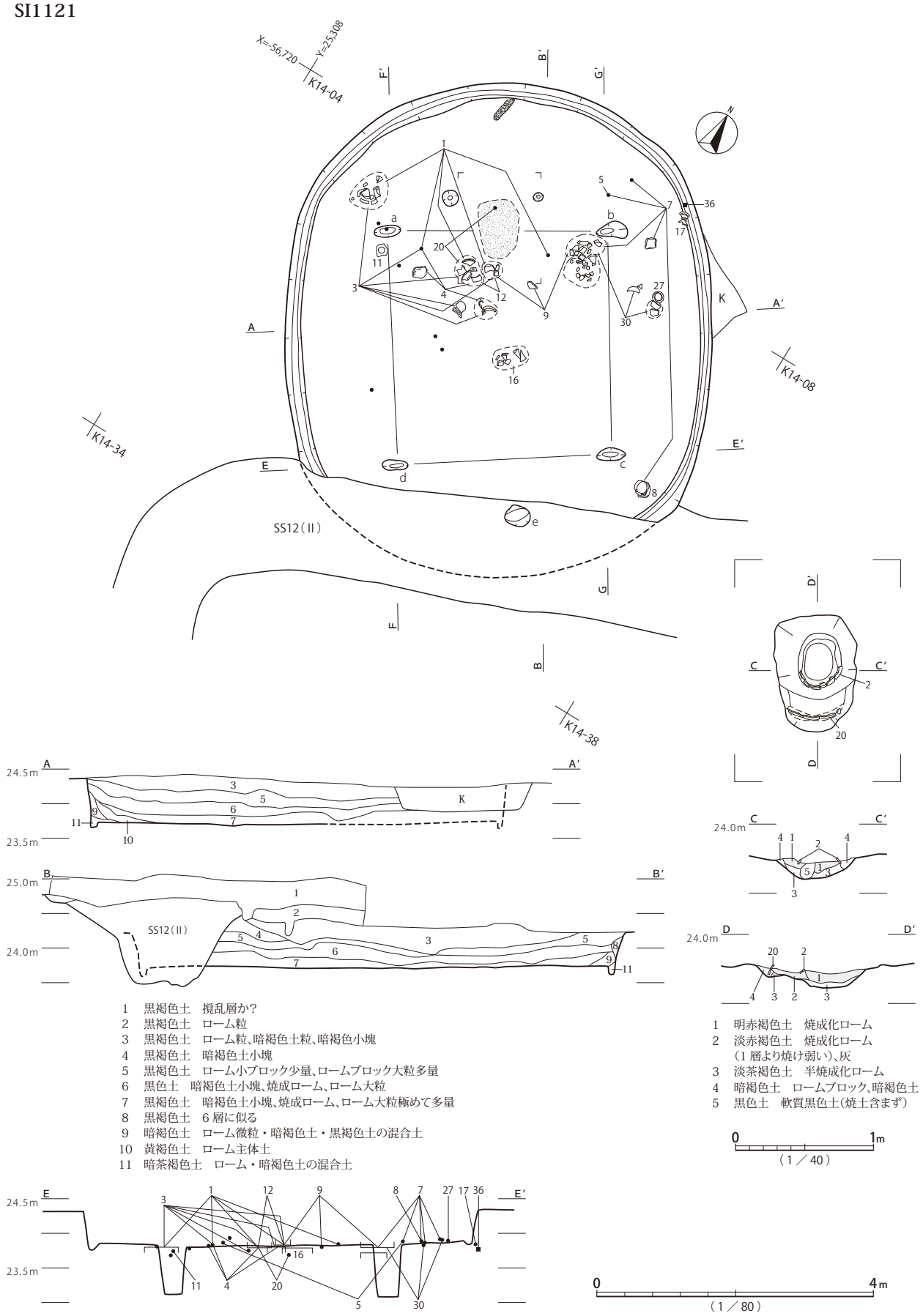
中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に不整楕円形の炉が設けられる。炉の外縁と中央寄りには土器片が立てて埋置されている。内側は大型の甕口縁片2を下向きに、外側は大型壺胴部片20を使用している。床面周溝は遺存部で連続して検出され、全周していた可能性が高い。

覆土は、北側で炭化材が内側に傾斜して検出され、廃絶時に火を受けた可能性が高いが、焼土集中部は認められない。最下層には焼土粒・ロームブロックが多く含まれており、埋め戻しなど人為的な埋積状況が推定される。上位は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、床面直上から完形を含む土器が出土している。甕1・3～5・7・8は在来的な交互押捺口縁の甕で、頸部屈曲が緩やかで胴部の張り出さないプロポーションが共通する。完形の甕8は内面に帯状の使用痕が見られる。壺16・17は口縁外面肥厚部が厚く、17は沈線区画の縄文帯が施される。完形の椀27は口縁肥厚部端面の幅が広い。床面出土の土器群は、概ね弥生時代後期前半、久ヶ原2式古段階に位置づけられる。その他、有孔長球状土製品34、緑色片岩製砥石35、軽石製砥石36が出土している。覆土一括取り上げ資料である古式土師器は、SS12等の周辺遺構からの混入品であり、銅鏃37も同様と思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半、久ヶ原2式古段階に位置づけられる。

SI1121

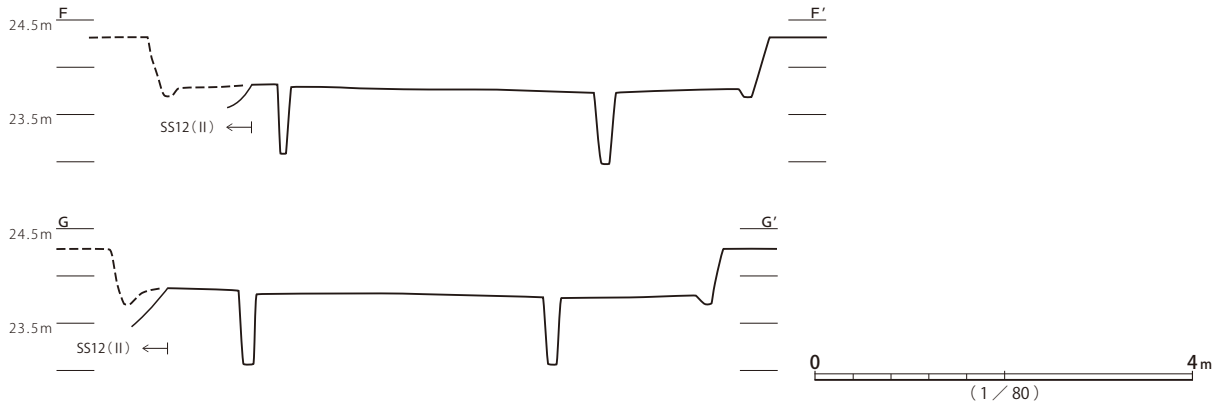


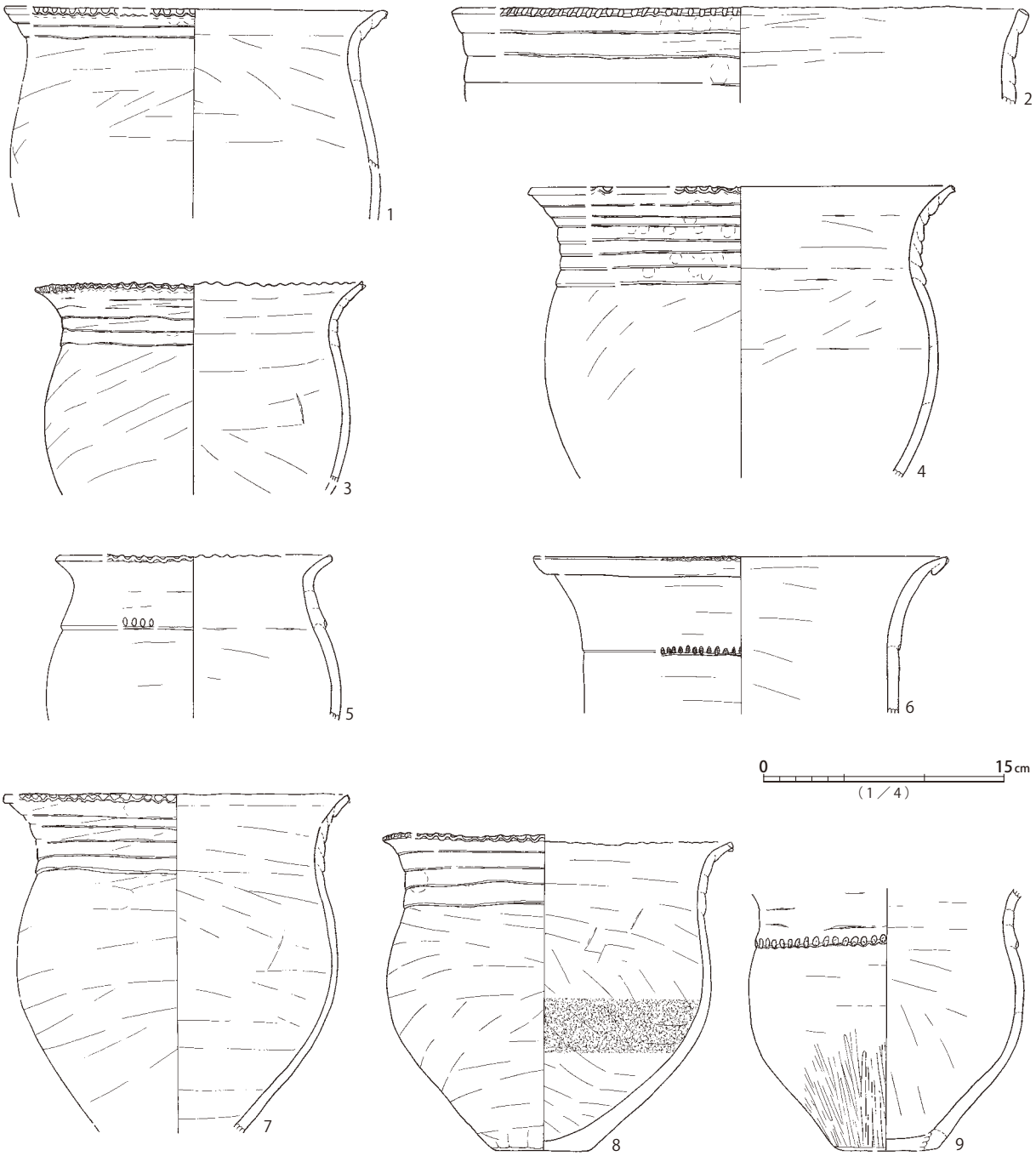
1　黒褐色土　撹乱層か?
2　黒褐色土　ローム粒
3　黒褐色土　ローム粒、暗褐色土粒、暗褐色小塊
4　黒褐色土　暗褐色土小塊
5　黒褐色土　ローム小ブロック少量、ロームブロック大粒多量
6　黒色土　暗褐色土小塊、焼成ローム、ローム大粒
7　黒褐色土　暗褐色土小塊、焼成ローム、ローム大粒極めて多量
8　黒褐色土　6層に似る
9　暗褐色土　ローム微粒・暗褐色土・黒褐色土の混合土
10　黄褐色土　ローム主体土
11　暗茶褐色土　ローム・暗褐色土の混合土

1　明赤褐色土　焼成化ローム
2　淡赤褐色土　焼成化ローム
(1層より焼け弱い)、灰
3　淡茶褐色土　半焼成化ローム
4　暗褐色土　ロームブロック、暗褐色土
5　黒色土　軟質黒色土(焼土含まず)

第410図　SI1121遺構(1)

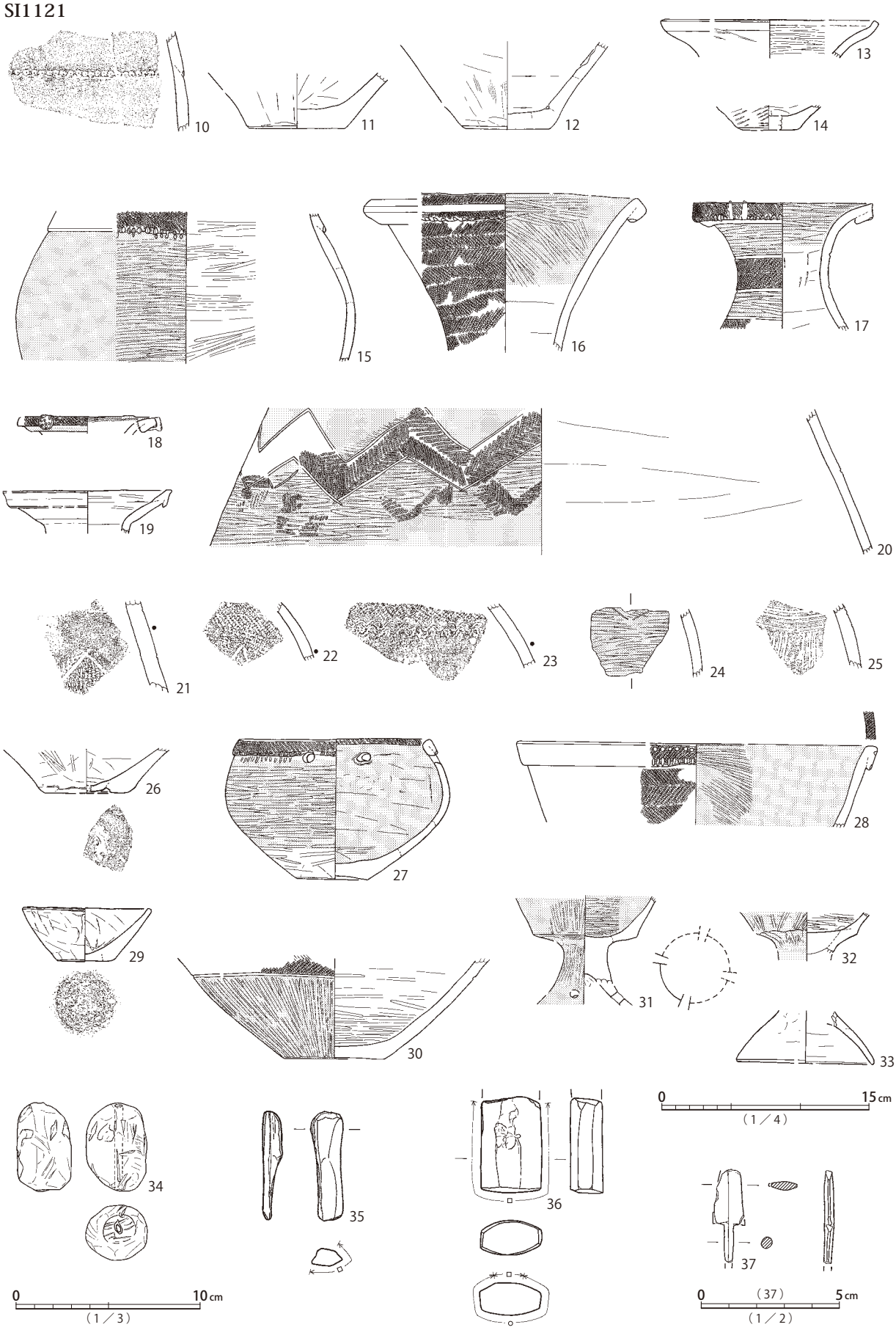
SI1121



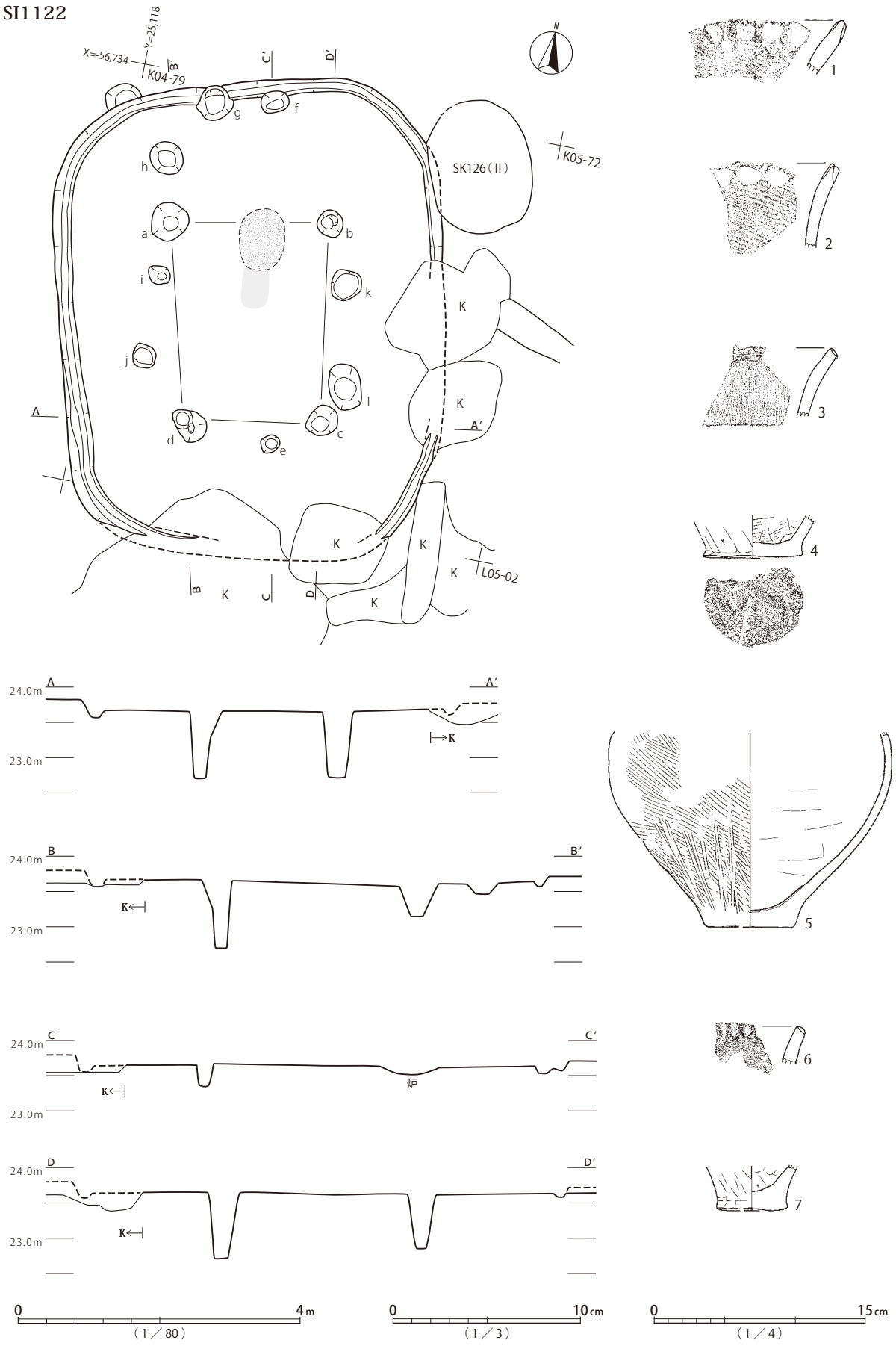


第411図　SI1121遺構(2)、SI1121遺物(1)

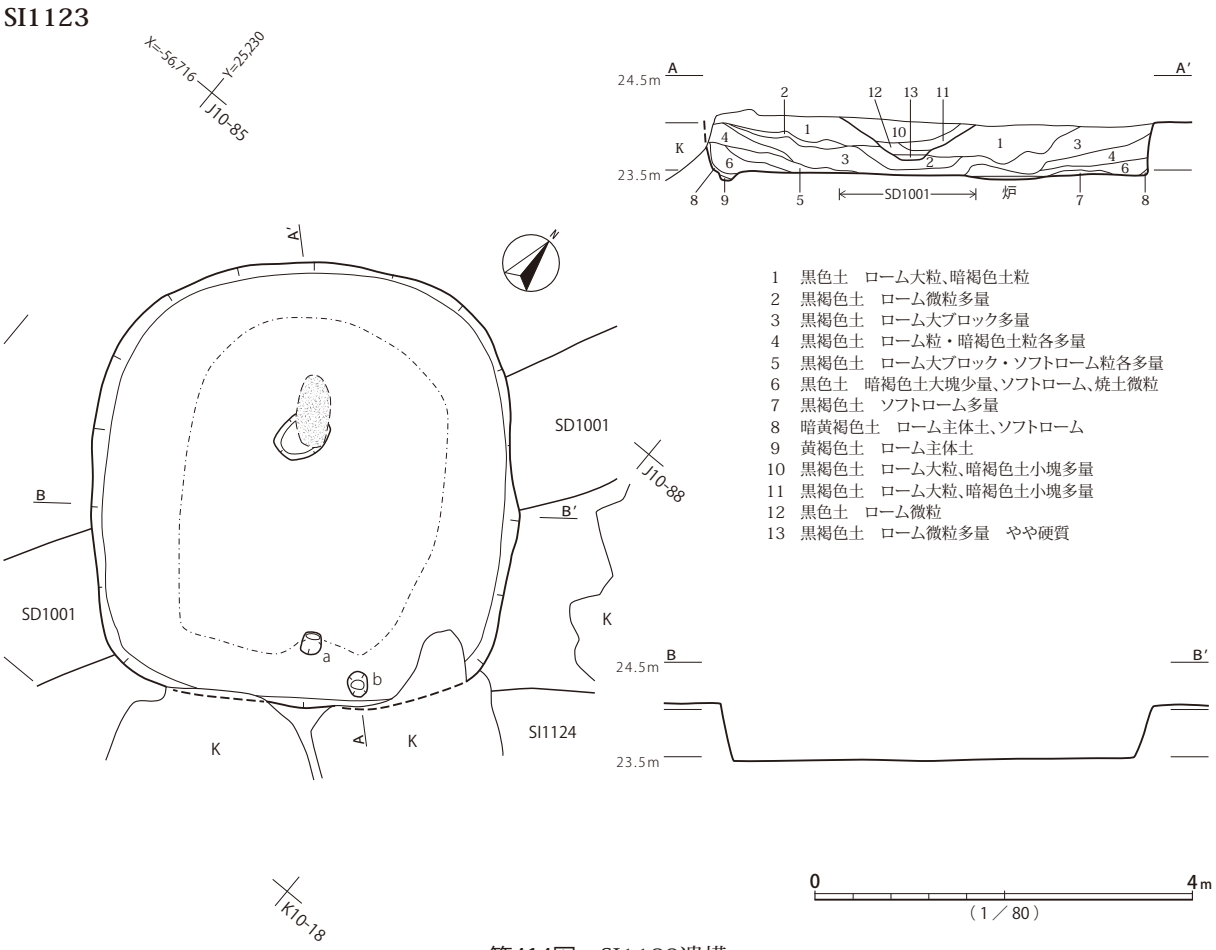
SI1121



第412図　SI1121遺物（2）



第413図　SI1122遺構・遺物



第414図　SI1123遺構

SI1122（第 413 図、図版 79・249・339）

6.8？×5.5m、深さ10cm程度の不整隅円長方形竪穴建物跡である。南東側は、多数の床面までの撹乱を受け、遺存状態が良くない。北東角は、古墳時代以降と見られるSK126と重複する。主柱穴a～dが検出されている。中心軸やや東寄り、a・b間ライン上に楕円形の炉が設けられる。竪穴中心側に焼土の広がりが検出されており、火床面が拡張された可能性がある。遺存部に床面周溝が認められ、本来は全周していたと見られる。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。炉を除き、焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、少量の土器が覆土一括取り上げ資料として出土している。指頭押捺により小波状を呈する口縁の甕1・2、ハケメ工具押圧による刻目状刺突文の甕3、木葉圧痕の底部4、甕下半部5、縄文原体押圧による刻目状刺突文の広口壺6、小型甕（鉢）7があり、いずれも弥生時代中期後半、宮ノ台式に位置づけられる。

本遺構は、積極的根拠に乏しいものの、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代中期後半の所産と推定される。

SI1123（第 414 図、図版 79）

4.7×4.6m、深さ55cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。近世以降のSD1001が覆土内を北東－南西に横断するほか、南東辺が撹乱を受け、一部は床面に及ぶ。南東側は、弥生時代後期後半以降

のSI1124と同時存在不能な距離で近接する。主柱穴は認められず、ハシゴ穴a、貯蔵穴の可能性があるbが検出されるのみである。中心軸上、北西寄りの位置に長楕円形の炉が設けられる。外周部を除き、炉の周囲からa周辺にかけて、床面の硬化が認められる。

覆土は、明確な焼土・炭化材の集中部は検出されていない。最上層を除いてロームを多く含む層が目立つことから、意図的な埋め戻し、あるいは周辺遺構掘削時の排土などが想定される。縄文時代遺構に由来すると見られる礫を除き、出土遺物がまったくないことも、埋め戻しの行われた可能性を示唆する。

本遺構は、積極的な根拠に乏しいが、平面形と周辺遺構の様相に基づき、弥生時代後期後半から終末期前半の所産と推定される。

SI1124（第415図、図版79・172・249）

5.0×4.8m、深さ30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。西辺の一部は、撹乱により床面まで破壊を受けている。北西側は弥生時代後期後半以降と見られるSI1123が、同時存在不能な距離で近接する。主柱穴a～d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に楕円形の炉が設けられる。柱間の内側は調査で一段掘り下げられ、ベッド状遺構が床面外周部に設けられた可能性もあるが、SI1117のように床面構築土が黒味を帯びていただけとも考えられる。

覆土に焼土・炭化材の集中部は認められない。壁際の初期堆積がロームブロック主体土であり、上位の土層にもロームブロックは比較的多く含まれている。

遺物は、覆土一括取り上げ資料として少量の土器が出土している。台付甕1、在来的な甕2～4、ヘラ状工具による刻目状刺突文の壺5、結節文区画の壺6、沈線区画の壺7、胴部縄文施文の鉢8、高杯形のミニチュア土器9、台付甕形のミニチュア土器10があり、概ね弥生時代後期後半、山田橋式から終末期前半、中台1式の範疇と思われる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から同終末期前半に帰属する可能性が考えられる。

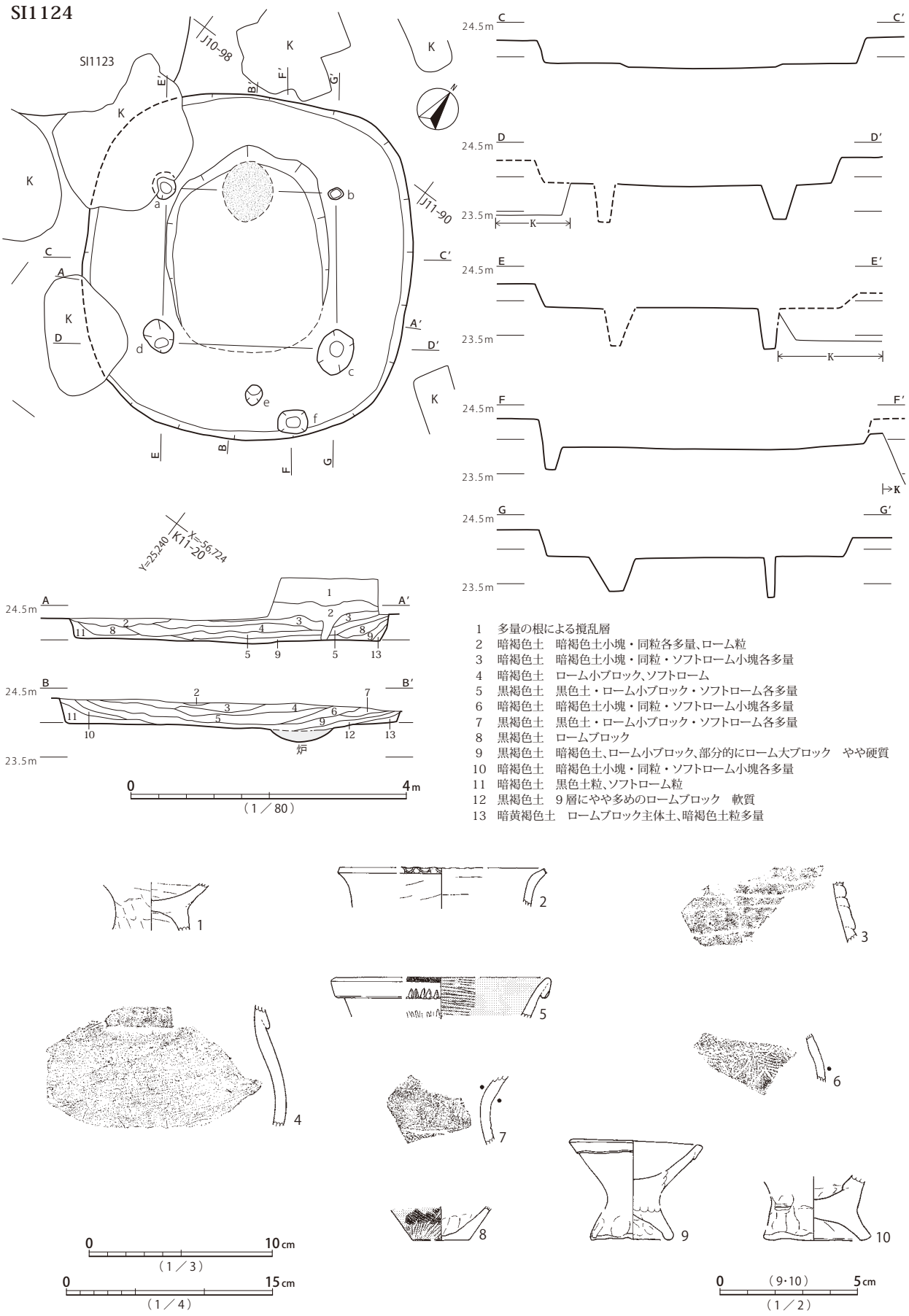
SI1125（第416図、図版80・249）

5.3？×5.3？m、深さ25cm程度の円形竪穴建物跡である。099地区の北辺に位置し、北東側が調査前に失われている。イモ穴群により床面までの撹乱を受けている。主柱穴は見られず、貯蔵穴と見られるaのみが検出されている。中心から北寄りの位置に長楕円形の炉が設けられているが、撹乱によって中央部が欠失する。炉の周囲から貯蔵穴側には、床面の硬化範囲が認められる。

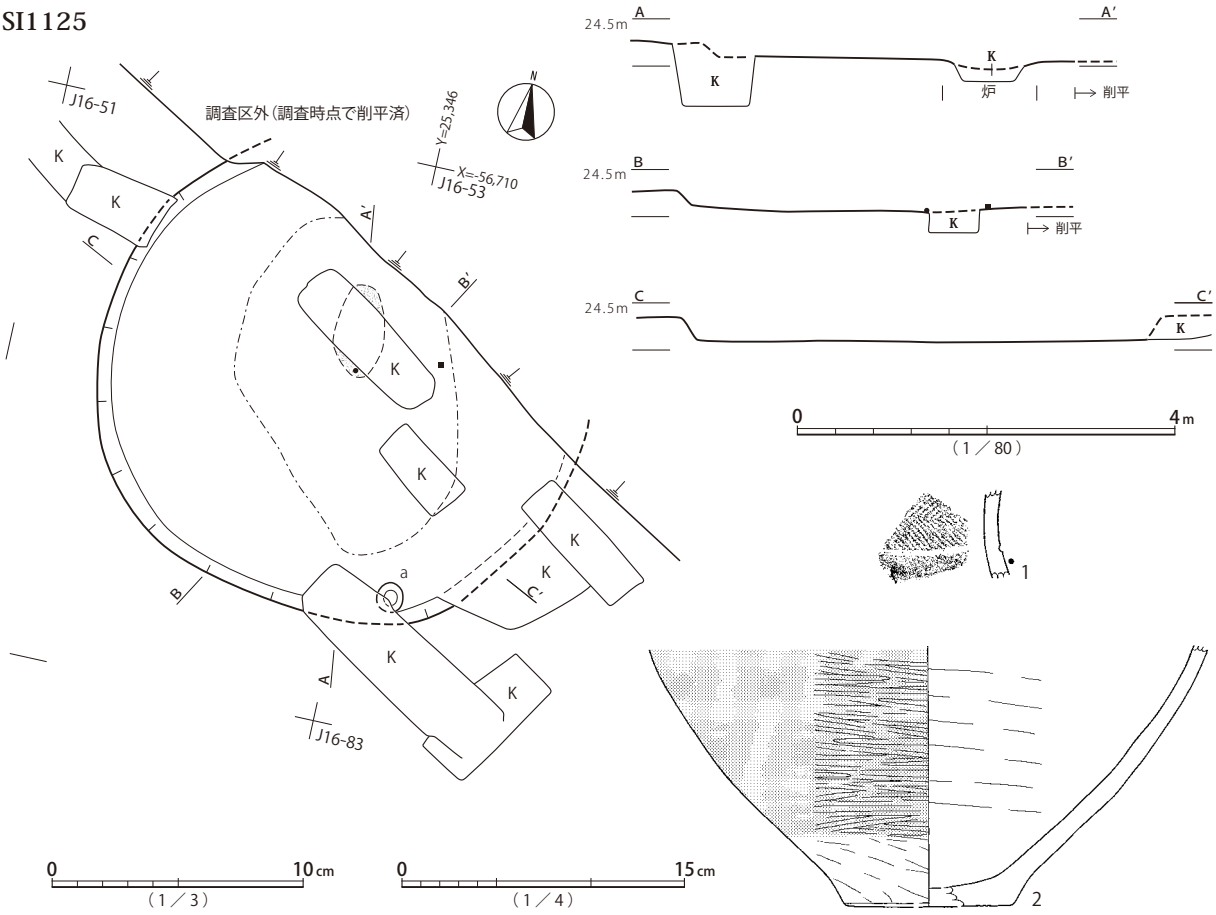
覆土は、土層断面記録が無く、詳細は不明である。焼土・炭化材の検出記録はない。

遺物は僅少で、沈線区画の壺1、壺下半部2が出土している程度である。壺1は弥生時代後期前半、久ヶ原式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と推定される。



第415図　SI1124遺構・遺物



第416図　SI1125遺構・遺物

SI1126（第 417 図、図版 3・4・249）

3.5 × 3.7m、深さ 35cm程度の不整円形竪穴建物跡である。南辺が、イモ穴により床面まで撹乱を受ける。主柱穴は見られず、ハシゴ穴a、貯蔵穴bのみが検出されている。竪穴外にピットが認められ、建物に関係する可能性も考えられる。中心軸上、北西寄りに楕円形の炉が設けられる。床面は外周部を除き、硬化面が検出されている。

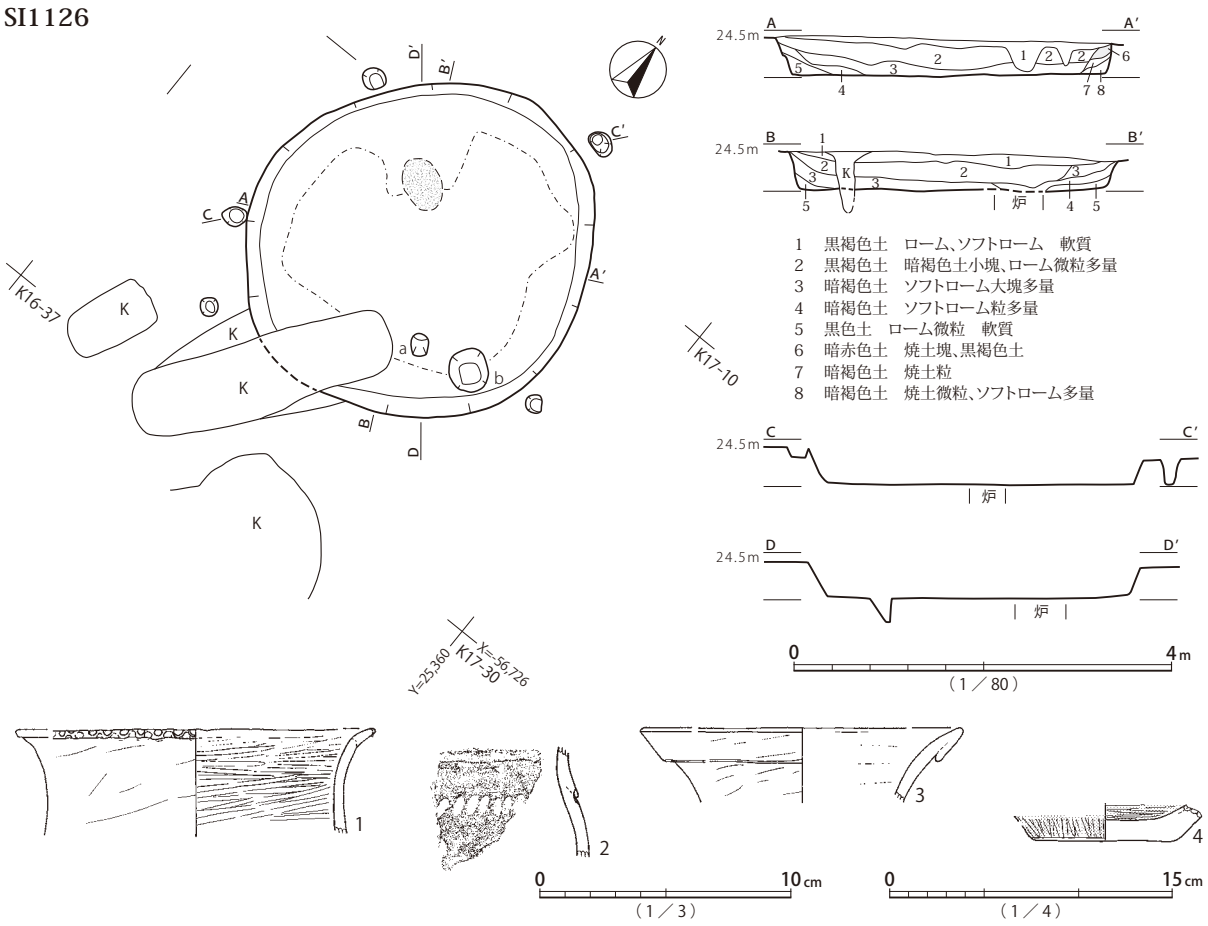
覆土は、床面上に焼土・炭化材は見られないが、東側上位に焼土集中部が認められる。その他は、暗褐色土と黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況を示す。

遺物は、覆土一括取り上げ資料として、少量の土器が出土している。在来的な、交互押捺口縁の甕1、段部押捺の甕2、無文外面肥厚口縁の壺3、鉢（広口壺）底部4があり、概ね弥生時代後期後半から弥生時代終末期の特徴を示す。壺3は弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相に基づき、弥生時代後期後半から同終末期前半に帰属すると考えられる。

SI1127（第 418 図、図版 3・4・249・316）

4.4 × 4.1m、深さ 20cm程度の不整円形竪穴建物跡である。南東辺が大きく撹乱され、床面まで破壊を受けている。東側では、縄文時代遺構の可能性もあるSK86と重複する。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴もしくは貯蔵穴の可能性があるeが検出されている。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に長



第417図　SI1126遺構・遺物

楕円形の炉が設けられる。

覆土は、焼土・炭化材の集中は検出されていない。初期堆積を除き、暗褐色土と黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、少量の土器が出土している。段部押捺の甕2、沈線区画文様の広口壺7、山形文の壺8が床面直上から検出されている。大ぶりの椀6を合わせ、概ね、弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。その他、軽石9、砂岩製砥石10が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

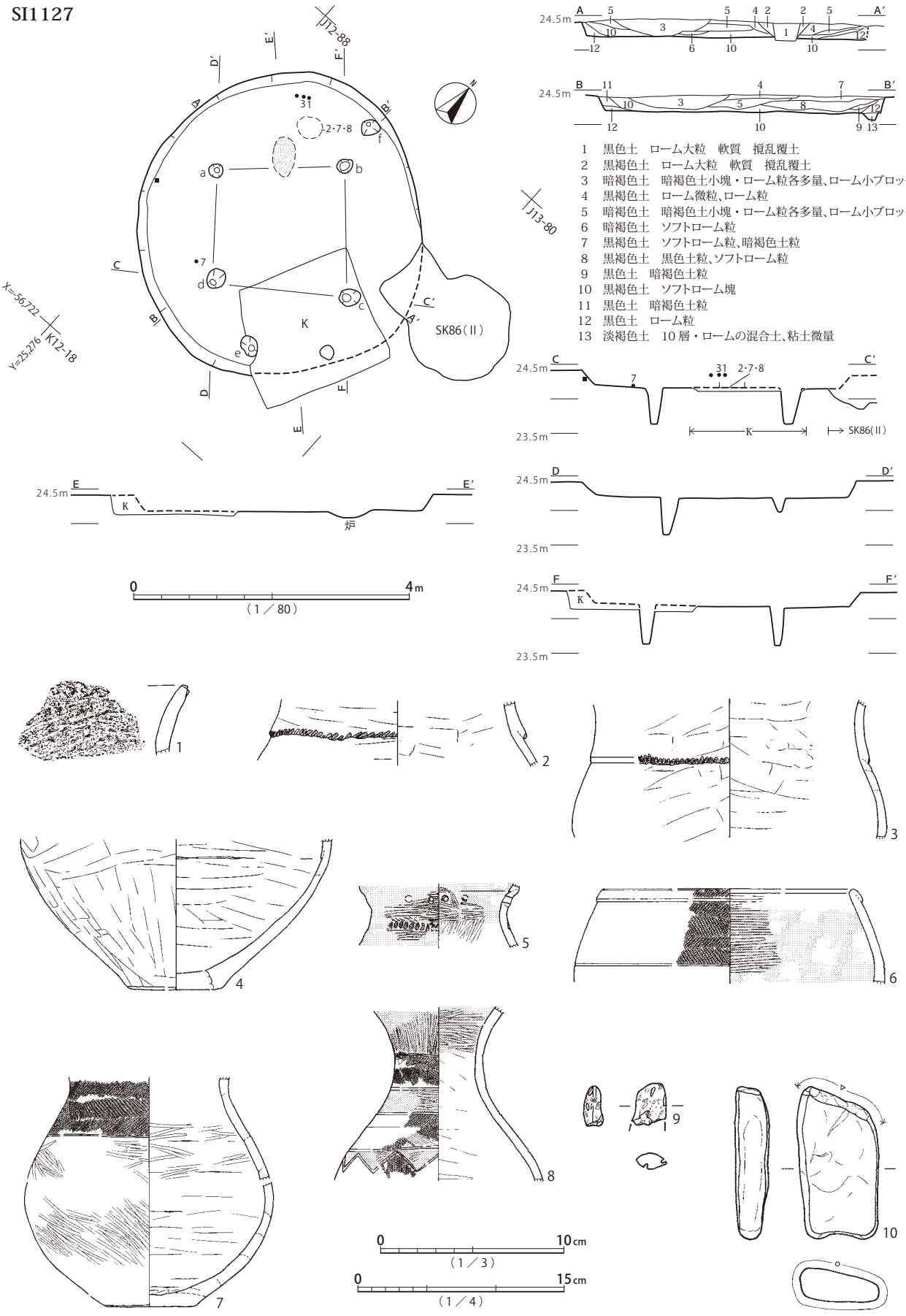
SI1128（第 419 図、図版 3・4）

3.4？×3.0m、深さ 40cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。北半が、古代方形墳墓SM1072北側周溝と重複し、床面まで破壊を受ける。南辺は時期不明のSI1201と重複するが、詳細不明である。弥生時代終末期方形墳墓SS6南東周溝とも位置が重なる。中心やや北西寄りに楕円形の炉が設けられる。主柱穴等は検出されていない。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。

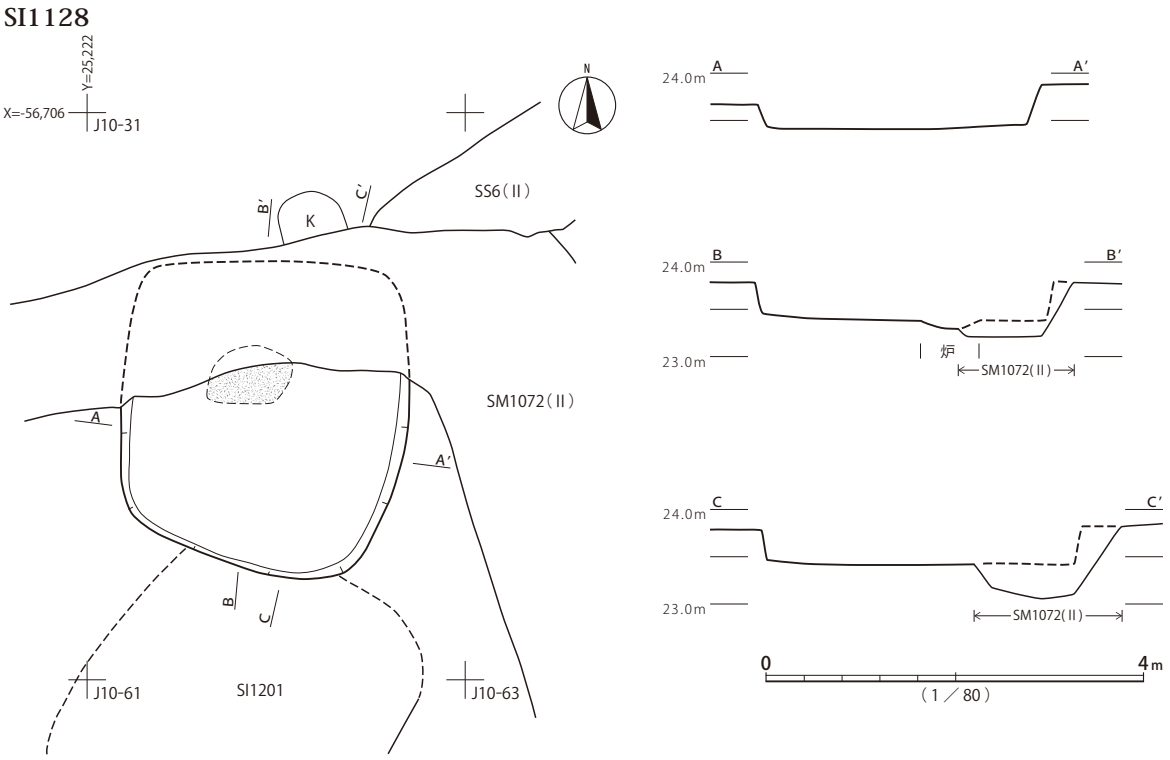
本遺構は、出土遺物が無く、積極的根拠には乏しいが、弥生時代終末期後半、中台2式期の墳墓、SS6に先行する可能性が高い。平面形を勘案すると、弥生時代終末期に帰属すると推定される。

SI1127



1　黒色土　ローム大粒　軟質　撹乱覆土
2　黒褐色土　ローム大粒　軟質　撹乱覆土
3　暗褐色土　暗褐色土小塊・ローム粒各多量、ローム小ブロック
4　黒褐色土　ローム微粒、ローム粒
5　暗褐色土　暗褐色土小塊・ローム粒各多量、ローム小ブロック
6　暗褐色土　ソフトローム粒
7　黒褐色土　ソフトローム粒、暗褐色土粒
8　黒褐色土　黒色土粒、ソフトローム粒
9　黒色土　暗褐色土粒
10　黒褐色土　ソフトローム塊
11　黒色土　暗褐色土粒
12　黒色土　ローム粒
13　淡褐色土　10層・ロームの混合土、粘土微量

第418図　SI1127遺構・遺物



第419図　SI1128遺構

SI1129（第 420 図、図版 80・249・316・339）

4.4 × 4.0m、深さ 15cm程度の不整隅円方形竪穴建物跡である。西側が木の根により大きく撹乱されるほか、南東辺にも時期不明掘り込みaが重複する。北東辺には、時期不明の土坑墓SK94が重複し、床面が欠失している。主柱穴等は検出されていない。炉は撹乱範囲内に存在した可能性がある。

覆土は、黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、少量の土器と石製品が出土しており、すべて覆土一括取り上げ資料である。在来的な、交互押捺口縁の甕１～４、北陸南西部系の有段口縁甕5、沈線区画文様の壺6、小型椀7があり、甕5と小型椀7は、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる。その他、砂岩製礫石器8が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期の所産と推定される。

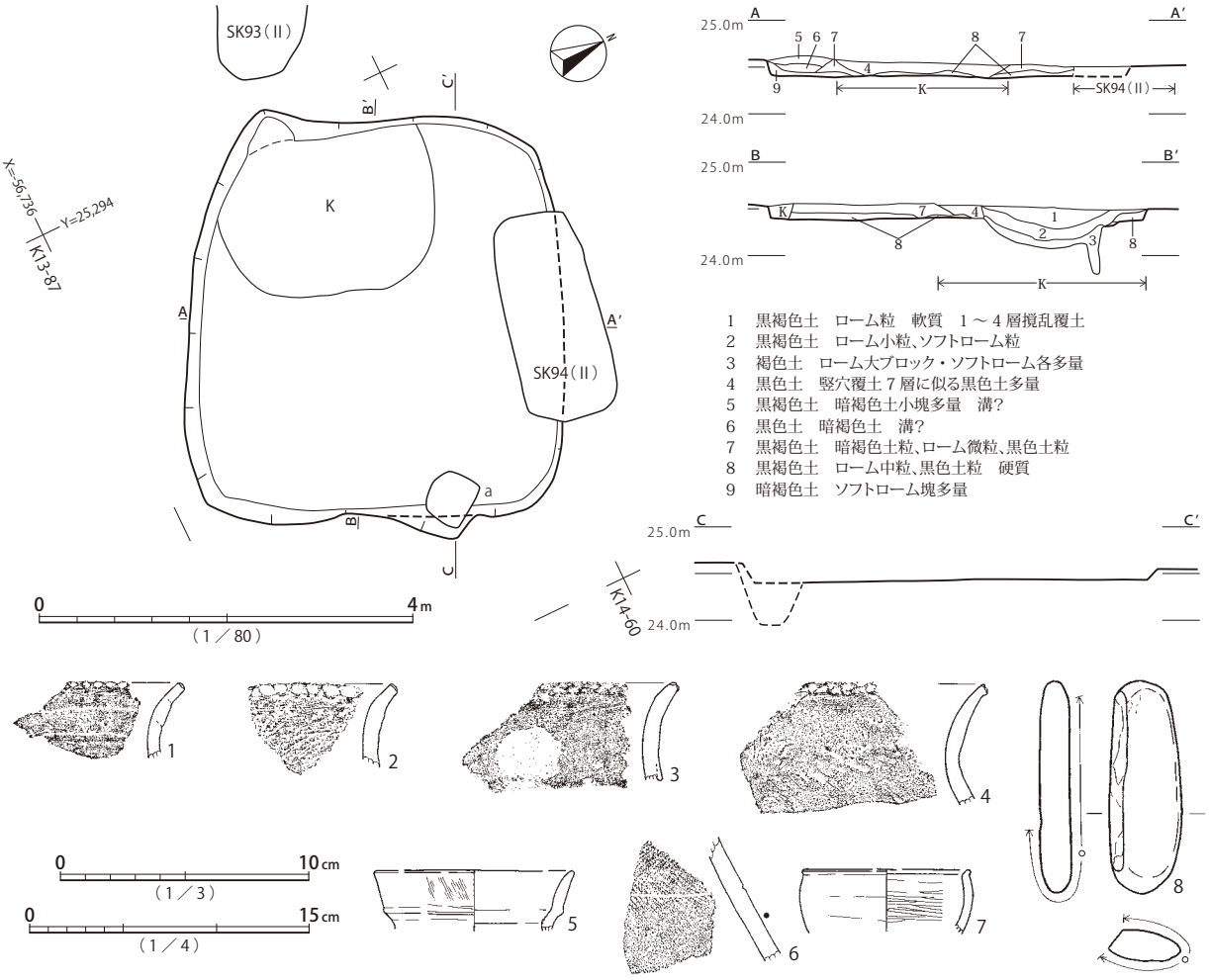
SI1130（第 421 図、図版 80・172・249・250・316・339）

2.9 × 3.0m、深さ 40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。主柱穴は認められず、明確な床面施設としては、貯蔵穴と見られるaが検出されている。

覆土は、焼土が南東部床面で検出されており、廃絶時に火を受けた可能性がある。最下層にロームブロックを多く含む層があり、上位に黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、下層から上層にわたって、少量の土器と石製品が出土している。在来的な甕1・3、壺4、縄文施文の壺5・6は、弥生時代後期土器型式の範疇にある。底部輪台技法の小型鉢9、口縁端部に内傾面を持つ内弯杯部の高杯10、4方配置の円形透孔を持つ高杯11、2孔1対で4方配置の円形透孔を持つ高杯12等は、弥生時代終末期前半、中台1−1式に位置づけられる。高杯10は破片の一部が最下層で検出されており、遺構の機能時期を示唆する。その他、流紋岩製砥石14、溶結凝灰岩製

SI1129



第420図　SI1129遺構・遺物

礫石器15が出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

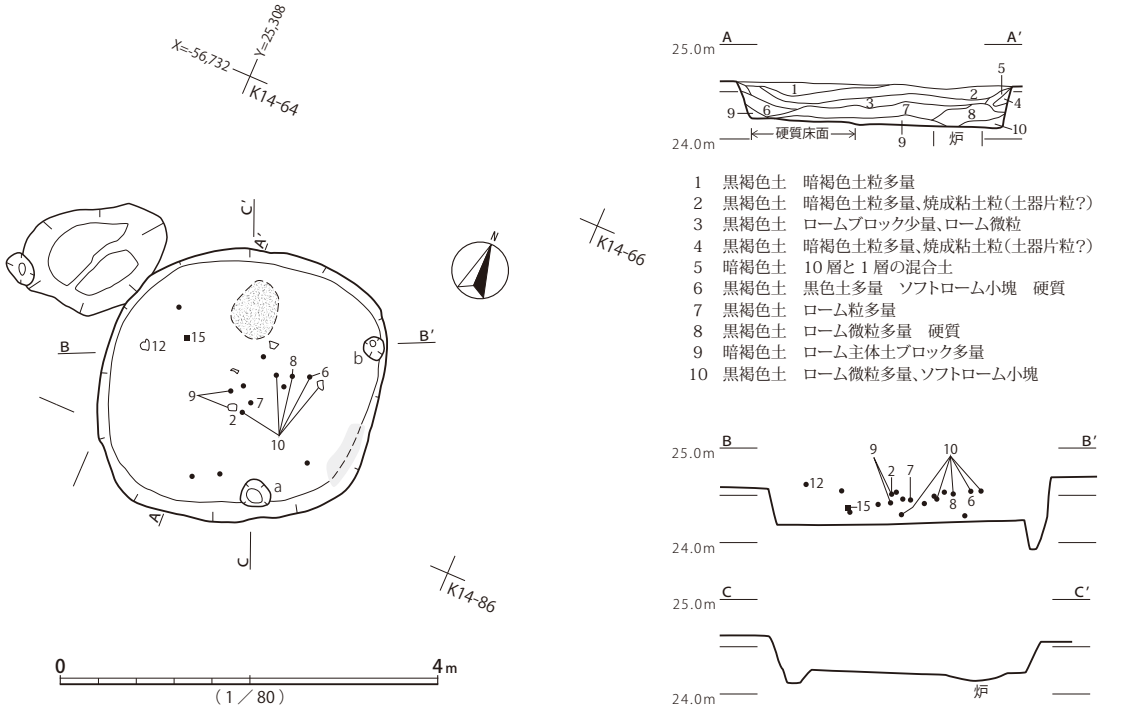
SI1131（第422図、図版80・250）

3.0m以上×2.2m以上、深さ20cm程度の方楕円形と推定される竪穴建物跡である。古墳時代終末期の前方後方墳SM1009後方部内に位置し、周溝に北側の大部分が破壊されている。イモ穴により床面まで撹乱を受けている。周溝外部に本遺構覆土は検出されていないため、4.5×4.0m程度の規模と推定できる。主柱穴等は検出されず、欠失部に炉が存在したと見込まれる。

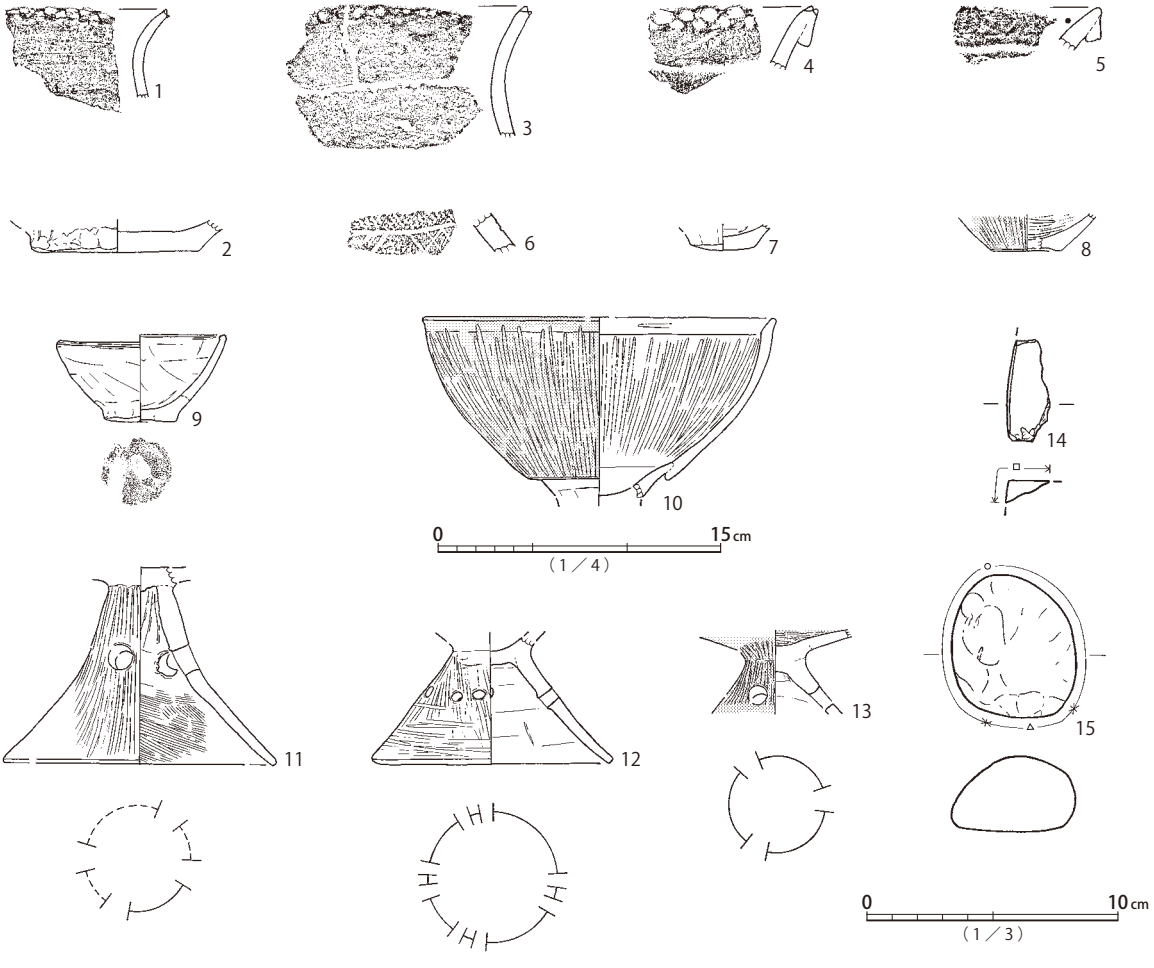
覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。壁近くに炭化材の検出が見られ、廃絶時に火を受けた可能性がある。

遺物は、交互押捺口縁の甕1が出土するのみである。弥生時代後期から弥生時代終末期に位置づけられ、本遺構の構築時期を示唆する。

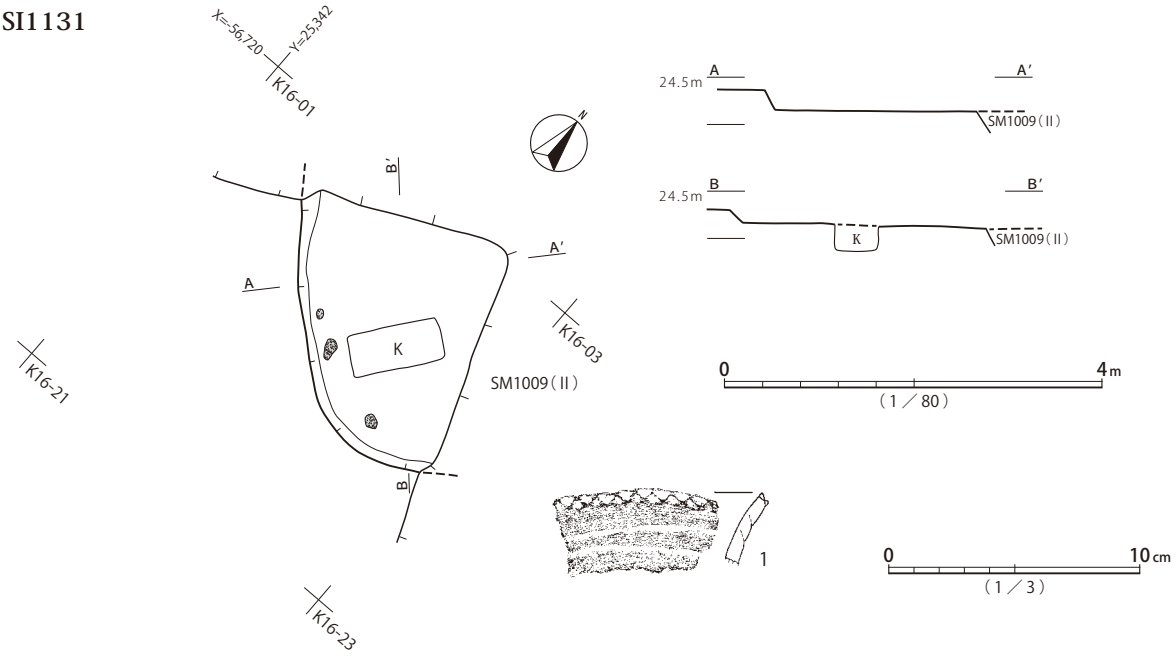
SI1130



1　黒褐色土　暗褐色土粒多量
2　黒褐色土　暗褐色土粒多量、焼成粘土粒（土器片粒?）
3　黒褐色土　ロームブロック少量、ローム微粒
4　黒褐色土　暗褐色土粒多量、焼成粘土粒（土器片粒?）
5　暗褐色土　10層と1層の混合土
6　黒褐色土　黒色土多量　ソフトローム小塊　硬質
7　黒褐色土　ローム粒多量
8　黒褐色土　ローム微粒多量　硬質
9　暗褐色土　ローム主体土ブロック多量
10　黒褐色土　ローム微粒多量、ソフトローム小塊



第421図　SI1130遺構・遺物



第422図　SI1131遺構・遺物

SI1132（第 423 図、図版 80・250）

4.3？×5.3？m、深さ25cm程度の楕円形竪穴建物跡である。東半が、古墳時代終末期前方後方墳SM1009周溝と重複し、欠失している。主柱穴は見られず、貯蔵穴aのみが検出されている。炉は中心から東寄りの位置に設けられるが、大部分が破壊されている。

覆土は、壁際の初期堆積と最下層にロームが目立つものの、概ね黒褐色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、少量の土器が出土している。床面上から外面肥厚口縁の壺4、貯蔵穴内から交互押捺口縁甕1・甕下部2、上層から輪台技法の底部3が検出されている。壺4は無文ながら、頸部屈曲が緩やかで、弥生時代終末期前半、中台1−1式に位置づけられる。

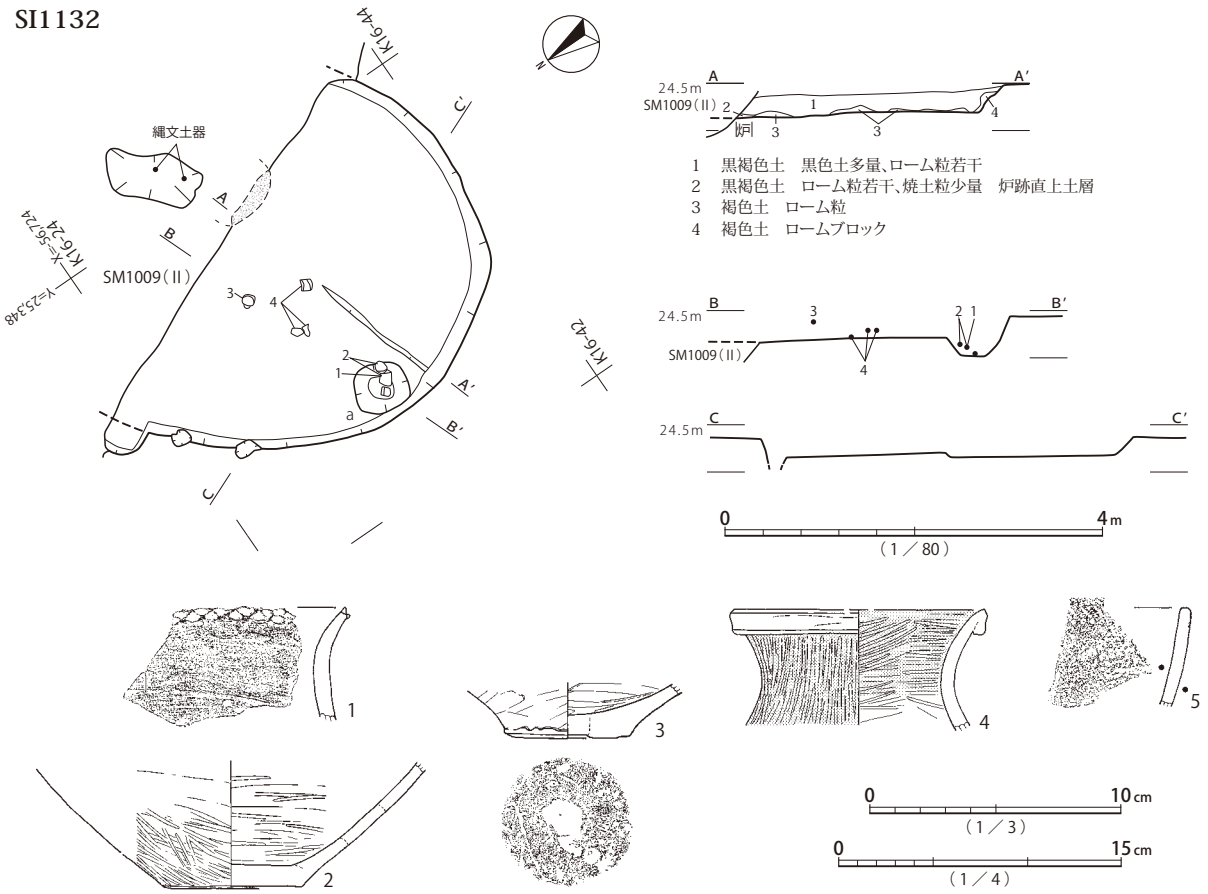
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

SI1133（第 424 図、図版 80・250・299・339）

6.2×5.4m、深さ60cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。中央部には古墳時代終末期前方後方墳SM1009後方部東側周溝が東西に横切り、床面まで切り込まれている。主柱穴a〜d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。貯蔵穴fの竪穴中心側床面には、高さ2cm前後の弧状の高まりが検出されている。a・b間ラインと中心軸の交差する位置に楕円形の炉が設けられる。床面周溝は認められない。

覆土は、壁際の初期堆積にロームを多く含む層が見られる他は、黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。焼土・炭化材は検出されていない。

遺物は、すべて覆土一括取り上げ資料で、少量の土器等が出土している。在来的な、押捺段部の甕1・2、焼成後穿孔の底部片3、結節文区画の壺4、斜行帯による文様の壺5があり、概ね弥生時代後期後半、山田橋式の範疇である。その他、混入品の可能性のある管状土錘7が出土している。



第423図　SI1132遺構・遺物

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半の所産と推定される。

SI1134（第 425 図、図版 80・250）

3.5 × 3.4m、深さ 40cm程度の円形竪穴建物跡である。古墳時代終末期前方後方墳SM1009墳丘内に位置する。南辺が弥生時代終末期のSI1135と重複し、切り込まれている。主柱穴は見られず、床面には貯蔵穴aが検出されるのみである。北西に寄った位置に不整長楕円形の炉が設けられる。

覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明である。焼土・炭化材は検出されていない。

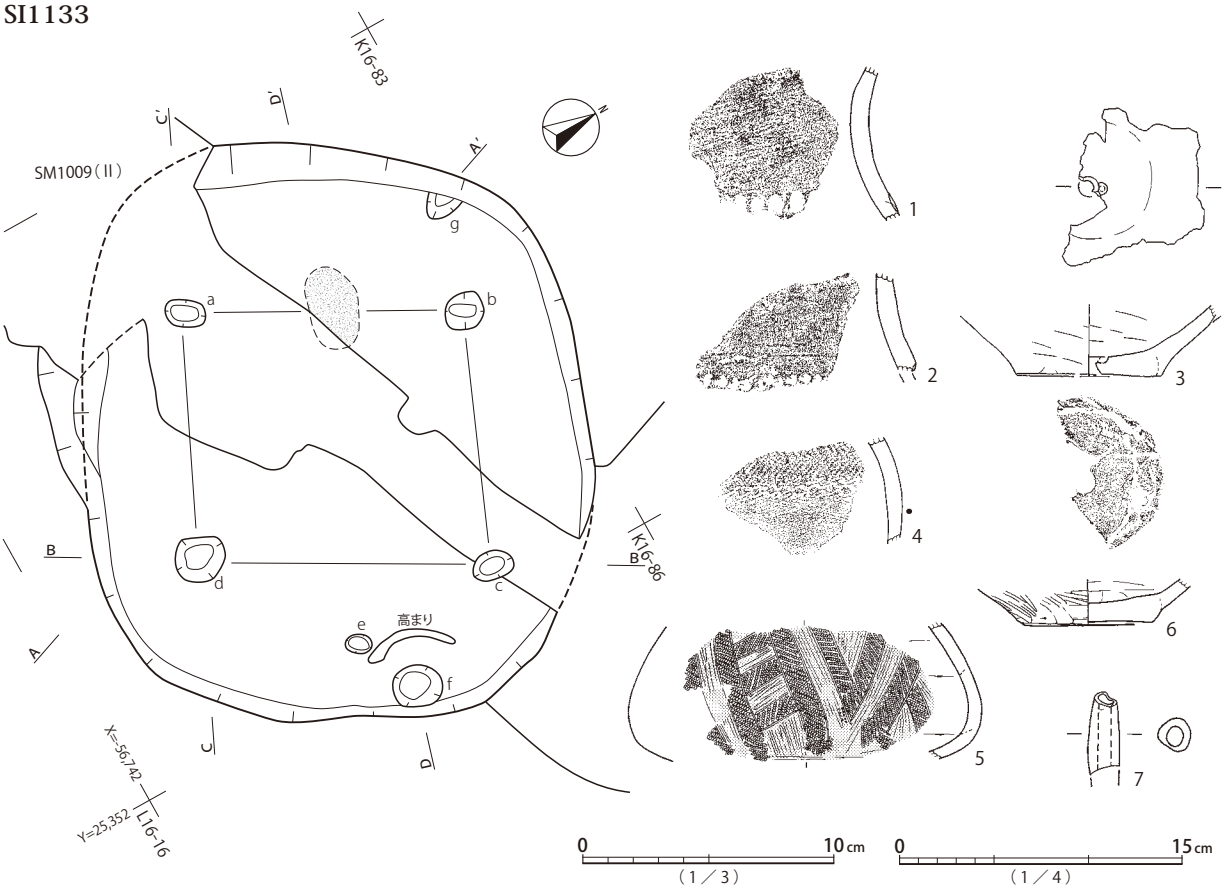
遺物は、少量の土器片が出土している。床面近くから出土したのは、在来的な甕1で、古式土師器の輪台技法の底部2、壺頸部片3はSM1009盛土に伴う可能性が高い。

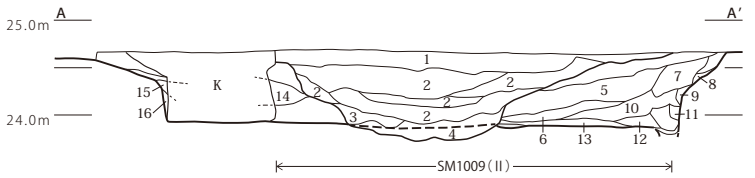
本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期から弥生時代終末期前半に位置づけられると思われる。

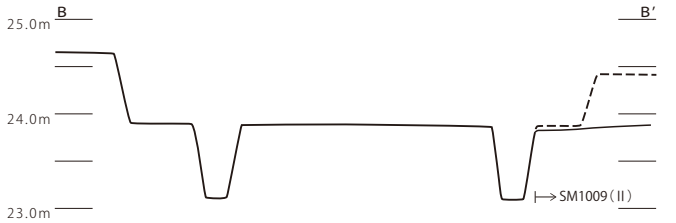
SI1135（第 426・427 図、図版 81・172・250・316）

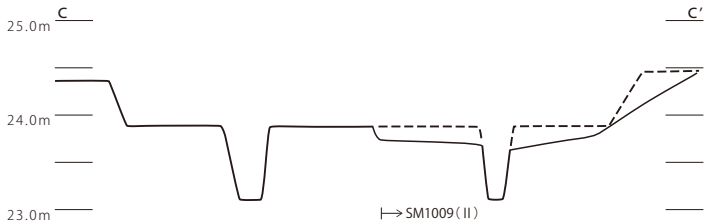
5.0 × 4.8m、深さ 30cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。北東角が、弥生時代後期から同終末期前半に位置づけられるSI1134南辺と重複し、本遺構が切り込んでいる。主柱穴a ～ dが検出されている。中心に位置するeは上層からの掘り込みと見られる。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に不整楕円形の炉が設けられる。床面はSI1134より高い位置に形成されている。

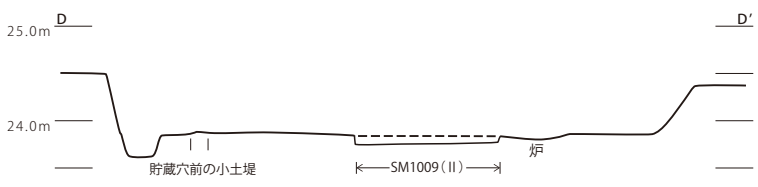
SI1133









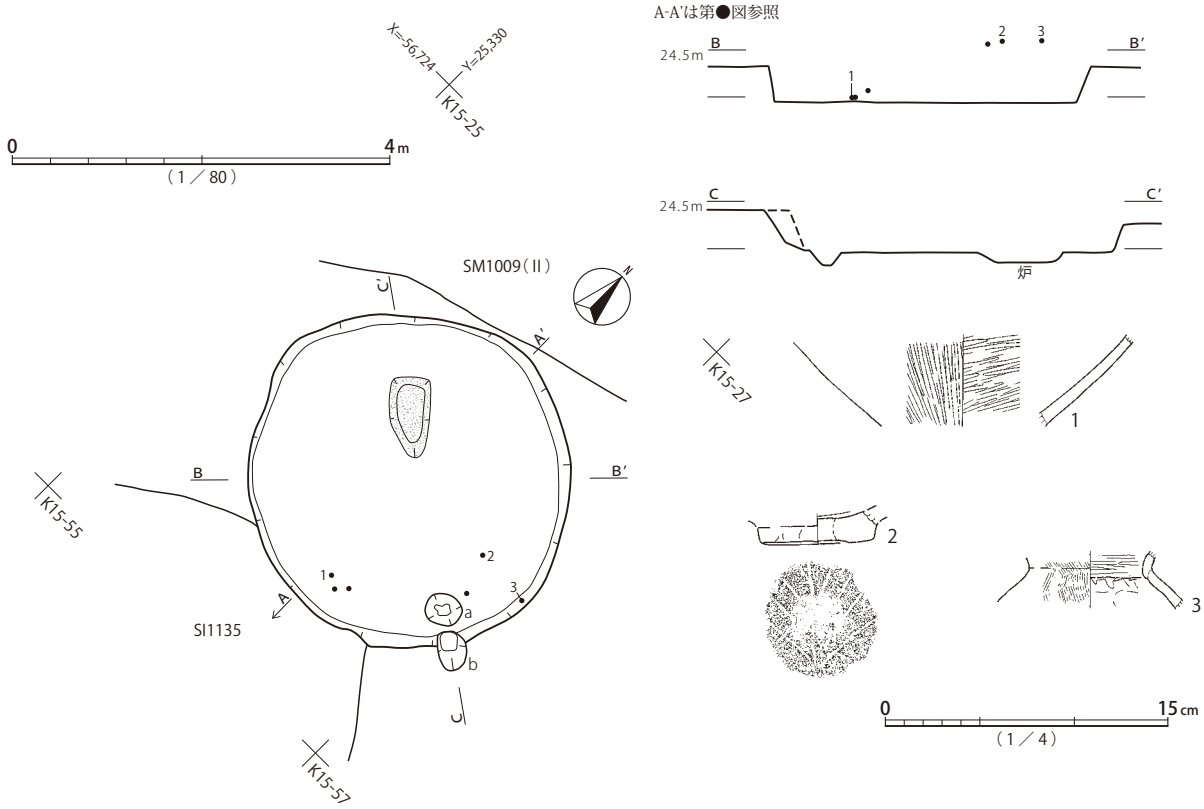


1　黒褐色土　ローム粒含む　やや硬く締まる
　1～4層 SM1009 覆土
2　黒褐色土　有機質土・ローム粒等はほとんど含まない
3　暗褐色土　有機質土中にローム粒・
　ロームブロックまばら含む
4　黄褐色土　ローム粒・ロームブロック主体
5　黒褐色土
6　暗褐色土　ローム粒、ロームブロック
7　黒褐色土
8　暗黄褐色土
9　黄褐色土
10　黒色土
11　暗褐色土　ローム粒
12　褐色土　ローム粒
13　黒色土
14　褐色土　ローム粒
15　暗黄褐色土
16　黄褐色土　ローム粒

0　4m
（1／80）

第424図　SI1133遺構・遺物

SI1134



第425図　SI1134遺構・遺物

覆土は、焼土・炭化材の集中は検出されておらず、下層にロームを多く含む層が見られる他は、概ね黒褐色土を主体とする漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、床面近くから上層にかけて、土器・石製品が出土している。段部のある甕1、結節文区画の壺8、素口縁小型鉢14、炉器台16が床面近くで出土している。弥生時代後期後半から同終末期前半の範疇と思われる。くの字状口縁ハケメ調整甕3、底部11は、竪穴覆土より高い位置から検出されており、SM1009盛土に伴う混入品の可能性が高い。その他、軽石製砥石17、菫青石ホルンフェルス製砥石18が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から同終末期前半の所産と推定される。

SI1136（第428図、図版81・250・316）

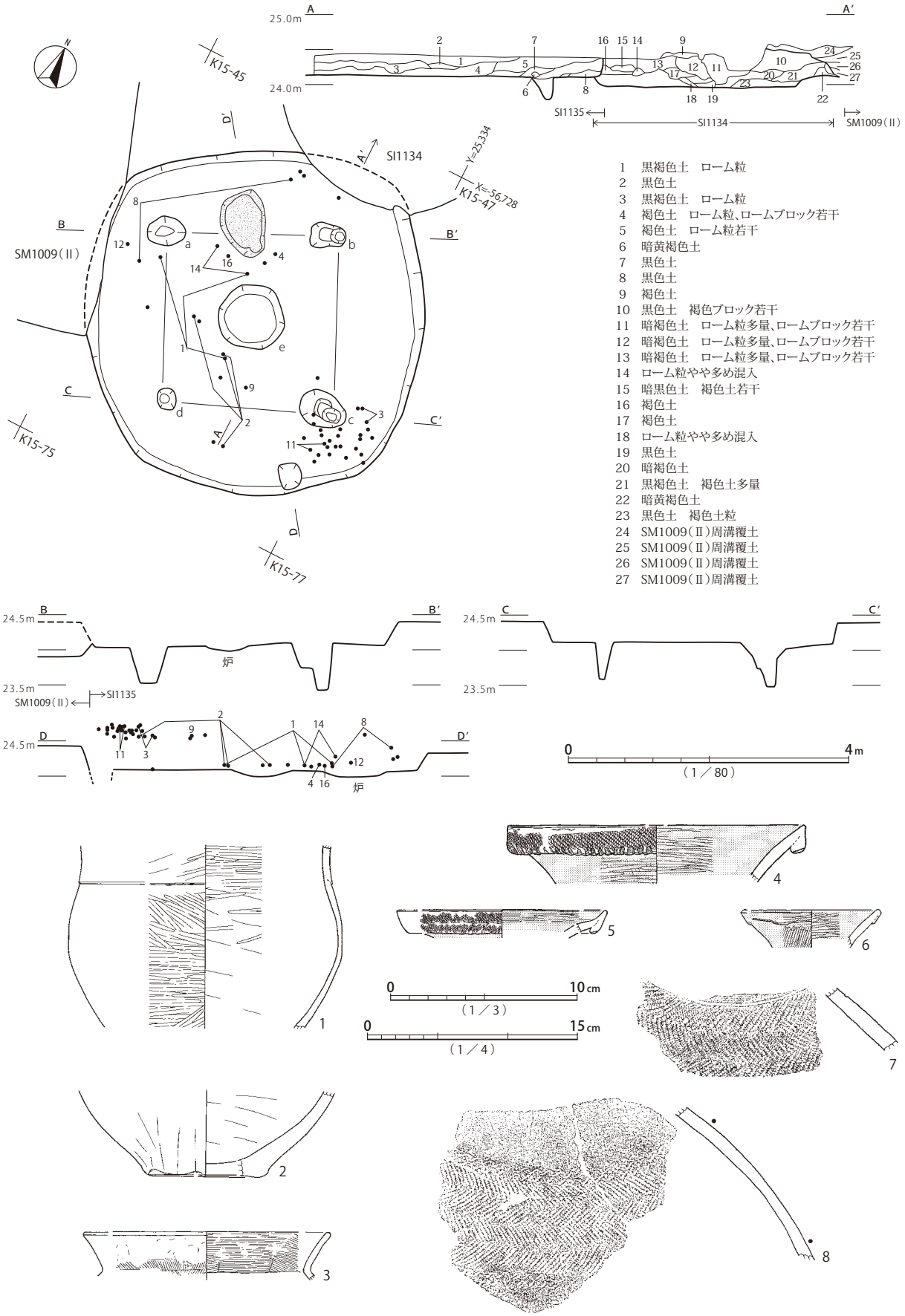
2.9×2.7m、深さ40cm程度の方楕円形竪穴建物跡である。弥生時代終末期、中台2式期の方形墓SS12の方台部内に位置する。南西角から中心にかけて、イモ穴により床面まで撹乱を受ける。

覆土に焼土・炭化材は検出されず、黒褐色土から黒色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

遺物は、ごく少量の土器と石製品が出土している。在来的な、ナデ仕上げの甕1と、縄文施文される外面肥厚口縁の椀2は、弥生時代後期から弥生時代終末期に位置づけられる。その他、輝緑凝灰岩製砥石3が出土している。

本遺構は、平面形及び切り合い関係と出土遺物の様相から、弥生時代後期後半から弥生時代終末

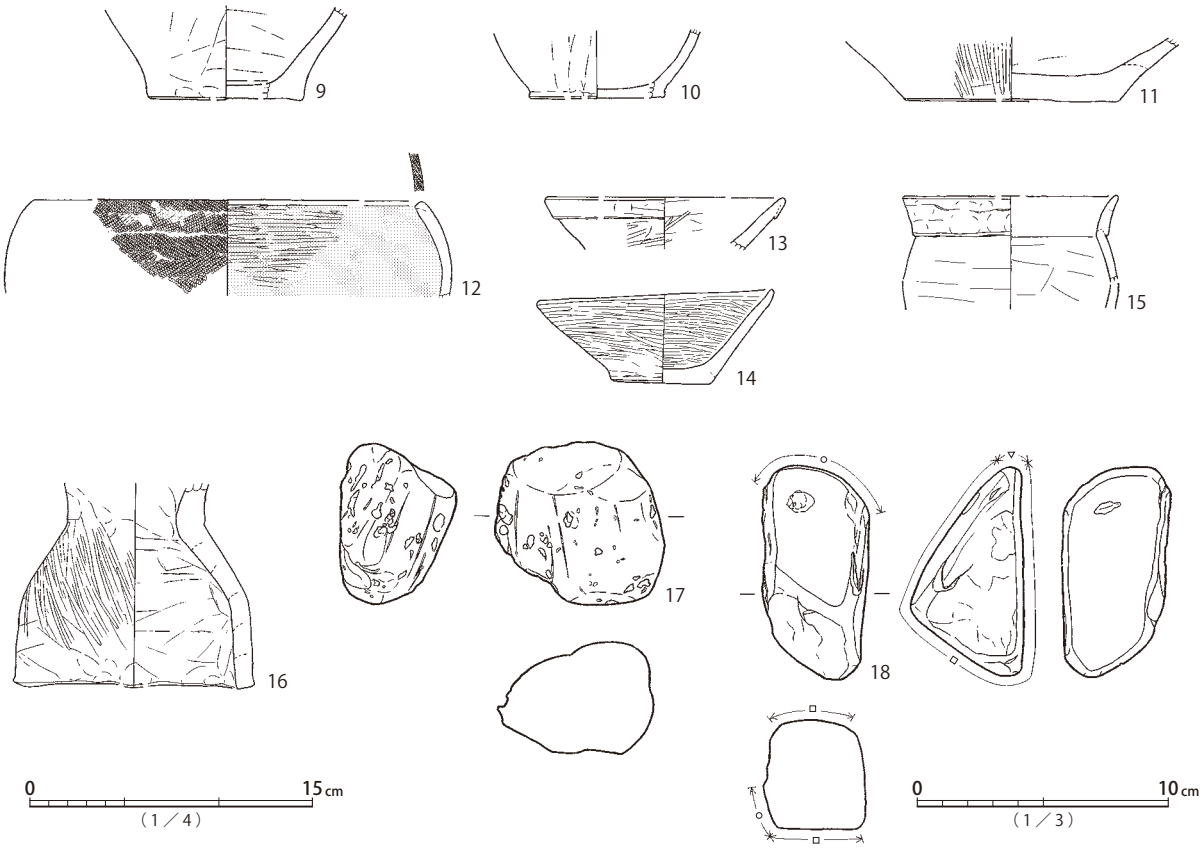
SI1135



1　黒褐色土　ローム粒
2　黒色土
3　黒褐色土　ローム粒
4　褐色土　ローム粒、ロームブロック若干
5　褐色土　ローム粒若干
6　暗黄褐色土
7　黒色土
8　黒色土
9　褐色土
10　黒色土　褐色ブロック若干
11　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック若干
12　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック若干
13　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック若干
14　ローム粒やや多め混入
15　暗黒色土　褐色土若干
16　褐色土
17　褐色土
18　ローム粒やや多め混入
19　黒色土
20　暗褐色土
21　黒褐色土　褐色土多量
22　暗黄褐色土
23　黒色土　褐色土粒
24　SM1009(Ⅱ)周溝覆土
25　SM1009(Ⅱ)周溝覆土
26　SM1009(Ⅱ)周溝覆土
27　SM1009(Ⅱ)周溝覆土

第426図　SI1135遺構、SI1135遺物(1)

SI1135



第427図　SI1135遺物（2）

期前半の所産と推定される。

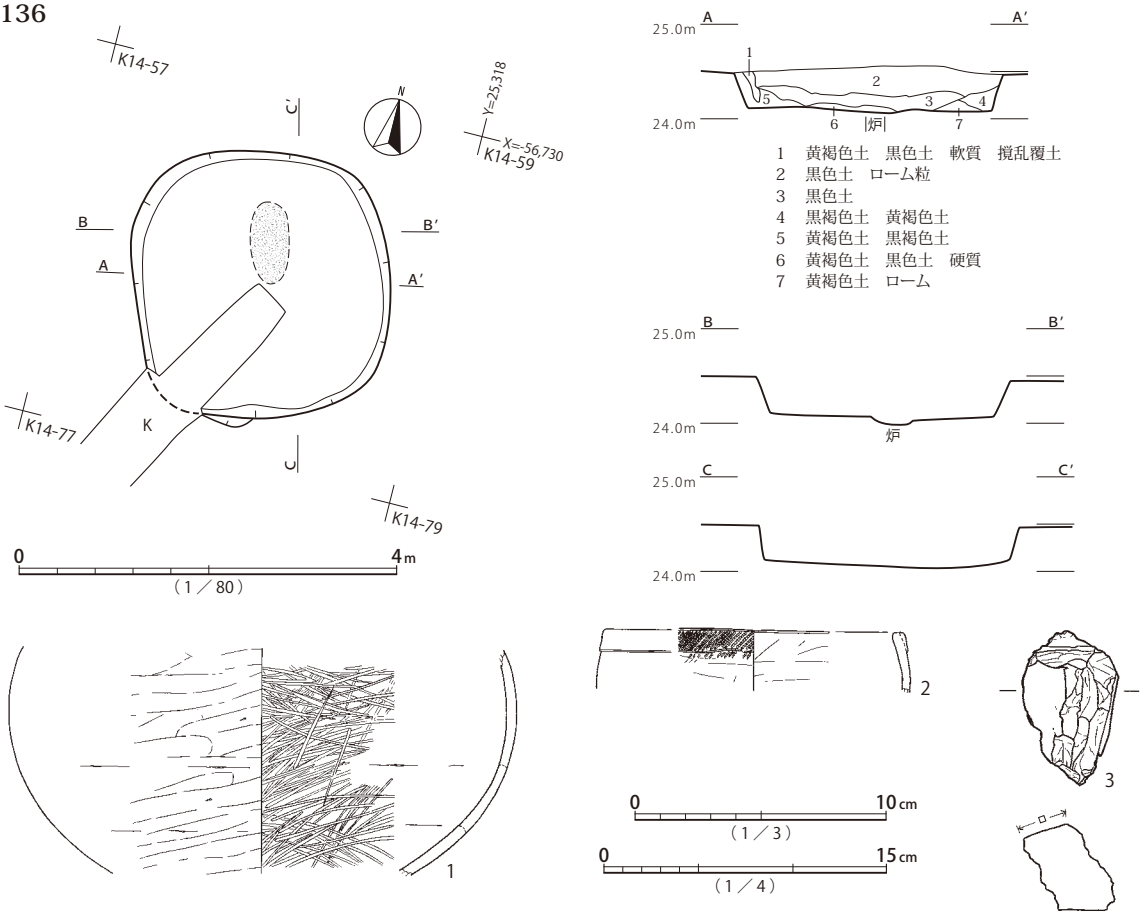
SI1137（第 429・430 図、図版 81・251・316・317・339）

4.8 × 4.0m、深さ 40cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。南側が、古墳時代終末期方形墳墓SM1047北側周溝と重複し、床面まで切り込まれる。主柱穴a ～ d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。cは底面が上端からずれた位置にあり、壁面が明確にオーバーハングする。中心軸上、a・b間ラインと交差する位置に円形の炉が設けられる。床面周溝状の落ち込みが、東西壁際に認められる。

覆土は、比較的広い範囲の焼土・炭化物集中部が北半部床面に検出され、廃絶過程で火を受けた様相を示す。下層以上は、黒褐色土を主体とする漸移的なレンズ状の堆積状況が看取できる。

遺物は、床面近くから下層にかけて土器・石製品が出土している。炉内から交互押捺口縁の甕3、床面から縄文施文の椀16、下層から結節文区画の壺10が出土している。山形文の壺9は頸部が細く、沈線区画文様帯が施され、久ヶ原2式新段階の特徴を示す。壺10は結節文区画を持ち山田橋1式の特徴を示すが、石英・角閃石・軽石等を大量に含む特徴的な胎土であり、古相の資料と思われる。土器群は、概ね弥生時代後期中葉の範疇と思われる。その他、軽石19、軽石製砥石20、砂岩製砥石21・22が出土している。なお、取り上げ番号を持つ遺物注記にはアルファベットと数字の2系統があり、前者のみ位置記録が判明している。数字注記の破片については、対応図面記録は確認できな

SI1136



第428図　SI1136遺構・遺物

いものの、アルファベット注記の遺物と同一個体の可能性が高い破片を認められるため、本遺構出土資料として扱う。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期中葉の所産と推定される。

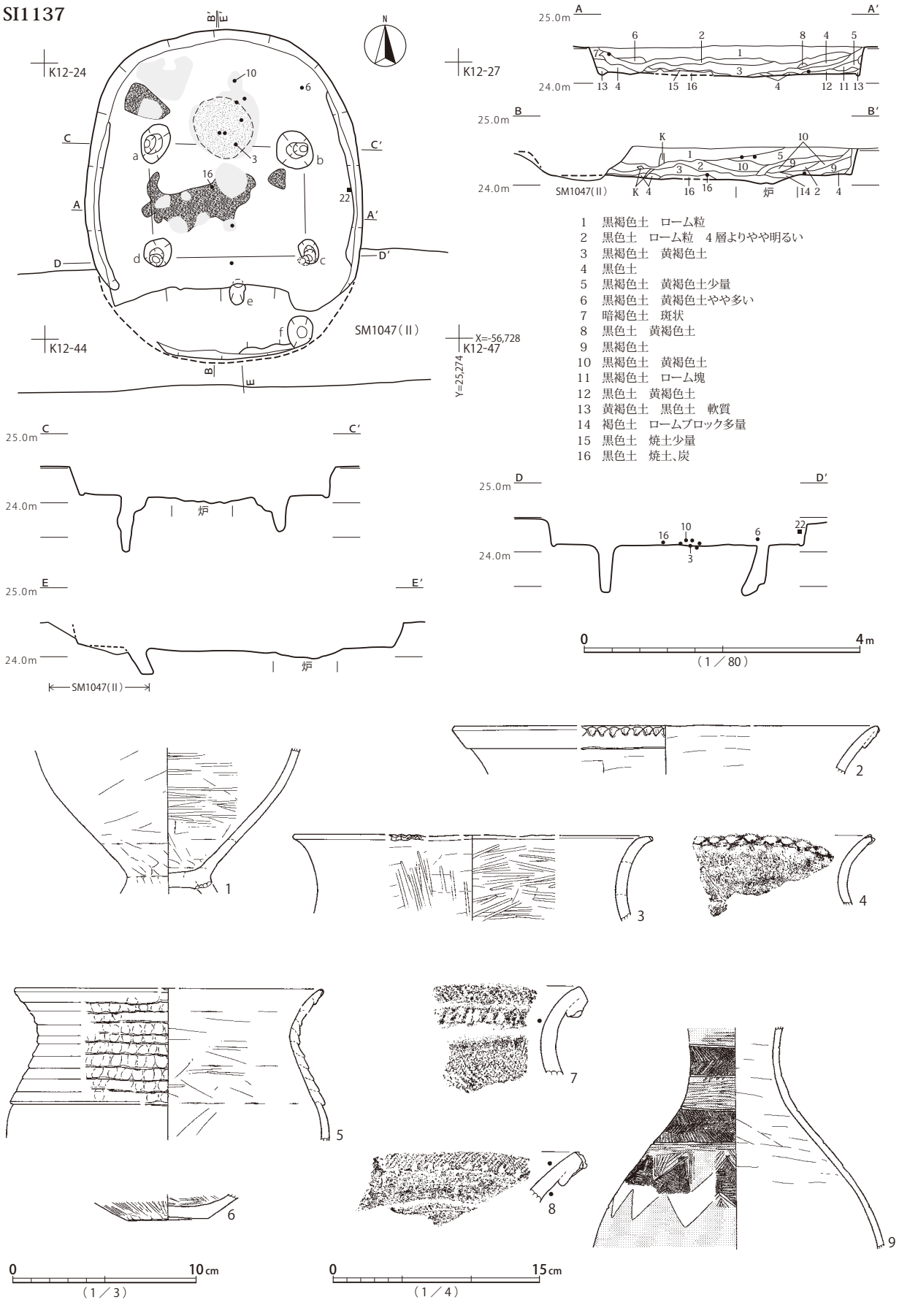
SI1138（第 431 図、図版 81・251・317）

3.4×3.4m、深さ40cm程度の隅円方形竪穴建物跡である。主柱穴は見られず、ハシゴ穴aが検出されるのみである。中心軸上、北東寄りの位置に不整長楕円形の炉が設けられる。

覆土は、北西辺に焼土が検出されており、廃絶時に火を受けた可能性が高い。壁際と床面直上の初期堆積にローム主体土が見られるが、上位には黒色土主体の漸移的な堆積状況が認められる。

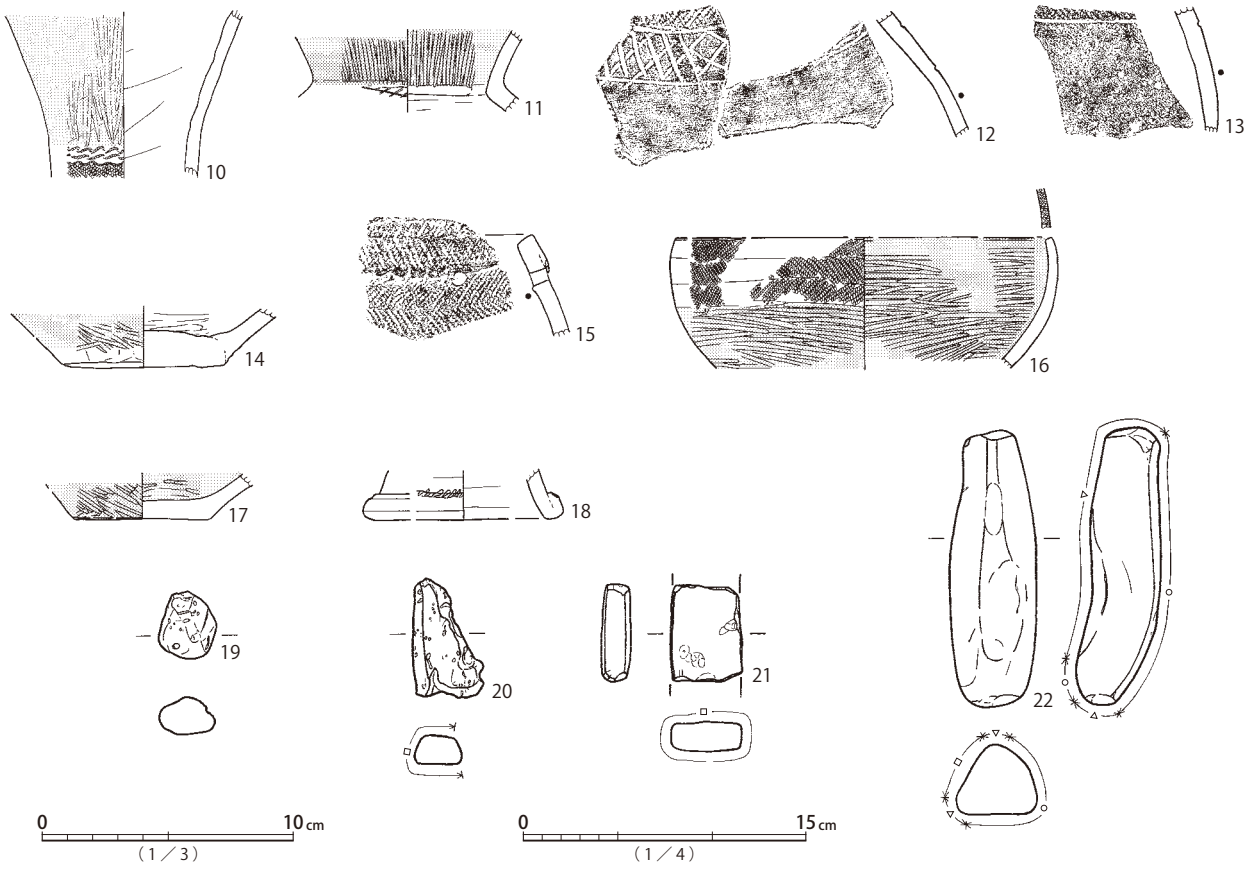
遺物は、床面近くに少量の土器・石製品が出土している。出土位置が明確なのは、壺底部5、鉢6で、他は覆土一括取り上げ資料である。鉢6の装飾は丸棒状工具による連続刺突文であり、弥生時代終末期、中台式に位置づけられる可能性がある。在来的な、段部押捺のある甕1、山形文の壺2、円孔のある受口状外面肥厚口縁の壺3のほか、内弯気味の直口壺4が出土している。その他、軽石7が下層から出土している。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期から同終末期の所産と推定される。



第429図　SI1137遺構、SI1137遺物(1)

SI1137



第430図　SI1137遺物（2）

SI1139（第 432 図、図版 3・4）

2.8 × 2.9m、深さ 10cm程度の方形竪穴建物跡である。古代方形墳墓SM1150西側周溝が南北に横切り、床面下まで掘り込んでいる。南西側には、弥生時代後期から終末期と推定されるSI1026が同時存在不能な距離で近接する。主柱穴等は検出されていない。炉も見られないが、SM1150との重複部に存在した可能性も否定できない。

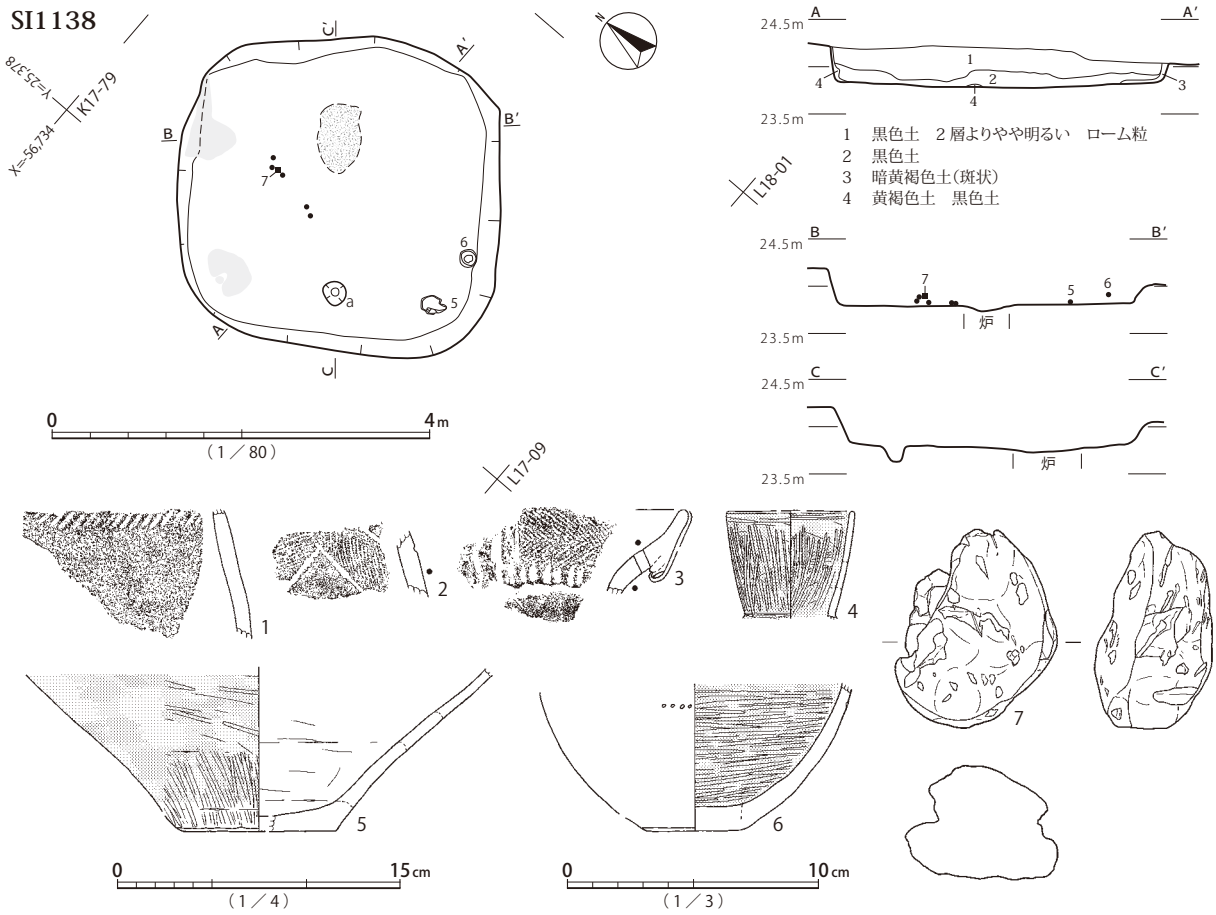
覆土は、土層断面記録が無く詳細は不明だが、焼土・炭化材の平面分布の記録もないため、漸移的な堆積だった可能性がある。出土遺物は、まったく伴わない。

本遺構は、積極的根拠には乏しいが、平面形に基づき、弥生時代終末期から古墳時代前期前半の所産と推定される。

SI1140（第 433 図、図版 81・172）

6.1 × 5.0m、深さ 50cm程度の長方楕円形竪穴建物跡である。古代方形墳墓SM1072西側周溝と重複し、床面まで掘り込みを受けている。明確な主柱穴は見られず、貯蔵穴aが検出される程度である。中心軸上、北西寄りに楕円形と推定される炉が設けられるが、SM1072により大部分が破壊されている。

覆土は、炉覆土を除き焼土集中部は見られず、炭化材も検出されていない。壁際と床面直上の初期堆積にローム主体土が見られる他は、黒褐色土から黒色土を主体とする漸移的な堆積状況が認め

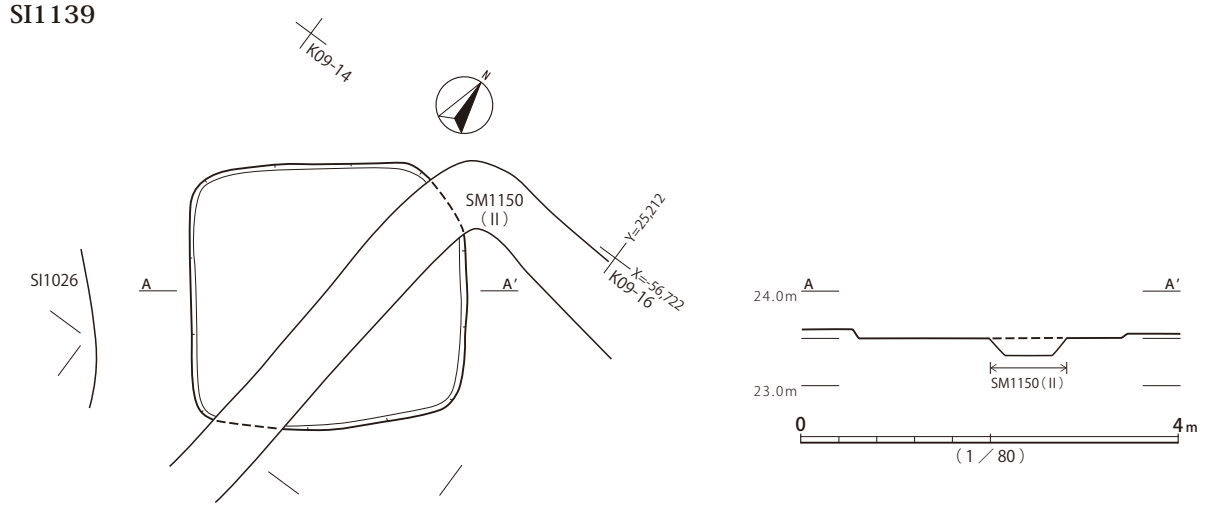


第431図　SI1138遺構・遺物

られる。

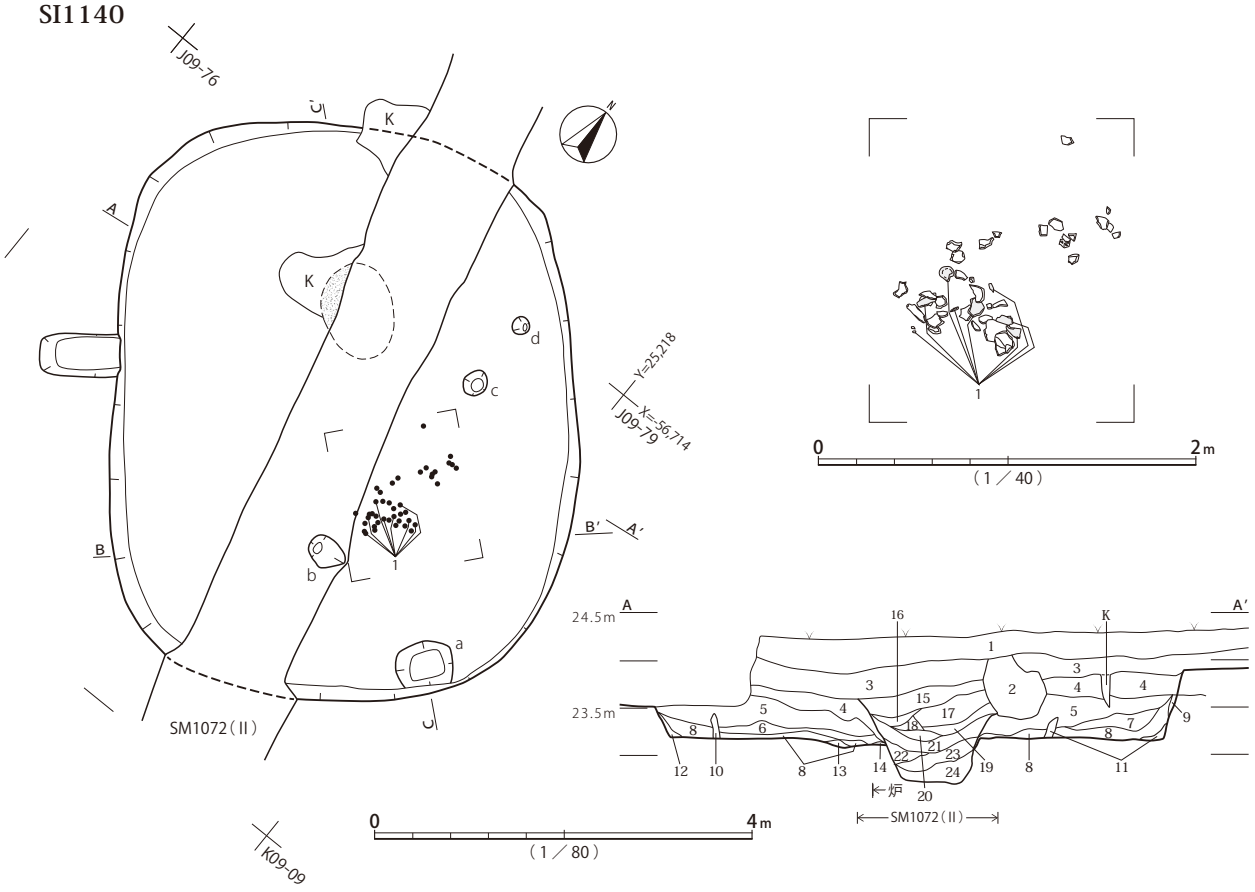
遺物は、床面から10cm弱高い位置にレンズ状堆積に沿う形で、弥生土器の甕1として復元された土器を含む破片群が検出されている。輪積痕甕1は弥生時代後期前半、久ヶ原2式に位置づけられる。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代後期前半の所産と考えられる。

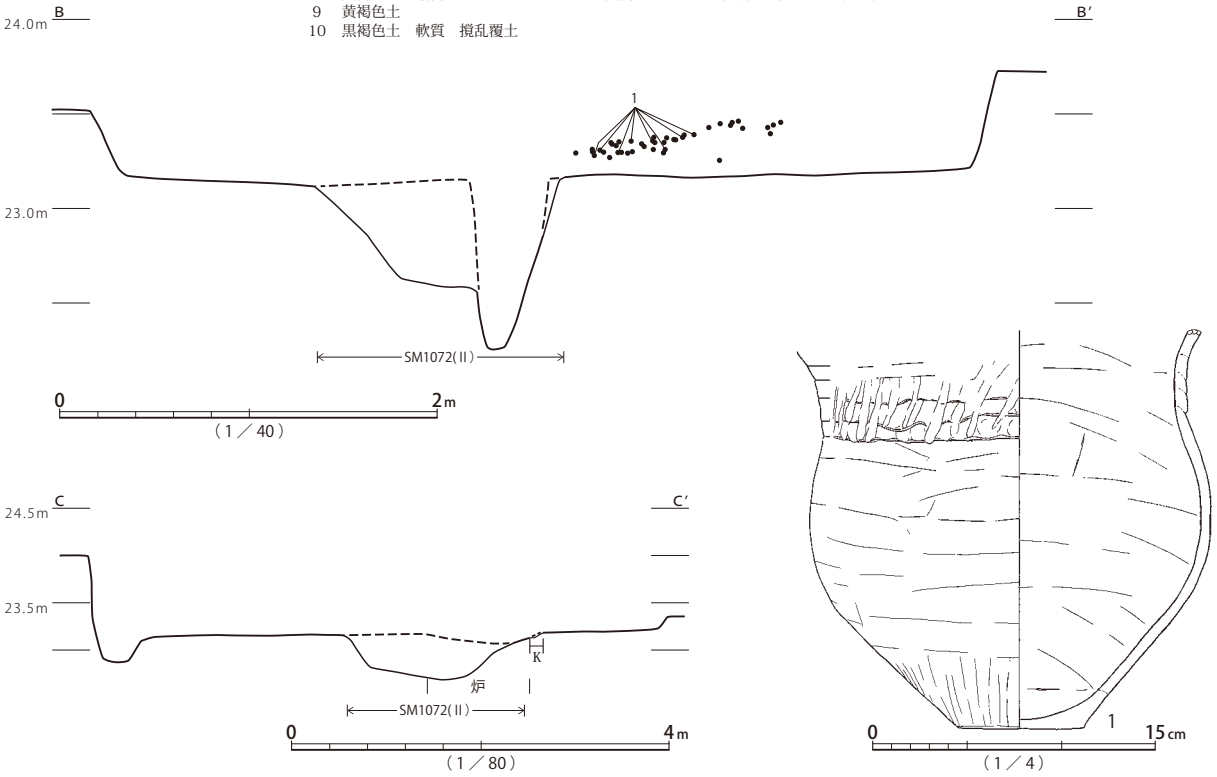


第432図　SI1139遺構

SI1140

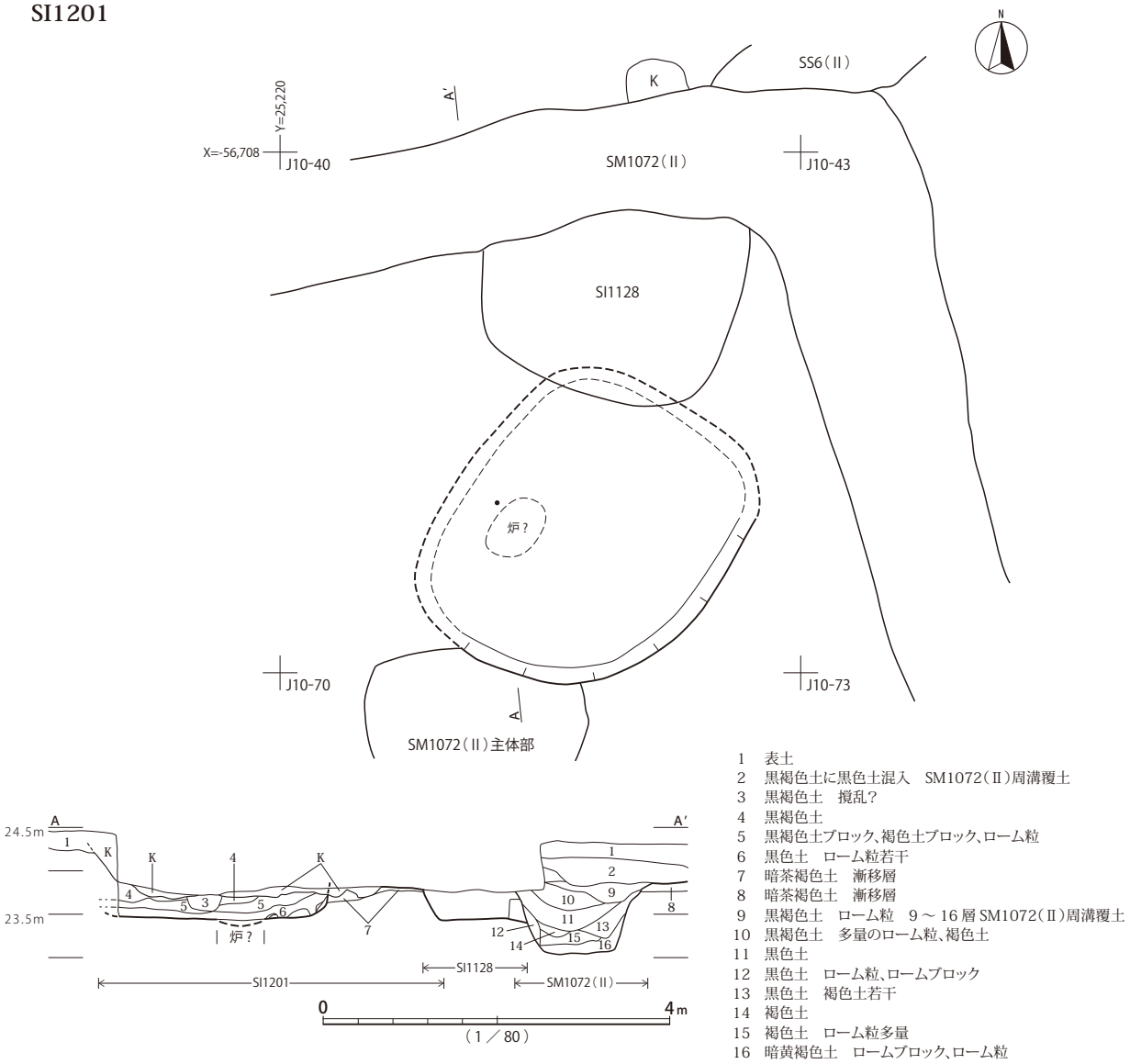


1 表土
2 黒色土 非常に軟質 撹乱覆土
3 黒色土 4層より軟質
4 黒色土
5 黒色土 ローム粒
6 黒色土
7 黒褐色土
8 黒褐色土 暗褐色土
9 黄褐色土
10 黒褐色土 軟質 撹乱覆土
11 黄褐色土 黒色土
12 黄褐色土 黒色土少量
13 黄褐色土 斑状
14 黄褐色土 焼土
15 黒色土 ローム粒少量
15～24層 SM1072(II)周溝覆土
16 黒色土
17 黒褐色土 ローム粒、下の方がローム混入少
18 黒色土 ローム粒
19 黒褐色土 ローム粒、下の方がローム混入少
20 黒色土
21 漆黒色土 ローム粒
22 漆黒色土
23 黒色土 ロームブロック
24 黄褐色土 黒色土



第433図 SI1140遺構・遺物

SI1201



第434図 SI1201遺構

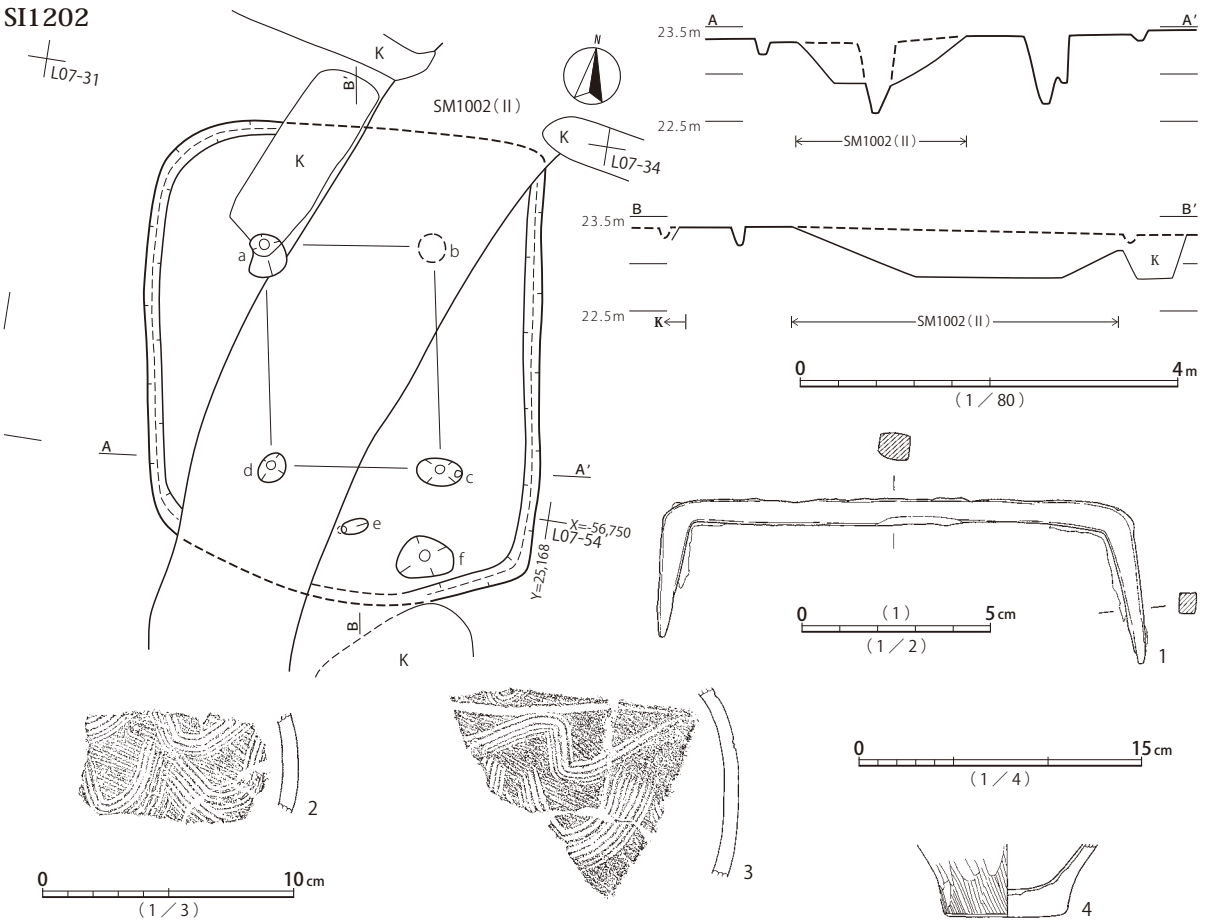
SI1201(第 434 図、図版 3・4)

3.8？×3.2？m、深さ30cm程度の不整方楕円形竪穴建物跡である。古代方形墳墓SM1072方台部内に位置する。北東辺が弥生時代終末期のSI1128と重複するが、切り合い関係を示す記録はない。主柱穴は見られず、炉と見られる被熱部が検出されている。

覆土は、黒褐色土主体で焼土・炭化材の集中は検出されていない。

本遺構に伴う遺物は確認できない。

本遺構は、積極的根拠には乏しいが、周辺遺構の検出状況と平面形を勘案すると、縄文時代もしくは、弥生時代後期に帰属する可能性が考えられる。縄文時代遺構とすると、推定される規模・形態が報告書I所載の22号住居跡と類似するため、縄文時代前期、関山式期の所産である可能性が推定される。



第435図　SI1202遺構・遺物

SI1202（第 435 図、図版 3・4・251・327）

5.1 × 4.2m、深さ数cmの不整隅円長方形竪穴建物跡である。南東角が鈍角をなし、南辺が曲線的に張り出す、弥生時代中期後半のSI1122と近似する平面形だったと推定される。イモ穴により撹乱を受けるほか、古墳時代終末期の前方後円墳SM1002周溝と重複し、床面まで破壊を受けている。重複部の他も、ほぼ床面まで削平を受けており、全体的に遺存状況は不良である。主柱穴a・c・d、ハシゴ穴e、貯蔵穴fが検出されている。炉はa・b間ライン近くに設けられていたが、SM1002周溝に破壊されたものと見られる。柱穴bについても同様と思われる。遺存部には床面周溝が検出されており、本来は全周したものと見られる。ハシゴ穴eが主柱穴c・dラインに近い点は、SI1122と似る。

覆土は、調査時点においてすでに失われており、不明である。

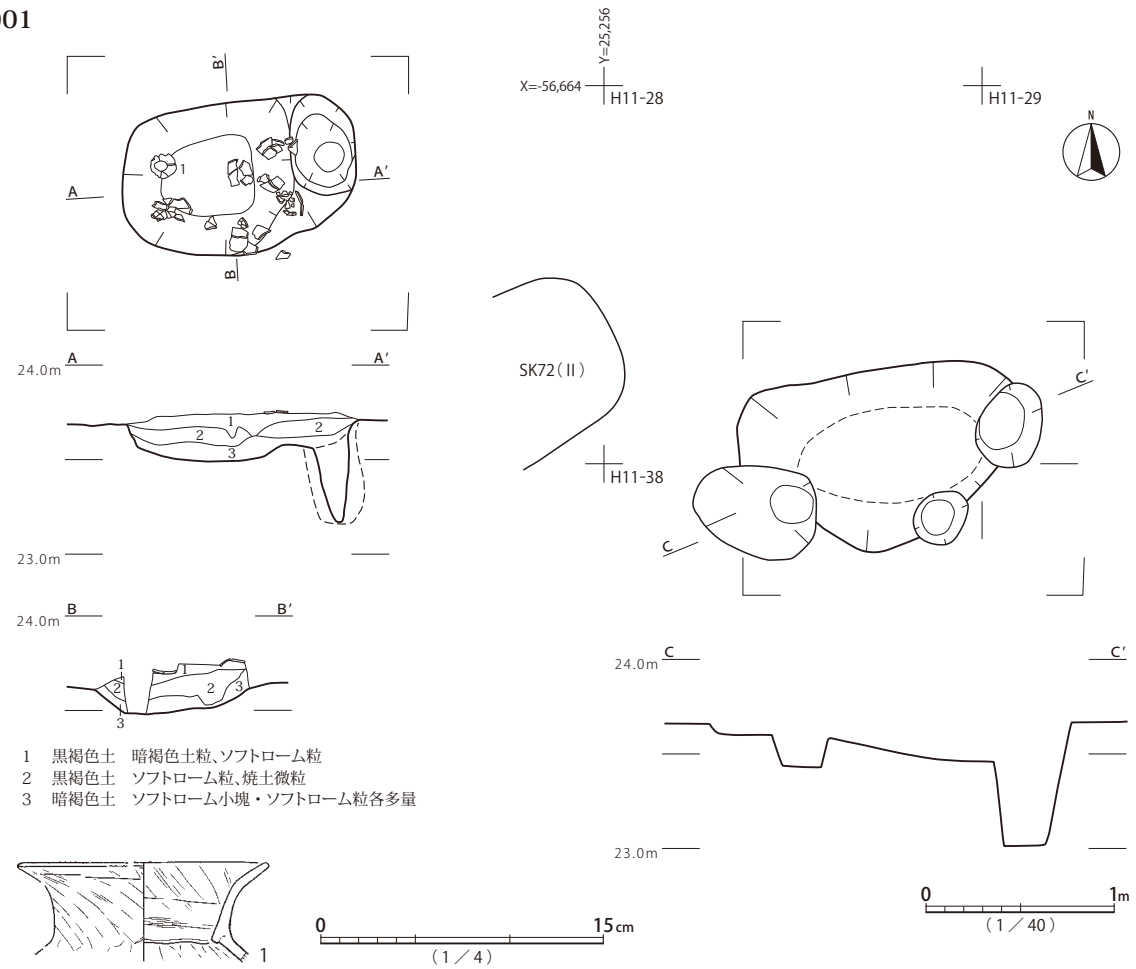
遺物は、ごく少量の土器が出土している。ハケメ調整で櫛描文の施される壺2・3、ハケメ仕上げの底部4は、いずれも弥生時代中期後半、宮ノ台式に位置づけられる。鉄製鏃1は混入品である。

本遺構は、平面形と出土遺物の様相から、弥生時代中期後半の所産と推定される。

SK1001（第 436 図、図版 82・252）

SI1051の西側約2m、SK72の東側に位置する隅円方形土坑である。長軸1.9m、短軸1.0m、深さ20cm程度の規模で、長軸両端に円形の穴が伴う。東側の穴は中央部底面から40cm以上、深い。

覆土は、黒褐色土主体で、焼土集中部・被熱面は見られず、炉や炉穴ではないと見込まれる。覆



第436図　SK1001遺構・遺物

土に含まれる焼土粒は、被熱による赤変部のあるSK72に由来する可能性がある。

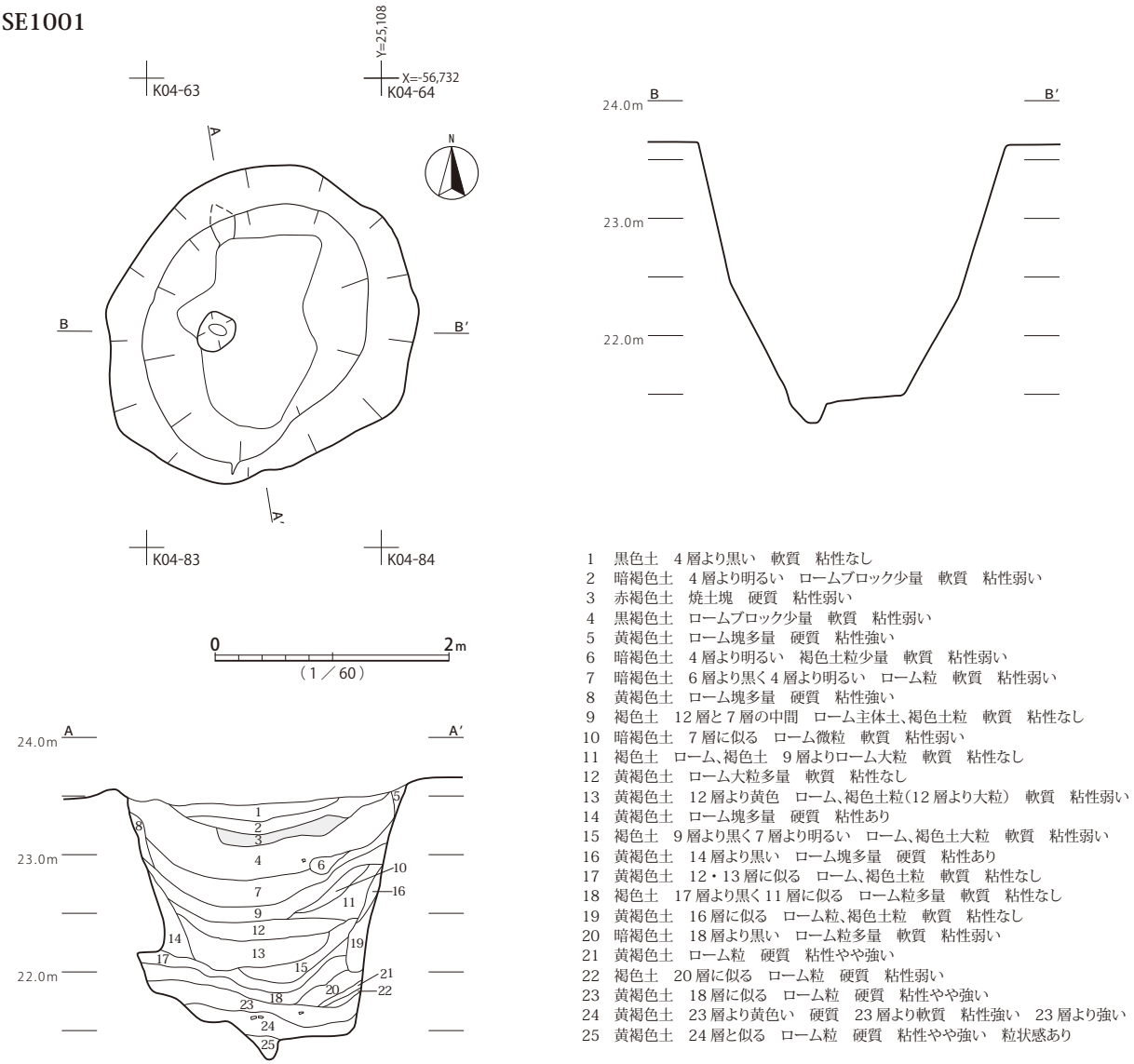
上層には、土器片が比較的多く検出されているが、実測対象遺物は、古式土師器素口縁壺1のみである。古墳時代前期前半、草刈1式の範疇と思われ、遺構の帰属時期を示唆する。

SE1001（第437図、図版82）

099地区西端に位置する大型円形土坑である。直径2.7 ～ 2.8m、深さ2.22mの規模で、比較的急角度の側壁を持つ。覆土は、中位以下に黄褐色土が多く、7層以上に暗褐色土、黒褐色土と黒味を増していく漸移的な堆積状況が認められる。上位には焼土が検出されている。下層には、黄褐色土層主体の硬質な層があり、埋め戻しを示唆する。湧水は見られないため、井戸としても溜め井戸として利用されたものと思われる。なお、土層断面図に土器片と見られる表現が見られるものの、対応する注記を持つ遺物は確認できない。

出土遺物が無く、遺構の帰属時期は不明だが、セ28地区に平安時代前期と見られる井戸状遺構が検出されているため、同時期の所産である可能性が考えられる。井戸状遺構でないとすれば、陥し穴等の縄文時代遺構である可能性も否定できない。

SE1001



1　黒色土　4層より黒い　軟質　粘性なし
2　暗褐色土　4層より明るい　ロームブロック少量　軟質　粘性弱い
3　赤褐色土　焼土塊　硬質　粘性弱い
4　黒褐色土　ロームブロック少量　軟質　粘性弱い
5　黄褐色土　ローム塊多量　硬質　粘性強い
6　暗褐色土　4層より明るい　褐色土粒少量　軟質　粘性弱い
7　暗褐色土　6層より黒く4層より明るい　ローム粒　軟質　粘性弱い
8　黄褐色土　ローム塊多量　硬質　粘性強い
9　褐色土　12層と7層の中間　ローム主体土、褐色土粒　軟質　粘性なし
10　暗褐色土　7層に似る　ローム微粒　軟質　粘性弱い
11　褐色土　ローム、褐色土　9層よりローム大粒　軟質　粘性なし
12　黄褐色土　ローム大粒多量　軟質　粘性なし
13　黄褐色土　12層より黄色　ローム、褐色土粒（12層より大粒）　軟質　粘性弱い
14　黄褐色土　ローム塊多量　硬質　粘性あり
15　褐色土　9層より黒く7層より明るい　ローム、褐色土大粒　軟質　粘性弱い
16　黄褐色土　14層より黒い　ローム塊多量　硬質　粘性あり
17　黄褐色土　12・13層に似る　ローム、褐色土粒　軟質　粘性なし
18　褐色土　17層より黒く11層に似る　ローム粒多量　軟質　粘性なし
19　黄褐色土　16層に似る　ローム粒、褐色土粒　軟質　粘性なし
20　暗褐色土　18層より黒い　ローム粒多量　軟質　粘性弱い
21　黄褐色土　ローム粒　硬質　粘性やや強い
22　褐色土　20層に似る　ローム粒　硬質　粘性弱い
23　黄褐色土　18層に似る　ローム粒　硬質　粘性やや強い
24　黄褐色土　23層より黄色い　硬質　23層より軟質　粘性強い　23層より強い
25　黄褐色土　24層と似る　ローム粒　硬質　粘性やや強い　粒状感あり

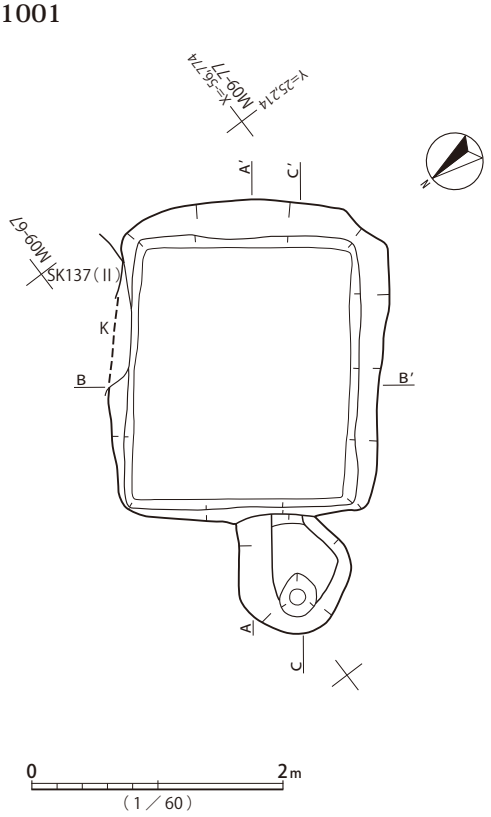
第437図　SE1001遺構

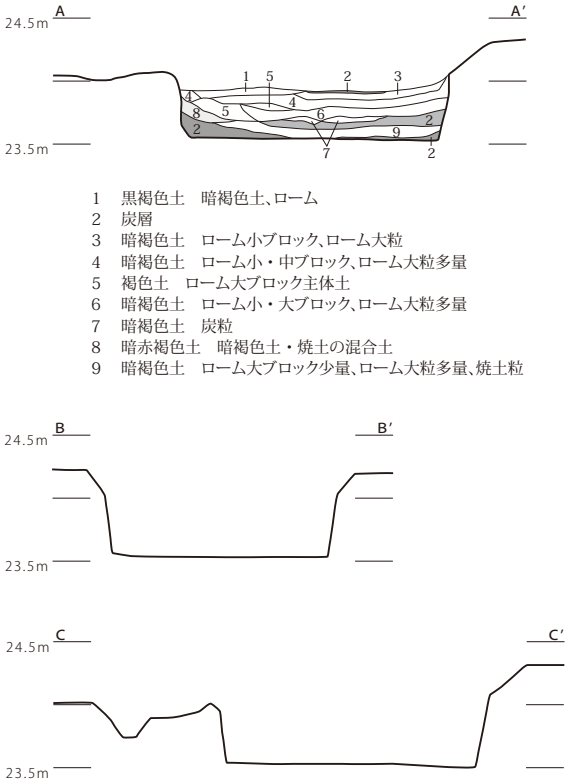
SY1001・SY1002（第438図、図版3・4・82）

SY1001は、木炭生産に関連すると見られる遺構である。SD1001の約5m東に位置する。2.6×2.2m、深さ65cm程度の方形部と、その北西辺につながる円形部が検出されている。北東辺はイモ穴と切り合うが、先後関係は不明である。方形部床面は円形部より低く、機能的な関連性は不詳である。炭窯であれば、床面・壁面に強い被熱痕跡が伴うと予想されるが、赤変部・焼土ブロックなどは検出記録が無く、その点はやや不自然である。竪穴状の半地下部分は湿気を呼び、燃焼には不適当に思われるが、方形部の最下層には明確な炭の堆積があり、焼土を多く含む層も見られ、ロームブロック主体土などは窯体に由来すると考えられる。煙道や焚口などの付帯構造も不明だが、いわゆる製炭土坑と呼ばれる炭窯跡と推定される。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SY1002は、イチジク形の形態を持つ炭窯跡である。3.2×2.7m、深さ40cm程度の掘り込みが遺存する。平面形は、大円（半径4尺）の弧上に小円（大円の1/2の半径2尺）を描き、それらに外接する曲線を描いて設定されたと見られる。床面に炭を多く含む層が広がるのに加え、窯体に由来する高温被熱粘土ブロックが多く検出されており、構築部の崩落した炭窯跡と考えられる。SY1001と

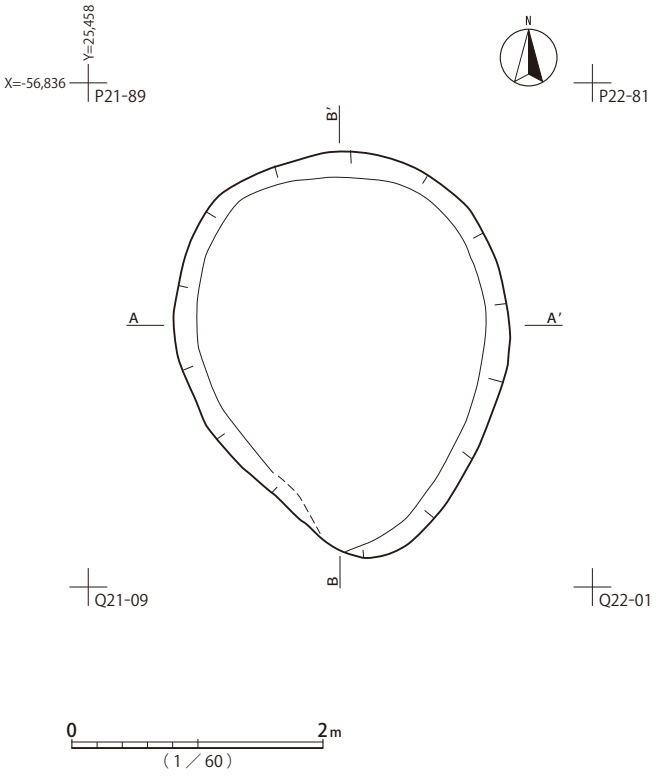
SY1001

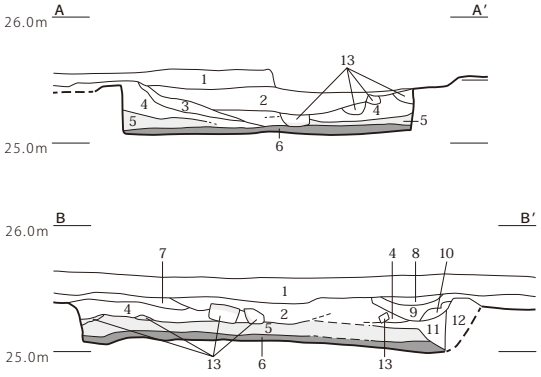




1　黒褐色土　暗褐色土、ローム
2　炭層
3　暗褐色土　ローム小ブロック、ローム大粒
4　暗褐色土　ローム小・中ブロック、ローム大粒多量
5　褐色土　ローム大ブロック主体土
6　暗褐色土　ローム小・大ブロック、ローム大粒多量
7　暗褐色土　炭粒
8　暗赤褐色土　暗褐色土・焼土の混合土
9　暗褐色土　ローム大ブロック少量、ローム大粒多量、焼土粒

SY1002

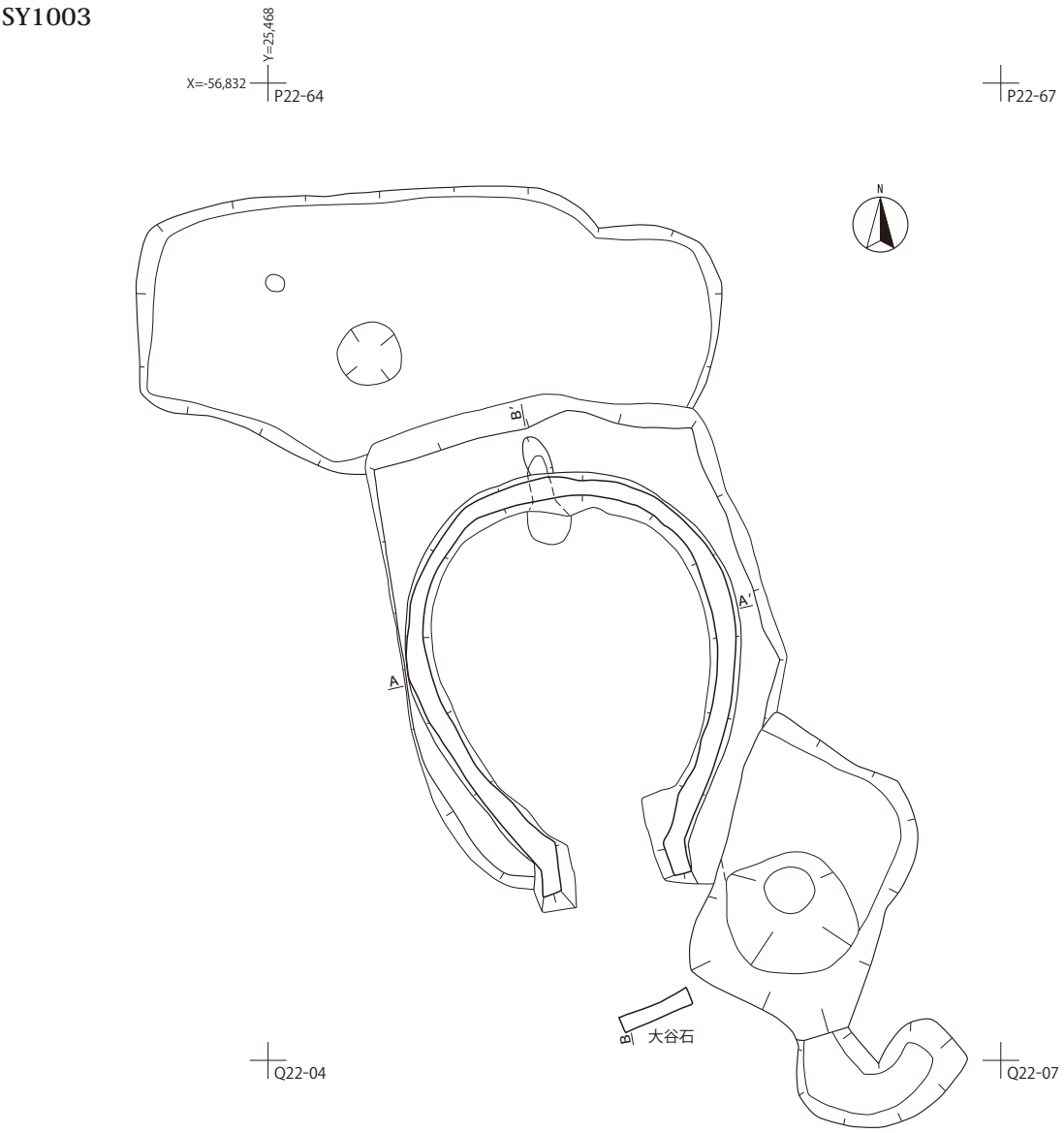


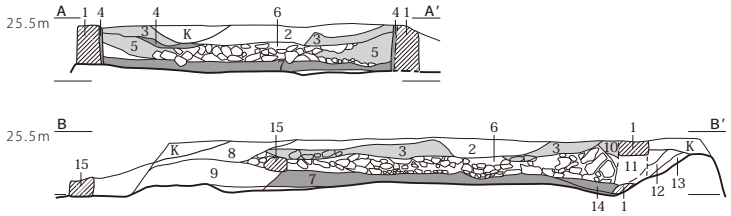


1　黒褐色土　暗褐色土小塊、ローム、焼土大粒　撹乱気味
2　暗褐色土　黒色土粒　天井部の土層か?
3　暗褐色土　粘土粒多量
4　明褐色土　半焼成化粘土　天井部及び側壁落下部
5　明赤褐色土　白色粘土の焼けた部分
6　黒色土　炭
7　1層の軟質土（黒色土多量）
8　灰褐色土　煙道部上層の落下粘土層
9　灰褐色土　煙道部附近の落下粘土層　8層より焼けている
10　黒褐～黒色土　暗褐色土粒多量
11　黒褐色土　煙道部内覆土（流入土）
12　煙道部流入土層
13　カーボン（還元焼成の感）　落下、逆転した天井部ブロック

第438図　SY1001・SY1002遺構

SY1003



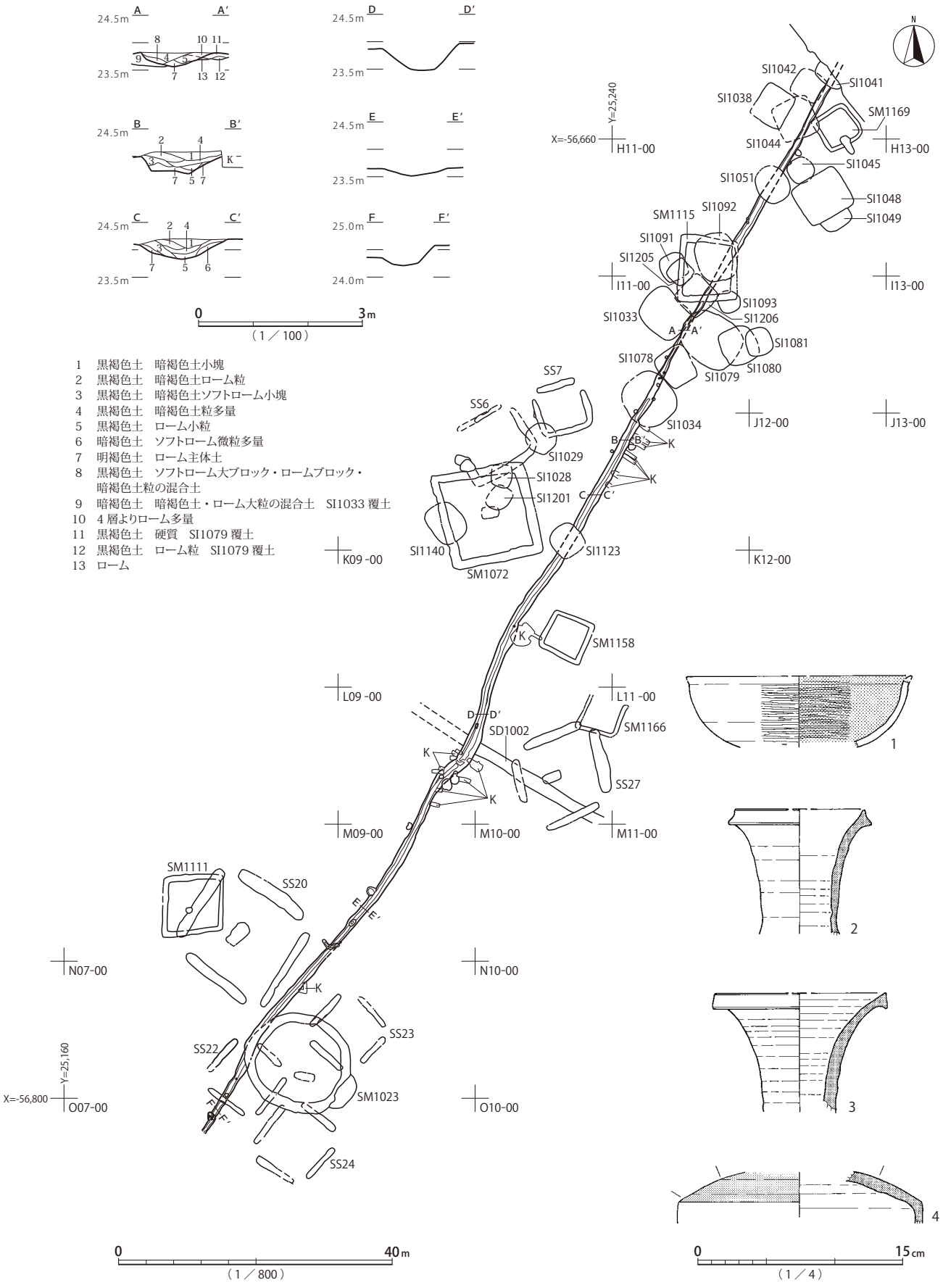


1　外壁断面
2　黒褐色土　焼成化粘土粒多量
3　灰赤褐色土　粘土塊　天井部最上層
4　カーボン混入
5　粘土混入
6　淡赤褐色土　酸化炎焼成粘土塊　天井部の陥没
7　黒色土　炭主体土
8　黒褐色土　撹乱覆土
9　黒褐色土　粘土小ブロック多量
10　明灰褐色土　粘土塊　煙道部
11　黒褐色土　粘土粒・炭粒各多量　煙道部
12　黒褐色土　粘土、焼土微粒　煙道部
13　黒褐色土　軟質　煙道部
14　灰多量混入　炭層、煙道部
15　大谷石系軟質岩

0　2m
（1／60）

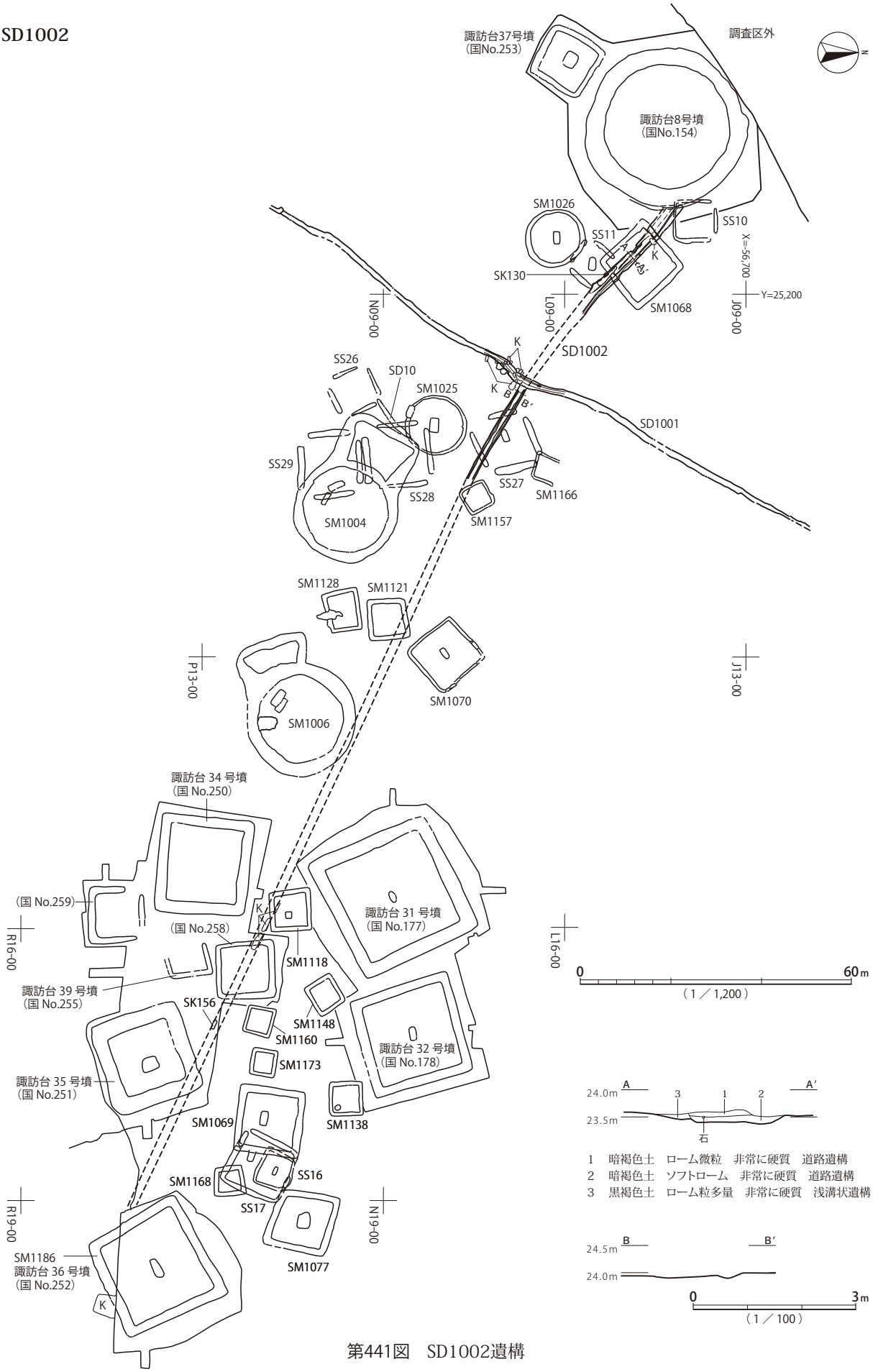
第439図　SY1003遺構

SD1001

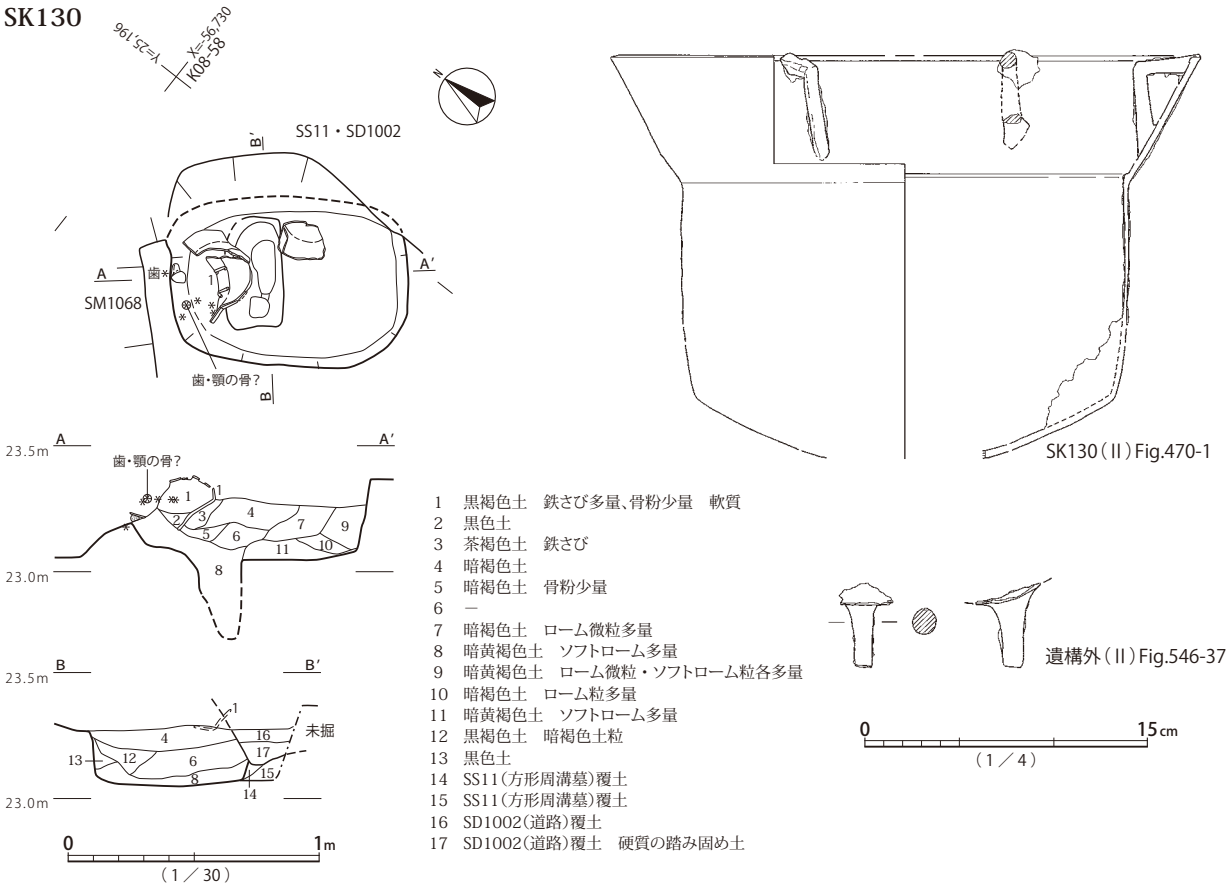


第440図　SD1001遺構・遺物

SD1002



第441図　SD1002遺構



第442図　SK130遺構・遺物

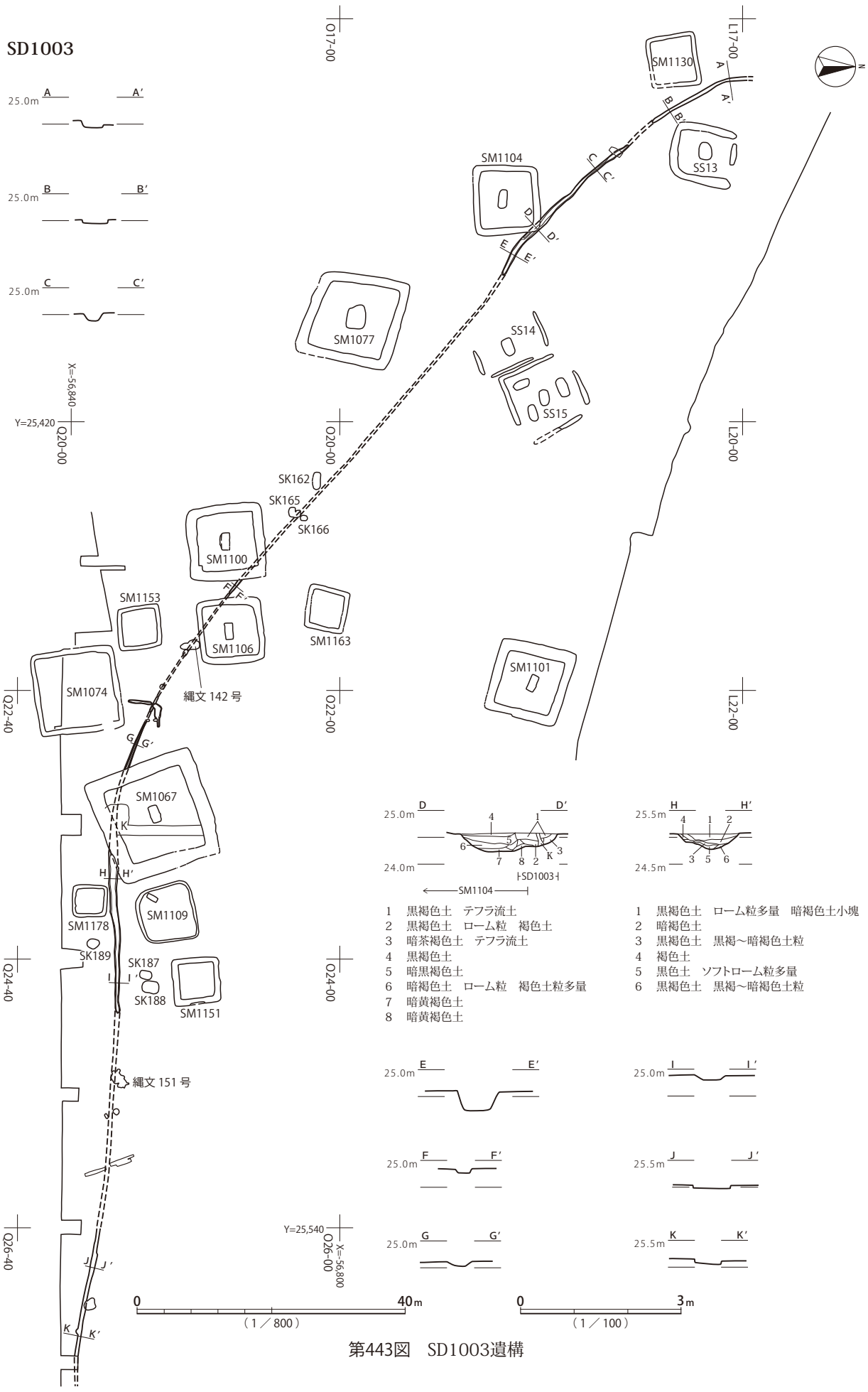
同様、竪穴状に掘り下げられる形態から、製炭土坑と推定される。本遺構は、SD1002北側に位置し、8m東に炭窯跡SY1003が並ぶ。出土遺物は無く、帰属時期は不明だが、道路跡SD1002に面し、SY1003と関連して営まれた可能性が高い。木材・木炭の搬出入の効率に関係する立地と思われる。

SY1003（第 439 図、図版 3・4）

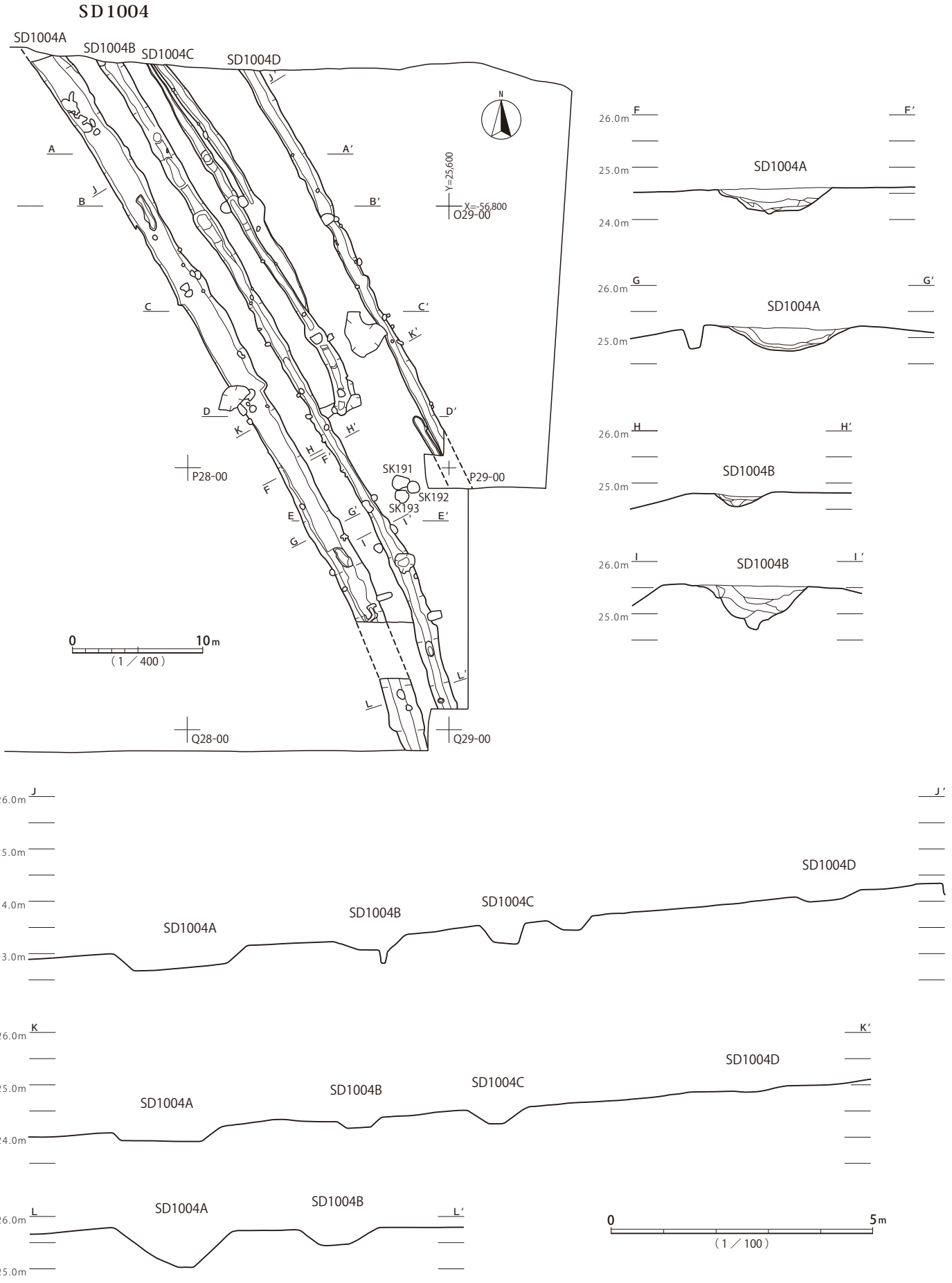
099地区東側、SD1002北側に位置し、南に開口部を持つイチジク形の炭窯跡である。3.6×2.7mの平面規模で、地山面に石材と土によって窯体が構築されている。平面形は、SY1002と同様、大円（半径4尺）の弧上に小円（大円の1/2の半径2尺）を描き、それらに外接する曲線を描いて設定されたと見られる。焼成化粘土ブロックが多く堆積していることから、燃焼室は主に粘土で構築されたと推定される。北部と南東部に掘り込みが伴い、屋根をかけた木材置き場や土取り穴等、炭焼きあるいは築窯に関連する可能性がある。燃焼室の開口部は幅90cmあり、反対奥に煙道が設けられている。また、開口部から約1m離れ、大谷石と見られる石材が検出されている。SY1002の東8mに位置し、両遺構は関連すると見られるが、大谷石の利用など構造的に見て、本遺構が後出すると推定される。

SD1001（第 440 図、図版 66・79・252）

099地区西部において北東−南西方向に通る溝状遺構である。長さ179m、幅1.4m程度、深さ40cm程度という規模で検出されている。古代以前の各遺構を破壊して貫通し、SD1002とほぼ直角に交差する。諏訪神社社殿及び諏訪台10墳の東側を通る、造成前の区画と対応する自然発生的な小



第443図　SD1003遺構



第444図　SD1004遺構(1)

径と見られる。市原台地A谷南支谷から台地に上る経路であり、円墳SM1023等の墳丘を避ける移動の繰り返しで生じたと考えられる。南側は10号墳の東を通り、台地下へ直線的に降りる溝状遺構（SD27・SD29）に接続したと推定される。土層断面記録には、富士宝永テフラ（1707年降下）について注記されておらず、存続時期は不明だが、社殿に規定される軸向きとは異なることから、成立は近世以前に遡る可能性がある。図示した遺物は、調査区内遺構群からの混入品である。

SD1002・SK130（第441・442図、図版3・4・81）

SD1002は、099地区中央部を北西−南東方向へ通る溝状遺構である。長さ75m以上、幅2.4m程度、深さ20cm程度の規模で検出されている。諏訪台8号墳の周溝北東部を屈曲部として踏襲し、南西へ向きを変え、への字状を呈している。道路として利用されており、8号墳近くの覆土は路面として非常に硬質化している。西側は轍状の凹部が認められる。SD1001との交差点から東側は、行人塚（諏訪台34号墳）北側を通り、東間部多古墳群の所在する高台に続く道に合流する。SD1002北側には、直角方向に派生する北東向きのイモ穴列が検出され、区画の存在を示しているが、南側には、神社に規定される東西軸に対する南北軸の区画が見られ、相違が認められる。東西軸は参道の向きとも近似しており、神社と、東間部多古墳群の分布する東側台地上へと直線的に続いたと見込まれ、西広貝塚・山倉古墳群付近から諏訪神社へ、台地上平坦面を少ない高低差で横切る効率的な経路となっている。10号墳と行人塚の南側を通る経路は、沖積地に向かって西側へ下っていく。

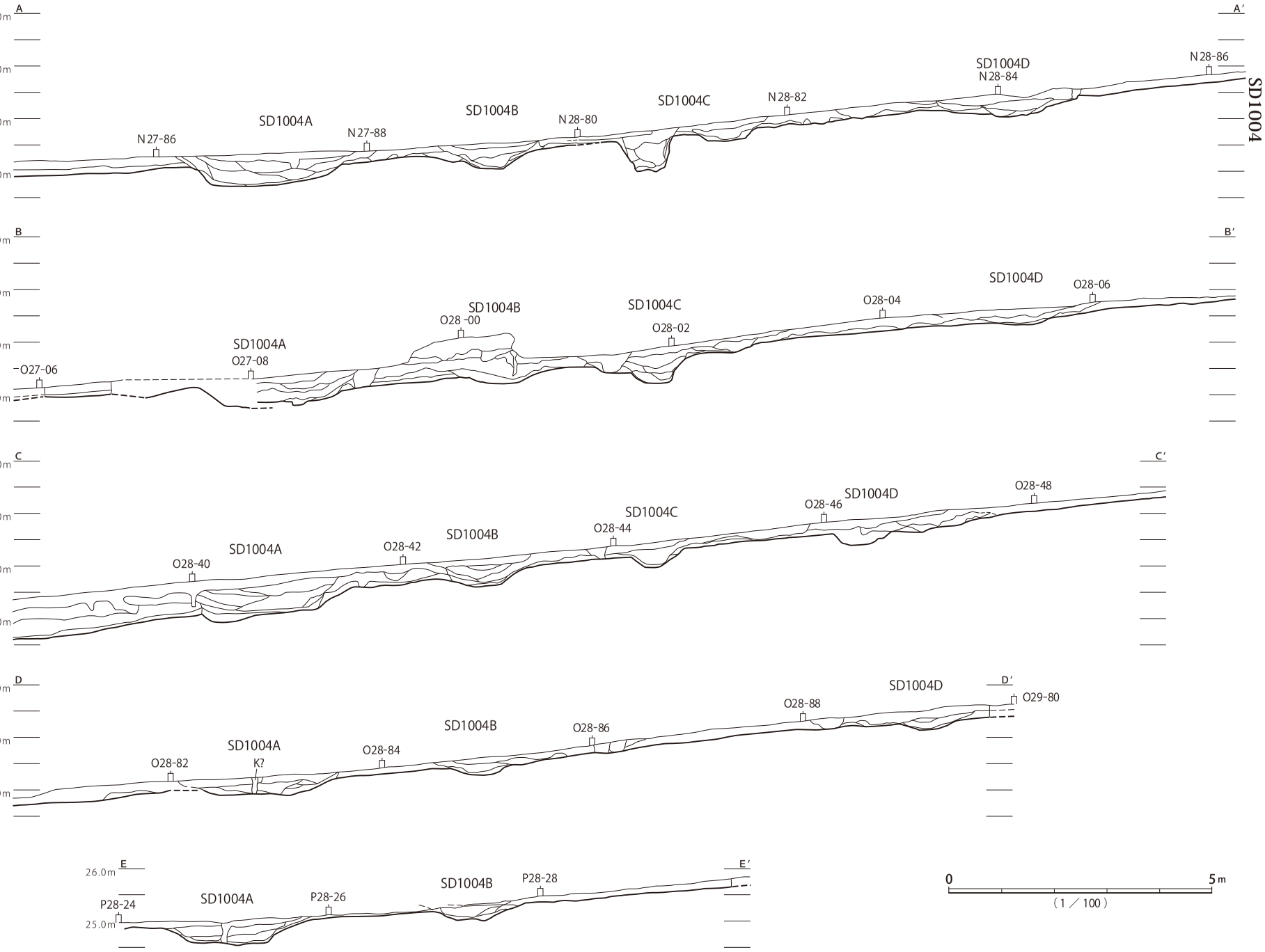
SD1001との交差点から北へ約30mの位置に、SK130（報告書Ⅱ参照）が構築されている。96×68cm、深さ30cm程度の丸みのある方形土坑で、脚付内耳鉄鍋と歯・人骨（顎か）が出土している。鍋被り葬の土坑墓で、頭位は北西である。第442図は、報告時の標高等を修正し、土層内容を追加した。堆積状況からは、SD1002覆土がSK130覆土に切り込み、SK130がSD1002に先行して構築されたことがわかる。鉄鍋脚部片は周辺グリッド一括取り上げ遺物で、同一個体の可能性がある。

SD1003（第443図、図版81）

099地区東側において検出された溝状遺構である。規模は、長さ230m、幅1m程度、深さ15cm程度である。東部は、ほぼ東西方向をとり、中ほどで北西に向きを変え、北端でほぼ南北軸に沿うようになる。明確な硬化面は記録されていないが、道路状遺構であり、北側の先には、TJ地区のSD0001が位置し、東側は、東間部多古墳群の立地する高台へ続く。平面・断面ともに宝永テフラの堆積状況の記録はなく、存続時期は不明だが、近世以降に成立したと推定される。

SD1004（第444・445図、図版81・82）

099地区東端で並行する4条の溝状遺構群で、北西−南東方向に調査区を横切る形で検出されている。A〜Dの切り合い関係は不明で、機能時が重なるのか、先後関係があるのかは不明である。SD1004Aの幅が最も広く、深い。南側に隣接するSW83地区には、SD1004Aのさらに西側に並行する溝状遺構SD9003が検出されている。099地区東端部は、市原台地A谷南支谷から養老川方面へ向かう最短経路に当たり、その立地を反映して、これらの溝状遺構が形成されたと考えられる。東側の高台の西面下段を南北に通り、SD1002・SD1003に合流する東西経路と直交していたと見られる。



第445図　SD1004遺構(2)

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集
上総国分寺台遺跡調査報告XXIX

市原市天神台遺跡Ⅲ（本文編１）

令和５（2023）年３月28日　発行

編集発行　市原市教育委員会
市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489
TEL 0436（41）9000

印　　刷　株式会社弘　文　社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 047（324）5977